オレと死神？！

飛焔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オレと死神?!

【Ｎコード】
Ｎ８１５３Ｃ

【作者名】
飛焔

【あらすじ】
喧嘩最強の高校生雨宮和也と天真爛漫な死神の少女レナの2人と他の者達が巻き起こすファンタジーありコメディー多々アリシリアスかなりありの学園コメディー（？）。和也とレナが出会い運命の歯車は動き出した《真実》と《偽り》。《表》と《裏》。《人間界》と《魔界》そして、……それらが行き着く答えとは?（和）「何真面目にやってんだよ。コメディなんだから明るく行こうぜ」シリアス５０％コメディ３０％グダグダ２０％は不思議なお話。（レ）「コメディなのにシリアスに負けたぁ!!」【現在、１話から手直

しをして行きますので、遅れますのでご了承ください。1日に2話ペースで訂正します】

【プロローグ　ルートA】オレと死神の始まり（前書き）

どうも、飛焔です
我が不定期更新をどうぞ
部活などで不定期になる（予定）
予定ッ！！！？

【プロローグ　ルートA】オレと死神の始まり

うっ……？　朝か？

太陽の光がカーテンの隙間から注がれる。眩しい……だが、よい朝なのだろう。さぁて、今日は“大切な日”なんだ、さっさと起きるとしますか。

朦朧とする意識の中でそっと、窓に繋ってる制服に、目をやる。藍色を基調とした、オレが今日から通う高校。＜聖涼高等学校＞の制服である。ブレザーの胸ポケには校章である天秤と下にＳＥＩＲＹＯと刺繍されている。

重たい身体を半分起して外を見据えると、小鳥が2匹、窓辺の木に止まっていた。平和な朝ですこと。そんな事を考えながらオレは静かに立ち上がる。

軽く腕を伸ばして、身体の調子が好調なのを確認する。

「ふぅ…。今日から高校生か……。オレ……って」

実感ねぇ～なぁ。中坊の頃はアレだったからなぁ……。

ちゃんと、規則正しい生活をしたからだろうか？　久しぶりの快適な目覚めだった……感じがする、やはり規則正しく寝ると大分、疲れも取れるもんだ。身体が随分と楽だ。目も大分(だいぶ)冴えてるから寝ぼけは珍しくねぇ。

「さてっと！！」

タンクトップを着てからYシャツを着る。ボタンは規則に反して全部は閉めない。だって、そってのが楽だし。左手には腕時計を巻いてからズボンを履いてなどなど、いそいそ着替えを始める。

今日は大事な入学式があるからなぁ～首洗ったんだから、ちゃんと行かねぇ～とな。それに、あの人とも約束した事だ、なにより来なかったら“アイツ”が五月蝿いだろうな。

そんな如何でもいいことを考えながら枕元に置いてある目覚ましに目をやると、オレはその場に立ち尽くした。

さぁて、問題です。オレはなにを見たんでしょうか？

「……げっ」

目を擦る。

そして、また、目覚ましを確認する。

当然、壊れもしないかぎりこんな時間になる筈がない。時計の秒針も動いてる……壊れてなどいない。第一に、一週間程前に買ったばっかだ。

「や……ッ！　やっべぇぇぇ

「お、落ち着け。今なら入学式の時刻だろう」

なら、教室は空いてるはずだ！　なら、何食わぬ顔で……！！！

なんとか……ならないよなぁ……イキナリ挫折かよ。さすがに入学式から遅刻ってねぇよな。ただでさえ元ヤンだから印象わりぃのに。

オレ。雨宮和也（あまみやかずや）は。ブレザーを羽織り、ネクタイを巻きながら、言い訳を考えてる。もう、一生分の頭を使って。こんなに頭を使うのは入試ぶりだぞ？　（殆ど、勘だったが）

着替え終わり、急いで下に向かいパンを取り出し家を出る。

相棒（チャリ）に乗り即座に、学校へと向かう。全力で漕げば早い。シュー○ッハもビックリだぞ！

多分、スペースシャトルも目でもないからな……ただ、道が複雑だからそんなスピードで走ったら家を壊してまう。

自転車で駆ける事によって風を全身に受ける。カットしたばかりの髪もその風にゆれてただでさえ無造作の髪が酷くなる。まぁ、ンな事に構ってるヒマはない。

「早く行かねぇと、『アイツ』がなぁ……はぁ～」

必ず出るって言っちまったからな……。あ～ぁ。もう、サボるかな？　自転車で走るのもかったるいし、それに遅刻は遅刻なんだから遅いか早いかの違いだけだ。どうせ、最初から印象わりぃンだし。

＜イキナリ挫折？＞

な、なんだ！？　これは！！？　違うよ！　そんな馬鹿な！　こんな早く挫折なんか……するもんかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！

全力でペダルを漕ぐ。

急がなければ！！

ペダルから、イヤな音がしたけど無視！　信号が赤だけど無視！！

子供がイキナリでて来たけど無視！＜ドンッ！＞　轢（ひ）いたけど、無視！　止まったら警察（マッポ）に捕まっから無視！

真上から、＜バチバチ＞音がしたから、迂闊にも上を見る。電線がショートしたわけでもないみたいだし不思議な物に自転車にブレーキをかけて、再び見上げる。

「？」

これが、オレと死神の出会いの始まりだったりする。

「きゃあああ！！　マー君がぁぁ」

母親、キタ――――――――――――――――！！！

クソ！　頭上の怪奇現象は後だッ！　このまま轢き逃げでＧＯ！

ＧＯ！

そう、思い。ペダルに脚を掛けた時だった。怪奇現象（？）も治まった……。

ちょうど自転車も動き出していたところだ、それに“何か”重たいものが降って来た。

「！？」

ば、バランスが……ッ！　走り出そうとした瞬間の自転車は突如振ってきたものにバランスを当然崩す。

そのまま勢い良く横転。そうして、オレはとても意外な“者”を見る羽目になった。

この先に起こる事も知らずに。オレの運命は、今日この日から本当の意味で動き出した。

そう、オレの運命は。

【プロローグ　ルートA】オレと死神の始まり（後書き）

本当にお願いします。できるだけ速めに更新しますんで

【プロローグ　ルートB】舞い降りし死を司る神（前書き）

ノリで、第２話まで頑張りました！！もう少しで学校なので、遅れますが・・・気を長くして待って下さい！
４お話目を終えて、６０話目ほどでキャラクターの人気発表をやりたいのでお願いします

【プロローグ　ルートB】舞い降りし死を司る神

＜同時刻＞―ｉｎ？？？―

「そうそう。でさー、ヴァンがねぇー……」
「あははは。また？」
「それよりさ……」
「たしかにねぇ……」
「んで、ラミア？　この前の試験どうだったの？」

親友のラミアが話しかける。ふふふ、まさか高等部でも同じクラスだとは驚きよ。ラミアと私は子供の時から一緒に育った、まぁ、４歳ごろの事なんだけどね。それから、彼女とはずっと一緒だ。話題になっているヴァンも俗に言う幼馴染というものなんだよ。

「ん？　私？私はねっ。死神の、レナ・フォード＝ライズ・ハールド。歳は１６歳、スリーサイズは秘密で、明る良い子だよ。好きな食べ物はプリンで、嫌いな食べ物はニンジンだよ」
「あんた……？　何言ってるのよ」

むむぅ～。そんな冷ややかな目をしないでよ！

「読者様に挨拶。やっぱ偉いな私！　うんうん」
「読者ってなによ？」

なんで呆れるかにゃ？　まったく

まぁ、主人公とヒロインさえ知ってれば良いか！　うんうん。
なにおり、礼儀は必要だからね☆　さすが私、天才的♪

「んで、なんの話しだったけ」
「この前の試験の結果よ」

そうそう。試験の話しだったね。まったく、どうして外れたんだかむぅ!?　読者さん!　お前だって言わなかった!!?　ぶち殺すわよ!!

礼儀?　なにそれ?　食えるのかな?

「あんたが、いきなり自己紹介しだしたんでしょう。ってか、あんたの方が礼儀を必要よ」
「心読んだな!?　人権無視だ!!　ってか、れいぎって?」

酷い友達だな。新手のSかしら?　あ、でもラミアって意外とマゾだし。

あ、そうそう!　聞いてよ読者様、ラミアは【死神】の中でも特殊な能力を持ってるんだよ!
なんと!　心の声が聞こえるんだよ♪　凄いよね♪

「おいっ!」
「あんた等、相変わらずねぇ」

みんな、私……マゾじゃないよ。ラミアが、マゾなんだよ。
ユミちゃん……作者曰くワンキュラ。ワンキャラがヒロイン様になにを言うかァァ!!

「……試験落ちなさい」
「親友の台詞かっ!　酷すぎだよぉぉ。お母さん悲しいわ」

「親友に、マゾとか言う、あんたの方が悪いでしょ！！　ってか、アンタは私の母親じゃないし！」

ううっ　酷い。あ、でもねぇ、ラミア昔はねぇ……。読者様にちくろうと、した瞬間。ガラガラとドアが開き。先生が入って来た。ま、先生と言っても人間じゃないよ。

2メートルをユウに超え、頭に角が生えて、大きな翼を生やした獣……。そして、なによりおぞましいその眼光。

「やった！！　デーモン先生だい！！」
「こらっ！　まだ、オレの生徒になれるか分からないんだぞ」

ついつい、飛び跳ねる。私♪　だって、デーモン先生って、めっちゃ優しいんだもん！
顔は例外だけど……。ま、確かに生徒になれるかどうか知らないけどね。
ふふふ、だがしかし、受験に成功しといて“あの”テストを落す私ではなくてよ。

「っと、レナが思考してます」
「あ。ら、ラミアーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！」
「ほぉう、まぁ許してやろう（にやにや）」
『ザァワ！！』

今日室中が先程のデーモンの言葉で騒動が起きる。

ば、馬鹿な！！？　あのデーモン先生が！？
なんだ？　明日は隕石でも降ってくるのか！！？

「と、レナが……」
「にゃあああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」
「静かにしろ」
静かなデーモンの喝だけで教室が静まり返る。
そりゃ、怒ったら怖いもん。
「デーモン先生！　さっすがです！」
凄いよねェデーモン先生♪
みんな黙ったよ！　怖くてね♪　私半泣きだもん……だって……女の子だもん。
ちょっと、私を古い人間と見なかったかい？　読者さん？
「開き直るな」
「調子にのるな。試験の結果を渡すぞ……」
よかった。これなら楽しい学校生活になるぞ～♪　楽しみだなぁ……青春サイコー！！
「レナ！！　聞いているのか！？　お前のだぞ」
「はいっ！！」
通知……レナ・フォード＝ライズ・ハールド
＜不合格＞
はいっ？

プリントを見た瞬間頭を傾げる。

ふごうかく？　いやいや、ふあいかく？

えっと……ふ……ふぅ……？

※現実を見てください

「先生……？　間違ってない」

「間違うはず無いだろ、同姓同名などこの学校には、居ないのだからな」

「うそおおおおおおおおおおおおっ！！」

「真実だ。ほら、早く行くぞ……」

そう言うコトはわかってましたよ！

素早く袖に隠していた目薬を点ける。ふふふ、女の武器は千の大軍に匹敵するのよ！

「嫌だよ。ほら、女の涙だよ先生？」

「で？」

「ひどっ！！」

そもそも、涙じゃないけど、悪魔だよやっぱり……。

暴れるレナに、デーモンは手刀を入れ気絶させる。そして、重そうに運ぶ。

それも当然、悪足掻きといわんばかりにレナは“魔法”を使ったのだから。

「んんっ……そんなに食べれないよ～♪　プリプリン星人さん♪」
「レナ。起きろ。そいつ等は宇宙人だ、騙されるなよ」
「だ、騙したのねぇぇぇ！！！！　コレは焼いたヨーグルトじゃな――【作者の理由により削除】」

デーモンが、なかなか起きないレナを揺する。が、レナは一向に起きない。

しかも、使い振るわされた寝言ネタに作者もあきれてる。

イヤ、多少例外もあるけど……。

「仕方ない。炎術・火炎弾（フレイムバン）」

手の平から、火の玉を生成する。形を練り、【ゴォウ！】と火の玉は放たれ、レナに当たった。当然弱い魔法だろうと、熱い。

「あぢいーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！！！！！！！」
「起きたか」
「乙女に何をするんですか！？　もう少しで【作者の理由により削除】星人に連れてかれる所助けてくれてありがとう！！」
「ほら、荷だ。それに矛盾だらけだぞ」

そう言い、レナに少し大きめのリュックサックを投げ渡す。

「へっ？」
「じゃあな。しっかり頑張るんだぞ」
何を？　レナはそう呟き、首を傾げる。
「いいか。今日から2年間、人間界での生活を義務付ける」
「あっ」

そう、試験で不合格の場合……2年間の人間界の修行が義務なのだ。故に筆記試験を落したレナは人間界へと落とされるのだ。死神として成長するために。

「人間界で、何をすればいいの？」
「お前ってやつは……。簡単に言うとだな」

（ま、テキトーにマイライフしてまったりと過そうじゃないか……グフフフ。）

「……を、すればいいんだ」

（あっ。聞いて無かったや♪）

「出来なければ、お前は二度と帰ってこれない」

その言葉にレナは反応する。故郷に帰ってこれないのもそれはそれでキツイものがある。

「先生？　先ほど何を？」
「任務に失敗すると、魔力を失い、更にこっちに帰ってこれなくな

る」
「前ですっ！！　任務ってなんですかっ！！」
（しかも、なんか足してなかったですか！？）
「むっ。聞いて無かったのか。悪い時間が無い、今すぐ送る」
「ま、まってよお！！」
「転移魔法……アストライム」
「まってぇーーーーーーーーーー！！！！！！！」

「あー。呼び出しくらうだろーな」

オレはチャリに乗りながら無駄だが言い訳を考えながら走っているワケだ。

＜バチッ……バチッ！　バリバリボリボリ＞

「ん？」
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！　マー君！！！！！」

「……逃げるが勝ちなり！」

何か頭上に音がしたので、上を見上げる
ってか、後半煎餅食ってなかった？
違う違う！！　それより、逃げるんだよォォ！！

そう思い、ペダルに脚をかけた瞬間…

「って!?」

何か黒い物が降ってきた……めっちゃ重いんだけど?　何これ!?
バランスを失った自転車は当然倒れる

「いってぇ〜?　全くなんだ?　ポイ捨てか?」

頭打ったか?　いってぇ。何が降ってきたんだよ?
手探りで、オレに当たったものを探す
なにか、手に触れたぞ……?

「ったく!　なんだよ……」

立ちあがり、埃を払う。新品のブレザーなんだぞこれ!
何が降ってきたか確認する……。
黒いローブ?
それに、触れてみる。人肌みたいに温かい感触がした。
んっ?
ひッくり返すと……女が居た。訂正、寝てた

「はっ?」
「Ｚｚｚ…」
「なん、なんだよ?」

まじまじと見る。金髪で、へーっ、けっこう可愛いな。だいたい
歳は、同じくらいか?　荷物を持ってるし……家出か?　まじまじ
と、ずっと見てたのが、災いした。家出娘が、目を覚ました

「……」
「……」

しばらく、沈黙は続いた
当然、叩かれた……
お約束だよね……泣きたい。

取り合えず殴り返したけど☆

これが、私という死神。レナ・フォード＝ライズ・ハールドの運命という歯車が
動き始めて、もう一つの歯車と重なろうとした……瞬間だった。
運命なんて洒落たモノが結んだのかも知れない……こうして、私達の物語は進行する。

【プロローグ　ルートB】舞い降りし死を司る神（後書き）

次の話しでは、多数の新キャラを出す予定です！！

【1話】始まる新たな日常？（前書き）

休みの内に出来るだけ進める様に努力します！！
４０話目を終えて作者の計画では６０話目ほどで
キャラクターの人気投票したいな～～～。との感じです。
手伝ってください！

【1話】始まる新たな日常？

「で、遅れたの」

机で頬杖をして遠くを眺めていた。オレは果てしなく疲れている。

まぁ、尋問だ……。オレが約束を守らなかったタメである。

アイツはアイツでオレが不良（ワル）に絡まれてたのではないかと、心配していたんだとか？

アイツの事だし、将（まさる）が言っていたことはウソであろう。

「聞いてるの？　和也」

聞いてないぞ、魅夜よ……。目が三角になってオレを射抜く。

この、ポニーテール娘はオレの幼馴染みの柴原魅夜、歳はオレとタメの１５で、オレと同じ高校の聖涼高校に通ってる、今日から通うことになる。容姿は上の下で、上から７２・５６・６９……だった筈だ。アクまでも最後の記憶は中２の夏だから変わってると思うんだが……変化なし？

強気そうなキリットしたツリ目が特徴的だ。ついでに、彼氏募集中らしい……モテるのに。

あ、性格が狂暴か。納得した。

「なにか、思った？」

どこかわからない処から凶器（（鉄の）ハリセン）で叩く

【頭蓋骨陥没】

あれ～？　死んだおじいちゃんだ～卯不不不（ウフフフ）♪

ってな、感じになったらどうするんだよぉぉ！！

には、ならなかった

ってかよぉぉぉ！！　頭から血が飛び出てるじゃねぇかよ！！

ってか、血が出てたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！

だから、影では【裏の姫】と、呼ばれてるんだよ……。

「はぁ～。朝から何をやってるんだか」

溜息を1つ落した後で、低い吐音（とおん）で話す。

オレは朝の事を振り返っていた。

朝、家出娘と接触事故、ただ見ていただけなのに叩かれて、時間が無い為に無理矢理に家出娘ごとチャリに乗せて速攻で学校に向かった。

校門がしまっていた為、無謀にも自転車で飛び越えると、いう荒業をやって侵入。警備員と乱戦となった。オレに喧嘩をうるからだよ。全員泡を吹かせたぜ。

そこに、体育教師らしい筋肉マンがでてきたからボコボコにして、家出娘を突き出して。

オレは、家出娘をネタに遅刻の言い訳をしたところ、なんとかなったと言うミラクルを起こしたのだ。

今更なんだが……生徒手帳見せれば良かったんじゃないか？

「それで、今はどうなってんの」

オレの席の隣から高めの声が聞こえる。

コイツは、親友の井塔将（いとうまさる）。穏やかそうな垂れ目や貧弱そうに見えるが、キレると鬼神ごとき力を見せる銀髪のショートヘヤーボーイ。高級江戸前寿司の跡取りでもある。

「ん？　ああ、今は職員室に居るらしいぞ」

「ふーん　で、可愛いのか？」

なんでオレを睨むんですか？　魅夜様？　私なにかしてしまいましたでしょうか？

「まぁー上の中かな？　一瞬見惚れてたし」

な……？　なんだ？　魅夜から怒りのオーラが……○原さんじゃなくても判るオーラだ！
これは……！　殺気！？

「こんのっ！　ヘンタイ！！」

手元にあった、物を次々と投げて来る。

「っわ！？　あ、危ねぇって！？」

筆箱（回避成功）→ハサミ（回避成功）→蛍光灯
蛍光灯ぉぉおお！！？

（回避成功）→バック（回避成功）→バスケットボール（回避成功）→椅子（回避成功）→元気玉
なんですとぉぉぉおおおお！！！！！？

（回避成功。しかし、後ろの席のメガネが吹き飛ぶ）→１００倍ビックバンかめはめ波
知る人ぞ知る孫　悟空とベジータのスーパーサイヤ人４の状態での最強フュージョンでの最強必殺技ですかぁ！！！！？

しまった、伏字を忘れたぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！！！

「ちょおおぉぉおおおおお！！！！！！！」
（ＨＩＴ！！）

「……柴原。気絶してるよ」

してねぇよッ！！
クソォ……意識があるから余計に痛ぇ！
一思いに意識を断たせてくれ。

「知らない」

と、吐き捨てる。
悪魔だ！　コイツはまどオレに何か怨みがあんのか？
ちなみに、今のオレの状況はっといいますと、後ろの黒板にめり込んでるんだよね♪
オレって不死身かも？

そんなことより……べ○イミを……かけて。

【イオ○ズン】

「ぐぎゃぁぁぁあああああ！！！！！」

更に追い討ちをする、魅夜……。

鬼だ悪魔だ鬼畜職業だＳＭの女王様だ！

じゃなくて……ザオ○クお願い……し、ます。（意識ホワイトアウト）

―Ｒｅｎａ・Ｆ＝Ｌ・Ｈｒ

はぁ～い♪　皆のヒロインのレナちゃんで～す。

いや～、びっくりしたなぁ。だってね目を覚ましたらね！　男の人がまじまじと、私を見てんだよ！？

ビックリだよ！いくら、私が可愛いからって、まじまじと見られたら恥ずかしいじゃん！！　で、今ね今ね！　なんか、バック見てたらさぁ、この学校の学生証見つかったんだ！！　さすが、デーモン先生だよね！！　用意周到だよね！　愛してる～♪

まさかこんなに規模が大きい記憶操作魔法を使うなんて♪　でも、今は、服装とかで起こられてるの。

グスンッ。あの、男の人なんかさ、私を餌にしてさぁ一人だけ逃げちゃうしぃ～酷いよね

「聞いているのか！？」

体育教師みたいな岩みたいな筋肉をもった男に私は説教されてい

た。
そりゃぁ……ん？　もともと私がこんな目にあったのは、あの男が原因だよね！？
※テストに合格しなかったアナタのせいです。
更には、あんな場所に私を落したデーモン先生が悪いんじゃ！？
※筆記試験で不合格だったレナが悪いです。

「作者、煩い！！」

「……おい」

（仮定）体育教師が低い唐音（とうおん）で私を睨むって！　コワァ！！

「にゃんですかぁ～」

究極（？）の笑顔で返すがガシィッ！　っと、鈍い音がした。

「……」

……まさか？　コレは……体育教師が誇る握力を生かした体罰の……
※格闘技の技だったはずです。
【アイアンクロー】
ッバギィ！！　メシィメシッメシィメシッ！！　グゥグググググゥゥゥゥゥウウウウ！！！！

「ぐぎゃぁぁぁあああああ！！！！！！」

「うっ……ん？」

目を覚ますと真っ白な天井が視界に入った
保健室か？　薬品の独特な匂いがする。なんで、オレが保健室なんかに？
あぁ、そうだ……オレ、魅夜の攻撃くらって、意識を失ったんだ？
帰ったらお仕置してやろう。
カシャーっと小切れ良い音を発て純白のカーテンが開かれて。白衣を着た膝まであるストレートの黒髪の女性が入ってきた。

うむぅ、９５・５９・８７っと見た

「気がついた？」

女性にしては少し低い声っだあ。目は冷たい冷徹な目だ。
素クールってヤツか？

「ええっと。下校時間……ですか？」

女医は自分の腕時計を確認し「あと、一時間くらい」と、告げる

「そうすか……。んじゃあ、そろそろ、オレ行きますわ」
「何時でも来ていいわよ」
「じゃあ、サボる時にでもきますわ」

オレは、笑顔でそう言う。
保健室とかにはあまり居たくねぇし、とっとと、おさらばしますか。

「いつでも、ベット空けとくわ」

甘い誘い！？
この先生なんか危なさそうなんですけど！！？

―Bクラス―

「ん？」

教室の雰囲気が先ほどと違う感じがする？　なにかあったのか？
あぁ～。男子の集団ができてんのか。

「なぁ、将？　あの塊はなに？」

オレが教室に入ってほとんど気がつかなかったし。
だって、このクラスではオレって恐怖の対象だぜ？
今までのパターンならオレが入って来たと同時に教室中が静まりかえるからな。

「ああっ。実はねぇ、転入生が来たんだよ。ほら、男子の塊があるでしょ」
「あぁ……」

って、ことは美女の類か？　どうりであんな男子の塊がある分け

だ……。

飽きれてる途中、教室を見渡して見るが見当たらないヤツが2人居た。

「あらっ？　魅夜は？」

先公が来て五十音順に席替えをしたため席が離れたらしい魅夜の姿が見えなかった。

「駿と出かけたよ」
「如月と？　魅夜が？」

珍しい組み合わせだな？
如月は次回に多分出て来るだろう。紹介は次回でいっか

「カズ？　次回って？」
「それはだな～」
「そうそう。カズ知ってる」

軽く無視すんな。ってか、華麗だな

「なんだよ」
「転入生……僕の勘だと、カズの言う家出娘だよ」

なにをおかしなことを、黒ローブで学校に来る馬鹿なんて居る分けねぇだろ？
そもそも、居たらオレの常識は大きくかわるぞ。

「担任は？」

担任＝好敵手の情報をベストフレンドに聞く。

「石川文宏ってゴツイ筋肉マ○」

「フミｔ　で良いかな？」

「あだ名考えるかな？　真っ先に」

いいじゃないか。魅夜が居ないからヒマなんだよ。

「ヒマだから、転校生に挨拶しにいきますか」

「いってらっしゃい」

なぜ、笑みを浮かべる？

オレは窓側の一番端に向かう

「ちょっと失礼」

いや～。不良（ワル）ってのはたまには、いいねぇ～こう言うのに便利だな。

周りに居た男子が全て無言で立ち去るほど酷いかな？　オレって？？

「やあぁ、こんにちは。オレ、雨宮和也よろしぃｋ……」

オレの（作り）笑顔が凍りつく。

「あっ。私ｈ――」

一方の＜家出娘＞も笑顔が張り付いたまま……だ。

『あ、あああああああああああああああああああああああ

ああああぁ！！！！！！！！！』

オレ達の声は、校内中に響きわたった。

【1話】始まる新たな日常？（後書き）

こんなのだけど、評価していただくと助かります

【2話】アイツの正体？（前書き）

明日から、学校なので、更新不定期になります

６０話目【人気発表なり♪　血の予感？？】です

よろしくお願いします

【2話】アイツの正体？

「お、おま……？」

思考が暫らく停止していた。

気がついた時にはオレの脳内は　何故だ？　何故、家出娘が……ここに！？

などと、言うコトに頭がいっぱいであった。

「ウチの生徒だったのか？」

次第に考えれるようになった頭でよくよく見ると、家出娘は聖涼（ウチ）の制服（ブレザー）を着込んでいた。ってコトは――ウチの生徒ってコトだ。

だとしても、ふに落ちない点がある。なんで、黒ローブだったんだ？

「あ、私は。レナ・フォード＝ライズ・ハールドです……」

（しまった！　この人には、転移したところがみられたかも！？ど、どうしよ）

「よ、よろしく」

なんなんだ、こいつは！？

握手しようと、手を出す

「こちらこそ」

笑顔で握り返す。家出娘こと、レナ・フォード＝ライズ・ハールド

「ん？　そういえば、外国人なんだ」

名前からするに外人だが……日本語がペラペラじゃねぇか？
本当に外人か？
オレの思考は次第に疑問で頭が痛くなってきた。

出来るだけ友好的に……
そう、思った瞬間に何かがひっかかった。
ん？　なにか、わすれてないかオレ……？
ん～。なんだっけな～？　確かチャリで爆走（ガキを引いたほど）していてそれで……？

「……？」

重大な事を思い出した。こいつ、突然、降ってきた？　いや、出てきた？　そうだ、オレが言い訳を考えながら自転車に乗ってるときに……現れたんだ！
そうだ、あの変な音とかして、それで、オレの真上に落ちたんだ！？
なんか、お約束な臭いがするぞぉーくっくくくく（邪悪）。
お約束的にこいつの正体が気になるぜ！！

「なにを、大声をだしてるのかしら？」

何時の間に、居たかは、しらないが……魅夜が、居た

「み、魅夜？　なにを？」

更にはオレにヘッドロックを極められた。
あ、結構良い匂い？
シャンプーｏｒ石鹸の良い香りだ……。

「にゃーーーーーー！！」

干渉に浸っているところを邪魔された。
ってか、ネコか？

「なぜ、猫？」

ヘッドロックを掛かれているので掠れた声しか出ない。

「ケットシーなんか、大っ嫌いだーー！！」
「猫語使ってんのにか！？　ってか、なんで、ケットシー！？　ってか、長靴を履いた猫なんていないよ！　ふつー！？」

ふ、不思議な奴だ。
それより……く、苦しい……！

「無理矢理履かせれば？」

魅夜、それ、動物虐待。
ってか、名前の通り「鬼」だわ、そりゃあ……

「悪魔」と、オレ
「死ね」

と、魅夜がそう吐き捨てる。
一層に強くなった。ぐふぉ……。さ、そんそ（酸素）を……

「まぁまぁ。僕の言った通りカズが言う家出娘でしょ？」

何時の間にか、オレの背後を将が盗っていた。

「ね？」

笑顔でそう言う……お、恐ろしい子。
お母さん怖いわ……。

「むにゃ～？　はぅ？　さすが私～寝ちゃった。お茶目だなぁ～」
「……破ッ」

ムカツイタから蹴りを1発
なんなんだ、こいつは……？

「なぁ、オレの事無視してないか？」
「あ、如月。居たんだ」

魅夜の後ろに居る馬鹿デカイ男に返す。
存在薄いからだよ～。まったく

「お前は親友だよな」
「さぁ。和也だから」っと魅夜。失礼な
「どう言う意味だよ」オレは目を三角にして魅夜を睨む
「そのまんま東」っと、見事に的外れなボケをする魅夜
「芸名だよそれ」ってか伏字を使えよ、っと心中でツッコム
「いまは、東国〇だよ」ツッコミにツッコミで返す魅夜
「屁理屈だ！」ツッコミのツッコミをツッコミで返すオレ
「立派な理屈よ」そして、我を貫き通す魅夜
「うぐっ」

魅夜に圧倒されていまう。アナタ……魅夜は強く育ちましたよ…
…（涙）

「如月！　援護を！！」
「……」
「お～い」

如月、無視は、酷いよ

「まず、オレに紹介させろ！！」
「なんで、紹介すんだよ！？」

変な奴だな～。なんでいまさら紹介なんて

「オレ、如月駿（きさらぎしゅん）。１５歳で……」
「詳しい紹介はＷＥＢで！」
「和也！？　なんか永久ループの予感だぞ！？　頼むからちゃんと紹介させて」
「な、泣くな！　分かったから」

なんで、こうなるかな～。
どーでも良いヤツの紹介ってイヤだなぁ……
時間の無駄だし

「如月駿。歳は１５、身長は１８７体重は７９の、赤髪のストレートで【個人情報なタメに削除】……ｅｔｃ」
「なんでそんなに知ってる！？」
「……作者が」
「はっ？」

あ、馬鹿は知らなくて良いよ

「にゃんか、輪に入れないよ？」

猫嫌いが、猫語を使うな。

―川原―

「魅夜。レナのことどう思う？」

オレは、魅夜と一緒に帰宅中である。
ま、家が近いし……『確か』ガキの時からずっと帰りはこうだった筈だ
確かってのはオレの記憶が小学生以前の過去を思い出せないからだ……ま、気にするな。

「可愛くて良い子でしょ！」

声に怒気がある　なんでなんだか
怒るならもっと可愛く怒ってくれ

「そうじゃない。変だろ？」
「和也の方が」

何を怒ってんだよ？　だからさぁ？

「あいつってさ、この辺に居なかったよな。他校や地区外に、お友達も沢山居たから知ってんだけど、ここら辺のヤツじゃないらしい」
「それがなにさ？」

ったく、聞いてたのに気がつかないのか

これだから、この馬鹿は……

　コイツは実際はオレより成績が優秀なのだが……
解答欄を1つ飛ばして書いたり、問題を最後まで読まないで書いて間違ったり……
難儀な馬鹿だ……

「オレが大事なクラスメートから、脅しぃ……訂正、借りた新入生資料だ、主に自己紹介の時の話しと、第一印象とかも混ぜたヤツだ」

　おっと、読者様？　脅しじゃないぜ？
刃物をちらつかせてお小遣いと一緒に頼もうと思ったけど理性で押えたぜ？

　怪しい？　ノォンノォン。メガネ君のポケットからくすめたヤツだよ

「それがぁ～？」
「レナ・フォード＝ライズ・ハールドの紹介文だ。『レナ・フォード＝ライズ・ハールドです！ハードルじゃないよ　歳は16歳♪誕生日が、4月5日だったの～。好きな事は、友達と話すことで～す。皆さんよろしくお願いします』だ。もんだいは、この質問だ『家は、何処なの？　こんど、遊ぼうよ』この質問に対し『この地区の2丁目にずっといるよ。家はねぇ～……』。わかったか？」

　魅夜の顔が面白い顔にかわってる……
ってか、気がつけアホンだら

「そう、2丁目は、オレらが通っていた中学がある所しか学校は無い。近くても2丁目からは遠い。隣の丁の中学とか、この地区の中

学は全て如月と、将、オレで制覇したしな」
「だからって」
甘いな……魅夜！！
「可愛い子のデータは、全て知って！！　ガハッ！！　なにしやがる！鞄で殴ることないだろ！？」
「ヘンターーーーーーーーーイ！！！」
「ま、待て！！　ご近所迷惑・・・・・じゃない！　訂正しろ！！　ヘンな噂が地区に回るだろ！！奥様方の情報網侮るなよ！！」
オレにヘンタイの汚名がぁ！！！！！！！！！
オレが誤解を説くのに1週間の月日を有したん？　月なんて経ってないって？
ほら、そりゃぁ……アレだよ
一握りの人達は気がつくかな？
いっせいのーで！
「気ニシナーげふぅ！！」
作者愛用の目覚ましが落ちてきた。
禁止用語ですもんね！

【2話】アイツの正体？（後書き）

間違いなどありましたら報告してくれたらとても、ありがたいです

【番外編】メインキャラ紹介！（前書き）

な、なんとか更新完了っっっ！！

今回は、メインキャラのプロフでした！　続きが気になってた人はスミマセン、早目にメインキャラの整理がしたかったために・・・。

『好きな事』が、抜けているのわ、趣味と同じと捉えてください

【番外編】メインキャラ紹介！

名前・雨宮（あまみや）　和也（かずや）
Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ
性別・男
年齢・１５
誕生日・８月１７日
職業・学生
学年・高校１年生
学校名・聖涼高等学校
身長・１７９ｃｍ
体重・６２ｋｇ
髪形・カラー・短髪でいつも寝癖が立っている。青が少し混ざった黒（藍色に近い）
容姿・上の中
口癖・「やる時にやらない、なら……やる意味はねぇ！」
趣味・球技全般。寝ること。
好きな食べ物・ラーメン
嫌いな食べ物・特に無し
嫌いな事・ハッキリしない事
流派＆特技・雨宮流（無差別）武術。剣術。格闘術などなどｅｔｃ…昇龍拳。波動拳なども多用。喧嘩
備考・３年前に家族と他界。成績は学年（全５クラス、２２４人）中で２７位
まあまあ、整った容姿。中学時代に、如月駿。井塔将と、喧嘩に暮れていた。ある日を境に丸くなった。因みに３人の中で一番の実力者。いじめっこ（？）
和也「半端な成績なのに……。ん？　勿論、勉強なんてしてねぇぞ」

名前・レナ・フォード＝ライズ・ハールド
Ｒｅｎａ・Ｆ＝Ｌ・Ｈ
性別・女
年齢・１６
誕生日・４月５日
職業・学生。死神
学年・高校１年生
学校名・聖涼高等学校
身長・１６６ｃｍ
体重・秘密ッ♪
髪型・カラー・肩まである金髪
容姿・上の中
口癖・たまに、「な」が「にゃ」になる
趣味・おしゃべり
好きな食べ物・プリン
嫌いな食べ物・ニンジン
嫌いな事・ケットシーを見る事
流派＆特技。八式重力魔法
超重力（メガ・グラビジョン）。大食い
備考・本編のヒロインです、明くるくて、周りを元気にするパワーのある子にしたい、作者です。ネコみたいな感じの子です。
実は、この明るすぎる性格には、多少の裏設定も（極秘？）
成績（学年順位）は２２０位
レナ「やっぱ、あたしが、ヒロインだよねっ！！」

名前・柴原（しばはら）　魅夜（みよ）

Ｍｉｙｏ　Ｓｈｉｂａｈａｒａ
性別・女
年齢・１５
誕生日・６月１４日
職業・学生
学年・高校１年生
学校名・聖涼高等学校
身長・１７４ｃｍ
体重・トップシークレット
髪型・カラー・ポニーテール。黒
容姿・上の下
口癖・「しっかりしてよぉ」
趣味・弓道
好きな食べ物・もも
嫌いな食べ物・ナス、レバー。
嫌いな事・特に無し
流派＆特技・柴原流護身術＆高梨流弓術
極光拳（！！！？）
備考・和也の幼馴染で、物事をハッキリさせるタイプ。弓道の腕は地区大会２位。サブヒロインの位
冷静に考えるタイプだが、空回りが多い。幽霊とかが駄目なタイプ
成績は１０１位
魅夜「べ、別にぃ……幽霊なんか、だ、大丈夫だいっ！！
ってか、和也より成績が下ァァ！！！？」

名前・井塔（いとう）　将（まさる）
Ｍａｓａｒｕ　Ｉｔｏｕ
性別・男

年齢・１５
誕生日・９月１日
職業・学生。板前
学年・高校１年生
学校名・聖涼高等学校
身長・１８４ｃｍ
体重・７８ｋｇ
髪型・カラー・ショートヘアー。銀髪
容姿・特上の中
口癖・「面白ければそれで良いよ」
趣味・読書
好きな食べ物・りんご
嫌いな食べ物・特に無し
嫌いな事・読書の邪魔をされること
流派＆特技・須藤流暗殺術
頭脳戦
備考・寿司屋＜月栄（げつえい）＞の跡取り。落ち着いてる人だが、『始まる新たな日常？』で紹介したようにキレると鬼神並の力を、発揮する。高１にしては長身。
成績は、８位とかなり頭が良い方。いたずらっこ（？）
将「まったく、怒るとそんなにこわいかな？」

名前・如月（きさらぎ）　駿（しゅん）
Ｓｙｕｎ　Ｋｉｓａｒａｇｉ
性別・男
年齢・１５
誕生日・６月２０日
職業・学生

学年・高校1年生
学校名・聖涼高等学校
身長・１８７ｃｍ
体重・７９ｋｇ
髪型・カラー・膝まであるロング毛。深紅
容姿・中の中
口癖・「まま～～」（殺す）冗談、「仕方ねぇな」
趣味・喧嘩
好きな食べ物・チャーハン
嫌いな食べ物・パセリ
嫌いな事・無視されること
流派＆特技・我流脚技
影を薄くする（殺す）冗談ですよ～♪
備考・デカイ割に影が薄いという可愛そうな人。意外と真面目な性格で、３人の中で１番弱い。
成績は、７１位。いじめられっこ（？）
駿「わるかったな！！　影がうすくて！」

ついでに、僕の紹介を…
名前・飛焔（ヒエン）
由来・テキトー
性別・男
年齢・１４歳
誕生日・６月１９日
職業・アルバイター（？）　学生　作者
学年・中３
学校名・言えるかァァァ！！！！！
身長・１６４ｃｍ
体重・５１ｋｇ

髪型・黒のボサボサ（寝癖ぼうぼう）
容姿・……秘密♪
口癖・「ダル～」「果てしなくめんどくさい（どうでもいい）んですけど」
趣味・モンハン（？）　バスケ　料理
好きな食べ物・人の不幸（！！！！？？？？）
嫌いな食べ物・野菜
嫌いな事・人の幸せ（！！！！！！？？？？？？）
特技&流派・合気道を少々…。最近では殆ど喧嘩の応用を含めて我流になっている。
備考・我、語る事無し！
飛焔「ヨロシク！」

駿「羞です」
将「恥です」
和也「心だ」

飛焔「読者様、まったく違います」

【番外編】メインキャラ紹介！（後書き）

評価、作者のやる気に繋がります

【3話】戦場へと…。（前書き）

この、更新の速さ・・・自分でもビックリです

人気投票にお手伝いください！

【3話】戦場へと…。

先週は、エライ目にあった。まったく……。

ん？　どうやって止めたかだって？　ババァ共を殺意に満ちた目で脅しただけだけど？

ちょっと、ドスを効かせたらお金もくれたし♪

「カズ♪　大変だったね」

オレが、へばってる時に笑顔で話しかけてくる我が親友。憎い…。

コロシマスヨ？

「まさか、5日目で隣町まで広まるとは……奥様達って……怖い」

クソババァが。噂好きなら探偵にでもなりやがれ！

畜生、小学生にまで舐められたし。（半殺しにしたけど）

それより、それを止めたオレを誉めて！

「いいんじゃない。丸く収まったんだし」

「よくねぇーよ！！」

どんなに、大変か思い知らせてやろうかっ！？

オレの苦悩を思いしぃ――ッ！！？　ゲップ！！

将の拳がオレの鳩尾にめり込む。お、重たい拳だな……相変わらず

……ボクシングの世界チャンピオンも真っ青だぞ？　これは……。

「それより……どうなんだ？」

鳩尾を押えながらオレは将に『頼んだ物』を求める。

うぅ……やっぱり効くなぁ……。将の拳は的確に弱点を突くから厄介なんだ……。

「えっ？　カズまさか、私を襲おうと」

どういう経緯でそーなったんだ！？

ってか、なんだよ右手を左の頬に当ててッ！

「つーか、女言葉つかうな！！」

キモイし、イタいから！　キャラが、イタいから！！

確かにお前は女っぽいヤツだけどさぁ？　オレよりデカイのがヤバイって！！

「レナの件だよっ！」

オレが、誤解を解くために歩き回ったため、レナについて調べてもらったのだ。将もレナの＜正体＞について、興味をしめしたためだ。将も引っかかってた見たいだし。

それにオレだって気になるし。

「な～んだ」

なんだとは、なんだキサマ？　そんなにオレをヘンタイの噂を真

実にする気かっ！！
オレは、将を睨む。と、いっても将はいつものウソっぽい笑みなんだがな……。

「冗談だって」

笑えねぇー冗談だ。将ならやりかねない……。
もっと悪質な手でだがな……だから、コイツは怖いんだ。

「で、結果は？」
「カズの予想どーり。二丁目にレナ・フォード＝ライズ・ハールドの記録は無いよ。ホントに、突然姿を表したって感じだね」

やっぱりね。

「住んでるアパートも最低限使う物だけ、最近の女の子には珍しいよね」

そうだな……魅夜の場合は未だにゲーセンで獲った人形を置いてるんだがな。

びみょうな所が乙女だこと……フフフ。

「んで、大家さんはなんて？」
「ずっと前から住んでるって」

おかしい事だらけだな、やっぱ。

オレと将は不気味な笑みをつくる。どうやら、同じ事を考えてるみたいだ。

「親については、聞いてくれたか？」
「ぬかりは無いよ」

将の目が怪しく光る。こわっ！！
でも、流石は将だな？　本当にぬかりがない。

だから……頼れる。黒い意味で。

「親は、二人とも出張、決まったも同じだよね」
「ああ。だな」

オレの中で確信はついた。

レナは秘密がある。

「1つ良いか？」
「うわっ！！」
「居たんだ、駿」

あいうえお順なタメ隣の席の如月が何時の間にか着ていて輪の中に入っていた。

流石にビビッたぜ。さすが、影が薄いから気がつかなかったぜ。

「和也はまだしも、将はわかってたろ」
「ははは、当然」

失礼なヤツだな？　オレだって……オレ？　だって……さぁ？

「ゴメン」
『認めんかい！』
　ははははは。悪いな。
馬鹿の気配を感じるの苦手なんだよ
「で、なんだ？　駿」
「オレが、思うに……こんなのどうよ？」
　人差し指をオレ等の前に出して、如月は話し始めた。
―数分後―
「たしかに、駿の説はあながち間違いじゃないかもしれない」
「将！？　それじゃあ、オレらは……」
　たしかに、如月の考えは間違いじゃないかもしれない。だが、だけど！
「魔法……しかも、記憶操作魔法なんか、御伽噺（おとぎばなし）を信じないといけないんだぞ」
「確かに、御伽噺ね」
　何時の間にいた？　幼馴染よ？
　ってか、出席番号巡だから断然、違うだろぉが。

「おはよ、魅夜」
「明らかな怒気を混めて手を出さないのよ」

ちぃっ、手の裏に仕込んだ画鋲がバレたか。
勘の良い女だなぁ？　ってか、1度引っかかって以来、なかなか引っかからないんだよなぁ。

「朝から夫婦漫才はいいから」
『だれが、夫婦じゃあああああ！！』

おお、オレと魅夜の見事なまでのシンクロ！　多分、エ○ァも動くよ！

それより、如月よ、何をどう見たら夫婦漫才に見える？
オレは手に画鋲を仕込んでるんだぜ？　殺意剥き出しでだが。

って、考えてるウチに、如月の鳩尾に拳が貫通していた。
か、貫通！！？　あ、目の錯覚か。

「駿、動かないよ」と、将が言った。
「天に召されよ。如月よ」手を合わせてご冥福をお祈りするオレ
「自業自得よ」如月の返り血を拭きながら魅夜が言った。
「勝手に、殺す……な。」

如月は力なく地に落ちた。よく生きてるな……コイツは。
ま、どーでも良いか♪

―Ｒｅｎａ・Ｆ＝Ｌ・Ｈ―

Ｚｚｚ……　Ｚｚｚ……。

ん？　はっ！！　えっ？　私視点なの！？　寝ちゃってたよ、てへっ♪　どじだな～、私♪

私ってやっぱり可愛いのねぇ。なんと！　一週間でラヴ・レターがなな、なんと！！　３０枚も♪

でも、私好みの人なんて居ないんだもの！　やっぱり可愛い子には、かなりのイケメンじゃないとねっ！　どんなのが、良いかかって？

身長は１８０前後でそんなに太くもなく、細くもなくて、顔は上の中以上、どこか、不器用そうな人で……ｅｔｃ

ま、そんな人は少ないだろーにゃ。　そんなことより、あの、４人（和也、将、駿、魅夜）怪しんだ、まさか、私の正体が……そんな事ないよね～♪

その前に、私は……戦に出ないといけないのよ。

カシャッと、私は……紙を強く握っていた。

なに？　ちょっと読者様ぁ～マシンガントークで引かないでよ！

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

「ううっ？　保険室？」

お、起きたか。

椅子から立ち上がり如月の元に近寄る。

「大丈夫か？　如月？」

「あ、ああ。ん？」

あ、気がついたか？

やれやれ、厄介だな。あの後に【ズキューン！】までしたのに、生きてるよ。しかも記憶にありやがるし。

「じゃ、また来るかｒ「ちょおおおおおおおおおっと、まてぇえええええいっ！！」なんだよ？」

逃げようと立ち去ろうとした時に、如月が叫んだ。

クソ、須川女史め。余計なことをしやがって……。

「『なんだよ？』じゃ、ねぇーだろ！！！！」

「うるさいな、保健室だぞ」

「そう、保険室は静かにねっ」

須川三玖（すがわみく）。前にオレがお世話になった人だ、改めて見ると本当にナイスバディーだな～。改めて実感しました！！　ってか、白衣とその豊富な……ふふふ。

「須川女史っ！？」

「しばらく絶対安静よ」

「そんなに、酷いんかいっ！！　グパッ！？」

あ、気を失ったか？　血を吐いたしさ。まさか、本当に召されるとは……やった♪

「これくらいなら、大丈夫♪」

おいっ、すげーな須川女史

まぁ、貫通したコイツを直したんだからな。

―廊下―

「和也！　これ見てよ」

魅夜が、オレに何かを持ってきた

「ん？」

そのチラシに視線を落す。

「ほらっ！　早くしないと間に合わないよ！」

そう言い紙をオレに見せる……こ、これはっ！！

「柴原少尉ッ！　１階級特進してやろう！！」

どこの、兵隊だ。

「はっ！　ありがとうございます！！」
「柴原中尉！　これから、我らだけでこの乱戦を生きぬかねばならないっ！　もし、オレの身になにがあろうとも、このターゲットを＜捕獲＞するのだ！！」

ま、お金を使ってだけど。

「少将！？　私にはできません」
「我らは、これを確保せねばならぬのだ！！　甘いことをぬかすなっ！！」

今後の生活のためにね。

「しかしッ！」
「オレも。必ず勝ち取るから、だから！！」

オレが負けるとでも？

「わかりました……」

なんか、ドラマっぽくないか？

「キミだけは……なんとか」

死亡フラグだぞ？　オレよ……。

「少将……了解しました！！」
「いざ！」

オレと魅夜が、お互いを見つめ合う

『出陣！！』

続きはｗｅｂで！（ウソ）

【3話】戦場へと…。（後書き）

「どうも、雨宮和也です」
作者です。
「で、後書きに呼んで、なにか、用事？」
いやー、後書きのネタがですね。
「何をしたらいいんだ？」
それを、考えて・・・キャラでもなにか出そうと、してですね。
「だから、何をすれば良い」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
「・・・・・・・・・・」
では、次回！！
「コラぁーーーーーーーーーーーー！！！！」
次の内に考えます！！

【４話】開店♪（前書き）

今回は、短いです
４０話目を終えまして…
６０話目に人気投票をもくろんでいますです。お手伝いしてください

【4話】開店♪

「ちっ、やはりかなりの人数が居るな……」

学校帰りにすぐさま来たが……。まだ、十五分前だぞ。

“安い”からってこんなに来やがって、どういう神経をしてんだ？　たかが、１０円、２０円なのによぉ……。ま、そうじゃねぇんだよ……な。

「仕方ないよ、和也のターゲットはなに？」

「大丈夫だ、魅夜とは被らないはずだ。被ったとしてもオレらがバ共に劣るか？」

いや。オバハンパワーには勝てないかも？

いくら衰えていても、大安売りに目がないオバンの実力が発揮されるからな。

「負けちゃいなさい！！」

魅夜！？　学校での誓いＩＺＵＫＯ（いずこ）？？　たしかに、落ちたら構うなと言ったけどよぉ、さすがにねぇよ。

「寂しーよ！」

身体をデフォルメして魅夜に飛びかかる。

うむ。これぞ、キャラクターの特権なり。

「幼児化しないっ！！」

挟撃乱舞剣（ハリセン）で顔面を叩かれる。

良く生きてるなっと、自分に問いたいものだ……顔面がアスファルトに埋もれてるし。

「いつもと、ボケとツッコミが逆だけど、好きだーーーっ」

挫けずにもう1度、飛びかかる。

拳を構えて。ちなみに、デフォルメ中……。

「はいはい。ウソはいいから」

今度は蹴り飛ばされる。更にはマヒャ○の追撃。

こいつ……どこでそんなワザを？

「ウソじゃない。帰ったら、結婚でも……」

鼻血を押えてジョーダンを言う。

【×　ジョーダン】
【○　ジョウダン】

……知らん！！　なんだよ！？　その目は！！

「死亡フラグだよ！？」

余りにも哀れな姿だった為か？　魅夜はツッコミ（ベキ○ゴン付

き）
お前のせいで死にそうかも!?!?　ってか、オレにダメージを与えたのは貴様じゃァァ!!

「万能だな、魅夜」

まさか、ドラ○エの魔法を使えたとは……。我が幼馴染みながら天晴れだ。

「ホメてないでしょ」

いや？　ドラクエの魔法を使える人が居るんだよ？
そりゃぁすげぇぜよ。
第一、りゅう○う様愛用の呪文だからな。

「なによ？」
「ふむっ。ツッコミは魅夜だけで十分か」

どこから、その話しになる!?　自分に問いたい。
ここは、思いきってボケに専念を……？

「なに!?　私だけって？　まだ、ボケ役でるの!?」
『そりゃ、大量に』
「と、作者が」
「作者ってなに!!!?!?」
「そりゃ……」
「で、開店まで何時」
「無視ーーーーっ!?　えっと、あと三分ぐらい」

何時のまにかボケとツッコミが変わったのだ!?

ん？　開店ってなにかだって！？　あ、説明してなかったか。オレと、魅夜はただいま激安スーパー『怨瀬腐（ジョセフ）』の開店１５周年目記念セールだそうだ。例えれば、玉子ＬＬサイズお一人様１個かぎり、１円であるのだ……大丈夫すか？と、聞きたい。

名前はあれだが、格安スーパーで地元では戦争の場だ。

安いのなんのその、ヘタしたら１００均より安いかもしれない。

「魅夜……」

が、……。

「わかってる」

そんなに、安ければ……。

「強敵よ」

そう、名のある人が必ず来る。スーパーの神々が。

「〇ム〇ムの実を食したと言われる３人の子供の生活を支えるシングルマザー。凱旋瑠美子（がいせんるみこ）。１００ｍ、９秒９１を誇るこの地区最速の専業主婦、高橋翔子（たかはししょうこ）。など、他３名ほどね」

「くっ。激戦になりそうだな」

激戦区とは、先ほど述べた玉子。と、豚バラ肉１グラム辺り１円。ティシュボックス５箱入り３０円。などなどだ、ただし、オレが狙うのは玉子、ティッシュボックス、米１０キロ、コーヒー豆などなどなどだ。

激戦区が2つか……。このメンバーが、相手だとキツイな。

『開店まであと、1分です』と、店員の声。

「魅夜」

「うん」

遅れて来たため、場所は最悪。位置は後方だ。

「10秒前…」

オレが、自分の腕時計を見ながら呟く。

・・・・・・・

「ゼロ！」

『開店です！』

と、同じに扉が開く。

勢いよく、一斉に駆け出す。さ、勝負だ！！

【4話】開店♪（後書き）

前回の約束守れないで、スミマセン

【5話】鍋パーティー？（前書き）

更新遅れました!!　すみません、部活の試合で遅れ。中間テストの勉強もあって・・・。速目の更新を・・・僕に時間を!!
６０話目に人気投票の結果発表をしたいので、お願いします！　協力してください

【5話】鍋パーティー？

先頭を切ったのは、やはり高橋翔子だった。

は、速いッ！！　周りのババァ共ともう１０m近くは離れてるぞ！？

「すみません！」

次々と人を追い越しているタメに（一応）謝って前へ前へと進んでいこうとするものの、前にはなかなか進まない。

くっ！　ババ共邪魔だ！！　目の前は人ヒト人ヒト……！！　いらつく！

「じゃあね♪　健闘を」

魅夜が、話しかけてきた。随分と余裕な顔じゃねぇか。

「余裕そうじゃん」

苦虫を加えたように苦しい返事を魅夜に返す。

「私は、激戦区が入ってないからね」

それに引き換え魅夜は余裕そうに答える。

「オレの苦労を知れ」

心の底からそう罵る。溜息をする動作付きで。

「まだ、苦労してないじゃん」

と、魅夜は舌をちょこっと出して、可愛らしい……オホン。にこやかにツッコミをくれる。

「だな」

それにオレは大きく頷く。そして……。

「だね」

魅夜も頷いた。

そうして、オレ等は、笑いながらお互いの『獲物』がある場所へと足を進めた。

「さてと。がんばりますか」

話し相手も居なくなったっと言う事で気合を入れるタメ頬を両手で叩く。

我が、生活費のために！！　もう一回、気合を入れて走り出す

玉子売り場に向かうに良いルートは主に2つ

1つ目は、正面から向かう最短コース。ただし、道が細いので足に自信がある人や、最前列を取った人くらいなら完璧とれるコースだ。

2つ目は、ドリンク売り場を、右折して。そこから真っ直ぐ行き、玉子売り場に行くコース……利点は道が広いこと。ここは、遠回り

だが、足が速ければ。たとえ後方でも取れる可能性がでるし、ほとんどが、最短コースを通るので、すいている。簡単にいう穴場だ。

どうする？　並びは後方だった……。足ならここらのババ共より速い自信がある。

ここは、２つ目だ！！　オレは身を９０。返し飲料売り場に出る。そこには、１０～２・３人程度の人しか居なかった。よしっ！　いける！！　オレは、全力で走り出す。

見えた！　玉子が乗っているショッピングモールを見つけるが、ババァ共が隙間無く取り囲んでいた。正直……ぶっ殺してやりてぇ☆　『ちょっと壁を貫通』させるぐらいで逃げてくれるかにゃぁ～？

はっ！　なにを笑顔で邪悪な考えを！？

どうやって、割り込もうかと考える。やっぱり、突撃☆笑顔の悪者（レオ）♪　で……。

いかんいかん。悪じゃないか。これは。

ならば……どうする？　オレは……なにをしたら良い？

策は無い……ならば……肉弾戦だ！

オレは命を惜しまずにババァが群がる陣地へと駒を進めた。

「吹き飛べ！　覇道拳（はどうけん）」

波動拳をオレ流にアレンジした技だ。当然の事ながら威力が押え

ておく。青白い弾はオレから一直線上にいるババァを吹き飛ばし、その隙に玉子を取り脱出する。

ふふふ、ヒットエンドラン！　それで突き進むのみ！！

邪魔すると怪我するぜぇ？

【迷惑です。】

結果を言えば12戦9勝という好成績を出した

「買ったねぇ～。で、和也？　今日……」

「ああ。香澄（かすみ）姉さんから聞いたよ。今日、オレん家で晩飯食うんだったな」

香澄姉さんは魅夜の姉だ。後で、出て来ると思うが……うん、出てこないと性格は分からないと思う。あ、魅夜が、オレん家に来るのはまれにある事で、それは、魅夜の親父達は政治家でいっつも遅いので、小さい頃から毎日、オレの家で晩飯を食べに来てたのである。さすがに、高校に上がったら年頃の男と娘を一緒にさせるわけには、いかず。オレは親が他界したので。ま、そういうことだ。

「う～ん。安い食材も手に入ったし……鍋でもやるか？（将達も呼んで）」

「鍋？　う～ん、そうだね（和也と二人っきりで）」

そこからしばらく談笑をしながら、オレ達は家に向かった。

「ねえ、和也？」
「ん？」
「久しぶりに公園寄ろうよ」

魅夜が指さしたのは、オレらの家の近くにある公園だ。オレと魅夜はよく遅くまで、遅くまで公園で遊んでた。ま、2人共、親の帰りが遅い仲なため7時まで大丈夫なのだ

「そだな。久しぶりに寄るか」

オレらは、公園の中へ足を進めた。仕方ないじゃないか……楽しそうな魅夜の顔は久しぶりなのだから。中学の時にコイツのは大分、迷惑をかけたからな。

「なっつかし～な。ぜんぜん変わってねぇーぞ」
「そんなに変わらないよ」
「そりゃそっか」

笑い合う。端から見ればどう見えるのだろうか……まさか……うっほん！
オレの考えが、バレれば……多分、魅夜に殺れるであろう。桑原桑原……。

「で、どうすんのさ？　レナちゃんのこと？」
「と、言ってもな。どうすればいいんだか」

オレらは、ブランコに腰を下ろす。公園の入り口から向って右がオレの定位置でその隣が、魅夜だ。それは今も変わってはいない。

「なんか、さ……。イヤーな予感がすんだよなー」

「はっ？」

アンタ、馬鹿って顔で見るなよ。

「なんかさー」

ギコッ。と、ブランコが揺れる。そのまま、少しづつ景色が変わっていく。

「オレ達の常識じゃあ、分からない事なのかも知れない」

「？」

魅夜も、ブランコを揺らし始める。

「なんて言うか～。オレ達と、アイツは、レナ・フォード＝ライズ・ハールドは。なにかが違うんじゃねぇのか？」

「頭でも打った？」

「おいっ」

意外と真理だと思ったんだがな？　考え過ぎか？

「和也。最近、レナちゃんの事ばっかだよね」

「ん～？　そっか。たしかに、気になる存在だが……」

「そう」

……な、なんで機嫌がわりぃの？　それと、もう1ついいか？

見つめないで！？

ちょっと、何故だか恥ずかしいんですけど！

「……また、後でな」

「あ、ズルーイ！！」

「ズルくない！」

何が、ズルイんデスカ？

「んじゃ、帰るか」

ブランコから、飛び降りる「１０点…」と、呟く。

「バーカ」

「ひどっ！！」

―Ｍｉｙｏ　Ｓｈｉｂａｈａｒａ―

「あ！　如月！！　それは、オレのだ！！」

「うるさい！　速いもの勝ちだ！」

「肉は貴重なんだぞ！　お前、さっきから肉しか食べてないだろ！！」

「野菜など要るか！！」

「バランスを考えろ」

……。せっかく、せっかく。和也と二人っきりの食事だと思ったのに。

「魅夜。初視点なのになにを？」
「カズ、視点って？」
「気にすんな」

たしかに、初視点なんだけど！　なんだけど！！

「肉もらい！」
「させるか！！」

駿と、和也は相変わらず肉の攻防戦やってるし。

「駿、いい加減にしようね」
「は、はい」
「どうした？」

そんなことは……良いんだ。

「もっと食えよ、遠慮はいらねーよ。『レナ』」
「なんでレナが、居るのよーーーーーーっ！！」

そう！　和也がみんなを呼んだ時に、この子……レナも着いてきたのだ！！

「鍋は大勢で食べるものだ。魅夜、さすがに、鍋を2人で食べるのはきつい」
「そんなことは、いいのよーーーーーー！！」
「落ち着け。血糖値上がるぞ」

まだ、そんな心配いらんわ！！

「まったく、続きは次回で」

「次回ってなに！？　ちょっと！　これで終わりなの！？」

【5話】鍋パーティー？（後書き）

和也「で？」
はい。お題は作者の、のうりょ・・・
駿「運動音痴」
和也「馬鹿」
魅夜「書くヒマがあるなら、勉強しろよ。テスト近いんだし」
将「誤字脱字が多い」
容赦ないね！！
和也「お題だから」
駿「クズなのは、変わらんぞ」
将「能力低いから」
鬼！！
魅夜「こんな、馬鹿でどんくさい作者ですが」
詩織「オレと死神？！　よろしくお願いします」
フライングだよ！？　まだ、出番来ないから！！
『次回もよろしくお願いします』
君ら、作者を無視ですか？

【6話】なんか、波瀾の前兆？（前書き）

評価、とても作者のやる気が沸いてきます

人気投票、作者の野望につながります。お気に入りのキャラを投票してください

【6話】なんか、波瀾の前兆？

「どうした？　和也？」

くっ！　どっちだ？　どっちが正しい！？

「早くしろよ？」

駿が和也を急かし冷静な判断能力を奪う

……見えた！

「右だぁぁぁぁぁ！！」

オレが引いたのは、クローバーの3……。否、ジョーカーだ。そうなのだ、オレ達は今、ババ抜きをしている。

「ははははははっは！！　またか！？　これで、オレが引けば、オレの勝ちだ」

「くぅ！」

オレの右にはジョーカー。左にはハートの3がある。さ、選べ如月！

「オレは、今日……お前をこえる！！」

そう、ほざきながら、如月は、左のカードに手をかける。

クッ！　引くな！　引くんじゃない！！

「……。と、見せて……右だぁぁぁぁぁぁ！！」

馬鹿だ。

「ＯＨ！　ＮＯ！！！！！！！！！」

「ええい！　いい加減にしなさい、あんた等！！」

歪曲空間からハリセンを出し魅夜がオレの頭を叩く。

って！　なんてとこから出してんだよ！　空間が歪むの見えたぞ！！

「何故、オレを叩く！？」

何故だ！？　ミスったの如月なのにオレを叩きやがった。

暴力だぞ！　イジメだぞ！！　最低なんだぞ！！！

「何回、これを続けるのよ」

「うっ……」

そうなのだ、突如始まったババ抜き（罰ゲームあり）で、最後に残ったオレと如月で、ババの取り合いをしているのだ。あ、ババ引いた。

適度にシャッフルをして、突き出す。

「ふふふふ。どれだ？」（カズ）

「右だっ！」（駿）

「馬鹿め！」（カズ）

「ちっ！！」（駿）

「どうだ、如月？」

「右！！」（カズ）
「甘い！！」（駿）
「くっ！」（カズ）
「とりゃぁぁぁぁぁ！」（駿）
「またか！」（カズ）
「どーれだ？」（駿）
「左！！」（カズ）
「馬鹿め！！」（駿）
「ど～れだ♪」（カズ）
「右」（駿）
「よし」（カズ）
「決めたら、怒るぞ」（駿）
「上等だ！！　これだーーーーーーーっ！！！！」

引いたカードは、クローバーの3……？　ジョーカーじゃ……ないよな？

って事は……？

「か、勝った！！」
「くっそーーーーーーーー！！」
「みんな、オレ……かっ」

笑顔でオレが振りかえると……

『Ｚｚｚ…Ｚｚｚ』
「寝るなーーーっ！！」

こいつ等、オレが、苦労してんのに寝てやがった。

万死に値するぞ？

「あ、終わった？」

あ、終った？　じゃねぇぇよ！！

「おはよ、魅夜」

「バレた手をまた、使うの？」

ちっ、寝起きなら大丈夫だと思ったんだがな、手の画鋲……。

「あれ？　今、何時？」

将が、聞いてきた。高校生なんだから、腕時計ぐらい持とうぜ。

オレは自分の腕時計を見て答える。

「う～んと、８時過ぎだな」

「そう」と、だけ言って身支度を始める。どうやら、門限らしい。

「ん？　そんな時間か……悪い、親父に９時までって言ってるから、僕は帰るよ」

「あ、オレもバイトあっから」

まぁ、将は仕方が無いが、如月がねぇ……。そもそも、聖涼（ウチ）バイト禁止じゃん。

「そうか？　じゃあお開きにしますか」

「カズ、じゃあね」

「んじゃ、月曜日にな」
「ああ、じゃあな」

みんな、独自の帰路を進む。……二名以外

「……」
「……」

オレと魅夜はお互いを見て、それから、もう1人に視線を落す。

「Ｚｚｚ……Ｚｚｚ」

コイツ、どうしよ？

それを、オレ達は確認し合ったのだ。

「お～い、レナ～？」

揺する。マッハで……多分、振ってる早さの後で音が聞えるから音速を超えた速さで。

「Ｚｚｚ…」
「おーーーいっ！」

耳元で、叫ぶ。

「Ｚｚｚ……すぅ。」

くっ！　可愛い寝顔じゃないか！！

「なにしてんのよ」
「む、困ったことにまったく起きないんだ」
「……。どうすんのさ？」
「起きないからな～」

もし、起きなければ……運ぶか、泊めるしかないな。

「どうしよ？」
「私の、家は今日は駄目だから」
「そうだよな～。運ぶのめんどいし」

たしか、２丁目ったら遠いんだもんな～

「めんどいし、泊めるか？」
「駄目」

そっこーで、答えが返って来やがった

「なぜに？　ここは、我が家だよ？」
「不健全」
「いや、だから」
「法律違反は駄目」
「何を言いたい？」
「不純いせぇ「はい、禁止！！」なんで？」
「駄目だよ、１８歳以下禁止になっから」
「？」
「作者の心情だ」
「？？」
「気にすんな」

ま～。確かに、万歳だよそれは？　でもさぁ……寝た女を襲うなんて。

『お前もかっ！』

「って、作者が」
「魅夜も天の声が！？」
「いや、死んでないから」

だって、この物語に作者っていないもん。

「と。それは、置いて置いてさ　レナちゃんどうする？」
「だってよ」

運ぶの、メンドー。
泊めるの、魅夜に拒否。
魅夜の家、用事で使えない。

「じゃあ、どうすんだよ！？」
「そもそも、メンドーがあるから、悪いんでしょ！！」
「２丁目までは、１・２ｋｍほど離れんだぞ」
「男でしょ！」
「そんなのかんけーね！！」
「小島よ○お」
「じゃねーよ！！」
「ふ～。なら、レナちゃんが、泊まるなら……私だって」

何を、言い出すんだい？

「あ、もしもし？　母さん？　私だよ！　えっ？　ワタシワタシ詐

欺？　いや、オレオレ詐欺じゃないんだから。いや、ほんとーに、魅夜だよ！　ちょっと、本当にワタシだよ？　で、今日は、詩織の家に泊まるからね。戦利品は冷蔵庫だからね　うん、わかった。じゃあね」

魅夜の母さんは……かなり天然だからな～。

「布団２つな……はぁ～」

今日限定の居候が２人来ました。

あ、如月の罰ゲーム忘れた。

【6話】なんか、波瀾の前兆？（後書き）

今回の、お題は、これからの『オレと死神？！』について
和也「・・・それは、お前の問題じゃないのか？」
うっつ・・・！　痛いとこ突くな～
レナ「むぅ・・・・・・」
そういえば、レナちゃん最近出番があまり・・・
レナ「元気が、有り余ってるのよ！　スーパーのセールスでも、玉子しか取れなかったのに・・・」
そうそう、裏設定だね
和也「居たのか？」
レナ「うん。ついでに言えば、握った紙はもちろん、スーパーのチラシだよ」
和也「ふ～ん」
レナ「そろそろ、じゃ～ね♪」
あれ？　お題からずれてないかな？
和也「では、次回でねな」
あれ～？　お題関係無いような

【7話】絡み合い始めた2つの歯車（前書き）

こんなに、早く１０話に行けたなんて、思ってもいませんでした・・・思えば、２週間ぐらいしか進んでいません・・・。下手したら、１００話超えるかもしれないです・・・

４０話目書き終えて…人気投票の発表会がやりたいので

自分のお気に入りのキャラクター、送ってください！

【7話】絡み合い始めた2つの歯車

「ふぅ……。よく寝たぁふぁ～……　……ん？」

時間は7時過ぎか・・・魅夜は、帰ったのかな？。レナは、どうしてんのかな？　もう、帰ったかのか？　帰ってたなら嬉しいがな。

「まぁ、関係ないか」

レナは別に感謝されなくても良いし。魅夜は、今日朝練って言ってたって？
ベットから降り、着替えを取り出して着替える。

普段着のTシャツにパパシャツを羽織る。黒のジーパンを履き下に向かう。

「ん？」

庭からか？　なにかうるさいなぁ……？

窓を開けて、隣の部屋のベランダに飛び移って外の様子を見る。

「……ちぃ」

ちょうど、庭の木で見えなかった。だりぃ～。

兎に角、朝飯朝飯……っと。

―Ｒｅｎａ・Ｆ＝Ｌ・Ｈ―

「イ、イヤ～～！！」

こ、来ないで～！！

私の、願いもむなしく『ヤツ』は近づいて来る

「に、にゃぁぁぁぁぁぁぁ！！」

大人しく、家に居ればよかったーーーーっ！

そう、言うものの……いまさら、遅い……。

「ね、猫おおおお

「お前な～。ま、いいや」

あれ？　なんで、家の中に？

見渡せば和式に整えられてる玄関。不良のクセーに綺麗にしやがって。

「静かにせいや、しばくぞアマが？」

殺気１００倍カズパンマン！！！？

「口に出てるぞクソが。アンパン○ンじゃねぇよ」

「アイキャンノォウスピークイングリッシュ」

※和訳・私は英語を話すことは出来ません。

咄嗟にその言葉がでる。意味？　わかんなぁい☆

「やっぱり、馬鹿か……日本語だぞ？」

「？？」

なにが、なんだか？

「つーかよ、そんなに、猫が嫌いか？」

「うん」

ケットシーだから。

だって、私とアイツ……同類にされてんだよ！

「即答かよ」

外の騒動から数分、オレはレナを落ち着かせるタメにリビングに上げさせる。

ただ単に迷惑だから……。

「で、落ち着いたか？」

「は、はい」

前々かろ思ってたんだが……コイツ、やっぱり……。

「……」

「……」

さぁて、何を話すべきか……。

このままは流石にイヤだし……聞いてみるか？

「なあ」

「ん？」

「お前って、猫被ってるだろ？」

「イヤーーーーーーーーーーーーーーっ！！！！！！！！！」

猫にそんな、反応すんのか！？　いくらなんでも、オーバーだろ！？

そんなにネコが嫌い!?　なにがあったの!?

「い、いや。なんつーか、外行きの言葉使いだ。と、思うんだが?」

「にゃぁぁぁ

「具は？」
「具？」
いい加減にしろよ。嬲るぞゴラァ。
「握り飯もとい、おにぎりの中身だ！！　鮭がいいか、おかか！　どっちが良い！？」
「お、おかかで！！」
ビビッてる？　そんなに怖いか？
そう、反省（？）しながら、オレは、台所に足を進める。

―Ｒｅｎａ・Ｆ＝Ｌ・Ｈ―

こ、怖かった～。あれ、デーモン先生だよ、ってか、それ以上だよ！　顔がそうだったもん！　ううっ、思い出しただけでも震えてきたよ～。絶対、何人か殺ってるよ！？　そういう目だもん！！　だって、聴いた話しでは……地区最凶の不良のぉ～？　なんだっけ？　秋刀魚神だっけ？（参魔神です）。
「ううっ。何か、悪い事した？」
私、ヒロインだよね？　扱い酷くない？
「ほら」
差し出された、おにぎりが、目に入る。きれいに三角になってい

て、ホカホカのご飯、塩がきれいに光を出して、湯気が綺麗に昇っている。そして、美味しそうな香り。皿に置かれたおにぎりは非常に美味しそうであった。

「海苔は巻くか？」
「ううん。もう、食べ終った」
「速えよ！！」

だってぇ……美味しそうだったしさぁ……。

実際に美味かったんだけど……？

「まったく」

うむ、塩加減もちょうど良いし、おにぎりに入ってる空気も少し多めで、米も私好みの固さで、ふっくらしたご飯……うん。

「美味しかったよ！」
「そりゃ、良かった」

くっ！　良い笑顔じゃないか！！　怖いくせいに！！

「今、失礼なこと考えなかったか？　おい？」
「そげなーことは、なかとー」
「いろんな、訛りが混ざってるぞ」
「んなことなかー！」
「……もう、いい」

うむ。ラミアの方が、ツッコミは上手いな？

「お茶は？」
「ほしい！」
「麦？　緑茶？」
「麦茶」
「はいはい、お姫様。普通は、遠慮する場面だけどね」

私、そんな主義じゃないもん。
昨日は、遠慮したけどね♪　うん、エライな私！

「冷えてるけど、氷は要るか？」
「うん！」

あれ？　何時の間にか、いつもの私になってる？　ありゃ？　畏まってたのに？
ま、いいか♪　さすが、私！　心が広いな！　私が仕方ないから心を開いたんだよ！

「どーぞ」
「どもども～」

一口、麦茶を口に運ぶ。

「う～～っ。冷えていて、美味しい～」
「言ったろ。冷えてるって」
「美味しいよ」
「冷えてるからな」

ううっ。意外とクセモノだな～。

「ふぅ～。魅夜は？」

「朝練行くって言ってたよ」
「帰りは？」
「昼には、帰って来るからだって」
「昼ね～。アイツ、オレん家に真っ直ぐ来るだろーな」

和也は、自分の腕時計を確認する……。古いな～、あれ？

「穴？」
「ん？　ああ、これか」

と、言い自分の腕時計を見せる。ってか、言葉が漏れちゃった♪

彼の時計はあきらかに不自然であった。それか、皮のヤツだからハッキリと痕が残るものだ。彼が着けてる腕時計に痕は２つある。一つは彼よりあきらかに大きいところに付けられてる。もう１つが彼のつけてるものだ。それは、彼に丁度いいもので、あきらかにあの痕はありえないものだ。

「これ、親父のなんだ。ま～、たいした親父じゃないぜ、逆に悪い方だ。博打好きでさ。よく、給料を捲き上がれて、母さんに半殺しにされてたんだ。そんな、親父へオレがもらったお年玉でさ、欲しいものがなかったからさ、母さんと、親父におそろいで買ったやつなんだ。ま、安物なんだけど。それから、数年したら、親父達は事故にあった。母さんは、即死だったみたいだ、親父は重症すぐに、病院送り。帰ってすぐ、電話があってビックリしたわな。っと、ま～解るだろ？　形見なんだよ親父の。母さんのは壊れちまったみたいだが。ま～、親父とオレじゃあ手首の太さが違うんだよ・・・これ、安もんだけど皮でできてるから、痕が残り易いんだよな♪　ま、そんなところだな」
「Ｚｚｚ…Ｚｚｚ」

「寝てんのかよ」

だって、長いんだもん♪

「まったく。そうだ」

ニヤリッ。と、笑った気がした。

邪悪だ。なんか危険な感覚が……？

「そうだな～。こっちの質問も良いか？」

な、なんだろ。とてつもなく嫌な予感が！！

『お前の正体を教えろ』

……。彼は、そう言った。

「ナンノコトカナ？」

「オレも決意したんだぜ？　なんか、嫌な予感がしてたからな～。オレが、過去を話したんだ、お前にも何か、教えて欲しいんだが」

「にゃっ！！」

ヤバイ。ヤバイ。ヤバーーーーーーーーーーーイッ！！！！

「話さないなら、お前がオレの近くに降ってきたことを、公開し、オレ等の考えを述べる」

バレてる。絶対に！

「あ、あう……」
「話してくれないか？」
「……」

笑顔だけど、笑ってないよ。

「はいっ」

仕方ないよ、ね。バレちゃったから。お、脅しに屈したワケじゃないんだからなぁ！！

【7話】絡み合い始めた2つの歯車（後書き）

お題は、・・・・・・

和也「１０話目おめでと～！」

魅夜「おめでと～！」

駿「酒買って来たぞ」

将「親父から、寿司をもらってきた」

和也「おっ！　本格江戸前寿司だろ？　良いのか？」

魅夜「いいじゃん、将の親父優しいから」

将「ああ。１０話目だから特別だだってよ」

駿「ナイス！」

和也「如月？　これだけか？」

駿「ああ、バイト先のあまりだからな。悪い」

魅夜「あんたらね～」

和也「いいじゃん。今日は特別なんだから」

将「ああ。あれ？一人たりなくないか？」

和也「ああ。レナか」

駿「今日は出番が多いから、休むってよ」

和也「そういえば、最近、お前等出番ないな」

駿・将「・・・・・・・・・」

魅夜「話題にすら・・・特に、将の台詞数が少ない」

将「・・・・・・」

駿「・・・・・・」

和也「な、なんだよ？　包丁なんて危ないもの持つなよ・・・・アギャーーーーーーーーーーーッ！！」

・・・・・君等、作者を無視しすぎだよ・・・・・（泣）

魅夜（出番が欲しいなら作者にたのべば・・・）

【8話】真実と動きだした歯車（前書き）

テストなんか、クソくらいだーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！！！！！
テストなんか、どうでも良い！！　書いて書いて書きまくってやるーーーーーーーーーーっ！

第６０話目に企画しています人気投票の結果発表をしたいのでどしどし送ってください

【8話】真実と動きだした歯車

「ううっ……。正体って？」
「それを知りたいんだよ」

あ、さすがに正体はバレテないか……はは。だよね、普通＜死神＞なんて単語、出ないよね♪
うんうん、コレならなんとかなるね☆　私って、天才だもん！！

「話せ」

言葉が短いぶん、余計に怖い。ってか、命令された！？

「正体が、バレたら帰れなく（多分）「どこぞの魔法少女だ。ってか、さらっと自分がオレ達と違う存在と暴露してるぞ」あうぅぅ～～～～……」
「そ、その～……、あのですね？」

考え中……考え中……。
＜レナ・フォード＝ライズ・ハールドの答え＞
ええいっ！　なんだ！？　この、ナレーションかなにか、わからないのは！？
『平成教育学○』
ずいぶん、ヒロインがピンチなのに、冷静だな！　おいっ！
責任者もとい、作者ぁぁぁぁぁあああ！！！！！！！！　首刈ったるぞこの野郎！！
【作者の特権により削除】で小学校６年のとき【作者の特権により削除】
んでもって、今では【作者の特権により削除】しかも、１４歳っだ

てーのに【作者の特権により削除】なんか【作者の特権により削除】だろぉぉが！！！

さ：プライベートをぶちまけるなよ。

ってか、全消去された！！

「ええっと～、なんといいますか～。その～」

いくら、可愛いからって、そんなにじっと見ないで／／／

イヤ～な、沈黙で包まれる。こんな、空気イヤだな～。

「……なぁ」

やっと、返って来たよ～。反応が無いのって怖いんだよ？

「あ、そ。」

「それだけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！？　もう少し反応ないの！！？　ちょっと！」

「んで、死神がこんな平凡な高校生になにかようかな？」

反応を期待していた私が馬鹿みたいじゃない！

なんで、驚かないの！？　この人！！？

ってか、目が余計に冷たいんですけど！？

「いやぁ～。まさか、本当に居たとは驚いたよ」

いや、絶対に驚いてないでしょアンタ！？　ってか、さわやかだなぁ！！

「言っとくけど、オレは隣に死神よりも恐ろしい鬼が居るからな。この、程度では驚かん」

魅夜さんのことかぁ！！？　聞かれたら怒られますよ！！

でもって、なんでわかってしまう私がわからない！

「って、はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！

!!!?」

「さっきまで冷静だったのに、なんでビビッてるんの!!?」

軽く流そうとしていたな!!?　冷静に考えたらこうなったのか!?

「なにしに来たんだよ!?」

試験に落ちちゃったからかな☆

「まさか……オレの魂を刈りに!?」

「う～ん。どうしようかな～☆」

意地悪なども込めて私はそう答える。

「別にどうでもいいけどよ」

いいのか!!?　ってか、これが本当の顔か!?

「とりあえず、理由（ワケ）を話せ」

そして、私はこれまでの経緯を簡単に話すことにした。

半分以上が私の作り話（妄想）だけど……。

「ま、だいたいは分かった」

やっと、いつもの状態になったよ。いちおう、簡略な説明をしたが・・・あ！　Ｐ（プロローグ）／ＲＢ（ルートビー）参照だよ。

「で、お前は。その、任務を聞き忘れた、『馬鹿』と」
「馬鹿言うな！」

馬鹿ってセリフは、ケットシーの次に嫌いなんだから
って、何処かでバカと表記されてたよぉぉな……。ま、気のせい彼
のせい時のせいってか（古ッ！

「おっと、失礼。『大馬鹿』だったな」
「そうそう。大馬鹿なの」
「えっ！？　大馬鹿は認めんの！？」

馬鹿以外なら…。
なんとかねぇ……？

『同じことじゃあ…』

黙ってさっさと続きを書け！
作者はソレさえやれば良いんだよ！

「オッホン」

ワザとらしい咳払いをする。
ハッ、暴走してゴメンね読者さん

「あ、でね。続きなんだけど。これを見て～♪」

私は、ポケットにある『物』を取り出す。

「なになに～。悪魔帳（デモニックノート）？　滅茶、恐ろしいネーミングだな」

気にしない、気にしない♪

「これは……。任務のマニュアルか？」

そういい、パラパラ紙を捲る。

「書いてないのか？　その、任務ってヤツ？」

書いてたら行動してるよ！　そこまで、馬鹿じゃないもん！

※バカです

「書いてないんだ……よぉ」

「マニュアルだぞ？　そんな訳ないだろ。お前は大馬鹿だからさ」

「大馬鹿言うなーーーーっ！」

「ええっ？　さっき怒んなかったよな！？　おい！」

さっきは、さっき！　今は居間！

『字が違うよ』

「ねぇ。ぜんぜん話しが進まないんだけど」

『あ、無視？』

「お前が妨げてるんだ」

んなワケ、無いよね♪

「そんなことないよ」

「……もういい」

「で、どこまで進んだの？」

「テッメー！」

にゃんで怒るのかな？

「まぁいい、どうやら、本当に書いてないな……。その前に、最初の２Ｐ（ページ）あたりまでしか、書いてないだろ！！　ってか、礼儀作法だけかよ！？　他は、膨大な量の料理のレシピじゃないか！」

「そうそう。これには、助かったよ」

大半が失敗だけどね♪　ってか、実際は成功してない？

「む？　ほぉう」

「……？」

「なるほど……」

「……？」

「ああ。そうすればいいのか」

「……」

なんだろ？　私を無視？　この天才美少女たる、この私を？

「ふむっなるほど」

「……」

ちょっと、本当に私、無視？　ヘロインだよさ：ヘロインだと？　なんで、知ってる？

レ：なに？　それ美味しいの？

さ：……麻薬だよ

レ：えぇ！？　私ってドラッグみたいにクセになる魅りょ【作者が呆れた為削除】

「よしっ。昼飯決定だ」

「へっ？」
「いらないのか？　もうすぐ、１２時半だぞ」
何時の間に！？
さ：作者の特権さ。
「魅夜は、遅れんか？　連絡でもいれるか」
ポケットからだした、携帯をピコピコいじる。
「あ、もしもし亀よ亀さんよ。こちらは、あほんだら１。おたんこなす１聞こえてるか？
部活はどうなんだ？　ああ、いま、終わったのか。
どうする？　昼は？
ああ、部活ののメンバーで？　泉先輩が？　珍しいーな。あの、先輩が？
ふ～ん、じゃあ、昼は外で食うんだな。
ん？なんでかって？　ちょっと、レナに料理のレシピをもら……ん？
ああ、レナも一緒だが？
はっ！？　なんでイキナリ？　『いいから！！』お、おい！
……切られた」
……なんか、もうどうでもいいや。
「あ、本題からずれてたな。ってか、なんだっけ？」
「今更かいっ！！！！」

【8話】真実と動きだした歯車（後書き）

はぁ・・・はぁ・・・はぁ。
和也「馬鹿か？　テスト前日になにをしている」
テストなんか・・・テストなんか・・・！
魅夜「避けれないのよ」
駿「そうそう。テストなんか、テキトーよ」
レナ「作者はだいたい何位なの？」
１３７人中８４位だよ・・・前回。
駿「可も無く不可も無く」
魅夜「ま・・・がんばって」
無責任だ！！
和也「そういえば、将は？」
魅夜「さぁ？」
駿「ああ、仕事だよ。寿司屋の」
レナ「・・・寿司・・・」
和也「食いたいか？」
レナ「うん！」
和也「・・・あそこは、無理だ・・・」
駿「高い・・・」
魅夜「えへへっ♪」
和也「金持ちはやっぱり違うのかーーーっ！」
魅夜「借金執事にさせてあげようか？」
和也「断固拒否じゃーーーっ！」
テスト・・・か。

【9話】3人のドタバタな日曜日？（前書き）

テスト、終了いたしました！　そんなに勉強しませんけどなんか、手応えはありました！　評価、勉強と更新への気合へと繋がります。口コミもしていただくと、ありがたいです！　函館市の中学生の方々、もしかしたら、部活で会うかもしれませんね♪　学校の人にも内緒なんで、シーですよ。

自分のお気に入りのキャラクター。どしどし、送ってきてください

【9話】3人のドタバタな日曜日？

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

うむっ。なんで、こうなったのかな？ちょっと時間を逆登ろう……。

たしか、オレが今夜の食材を買いに来てたんだよな？　怨瀬腐（ジョセフ）（４話参照）にな。そこからたしかぁ……。

数十分前

「ふぅ、今日も安いの手に入って良かったな～♪」

レナからも、あの、レシピをコピーしてもらったし……ふふ♪

今日は視点独占だしな。

え？　独占じゃない？　だ、騙したのか！？　スタッフ！！？？

和気藹々としていたオレは鼻歌交じりで帰路に着いていった途中だったのでより一層ムカツク。

「魔槍（グングニル）の、雨宮だな」

なんだ？　この、高校生は？　知らない制服だな？　青を基調と

した、学ラン……？ってか、休みの日にまで制服って……馬鹿なヤツ等だ、HL（ホームレス）ってやつか？
※土日とゲーセンやらカラオケやらで過してたクズ

「ああ　篠原中（シノチュー）か」
「テメー！　ザケてんのか！？　あぁ！？」

OH！　ハズレちまったぜ。

「いえいえ、ふざけてないですよ」

大前提からボケただけだし。ああ、早く帰りて～。雑魚に構ってるヒマなんかねぇんだよ。こうみえても洗濯物獲り込まないといけないし、料理だって忙しいんだよ。

「ちょと来いや」

お決まりの言葉ですね……。だり～。めんどくせぇ。

「オレ早く帰りたいんだが？」
「テメーが黙ってりゃすぐ終わるよ」

はいはい。速攻で終りますよ、この人数ならね……。

黙ってるだけで良いなら……3秒ほどで、どうですか？　ま、ンなにかかんねぇか。

「なあ。その程度でオレに勝つ気かよ？」
「はぁん！？」

この程度の数と、言っても２４、５居るんだがな。少なすぎだっつーの。このオレに対してたかが、２４、５人だと？　舐めてるのか？

「だ・か・ら。雑魚は数がたりねぇぞ。ナウマンゾウ１００匹ぐらいつれて来い、キミ達チンパンジーではオレに勝てないから☆」

「テッメー！」

チンパンジーの一人がオレに拳を叩きつけようと『した』そう、しただけである。

「まま～～～～～～～～～～～～！！！！！！！！！【キラ～ン】」

オレが蹴って夜空の（？）お星様にしたからだ。

チンパンジーからお星様って出世したな、チンパンジー

※因みに名前が、狆派（ちんぱ）猿鬼（えんき）って名前です。

「てんめぇ！　チンパンジーになにしやがる！！」

あ、仇名（あだな）チンパンジーなんだ。スゲー奇跡だな♪

まぁ良い、このままあの野郎共を……。

「止めろ。マサ」

オレが、蹴りを出そうとするが、一人の男が、制止する。と、同時にオレも蹴りを押える。

……コイツ、確か。

「羽柴か……。澄芝中の。今は第3だったな」
「この前は、どうも」

身長2m越えの巨人だ、髪は見事なまでの角刈りで……これでも高一だ。
ゴリか？　コイツは知る人ぞ知るゴリラダンク使いか？
普段は穏やかなヤツなんだけど……なんか、最近荒れてるんだよな～、なんかあったのか？

「羽柴さん、いまから、ＴＥＬしますか？」
「別にいい。お前等、忘れたのか？　これは、オレと雨宮のタイマンだ」

1対1（タイマン）ですか？　羽柴……なにを？　焦ってる？
羽柴秀中学校の時から違う学校ではあったがなにかとオレと張り合っては（精神的にも）ボロボロにしたが。たまにつるむ事もあったが、殆どが喧嘩だがな。

「羽柴？」
「来い、雨宮」

なんか、ムズイ……。なんだろ？

羽柴……お前はコイツ等と違うもののタメに喧嘩してんじゃないだろぉな？　なんか、他の奴とは違う目の気がする……まるで、“何かを守る者”の目だ。

と、なったんだ。で、今オレは怖い人に囲まれてるんだったな。
ってか、倉庫に連れて来るなんてベタだな。それよか、なんか増えてねぇ？

「羽柴。この前、忘れたのか？」

この前も、羽柴が懸(か)かって来たから……つい♪

「ああ、あばら4、5本な」
「わお。痛そうだな～」

あばら骨って痛いんだよね。特に折れやすいに内臓に刺さるだろぉし。意外にもアソコを折られると痛いんだよね♪

「お前にやられた……な！」

右ストレートが行き成り来る。あ、アブな！？
そう思いつつ、左に跳び回避する。

続いて、左が飛んで来る。

「おっと」

左足で羽柴の左足を蹴り上げる。右足に力を入れて左手を握り。相手の腹に一撃を極(き)める。コレで終りだ。うむぅ、０．７４か……少し訛ったかな？

「喧嘩売るなら相手を考えろよ」

多分、聴いてないであろう……どうでもいいんだけど？　羽柴は、口から、泡を吹いてるし。

それよか、他の連中……オレに懸かって来る気まんまんじゃん……。

しゃぁねぇな。

「久々の祭(ケンカ)りだ！　テメー等もかかって来いや！」
「ァんだと！　餓鬼(ガキ)が！」
「はぁん。雑魚は纏めてかかって来いや！」

全てが、終ったのは１秒後だった。

「ん？　なんでここに居るんだ？　オレ？」

ええっと、羽柴に会って……それから……ま。

「いっか♪」

その次の日、とある倉庫で気絶してる２６人の第３の生徒が見つかったそうだ、怖いな～、第３って荒っぽいヤツが多いんだよな～、そんなヤツらを１日も気絶させるなんて。あ、さては、将か、如月だな～。オレに黙ってケンカするなんてさ。読者様もそう思いますよね？

―Ｍｉｙｏ　Ｓｈｉｂａｈａｒａ―

退屈だ……。

毎日そうだった。なにを、するにも退屈で仕方なかった。

義父さんも、母さんも……仕事が忙しいのもわかる、でもどうしても、退屈なのだ。

「魅夜〜？　私、そろそろ行くからね」

義姉の声が聞こえたので、玄関に向かう。

「うん。わかった、お義姉ちゃん」

「ちゃんと良い子で居るんだよ〜？」

姉は私の頭をグリグリする……その、アリ塚を砕くほどの握力でやられると痛いんだけど。

いや、マジで。だって、私……私が見えてるんだもん。

……ゆ、幽体離脱ぅ〜。

ぐはぁ！　じ、自滅じゃないか。

「子供じゃないからだいじょぉぉぶだよ……」

い、意識がまだ朦朧と……！

「まだ、小学生のガキがなにを言うか、マセガキめっ！」

「ガキガキあんまり言わないでよ」

「つまんないの〜」

「面白いワケないじゃん。さっさと大学に行きなさいよ」

「うっ。クールねアンタ」

……。私は、クールなんかじゃない。

「んじゃ、何かあったら連絡するのよ～？」
「なんかって？」
「おいおい……。そうね～、恋に落ちちゃったとか？」
「！　そんなこと！！」
「あらら、恋しちゃったんだ～？　さすが、マセガキね」

別に、私は……恋なんか。

「和也君か？」

姉が耳元でそう呟いた……。

雨宮和也……私の幼馴染みである。

「なんで、あんな馬鹿！」
「あらあら、アンタより頭良いのに？」
「うるさい！　早く大学に行きなよ！」
「はいはい。お姫様」

それを、言い残し姉は楽しそうに去った。明日から、弄れる。
なんか、疲れたので自分の部屋に向かう

「はぁ～、なんであんなヤツのこと……」

馬鹿で。情け無くて。卑怯者で……。イヤな所を挙げたらキリが、無いほどあるのに。

「なんで……」

わからない、あんなヤツのどこがいいんだか。
しばらく布団でそんな事を考えてたら何時の間にか寝ていた。

「んっ……？」

眩しい……。気がつくともう、5時をまわっていた。

「なっつかしい。夢ね……。ふわぁ～。ご飯作んなきゃ……」

起き上がり、寝ぼけながら台所に向かう。
寝癖を溶いて、髪を直し、髪を結ぶ。
気がつくと、化粧台の上に置いていた携帯のランプがチカチカと、
点滅してる

「先輩からかな？」

携帯を開くと、こう表示されていた
着信あり【雨宮和也】と。

「！！っ」

今日はいったい全体なんなんだ？　携帯をぜんぜん使わない和也が今日にかぎって2回も電話がくるなんて！？　もちろん、速攻で掻け直す。

『もしもし？』

「なによ、和也？　電話なんかして？　珍しいじゃない」

『お前な～、そんなにオレが電話なんかするの珍しいか？』

「うん」

『うんって……』

なんか、困ってる。だって、本当に珍しいんだもん♪

「で、本題なんだけど」

「本題？　ああ。レナから、料理のレシピ貰ったんだけど」

また、レナ……！

「ちょっと、失敗しちまってさ、作り過ぎたんだよ。もし良かったらさ、貰いに来て・・・あ、めんどうだから、家で食うか？」

「もちっ！」

昨日はお泊り付きの夕食で。朝は、和也が握ってくれたおむすびで、昼も和也が作った謎の料理で……晩ご飯も和也の家！！

『……い』

どうしよ？　どうしよ！？　何を着ていけば！

『おーーいっ』

あ。お化粧も……いやいや、暴走しすぎだよ！　私！！

『昔はクールだったんだがな。どうしてこんな……』

どうしよ～！！　私は、しばらく私は妄想を繰り返していた。

『はぁ～…』

何故か、私は大きな溜息を床に落としたようだった。

―Ｒｅｎａ・Ｆ＝Ｌ・Ｈ―

「あ～ぁ。憂鬱だな～」

私は、部屋を見渡して呟く

「な～んも無いってのはね」

あるのは、ベット。キッチン。テレビだけっと、お風呂もない安アパート……。お風呂は近くの銭湯で済ませないといけないのだ……。

「なんか、買うって行っても……」

ある、手紙をだす。

＜無駄使いは、許さん　ｂｙデーモン＞

って、手紙が来たんだよー（泣）

バイトっといっても……。高校がバイト禁止だし……。なにかと調べられたら厄介だし。

「はぁ～」

質素な家。和也の家とは大違いだし……ってか、マジで正体がばれたら帰れないってならどうするんだろ？　ラミア達元気かな？私居ないから寂しくないかな？　だって、私はあの学園の花よ？……いや。私が寂しいんだ。

「……あ～あ」

ベットに倒れ込む。するとどこからともなく私の第六勘になにかが引っかかった。

！ッ　邪気！？

邪気を感じてベットから飛び降りる

この気配!!　ヤツか!

「ふふふ……。いい度胸よ……♪　乙女の部屋に忍び込むなんて……なんてアハ♪」

むっ!?この気配。ヤツは1匹じゃないのか!?　気配は……1、2……3匹か!?

「!　そこだ!」

丸めた雑誌でテレビの裏に居た、1匹を叩こうとするが、避けられる。

「ちぃ!」

外したか!!

カサカサッ。

「キャッ!!」

くっ!　＜ゴキブリ＞め!!

「○い3連星か!」

カサカサと3つの音が重なる。

「1号!　さっきは見逃したけど。次は逃がさな……。なに!?」

私は驚愕の悲鳴を挙げる。このゴキブリ達……。Ｖ３がせまって来る。それに、続いて２号、１号と続く……。そう、この体制は……。

「ジェット○トリームアタックだと！？」

このゴキブリ、連携攻撃をとるなんて！

「こう言うのは、踏み台にするんだよね？　できね～！！！！」

ってか、踏んだらヤバイって！！

無常にもゴキブリは着々と進んでくる。

「ちぃっ！　聖剣エクスかリバーよ！　悪を倒せ！！」

丸めた雑誌を担げる。そして、構える。

Ｖ３が攻撃（飛んで来るの）を……

「ゴキ本塁打あああああああああああああああああああああ！！！！！」

ちょうど、窓が開いていたので、場外ホームランを打つ。

残り、１号と、２号！

むっ？　２つに分散する気か！？

カサカサ……。

ブーーーンッ。

エクスカリバー！　私に、新たな力を！

飛んでるヤツはさすがに無理だ……なら！

「見切った！　チェストーーーーーーーーッ！」

1匹潰した。最後に2号！

あ、もちろん中身は飛び出してないからね！

「死神様を舐めないことね。普通の人より動きは良いのよ！」

だが、しかし

「卑怯だ！　降りて来い！」

ゴキブリは、天井に居た。当然、背が小さいレナが届くわけが無く、冷戦状態なのだ。

「くっ！」

ゴキブリめ～！　あ、そうだ。私って……“死神”なんだ

「二ヒッ。届かないなら……『落とせばいいじゃん』。重力魔法・超重力（メガ・グラビジョン）！」

重力魔法は死神の基礎！　それでもって、重力魔法は私、得意だし！

クシャ。

ゴキブリが潰れた……最悪。

ゴゴゴゴォォォォ！！

「ん？」

古い木造建築。ギシギシ鳴る床。上の階。５Ｇの重力。

「あ、……」

い、イヤだな……？　冗談だよね？　ちょっと！

「ウッソーーー

私……帰る所を失いました。このままだと、怪しいお兄さん達に捕まってあんな事やこんな事になって……グフ♪

「ん？　どうした？　公園なんかで？」

気がつくと、和也が居た。

「泣いてんの？」

優しい声で聞いて来る。

「うう！」

「えっ？　マジ！？」

今の、私に優しくしないで～～～～っ！

「逃げんな」

手を掴まれる、逃げれん！

「ま、とにかく話してくれないか？　じゃないと、オレも気になる」

「ううっ」

人には、言えないほどの顔だろう。

私は、全て白状した。

「ふ～ん。なら、お前は帰る場所が無いわけだな」

「そうです……」

「なんで、敬語……？　ま、いいか」

「？」

和也が、立ち上る。見捨てるんだ……。
そうだよね、人間ってそうだよね？

「来いよ」
「？」
「オレの家に来い」
「？？」

なにを、いってんの？

「だから。アテが無いなら家に居候しても良いぞ」
「えっ？　マジ？」

この日から。私こと、レナ・フォード＝ライズ・ハールドは、この日から雨宮家に居候することになった。

全ては、ココから始まったのであろう。

【9話】3人のドタバタな日曜日？（後書き）

レナ「ラミアーーーーー♪」
ラミア「レナ、ウザイわよ」
レナ「親友にそれか！？」
？？？「まあまあ。2人共」
レナ「ヴァン！？　おひさ♪」
ヴァン「うん。久しぶり」
ラミア「あれ？　ヴァン。なんで居るの？」
ヴァン「名前しか登場してないだけでその扱い？」
レナ「ラミアだってさ、1回登場して。それから、1回だけじゃん」
ラミア「アンタね・・・」
レナ「ギブギブ！　ヘッドロックなし！」
デーモン「落ち着け」
レナ「デーモン先生！」
デーモン「おっと。レナ、オレはお前みたいな生徒知らないぞ」
ラミア「アンタ、試験に落ちたでしょうが」
ヴァン「レナは勉強は駄目だけど、実技は凄いでしょ」
レナ「勉強が悪くて、すみませんね！　メガ・グラビジョン！！」
ヴァン「あがっ！！」
ラミア「あたしまでぇぇぇ？！」
デーモン「こらこら、レナ。止めないか」
レナ「１０Ｇ！」
ヴァン「がああああああっ」
ラミア「こ～んの！」
デーモン「馬鹿」
レナ「あきゅ！？」
ヴァン「レナ」
ラミア「ありがとうございます。デーモン先生♪」

レナ「デーモン先生、乙女を殴るなんて酷いよ～」
ラミア「レナ♪」
ヴァン「ちょっといいかな？」
レナ「どうしたの？　笑ってるのに顔が笑ってないよ」
ラミア「うふふふふ」
ヴァン「ふふっ」
レナ「ちょっと！？　いや！　グギャアアア

【１０話】危険な香りの1日旅行・その1（前書き）

だんだん、更新が遅く・・・でも速い方だと・・・
バスケの試合がありまして・・・。良い訳にもなりませんね。でも、試合で３Ｐを決めたりしまして、無事、勝ちました！　意外と活躍しました！

お手数ですが、キャラクターの人気投票をしてますので。
感想やメッセージと同梱で送ってきてください

【10話】危険な香りの1日旅行・その1

「……はっ？」

こんの、自称死神がヘンな事を言い出した。

「だ～か～ら」

それがまた不思議なことでさ

「デーモン先生からね、手紙が来たんだけど」

「却下」

イヤな予感がしたのですぐさま却下する。

うん、なんかＯＫ！って言ったらオレヤバイかも

「ええっ！！」

「黙れ！　祝日なら良いが、平日にだと！？　明日も学校だろ！？」

ま、祝日であろうが休日であろうが断るけど。

ん？　えげつねぇ……だと？

……オレの知ったこっちゃねぇ。

「だから、あのね？」

「語尾になんでハテナが入るかな？」

しかも、前も聞いたけどそんな名前の人（？）が居るワケねぇだろ

デーモン小○なら別だがな！

「和也が分からず屋だからよ！」
「居候が何を言うか！？」
「居候のワガママくらい聞け！」
「家主の言うことぐらい聞け！」

こんのワガママ娘が・・・！！
一発、腹にブチ当てれば……吐血で済ませる。

「和也みたいな自己中な人始めてだよ！」
「悪かったな」
「うん、悪い」
「ああ、オレはどうせワルだよ」
「だから、学校でも怖がられるのよ！」
「さらに、誰かさんのせいで更に嫌われたけどな」

そう、コイツのマンションが原因不明の地盤沈下で崩れた事は学校ですでに有名だった、それで、ダレもがコイツの住む所の事を詮索してくる、ここは、普通に「大丈夫だよ」と、言えばいいのに、この馬鹿神は・・・「和也の家に居候してるから、大丈夫だよ♪」と、♪まで付けて返答しやがった。当然、イヤな誤解まで受けた。魅夜は、まだ誤解してるし・・・こんな生意気な娘は眼中にない！

「いいじゃん、もともとなんだから」
「良くねぇ！！」

しかも、不名誉なあだ名まで付いてしまった＜一石二鳥の性食者＞と、誤解だらけだぞ、コイツが来たことでオレは一石二鳥どころか一石三損以上そんをしてるぞ！
ってか、性食者なんて誤解だらけ過ぎる！

「とりあえず、却下！」
「なんでさ！？　こんな、美女が頼んでるのよ？」
「お前が美人なのは、認めるが。性格が認められん！」
「いや！　認めるんだ！？」
「オレは、ウソはつかねぇ（冗談は言うけど）」

なにが違うのかはわからんがな！

「こうなれば・・・・・・」
「ん？」

何をする気だ？
あ、怪しいオーラを放ってなにを……！？

「強制連行！！」
「なにぃぃぃぃぃ！？」

不可思議な出来事が起きた。空気中から鎌が出てきた

「てへっ♪」
「……な、なにをする気だ？」
「強制連行よ！」
「ザケんな！　全力で逃げてやる！」
「逃がすか！」

「……　……　……」

必死で逃げたが、掴まってしまった。
捕まったってか。

『重力魔法・指定重力空間（ロックオングラビティーエリア）！』
『げふぅ！！！！！！！！』
ってな具合にだ……。魔法っと言うものを本気で信じた。

「ええっとね。デーモン先生から手紙がきたんだ」
「……宿題どうしよ」

数学の宿題が大量に出されてる。モチろろん♪
明日もあるのよ……数学。

「読むね＜レナ、問題を起すのも対外にしろよ。お前は人様にどれほど迷惑をかければ・・・＜中略＞
・・・お前は本当に昔から・・・・」

「待て！　全てお前に対の指導だろ？　本題を言え！　ってか、普通言わないだろ！」
「あ、そうか」

やっぱり馬鹿だ。

「えっと。＜そんなことは、どうでも好いが。言い忘れだ、実は月に１回、こっちの世界に帰ってこれることだ、毎月３０日に均衡が薄くなるからその日にお前の転移魔法でもコッチ側に来られるだろう。こんど、居候先の人でも連れて来い＞って」

「理不尽じゃねぇ？　お前1人で行けばいいだろ」
「えぇ～。だって、私居ないと寂しいんでしょ」
「平和でかなり素晴らしいな」
「ひどっ！」
「で。この、落ちてる状態はなんじゃーーー

なんか、空を飛ぶ巨大な生命体の上に居るみたいだ。

「・・・・・・」

これは・・・RPG好きだからなんとなくわかった

「なぁ、レナ・・・まさか・・・？」

「うん、ドラゴンの上だよ♪　ほら、サファイア、挨拶は？」

『グガァァァァァァァ！！』

と、叫びやがった……鼓膜が・・・破れそう・・・！

「サファイア・ドラゴンのサファイア！　私の1番の親友だよ」

「あ、ありえねーーー

「・・・・・・・・・」

デカイ街だなヤケに広い。

「私が・・・育った街」

ん？　なんか違和感あるな～？

しかも……哀しそうな目だ……。

「そうか・・・」

違和感を覚えつつも何時も通りに接する。

「ねぇ！　早く行こうよ」

明るいヤツだな～。ん？　なんだ？　この視線・・・？　奇異な者を・・・昔のオレを見る視線に近いものが感じられる・・・・・・オレに対するヤツか？　そうだよな、違う人種（？）なんだからな・・・・・・でも・・・何か・・・違う・・・。

「和也！　早く♪」

「あ、あぁ……」

この視線・・・まさか・・・・・・・・・いや、でも・・・・・・・アイツ（レナ）に対する視線？

いや、そんな筈がない・・・あんな明るい子が・・・違うよな♪

「早くしなさい」

「はいっ」

なんか、怒りのオーラが出ていたので、逆らわない・・・いや、逆らえなかった。

「ヤッ！　皆の衆！」

『・・・・・・・・・・・・・・・』

「無視か！？　無視なのかい！？　マイ・ルームメイト！？」

「まず、お前が落ち着け。　そして、今は授業中だ」

「あははは。お茶目お茶目♪」

「「お茶目で済むか！　このドアホ！！」」

「「ん？」」

なんか、同じツッコミが被ったような・・・・・・？

・・・・・あの、黒ローブの娘か・・・。

「あの・・・・・どなた様ですか？」

「ええっと、雨宮和也といいます」

「私は、「ラミア・デュミナサスト！　私の親友だよ」です・・・って！　コラ！！」

「まぁまぁ。落ち着いてよラミア？　ほら、今授業中だからさ」

正論だな少年よ

「僕は、ヴァン＝アル・サーザスと言います、宜しくお願いします」

うわっ！　笑顔が眩しすぎる！

「あぁ、宜しく。オレは馬鹿を連れて行くから」
「ええぇ～？　もっと皆と居たいよ」
「「ワガママ言うな！」」

つくづく、ツッコミが重なるな・・・。

「ほらほら、いくぞ」
「ミミ！　ミィミ！　耳！！？　耳引っ張らないで！？」
「ウザイ。黙れ」
「イダヂダイダ」
「ヂってなんだ？」
「さぁ？」

馬鹿だ・・・。

こうして、オレは、レナの住んでた世界・・・まぁ、魔界だが【クゥアトゥル】という世界の1日旅行が始まった。

【１０話】危険な香りの１日旅行・その１（後書き）

今回は、色んな目立たない人を集めました！
まずは、デーモン先生！　意外とアットホームな皆のパパさんキャラ！　そろそろレギュラーキャラになる（はず）の人！　次は、ラミアちゃんです！　レナちゃんの元・ツッコミ担当、今回からレギュラー化します！　次は、ヴァンパイアのヴァン君！　レナとラミアちゃんの仲裁人・・・和也くんの次に苦労人です。ヴァン君もレギュラー化しますよ！　そして、サファイア・ドラゴンのサファイア、体長は７５ｍの巨体、色は艶のある蒼色の鱗を持つ。実は、現在での最強キャラの第２位に属してます♪
さらにさらに・・・＜続く＞
えっ？　ちょっと！？　えっ？　続きは次回なの？　ちょっと！？

【１１話】危険な香りの１日旅行・その２（前書き）

更新完了ッッッッッ！！！
我武者羅に頑張りますよ！
嗚呼嗚呼嗚呼ッ！！　＜作者暴走＞

４０話目終えました時点でのご報告
６０話目に、人気投票の結果発表をしたいので
アナタ様のお気に入りのキャラクター、送ってきてくだせぇ。

【11話】危険な香りの1日旅行・その2

「ちぃっ！」

コイツ・・・今までのヤツより強い！

「・・・・・・・・・」

右から来る攻撃にぎりぎりで、反応、反撃の態勢に取り、全力の攻撃をヤツの胸に攻撃する。

ガーーンッ！！

「痛ッ！！」

逆にオレの拳にダメージをもらう。

「鎧なんてヒキョーだぞ！」

オレが、今対峙してるのは・・・・・・属に言う、首無し騎士であろうか

「セフィリア！　がんばってねー！！」

「レナ！　お前はそっちの味方かぁ！？」

あんにゃろ・・・・・帰ったら猫地獄を見してやる。

そもそも、どうしてこうなったんだか・・・・・・。はぁ～、帰りて～・・・・・・。

それは、レナの話しをテキトーに受け流してた時だったな・・・・・・

「それでね、ラミアったらさぁ～」
「ほ～う」

今日の晩飯何にしようかな～・・・、多分、帰る頃には買い物する余裕ないだろ～し、魅夜のヤツ最近（と、言ってもレナが居候するって言うから）機嫌が悪いからな・・・・・・夜遅く帰るとしたら・・

こ・・・怖ぇぇ・・・・！！

「なぁ」
「帰んないよ時間まで」

うっ・・・、お見通しか・・・。

「でもさ、買い物もあるしさ・・・」
「多分、朝帰りになるよ」

聞いちゃいねぇ～・・・ってか、そっちの方がヤバイって！！　そんな、事が魅夜に知れられたら・・・
オレに明日はねぇ・・・！

「お前の好きな料理作ってやるからさ」
「却下」

くっ・・・、（オレの）明日の為になんとかしなければ。

「レナ様？」

「おだてないってよ～」
「まだ、煽ててね～よ！！」

あっ、ボロがでた・・・く、悔しい・・・レナのくせいに！
ついつい、ジャイ○ンのセリフが口にでる

「・・・・・・・・・・・・」

はぁ～、やっぱり無理か・・・そうだよな・・・久しぶりに会ったダチとは、話したいよな・・・レナだって女の子だもんな・・・しゃあねぇ～な

「しかたねぇ～な・・・今月だけだぞ」
「えっ？　奥さんのことは良いの？」

奥さん……？　オレに身近な人物か？
オレに1番近い人物……か？

「何時から、魅夜はオレの嫁役になった？」
「えっ？　違うの？」
「断じて違う」
「魅夜悲しむよ」
「はっ？」

アイツもオレと同じ反応だろうよ、だって、アイツは

「許嫁が居るからな」
「へぇ？」
「アイツは、柴原の娘よ？　そりゃ、金持ちでオレなんかより良い男だよ」

「すっごい気になります」
「……　……話すだけで、イライラする」

アイツの事はすぐさま忘れたい・・・アイツは・・・アイツは・・・

「ホモなんだよ」
「話しが合ってないよ・・・ってか、ええっ!?」
「しかも、オレに懐いてやがるし・・・」

今にも「カズく～～ん」って聞こえてきそうだ。
ぎゃぁぁ～～～～～～～～～～～～!!!

あまりにも動揺してたのだろうか、マジで心配した顔で聞いてくる。

「大丈夫じゃねぇよ！！」

「やっぱり？」

そんな、下らない（端から見れば）話が始まりだったのかもしれない。

「・・・・・・・！！！？」

「あ、デーモン先生！」

なんだ！？　この、デカイヤツは！？

何物だ・・・コイツは？　とにかくデケー・・・。

「久しぶりだな、レナ」

体長は２ｍを軽く超えて、大きな角と翼をがあり、目は・・・・・・・・・魅夜（怒り）モードの目だ。

「・・・・・・」

「ねぇ、デーモン先生？　ラミア達は？」

「ラミア達は、実技試験があるから、校庭に向かったぞ」

「えぇ～・・・・・・よしゃ！　２人共、落ちてしまえ」

「馬鹿が、親友なら合格できるように応援してやらないか」

「へへぇ～♪」

なに？　オレ無視？

「ちょっと待て。試験とやらは1つだけじゃないのか？」
「ん？　あぁ。試験はね、筆記試験と、実技試験があるんだよ」
「筆記試験と、実技試験って体育と同じじゃねぇ？」
「そうだ、君等の体育という勉学と同じだ、違うのは、我らでいえば、魔法についてだ」

ふぅ～ん

「で、コイツは筆記試験に落ちたと」
「そうだ。『和也君』」
「・・・・・・・・・・・・・・なんで、オレの名前を！！？」

この、悪魔オレの名前を当てやがった！

「ああ、悪いとは思ってたんだけどね。レナの監視をつけていたんだよ、それで、この馬鹿が・・・
「あ、あぁ」

納得納得♪　それで、オレの家に居候することで、オレの名前も知ることもできたのか

「納得されたーーー！！」

だって、お前馬鹿だろ。

「「あたりまえだ。お前が馬鹿だからオレが（彼が）迷惑してんだ」」
「和也、今日はツッコミが重なるね」

お前がボケすぎなんだよ。

「あ、そうだ。レナは皆のを見てくるが良い」
「あ！　行く行く！！」
「みんなの、迷惑になるなよ」

と、悪魔・・・めっちゃ良い人に悪魔は失礼か・・・？

「はは。無茶ですよ・・・アイツの性格はこの2週間見ててわかってますよ・・・意外と、寂しがり屋なことも・・・・・・そりゃ、寂しいですよね」
「ああ、アイツは・・・・・・1番、寂しがり屋は居ないぞ・・・」
「えっ？」
「アイツはな・・・・・・フォード＝ライズ・ハールドの正式な血統じゃないんだよ」
「！？　養子・・・ですか？」

なんとなく・・・アイツが、あんなにも、明るいのがなんとなく・・・わかった気がした。

「レナは・・・捨てられたんだよ」
「・・・・・・・・産みの親にですか・・・」

当然の事を聞く・・・。

「ああ・・・・・アイツを嫌わないでくれよ・・・キミだから、心配はいらないか」

嫌われない為に・・・・・・明るく・・・か・・・。

「1つ・・・いいですか？」

「・・・・・勘が良いようだな・・・」
「・・・レナには・・・まだ、有るんじゃないか・・・？」
街の人の目を見ても明らかだ・・・・・・レナには・・・・・・まだ、なにかある。
「・・・・・・・・・・・・・・・あの子はな・・・・・・・・・・・・」
長い沈黙の後、デーモンさんは、口を開いた。
その言葉に・・・オレは絶句した。
「・・・・・・・・・・・・・・・

「だって、ラミアは私の友達、こんな友達を作った私はえらい！！」
「アンタの、脳は本当に都合いい変換があるのね」

そんなことないよ。

「ありまくり」
「ラミア。次だよ」
「あ、ヴァン！　どうだったの？」

ヴァンの顔がだんだん青くなって行く。ヴァンパイアなのに・・・？

「貧血？」

ラミアが、心配する。

「ラミアは余裕そうじゃん」
「私は、アンタみたいに馬鹿じゃないからね」
「筆記はね」
「失礼な」

本当のことじゃん。私の方が実技ではいっつも1番だったもん♪

「アンタ、生意気ね・・・」
「ラミア、早く行かないと減点になるよ」
「心配しなくても、大丈夫よ」

調子に乗ると、落ちるよ。

「はいはい。心配ありがとね」

いつも、そう素直なら良いのに。

「はいはい、アンタは筆記を頑張りましょ」
「ちぇ～」
「・・・・・・・・・はぁ～」
「どうしたのさ？」
「僕・・・・・・・落ちたかも」

へっ？　成績優秀で、大人も出来ない魔法が使える、文武両道のヴァンが？

「どうしたの？」
「いや・・・ちょっとね」
「そ、そう・・・残念だったね、ヴァン」

内心、仲間が増えて喜んでいる、私だった。

「そこで、だ」
「？　えっ？」

デーモンさんが、急に話しを変えた。

「キミの実力を知りたい」
「オレの・・・・・実力？」
「そうだ・・・・・レナには特殊な力があるんだ・・・・それを、狙う者も少なくない・・・」

オレに・・・・レナを守る力があるか・・・・・・知りたいんだ・

・・この人（？）は・・・・・。

「やってやりますよ・・・・ハッキリしない事は大キライですからね！」

「・・・キミがレナの居候する所の家主で助かったよ」

「オレは、けっこう純情なんですよ・・・こういう話しを聞くと放っていられないんですよ・・・だけど、オレは正義のヒーローでもないんです・・・だから、うまい事は言えませんが・・・レナは、オレが・・・・オレ等が守ってみせますよ」

あれ？　意外と決まったかもしれないぞ？

「ふっ・・・、オレ達か・・・・」

「そんじょそこらのヤツ等よりは強いですよ・・・・・オレ等は」

「・・・・・・なら、キミの力を見ようじゃないか・・・」

「えぇ、見せ付けてやりますよ・・・・今は、オレの力をね」

オレが、強気の宣言をしたのが、１番の原因なのかもしれない・・・。

【11話】危険な香りの1日旅行・その2（後書き）

で、続きですね　ん？　なんんですか？　前書きの暴走？　・・・・・気にしないでください。

続きは～・・・たしか、現在名前が挙がった中での最強1位えしたっけ？　オレと死神?!　最強は、魅夜さんの義理の姉にあたる、柴原香澄さんです！　もうすぐ出て来るのでおたのしみに（笑）

1回出てきましたが、余所行きの顔です。本来の顔は・・・・・・・・

＜続く＞

なんだ、これ!?　永久ループかよ!?　おい！

【１２話】危険な香りの１日旅行・その３～ＶＳ雑魚（前書き）

１日なのになんか、長いですね・・・・。もう２～３話ぐらいやりますよ。
なんか、だして欲しいモンスターでも入れば評価とぜひ一緒に・・・・宜しくお願いします。

４０話目、アップしました。
人気投票を実地していますのでお願いします

【12話】危険な香りの1日旅行・その3～VS雑魚

「で、こうなるのか？　デーモン先生？」

オレは、目を吊り上げデーモンさんに視線を流す。

「すまんな、時間が無かったのだ・・・・・」

オレが、今居るのは、地下コロシアム・・・＜いらっしゃい＞と、ふざけてんじゃね！？　と、言いたいネーミングのコロシアムの中心に居た。簡単な円のコロシアムで浮いているのが特徴的である。

「適当に見積もった私の生徒を使ってるわ」

と、グラマーな人が言う・・・・・ハーピーとでも言うのだろうか？　多分、先生だろう。

「・・・・・まったく」

「ついでに言うが、落ちたら・・・・・

「１０人を勝ち抜き戦！　では、まずは１人目！　＜ゴブリン＞！！」

と、その時に、オレの前のゲートが開く。

なにっ！？　もう、居ないだと！？　なんたる速さ！

「ゴ～ブ、ゴブゴブ。弱そうな人間ゴブネ」

後ろか！　・・・・・・・・・・・・・・・・・・はっ？

「あ、ごめんね和也君。両方の扉をひらいちゃった♪」

オレが、見たのは後ろのゲートから出てきた、チッコイ鬼？だった。

「こんなの、さっさと倒してゴブ。イイコトしに行くゴブよ。こんな、雑魚瞬殺ゴブよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「さっさと、殺してやるゴブ♪」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「ゴブパンチゴブ～！」

「ぶっ飛べゴラァ！！」

ゆうしゃかずやは、ごぶりんをこうげきした。

「ゴブゥウウウウウウウウウウウウ！！！」

なんか、某ＲＰＧのヤツが出たが、気にしない！！
オレは、蹴り飛ばしたゴブリンに追いつき、更に胸座（むなぐら）を掴み。左手で右・・・左・・・右・・・左と繰り返し殴る。

「ゴブ！　ゴブゥ～！！　げらっぱ！　グキュ！？　ゴブ！！」
「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラァァアアアァァ！！！！」

右・・・左・・・右・・・左・・・顔・・・顔・・・顔・・・鼻・・・目・・・口・・・口・・・口・・・顔・・・顔・・・顔・・・腹・・・腹・・・腹・・・チン蹴り・・・チン蹴り・・・腹（中略）顔・・・顔・・・顎にアッパー。

「ゴ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ブ・・・・・・・・・・・・・・・」

ゴブリンは、綺麗に宙を舞った。

「チェストー！！！」

落ちてきたゴブリンに全力の右ストレートを与える。
ドゴォン！！（壁にめり込む音）
やりすぎたかな？　う～ん、人のことを雑魚って言ったんだからさ。

「次・・・・・良いですよ」
「わぁお！　凄い子ね～・・・デーモン！　次へＧＯ！」
「ハーレス・・・・・最後の子だが・・・・・・・・」
「いいじゃん！　とにかくＧＯ！」
「まったく・・・・・」

なんだ？　なにかもめてるのか？

「じゃあ、行くよ！　＜キングゴブリン＞！　でておいで！」

なに？　キング？　強い奴だよな？　大様なんだから！

「死にやがれゴブゥゥゥウ！」

出てきた途端に突っ込んでくる。

「あ、そう」

もちろん猪突猛進な攻撃など避けれないワケも無く、簡単に避ける。

「避けるなゴブ！」

いや、そりゃ避けるさ。ってか、さっきのゴブリンより小さくね？

「ゴブビーム！！」

でこの辺りに装備してるゴーグルから、光がでる。

光線だと！？

「これで、明るくなったゴブ」

否、単なるライトだった。そうか、蝋燭の光だけじゃ心配だもんな

ぁ～・・・・・・。

「脅かすんじゃねぇ！！　ガキィ！！！」

オレの殺人チョップが炸裂する。

「痛いゴブ！　酷いゴブよ！！」
「大丈夫かゴブか！？　メニスト！？」

ん？　先のゴブリンか？

「邪魔じゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ナイスクリア！　意外とサッカー選手もいけるかも？
パァリーン！！（強化ガラスが割れる音）
ゴブリンはデーモンさん達の所に飛んで行った。

「おにちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

「バリバリだぜ！！」
「アンタは、イキナリ何を言うか！？」
ラミアの殺人チョップが私に炸裂した。
「ｇｋ；ｆｒ；あえうｇｆぁｈｇ・えいｙｆｌが・ｇふぉいｔ」
「ちょっと叩いただけでそんなダメージ！？」
痛いな～もう！
「ん？」
「どしたのヴァン？」
ヴァンがイキナリ止まった。
「レナ・・・・・・」
「にゃ？」
「そこは、危な・・・・・・・・・・＜ドゴォン！！＞（ゴブリンが地中から飛び出て来る音）「グハッ！！」だ、大丈夫レナ？　もろに入ったけど・・・・・？」
「ぐｒふぃｇ，いおｔｒｙｔｒｄｙｋｆぃｔっれｔｒｇ，；およ；よつい」
「何を言ってんのよ、さっきから・・・・」
何が・・・？　いったい何が！？　女優にとって顔は命・・・・。
「女優じゃないでしょ」
「ラミア・・・・・・・あんた、心読みすぎ」

いくら、そういうキャラ設定だからって・・・・・。

「おいおい・・・・・・・」
「大丈夫？　ハーマウスト？」
「オラッ！　慰謝料払えやハーマ！」

ゴブリンごときが！！　この、私の顔に傷を！！

「付いてないついてない・・・・・・ってか、付いてもどうもないから」
「酷いッ！　親友だと思ったのに」
「だから、その親友に試験落ちろと言ってる貴方は何なの？」
「・・・・・・・・・そんなのかんけーねぇ～☆」
「関係なく無いと思うのは私だけか？」

うん。ラミアだけだよ。

「あんたねぇ～・・・・・・・・・・・！」
「えっ！？　人間にやられた？」

ヴァンがイキナリ叫びだした・・・・・・人間って？

「アンタの彼じゃないの？」

？　なにをいってるのかな？

「彼？　私、まだ彼氏なんて居ないよ？」
「あら？　違うの？　アンタの連れよ」
「あぁ、和也のこと？」

イヤな誤解だなぁ～。

「で、和也がなにをしたの？」

「黙れゴブ！　ブス！！」

・・・・・・・・・・・・・・・（思考停止）

「３人目は～・・・ゴーレムちゃん！」

「イヤ、でか過ぎだろ」

出て来たのは、体調２０ｍはあろう巨体だった・・・・・・・・・岩の巨人だった。

「ちぃ！」

相手は、岩だから殴ってもオレが痛いだけ・・・・・・・しかも、奴の全体重がかかった攻撃は当たるわけには、行かない・・・・。

考えろ・・・・ヤツの打開策を・・・・・・・・・・。

１・真っ向から勝利をもぎ取る。

２、降参する。

３、頭の良い俺がヤツの弱点を見つける。

４、ヤツを上手くリングの外に誘き出し後ろからじいちゃん直伝の必殺技で倒す。

うん、３番だよね・・・・・・・でも・・・・・無いだろ？　だから、３番は自然消滅。
１番・・・・・・無理。
と、言うことは・・・２と、４か・・・・・・・。２番？　イヤイヤ、さすがに３人目で止めるのはイヤだしな～・・・・・・・・・、じゃあ、４番？
でもなぁ～・・・・・・無闇に使うなって言ってたし・・・・・・・
でもなぁ～・・・・・。
仕方ないか・・・・・・・。

「ほら、来いよ！」

リングの端に走り寄る。
さ、来い！
＜ズドォォォン＞　＜ズドォォォン＞
もう少し・・・・＜ズドォォォン＞　あと、１歩ぐらい・・・・。
＜ズドォォォン＞　そして、後は足を上げたら・・・・GO！
オレは、全力でゴーレムの股を潜り抜けて、後ろを獲る。

「雨宮秘伝奥義！」

ヤツの体を飛び渡りちょうど背中の真中に跳びはねる。　片足の状態だから、いくら何百tほど、有ろうが・・・・片足ならその分バランスは悪い！

「魔槍烈破掌（グングニール・インパクト）ッ！！！」

＜バァゴォォォ

「痛ってぇ～～～

【12話】危険な香りの1日旅行・その3～VS雑魚（後書き）

今日は、お暇な3名の皆様です。
駿「余計じゃアホ」
将「いくら、本編にでて来ないからってね、僕は忙しいんだよ？
親父の店を継がないといけないしさ」
駿「そうそう、オレはバイトが忙しくてさ」
・・・・・言い訳を・・・・・。
「「アッ！？」」
怖いよ！　ヤンキー！
魅夜「ふふふふふふぅ・・・・・・・・」
コッチの方が怖い！！　ってか、何気に暴走気味？
魅夜「朝帰りかぁ～・・・・・・そう、朝帰りね～・・・・」
あっ・・・・・・・・。
将「まったく、あんな面白そうなことをやるなら、僕も行きたかったな」
駿「仕方ないさ」
魅夜「朝帰り・・・・・・・かぁ」
怖いよぉ・・・・・・皆して怖いよ～・・・・・。
ってか、前はなにかの続きだったかな？　ま、いいか。

【13話】危険な香りの1日旅行・その4～VS長靴を履いた猫（前書き）

ご愛読ありがとうございます。
前回登場したゴーレムと、ゴブリンの紹介をさせてもらいます。
←

【13話】危険な香りの1日旅行・その4～VS長靴を履いた猫

＜ゴブリン＞
イングランドに伝わる、醜く小柄な妖精。1説によれば、その起源はフランスで、ピレーネ山脈の割れ目から現れ、ヨーロッパ全土に散らばっていったという。そして、教会の墓場の地下や、岩の裂け目、あるいは洞窟や、古い木の根のあいだなどに住んでいるとされてる。ゴブリンは、それほど邪悪な存在というわけではないが、意地が悪く、ゴブリンが笑うとミルクが酸っぱくなるという言い伝えも残されてる。本編では、妹より位が下と不甲斐ないが・・・・・・多分、もう活躍はしないだろう。

＜ゴーレム＞
ユダヤ教の伝承に登場する人造人間のこと。ユダヤ人のあいだでは、祈祷してから断食をし、粘土で人の形をつくり、神の名を語りかける。すると、泥人形に生命が吹きこまれ、怪物がつくられると信じていた。名前はヘブライ語で＜胎児＞である。

＜とある、資料から抜粋＞

「この上のはなんだ？」
「気にせず次行こう！」

いや、本編の前にあれば、気になるだろ？

「4匹目はバジリスク！」

・・・・・・・・・バジリスクってアレっすか？　目を見たら、

石になるってヤツ？

「シャァァァァァァァ！！」

「ちぃ！」

とりあえず、跳びはね回避する。

目を見るわけにはいかないから、状況が分からん！　クッソー・・・

・あの教師達は何を考えて・・・・・・ってか、あのゴーレムとか

も普通は勝てる相手じゃねぇぞ！

「くぅ・・・・」

しばらく大きな喧嘩してねぇ～から勘が鈍ってヤガる・・・・。

「・・・・・・・・・・・・ふぅ～・・・・・・・」

何処から来る？　多分、ヤツはオレに対し真っ直ぐ向かって来たから・・・・・そうして、オレは真上ににげた・・・と。なら、オレの真下にいる！

「居るかどうか分からんが、俺の儚い願いを込めた攻撃を食らえこの蛇ヤロウ！」

無駄に長いセリフだ・・・・自分から言っといて・・・・・・。

ってか、マジ怖いんだけど！

＜トンッ＞

は、外した！？

「キシャァァァァァァァァァ」

しまっ・・・・・・！
＜ドン！！＞

「あがっ・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！！」

体当たりが、もろに腹に入った。
い、痛ぇ～～・・・・・・・・・・・・っ！！！！！！
＜ピシッ＞
ん？　なんだ？　内ポケに・・・・・・何が？　あ、ってか学校帰りに襲われたから、制服のまんまで・・・・・あんにゃろ・・・・人の制服に・・・・・・・・・！！
制服・・・・・・・・・・？

「そうだ・・・・・・その手が！」

自分の制服の内ポケにてを入れて、ある物を取り出す。

「おいっ！　コッチ見ろよ！」

目を見開き、蛇を誘いだす。
よし、コッチ向いたな馬鹿！

「・・・・・・・・・・・・・・・

た自分を。

「天才なんだよ、オレは」

ま、まぐれだけどね♪

「にゃ？」

目を覚ますとヴァンと、ラミアが息を切らしていた。

「どないしたんねん？」

「「殺す・・・・・・！！」」

えっ？　私はにゃにを？

「レナ・・・・アンタはねぇ～・・・・・」

「レナ・・・・・・」

「私・・・・・・・にゃんかやっちゃった？」

いや～。記憶がないからさぁ～。

マジでその怒気はにゃに？

「詫びなさい！　死んで！」

「にゃにをイキナリ！？」

私が、いったい何を？

「レナが悪いんだよ」

「この、オオボケ娘が！」
「だから、私が何を！？」
「ヴァン、この『馬鹿』はほっといて行こうよ、『馬鹿』の連れが、なんかやってるみたいだし」
「？　和也が？」
そういえば、さっきもなんかその話しで・・・・・・・？
「あ、ちょっと！　置いてかないでぇ～！」

「あの子、やるはねぇ～。レナもいい子見つけたじゃない」
「確かに強い・・・・・まさか、ゴーレムに勝つとはな・・・・・・・・」
「ま、バジリスク戦はまぐれだものね・・・・・でも、次はまぐれは無いわよ・・・・・・・次は・・・・・・出ておいで＜ケットシー＞！」

むっ？　ケットシー？　どこかで聞いた事があるような・・・・・・・？
あ、レナの嫌いってか、苦手なヤツだったな。

「シャッ！」
「おわっ！？」

イキナリかよ・・・・・・ドイツもコイツも・・・・・。
ネコはオレの前で1回止まった。マジで長靴履いてヤがる。

「・・・・・・・キミの命運もここまでだにゃ」

なにを～！　クソネコが！　成敗してやる！

「長靴を履いたネコごときが！」

「・・・・・・・・・・遅いにゃ」

！？　消え・・・・・・・・・・・た？

「後ろにゃ♪」

振りかえるとネコがニヤリと笑っていた・・・・・・・スゲー屈辱的だ・・・・！

「テメェ！」

回し蹴りから、突きへ移るフェイント！

「見え見えだにゃ♪」

軽く回避される。

「ちぃ・・・・・厄介だな・・・・・・・」

動きが速すぎる・・・・・こう云う敵は如月に任せてたからな・・・・・・。

「獣猫拳（ネコパンチ）！」

「くぅ！　危なっ！」

「獣猫蹴（ネコキック）！」

違う！　その体制は・・・・・・・・ライダー○ックか！？

「甘い！　ジャンプ中の方向転換は、できねーだろ！！」

ジャンプし、回し蹴りの体制になる。

「くらいな！　竜巻旋風脚（たつまきせんぷうきゃく）！」

著作権なんか・・・・・・著作権なんか・・・・・＜カチィ＞↑

（何かのスイッチが入った音）そんなの・・・・・・ぶっ壊す！

「フシャ！？」

「まだまだまだまだ！！！！！！！！神龍拳（しんりゅうけん）！　メガ・サイコク

ラッシャー！　真空波動拳（しんくうはどうけん）　昇龍拳（しょうりゅうけん）！　滅殺豪昇龍（めっさつごうしょうりゅう）！　真・昇龍拳（しんしょうりゅうけん）！」

「ニャ！？　ギュパ！？　ベボ！！　フシャアアア

「次はキサマか？」
「次って何！？」
「ってか、ケットシーこと、ニャー○が死んでる！！！」
「えっ！？　本当♪」
「アンタ、本当にうれしそうね・・・・・・・・・・・・・・・」

ん・・・・・・・・・・・・・・？　あれ？

「？　なんで、レナが・・・・・・・？　それにお友達2人も・・・・・・・・？」

記憶が・・・・・？　そういえば、ケットシーは？
ううっぅ・・・・・・？　頭が身体じゅうが痛い・・・・・。

「さすが、和也だね！！」
「はっ？」

何を言ってるんだ？

「ケットシーをあんなにするまでボコボコにしてさ！」
「はぁ～？　何を言ってんだ？」
「えっ？　だって、あれって和也がやったんだよね」

レナは果てしなく遠いい所を、指す。
そこには・・・・・・・猟奇殺人！！！！！？

「・・・・・マジで記憶にないんかい」
「アンタと同じよ・・・・・・」
「へっ？　私と同じ？」
「だね。ペットは、買主に似るっていうからね」

何を、言ってるんだ？　このガキ共は？

「まったく、私に似て良かったね和也♪」

「「お前だよ」」

ってか、お前等イキナリ出てきてなんなんだよ。

「えっ？　私が私に似すぎてるって？」

「「「馬鹿」」」

「何！？　皆してツッコミ役なの！？　ボケは私だけ！！？」

「ああ」

「うん」

「そうよ」

「酷い！！！」

「「「何がだよ・・・・・・・・・」」」

まったく、ツッコミが被るぜ。

「じゃあ、次行くわよ！　レナ達は観戦席で見ててね♪」

「？」

「いいから、行ってろ」

「ズルイ1人だけ良い事を・・・・・・」

「「「いいから、行け（行くわよ）（観戦席に行こうよ）」」」

「イヤだーーーーーーーーー！！」

「ワガママ言うな！」

この、ワガママ娘が・・・・・・。

「いい加減にしろ」

ちょっとドスを訊かせて喋る。

「うっ・・・・・・・・・・」

勘が良いな・・・・・オレがキレると思ったのか・・・・・・・・怒ったって怖くないのにさ。

「いいから、見てろ・・・・・・明日も学校だからな」

「わかったよ・・・・・・・・・」

あ～ぁ、拗ねちゃったか・・・・・・明日の朝は豪勢な物にしないとな・・・・・・。

「ＯＫ？」

「はい」

「次はね。＜ビッグフット＞！」

『がんばれー！』

と、観客から。理由もしらない喧嘩を、応援してるって・・・・・・・・・・・・はぁ～・・・・。

「さてと！　負けらんねぇ～な」

【１３話】危険な香りの１日旅行・その４～ＶＳ長靴を履いた猫（後書き）

評価ご感想お待ちしとります。

【１４話】危険な香りの1日旅行・その5～ＶＳ火炎魔神（前書き）

あと1話！　あと1話ください！　あと1話でこのシリーズが終りまして、和也君が魅夜ちゃんに起こられますから！　そしたら元のコメディーに戻りますから。

４０話目できました。・・・。
人気投票します。手伝ってください

【１４話】危険な香りの1日旅行・その5～ＶＳ火炎魔神

「すごいですね～、実況のラミアさん」
「そうですね～。前回から少し飛びまして今は、９匹目＜イフリート＞を相手してます」
「こちら、解説のヴァンです・・・・・・・「落ち着いて観てろ！！」「「は、はい！！」」」おっと！　怒りました！　雨宮選手！」

こいつ等・・・・・・聞いちゃいね～・・・・・。

「余所見するな！」

イフリートねぇ・・・・・確かに攻撃力は高いが・・・・・・・・遅いよ！

「ちぃ！！」
「攻撃が当たりません。どう見ますか？　解説のヴァン？」
「あ、はい。イフリートの攻撃がただ単純で雨宮選手からして攻撃が丸分かりなんでしょう。攻撃が読まれてます！」
「だから、お前等いい加減にしやがれ！！」
「「「は～い」」」

こんのガキ共・・・・・！！
レナのヤツはお仕置決定だな○○に代わって。

「そのまえに、コイツをなんとか、しね～とな！」

モグラ叩きじゃね～んだよ、ただオレに向かって殴るだけじゃ・・・

・・当たらないぜ！

「避ける避ける避ける！！　素早いぞ和也！」
「イフリートの攻撃は単純で攻撃しやすいけど、ヤツの体温は数百万度にいたります！　攻撃したくても、攻撃ができないのです！」

駄目だこいつ等・・・・・落ち着くって事を知らない・・・・・
でもな～・・・本当の事なんだよな～。回避は出来るんだけど、攻撃したら・・・・・コンクリートと同じく焦げちまう・・・・・・
すげー臭いんだけど！　コンクリが焦げる臭い！　は、鼻が・・・・
・ちくしょ・・・・これじゃコンクリートが溶ける際にでる有害物質で、オレが倒れる、実際に頭がマジ痛ぇし。

「ちぃくしょおおおおおおおお！　当たれ当たれ当たれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

動きが遅いよ。
でも・・・・しばらくすると頭で判断できなくなる。やばいな～・・・・なんか、打開策はねぇ～か？　しばらくするとマジ殺られるぞ！

「このままでは、負けてしまうぞ！どうする？」
「大丈夫！　和也はちょっと強い」

ちょっと！？　あんな化け物たちと戦って勝ったオレが！？　ちょっとなの？

「って、ツッコミを入れるのは無理か・・・・・・・」

どうすれば、勝てる？　どうしたら・・・・・・・・・？

攻撃は簡単に避けれるが、攻撃を与える事はできない・・・・・それに、このままだったらオレが負ける！　しかも、死という形で・・・・。

「くぅ！　攻撃ができないなら・・・・・・落とすしか・・・・・・・でも、どうやって？」

「当たれや！」

そんなこと言ったて、当たるかよ！　真空波動拳ってもあれじゃ効かないだろうな・・・。

「どうする・・・・・・・？」

それなら、ゴーレム戦と同じく・・・・・・・・・・。でもなぁ～・・・・。

それなら、攻撃の反動で落とすか？　でも、ゴーレムのヤツより素早いからな・・・・・・。

考えろ・・・考えるんだ・・・・・・・何か・・・・・・何かないのか？

避けるだけしかないんだ・・・・・・・・クソ！

「う～ん。ガスマスクちょうだい」

オレが1番欲しんだがそれ！　ってかなんで持ってんだよ！？　レナ！？

「でも、3つしかないよ。私とラミアとヴァンでちょうどだね♪」

・・・・・・・こらぁレナ！！　テメー！オレを忘れてるだろ！

「あの～・・・・・・４つは無い？」
「シュコー。シュコー。シュコー」
「もういい・・・・・・・」

そうだよな、マスクしたら喋れないよな・・・・。

「くっそーーー

「わかったぜ！　落ちればいいんだな」
「ああ」

馬鹿め、落ちたらオレの勝ちでお前は地獄に行くんだぞ。

「あの～・・・・・こんな状態で次の試合をやるんですか？」

リングの半分が、焼け焦げていた・・・・・歩き回るのは少々キツイ物がある。熱いから。

「ええ。最後はすぐに終るだろうから。でも、冷やしたほうが良いわよね。和也君、一回リングから出てね」
「あ、はい」
「氷術・アイステリトリー」
「！？　スゲー」

一面が凍り・・・・リングが凍りついていた・・・・・。

「じゃあ、次はこれで行こう！　ラスト！＜デュラハン＞」
「「セフィリア！！！？」」

何時の間にガスマスクを外しやがった？
オレの前に現れたのは・・・・・間接・・・・首などが抜けた鎧騎士だった。
な、なんだ？　コイツ・・・・・・？　今までのヤツとは力も・・・・
雰囲気も・・・・全て違う。
野性の勘だが・・・・・・コイツ・・・・強すぎるぞ。

「・・・・・・・・」

駄目だ・・・・コイツには勝てない・・・・・。
そんな予感がオレの全身に駆ける。

【14話】危険な香りの1日旅行・その5～VS火炎魔神（後書き）

魅夜「・・・・・・・」
なんですか？
魅夜「・・・・・・・・」
将「・・・・・・・・・」
駿「・・・・・・・・・」
な、なにかな？　HAHAHAHAHAHA！
魅夜「・・・・・・・・」
将「マグロを裁く包丁の切れ味を見るか？　人間なら簡単に切れるぜ」
駿「どうしてくれようか」
魅夜「このクズが死ぬなら、それでいいわよ」
何をする気なのかな？
「「「人体実験」」」
な、なんでーーーーーーーーーーーーーーーー！！！次回から本編に登場するのに！
「「「ウソこけ！！！」」」
スミマセン、ウソです。魅夜ちゃんは、次の話しに出す予定です。
君等は2話目です。
魅夜「あら」
将「はん、所詮こうさ」
駿「だな」
何が不満なのキミ達！！！

【１５話】危険な香りの１日旅行・その６～ＶＳ騎士（前書き）

相変わらず会話の多い作者です・・・・・
なにか、表現の事で参考になる事でもありましたら、ご指導して貰いたい限りです。
評価、やってもらいたい話し、世間話しお待ちしております～す♪

６０話目にですね、なんと！　人気投票の結果発表をやりたいのでアナタ様のお好きなキャラ！　お一人様につき2評までです。
送ってきてください

【15話】危険な香りの1日旅行・その6～VS騎士

次元が違う、そういう感じがビシビシ伝わってくる。

はは……上等！　楽しませてくれるじゃねぇか？　愉快ったぁこの事だ。

「なんで特Sの、セフィリアが……」

はて？　特Sとな？

「ちょっと！　デーモン先生もなに考えてるのよ！」

「勝てるワケが無い……。セフィリアは特Sでも1番の実力がある」

あのよぉ、確かに強い感じはピンピン伝わるさ、でもよぉ？　このオレを舐めてるのか？　こんな奴はアイツに比べたら雑魚中の雑魚だ。まぁ、情報があるには越した事がないだろうし、特Sの事を聞いてみるか？

「レナ、特Sとかってなんだ？」

観客兼解説のレナに疑問をぶつける。コイツに解説が出来るのか？

「あぁ、特別Sクラスの略だよ♪　さすが、私！　優しいな！」

自我自賛のレナさんそれで、終りかい！？　終りなのかい！？

やっぱり聞いたオレが間違いだったか……。

「ええっとですね」

と、付け加えるラミアちゃん。こういう子貴重だよね。レナはアレだけど。

「ここには5つのクラスがあるんです。

まずは、Cクラスこの中では最弱クラスです、普通の人間と同じ程度の力しかありません。ゴブリン兄妹がCクラスです。

次に、Bクラス和也さんが戦ってたバジリスクまでがBクラスです。

続いて、Aクラス実力でいえばBクラスとは比べ物になりません。ここから、魔法が授業に入ります。ケットシーはそこの中堅ですね。

そんでもって、Sクラスです私、ヴァン、レナがこのクラスです。

最後に、特別Sクラス実力は他のクラスとじゃあ比べ物にもなりません、教師陣と同じほどの力です。で、彼女はそのクラスでも飛びぬけた実力で1番の実力が有るんです……もしかしたら、レナのあのドラゴンと同じ実力かもしれません」

そんなに強いの!?　あのドデカイドラゴンと同じ!?　いやいや、だけどコノヤロー……まだ本気で殺気を出してねぇな、それに押えてる感じがする、本当に実力なのだろうか？

つーか、ハッキリ言うと……本気だされたら負けるね。

「んな、アホな……」

「！」

危っねぇ！　刀なんか振り回すなよな！　髪をちょっと持って刈れたよ！！　友達になにしやがる！？　髪は男の友達なんだぞ！男はハゲやすいから！

「でも、見切れないわけじゃ……、ねぇよ！！」

振り上げられる、剣を避ける。ンで、右腕が隙ありだよ！

「はぁ！」

回し蹴りをヤツの右腕に！
＜ガキィィィィィンッ！！＞
やったら、金属音が響いた。

「痛っっっってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

なに！？　鋼鉄を蹴った見てぇーだ！　足がマジ痛い！　ま、まぁ、オレからしたらダイアモンドでも粘土遊びと同じなんだけど。そんなのより全然硬い！！

「セフィリアの鎧はこの世界最強の鉱石＜魔法結晶（マテリアルクリスタル）＞で丹念に作られた鎧です、そんな攻撃じゃあダメージなんか貰いません」

ちぃ！　そう言うのは早めに言ってくれよな！　ま、兎に角説明ありがとさんね、ラミアちゃん。

「セフィリア……。相手は普通の人間なんだよ」

と、意味深にヴァン君が。と言うか、普通の人間なんだからゴーレムなんて倒せません！　あれは、少し力のある人間じゃないと太刀打ちできないからね！

「セフィリア……。手加減してよ」

ああ、其処らへんは大丈夫、この野郎、本気で戦ってねぇから。

「遅い……」

「！！っ」

しまった！　ツッコミ（指摘）をしてたらあの野郎、突きを！

「皇魔突（こうまとつ）」

魔力っぽい紫色の物を剣の先に溜めてから高速の突きを放つ。この野郎、鎧のくせに早い！「ちぃ！」受身が……。中途半端になってる、けっこういてぇぞ？。

「こんのぉぉ！！」

空中で綺麗に体制を戻す。おお、オレって天才？

「！？」

あら？　体当たり！？　ヤバイ……着地が……ッ！！

「うまい！　持ちこたえた！」

お褒めいただきありがとう。でも、着地に失敗して足を捻っちゃったけどね。ってな、余裕はねぇんだよな……。マジで……。コイツは今まで戦った（じいちゃん抜かす）どいつよりも強い。

「ちぃっ！」

コイツ……。全然力を使ってねぇし、今までのヤツより強い！！

「……。武者狩（むしゃがり）」

右から来る攻撃にぎりぎりで、反応、反撃の態勢を取り、全力の攻撃（強パンチ）をヤツの胸に攻撃する。ヒビくらいは入って欲しいんだけどなぁ？

＜ガーーンッ！！＞

しかし、なるのは金属音だけ……いてぇ。

「痛ッ！！」

逆にオレの拳にダメージをもらう。マジでいてぇ……。既にトータルダメージが魔槍烈破掌（グングニール・インパクト）よりでけぇぞ。

「鎧なんてヒキョーだぞ！」

「セフィリア！　がんばってねー！」

「レナ！　お前はそっちの味方かぁ！？」

あんにゃろ……。帰ったら猫地獄を見してやる。

「くっそ！　あの鎧をなんとかしねーとな」

こういうのは継ぎ目を狙うのが、ベタなんだけどよォ。

まず、隙がない。そして、間接もヤツは欠落してるんだ……。簡単に言うと『透明人間』が鎧を着てるという状態だ、攻撃しても透ける、トーンって。スケルトーン……なんちって♪

ま、まぁ、そんな状態の野郎を攻撃するつーのは至難の業というヤツであろう。

「和也ーーー！」
「あんだよ！？」

こちとら、忙しいんだよ。

「負けちゃえーーーーー！！！」
「まずは、テメーをぶっ殺すぞ！！！」
「あっ！」
「和也君！　前！前！」
「あんっ？　！！　しまった」

馬鹿に気を取られすぎた！　駄目だ……野郎、さっきの突きだ……反応間に合わねぇ！！

「うわぁぁぁ

＊＊＊

や、やべぇ……。頭打っちまったか？　フィールドが氷だからさらに滑りやすいんだ……な。やべぇな、クソ！　都合がワル過ぎる。

＜ガシィン＞＜ガシィン＞

ちっくしょう……。アイツは本当にオレを殺る気だ……動け、動けオレ！！

＜ガシィン＞＜ガシィン＞

動け……動け……！

『お前じゃ無理だぜ』

？　なんだ、お前は？

『オレ？　“俺”は、雨宮和也だよ』

“俺”……？

『そう。お前は“オレ”だ……』

＜ガシィン＞＜ガシィン＞

「終り」

『でも、“僕”が出てあげるよ』

はッ……？　お前は？　いや、お前等は……？

「龍滅掌（ドラゴニッククリア）」

＜ドゴォォン＞

―Ｌｅｎａ・Ｆｏｗｄ＝Ｌａｉｚ・Ｈａｒｒｕｄ―

何！？　何が起こったの！？

えっと、セフィリアが和也に止めを刺そうとしたら、和也がイキナリ起きて？

「……僕に止めを刺そうだなんて数万年早いよ」

えっ？　なんで？　あのセフィリアが……吹き飛ばされた？

「……」

「へぇ、やっぱタフだね。すぐ起き上がる」

さっきまでとは、全然違う！　でも、和也だ。でも、なんで和也から魔力が溢れ出してるの？　それも凄まじい量が？　和也は人間のはず……？

＜ガァァァン！＞

「ちぃ！」
「……鬼神剣（きしんけん）」

出た！　セフィリアの決め技！　真一文字に切り裂く紅い斬撃！

「雨宮流格闘術！　獅子戦閃（ししせんせん）」

和也が右手を突き出して出来た獅子の衝撃波が相殺した！？

「凄い！　セフィリアの攻撃を無効化した！」
「でも、セフィリアが怯んでない！」
「違う！　和也さんの動きの方が速い！」

上を見上げて見る、和也がセフィリアの真上に居た。

「くぅ」

セフィリアが……、押されてる？

「皇焔剣（おうえんけん）」
「ふふ、危ない危ない……」

剣を突き出し召喚された不死鳥は和也を食らうが、その和也はま

るで霧のように姿を消した。

「……」

「ふ、本気モードかい？」

早い！　何時の間にか和也の後ろを！？　と、いうより和也は何時の間に移動なんか？

「炎術・獄焔弾（メガフレイム）」

セフィリアの手から２ｍはあろう火球が練られる。

早い、上級魔法を一瞬で……。

「これで決めて……ッ！！！　限界か……！」

どうしたんだろう和也？　頭を押さえてる？

「くぅ！」

「凄い！　あの火球を避けた！」

「でも、セフィリアがもう動いてる！」

あ！　爆炎が邪魔で見えなくなった！！　どうなってるの？　煙で全然見えない！！

＜ドゴォォォォォォォォォォン！！！！＞

「きゃぁ！！」

「凄い爆風だ……！！！」

「ぐぅ……！！！」

リングの中心で和也が倒れてた。ピクリとも動こうとしない。気を失ってるのだろうか？　そういえば、セフィリアは！！？　……居た……。リングの端に飛ばされたんだ！！セフィリアが立った？　ヤバイ！

uya　Amamiya―

―Kaz

「いって～？」

果てしなく意識が飛んでたような……？

あれ？　さっきまで何を？　非常に忘れてはいけないことだったような？

う～～～～～～～～～～ん　……はて？

＜ガシィン＞＜ガシィン＞

なんだ？　この不吉な音は？　……なんだっけな～？　そういえば、なんで横になってるんだ？　あれ～？　立った方が良いよな。

＜ズドォン！＞

な、なんんだ！！！？　立った瞬間さっきまでオレが寝てた所に刀が！？

思いだしてきたぞ……！　そうだよ、コイツでラストだったけ。でも、なんで気を失ってた？

なんでさっきまであった氷が溶けている？　それに、オレは『グングニールをヤツに使おうと？』したんだ？

くっ！

考え事をしてる内に刀を振ってきやがった。危ないんだけど！！

「ちぃ！」

かすったか！？　頬に軽く湿った感じのものがある。

「……」

「さてと……？　どうするかな？」

そろそろ、足を誤魔化すのはキツイし。それに、どうやってヤツを倒すかだ。

やっぱり、グングニールを……。でも、流石に1日に2回はキツイ。

でも、勝つ為には『アレ』を。たしかにグングニールよりは強靭な破壊力がある……。だけどなぁ～。

仕方ない、か。

「威突（いとつ）」

攻撃がしつこい！！　集中があできねぇ！！
右……下、そこから、振り落してから……突きへ単調な４連の攻撃パターンだ。

そこから、構え直す為に、腕を上げて……今だ！！

「四聖拳壱の型・朱雀舞」

「弐の型・青龍槍」

乱打から、突きへ。

弐の型はグングニール以上の破壊力だぜ！

「参の型・玄武砕」

さらに、掌底の追撃

「終の型・白虎双牙天極拳（びゃっこそうがてんきょうけん）」

吹き飛んだヤツのバックを獲り、背中へＤ（ダブル）パンチ。そこから、右足で軸に前に出て、左足をどてっぱらに蹴りを入れる。そして、全部命中させた懐に全力で拳を叩きつけるッ！

＜バギィ！！＞

「！　和也の骨が砕けたの！！？」

残念だったな、砕けたのは……。

「違うよレナ。凄いよ彼は、全て……と、いってもあの、ダブルパンチ以外だけど、全部、同じ場所に入ってたんだ」

「ウソ！？」

うん？　なんか馬鹿レナの声が聞こえたような？

「まだ、やるかい？」

その前に……コイツの戦意を確認しないとな。ってか、アレを食らってもビクともしねーか……。

やるって言われたら勝ち目は無いぞ……こりゃ。だって、装甲を破ったというよりはヒビを入れただけだ。

「でも、気をつけた方が……」

「へっ？　なんで？」

「いい、レナ」

「あ。あれか……」

「どうしたの、２人共？」

「う、うん。デュラハン一族の家計はね」

「大丈夫か？　悪かった幾らその鎧でも痛かったろ？」

オレのが痛かった気がする。

「……」

一瞬……。一瞬だけど、息を呑んだ。

「へ……？」

「参りました」

女（アマ）？

「……あ、あれ？　首が……？　か、間接が？」

そうだ、一番驚いたのは今まで、欠落した物（首など）があったことだ。

「一種の武装。弱点を無くする為」

「あ、そ……。そう……」

そして、オレがドキモを抜かされたのは、そのよぅ……。

＜トンッ＞

『なにか柔らかいもの』が、オレの唇に触れた。

脳内『な、なにいいい

「……」
「……」
「？」
「……」
「はっ？」

＜脳内処理中……処理中……処理中……＞

「な、なななな……何を？」
「キス」

簡単に言ったよこの女！　ＨＡ－ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！！！

落ち着け！　落ち着くんだ、雨宮和也１５歳！！　そんな馬鹿なことが、けっしてモテないオレだぜ！　こんな、長身で長い蒼髪の女性で特上の特上並みの美人だぜ！　イッピー（一般ピープル）のオレがだぞ！　現実を見るんだ！

そうだよな！　オレの理性！！

何を、言ってやがる？　キスなんてするんだぜ！？　もう、決定じゃねーか！！

何を言うか！？　本能！？

うっ……！

ウソだろ！　負けるなよ理性！！

所詮、弱肉強食の世界だぞ！　強き者こそ、正義！！　強い者が弱い者を支配するべきなのだ！

だってよ！　オレ！

何気に肯定してんじゃねぇよ！！！　ええい！　本能よ！　攻めが足りない……。じゃない！　本能は出て行け！！！　理性もしっかりしろよ！！

「はぁ、はぁ…」
「？」
「大丈夫だから」

オレは、彼女を制止する。理性のＨＰが無いに近いから。

ＨＰが、マイナス１００しかないよ。

０以下かよ！！

「もう一度言うね。デュラハン一族はね、自分を倒した相手を婿（嫁）にする掟があるのよ」
「……じゃあ」
「うん。だね。和也君は、セフィリアの婿になっちゃうね」

（な、なんだろ？　なんか、モヤモヤする……？　ま、なんもないよね♪）

「あ、ほら。キスした」
「あ……」
「馬鹿和也」

「……」

今更だが、彼女は本当に美人だ。細長いスラットした体に足まである長い綺麗な蒼い髪、凹凸の激しい……。ゴホンッ！　綺麗な碧色の目で、整った容姿。満点ってレベルじゃねぇ。

「なぁ。デーモンさんこれで宜しいのでしょうか？」

気まずいんで、この主催者（？）の悪魔に話しかける。

「予想外だたわよ。まさか、特Ｓの首席を倒しちゃうんだから」

「あ……？　ああ……鳥人（ハーピー）さん」

「イヤン♪　名前でよんでよ～」

スミマセン、その名前を知りませんから、悩んでたんですよ。ってか、アナタ。その喋り方は何歳ですか？　古いですよ。

「ハーレスって言ってよ～」

「は、はぁ……」

「いい加減にしておけ」

「ちぇ～。じゃ、またこんどね～♪」

この人は、レナと同じタイプだ。多分、前世は姉妹なのだろう。

「さすが私♪　いい引きぎわだったわ！」

って、最後の方聞こえたもん。

「あの馬鹿……」

「はは……」
「で、ふつつかな事を聞くが、その武術は？　始めて見たんだが」
あぁ。
「じっちゃんの、創作武術ですよ。３歳の頃から母さんと、一緒になって孫をボコボコにしてたんですよ！　ああ！　許せねぇ！！　じっちゃんも、じっちゃんだけどよ！　母さんも母さんだ！！　なんで、実の息子に！！　思い出す切実で血に塗れた４歳の記憶がね……毎回、誕生日になると熊を素手で倒せってなんだよ！？　しかも、５歳で人食い熊だと？　それで、逃げて迷子になってどれほど苦しんだことか！！！　１２になったら、水中でホウジロザメと水中で１対１ってよ！！　しばらくすると、血で他の鮫も寄ってくるし……！！」
なんか、泣きそう……。オレ。
「ふ。それなら、レナは任せられそうだな」
「あ、そうですか？」
ま、こんな壮絶な子供なら、仕方ねぇよな。ぁあ、自然と涙が……。
「うむっ。レナ！　時間になるぞ！」
「えぇーーーーー！！？」
「ワガママ言うな！　帰るぞ！」
腹が減ったから。
「もう少し！」

「早く帰えろうぜ！　風呂に入りたい」

腹が減ったから。

「ううっ…」

「あまり迷惑をかけるな。レナ」

腹が減ったから。

「そうだよ、来月に来ればいいじゃないか」

腹が減ったから。

「わかったよ……」

（（（よし！！））））

こうして、６話……。訂正。長い１日旅行を終えた。

＊＊＊

「……ねぇ」

「なんだ～？」

「結局オチってこうだよね」

「……言うな」

オレ達はただいま、まっ逆さまに落下してる。またもや、空の上に出たのだ。当然、落ちるよね♪

「ねぇ？　痛いかな？」

そんなレベルで済んだら良いな。まぁ、オレは平気でいられるけど。

「痛いじゃ済まないだろ？」
「死？」
「ＹＥＳ」
「あはははははは」
「はっはははははははは」
「「ざっけんなぁぁぁ

ふぅ。これで安心……。じゃねえ！！　アスファルトが！！　地面が！！！

「あぁ！　重力ー！！」

「せ、セーフ……」

顔面スレスレだぜ？　ふむ、お空から縄なしバンジーはもうイヤだな。

「ふぅ、危なかった」

＜トンッ＞

着地。だめだ、立てない……主に、こ、腰が……！！！！

「和也～疲れたよ」

「分かった！　分かったからおんぶスタイルになるな！！　今、腰が抜けてるから！！」

「腰が抜けてる！？」

「その、妄想は止せ！！！」

「ま、いいからＧＯ！」

と、オレの背中に乗っかる馬鹿娘。

「お前なぁ～。オレは、あの敵を相手にしてたんだぞ？」

「ちゃんと、地面に足が着いてるのはダレのお蔭かしら？」

グッ！！

「魅夜に、キスのこと言ってもいい？」

「アナタ様のタクシーにでもなります」

その間、約０．８秒。

「プライドなぁ……」

脅したのは誰だ！？　こっちは左足を痛めたんだぞ！？　捻ったことも、あの鎧に風穴空けたことで足が滅茶痛いんだぞゴラァ！？

わかってますか！？　お嬢さん！！

「さっさとＧＯ！！」

「はいはい！」

「ちゃんと反省してるの？」

「スミマセン魅夜様」

家に着いた瞬間、魅夜に掴まって、延々と説教が朝まで続いた。

結局、オレ達は晩飯が食えなかった。……風呂すら。

備考だが、家に着いたのは午前１時４４分４４秒だった。１時は別に良い……ただ、死死分死死秒と、４が４つで更に死。五つの死を、オレは確認した。

「どーして、さない怒るんだ？」

【15話】危険な香りの1日旅行・その6～VS騎士（後書き）

魅夜「私の出番は、アレだけか！！？」
ちゃんと本編進出したんだから！　落ち着いて！！
将「出番があるだけいいじゃないか」
駿「そうだぞ。ワガママは言うものじゃない」
魅夜「むぅ・・・・・・」
あはは。ちょっと説明させて頂くと、和君の必殺技の四聖拳のことでちょっと。和君は、南から始めましたが実は、何処からでも始める事は出来るんです。和君がやった順番は、南↓東↓北↓西と、来ましたが始まる順番は何処でもいいのです。ただし、時計回りに進むのが条件ですが。最初～3つ目まで普通の技ですが、最後は奥義系の技を使用とします。ってな感じですね。
魅夜「どうでも良いことを」
駿「次回にオレ出る！？」
うん。メインで。
駿「よし！！」
将「次回・如月駿をヤろう」
駿「・・・・・・・・・はっ？」
じゃ、次回ね～♪
駿「ちょおおおおおおおおおおおおと、まてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇい！！！！！」
『んじゃ！』
あ、プロローグを少し修正させていたしましたので、良ければ再度お読み下さい。
駿「んなの、どおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおでも、いいわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

【16話】如月駿をヤろう（前書き）

もうそろそろ、期末テストの時期です。
中学2年の冬・・・・受験シーズンに1歩足を踏み込みました。
そろそろ、本気で勉強しようと思いますので更新が遅くなるので、
ご了承下さい。

キャラクターの人気投票をやっております
送ってきてください。お願いします

【16話】如月駿をヤろう

皆様は、覚えていらっしゃるでしょうか？
覚えていない人は第6話あたりの、＜なんか、波瀾の前兆＞辺りを再読して下さい。

「いいか？　将……月曜日はイロイロあって不可能だったからな」
「久しぶりの出番だからね、気合いが入ってる」
「久しぶり？　1日しかたってないぞ？」

実際は、7話位前だけど。
本編で言う訳行かないし。

「そういえば、昨日は散々だった見たいだね」
「あぁ、足は捻ったし、腹は減るわぁ～。ってか、腹空いた……アンパンマン来ないかな？　魅夜の説教にさっきまで付き合ってたんだぞ。実に6時間も噛まずにペラペラと……ずっと、正座だったから、更に足が悪くなったよ」
「ご愁傷様♪」
「楽しんでるだろ将」
「うん」

包帯すら巻いてないからなぁ～。歩くのすらキツイんだよ。

「で、」

将が何か話しを振ってきた。「ん？」と、軽く流す。

「何処まで行ったの？」

「ぶっ！！！」

吹いた。おいおい！　なんて誤解を！！　将まで！

「まてまて！！　なんでそうなる！？」

「だって、朝帰りなんでしょ」

イヤ！　そうなんだがな！　そうなんだけど！！！　違うんだよ！！

「それは、勘違いだつーの！！　魅夜だから反論できなかったがなぁ！！！」

「じゃあ、何をしてたの？」

「ケットシーらと戦ってた」

「はっ？」

あ、話しが飛んだかな？

ああ、そう言えばまだ将達にレナの事を教えてなかったな

「ええっとな……＜以下略＞ってな感じなんだよ」

「以下略ってなに？」

「黙れ、メガネ君（1話参照）」

立ち聞きしていたメガネをぶん殴って、天井に当てる。

あ、下半身だけ出たか。

ま、無視していこー

「信じがたいんだが。お前が怪我する位だ、人間じゃないな」

「遠まわしにオレを化け物扱いしてねぇ～か？　将よ」

人間ごときじゃオレには傷1つ付けれないって言いたいのか？
勘違いしないでよな、オレは人間です。
どんな過去があっても、オレは人間です。
もう一度いいます、オレ、雨宮和也は人間です！！
ん？　先程のメガネだと？　ダレのコトだ？

「で、本人の許可無く話していいの？」
「さぁ？」
「プライバシーの侵害はね、重大な犯罪だよ」
「将……オレ等にとって犯罪って今更じゃねぇの？」
「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」

顔を見合わせる。考えは一緒だろう

「だね」
「だな」

犯罪なんて、器物損害罪やら、公務執行妨害やら、いっぱいやったからな♪
ってか、拳銃で狙われたコトもあったっけ？
ま、オレを狙ったヤツは現在精神が壊れてるって聞いたけど？

「あんた等ねぇ～」
「お、朝練お疲れさま」
「だまれ、朝帰り」

酷っ。　疑いが晴れてねぇし。

「魅夜……レナの正体やらオレの怪我やら朝帰りになった理由も話

したのに！！」
「全部、アンタが悪いのよ！！」
「なんで！？」

魅夜の怒りの原因がわからねぇ、なんで、あんなに？

「でも、和也？　レナはどうしてんの？　見当たらないけど？」
「部活の見学だってよ。今日はバスケ部と、弓道部だけだからバスケ部も見てるんだろ」
「バスケねぇ～。たしか、５月の球技大会って、バスケだったよね」
「ったく、５月になんでこんな……」

バスケはキライじゃない、だけど５月なんて半端な時期になんでこんな身体を動かすのかだ。
あ、そうそう。聖涼の学校行事って意外と面白いんだぜ？
メンドいから作者ヨロシクな。
さ：めんどいから、バスケん時に
おい、コラ

「バスケで思い出したんだが、最近駿の周りにバスケ部の奴らいるよな」
「ん？　ああ、朝帰りは知らないのね」
「魅夜。そのあだ名っぽいの止めてくれ」

そんなに、心配してたんならまだしも、更には人を叩くんだぞ、痛めた足を！？
ったく、泣きっ面蹴ったりってこれだよな。
＜踏んだり蹴ったり。または、泣きっ面に蜂の間違いです＞
……ニホンゴムツカシーデース
さ：こらこら、「ツ」じゃなくて「ズ」しかも、片言だけど日本語

だろぉが
ちぃ。Ｉ　ｃａｎ　ｎｏ　ｓｐｅａｋ　Ｊａｐａｎｅｓｅ　ｎｏｗ
さ‥……勝手にせぇぃ。

「あらゴメンなさい＜一石二鳥の性食者＞さん」
「そんなに、オレを虐めて楽しいのか？」
「この上ない快感よ」

心が折れそう……。
オレのガラスのハートになんてコトを！

「駿はね、バスケ部からスカウトを受けてるんだよ」

魅夜に説いても答えない回答に、将が変わりに答えた。

「はぁ？　なんでアイツが」
「簡単に言うと背が高いからね。ってか、駿はソレ以外取り柄はないでしょ？」
「まぁ、確かに背が高ければ有利だよな」

しっかし、如月は部活とかタダルイ物嫌いだからな……ココでまた、才能が潰れたか……。

「ちぃーす」

お、噂をすればなんとやらかな♪
遅刻スレスレに駿が教室に入って来た。

「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

三者共に黙る。　辺りには不自然な空気が生じた。

「な、なんだよ？　将に和也？　それに、魅夜まで？」

「「な～んも♪」」

「！！ッ　まさかお前等……！！！」

ちぃっ！　バレたか！？

くそ！　計画変更だ！！

「……腹でも壊してトイレに行きたいのに恥ずかしくて行けないという、恐ろしい状況なのか！！！？　そうなんだろ！！？」

「馬鹿かキサマはぁ！！！」

オレは大きな声でリバーブロウを食らわせた。

恐ろしくもなんともねえぇよ！

たしかに、少し気まずいがよ！

「グゥ！！　ま、待て！？　馬鹿とはなんだ！？　馬と鹿でなんで馬鹿なんだ！！？」

「まず、そこか！！？」

またしても、如月にツッコミを入れる。

しかも、あんまりタイしたダメージじゃないみたいだ。

「馬と鹿の区別がつけれないから、略して馬鹿？」

将、それはぜってぇー違うぞ。

「馬も鹿も単純だからそれと同じやつの総称が馬鹿？」

魅夜……鹿って賢い生き物だぞ☆
ってか、将の方が正解に近いんじゃ？
でも、全部ちげぇーよ、テメー等。

「じゃあなんだよ？」

やっとそこか？
てか、心読んだろ如月

「さぁーな」

っと、テキトーに答える

「？　ヘンなヤツ」

お前がな。
こうして、オレ等の計画は実行に移った。

「昇龍拳！」
「グハァァァア！！　イキナリかい！！？」

1撃K．Oだぜ！

「和也！　SHR（ショートホームルーム）の終わって速攻でヤルのはリスクが高すぎる！！」

「普通の人間にはオレの攻撃は見えない！」

自分にどんな早さだ！？　と、ツッコみたい。
礼の後、如月の懐まで、行くのに１秒。
昇龍拳の体制にはいるまで０．３秒。
昇龍拳が、如月の肉を抉(えぐ)るのに０．１秒。
合計、１．４秒。
そして、もとの位置に戻るのに０．６秒。
２秒クッキング完成だ。
皆の目からはイキナリ如月が血を吐いたぐらいにしかかんじないであろう。

「大丈夫か！？　如月？」（棒読みｂｙオレ）
「大変だ！　保健室につれてこー」（棒読みｂｙ将）
「あ！　私も行くぅ～」（棒読みｂｙ魅夜）
「ほら！　レナも来いよ」
「へっ？」
「ほら、早く！」

魅夜がレナを急(せ)かす。

「あ、うぅん」

と、だけレナは答えてオレ達に着いて来る。
オレらは、如月を保健室に連れて行くわけも無く『アソコ』に運んでいった。

「志穂さーん？　いますか？」

カラン。と、小切り良い音が店内に響く。

「ん？　その声は和也君かなぁ～？」

と、ひょっこり顔を出す栗色のショートのそんなに背は高くない＜憎き＞女性。

「ダレ？」

と、レナが聞いてきた。

「あぁ、彼女は吉村志穂（よしむらしほ）さんだ。この街1番の腕のたつ美容師だよ」

「そこらのアイドルのメイクさんより腕はいいし安いんだよ」

「ウチも御用達だよ？　馬鹿よりは自信があるわ」

「馬鹿でわるかったな」

聞こえない程度に呟く。

こいつ、Sだ、絶対に。

しかも、言葉で攻めるタイプの・・・。

「あはははは♪　相変わらずね君等♪」

「志穂さんも、相変わらずなんで笑うのかわからない人ですね」

「酷い☆　あんなに子供の時からあんなに面倒をみてあげたのにぃ☆」

「その言葉のなかにある、『☆』がある人なんか信じられませんよ☆」

「あはははははは」

「あはははははは」

相変わらずですね！　本当に！！

「彼女と和也は親同士が決めた許嫁なのよ」
「へっ？」
「そのクソ解らない性格は変わらねぇな！　『志穂』」
「あなたも、随分と細かいのは変わらないのね♪『和也』」

ガンのぶつけ合い。
アイツが虎ならオレは龍であろう。
それほどの仲だ。

「まぁまぁ。ジャレ合いは止めて本題に入ろうよ」
「わぁったよ」

オレは適当に返事だけ返す。

「何の用かな？」

営業スマイルって便利だな……。
なんか、絶対に裏が有るけど。

「で、和也君♪　後ろの子はどちら様？　ここらじゃ見ない顔だけど？」
「本題からずれてるぞ」

この馬鹿は自分の知りたいことにしか興味ないのかよ。
これだから、馬鹿というものは難儀よの～。

＜シュン！＞（ハサミが空を切る音）

＜ザァン！＞（壁に突き刺さる音）

「・・・・・・・・・」

頬に熱い感触があったので触ってみる。
手に水っぽい何かが振れた。
恐る恐る手を見て見ると。
血が流れていた。

「あっぶねぇーだろうが！！！　なにしやがる！！？」

壁から抜き取り、ヤツに投げ返す。

「ゴメン失礼な事を考えただろうな～と、思ってね☆」

あんにゃろ……あっさり取りやがって！！　しかも、心の中を読みやがった！

「お前は何時から人の心が読めるようになった！！？」
「サトリを開いたのよ」

あっさり答えた。

「スゲーな、おい！！」

「？　？　？？」

レナは相変わらず疑問符を挙げていた。

「いつもこうなのよ。ここに来ると最初は紳士的な態度なんだけど、

何時の間にかこうなるのよ」
「ま、喧嘩するほど仲が良いって言いうんだけどね？　魅夜？」
仲は最高に悪いぜ？　将よ。
「うぐぅ……」
魅夜もなんで動揺するんだか。
「だいたい何時もお前はなぁ！！」
「アンタこそそうじゃない！！！」
メンチの切り合い。
「いい加減にしろ！！　馬鹿和也ぁ！！！」
そして、魅夜の右ストレート改。
オレの意識は虚空に消えた。
「「「「ぶっ！！」」」」

４人が一斉に噴出した。如月を見た瞬間に。
意識を取り戻して数分、ニュー如月が誕生したのだ。

「んっ？　ああぁ？　グハッ！！」

余程、昇龍拳が効いたか？　如月は生死の境をさ迷っていた。
やり過ぎたかな？

「和也！！　何しやがる！！？」

意識取り戻しやがった。
・・・・・・・・・・・仕留めたと思ったのに。
ってか、仕留めた瞬間からこいつの思考が始まりやがった。

「って？　ここは？　【ディラーゼ】？　なんで皆の顔が赤いのだ？」

コイツ、自分の頭の事、気づいてねぇ～！

「か、かがぁ！　プッ！！」
「華袈牙（かかが）？」

なんつー間違え方だ。

「鏡見てみなよ。志穂さんのカット、僕等のおごりだからさ♪」

と、将・・・・・・・・アンタ、鬼だわ。

「マジか！？　・・・・・・・・・・・

「「「「「がぁーはっはっはっ

れば解ると思います。

「・・・・・・・・・・・・・・うそだろぉ～」

バイト先じゃあ大変だろうよ・・・・・・・哀れな。

「２３００円だよ」

「髪染めもあって？」

「うん」

ってことは、４分割で・・・・。

「よし、全員５７５円を出せ」

オレ・・・５７５円

魅夜・・・１０００円から５７５円。４２５円のお釣。

将・・・・５７５円

レナ・・・？？？円

「「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」」

レナ・・・１００円

「「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」」

「てへぇ☆」

魅夜のおつり足しても、５０円たりねぇ！！

和也・・・４７５円

「えっ？　オレから引かれるの！？　あまりが！？　なんで、魅夜から減らないの！！？」

こうして、如月駿改造計画は終了した。

「待てぇぇぇ

【１６話】如月駿をヤろう（後書き）

でも、中間の順位が７０番台だったのでイケルかと・・・・。
元・また、現受験生の皆々様、受験の攻略ほうなどありましたら、評価はそっちのけでお教え下さい。

【17話】出会いと災難と（前書き）

秋ですね・・・・・。
物語では5月になったばかり・・・・・・。
季節感もクソも有りませんね。
中学は期末テストがあと、2週間足らずになりますね・・・・。
冬休みはやりたい話しもあるので更新に追われるでしょうね・・・・・・北海道は長くて良かったです。東京とかでは夏休みが長いみたいですね・・・・・・。
北海道では夏・冬は同じ期間です・・・・・。
すみません、世間話しになりましたね。
では、本編をお楽しみ下さい。

つきましては、キャラクターの人気投票をさせていただいております。
お願いです、手伝ってください

【17話】出会いと災難と

「ねぇ？　和也？」
「またか？　だから、なんでオレがアイツの話をせねばならん？」
「いいじゃないの？」
「魅夜まで……」

ただ今オレは、魅夜と、レナと下校している。
因みに先程までは行き付けの駄菓子屋に寄っていた。
今はねり飴（知ってるかな？）をねってる
※駄菓子の定番（作者論）いろんな種類の味がある水飴を割り箸につけて
箸でグリグリィィ～～～とねって白くなったら食べるという奴
オレはメロン。レナと魅夜はイチゴ味を咥えてる。

そんな中、話題はオレと志穂さんの関係だった……なんて、迷惑な。
関係と言っても好敵手以外はクソ親父が勝手に決めた許嫁くらいだ、
迷惑な事を……。

「話してよ♪　カズッチ」
「勝手なあだ名をつけるな。オレはタマゴ○チのなにかか？」

ってか、古いツッコミだな……。

「よし、話せ」

と、レナが咥えてたねり飴をオレを刺して言う。
キタねェな……

「今度は、命令か？」

調子にのりやがって。
あ、ああぁ……唾液が垂れてるし、吐き気すんぞゴラァ？

「居候先の人になに言ってんだ？　コラァ？」

頬をグイグイ引っ張る。
ねり飴を押し込んだがな、当然

「おっ」

コイツのほッペ以外にものびるぞ。
グゥイー。

「ぷっ」

こうすると、メッチャヘンな顔だな。
グゥイー。
ムギュ～。

「お前、ヘンな顔だな～」
「ふをうひょくまふぉふ（重力魔法）・重力空間（グラビティ・フィールド）」
「グガァァァァァア！！！」

重い！　体が滅茶重い！！！

「スミマセン！　ごめんなさい！！重いです！　話しますから！
お願いです！　これを、解除して下さい！！」

プライド・・・・・・・・・ねぇ・・・・・・・・？
あの時に捨てたよ・・・・・・・そんなの。

「よし♪」
「さすが、レナちゃん」

なんですか？　魅夜さん？　その、包丁は？
ってか、何処から出したんですか！？　貴方は切り裂きジャックですか！？
留置所に行ってください！

「だめだよ♪　逃げられないようにする、脅しの包丁なんて」

何をする気だ！！？
ちょっと、お姉さん？

「待て！　逃げる気はないから！！　お願いせすから、止めてください！！」
「ちぇ。１週間便が出そうで出ない魔法を掛けようと思ったのに」

レナ！！？　なんて恐ろしいことを企んでたんだよ！！？
ってか、オレは包丁を持ってる悪魔に行ったんだぞ？

「なんて、恐ろしいことをしてくれようと、したんだ！　キミは！！！」

考えただけでも恐ろしい。
それって、呪いじゃないの？
魔法じゃないだろ？　呪いなんだろ！？

「じゃあ、話してよね♪」
「お前等は悪魔か？」
「……掛けようか？」
「刺すよ？」

と、レナと魅夜。

「ごめんなさい」

オレ、土下座。
なんで……オレがぁぁ・・・

「ん～。どこから話せばいいんだか？」

とりあえず、家でオレ等はお茶でも啜りながら話す事になった。
勝ってきた駄菓子をテーブルに広げて。
オレはヨッチャンイカを咥えてる。
レナはヨーグルト（懐かしい……）を、定番のちっこいスプーンで掬ってる
魅夜は微笑しながら包丁を研いで……
って、なにいいい

そして、それをスルーしたよ！？
オレもだけど！

でもな～。

「たしか、幼稚園児の時かな？」
「かなってなによ？」
「記憶があいまいなんだよな～……中学以降の記憶しかねぇ」

ちょっと、変かもしれないけど。
ま、無理くり探すか。

「それでも、いいから」
「なんでそんなに聞きたいんだよ・・・」
「同居人に秘密はいけないのよ！」

隠し事くらいいいだろ！？　さすがに、オレの秘密のコレクションを教えるワケには、行かないし。
おっと、幾ら読者様が神でも無理な相談だぜ

「しかたない……」

【雨宮和也　幼稚園時代（多少編集あり）】

もともと、あの美容院はアイツの母親が開いた店だったな・・・。
それで、父さんがアイツの親父と同じ職場だからって開店の日に無料（タダ）でカットしてもらいに行った日だったけな？

「いらしゃい。　厳馬（ゲンチャン）♪」

カランと、綺麗な鈴の音がする。

「よ！　聡（サトッチ）♪」

オレの隣に居るのが、雨宮厳馬（あまみやげんま）である。熊みたいな大きな男だ……。
で、若い奥さん（ま、ウチの母さんも若いが）と、一緒にいるのが、吉村聡（よしむらさとし）さんだ、奥さんは今日、美容院を開くということで、聡さんと同じ職場で同期ってことで、タダでカットしてもらうことになったのだ。
だが、しかし……さっきの会話を聞いていて吐き気がした。

「「大の大人が語尾に『♪』なんてキモっ。ってかイタイ」」

と、ダレかとツッコミが重なった。

「「親にキモいって、お前等・・・」」
「真実だ」

と、オレ。

「父さん、ツッコミに、ツッコミは反則よ☆」

と、謎の娘が。

「和也（号泣）」

うっわ、汚ねぇから鼻水垂らして泣くなよ、馬鹿親父が

「志穂（号泣）」

と、聡さん。

「キモいから泣くな」

「お父さん、しつこいとお母さんに言うからね☆」

「・・・・・・・・・」

聡さんの目が泳いでる・・・・・・・・。

どこの時代も嫁が強いのか・・・・・・・。

娘が強いのか・・・・・・・。

「・・・・・・・・」

「やぁ！　こんにちわ☆」

黙って親父に蹴りをオ入れた瞬間、謎の娘が声をかけてきた

なんだ、コイツは？　初対面にもナレナレしすぎる。馬鹿か・・・・・・。

「馬鹿じゃねーの」

気がつくと、そう口ずさんでいた。

「年上に向かって馬鹿やと？　ガキ？」

関西弁になってますけど。

ってか、離れても3歳だろぉが。蹴ったろか？

魔槍裂破掌食らいたいか？　アホが？

「・・・・・・・・・・」
「こんのガキィ！　シカトか？」
「昇龍拳！」

「グヘェ！！」

と、そこまで話したところで、レナの重力魔法がオレに牙を向いた。

「酷い！　志穂さんに謝って来なさい！！」
「お前・・・・・・ガキの頃の記憶なんてあの女に有るワケないだろ！！」
「そういうのが、失礼なのよ！」

と、魅夜の右付きの指導。
女って・・・・・怖い。
しばらく、説教を受け、なんとか話しを戻した・・・・・高級ケーキを奢ると、いう条件で。
泣いて、いいですか？　ボクは、人生に疲れました♪

「それが、初めての出会いだったな」
「で、でで！？」

と、興奮から醒めないレナ……死神って夜行性なのかな？
何時の間にか時刻は１０時を回っていた。説教に３時間・・・泣きたい。

「ん？　何が聞きたいんだ？　レナは？」
「へっ？」
「もう、アイツとの出会いについて話したぞ？　他に何が聞きたいんだ？」
なんだろ・・・・・・？　検事みたいな感じがする。
「オレはもうすでにレナの望みだった、志穂さんとの出会いについて言いました！！　これ以上、何を追及するんですか！？　出会いについてはもう、話したから言うことはありません！」
「異議あり！　それは、私の発言ではなく魅夜さんの発言ですよ！」
くっ！　馬鹿も馬鹿なりに考えてやがるか。
「待った！　この話しの会話文はあとがきと、コメント以外全て「」です！　魅夜が言った証拠など！！」
「くぅ！　そこをだすなんて・・・・・・ズルイ！　でも、アレは私じゃ！　口調が違います！」
「だから、解らないでしょ！？　口調なんて変えれます！」
「異議あり！　検事！　アレは私が言ったセリフだ！」
と、魅夜が割り込む。
「だから、偽装も出来ると、言ってるんです！」
「「グッ！！」」
よし！　弁護士も被告（レナ）も詰まった！　ここで、勝負だ！！
「法廷では証拠が第一だ！　証拠が全て！客観論など意味が無い！

！」

さぁ！　どうでる？　魅夜！？

「・・・・・・・・和也・・・・・裁判員制度って知ってる？」

「傍聴人が意見を出し合い裁判での判決や刑を決めるって奴だったけ？」

勘違いして欲しくないのは、最終判決をするのは裁判官だ。ただ、判決の参考にするまでの事だ。

「そう・・・・・・・」

なんだ？　背筋に悪寒が・・・・・・・・・。

「ま、さか・・・・・・・・！？　ずるいぞ！」

今の今まで気がつかなかった！　まさか、傍聴人に駿と将と志穂さんに、ヴァン、それから、ラミアちゃんまで居たなんて！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・？？

もう一度、数える。駿で1人。将で2人。志穂さんで3人。ヴァン君だっけ？　で4人。後は、ラミアちゃんで5人・・・・・・・たしか一昨日の鎧ヤロウこと、たしか・・・・セフィリアで6人。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「あ！　ラミアに！　ヴァン！　それから、セフィリアまで☆」

あれ～？　オ持ち帰りした記憶なんてないぞ～？

「・・・・・・・・・・・・・・・」

魅夜は、固まっている・・・・・・・・・そりゃ驚くだろうな、人間2人と、美容師1人、死神2人とヴァンパイア1人、そして、首なし騎士だもんな～・・・・・・・・ってかよ。

「セフィリア（だったけ？）！　鎧姿でなにしとんじゃ！！　貴様等も、何故おる！？」

と、ツッコミを入れる。
すると、静かに3人は紙を取りだして、オレに渡す。

ラミア・デュミナサス
＜不合格＞

ヴァン＝アル・サーザス
＜不合格＞

セフィリア・ナイト＝メイガス
＜不合格＞

「・・・・・・・・・これは？」
「ぎゃーはははははははっはは！！！！！！！」
「「笑うな！　筆記試験が受かって安心しすぎてただけだい！！」」

・・・・・・・馬鹿だろ、それは。
あざ笑うレナを他所にオレは抱き着こうとする、セフィリアと攻防戦を繰り広げていた。
後ろからは、更なる追求をせねばと、魅夜と志穂さんが迫る。
お、恐ろしい！！　なんてことだ！　魅夜に知られては・・・・・・・・・！！
それなら、死んだ方がマシだ！！　・・・・・・・・・・・・・・・殺

されちゃうもん☆
ってか、何故に志穂さんは居るのだ！！？
「くそぉおおおおおおおおおおおおお！！！！！
ヤロォオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」
オレ疾走。
オレの、逃亡は１０分ほどで終止符が討たれた。
試験の馬鹿

【17話】出会いと災難と（後書き）

評価・感想・誤字脱字のお知らせ。よろしくお願いします

【１８話】災厄は続くのだ！（前書き）

人気投票をやっています。６０話目に発表する予定です
手伝ってください

【18話】災厄は続くのだ！

「・・・・・・・・・・・・・・・」
「どういうこと？　和也君♪」

１０分でオレは捕まってしまった。
オレは、ただ今・・・・・・前回見て頂けたらわかりますように・・・・・・・・・。
右を見ると。
目が座ってジィーと、オレから視線を外さない魅夜。
左を見ると。
笑顔だけど、全然笑ってない志穂さん。カット用のハサミをチャキチャキ動かしてる。
後ろを見ると。
楽しそうに行く末を見るレナと、メンドイからその他多数。
議題は・・・・・・雨宮和也の刑。だ・・・・・・・・・。
はははははぁ。すでに、刑の執行決定かよ！！
なに！？　お前の死はすでに決定してるってか！！？

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言の圧力。

「この、ハサミってカット用だけどナイフより切れるんだよ☆」

と、言い。ハサミをオレの首筋に当てる。
なんで、オレが・・・・・・・・・・・！！
ただ、キスされただけだよね！？　されたんだよ！？　オレに原因は無いはずだよね！？

オレは無実！　無罪なんだ！！
しかし・・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

相変わらずジィーとオレを見つめる。

「ははははぁ。言い訳とかって通用しないよ☆　決定事項だ～か～ら♪」

「志穂さん？　あのですね」

薄皮1枚破れる。

「次はこんなのじゃないよ？」

顔がマジだ。殺る気だ。

「みぃ、魅夜さま・・・・・・・・？」

何時の間にか魅夜が携帯でダレかに連絡をいれていた。
背筋に悪寒中の特大な悪寒がイヤな汗と一緒にでる。
まさか・・・・・・・・・！
オレの勘がある事をビンビン伝えてきた。

「よかったわね、和也」

相変わらず無表情で魅夜がオレに何かを告げてくる。

「ユウくんを呼んであげたは、和也が言いたい事があるって伝えたら、飛んで来るって」

「なんてことをしてくれたんだ！！！　キサマは！！！」

オレが勢いよく立ち上がる。

＜ザシュ！＞

「ぎゃぁぁぁ

「ユウくん残念だったね」
「オレは、助かったぞ？　ってか、面白がってるだろ？　キサマ？」

オレは、魅夜を睨む。
それはもぅ・・・・・鬼の形相で。
昨日、最後の最後でレナが説得してくれたから、良かったものの、
もし、あのままだったら・・・・・・。一瞬想像してみた。
オレの身体と魂は別の場所に行くであろう。
想像した、オレが馬鹿だった。

「ははははは♪」
「なに笑ってる？」
「許したわけじゃないよ☆　そこを、勘違いしてもらいたくないなぁ～」

コイツ、カッターなんか持ち出して来やがった。
オレって、不幸な人間・・・・・・・泣きたい・・・・・・・。

「なぁ？」
「なにさ？」
「なんで、オレの看病をしてくれるんだ？」

と、疑問をぶつける。
昨日は昨日でオレに全身打撲の大怪我をあたえるし。
今日も怒ってるしさぁ。
なのに、なんで。オレの看病をしてくれるんだ？
オレは、魅夜に回答を求めようと、魅夜の顔を覗きこむ。

「っ！！」

顔を赤くしていた。
まさか・・・・・・・・・コイツ！
オレに1つの予感が過る。

「お前・・・・・・・」
「な、なによ！」

剣幕を飛ばしてくる、怖っ・・・・・・・・・。

「風邪でも引いたのぉ・・・・・・・・・」

＜ドゴォ！！＞

「お約束のボケをしない！！」

コイツ・・・・・・・。何時の間に金属バットなんて？
ってか？　ボケですって？　オレはイタって真面目な・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？

＜ドゴォ！！＞

本日2発目。
殺人罪になりかけないぞ？　こりゃ。
しかし、2発受けて、脳震盪すらおこさないオレって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？

「あんた、頑丈ね」

「お前こそどこから出したか解らないもので叩かないでくれないか？」

最大限遠周りの嫌味を言う。

「和也って、頭の骨って合金でできてたのね？　知らなかったは？」
「そんなの、重たすぎて礼ができないぜ」
「だね」
「だな」

＜ガァァァァン！！！＞
オレの拳と魅夜のバットがぶつかり合う音

「ちぃ！」

魅夜が一歩後退する。
手にはこん棒をもって。
ついに、鬼と化したか！！　魅夜！！

「よく、防御したわね」
「何年お前と一緒に居ると思ってる？」

布団から出て構える。もちろん、臨時戦闘態勢の。

「まだ、１５年」
「けっ！　『まだ』か」

コイツとの腐れ縁はまだまだか。
そうだよな……まだ、か。

「？　ど、どうしたの？　和也？」
「……なんでもない」
コイツらに・・・・・・・・・心配かけるワケにはいかない・・・・・・・。
「・・・・・・・・・・・・なんでもない」
吐き捨てるように、呟く。
・・・・・・迷惑になるだけだからな。皆の・・・・・・・・・。
「兎に角、休んだ方がいいよ？　和也？」
「悪い・・・・・・・」
そう言い、オレはまた布団に横になる。
アイツの顔が凄く心配そうな顔になってる。
・・・・・・・しまったな、怪しがってる。
つくづく後悔する。
「それじゃ・・・・・・・・・なんかあったら読んでよね。私・・・・・下に居るからさ」
「ああ・・・・・わかった」
今日という日をつくづく後悔した。

【18話】災厄は続くのだ！（後書き）

ナインッ！　読んでくださるとありがたいです。
評価・ご感想などなどありましたら送ってください！！

【１９話】事故と出会いと？（前書き）

６０話目にね　人気発表をね　やります。なにとぞ、手伝ってください

【19話】事故と出会いと？

人生とはつくづくオレを敵に回したいらしい。
もちろん人生なんて大きな物を敵に回す気は無い。
大きすぎる。
実際にそんな戦いは出来ない。あったとしても白旗を挙げるさ。
なぜ、そう考えるかって？
オレってヤツは不幸な立ち回りなヤツなんだ・・・・・・・・・。
全ては・・・・・・・・・。

「きゃぁはははははははははははははは！！！」
「ウザイから黙らんか！！」

コイツ等のせいで。

「こら、レナ。やっぱり怒られたでしょ」
「なによ～？　和也の家＝私の物。全てがそれよ」
「昇竜拳！！」
「なんでぇ～！？」

オレの昇龍拳はリ○ウの１万倍くらい強力だぞ。
ってか、普通の人間だったら存在すら消えてしまうほどの・・・・・・。

「どんだけですか！！？」

と、レナのほっぺを抓りながらツッコミを入れてくれるレナの相方のラミアちゃん。
レナの話しでは心を読めるらしい。

うん。便利な能力だ。

「あ、いや。冗談だよ」

リュ○の1万倍くらいの威力以外。

如月専用だけど、馬鹿（レナ）にも実用化しよう。

「あ、和也くん朝ご飯できました」

と、貧血気味の童顔少年リビングから出て来る。

「ん？　別にいいのに」

「ははは。居候してる身だから落ち着いてられ無くてね。迷惑だったかな？」

と、首をかしげる。

可愛いじゃねぇーかよ！！　ヤローのくせいに！！

そんな、奥様方の心を掴みそうな少年はヴァン君。レナや、ラミアちゃんとは違い、ヴァンパイアの血統に入る。

「迷惑じゃねーがよ。居候先の主人として迷惑をかけるわけには・・・・・・」

プライドもあるし。

「そうだよヴァン？　ダラダラしようよ」

「お前はだらだらしすぎなんだよ！　昇竜拳！」

「またかぁぁぁぁぁあ！！！」

仕留めたと思ったんだがな。

改良の必要あり・・・・・・・か。

「改良しなくても十分なのでは・・・・・・・・・・？」
「いいや違うぞ。必殺技とは必ず相手を殺す技と書くのだぞ。ものの数分で回復するしさ。改良が必要なのだ。実験体の如月も最近生きがいいからな、神必殺技でも・・・・・・」
「『新』ではなくて『神』ですか・・・・・・・・・」

そっちの方が強そうだから。
新しいより、神の方が強そうでしょ？　読者様もそう思わないかな？

「ま、とにかくサンキューなヴァン君」

オレは皿に載せられた卵焼きを掴む。

「うん。美味い」

と、笑顔で返す。

「良かったぁ～・・・・・・・・・」
「ほなら、私も・・・・・いっただきまーーーーす！！」
「灼熱昇龍拳！」

灼熱波動拳＋昇龍拳。

「なんでぇぇぇぇぇぇぇ！！？」

科学の発展の為に犠牲はつき物なんですよ。
もちろん、レナに詫びる気は無い。
ただ・・・・・プライドが・・・・・・・・・・ねぇ？

「疑問系にしてもらっても困ります」
「だな」

食事が済み、学校へ向かおうと家をでて、相棒（チャリ）の音速8号（なんつー名前だ）に跨る。
そして、後ろにレナ、その後ろにラミアちゃん、そのまた後ろにヴァン君、そのまた先の後ろにセフィリアが乗る。
・・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・。

「GO！GO！」
「テメー等！！　下りろヤゴラァ！！！」

ママチャリに5人乗れるかい！！　ってか、何時の間にセフィリアは現れた！！？

「なんでよ～？」
「いや！　さすがに無理があるだろ！！　せめて2人にしろや！！」
「和也なら5人乗りでも出来そうだよ？」
「それじゃあ、オレは神にでもなれるぞ？」

ってか、重たいからダレか落ちるよ。コーナーで。
まずそんな神業はオレは無理だ。

「大丈夫だよ」
「なんで！！？」
「和也だから」

「なんか、永久ループの予感だよ!?　これぇ!!?」

いくら、あの全身打撲を1日で直したからって。無理がある!

「あ、あの～」

「だから、和也ならできるの!!」

「無理!　物理的に無理!!」

レナとオレは同じ口論を数10分まるまる使ってた。

「あの・・・・・・歩けば?」

と、控えめにラミアちゃん。

「「めんどくさい!!」」

綺麗にレナと重なった。

睨み合う。

後で聞いた話しでは背後に龍と、虎のバックがあったみたいだ。

そんな事は置いといて。

「和也君?」

ヴァン君が話しかけてきたので、反応する。

馬鹿は無視して。

「あの・・・・・8時20分過ぎたんだけど?」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」
「「「なにいいい

目に入ったのは顔から血をだして惚けてるレナだった。
チェーンがぶつかったのか!?
ギリギリ近くに居たので、捕まえる。
しかし、間が悪かった。疾風でオレは体制を崩した。

「くぅ!」

レナをラミアちゃんの方に投げる。
「良かった」キャッチしてくれた・・・・・・。

「!!」
「和也さん!!」

ラミアちゃんが叫ぶ。
オレも気がついていた事だ・・・・・・オレの下は一種の崖になってた。

「学校に行ってろ!」

それが最後の言葉になっただろうか?

「遅刻だよ〜!!」

こちらの女性も全力で自転車で駆けていた。

「学校にいってろ!」

自分の真上でそんな絶叫が聞こえた。

「ん？」

見上げた瞬間。

一人の男性が舞い降りた。着地に失敗して私と頭をぶつけたけど。

もちろん、体制を崩し私は倒れる。

私の意識は遠のった。

私の人生って、こんなので終るの？　まだ、恋すらしてないのに？

イヤだな・・・・・・・・。

意識は完全に遠くなった。

「ど、どうしよ！！？」

「どうするもこうするも・・・・・・・・・・」

「・・・・学校に行く」

「セフィリア！」

「・・・・・・それが、和也様の望みだから」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「わかった」

「ヴァン！！」

「それが正しいんだよ・・・・・・多分」

「・・・・・・・わかったはよ」

「・・・・・・・魅夜さんに、連絡を入れておくから、放課後探すべき。将さんや、駿さんも手伝ってくれる筈だから。多分、和也様はレナを保健室に連れてって欲しい筈だから」

「「……わかった」」

3人は急いでレナを担ぎ学校へと向かった。

【２０話】記憶と作戦と？（前書き）

好きなキャラクターをドシドシ送ってください。
迷える子羊を導くとおもってなにとぞ・・・。

【２０話】記憶と作戦と？

「父さん！！　母さん！！　鈴南（れいな）！！」

少年が絶叫する。
少年の目に広がるのは『交通事故』の光景だった。
足に怪我でもしたか立てない。良く見ると足の太腿（ふともも）から出血をしていた。
這いつく張り、前へ進もうとする。

「くっ！」

前へ・・・・前へ。
どれくらい進んだのだろう？　解ることは確実にアソコから前に進めたはずだ。
徐々に徐々に『事故現場』に進もうとする。
しかし、意識が朦朧としてきた。
手に力が入らなくなった。
意識が薄れて行く
駄目だ、あの車には……父さんと、母さんが……妹が、乗って・・・・・・・。
意識が無くなりかける。少年は意地で腕を進めた。

「――――ごめんなさい」

ダ・・・・・・レ？
顔を上げて見ようと試みるが、意識が朦朧（もうろう）して良く見えなかった。
しかし、女性だという事がわかった。

「――仕事・・・・・・だから・・・・・・」

女性が泣き崩れた。

なに？　なにがあったの？

「――あっ！」

女性がこちらに近づいた。

助かった・・・・・・そう、感じる。

しかし女性は「ごめんなさい」と、しか口を開かなかった。

「――『鈴南』だけで、本当にごめんね」

その女性は・・・・・・少年の『母』だった。

「かぁ・・・・・・さん？」

視界に入るのは最後に見た母の涙を流してる顔だった。鼻水も出し、目を赤く腫らせた。あんなに強い母の泣き顔だった。

「さよなら・・・・・・『和也』」

痛みが一瞬にして失せた。

「かぁさん・・・・・・？　鈴南？」

そして、雨宮和也は深い眠りについた。深い闇へと落ちた記憶と一緒に……。

「っ！！！！」

勢い良く布団から出る！

なんだ？　あの事故は？　レナが来てからか？　『あの夢』をまた見るようになったのは？

あの事故はいったい？

ズキッ！　っと、頭痛が頭を割るかのように襲いかかる。

まるで、バックドロップを鋼鉄の床で魅夜にやられ更には・・・・・・

＜以下略＞

んで、最後に腹部にラリアットされ＜以下略！＞

最後はそんなのじゃなく・・・・＜以下略！！＞

そして、とどめに＜以・下・略だ～～～～～～！！！！＞

煩いぞ作者よ。

『キミには以下略って日本語解りますか！？』

当たり前だ。そんなに馬鹿じゃない。

『なら省略しなよ！』

キサマの文章力がないからオレがだなぁ～。

『R指定だから』

・・・・・・・・・そないですか。

しかし、本当に痛いなぁ～・・・・・・？

なにがあったんだ？　記憶を呼び起こそうと考え込む

「！　まさか！　魅夜が大事にとっておいたプリンを勝手にたべて事がバレて、柴原家の暗殺者が！！」

いや。待て。ヤツの親は政治家だ、ありえんな。

「なら、アイツ自信が出向いてオレを崖から突き落として？」

？　崖・・・・・・・？

なにかが引っかかった。

崖ねぇ～？

『崖　転落』で脳内検索する。

３件見つけた

どれどれ～。

○月×日・おじいちゃんと、おかあさんに崖から落とされました・・・

途中で見るのを止めた。封印した忌々しい記憶だ。

○月△日・１日掛けて這い出たのもつかの間、魅夜がイキナリアタックしてきてまた昇る羽目に・・・

途中で見る気が失せた。オレが捻くれた１番の元凶だからだ。

・・・・・このキーワードにはイヤな思いでしかないみたいだ。

確信した。

次が深い闇に消えた記憶のデータとも知らずに。

そんなことはさて置き・・・・・ここ何処デスカ？

見渡せば知らぬ家。見知らぬ天井。見知らぬ美人？

はて？

『美人』のキーワードで調べると・・・・・・

□月★日・黒ローブの娘と出会う。金髪の可愛い子だった。遅刻してよかった☆

・・・・・・・そんなことは無いよ、オレ・・・・・・・今、アイツのせいで不幸だもん。

これしか無いぞ？

あ、更新された。

Ｊ月○日・謎の美人と出会う。なんか、周りにおかしな美人しかいないから。この子も・・・・・。

夢を壊すなよオレ・・・・・・・・。
我ながら臍曲げだぜ・・・・・・・・オレ・・・・・・・・。
あ、セフィリアは入ってないか。どうやらオレの本心ではアイツは美女分類されてないみたいだ。
・・・・・・・・急遽もう1件追加！
？月？日・久しぶりに家に帰って来た。んで、魅夜のところに行こうとしたら鈴南が・・・・＜中略＞
んで、再開した。あったらドキッ！と心臓が高鳴りした。「ずいぶんと狂暴娘がここまで可愛くなっ・・・・・」久しぶりに右ストレートを鳩尾に当たった。可愛くなっても狂暴なのは変わらないらしい。
違う！　これじゃあ『狂暴』が、キーワードじゃないか！！
訂正しなければ・・・・・・・・・。
そう考えた瞬間・・・・・『変な所』を見つけた。
鈴南って・・・・・・・・誰だ？
そんな疑問もつかの間頭を使いすぎたか？　頭が最初から痛かったのでより痛くなった。
目の前の景色が歪む。

「だ、大丈夫！！？」

見知らぬ美人がオレに近づく。

「もう少し寝てた方がいいよ？」

と、親切に接してくれる。

「うっ・・・・・・・。何処なんだ？　ココは？」
「私の家」
「あ、そうですよね」

納得したなぁ。
!!!　なにを考えてるんだ!?　ツッコミ処が一応あるじゃないか!!!

「そこを聞いてるんじゃない!!　オレはいったいどうなったんだ!?」
「質問の内容が代わってるんですけど?」
「・・・・・・・・・・・・・」
「黙るのそこで!!?」

事実ですから。

「ってか、誰?　お前?」
「初対面にお前か?」

「はぁ!!?」

駿が絶叫する。

「・・・・・まずは落ち着こうよ、駿」

将は窮めて冷静だった。

「和也・・・・・」

私は椅子を跳ね除け和也が落ちたという場所に向かおうとする。

「魅夜さん！！」

ラミアちゃんが静止した。
焦ったってしかたない事はわかってる。

「・・・・・とりあえず、レナちゃんはどうなの？」
「須川先生が治療してる」
「そう・・・・・・」

将が何かを考え込む。

「将・・・・・ここはオレ等が・・・・・」
「イヤ、あの崖の下は広大な森が生ってる、２人では危険だ」

もっともだ。

「だけど」
「・・・・・・・・・・僕に１つ、考えがある」

さすが３魔神の『知』ね。
そうそう、説明がまだだったと思うから説明しとくね。
雨宮和也。井塔将。如月駿の３人はこの地区最強の猛者だった。
いまは、あんな馬鹿な連中だが。１年前まで、冷酷。無慈悲。鬼神などなど言われてきた。
まずは参魔神の『槍』の和也。
次に、参魔神の『知』の将
最後に参魔神の自称『エース（実際は『脚』）』の駿
それが参魔神である。
参魔神はそれぞれで、オーディンのパーツを指してる
槍はグングニル

知はオーディン
脚はスレイプニル
それぞれの部分を指してる。
和也は元からグングニルと呼ばれてた
将は名前からとってオーディンと付いた
駿も同じでソコからスレイプニルと名付けられた
と、長々（？）説明してる内に私は置いてかれた。着いて行こうドアを開いた瞬間、担任と衝突（クラッシュ）してしまった。
フミｔはウソの早退を許してくれない質の先生だ・・・・・・・。

「ふふふふふ。今度は逃がさないぞ～？　柴原？」
「あ、あぅ・・・・・」

私は脱出する手を封じられる他なかった。

【21話】ピンチ！

「ふむ、話しをまとめると。
1・5人乗りをして爆走するオレ。
2・あまりの非常識さにチェーンはぶち切れる。
3・空を舞いレナを助けたものの自分の落下点を失い落下。
4・そいで、遅刻しそうで爆走してる少女に激突
5・先に気がついた少女がオレを少女の自宅へ運ぶ
6・ベットインさせられる・・・・・
「待たんか！！」

少女がオレの改装を止める

「なんだよ？」
「少女いうな。私は阿野名（あのめい）よ！それに、そこじゃない！　ベットインってなに！！」

ふむ、1度に2個ツッコミを入れるとはさすがだな。

「ってか、本当に私のこと知らないの？」
「知らん」
「ハッキリ言うなぁ・・・・キミ」

見たことさる人でも知り合いでもなければ１０秒で忘れれる自信があるから。

「だったらさ。入学式で見た記憶は？」
「あるワケないでしょ。サボってましたからね」

レナのせいでね。うんうん、懐かしいね～３週間前のことだけど。

「その制服、聖涼だよね？　ネクタイの色が藍色だから１年生だよね？」
「そっちは黒色・・・・・３年生？」

ウチの学校はネクタイで学年を表してる。
最上級生から。黒色
２年生。　朱色
１年生。　藍色
と、なってる。

「だから、オレはキミを知らない」
「もういいわ・・・・」

もう半ば諦めた状態で阿野が言う。

「阿野」
「呼び捨てか！」
「なんの途中だったっけ？」
「えっ？」

話しが脱線しすぎたせいでわからなくなった。
うんわれながらナイス脱線だ。

脱線にナイスもクソもねぇけど。

「たしかぁ・・・・・経緯を纏めてなかったけ？」

「そうそう。

7・オレが意識を取り戻す。

8・阿野に出会う。

9・ベットイン」

「だからなんでそうなる！！」

「お茶目じゃないか」

「お茶目もクソもあるか！！」

ジョーダンが通じないなぁ。

×ジョーダン　　○ジョウダン

！！　しまった！　間違えた！　サッカー選手じゃねーか！！

「ベットインしない？」

「既成事実作る気か？」

「冗談じゃない」

「アンタが拒否してんじゃないの！？」

意外としぶとくツッコミをしてくれるじゃないか。

魅夜なら脱落してただろうな。

「ツッコミしぶといな」

「ツッコミ要らないのなら！？」

「ツッコミが無いと寂しいな」
「どっちよ！！」

本当にしぶといなぁ。

「ん？」

足音が聞こえる？　なんだ？　１つや２つなんかじゃない。
大勢だな？
距離は２・３００ｍぐらいだな。

ん？　車の気配もある。
リムジン？　外車の燃費が悪い車の音もだ。

「なぁ」
「上級生にタメ口か？」
「人が沢山近づいてるぞ」
「！」

阿野は窓へ向かい何かを確認する。

「まさか、何時もなら学校に行ってる時間なのに！」

面倒事はゴメンだよ？　違うよね？

布団から飛び出し窓を見る。
スーツを着込んだ男達がズカズカ近づいてきた。
おいおい・・・まじかよ。

「うん。そう、よろしくね」

用件も言い終わり、ケータイを閉じる。

「どこに電話してたんだよ？　将」

駿が何処に電話をしたのか聞いてきた。

どうしようかな？　言ったら言ったで面白そうだけど。

後で驚く顔も見たいしなぁ～？

「う～ん。お得意さんだよ。ウチの寿司屋の♪」

「そんなにビックリしますか？」

ラミアちゃんが聞いてくる。

たしか人の心が読めるんだったな・・・・・。

便利なんだか不便なんだか・・・。

「うん。そうだろうね」

「性質（たち）が悪いお方で」

「セフィリアさんも♪」

僕は笑顔でそう答える。

「駿」

僕は駿に話しかける。

「後ろのハートマーク、似合ってるよ☆」

「うるせぃ！！」

談笑しながら僕達は、カズが落ちた場所に足を進めた。

「この広大な土地を売っちゃえば済む話しでしょ！」

「売りません！」

「お宅ぅ～？　わかってます？」

「わかっています！」

わかります？　あいつ等借金取りです。はい、見事に面倒事に巻き込まれました。

「お宅も可愛そうですねぇ～？　親が借金なんか押し付けちゃって」

「でもよ！　借りたものは返す？　それも教えてくれなかったの？　お前の親は？」

「くっ！」

どうやら経緯をまとめると。

阿野の親が多額の借金を作ってしまい、阿野の叔父が保証人にされてしまったそうだ。

んで、この借金取りが叔父の家に金を徴収しに来たと。

そんでもって押さなかった阿野を叔父の家に置いて行き。消えてしまったと。夜逃げ・・・・か。

そいで、叔父がガンで亡くなり阿野が借金を背負ったと・・・。

「お金は必ず作ります！」

「そうやって返さない奴はたくさんいんじゃよ！！」

「親もあれじゃぁ娘もこれか」
「！！」

＜パァン！！＞

阿野が借金取りＡの頬を叩いた。
おいおい！　やべーよ！！

「てめぇ！！」

＜バァゴォ！＞

「阿野！！」

オレは殴られた阿野に近づく。
頬が赤く腫れてる。
頭に血が登ってきた。

「なんじゃキサマ？」
「黙れグラサン！」

借金取りＡに、ボディーブロゥを１発与える。
借金取りＡは壁に強打する。

「言い過ぎだ」
「なんだテメー！！」

借金取りＢが殴りかかってくるが、綺麗に避ける。
そして、「昇龍拳！」を１撃。

「誤れ」
「ざっけんな！」

まだ、実力の差が分からないのか？
四方からの攻撃を回避して回し蹴りで対処する。

「阿野は悪くない」
「ほぅ、小童。いっちょまえの事を抜かすな」
「！」

このジジィ！　何時の間にオレの後ろを・・・・？
カチッ。と、冷たい感触が首筋に当たる。

「少しは武術を心得てるようだな」

イヤな汗が噴出す。

「拳銃（チャカ）か・・・」

忌々しそうにそう、オレは呟く。

【２２話】結局はいつも通りに☆（前書き）

明日期末テストなのに小説を更新する作者です。

３年生になってこれはマジヤバイんじゃ？

ご自分が好きなキャラクターを送ってください

【２２話】結局はいつも通りに☆

辺りに静けさだけが残る。

「雨宮君！！」

阿野が叫ぶ。
オレが１番叫びたいんだけど？

「・・・・・」
「ここからは、大人の世界や」

オレは拳銃（チャカ）の持ち主の方を見る。

８０過ぎのヨボヨボのジジィだった。
だが、ただ者じゃない。
オレの後ろを突くし、しかも・・・・・付け入る隙が無い！

気がついたら手から凄い量の汗が噴出していた。

「・・・・大人ねぇ？　それじゃ、阿野は関係ないな。まだ、成人じゃない」
「その笑顔はどこから出るんじゃ？　お前サンには余裕がなかろぅ？」
「余裕が無い時こそ笑顔を大切にしろ。オレの独論だよ」

今作ったね。
さて、真理戦の開始だ。

「ほぅ、ガキにしては対したものやな」
「ガキじゃねぇ。雨宮和也だ」
「むっ？　雨宮和也・・・・？」

なんだ？　コイツ？　オレのこと・・・・知ってる!?
面識はないし・・・？

「あら？　有名なんだなオレって」
「『魔槍（グングニール）』か・・・たしか、３人組になる前の２つ名だったな」
「随分とご存知で」

オレが如月と将に出会う前は、オレは１人で荒れていた頃の２つ名だ。
自分でも懐かしいと、感じる。

「ウチの若いもんがお世話になったからの～」
「あの頃は見境無く荒れてましたから。覚えてませんよ」
「かっかっかっかっか!!　随分と図太い神経をしとるの～？」
「朴念仁ってよく言われてますよ」

昔はよく魅夜に言われたな～。
懐かしいねぇ～。これでも勘は良いのに。

「お主、状況はわかっておるのぉ～？」
「オレがヘタな事をしたら『パ～ン』ですよ？　それ以外になにか？」
「それで、随分と大きくでたの～」
「それが、オレです」

あえて笑顔で答える。

そう、笑うカドに福来たるってね。
だから、本心は出すな！！

「・・・・・・・」
「雨宮君？」
「大丈夫ですよ。勝機はあります！」
「勝機？　面白いのぉ～小童。　その、勝機・・・手にしてみぃ」

カチャっと、音がする。
・・・・・・引くな引いたら・・・・終りだ！
指がトリガーに触れる。

こんな時だからこそ。

特上の笑顔を見せるんだよ。

「雨宮流無差別格闘術　速戦拳　閃雷！！」

その拳は閃く雷如し。

その拳は瞬きする間すら与えず。光の速さに同じ。

そして、万物より速し。

「ぬぐぅ！」
「おやっさん！！」

取巻き達がジジィに近づく。

「急所は外したよ☆」

これ、槍の如くってね♪

「全員相手になるけど？」
「んだぁと！！」

取巻きXが刀（ドス）を取り出すが。

「雨宮流無差別格闘術　手刀拳　斬刀」

刀を手刀で切り裂く。
取巻きの顔が青くなる。
オレは満面の笑みを浮かべる。悪魔のように。

「そこまでや。ガキ」
「な～んだ。気がついたの？」

オレの顔は凍りつく。

「気づいておろぅ？　小童？」
「ちぇ。　手加減しないでくれよ。アンタならカウンターできたでしょ？」
「かっかっかっかっか！！　ウチの若いもんとはエライ違いよ」

さてと、どうするかな～？

「小さい時から大変な目に会いましたからね。そりゃ、１般人じゃ到底できない・・・・ね」
「良い目をしとるの～。気に入ったわい」
「？」

「卒業したらウチの組に来るがええ。幹部の席を空けとくけん。盃を交わすのが今から楽しみやの～」

？　うそ？

「かっかっかっかっか！！　帰るぞ！」

「は、はい！！」

ジジィが他の取巻き達を連れて家から出て行く。

高笑いしながら。

久しくおもろいもん見せてもらったわ。

「大丈夫っすか？　おやっさん？」

幹部の1人のヤスがワシの心配をしおってからに。

ワシはまだそんな年や無いで。

「大丈夫や」

「そうっすか」

そうや、マサ坊から頼まれ事あったんやったな。

懐からケータイを取りだし、マサ坊に連絡をとる。

「マサ坊か？」

そんなに大事な友人か？　マサ坊はすぐ出た。

「雨宮君？　大丈夫？」

阿野が心配そうに駆けよって来る。

「・・・就職先が決まったみたいだ」

「・・・そうね♪」

語尾に♪ついてやがる・・・。

楽しんでやがったな！！

「・・・・・・・ウソだろ～」

絶望した。

「！」

ありゃ？　ここは何処かしら？

たしか、自転車で爆走してたら・・・？

あ、チェーンが切れたんだ！

それで・・・？

それから・・・？

ありゃ・・・？

ふにゃ？

あれれれぇ～？

「あら、気がついたようねレナさん」

と、後ろから大人の女性の声が聞こえた。
男の下心を底上げするような、色気のある声・・・。

「むにゃ？　阿修羅先生？」
「須川よ・・・！」

意外。須川先生も顔にシワをだすんだ♪

「なんで私、ココに居るの？」
「あら？　和也君に感謝するのね」

ニッコリ微笑みながら須川先生が私にこれまでの経緯を話してくれた。

「で、オレ等学校さ行かないで良いのかな？」
「あ！　忘れてた！！」

今更だがオレ等は学校へ向かう途中じゃないか！！

鞄をそれぞれ取りに向かう。

たしかベットの上にあったはずだ！！

２階へ上がり布団の近くにある棚の上にある鞄を見つける。

「あった」

鞄を取り、急いで学校へ向かおうと。窓から飛び降り様とする。

が

無理と感じて止める。意気地なしって言ってもけっこう！！

落ちたら痛いじゃん。

階段を駆け下(くだ)る。

玄関前に自分の靴が有る事を確認し、靴を履く。

そして、扉を勢い良く開ける・・・・・・と、

「グヘェ！！」

って、聞こえた。

そんな事は無視して。目の前に人影があった。

そいつは、よく顔を見知ってる友人。

井塔将。と、その一同だった。

「おお！　お出迎えご苦労ご苦労♪」

「ははは。見つかって良かった良かった♪」

将が乗ってくれた。

「良くここがわかったな。オレもわかんないけど」
「僕って顔が利くからさ」
さすが高級江戸前寿司の跡取り息子！
「どんな人材使ったんだよ～？」
オレの質問に対し、後ろのラミアちゃんも、ヴァン君もセフィリアも知りたそうだ。
そして、将は笑顔でこう答えた。
「取巻きのボス」
「「「「・・・

扉が開いた。開けた人物はこの家の家主の・・・。

「阿修羅！？」

「阿野名よ！　阿しか合ってないわよ！！」

うん。ツッコミのキレがいいねぇ～♪

「お、お前等ぁ～～～～～～～～～～。　オレを無視するんじゃねぇ・・・・・・・よ」

また、自然と扉が閉じ様とする。

そこに見えたのは。しつこいけど。

ハゲの後ろ髪。

後ろ髪はピンクでハートマークがある。

身長はオレ等よりデカイ１９０近くある身長・・・・・。

まさか！

「なんだ、如月かよ」

「なんだとはなんだ！！？」

あ～ぁ、家に痕が付いたじゃないか。人の家になんて事を。

「んじゃ、行くか」

オレは皆に声をかける。

『おう！』

オレ等は鬼叉螺戯（ささらぎ）を無視して足を進める。

「漢字が違うと思うんですが？」

と、螺魅阿（ラミア）ちゃんがツッコミを入れてくれた。

「私のまで・・・・」

心の中でラミアちゃんに「ゴメン」と、だけ言う。

「おーーーーい！！　置いてくなぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！！」

後ろで如月が絶叫してたが無視する。

こうしてなんとかオレ等は学校へついたのだった。

当然恒例の・・・・。

「アンタは毎回毎回ぃ私に心配をかけさせてぇぇ！！」

「ゴメンナサイ！！　マジでスミマセン！！」

魅夜に叱られていたのだった。

m（＿＿）m↑和也

「本当にすみませんでしたぁぁぁ

【22話】結局はいつも通りに☆（後書き）

和也「なんでいつも・・・・オレは・・・」
レナ「魅夜っち。怒ってばっかだね」
魅夜「えっ!?　そ、そう?」
レナ「和也落ち込んでるしぃ」
魅夜「言いすぎたかな?」
レナ「地獄の拷問って伝説ができたぐらい。実際は、セフィリアとの件の方が凄かったんだけど・・・」
魅夜「あ、あれは、和也が悪いのよ・・・」
レナ「そう、怒ってばっかだと、嫌われちゃうぞ♪」
魅夜「べ！　別にあ、あんなヤツ・・・」
レナ「最近女性キャラ増えてるよね～」
魅夜「うぐっ！」
レナ「和也に好意もってる人多いし」
魅夜「グッ!!」
レナ「和也・・・取られちゃうかもよ?」
魅夜「ガハァ!!」
レナ「（ニコニコ）」
魅夜「か、和也?」
和也「うん?　どうした?」
魅夜「なにを、落ち込んでたの?」
和也「・・・・・聞いてくれるか?」
魅夜「うん・・・なに?」
和也「・・・・外れたんだ」
魅夜「なにが?」
和也「馬券だ・・・あそこで、豊が!!」
魅夜「高校生が何を買ってるかぁぁぁぁぁぁぁああ!!」
和也「ガハァ!!」

魅夜「ったく！　アンタは本当に・・・・
レナ（ははは・・・無理そうね。
私も負けてらんないな！）
・・・・・・君達は何をやってるんだい？

【２３話】球技大会！　幕開けのメンバー発表！（前書き）

スミマセン、多種多様な野暮用がありまして更新遅れました！！
和也「言い訳だな」
最近、バスケで忙しいんだよ！
魅夜「それはいいんだけど、このテストはなにかしら？」
あっ！！　す、数学の・・・や！　ヤメテクダサイ！
レナ「！！」
ラミア「あんたより数段上よ？」
ヴァン「レナの成績は・・・１４点だったけ？」
和也「だまされるな。その半分だ」
レナ「！！　和也はなんぼよ？」
和也「７８」
レナ「！！」
魅夜「！！」
良くも悪くない・・・。
和也「あん？　黙れ４３点」
言うなぁぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！

【２３話】球技大会！　幕開けのメンバー発表！

「刀と鞘は対になってる物なんじゃよ。カズ坊」

この時のオレにはこの言葉の意味を理解できなっかた。
いや、理解しようともしてなかった。

「刀は鞘を守り。鞘もまた、刀を守ってるもの・・・。お互いがお互いを守る者。守られる物・・・」

話せばクソ長いんだよな、このジジィ・・・。
オレは・・・ただ、『自分の真実』から逃げ様とするだけだった。
信じたくなかったのだろうか？　いや、絶望してたからかもしれない。
オレ自身に・・・深い闇に迷ってたのだ。

そう・・・・・高校生になった今も。

「和也？　起きなさいよ！！」

ジッチャンがよく話していた鞘と刀の話しを思い返してた。
そして、あの日・・・起きた事も・・・。

「あぁ？　起きてるよ・・・・・・で、なんだ？」
「聞いてなかったんかい」

さぞ、呆れたかのように魅夜が言った。
失礼な。　本当の事だけど・・・。

「それは、どうかと・・・？」

後ろの席からラミアちゃんが呟いてきた。
そう、おおかた予測がついてたでしょうがラミアちゃんも、ヴァン君もセフィリアまでも転向してきたのだ。ヴァン君はA組に、んでもってラミアちゃんがオレらの居るB組。残ったセフィリアはというと、C組に分かれた。
まぁ、実はというとこいつ等が来襲して来た次の日に転入してきたのだ。
作者の説明不足を補うオレって・・・エライね☆

「和也！！」
「んだよ、さっきから！？」

ついつい怒鳴ってしまう。
周囲の目が痛い・・・。

「ったく、なんだよ？」
「5月の球技大会のメンバーについてだよ」

と、説明をしてくれる将。
さすが、我が親友♪　助かったぜ。

「だったな」
「和也・・・」

暗いトーンで魅夜が話しかけてきた。

ヤバイ！　そんな直感がひしひしと、伝わり、冷や汗となる。

「み、魅夜さん？　どうしたのでしょうか？」

「アンタってヤツは・・・！！」

ひぃ！　う、後ろに！　後ろに魔王の影がぁ！！？

「そ、そのバックの『者』はいったいなんなんでしょうか？」

「ひ・み・つ★」

「黒いよ！！　星が黒いよ！！」

お、恐ろしい・・・。

だんだんと、魔王が近づいて来てるような・・・？

なんですか？　その＜ゴゴゴォゴォォォォォォォォオオオオ！！！＞って、効果音は！？

恐ろしいお方だこと・・・！！

「ま、待て！　奢るからさ！　明日にでもケーキでも奢るからさ！！」

「・・・・・・・・・不○家の高級ケーキ」

「・・・・・・財布と相談しておく」

「約束よ」

「ちょ！！　財布と相談するからさ！？」

「絶対だからね」

「・・・了解しました（涙）」

生活費が・・・。これで、オレの・・・節約生活が・・・。

涙が止まらないぜぇ・・・。

「相変わらずだね♪」

「将・・・喧嘩売ってるのか？」
「冗談だよ」

居候がただでさえレナ、ラミアちゃん、ヴァン君、セフィリアの４人居るってのに・・・。

恐る恐る財布を確認して見る。
・・・・・・・・・１０５００円？
ジッチャンと、あの馬鹿夫婦の遺産をそろそろ下ろしてこようかな？

「ズルイぞぉ」
「げ！　れ、レナぁ？」

タイミング悪ッ！？
アナタ、タイミング計りましたね！？
絶対に計算済みでしょ？

「ケーキ・・・私も食べたいよぉ！」
「ワガママ言うなよ！！　オレは居候を４人置いてるんだぞ？」
「ズルイ」
「だから！」
「ズルイ」
「・・・・・・」

どうして・・・・・・オレの周りにはこんなワガママな女ばっか・・・。

「あ～。わかったわかった。オレは行かないからレナ、魅夜と行けば・・・！？　な、なんでしょうか？　魅夜様？」

魔王の気を宿した魅夜の視線が刺さる。
地獄の灼熱でも溶かすことのできないほどの冷たい目で・・・。

さて、どうしたらいいんだか。

「「和也！」」

２人の声が重なった。
オレにどうしろと？

「とりあえず落ちつけ！　お前等！！　ＳＨＲ中だぞ？」
「むぅ・・・」
「・・・・・」

つくづく疲れさせられるヤツ等だ・・・。

聖涼は意外と面白い高校だった。
とくに、学年行事などが特におもしろい。

まずは、球技大会が５月。７月。９月。１２月にかけてあることだ。
なにも、校長が球技とかが好きでやってる行事だそうだ。　Ａ～Ｆクラスで争うのだ。
各月の優勝したクラスに１万円～１０円の文化祭のクラス資金に重大な関りがあるのだ。
総合優勝の組にはポケットマネー５０００円をプレゼントというご褒美があるのだ。
そして、実力。期末。中間。で１～１０位上位に入ると。

実力テスト上位１０名が居るクラスに文化祭なだに使う資金１００円支給される。
続いて１学期末テストで実力テストの上位１０名に残った者のクラスに２０００円
同じ条件で中間テスト・・・５０００円の支給。
２学期末・・・１００００円
んで、３学期末には１５０００円と、なってる。

噂では教師陣も給料ＵＰに繋がるらしい。

そんな中５月の球技大会のメンバーが発表された。

リードガード
ＲＧ・・・井塔将
センター
Ｃ・・・如月駿
シューティングガード　ひむろけいすけ
ＳＧ・・・氷室慶介
ポイントガード
ＰＧ・・・作者

「・・・・・・・」
『冗談です！！　冗談だから！ね？ね？』

ＰＧ・・・日下部飛焔　くさかべひえん

反省してねぇ！！

パワーフォワード
ＰＦ・・・雨宮和也

えっ？　オレでしゅか？

オレなんでしゅか！？

「『す』が、『しゅ』になってますよ？」

ラミアちゃんがオレにツッコミを入れてくれた。

そうだ、オレの席を説明しよう。

オレの席は1番窓際の後ろから2番目の席と、好ポイントを手に入れたものの、横には魅夜。前にはレナ。斜め前に将。斜め後ろには桧山桐（ひやまきり）ウザイクラス委員長んで、最後に人の心を読むラミアちゃんとなったのだ。

「現実逃避・・・ですね」

「余計なことをぬかすな」

人の心が普通に読めるって便利な能力はしかたないけどさ、ツッコミが無条件で出るのはどうなのだろうか？

「これは、夢だったんだ。体育の時間、ほとんどサボってたオレが・・・スタメンですって？」

「あ～ぁ。自分の世界にはいちゃった」

「魅夜さん？」

「気にしないで、特技みたいな物だから」

失礼な幼馴染だな！！

「確かに球技は体育の中で好きだよ？」

これといって趣味がなかったから球技とかプロフでぬかした　けどさ・・・。

スミマセン、趣味なんかありません。なかったので、テキトーにと作者に言ったもので・・・・。

「と、言ってますよ」

よ、余計なことを!!　なんで、よりによって魅夜に!

「と、おっしゃってます」

しまった!!　また、オレは余計なことを!!

「お前等・・・話しを聞く気はないのか?」

ナイス!　フミt!!
この絶好のパス・・・得点に決めてやる!

「そうだぞ!　お前等!!」
「お前のことだぞ、雨宮」
「オレのことかぁ!!」

どうやら、オウンゴールだったらしい。

【23話】球技大会！　幕開けのメンバー発表！（後書き）

ポジションの説明をさしてもらいます。
リードガード・チームの司令塔。チームをリードする役割がある。つねに、全体に視野を広げる（特にプレイする逆サイドを注意する）。
シューティングガード・シュートや、ドライブインで相手をかく乱させる。相手を引きつける動作とパス技術が必要。
センター・つねにリバウンドに参加する。ポストプレーや、ゴールしたのシュートの正確性が必要。
パワーフォワード・センタープレイヤーと同じ役割（センターの代役）。攻撃的な攻めの技術が必要。
ポイントガード・パスの正確性。ドリブルの速度。細かい技術が問われる。作者のポジションです。

【２４話】球技大会！　練習は大事だけれど、何故か…？（前書き）

長い題名ですね。
累計アクセス数が２００００突破しました・・・。
（シーン）
寂しいよ！　なんで、誰も出てきてくれないのぉ！？
詩織「・・・・私の出番は？」
！？　七瀬さん？
詩織「速く出番がこないと和也が取られる」
いやぁ、その・・・。
詩織「・・・・・」
そのですね？　バスケが終って魅夜ちゃんのお姉さんの登場がありましてその次にでもと・・・。
詩織「遅い」
１２月後半でしょうけど。その話しを更新するのは。
詩織「・・・・ＫＮＩＧＨＴ，Ｓの更新はどうした？」
！！？　な、内容が納得できなくて何度もやり直しを・・・・。
詩織「ナインッ！　の更新も１週間ほどやってないな」
！！？　そ、それはぁ・・・。
詩織「だから、クズなのだ」
！！！　そ、そんなに言わなくても・・・。
詩織「私を出さないからこうなるのだ」
いいもん、和君と誰か適当にＬＯＶＥにしてやるもん。
詩織「なっ！！？」
いまからでも、執筆してやるぅぅぅぅぅぅぅ！！
詩織「・・・・・反感がたくさん出てボコボコにされるぞ」
・・・・・・あっ。

【２４話】球技大会！　練習は大事だけれど、何故か…？

＜ガァン！＞

放った球はバックボードに弾かれる。

「リバンッ！！」

氷室が如月にリバウンドの指示をする。

「了解ぃ！」

「如月（ピンクマン）なんかに負けるかよ！」

高さでは如月の方が上だが、ジャンプ力では勝ってる！

オレも、タイミングを計ってボールを迎えに行く。

タッチの差でオレはボールをキャッチする。

「カズ！」

後ろから将の声が聞こえる。

オレは、ボールを後ろに居る将にパスする。

「通しませんよ」

日下部か・・・。

特徴は１７０以下のバスケには向かない小さな身長。

ドリブルの技術は長けていて。パスの力はあまりないものの、パス

の正確性は高い・・・。
ディフェンスは基礎がしっかりと出来てるが深読みしてしまう性質がある・・・。
だから、ここは・・・正直に抜かせてもらうよ！

僕は普通に姿勢を低くして日下部の横を通りぬける。

「！　しまっ！！」
「仁志田！」

僕はスリーポイントエリア外に居た仁志田雅紀（にしだまさき）にパスする。
仁志田は長距離主砲のＳＦ（シューティングフォワード）だ。遠くからの方が・・・入るね。

仁志田はパスを受け取りセットにはいる。
仁志田が投げた玉は綺麗に弧を描きゴールポストに綺麗に入った。

「ナイスニッシィー♪」
「こらこら。守備があるんだから。速く戻る戻る」

和也が仁志田に話しかけるが大野が和也を止める。

「速攻！」

氷室が速攻の支持をする。

「和也！　日下部が来たら気をつけてよ」
「作者の仮の名ごときをか？」

「相手を過小評価しないの」

バスケ部の大野がオレに注意をしてきた。

「大丈夫だよ」

「日下部はドリブルの素早さなら部活でも速い方なんだから」

意外だった。確かに小さいからドリブル意外役にたたないだろうがまさかこれほどとは？

「氷室！」

球が如月に渡った。

速攻じゃなかったのか？

大野が如月のマークに入るが、球はすぐに大野がカットする。

「悪いな、大野」

「！」

日下部（アイツ）・・・如月の後ろに！！

そうだ！　小さいから１９０近くある如月の影になってたんだ！

球は日下部がカットして前え突き進む。

逆サイドに居る、将と仁志田は対応できなかった。

「カズ！　志村！」

「くぅ！」

志村はスピード負けし追い切れず。残されたのは、ポストに居る和也のみだ。

「来い！」

ハンドアップし、姿勢を低くする。

「行きますよ」

勢いを止めず日下部は進む。

「甘い！」

オレは球を抉ろうと長いリーチを生かして手を伸ばすが、日下部は消えていた。

否・・・。視野から外れていた。

クロスオーバーかっ！！

※ボールを左右に切り返すこと。

日下部は正反対のところに居た。

そして、日下部はランニングシュート（レイアップ）の体制に入り。ボールを置いてくるかのようにリングへ頭１つほどにまでジャンプする。

＜ガァン！＞

しかし、球はバックボードに弾かれる。

「ナイス！　日下部！！」
「！　如月！？」

気がついた時には如月がボールに触れていた。そして、そのままリングに叩き込む。

「ナイスダンク♪」
「うしぃ！」

日下部と如月はハイタッチをし、すぐに守備位置に戻る。

「やってるやってる♪」
「紅白戦？」

レナと魅夜が入ってきた。
一般生徒が来るってことは8時過ぎか・・・。

オレは2人の所に近づく。

「どうしたんだ？　今は練習中だぜ？」

汗を拭きながら魅夜に問い掛ける。

「いいでしょ？　それとも、正当な理由がないと来たらダメ？」
「昨日高級ケーキを女性2人に奢った財布の持ち主ががんばってるか見に来ただけだよ？　和也？」
「テメー！　人が悲しんでるとこを突くんじゃねぇ！」

オレは失礼な事を言ったレナの頬を抓る。これがまた、面白いぐあいに伸びて面白い。

「そろそろ時間だね。今日は上がろうか」
「あぁ、そうだな」

如月と将が話しあっていた。

「大野に、氷室。ゾーンディフェンスについてなんだけど・・・」
「あぁ、基本の1・2・2型にしてるけど、工夫が必要だな」
「メンバーや状況にもよるからなぁ・・・」

バスケ部のメンバーはディフェンスの意見交流していた。

他のメンバーはそれぞれ汗を拭いて話こんでいた。

『（ニコニコ）』

ほのかに皆がこちらを見て笑っていた。
なんなんだ？　こいつ等は？

「そろそろ時間だし教室さ行っか」
「「うん」」

2人の声が綺麗に重なった。
オレは、鞄を取って魅夜達と教室に向かった。

「なぁ、ピンクマン？」
「ピンクマン言うな」

あ、ピンクマンって如月のことだ・・・・後ろ髪の色がピンクのハートマークだから。

「疲れたな」
「あぁ」

オレ達は大津の日本史をサボって屋上で空を眺めていた。

「そういえば、懐かしいな屋上・・・」
「あぁ・・・。オレとお前が初めて対立した時だよな？　時期的に同じだしさ」

オレの脳内で如月との出会いを再生する。

「けっ。数で勝るからって喧嘩売ってるんじゃねーよ」

辺りにはボロボロの見ず知らずの人間が２０人以上横になっていた。

その頃のオレはまさに不良だった。
喧嘩に明け暮れていた。
少し名を挙げただけで己の力量もしらないヤローが続々と喧嘩を売りに来た。
全て、返り討ちにしてきたが。
『魔槍（グングニール）』いつからか、そう呼ばれるようになっていた。
オレの学校は３つの勢力に分かれていた。

まずは、井塔将を先頭とする学校の３／４を握る軍勢。

次に、如月派残りの０，９／４を絞めてる。

残りの０，１は、オレだ。

１匹狼ってワケだ。

別に、１人が好きってワケじゃない。

他人がオレに寄っては来る・・・でも、オレは１人・・・。

オレが・・・人を避けてるから。

あまり、人とは親しくなりたくないんだ・・・・。

・・・・・・願わくば・・・・これからも。

「ただいま・・・」

オレの声は家に響く。

いつも、出迎えってくれるヤツも居なくなった。

去年・・・・この世を去ったのだから。

「・・・・このクセ・・・直さねぇとな・・・・・」

そう、呟き。オレは晩飯の仕度をするためリビングに向かう。

冷蔵庫から必要な具材だけ取って下拵えをすることにした。

次の日、オレは如月旬だか言うのに呼び出された。
ん？　旬の字が違う？　そんなことは、どうでもいい。

呼び出された場所は放課後の体育館裏・・・・ベタ過ぎだ。
その、如月瞬だかは、馬鹿みたいだ。
ん？　瞬の字が違う？　そんなことは、どうでもいい。

ネタを繰り返してる？　・・・・・そうだな。オレもそんな気がする。

と、まぁ。そんなんだが、オレは屋上で寝ていた。
今は、６時間目の最中か・・・。
しかも、終り頃・・・。

さて、寝るか・・・。
オレは深い眠りにつく。

「雨宮ぁぁぁぁぁ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ぁぁぁぁあああ！！！！！」
「ん？」
外からウザイヤツの声が聞こえる
時計を確認。５時３０分・・・・か。ちょっと寝すぎたかな？

誰だよ？　うぜぇーな・・・。
屋上から外を覗く。

如月俊だかだった。
しつこい？　いいじゃないか。

「臆したか！　そうだ！　この、オレにビビったなぁ！！　雨宮和也ぁぁぁぁああ！！」
「・・・・・・」

1人だけ叫んで・・・コイツは馬鹿か？
近くに落ちてた少し大きめの石を手に取り。投石。

「がはぁ！！」

あ、当たった。

「どこのドイツだぁぁぁぁぁぁああ！！」
「駿！！　屋上だ！！」

仲間も居たのか？

「そこに居たのかぁ！！　雨宮ぁぁああ！！」

あ、走った。
・・・・・メンドくさぁ。

しかし、綺麗に石が当たるとは・・・。
コメディーですから。
そうかぁ・・・。

さてと、近くにある石を集める。
結構集めたところで扉が開かれる。

「とりゃ」

オレ・・・投石

「がはぁ！　痛い痛い痛い痛い痛いイタイイタイ痛い痛い痛いイタイいいいいいいいいいい！！！！」

たたかう
とうせき↑
どうぐ
にげる

かずやのとうせき。
バカは９９９９９９９９９９９９９９９のダメージ

ダメージ大きいなぁ！！？

かずやのとうえき
バカは１のダメージ

あれ？

かずやのとうせき。
バカは１００のダメージ。

うわぁ、普通。

「キサマ・・・何をする！！？」
「わからんのか？」

当然、投石だ。

つづく・・・。

えっ？　こんな微妙なところで今回は終了ですか？

【２４話】球技大会！　練習は大事だけれど、何故か…？（後書き）

他の控え選手（ベンチメンバー）の紹介です。

仁志田雅紀・・・ＳＦ（シューティングフォワード）

大野清志（おおのきよし）・・・ＦＧ（フォワードガード）

志村一（しむらはじめ）・・・ＰＦ（パワーフォワード）

小野寺雅人（おのでらまさと）・・・ＳＧ（シューティングガード）

皇加持宏人（おうかじひろと）・・・ＲＧ（リードガード）

の、以下５名です。

実際は控えは７人なんですが・・・球技大会ですから。など、作者の独論で控えは５人にしました。

ついでに言うと和君達がやってたのは紅白戦です。

メンバーは。

紅・・・如月・・・Ｃ

　日下部・・・ＰＧ

　氷室・・・ＳＧ

　皇加持・・・ＲＧ

　小野寺・・・ＳＧ

白・・・和也・・・ＰＦ

　将・・・ＲＧ

　大野・・・ＦＧ

　仁志田・・・ＳＦ

　志村・・・ＰＦ

ってな、感じです。

【番外編】借りがあるからの前に親友として（前書き）

はい。サブタイトルの名前が思いつかなかったので、読者様が何かしら送っていただけるとありがたいです。
前回を読んでくださると、番外編の内容がわかると思います。

【番外編】借りがあるからの前に親友として

石も無くなったので、2～3回屈伸し、構える。

「こんの、卑怯者がぁ！！　不法投棄だぞ！？」

「不法投棄ってなにか、本当にしっているのか？」

石を投げただけだぞ。

コイツは本物の馬鹿だな・・・。

気を緩めすぎないようにし、如月を馬鹿にする。

しっかし、赤のロンゲってキモイな・・・。坊主にしたら面白いかも？

今度、やってみよう。

すでに和也の頭の中で如月駿・坊主計画は進行されていた。

「魑魅魍魎（ちみもうりょう）！！」

キモロンゲが殴り込む。

「無理に難しい言葉をつかうな」

ワンステップで回避し、キモロンゲの懐に飛び込む。

「昇龍拳！！」

「げっぽ！！」

キモロンゲは、綺麗に弧を描きながら宙に舞う。
そこでオレは追撃の体制に入ろうとする。

「雨宮ぁ！！」

扉が開いて２～３０人ぐらいの生徒がぞろぞろ入ってくる。
多分、如月派の１部であろう。

なんだ？　キモロンゲの仲間か？

開いた扉の方に意識を集中させる。

「！！　トモ！？」

その中にはオレの小学校時代からの親友の朝日智貴がいた。ってか、簀巻きにされてた。
しかも、顔がアザだらけで・・・制服にはジャリなども目立っていた。

「知ってるんだぜ～？　お前が唯一、心を許している智貴（コイツ）のことをな？」

「・・・・・・・・・くっ」

トモには借りがある・・・。コイツらぁ・・・！！

オレは構えを解き。その場に座る。

「けっ！　わかってるじゃん？」

総勢３５人かぁ・・・。さてと、いつまで殴られることやら。

トモの監視に1人・・・。後は、オレ狙いか。
ってか、こいつ等キモロンゲを無視してんだな。そこで、へばってるし。

かれこれ、2時間ほどオレは袋（リンチ）にされていた。
気が済んだか？　ヤツラはズカズカ出て行った。

重たい身体を動かしてトモに近づく。

「悪かったな・・・。トバッチリくらっちまってよ？」

手と足の紐を取って簀巻きを解く。
最後に口についたガムテープを取ろうとするが、オレは困ってしまう。

勢い良くとって楽にさせるか、ゆっくり取っていくかだ。

勢い良く取ると、すぐに楽になるけど痛いんだよね♪

でも、ゆっくり取ると、すぐには楽になんないけど痛みは・・・勢い良く取るよりは痛くないだろうし。

「トモ、勢い良く取るか、ゆっくり取る・・・どっちが良いか？」

と、言うが口を塞がれているトモが喋れるわけもなく、オレはめんどくさいから勢い良く＜ビリィ！！＞

と、取る。

「うっ！！」

「悪い。痛かったよな？」

「大丈夫だよ。和君」

アザだらけで大丈夫には見えないけど、アイツはオレに心配させないタメに笑ってみせる。

トモ・・・。

「すまない。オバサンにはオレからトモのこと・・・」

『あの一件』以来からトモのオバサンから嫌われてるけど・・・。

しかたないか・・・。

「い！　いいよ！　だって、和君の方が・・・・・・」

「良くない！　お前は我慢しすぎなんだよ！！　親にはオレから言うから・・・」

昔からトモは我慢強かった。皆が嫌がる事をおしつけられても何も言わないでやって・・・。

自分の物でも友達に先に読ませて、自分は後でよんだり・・・。

挙げれば限がないほど、トモは良いヤツで、我慢できる奴だった。

だから、パシリとか・・・喧嘩の強いヤツのパシリになったり・・・。

それでも、コイツは不満もなにも言わない・・・。

トモは・・・昔からこうなんだ。

自分より他人を尊重する人間・・・。

「僕のせいで、また・・・和君がぁ」

トモの目から水が溢れてくる。

「トモ！　アレは・・・オレが悪いから。トモの責任じゃねぇよ」

オレはトモの頭に軽くデコピンする。

「！！　和君！」

？　後ろなんか指差してなにを？

【バゴッ！】

「！？」

頭を金属で叩かれたような感じがして視界が歪む。

後ろを振り返るとさっきまで横になっていたキモロンゲが鉄の棒をもっていた。

地面に手をつき。右足で踏み切って回し蹴りの体制になろうとするが、真正面にいる、トモにも被害が及ぶので、緊急停止する。

そして、突き出していた左脚鉄の棒を思いっきり叩いてきた。

「グッ！！　行け。トモ！」

「か・・・。かずくん？　頭・・・・・・」

トモに頭を指摘されたので触れてみると血がついていた。

「大丈夫だ。だから、行け！！」

最後の部分に怒気を込めてそうトモに言う。

「う・・うぅぅ・・・」

「トモ！！」

「僕が・・・またぁ・・・」

「いいから行けぇ！！」

「僕のせいで・・・僕のせいで・・また・・・また、和君が」

ダメだ！　完全に自分の世界に入ってやがる。

そうこうしてる間に第3撃が来るが。狙いはオレではなくてトモ・・・。

「くっ！」

トモに意識を集中して来たためオレはトモと回避することすらできず、トモの盾になる。

背中に激痛が走る。

「！！」

声にもならないほどの痛みが背中に駆ける。

トモを連れて安全地帯まで駆ける。

「大人しくしてろよ」

それだけ、挙動不審になってるトモに言い残し。オレはキモロンゲ

に向かい合う。

「お前には制裁が必要みたいだな！」

確かに、トモには借りがある！　だが……オレはまず！
貸し借りなんか関係なく！　オレの大事な親友なんだ・・・。
借りがあるからの前に！　オレは親友として・・・。

トモを守る！！

テメーには、オレの一撃を決めてやるよ！！

「けっ！　やれるもんならやってみろよ！！」

ダラッとした体制で鉄の棒を構える。
他人から見れば隙だらけに見えるが・・・違う。余計なところにも力まず全てに対して無気力。
ただし、神経を刃のように鋭くしているため、どんなものにも反応ができる。

「雨宮流無差別格闘術奥義　虚無の業　夢槍（ゼ）の滅鱗（ロ）」

雨宮流無差別格闘術基本の型の総結集。そして。今、和也が覚えている中で最大の奥義。

当然、『オレと死神？！』の強さのピラミッドの中盤にいる如月（キモロンゲ）がベスト５に入る和也に実力でも敵わずさらには、奥義クラスの技。

結果は・・・。

如月駿　消滅（デリート）。

「えええええぇ!!?　なんか、過去を変えてない!?　過去の話しなんですけど!?」

訂正――如月駿　溺死?

「なんだよ!?　『溺死?』って!!?　ってかなんで、『?』がついてるの!!?」

これにて――完

「終るな!!?　微妙じゃないかよ!!」

「ってな感じだったよな?」

「和也、軽く人を殺すな」

【番外編】借りがあるからの前に親友として（後書き）

朝日智貴君の詳細は僕が書いている
『ＫＮＩＧＨＴ，Ｓ』
を読んでいただけるとわかると思います。
あと、たまに少し話を飛ばしている読者様が居ますが、飛ばさないで見てください。終わり方が悪いと、言うかキリが悪いと、言うか・・・。終り方が雑なので全話見てください。

このお話はＫＮＩＧＨＴ，Ｓのお話に凄く関係があります

【２５話】球技大会！　最終戦…の１歩手前！　オレと死神の賭け（前書き）

はい、今回は短いです。

キャラクターの人気投票してます。

６０話目に発表会しますのでよろしくお願いします

【２５話】球技大会！　最終戦…の１歩手前！　オレと死神の賭け

さぁて、時はとんで５月２０日となりました。

なぜ、こんなにも飛んだかといいますと作者の予定に合わないとかで没ってしまったとのことです☆

この、クソ作者～！！

そんでもって最後のＡ組との決戦となりました。

女子は１回戦で敗退。最下位決定戦で負けてしまい最下位となってしまいました。

ここは、断固１位を取らないと（オレが）魅夜とレナにボコられる。

？　オレの為じゃないかって？

・・・・・・・・そんな事アリマセ―ン！！

？　口調が可笑しいだって？

・・・・・・・・そんな事アリマセ―ン！！

スミマセン。そんな目で見ないでください。

ゴメンナサイ。自分のためでしゅ・・・。

読者様、ウソをついてすみませんでした。

さて！　そんなことはさておき！

？　反省してねぇ！！？　ですって？

ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！！！　そんな事アリエナイノネー！！

？　口調がメッチャ変だって？

・・・・・・言い返せません。

「さぁて！　始まりましたぁ！！　決勝大会？」

？いらん。

「はじまっちゃったよー。マジで始まっちまうよ」

なんで、残念そうなんだよ！？

ついでに言うとこの会話をしていたのは上が教頭。下が校長だ。

教「実況の教頭です」

校「おっ？　実況の『きょう』と、教頭の『きょう』をかけたね～

教頭ちゃん？」

教「恐縮です」

校「上手いよ！　上手いよ教頭ちゃん～？」

教「いえいえ。お代官様ほどでは」

校「ははははぁ！　越後屋！　お主もボケよの～？」

教・校「ははははははははは！！！」

ダメですこの２人は。朝礼もこうですから。

こんなのでも偉いんですから。

ってか、あの２人だけ特別扱い！？

そんな事はさて置き。試合の方です。

ってか、なんでオレ・・・敬語なんだろ？

「大丈夫？　Ａ組のスタメンにヴァンが居るんだよ？」
「心配すーんな♪」

オレは今、最終練習中に訪問者（レナ）が来たので、オレは練習を中断してレナと駄弁ってた。
どうやら、オレ達が負けた際、（オレが受ける）刑が決まったことだ。

ついでに、ヴァン君にコネを使ってヴァン君がスタメンと、いう情報をてにいれたみたいだ。

「だって、Ａ組のスコアって・・・」

どれも、バスケの点数とは思えない点数で。
１５０点オーバーと、とんでもない点数なのだ。

「それじゃあ、『賭けをしようぜ』？　レナ」
「賭け？」
「オレらが・・・もし！　負けたら――――

教「最終戦！　スタートメンバーはコイツ等だぁ！！」

B組――――
RG・井塔将
C　・如月駿
SF・仁志田雅紀
PF・雨宮和也
PG・日下部飛焔

SGの氷室が途中捻挫で保健室。

A組――――
RG・野口英世
SF・樋口一葉
PG・福沢諭吉
FG・夏目漱石
PF・ヴァン

この、４人ってお札様達じゃないかよ！！？

校「そんではアップに入るのじゃぁぁぁ

【２５話】球技大会！　最終戦…の１歩手前！　オレと死神の賭け（後書き）

はい。今回はこれで終りです。

【26話】球技大会！　前半戦　如月駿の頭にご用心？（前書き）

３０話だ～！
名「・・・ですね」
・・・・。
名「・・・・・・・」
・・・・。
名「なんで、私の名前って名前の『名』なんですか？」
あのですね～。
名「・・・・・・」
お気に召しませんでしたか？
名「変な名前だもん。名(めい)って・・・命(めい)とか、明(めい)。芽衣(めい)とかならわかるけど・・」
知りたい？
名「うん」
珍しい名前の人が欲しかったからぁ――
名「ざっけんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
げふぅ！！

【26話】球技大会！　前半戦　如月駿の頭にご用心？

教「う～む。校長、この梅昆布茶おいしいですねぇ～」
校「寂しい心すら温まるわぁ」

お前等！　ちゃんと仕事しろよ！！　もう、試合が始まるんだぞ！！
ダメだ・・・この2人・・・。

教「あ。ジャンプボールやってて」
校「オセロやろうよ」

ついでか！？　なんか、『ついでで』って感じだな！！？
ってか！　校長！！　オセロじゃなくて、試合を見てください！！

ツッコミを入れてるあいだに、ボールは高く上がっていた。
ボールは如月が弾いて、日下部に渡る。

日下部はディフェンスを次々と抜いていき、ツーポイントエリアまで足を進めていた。
オレは福沢をマーク。将は樋口。如月が野口について仁志田が日下部の後ろにつく状態だ。

ヴァンと、夏目は2人を通すものかと、徹底的に防御する。

「仁志田（ニッシー）！！　行くよ」
「応ッ！」

仁志田が夏目を押さえる。実質、ヴァンと日下部の1対1になる。

日下部君の持ち味は素早いクロスオーバー。後は、股を通されない限り抜かせないよ。

しっかり、姿勢を低くして手をちゃんと上げる・・・。
パスもフェイントも・・・見逃さないよ!

迷わず日下部君は、ボールを1回戻して助走をつけて駆け込む
4~5回ボールを左右に揺さぶる。そして、左へドリブル。

と、見せかけて・・・右だぁ!

「ちぃ!」

案の定、日下部君は右へリターンしていた。

「なんてね」
「!?」

伸ばされた腕の先には日下部君は居なかった。真後ろでボールがバウンドしてる音が聞こえた。
後ろに視線をやると。レイアップの体制に入る日下部君が居た。
球は綺麗にリングを通る。試合開始から僅か9秒の出来事だった。

教「バックターン!」
校「その後にすぐ股を通した後、足音を発てずに後ろに行ったのじゃ」

と、解説をする2人。
にしても、早すぎだろぉ！？

「速さが唯一の武器ですから☆」
「くぅ・・・！」

逆に言うとそれ意外取り柄がないってことだよね？

「無理にボケないのよ、ヴァン」
「こんな時にも心を読まないでよ。ラミア」

よし。この、先制点は大きい！
密かに僕は口元を緩めていた。
仁志田と日下部、そしてカズが切り込んで。
僕が指揮をとり、駿がリバウンドをちゃんと取る。
この陣形さえ上手く指揮すれば・・・突破口はある！！

問題は・・・・守備だ。取って盗られての繰り返しはダメだ。
さぁて、相手はどうでてくる？

スローインから来る相手の動きに警戒しながら僕は、守備位置につく。

福沢から、ヴァンに渡り。逆サイに居る樋口に渡る。

樋口にマークをしてる僕は足止めをするが、抜かれる。
日下部が迅速な反応をしてパスコースを潰す。そして、駿が球をカットしに向かう。

「！！」
「何を笑っている？」

そう言いながらちゃんとカットしてくれる駿。さっすが！！

教「うわぁ・・・」
校「あれって、卑怯だよね」
「「あの、頭・・・」」

そうか！　樋口は駿の哀れな頭を直視してしまったんだ！？
たしかに、あれは・・・破壊力あるからなぁ～。ピンクのハートマークがある、坊主。

ってか、駿の目から涙が見えたような・・・？

球はカズに渡る。
カズは勢いよく駆けてゆく。スリーポイントエリアにすでに居た仁志田に球をパスする。

仁志田はそのままシュート・・・。

球は綺麗に弧を描きバックボードに辺り、リングから弾かれる。
それを、全力疾走した駿がリングに叩き戻す。

教「ピンクマン！　ピンクマンがダンクを決めましたぁ！！」

校「ただの、ピンクじゃないか・・・」
「ピンクマン言うなぁ！！」

駿のツッコミ（？）は体育館に響いた。

それから、１回流れは持っていかれて点差は１０になるが、日下部とカズが流れをこちらに戻す。
そうこうしてる、間に点差は僅差になった。そして、第一クォーター終了の笛が鳴った。

第一ピリオド終了時、得点。
Ａクラス　　Ｂクラス
３２　　３５
僕らの３点リードと、いう感じになった。

皆もそろそろ身体が温まってきた。
さて、本番だね。

第二ピリオド残り３分、得点
Ａクラス　　Ｂクラス
８２　　６１

如月、日下部の凡ミスや、点差の開きから焦った結果がこれだ。
将は打開策を考える為に１回下げた。これからは指示に専念するみたいだ。

代わりに入ったのはバスケ部大野。

徐々に纏まりを戻してきた。そろそろ得点が欲しいころだ・・・。
この、攻撃が決まったら・・・流れは戻る!!

日下部からボールが渡ってくる。
福沢・・・樋口と突破して、ヴァン君と1対1になる。

「和也君・・・流れは渡しません!」
「おいおい。オレは君達の居候先の主人よ? 流れくらいくれたって「イヤだよ」ちぇ。なら、無理矢理にでも掴み取る!!」
「渡さないよ!」

オレはそのままセットに入り、シュートをするが、ヴァン君に弾かれる。すぐに、ボールを取ってジャンプする。軽く上半身をリングより高く跳んだ。
そのまま、リングに向かってボールを投げる。
滞空時間の関係でヴァン君は着地する。ボールはそのままリングへ綺麗に入る。

「うしぃ!」
「高っ・・・!!」

これで、流れは戻った!! この、流れは・・・渡さない!!

教「いや~。春の体力測定で垂直飛びで1番の成績でしたね~たしか」
校「人間離れした足の力で出来るんじゃ・・・。若い小僧であれかぁ・・・やるの~」
教「そんな事より校長ですよ」

校「お、そうじゃったのぅ」

この2人は・・・オセロを止める気はないのか!?

第二ピリオド終了時、得点。

Aクラス　　Bクラス

88　　80

と、見事な追い上げをしてみせた。ってか、第二クォーターで80点台って・・・。

1クォーター8分だから、16分間で2クラスとも80点台って凄くない?

【２６話】球技大会！　前半戦　如月駿の頭にご用心？（後書き）

何かプレイについて分からないことがありましたらどんどんお申しつけください！！
評価などもつけてくれると、泣いて喜びます。

評価ってもらうと顔が自然と微笑むんですよ！
なんて言うか、書いててよかった！とか、思うんです！
もし、興味がある方は作者登録してみてください！！

【27話】球技大会！　クロス＋クロス＝新ワザ？（前書き）

人気投票中

【27話】球技大会！　クロス＋クロス＝新ワザ？

「あははは♪　でね、名。佐伯（さいき）がさぁ・・・」
「そうだよね。佐伯先生って細かいからね」

私はお昼を友達の美樹と一緒にパンを頬張っていた。
体育館近くの庭だ。私のお気に入りの場所である。

「んで、名～？」
「なに？」
「高3だよ？　アンタ？」
「それがなに？」

美樹の意図がわからない。なにを言いたいんだろ？

「あんたね～」

額に手をやりながら、溜息を落す。

「？」
「高校生活、最後の青春なんだよ？」
「？？」
「もう！　じれったいなぁ！！　なんで、アンタは1度も彼氏をつくらない！！？」
「か、枯れ死？」
「アンタ、ボケがヘタなんだからボケるな！！！」

ひ、酷い……！！
私だって頑張ってみたのに・・・。

「名ぃ。その容姿で、生徒会長で・・・なのに、何故ぇ!?」
「生徒会長とはなんの関係がぁ!!?」

「高校生にもなって1回も恋をしないなんて……馬鹿にも程がある!!!」
「恋かぁ～・・・・・・」

美樹に言われて恋愛について考える。

多分、普通の人間には無理だろう・・・。
なんせ、借金抱えて取巻きと口論する毎日って……。
想像するだけで、切実だ。

でも、アイツなら・・・。
私の思考の中に雨宮君(アイツ)が最近でてくる。
たまたま、落ちてきただけのアイツ・・・。取巻きを赤子を扱うみたいに戦うアイツ・・・。

「ほぉう。該当アリ！　と、見たぁ!!」
「なっ!!?　そんなワケないでしょ!!」
「（にこにこ）」
「微笑むなぁ!!」

「おいおい。1年が凄いんだってよ」
「行ってみよーぜ」
「カッコイイ子が出てるって」
「うそー!?　行く行く!!」

などと彼方此方から聞こえてくる。

それに、真っ先に反応したのが、美樹だった。

「？　そういえば、１年の球技大会の日だったわね～」

「う、うん」

生徒会長なので大体の校内行事について頭にはいってる。

１年生ってことは……もしかしたらアイツも・・・。

「ほぉう。にゃるへそ」

美樹が黒いメモ張になにかメモをとっていた。

口元を口避け女のように耳まで剃って裂けていた。しかも、目は黄色になり口からなんと、紫色で……美樹は人間じゃなくなったの？　しかも、まがまがしいオーラを出さなくとも・・・？

「み、美樹？」

「生徒会長の阿野名は１年Ｂ組の雨宮和也に脈アリか？」

などと呟いてる。ってか、なんで雨宮君の名前知ってるのぉ！！？

ちょっと！？　本当に人間！？　キミって！？

「ふふふふふ（笑）くーっくっくっくっくっくっく（＾▽＾）

阿野名ぃ……。新聞部に良い情報をありがとう」

「な、なに！？　ってか、顔文字までぇ！！？」

「『学園アイドル！　元・不良のＡ君に熱愛ぃ！！？』と、素晴らしい見出しをありがとう」

メモ帳を閉じて内ポケにしまう。

あの、メモ帳の中身が知りたい・・・。

美樹は立ち上がって体育館に足を進める。

「？　何処に行くの？」

「はぁ！？　決まってるじゃない！　唯一弱味を知らない雨宮和也の弱点を調べるのよ」

唯一って！？　アンタ、何者ぉ！！？

あの、ノートか！？　ノートに書かれているのかぁ！！？

私はパンの袋を捨てて、美樹を追う。

ってか、あのノートに私の弱味があるってこと！？

第三ピリオド残り１０秒、ボールはＢ組が持っている。

得点は１０３対１０５でＢ組がリードしていた。

小さい男の子がセンターラインを素早く通り抜けて行った。

ディフェンスを次々避けて行きもう、ツーポイントエリアまで足を進めた。

上から見てればただの2重…3重のフェイントだけど、相手は早くて追い切れてないのが目立つ。

そして、セットシュートの体制をとり投げる。

直後、ブザーが鳴る。バスケは最後にシュートの途中の際（完全に手からボールが放れてる場合）にはシュートが外れるか、入るかが見れる。入った場合はポイントが入る。

ボールはアーチを描きながら、リングに吸い込まれるみたいに入った。

『ワァァァァァァ！！！！！！』

体育館中が歓声に満たされる。

「うしぃ！！」

「ナイス！　日下部！」

雨宮君と小さい子が拳をぶつけあった。

両組がベンチに戻って行った。

「……すごい」

まるで、プロの試合を見ているみたいだった。

１人１人がそれぞれ自分の役割をちゃんと理解していて・・・。

なおかつ・・・。２クラスとも１００点台と攻防戦を繰り広げていた・・・。

ほんの、１０秒ぐらいだけど、心のそこからワクワクしてきた。

私は暫らく棒立ちの状態になっていた。

教「校長・・・どうなりますかね～？」

校「う～む。カズ坊と、ヴァンとやらがこの勝負のカギになる存在

よの～……Ｚｚｚ・・・・」

もう、ツッコム気力がない・・・。疲れた……。

「はい、和也」

と、後ろから誰かの声が聞こえたと同時に頬に冷たい感触があった。後ろを振り返るとスポーツドリンクが入ったペットボトルを差し出すレナが居た。同じく、隣にはドリンクを鞄から出そうとしていた魅夜の姿も・・・。

「ありがとよ」

受け取って蓋を開けて口をつける。一気に半分近く飲む。蓋を閉めてレナに返す。ジャージの袖で口を拭って、将の作戦に耳をかす。

最後の戦いだ・・・。第四ピリオド・・・。この得点差を守っていくんだ。

オレの思考にはこの得点差を守る！　と、いうくらいしか頭になくて、まともに将の話しを聞けなかった。

２分のインターバルの残り時間が無くなる。

第四ピリオドから大野と将が代わる。

※バスケは失格しないかぎり何回も交代できる。

残り、２０秒ほど。

如月が手招きするので如月に近づく。

みんな、円陣の体制になっていた。

オレは将と如月の間に割って入り手をかける。

「このまま、守って行くぞォ！！」

と、仁志田が叫ぶ。

『おぉ！！』

みんながそれに合わせる。

「勝つのはどこだぁ！！？」

次に、日下部が叫ぶ。

『Ｗｉｎ　ａｒｅ　Ｂ組！！』

「カズ……」

将がオレの肩を突いてきた。

オレが言うのぉ～？

しかたない！

「絶対勝つぞぉ！！」

『おぉ！！！！』

円陣を解いてそれぞれの守備位置につく。

相手の、スローインから試合は再開された。

残り、3分・・・。点差はまだ4点の均衡を崩していない。
今は…相手ボールかぁ・・・。

「仁志田！　2対1を仕掛けるよ」
「おう」

僕は、ニッシーを呼んで樋口を囲む。
ピポットターンをしながら、耐えてるけどパスコースは井塔の指示で塞いでいる。

仁志田がカットして僕の方に投げた。
投げたボールをしっかりキャッチしてドリブルで着実に足を進める。
どんどん抜いていきゴールは間近。福沢をクロスオーバーで抜き去り。夏目を速攻で抜いて3ポイントエリア内に突っ込む。

「得点はあげないよ！」

ヴァンがカットしに来るが、僕はボールを後ろに戻して3ポイントエリア外にでる。

「斜め45度って1番カッコ良く見えるんだよね」

そういい、僕は細く微笑む。
全力でジャンプして、シュートの体制になる。
球は弧を描きながらローポスト付近に落ちる
※ツーポイント内のゴール付近のことをローポスト、その前がミドルポスト。その前がハイポストとなる。

「ないしゅ♪　日下部」

バウンドしたボールを駿が掴んでリングに叩き込む。

よし！　これで6点差だ！

残りは2分弱……しっかり守ってくぞ！

残り……10秒！！

オレはタイマーを1回確認して必死に走る。

得点差は1点！　決めればオレ達の勝ちだ！！

マークが道を塞いだのでオレは近くに居た如月にパスを回す。

「如月！」

「おう！」

しかし、ディフェンスのカバーも早く如月もすぐに、日下部にパスする。残り、5秒……任せたぞ、日下部！

残り、4秒・・・。考えるな！！　本能で突っ込む！！

股抜き。クロスオーバーを屈指してツーポイントエリア近くに入る。
最後の壁はヴァンだった。

「ちぃ！！」

クロスオーバーで避けるつもりだったが、読まれていた。
無理矢理体制を戻しコントロールしようとするが、ボールが左手に当たってしまった。

全力で手を、足を伸ばす。

届けぇ！！　右手にボールの感触があった。それを前へ飛ばして追いかける。

校「！！」
教「速い！！」

リングを多少追い越してしまったが球はしっかりと手にあった。そのまま、バックシュートの体制になり、手からボールの感触が無くなった。
刹那。ブザーが鳴り響く。

＜ガァン！！＞
と、ボールがバックボードに弾かれる音が聞こえた。
体育館中が静まり返っていた。
＜バァン＞
と、ボールが床に落ちる。

僕は得点盤に視線をやるとポイントは・・・・。

Aクラス・・・１２３点
Bクラス・・・１２４点

と、電工掲示板に表記された。

教「２段階の高速クロスオーバー・・・」
校「＜リターンクロスオーバー＞とでも言うのかのぉ？」
教「まぁ。勝者は決まりましたね、校長」
校「まさか、ワシの勘が外されたとわのぉ・・・」

僕達の・・・勝ちだぁ！！
「うし！」と、小さくガッツポーズをとる。
「お疲れ様」
「さっすがだな、バックシュートの正確性」

大野と氷室が僕に近づいてくる。
氷室が僕にタオルを投げてきたのでそれをキャッチして、汗を拭く。

「勝ったよな？」
「あたぼーよ！」

と、言いながら首を回してくる。

「そうそう。ナイスプレイ♪」

こうして、球技大会は終ったのである。

「あ～～～～～～～～～～～～～～！！！！！！　ダリィ～～～～～～～～～～！！！！！！」

オレは帰路を背伸びしながら歩いていた。もちろん何時もの面子で。

「ふっ。カズは見せ場を日下部に盗られたからね」

「決めた点数でお前は日下部の次に低いぞ？」

上から、将。駿がオレを虐めてくる。ひどぉ・・・。

確かにそうだけどさぁ・・・。

「まぁまぁ。日下部君はサポートに貢献したけど、和也は……ねぇ？」

「悪かったな！　魅夜！！」

オレを肘で突っついてくる。

しかも、満面の笑みで。

コイツ・・・！！

「眠い。帰ったら寝たいよ～～～～～～～～～～～～！！！！！」

「話題をずらさない♪」

オレの発言に将が痛いところを突いてきた。オレは「グゥ……！」

と、しか項垂れることしかできなかった。

「あぢぃ～～～～。なぁ、アイスでも買って帰らないか？」
「そうだね、和也の奢りで」
と、魅夜が恐ろしいことを言ってきた。
「なっ！！？」
オレの財布には５０００円しか入ってないぞ！？
待て待て！　オレにはまだ使うことが・・・！　欲しいゲームを買うタメに少しづつ節約したお金がぁ！！
「異議あり！！！」
『賛成♪』
「ちょ！！？　お前等ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
オレが反論しようとしたものの、満場一致で賛成すんじゃねぇ！！？
「じゃあ、私はぁ～・・・」
「どうする？　魅夜？」
レナと魅夜はアイスについて相談を始める始末。
如月と将は笑顔のままだ・・・。こいつ等……高いの選ぶ気だろぉ～！！？
トホホ……（泣）

【２８話】朗報と封印された記憶？（前書き）

人気投票中でーーす

【２８話】朗報と封印された記憶？

「泣くなよ……」

少年が蹲る（うずくま）少女にそう声をかける。少女は、ただただ・・・小さな墓……穴を掘って亡骸を埋めただけの小さなお墓の前で泣きじゃれていた。

「だって……だって」

かすれて今にも小さな風に浚われてしまいそうな声で少女は少年に返した。

「死んでしまったら人も・・・動物も……蘇ったりしない」

少女に視線を合わせようと、少年もしゃがみこむ。

そして、少女の顔を覗き込もうとする。しかし、少女は少年を払い退ける。

「アンタに……」

辛そうに・・・声が裏返っていた。そして、また、風に浚われてしまいそうな声で少女は口を開く。

「アンタに・・・和也の――――でしかないアンタなんかに……。なにが、分かるっていうの？」

少女の言葉は途中で風に邪魔されたが少年には・・・その欠けた言

葉がなんなのか・・わかっていた。

「魅……夜」

「気安く私の名前を呼ばないで!!!」

さっきまでとは違ってハッキリと・・・怒りの感情も込めて発した言葉は、少年の『心みたいなもの』を深く・・・くっきりと抉った。

「でも・・・オレ『も』、『雨宮和也』だよ」

「ふざけるな!!」

少女は尚も少年を追い詰める。

「アンタは和也じゃない!!　和也は――――――

オレの妄想の中の出来事？　にしても、頭に激痛が走る。
魅夜・・・？　何を言ってたんだ？　妙に大事な所が欠けてるような・・・？

『思い出したくないからだよ』

男の声がオレの脳内に響いた。いつか、聞いた事のある声だった。
セフィリアとの1戦の時だ・・・たしか、途中でコイツの声が聞こえて……。

！！？　頭にこれでもか！！　と、言うほどの激痛が頭を通りすぎた。
言葉にすら上げれないほどの激痛だった。

暫らくして、ようやく痛みが引いた。腹が減ったのでベットから下りる。オレの鼻に美味しそうな香りがよぎった。
ヴァン君か・・・。
クローゼットの中から制服を取って、制服に着替える。

着替え終わりドアを開けて向かい側にある階段を降りる。
階段を降りたらすぐに左折。右に行ったら倉庫だからだ。
すこし、真っ直ぐ進んだら十字路になってるので右に曲がって、３番目の部屋がリビングだ。
ついでだから、ウチの紹介をしよう。まず、２階からだ、オレの部屋は1番右側にある部屋だ窓を開けると魅夜の部屋が見える。その隣が元・馬鹿夫婦の部屋。今はレナがいる。その隣とかは開き部屋だったが急遽オレが片付けたいまではヴァン君の部屋だ。隣にはセ

フィリア、同じく開き部屋。その右隣がラミアちゃんの部屋だじっちゃんの部屋だった場所だ。
階段を下ると、広い廊下があって左右に分かれている、右に行くと先ほど述べたように倉庫…物置部屋がある。
左に進むと十字路があって真っ直ぐ行くと道場がある。今は師範も生徒もいないのでオレが鍛錬に使っている。左に進むと風呂場とかトイレとか洗面所、地下倉庫とかいろいろある。
右から1つ目は、アルバムとかビデオの保管場所がある、父さんも母さんも親馬鹿なので大量に残ってる。2つ目には親父が趣味でギャンブルのなんかいろんな物がある。
3つ目にはリビングがある。
まぁ、他にも色々と部屋はあるが……秘密だ。

「おはよー。和也君」

せっせと料理の準備をしながらヴァン君がオレに声をかける。
髪は銀髪で童顔。カワイイ系の顔の持ち主だ。
オレのお気に入りの下僕・・・じゃなく弟みたいなそんざいだ。

あぶねぇー。本音がでちまった。

「本音なんださっきの……」
「・・・・・・・・・・・・」

オレはラミアちゃんにこれ以上いったら殺すとサインする。

「うぐぅ！」
「？」

ヴァン君が不思議そうな顔でこちらを見る。オレは「いいよ」と、

だけ言って持ち場に帰す。

あぶなぁ～。危うくいい配下を失うところだった。

あ、ついでにラミアちゃんの設定を言おうじゃないか！

「せ、設定？」

髪の色は橙色でキリッとした目が特徴的、なんと、人の心の中を読めるという特殊能力つきときたもんだ！！　買わなきゃ損するよ！！

はっ！　イケナイ！！！　商人魂がオレを・・・。そんなのないけど。

まぁ、レナのツッコミ役である。うんうん、助かるよ。

「別にレナのツッコミ役じゃ――――って！　私って良い様に使われてるだけぇ！！？」

「酷いよ！　あの時誓い合った約束はウソなの！？」

ナイスアシスト、レナ♪

ラミアちゃんのツッコミを使って上手くボケるレナ。ウソ泣きしながら。

「どこぞの、韓流ドラマよ？」

食器の用意をしながら上手くレナに返す。うむぅ、流石だな。

箸を両手に持つレナが待っているのでオレはそうそうと我が台所（デートスッポット）に向かう。

「ラミア！！　奥様には今！　韓流ドラマが人気なのよ！！　昼寝しながら見るのよ！！」
「1昔前よ……それに、昼寝しながら見たら話しが見えないじゃない」
「ツッコミが冷たい！！　もっと『欧米か！！』ってツッコミを！！」

レナの頬が蛙みたいに膨らむ。レナ……ネコみたいなのに、蛙も混じってると変だぞ？
ネコ蛙ってか？

「それは、パクリよ？　しかも欧米ではないわ。日本よここは？」
「ええじゃないか！ええじゃないか！！」
「もう、歴史に詳しいことにしかわからないじゃない」

オレはこの2人のやり取りを苦笑いで見守りながら愛用のフライパンを出して、冷蔵庫から玉子を取り出す。

「私が詳しいんじゃない！！　作者が詳しいんだ！！」
「アンタ、それを言ったらお終いよ？」

この2人は・・・いつまでこのやり取りを繰り返すつもりだよ？

「和也様・・・魚が焼けた」
「お？　ええっと」

魚用の皿はどこさやったかな～？
オレは食器棚を覗き込む。
1番上・・・ない。

上から2段目・・・ない。
下から3段目・・・ない。
下から2段目・・・

「あったあった。ほれ、盛っておくれ♪」

セフィリアに魚用の長細い皿を渡してオレはコンロに向かう。
フライパンに火を通す。

確か……レナは白身はちゃんと焼けていて黄身が半熟の目玉焼きが好きなんだよな？
なんとワガママな・・・。

油をホントに少量入れて玉子を割る、上手く白身だけフライパンに入れて焦げ目がついたら黄身を落す
後は、黄身が半熟の状態になったらＯＫだ。
皿にレナ用の目玉焼きを入れて完成だ。

ラミアちゃんは半熟が好きなんだよな？
フライパンを流し場に置いて新しいのを取り出してホンの僅か水を入れる。そして火を通して熱が通ったら玉子を入れる。全体的に半熟になったらＯＫだ。
ラミアちゃんの皿に入れてこちらも完成。

また、新しいのを取り出して油を入れる、火を通して玉子を３つ割って落す。オレとヴァン君、セフィリアは固めが好きなので思いっきり強火で火を通す。オレは別に醤油もソースも要らないので塩胡椒（コショウ）の味付けとなる。
３つを皿に入れて完成だ。

目玉焼きをそれぞれの場所に運んでオレはフライパンを洗う。

？　メンド臭くないかって？

めんどくさいよ。そりゃそうだろ？　オレだって一気に作りたいさ。

でもさ、目玉焼きって火とそれぞれ好みってあるじゃん？　レナみたいなヤツとか、ラミアちゃんとかさ、オレからすれば半熟の何処が良いのか分からないけど、それは相手にも言えることなんだよ。

オレにはオレの考えがあって。レナとかにも考えがある。用は自分だけ自分の好きにしたらダメだってことだ。相手の考えもちゃんと受け入れることが大事なんだから。

まぁ、ソース派と醤油派の争いはウザイけど☆

「ほら！　目玉焼き様の出来あがりじゃ～」

「やった！　和也が作る卵焼きだーい好き☆」

レナが本当に嬉しそうな顔でオレに抱きつく。

・・・・なんだ？　今日のレナ？　やけに上機嫌じゃないかよ？

ってかさ、オレって男だよ？　思春期の？　まさか、オレが狼にならないとでも？

「阿呆。さっさと自分の席に戻れ」

「は～～～～～い♪」

まったく。こいつ等のせいで欲求不満だ～～～～～。

はっ！！

「・・・・・・・・」

「な、なにかな？　ラミア様？」

「最低です」

オレの向いの席はラミアちゃんじゃないかよ！！！！

突然の朗報に私は戸惑うだけだった。

「ちょっと待って義姉さん！！」
『ま！　兎に角今日の昼には帰ってくるからね』
「そんな！　なんで、こんな急に！」
『なに？　和也君とデートでもあるの？　ないわよねぇ、和也君はモテモテで相手にしてもらってないんじゃないの？』
「はぁ！？　なんで、アイツがモテモテなのよ？」
『あらあら。余裕が無いみたいね？』
「なっ！！？」
『私に隠し事はできないんだから。声を聞くだけでその関係線ができるのよ？』
「なんで、和也の話題なのよ！？」
『あらあら、デートすらまだなの？　早くしないと和也君が――なんでもないわ』
「？　何を言いかけたの？
『ま！　今からジェット機で帰るからねぇ～』
「ちょ！　ちょっと！！」

切りやがった、あの義姉めぇ！！

それより・・・和也が……なに？
和也は・・・何かを隠してるの？
いったい・・・なにを？
なんで？　なんで…隠し事なんて？

私達、1度も隠し事なんか・・・？

暫らく、私は和也の事で頭が痛かった。
それに、『あの』義姉が帰って来るからもあったからだ。

【２８話】朗報と封印された記憶？（後書き）

次話、魅夜様の義理の姉が帰ってきます。

【29話】翻弄されるオレと帰ってきた天敵（前書き）

シリアスの中に無理矢理ギャグを入れてるのがありますが、気にしないでください。
今回は和君が自分に疑念を持つっ的な内容がメインです。
香澄姉さんはホンの登場は終盤だけです。

きゃらくたーのにんきとうひょうちゅうです。
どうか、おねがいします

【29話】翻弄されるオレと帰ってきた天敵

「和也ぁ！！　遅刻しちゃう～♪」
「なんで語尾に『♪』をつける！！？　もとはお前が……？」

自転車が壊れた事もありオレ等は走って学校に向かっているのだ、
さすがに、自転車で5人のりしたオレが悪かった。
そんなことはどうでも良い。なんで全力疾走してるのかというと・・・。
レナが原因だ。
この馬鹿……。いや、愚痴るのは後だな・・・。『お客さん』がいるからな。

「あ！　ちょっくら忘れ物したわ。先に行っててくりぇ☆」
「？　馬鹿ねぇ～。もちろん先に行くわよ」

ふぅ、馬鹿で良かった。でも、セフィリアもラミアちゃんも気がついてるな……。
ラミアちゃん、学校に着いたら一応『気をつけて』ね。

「気を……うぐぅ！！」

セフィリアがラミアちゃんの口を塞いでくれたので助かった。
さんきゅ。
しばらくして、４人共見えなくなった。
さてと・・・。

「・・・・・・5，6人か」

オレは路地裏の一角を睨みつける。そもそもおかしいよな・・・。
朝なのに、一人も居ないなんてよ

「雷術・・落雷（サンダーボルト）」

「！！？」

か、雷だと！？とっさの奇襲にオレは少し反応が遅れる。

「禁術・・死霊召喚（ネクロマンス）」

バックステップで避けた後、オレの周りからゾンビと思（おぼ）しき物体が現れる。
実に８０以上、しかも、尚も上昇中☆
って！　ざけるな！！

黒フードの男が６人、路地裏から出てくる。
どれも同じ体系の女性だ、オレの目は誤魔化せないぞ！　どれも、Ｅカップ以上だ！！

ふふふ。女に餓えたせいで妙な能力が備わったじゃねーかよ！！
もとは、居候にビビッて『右手と遊べない』のが悪いんだよ！！
あ、分からない人は知らないままでいいです。親なんかに聞いちゃいけませんよ！

「さてと・・何が目的なのかな？」
「キサマは分かっているのだろ？」

１人の黒フードが１歩前に出る。

「さぁ？　なんのことやら」

オレは細く微笑む。そうか、こいつ等が『レナの力』を狙ってるヤツ等か・・・。
おもしろい！　魔術を使う相手にどれほどオレの力が通じるか・・・
見極める！！

「やれ」

黒フードＡがゾンビに命令する。オレを囲んで行ったゾンビが一斉にオレに襲いかかる。
ふぅ、先にこいつ等を始末したら相手になってやるってか？

「なめんなよぉ！！　」

跳びついてきたゾンビに回し蹴りで薙ぎ払う。後ろから来たヤツ等に裏拳を１発。
これだけの数だ！　手数だ、手数で攻める！！

ダメだ！　こいつ等・・・倒すのより増えるのが速い！！
オレが１０匹ぶっ殺すより敵が２０匹増えるってかんじだ・・・。

仕方ない、ゾンビを操るあいつを先に・・・ぶっ倒す！！

「極魔槍裂破掌（グングニール・インパクト・ノヴァ）！！　」

刹那、直線状の敵は全て消え去った。出来たのは、黒フードＡへの道。
そして、黒フードＡの懐（ふところ）。

「な！？」
「影楼（カゲロウ）」

腹部に3発、後ろを一瞬で盗って首筋に1撃与える。

「風術・・」
「氷術・・」

黒フードBとCの目の前から意味不な紋章みたいなものが浮かび上がる。

「竜巻（ハリケーン）」
「粉雪（アイスシクル）」

竜巻と粉雪が接触した。
同士討ち？
一瞬そう考えるが、違う！　勢いが・・・増した？

「「氷乱竜巻（アイスストーム）！！　」」
「新郎新婦の初共同作業かぁ！！　」

否、合体魔術とでも言えばいいのだろうか？
かなり的ハズレだな・・・？　ってか、ツッコミが無いとこんなにも寂しいんだ！？
違う違う！！　問題はこれをどう乗り切るかだ！！
ちくしょう・・・一人でボケとツッコミをヤルなんて……悲しい（涙）

「剣術・・」
「！　」

しまっ！　後ろのも居たか！！
左肘で黒フードＤの腹部を突く。

一回、二回転がる。その際に刀もオレの目の前に落とす。すかさずオレは刀を盗る。
次は・・・竜巻の斜線上から出ることだ。

オレは全力で竜巻の斜線上から出ようとするが、上空から雷が無数に飛び交う。
そのせいで逃げ遅れる。
竜巻との距離僅か１０ｍ未満。

「くそぉおおお

『・・・邪魔だよ』

頭の中に『ヤツ』の言葉が響いた。そして、『オレの』意識は消えた。

「おいおい。この程度の竜巻……効かねぇよ」

盗った刀の一振りだった。その、一振りで目の前の竜巻は旋風(つむじかぜ)すらも残さず『消滅』した。それと、同時に3人の黒フードが倒れた。和也の位置は変わってはいない。

「けっ！　この程度かよ？　」

剣を片手で遊び投げ捨てる。
そして、右手を突き出す。

「もっと遊ぼうぜぇ？　『久々の身体』だからな」

そして、右手には『ありえない物』があった。
それは、『人間が持てるはずの無い物』・・・。

それを、地面に突き刺す。
残り、2人の黒フードからは顔こそ見えないものの。「ありえない」「そんな馬鹿な？」などの心境が分かる。なぜなら、『人間の筈の雨宮和也』が『持てるはずの無い物を持っていた』からだ。

「なぜ・・・」

一人の黒フードが口を開いた。

それは、絶望の前に震えている弱虫みたいな声で。

「キサマが――――『鎌』を」

「馬鹿か？」

もう一人が口を開いた。こいつは極めて落ち着いていた。

和也は平然としている。『鎌が自分にあるのが当たり前みたいに』。

だから、ヤツを小馬鹿にしたのだ。まるで、王が身分の低い者を見下すように。

「オレが『死神の端くれ』だからだよ」

その、瞬間。２人の黒フードの意識は別の世界に行った。

それと同時に６人は『砂に帰った』

「てめぇは餓鬼か？　その歳でお砂遊びですかな？」

和也は何も無い路地裏の一角を睨む。それと同時に一人の老人が姿を表した。白い顎鬚を腹のヘソ辺りまで伸ばした老騎士がいた。何故か、栄養ドリンクを両手に持った。

「ワシのカワイイ娘達を、乱暴な男よの～？」

「うぜんだよ。今は取巻きのボスみたいだな？　『北欧神話の最高神・オーディン』」

左手の栄養ドリンクを流しこんでポイ捨てする。ビンなので当然割れてしまう。

その音すら、和也は聞く暇すらなかった。

気を抜けば殺られる。それしか、頭の中にしかなかった。

「ふぉふぉふぉ。攻撃する気などありゃせん」
「・・・・なら、答えろ」
鎌を自分の中に戻して。オーディンと向かい合う。
「お前等がレナを狙うのは『アイツの力』だけが原因じゃねぇだろ？」
「気づいておったか。よかろう、話しておこうか」

クソ！　クソ！　クソ！　クソ！！
今は昼休みの途中。それぞれが昼飯や談話など思い思い好きなようにすごす時間だ。
そんな中オレはイライラ爆発の状態だ。地区最強の不良と言われたオレに遅刻したオレを注意することも出来ずにダレもが近寄りがたい空気を全身から発していた。
理由は、『欠けた記憶』だ。気がついたらアイツ等は消えていた。
もちろん追い返した記憶もない。ラミアちゃんにメールしてもレナは学校に居た。なにより、１番気持ち悪かったのがオレが無傷だったということだった。

「ワケわかんねーよ……」
知らずの内にオレは、そう呟いていた。

昼。私は学校を早退して空港で義姉の迎えに来ていた。
旧姓、三原香澄（みはらかすみ）。私の父の連れ子だ、歳は（自称）永遠の２０歳。
実はすでに三十路を越えている。義姉の前でそんなことを言ったら終わりである……人生の。
和也が良い例だ、義姉の３０歳の誕生日（？）に和也が「３０歳おめでとー♪　香澄姉さんじゃなくて、オバさんかな？」と言った瞬間に全治２４ヶ月の全身複雑骨折・・・なんで、生きてたんだろ？しかも。２ヶ月で直ったし。和也曰く「某野球ゲームに出て来るダイジョーブなのに、危険（デンジャラス）なダイジョーブじゃない博士の『改造』手術を受けたんだ」。改造が気になる。

そんな事を考えていると空港に１台のジェット機が停まった、そこからはぞろぞろお客が出て来る事も無く、１人の女性と黒いスーツの男達が数人出て来た。

女性はクソ長い青より蒼が似合うようなヘアカラー。腰まである長い髪の毛の１本１本が丹念に手入れされてて、華奢な身体をしている女性だった。

あの人が私の姉の、柴原（しばはらかすみ）香澄……私の義理の姉、本人だった。

ついに、帰って来てしまった。なんで、帰ってくるんだ？
この、悪魔は……。

また、弄られる・・・クソ義姉に……。

「久しぶりね？　魅夜ちゃん」

来やがったか。天敵め。

【29話】翻弄されるオレと帰ってきた天敵（後書き）

評価、ご感想ありましたらドシドシ来てください！

【30話】KYレナとオレの微妙な昼休みと魅夜と義姉（前書き）

2話!!　1日で2話行ったぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!

久々の快挙じゃぁぁぁぁああ!!!!

和也「良くやった」

魅夜「やればできるのね」

裏があるでしょ？

「「・・・・・・・・」」

えっ？　当たり!!?

【30話】KYレナとオレの微妙な昼休みと魅夜と義姉

「・・・・・・・」

クラス中が重たい空気になっている。原因は……オレが出してる『殺気』だ。

いくら丸くなったと言ってもこの、地区での最強伝説を残すオレに近づこうとする馬鹿は――

「どしたの？　和也？」

居たよ！？　おいおいレナさんよ～？　キミはKY（くうきよめない）かYO！

両手に一杯にパンわ抱えながら。その中にはオレの好きなカレーパンがあった。

「なんでもねぇよ」

「うわぁ。こんな美少女が心配してやってるのにそれ～？　失礼しちゃう」

背後から「ぷんぷん」と文字が見えるのはスルーする。スルーする？　するーする？　するーするー？駄目だ！　校長と教頭のクセが・・・！！？　呪いか！？　これは校長の呪いなのか！！？

「自分で美少女言うなアホ」

「本当のことじゃない！　私は美しい！　そして、可憐なぁ――

黙らんかい。オレはウザイので弁当の卵焼きを口の中に突っ込む。味わって食うが良い。お前がオレに逆らうから弁当を作ってやらないのだ。

「もぐもぐ」
「普通はそんな音でないから」
から揚げを頬張りながらレナに視線を戻す。
ほのかに目があっちの世界に行ってる。
「美味ぁぁぁ

「男料理なんていらない、それなら購買部で争う者達に踏み潰されて中身が飛び出したジャムパンの方が増しよって、言ったのはダレだ？」

「うぅぅ……。過去の過ちよそれは！！　いいこと！　人間は前向きに過去を消しながら突き進まないといけないの！！　だから、初じめて居候した時の事なんか水やお湯や氷や怒りに流して！」

縮こまりながら、レナはオレに反抗しようと立ち上がって熱弁する。

それは、クラス中の注目を集める。

もちろん、勢いに任せた馬鹿がばら撒いたパンにだろう。

「こらこら、食べ物を粗末にするなよ。拾うぞ……ばら撒きやがって」

オレは腰を低くしてパンを拾う。レナも「あぅ～～～～」と、唸りながらもパンを拾う。

メロンパン。　ジャムパン。　チョココロネを拾い上げる。

そういえば、チョココロネって頭から食うって言うけど頭って細い方から食うのだろうか？　太いほうから食うのだろうか？　オレと作者は細い方を千切（ちぎ）ってチョコをつけて食べるけど。本当はどう食べるのだろうか？　読者様、知ってる方が居ましたら感想と一緒に送ってきてください。

はっ！！　あっちの世界に行ってしまっていたじゃないか。

最後にアワビパンを取って。？？？？　アワビ！！？

なんですか！？　アワビパンって！！？　こんなのあったんだ！

購買部に！！

「ほれ」
「机に置いておいてぇ～」

オレは言われた通りにレナの机に拾ったパンを置く。
ってか、なんでこんなにパンがあるんだよ？

「おいレナ？　なんでこんなにパンを買ってるんだよ？」
「ははは♪　私のおやつよ☆」
「……食いしん坊」

恥ずかしそうに笑うレナ・・。
それにオレはツッコミ（？）をいれる。
一転。レナの顔が魅夜の次に怖い顔になった。
なんと、不動の3位だと思った志穂さんをダントツで追い越した。

「重力魔法・・」
「ひぃ！　ま！　待て！！　ここは学校だぞ――――「超重力波（グラビティウェーブ）！！」ぐへぇ！！」

重力の拷問・・・その伝説が新たに出来た瞬間だった。

「馬鹿だね。カズは」
「あぁ。いくらオレでもあれは言わないぞ」

将と駿は和也を影で小馬鹿にしていた。

「ただいまぁ～♪　魅夜ぉ～☆」

この、クソ義姉め、イキナリ抱き着いてきやがった。
私には遠いい感触が私の腕に伝わる。
この、腐れ巨乳め。私に殺されたいか？

「離してよ、義姉さん」
「もぉう。姉妹のスキンシップよ？　まったく」

鬱陶しいわ！　なにがスキンシップよ？　アナタが私で遊びたいだけじゃない！！
毎回毎回ぃ・・・！！！

「なに？　そんなに身体での挨拶が良いのかな～？」

義姉の手がスカートの下に忍び寄る。

「あほぉ！！　このレズ野郎！！」

私の正拳が義姉の鳩尾にクリーンヒットする。

「駄目よん☆　そんなに乱暴じゃ和也君から逃げちゃうわよ？」

義姉の甘い言葉が私の首筋に繋る。
ううぅ！　鳥肌がぁぁぁぁ。

そして、耳たぶを咥えられる。

「＿＿＿っ！！！」

そ！　そこは敏感なのに～～～～～～～～～～！！！

いやぁ～～～。舌なんか使ったら……こ、声がぁ・・・。

そして、姉の右手が私の首筋をなぞるように触れるか触れてないかの寸前で行なわれる。

出してしまいそうな声を呑み込んで耐える。息すらできないので顔が真っ赤になってるであろう。

しかも、公衆の面前で！！

左肘で姉の腹部にエルボーをしようとするが避けられる。

右足で蹴ろうとするがまた避けられる。

私は泣きそうな顔で声を堪える。

私はこの死闘を暫らく繰り返していた。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「まったく、体力つけないと、和也君に嫌われるよ？」

私は荒い息を吐きながら迎えの車の中で泣いていた。

原因はこの変体義姉（レズ）だ。

コイツとは産まれた時から今まで何度も虐められたのだ。

危うく私もあちらの世界の人のお仲間になりそうなこともあったが。

私の根性でしのいできた。

「根性じゃなくて、和也君への思いじゃないのかしら～？」

「！！！？」

「ふふふ。インドで、読心術を学んできたのよ。魅夜の心の声が聞

きたいから♪」

よ、余計なことを！！

「魅夜の感じてる時の心の声が聞きたいからだけどね」

と、耳元でヘンタイが呟く。全身に悪寒と鳥肌が立つ。

私はベンツのヘンタイが居る逆の方にすかさず逃げる。

「ネコみたいでカワイイ☆　和也君に渡すのは勿体無いわねぇ。このまま、こちらの世界に引き込もうかしら？」

と、悪魔の笑みでヘンタイが私に近づく。

「い、」

なんで涎なんか垂らしてるんですか？　なんで、目が逝っちゃってるのかしら？

なんで、服を脱ごうとしてるンデスカ？

「い。いやぁぁぁ

ン現る！？』と。

無論、私が和也の家に逃げたのは言うまでも無い。

全ては、あの義姉（ヘンタイ）から逃げるために。

【30話】KYレナとオレの微妙な昼休みと魅夜と義姉（後書き）

キリスト如く十字架に吊るされた作者です。
和也「・・・・・」
魅夜「・・・・・」
和也「ダレが欲求不満だぁ？」
魅夜「最初とは随分と設定が変わったのね、あの義姉わ」
・・・・・・・・・・ギャグを取らないと行けないから。
「「殺す」」
うぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！

【31話】ある意味しりとり？（前書き）

はい、今回は短いです

アナタの好きなキャラクターがおらっしゃいましたらお手数ですが・・・

感想やメッセージで送ってきてください

【31話】ある意味しりとり？

「わーった。わーった！！　泊めてやるから泣くなって」

学校から帰って来たと同時にオレは魅夜に『泣き寝入り』された。
まぁ、香澄姉さんが帰って来たのが原因であろう。
ウチにも家の事情があるから丁重にお断りしたつもりでしたが……
玄関の前で泣きやがった。

「でも、開き部屋がないんだよね？」

ヴァン君がそう、指摘する。
そうだ、そうなのだ。オレの家には４人の居候がいて開いてる部屋がないのだ。あっても……。アソコだけは……さすがに「ＮＯ」だ。
となると、次の問題はぁ・・・。

「雨宮家家族会議ぃ～～～～～～！！！！」
「勝手に始めるなレナ。ってか、家族会議じゃないだろ？」

ってか、何時の間に玖珠球（多分この漢字だと思います）なんか用意したんだよ？
その前に戸籍上では雨宮の直系はオレだけだし。
家族じゃないだろうに？
……孤独か。

「でもって、ダレが何処で寝るか考えよう」

本題を切り出す魅夜・・・。なに、仕切ってるんだよ？　テメーの家に帰すぞぁ！！？

なんて言ったら殺されるな、オレ。

「ダレがどの部屋に移るかだ。オレは断固拒否する！」

男の秘密があるからだ。何十にも罠を張ってるから多分バレないと思うがバレたら恐ろしい目にあいそうだ……。

「和也と相部屋でも良いからさぁ～」

「おいおい。オレは漢だ魅夜はケモぉ・・・女だぞ」

「和也？　ケモノって言いかぁ――――――

負けたらオレは居間で寝る。魅夜はオレの部屋で寝ろ」
「ふふふふふ。私にしりとりを挑むなんて1年甘いわぁ！！」
「短いな……」

オレは呟く。

「じゃあ、しりとりの『と』！」
「『と』　とぉ！？　待て待て！！　語尾から始まるんじゃないのか！？　『か』」
「『か』　カカの天下　『か』」
「『か』　カカの天下って、おい！！　勝手に名前を出すんじゃねぇーよ！　『よ』」
「『よ』　夜露死苦　『く』」
「『く』　くそ！？　ワケ分からん！！　ルールもクソもないじゃないか　『か』」

＜魅視点＞

！？　新しいの出たぁ！！

『無視してください』

は、はぁ……。

「つ、繋がってる……！！」
「凄いねぇ……」

「『か』　亀仙人　『ん』　……って、凄いねぇ　『ね』」
「『ね』　ねぇ……じゃ、ねぇよ！！　アホ！！　『ほ』」
「『ほ』　鳳凰　『う』」

「『う』　梅　『め』」

まともになったぁ！！

「『め』　メロンパン大好き♪　『♪』」

「『♪』　む、無理だぞそれはぁ！！？」

ひ、卑怯だぞ作者。

さすがに、『♪』はないだろぅに。

≪雨宮和也　敗北≫

「そんな馬鹿なぁ！！」

今回はこれにて―終―

【31話】ある意味しりとり？（後書き）

はい。終りです。

【番外編】美樹様のちょっとした情報にゃり♪（前書き）

番外編です。はい……。
なんとなく、番外編です。

それと、ダレかが美樹様の情報で抜けています
探してみてくだせぇ。

【番外編】美樹様のちょっとした情報にゃり♪

美樹「私をワンキャラだと思ったヤツはどこじゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

名「とりあえず落ち着いてよ美樹！！」

作者『ははははは。いいじゃないか』

名「作者！！？」

作者『今回は描写をゼロ！　で、いくからよろしくぅ♪』

名「よろしくぅ♪　じゃねぇよ！！　」

美樹「でもって今回の本題はぁ……なに？」

作者『とりあえず和君の周りについての事を頼むよ』

美樹「雨宮和也の周辺のことねぇ・・・」

名（でた！　美樹のメモ帳！！）

作者『ちなみに、デス帳って名前が……』

名「著作権ギリギリ！！」

美樹「あったあった。

柴原魅夜・・雨宮和也に1番親しい人。関係は幼馴染。

井塔将＆如月駿・・雨宮和也の喧嘩仲間。地区内では『参魔神』と呼ばれていた。

朝日智貴・・小学校の時からの親友。雨宮和也になにやら借りを作ってる模様。

七瀬詩織・・柴原魅夜の大親友。七瀬財閥の一人娘。

レナ・フォード＝ライズ・ハールド（以下レナ）・・正体不明の転入生。雨宮和也の家に居候

ラミア・デュミナサスト・・レナの親友であり、相方の少女。雨宮亭に居候中

ヴァン＝アル・サーザス・・レナの男友達。雨宮和也の下僕的な存在。

セフィリア・ナイト・メイガス・・これまた、レナの友人。

平河悠太・・本編の出場はまだ無いが、雨宮和也を溺愛しているみたい。

柴原香澄・・魅夜の義理の姉。義妹が好意を持ってる朴念仁に多少の恨み（？）が……？

おやっさん・・名前不明。取巻きの頭で井塔将の父が経営する＜月栄＞を贔屓にしてるらしい

Ｂ組全体・・まだ、中学生の頃の悪い噂が抜けていないためカヤの

外の扱い。

教師陣・・校長。教頭以外は、雨宮和也を恐れてる模様。

阿野名・・多分忘れられてる。

名「おい！　念のタメに言うけど、私は生徒会長で毎回生徒会新聞にねぇ！　」

作者『見てないから』

美樹「そうねぇ～。多分、見ないよねぇ～」

名「あうぅ！」

美樹「ふふふ。目立たないのが悪いのだ」

名「生徒会長である私が影が薄いだとぉ！！？　」

W『出番少ないから』

名「あきゅ！！」

作者『次は和也君に思いを寄せてる人を』

美樹「どうぞ！！」

美樹「柴原魅夜　ランク・ＳＳ　タイプ・幼馴染み　備考・幼少の時から恋心が芽生えていた様子。雨宮和也も心を許してるし、雨宮和也に１番近い存在なので１番危険。

レナ・フォード＝ライズ・ハールド　ランク・Ｂ　タイプ・居候
備考・本人に自覚は無いがどうやら、好意をもっている感じ。雨宮和也とは以外と気が会うみたい。

七瀬詩織　ランク・Ａ　タイプ・お嬢様　備考・魅夜とは親友でありライバルでもある。朝日智貴同様、小学校の時からの腐れ縁。雨宮和也の強さにキタ模様。

平河悠太　ランク・ランク外　タイプ・ホモ　備考・雨宮和也が毛嫌いしてる少年。どうやら、一目ボレらしい。大物政治家の孫。

セフィリア・ナイト・メイガス　ランク・Ｅ　タイプ・居候　備考・とりあえず、好意をもってる模様。なにか違う感じがするけど、とりあえず美貌を咥えた点でＥランク。

阿野名　ランク・ランク外　タイプ・生徒会長　備考・影薄い。どうせ、雨宮和也も覚えてない可能性大アリ。でも、雨宮和也に対する好意は以外と……？

よ！！」

名「おい！！　お前は私を貶してるなぁ！！」

作者『聞いての通り』

美樹「ほんとは見ての通りだけど！」

名「もぅ。あんたらはぁ……」

美樹「ふふふっ」

作者『聞こえるのかな？』

美樹「はい。私の悪電波に引っかかりました☆」

名「な、なに？」

美樹「来てる来てる来てるぅぅぅ

【番外編】美樹様のちょっとした情報にゃり♪（後書き）

はい。欠けていたのは
――志穂様でした。
それでは。

【32話】いいか、これは夢だ（前書き）

更新、じつはもっと早くできたんですが相次ぐ不幸で…。
機種が古いポンコツなので途中で動かなくなってしまったり、ボツったやつと間違って消してしまったりなどなど・・・。もぅ、ついてませんでした（泣）

キャラクターの人気発表のタメに心おやさしいお方、1票を

【32話】いいか、これは夢だ

「はぁ～……。なんで、オレが・・・」

オレの自分の寝具（マイ枕&毛布）をもってリビングに居る。
まぁ、夜食を食うには損は無いんだけど、ベットが代わると寝づらいつーか、安眠できないんだよなぁ……。そもそも、香澄姉さんが魅夜を弄るからこうなるんだよ。

「まぁまぁ。私にしりとりを挑んだ方が悪いの」
「レナ……。あれは、しりとりだったのか？」
「後半はね☆」

前半はオレって遊ばれてただけ？　ってか、オレはレナの思い通りに動かせれてたんだ・・・。
オレって……。

「はぁ～。最・悪なんですけど……」
「悔やんでも仕方ないね、和也♪」

お前、いつか、ぶっ飛ばす！
やべ～。あのクソ双子芸人思いだしちまったよぉ～。
そういえば、あの双子芸人にも『かずや』って居たようなぁ・・・？
気のせいか♪

「あ、魅夜さん。和也君の部屋はぁ・・・」
「階段上がってすぐでしょ」
「はい」

ヴァン君が魅夜をオレの部屋までエスコート（？）しようとするが。
まぁ、幼馴染だから部屋ぐらいは知ってるだろう。魅夜は断った。

「あ～。レナは今日も頼む」
「ん？　ちぇ。『あの賭け』は、私の負けだもん……仕方ないかぁ。
和也が哀れだから」
「お前マジでぶっ飛ばすぞ？」

あの賭けとは球技大会の日に約束したものだ。
実際は機能も取り組んだがなかなか上手く行かなかった。まぁ、球技大会での疲労もあったからだと思うが……。すぐ潰れてしまった。

「なにかな？　なにかな？？　和也ぁ？？？」
「にゃ、にゃんでしゅか？　魅夜しゃん？？？」

オレの背後には鬼神モードの将より恐ろしいケモノ……いや、魔王が来たかぁ！！
オレは機械的な動きで顔だけ振り向く……。すぐさま逃げれるように。

そこには、絶対神（ゼウス）となった魅夜が居た。
もう、見ちゃったらトラウマになってしまいそうな形相でした。そりゃぁ……もう、貞子より怖いぜ？
そうそう、魅夜は嫌いだったなぁ、ホラー映画。
・・・・・・・・・そんな、和んでる暇ないですね・・・オレ！！

「『あの賭け』ってなにかな？　かな？？」
「その言い方パクリじゃない？　その子より怖いけど」
「・・・・・・・・・・」

駄目だ！　アニメの知識が通用してない！！
それに、更に眼光が強いよ～。
こわぁ～～～

そんな余裕、ありません。

「言えないことなんだ」

「・・・・・・・・・別に言えなくは無いが…恥ずかしい」

「だから、なにかな??」

「わりぃ」

あまりにも、魅夜の追及が酷いので、オレは魅夜の鳩尾に1撃加えて気絶させる。

意識を失い足が覚束無(おぼつかな)くなり、転びそうになるもののオレがキャッチ。

「ヴァン君。魅夜を寝かせといてくりぃ♪」

「うん。わかった」

魅夜のことはヴァン君に任せてオレ等は道場に向かった。

「……??　ここは……??」

あれ?　私はなにを・・・?　確か……。

あぁ・・・明日、和也を懲らしめてやらないと。

なにが良いかなぁ～??　やっぱり『WARA(わらわら)WARA』かな?

それとも『火あぶり』

・・・・・違うなぁ～。

※ＷＡＲＡＷＡＲＡ・・丑みつ時ワラ人形でまぁ、アレをやること。

違ぁぁぁ

「ちぃ！」
「まだまだ甘いよ、和也♪」
「今日の段取りは終えましょう。来客です」
「えっ！？　げっ！！　魅夜！」

ぴくっ？　私のコメカミが動く。

「げっ！！　って残念そうねぇ？　和也」
「・・・・・・・いいか、これは夢だ」
「アホ。そんなのにひっかかるか」

さてと、尋問開始だ。

【33話】キレました。（前書き）

６０話目（番外偏、ルート〇も含めて）にキャラの人気発表があるので
よろしくお願いします

【33話】キレました。

「・・・今日、魔法を使う奴に絡まれたんだよ……」

その言葉でレナが驚きの表情をだす。
まぁ、気づいてなかったから仕方ないか。

「そんで一人はなんとかしたんだが……実力が及ばずに・・・やられたってワケ♪」
「ワケって・・・アンタ！！」

魅夜が立ち上がる。
まぁ、オレの身体の心配でもしてくれるのか？

「弱ッ！！」

期待を裏切られました……。
しかも、オレのガラスの心を傷つけて。
ハッキリ言わなくても……。

「・・・・・魅夜・・・オレに恨みでもあるのか？」

泣きながらオレは魅夜に言う。
あえて言うけど、マジ泣きじゃないし、涙すらだしてないぞ。
そう、ウソ泣きだ。

「鳩尾に1発」

オレ、黙秘

「……ごめんなさい」

オレ、土下座。

そりゃもう、凄い勢いだよ？　なんせ、デコから血ィ出してるもん。

明日、デコ張れてるだろうな。真っ赤に・・・。

「・・・。それより相手はダレですか？」

ラミアちゃんがアシストしてくれる。

相手はダレですか？　と、聞かれても困るぞ。

オレの勘が告げる。危険だ。「ナイスバディーだった」なんか言ったら多分…絶対に明日が無いぞ…と

「女だ、６人組の」

「メス……。でも、あの魔力は・・・」

セフィリアが考え込む。

なにか、知ってるのか？

「『使い魔（アガシオン）』だね・・・多分」

「あ～。さすがヴァン。ナイス嗅覚♪」

「レナ、嗅覚関係無いから……」

オレの後ろでレナとヴァン君が話しをしていた。

「あがしおん？」

「使い魔のことです」

と、ラミアちゃんが言う。
使い魔ってあれですか？　犬ですか？？

「ゼ○の使い○ですか……」
「よく知ってたね。作者も兄貴の入れ知恵なんだけど」

苦笑いで答える。あれ？　そういえば魅夜は？
さっきまで正面に居たはず――

だったのだ。

「「「「「！！？」」」」」

一同が驚愕した……魅夜が人知れず消えていたのだ。
まるで、手品のように。

慌てて、さっきまで居た所に手をやる。

――暖かい？

生暖かかった……遠くへは行ってない。いや、誰にも気づかれずに道場から出るのは不可能に近い。
なぜなら、ダレかが道場から出て行こうとしたらすぐにダレかは気がつくはずなのだ。

「空間転移魔法……？」

後ろでヴァン君が呟く。空間転移だぁ～・・・？
アレか……。レナに無理矢理あっちの世界に連れてかれた時に体験したことがある。

いったいダレが？　なんのタメに……？

「空間転移の魔法なら『こちらの世界』には居ない。多分……」
「僕達の世界でもないね……明日の日付は……5月30日・・・こちらとあちらの世界の均衡が崩れる時だからね・・・」

そう、毎月30日には……レナ達の世界とオレらの世界の均衡は崩れて、レナの魔力でもあちらの世界に簡単にいけるのだから……。

「・・・いや・・・お前等の世界みたいだな」
「かずや？」

『メッセンジャーボーイだ』

オレがそう呟く――刹那。　黒い影が多数、ウチの道場に現れた。

「アガシオンが……こんなに！！」
「ラミア！　ただのアガシオンじゃない！！　均衡が解けていないのにこんなにアガシオンを送ってくるんだ！　敵の本体は化け物だ！！」

＜……偉大ナル“アクレイア様”ノ命ニヨリ申ス＞

ヤツラは言葉を発していない。
オレ等の脳内に響いてるのだ。

＜……コノ娘ノイノチガ惜シケレバ、レナ・フォード＝ライズ・ハールドヲ“アクレイア様”ニヒキワタセ・・・サモナクバ……＞

奥歯をこれまでに無いほどの強さで噛み締める。
そうして、オレはアガシオンとやらにパンチを1発ぶつける。

「レナ、明日だ。明日……全て片付ける」
「か、和也!?　ぶっ殺す!!」

その瞬間、周りに蠢いていたアガシオンが全て消え去る。

暫らく沈黙が続いた。

オレは拳をこの人生で1番の握力を出してるであろう。ギリッギリッと音を立てる。

どこのどいつかは、知らねぇけど……。面白い挑戦状じゃねぇか!!

オレに喧嘩を売ってるのか?

まぁ、どうでもいい。

結論は1つ……だから。

レナも魅夜もヤツの好きなようにさせねぇ!　ぶっ殺してやるよ!!!

明日が楽しみだよ……明日になれば・・・全て終るのだから!!

テメーの“死”でなぁ!!

「和也マジギレ・・・?」

レナがそう呟いた。

「悪いな、将に如月」
「別に、ちょうどいい運動になりそうだからね」

拳の骨を鳴らしながら将がそう言う。如月は少しはマシになったベリーショートの髪を掻き揚げてる。

「あぁ。構わないさ」

そう、呟いた。
流石に2人共本気らしい。逆に相手が魔法使いとかそういうのと、喧嘩をするのが楽しみなのだろう。オレはオレで完璧に本気モードである。

「レナ、頼む」
「カズ……もちろん、居場所知ってるよね」

あれ？　昨日の夜の出来事を振り返る。

「あ、」
「転移魔法・・空間転移（エリアルワープ）」

「場所わかんねぇ」
「・・・・・・」
「・・・・・・」

如月と将がオレを睨む。

「「アホぉぉぉ

【３４話　ルートA】とりあえず、コメディーを尊重して！（前書き）

あと、１話で４０話で～～～～～す！！！！

和也「なぁ、４０話もやってるのに、まだオレ達は5月なんだけど？　レナの研修は2年間……」

レナ「凄く長くなるんじゃぁ・・・」

・・・・はい。予定では１５０話を目処に・・・。

魅夜「もう少しで、１／3よ？」

・・・・

０円」

和也「何かいってみろ」

レナ「一、十、百、千、萬、十万、百九十万、一千万、一億、十億、百九千億、千億、一兆、十兆、百九十兆、
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・＜けい＞だっけ？」

和也「漢字は？」

レナ「知るかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ついでに言いますと、レナが言ったのは二千骸（にせんがい）（＜がい＞の漢字多分、これです）です。

【３４話　ルートA】とりあえず、コメディーを尊重して！

―Ｓｙｕｎｎ　Ｋｉｓａｒａｇｉ―

ぁんの、馬鹿ぁ！！　なんでこうも、大事なことを忘れるのだぁ！！

「ははははは。悪い悪い、ついつい手が早かったみたいだ」

「笑い事じゃねぇ！！」

まさか、大事な柴原魅夜の居場所を忘れるとは・・・。

確かに、コイツは柴原の事が心配なんだろう……。

でも、オレはもう１つ・・・言いたい事があった。

それは、ヘラヘラ笑ってる和也もそうだろう・・・。

「それでよぉ、レナ？」

「なに？　和也」

暫らく、和也は黙っていた。「自白しろ」的な目で。

そりゃあ、もう・・・。冥界（ハデス）の王の目で。

和也の目力はすごいものだと思う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

レナはレナで和也の目を見ないようにと、目を反らす。

そういえば、将は？

ふと、そう思って回りを見渡すと・・・。

「駿。『覚醒の時』は近いよ」

背後に居てオレに耳打ちをする。

・・・・・そうか、『以外と速かったな・・・』。

オレは率直にそういう感想を抱く。

さてと、和也もそろそろ限界みたいだな……。

「レナ――――――

ォォォオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！
」
和也とレナのやり取りは風に流される。
さぁてと。
どうするかなぁ～？
「サファイア、カモーン！！」
ゴォウ！！　と、空気を切り裂く音が遠くから聞こえてきた。
最初は黒い点だったが徐々に姿がハッキリとしてくる。
その姿は……『古龍』だった。
馬鹿な……『あの』龍（ドラゴン）は既に絶滅したはず・・。
蒼穹（サファイア）の鱗をもつ。伝説にして最強のドラゴン・・・。
龍族の皇……『グレアフレイムドラゴン』・・・。
オレの『長年の知識』が・・・。それを、物語った。
―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―
「ふぅ…」

オレはコイツの背で安堵(あんど)の息を吐く。

コイツとは・・・体長７０ｍ越えの人を馬鹿にしたぐらい巨大なドラゴンの背の上なのだ。

名前はぁ…サファイアドラゴンのサファイア・・・。年齢不詳。

「レナよ、なんですぐに呼ばなかった？」

オレは自分の上にちょこんと座ってる死神の胸座を掴もうとする。

ってか、コンニャロ！

オレの怒りは

オレをクッションに使ったなぁ！！　が。２割

もちろん、すぐにコイツを呼ばなかった　ことが。３．１４１５９２（以下略）割

レナが憎いから　が。５割強

である。

ん？　円周率があったって？

気のせいだ…。うん、気のせいだ。

「・・・コメディーだからだよ～♪　イヤだなぁ～」

「ははははは。そうか。

このクソ野郎」

「サファイア落しちゃえ」

「ゴメンナサイ」

だんだん、コイツにオレの遊び方がバレたようなぁ・・・。

「はぁ～。とりあえず下りろ、重いから」

「あ～い♪」

「重力魔法・・指定重力空間作成（ロックオンエリアグラビジョン）」

はいぃぃっ！！？

レナの言葉と同時に、オレの周りを囲むように黒い球体に包まれる。

「ぐぎゃぁぁぁ

フルーツの詰め合わせが置かれたクソ長いテーブル。
そして、大きなソファー。
冷蔵庫にもありとあらゆる物が完備されていて、調味料も香辛料も完璧である。
さらには、ポテトチッ○スも、ファ○タなどのお菓子もドリンクも完璧・・・。

別室にはキングサイズのベット。や、ビリヤードなどの遊具があったり
カラオケ……映画鑑賞のタメの個室。
ありとあらゆる贅沢な物があった。

その一方で私は玄関に居た。

「でやぁ!!」

回し蹴りが入口(ドア)に炸裂するがビクともしない。

この、行動が5時間経過していた。

足も赤く腫れてる。

クソクソクソクソ!!!

自分の無力差に自分が許せなくなる。
せめて、和也みたいに強ければ……。

私は和也を赤子を扱うような強さをもつ義姉とは違う。

「・・・・・・・・・なんで、外側に鍵なのよ・・・・・・・・・・・・・・

」

それって、部屋の役割としてどうなのよ？

ツッコム暇なんかありゃしないか。

―んっ？

ふと、異変を感じる。

―声？

それは、幼い少年と大人の男との話し声であった。

声は聞き取れないから何を言ってるかは解らなかった。

すると、扉が開いた。「好機（チャンス）！！」心の中で思う。

私は一気に駆ける。とびらを開けた人物は本当に幼い……１０歳にも満たない少年だった。

「……気に入ってくれたかな？　キミの部屋は？」

あ――れっ？　視界が歪む。気がつけば側近らしき大男の右手が自分の鳩尾に食い込んでることに気がついた……。意識が飛んでしまいそうになるけど・・・私は、忘れる事がないであろう

少年の……恐ろしく不気味で・・・深い闇が見える……邪悪な笑顔を……

「！？」

なんだ？　今……胸騒ぎが・・・？

「カズ？　聞いてる？」

将がオレの顔を覗いて来る。

「いや、なんでもない」

と、オレは簡易に答える

「なら、始めるよ？」

将が全員の顔をオレ、レナ、如月の順で確認する。

「作戦会議を……ね」

まず、オレ等がやることは…ラミアちゃん達との合流。

じしつ、これは遅くても良いのだが…オレ達には残り２０時間という短い時間しかないため。

ラミアちゃん、ヴァン君、セフィリアとの合流を先決する。
理由は魅夜の情報を集める為に速めに纏まる必要があるからだ。

次には、当然……情報収集。大量のアガシオンを送れるほどの魔力をもつ者のこと。
確率は少ないが…魅夜のことである。
調べる場所はレナ達の町だ。

オレはこの間にデーモンさんに『あの黒フードの女の6人組』のことを、報告せねばならない

場所を突き止めたら……。オレと如月、そして将の出番だ。

やることは、『魅夜の事は二の次だけどその分犯人をボコボコにするザマス』だ!!

魅夜に聞かれたら殺されるけど。
・・・・・・・・・・・・・これは、極秘ですよ。

ついでに言うと
【発案】・・オレ
【レイアウト】・・将
【責任者】・・オレ
【製作】・・如月
【如月のカット&ヘアメイク】・・志穂

で、ある。
だから、決(けっ)して魅夜にバレてはいけないんだ!!

最後に帰って来たら…ベリーショートになった、如月の髪型を進化(エヴォリューション)

させる
それが、・・・・最後の仕事だ

「ちょぉおおおおおおおおっと、待てぇえええええええええええええい！！！！！！」

「なんだ？　如月？？　今更、作戦の変更は認められないぞ？」

「それ以前のもんだいじゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

むぅ、折角オレ等の奢りで志保のカットができるってのに。
勿体無い……。

「似合ってないもん」

と、レナ

「昔はもっとキモかったんだよ？　ロンゲでさぁ？」

と、将

「うわぁ。キモッ・・・」

と、再びレナ

「だとよ、『ハゲ』DE（で）後ろ髪にHEART（ハート）マークが似合ってるぞ☆」

と、笑顔でオレが如月に留めを刺す。

如月は泣き崩れた。

・・・・・如月……お前はオレ等のおもちゃなんだぜ？

オレ、レナ、将の顔がそう言っている。

【３４話　ルートA】とりあえず、コメディーを尊重して！（後書き）

レナ「ＨＡＰＰＹ　ＮＥＷ　ＹＥＡＲ！！」

ラミア「馬鹿。それはお正月でしょう」

レナ「私のＨＥＡＲＴはいつだって、こうなのさぁ！！」

セフィリア「それは、単なるお気楽なだけ？」

志穂「和也君が小学生の時に言ってたわねそれ」

レナ「和也と同類ぃ！！？」

魅夜「ガキの時には本当に無邪気でさぁ・・・」

志穂「戦隊ものの影響を受けてへんてこな名前を叫んでたっけ・・・」

レナ「ッ！！？」

ラミア「アンタは今もだもんね♪」

レナ「ソ、ソンナバカナコト、ナニイッテルノヨ、ソンナワケガアルワケ・・ネェ？　ラミア」

ラミア「動揺しすぎでワザとかわかんねぇ！！」

魅夜「グスン……あの馬鹿ァ。あんなにもアプローチしてるのにさ

？　さ？？」

詩織「諦めなさい。私が和也様を貰うから」

魅夜「それは、イヤー！」

志穂「私も、イヤー！」

レナ「なら、私もイヤー！」

和也（ならってなんだよ！？　ならって！！）

出歯亀でしゅか。

【34話　ルートB】3人の黒フード（前書き）

メリークリシミマス！

和也「クリシミマス！！？」

ええっと、密かにキャラクターの人気投票をしようと思っていますので
宜しかったら、感想と一緒にメッセージなどで送って来てください。
今のところ、なんとセフィリア1番人気で……。

【３４話　ルートB】３人の黒フード

―Ｒａｍｉａ　Ｄｙｕｍｉｎａ
ｓａｓｕｔｏ―

「ラミア……昨日から変な感じがしてたんだけど・・・」
「ええっ。アクレイアについて・・・ね」

ヴァンも気がついたみたいわね。
今、私達は＜アランド＞に居ます。

先に来た筈のレナ達が居なかったのには驚きだったけど・・・。
私達はアクレイアについて喫茶店で考えていた。

「……アクレイア・シュバルツ＝ゲイム」
「前、この世界に王の息子・・・」
「うん。それしか…考えられない」

前王・・ゲイル・シュバルツ＝ゲイム。
４，５年前に無茶苦茶な政治をやらかして・・『あのお方達』に刈られたはずなのだ。

「・・・。相手が大きすぎる」

ヴァンが弱気にそう、呟く
王には代々に渡って魔力。知力の殆どが子供の代に引き継がれる。
そして、ゲイルは……１２代目。
王の桁外れの魔力を１２代分もあるのだ。
そして、アクレイアは……１３代目のハズだった。

しかし、魔力が下がる訳ではない。

「現王じゃあ……力不足だしね」

「ここはやっぱり……」

「『あのお方達』のお力添えが必要・・・」

私達、3人の意見は纏まっていた・・・。

あとは、和也さん達に意見を聞いて……。

それからだ。それから決めるべきなのだ。

『あのお方達』に任せるのは。

―？　？　？―

「これは、お前等の不始末だぞ！」

延々と聞かされる上司の嫌味…。

そろそろ飽きて来た。

隣のヤツはとっくの昔に飽きてるみたいだ。

「だいたい、貴様等は……」

「わーってますよ。オレ等は『ここの』トップなんだから自覚を持ててでしょ？」

オレは、上司の言葉を遮(さえぎ)る。

何度も聞かされたってーの！

「怒りすぎ。甘いものが足りませんわね」

「ホナ。局長は甘いものが苦手なんだ、仕方ないだろ？」

「お前等ぁ！！」

机を両手で叩き立ち上がる。

もぉう、怒りすぎは身体に悪いんですよ？

オレの隣に居るのは水瀬歩奈実（みなせほなみ）。

そして、オレが神堂真琴（しんどうまこと）。ここのＮＯ．１である。

「ええぃ！！　貴様等の不始末は貴様等で終わらせてこい！」

横目でホナを見る。相変わらず無表情に見えるが……果てしなくメンド臭そうだ。

コイツとは長年の付き合いだから知っている。無表情なりに表情がある。

「へいへい。わーりました！！」

「・・・・・おやつは何ギルまで？」

ギルってＦＦの通貨じゃなかったっけ？

ってか、おやつかぁ。遠足以来だな。

「アホォ！！！！」

局長の怒号が耳に凄く響いた。

asuto―

・・・どうしよう？

「ヴァン……どうしましょう？」

セフィリアがヴァンに話しかける。まぁ、ここでセフィリアが『戦ったら』・・・被害がある

それは、私もそうだ。

「この先の広場までの我慢だよ」

確かに、広場まで行ければ・・・なんとかなるけど……。

「私は、我慢の限界よ！」

鎌を取り出して構える。

「ラミア！！」

ヴァンとセフィリアも立ち止まる。

流石に大きい……。だけど、公園までいったら・・・被害が大きくなる。

「ヴァン！　セフィリア！！　キマイラをここで押さえるわよ！！」

―Ramia Duminas

「ラミア！！　ここは街中で！」
「この先には私達とレナとの思い出が詰まった公園よ！」
「ッ！」

この先にある公園は…私とレナ…それと、ヴァンがよく遊んでいた公園がある。
アソコにはいろんな思い出があるから・・・。ここで、止める！！

「でも、魔法はぁ・・・」

そう、ここは街中である。
魔法を無闇につかったら・・・。町がボロボロになる。

「だから…セフィリアは刀。私は鎌。ヴァンはバックアップ！！」
「うっ・・・。
わかった・・・」

私の視線の先には・・・合成獣（キマイラ）が３匹・・・。

＜アクレイア様の名の元に、貴様等を捕らえる＞
＜大人しく従え＞
＜・・・・・・・・しゃらっぱぁ！！＞

一匹変なヤツが居たよ。
しゃらっぱぁ！！　ってなによ？

「ダレが……したがうかぁ！！」

＜ふん。死神の小娘がぁ！！＞
＜我等に勝てるとでも！？＞

＜ネコ耳萌えぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！＞

やっぱり、一匹おかしい！！
２匹が口から火炎を吐く。
１匹は突撃してくる。

「・・・・・・・・」

＜あぢぃぃぃ

＜よくも……やったなぁ！！＞

いや、だから焼いたのはアンタ等だから。

コイツ……なんかムカツクんだけど？

＜はぁはぁ……ツンデレも萌え＞

・・・・・なんだ、コイツも生きてたのか。

＜獅子王（レオ）の顎（ストライカー）！！＞

＜萌えろぉ！！　獅子王（レオ）の業火（メガ・フレイム・ノヴァ）！！＞

漢字がちゃうわぁ！！

「我、ここにて『鎌の意』を唱えん。我が鎌よ真の力を現せ！
『魔力（マジック）を切り裂く刃（ブレイカー）』！！」

私の鎌の一振りで火炎は消える。

次は、近戦攻撃をしてるヤツ！

「蒼き風は全てを払い除け紅き炎は全てを焼き払う。そして風は矢へと炎は矢を表なる守護をす
『炎嵐の凶弓（ファイアストゲムアロー）！！」

炎と炎がぶつかり合う。

―相殺？

２つの炎は打ち消し合う

いや・・・。

「疾風の矢（ゲイル　アロー）」

打ち消し合ったのは炎のみ。
炎の内側に存在した風の矢は残っていた。矢は真っ直ぐキマイラに突き刺さる。

「牙狼遂雷滅刃（がろうついらいめっじん）」

セフィリアの剣技が炸裂する。よし、あとはこのヘンタイだけだ！

＜アクセルクロー＞

そう考えた・・・刹那！
私にヤツの爪が炸裂した。

宙に浮いてしまう。しまった！　空中での方向転換なんて……！！

＜獄焔！＞

「水霊召喚！　盾なる鳥（ブルースシールドド）」

炎は相殺される。その間に着地。鎌を改めて構える。

＜焔帝・獅子王の焔喉（レオ　フレイムバースト）！＞

な―っ！？　後ろだとぉ！？

駄目だぁ……ヴァンの詠唱も間に合わない。

セフィリアの剣技もこれじゃあ間に合わないっ！！

瞬間、目を瞑ってしまった

「はぁぁ。果てしなくめんどくさいんだけど？」

「……ふふ。アメリカや外国ではオタクは尊敬する者よ」

「ホナみん。不思議ちゃんが売りなはずなんやけど？　マジな話しやな？」

3人の黒フードの人達が知らぬの間にキマイラを殺していた。

「アクレイア……か」

「何故なら1つの事に執着することは凄いとされてるから」

「続いてたんかい」

なに……？　この3人は？

【34話　ルートB】3人の黒フード（後書き）

レナ「・・・・・・・サンタさん、まだかなぁ～」

和也（どうする？　魅夜？？）

魅夜（どうするもこうするも、サンタさんの事を期待してるんだからなんとかしないとぉ……）

和也（レナさえ寝ればなぁ……）

魅夜（ねぇ、こんなの見たらサンタさんを信じてる人が見たら・・・。）

和也（困った）

魅夜（サンタさんかぁ……）

和也（ははは。お前にバレちまった事は驚いたよ）

魅夜（ううぅ・・。義父と母さんの使い魔になってサンタになってたなんてさ）

和也（ははは。それで、中学校2年まで信じてたんだもんな♪）

魅夜（アンタのせいよ！　アンタの！！）

レナ「Ｚｚｚ……Ｚｚｚ……」

続きはクリスマスのお話で！！

【35話　ルートA】VSキマイラ・その1！（前書き）

メリークリスマス。

人気投票を受け付けていますので、番外編、ルート？も含めた６０話目に
キャラクターの人気発表を目論んで……計画しております
なにとぞ、1票をください

【35話　ルートA】VSキマイラ・その1！

―Miyo Sibahara―

「う――っ？　んっ？」

目を開けた瞬間、見えたのは馬鹿デカイ天井と金色に輝くシャンデリア。
目がチカチカする――。迷惑だ。
そんな事より……なんで私は……ソファーなんかで横に・・・？

「おや？　お目覚めかな？　囚われの姫君」

パン。と、本を閉じる音と同時に聞こえた幼い少年の声。

「！！」

その言葉を聞いた瞬間、飛び跳ねる。
あの不気味な笑みの小僧だった。

「警戒しなくても結構。ボクはキミを拉致しただけ」

拉致しただけだぁ！！？　コイツ……苦手なタイプだ
違う！　『だけ』とはなんだ！？

「さぁてと、僕が仕向けた『ゲーム』の説明をしようじゃないか」
「ゲーム？　」

その単語に……私は胸騒ぎがするようになった。
女の勘だ……コイツ、普通じゃないことを考えている。
ニタリッ。と、不気味君の口が綻(ほころ)んだ。

―ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

「なぁ。街に着いたのはいいんだが……ラミアちゃん達はどう探すんだ？」

オレ等は今、将達と街中をブラブラしていた。
まぁ、街をブラブラしてりゃあバッタリ会うかもしれねぇからだ。

「女の勘！」

レナは誇らしげに自分の胸に手を当てて女の勘を主張する。

「ありもしない胸をそんなに誇らしげに主張されると困るのだが―！！」

「重力魔法・・」

「うわぁー！　うわぁー！　スミマセン！　レナ様は貧乳……美乳でございます！
けっして、貧乳なのではぁ、ありませぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇん！！」

オレの絶叫も虚しく、オレは重力に押しつぶされそうになった
怖いよぉ。女ってみんなこうなの??

「やれやれだね」
「まったくだ」

将と如月尻目でオレを見る
そして、うんうんと、まったく同じテンポで縦に動く。

なに、腕を組んで頷いてんだよぉ!!?

助けてください
目で訴える

イヤだね（な）。
と、視線を返してくる

お願いだから。
また、目で訴える

イヤだ
と、視線で返してきた

酷いヤツ等……。

「おい！」「なっ――！」
「早く逃げよう」「ちぃ！　なんでキマイラがこんな街に！」

？　何を話してるんだ？

「キマイラ！！？　」

レナがイキナリ大声をだす
うるせぇー。

「んだよ？　キマイラって？　」

＜作者の神獣（モンスター）講座＞
【キマイラ】キマイラは、獅子の頭、山羊の胴、ドラゴンの尻尾をもちて、口から炎を吐く、ギリシャ神話の女怪であります。火山地帯のリュキアに生息していたとも言い伝えられております。この怪物の父は、大地母神ガイアの息子で蛇のような怪物のテュポン、母は上半身が女、下半身が蛇であるエキドナなのです。テュポンは、ゼウスと世界の支配者の座を争って負けてしまいそうになった時に、キマイラが産まれたとされています。テュポンとエキドナの間には、ケルベロスやヒュドラなども生まれているので、キマイラも由緒正しい血統なのだ！　これにて―＜終＞―

「上参照」

レナよ、それは卑怯というものだぞ？
ってか、詳しいな。

「んで？　」
「なんだっけ？　」

作者の知識を聞いていたら本題を忘れちまったよ。
将も如月もそうらしい

「「「「ははははははははは。」」」」

４人がお互いを見詰め合って笑いあう

刹那―！

獅子がオレの目の前に出て来た

それは、獅子の顔を持ち、山羊の胴、龍の尻尾を持った獅子……

キマイラなのだろう。

「「「・・・

あああああああああ！！！！！！！！！！」

レナとキマイラの差は僅(わず)かになる。

泣きながら逃げてるがもぅ、無理だろう。

さらば、レナ……。オレにそんな勇気はない

それぇに、上手くレナを渡せば簡単にアクレイアの居場所まで行けるのだから！

さぁて、上手く捕まってくれよぉ？　レナァ？？

「将、如月。わかってるな」

「うん」

「へぇ！？　は？　あぁ！！」

わかってねぇだろ、如月よ。

「まぁいい！　行くぞぉ！」

「「応ッ！！」」

オレと将は全力で飛び跳ねる。

小さな家の屋根に乗っかる。さぁて、餌になってくれよぉ。

「紅牙(べにがれん)煉！」

如月の攻撃がキマイラに当たってしまう。

オレと将の視線はそれはそれは、呆れていただろう。

「ちぃっ！　馬鹿如月ぃ！！　レナを餌にして、アクレイアだかの居場所を突き止めるんだよんなことすらも、わからんのかぁ！！」
「衝撃の真実発覚ぅ！！」

しまった、レナに聞こえてしまったか。これでは、この作戦は不可能か・・・。
しゃぁないか。

オレはまた、地面に下りる。

「悪いなレナ。仕方ないからオレが残っからさ。許してくりぃ♪」

構えを取る

距離は、中距離……。この距離では相手が有利か……。

「ダレが許すかぁぁぁぁあああああああああああ
あああああああああああああ！！！！！！！！」

＜キマイラ４匹衆の長女である。オレに一人で勝てるとでも？＞
「だから、残ったんだよ。雑魚！」

レナは将が押さえてくれたので暴れれるぜ！
間合いを測って攻撃をはじめる

【35話　ルートA】VSキマイラ・その1！（後書き）

はい。キャラクターの人気投票をやりたいので、
ご協力おねがいします

【35話　ルートB】海かぁ…（前書き）

ただ今、人気投票をやっています。
番外編、ルート●なども含めて60話目に
人気投票の結果発表をやろうとしています。

どうか、お手伝いして下さい

【35話　ルートB】海かぁ…

―Ｒａｍｉａ　Ｄｈｕｍｉｎａｓａｓｕｔｏ―

「なぁ、まだアクレイアの居場所わかんねぇの？」
「慌てては落し物があるから」
「ホナみん、遠まわしすぎやさかい、落ちつこうとぉ」

なんだ？　キャラが濃いぞこの３人……。
鎌を持ってるってことは……死神？

しかも、なんだ？　このエセ関西弁は？？
それに、あの不思議ちゃんは？？

「……『四二神（しにがみ）』……」
「えっ！？　セフィリア？」

呆然としてる私を目の前にして、ヴァンとセフィリアが小声で話していた
『四二神』って……？　まさか……あの？

「え？　えぇぇぇ

「・・・・・うざっ」

リーダーらしき真中の男がそう言う。

じゃあ、まさか……かの人が『鎌の意』……『死乃恐怖の鎌（スケィス ブラッド）』の主（マスター）？

『四二神』のリーダー……神堂真琴（しんどうまこと）！！？

「私の電波にヒットした。ふふふ、マコちゃん？」

「・・・おい。ダレがマコちゃんだぁ？」

「まぁまぁ。場所がわかったことやしぃ、さっさと行こかぁ」

じゃあ、あの不思議ちゃんが……水瀬歩奈実（みなせほなみ）？

だったら、あの関西弁はぁ……セイガ・アルウィン？？

ってことはぁ……

「『四二神のスリートップ』」

「ほな、行きましょか」

「ホナ？　場所は」

「深い深い地面より深い深い」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

２人共頭を抱えた。

２人の心境が聞こえてくる。

真琴（地面より深い？　くぅぅ……。ホナのヤツ……！！）

セイガ（ホナみんの魔力探知の能力は使えんやけど……この不思議ちゃんが……）

などなど、本当に困ってるみたいだった。

「……海底」

「「そこだ！！　」」

セフィリアの言葉に2人共一斉に声をあげる

あぁ、確かに海底なら地面より深いか……。

さすがセフィリア。

「さぁてと、」

真琴様が鎌を私の首スレスレに置く。

目が……怖い……！

「……目的は同じようやけど……何者や？　」

「折角、マコちゃん困ってたのに・・・」

歩奈実様はセフィリア

セイガ様はヴァンに、私と同じ状態になっていた。

「果てしなくめんどくさいけど……

聞かせてもらおうかな？　これまでの……経緯をね？　」

なるほどなぁ……。
コイツ等は大事な友達（にんげん）をさらわれて追ってきたワケね。

困ったなぁ……人質が居るのかよ。
しかも、狙いはこいつ等……と、きたもんだ。
ヘタに手出しはできんか……。
それと……『雨宮』……？
『雨宮』ってどこかで聞き覚えが……？

気のせいか？　『雨宮』か……。
今度、調べてみるか。

「どうするんや？　マコちゃん？」

セイガがオレに耳打ちをする。

「マコちゃん言うな」

まぁ、確かにセイガの言うと通りだ。
人間にはあまり干渉することはできないのが、こちらの世界
この子等は……試験に落ちたタメ、人間界での義務的な修行が必要なタメ
干渉は許されている。

……まてよ……？

こいつ等は人間への干渉が許されてるんだ。

ここは、全部コイツ等に任せるしかないか……。
でもなぁ……。こいつ等の実力で勝てんのかぁ？
……無理だな……。

「あのぉ……？　『四二神』がなんで……アクレイアを？」

死神の娘が手を挙げるて、オレ等に対する質問を投げかける

「ゲイルを殺したのはオレ等だからだ。簡単に言うと、後始末だ」

オレは質問に答えると、なんだか、まだ納得してないような娘が居た

「はぁぁ。なにかな？　ケヴィン・ナイト・メイガスの娘」
「……『刈った』のではなく、『殺した』のですか」

ちぃ。勘のいい女だ。これだから、デュラハン族の娘は嫌いなんだ。
僅かな違いでもついてきやがる。

オレ達が居る路地に冷たい突風が髪を撫でるように遊ばれる

僅かながら『魔力』を含んだ風にこの場の全員の注意が風に
注意が向く。　それと同時……

『雨宮』の『正体』を『思い出した』

そうか……『鈴南』の兄か。いや……『もう1つの方』の……。

「まぁいい。着いて来い……。連れて行ってやるよ」
「・・・・・・・聞いたことは聞かなかったこと……」

余計なこと言うな！
ついつい叫んでしまいそうになるのをグッと堪えてホナの口を押さえる

「で、でも……」
「所詮は人間だアクレイアには敵わない」

ヴァンパイアの少年が他の人間を心配しているのだろうか？
オレに質問を投げかける。

なんでぇ、オレばっかりに……？
ホナに聞かないのはわかるのになんでセイガには聞かないんだ？

はぁぁ。果てしなくめんどくさいんだけどぉ。

「着いて来ないのならその女が死んでも良いってことだということだな」
「「くッ！」」

デュラハンは声を出さなかったが2人は立ち上がりかける

「……着いて行く」
「セフィリア……そう、だね」
「ヴァン！！　セフィリア！！」

2人は納得したようだな……。
問題は……この死神の女だな。

オレは女に近づく。

目には迷いがあるらしい……。

「お前はその人間達を殺す気か？」

「う！」

わかるよ……その気持ち……オレも昔は……。

「わかりました」

・・・・・・・・・死は、必ず乗り越えないといけないんだよ。

「ほな、いこっか♪」

セイガの言葉にオレは頷いて、場所へ向かう。

まぁ、海といったら……この世界で最古にして最深……最大の海であろう。

まぁ、ホナが深いって４回も言ってるんだ。

この世界にある４つの海の中で４番目…１番深いってことだろう

海かぁ……。

【35話　ルートB】海かぁ…（後書き）

レナ「人気投票の結果はもちろん私が1番!!」

和也「ははは。馬鹿だなぁ……断定トップはセフィリアだぞ？　3位？」

レナ「ムキー！　各下のくせいに」

和也「1票差だろ？」

レナ「納得いかない！　なんでアンタが私とたったの1票差なのよぉ！」

和也「魅夜とは3票、放れてるぞ」

レナ「ムキー!!　ヒロインは私なのよ!」

和也「はは。勝ちたかったら投票を待つんだな」

レナ「お願いしまーーーーーす!!」

和也「ほら！　もっと大きな声で！」

レナ「人気投票、お願いしまーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーす!!!!」

和也（ふふふ。和君の身体を乗り移ったかいがあったよ）

？？？（けっ。ダレの身体を使ってるんだよ？）

（しまった！！？　コッチのを排除するの忘れてたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！）

以上、和君の身体に乗り移った作者でした

神童真琴……作者が自分をイメージして作ったキャラです
作者の口癖の「果てしなくめんどくさいんですけど」……はい、作者と極似です

水瀬歩奈実……不思議ちゃんです。はい。

セイガ・アルウィン……関西弁の知らない作者がこんなものかなぁ？　と、想像した者です

【36話　ルートA】VSキマイラ・その2（前書き）

キャラクターの人気投票を実施中です。どうか、1票
アナタ様のお気に入りのキャラクターに投票してください

【36話　ルートA】VSキマイラ・その2

一気に間合いを詰めて、顎に蹴りを一撃。

反撃を避ける為、横へステップ。

＜ふっ。先手必勝か＞

効いてないかぁ……。やっぱり？　手応え無かったもんな。
って、ことはオレの出方を疑ったってことか。

＜次は、こちらだぁ！　獅子王の紅蓮弾（レオ　ファイアーボール）＞

口から大きな火炎弾が真上に放たれた。

「はぁん。方向感覚すらねぇか！」

飛びあがり横っ腹を蹴って、背中に乗る。
尻尾のドラゴンが、オレに牙を向くがアッパーをして怯ませる。

＜甘いな……小僧＞

「？」

＜炸裂（バースト）＞

獅子がそう、オレに伝える。

なにを――！！

真上で炸裂音がした。上を向くとオレの頭上にあった先ほど奴が放った火炎弾が
爆発――同時に無数の火の球が降り注いだ。
馬鹿め！　ここは、お前の背中だぞ！！
当然、お前にもダメージがあるに決まって……。

「なっ！」

そう、考えていたが……推測にしか過ぎなかった。
火の球はオレの周囲を囲むように――

浮遊していた。

＜悪かったなぁ……操作ができるんだよ＞

衝撃の新事実。

それは、卑怯と言うのではないのか？
いいや、せこいなのか？　セコイヤチ○コレ●トなのか！？

「ちょぉ！！」

四方八方から火の球がオレに向かって飛び交う。

上ッ！

すかさず、上に飛びあがる。

うむ。普通すぎだな。

ゴォウ！！　と、火の玉がぶつかり合う。

ふふふ。古典的な手だろう……？
オレの目はおかしくなったのだろうか？
ウソだろ？

＜言っただろ？　操作が可能なんだよ＞

ぶつかり合った炎は渦を巻いて炎の竜巻としてオレに迫って来た。
簡単にいうとぉ……。炎は相殺されずに逆にまた、１つになってオレに迫ってきたわけだ。
もちろん、勢いは（当社比）１００倍……。

「うそぉぉぉぉぉん！！！」

＜ふん。火炎旋風（フレアストーム）＞

炎の竜巻はオレのスニーカースレスレにまで至った。
空中での方向転換は不可能。オレに翼があるワケがない。
そして……。足スレスレには炎の竜巻。

これが……マジでの魔術か！　ラミアちゃんや、レナ達と対魔法のために修行したのに
……。無意味なのかよ……。オレの実力は・・・魔法には届かないのかッッ！！

強くなりたい。
魔法もクソみたいなくらいに。

強くなりたい。
約束を……いや、レナを守りたいから。

強くなりたい。
みんなを……魅夜、レナ、ラミアちゃん、ヴァン君、セフィリア、如月、将、志穂さん、阿野、トモも！！　どいつもこいつも……守るために！！

だから、こそだ……。
だからこそ・・・・・・・・・。
強くなるんだ！
大切な人達を……。
守ために！

だから……コイツを越えるんだ！！
オレの……これからのタメに！！

準備はいいか？　オレ？？
準備ができたらいっぞ！！

「うおおお

く！！

『呼んで』

脳裏に女性の声が響いた。

『呼んで』……？

ダレだ？　レナ達は安全地帯に住人と行ったはずだから、レナではない

ならば、ダレ？

いや……『人なのか？』

考えてる暇はない！　行動しろ！！　雨宮和也ぁ！！

その瞬間。頭の中に言葉が過る。

「我、ここにて『鎌の意』を唱えん。我が鎌よ真（まこと）の力を現せ
『運命の悪魔（ディステニー　デビル）を切り裂く刃（ブレイカー）』」

刹那――

オレの右手に『重い何か』が手に触れた。

考える間も無くオレはそれを炎の竜巻に向かって振りかざす。

＜なっ――！！　馬鹿なぁ！！＞

オレが『何か』を振りかざした瞬間。

炎の竜巻は跡形もなく消え失せた。

オレは地面に着地する。

「なんじゃこりゃ？」

オレは自分の手にあった物に驚愕する……。

か、鎌でしゅか？

オレが手に握っていたのは、草を刈るあれでもなく、忍者がつかうアレでもない
タロットでよくみる『死神』がもつ『大鎌』というものだった。

全体的に黒くて、刃の部分が悪魔の翼みたいな刃をした漆黒の鎌だった

＜グゥ！　貴様……死神だったのか＞

「違ぃげぇぇよ！！　オレの名は……雨宮、雨宮和也だぁ！！」

オレの呼びかけに答えるかのように、鎌は漆黒の鎌が光出す。

明るい色であった。漆黒の鎌には似合わない淡い明るい光。

輝きと、いう表記が正しかったのだろう。

しかし……何故か？　何故か……『漆黒の鎌を持つ雨宮和也』に最適の輝きであった。

そして、この鎌がその名の通り『運命を切り裂いた』のであった。

でも、それは……まだまだ先の話しである。

だが、ここでも……雨宮和也は炎の竜巻で『焼かれる』という『運命』を……。

『切り裂いた』のだった。

「さぁてと、鎌（コイツ）の事を考えるのは後だ！

まずは……。テメーをぶっ殺す！！」

【36話　ルートA】VSキマイラ・その2（後書き）

魅夜「今回の私の出番はぁぁ！！？」

なし！　です。

レナ「名前だけだよ私ぃ！」

そーですね

ルートAは、和君、将君、ピンクマン如月、レナ、魅夜、アクレイアが主です。

ルートBは、ラミアちゃん、ヴァン君、セフィリア、真琴、歩奈実、セイガです。

わかっていますと思いますが、一応です。

累計アクセス数が４００００を越えましたぁぁぁぁあああああ！！

プロローグルートBの読者数が２０００ジャスト！！

そして、中間報告です

１位　セフィリア様　１２票
２位　魅夜しゃん　１０票
３位　レナちゃん　６票
４位　和也君　５票
５位　ラミアちゃん　２票
６位（同票）キマイラ&作者&志穂１票

ついでに言いますと1票貰ったキマイラはあのオタクキマイラです。

はい、後書きなどにしか出てこない作者に1票入れていただき仰天でございます

以下、0票です

【37話　ルートA】VSキマイラその3！　どないせぇちゅうねん！　by東

冬休みの・塾の宿題……それら全てを片付けたオレは敵無しなのだ
ぁぁぁぁぁぁああ！！！
ははははは！！　更新遅れてスミマセンでした。
マジスミマセン。はい、ここ2，3日不眠不休(ウソ)で片付けた始末です。

和也「国語4　数学？　理科5　社会5　英語？」

魅夜「技術家庭4　保険体育3　音楽？」

いやぁぁぁぁぁぁ

【37話　ルートA】VSキマイラその3！　どないせぇちゅうねん！　by東

ハッキリ言うぞ……。
これって意外と重要だから。
うん。人間には慣れって必要なんだろうね。
それでもって、初めての事はどうしても不器用なんだよね。
まぁ……。それが、今のオレの状況なワケよ。ん？　なんでだって？
そりゃぁ……、簡単なことだぜ？　当然、オレの右手にある鎌だよ……。
正直に言うぞ・・・。オレは……
鎌の使い方なんか知んねぇーんだよ。

＜どうした！　その『鎌』は飾りかぁ！＞

前足のワン・ツー。
続いて、火炎弾という順番で攻撃してくる。

オレは『鎌』なんて使った事なんかないもん。仕方ないじゃない。
竹刀や鉄パイプなら喧嘩で幾度も使ったけど……警官相手に。
もちろん、警官を半殺し以上の９／１０殺しかな～？
危うく殺人罪で捕まるところだったぜ♪

などなど、世間様の前で言えない事を考えながら避けていた。

まぁ……、適当にやっちゃるか。

一閃。鎌を振る、同時にバックステップで回避する。

＜ぬぅ！　温いわぁ！！＞

キマイラに多少のダメージを与えたが全然平気らしい。
ちぃ！　固てぇヤツだな。

＜獅子王（レオ）の炎（フレア）＞

口から炎を吐く。まぁ、ドラゴンが吐く炎だね。うん。
・・・。・・・。・・・。なんだ・・・？

またもや、オレの目はおかしくなったのか？
そうなれば、これまでの事は夢なのかもしれない。
夢でなければ、オレの目はイカれたのだろう・・・。
なんでかって？　オレの目の前にちっこい『悪魔』見たいな変な奴が居たんだよ
オレの目の前で本？　いや、ノートか？　それを見ながら背泳ぎの状態になっていた。

うわぁ。コイツ、ムカツクなぁ……。

オレの視線に気がついたか？　悪魔は驚いた表情になる。

『そいつを刈るの』

また、頭の中に女性の声が響く。
……刈る？
刈るってコイツを？

そないいえば、炎は？
オレは視線を炎に戻すと……＜ゴォウ！！＞と、うねりながらオレ

に直撃スレスレ。
ってか、オレの鼻先にあったぜ♪　あぁ～、鼻が熱ちぃぃぃぃぃ
！！

当然距離をとる。そして、オレ……大悶絶。
泣きたい……。この歳になってなにをしとるんだ？　オレは！！？

ってか……ｗｈｙ？
なぜ、炎は『止まっている？』

炎はうねりをあげながら止まっていた……いや、微弱ながら動いて
いる。

『運命（さだめ）の空間。アナタの運命をきめるわ』

また、頭の中に女の声。

「テメーは、んだよ？」

『アナタの右腕にある物よ』

「はぁ？　鎌（コイツ）？？」

『そうよ、鎌の意思……まぁ、私がこの鎌っていうかぁ……』

「とりあえず、お前はコレってこと」

『うん』

「でもって、『運命（さだめ）の空間』ってなにさ？」

『簡単に言いますとぉ。アナタの運命を決める空間だね』

「だかぁら、それってばなに？」

『えぇぇ？　詳しいことは知らないもん』

「てめぇの事だろ」

『アナタの『死』か『生』を決めるってことよ』

「説明できるじゃねぇか」

『うん。できた』

「テメー。捨てんぞ？」

『ギャース！！　それだけは止めて御主人様！！』

「オレは鎌（キサマ）にご主人様など言われる筋合いはねぇ」

『止めて！　捨てないでください！！　捨てたらアナタ、死んじゃいますよ～！』

「テメーの呪いか？」

『だーかーら！　ここは、アナタの運命を決める空間なの！』

「だから？」

『運命を変えない限り……死（んじゃえばいいのに）』

「小声でなんか言わなかったか？　テメー？」

『……心の狭いお方』

「捨てるぞ」

『それより、前』

「あん？　って！！」

説明？　メンド臭くてしてなかったが、炎が徐々にオレに近づいてきたのだ。

＜巻き戻し＞　＞　＞　＞

『テメーは、んだよ？』

『アナタの右腕にある物よ』

この状態で炎は微弱ながら動いていた。でも、距離はまだまだ十分あった。

細かい描写を入れるならば。和也は右手に持っている鎌を直視していた。

声はだしてはいない。精神内での会話だったからだ

『はぁ？　鎌（コイツ）？？』

『そうよ、鎌の意思……まぁ、私が鎌っていうかぁ……』

『とりあえず、お前はコレってこと』

『うん』

ここでは、まだまだなんとかなるレベルの距離であった。
しかし、完璧な直撃コース。
それでもって、キマイラも追撃をしようと、接近。

『でもって、『運命の空間』ってなにさ?』
『簡単に言いますとぉ。アナタの運命を決める空間だね』
『だかぁら、それってばなに?』

炎とキマイラの追撃はおよそ、あと、１０m弱
いまだに、和也は鎌を睨んでるだけでなにもしていない。

『アナタの『生』か『死』を決めるってことよ』
『説明できるじゃねぇか』
『うん。できた』
『テメー。捨てんぞ?』
『ギャース!!　それだけは止めて御主人様!!』

どうやって投げ飛ばそうかと、思考錯誤に投げ方を考える。
その間にも炎とキマイラは確実に近づいてきた。

『オレは鎌(キサマ)にご主人様といわれる筋合いはねぇ』
『止めて!　捨てないでください!!　捨てたらアナタ、死んじゃいますよ~!』
『テメーの呪いか?』
『だーかーら!!　ここは、アナタの運命を決める空間なの!』

炎はすでに焚き火をするくらいの距離。
でも気がつかない、朴念仁、鈍感男の雨宮和也。
乙女心にも気がつかない男……。熱さにすら気がつかない。

『だから？』
『運命を変えない限り……死（んじゃえばいいのに）』
『小声でなにん言わなかったか？　テメー？』
『……心の狭いお方』
『捨てるぞ』

やっと、捨てるのに最適な、野球で言う横投げ（サイドスロー）。
それで、投げ様とした瞬間。

『それより、前』
『あん　って！』

そんでもって、自分の鼻先三寸で、キマイラと炎がそこにあった……っと。
やっとここで、鈍感超朴念仁男・雨宮和也はついに気がついた。

どないせぇちゅうねん！！

『だから、あの悪魔を刈ればいいの』

どういうことだ――？
ってか、まずは避けることが大事だ！
バックステップで距離をとって、鎌に呼びかける。

（おい！　なにすればいいんだよ！？）

（せやから、あの悪魔を刈れば『生』、攻撃を食らえば『死』）
（ってことは、ムカツク悪魔を刈ればいいんやな？）
（そやそや）
（（なんで、関西弁？））

まぁいいや。
鎌を持ち替えて、悪魔を探す。
……いた。

だが、まったくの逆方向。
笑ってる？

遠くてわからなかったが、口がすこし綻(ほころ)んでいたようなきがした。
＜ＣＬＯＳＥ　ＳＰＡＣＥ(へいさくうかん)＞

「！！」

背中に……『なにか』が触れた。
それは、どんなに押しても動かない壁であった。
安易な想像だと体育館の四方の端っこである。
横にも後ろにも炎とキマイラの追撃を避ける事は、不可能。

じゃあ、本日２回目のこれを言おう……。
よろしかったら、デスク前のあなたも。

どないせぇちゅうねん！！

「なっ――――！　じゃあ、アンタの最終目的・・・最初からの目的って……」

相変わらず、頬を綻ばせている少年を睨みながらたずねる。
明らかに殺意を込めた視線を送って。
私の質問に対していっそうに頬を綻ばせる。

「そうだよ。本当は僕はレナ・フォード＝ライズ・ハールドなんかには興味がない
そうだよ、僕の本来の目的は……『雨宮和也の殺害』だよ」

再確認ではあったが、私はまた……。絶句した。
なんで？　なんで和也がこいつ等に狙われなきゃいけないの？

「くくく。不思議そうだね？」
「……。」
「キミをコッチに惹き入れたのは本当はレナを呼ぶためじゃない。
目的は雨宮和也なんだよ？
最も大切なキミを助けないといけないからねぇ？
理由は、レナにしたのは本来の目的がバレないこ・う・じ・つ。
これで、ダレもが雨宮和也を疑わないからねぇ？
これで、最も大切なキミを助けるために雨宮和也はノコノコ出て来るってことだ。
そして……この『ゲーム』で勝てば……『雨宮和也の死』だ！
もちろん、僕が負けるワケがないねどねぇ！！」

なにを、長々と……。
ってか、私が最も大切？？　そんなワケがない。
いくら私がアプローチをかけたって、薄着で迫ったって……
思い出しただけでも切実だ。

風呂上がりでバスタオル1枚の状態の私すら軽くあしらうアイツだよ？
露出度が高い服で寄って、2人きりの状態でもさぁ……無視だよ？
いくらアプローチしたって……アイツは……。

『早く服を着ろ、風邪引くぞ』とか、『ガキじゃあるまいし抱きつくな阿呆』

だよ？

どうよ？　私に気があるワケないじゃん。
どうせ、1番の友達とかでしょ？？

私なんか……相手にされていない。
試行錯誤いろいろタメしたよ？

『雨宮和也二次元興味調査』
和也のアッチ系の本の割合　写真8　マンガ2
［後日談］発覚と同じに消滅

『雨宮和也メガネッ子興味調査』
メガネッ子委員長に頼んだが全くの無反応。
［後日談］メガネッ子自信喪失。

『雨宮和也ロリコン調査』
近所の中学生に頼んだがこれもた無反応。
［後日談］和也のお気に入りだと勘違いされて、学校で恐れられる存在となった

『雨宮和也男性機能喪失調査』

やっぱり、男であった。
［後日談］特になし。ってか、安心した。

『雨宮和也塾女趣味調査』
買い物仲間の女性に頼む
［後日談］夫に見られて危うく離婚そうどうに。しかし、興味が無かったご様子

『雨宮和也マザコン説』
塾女の件で自然消滅。

『雨宮和也ホモ説』
将に頼んでいるがそういうのではないらしい。
［調査中］

などなど……。本当に和也は女に興味がないのだろうか？

興味が無かったらマジでヘコむ。

はっ！！　本題からずれてる！！

「だぁかぁら！！　アンタが和也を狙う理由ってなによ！？」
「『復讐』だよ！！　『僕はアイツの変わりじゃないんだ』ってねぇ！！」

復讐？？　コイツは和也の代わりじゃない？？　どういう事？？
私は瞬きすらする事すら忘れるぐらい呆然となった。

コイツ……『なに？』

「そうだよ!!　僕はアイツのォ!!　雨宮和也の代わりじゃぁないんだよォォォ!!
証明するんだ!!　そうだよ、だから、証明するんだ!!
僕は僕だって!!　そうすれば……『鈴南姉さんも』認めてくれるハズだ!!
僕は……雨宮和也の代わりじゃないってネェェ!!!!」

イキナリ吼える。何処かわからないところに向かって。
私はそれをただただ……それを眺めるだけだった。

『コイツ……普通じゃない』

そんな、当然のことだけしか……頭の中にしか・・・なかった

【37話　ルートA】VSキマイラその3！　どないせぇちゅうねん！　by東

アレハボクノ、セイセキでハナイデスヨ
イエ、ホントウデスッテ。

将「カズ？　？　って？？」

和也「さすがにそれを言うとだめだからな
まぁ、数学と英語の基礎をしっかりと冬休み中にやってきなさいだ
ってよ（笑）」

それをいっちゃぁぁ、お終めぇぇよ！！

「「「トラさん」」」

【36話　ルートB】海……ねぇ。（前書き）

年始に多種多忙な用事がありまして贈れてしまいました…
では、少し遅くなりましたが……がっは！

『明けまして、おめでとーーーう！！！』

レナ「和也？　さっき作者を蹴り捨てなかった？」

和也「なぁに、心配いらないさ」

魅夜「たとえ、死んでも書かせるから」

「「なぁ～？」」

レナ「二人とも“S”だね」

【36話　ルートB】海……ねぇ。

―Ｍａｋｏｔｏ　ｓｉｎｎｄｏｕ―

俺はまぁ、ブルーだ……。理由は聞かないでくれ。
俺の目の前にはまぁ、海があるんだよね。
そりゃぁ……当然なことだ、ココに向かって来たんだから。
なかったら困る。

「……ふふふ」

うわぁー。コイツ笑ったよ。今後の展開が見えてるってかぁ??
不自然きまわりない。まったくもって……いや、こいつは知ってるんだ。

そう……『俺の弱点』を……。

いや、コレは俺が悪い訳じゃないぞ。俺の設定は作者と同じ性格などなど。

イコール、弱点も同じなんだ。

「……ふふふ」

こんにゃろ。絞めたろか??　アァァ??

そんな事を考えつつ砂浜に下りる。

海……ねぇ。

「どうするんですか？」

ヴァンパイアの少年が俺に視線を送りながら質問する。

その視線に感じるのは後ろめいた罪悪感。人間達に対する物なのだろう。

「水中移動（ダイビング）を使うのよ」

と、珍しくホナが答える……いや、コイツが言った理由はわかる。

それは、俺のことだ。

俺の唯一無二の弱点。

「……ふふふ」

俺を見て笑うなよ。果てしなくめんどくさいんだけど。

いや、果てしなく怖いんですけど。

「水中移動（ダイビング）の魔法は学校ではまだ……」

と、死神娘（ラミア）。

「はぁぁ。わぁったよ……基本の説明……ホナ。頼んだ」

？　あんな不思議ちゃんに任せていいのかって？

セイガは駄目だ……馬鹿だから。っーか、説明できねぇだろ。

お、俺？　お、おれはぁ……そのぉ……。まぁ、アレだ。
今日はお日柄が悪かったってことでたのんます。

「「「……」」」

頼むから、俺に救いを求めるネコみたいな目で俺をみないでぇぇ！！
３人共、ホナの説明に不満があるらし。
それなら、セイガを見やがれぇ！！

「……ホナ、不思議ちゃんモード禁止だからな」
「それは、ラーメン屋にフランス料理を頼むようなもの」
「それを言うなら、無茶な注文……じゃねぇぇよ！！　やれよ！
やってくれよ！！」

俺の絶叫は遠くまで響いたであろう。多分、ココから２００ｍぐらい？

危ない危ない。危うくホナのボケに乗ってしまうところだった。

頭を抱えながらそう思う。

「「「……」」」

いや、そんなに言うなら自分がやれよ的な目で俺を見るなよ。
いや、助けを求める目をしたって無駄だよ。
いや、本当だよ。絶対。
いや、ホナ……なんで禁書に登録されてる黒魔術の本なんか――

「ホナーーーーーーーーーーッ！！！！　んで、禁書なんか持

ち歩いてんだよ！！
今ごろ、魔書館は大騒ぎになってるだろぉぉぉがぁ！！」

すかさず、作者が差し出したハリセンでホナの頭を叩いて、禁書を取り上げる。
そして、すかさず威嚇。そりゃあ、バックに獅子がみえるくらい。

「マコちゃん……私の愛読書だよ」
「なに勝手に禁書を持ち出してるんだよ？　アァァ？？」
「『四二神』の調査って言ったら楽チン」

と、ピースサインしながらホナが無表情で言う。
コイツ……賢いな……違ぁぁぁ

「なにがなんなんだか」
「……」
「まぁ……喧嘩するほど仲がなんだかって言うからね？」
そうして……一行に始まらない……水瀬歩奈実の水中移動魔法（ダイビング）のレッスン
一向に止まらない……四二神のトップと、ＮＯ２の喧嘩
っと、言っても主に次々と出す禁書に対するツッコミだが。
そのやり取りに呆れる一同。
「「「「はぁ～」」」」
一斉に溜息を落したのだった。
―？　？　？―
「……」
そろそろか……。早くこいよ！！　神堂真琴ォ！！
『この前の借り』はン万倍で返してやるよォ！
早く来い……来やがれ！！
テメーに復讐する為に坊主（アクレイア）に手を貸したんだ！！
もちろん来るよなぁ～？　神童真琴ォォ！！
「ひゃひゃひゃひゃひゃ！！！　くぅーひぃひぃひぃ！！」

イメージできる。今の俺様が…点神堂真琴をヤツ裂きにする光景がなぁ！！
早くこいよ。早く現実にしてくれよォ！！
なぁ！　テメーの血を浴びてぇンだよォォ！！

「『コレ』さえあれば……。ぎゃーはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！！！」

コレさえあれば……神堂真琴すらも殺れる！！
俺様は……無敵なんだヨォォ！！

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｉｎｎｄｏｕ―

「ぶうぇくしょい！！」

ううぅ……。いくら６月でも海の辺りは寒いな……。
でも、くしゃみなんかでる寒さでもないし……。
まさか……
何処かの美女が俺の噂を！？
なーんてな。俺の地位は『四二神』のトップだ、誰かが噂してても不思議じゃねぇか

もしかして、あのストーキング野郎か？　懲りないヤツだな……。
いくら秘策があろうとも俺の足元にも及ばないのに……。

まぁ、俺が強すぎるのか☆

って、天狗になってる暇はないんだよね。
俺もそううかうかできないんだよね……。
そろそろ……いや、これは遭えて推測にすぎない……。

ホナも真面目にやってるからいいけど……さぁて、俺はどうしようかなぁ～？

はぁ～。海……ねぇ。

―？　？　？―

「……えぇ～～～～？？？」
「お嬢様！！　だから、今日の外出は許可されてません」

むむぅ。相変わらずケチだなぁ～。ジィはぁ！
いいじゃん！　ちょっとくらい！！

折角、兄妹の対面だって言うのにさ！

私はクソ長い廊下をゆっくり歩きながら。ブツブツ文句を言いながら……。
しまった、声にでていたか。

※これもでてまーす♪

仕方ない。こうなれば……アレを使ってでも出て行ってやる！！
そして……ムフッ♪

※コレも出ております。

「ふぅぅ……。我、ここにて『鎌の意』を唱えん。我が鎌よ真の力を現せ！
『空間（エリアル）を切り裂く刃（ブレイカー）』！！」

取り出した鎌を手にとって何もない『空間を切り裂く』
まぁ、私に外出するなってのが無理なのよ♪

「ほなら、行って来ま～す♪」

「あっ！　鈴南お嬢様！！」

ふふふ。爪が甘いな、ジィ！！
※詰めが甘いの間違い。

……そうだっけ？

【36話　ルートB】海……ねぇ。（後書き）

では、改めまして。明けましておめでとうございます。
では新年ってことは無視して、雑談聞いてください。
昨日、携帯が壊れました。はい。
修理代にお年玉が1／3消えました。
昨日、姉にお年玉の約半分消えました。
昨日、データが壊れた年賀状の住所録を1から直してました
昨日……寝てません。
では、よい御年を

【３８話　ルートＡ】前途多難なお昼【前編】（前書き）

お久しぶりでぇ――

和也「遅いわぁ！！」

魅夜「また私の出番がなくてよ！！」

和也「言ったら駄目だろそれ！！」

くぅ……４０℃以上の高熱に魘されて、更には文章力を着ける為に、コタツに入りながらぬくぬく地の文（描写）の練習をしたというのに！！

和也「ぬくぬくはだめっしょ！！」

ウソだよ、ウチにはコタツないもん

和也「根本的なことを！！？」

地の文の練習をしてるのは本当ですよ？

でも、まだまだで……。こんなのだけど、３８話をお願いします！！

【38話　ルートA】前途多難なお昼【前編】

―Ｒｅｎａ　ｆｗｏ―ｄｏ　ｒａｉｚｕ　ｈａ―ｒｕｄｏ―

凄い量の魔力を含んだ爆風に近い風がビルの屋上にまで届いた。
そんなに低くも高くもない5階建てのマンション型の屋上である。

なに!?　なにがあったの?

吹き飛ばされない様に重力の空間を作り出してふんばるものの、魔力を含んだ風・・・。
否、爆風に近い風で吹き飛ばされそうになる。

なによ!?　いったいなんなの?

なんか知らないけどキマイラとは出くわすし。
和也には囮にされる作戦を考えられるし……いくら私が可愛いからって。

ん?　誰か心のなかで「おい!」ってツッコミを居れなかったかしら?

しかも、和也は和也で鎌を取り出したんだよ?　死神でもないのにさ。
確かに和也の人間離れした実力はセフィリアにも通じた。

『人間』では『不可能』なはずなのに。
私達と人間ではあきらかな能力の差がある。

それは、何をしようがBクラス以上には勝てない差である。
それは『絶対』なのである……身体能力、五感のどれを取っても遥かな差がある。

それを覆したのが『雨宮和也』なのだ。先ほどまでキマイラと戦っていた。

仕舞いには『鎌』まで『召喚』した。
さらには、『鎌の意』すらも唱えて『鎌の真の力』も引き出したのだ。

これは、あきらかに人間じゃない……。いくら私が馬鹿でもわかる……。

『雨宮和也が普通の人間ではない』ってことがね☆

・・・・・・ゴメンナサイ、無理に明るくしました、怒らないでね読者様♪
・・・・・・そんな目で見ないで……ヒロインだから。

だれか、小島よしおのモノマネを心の中でしなかった？
聞こえたよ！　ラミアじゃないけどさ！

そういえば、ラミア達は大丈夫かな？

一方では一匹のキマイラが萌えを叫んでいた。

それより……和也は？
風も落ちついて私は先ほどと同様に屋上のフェンス越しから和也達の様子を覗く。

先ほどまで居た位置には……雨宮和也の姿は無かった。
それは……『ある、勝敗』の結果が物語っている……。雨宮和也は……。

生きていた。うん、起きたらまた冥不へ送ってやろう。
ちょっとでも、涙を流した私がアホらしい。

そうなのだ、やられたのはキマイラの方なのだ……。どう言うことかは、知らないが。
今の和也は駿におんぶされて寝ている。そうなのだ、気絶とかならまだしま……。
この朴念仁和也はスヤスヤ気持ちよさそうに寝ているのである。
・・・・・・。顔に落書きしたい。
でも……マジックがない！！

？　魔法じゃないよ、サインペンのことだよ。油性の。

そこで、私達は更なる問題の前に立とうとしていた。
なんの情報もなくて数時間さまよっている。街はキマイラが暴れたことで荒れ放題
誰も構ってはくれないのだ。私が『異種』でもある為もあるだろう。
そんな中、うん。おなかへったの。

「ううぅ……今は何時？」
「この世界の時間は知らないよ」

肩をガクッと項垂れながら、将と話す。
もう……お腹へってしかたがない。
そういえば、朝ご飯食べてなかったな・・・。

うっ……。海鮮チャーハン食べたい。

そんなお金はない。

こうなれば……料理をするしかないか。
料理とかいうより……私のは料理（マテリアル）？？

「仕方ない、背に腹は変えられない……。誰か？　料理できない？」

将があきらかに引きつった笑顔でみんなに聞く。将も朝ご飯を食べてないみたいだ・・・。
仲間が居た。

「あぁん？　オレは無理だぞ、基本的にコンビニの余ったヤツだし」

「私はぁ……ヒロインだから、王道の」

まただ!?　また、小島よしおのモノマネを心のなかでやったね!!
王道のヒロインは料理ができないのよ!　それが、萌えってことなのよ!!
ドジッ子じゃないのにドジをするのも……
？　それはムカツク??　わ、私は・・・・・・。私は……。

てへっ☆

にゃはははは。そうだよ、料理が出来ないのをヒロインだからってさ、
自分に言い聞かせていたよ!!　そうだよ!　言い訳だよ（泣）!!
はははは。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「どうした?　将?」

駿が将を覗き込んで聞く。
おかしいな?　板前の将なら料理ぐらいは……。

「誰も、作れないんだ」
「「はっ?」」

「Ｌｅｔ’Ｓ　」
「Ｃｏｏｋｉｎｇ！！」

はい！　始まりました！！
料理が出来ない者による無理して料理をすると、いう……なんとも危険な料理講座がねぇ！　はぁーはっはっはっはっはっはっはっはっはっ！！　マネしたら行けませんよ？

「いや～。駿シェフ、今日は何故にこんな事態になったんですか？」
「まずは、馬鹿が寝てることが痛かったです。
それに、まさか……板前である将が料理を出来なかったとわ……。
まったく、使い物にならないクズだったからですね」

「駿、ちょっと」
「あ、……」
「・・・・・・」

ずるずると音を発てながら引きずられていった。
笑顔の将に……。鬼神とかした・・・ね。

「あぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

如月駿　享年１６歳　死因不明　死去。
さよなら……。
短い間だったけど、パートナーが居て楽しかったよ？
さよなら……駿。

「ええっと、作者が用意した食材はぁ……。」

マンドラゴラ　５個
魔法の薬　３錠
バファリン　１０錠
ポーション　２本
魔法の粉　９９個
フェニックスの尾１個
魔法のランプ　１個
トリカブト　３個
キマイラの肉　１２ｔ
ラ〇ウ　１人

で、ある。

誰か！！　ツッコミ役は居ないのぉ！！？
ちょっと！　なんで、ラオ〇様がいるのよ！！　ものすごいオーラを発してるんですけど？
なになに？　〇オウ様を調理するなら倒してね☆　だって？
ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！

こんなにも可愛い私がラ〇ウ様に敵うわけないでしょ！！？
あれだよ？　覇王だよ！？

でもって、次はぁ……。マンドラゴラに、トリカブト……。
野菜炒めにしよう。

火は魔法を使えばＯＫだし。

マテリアルスタート
料理開始。

錬金術で作ったフライパン（？）原型すらなにかわからない。
物にキマイラの油を入れて火を通す。

やべぇよ、マンドラゴラ。泣き声聞いたら死んじゃうよ。
仕方ない、次回ってことで！！

あれ？　また、心の中で「おい！」ってツッコミを……

【38話　ルートA】前途多難なお昼【前編】（後書き）

更新・・・次第に遅れま――

和也「遅れるな！！」

【37話　ルートB】海面でねぇ……（前書き）

遅れて申し訳ぇぇぇぇえ！！

和也「黙れ！　このクズがぁ！！」

げふぅ！！

魅夜「死になさい！　死んで読者様にお詫びを言いなさい！！」

死んだら喋れませんって！　コラ！　和君！　実行に移さない！！

和也「昇……

こ、この体制はぁ――――！！

龍拳ッッ！！！！！！」

ぎゃはぁぁぁぁあああああ！！！！！

【37話　ルートB】海面でねぇ……

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｉｎｎｄｏｕ―

「ざけんなぁっ！！」

鉄と鉄がぶつかり合う音があたりの静けさを一瞬にして奪う。
奪った2人はお互いにもう一度間合いを取ってから詰める。

ヒュン！　っと空気を切り裂く音が1つ。
それと同じにまたもや鉄同士がぶつかり合う

「てぇめぇぇえは、しつけぇぇぇぇぇえええ！！！！！！！」
「久しぶりなんだから楽しもうぜェェ！！！！？？　神堂ォォ！！！！！！！」

人からすれば黒い閃光。またもや、ただただ、音しか聞こえない程度だ。
常識外れの運動力。人間ではないのだ。
死神……。西洋でいう、死の使い魔であるのだ。

相変わらず……しつけぇぇ！！

そもそも、ここは人間の世界ではない。
俗に言う魔界である。人間は居ないがその中で極めて人間らしいのだ。
容姿や身長……殆どが普通の人間と変わらない。

違うのは絶対的な身体能力。
そしてなにより……＜鎌＞の＜召喚＞を＜契約＞すればできると、言う事

具体的に言えば自分の血を決死量である１／３以上失われるっということだ。
最悪の場合……２／３失われる。血の契約とも言われている事だ
それは、代表的な事だ。他にも幾つかの契約法があるが、最も過酷ではないのがこの、血の契約である。

そうして、鎌を持っているこの男は『四二神』と呼ばれている
４２人の選りすぐりの死神である。実力は魔界の中でも１、２を争う組織である。
その中の中心核。リーダであるのが、現在戦っている、神堂真琴（シンドウマコト）である。
四二神の中でも彼に敵う者は居ない。
ＮＯ．２　ＮＯ．３が纏めて掛かってきたとしても彼には傷一つたりともつけれない

神堂真琴は・・・・・死神の中で化け物なのである。

そうして、その彼が今、対立しているのは……。
エル・ミクトランス
これといって、名家ではない。
しかし、神堂真琴と対等に戦っている。
それは、エルがかなりの実力者だと言う事だ

「弱いくせぇぇによぉぉ！！！！！」
「うぜェェェ！！！！！」

エルの攻撃で真琴は吹き飛ばされる。
着地と同時に真琴の回りに＜魔方陣＞が生成される。

魔方陣は一般の魔法では用いられない。それは、身に着けている神具（しんぐ）と、呼ばれている幾つかの魔方陣の代わりとなるが、魔方陣の代わりとなっているからだ。
それは、こちらの世界で＜技術＞の意味である＜錬金術＞で作られた本体の複製（コピー）である。
それらは＜装飾品（アクセサリー）＞と、して用いられている。
代表的なのは、指輪や首飾りなどである。
大抵の装飾品を用いる魔法は自分の魔力に比例して下級（ビギナークラス）・中級・上級（マスタークラス）・達人級に分けられる。
ハイクラスまでは魔法名を言うだけで魔法を使えるが。
マスタークラスの魔法は
聖霊との一時的な契約や詠唱。
詠唱の際にはその意味を完全に理解していることが必要である

「混沌の礎に因りて忌々しめし聖者の封印。
我が力により開放し。我が力と成らん事を。
力は我が糧（かて）となり我が敵を抹殺す。
聖霊王降臨・冥界の王（ハデス）！！」

金色だった魔方陣は詠唱と同時に徐々に黒く……漆黒に染まっていった
金色が光を失い。黒く黒く漆黒に漆黒に染まっていく。
魔方陣の上には青白い炎が現れる。
漆黒に染まった魔方陣の上にある炎は目立っている
それは、似合わないっと言うわけではない。
・・・不気味なのだ。

「ちぃ！！」

現れる前に！　っと、エルは一気に攻撃を仕掛ける。
しかし、それはおかしな物であった。
左手。彼の左手は義手なのだ。
義手っといっても電磁銃（レールガン）っという、艦載銃に用いられる銃である。
威力は絶大な物である。魔力の分だけ威力が上がるのだ。真琴と対等に戦えるほどの魔力を持っているのだ。核ミサイル……その何万倍ものの破壊力を誇るのだ。
鉱と雷の魔法の組み合わせでできる最強の義手だ。

レールガンの理屈はリニアモーターカーと同じである。
超強力な電磁石を使って金属の砲弾を打ち出す艦載兵器である。
エルの場合は、鋼鉄の義手に『雷』の魔法を流す。
『鉱』の魔法で弾を創り出して放つ物だ。

放たれた弾はオレンジ色に光る槍如く真琴に迫る。

「！」

エルは驚愕の色を隠せなかった。
超強力な電磁石によって放たれた弾がゆったりっとしか動かなかったんだ。

通常なら音速の3倍……エルの魔力も加わって１０倍の速さである。
それが、ゆっくりとしか動いてないのだ。

何故？　なんで？　何をしたんだ？　っという表情がでている。

そうしている内に真琴の頬が緩んだ。

「Ｊｕｄｇｍｅｎｔ」

そして、小声でそう言った。

コトの起こりは遡る事数十分前。

海面の上に６人の人影がある。

１つは、死神の少女。ラミア

２つ目は、吸血鬼（ヴァンパイア）の少年のヴァン

３つ目は、騎士（デュラハン）の女性、セフィリア

４つ目は、関西弁の使う死神。セイガ

５つ目に、無表情＆不思議ちゃんの死神。歩奈実。

最後には歩奈実に抱き寄り小刻みに震えている最強の死神……真琴である

「マコちゃん……ふふ」

「わ、笑うなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

どんなに完璧であろうが、人には必ず弱点っというものがある。
そして、この小刻みに震えているの『四二神』のトップである……
神堂真琴である。

「うっ……」

ラミアは出来るだけその姿を見たくなかった。
それはそうであろう、『四二神』は死神の憧れである。
もちろんその中で神堂　真琴は『四二神』のトップ。
全ての死神が憧れているこの男の……

「（ガクガクブルブル）」
「マコちゃん……可愛い」
「ぶっ殺すぞ！！　ア〝やめて！　落そうとしないで！」
こんな姿など……見たくなかったのであった。

「！」

真琴は“何か”に気がつき、歩奈実を抱きかかえて後ろに跳ぶ

そして、先程に真琴達が居た場所から一本のオレンジ色の光の槍が
雷を纏い海中から飛び出て来た

「なっ！？」

ラミアは驚いた。

海中からの突然の攻撃だ、奇襲にも程がありすぎる

それと同時に莫大な量の魔力を感知した。

“魔力の色”は紫……死神の攻撃である。と、ラミアは感づいた

「……マコちゃん」

「あぁ、お前等は先に行ってろよ。アイツの狙いは俺だからな」

「わかった」

真琴の言葉にセイガは頷いた

それと同時に水色のシャボン玉らしき物がセイガの身体を包み込んだ。

それは、歩奈実、セフィリア、ヴァンと続いた

水中移動魔法（ダイビング）である

「……」

ラミア達は口を摘んだように話さなくなった

あの電気使いが攻撃をしてきたら？　そう考えるだけでおぞましくなる

実力の桁が万位違う……そんなのは、相手にするだけ無意味なのだ

絶対的な力の差がある

「……出て来いよ、ストーキング野郎！！」

最後に響いたのは、ちゃぽんっと、水の中に沈む音と、神堂真琴の叫び声であった。

こういう場面でのみ、真琴はここが自分が苦手である海だという事も忘れられる。ってか、忘れらてる

足場が揺れる海面での戦闘が勃発したのだった

どこから来る？

精神を集中させて敵が出て来る所を伺う。海中に居るっと言う事で出て来る場所は行くて数多（あまた）である。

大きな波が来た。そこから魔力の気配がした
そして、自分の真下からも魔力を感じた

５０対５０（フィフティーフィフティー）か……

確率で言えば……海中。
不意打ちにけの中で適してるのは……波の方！

神具の力で風の刃で波を切り裂くと同時に青年が姿を表した

エルである
薄緑の髪、アイドル顔負け以上のイケメンで四角のアンティークなメガネが特徴的で背は駿くらいはある。そして何より目立つのは左手の義手である

ロッ〇マンのロックバスターに似ている。

そして耳には十字架のピアスを着けているのも特徴の1つである

「見つかったか」
「甘いんだよ、雑魚」

【雑魚】「悪かったなぁ？　意気地（チキン）無し野郎」

【意気地無し野郎】「けっ、馬鹿で品性のかけらも無い馬鹿との付き合いはほとほと飽き飽きするぜ」

【馬鹿で品性のかけらも無い馬鹿】「けっ、頭のイカレた連中を纏める最もイカレたクズが何を言うんだが？」

【頭のイカレた連中で最もイカレたクズ】「……これだから、品性の無い口だけのエセ死神はぁ……」

【口だけで品性の無いエセ死神】「あァん？　ざけんなよぉ？
歩奈実の忠犬マコ公」

【歩奈実の忠犬（しもべ）のマコ公】「てェんめェェ！！　お前こそ負け犬のくせいに！　首輪つけんぞ！？」

【負け犬】「あんだと？　弱虫真琴が？　海が怖いなんてガキがなぁ！？」

【海が怖い弱虫真琴】「う〝……そんな俺に一回も勝てないクズがなにを言うか」

【そんな真琴に勝てないクズ】「ぐぐぅ……！！」

口論、勝者は神堂真琴であった。

そして、間を開けるコト無く、なにも交わさずに鎌を取り出して、ぶつかり合ったのだった。

爆音が響き渡る。鉄同士がぶつかり合う音だ、次第に真琴が居た辺りから海面が凹んだ。

クレータが両者の攻撃によってできた凄まじい風がぶつかり合ったタメである。

「てめェェに、斬り落された左腕の借りだァァ！！！！」

「……・・・・・・」

口を僅かに真琴は動かすが何を言っているのかは、わからない。

そして、エルは、右腕から１０億Ｖの電気を放つ。

ゴォウ！！　と、音を発てながら真琴に迫る。

はず……だった。

「なっ！！？」

その雷は数十分後のレールガンと同じであった……。

「俺の得意な術式を答えてみろよ」

「……

暫らく間が開いた。

時空魔術かぁ！！？」

「ご名答！」

鎌を振るい、雷は脆くも切り裂かれて消える。

「時空魔法・スロウってなぁ！」

それは、ＦＦである。

【38話　ルートB】ただ……切り裂くだけだ【序】（前書き）

ううっ……。スランプ気味だ。

【38話　ルートB】ただ……切り裂くだけだ【序】

―Ｒａｍｉａ　Ｄｈｕｍｉｎａｓａｓｕｔｏ―

「しつこいよねぇ……金魚の糞野郎は」
「おーい、本音がでとるでぇ？　ホナみん」

……世界は広いんだ。そんなのは、頭では理解していた。
でも……、最強だと、右に出る者は居ないと思っていた『四ニ神』のＮＯ．１に、近いほどの魔力を誇る者ま……居るんだ。もっと……世界は広いのかもしれない？　もしかしたら、神堂真琴の上を行く人も居るのだろうか？　簡単に神獣を殺す程の実力者を……超えてる奴も居るのかもしれないんだ。

「ラミア？」

ボーっとしていたラミアにヴァンが心配した顔で覗き込む。
まだまだ、深海に行くのには魔力の練りや集中力が足りないタメに３人で、大きな術式で作ったのだ。
魔力を練るのが得意なラミアが土台を作り
繊細な技術を持っているヴァンが形を作る。
そして、魔力の高いセフィリアが強度を高めるのが３人の役割である。

「あ、なんでもないよ」
「うん。元気なら良いんだよ」

うむっ。相変わらず女の子みたいだな？

ヘタしたら普通の女子よりも可愛いんじゃないかな？
ヴァン……和也君に、ジャ○ーズに売られないようにしなさいよ。
彼女の中にある、雨宮和也のイメージを知りたい。

「……レナ達は大丈夫かな？」

珍しくセフィリアがハッキリ口に出した。
……和也君には悪いけど……魅夜さんは私達が助け出します。
……それに、狙いはレナなら……尚更だ。

「大丈夫よ……和也君達が付いてるでしょ？」

そんな暗い考えを他所に、私は……笑顔でセフィリアに返した。
それに、ヴァンも「うん。そうだよ」っと、頷いた。

「……そうね」

先ほどまでの弱々しくて似合わなかったセフィリアの目が、私の言葉と同時に、何時ものクールな目に戻った。そうだよ♪　セフィリアにはそれがお似合いだよ。

ッ！！！？

全身に悪寒が走る。途轍もない魔力を感じとった。
恐怖？　憎悪？　違う……？　これは……。

＜コロス、ボクノ邪魔ヲスル奴ハ……皆殺シダ＞

凄まじい『殺気』だ。

心を読む力をもつラミアがその心を読み取るには大きな『思念』がある程度必要なのだ。
微弱な思念はかなり近づかない限り読み取れないが。
強力な思念ならば、遠くへいても読み取れるっということだ。

単純に言うと『音』と同じである。ボリュームが低いと近くに居ない限り気がつかないと
ボリュームが高いと遠くにいても聞こえるっと言うものだ。

アクレイアの居場所までは歩奈実さんが言うにはまだまだあるそうだ。
それでも、コレほどの思念の大きさは初体験であった。
恐怖。それが……ラミアを襲った。

コイツは、尋常じゃない。キケンダ……。

「ラミア？」

小刻みに震えるラミアをヴァンは心配そうに声をかける。
しかし、反応はいくら待ってもなかった。

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｉｎｎｄｏｕ―

「俺の勝ちだ」

鎌を首元（多分これです）に付きつける。
髪は海の水で濡れて黒のローブも真琴の華奢な身体のラインがわかるくらいだ。

そんな格好で真琴はエルを見下す。

「くっ……そォォォ

コイツは……やべぇぞ！！！

実力は……俺の本気と五分……ホナ達が危ねぇぞ、こりゃあ！

「ふふ……お前の負けだよォ、神堂ォ……」

お前のその甘さが……死を招く。
お前がアマちゃんを卒業しねェ限り……おめェの負けだよ。

あの御方の力量は……この程度じゃねェぞ。もっと、恐ろしい物があの御方にはあンだよ。

俺だから解かる。アイツも近づけば解かるだろうよ……。
絶対的な力がな。

それ以前に……俺は……。
あんなガキに殺れるんてェ、俺が許さねェぞ。神堂ォ！　お前を殺るのは俺だ。
そして、前王の敵討ちだ。それ以前に腕の事もある……。
それに……アイツの事もある・・・・・・。

・・・・・。『レナを守ってやれなかった』
俺が未熟だからだ、そして、弟も……俺が止める！
アクレイア……お前に神堂はやらせねぇぞ！

―？？？―

「あれ？　ここはお城かな？」

見渡せば石造りの城である。所々に不気味に蝋燭（ろうそく）の炎が揺れる。
そして、尚且つ私の前に居る中ボスみたいなフランケン。

「……イキナリでぇぇぇえええすかぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああ
あああ！！！！！！？」

鬼ごっこ（？）のスタートである。

―Ｒａｍｉａ　ｄｈｕｍｉｎ

ａｓａｓｕ―

「う……？」

誰かの悲痛な叫び声で意識を盗り戻した。中学生くらいの女性の声だ。
頭が痛い？　頭痛？　違う？
石の感触？

目を開けると高い高すぎる天井と揺らめく蝋燭の炎であった。
少し、先を見据えると……。

傷だらけのヴァンとセフィリアが横になっていた。

「！？」

慌てて起き上がる。

先にはラミアが居る、石造りの通路の先には西洋の玉座の間みたいな、派手な椅子と赤いカーペットの空間があった。

その先には、小学生くらいの少年に押され気味の、『四二神』のＮＯ，２　ＮＯ，３の姿が、視界に入って来た。

「ヴァン？　セフィリア！！」

ラミアは２人に駆け寄る。

いろんな所が斬られて肉までくっきり見える。

治癒魔術は苦手だけど……しかたない！

「我は祈り。そして願う……天の恵みよ
光の温(ぬく)もりよ。我は、願いを聞き入られたし
我は願う。我が前に居し傷を負いし者達に、女神の祝福を我は願う
！！
治癒魔法・完全治癒(リザレクトヒール)」

２人の身体からいろんな所にあった切り傷が消えて、綺麗な肌になる。

治癒術をかけたからって、すぐに起き上がる訳ではない。意識がないのなら、意識が戻るまで起きるわけではない。魂と身体が意識に繋がるまで寝たままなのだ。外傷はなくっても意識が戻らない限り、

起き上がらないっと言う訳だ。

とりあえず、暫らく安静にしておいて……。私は……。

「人間を探しておけ。奴は俺達が押える」

後ろから声が聞こえたので振りかえると、そこには『四二神』のトップが後ろに居た。

中肉中背のまぁまぁ普通の容姿の男だ。

「ケリはつけるぞ！　アクレイア！！」

「マコちゃん、バトンタッチ」

「任せたで、魔力が回復したら加勢するさかい！　なんとかしとって！」

「神堂真琴……」

2人は既に私の近くに来ていた。

速い……見えなかった。

「スケィス！！」

真琴の右手に鎌が『召喚』される。

それと、同時にアクレイアも刀を抜く。

3mはあろう長い日本刀である。

2つがぶつかり合った。

【３９話　ルートA】前途多難なお昼【後編】（前書き）

実力テストも終ったっと言う事で落ちついて更新できますね。

【39話　ルートA】前途多難なお昼【後編】

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍ

ｉｙａ―

「どういうことだぁ??　レナー??」

尋常では無いほどの殺気を放つ和也（?）が土下座をしている将とレナ。横になって生き絶えた駿を睨みつける形となっている。駿は和也（?）の怒りの攻撃で最初に死んだのだ。

「ま、心配停止ぐらいなら作者が直すだろう」っと、吐き捨てて。

「そ、そに～」

「その～っと、言いたいのか?　ソニーっと言いたいのか?　どっちだゴラァ?」

静かながらも人間ではあり得ないほどの殺気をだして、和也は問う。

「ＳＯＮＹ!」

「まず、Ｏなのか、〇かハッキリしろ」

Ｏだったら、著作憲法違反に反するから。

〇だったら伏字だし許す……

と、思ったか!?　クソ野郎!!

「Ｏ(オー)!」

と、馬鹿神(レナ)はハキハキと答えた。

っと、同時に作者愛用のペンギン形の目覚し時計が飛んできて、レ

ナの顔面にクリーンヒットした。ナイスじゃないか。作者よ。

小学校2年の時からの相棒を投げるとはえげつないな。ある意味可愛そうだな。

「女優は……顔がイノキ……」

イノチじゃボケなす。

そう言い残しレナも地に落ちた。

「さぁて、将君♪　詳しい説明を……（ワントーン落す↓）してくれるよなぁ？？」

あきらかに笑顔の筈なのに限りなく笑顔とは遠く放れた声で言い放つ。

今にでも食ってしまおうと思っている悪魔の形相すら超えている。

「じ、実際に料理（マテリアル）したのはレナちゃんであって……僕はなにも……」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ちぃ！　白（しら）を切り通すつもりか？

将の場合は後々が怖いので保留だ、根に持つタイプだから尚更だ。

「……将、馬鹿共を起せ。とっちめてやる」

「は、ハイッ！！」

≪画像が荒くなっておりますので前回の続きをやります≫

うむぅ……マンドラゴラかぁ……？

難しいにゃ。叫び声を聞かずに調理かぁ……。

彼女にはマンドラゴラを使わないっという選択肢は無いのだろうか？

「う～ん。とりあえず抜くか」

随分と行き当たりばっかになると考えられる。
レナに行き当たりばっかでは無い事を密かに願おう。
策があるはず……
『うわぁぁぁ

が良かったタメか？　『全部』がフライパンモドキの中に入る。『全部』がだ。
当然が如くフライパンに山盛り（エベレスト）になった

「・・・・・・・・・・・・・・・
万物を変換させよ！
我の願いをかなえんことを、我は想像す！
鉱物式魔術・錬金術（マテリアル）！」

フライパン（？）が光に包まれ見る見る内に形が変わって言った。
形は……超底が深い（推定１ｍ弱）程の鍋ができた。それにポーションを注いで水も大量に入れる。

計画変更。味噌汁にしよう。

とりあえず、味噌はぁ～？
【キマイラの脳味噌】
これでいこぉう！！

脳味噌を投入。更に異臭が強まる。

【バフ〇リン】投入

グツグツっと、味噌汁（に限りなく遠いい味噌汁）が煮えたぎる。

「……」

流石のレナもマズイっと気が付いてる。
危険だバイオ兵器だ。

そんな事を考えつつ残りの全てを投入する。

色はドス黒く。スライム（懐かしい）みたいにネバネバだ。

全身に汗が噴出す。

だ、打開策は！？

そもそもあんな材料ではまともな物は作れない事に気がつかない。

！　そもそもアレ等ではまともなのは作れないじゃないか！

その通りです

……打開策は見つかった！

そう言うとお椀に（レナ曰く）味噌汁を盛ると、ラ○ウに持って行く。

「・・・・・・・・・・・・」

「どぅぞ、ラオ○様」

それをラ○ウはグビッっと呑んだと、同時にこの世を発った。

ケンシ○ウすらも苦労した相手なのに……。

まぁ、打開策はラオ○様を使えば良いのよ！！

ラオウ様の生き血を味噌汁に投入。

「・・・・・・・・・・・・」

もっとヤバイ物になっっちゃったぁぁあああああ！！！

ヤバイよ!?　だって味噌汁にモザイク掛かってるんだもん!!!!
それに……なんでもない。

様子を見に来た将が倒れていた。

と、とりあえずご豊福をお祈りします。
※ご冥福です

……。ティッシュを鼻に詰めててよかったぁ。

「って、物を作ってね……」
「笑顔でしばくぞゴラァ♪」

レナが料理の説明してるとそれを遮るが如く和也（？）が怒りだした。
それと同時に和也（？）はイヤな予感がしていた。

まさかとは、思うが――――。

「ううぅ～っ。完成した物の毒見を和也に食べさせたの」
「うん♪　笑顔で殺すからな♪」

『オレの身体』をこんなんにしくさって♪

現在の和也の身体は手の平サイズにデフォルメされていた。
さらに追撃っとなったのは和也の性別が反対になっていたことだ。
そう、現在の和也は女である。

これで解かるように身体を小さくされたうえに、身体を女性の身体にされたのであった。

コレを怒らないのは鑑真くらいだぞ、ゴォラァ！！！？

※ガンジーっと言いたいらしい。

煩いぞ！！　作者！！

将の手の平で暴れる和也を尻目にレナは笑いを堪えるのに必死になる。

「Ｔｈｅ　ｐｌｏｗ　ｆｉｓｔ！！」

※和訳しますと。

Ｔｈｅ　Ｐｌｏｗ・・・北斗七星

Ｆｉｓｔ・・・拳

しかし、人形サイズなタメ全然効かない

「か、カズ？　英語にする意味は？？」

「うるさいうるさいうるさーーい！！！」

あまりにもショックだったタメか？　和也は泣きながら怒りだす。

「和ちゃん♪　ぎゃーはっはっはっはっはっはっは！！！！！！！！！！」

何時の間にか復活していた駿が和也を見て笑い始める。

「うをぉぉぉぉぉぉぉぉおおおおおおおおお！！！！！！！！！」

雨宮流無差別格闘術　破壊の業　破壊龍の混沌舞！！！！！！」

駿に飛びかかる和也を右手で首の付け根を掴み盗る。
当然、和也は宙吊り状態っとなる。

「どぉうしたぁ？　和ちゃん？？」
「ぐをぉぉぉぉぉおおおおおおおお！！！！！！」

如月なんかに！！　如月ごときにぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！

和也は涙を堪えながらもがく。

「駿、駄目だよ」

和也から出される殺気に流石にマズイっと思ったか？　将が止めに入ると思った・・・が。

「積年の怨みを晴らすぐらいやんないと」
「裏切り者がぁぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！！！」
「あ、じゃあ私も♪」
「レナーーーーーーーッ！！！！！　テメェもか！！！！！」
「駄目だよォ和ちゃん♪　男みたいな言葉を使っちゃ♪」
「コロス　オマエラゼッテーコロス！」

帰って来た時の恐ろしさをこの3人は知らなかったのであった。

【39話　ルートA】前途多難なお昼【後編】（後書き）

次回はルートAです。
VSキマイラとの最終決戦です。

あ、愛用の目覚まし時計がペンギン形なのは本当ですよ？
男が……って引かないでくださいね！

【４０話　ルートA】ＶＳキマイラ・その４（前書き）

５０話目ぇ！！　でも、４０話（笑）
１０話も違うってなんやねん！

でもって、人気投票の結果発表までも残り１０話♪
ドシドシ！　お願いします。

【40話　ルートA】VSキマイラ・その4

迫り来る業火。逃げ場を失ったオレ。
無常にも目標物には届かない。
なにをどうするべきで、なにをどんな風にやれば良いのか。
そんな、自問自答を繰り返す。打開策、それは自分が考える理論ではない。この炎をどうにかするなど無茶苦茶である。だが、オレの理論に反する物??
それが『ある』んだ。
推測する、やはり辿りつくのはこの『鎌（ディスティニーデビルブレイカー）』これしかない。
鎌……初めて使う武器だ。使い道もわからない。
けど。
ヤルしか……ないんだッ！！

「鎌ッ！　どうしたら良い？」
＜あの炎を何とかして、キマイラの追撃をなんとかしながら『悪魔』を刈る＞
「答えになってねぇ！！」

そんなのは、解かり切ってるんだよ！
そもそも、こんな『壁』さえなけりゃぁ……
ん？　……『壁』

そもそも、この空間に『壁』は無かった。
少なくとも、この位置に『壁』など無い。
だとしたら…点作られた？　だとしたら。
なら……。オレの推測が完璧ならば…。
この炎を避けれて……更には刈れるッ！

「鎌、『炎に全身を包まれて焼けたのなら負け』なんだろ？」
＜うん＞
「戦うべきは『悪魔』だろ」
＜そうだよ。アレほどの熱なら……突撃しても焼かれちゃう＞
「ばぁろぅ。オレがぶち壊すのは……」
炎が後僅かな距離に迫る。
「野郎（アクマ）が『作った』くだらねぇ『壁』だぁ！！」
鎌で『壁』真っ二つに切り裂かれた。
そして、崩壊するように他の部位も崩れていったと同時に和也は炎から距離を取る。
「Ｗｈａｔ（なに）！？」
「悪ぃな……英語は赤点組みなんだよ！」
トンだ検討違いだったな。オレは炎に立ち向かう事しか考えていなかった。
だが、この『空間だけは違う』
鎌に確認を取ってて良かったぜ。考えれば簡単な事だ……。
この空間では、『キマイラや、炎など関係ない』
いや、少なくとも関係はあるが……『向かい合う義理はない！』
オレがこの『空間』でぶっ飛ばすのは……悪魔（ヤツ）だけだ！！
「Ｄｅｆｅｎｓｅ（ぼうぎょ）　Ｗａｌｌ（へき）」
直線状に無数の横に広い壁が和也の追撃を避けるかのように幾度も建ち並ぶ。

透明な『壁』　だが、感覚でわかる！！　なんとなくで、確証はないが……わかる！！
自信？　違う。　勘？　違う。
これは……オレの、＜スケベ＞だ！！

「ごぉら！！　クソ鎌ぁぁあああ！！！」
＜一応コメディだからさ！＞
「お前、マジでぶん投げんぞォ？　ゴォラ？？」

シリアスムード立派にＢｒｅａｋしやがって！！
あ～ぁ……ムカツク。
どうやって捨ててくれよぉか？

「使い方は違えど……行けるだろう！
雨宮流無差別格闘術　剣（つるぎ）の型　閃光烈駕迅！！」

鎌を勢い良く地面に叩き突ける。
それに伴ないＲＰＧゲームの必殺技のような真空波（？）が次々に壁を破壊して行く。

１つ目の壁を破壊したと同時に前へ踏み出す。

壁を全て突き破るものの、悪魔には一歩届かない。
悪魔の反撃である炎が無数、和也を目掛けて飛んでくる。

怯むもんかぁッ！！

前へ前へ１歩ずつ踏み込んで行く。
１歩。もう１歩……。
もうちょっと前に！！

……なにより……魅夜わ助けるタメに！！

前へ前へ進んで行く。

多少当たろうが、多少火傷しようが……。

関係ねぇッ！　オレは……これからのタメにこそ、戦うんだ。

こんな所で死ねねぇ！！

いや、死んで堪るかッてんだ！！

前へと着々と進んで行く。

てめぇの魂……刈らせてもらう！

「うをぉぉぉ

こんなバラバラの攻撃……簡単に読める？

「これで……ッ！」

結局致命傷にすらならなかった炎わ遮り、鎌が悪魔の真上に到達する。

まだ、ナゾが多いが……。これで一旦、この世界も終りだぁ！

黒い一閃が悪魔を2つに分けた。

身体が右と左に別れる。血が吹き出し、Yシャツが少し濡れてしまう。

相手は内臓やその他の器官もまだ、ピクピク動いている。

目玉も飛び出して、これもまた、細く動いていた。

悪魔も殺した、ならば残すは……。

「終りじゃねぇか」

現実（リアル）でのキマイラ……。アイツとも決着（ケリ）をつけねぇとな。

そう、思考を巡らせてるとこの空間が崩れ去った。

目の前には裂かれて自分に火の粉すら発てずに鎌で裂いていた火炎が入った。

なにが――――？

わからない。なんで、イキナリ炎が無効化されて、キマイラの追撃

すら防いでいた。

起こってたんだ？

オレはこの炎を『避けてた筈』なのに……。

なんで、目の前に炎が……？

考える。事態をなんとか受け入れるタメに。

尽力を尽くす。

そうか、アレはあえて、空間が違うんだ。

『あちらの世界』で如何（どう）しようが『こちらの世界』には関係無いんだ。

あれは、簡単なギャンブルみたいなもので窮地に陥った時にのみできる事なのだろう。

『あちらの世界』で、悪魔を刈れば・・・

『こちらの世界』で、「生」

『あちらの世界』で、悪魔に負ければ……

『こちらの世界』で、「死」

無論、『あちらの世界』での最終的な居場所などは、『本体』のある『こちらの世界』には関係してない。関係があるのは「生」か、「死」かである。

って、ことか……。

＜むっ！？＞

……よしッ！

頭の整理も終らせてすぐさま反撃の態勢に持ち直す。

「手数なら負けねェよ」

顔の下に飛びかかり顎を蹴り上げる。

そういえば……死神は鎌さえ持てば普段の何十倍の実力を出せるのよって、レナが言ってたっけ？
なら……。お前に賭けるぞ。鎌ッ！
＜合点！＞

顎を蹴られて怯んだキマイラに鎌で右足に鎌で攻撃。したと同時に間合いを取る。

＜グゥゥ……ッ！＞

キマイラが苦痛の音（ね）を挙げる。

怯んでいる事には変わりはない。
距離を取ったのには理由がある。

「くらぁえッ！！　破空斬（ハクウザン）！！」

鎌を横に振るい、真空の刃がキマイラの鬣を数本持ち去った。
次は当てるとの警戒で。

＜我は引かぬぞ＞
「残念。なら……死ねッ！！」

一気にキマイラの懐に近づいて切りかかる。が、先ほどは相手も油断していたっと言う事で相手に傷を付けれたが今となってはキマイラも和也の実力を見返していたタメ全く効いていなかった。
キマイラは反撃と、右足を和也に向けて攻撃をするが、和也はそれを回避するが、手も付いてしまったここぞとばかりにキマイラが火炎を吐く。それを、なんとか回避して、もう一度、キマイラを相手に突撃をする。攻撃も多少のダメージを与えてるようだが、微動だにしない。

木鶏みたいなヤツだな……。

その姿に一瞬そう考えるがキマイラの更なる追撃により閉ざされる。

クッ……物理攻撃が効かないのか……？

「破空斬ッ！」

相手の身体を目掛けて真空破を放つ。直撃と同時に大きなダメージを受けたかのように怯んだ。
よしッ。効く！

隙あらばっと、間合いを詰めて鎌で顔面を切り裂く。返り血が服にこびりついた。

＜グガァァァァァァアアアア！！！！！！！！＞

キマイラは悶絶する。地面に倒れ込んだ。

「・・・・・。チィッ」

顔に斜めに深く傷を負いながらもキマイラは立ち上がろうとする。
意地か？　それ以上の物を和也は感じた。

何故……立ち上がる？

もぉう、勝敗は決したというのに……。何故……。

＜和也！　油断するなぁ！＞

鎌が頭の中で和也に危険を知らせる。
和也の真横には先ほど撃退した炎の消し残りであろう、火の粉が無数、和也に飛びかかってきた。

クゥ！　残り物も迷わず使うか！
炎を払い除けて、キマイラを仕留めに向かう。

地面と鎌の刃が擦れ合う、ガガガァ！！　っと、独特な音を出す。

カァン！　と、何かが途中で放れる。
先ほどまで地面に接していた、鎌がキマイラの真上に振り上げられていた。

＜Ｔｒａｐ（ワナ）　Ｏｒｂｉｔ（きどう）＞

「！！」

辺りが急激に熱くなる。

なにが――――ッ！？

混乱する。
和也の足元にはキマイラの血で描かれた魔方陣があった。
そして、キマイラの口から理解不能な言葉が発せられた。

魔方陣を中心に炎の竜巻が和也を囲んでいた。
炎の竜巻は徐々に小さくなっていった。

クソ。なにが起こるってんだ！

魔方陣と炎が消えた。
その瞬間。
直線状の街が一直線に跡形もなく『溶けた』

消えたっと、いうワケではない。
消えてはいる……が、それは『消滅』ではない。『溶けた』という表記が正しい
約５０億度の高熱によりビルから地面、全てが溶かされたのであった。

聖霊皇・炎神ルーク
その炎はなにもかも全て無き物へと溶かし消す、聖なる焔の光なり。

あ、あぶねぇ～。
咄嗟の判断に助かったぁ……。生きてる心地がしないぜ。

ヤツの＜召喚……＞って、ワードがでた時に瞬時で避けたけど……
助かった。
もし、逃げてないと……。そんなの考えただけでゾッとする。

今、居る路地裏は、先程和也が炎の竜巻に囲まれた時に偶然、真横

にあった、裏道である。
和也はなんとかソコでやり過ごしたのであった。

自分の目の前で約５０億度の高熱の光線が通ったのだ。
顔は冷や汗と熱により滲み出る汗混ざっている。

だが、すぐに熱による汗は引いたが冷や汗が全然引かない。

おいおい……こんな秘策があったのかよ。

恐れがどっと押し寄せてっくる。

どうやったら勝てる？

運が良かった。

もし……路地裏（ココ）が無かったら……。

オレは……。

恐怖で身体が震える。

怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。

勝てない――ッ！！

何時もだ、何時も１歩足らない。

なんで――。

こうも！！

力があれば。後、１歩。ホンの少し届かないものに届くくらいの１歩が欲しい。

負けたくない。

けど……。

勝てない。

ほんの少しだけ……立ち向かって……

ヤツに勝てる力が欲しいッ！！

１歩。前に踏み出すタメに！！

オレに力をッ！！

鎌が和也に答えるかのように光だす。

淡い光が、和也の支えと化す。

そして……。大切な人達を守りぬける力が欲しい！！

強く。どんな願いよりも強く願う。

そのタメには……ヤツを超える力が欲しい！

勝つ。超える。守り貫く！！

そのタメに……1歩前に出る力を!!

3つの力を強く欲する。
それは、どれも自分のタメではなく。仲間のタメに
相手を超えるのも、相手に勝つ事も、今の和也は、仲間を守るタメ
にそれ等の力を欲していた。

どれも。

大切な友達を守るタメ。

そのタメだけに、自分を犠牲にする。

それが強さなのである。「この」和也が持つ優しさである。

そして、1番の強さである。

「勝つ!!　絶対(ぜってぇ)に!!　オレがぁ!　やらなきゃ、みんなが傷つく!
なら、オレが……やり通す!!
やる時にやらねぇ!!　なら、やる意味すらねぇぇからぁッ!!!」

確実に和也は1歩、前に踏み出した。

それは、どんなに足が長い人でも、どんなに幅跳びが得意でも辿り着けないほどの1歩わ、確実に和也は歩んだ。それは、世界を変える第1歩である事は、誰一人として知らない。

＜……まだ、生きておるか＞

和也の叫び声にキマイラが気がついた。
今は、路地裏。そして後ろには、逃げ道はない。

「……。和也流創作格闘術　鎌の型　幻影乃無双（スラッシュ・ゴースト）」

和也の居る路地裏を覗き込んでいた、キマイラは突然の出来事に回避が遅れた。

鎌が振り下ろされてできた、無数の真空刃がキマイラを吹き飛ばした。
左右にあるビルも切り刻み、向かい側のビルも数カ所切り倒される。

「続いて」

ビルに強く叩きつけられ怯んだキマイラに向かって、もう1つ、創作技を繰り出そうとするが、キマイラも意地となり、炎を吐く為に最大限タメる。

「魔槍裂魔斬（グングニル デビル&ラッシュ）！」
＜獅子王の極神焔（レオ テラフレアギルム）！！＞

2つの技がぶつかり合い。あたりり1辺に強い爆風を起した。
崩れかけたビルは崩れ落ち。
2つがぶつかり合った場所は溶けた上にさらに深いクレーターができていた。

キマイラは首から腹の真中まで真っ二つに切り裂かれた。
上半身が先に地面に落ちた。
そして、連鎖如く、下半身も横へ、大きな音を立てて崩れ落ちた。

そして、和也は……。

「……。今日の空……やけに蒼いんだな……」

キマイラが落ちた、さらに後ろの場所で大の字になって、今日の蒼い空を眺めていた。

和也の攻撃と同時に貫通した穴とその爆風で吹き飛ばされたタメである。

そうでも良い。

でも、やっぱり空は1つの雲もなく、光だけがあるその蒼い空を何処まで続いているのか、そう……考えるだけで、ずっと、空を眺めていた。

何処にでもある、快晴の空を……。

【４０話　ルートA】ＶＳキマイラ・その４（後書き）

１位　魅夜　　１８票
２位　セフィリア　１７票
３位　和也　　１５票
４位　レナ　　１３票
５位　作者（飛焔）　２票
６位　名・ラミア・キマイラ　１票

沢山来ましたぁ～♪　では、続きは１０話後に！

そんでもってぇ！　まだまだ続く後書きです！
残りの１０話！　メインキャラの詳細っぽい事から
オレしにの、語録などもやっちゃりましょう！！
まずは、この話しの主人公である
雨宮和也君でぇす！！

成績まぁまぁ。喧嘩最強。容姿まぁまぁの、喧嘩を抜かした場合なんの変哲もないタダの学生。
メンド臭がりで飽き易い性格。外見とは異なり優しい心の持ち主。
楽に尚も自由にをモットーに生きてる、有言実行をある日から固く決意するようになった。
人間関係は狭いが良い親友を持っている。
『鎌の意』は運命の悪魔を切り裂く刃。
そして、自分も知らない秘密を持っている。

語録ＮＯ．１

『鎌の意』その鎌が持つ能力。鎌の意を知らない限り本領は発揮さ

れない。
能力が強ければ強いほど鎌の意は強い「枷」を建てられる。

次回――――――――――
共通ルート

４１話より「どうして、こんな事になる!?　お前は……なんでそんな事を!?」
和也は眼前の最凶（アクレイア）に向かって叫ぶ。それを、アクレイアは笑い飛ばす。

４１話より「オーディン？」
どこかで聞き覚えのある名前をデーモンさんは呟いた。
そして……。

４１話より「守るって決めた！　守るって約束したッ!!　約束は……守るって決めたから!!」
身体が悲鳴を上げる。身体全体の骨にヒビが入ってる。でも、和也は立ち上がる。
負けたくないっという、意地で。そして、自分がした身勝手な約束を守るタメに。

次回・４１話　共通　決戦～序～

その炎の決意に、揺るぎはない。

――――――――――――――――

ルート　Ｂ

４０話より「やるっきゃないから。やるんじゃない。やるべきだか

らこそ、やるんだ。
だから、お前を……、ただ……切り裂くだけだ」
アクレイアの首元から真っ赤な血が溢れて来た。鎌は血を吸い、さらに強靭な刃へと変わる。吸血の刃の『神名』が溢れ出すアクレイアの血で成長して行く。

３９話より「これで……しまいだよ。アクレイア！」
真琴は鎌を振り落とした。

４０話より「明日があるから明後日があるんじゃなくて、生きているから、明日も明後日もあるんだ」
真琴は気恥ずかしそうにそう言った。

４０話より「魅ぃ姉ぇ……？」
そこに居る、和也に何処と無く似た少女がそう呟いた。

３９話　ルートＢ　ただ……切り裂くだけだ～終～

４０話　ルートＢ　柴原魅夜／雨宮鈴南＝雨宮和也
思いを成就させるのは……ただ１歩の勇気だから。

ルートＢ　２話同時作成中です。

【３９話　ルートＢ】ただ……切り裂くだけだ【終】（前書き）

２，３日したら４０話も完成いたしやすっ！

【39話　ルートB】ただ……切り裂くだけだ【終】

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｉｎｎｄｏｕ―

「……２００年も前だったよな……」

「なにがだ？」

刃と刃が擦れ合う音が響き渡る。

そして、音よりの早く、２つの影が動く。

黒と漆黒（アクレイアマコト）。２つがぶつかり合う時から音がするのに０，７秒。

雷が光って音が響くまでは距離も関係するが、だいたい光ってから音がするまで３秒といわれている。

その中でもこの声はゆっくりと聞こえた。

「お前の父が玉座に着いてから丁度、２００年だ」

「知ったこっちゃないね」

「……。そうか……」

真琴は、そう。短く答えた。

その言葉には無数の意味がある。それはまだ、解き明かす物ではない。

だが、２人の少年少女には少しだけ、意味を有していた。

「それこそ、キミが『四二神』っとなったのも、もぅ、１００年か……」

「年より扱いするなよ。ガキ」

鎌を振り落とす。

それを、刀で防ぐ。
真琴は鎌を上手く扱い鎌の先と刀の背を捕らえる。
そして、鎌を勢い良く上げる。
刀はアクレイアの手から放れて天井に突き刺さる。

「クッ。長寿の功ですかぁ？」
「死神の平均寿命は４７０歳だ。まだ、１２６年しか生きてない」

鎌で払い。アクレイアは小さく跳んで間合いを詰める。

「焔掌（フレイムナックゥ）」

焔を纏った炎が真琴の腹に食い込んだ。
あばら骨が2，3本折れた。
イヤな音が真琴の耳に届いた。

「焔帝滅掌！」

続けて、鳩尾に掌底を1発。
そして、無数の拳が、顔、腹、腕を襲いかかった。
鈍い音が数カ所から聞こえた。

「！！」

痛みで声も出なかった。
バックステップで間合いを計る。

「虚空千烈破」

待ってましたっと、ばかりにアクレイアが更に詰めてくる。

当然、体制を立て直そうっとしていた真琴は上手く防げるワケもなく、壁に激突した。

「真琴ッ！！？」

歩奈実が血相を変えて叫ぶ。が、真琴からの返事はなかった。
最悪の結末が脳内によぎった。

「……。」

強い……。想像以上だ。

自分の計算外の相手の実力に真琴は焦る。

ここで……死んだフリでもして、隙でも伺うか？

そう、至難していると自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

よく知っているヤツの声だ。１２０年以上……ずっと同じだった。
水瀬　歩奈実。どうやら「人間だった時」もアイツとつるんでたみたいに簡単に心が開けた。
ガラではないが人見知りが激しい俺にとっては不思議なヤツだった。

アイツが居て迷惑だと思った事は無かった。ただ、楽しいとか……
そう言うわけではない
アイツが傍に居ると落ちつくんだ。
アイツが居るから……仕事も飽きることが無かった。

瓦礫の中で息を潜めながら。思い返す。

そうだよ、アイツが居るから……頑張れる。頑張れた。
アイツは……俺の勝利の女神だから。

「弱い……」
「全言撤回じゃボケ不思議娘ぇッ！！」
「ちぃッ。生きてたか」
「て、てんめぇ！！？　何様だ？」
「……マコちゃんの飼い主様？」
「俺はお前の犬じゃねぇ！」
「……私の考えは変わらない」

コイツ……！　お、覚えてろよ～！！

「斬神！」

隙を見て刀を取り戻したアクレイアが真琴の上から襲いかかる。

「うるさいッ！」

その瞬間、アクレイアの顎に綺麗に真琴のアッパーがクリーンヒットした。
無意識の行動であったが、真琴は更なる追撃の回し蹴りをする。

アクレイアは突然の運動能力の上昇に驚きが隠せないでいた。

「てめぇは、いつもいつも……ッ！！」
「マコちゃん、慌てない慌てナイチンゲール」
「無意味な駄洒落を使うな！」

しかもナイチンゲールって……。本当に大丈夫か？　この不思議ち

ゃんは？
疑問に思う。

「……クッ」

アクレイアは戸惑う。急に真琴が強くなったと「錯覚」してる為だ。
真琴が強くなったワケでも、アクレイアが弱くなったワケでもない。
理由はもともと真琴は「この程度の実力」があるからだ。
ただ、それを発揮できないだけ。
それだけの事であったが、アクレイアは理解に苦しんだ。
どうしても、解らなかったから。

解るのは、歩奈実の声が真琴に反応した事だ。
ならばどうする？　アクレイアは考える。
そして、見出した結論は……。

水瀬　歩奈実を殺す。

そう、考えついた。

「コ・ロ・ス」
「？」

なんだ？　とち狂ったか？

「ボクノジャマヲスルキケンインシハ、スベテ、ミナゴロシダ……」

なんだ？
全身にイヤな感じが駆け巡る。
空気が、壁が揺れ動く。

これは……？

「マズ、コロスベクハ……アマミヤカズヤ……ダガッ！！」
「！？」

反応が1瞬、遅れた。そして、なにより大きな1歩が遅れた。
そして、大方、真琴にはアクレイアの出る行動がわかっていた。

斬撃が一人の少女を襲う。

「……？」
「！」
「ちぃ！　事を仕損じたか」

歩奈実は血を浴びただけであった。
アクレイアの持つ刀の刃先は……。『鍵』たる少女
レナ・フォード＝ライズ・ハールドの腕を深く抉られたレナの返り血だった。

「歩奈実姉さん♪」
「子猫……ちゃん？」

確か……彼女は前に1度会った……事があったような……？

「あッ！　マコちゃんも元気！？」

そうだ。オレを初めてマコちゃんと呼びやがった子猫娘だ。
そうだよ。あの忌々しい……。

「貴様……！？」

「救えないねぇ。ああ、本当に！」
「！」
アクレイアがレナに注目していた隙に真琴が鎌を振り落とそうとしていた。
アクレイアは真琴の声に反応し、避ける。
次に鎌を横に振るい、アクレイアは、また、後ろにステップして避ける。
「ホナ。治癒魔法を掛けてやれ」
「うん。セイガ、魔方陣書いて」
「えっ？　ワイ？？」
お前ってヤツは……。魔力の回復に集中しすぎて気がついてなかったのか？
馬鹿だろ……。
「おい。アクレイア……なんで、ホナを狙った？」
「……。僕の邪魔をしたからだ」
「お前の邪魔をしてんのはァ、俺だぞ！？　クソ餓鬼（ガキ）！！」
押えていた「箍」が外れた。頭に血が登る。
熱い血が、真琴の判断力を奪う。
そして、目は氷のように冷たい目で尚且つ頭は噴火寸前まで登る。
「君等も気に食わないからだよ！」
「それは、お前の父を殺した事か？」
「違うよ。あんな父親なんか死んだってどうでも良かったよ。
逆に君達に感謝してるよ。あの親父を殺してくれてありがとう……ってね？」

つくづくイカレタ野郎だな……。
真琴は嵐前の静けさが真琴の頭に波の音を発てている。
静かな怒りが、真琴の頭の中で児玉する。

「……お前は親をなんだと思ってるんだ？」
「イラナイ存在さ。僕みたいな究極の存在にはね！」

自分が究極の存在ねぇ？
真琴の怒りは限界を超えていた。
自分の昔の姿を見ているようで……昔の自分を思わせていた。
最も自己嫌悪をしている自分の姿を鏡写しでみているようで真琴の怒りが底上げされていた。

「自分が完璧ねぇ……？」
「うん。そうだよ」
「本当に……クソ野郎だな。アクレイア」

飽きれて仕方が無い感じで真琴はそう、呟いた。

それと、同時に黒い何かが鎌を包んだ。
濃い霧みたいに薄っすらとは見えるものの、本当に薄っすらとしか黙視できない。

「マコト！」

セイガは、真琴がやろうとしている事に気がついたらしく。真琴に向かって叫ぶ。
つられて、歩奈実もわかった。

神堂真琴の本領が発揮されそうな事に。

「……お前等は逃げていろ」

真琴がそう告げるとセイガは離れた場所に倒れているセフィリアと、ヴァンを抱えて走りだす。

歩奈実もレナを連れてこの場を離れようとするが、立ち止まる。

「……マコちゃん、暴れすぎたら私達も瓦礫と一緒に海の底だから」

「忠告ありがとう……。安心しろ守ってやるよ」

真琴の言葉を聞き終えると、歩奈実はこの部屋を後にした。

「なんだ？　その魔力は？」

「……これは、ただ……切り裂くだけの刃（ヤイバ）だ」

霧は晴れることがなく。仕舞いには紅蓮の炎を纏った。

霧は蒸発され、鎌も「新たな」形を現した。

2枚刃の血のように赤い鎌。

『吸血の処刑鎌（ディープブラッドギロチンブレイド）』

死乃恐怖の鎌の「神名（ブラッド）（しんめい）」である。

血の様に赤い刀身とドラゴンが翼を開いたかの様に広がる刃。

そして、『主の血を吸う鎌（スケィス）』

真琴は流血していた、いや。自分でしたのだ。自ら鎌で自分の腕に

傷をつけていた。
それは……。
「……なにを？」
アクレイアは理解できなかった。最強の死神と言われる神堂真琴の事だ、なにかしら意味があるに違いない。考える。考えてでた結論。
『あの、鎌は血を吸って強力になる』
自分の血を「吸わせてる」っと言う事はそれは……。
代償を払い力っとなる鎌であるっと言う事が。
「……そうだ」
「！」
アクレイアは自分の考えがバレたと言う事に驚く。
それ以前に、吸血のスピードが速すぎている。
鎌を刺した腕がほのかに青くなっていた。
「準備完了」
そういうと、鎌の刃を自分の腕から抜くと、逆の手に持ちかえる。
アクレイアは、解らなかった。
彼の目が、冷たい物ではなく。シスターが迷える子羊をみるような目で見ていたからだ。
殺気より慈悲が表れていた。

「救われない奴だよ。本当に」
「なにがだ!?」
アクレイアが怒鳴る。
偽善者ぶった真琴の反応に苛立ちを覚えたタメである。
「お前の腐ったれた考え……。本当に救われねぇよ」
真琴は極めて落ちついてる。だが、心の奥底ではアクレイアを殺す考えがあった。
仏と魔。2つの事を、真琴はやってのけている。
「……うるさいッ!!」
勢い良く駆ける。
真琴の懐に詰め寄る。
が、
「なっ――――!?」
「残念だが、強くなるのは鎌だけじゃないぜ?」
本来鎌は、死神の能力を最大限に引き出す『武器』である。
当然、『鎌の意』を唱えるだけで数十倍の実力は出せる。
『神名』っとなれば別だ。
鎌に宿る鎌の力を解放することだ。
当然。『鎌の意』を開放するより……強力になる。
それが、タダでさえ最強と言われている真琴ならば?
魔界の3本の指に入る死神が『神名』を開放したら?

当然。最強になる。

「……」

「クソ。貴様……なんで？」

アクレイアは疑問に感じた。

真琴が何故、力を発揮するのか？

解らなかった。

「……俺はな……責任ってのがあンだよ。『四二神』の連中を率いてるからだ。

みんなを生かすって責任があンだ」

鎌を待ちなおす。

腕から血が滴り落ちる。流血がまた始まってきた。

それでも、力強く鎌を両手で握り締める。

「自分のタメには何故動かない！？」

「自分自信の行動は死を招く。死んだ先代の意思だッ！！」

鎌を冗談に切り上げる。

アクレイアは攻撃に対し上手に反応する。

が、

反対にある刃を上手に使い、持ち手の先でアクレイアの腹部を突いた後、左刃の背でわき腹を攻めた後腕を上手に捻り刃先をアクレイアの腹部に「刺した」

別に切り裂こうっとしたら切り裂けていた。

しかし、真琴はそうしなかった。

「貴様……なにを！？　ぐうっ！！！？」

アクレイアは立ち眩みをした。

理由は簡単。「血を吸われているからだ」。

貧血。それが先ほどの症状。

「悪いな……。コントロールできないんだよ、まだ」

「き、さぁぁまぁぁああ！！！」

自力で刃を抜き、真琴に近づく。

らしくも無く、取り乱していた。

冷静さを失った者の結末は……。決まっている。

「！？」

アクレイアが攻撃したのは真琴の魔法によって作られた分身でしかなかった。

「これで……しまいだよ、アクレイア！」

真琴は、鎌を振り落とした。

【３９話　ルートＢ】ただ……切り裂くだけだ【終】（後書き）

もしかしたら、暫らく更新できない恐れがあります。

今回は神堂真琴さんです。
基本的に作者をイメージして書いています。メンド臭がりでやる時にはやり通す男です。
髪は黒の短髪（ワックスを浸けてるから、立ってる）でメガネをたまに……。学校だけでしかメガネをかけてませんから。
身長は（作者の希望で）１７４ぐらい、（自分で言うのもなんだが）クールでツッコミ役で無口。
鎌の意は、死乃恐怖の鎌／スケィス・ブラッド
神名、吸血の処刑鎌／ディープブラッドジャッチブレイド
根は良いヤツだけど。過去に色々設定あり。オレしにで裏の主人公。

語録ＮＯ．２
『四二神』魔界での４２人の強者（つわもの）死神が集う組織。
基本的には暗殺や、人間の魂を刈るのが仕事。

【４０話　ルートB】柴原魅夜／雨宮鈴南＝雨宮和也（前書き）

この回は殆どネタバレです。
長いです。
今回は誤字が多いので報告してくださるとありがたいです。
できるだけ詳しくお願いします。

【40話　ルートB】柴原魅夜／雨宮鈴南＝雨宮和也

―？？？―

「はぁはぁ……。撤いたか？　あの腐乱犬酒蛇淫（フランケンシュタイン）もどきは？」

壁を背に地面に倒れこむ。

＜かちぃ＞

？　なにか音がしたような……？

まさかぁ？　そんな事あるわけ……。

＜ガガガガァァアアアア！！！！＞

あるわけ……。

＜ゴゴゴゴゴゴゴォォォォォォオオオオオオオオオ！！！！１＞

あ……るわけが……。

考える。

ココは何故か斜面。そして、右手を置いてる所が不自然に凹んでいる。

そして、上の方から聞こえる何か大きな物と壁が擦れてるような……。

……さらに追求する。

これは……コメディーだ！

結論は……。

潰れちゃえ☆ローリングストーン♪　か！？

横を見ると高速で転がってくる巨石が見えた。

出たッ！　潰れちゃえ☆ローリングストーン♪　だなッ！

たたかう

こわす

まほう

にげる↑

れいなは、にげだした。

某ＲＰＧか！？

馬鹿め！！　転がる岩の速度に人間が対等？？？

哀れ！哀れなり！！！

ちょｗｗ！？　なに！？

笑止なり！

幾ら「死神の血」は流れてようが、彼女は女性。

「純血な死神」ではない。

当然、走りも普通の女性と変わりはない。

さらに当然が如く。

潰れちゃえ☆ローリングストーン♪　の転がる速さには遅れをとる。

哀れなり！　ははは！！　泣け！喚け！恐怖するが良い！！

このナレはなに！！？

※【ナレ】ナレーションの略。

召されよ！　あの世へと！！

「鋼よ……貫け！　鋼の槍！　スティールランス」

私の正面から鋼の槍が放たれる。

鋼の槍と岩は大きな音を発ててぶつかり合う。

五行思想は基礎の基礎！

火は樹に強く、樹は土に強い。

土は金（鋼）に強く、金（鋼）は水に強い。水は炎に強い。

基礎中の基礎だよね！

あれ？　なんかヘンな目で見られてない？　私？？

ん？　確認しろって？

私が今、放ったのは……金属性。相手は……土？

……。

……。

「うそぉぉぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん！！！！！！！！！！」

全速力で逃げ出した。

無駄無駄無駄ぁぁぁぁぁあああああああ！！！！

このナレ殺す！！

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｉｎｄｏｕ―

つくづく自分は甘いと思う。

別に殺せる機会はある。

でも、仕留めない。

何故？　確かに残酷でなければ死神は勤まらない。

それは……オレの過去もある。

オレも試験に落ち修行を積んだ死神だからだ。そして、死神に架せられた『帰る条件』を……俺はやった。いや、殺ったの方が正しい。

死神の研修の終了条件……。

「クククククク」

アクレイアの笑い声に俺は思考を閉じた。

「なんだ？」

冷酷に、尚且つ冷酷に言い放つ。

気を抜いたら出し抜かれる。

緊張感が真琴の中を駆ける。

「甘いよ？　なんで、僕に止めを刺さなかったのかな？」

「……。殺す価値も無いからな」

返答に困った。真意は別にあったが。コイツに知られては行けない。

いや、この過去はいずれ語れたら語ろう。

「それが……キミの甘さじゃないだろ？」

「！」

コイツ……なにを……！？

間が……永遠を思わせる程の沈黙の間が流れる。

「フッ」その沈黙の間はアクレイアの失笑に途切れた。

「愁羅（しゅうら）　飛鳥（あすか）」

「！！」

その人名に俺は同様が隠し切れなかった。

愁羅飛鳥……。

クソ！　なんでコイツが！！　飛鳥の事を……！

「ははははははは！！！　おいおい！？　忘れたのか？
お前が刈った人間だろ！！？　そして……」
「貴様ッ！！」

鎌をヤツの腹部に刺している状況だ。コイツの余裕が解らない。
注意せねばと、心がけてたが……コイツ……ッ！！

手に火球を練る。

「殺れよ」
「！」

コイツ……知り尽くしてる。
俺の過去を……。俺が死神として……落ちこぼれだと言う事を。
俺が……「殺すことも魂も刈ることができない」死神だと言う事を
……知っている。

あの『絶望』を……。知っているんだ。

「お前……」
「僕の使い魔は優秀なんでね」

あの日の事を……。

クソ。置かれていたチュッ●チャ○プスのコーラを咥えながらどう、逃げるか考える。
私じゃあ、あの扉を開ける事は不可能。
腕力とかが及ばない。

和也……。心配してくれるかな？

妄想
和「魅夜が居なくなったな……あいつ忍者か？」
レ「そうだよ！　魅夜ちゃんって時には凄い力を出すからね！」
ラ「それは……」
ヴ「違うと……」
和「ま、腹が減ったら帰って来るか！」
レ「だね」
ヴ&ラ「「駄目だこりゃ」

妄想終了
ヤバイよ！！？　それはマズイ！！

助けを呼ばなければ！

自分で考えてて凄く憂鬱になるぞ。

待て待て……責めてもう少し良い妄想をしよう。

妄想
和「しっかし、魅夜が居ないとなったら香澄姉さんが怖いからなぁ……」

レ「香澄姉さんって？」
和「魅夜の義理の姉だよ」
レ「？　義理？人情？」
セ「……人情はイラナイ」
レ「ってなに？」
和「う～ん。簡単に言うと香澄姉さんは連れ子ってヤツでな、簡単にいうと産まれてきた母親が違うって事。腹違いのガキって事だ」
レ「先生！なんで違うのでしょう！？」
和「えッ！？　それはだな……。香澄姉さんの両親が離婚して。父親の方に育てる権利が与えられたんだ。それで、魅夜の母さんと再婚してだな……で、魅夜が生まれたんだ」
レ「離婚って！？　再婚って！？　血痕って！？」
和「昼に主婦が目を輝かせるワードだ！　ついでに血痕はどこから出た！？」
レ「なるほど……」
ヴ&ラ「納得するのかよ」
セ「……何れは魅夜さんも同じ」
和「？」
セ「……魅夜さんは和也様の嫁だから」
妄想終了
違う違う！
確かに『嫁』ってワードは素晴らしかったけどさぁ……。
違うよね？　あれってトークだけだよね？
白馬の騎士的なのは……。
そうか……

和也だからあり得ないんだ……。

魅夜はやっと助けに来る妄想が出来ないのか気がついた。

そして自分で絶望する。

さ：絶望せよぉぉぉぉぉぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！

み：はいはい。某ＳＲＰＧ（シュミレーションロールプレイングゲーム）のラスボスのセリフですね。

さ：詳しくはＳＰＲＷ（スーパーロボットたいせん）Ｊをプレイ！

み：ハッ！　伏字を何故入れない！？

さ：ま、気ニシナーイ。

み：こらこら、先日読んだコロコロ様の小説に影響だな？

あの怪物の超朴念仁ラーメン大好き星人の影響だな！？

さ：や、ヤメテ！　そんな事言わないで！　なにか来そうだからさ！？

なにか、別の世界からヘンな気が来てるからさ！？

み：貴様の事など知るか！

さ：ひ、酷い！

ふぅ……。作者は帰ったか……。

さ：あ、コロコロ様。本当にスミマセンでした。ラーメンを奢りますからどうか……

作者がなにに怯えているのかは、コロコロ様著の勇者以上魔王以上をどうぞ！

このクズ作者が書いてる小説の何十倍も良いですよ！
グハッ！！？　ペンギンの目覚まし！？
作者か！？
むッ？　手紙も付いてる。
なになに……？
『確かに僕のは劣るけど、調子に乗るなよ？　幼馴染のくせいにサブヒロインが』
帰ったら殺そう。
さぁて、つまらぬ会話を失礼しました。
さぁて、私はどうしようか……？
その前に……そこに居る中学生を……！！！？
「魅ぃ姉ぇ……？」
そこに居る、和也に何処と無く似た少女がそ呟いた。
〈回想〉―Ｒｅｉｎａ　Ａｍａｍｉｙａ―
走る～♪走る～♪私だけ～♪流れ星より……早くなりたいよぉぉぉおおお！！！！
巨石との鬼ごっこ実に１０分がたとうとしていた。
えっ？　脇道に反れれば良かったって？
ははは。当然やったよ？　でもね……この岩……。
ストーカー的なぁｗｗ潰れちゃえ☆ローリングストーン♪　なんだよね？

理解ＯＫ？
難しい？　付いて来るの私に！　幾ら私が可愛いからって／／／／／
【午後五語午後五語後午後五語後】
なにそれ！！？
【コロコロコロコロ】
勢いとまってるなぁ！！
【キシャァーーーーーーーーー！！！！！】
動物だろ！？　貴様ぁぁあああ！！！？
【お～れ～は♪　ゲイム・ラ・ゴルゴル・岩本～♪】
某音痴の歌か！？　でもって微妙な名前だな！！
【空を自由に飛びたいなぁ～】
はい！　無理です！！
【イオナ●ン】
それ、言うなよ！！
【雨宮鈴南のスリーサイズは……】
何故知ってる！！？
【ゴロゴロゴロゴロ】
もとに戻った！！
【７１　５８　６８】
！！！！！！！！！（図星）
【スピードＵＰ！】
しないで！！

鎌を『召喚』し、『鎌の意』を唱える

「我、ここにて鎌の意を唱えん。真の力を我が前に現せ！
空間（エリアル）を切り裂（ブレ）く刃（カー）！」

鎌を何も無い空間に振るう。
すると、鎌を振った所が、まるで裂かれたようにその部分だけ異な

った。
黒いなにかに鈴南は飛び込む。
それと同時に空間は塞がり巨石は転がって行った。

「ん？」
【ごろごろゴロ】
「如月？　ワナに掛かったか？」
「それより、逃げるぞ！」
「大丈夫だよ駿」
「ハッ？」
「小指でドーン！！」
しゅ（小指でぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！？）
まちゃ（さすがだよ、上手く逆回転にさせて破壊して無駄に被害がでるより良い）
かちゅ（小指すりむいた……（泣））

はて？　ココは何処だろう？
ただ、だだっぴろい部屋だ。高い天井。西洋のお城を思わせるお城だ。
さっきまでの魔王の城よりを思わせない。

そして、私の眼の前にいる女性……。
『私の兄の幼馴染の女性』
柴原魅夜……の、姿であった。

〈回想終了〉―Ｍｉｙｏ　Ｓｉｂａｈａｒａ―

魅ぃ姉ぇ……。私をそう呼ぶ人が確か居た……。
思い出せなかった、何故かは、わからないけど……。
何故か知らないけど。何故か思い出せない。
そして、彼女を見た……知っていそうで知らない。
なんで……？　解からないの？
私に対して呼ぶ人称。そして、その容姿（ツインテール）……。

どうしても、思い出せ無い。まるで、『魔法にでも掛かってるみたいに』
名前だけ……。思い出せ無い。何度も言うが私は彼女を知ってる。
だけど、思い出せない。

家が近かった。そして、近くには和也が居て……。
和也の後ろでよく……丸くなってた。
和也の事をお兄ちゃんって呼んでいて……。
それで……。それで……確か彼女は和也と2歳違って……。
それで……和也は……。
「鈴南。帰るぞ」
っと、和也は『妹』と帰って行った。
でも、和也は一人っ子で……。親戚も殆どが不幸で無くなって……。
現在の雨宮の直系は和也だけで……。
それで……。

『記憶操作魔法ってのはどうだ？』
！　レナの時に駿が言った言葉が引っかかった。
確かに私も怪しいとは思って聞いていた……。
事実そうだった。レナには矛盾点が沢山あって……。

それでも……。なんで？　私は彼女の記憶が欠けてたの？

……。なんで……？

「わぁあ！！　魅ぃ姉ぇだぁ～～～～♪」

私は……。

その時、鍵（ロジック）が開放された。柴原魅夜に『も』架せられた封印を。

『雨宮　鈴南』

ッ！！　思い出した……。彼女は和也の妹の鈴南ちゃんだ。

なんで、思い出せなかったの？

私……なんで？

「鈴ちゃん？」

「そのと～～～～～～り☆」

私から離れて親指を立てる。

……私達はなんで……この子を覚えてなかったのだろう？

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｉｎｄｏｕ―

「貴様……ッ！！」

怒りが別の方向に向いて着ていた。

「キミは……彼女を殺めてからそうなったんだろ？　キミは逃げてるんだ」
「言うな」
「現実とは残酷なモノだよね　だから逃げてる」
「やめろ」
「そして、キミは……残忍なまでの死神っとなった！」
「やめろ！！」
「でも……世知辛い事にまたキミは殺めたんだろ？　愁羅飛鳥の産まれ変りを」
「言うなぁッ！！！」
「その手は血で濡れ過ぎだ」
「！！」

アクレイアに詰め寄られる。

反射的にアクレイアの身体を切り裂いた。

俺は……。
俺は！！

「それがキミの甘さだよ」

背後から声が聞こえた。
振りかえると後ろには……。アクレイアが笑顔で……尚且つ無傷で立っていた。

先ほど切り裂いたアクレイアの姿は無かった。
馬鹿な……。

「アレは……僕の使い魔だよ」

「なッ！！？」

「ウソ。ミラーパクト。簡単に言うと僕の分身」

アクレイアの拳が俺の脇腹に入る。
先ほど脇腹が折れてる為、更に激痛が走る。
膝を着く。

「さぁて、終りにさせようか」

アクレイアの手の平から5つの弾がでる。
それは、5色の弾。
紅い弾。碧(みどり)の弾。茶色の弾。黄色の弾。水色の5色の弾が囲むように浮いていた。魔力を感じる……これは……
五行魔術？
属性は『炎』『樹』『土』『金』『水』

五行思想の5つの基礎？？

真琴は疑問符を挙げる。

「消滅魔法……」

5つの球がアクレイアの手の真中に集まり溶け合った。
イヤ、融合が正しいのかもしれない。
ヤツの手の平から強力な魔力が感じられた。

「デリート・オブ・デス！！」

微弱な魔力だったが、合さるだけでトンでもない魔力に化けた。

防御は!?　間に合わないし、破られちまう!
回避……?　駄目だ!　間に合わないし余計にダメージを受けるだけ!

飛鳥――――ッ!!
アイツに知らずの内に助けを呼ぶ。俺がアイツを殺めたのに……。
虫の良い話だ……。何時だって迷ってる時にアイツは飛鳥は俺に答えをくれた。
俺が……。自分のタメだけに……死神でありたいがタメに……俺が……殺したってーのに……自己満足で……俺が!!
死神が研修を終えるのに必要な事……条件は
『自分が最も思う人間の魂を刈る事』これは……死神に人の魂を刈るための残忍さを教える為のモノなんだ。クソくらえだ……んなの!
でも……俺は……飛鳥を殺めた。
ゴメン。ゴメンな飛鳥。そっちに行って何度も謝るよ。

『真琴、思いを成就させるのは、たった1歩の勇気なんだよ?』
「!　あす……か?」

たった1歩の勇気。

踏み出せ……。
踏み出せる勇気を!
俺は……お前に頼りっぱなしだけど……。
飛鳥……力を貸してくれ!　結局自分のタメでしかないけど……。
俺は……仲間の命を守るタメに生きて行くから!　今だけ……。

俺に……

たった、1歩の勇気を分けてくれ！！！

『真琴、コレは貸しだからね♪』

飛鳥がそう……笑顔で答えてくれた。

わぁったよ……。飛鳥。

「うをぉぉおおお

開くんだ！！！」
『それで良いんだよ！　キミにはその優しさと力があるだけで良いのそして……』
頭の中に鎌が語り掛ける。
対して驚きはしなかった。
逆に心地よかった。
飛鳥が傍に居るみたいで……。
強くなれた感じがしたから。
「「ただ……ヤツを切り裂くだけだ！！」」
鎌と俺がハモった。
1歩だけ……歩けた。
これは……俺の1歩じゃない。
飛鳥が分けてくれた飛鳥の1歩だ！
アクレイアに近づく。
アクレイアは俺を対象するが、
蹴りで地面に埋められる。
置きあがるが鳩尾に1撃を与える。
怯んだ隙に回し蹴りを脇腹にブチ当てる。

血反吐を吐きよろめく。
そこで賺さず、後ろを盗り鎌を首に突きつける。少しだけ皮が裂けて微量の血が流れるが、それを鎌は吸い付くさんと、ばかりに血を吸う。

「ぐっ……！」

動脈付近を裂かれたタメ、よろめく。

そして、考える
神堂真琴の成長を
戦えば戦うほど強くなれる。敵が強ければ強いほど成長は早く、それに強くなれるんだ2度に渡って戦い抜いたから分かる……。コイツは……頂点に立つべくして背伸びをして立つリーダーでは無い。段階を踏みしめて成長しようとする、ゆっくり過ぎる反面、最高のリーダーなんだと。
神堂真琴は……『四二神』を統べるべくして統べているんだと。

神堂真琴……とんだ逸材だと、アクレイアは思った。

なにより、1歩踏み出しただけでアソコまで行けるのは天才なんだ……正真正銘の……最強に近い天才。

天草零斗（あまくされいと）。彼と同じタイプの人間のようだ

「さぁあ！　やろうじゃないか！？　死合（しあい）をなぁ！」

アクレイアが叫び出した。
狂ったかのように笑い出す。

それに寒気を覚えた俺は、鎌を解いて1歩下がる。

「知ってるかい？　魔力と氣は同じようだが違う。
氣は世界の森羅万象などを司る自然を利用して強力な力を発揮するもの。
魔法はその者の精神的な強さ、精神的に強い事で魔力を集中しさまざまな現象を起す」

「？」

鎌を構えて、意味をよく考える。

「もし、『氣功術』と『魔法』を同時に使ったのなら？」

考える、自然の定理と魔法の定理……異なる2つの力が合わさったら？

【革命戦争】

「！！」

待て……この戦では……確か、魔法と氣功を使う。最強と言われたヤツが居た。

天草零斗……革命側の『人間』

「すごいよね、ロキと一緒にオーディンと対等に渡り合ったんだから」

「馬鹿な……魔法と氣功を使い分ける……ましてや、融合なんて！！」

あり得ない。そんな事をしようとする馬鹿が沢山居た。
その結末は陰と陽と同じで、全く異なるが、必ず2つがある奴と同じで、超越した時には

心身共にクズになる。２つの能力がぶつかり合うからだ。そして、魔法の精神的な部分と氣功で使われる森羅万象を崩してしまう。
それを避けるのも『四二神』の仕事だ……。かど、もし……本当なら？

もしかして……。コレは……。

「氣魔・虚空熱風！」

アクレイアの周りから凄まじいほどの熱を持った鋭い衝撃波が襲いかかる。

（クッ！　反射魔法……マジックリフレクター！）

反射の壁を作るが、破壊され無数の衝撃波が真琴を襲う。

馬鹿な……？　オレの反射の魔法を破壊した？

十分な魔力は練った筈だ。なぜ、破壊されたのかはわからない。

「確かに同じ自然の定理と心の定理は共通している。
けど……キミ程の魔力なら魔法は返しても氣は反射することまで出来ない。
余程の魔力を使う奴かぐらいじゃないと返せないよ」

ちぃ。幻術と防御関係はホナが１番だからな……。
だてに、ＮＯ．２にホナは居ない。
『神界』と『魔界』……魔法を使うこの２つの世界でホナは幻術に関してはＮＯ．１なんだ。
類い希（たぐいまれ）なる幻術の天才……水瀬歩南実。

それは、防御関係の魔術でも高い評価がある。

ホナが居ればあの『氣魔』だかは、なんとかなった。

けど……。

ホナが居ればの話し……。

これは、俺自信で片を付けなければイケナイ。

鎌を握る力を強くする。

強く……なるって決めた！　飛鳥から貰った1歩を無駄にするなんてできるかッ！

先ほどの攻撃で身体中に切り傷が沢山付いている。

血が溢れ出す。

一瞬でけでも良い。一瞬だけでも……。

アイツに鎌を突き付ける！

地面を蹴り飛ばして一気にアクレイアの懐に飛び込み鎌の刃先を脇腹に刺し込む。

そして鎌を振るい、自分の前に吹き飛ばす。

腰に蹴りを1撃。

しかし、真琴は不思議な感触を覚える。

手応えが無かった――――？

疑問符を挙げる。

「氣功って便利だよね？」
「お前……？」

防御魔法か……！
いや……氣功……と魔法を合わせたのか？

氣の防ぎと魔の防ぎ……。物理的に……魔法的にも防ぎを作ったのか！

そうとなれば……物理的にも魔法的にも効かないのか？
鎌を通したのも氣と魔法を練っていたのか？

「……。氣魔防神」
「クッ！」

どうするべきかなぁ……？　コイツは？

やれるのか？

―？？？―

「真琴って不思議なヤツだよね？」

「はぁッ？　俺は至って普通だぞ（死神として）」
「イヤ、平気で不良を５０人を１分以内で倒しちゃうし」
「そりゃぁ、平気だぞ？　ヤツは武術の基礎がなってない（ま、死神の身体能力は普通の人間のン百万倍だからな）」
「そういう問題……？」
「ああ、そうだが」

２年目……俺には重たい事だ。
そもそも……俺が試験を受けなかったのが悪いか……。
……でも、コイツに会えた……。世知辛い世だ……。
２頭を追う者は１頭も得ず……いや、コイツを取るか……死神としての人生を送るか……か。

クソ……。

「……真琴？　聞いてる？」
「あ！　なんでもない……」
「聞いてるのって、聞いてるの！！」
「それは駄洒落か？」
「アホ！」
「イヤ、俺にはそう聞こえたのだが？」
「アンタの頭が逝かれてるのよ！」
「イヤ、そういわれても……困るんだが（近くにあの不思議ちゃんが居たのが悪かったか？）」

この帰路ももう、１ヶ月もないのか……。
……イヤ、俺が飛鳥の魂を刈れば？
俺の手で……。

……死神として安定した立場が約束されてる俺と、コイツを思う俺

……。

俺は……どう生きれば良いんだ？

……死神……。

……人間……。

俺は……。

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｈｉｎｄｏｕ―

……飛鳥……。そうだったよな。

思い出した、お前の口癖……。

『なにを悩んでるかは知らないけどね？　やるっきゃないから。やるんじゃなくてね？　やるべきだからこそ、やるんだよ♪　選択肢はあるんだよ？　だから、真琴も……悩まないの』

……。悪いな……コレが、俺の選んじまった『道』だ。

「でやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

―Ｈｏｎａｍｉ　Ｍｉｎａｓｅ―

「ホンマにマコトは大丈夫なんやろな！？」

セイガがセフィリアと、ヴァンを抱えながらホナミに質問する。

マコちゃんは、負けない。

「……進化する者と強者では違う」

「歩奈実姉さん？」

……子猫ちゃんは私の裏の表情に気がついてるみたいだった。

正直、最近のマコちゃんはおかしくなっていた。

あの任務からだ……。あの要人……マコちゃんの知ってる人だったのかな？

マコちゃん……。あの日から魂を刈る事も罪人を殺す事も躊躇うようになった。

「……。マコちゃんは決める時には決めてくれる」

……マコちゃんはもしかしたら、アクレイアを殺せずに逆に……。

やめよう、その考えは……。

信じること、信じつづける事が本当の強さだから……。

行こう！　前に。

マコちゃんは負けない。

「……せやな」

「はぁはぁ……！」
「魅ぃ姉ぇ！　大丈夫！？」

とりあえず、逃げるものの、そろそろ疲れが来る。
でも、逃げないと。
だって……。

『ふごぉーーーーーーーーーー！！！！！』

フランケンシュタインが襲ってくるから！！

「炎よ……貫け！　業火の槍！　フレイムランス！」

『ぐがぁぁーーーーーーーーーー！！！！』

真横から炎の閃光が走りフランケンシュタインに当たり、壁に激突する。

「風よ……唸れ！　疾風の刃！　ウィンドエッジ！」

鋭い風が追撃でくる。

「とどめ！　光よ……貫け！　光の槍！　ホーりーランス！」

特大の光の槍がもう1撃、フランケンシュタインを攻撃する。

「大丈夫ですか？　魅夜さん？」

すると、そこから出てきたのは私のよく知る常識人のラミアちゃんだった。

「ラミアちゃん？」

「はい。助けに来ました」

「おぉ！　霊封魔法！」

れいふぅまほう？

「お札に封印された聖霊の力を使って、各種の術を使う魔法です。槍（ランス）・刃（エッジ）・斧（アックス）・弾（ガン）の４種類があります。選択はできますけど、どのお札も1回こっきりの使用しかできません」

読んだ！　人の心を読んだよ！！

和也がツッコミを入れるのもわかる……。

けど、属性的にツッコミなんだよね、この子……な、難儀だ……。

「慣れました」

「……」

口に出さなければ済む事なのに……。

dou―

「さぁ？　どうしたんだ？　キミの勝ちだ。また、逃がして君は繰り返すか？　やるっきゃないんだよ」

「違うな」

選択肢は無数に増やすことができる。

「やるっきゃないから。やるんじゃない。やるべきだからこそ、やるんだ。

だから、お前を……、ただ……切り裂くだけだ」

アクレイアの首元から真っ赤な血が溢れて来た。鎌は血を吸い、さらに強靭な刃へと変わる。吸血の刃の『神名』が溢れ出すアクレイアの血で成長して行く。

より強靭に。より鋭く。

「やれよ」

首に突き付けていた鎌を振り切る。

アクレイアの顔と胴体がおさらばする。

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｈｉｎ

1歩踏み出すんだ……死神として。

人間としての、俺を捨てて……。

生きて行く！！

「任務完了（ミッションコンプリート）。帰還する」

にしても……アソコまで簡単に死ぬのか？

クソ、疑問符が多すぎる。

＜ズギャァァァアアアアアアアアアアアン！！！！！！！！！！。

「！？」

雷の槍みたいな閃光が走り玉座にぶち当たった。

「エル……？」

「……。行くぞ、神堂」

「？」

なんだ？　コイツは……？

なにを言いたいんだ？

真琴の元にエルが近寄る。

「終らせるぞ、神堂」

「どういう事だ？」

「……。アクレイアを止める為だ」
「ハッ！！？」

エルの発言に俺はどキモを抜かされる。

「アクレイアは今年で１０歳だ」

「！」

今まで戦ってたのは……。１７，８に見える青年。
魔界側の人間って事は……１００を越えてる。

エルの言葉を信じるなら……。アクレイアは……１０歳だぁ？

「……。お前はアクレイアの顔を知らないだろ」
「ッ！」

ターゲットの名前だけで信じすぎたのか……。クソ、なんて、凡ミスだ！
ただし……エルの言う事があってればだがな。

「信じないなら別によい。ただし、俺を雇ったのはこのクズじゃねぇよ。それに……」
「それに？」
「アクレイアは、俺の弟だ。アイツも知らないがな」
「なッ！？」
「……玉座の下に隠し通路がある。親父の研究室がある。ヤツはソコだ」

レールガンが破壊した玉座を調べると階段があった。

……。エルの言う事を信じるべきか……否か。

考える。もし、グルだったら？

「お前を殺すのは俺だ」

「エル……」

だな。そうだったよな……。

俺をやるのはお前だもんな。

不思議な安心感が俺を包む。

「行くぞ」

「おう」

明日があるから明後日があるんじゃなくて、生きているから、明日も明後日もあるんだ。

それを……俺は守る。

四二神を統べる死神として……。仲間の命を守る！

「んじゃ。将と如月はレナと魅夜を探してくれ。オレは行って来る」

「了解」

「あいよ」

2人の主人公が繋がった。

【４０話　ルートＢ】柴原魅夜／雨宮鈴南＝雨宮和也（後書き）

今回はヒロインのレナちゃんです！

猫みたいな女性を目指して執筆しています。
活発でも意外と人見知りをするタイプです（以外に）
元気が取り柄で馬鹿で能天気。
鎌の意は未だに不明
いろいろ秘密がある少女（本人もしらない）

語録ＮＯ．３
【鎌】死神の運動神経・動体視力をン万倍に増大する物。
死神それぞれ自分のウチに眠る力。精神的なものと、死神としての魔力が力となる

次回！　ついに２つの話しが重なる。
ルートＡ　ルートＢ
和也と真琴。２つの主人公の物語が重なる。

【41話】決戦【序】　差し伸ばされた手（前書き）

スミマセン、文の量を考えたら次回予告の大半が42話からです。
サブタイを見ての通り【共通ルート】です！
遂に2つが繋がりましたぁっ！！
作者感激☆
和也「ヒ○キ感激？」
……
では、本文どうぞ！
……真琴ちゃんは出てきません
和也「共通ルートなのに何故！？
仲間について考えながら読んでください。

【41話】決戦【序】　差し伸ばされた手

「……さぁて。まだお仕置は欲しいか？」
『イエ、スミマセンデシタ』

よぅ、雨宮和也だ。
知らない人は1話から見やがれ馬鹿野郎。
さ：こ、こら！　そんなの言わないでよ！
か：オレの知ったこっちゃねぇ。
さ：前回のまだ……拗ねてる？
か：昇龍拳！！
さ：バイバイ◯ーン！！

「それより、レナ……。お前とこの学校に行くぞ」
「へっ？」

すっとんきょんな声を挙げる。そんなに驚くことかぁ？
これは極々当たり前の事だと思うんだがな？

「情報ならちょうど良い悪魔が居るじゃねぇか☆」
「はぁ？」
「黙れ如月」
「んや？」
「あっ！」

この中ではオレとレナぐれぇだから仕方ないか。

「待て、俺なんか罵倒されなかった？」
「さぁ？　気のせいじゃないか？」

そして、白を切る俺。
ついでに如月を罵倒したのオレ様♪

「で、カズ？　悪魔ってダレ？」
「先生だよ♪　しぇんしぇ」
「はぁ？」
「死にやがれ如月」
「ま、ついって来たらわかるか」

さっすが、将☆　もの解かりが良いねぇ。

「待って、俺なんか――」
「レナ、案内頼む」
「はーい」
「グスン」

鼻を啜るなよ、キメェな如月……。

そんな事はさて置きぃ。レナの学校へと進か。

街は先ほどのキマイラの事もあって、荒れてて騒々しい。
悲鳴や怒号……。子供の泣き声が絶えてない。

アクレイア……。許さねぇぞ。

先月来た時は平穏だった。それが、コレか……。

「なぁ、レナ……。許せない奴には……余計にボコらねぇと気がすまねェもんだな」

「うん」
「とりあえず、如月？」
「ぁん？」
「理神獄！」

【理・神・獄】『理（ことわり）』無く　『神』が受ける　地『獄』
死もせずに気絶もしないギリギリの位まで与える生き地獄の鉄拳。
人では１０日ほど悶絶したまま。

「がぁ……ッ。グゴォ……」
「ストレス発散も大事だよなぁ？」
『うん』
「てめぇ……らぁ……」

さぁて、生ゴミを捨てるか。

ようこそ、オレと死神？！　の世界へ。
先ほどの余興はいかがでしたか？　これからが、『本当の本編』であります。
僕……作者はコレまでのを余興だとしか思ってはいません。
内容は代わらずにコメディーで進めようと思います。
だが、それは僕のお話、オレと死神？！　の世界ではありません。
雨宮和也と、神堂真琴……２つの話しが繋がったのです、それは別の世界で、別の道を歩んだどうしで、合間見えない筈の２つ……。

それを繋げたのは、レナ・フォード＝ライズ・ハールド。
彼女の存在です。彼女は『オレと死神?!』の本来の主役も同じ……。
そして、僕のオリジナルの世界はココから始まります！
僕は僕自信の道を……歩むつもりです。
それは、僕が考えてる複線です。
その扉が雨宮和也と雨宮鈴南。そして、この2人の母……。
そこの扉の鍵を少しづつ確実に繋げましょう。
それが、世界の法則と言いましょう。
では……。本編をどうぞ

「はい……」
「そうか……レナを狙う奴か……」

オレは今、デーモンさんの前で以前にオレと一戦交えた奴等の会話をしている。
もちろん、この話しになる事も考えていたから、レナ『には』席を外させてもらった。
馬鹿で良かった……。

オレがココに来た理由は3つ、まずはアクレイアの居場所だ。
学校の教師で（なんと）歴史担当の教師のデーモンさんに助言を貰う為だ。
おかげで、位置がわかった。『海底神殿』そう呼ばれている場所だ。
なんか、最近に強い魔力を感じてるみたいだったらしい。ソコは元王家が滅んで『四二神』とやらに沈められたんだかなんだか。

そして、今話していた……。レナを狙ってた（っぽい）奴等の事である。

「……オーディン様だろうな、あのお方の考えそうな事だ」

「オーディン？」

デーモンさんから何処かで聞き覚えのある名前が発せられた。

たしか、北欧神話の最高神だったよなぁ……！！？

はっ……！？　さ、さささささささ最高神だぁぁぁあああああ〝あ〝！？

「な、なんでそんなのが、レナを……！？」

「……」

デーモンさんは口を閉じた。

「……オーディンってなんだ？　どこのどいつだよ！？」

奴には『オレが』借りを返さないといけねぇ……。

『神界』の者だ」

「神界？」

表し抜けた声でオレは返した。

「それって、神様が住む世界って事ですか？」

と、将が言った。

「ぐをォ……」

黙れ如月。

「あぁ。大まかな説明だがな」

「……なぁ、魔界と神界。なにが違うんだ？　同じモンスターとか、神獣とか、人っぽいのが居る世界じゃねぇのか？」

椅子に座りながらも俺はそう、訪ねる。

「……神話を知ってるよな？」

「あぁ」

「そもそも、人間界は神が想像した世界だ」

その言葉にオレの電波に引っかかった。

実に簡単でそれいって、最もオレが知っている世界……。

将は……？

隣に座っている将に視線をやる。

やっぱり……。そういう感じで冷静だった。

……まさか……『神界』って……。

「そうだ、君達が住む世界だ」

人間界……。簡単に言うとそうなる。

最も身近で、自分に関係深い……オレが住んでる世界……。

「なっ……」

理解は……予測はできていた。
だけど……あまりにも以外で……オレの想像を超えてるものだったから。

「カズ、予測はできたよね」
「ま、さる……」

口に手をやり将は自分の思考の中に溶け込んでいった。
なんで、んな臨機応変なんだよ……将。

そりゃぁ……冷静になるのが1番だ……。でも……。

「なんで……オレ等の世界が『神界』なんて大層な名前で呼ばれてんだ？」
「さっき言った事だよ、僕達が住んでる世界は神様が創った世界。だから『神界』じゃないのかな？」

と、デーモンさんではなく将がそう答えた。
それは先ほど言った事だ。
……。納得はしているつもりだ。だけれども……。

「その他にもある。」
「!?」

「神は未だに生きている」

オレはその言葉に……なにを感じたんだろう。
恐怖も無かった。
関心ってなワケでも、意外ってワケでもない。
オレは……自分がしってる現実がなにかわからなくなったんだろう。

自分の世界が変わった時なのかもしれない。

そして、オレの物語がやっと錆びた鎖が解き放たれ、回り始めたんだ。

動く。

まだ、錆びが取れてなくぎこちないが、確実に、少しづつ……。
錆びが取れつつある。
錆びのウチに眠る綺麗な錆びの無い歯車が、姿を表そうっとしていた。

だけれども、錆びた歯車は動く。
止まるきっかけをを得るまで。

「神……が、未だに存在している？」
「そうだ」

淡々と上がって行く言葉に……。オレはワケがわからなくなった。

「……神が存在してる？　どういう経緯ですか？」

将が椅子から立ち上がり、デーモンに淡々と自分の疑問をぶつける。

「簡単な事だ、『血統』神の直系だ」
「神の……直系……？」
「……神の子孫って事ですか？」

神ってのは化け物とかばかり産んでるんじゃないのか？
そもそも、んなのが居るのになんで今まで明かさなかった？

次々とオレの中では疑問が増えて行く。神とかほざくヤツラの考えはわからない。
理解できねぇ……。

「そうだ……」

「……なにか……隠してませんか？」

オレも当然この先生の不思議な事に気がついている。
それは……洞察力が優れてる将がオレより早くそう言った。

顔色が悪い……。
やっぱりこの先生……。なにかを……！

「……その先は話せない」
「……そうでっか……」

オレは立ち上がり、デーモンを見据える。

「では、オレがココに来た目的の１つですが……レナは何者なんですか？」

「……雨宮君、キミだけには話しておこうか」

真っ直ぐオレを見つめそう答えた。

「悪いな将……。席を外してくれ。未だに悶絶してる如月も連れてな」
「わかった」

将はそう短く答えて蹴り飛ばして部屋から出て行った。
バタンっと、扉が閉まる。

そうして……オレはもう一度、椅子に座り直してデーモンさんを睨む。

「……レナは……いや０７（レナ）は……」

０７？

―？？？―

「そうか……雨宮が真実に近づいたか」

「あぁ」

「ったく、人様が悶絶してるってぇのによ、軽く無視はねぇだろ」

「悪いな、雨宮の前ではそう言えないのでな」

「ふん。そろそろ、オレ等も動くんだろ？」

「だろうね。実験体０７　第一覚醒が始まってるみたいだし、極僅かだけど」

「……だが、オーディンの奴が動いてるんだろ？　早くしねぇと」

「大丈夫だ、あんな老体如き我等に敵いはせん」

「だが、実験体０７が最終段階に入ったら……」

「あぁ、もう一度……世界を含めた『革命』が起こる」

「やれやれ……。ラグナロク……もう一度起こるってーのか？」

【ラグナロク】神話の中の戦争の事

「ま、鍵は雨宮和也と０７の動きだよ」

「……だろうな」

「ふふ、機が熟すのを待つのみさ」

「余興を楽しんでますか。事態がどう転ぶか……な？」

「では、能力開放もＬＶ．３（スリー）で行くぞ」

「あいよ」

……レナが……。
マジかよ……。

落胆とは別。軽蔑とは異なる。
しかし、先ほどの発せられた言葉は
ソレほど、前までのレナとどう接するか解からない部分があった。

「……」
「もちろんこの事は1部の者にしか知らない」
「だけれど……」

どうやらレナは自分の『出生』を知らないみたいだ。
イヤ……知るべきでは……ない。

「……後は6時間だぞリミットまで」
「……そうすか」

オレは椅子から立ち上がり。部屋からでようとする。

「レナを頼む……」

デーモンさんが、弱々しく……オレに言った。
オレは「わかってま～すよ」と、軽く答える。
根拠……ンなの無い。

でも……オレはレナを見捨てたりなんかしねぇ。
守る……。守りきってやる。

『2度とあんな事……』
えっ？

自分で疑問に感じた。2度と……なん、なんだ？
オレは……何かを知っている

呆然と座ったまま。和也は目を開けたままであった

時は1時間過ぎた。

オレにとっては永遠を思わせる……長くて……。
重たくて……苦しい時間だった。

「……」

アクレイアだかの居場所へ空間を繋げてくれるらしい。
正直、あの時間からあそこまで行ったら間に合わない。
助かった……。けど……オレは……守ってやれるのだろうか？
レナを……魅夜を……。こいつ等を……オレの力で……。

守れるのか？　オレだけで……。

和也は一人だけで考え込んでいた。
最も身近にある『強さ』を見失っていた。
最も近いのに最も見失う強さ。
けれども……今の和也はそれがわからなかった。

「……準備ができたぞ」
「あぁ……」

沈黙の面持ちが場を包んだ。

「じゃあ……レナ達をお願いします」

ジーンズのポケットに手を突っ込み。笑顔とは限りなく放れた笑顔で和也は答えた。
顔は笑顔だ。だけど……心からの笑顔とは別。
ただ、自力で笑顔を作ってる。

「わかった……本当に良いのか？　彼等を連れて行かないで」
「はい。ココからは……オレの問題です」

そこから、デーモンはまた、黙り込んだ。

いったい……。なんだってんだ？

世界は理不尽に動き続ける。
それは、自分の人生が終るまで決して止まらない。
止まることなど許されてないんだ。

「ここだ。門（ゲート）は開いてる」
「そうっすか」

奴は……アクレイアは余程の実力者なんであろう。
だからこそ……アイツを守る自信がねぇ……。

もし……失敗したのなら？

もし……将や如月にも被害が及んだのなら？

もし……ダレ、一人として守れなかったら？

もし……アクレイアに果てしなく及ばなかったら？

……考えるんじゃねぇ！　ンな事……！　考えるな！

そう思うが、どうしてもマイナスの方向に考えてしまう。

一人で迷路を迷っている。

1人じゃ解決できない迷宮。

どうしても、行き止まりへ向かって、同じ道を何度も来てしまう。

高い壁を見上げながら、なんどもさ迷っては行き止まりしかない。

道は閉ざされてるとも知らずに。

永遠とさ迷ってるしかないのだ。
迷宮の先に居る者達に和也は気がついていない。
「一人で本当に大丈夫なんだよな……」
「はい。あいつ等には迷惑をかけられませんから……」
声が少し上擦って微かに手が震えている。
それはマイナスの事しか考えれていない和也が居て、最悪の事しか考えていなかったからだ。
「……だぁれが、てめぇに迷惑なんか掛けるかよ」
「!?」
背後から声をかけられる。
聞き覚えのある声だった、2年間だけど殆どの時間を過ごした親友と呼べる人間
「そうだよ♪　僕等はキミに助けてくれなんて頼んでないしさぁ……」
「それに、ンな落ちぶれちゃいねぇよ」
「なんで……？　お前等……？」
気配には最大限気を配っていた。
普通の状態ならば……和也は気がついていた。
だが……
『今の』和也は気がつかなかった。
「ふふ～ん！　私は美少女スパイもできるからね！」

お前の何処がスパイできんだよ。

「いいか？　てめぇのそういう自己満足が毎回ムカツクンだよ」

ズカズカと駿は和也に近づいて服を掴む。身長の差で和也の足が少し浮く。

「な、にすんだよ！」

「俺達はお前のお節介ががイヤなんだよ！」

「お節介なんか……」

「してんだよ！」

駿の言葉で和也は詰まった。

「お前よぉ……？　ダレがてめぇなんかに俺を助けてくださーいなんて言った？」

「……」

「俺はンな事言ってねぇし言いたくもないね。俺の自由をてめぇに奪われたくなんかねぇよ。確かにお前にはすげぇ力がある。だがよ、ンなの自己満足でしかねぇくせいに勝手に言うんじゃねぇよ」

「自己満足なんかじゃねぇ！」

「自己満足じゃなきゃなんだ？」

「っ！」

駿の攻撃……いや、口撃が和也を徐々に詰まらせる

駿の放つ鋭い眼光が和也を見据える

「お前がレナを守るってのは見とめてやるよ。けどな、俺等はンな落ちぶれちゃいねぇ」
「……悪い。だけど！　今回は……本当にヤバイ」
キマイラとの戦いで気がつかされた。
今回は本当に化け物なんだって、今回は雑魚との喧嘩じゃねぇんだって。
今回は……オレが、『力』をもったオレがなんとかしねぇといけねぇんだって……。
仲間が……大切なヤツが傷ついて欲しくないから……！
「本当にヤバくなったら、助けてくれれば良いだけど……オレ等のやれる範囲ぐらいやらせてくれ」
徐々に駿の声が強くなる。
強張ってるのではなく、優しく……。
「そうだよ？　折角ココまで来たんだ。僕だってココで引く事はできない。
あんなにされた街を見たんだ。君と感じた事は同じだよ」
「駿……将……」
力が抜けた。
先程まで、和也をピリピリさせていた迷路から前とは違った光が見えた。
その先には……手が３つあった。
和也に向けられ伸ばされてる手……。
「私を忘れない！　私だって和也の友達だよ♪」

光の反射によって見れなかった顔が見えてくる。
３つの手の主は……

大事な……なにより大切な親友の
如月に将、レナの顔だった。

上を見上げながら和也は、伸ばされたてに指を絡めた。

「……」

アレ？　なんで目から水が……？
なんでだ？　とまんねェや……？

「和也、お前は一人じゃねぇんだ」
「そうだよ、カズにはね、僕達がついてる。迷った時こそ」
「私達を頼りにしてよ♪　私達だって迷った時に和也が助けてくれたんだから」

「……お、れぇっっ……」

久しぶりに見た光は……今の和也には眩しすぎていた。

『仲間』という光が……さ迷っていた和也に降り注いでいた。

1歩。また1歩と、和也は確かに進んでいった。

仲間を得た和也が次はどんな壁に……迷宮にぶち当たるか。

それは……神のみぞ知っている。

「行って来い。待っている者も居るのであろう」

「はい……。行ってまいります」

和也は顔を上げて。そう答えた。

待ってやがれよ！　アクレイア！　テメーにはお仕置をしてやるよ！

魅夜……ぶっ飛ばしたら迎えに行ってやるよ。

「行くぞ、猪八戒、将、レナ」

「和也!?」

「うん」

「へ～い」

4人は門へと足を進めた。

【41話】決戦【序】　差し伸ばされた手（後書き）

今回は水瀬歩奈実様です！

四二神のＮＯ．２．実力その他は未だに未知数。
幻術だけならば神をも優る。
不思議ちゃんに使用と努力はしてるんですが実力及ばず…
鎌の意は・幻影の魔狼鎌／ファントムフェンリル
幻術もそうだが死神としてもなかなか優れている。

語録ＮＯ．４
【雨宮流無差別格闘術】和也が用いるジッちゃん仕込みの武術。全ての武器（拳、銃など）全てを合わせ応用した武術。〇の型だけでも数千種類ある。
それを極めた者を「武器を統べし神」【武統神】と呼ばれる。

【番外編】累計アクセス数７００００突破記念のたまーに増える短編なのです

続きが気になる人、マジゴメンナサイ
作者がコメディーが書きたいと、ワガママを発して続きではなくて
番外編たるコメディーを書きました
ほのぼの……？　です、では！　ドウゾ！！
あ、細かく言うと……７２，１２３名様のアクセス数です♪

その１　阿野名
その２　須川先生
その３　メガネ（ダレ！？）

まだまだ、増える予定です♪

【番外編】累計アクセス数７００００突破記念のたまーに増える短編なのです

―Ｍｅｉ　Ａｎｏ―

「会長おおおお

よく、階段も引きずられたわね……。
美樹の意地も飽きれるわ……。

2度ノックをして「失礼します」と言い、部屋に入る。

校「そこで、でるの～？」
教「まだまだ甘いですよ～校長。相手を1回ダウンさせてから瞬獄殺すると全部当たるんですよ」
校「卑屈だね～。卑屈すぎるぜ～教頭ちゃん♪」
教「恐縮する教頭でありますよ～そんな気分の今日この頃」
校「ナイスだよ♪　さすがだよ、教頭ちゃ～～～～ん♪」
教「今日も強力なまでに冴えてますサエコさん」
校「ははは！　某野球選手の奥さんか！」
教「そーうです。ウスターソース♪」
校「いいねぇ♪　最高だぜ教頭ちゃん♪」

……他の生徒会の子が号泣しているのが、私の脳内に焼きついた。

「閣下殿！！」

美樹が五月蝿かったので、蹴り飛ばして黙らせた。

ダレか……まともな校長&教頭を連れてきてください。

それは、生徒会全体の望みだ。

「か、会長ぅぅ～～」
「大丈夫だから♪　ね？」

慰めるように弾んだ声で副会長の百合ちゃんを慰める。

あ、名前が百合なだけでこの子はＧＬじゃありませんからね

「やっぱり会長・・・ステキ（ポッ）」

「火照るなクソ書記」

ＧＬ１００％なのが、書記長の永見雅ちゃん、コイツの毒牙に掛かった少女は数知れない。

生徒の相談で大多数を占めている。

「校長に教頭……話しを進めましょう」

校「ちゃんと、やるから～」

教「今、やろうと思ったのに……」

「何処ぞの子供（ガキ）の言い訳ですか！！！！！！！！」

テレビ画面に拳を叩きつける。【ズドオオオオオオオオオオオオオオオン・・・】

爆発した。

なにがかって？

テレビが。

なんでかって？

企業秘密です☆

校&教『さぁて、会議をはじめようか』

「はい」

【ガクガクブルブル（恐怖）】↑1名以外

【ダクダクダクダク（鼻血）】↑某書記長

他の生徒会の子が振るえてるけど、なんでかな？

アハハハ。普段大人しい子を怒らせちゃ駄目だよ？　読者さん♪

この話しのかんそ――――

「某ラーメン狂！！！　積年の怨み！　晴らしてやるからねぇぇぇぇえええ！！！！！！」

以上、命知らずの阿野名からでした。

―Ｍｉｋｕ　Ｓｕｇａｗａ―

「で、その友達にボコボコにされた高校生の治療を手伝って欲しいの？」

『あぁ、結構ヤバくて、俺でも危険なんだよ』

「ふーん。気が向いたら行くわ」

『あぁ、作者のお気に入りの人物だからなるべく来てくれ』

「はいはい。わかりました」

全く、アイツ……相変わらず強引なんだから。

それにしても……何処をどーしたらキャッチボールの流れ弾で入院して、病院に居て悪化するんだか？　何か悪意に満ちてそうね。

「どうしたんですが？　須川先生？」

「ん？　昔の親友よ」

今、何故か蹴り飛ばされて大怪我をした女子を治療中であった。
そして、連れが阿野さん。
そりゃぁ、親友だから心配か。

「はい、終わりよ。全身複雑骨折ぐらい簡単よ」
「あ、ありがとうございます（な、何者ですか！！？）」

阿野さんが明石さんの首根っこを掴んで扉に手を掛けた時に私はついでにこう言った。

「阿野さん、女の過去を追及したら人には言えない事になるわよ」

それを聞いた途端、人間を超えるスピードで逃げ出した。

やれやれ……。
私も暇だし行きましょうか……。

アイツと、顔を合わせるのは何百年ぶりかしら……？

「助かったよ、ミク」
「まだ、助けてないわよ。ゼイア」

私は今、病院の中庭に居る。
ま、旧友と患者についての話しようと中庭のベンチに腰を落しただけだが。

「病院（ココ）でそう呼ぶなよ」
「あら？　スミマセンね。碇谷先生。ずいぶんとイケメンドクターで騒がれてるじゃない」
「別に【種族】で言えば当然だろ？　この程度」

コイツは確かにイケメンだ。整った容姿と優しそうな笑顔と器量の良さ。
ココではコイツがモテモテなのも理解できる。

「【淫魔（インキュバス）】でいえば、微妙だけれどね」
「【淫魔（サキュバス）】のクイーンに言われるとやっぱ傷つくぞ」

私達は淫魔と呼ばれている種族の魔族だ。
人を惑わす容姿を持ち生気を吸い取るっと言う者だ。
その中で、私はサキュバスの美の象徴っと謳われて居た。
そして、コイツはインキュバスの中で不細工な方である。
コトもあろうに私とコイツは幼馴染で、同じ考えを持つ者同士であった。
【生気】を使って【人を助けたい】。２００年近くからずっと思っていた。

「ま、良いわ……。容態とかを聞かせて」
「あ、あぁ……」

ふ～ん。大体の事情はわかったわ……
それにしても……友達に苦労してる子ね……。

「キミ達は、良いよ」

入ろうとするナースを止める。
まぁ、私達の治療を見せるワケにはいかないからね。

「ミク、行くよ」
「わかってるわよ」

あの馬鹿……ナースを止めた際に生気まで吸ったわね

「取り合えず簡単な部分は俺がやる。ミクは難しい内蔵の部分を頼んだ」
「あいよ」

まずは内臓の破裂個所を探すために魔術をかける。
【透明化(スケルトン)】で内臓を見やすいようにする。
治療専用の魔術なので内臓や毛細血管など見え見えである。
身体に傷(メスのあと)を入れるのも悪いので手と他の器具に魔術を掛けて。
皮膚を切らずに破裂個所などの縫合を素早くする。

「取り合えず身体は終わったわ。次は目と耳の細胞を再生させるわよ」

目を開いて指を突っ込み傷ついた場所に組成魔法をかけて出来あがりだ。
耳も同じ、指を突っ込んで細胞を復活させる。

コレだけのコトに１０分。
私は。

馬鹿はいまだに皮膚の縫合をしていた為、私の悪戯心が働いた。

強化しようかしら♪

それは簡単なコトである、自分に存在する生気を送り込めば簡単である。
余程の実力者ではない限り勝てない身体にしよう。
まぁ１／１０００００００ぐらい送れば
親指と人差し指でリンゴは粉々。
左右共にヤシのみとドリアンを潰せる程の握力
１００ｍ３秒の神速
Ｉフィールド並の耐久性。
野球でいえば２００キロの速球を投げれる・打てれるように
などなど、改造した。
期限は１日ぐらいかな？

改造は良くないか……強化した。

その頃、丁度馬鹿も終った。

さ：因みに外では

【グワァシャァァァァァン！！！！】【ズドォォォオオオオオン！！！！！】【ビカァァァァァァァン！！！！！】【ガシャァァァァァァァァンン！！！】【どなどな～♪】
などの、効果音が流れていた。

※魔法特有の音を出さない為に馬鹿が擬音をだしていた。

「先生ーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！　開けてくださぁぁぁ

この話しの感想
名前はだしてませんけど、コロコロ先生……この短編、度々スミマセン

やぁ、僕の名前は、葉架瀬典齊（はかせてんさい）だ。
度々、メガネとして登場しているよ
1話と16話に出てる
その度には、魅夜さんや和也君に元気玉喰らったり、アッパー喰らったりしている
気がついた人も居るかも知れないが、もう一度言おう、僕の名前は葉架瀬典齊だ
言おうか。ハカセテンサイなのだ
わからないって？
これならどうだ

―Ｔｅｎｓａｉ　Ｈａｋａｓｅ―

なんだって
まだわからない！？　キミには恋愛者の主人公の称号をあたえるぞ
朴念仁って言えば良いのにツッコミは誰がいれた！！！？
ええい！　ならばコレだ
天才ハカセ
そう、僕のあだ名は……
「お～い、メガネ」

そう！　メガネ！！
じゃない！！！
ハカセだ！！

「ノート見せてくれ。数学の」
「木沙本（きさもと）君、またかい？」

優しく微笑みながら宿題の部分を出す

「Ｔｈａｎｋｓ」

何故英語で答える

「ハカセ――？」

ほらね、僕のあだ名はハカセだ

「イントセイヤ」

何ですか！？　ハカセ――イントセイヤって―？

さ：ふ、一部の者しか知らない熱き物語さ

「そういうお前も全然知らないだろーが作者」

さ：和君、作者との会話は避けようぜ、常人には見えねぇし

「イヤ、クラスの連中はお前が見えるぞ」

さ：なんだよソレ！！！？　この世の神である俺も知らないよ！

！！！

『この世の神は、キャラクターだけさ』

さ：クラス全体に言われると傷付くんだけど！！！？

……僕だけ、見えないの？　マジで？

みんな見えるのに僕だけが見えないわけが……あるもんか

それより本題だ、本題自体ない？

そんなのはわかってるよ

僕は天才だぜ？

さ：馬鹿だがな、学年1位なんだよな

なんだ？　人を小馬鹿にした声が聞こえたような……？

「名――――――――――！！！！！！！！！　落ち着いてえええええええぇぇぇぇぇ・・・」

明石先輩の悲痛な叫びがきこえる。

僕等一般人は明石先輩に弱点もとい弱音を知られているから教師陣も逆らえない

バックに校長と教頭も居るとか・・・

「阿野流撲殺術　釘☆バット――――――――――！！！！！！！！！」

【ちゃららぁ～♪　ちゃらりらり～ら～♪】

なんだ？　ゲームオーバー的な効果音は
くぶぅあ！！
何かと激突した
それは勿論
明石先輩どある。
釘バットで殴られた明石先輩が壁を突き破って僕に直撃したのだ
な……んで
有り得ない。この学校は壊れてる
ん？　そうか……作者が壊れてるんかー♪
作者よ、死ね
さ：【天誅（電柱）】
「わぁお。他作のキャラクター付きの電柱じゃん♪　この短編危うくねぇ？」
さ：言うなよ
「ってか、コロコロ先生の常連しかわかんねぇだろこの短編」
さ：否定できないぜ
「一回誰かに殺されろやクソ作者」
今回は……僕が主なのに……なんで……？

この話しの感想
……面目躍如ですね
なにソレ？
作者も知らない言葉だよ
面目ありません。そう言えば簡単だろう
「ちげぇよ！」

【番外編】累計アクセス数７００００突破記念のたまーに増える短編なのです！

後々、増えて行きます♪
たまに覗いてね～～～～　ｂｙレナ　サブタイに書ききれなくて後書きに！？

和也「謝れ！　コロコロ先生に謝れ！　須川女医の部分を！！」
ぐをぉ……。
真琴「って、か勇者魔王以上知らないヤツわかんねーだろ！！」
大好きな作品だからな。
和也「ではではぁ～！！　雨宮流剣術を披露しましょうか！　閃！　糸貫斬」
作者原子まで綺麗に分解。
和也「原子は最も細かい位だぜ」
名「師匠！　某ラーメン狂ヲ倒す特訓をさせてください！」
和也「却下！」
駿「和也～？」
和也「影薄会に出てろアホ！」
レナ「ｋ
和也「死ねえええええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇ・・・！」
じゃあ、それでは……ガハッ
さ、再生に時間を下さい

増える予定
その４　羽柴君（９話参照）
その５　和也君（幼少）
その６　真琴（四二神編）

そう！　マコちゃんの場合は“編”なのです！

まだまだあるんです！

【42話】決戦【中】　本当の戦いの幕開け（前書き）

うわぁぁぁぁあああ！！！！！！
次回予告のがまた遅れたあああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・
和也「爆撃殺！」
【チュドオオオオオオオオオン】
和也「次回超長編終了！」
レナ「そしてあかせれるマコちゃんの弱点とは！？」
和也「そこじゃねぇ！！」
レナ「じゃあ……あかせれる古代遺跡の財宝とは？　そして呪いとは！？」
和也「冒険小説じゃねぇよ！
ファンタジー&学園コメディーだ！」
レナ「刮目（かつもく）せよ！
和也「次回へと続く！」
和&レ『ｓｔｏｒｙを！！』

【42話】決戦【中】　本当の戦いの幕開け

……しまった。
反省したって仕方ない。
そもそも、アイツの場合なら毎回こうだったじゃないか。
注意するべきであった。
くっ……。仕事を増やしやがって……！

「どうするの？　カズ？」
「とりあえず、オレはアクレイアとこに行く。将達は……【ズガァァァァァァアアアアアン！！！！】ん？」

なんだ？　スゲー音がしたぞ？

「和也！　コッチだ！」

如月の言葉にオレが反応し部屋の中を確認する。

凄まじい傷跡がその攻撃の凄まじさがわかった。
見るかに頑丈そうな石造りの床にあんなにくっきりと傷跡を残していた。

ダレか居る……？

「・・・・・・・・！」
「・・・・・・・・」

駄目だ、聞き取れない。
でも……黒いフード……？　まさか……死神か？

なら、もう一人は……？

（駿、彼等も動いてるみたいだね）

（あぁ……）

ん？　玉座……？

お！　あんな所に隠し通路があんじゃねぇか。

多分……その先に……ヤツが居る。

「将……行くべきか？」

「待って、カズ。もう少し後でで行こう」

「はっ？　なんでだ？」

オレが将に意見を聞こうと思ったが返答はＮＯ

それに、疑問を持ったか？　如月が将に理由を聞こうとする。

オレも将に理由を聞きたい。

「率直に言うと彼等が片付けてくれるかもしれないからだよ。

それに……この先にはワナが沢山ある筈だ。先にそれらを解いて貰ってから行くべきだ」

「ほぉう、四字熟語でなんて言うんだ？」

『バカ。自分で辞書を引け』

如月の言葉に綺麗にオレと将がハモッた。

あ、読者さんも探してみてねぇ～☆　ｂｙ雨宮

「確かに……将の言ってる事は正論だな。少し時間を空けてるか」

「その必要性は垣間見得ないな。ここで、死んでもらうぞ」

「ぁん？」

「氷よ、固定せよ。アイスフィック」

声がしたので振りかえろうとした瞬間だった。

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｈｉｎｄｏ

ｕ―

……深海魚……悪趣味だな。

先程までとは景色が一風して変わった。

石造りの頑丈な城……しかし、ココはまるで水族館とでも言うのが正しい。

ガラスの壁。空間全体が透明なんだ。

他の色など微塵も持たない。透明に深海の深いとっても暗い水の色。

光すら微塵もない。あるのは……設置されている蛍光灯の電気だけ。

人工の物しかない。

「……エル、ここは？」

「悪趣味だろ？　親父の趣味なんだよ。この先には親父の研究所がある」

研究？　前・王が研究をしていたなんて報告されてないぞ？　それに……何故ココに神界の物が？

まぁ良い……全てはアクレイアから吐かせる。

しばらく真っ直ぐ進んだ。
その先には壁があった。どうやら……コレは……。

「どいてろ……」
「ん？　あぁ」

【ズガァァァ

2人は駆け出した。

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

「大丈夫か……？　将に如月」

「あぁ……大丈夫だい」

「カズがコレから相手にするヤツとは比べ物にならにからね」

見てるしか……方法はないのか？

オレは……？

「これでも昔は＜紅蓮の鬼＞と言われてたんだ――――

負けるわけにはいかねぇよ……！」

「僕だって、伊達に＜知略の破壊神＞の2つ名じゃなかったからね……

僕だって……負けたくはないよ」

立つな！　あの野郎の相手はオレがするから！

この、氷さえ……砕ければ！

「凍てつけ、魔弾の氷河！　アイスボール」

「砕けろぉッ！　双焔牙！」

如月のハイキックで氷の起動を変える。
だが、敵から第二撃が来る。

「切り裂け、氷の刃！　アイスブレード！」

天井ギリギリから氷の刃が生み出され、駿に向かって落ちる。

「ちぃ！　駿！　さっきの氷」
「？　あぁ！」

上体を反らして先程の氷に手を掛けて、反動に任せて飛び降りる。
刃は先程、駿が居た位置を過ぎ、なにもない地面に微かに後を残した。

なっ！？　アレぐらいで僅かにしか傷が付かないだと？

和也は先程の傷跡を確認する。
強力なレーザーみたいなもので深く傷ついた地面を見直した。

いったい……どうやったらこんな傷が……？

ソレより……両手両足が氷付けの上体をなんとかしねぇとな。

攻撃……サポートでも良いからなにか……ないのか？

「くっそぉ！」
「駿、焦ると死期を早める」

……イチか……バチかだ。
やってみる価値はある！

集中しろ……大気の流れを……万物が所有してる氣を感じ取れ。
気功が苦手だとか言ってる場合じゃない……。

動いてる気が3つ……。
将と如月……あとは名無しの少女か……。
体格、氣の量……あの大きくて赤い氣は……如月のか？
随分と氣が集まってるな？
じゃあ……あれが？　将か？
って、コトは……あれがお嬢ちゃんの氣だな……？

……石の氣、大気の氣、人物の氣、氷の氣……。
見える……。

集中しろ……ゆっくりで良いから……。

まずは、邪魔な氷を破壊する。

『砕けろ』
と、強く念ずる。

氷の氣……これを……爆発させる！

雨宮流気功術・爆撃殺

雨宮流格闘術を氣に特化させた武術
大気の氣に自分の氣を乗せて氷を包み込む
氷の氣に意識を集中させて氣を操作する

『砕けろ。砕け散れ』頭の中で幾度も念じる
先程まで自分を押え付けていた氷が砕け散った。
……反撃、開始だ

駆ける。迅速に、狙いを定めて
拳を握り締め、将と駿の間をくぐり抜ける

「！？」
「なっ」

一迅の疾風が駆け抜けた。そして握り締めた拳は既に名無しの少女（名前募集）を吹き飛ばしていた

手は凍傷を起こして赤く腫れ上がっている

そして何より、和也の目は何より冷徹であった
全てに対して冷めた目つきで少女を睨みつける

「くっ！」

「出ろッ！　鎌！！」

和也の手から鎌が召喚される。
そして和也は真上へ上げて。振り落とした。

いや、振り落とそうとした。

「……私に生き恥を背負い生きろとでも言うのか？」

少女は和也を睨みつける。
その視線は殺意の塊であった。

大きな力の差を見せ付けられて、殺されるのも覚悟して来た。
その決意を、和也は踏み躙ったのだ、少女の決意を軽く扱いすぎた。

尻餅を付いてる少女に対してただただ、鎌を突き付けるだけ。

「……。例えお前が将や如月を傷つけようが……オレはお前を殺したりはしない」

その言葉に少女の眼光はさらに鋭くなる。

殺意に少女は捕り込まれる。

「貴様……！」

「オレは、殺すヤツと生かす奴を決める。お前は殺すべきではない……と、思う」

よく、ジッちゃんが言ってたっけ？

『考えるコトは人を生かすも殺すコトもあるものじゃ……。お主は優しい者じゃから、戦ってる内に相手の感情もわかる。それは、お前が審判の資格があるのじゃ、本当に醜き者のみを倒すのじゃ、心が汚れていれば殺しても構わぬ。しかし、幾ら仲間を大切な者達を傷つけられても怒りに走ってはならん。心を理解するのじゃ、優しい力のある和坊ならできるぞい？　和坊はワシの孫である前に最高の弟子じゃからの、良いか？　表が闇であろうと悪ではない、裏に悪がある者こそ本当の悪じゃ。表の闇には理由があるものじゃ、ただし、裏の悪には醜い感情しかありはせん、表の闇には裏の正義があるものじゃ。対に、表に正義があろうと裏には醜い感情が溢れてるものじゃ。和坊はそれを見極めるのじゃよ。そして、己の心を貫き通せ。『やる時にやらないのならば、そこに、やる意味は存在しないものじゃ』コレは、忘れてはならんぞ。友達になるにはこの２つではない、真っ直ぐな者とだけにするがよい、真っ直ぐな者こそ、最も和坊の力になるじゃろうからのぉう。辛い過去を知るからコソ、醜くなるか、真っ直ぐになるか……ほんの僅かな違いで変わるものじゃ。よく言うじゃろう？　正義と悪は紙一重なんじゃ。和坊、【表の悪、裏の正義】。【表の悪、裏の悪】。【真っ直ぐ生きる者】。【表の正義、裏の悪】。【表の悪、裏の正義】。それが、人生で分岐する最初の道じゃよ。お主の強さはお主自信が知っておろう……。力は正義ではない。悪でもない……正義も悪も……心じゃ』

……よく一字一句間違えず覚えてるぜ……オレ。

まるで、昨日延々と聞かされたみたいだぜ……。

多分、コイツは……。

表の悪。裏の正義だ。

確信はない。そう感じただけのコト、根拠の欠片もない。

「なめるなあああああああああぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

和也を囲むように氷柱が現れる。

そして、和也に向かって降り注がれる。

簡単に人を突き刺すコトの出来るほど鋭利な氷柱。

しかし、ソレが和也に刺さるコトは無かった。

「僕等を忘れられては困るね」

「まったくだ」

駿と将が全てを破壊したからだ。

全速力で氷を砕く。

例え、少女に敵わないが、今度の相手はたかが氷。

地区最強の座をを争っていた程の実力者である。

和也と昔は対等であった将と2，3歩及ばない程度の実力の駿。

常任とは比べ物にならない程の実力があるのだ。

氷柱程度ならば簡単に破壊するコトもできる。

「くっ……！」

「……お前の負けだよ」

負けを認めてくれ。最悪の場合……オレは……やりたくないコトをやらないといけないんだ。

彼女にプライドがあるコトはわかってるだけれども、殺したくはない。

そんな心境が、和也を取り巻いた

同情……そんなものではない。しかし、和也は殺さない。
この子は……殺してはならないんだ。
何故か、そう感じてるだけ。

その考えが……後(のち)に災厄を撃ち抜くトリガーだとは……知らない。

「話してもらおうか……アクレイアについて」
「私は……アクレイアの使いではない！」

はっ……？

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｈｉｎｄｏｕ―

「着いたぞ神堂……最深部だ」
「行くぞ。ＥＬＬ」
「英語表記なのは何故？」

気にするな。
この世は気にしたら終りなのだからな。
ん？　エルの英語表記は“Ｌ”じゃないのかって？
ＤＥＡＴＨ　ＮＯＴＥの見過ぎだ、流石に名前となれば違うっつーの

さ：読者に失礼な主人公ばっかだ。

先程までとは違い、普通といえば普通のを開ける。
ま、普通といえど……王族が使うような大きく2人がけで開けるような両開きの扉だがな。

「風よ払い除けよ。我を仇なす者に裁きを与えたし。風は天(そら)へと向かい。裁きの風をココに召喚す。神の息吹たる風、来(きた)れ。我が刃とし……切り刻め！　風の刻印。集(つど)え風の聖霊……我が力となるべく！退いてろ！　エル！！　ゴッドエッジウィンドー！！！」

無数の風の刃は簡単に扉を突き破り、奥に居た数百の黒い者を撃退した。
【アガシオン】アクレイアの使い魔、それが控えていたのだ。
風は全てを切り刻み、全てのアガシオンを抹殺した。

「わぁを」
「エル……まだ、1匹残ってるぞ……」

ちぃ。全部相殺されたか……。
まさか……これ程だったとはな……

まぁ良い……。

鎌を構え直す。

「いい加減に犯人捜しゲームはお仕舞めぇだよ！！　アクレイア！！！！！！」

カァン。と、軽い音を発てアクレイアの元に駆け出した。

エルも援護とばかりに魔法を放つ。

「……。キミには興味がないよ」

【ズバァン！】

その音だけが静かに響き渡った。

「……な、に？」

口から紅いものが吐き出された……。
これは……血？

吐血。
なにがあった？
いったい……？

駄目だ……意識が遠のく……。
クソ……こんな所でやられてたまっかよ！

足を踏ん張れ。歯を食い縛れ。腕に力を入れろ。前を向け！
目をしっかりと開けて、眼前の敵を確認しろ！
立ち上がったのなら……眼前の敵と向かい合え！！

「負けてたまっかよおおお

右手を前に出して、ソコから握り締める。

……右ッ！

そうか……見えない剣だ。

見えない武器には感じろ。

そうしたら、見えないものも見える。

属性は風……ならば。

「土よ」

右方向に岩の壁を作り出す。

ガァン！　と、鈍い音を発てて相殺する。

「風の射手。放て！　【ストームアロー】！」

左手で風の矢を射つ。

風が螺旋を描きドリル如くアクレイアに向かい射でる。

ちぃ。防御壁かよ……。

風の矢はアクレイアの前に張られていた防御壁に遮られる。

間髪をいれずに鎌を振るい、切り裂く。

「でやぁぁぁ

防御壁を破り、間を開けずにアクレイアに突撃する。

「甘いよ♪　色々とね☆」

弾むようなふざけた口調でアクレイアはもう一度腕を差し出して、火と水の衝撃波を出す。

火には水。水には金。

瞬時に判断し同じ衝撃波を出す。

しかし、結果は相殺。

幾ら五行で優でも、魔力で決定的な差がある。

それが、真琴とアクレイアの例。

魔力が決定的に違うのだ。

「ちぃ！」

「ほらほら、行くよ♪」

相変わらず人を小馬鹿にしたような声で、次々と魔法を放つ。

火の魔法。水の魔法。金の魔法。土の魔法。木の魔法

それらを使い分けて放つ。

「エル！　起きてんなら返事しろ！」

後方にいるエルの援護を求む。

だが、さっきから援護がないとすると……。

「わりぃ……今、起きたとこだ……」

「無理はすんな！　ゆっくりと回復させとけ！」

エルを戦線から引かせる。

援護がないのはキツイが……。

やるんだ！　やるっきゃないからやるんじゃなくて……やるべきだからやるんだ！

「ふぅん♪　まだまだ！！！」

その余裕……断ち切ってやるよッ！　アクレイア！！！！

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

……雨宮鈴南ねぇ……？

ダレだ？

まぁ、雨宮なんて苗字は結構いるけど……。

まさか、オレがその鈴南の空間を切り裂く力を狙うヤツとなったワケか。

いらん勘違いだ！！

オレはンな幼女誘拐など！

さ：待てよ、じゃあレナはなんだ？　キミの甘い言葉で家に呼んだ

んだろ
え？　それはぁ……その……。
さ：……どうなのかな？
……。さぁて、本題に帰るか
さ：こらぁ！　逃げるな！！
爆撃殺ッ！
【チュドォォォォォォォォォォン】あふらぁく！！

「さ、お前はお前の仕事をしてろ。オレはオレ等の仕事をするだけだからな」
「うむ。了承した和也殿」

性格が変わったのは気にスルな。
ビジネス用の顔とバトル用の顔があるってコトだ。

「んじゃ。将と如月はレナと魅夜を探してくれ。オレは行って来る」
「了解」
「あいよ」

時間も空いたっということで、オレは次へと足を進めた。
お遊びの時間は終りだぜ。
さぁ、おネンねの時間だぜ？　アクレイア？

―Ｒｅｎａ・Ｆ＝Ｌ・Ｈ―

「ねぇ？　なんで四二神が動いてるんですか？」
「なんや？　簡単なコトやで？　自分で汚した部屋はなんす？」

「爆破」
「コワッ！！！」

ん？　だってー邪魔なものが出るから排除するタメに爆発させて後は、残りを抹消させて終りだよ？　それなら3秒で終るし♪
『魔法防御空間→爆撃魔法→消滅魔法』の順番でやれば完璧よ？
爆撃魔法（イクスプロージョン）の被害を押えるために防御壁を張って、爆撃魔法を使う。
残りの残骸を消滅魔法で無くせば完璧よ？

「掃除や！　あ・と・し・ま・つ！！」
「本末転倒？」

さすが私♪　文学少女だぜ♪
意味？　知らないぜ！
※物事の中心となる大事な事の、些細なことを取り違うコト纏めると、こうだったはずです。

「アホ！　お前やっぱり馬鹿やろ？」

ムッ！　馬鹿じゃないよ！！

「馬鹿言うなエセ関西弁！！」
「え、エセやないで！」
「「黙れ」」
「はい……」

真琴の居ないコトでツッコミにセイガが周っていた。
何故かって？　ボケだけの文は作者は書けないんだよ。
嘘だって読者さん、セイガは関西人だけでツッコミとボケの両立ができるんだよ。

関西人じゃないっすよ？　活動地域が関西地方なだけだ。
あ、活動地域に関してはまた。

「マコト……早く帰って来て」

うわぁ、鼻水垂らすなよ汚いわねぇ……。

「ねぇ、何処へ向かってるの？」
「うふふ、マコちゃんの暴走を止める為の物を手に入れるタメにね」
「あれを？」

はて？　なんの事かしら？

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｈｉｎｄｏ

ｕ―

うっ……！

「どうしたの？　僕はまだ余裕なんだけど？」

そうかよ……あの馬鹿強いミラーパクトがあるワケがねぇか……よくよく考えれば簡単じゃないか。
あの温厚な王が……あんな、横暴な政治をしたのも……そしたら、隠されていたこの研究がわかるじゃねぇか……。

目が霞んで、頭がぼやける。
多々骨に違和感を覚える。折れてるか……。

「キミにはもう少し期待をしてたんだが……ね！」

炎の槍が真琴を目掛けて唸りながら、接近する。

終りか……。
ちぃっ。クソ……！　こんな所で……！！！

『だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！』

魔槍裂破掌（グングニル・インパクト）！

諦めた瞬間、一つの閃光が真琴の目に入った。
それと同時に真琴は重たい瞼（まぶた）を閉じた。

「来た……やっと！」
「アクレイア！　やっと見つけたぜ！！！！」

真琴には目を暮れずに和也は自分の敵だけを認識した。
他のモノには気を入れる暇がない程、和也は気を抜けれなかった。

拳を握り締めて、構えを取る。

「雨宮……カズヤ！！」
「なんだか知らないが……ガキのお遊戯にはドが過ぎるぜ！」

その言葉と同時に2人が駆け出した。

【４２話】決戦【中】　本当の戦いの幕開け（後書き）

短編でモチベーションを上げてから更新するぜ！
でもって、キャラクターの紹介！
柴原魅夜さん！
大和撫子タイプの黒髪。髪は後ろで纏めてるポニーテール
和君に好意を抱いてるが、相方は気がつかない。
部活は弓道部で１年にしてＡ（エース）の実力。地区では２位、全国区でも２位の高レベル
怖いのが駄目なんですわよ～～奥様♪

語録ＮＯ．５
【雨宮流気功（格闘・剣術などなどｅｔｃ……）術】雨宮流無差別格闘術の各武に徹した武術。
んでもって、雨宮流は剣術が主流である。

はい、名無しの氷使いの名前を募集します。ワンキャラじゃないんで
容姿は金髪のショート
碧眼
１７０前後の身長
などなど他にもありましたらどうぞ！

【43話】決戦【終】　再びの日常（前書き）

うわあああああああああああああ！！！！！！！！
結局次回予告とりえてねぇぇぇぇぇぇぇえええええ！！！！！！！！
！！

和也「ドラゴニッククリア！」
げふぅ！
和也「次回！」
魅夜「夏だ！」
詩織「やっと出番だ！」
ユウ「ボクも♪」
レナ「夏休みだ！」
駿「海だぁ！」
将「花火だ！」
？？「ラーメンだ」
『！！！！！！！！！！！！！？』
アクレイア「？　作者？　何故に土下座？」
いや……ねぇ？
『刮目せよ！　次回へと続く！　ｓｔｏｒｙを！！』

でもって……１マス空けて見ました。
どうかご確認してください、どっちが見やすいか教えてください

【43話】決戦【終】　再びの日常

―Makoto Shindou―

「ガキが！　心の叫びなんかには気持ちなんかねぇよ！！　心の声自体に気持ちなんかねぇ！　心ってのはな、声があってやっと気持ちが……思いが伝わるんだ！！　自分がオレじゃあ……雨宮和也の代わりじゃねぇって思うんじゃなくて、言葉で言えよ！　言葉で伝えろ！！　心の叫びなんか自分にしか伝わらねぇ！　だから……言葉があるんだ。心は自己満足でしかない、代わりに思いを伝えるのが言葉なんだ！！　相手に自分の在り方を伝えないで……なんだってんだ！！！？」

な、んだ……？

俺……生きて……る？

どうして……？

そんなコトが頭の中で考えさせられた。

真琴は状況判断が追いついていない。ただ、男性の叫び声が聞こえていた。

状況を掴むタメに重たい目蓋（まぶた）を開いた

……なにを……してんだ？

「つ！　キミなんかに……ボクの何がわかるってんだ！！」

アクレイアが……押されてる？

如何して？　気を失ってる時になにが……？

「アクレイア！　お前は強くはない！　お前は弱いんだよ！　暴力は力なんかじゃない！　力ってのは自分自信の信じる力だ！　自分の事をハッキリと自分だって言えるのが力なんだよ！！」

……まるで、飛鳥みたいなヤツだ。
それが、率直な感想であった。

自分自信の論理を決して曲げずにソレを、相手に教えれる……。
本当に、飛鳥を見てるようだった。

「アクレイア！　お前はそう、うじうじしてる限り……延々とオレの代わりとしか見られてねぇよ！」

……そして、言うコトが飛鳥と似ている……。

刻（とき）は遡（さかのぼ）る

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

「ってか、本当にお前がアクレイアか！！？」

どっからどう見ても１０歳位のガキだぞ？
まぁ、どうでもいい……だが……流石に子供を殴るのは……。

だってよぉ！　どっからどう見ても子供だろ？
まさか、バチモンか？

アクレイアのもとに駆け寄る。

「フレアランス」

火炎の槍が和也目掛けて飛んでくる
和也は右にズレて回避する。

尚もアクレイアの攻撃は続く、その度に和也は予測に避ける
予測とは魔法の形、ある場所、どう動いてるのか？
大方この３つで相手の魔法を予測する。

レナ達との乱捕りが役にたってきたな……。
レナ達との修行は主にオレが対魔法にと懇願した結果がやっとでてきた～～～～♪
キマイラ戦では操作できる炎にどキモを抜かされたが……。

くぅぅ～～～～！！！！　役にたってよかったぜ～～～～！！！！
って、感激するのは勝ってからだ！！

うし！　この間合い……貰った！

氣を拳に１点集中し、相手のどてっぱらに放つ！！

和也の攻撃はアクレイアの腹部に当たるがアクレイアにダメージは無いかのように平然と立ち尽くすまるでＲＰＧの最初でイキナリ裏ステージのラスボスクラスに攻撃をしえる感じだ。
いや、ヘタしたら『ダメージが無い』かも知れない

「龍滅掌（ドラゴニック・クリア）！」

おいおい……DC（ドラゴニッククリア）は基礎の上級技だぞ？
ヘタなレベルの技より急所に入りやすくて尚且つ凄まじい威力を誇るワザだぞ？　おい？

「ちぃ！」

体制を立て直し、追撃の体制に入る。
腰を低くして、力強く地面を駆ける。

「破ッ！」

拳を鳩尾に極める。
『通常ならば』一撃でノックアウトの破壊力である
しかし……
『通常ならば』の話しだ。

アクレイアはまるで『ダメージ』が無いように平然と立ったままだ。

コイツ……やっぱり『ダメージを受けてない？』
どうする？　さて、なにがどうなってるコトやら？

「四聖拳　青龍の型　連脚！　龍閃烈脚（りゅうせんれっきゃく）」

姿勢を限界まで低くして、左足を軸として低く回し蹴りを、アクレイアの足を目掛けて閃光如き速さで蹴るが体制『だけは』崩した。

「龍昇烈脚（りゅうしょうれっきゃく）」

そこから、左足を軸で『閃』を止め。右足でアクレイアを蹴り上げる。
そして、自分も左足をバネにして飛びあがる。

「龍襲烈脚（りゅうしゅうれっきゃく）」

ソコから半回転して背中に蹴りを入れる。
【ズドォォン！！】アクレイアの落ちた場所に３ｍほどのクレーターが出来る。
ソコにも、自分ごと落ちたアクレイア目掛けて左足で踏みつける。
そして、蹴り上げて２ｍ程蹴り上げる。

「龍殺烈脚（りゅうさつれっきゃく）！」

左足だけで立って、右足を胸の所まで上げてソコから目にも止まらぬ速さで何万発蹴る。

これで……どうだ！？

『円』の動きから、『天』へ上げて、蹴り『落』して、『乱』打。
『閃』『昇』『襲』『殺』の技
これ、四聖、青龍の動なりってね♪

手応えはあったが……さっきまでと同じか……。否か？

ま……どうせ、結果は……。

「終り？　残念だな……この程度か」

やっぱり……か。

「お前は何者だよ～？」

普通なら即死だぜ？　四聖での青龍は取っておきだったんだがなぁ……？

ってか、良くもダメージを受けないな？

「……りだよ？」

「ぁん？」

「ボクは……キミの代わりだよッ！！」

はっ！？

オレの代わり……！？　なんだそりゃ？

「ボクはボクである事を証明するタメにボクはキミを倒す！」

「だから、なんだそりゃ！！？」

コイツイカれてんのか？　なんだってんだ？

「だから……死ね！！」

理不尽だ！　理不尽過ぎる！

オレは確かに不良には怨まれるコトをしたがよ……？

でも……いや？　売ったか？　いや？　どうだろう？

……な、なんだ！？　この邪悪でダークなのは！？

違うよ！　マジで！

こんな子供にンな復習される記憶なんてないもん！！

冷たい！　読者の視線が冷たい！！

「理不尽だっつーの！

我、ここにて『鎌の意』を唱えん。我が鎌よ真(まこと)の力を現せ
『運命の悪魔(ディステニー デビル)を切り裂く刃(ブレ イ カー)』」

＜やっと、出番ｇ「黙れアホ」グスン……＞

出た途端に鎌が叫び出したが、速攻で黙らす。
そりゃぁ……ふふふ（笑

「でもって鎌？　さっきから攻撃してんのにさ？　全然効かないんだけど解説」
＜ん？　全然わからｎ「使えない奴だ、捨てるか？」や、やめてください＞

そりゃぁ……このうえない快感だからさ。
冷たくね！？　ちょっと！！？
イジメだよ！！？　読者様！！

「振動ノ刃(バイブ エッジ)」

うをぉぉ！！　耳鳴りがぁぁ・・・

音の刃は空気を振動させ和也は運良く耳元スレスレを通った。
空気が振動されるコトにより鼓膜に強い音の振動が響き渡り和也にキツイ耳鳴りを受けさせた。

「アースブレイド」

？　なんて言いやがった！？

和也の真下から石の刃が迫ってるコトには気づかずに、和也はア

クレイアがなんと言ったか考える
読唇術は苦手なんだよなぁ……。

って……ココはぁ……。

＜やぁ、まただね♪＞

……今度はなんだ!?

＜下だよ？＞

シタァ？　って!!　岩の剣!!!!!!!!!!?

＜わかってる？　御主人様♪＞

下から迫るのは３０ｍほどの岩の剣がゆっくりと動いてる。
ココは【運命（さだめ）の空間】
キマイラ戦でも現れた空間だ。

で……悪魔は何処だか？

＜……右（１００％勘）！＞
「左だな。破空斬」

【スパン!】

＜……所詮、私なんか……＞

ザマァねぇな馬鹿が♪

ってな、コトでこの居ずらい空間は終了！

ってな、軽い感じで終った。

あ、今回は横にズレたんだ♪　ユニ・タン先生の回避不可能なヤツは別の次元に送ったんだっけ？

＜勝手に感想でのｋ「ウザイ」私……主間違ってるよ＞

今更気がついたか？　アホが。

「なっ？　まだまだ！」

さぁて、本当にどうすっかねぇ？

―Ｒｅｎａ・Ｆ＝Ｌ・Ｈ―

「って……マコちゃんの弱点？」

コレは、私もイヤだなぁ～……。

ってか、意外と女の子っぽいけど……か、可愛いなマコちゃん

現在、レナは緑が生い茂る森の中に居る。

う～～～～～～ん♪　日光が気持ちええ……

むっ？　ダレかババァくせぇって言わなかった？

海底のお城と外部にリンクさせ、何時でも行き来できるように特殊な目印（マーカー）魔法を使っている。

さすが、四二神だ、最新鋭の装備品ばかりである。

「外にはいっぱいフフ♪」

「良く触れんなぁ～ホナミ」

私も無理だね。

うん、流石お姉様……。

「マコちゃん……地獄を見なさい」

不思議ちゃんモードじゃないとマジコワイんですけど。

アンタは鬼ですよ？　死神じゃなくてさぁ？

モゾモゾと、動く生き物を袋に入れて持ったまま、私達はもう一度あの場所に向かうコトにした

勿論、気絶していたセフィリア達は寝かせて置いて、置き手紙を置いておいた

これで、混乱はしないでしょ♪

hara―

―Miyo Shiba

「ラミアちゃん？　みんなは？」
「ヴァン達ならわかりますけど……和也さん達はわかりません」
「「和兄ぃも（和也が）来てるの？」」

私と鈴ちゃんの声がハモる。
いや、まさか“あの”和也が来るなんて妄想もできなかったからさ？
以外だ、予想外デース（古ッ！
む？　ならば……シンジラレナーイ！（ヒル○ン前監督

ってか、マジで！！？

「はい。来てますけど……ココに居るかと言われればわかりません」
「そう……」
「やった☆」

さぁて、こんな会話は終りかな？
だってさぁ……私達実際にこんなに会話できるのも奇跡なんだよ？
【ゴロゴロゴロ】
気がついた？　そうだよ、うん。ベタだよね
ははははは♪　まさか、実際にこんなトラップがあるなんてね☆

【ストーカー的なぁｗｗ潰れちゃえ☆ローリングぅストーン２（

雨宮鈴南命名）】
が、迫って来てるからね♪

「取り合えず……全力で逃げましょう！」
「わかってるよおおおおおおぉぉぉ・・・」
「ぎゃあああああああぁぁぁぁ！！！！！！」

「ぁん？」
「如何したの？　駿？」
「いやぁ……近くから叫び声が聞こえてよぉ……」

如月駿に直撃まであと……1分

―1分後―

「ぐぎゃあああああああ

「ま、将!?」
「柴原！　ラミアちゃんも!?」
＜将＆如月（故人?）。魅夜、ラミア、鈴南ルート、合流＞

―名前募集の娘―

作者……絶氷魔法をくらうべきだ。黙るし。それに、コールドスリープの状態になります
不老不死になりますよ？　氷の中で永久（とわ）の眠りをプレゼントしましょうか？

さ：まぁまぁ。本編だけどキミのアピールタイムだぜ?

そんなのはイラナイ。

さ：ツンが。設定の方向音痴を強烈にすんぞ？　ゴラァ??

どうぞご勝手に。私はお嬢様を捜す。貴様なんぞの馬鹿に構ってる時間は無い。

さ：お前……永遠の名無しにすんぞ?

作者を無視して足を進める。
……また、同じ場所だな……じゃぁ、この道は左か?

また……同じ場所に来てしまった。

さ：お帰り。名無しちゃん

「永久の眠りへと誘え絶対無壊の氷よ。アイスエンド」

さ：ま、待てえええええええええええええぇぇぇぇぇ……

さて、お嬢様を捜しに行かなくては。

確か、先程は右を通った筈だ。ならば、左に反れて……。

当然、氷漬けにされた作者と再度出くわしたのは言うまでもない。

ｙａ―

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉ

痛ってぇ～。

和也は鎌を杖の代わりにして立ち上がる。

数本の骨が粉砕している、立ち上がれるのも奇跡である。

「無駄なんだよ、コレは全ての攻撃を無効にする王族の秘宝だ。雨宮流では破壊できない」

聞き飽きたわ。

これだ、アクレイアが自分の【マント】について語るのは。

魔法・物理・気功による全ての攻撃を無効としている、イコール、全ての攻撃はアクレイアの前では無意味となる。

反則じゃね？　卑怯だぞ～。

「まだまだ！　まだまだまだまだまだまだまだまだまだまだ！！！！！

貴様に地獄を見せながらいたぶって地獄に落すんだ！！！！！」

次々と魔法が和也の身体を貫く。

火の矢が左右に二の腕と肩を貫く。

氷の矢は胸を貫く、アクレイアは上手に肺のある位置を避けて貫かせた。

大木（木の魔法）が和也の肋骨にぶつかる。

最後の2本も鈍い音を発てて折れた。

「ガァッ！！」

気が遠のく。

目の前が霞む。

だけど、和也は立ち上がる。
周りは血反吐で紅く染まってる。

＜ご主人様？　もう、諦めまｓｙ「黙ってろ……！」でも！＞

ん？　そうだよ……な
アルじゃないか、攻撃だけど攻撃じゃない“こうげき”が！

はは……今更、気がつかされたよ。

「……小便小僧（しょんべんこぞう）が！！　いちいち生意気なんじゃ！　アホが！！
うぜぇうぜぇ！　【作者の権限により強制的に以下略にさせていただきます】」
「なっ？」

「【ピーーー

なら、如何するか？
蹴りや拳などの“攻撃”ではなくて、別の“こうげき”を捜せば良い。

ソレが、オレが未熟くて駿にくらった“こうげき”だそう……“口撃”だ。

「ひィひィ喚いてろや！　餓鬼が！」
「貴様に何がわかる！！？」

あぁ、人の心なんてわかんねぇな！
だって、ソレが人だからな。
人は同じじゃない、個人個人の思想からなにから全てが違うものだ。
例えば、熱いとか寒いとか……環境も違えば人も代わる、いくら、まったく同じ身体。顔。同じ部屋。同じ食事だろぉと……人は結局、人なんだ……。感じるコトもなにもかもが違う。
それが、人間なのだから。

「そもそも、テメーはンでオレを憎んでやがる！！！？」
「簡単だ！　認めてもらうタメだ！　母さんと、鈴南姉さんに！」

鈴南……？　何処かで聞いたな？
ま、気のせいか。

「ってか、代わりとかってなんだよ！？」
「ボクは母さんから見たらキミの身代わりなんだよ！」

コイツ、本当に何を言ってるんだ？

「最強の死神と謳われた女性。ヒメナ・アマミヤの種違いの子供としてなぁッ！」

ヒメナ……？　アマミヤ……？

まさか……姫南？

かぁ……さん？

「そうだよ、鎌を使える時点で気づくんだな。キミには【死神】の血が流れてるんだ、人間と死神のハーフ……それが、キミと鈴南義姉さんだ。ふふ……母さんはね……キミのお父さんを殺すタメに近づいた！　しかし、彼女はキミの父親と恋に落ちたんだよ」

コイツは……なにを言ってるんだ？

和也はアクレイアの言葉を理解はしていたが、“意味”だけは解からなかった。

「その間にできた子供がキミと、その後に出来たのが鈴南姉さんだ。

そして、神界の王から魔界の王たる父の元に速く刈れと命令が下った……。
さすがに最強の死神も神界には逆らえなかったみたいだね、彼女はキミの父の魂を刈ったその後……」
「もう良い……“理解”はした……」

その後、言う言葉を大方予想がつく。

母さんはその魔界の王様の妃(きさき)と“強制的に”させられた。
そして、その間に出きたのが……コイツだ。
鈴南ってのは知らないが……。コイツが義姉さんと呼ぶならば……オレを置いて行き鈴南を連れて行ったってコトか。

「だから！」
「だから、ボクは貴様の代わりとしてしか見られていなかったか？」
「っ！」

アクレイアは言葉に詰まった。

「なら、聞く……お前は自分は自分でしかない！　自分は自分だって叫んだのかよ！？」
「思ったさ！　幾度も！！」
「なら、お前は延々と、オレの代わりにしか過ぎない！」

その和也の言動にアクレイアは痺れを切らした。
ブチィと、堪忍袋の緒が切れた音がアクレイアの頭の中に響いた。

「貴ぃ様ぁぁぁ

「黙ってやがれ！！」

アクレイアから無数の魔法が飛んでくるが鎌で全て弾き返す。

「思うだけじゃ……だめなんだよ！」

「思いの何が悪い！？　汚れてなどいないだろ！！？」

「ガキが！　心の叫びなんかには気持ちなんかねぇよ！！　心の声自体に気持ちなんかねぇ！　心ってのはな、声があってやっと気持ちが……思いが伝わるんだ！！　自分がオレじゃあ……雨宮和也の代わりじゃねぇって思うんじゃなくて、言葉で言えよ！　言葉で伝えろ！！　心の叫びなんか自分にしか伝わらねぇ！　だから……言葉があるんだ。心は自己満足でしかない、代わりに思いを伝えるのが言葉なんだ！！　相手に自分の在り方を伝えないで……なんだってんだ！！！？」

気に入らない……コイツは！

気に食わない……。間違ってるだろ？

それは、オレの独論でしかないけど……アクレイアは……なにか間違ってる！

自分が自分だと……なんで、言わないかわからない。

悔しくないのか？　なんで、武力でしか訴えないんだよ？

「つ！　キミなんかに……ボクの何がわかるってんだ！！」

わかんねぇよ……お前のその考え！

お前がやってんのはガキの奴当たりでしかないんだよ……！

なんで……わかんねぇんだ！！？

そんなんじゃ……お前は弱いんだ。精神的に！

「アクレイア！　お前は強くはない！　お前は弱いんだよ！　暴力

は力なんかじゃない！　力ってのは自分自信の信じる力だ！　自分の事をハッキリと自分だって言えるのが力なんだよ！！」

　力は正義ではない、力は悪でしかない。正義は己の心にのみ存在してるんだ。
力は暴力にしか過ぎないものだ。真(まこと)の力は心に存在する、心とは正直なものなのだから。
そして、心にはそのものそのものに自分なりの正義がある。
自分を信じなければ……それは、心を偽ってると言うコト。
だから、コイツは強くなんかない。
コイツは本当は逃げてるんだ……自分が自分として認められないコトに……。

　だから……アクレイアは弱いんだ。
自分が自分であるコトを叫ぶコトが出来ないのは、殻の破れないサナギなんだ……。
　自分が認められないコトを恐れて心にだけしかゆとりがないんだ。
自分で自分は自分だって言わない限り……日溜りはできねぇし、空だって飛べないんだ。
　孵化(ふか)しねぇで、サナギが空を飛べるかってんだ！
蝶(ちょう)みたいには、羽ばたけないんだよ。
　見難い青虫で良いのか？　目立たないサナギで良いのか？
華麗に羽ばたける蝶にならなくて良いのか！！？
　良くないだろぉが！！

「アクレイア！　お前はそう、うじうじしてる限り……延々とオレの代わりとしか見られてねぇよ！」
「うるさいッ！！！！」
「お前はお前だって……言えよ！！」
「うるさい！　もう……死ね！！　フェニックスフレア！」

不死鳥を象(かたど)った炎が和也目掛けて迫る。

「鮫顎(シャオタライク)！」

横から水で象ったサメがフェニックスを飲み込んだ。

「！？　神堂……クッ！　死にぞこないが！」

「アクレイア！　お前のミスだ」

わぉ！　もう1人居たよ！

やっべぇ、全然気がつかなかったぜ。

「呪よ！　卦(か)の魔術を……打ち消せ！　アンチマジック！」

「しまっ！」

なんだ？

「今だ、今なら奴のマントの効力はない」

……ほぉう……一時期打ち消したってコトね♪

なら……1発、ぶん殴る！！

「アクレイア……」

言うコトの聞かない足を無理矢理動かし全力で駆ける。

和也の拳はアクレイアを目掛けて。

「お前は……お前だよ」

「えっ？」

和也は拳を解いてアクレイアの頭の上にポンっと、手を置いた。
拳はアクレイアに向かわずに、そっと、アクレイアの頭の上に向かったのだ。
親のような、優しい笑みで

「お前はお前だ。誰がなんと言おうがオレはお前がお前だと言ってやるぞ？
だって、オレは雨宮和也で、お前はアクレイア、根本的なものが違うだろ？
だからよ……お前はお前のままで良いんだよ……だから……暴力は止めろ。
それじゃぁ……なにも解決はしないだろ？　お前が自分で自分に言い聞かせるんじゃない。頼れよ……近くに居る奴等をよ？　だって、お前はダレの代わりじゃないんだからな」
「ボク……は……。ボク……で、いいんだよね……？」
「あぁ。お前は、お前だ」

優しくアクレイアを抱きかかえて背中から肩をポンポンと、優しく叩く。

「……やれやれ……俺は場違いか」

真琴は静かに出ていった。
数分後の悪夢を知らずに。

「ひくっ……」
「泣くな……でも、泣け。泣くのも……強さだ」

「うわあああああああああああああああああああああああああ・・・」

アクレイアの喘ぎ声は、この空間に響き渡った。

多分、コイツは優しさを知らなかったんだ。

母親から認めて欲しかったんだな……自分は別の息子（オレ）じゃないんだって……

ずっと……その心の内の叫びに気がついて欲しかったんだよな……。

大丈夫だ……お前はお前だから……安心しろ、アクレイア……

「ううぅ……。ぁっ……！」

「よしよし……落ちつけ」

取り合えず……鼻水を着けないでくれ……洗濯しないとダメだから……。

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｈｉｎｄｏ

ｕ―

やれやれだな……

まさか……あんなやり方で静めるか……

でも……1番なのかもな……。

「あ、」

「マコト～～～～～～～！！！！！」

取り合えずみんなが居た。
レナの野郎……未だに居やがったか。
取り合えず、泣きながら走ってきたセイガを殴り飛ばして黙らせる。

「で、なんだ？　その袋のモゾモゾは？」
「……プレゼント」
「ぁん？」

投げつけてきたホリ袋を見事にキャッチする。
うわぁ。めっちゃモゾモゾしてやがる！

……

な、なんだ……？

……

中身を確認した真琴は思考すら失い気絶した。

「ふふ、ｈａｉｒｙ　ｃａｔｅｒｐｉｌｌａｒ……」
「……英語？」

※毛虫です
あ、あああああああああああああああぁぁぁぁぁ。
気持ち悪い。
作者の分身だからマコちゃん毛虫は気絶するくらい嫌いです！！
１回、肩にポトンと落ちてから……あぁぁ！　あのキミの悪い色が
……
あの毛がああああああぁぁぁぁ・・・

以上、作者の恐怖でした。

―Ｓｙｕｎ　Ｋｉｓａｒａｇｉ―

「さっきの場所だね？」
「多分な」
「駿さんの言っていたコトが本当ならその奥でしょうね」

ん？　生きてたのかって？
イヤ、死なないし！　岩に踏まれたぐらいならあの地獄（コロコロ先生の感想前半参照）に比べたらな……。
何時の間にか駿のＨＰと防御能力はオレしに最強となっていた。

そうして、
＜駿、将、魅夜、ラミア、鈴南ルートと、四二神＆レナ＞が、合流したのも言うまでも無い

iya―

―Kazuya Amam

「な？　アクレイア……お前って命を狙われてるんだろ？」
「あぁ……。罪を犯したからな……父は。四二神はその一家の根を絶たないとイケナイ。
無益な反乱を防ぐ為にな」

アクレイアも落ちついたってコトで何か忘れてっけど話し込んでいた。
オレはある決意をこの時にしていた。

「……なら、ウチ来るか？」

そう……ココに居れば命を狙われる。今ではマントの効力も失っている。
どうやら、一時的なものではないらしい。
ってか、母さんについて色々聞きたいし

「はっ？」

アクレイアは惚ける。
いや、だからね……
ん？　居候……？
……はるか太古にダレかに……？

「あ、あああああああああああああああああああああああああ！！！

「ど、どどどどど、どうした？」

「お前が拉致った女だ！！」

「あ、あああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

和也と全く同じ反応をし。２人同時に一気に駆け出した。

似た者同士……流石は種違いの子供なのだろう。

＜和也＆アクレイアそして、３名を除いて全員＞が合流したのも言うまでもない。

―玉座の間―

「ってな、ワケでコイツも居候させるな」

『どんなワケだあああああああああ！！！！！！！』

レナと魅夜が揃って答える。

随分と仲が良いな……。

ってか、みんな揃って良かった良かった♪

「……すみませんでした」

「ま、許してやれよ♪　悪いのは誰でもないんだ……今回」

「うっ……。そうだけど……」

そんなこんなで、簡単にコイツの居候が決まった。

そうそう、流石にアクレイアって名乗らせるのも悪いのでアクレイアは
【阿玖（あく）　零亞（れいあ）】って、名前にした。
だって、コイツは……アクレイアだからな。

―余り1名―

「何処ですかあああああああああ！！！！！！！！？
お嬢様あああああああああああ！！！！！！！！？」

―残り2名―

「ココは何処！！？」
「……知らない森」

以下、名無しの少女とヴァン＆セフィリアでした♪

【４３話】決戦【終】　再びの日常（後書き）

やっと！　超長編が終ったあああああああ！！！！！
コメディーに帰ってきたぜぇ！！！！！？
ってか、また複線入れた！？
ははっははっはっははっは！！！！？

和也「作者が壊れたからオレが」
如月駿　影薄ヤロー
和也「はい終り」
駿「待て！！」
和也「でもって、語録ＮＯ．５」
【霊封札】簡易魔法自動発動札
簡単な魔法ならば魔法名（下級）ならば使用可能
魔力がない人間が使用するタメに革命戦争（ラグナロク）の時に開発された過去の産物。
和也「じゃあな」
駿「オレのを直せえええええええええええ！！！！！」

あ、最後の方は後々修正しますよ
うん？　駿の？　違いますよ最後の方の描写が気にいらないからですよ。

【４４話】海でＢＡＫＡＮＳＵ！（前書き）

１日に２話……シリアス版じゃできない……
今回は短いですが、どうぞ！！

和也「次回！」
レナ「鮫だ！」
零亞「迷子だ」
駿「マフィアだ？」
『掃除だぁ！！　刮目せよ！　次回へと続くｓｔｏｒｙを！！』

【４４話】海でＢＡＫＡＮＳＵ！

暑い……。
くそ……あの太陽破壊したろか？
「あ〜〜〜

だから知ってる人2人に次の通りに送ってね

「はい、ポイ捨て」

不幸の手紙は我が家の池に落ちた。

あ、そうそう。家の紹介をしよう。

オレの家は和風な作りで基本的に和室だ。

居間は22畳と少し広めの居間だ、ってか、居間は開き戸だぜ?

畳の掃除は大変だが、Ｉ　ｌｏｖｅ　Ｔａｔａｍｉ(たたみ)

リビングだけは洋風だけどな。

庭には池に鯉(こい)に金魚など居る。

金魚は生態系が変化して人食い金魚になったがな……いや~、如月をぶち込んだ時は楽しかったな♪　あの時の顔とありゃ……ククク、龍二さん、こんどあの影薄を入れてみませんか?

いまは、2匹が生き残りを争ってますぜぇ♪

なんなら、1匹要りますか?

おっと、時空を超えて話しこんでしまった。

コレはぁ……ジョンから?　えっと?　なになに?

「……みんな?　海に行きたいか?」

「う〝ん〟?（うん?）」

「い〝い〝がげん〝や〝べんざい（いい加減止めなさい）」

「いや、海でＢＡＫＡＮＳＵってどうよ?」

ってか、お前等やめぇい。

金魚の巣に落すぞアホが

「どうしたんだ？　和也？」
「イヤ、言った通りだよ」

青い空、スカイブルーの海……照りつける太陽に白い砂浜。
ンなのはオレからしたらどぉでも良いんだがな……。

「な〝にい〟でんでずか？（何言ってるですか？）」
「言ってねぇよ、オレの思考だ」

あぶねぇあぶねぇ……ラミアちゃんは要注意だな。
さてと、では知ってる奴全員に連絡しねぇとな……。

まずは……誰もが忘れてる吉村志穂を呼ぶか。
０９０－ｘｘｘｘ－ｘｘｘｘ

『もしもし？』
「明日から2、3日予定を空けてろ。以上」
『はっ？』
「でもって明日、オレの家に9時までに来い。来なければ……【プライバシーにより削除】をバラすぞゴラァ？」
『……なんで……あ、切ろうとしないで！！　行くから！　行くからさ！！！』
「言ったな、来なかったら覚えてろよ？　後は、着替えやその他もろとＢＡＫＡＮＳＵの用意しろやアホ」

よし。言い逃げ完了♪　次はぁ・・・

―1日後―

「さぁて、用意は良いか？」
『おうぅ！！』多数
「おー」少数

現在この場に居るのは
オレ
レナ
ラミアちゃん
ヴァンくん
セフィリア
零亞
魅夜
如月
将
詩織（初登場）
雨笠姉妹（双子&初登場）
志穂さん
阿野
明石先輩
香澄姉さん
が、勢揃いした。
ってか、オレの通話帳に記録されてるヤツ全員だ。

さぁて、行くぞー！

「何処に行くの？」

「ハワイだ」
『な、にいいい

雨笠姉妹はそこで出来た友人だ。
……どうやら、コイツは女性にモテるらしい、男子からは嫌われてるみたいだがな。

因みにツッコミはオレじゃないぜ？　零亞だ☆
なかなか良い“S”だぜ。

「ってなコトで空港に到着」
『ええぇぇ～～～

【４４話】海でＢＡＫＡＮＳＵ！（後書き）

今日はゲストの雨笠姉妹で～す！
「どうも、雨笠麗です」
「どうも、雨笠霞です」
いや～、零亞君はどうかな？
「「カッコイイ」」
そないでっか。
「クールで良いね」
「だね、麗♪」
見分けができないんだが？
「青いリボンが麗！」
「赤いリボンが霞！」
マジ！！？　だって、作者だから見れないし……
「「最低です！！」」
……零亞君に彼女を作るぞ？
「「ごめんなさい！！」」
次回は七瀬さんです……あの人はいろいろと出番を伸ばしてるからなぁ……大丈夫かな？

【45話】ハワイでBAKANSU？（前書き）

和也「次回！」
レナ「やっと平和なＢＡＫＡＮＳＵに！」
魅夜「でも、その前のちょっとした出来事！」
真琴「深まる謎」
和也「オレ自信の事」
レナ「そして、月夜のキス」
和也「ソコ！　言うんじゃない！」
『刮目せよ！　次回へと続く！　ｓｔｏｒｙを！！』

【45話】ハワイでBAKANSU？

着いた。
何処にかって？　ハワイだよ
夏休みというコトもあってか、空港には凄い量の旅行客が居た
微笑ましい家族や。モヒカン&スキンヘッドと、ガングロの一世代古い不良
などなど多数居た。

さぁて、ココで発生した問題は……
うん、最初は無視しようとしたよ、けどね……
連鎖事故が起ったんですよ……。

ん？　何かって？　聞いてくれよ……
レナ達が行方不明になったんだよ、それを捜しにラミアちゃんがヴァン君と手分けをして捜しに行ってしまい。帰って来ないのでしっかり者の零亞を向かわせた。零亞を追って雨笠姉妹も迷子に。そして、如月はマフィアっぽい人に連れてかれたが、将が説得した……
福沢諭吉さんで。
そんで、ダレも帰ってこなくなったワケだ。

オレも【仕事】の時間も欲しいのでみんなに相談しようとしたけど……
みんな、居なくなっていたんだ……

「すぅぅ……」

大きく息を吸って……

「魅夜！　【ぴーーーーーー】をバラすぞ！　（以下略）」
『はぁはぁ……』
「う～し、みんな揃ったか？」

速い速い、３分も経ってないじゃないか。よしよし

「か、和也……？　なんで、ソレを？」
「企業秘密だ」
「ぜぇぜぇ……なんで、私の事も？」
「明石先輩……オレを舐めないで下さい」

この場に居る全員の弱みを知ってるぞ？　なんせ、作者から買ってる弱点だしな
ん？　他の客にも聞こえてるって？　それは作者の力でその人にしか聞こえないようにしたからだ。
これぞ、作者の力だよな♪

「んじゃあ、別荘にＧＯ！」
『別荘！！？』

む？　庶民派のオレが別荘のオーナーなのを驚いてるのか？
失礼なヤツだ……。

「空港から近いし、このまま歩いて行くぞ」
『お、おぉー』

む？　いったいどうしたんだか？
ってか、意外過ぎて付いて来れないのか？　ま、良いや

「んなこんなで掃除開始！」

『どういうコトだあああああ！！！！！！』

何を言ってる？　別荘だろ？
なに？　また瞬間移動かだって？

ふふふ、ＢＡＫＡＮＳＵ専用だがな。
って、言っちゃったぜ～♪　オレ♪

「取り合えず家事が出来ない奴は遊びに行ってろ」
『は～い！』

って、待て！　ちょっと！！？

「……ウソ？」
「……最低だね、みんな」

残ったの……オレとヴァン君だけだとおおおおおおおお！！！！！？

待て待て！　ヘタな鉄砲数撃っちゃぁ当たるってのを実行したんだぞ？
零亞とかなら解かるけど……なんで、志穂さんまで……。
ってか、アイツ一人暮らしだろ！？　おい！！

……もっと、まともなキャラを創れえええええええええええええ！！！！！！！
クソ作者あああああああああああああああああああ・・・・

―2、3時間後―

やれやれ……やっと、終ったか。

「ヴァン君、レナ達の所に行ってろ。オレも落ちついたら行くから」

「うん。わかった」

やれやれ……余計な出費になったか……。

家事ができそうな奴と友達を集めたんだけどな～……。

オレのミスだ。

ヴァン君が出て行ってから暫らくして、インターホンが鳴った。

おっ……来た来た。

ソファーから置き上がり玄関に向かう。

「Ｈｅｌｌｏ！　Ｍｒ．Ａｍａｍｉｙａ」

「テメー、オレが英語ダメダメなのを知ってて言ってるだろ？　フランシス？」

「アハハ！　トーゼンだよ♪」

取り合えずむかついたから蹴りを1発入れた。

フランシス・ウェンディラ。オレの外国の友人だ。

ま、コイツの父親繋がりのダチだがな。

「取り合えず上がれや」

「ＯＫ」

さぁて、【仕事】だ。

―???―

「「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」」

「浮き輪付けてるくせぇに【鮫】より速いな、麗に霞」

はぁはぁ……。こ、怖かったぁ……。

なんで、こんな時に和也様はハワイなんかに……？

「駿が食われたぞおおおおお！！！！」

「なにいいいいいい！！？」

どーりで、浅瀬で遊んで下さいって描いて、更には区切ってるワケでしたか。

【サメの大量派生】

……。うん

浅瀬から出たらお終いだったな。

駿君は食われたし……。

あ、私は七瀬詩織（ななせしおり）です。今後共に宜しくお願いします。

「詩織……」

「魅夜……」

うん。ルールは守りましょう☆

なにも、昨日イキナリ大量発生しただか……

まさか、このタイミングを狙って？　まさか、そんなワケが……。

唯一、浅瀬で遊んでた私と魅夜は他の人達の地獄をただ、眺めていた。

そう考えてると一隻のクルーザーから、人が落ちた。

って……なにーーー

a―

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙ

やれやれ……鮫とやり合うのは何時だかぶりだな。

高速で近づく鮫に和也は上顎に肘を入れて、下顎に蹴りを入れる。
後ろから迫ってきた奴には【水龍滅掌（アクアドラゴニッククリア）】をブチ当てる

氣を拳に溜めて、飛ばすだけ。
ソレだけで気絶する。

浮いて来たのを盾にし、他の鮫の攻撃を防ぐ。
そしてもう１撃、ＡＤＣ（アクアドラゴニッククリア）を直撃させて、吹き飛ばす。

全方向から来るか！？
面白い！　水中だから四方八方３６０。全てからの攻撃か……

鮫の牙が和也を目掛けて突き進んで来た。
横に１２匹、縦にも１２方向からか斜めからもか……。
うし！　ではぁ……

【爆撃殺・崩（なだれ）】

和也を取り囲んで全方向から爆発した。

３分間、和也は鮫と戦っていた。

ふぅ……ラスト１匹……！

最後の1匹は極めて落ちついていた。冷静で冷徹。
先程までの鮫より1周りも2周りも大きい鮫である……。

恐らく……ボスか？

「……」
「……」

睨み合い、始動する。

雨宮流水中格闘技　螺旋　旋海烈掌！

筋肉を限界まで活用に腕に螺旋の動きをし、全力の拳で殴りつける

ふぅ……殲滅完了

全ての鮫をぶっ飛ばしたと言うコトで海面に上がる。

「ダイジョーブか？　カズヤ？」
「おーるＯＫ」
「サスガ、サムライボーイよ！」

フランシス、日本人で素手で鮫と戦える人間なんてそうそう居ないぜ？
ってか、1部の人間位だろ？

「抱きつくなアホ」
「マイダーリンにダキツイテ何がワルイかー？」
「全部だ」

「オツカレ、カズヤ」

ん？　オレはなんでこんなのをやってるかって！？

それはだな……

【45話】ハワイでBAKANSU？（後書き）

……な、七瀬さん？
詩織「……」
あの、出番ですよ？
詩織「……」
カメラさーん、写してあげてください
詩織「……」
あの、怒ってます？
詩織「……」
和くーん！
和也「ぁん？」
詩織「お久しぶりです和也様」
げ、現金な女だ……。

【４６話】月夜の一時　（前書き）

和也「次回！」
レナ「バカンスシリーズ恐怖の巻」
魅夜「でも、その前に」
『人気投票。結果発表！！』
和也「締め切りは明後日の午後９時まで」
将「感想またはメッセージにより受付！」
『導け！　読者の力添えによる　別のｓｔｏｒｙを！！』

【４６話】月夜の一時

「あ、紹介するな。この人達はオレの父さん繋がりの友人でジョン・ウェンディラと、フランシス・ウェンディラだ」

現在は、夜の９時過ぎだ。

ついでに全員が揃ってる……あ。雨笠姉妹は寝てるぞ？　良い子だからな

「Ｇｏｏｄ　ａｆｔｅｒｎｏｏｎ　ｅｖｅｒｙｏｎｅ♪」

「Ｗｈａｔ！！？」

「フラン……」

「Ｏｈ　ｓｏｒｒｙ」

「……蹴るぞ？」

「ヤ、ヤメテよ、カズヤ」

「！！！？」

フランが日本語を喋れるのにビビってんのか？

やれやれ……ハワイってのはな日本人の人口が結構多いんだぞ？

そんでもって日本の観光客が大半を占めてるタメ、殆どが日本語を片言ながらも喋れるらしいぞ？

ま、作者の豆知識だがな。

「ま、お前等にはオレがココに来た説明をせねばならないからな」

「和也？　ＢＡＫＡＮＳＵしに来たんじゃ？」

「イヤ、ＢＡＫＡＮＳＵも兼ねてだよ」

ま、大半は家事ができんだろぉと思ったヤツだがな……。

まさか、オレとヴァン君だけで遣らされるとは思いもしなかったぞ。

椅子に座ってる奴も床に座ってる奴もオレに向けられてる視線がなんか痛い……。

「取り合えず……和也？」

向かいに座ってる魅夜から鬼の形相が見受けられますが！！！？

ちょっと！？　なんで怒ってるの？

「その。フランシスって娘とどういう関係なのかなぁ！？」

「ま、待て！　フランとはタダの「ｍｙ　ｄａｒｌｉｎｇだよ？」って！　違う！」

ダレがダーリンだ！？　って！　コワイから！！？　なんで女性陣から殺気の渦が！！？

オレなんか、悪いコトした！！？　ってか、その抱き着いてる右手を放せえええええ！！！！

「久しぶりのぉぉぉぉぉぉおおお！！！　座りながら昇龍拳！！」

『ソレはタダのアッパーだあああああああああああ！！！！！！！』

ナイスツッコミをありがとう

取り合えずフランは黙った（黙らせた）ので続きを話すか……。

「オレがココに来た理由はお前等も知ってるだろ？　鮫の大量発生だ」

「え？　それって昨日からだよね？」

「あぁ、昨日にジョンから直通で来た」

1日も過ぎずに来たのは作者郵便とまさに神の郵便局だからだ。
でも、配達人が忍者みたいな服装なのは気になるがな……今度手合わせしたい

「今回の目的はジョンから依頼された鮫の駆除なんだ」
「はぁ？」
「じゃあ、昼間の飛んで来た鮫って……？」
「あ！　まさか……」
「あ、オレだけど？」
『ええぇ～～～

「待て、和也……最近お前が最強クラスになってきたぞ？」

あれ？　食われた筈の如月が何故……？

ってか、胃液クセェぞ！？

「金魚に食われ、鮫にも食われた……これで、オレは恭〇さん並のって！？　伏字！！？

佐久間さんの防御力を超えた……そして……「取り合えず死ね」ゲフゥ！！」

「弱いじゃねぇか。所詮はオレしに最強の防御力だろ？」

む？　如月なら今は壁に埋まってるぞ？

あ、テメー壁を直せよアホ

「ってか、佐久間ってダレ？」

「ダレだろうな、レナ」

ってな感じのほのぼのした会話をし如月との掛け合いは終了っと。

なんでかって？　馬鹿が移るからですよ～♪　イヤだなぁ♪

読者様のタメを思ってですよ♪

「最近この禁じ手が多いよね」

「ソレしか笑いがとれないんだよ、麗」

ってか、雨笠姉妹！！！！？　なんで起きてんの！！！！？

否定はしないけどさ！！　この禁じ手について！

「なんで起きてきた？」

「「下が騒がしかったからです！」」

「悪い悪い……」

イヤ、反省反省♪　テヘッ♪

「んでぇ……なんだっけ？」

『おい』

「なんだよ！？　オレ一人でボケてるみたいだよ？」

イジメ？　新手のイジメ！！？

「……で、なんで手紙が来るの？」

ナイスだ！　魅夜！　ナイス話しのリターン！！

今ならお前にときめきそうだ！

なんなら世界の中心で愛を叫んでやるぞ？

「ま、ガキの時からオレはハワイやその他でも鮫を刈っていたんだ。

そこにビジネスをオレは感じたんだ」

『何処にだよ！！！？』

またかよ！？　またオレだけがボケてるみたいじゃん！

孤立無援ってコレの事！？　ってか、レナ！！　ボケのくせいにツッコミをいれんなアホんだら！！！

「で……？」

飽きれた口調だけど救援ありがとう！！

本音で愛してるぞ！　魅夜！　流石は幼馴染だ！　うんうん

持つべくは面倒見の良い幼馴染だ！　ナイス！

「鮫１匹駆除につき１０００円で、この仕事をやるコトにしたんだ」

『馬鹿だろおおおおお！！！！！！？』

しつけえええええええええ！！！！！！！！！

「キャハ☆」

「フラン！　貴様も弁上するなあああああ！！！！！」

マジでいい加減にしろよ！？

ってか、マジで半殺しにしてぇぞテメー等？　ゴォラ？

「はぁ……もう助け船は出さないわよ？　和也」

「ヒデー！　お前に芽生えた恋愛感情死滅だよ！？」

「えええぇっ！！？」

場が笑いに包まれる。

それが、日常なのだから……。

オレの……大切な……【もう長くない日常】

長くて3年間……それが、オレに残された時間

オレの命が尽きるまでの短い……この日常……。

高校すら、卒業できないのだから……

でも、結局はこうなるんだ。みんなが居ると……

幾らブルーの日でも……みんなが居るだけでオレの周りは笑いに包まれた。

この日が永遠と続くと信じていたんだ……心の何処かで……。

でも、全ての物に終りがあった。

まだ、知る由も無く……まだ、オレについても本当の意味で知らなかった。
まだ、オレが自分を知るのはまだまだ……先なんだ。

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ

？―

「如何したの？　和也？」
「ん？　魅夜か」

夜、寝つけなかったオレは、別荘の近くに有る崖で横になってた。
色々と、考えこんでいた。
表向きの自分に対する嫌気が頭を無数に挙がってくる。
苛立ちが抑えるコトを出来なくなっていた
そんな中にワンピース姿の魅夜が姿を現せた。
コイツ……着痩せするな……やっぱり。
【何年ぶり】か？　【久しぶりに】コイツの顔をじかに見た

「寝つけないの？」
「あぁ……お前もだろ？　魅夜」

起きあがり地べたに胡座をかき、軽く返す。

「まぁね」

バーロ、寝起き１００％の目で見るんじゃねぇよ♪
なんだろ？　月の光に照らされてか？　何時も以上に可愛く見えるぞ？

幻惑……そんな感じなのだろうか？

「ま、座れよ……」

「うん」

魅夜を座らせてから、オレはまた横になる。

そして、ただただ……月を眺める

「ねぇ？　和也？」

「うん？　どうした？」

起き上がり魅夜を見つめて答える

「なんで……鮫退治なんかやってるの？　真面目に答えて」

「な～んだ、バレたか？」

あの話しは聞いていた。ま、アイツが知ってるのはアレぐらいだけだがな……

「……和也」

……月をもう一度見つめて、オレは答えた。

「魅夜……男の子の秘密に深入りしちゃいけないぞ☆」

「か……！」

だって……言えない

言いたくない……。　思い出したくないんだ！　１２歳のあの記憶を……！！

大切なものを失ったあの黒い感情は思い出したくないんだ……。

頼むから、俺を見てくれ……今は、アイツが表向きになってるけど……俺が表向きのになるから……
だから……

「黙っててくれ……」

あの日……俺は、全てを失った
そして……忌々しいオレが俺になった

このオレだけは……許せない！
俺から……魅夜も、全てを失った！！

俺の代わりでしかない……オレに！！

だから……許してくれ？
言えないんだ……言いたくないんだ……。
そしたら……俺の代わりをやってるオレに対してダメなコトだ……イヤ、俺がダメだ
アイツには……もっと深い絶望を教えてやる！　もっと！もっと！もっと！もっと！もっと！！！！
表のオレ……ホンの少しでも俺に……自由を分けてくれ……俺から奪った自由を……

「和也？」

そっと、魅夜に視線を移して。見つめる

「魅夜……」

そして……オレは、そっと、魅夜と唇を合わせた。

「えっ？」

魅夜のその言葉が俺の耳に焼き付いた

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

読者様……教えてくれ……なんで、オレは……魅夜とキスをしているんだ？

ドッキリなのでしょうか？　そもそも、オレが魅夜にキスをした形なのは何故？

オレは……何をしてたんだ？　なんで……こうなってるんだよ？

布団に入って寝てた筈なのに……なんで？

「……」

この場を、一人の少女はただ……呆然と見詰めていた

「……局長。本当なんですよね？」
「あぁ……アクレイアの父親の研究は【コレ】で、間違いない」
「……やっぱりか」
「何故、今更そんなコトを気にかける？　アクレイアは刈ったのだろう？」
「いえ、疑問は晴らす性質（たち）なので……」
「……そうか」

……やっぱり、あのアクレイアは……
見のがして正解だったのかも知れないな……。
短い間でも、人の暖かさを知っておくべきだったのかもな……
この世は、世知辛いもんだな

まさか、この禁忌に触れるとはな……。

親心と言うワケか……。

「……雨宮和也の正体……やっぱりだぞ」
「エル……」

そうか……道理でヒメナ様が前王に従ったワケだ……
全ては子供のタメ……か

「四二神の仕事は慣れたか？」
「あぁ」

……やれやれ……この世界の月は醜いものだ

紅く輝く月を背に、真琴はある決意を胸に抱えていた

【４６話】月夜の一時　（後書き）

人気投票
３月１８日の午後９時をもちまして期限を切らせて頂きます

【番外編】人気発表！　ＷＥＢの繋がり（前書き）

初めに
この結果の半分以上は話が友達などに聞き。
友達の友達にも依頼した結果です。感想にそんなに多く入れさせるワケには行かないで伝言タイプ又はメッセージの方で貰ったモノです。
整理をする為、人気投票の兼に関しては削除し整頓させていただきました。

【番外編】人気発表！　ＷＥＢの繋がり

美樹「番外編とありゃ……私の出番なのだあああ！！！

青飛焔『でも、混乱したらイケナイからって、忍び装飾で色違いにしたんだよ』

緑飛焔『……なのだ』

美樹「うわぁ……色違いで解かりやすいけどなんかムカツクなぁ」

名「……うん。すっごく」

紅飛焔『姉さん酷いッス！』

名「だれが、姉さんよ」

青飛焔『なーさん』

名「私の名前はあああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

緑飛焔『……なのだ』

黒飛焔『緑は壊れてるから『……なのだ』しか言えないらしい』

紫飛焔『我ながら馬鹿だ』

名「まったくね！」

美樹「こらこら、メタボリック指数が上がるから」

名「それを言うなら血糖値！！」

緑飛焔『……なのだ』

名「む、ムカツク！」

美樹「私も……」

紫飛焔『それじゃぁよ、人気投票に移ろうじゃないか！』

黒飛焔『口寄せ……オレしにメンバーズ！』

和也「……はっ！？」

レナ「んにゃ！？」

魅夜「なに？　なに！」

駿「なんだ！？」

将「……ココは？」

黒飛焔『ははは、ネットの世界かな？』

『根本的だな。おい！』

緑飛焔『……なのだ』

和也「うわぁ、ムカツクなぁ」

レナ「うん。すっごく」

紅飛焔『まぁまぁ、それじゃぁ、最下位から行こうぜ♪』

『おぉぅ』

緑飛焔『……なのだ』

１０位・０票獲得
如月駿―以下多数―

駿「……くそおおお

８位・２票獲得
ヴァン、ラミア、名

ヴァン「へ？　ボク？　ありがとう」
ラミア「ま、良い方かな？　出番の割に」

７位・４票獲得
飛焔＆真琴

飛焔（ノーマル）「ありがとぉう！！」
真琴「まさか、本体と同じとはな……」

６位・５票獲得
歩奈実

真琴「な、なにいいい

セフィリア

セフィリア「……ありがとう」

『な、なんでえええええええええええええええええ！！！！！！！！？？？？』

黒飛焔『ははは、４位以下は殆ど票が入らなかったからね♪』

紫飛焔『ではではぁ！　熾烈（しれつ）なトップ争いをしたぁ！

紅飛焔『第２位から！！』

緑飛焔『……なのだ』

青飛焔『刮目せよ！』

２位・２６票獲得

柴原魅夜

紅飛焔『Ｑ（クイーン）の座、おめでとうございます！！

コレからのオレしにと、次回の見所をどうぞ」

魅夜「えっ！？　あ、はい。

私は、昨日ってか前回の月夜の事があって、和也と話す事もできなくなって……」

青飛焔「カーット！　次は、第３位！　行こうじゃないか！！」

３位・２４票獲得

レナ・フォード＝ライズ・ハールド

レナ「な、なにぃ！！？　私が１番じゃないの！！？」

黒飛焔『残念だったねぇ、どうやら作者の友人は魅夜ちゃん受けらしいぜ？』
紫飛焔『では、レナちゃんも次回予告どうぞ！』

レナ『うん！　やっと普通のバカンスへと！　でも、様子のおかしい和也と魅夜。そして、私……
そして、ＢＡＫＡＮＳＵシリーズ！　恐怖の巻へと！！』

黒飛焔『はい！　ＯＫ！』
紅・青・黒・紫『『『栄えある第１位は！！！！！！』』』』

１位・３３票獲得

雨宮和也！！！！！！！！１

和也「オレ？」

緑飛焔『……なのだ』

和也「ええっと、サンキューな！　人の繋がり！」

紫飛焔『ふふ、作者の友達（ラノベ色に染まったダチ）に頼んで、さらにその友達にも頼んで貰ったかいがあったよ♪』

黒飛焔『ってか、緑だけデフォルメされてたんだ』
緑飛焔『……なのだ♪』

『おぉ！　進化した』

黒飛焔『なんか人気でそうだな……』

黒飛焔『では、次回の見所は？』

和也「あ、あぁ……。次回！　恐怖の？　ＢＡＫＡＮＳＵ！　悪夢だ……　ｂｙ和也
みなさんお忘れの不幸の手紙が効果を発揮します！
新ヒロインも誕生！？　ではではぁぁ……！」

全員『進め！　新たなｓｔｏｒｙへと！！』

飛焔『では、真にご協力ありがとうございました』

和也『半数以上が作者の友人の友人とかだがな♪』
飛焔『でも……これがＷＥＢの繋がりなんだよ』
和也『そうかよ……』

【番外編】人気発表！　ＷＥＢの繋がり（後書き）

短編小説
【勇者は鬼で、白魔術師は黒く、魔王は可哀想】
【自由のツバサ】

宜しくお願いします！！

【47話】影薄の不幸　主人公の受難【序】（前書き）

和也「次回！」
駿「でも、その前にクエスチョン！」
魅夜「釣りで1匹も釣れなかった事をなんという？」
和也「瀬〇慎吾！」
将「答えはＣＭで！」
駿「ＨＫ（話し　変わるけど）だけど……」
和也「次回！　不幸の手紙があきらかに！」
レナ「新ヒロインも誕生！？」
『刮目せよ！　次回へと続くｓｔｏｒｙを！！』

【47話】影薄の不幸　主人公の受難【序】

「さぁて！　今日は釣りに行くぞ！」

そんなこんな事があった、朝だった

……き、気まずい。

いったい昨日……無意識の内になにを……？

あぁ……！　ヘタに避けられたらオレ、ショック死しそう……

朝、昨日の夜に決めた席順……

なんとも最悪なのだろう……

なんで……魅夜と向かい合ってるんだよおおおおおおお！！！！！！！！！？？？？？

うっ……。

みんな感づいてるのか？　目が痛いし注目しないでくれ

昨日は気がついて速攻で逃げたが……

わ、話題……な、なにか！！？

そして、咄嗟にでた言葉が……

「さぁて！　今日は釣りに行くぞ！」

……ゴメン。無理矢理すぎた。

「はっ？」

「イヤ、ジョンさんに頼んで釣りに行こうかと……？」

最悪だ……第一、まともにバカンスしてねぇし。

オレだって泳ぎたいぜ

だが、言い出しっぺはオレだし……

仕方ない……ココは背に腹を変えられない

「イヤ、浜で遊びたい奴はＯＫだ」

そうでもしないと反感があるだろうし

「うん。ボクも釣りの方に行くよ」

「あぁ、俺も行く」

た、助かったぁ～。

ありがとう……将にピンクハートの男性……

「俺も釣りの方が良い」

お、零亞も？

ははは、釣りのイロハを教えてやるか♪

ってか、結構乗ってるじゃないか……ヤローだけだが

「「はいはい！　私も行く！！」」
「来るな馬鹿」

ナイスだぜ零亞♪
お前って最っっっっっっっっっっっっっ高だ……ぜ。その“S”体質

いやぁ～、種違いでもなかなか性格が同じだな♪
まるで、本当の兄弟だな

「ボクも行くよ」

はい！　ヤロー追加
ヴァン君だから良いけど

「……どうしたの？　レナ」
「うんにゃ？　にゃんでもないよぉ～☆」

ラミアちゃんの言葉にレナは軽く返した。
でも、どこか、レナらしくないものだった……

？　そう言えばさっきからおかしいな？
なんかあったのか？
真っ先にボケてくる筈なんだがなぁ？

なんか、調子が狂う……

「私も行くわよ」

そして、名乗りでたのは香澄姉さん

助かりました……男の中でフラン1人が女だったらどうなりますか知りませんから……

ってか、フランも外人だし、凹凸が結構激しいから……いかんいかん、こんな煩悩は直ぐに払わねば！

「……？」

あれ？　真っ先にラミアちゃんが反応して魅夜がぁ……！！！？

「ら、ラミアちゃん？」
「借りですよ」

この子、意外に小悪魔です。

まさか、オレと魅夜の心を読んだか……。
じゃあ――レナも？

ラミアちゃんは……レナが大人しい理由を知ってる？」

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

「ぅ～ん」
「あぅ…」

「……カズヤ？　死ニソウダヨ」
「……ヴァン君に、香澄姉さん……船に弱いなら言ってくれ」

くそぉ……まさか、オレより数段強い香澄姉さんが船酔いとは……
ヴァン君ならなんとなくわかるけど……
まさか……オレしに最強＆最凶の貴方がだなんて……

「まぁ良い……全員、目標はわかってるな」
『？』
「鮫ｏｒ鯨を１匹！！」
『不可能だあああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

全員の大合唱♪
いやぁ……フランはケラケラ笑ってるけど

「なら潜ってとっても良いぞ」

「僕等はキミと違う……」
「不可能だってぇの！！」
「……鮫か……」

「釣れなかった奴は……ニヒッ♪」
『なんだよおおお

さぁて、オレもやりますか。

―Ｍａｓａｒｕ　Ｉｔｏｕ―

やれやれ……カズも良く考えるよ。
しかし、カズの罰ゲームだから侮ってはいけない……

駿の髪が良い例だ……。

……負けられない

鮫を引き寄せるには……血だ。
適当に魚を切り裂き血を溜める。

溜めたしゃくでとった血を振りまいて切り裂いた身も投げ入れる。
このまま暫らく待とう……

―Ｒｅｉａ　Ａｋｕ―

「……潜るか……」

魔法を使えば鯨ぐらいなら簡単に倒せる

大きく息を吸って、海にダイブした。

―Ｓｙｕｎ　Ｋｉｓａｒａｇｉ―

「な、なんだ？」

始まってそうそう、和也に呼び出されて裏に来た。
全員からは視覚になってわからない場所だ。

うん。
イヤな予感がする

「……組まないか？」

おや？
てっきり餌にされるかと……

「昇龍拳！」

俺の意識はソコでシャットアウトされた。

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉ

yaー

さぁて、餌の仕入れも終ったって事で……。投下ぁ！！
ん？　ＨＡＨＡＨＡ餌？　気にしちゃダメだぞ♪

鮫なら潜った方が速いけど……ふふふ。

……良い子はマネ……ダメだぜ

【プクプクプク……】

「ひゃはははははははは！！！！」

笑って誤魔化せばなんとかなるんだよぉ……
多分……昨夜の事も。

＜水中＞

「……」

ターゲットはぁ……。

取り合えず、鮫か鯨を見つけたらそれでＯＫだ……
獲物は……どこのどいつだい？

『ゴパァ！　バ……ブォ！』

し、死ぬ……。

それが、第一の恐怖であった。

鮫が、一人の【エサ】を捕らえていた。

＜船＞

「キタあああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

和也の竿に何かが掛かっていた。

ほのかに……海面が紅かった……

【47話】影薄の不幸　主人公の受難【序】（後書き）

……釣りネタは続きます。
如月は生きてます
鮫の牙が刺さった程度では死にません
一生、遊んでやります

【４８話】影薄の不幸　主人公の受難【中】（前書き）

和也「次回」
駿「でも、前回の答えは……」
和也「瀬川慎〇」
レナ「和也？　それはＳなハゲだよ？」
和也「あ！」
魅夜「正解は【ボウズ】です」
駿「まぁ？　近いかな？」
将「こらこら」
和也「喝！」
『なんで！！？』
……お前等……
和也「取り合えず、雑談を終えろ！！　ここは次回予告の場だ！」
『おい！！』
？？？「私が登場！！」
将「ＢＡＫＡＮＳＵシリーズ終了！」
駿「オレの運命は！？」
和也「死！」
駿「グスン……」
不幸の手紙……能力開放編です。
『刮目せよ！　次回へと続くｓｔｏｒｙを！！』

【48話】影薄の不幸　主人公の受難【中】

突然だが
……エサが持って行かれた。

「き、如月イイイイイイイイイイイイ！！！！！！！？？？？？？」

さよなら……キミの事は忘れない。
たしかぁ……ピンクマンだっけ？
ま、いいか♪

如月だしぃ♪

「かぁぁぁ

ははははは……。

如月のヤツ……
鮫を片手に海面を走ってやがる……

そりゃ……速いのなんの……。
新幹線の速さを越えてるな……ありゃ……

「ば！　爆撃殺！」

海面が爆発するものの、如月は怯みもせず走りぬける。

キレた如月は化け物か！？

「ドウシタ！！？」
「フラン！！　魚雷はないのか！！！？」
「Ｗｈｙ！！！？」

流石のフランも驚きが隠せないようだ……。
そりゃぁ……海面を走る人間って……ってか、鮫も持ってるし……

「香澄姉さん！　後で魅夜の隠し撮り写真プレゼントしますからお助け！！」
「爆撃殺！」

反応早ッ！！？
さすがは、義妹馬鹿……。
ってか、オレよりも大きいし……。

完璧な気功は苦手だからなぁ……

不完全なもので代用してるにしかすぎねぇし……。

オレの気功は1点集中の爆撃化。
氣を1部の個所に溜めての爆発による加速&破壊力だ。

形を作る技量は残念ながら不完全だ

でも……そんな事より……

「香澄姉さん!!!

【チュドオオオン！！】

に、よって飛んで行った……馬鹿だ

「跳んだのが運の尽きだな……跳んだら回避行動にうつれねぇだろが」

あ、オレ程の実力者なら簡単だぜ？

でも、如月程度の実力では無し得ないワザだ。

「……うぷ」

「イキナリ再発しないでください」

吐き掛けた香澄姉さんにそう告げた。

あっぶねぇな……。

ってか、香澄姉さんも魅夜の様子がおかしいのに気がついた筈なんだ……。

なんで……オレ等に追いてきたんだ……？

ってか……自分が船に弱いとは知らずにオレに何かを言いに来たとか？

ま、どうでもいいか♪

……キスしたなんて言ったら……うん。最近は言わなかったが

「オレに明日は無い……か」

……それは、本当の事かもしれないんだ。

「ドナイシタンメン」
「フラン、お前はなんと言いたい？」
多分「どないしたねん」なのだろう
日本語をもう少し学べ……「タンメン」があるだけで不思議じゃんなにかぁ？　お前に食わせるタンメンはねぇ！　か？
怒るぞ？
「カズヤはナニかー？」
「はっ？」
何か……って聞かれたら……“S”かな？
「レイアもドーデモイ良インカ？」
レイア？　ダレ？　名前的に女性？
って……？　まさか……！？
「零亞あああああああ

「……カズ……海面どころか浮いてない？」
「「……うっぷ」」
２人は絶えかねてバケツにリバース
―Ｒｅｎａ・Ｆ＝Ｌ・Ｈ―
……☆＆％♪＃＃＄？¥¥†βΣ＄＄％！！？
「……馬鹿」
いやぁ……。まさか、こんな記号もわかるとは……
ラミアは凄いよ。
ってか、あんた……ワンピースの水着が似合ってるよ？
確かに小柄で可愛い系だけど……。
うん、白だからより一層似合ってるね。
まさか、和也の家から水着（女性用の）が出て来たとは……
和也のあの時の顔は……マジ泣きしてたし
「オレは無実なんだあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」
そんな叫び声が今でも聞こえてきた。

まさか、和也が幼女趣味だとは……

「……スーパーイ・ナ・ズ・マ・キィィィクッ！！！！」

和也の蹴りが私の顔面にめり込んだ。

「化粧の崩れたオカン程、コワイ顔はなぁぁぁ

「なんで和也が居るの」
「居ちゃダメか？」

平然と答えられたらなんか、私が馬鹿みたい……失礼な※馬鹿です。

「釣りに言ってたんじゃないんですか」

ラミア、和也に質問したって大した答えは……
和也、意外に腰抜けだし……

「……ですって」
「お前の部屋、明日にはネコだらけだからな」
「ゴメンナサイ、まじ勘弁してください」

ネコと聞いて取り乱さない私を誉めて＃♭$☆αΣ†β♪★にゃ

「取り乱してるわよ……」

Ｗｈｙ！！？　わ、わわわわた、たたたし、と、取り乱してにゃんきゃＩＮＡＩＹＯ？

「「……取り敢えず黙れ」」

和也とラミアに左右から蹴られました……
女は顔がイノセンスなのに……

「こわっ！！　それを言うなら命だし！」

パトラッシュ……私はもう疲れたよ

「安らかに眠りなさい」

「鬼……がふっ」

浜に身体だけ埋められました……

「ふぁ～。オレは疲れたから一足速く帰るな」

「「は～い」」

―Ｋａｚ

ｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

……あれ？　今は何時だ？

時刻は８時過ぎ……何かを忘れてるような……？

「あ、それは私の事かな」

……？　取り合えず横で五月蝿いので殴り飛ばして気絶させたなんでかって？　眠いからだよ

「和也～？　ご飯は？」

「いらね。今日は眠い」

部屋に入って来た魅夜にそう返す。

……？　いやぁ……だってさぁ……

さっき殴り飛ばしたヤツ……女なんだよね？
うん。知らないヤツ……バレたら怖いからねうん。

「大人しく部屋で隠れとれよ……ＩＦ　騒いでバレたりオレの安眠を妨害したら……」
「ＩＦ？」
※【ｉｆ】もし～ならば
「……コロス」
「……イエッサー」

？　たかが、人をやる時の顔を真っ黒にして目を黄色に照らして口を口裂け女みたいにしただけなのに……？　ナンデカナ？

「Ｚｚｚ・・・・・・」
「早っ！」

は～い。裏拳直撃☆

まだまだ……オレはこの鼻血をダラダラ垂らして死んでるこのアホが引き起こす災厄を知る由（よし）もないし、興味も無かった……。
ってか、コイツなに？

ま、騒いだら殺すけど？
久々に鎌を使わないと怒るし……邪魔ヲスルナラバ……ひゃはははは。

オレが、それを知るのは……明日の朝の事なのだから

「あの……私は無視ですか？」
「Ｚｚｚ……」

取り合えず、顎にアッパーを１発

【４８話】影薄の不幸　主人公の受難【中】（後書き）

ＰＣ……反抗期です。
たまに誤作動を起しますので遅れちゃいます♪
和也「この話し……そろそろ危ない気がが……？
特に前書き……」
ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ

【４９話】影薄の不幸　主人公の受難【終】（前書き）

和也「次回」
真琴「対立する」
将「３つの表と裏」
セイガ「裏は表の裏を殺すタメ」
駿「表は己の裏を知らない」
歩奈実「表の存在」
和也「それは……陰と陽如く表裏一体」
『刮目せよ……新たなる章へと続くｓｔｏｒｙを』

【49話】影薄の不幸　主人公の受難【終】

……ず、頭痛が……。
ダレか……オレを助けてくれ……

オレの聴覚と視覚がイカレタのかな？
イヤ……だってさぁ？
オレの席の向い側は魅夜なんだが……
うん。そうだよ……
コレは何かの悪い夢なんだ……。

そうだ……そうに違いない……？

聞いてくれ……イヤ？　小説内だからしっかりと見てくれ……【、or。】で区切らないからな……

目の前には……魅夜の格好をした将で将とチェンジした魅夜その他にも……ヴァン君に扮したラミアちゃんラミアちゃんと化したヴァン君零亞に扮した詩織で詩織になった零亞更には明石先輩になった阿野そして阿野になった明石先輩そんでもって香澄姉さんとなった志穂さん志穂さんと変わった香澄姉さんセフィリアになったフランまさかだがフランは居ないのでわからねぇが恐らくセフィリア……このそして麗になった霞と霞になった麗……変わってねぇ！！
ってか気がつかない？　馬鹿！？　それとも認識してねぇの！！！？

はぁ……はぁ……！

なんだ？　自分でも言っててなにがなんなだが？

将⇔魅夜

ヴァン⇔ラミア

零亞⇔詩織

明石⇔阿野

志穂⇔香澄

フラン⇔セフィリア

霞⇔麗

ってな感じかな？

おお、気が利くじゃない……か……？
この構造でイヤな予感がするのは……オレだけか？

いやー読者さんも感じてるよ？
ま、発声は本人と同じだけど？

「おはよ～」

キタ。

壊れたブリキの玩具みたいに首を機械的にぎこちなく動かす。

恐怖映像まで……5秒

「うわあああああああ

よ！！？
男が女物の服を着て女性の声で話すんですよ！！？
　龍二さん！　考えて見ろ！　お前とこの居候の内のダレかが恭○になってると！！
文一もだ！　お前の相棒が一聖になってみやがれ！！　吐き気では済まさないぞ！？
いいか！？　他にも馬鹿にしてる作者＆読者！
作者なら自分のヒロインと弄られ役の男子に代わったって想像しろ！！
読者ならば、自分が理想の女性にクラスで１番キモい男子に変えて想像しやがれぇぇぇ！！！！
　笑うな！！　笑っただろ！！？　ＨＡＨＡＨＡって笑ったな！！？
いいか！！　想像してみろ！！！！　馬鹿にしたヤツ！！
吐いたって知らないからな！！！！
　はぁはぁ……
このバカンスシリーズ……危険だ
　訴えられるかも？　コロコロ先生＆コニ・タン先生……誠心誠意謝罪させていただきます。
学園珍事ファミリア。勇者以上魔王以上……面白いですので是非アクセス！！
　……スミマセン、宣伝で誤魔化しました。
作者のヤツ、デスクの前で泣いてます……。マジ泣きです……
シンフォニアとアビスのラストと、ディステニーのリオンとの戦闘後並に泣いてます
　……作者曰く「伏字……使って？　ってか、僕の首危ないかもＡ

ＨＡＨＡＨＡ」だ。
ってか……オレにかよ！？

ＨＡＨＡＨＡソーリーソーリー

「さぁて……何処に逃げようか？」
「逃げてもピーチに行ったら同じだよ？」
「あぁ……まさかとは思っていたが……ん？」

なんだ？　何処から声が……？
ってか、さっきから耳元で騒がしいな……

さぁて、ここで出番がくるか？
ま、危ないから今回は……キンチョールはしまって。

「……他に殺虫剤ってなんかあったかな～？」
「待て！　なんで殺虫剤なワケ！！？」
「……イヤ……悪魔が殺虫剤をやれと……」

ってか、ダレだ！！？　まったく別の世界からささやかれてるような……？
……シルエットが見えるぞ？
って！！！！！！！！！！！！！！？？？？？？？

「……ヤメろ……理性を保て……オレ！」

その言葉が余程恐ろしかったもだろう……
オレの肩の上で手の平サイズの虫（？）が落ちてきた。

失礼だな……オレとしては大真面目だってのに……

ってか、この妖精っぽい蚊（？）はなんだ？

人の顔をしてる……？　人面蝿（？）

……まぁ、事の発端は……コイツなんだろぉな……。

はぁ～。厄介なのが来やがったか……

ってか……作者？　コイツの説明よろしく

『オレに用か？』

「お！　紫が来たか」

『本体の忍装飾が紫だからな……で、お前の肩の上に乗ってるヤツだな？』

「あぁ……」

『聞き逃すなよ……

彼女は【ピクシー】の血統だ。イングランドの南西部に伝わる、小さな妖精の事だ。妖精族は緑色と関係が深いとされてるが……その通りなんだ、このピクシーも、緑色の服や帽子を身に着けているとされてるんだなこれが。呼び名の由来は僕の勉強不足で知らないんだえど。スカンジナビア地方の妖精【ビスケ】という言葉と関係があるらしいんだけど……。知るか。

ピクシーはイタズラ好きで知ってるでしょ？　馬を盗んで乗りまわしたり子馬の鬣（たてがみ）を捻って結び目をつくったりするって言われてる。そんで、度々人間も道に迷わせるのもこの妖精の得意技なんだ。遊んで遊んで帰りの遅い子供を少しの間隠したり、農夫を畑の中で道に迷わせるとかそんな話しが多いんだよ。そして、ピクシーに騙される事を「ピクシーレッド（ｐｉｘｙ－ｌｅｄ）」って言うんだ、

それから逃れるには上着を裏返しにすれば良いと伝えられてる。
まぁ、ピクシーはイタズラするだけではなくて、自分が気に入った人には親切に手助けをするんだってさ……』
「長ぇよ。ってか、コイツはなんでオレになんだよ？」
『まぁまぁ……ピクシーってね、死んだ子供の魂って言われてるんだよ。そう考えればこのイタズラ心や人懐っこさは頷けるでしょ？』
「……端迷惑だ。ってか、オレは被害者！」
『鬼……慈悲がないのか？』
「慈悲？　ナニソレ？　食えるの？」
『我がキャラ……最低だな……？』
「お前のキャラだからな♪」
『……む？　オレはコレから見たいＴＶがある！　さらばだ！』

……逃げたか。
あんにゃろう……ぶち殺す。

「で、上着を裏返しにしたら良いんだな？」
『そうそう』
「紅！！？」
『設定ではその程度では変わらないようにせっていしたぜぃ』
『……な～のだぁ～♪』

緑も居た！！？
ってか、緑が更に進化したし！！

「違う違う！！　コラァ！！　逃げるな！！」

なんて事をしてくえたんだ！！　この馬鹿野郎！！
道理で細かく説明したよ！！

「……さいあくだ……なんで……」
「あの？　覚えてます？　私の魔力を込めた不幸の手紙」
「不幸の手紙？　ナニソレ？　食えるの？」
「貴方はヤギですか？　！！！？」

ぁん？
後半のヤツは何かって？
ＨＡＨＡＨＡ、黙秘するぜ♪

悪魔の囁きに乗っただけさ。

「戻せ」
「イヤ」
「戻せ」
「ＮＯ」
「戻せ」
「拒否」
「戻せ」
「駄目」
「戻せ」
「否定」
「……」
「……」
「爆撃殺！」
「妖精の旋風（フェアリーウィンド）！」

ちぃ！　相殺か！！
やるじゃねぇか……。だが……

次で終らせる！！

キンチョールを構えてピクシーと対峙する。
ふふふ、レナのお仕置用に持ってきた殺虫剤がこんな所で役に立つとはな……

※殺虫剤を人に向けて発射しないでください

ふふふ、あの目にダイレクトに入れた時のアイツの顔はぁ……クククク

※失明の恐れがあります

「妖精（フェアリー）の……」
「……殺虫剤……奥義！」
「魔力弾（ショット）！」
「武嗣殺死（ムシころし）！」

「あ、和也～」

ピク……。

この、声は……・……レナ？
茂みから出てきたのは……【自主規制】

「がはっ！」

雨宮和也、謎の吐血により作者の命令によって急遽日本に搬送。
ピクシーも作者の力によって雨宮亭にクロネコヤ〇トで宅配されたとさ

待ってくれ……オレはまともにＢＡＫＡＮＳＵしてねぇよ……

鮫と闘って魅夜とキスして釣りに行って……
仕舞いには、ヘンな事になって……。

不幸だあああああああ

ウソをつくなあああああああああああああああああああああああああ！！！

【４９話】影薄の不幸　主人公の受難【終】（後書き）

ピクシーは、前から出す予定だったんですよね♪
ｍｙ愛読書から神獣の事を抜粋してます。
まだまだ、神獣&神様は登場しますのでうんちく宜しくお願いします☆
……今回は本当に危険なお話しでした……
ノリだけで書きましたから……マジで危険です
……改めて謝罪。

半シリアスへと、物語は進みます。
コメディーと違って真面目に書きますから大丈夫ですよ

【50話】Six reverse coin's（前書き）

和也「次回」
駿「俺と関西弁」
将「僕と不思議ちゃん」
和也「オレと最強の死神」
『戦いの開幕。刮目せよ、次回へと続くstoryを』

【50話】Six reverse coin's

クソ……ッ！
コイツ……強い……！

強い雨が徐々に和也から体力を奪う。

気持ち悪い……服がめっちゃ濡れてやがる……。

髪から無数の水が垂れる。
手の甲に幾つも打たれる

「……」

鎌を持った黒いローブを着込んだヤツが1歩1歩……。オレに歩み寄る
冷徹な目。オレの攻撃も上手に受け流す【化け物】
次元が違う……初めてぶつかり合った時から感じていた

「死ね」

鎌はオレの頭上。避ける事はできるこも知れないが……もう、身体は動かない。

天候のタメか？　雷が何処かに落ちた。その閃光は一瞬だが黒ローブの男の顔を移した。

……なんだ、同い年かよ……

降り頻る豪雨の中で和也と真琴は運命と言わんばかりの出会いをした。
それは、【現在の和也】ではなく【あの和也】との……。
振り落とされた鎌は真っ直ぐ和也に向けて落とされた

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

……最悪だ。

「和也？　洗濯物大丈夫だった？」

レナがオレの状況をみてそう言った
そう、オレ達は近所のスーパーに寄って来たら店の中に居る内に大雨が振ってきたそうだ。
信憑性の高い天気予報を見て降水確率１０％だった……うん……なにか今日はイヤな予感がする。

「わ、私が悪いんじゃないよ？」
「……そうか、ヴァン君、蚊取り線香をやろう。うん、夏だから」

戸棚から蚊取り線香を取り出して火を付けたマッチで蚊取り線香

に火を灯す

「いぎゃあああああああああ！！！！！！」

居候（妖精）を撃退しオレはびしょびしょに濡れた服を再度洗濯機に入れた。

ま、セフィリアに任せたんだけど？

「レナ、ちょっと出掛けて来るからな」

「へ？　飴だよ？」

「お前……雨と飴……間違ってるぞ？」

ま、同じ言葉に無数の物を指してるのも日本語の特徴だけどよ……常用語句だぞ？

例を挙げるならば【橋】と【箸】更には【端】この３つとかもだ。

ま、アクセントの違いだけど日本に留学する外人は苦戦するらしいオレからしたら英語の方が苦戦だがな♪

「和也さん？」

「ちょっくら、用事だよ」

ラミアちゃんが疑いの念をオレにぶつけてくるうをぉ！　心境にだしてねぇけど鋭いな……ま、大雨の中に外にでるなんてガキはもう居ないしな。

「……」

「買い忘れだって！」

「……気をつけてくださいね」

ちぃ。わかってたか。

ってか、自分で思ったか……『心境にだしてねぇけど鋭いな……』
って……
オレのミスかぁ……

「あぁ」

ラミアちゃんにそう答えてオレは雨合羽（あまがっぱ）を着込んで外に出た。
傘？　使わないよ……。

久々の大きな喧嘩だ

着いたのは隣街の大きな公園。
野球やサッカーのグランド、バスケのコートも完備してる公園だ
大雨と言う事で子供は全然居ない……有るのは忘れ去られたサッカーボールだけ
風に吹かれてボールは転がって行く

公園の中心には見覚えのある顔が２つ

「将に如月？」

そう、喧嘩仲間の井塔将に影薄会書記長の如月駿だ。

「如何したんだ？　お前等？」
「和也？」

「カズもなんだ……」
「にゃるへそ……お前等も呼び出しか」

そう、オレがココに来たのは大雨の中洗濯物のタメに全力で走って帰ってる時に
【黒い何か】とすれ違いザマにボディーに1発貰った直後の台詞だ
「午後3時までに黒沢第3公園まで来い」っと。
……強い奴との喧嘩……
勿論、ボディーブロゥの釣りを返しに来た。

どうやら……この2人も

「……将に『駿』！」
「……うん」
「あぁ」

さぁて、モードを換えようか……。

「ぶっ殺すぞ」
「勿論」
「合点承知」

何処のどいつかは知らねぇが……このお釣は高いぜ？
半殺しで済むと思うなよ？

「……」
「……」
「……」

後ろに居るのは黒いローブを着込んだ3人……

ドイツもコイツもかなりの実力者だな……面白い！

オレを攻撃した奴は……あの真中の野郎だな？

はん、２人も自分の獲物を見つけたか……

喧嘩最強のオレ等を甘く見るなよ？

『知』『槍』『脚』

その３つの表は動き出した。

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓ

ｈｉｎｄｏｕ―

……迷う必要は無かった。

アイツは殺さないとイケナイんだ。

でも……何処かであの２人を殺せないオレが居た。

アクレイア……これはもう大丈夫だ……反乱もないだろう……確信はない。

そして、レナ……いや、０７……「まだ」刈る必要はない……覚醒はまだまだだ……。

「マコト……局長が次のターゲットやと」

「マコちゃん……行くよ」

「……わかってる」

【ターゲットNO．９９８　如月駿】【ターゲットNO．９９９　井塔将】
そして……【ターゲットNO．０　雨宮和也】

この、３人か……。
前の２人の【正体】から言ってオレ等が動くのは自然なのだろう……
そして、雨宮和也……コレは、既に重大な犯罪を起した者だ……
『未来』を『科学』によって変えた事によって無数の起らない犯罪が増えた……。
そして、死ぬ筈だった雨宮和也は別の雨宮和也として生きている。
元凶はヒメナ・アマミヤだが……
これは、必ず刈るべき者なのだ……

『裏』ではなく『表』の
雨宮和也を……
刈るのではなく、殺すのだ……。

【真の雨宮和也】ではなく【偽りの雨宮和也】を……

必ず……殺す。
殺さないと……世界は大きく変わってしまうから。

既に壊れてしまった世界と同じく……。
アクレイアの父が引き起こしヒメナ様が引いたトリガー。
そして放たれた弾……【表の偽りたる雨宮和也】……それを刈るのが仕事なんだ
アクレイアの父……ゲイルの研究の成果をぶち壊す

「歩奈実は井塔をセイガは如月を……」
「……承知」
「あいよ」
「オレは雨宮和也を殺す」

『闇』『幻』『血』
3つの裏はこの時、動き出した

―Ｒｅｎａ・Ｆ＝Ｌ・Ｈ―

……なにか、イヤな予感がした。
今日という日に……。

昔からイヤな予感は何故か当たっている。
今日は……なにかが崩れる日なんだと……そう、突然思った。

崩れるのは日常ではないくて……
和也なんだって……。

今日は……雨宮和也のなにかが崩れる日なんだと……

レナの予測通り、今日は雨宮和也が落ちる日であった。
それは、深い深い闇に満ちた螺旋階段へと落ちて行くのであった。

【51話】Six reverse coin's 闇対脚（前書き）

和也「次回」
将「知能と幻」
歩奈実「殺られるのは……」
「「どちらか？」」
『刮目せよ、次回へと続くｓｔｏｒｙを』

【51話】Six reverse coin's 闇対脚

「フレアエンド！」
「わ！」
「おっと」
「くっ！」

魔法!?　やっぱり……死神か？
確証は薄いがぁ……多分！

ま、こんなのを回避するのは造作もないがな。
ま、相手の狙いは……オレ等の分散化

オレはサッカーの芝生へ足を進める。
将は野球のグラウンドに、駿はバスケのコートへ別れる

「お前は何者だよ？」
「……死に行く者に語る名は皆無だ」
「ワケわからん単語を用いるな」

常用語句のみ使え阿呆
いいか？　長年不良をやって来たオレは難しい言葉はわからん！
魑魅魍魎（ちみもうりょう）程度しか知らない！

まぁ良い……ぶち殺すだけだ！！！

和也は真琴に立ち向かう

g1―

―Ｓｙｕｎ　Ｋｉｓａｒａ

「おい！　さっきは良くも人の部屋に石を投げ入れてくれたな！」

「なんや？　なんやぁ？　その程度怒らんでなぁ～」

ムカツクな……この関西弁……！

まぁ良い……ぶち殺して弁償させてやるからよ！

１歩踏み出して間合いを詰める。

０距離に入り左足で踏ん張り右足を顔面目掛けて放つが虚空を霞む

早ッ！

「ライトニングハルト！」

跳びあがってセイガの攻撃を避けるが、駿は前回の事を思い出す

『跳んだ状態では回避はできない』

「しまっ！」

これが、狙いか!?

「サンダーボルト!」

天空から雷撃が轟いた
狙いは……勿論、如月駿

「ぐがあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁ…」

雷に撃たれた駿は地面に叩き付けられる
全身に痺れが回り痙攣する

「……これがか……衰えたものだ」
「なめんじゃねぇよ……!」

痙攣する身体をなんとかし無理矢理、駿は身体を起す

くそ……! 動け……!
ちくしょう……雨合羽に助けられたか……

ゴム性の少し高い雨合羽だが、すでにボロボロになる。
セイガの放った雷の威力を知らせていた

「革命戦争(ラグナロク)の面影もないなもんやな。あんなにも戦地を駆けていたお前が……
今ではココまで衰えるやなんて……? 意外やなぁ」
「世界の終り……だが、まだ主は生きてるぜ?」

負け惜しみかもしれない……
だが、『負けてはいない』

「兎に角……死ねや」
「はぁん！」

神速と呼ばれた名を舐めるなよ！

麻痺する身体を無理矢理働かせる
間合いを詰めて鳩尾に１発与える
が、セイガは怯みもダメージを思わせない。
逆に駿は脇腹に蹴りを貰いよろめく。

「っ！」
「フレアボム！」

手の平で作られた爆弾は駿の腹部で爆発する。

「がっ！！」

倒れそうになる駿に対してセイガは膝蹴りを顔面に入れる

強い……。

それは駿も最初から理解していた。四二神のＮＯ．３
実力を指し示すのに十分……イヤ、十二分である。
ラグナロクの時にポツリと出てきた組織……こいつ等にオレ等は
壊滅的な打撃を受けた。
戦う前にわかっていた事だ……だが。

「負けられねェな！」
「残念だが……ここでゲームセットや」

バーロ？　ゲームセットだと？
残念だがオレは9回2アウト2ストライクノーボールでも諦めない性質（たち）なんでね！

同点にして……延長まで踏ん張る！
それが……【スレイプニル】の生き様（ざま）だ！

戦地でも諦めて堪るかよ！
諦めたら終りなんだ……けっ！

「まさかぁ……！」
「遅いぜ？」

セイガは吹き飛んだ。
駿は先程位置に居る。何一つ変わってはいない。

数秒後【ゴォウ！】と風が切られる音が響き渡る

「どぉした？　若造？」

しかし、ある筈の無い物が駿の足元に存在した

「ぐっ！」

一向に動かない駿を他所（よそ）にセイガはうめき声を上げる
そして、どれも数秒後には風が切り裂かれる音

「どうした？　【まだ完全】じゃねぇぞ？」

駿は1歩も動いてはいない……ように見えてるのだ。

「円氷！」

セイガの周りに氷の円陣ができるが粉々に崩れ散る

「弱ぇな……お前」

否、駿の能力が高いだけだ。
先程まではあきらかにセイガの方が実力ははるかに上だ。
だが、現在は違う。

今では比べるまでも無く駿の方が実力は圧倒的に高い
それは、プランクトンを食らう魚如く
簡単に食らう事ができる。

「半憑依？」
「正解」

駿の足元にある、ある筈の無い物……それは「影」である。
黒々としたアスファルトを凌駕する程、黒くハッキリするほどに
水溜りにもその姿は映っていた。８本足の馬の姿。

「ちぃ！　ライジングエンド！！」
「当たるかよ……脚技・脚馬瞬殺！」

目にも止まらぬ。全く見えない速度で駿はセイガを蹴り下す。

俺に勝つにはン百年後に来いや！

「来い！　操り人形の操作鎌／マリオネット・コントローラオブスラッシャー」
＜……我の相手は彼奴か？＞
「そうやで……マリオ」
＜その危険な名前を止めてくれ＞
鎌……か。面白い！　相手になってやるよ！！
身体能力をかなり底上げにするらしいな……。
相手にとって不足は皆無なり！
駿の蹴りは鎌とぶつかり合う。
しかし、鎌は押し負ける。
「ぐっ！」
「脚技・脚馬斧式（きゃくばせんしき）」
縦型の回し蹴りでセイガは吹き飛ばされる。
瞬時、後ろに位置盗りした駿の蹴りが背中にモロに当たる。
背骨にヒビ程度では本来ならば済まされない。
だが、四二神が着込むローブは一定の攻撃を無効にする
しかし、駿の蹴りは大きなダメージを与えるのに十分だ
「はぁん！」
「やるな～」
まだまだ、現役だぜ？　俺はな！
横から振るわれる鎌を後ろに下がり回避。

前みたいなミスは起さないぜ？
前回みたいに雷撃を貰ったら……今度こそヤバイからな！

「掛かった！」

はっ……？

「マリオ！！」
＜危ないと言っておるだろぉが！　我はあんなひげに帽子の親父ではない！＞
「お前のが危ないワ！」
＜いいか！　我はカメやキノコ（？）にぶつかった程度で縮こまる貧弱者ではない！＞
「だからお前のが危ないやん！」

兎に角……次で決める！

走りかけた瞬間、腕から血が流れた。

何が……？

一瞬、戸惑ってしまう。
自分の身に何が起こったのか？
駿の思考はそれで満たされる。「マリオネット・コントロールオブスラッシュ」
その名が浮かんだ

まさか……？
この場は……！？

「蜘蛛の巣へようこそ」
＜糸の地獄へようこそ＞

……同時に言うなよ
ワケがわからなくなる

「ライジングエンド！」

雷は駿の周りに張られた糸の空間へ落とされた。
雷は糸を通して糸の張られた空間に伝わり駿の着ている服へと伝わる

ま、待て……。　俺の服は今……雨でびしょ濡れだぞ？
オイ……？　雨合羽もさっきの雷でもう、ボロボロで……！

「ぐわあああああああああああああああああああああああああああああああ…」

俺の叫び声は辺りに響き渡った。

【51話】Six reverse coin's 闇対脚（後書き）

駿と将の正体があきらかに
でも、和也は知らない。

どんなに運命が変わろうが一定し時は進む
しかし、この日この日にしかこの日の時間は無い
来年のこの日は来年のこの日で現在生きるこの日とは全く違う。けど……時は一定に進む。世界が変わろうが1日は1日だけしかその時は存在しない1日は1回限り。何年後だろうと一定はしてるがこの日はこの日にしか存在しない。
それが……1日。同じ日は絶対に存在しない
1回だけの1日。それは……人の無限の分岐でもあって……
この日は……日常は常(つね)に……自分の運命を切り開いている。
決められた運命は存在しない……過す時間は既に自分の運命だから。

作者が……1日を過す中でよく考える事です

【52話】Six reverse coin's 幻対知（前書き）

和也「次回」
真琴「最強の激突」
和也「運命の変換」
真琴「時に残酷で」
和也「時に優しい」
真琴「偽りの表」
和也「本物の裏」
「「世界はこの時に動く」」
『刮目せよ、次回へと続くｓｔｏｒｙを』

【52話】Six reverse coin's 幻対知

「やれやれ……まさか、君等が来るか……」
「……」
おやおや……だんまりか。
まぁ良い……倒すのみだね♪

「疾風よ！」
「……紅蓮」

ちぃ。相殺か……随分と魔力が高いこと♪
まぁ、5行で弱点を突かれたからねぇ……。
だけど……強行突破する！

手に持っていた傘に魔力を注いで剣を生成する。
走り間合いを詰めて突きを放つが横に避けられる。
同時に火炎弾を放つが将は防御魔法で防ぐ

「……うな重をお奨め……」

やれやれ……体力（スタミナ）の衰えはやっぱり大きいか！

将はそう感じる。自分の身体が上手に動かないのは何百年も前にわかっていた
だが、若造に負ける程、将の意地はあった。
能力的にも歩奈実が将を圧倒する……しかし、まだまだ将は本気ではない

「まだまだ……姿は高校生なんだ……もっと粘るよ♪」

実年齢はヒ・ミ・ツ♪

さぁて……野球場（ダイアモンド）か……公園にしてはしっかりしてる……

※【ダイアモンド】野球場の形の事です

現在、将達は外野の方で戦っている。

両者1歩も引かない戦いだ

均等しているワケではない。歩奈実は実戦向きではないだけで、違う場面では歩奈実が圧倒する

それは、将もそうだが……桁と方法が違う。

『幻術』と『頭脳』……2人の決定的なバトルスタイルだ

歩奈実の『幻術』が優（まさ）るか？　将が持ち前の『知識』が優るか？

それが、ワケる。

「逆（ほとばし）る旋律。勇ましき戦慄。狂いの五経……」

この呪文は……。

持ち前の知識をフルに使う。

歩奈実のやろうとしている幻術を考える。

呪文の中にある意味を瞬時に訳する

距離を取って、歩奈実から遠ざかり呪文を唱える

「反響魔法・リバースサウンド」

「……！」

音系の魔法には反響魔法を……。

そして最も適用するのは……下級には中級の反響

それと同じように
中→（には）上
上→（には）下
これを……しっかりしたら……！
音系（サウンド）タイプの魔術は反射でいる。

「解」

よし……幻術を解いた。

「突」

腹部目掛けて傘もとい剣を刺す

「ちぃ」

刺された部分から霧状に掻き消える。

ミストゴース！？　しまった！

「フレイムエッジ」

芝刈り機の刃みたいな円状の刃が将を目掛けて来る。
将はすかさず傘で防ぐ

くっ……！　押し負けてる！！

足で踏ん張るが土がぬかるんでいるタメ徐々に靴が滑る。

押し負けるのも時間の問題……ではなかった

「は！」

「しま！」

バックを盗った歩奈実が将を蹴り飛ばしたのだ。

傘は吹き飛ばされ刃は将の腕を深く抉る

「ぐがぁッ！」

血が凄い勢いで流れる。

危ない血管まで傷つけたかもしれない。

くそ……。

やっぱりこの状態では限界か……な？

回復魔法を腕に掛けながら相手を睨みつける。

歩奈実は鎌を召喚し構える。

武器は吹き飛んだ……ある場所はセカンド付近……。

憑依したとしても……スレイプニルみたいに肉弾戦は不向きだし全力で3分ぐらいしか戦えない。

3分ではやっと決定的なダメージを与えられる程度……勝てない。

半憑依でも互角か……。

３０秒……３０秒だけでも時間を稼げれば……。

勝機は見える！

このダイアモンドを活かしてできる事……。

この場を活かす……あの魔法ならば……！

将は駆け出す。
目的地点はピッチャーマウンド。
残り６８ｍ前後
公園といってもかなりの大きなものだ。
少年野球や中学校や高校での大会にも使われるグラウンドだ。
結構な距離がある。

「……？　スキル開放　幻影の魔狼鎌／ファントムフェンリル」
＜……出番＞
「幻狼！」

鎌の刃先から白い霧状の狼が将目掛けて『駆ける』

実態が……ある？

そう思った瞬間、太腿を『噛みつかれた』

「なっ！？」

幻覚じゃ……ない！？

「幻覚……だけど物質」

……なるほど……。それが鎌の能力か……！
あの攻撃は回避不可能……か

「ちぃ！」

傘を持ち直して、再度、マウンドへ向う。

２０秒

「……アースエンド！」
「ウッドウォール」

全方向から迫り来る岩を周囲に木を張り歩奈実は防御する。
追撃に炎の槍が木の壁を燃やす。
だが、歩奈実の姿はその場に無かった。

上ッ！

「ライトニング！」
「アースフォース」

落雷が歩奈実目掛けて落ちるが土の守りを作り防ぐ

「幻狼！」

霧状（ミスト）の狼が将の腕を狙いに飛び掛ってくる。
冷気の槍を飛ばすが狼は擦り抜けて狼は空気中でもう１度形ができ、
将に近づく

くっ……！　対象物に触れることで実体化する幻術か……。
幻術の命中率は１００％
弾き返す事や術者が解かない限り……当たる……くそ！

「やれるだけ……やる！　フレアランス」

炎の槍は霧を蒸発させる所か水分によって無力化される。
先程の氷は凍らせるどころかすり抜けた……他になにか……？

考えて考えて考え抜く。
攻略の方法を……。

「残された最後の手！　吹き飛べ！　ウィンドストーム！」

狼は吹き飛ばされるが上空でまた形を作る。

５秒！

歩奈実は鎌を持って間合いを詰める。

定位置！　４秒……

傘で鎌を押える。
力量の差がある……！　押し負ける……！

「そもそも……傘と鎌なら……！　鎌が勝つかぁ……」
「……魔力にもよるけど……」

そりゃそうだよね……ま、魔力を「あちら」に集中してるから仕方ないか……！
３秒……耐え抜く……！

「……！」
「遅い！」

すかさず離れようとする歩奈実に対して将はローブのフードを放さない。

「……」
「へへ……♪」

Wノックダウン……で、いこうよ？
残り2秒……はは……食らいなよ
我の奥義……！

1秒……。

勝った……負けでもない……。

「銀狼の錬魂鎌／レクイエムフェンリル」
「！？」

なにをしようが……！　遅い！！

「プリズムエンド！！」

球場のそれぞれの角の部分から中心に向けて閃光が伸びる
中心……将達の真上でボール状のものが浮上する。

「……0！」

……えっ？

「私の勝ち……」

なにが……！？　プリズムエンドは？
なにが……起こった？

「ローブを脱いだのか？　でも……？」
「……私の放った攻撃……」

？　なにを……？
そういえば……あの狼は？

「つくづく……狼（フェンリル）に運がない……」

まさか……？
あの狼は……？

「私の幻術で見えただけ……」
「召喚……獣！？」
「……正解」

あれは……最初から召喚獣を……
幻影の狼に見せられてただけ……！？
あの……狼を？
なら……プリズムエンドを……飲み込んだのか？

「私の策略はどうでしたか？」
＜私の指示だがな……＞
「オーディン」

ははは……バレてたか？
外見（そとみ）ではおやっさんがオーディン役だったんだが……四二神はソコまで阿呆じゃないか……しまったなぁ……。
負けたや。

『グルルル～！！』

「お仕舞い」

後ろにはフェンリル……前には死神……か。
やれやれ……。

ゲームセットか……スレイプニルに怒られるな……

「……最後の……足掻きくらいしようか……」

3分間に……全力をかける！！

「憑依…！」

させまいと歩奈実は【変化】中の将へと。
鎌を突き刺した。

血が辺りの雨水と同じく。土が吸っていく。
静かに歩奈実は鎌を抜いた……。

「……くっ……神名……もぅ……魔力ない……」

歩奈実はその場に鎌を杖の代わりにして、朦朧とする意識の中。
ゆっくりと真琴の場所へと向った

それと同時に男性の叫び声が公園に響き渡った。
が、将の耳には届かなかった。

iya―

「知るか！」
「……お前の存在は罪だ」

オレの存在が罪だぁ！？
はぁん！　くだらねぇ！！

「死神にやる魂なんかこれっぽちもねぇよ！」
「……『作り者』が……ほざくな！！」

作り物！？
さっきからわかんねぇ野郎だ！

和也は自分の鎌を取り出し、真琴と対峙する。
今日は「この」和也の運命が大きく変わる日……
それを、知る筈がない。

しかし、それを勘付いた『もう１つのイレギュラー』は感じ取っていた。
レナ・フォード＝ライズ・ハールドという存在が。

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍ

【52話】Six reverse coin's 幻対知（後書き）

２人の生死は？
そして、和也と真琴……
２つのイレギュラー
そして、３つのお話しの本当のお話し

【53話】Six reverse coin's 血対槍（前書き）

レナ「次回」
エル「雷対重力」
将「レナの能力の発揮」
駿「神々も恐れる能力」
レナ「その1つが発動」
エル「信念のぶつかり合い」
『刮目せよ、次回へと続くstoryを』

【53話】Six reverse coin's 血対槍

雨は冷たかった。
身体から体温が奪われて……でも、冷たく感じる
体温が下がってれば最初と比べて冷たくはないけど……
より一層冷たく感じられた。

身体が震えて止まらない。
寒さ……恐怖……その両方が和也を襲う

「どーいう、こと……だ？」

疾風に簡単に掻き消されてしまいそうな声で和也は呟いた。

「……お前は……人間じゃない」

その言葉は理解できなかった。わかりたくなかった。
知らない知らない聞いてない聞いてない！！　なにもかも！！！

心の内にそう叫ぶ
しかし、心の叫びは伝わるワケがなかった。

ただ……豪雨が和也の体力と体温を奪われていくだけだった。

はは……オレが……人間じゃ……ない？

「……正確には人間だが……お前は人間を語れない」

なんだよ……？
なにが言いたいんだよ！？

和也は口に出せなかった
真実を知ることを拒んでいたからだ。

自分でも……なんとなく気がついていた
けど……信じたく無い。
知りたくない！！

「……お前は、雨宮和也の…

「その先を言うなぁ！！！」

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

「出番だ！　鎌！！」

握り締めていた鎌を大きくさせて頭上で一回転させて構え直す。

＜了解！＞

ひとつテンポが遅れて合言葉紛いの言葉を言い放つ。

「……スケィス！」

お！　相手は随分とカッコイイ鎌だこと

黒い持ち手に根元には花みたいな装飾の鎌だ

うをぉ……カッコイイねぇ……。

「どぉりゃ！」

「……」

鎌と鎌がぶつかり合う。

鉄と鉄がぶつかり合う音が響き渡る。

「雨宮流鎌術（あまみやりゅうれんじゅつ）！　魔閃！」

「遅い」

下から抉るような一閃を後ろや横に避けること無く、真っ直ぐ和也に体当たりをし

横の一閃が和也の雨合羽（レインコート）を裂いた

真琴の攻撃は更に続く。

「ぐ！」

左手で炎の槍を放つ。
和也は無理矢理体制を立て直して右に避けるが真琴の鎌が、和也の腕を浅くだが抉った

「――――っ！！！」

言葉にならない激痛が和也を襲う。
血飛沫（ちしぶき）が芝生に赤みが残るがすぐ雨に流される

「……お前は……」
「ぁん？」

低い声が雨音の五月蝿い中でもしっかりと和也の耳に届いた。
ハッキリとした声で

「自分が命を狙われる理由をしるか？」
「う～ん？　知るかアホ」「……そうかよ」

真琴がそう答えると、真琴は鎌を構え直す。
和也は右手を垂らしながら真琴を睨みつける

「なんだ？　お前等？」
「四二神……」

しにがみ？
死神？　なに？　日本語の特徴？
ええっと、アクセント的に……

同じじゃねェかよおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！

「４２人の選ばれた死神……だ！」

縦に振られた鎌を左手に持った鎌で防ぐ

くそ……！　芝生が滑るなぁ……

「こんな一般人を狙うとはぁ……格下か？」

格下に負けかけてるとはぁ……そりゃマズイ

「ＮＯ，１だよ……！」

「わぁお！　豪勢だねぇ～」

ってか……一般人相手にこんな化け物を出すほど馬鹿なのか？

その四二神って組織はよ？

ＮＯ，１！？　ってことは組織のトップ……ですかぁ……じゃあ……将に駿は！？

まぁ……、他人の心配できる余裕は……全くないな……この野郎

「……お前は自分自信を知らなさすぎる」

「ワケわからん！！」

鎌を払い、真琴目掛け駆ける。

無理矢理右腕に力を入れて顔面目掛けて叩き付けた

「っ！」

和也の拳は快音を発てて真琴の頬を歪ませる

ワザと当たった？

コイツの実力なら避けて反撃ができた……！

「お前……！」

「……この程度か」

おいおい……平然と向き合うかぁ……。

はは……化け物がぁ……

ってか……流血がひでぇや……

浅いから良かったかが……もう少し深ければ……動かなくなってただろぉな……けっ！　悪運が強ぇや……

「……死ぬ前にヒントを出してやろうか？　お前の【記憶】と俺が言う【真実】……照らし合わせてみろよ」

はっ？　オレの……記憶だと？

ワケわからん……なにを言い出しやがるんだ？

「第1問・お前の家族は何人家族だ？」

そんなのは簡単だ、父さんに母さん、オレとじっちゃん……

「4人だ」

「……5人だよ……父親に母親、雨宮和也に……鈴南……そしてじいさん……5人だ」

そう言えば……零亞との戦いの時も何度か出た……。雨宮って苗字は結構あるし……
他人の空似や零亞の被害妄想だとどこかで考えていた……そう言えばいろんなドタバタで聞いてなかったな……

「第2問・お前が見た家族の最後の光景は？」

どういう事だ？　最後の光景？
確か……？　遊んで帰って来たら……じいちゃんが……居て……
母さん達が事故に遭ったって……？

「？　……光景ったら……朝の団欒……かな？」
「……お前は事故の光景を見ている」

な……に？
父さんたちの……事故現場を……だと？

そんな記憶はない……そんな筈がないんだ……。

「ま……アレは初めての大きな記憶変換魔法だったがな……」

この時から……イヤな予感がしていた。
決定的な記憶の違い……。くだらない事かもしれない……。

でも……家族も……家族の最後も知らないなんて……おかしいだろ！？
おいおい……まるで……オレが……ウソで埋め尽くされてるみたいじゃないか……

まるで……【必要な記憶以外】……【全てがウソ】みたいに……。

オレの存在事態が……ウソみたいに……。

「最終問題……

『お前の命日』は何時だ？」

っはは……何だよ……。

まるで……オレ……死んでるみたいじゃねぇかよ……？

オレの【身体】は！　ちゃんとある！！

透けてもねぇし……触れるんだ！

オレの身体は……身体……だけは……？

「あ、」

度々ある記憶の欠落。決定的だったのがハワイの……あの魅夜と唇を合わせたあの日の夜……

あの時『も』記憶が欠落している……。

そして……蘇る先程のアイツの言葉……。

『……『作り者』が……』という……台詞……。

オレはもしかしたら……

「う……ウソだぁッ！！」

雨宮和也という人間の偽り……クローン……イヤ……

【レプリカ】だとでも言う……存在……。

とある、ゲームにもレプリカ人間という存在もいた。

最初の頃はアイツの性格に苛立っていた……。

でも……話しを進めるに連れて……感情移入していた。

「事実だ……お前は……雨宮和也じゃないんだよ」

雨がより一層に強くなったような気ががした……

雨は冷たかった。

身体から体温が奪われて……でも、冷たく感じる

体温が下がってれば最初と比べて冷たくはないけど……

より一層冷たく感じられた。

身体が震えて止まらない。

寒さ……恐怖……その両方が和也を襲う

「どーいう、こと……だ？」

疾風に簡単に掻き消されてしまいそうな声で和也は呟いた。

「……お前は……人間じゃない」

その言葉は理解できなかった。わかりたくなかった。

知らない知らない聞いてない聞いてない！！　なにもかも！！！

心の内にそう叫ぶ

しかし、心の叫びは伝わるワケがなかった。

ただ……豪雨が和也の体力と体温を奪われていくだけだった。

ははは……オレが……人間じゃ……ない？

「……正確には人間だが……お前は人間を語れない」

なんだよ……？

なにが言いたいんだよ！？

和也は口に出せなかった

真実を知ることを拒んでいたからだ。

自分でも……なんとなく気がついていた

けど……信じたく無い。

知りたくない！！

「……お前は、雨宮和也の…「その先を言うな！！！」

レプリカだ」

―Ｒｅｎａ・Ｆ＝Ｌ・Ｈ―

「……」

遅い……
実際には３０分ぐらいしか経ってない
でも……そう感じた。
長かった……なんか、今日は速くいつも通りに戻ってほしかった
……イヤな予感がした。

どうやら……今回は何時も以上にイヤな感じだ……。
うん。今日という日は……速くいつも通りに戻って欲しい……。

みんなでワイワイ過して……楽しい毎日に……。

「レナ……」
「ラミア……私……じっとしてるのは無理だわ」
「レナ！　わかってるよね？」

気がついてるよ……マコちゃん達が何故か和也を狙ったって……
和也に喧嘩売ったのが四二神……なんだって。わかってる！

「……私……行くよ」
「レナ！！」

黒いローブを着込んで私は家を出た。
家……そう、ココは私が存在できる家なんだ。

前までは自分の存在を学校でしか感じれなかった。
小さい時に親から捨てられて……養子とは違うけど……フォード＝
ライズ・ハールドに向い入れられて貰った……その時にデーモン先
生がなんとかしてくれたんだったな……。
でも、私に居場所はなかった……そりゃあ、ハリー○ッターのあの
家みたいに自分が存在できる場所は無かった……そんな中、ラミア

達に出会って……。初めて、友達ができた……。
学校では、私の出生の事すらも気にせずに……みんなが居場所を与えてくれた……
ココに来てからは……和也に暖かい家を……作ってもらった……居場所をくれた！

「……恩返しだよ」
「……好きにしなさい」
「おおきに♪」

ラミアにそう言って私は外に出て行った。

雨水が当然だけど……冷たかった。

「……邪魔をするんだ……」

私の目の前には同じ黒いローブを着込んだ死神が道を封じていた。
通せん坊……か！

「……」
「……容赦……しないよ！」

強行突破する！
どうやら監視してたみたいだけど……相手が悪かったわね！

久しぶりに……『本気』で行くわよ？
拳を握り締めて臨戦体制をとる。

「重力魔法…」
「雷術…」

メガ・グラビトン・ブレッド
「超重力弾！」
メガ・ライジング・ブレッド
「超雷撃弾！」

ここでもまた……2つのコインが弾かれた。

【53話】Six reverse coin's 血対槍（後書き）

ふふふ、考察のよいお方なら矛盾点がありますよね？
それは、お楽しみにしてください。

原案は最初から出来てましたからね♪
将はそのまま、将軍→オーディン
駿もそのもも、戦馬→スレイプニル
といろいろともじってます♪
他にも居ますぜィ？

【54話】Six reverse coin's レナの力（前書き）

和也「次回」
真琴「決着」
レナ「私は間に合うか？」
『刮目せよ、次回へ続くｓｔｏｒｙを！』

【54話】Six reverse coin's レナの力

相殺か……！
ココでは危ない……幾ら相手が魔力で結界を張ったといっても……
被害がでてしまう……。近くに公園がある……アソコだ！

「逃げるのか？」
「へぇんだい！　お前なんかに逃げるかよ♪」

挑発をして相手を上手く運ぼう……。
ここだと……みんなも巻き込んでしまう
……そんなこと……させない！
巻き込まれるのは……私だけで十分だ！

「遅い！」

まずは……公園へ向え！
近所なのが助かった……。でも……コイツをなんとかしてから！

「重力魔法・変換！」

重力を……縦から……横にす！
まぁ……引力の問題なんだけどね♪

「ぐッ！！」

わぁお♪　綺麗にとぶねぇ♪
今の内に公園に向うのみ！

ふぅ……やりますか……禁断のワザをね♪

さぁて……公園に来ましたが……Ｉ' ｔｓショータイム♪
まずは相手がくうと同時に重力の空間を発動させる……ま、死神だから平気だろぉけど……
まぁ……やるだけやりますか！

「やるな…」
「重力系の魔法なら……例え四二神だろぉが……負ける自身は無いよ？」
「ふん」

鼻で笑われた！！？　む、ムカツク……！

―Ｓｙｕｎ　Ｋｉｓａｒａｇｉ―

「……」
「あ、……！」

１人と『１匹』は場に立ち尽くしたままであった。

鎌を持った男は酷く硬直していた。

「やれやれ……間に合ったぜ♪」

「完全憑依？」

鎌を持っているのは当然セイガである。

だとしたら……1匹……それは……『8本足の馬』の姿。

『如月駿の姿』は無かった。

「やれやれ……まさか、この姿になるとはなぁ……♪」

ははは……後悔するなよ？

駿は不気味に微笑みそう呟いた瞬間だった。

その場に【駿は】居なく、7mはあろう馬が姿がその場に居た…

糸は全てスレイプニルの足元にボロボロと砕け落ちていった。

「良い塩梅（あんばい）の電機治療だったぜ？」

ひゃはははは……この程度の雷撃は……人間での俺しか倒せないぜ？

スレイプニルの俺はぁ……倒せん！

―Masaru Itou―

「!?」

歩名実は将を刺した場所に再度目をやる。
まるで突然、なにかを思い出したかのように……

「……倒れて……ない？」

そう――あの傷は死傷並の傷だ。
倒れない方が……おかしいのだ。
胸に一刺し……肺まで刺した……筈だ。

「目には目を……じゃよ」

ゆっくり口調のおじいさんがそう答えた。
普通ではない８ｍ近くはある巨人だ。
しかし、かなりの老体はかわりない……

「完全……憑依!?」
「正解！」

グングニルを取り出し歩奈実に向けて駆け出す。

3分……！
いや……2分で片付ける！

その時間を過ぎたら将は戦闘をする事は到底不可能だ。
だから、最初からトップギアで将は歩奈実と立ち向かった。

「くッ！」

「は！」

歩奈実は鎌で槍を弾くが、すぐさま第二撃が歩奈実を襲う
歩奈実は現在魔力切れ（ガスケツ）の状態。

勝敗は決した。

―Ｒｅｎａ・Ｆ＝Ｌ・Ｈ―

「ｃｏｍｐｒｅｓｓｉｏｎ（圧縮）」
「ぐがぁ！」

レナがエルと戦闘を初めてから１分足らず。
すでに勝敗は決していた。
レナが意図も容易くエルを圧倒していた。

「ｒｅｄｕｃｔｉｏｎ（縮小）」

先程までエルを包み込んでいた重力の弾が左腕の義手に集まり。
手の平を広げていたレナは右手を握り締めると同時に義手が破壊された。

「ぐっ……！」
「……ｍａｇｎｉｆｉｃａｔｉｏｎ（拡大）」

そして、もう一度エルを包み込むように重力の空間が作られる。
手の平を、広げる。だが、何時でも握り締めれるように猫の手は欠かさない

「選べ……もう一度重力に押し潰されるか……私を通すか……選べ！」

「……」

……私の邪魔をする者は許さない。

「負けだ……」

その言葉と同時にエルは重力魔法で増加された重力に叩き落される。

通常の１０倍の重力で。

それは、通常ならば……簡単に人間の骨を砕く事のできる重力だ。

「……無駄な時間を食った……！」

和也……！　クソ！　イヤな予感がする……！！

たしか……隣町の公園ね……！

雨の中に少女は自分の大切な者を崩さないために駆け出した。

―Ｓｙｕｎ　Ｋｉｓａ

ｒａｇｉ―

勝敗は此方も決していた。
スレイプニルの状態になった駿の攻撃にセイガは反応もしきれない。
それは、決定的な実力の差を指し示していた。昔みたいな2対多数の勝負とは違って
1対1……実力の差は決定的だった。

「……ふん」
「マリオ……」
＜……あぁ……逃げるぞ＞

勝った……。
逃げるなら文句は無い……。
見逃がそう……。

深追いをしてしまったら負ける。
増援なんかが来たり包囲でもされたら終りだ……

まずは将との合流を……？
いや……まずは……
和也だな……。真実を知ったらアイツは潰れちまう！

人間サイズに戻り、駆け出す。

和也は……サッカーグラウンドだ！

―Ｍａｓａｒｕ　Ｉｔ

ｏｕ―

「……」

「……」

　幾ら老体だろうが、将の強さは神々のままであった。
北欧神話の最高神オーディンの力は健在だった。
それは、動ける時間は短いかもしれない。だが……老体なのにはかわりない
ウルトラ○ン如く3分しか全力で動けない。

「退け。勝敗はけっしてる」

「……マコちゃんは彼にムカツイてる……」

　そうかい……。
そのぐらいは解かってるよ……彼の目は真っ直ぐだからね。
君等と顔を合わせた時にわかったよ……。
瞳とは人の真実を現してると思う。
瞳は人間の中でも1番に素直だと僕は思ってる。
心を偽る事はできる。言葉もだ……だけど、瞳は自分を写す鏡だと……僕は思ってる。

　その分、和也は弱い存在だ。自身に溢れた目をしてるが良く見るとその逆。
和也は何処かで自分の存在に微かに気づいていた……迷子の子猫みたいな瞳で、前後不覚になる程だった……和也は自分のオアシスを

捜してたのだと思う。
心のゆとりを持てる場所を……ずっと捜してたんだろう……。
それが、レナと出会って変わった、和也は孤独の文字を感じさせなくなってた。
居場所を与えてくれたのは和也だ……でも、そこには和也も一緒だった……
『家』に『家族』が居るのを初めて実感できたんだ……そりゃあ……人間ができる初めての居場所だから……かもしれない。和也は大きく成長したんだが……和也の瞳は純粋で無邪気で傷つき易い繊細な心なんだ……。

だから……僕等はまた人間を信じてみようと思えたんだ。
彼はたしかに人間ではない人間だ。けれども……彼は彼に代わりないんだ。
彼は……雨宮和也を語れるんだ。

「……カズ、僕は……キミのオリジナルではなく、キミの方を雨宮和也って言うよ……」

元の姿に戻り将はそう呟いた。

カズ……崩れる前に……キミをなんとかしたい。

mamiya―

なんとなく……自分が自分じゃないって気が付いてた。
それは……確信じゃないけど……あぁ……オレってなんか人より違うのかな？　って……
そんで……熱を出して病院に行った時に、魅夜の無理強いで健康診断された……その時に……オレの寿命がもう……6年ぐらいしかないって聞いた。高校を卒業できないって……。
ソコからだったかな？　荒れたのは？
高校なんかに行ったって意味がねぇって……。もぅ、闇雲に殴って、蹴って。
喧嘩さえ強かったら……生きれるんだって感じていたんだ。
でも……違うんだ。
……ある人が言った「死としたら……ねぇ？　兎に角楽しもうぜ？　自分の生死なんて後だって」
……ある人が言った「死ぬのは楽しんだ後かな？　楽しまなきゃ人生は損っていうでしょ？」
2人の大事な親友の回答……。

自分が馬鹿馬鹿しく感じた。
楽観的かもしれない……でも、真意だと思った。

オレは何が何でも楽しんでる……そんなのが羨ましかった。
存在異議が無かったオレには……こんな楽観的な馬鹿でも憧れれた……。
『ただ……楽しく。』
小さいかもしれないが、馬鹿にはできない存在異議

―Kazuya　A

「……お前の存在で幾つモノの運命が代わったと思う？」
「オレが……本来のオレに代わってたから大丈夫だったんじゃねぇのか？」

無気力ながらも和也はそう答える

「……お前は知らなくて良い」
「そうかよ……」
＜ご主人様！！？＞

……いじけるのは……コイツをぶっ倒してからだ！

そしたら……オレは……自分を知るために……行こう。
アソコへ……。

「……死ぬわけにはいかないんだよ！！！！」
「……殺す！」

へへ……死ぬなら……全てを知ってからだよ！
そして……知ってから……オレは……あるべき『裏』になるんだ
『表』で居るのは……疲れた。コレからは……オレが『裏』として
……。

再度、この２つのコインは弾かれた。

重力が大勢の者を巻き込んだ。
レナの周りには多数の黒ローブの者達がいた……。

「四二神が……こんなに……」

待ち伏せかな？　ダレかが逃げて追い掛けて来た時に袋叩きにする為に……
させない。そんな事は絶対に……。

「ま、片付いたかな？」

息を吐いて。駆け出す。
３８人が倒れていた。そう、彼女一人で残りの四二神を倒したのだ。
家の前で倒したエル。そして、真琴、歩奈実、セイガ以外の３７人の死神を
実力が劣るわけではない、レナのスキルが四二神を圧倒するモノだっただけだ。

「……速く……しないと！」

「駿……」
「将……見ろ」

駿の視線の先には2名の鎌を持った男が死闘している姿だった。
和也は真琴と対等に戦っていた。だが……いつもの和也では無いのを感じていた。
まるで、嵐の前の静けさみたいに……不自然な……。

「……わかった」
「見てようぜ……和也の道だ」

この2人は、和也の考えが解かっていた。
ちょっとの間の別れを……。

【54話】Six reverse coin's レナの力（後書き）

和也（偽）、将、駿、レナ、真琴、和也（真）
6つのコインは彼らです。

【55話】Six reverse coin's 血対槍（前書き）

スミマセン、遅れました…
腕を骨折してしまい……だがしかーし！！
１週間で退院のところ5日で復活しました！！
左手で最終調整をしたんですが……ハハ、多分誤字脱字が多いんで
宜しくお願いしまーす

【55話】Six reverse coin's 血対槍

「お前は……何故戦うッ！」

真琴の鎌が振り落とされるが、和也は横に避けて避ける

「……オレが言えた事じゃねぇけど！　オレは……オレが守る！
それが……表となってる……オレの仕事だ！」
「偽善者が！」

避けると同時に和也は鎌を傷ついた右手に持ち直す。

偽善者ねぇ……？　そのぐらいが良いかな？
名前のないオレにゃ……偽善者の3文字がな！！

「……影には名前がない……そんなら……影で十分だ！」

横から和也の鎌が迫るが、真琴は避けずに、無理矢理体制を立て直し鎌で防ぐ。
真琴はその場から跳び上がり、跳び蹴りを1発。
和也は右腕で足を掴み放り投げる。
体制を立て直し着地、それと同時に駆け出す

「いいか！　存在には意味がねぇかも知らないがよ！　意味があるヤツを守る！」

鎌を地面に刺して、構える。
鎌ではなく武術の構えで、和也は真琴と素手でやりあうつもりだった

無駄に死なせて堪るかってぇの！　ってかさぁ？
オレってあの馬鹿2人組が心配なワケよ？　お前みたいな化け物相手じゃ勝てないからね♪
……はは……大切なダチなんでねぇ！！

「お前に……資格なんかない！」
「はん！　喧嘩に鎌はいらねぇ……！」

真琴の右腕を顔面スレスレで回避し、膝を真琴のどてっぱらに入れるが
真琴は怯まず、左手が和也の顔面にめり込んだ

はは……なんなら……拳でいこうや！　それが……喧嘩じゃ♪

「俺は……お前のせいで余計な仕事が増えてるんだよ！」
「ココで仕事の話しかよ！？」

真琴の蹴りを、また右手で掴んで払う。
真琴は空中からバク宙し、和也の後ろをとる。
和也はすかさず真琴と向かい合う。

こんにゃろぉぉ……右腕が痛いの！　前にお前にやられた右腕が痛いの！！
無造作に右腕は使えないな……こりゃあ……！

「魔天掌！」
「龍滅掌！」

和也の左手が真琴の右手とぶつかり合い。同時に爆発した。
全く同じ動作を2人はやっていた。

（コイツ……？　まさか……？）

不自然な直感が和也の脳裏を横切った。

「……お前は……どうして……！」

「はぁん！　身体を預かってんだ！　傷つけたら面目ねぇ！！」

コイツは……【初期式】の雨宮流か……！

コイツがなんでこの武を使ってるかは知らねぇが……！

やるだけ……やる！！

「……大人しくしてれば……！」

「お生憎様♪

四聖拳　朱雀の型　舞武！　鳥律舞武（ちょうりつまいぶ）」

オレに、大人しくしろなんて無理なの♪

朱雀の尾が如く蠢く拳が真琴の顔面スレスレを通る。

合計7発、全て真琴は回避する。

「鳥爪舞武（ちょうそうまいぶ）」

真琴の顔面を鷲掴みにして、地面に叩きつける。

ホンの少し大きめなクレーターを作る

「鳥焔舞武（ちょうえんまいぶ）」

両手を真琴の胸に叩きつける。どういう原理か炎が噴出した。

「っ！」

真琴はすかさず防御の体制に入るが、時既に遅し。
和也は【殺】の体制になっていた。

「鳥殺舞武（ちょうさつまいぶ）！」

原理は龍滅掌（ドラゴニッククリア）と同じ。
相手の接触と同時に手の平に溜めた氣を爆発させる。
だが、ＤＣの５倍以上の破壊力を誇る。

「ぐっ！！」

真琴の口から血反吐が噴出される。

「……オレは……目の前の敵を倒して……倒して……！　そうやって生きてきた。けど……！」

和也は真琴を見下し、怒鳴る。

「オレには生きる資格は無い……だから　せめて、この身体を守って……生きてくしかない　それが……唯一できる……事なんだ……だから、」

拳を握り絞めながら和也は苦しそうに……けれども、どこか苦しげに和也はそう呟いた。
認めてるけど……認めたくない。

この和也は……既に、前の和也と変わった。
この一言で、和也は踏ん切りがついた。それは、仲間という翼を捨

てて漆黒の『孤独』という翼を手にした。『枷』は放たれ……1つの『槍』が『魔槍』へと変貌した。

それは、勝負を決定づかせたと同じだった

「前の生き方は疲れた…」

「スケィス！！！」

先程まで少し遠くに突き刺さっていた鎌が、真琴の手元へと再召喚された。

しかし、勝敗は決した。時は既に勝負を決定させていたのは変わらない

「鬼槍（きそう）」

一瞬だった。

「あ――？」

和也の右腕1本で片付いた。

超高速の突きが真琴の鳩尾にめり込んだ。

だが、この程度では終らなかった。

「鬼槍連牙（きそうれんが）」

目にも止まらぬ速さで上・中・下に1発づつ

真琴は脆く地面に倒れた。

そして、和也は真琴の顔を踏み出す。

「残念だな……まだまだ……本気じゃなくてよ」

今までの目とは違い。ドライアイスより冷めた目つきで真琴を見下す。

急速なまでに冷めた目は前までの和也の目ではなかった。

殺意も何も感じさせない程の『無』の目。

「テメーは、オレにゃぁ……敵わねぇよ……」

「なに……もんだ!?」

吐き捨てるように真琴は和也に向ってそう言った。

同時に真琴を押えてる足とは逆の足で蹴り飛ばした。

「ただの【名無し】の不良だよ」

和也はそうとだけ、呟いた。

「ハァん。そうだ……オレに語れる名前はねぇ……」

和也は鼻で笑い捨ててそう言った。

真琴は本能で気がついた。ヤツは危険だと。

今の、雨宮和也（レプリカ）は危ないと……悟った。

しかし、真琴は一向に立てない。足や腕に力が入らなかった。

「無理無理……立てねぇよ……1／3の、鬼槍をモロに貰ったんだ1／100でも普通に気絶させんだぞ？　オレの拳は……なぁ！

死神のローブは大抵のダメージを軽減できんだろ？　まぁ……テメー等みてぇな組織ならレナ達のとは桁が違うんだろうがな……」

何時もとは違う冷徹な声で和也はそう言った。

真琴は身体全体に鳥肌が立った。そして、痙攣とは違う震えが来た。

【恐怖】それが真琴を支配した。

「２０％のオレに歯が立たないようじゃな」

先程の和也は本気だったが、今の和也は違っていた。

根本的に戦う理由が違っていた。

【天使】が【悪魔】に変わるみたいに……全く逆のモノになった。

【守り】が【暴力】に変わっただけだ。

しかし、それは……昔の和也の生き方だった。

「……２０％？」

真琴は呟く

「ウ・ソ♪」

真琴は重たい息を呑んだ。

「２％だよ」

「にッ…！？」

和也は慌てふためく真琴を鼻で笑い捨ててトドメを刺し『かけた』

「和也！！」

1人の少女の声が和也の手を止めさした。
和也の視線の先には【自分に似て非なる】少女の死神、レナ・フォード＝ライズ・ハールドだった
雑木林の先に居る彼女を捜すのは至難の業だが、和也にはそんなのは関係無い、気配さえあればこの和也には見つからないモノは無い

「レナ……か」

トコトコ近づいて来るレナに聞こえない程度の声で呟いた。
蚊が鳴くように、豪雨に簡単に流されるような小さな声を出していた。

「将に駿、お前等も隠れずに出て来い」

茂みに隠れていた2人に和也はそう言った。
2人は大人しく茂みから姿を表した、ボロボロの状態で

近くに来たレナは、この2人も居た事よりボロボロの姿にも驚いていた。
しかし、レナが一番に驚いたのはボロボロにされて伸びている最強の死神【神堂真琴】だった。

「かずや……？」

口をパクパクさせて呆然と和也と真琴を交互に見る。
そりゃそうだ、和也には右腕以外目立った外傷はない、顔は何時も通りの綺麗な顔立ち
そして、何時もと違うのは『目』　温厚で優しい目の和也しか知らないレナにはこの和也は今までの和也と違って見えた。合い変わっ

て2人が驚く事も無かった、この2人はこの和也を知っているからだ。久しぶりに見ただけ。

「カズ……その目だと嫌われるぞ？」
「……将、冗談はあまり言うな……」

『この和也は聞かないからね』
「へ？」

2人の声が重なった。レナは間の抜けた声を発した。

「……大丈夫だったのか」
「ああ」
「うん」

和也は『そうか…』とだけ、呟いて足を進めた。

「……和也、このゴミの処理は任せろ」
「大丈夫……ぬかりはないよ♪　レナちゃんも手伝ってね♪」

将は相変わらず作った笑顔でレナにそう言う。

「へ？　え？」

何やらもどかしい雰囲気にレナはたじたじとするばかりで、付いて行けなかった。
何時もとは、かなり雰囲気の違う3人にただ呆然としているだけだった。
それが、不気味で……それでいて、違和感の無い。

「レナ、何も言わずに従え」

駿の低い声にレナは少し驚きながらビビる。

今までみたいに温厚で馬鹿丸出しの駿とはかけ離れていた。此方も……いや、全員が怖い目をしていた。今までに見た事の無い、和也と同じ……『無』の目、何も感じさせない。

冷徹だけど冷徹になれない目。温厚だけど温厚になれない目。

その闇に迷って歩け出せない目

「う…うん」

レナはついつい頷いてしまう。

将、駿、レナを他所に和也はゆっくりと歩き出した。

1歩1歩、踏みしめるように……ゆっくりと。

その1歩は、双六でいう【ふりだしに戻る】とは、レナだけは予期をせなかった

ただただ……彼の背中を眺めてるだけでしかなかった。

―Ｓｙｕｎ　Ｋｉｓａｒａｇｉ―

今日は本当にやれやれだ……。

和也が自分の事を【一部】知っただけでも大きな事だ……。

アクまでも、和也が偽者（レプリカ）であるのは当然だが……アイツはただのレプリカじゃない……。
その程度は分かって欲しい……アイツは特別なんだ……。
アイツは……アイツなんだって……。事実は違うけど……アイツはアイツなんだよ……

「クソ！」
「駿、レナ達に説明をしよう……僕達の事を含めて」

芝生を蹴り飛ばす俺を、将が静止させる。

そうだな……説明するべきか……。

「まずは……この死に損ないを処理してからな」
「当然♪」

やれやれ……四ニ神のトップがたじたじじゃねぇか……
流石は……【半完全同位複写人間（アルティメットレプリカ）】の雨宮和也……の、喧嘩モードだこと♪　さぁて……吐かせてやるよ……全部な！

「ッ……！」

「わぁを♪　流石は四二神のトップだねぇ……この状態でもやるんだ」

前半の口調と後半の口調が変わってるぞ、将♪
まぁ…この野郎が憎たらしいのは目に見えてるぜ？
俺様もその一人だがよぉ！！

「……マコちゃん……」

「なんだ……知り合いか？　レナ」
「う、うん…」

『そうか…』とだけ返して、真琴と向かい合う……気にはなれねぇが……仕方ないか。
この問題は、俺等3人も関係してるからな♪　楽しもうぜ……♪

「レナ、鎌を隠さなくて良い……「っ！」多数の鎌を己の身に宿してるんあだろ？」
「全部知ってるから大丈夫だよ」

驚愕の顔を表にだすが、すぐさま気を引き締める。
そりゃそうだ……これ程の魔力だ……最初からトップギアでいくぞ…

2分ぐらいは稼いでやるよ……和也！

―Ｍｉｙｏ　Ｓｈｉｂａｈａｒａ―

もう少しで晩御飯の時間だ……。

布団の中で丸くなるのをやめて、布団の中から出る。
どうやら、重症みたいだ……、あのハワイでの一件いらい……

うぅ……。思い出しただけでお赤面だ……。
だってだって……和也と……

「ブハッ！！」

は、鼻血がぁぁ……。

きょ…強烈すぎる。５日もたったのに、未だに鼻血がでるとは…
…。
おかげでボックスティッシュの山が沢山ある……アハハハ…
うぅぅ……最近、貧血気味だ…レバーでも頼もうかな？　久しぶり
にレバ刺し食べたいし…。
そうそう、義姉さんは、ロシアに向ってもう家には居ない、結局は
あの人…私を弄っただけでまともに出番がないらしい……でも、気
をつけよう……突然帰って来たら、今度こそ私の操が危ない…
私にそんな趣味はない。

「うぅぅ…。わ、私って……」

まさか、ヘンタイ？
いやいや…たかが、キスだけで鼻血を噴出すだけじゃないか…
そうだよ、それだけで、ヘンタイだなんて……アハハハ…

【ピーン　ポーン　宮崎をどげんがせんといかん！！】
なに！！？　このチャイム！！？　なんで、東国○さん！！？
あの、義姉め！！　またイラナイ改造をしたな！！？　なんともえ
げつない…
ってか、ココは宮崎じゃありません！　【新都・鳥栖（とすみ）深県】です！
あ、読者様は初耳でしたね？　ココは殆ど最近に造られた町なん
ですよ？　一応、私達が住むのは県庁所在地の【総部葎（そうぶりつ）市】と、言

います。

あ！　ってか、お客さんお客さん

お客さんの確認も忘れたまま、扉を開けた。

その先には……

「吐け。だれの依頼だ」

「依頼主の情報は吐かない」

やれやれ……コイツは……めんどいな

もう少し、痛い目をみせてやろうか……？

「……駿、大して情報はないらしい。帰るよ」

「……あいよ」

ちぃ…。将に助かれたな……ガキが。

「……駿…将……」

「わかってる。」

「話すさ」

将と俺の拳が真琴の顔面にめり込む。

おお♪　意外と気が合うじゃないか……戦友♪

死に損ないは、2、3回転ぐらいして地面に伸びた。

その姿をみて、将と俺はまたもや同じ行動（鼻で笑った）をした。

「行こうよ……だいたいの話せる事は話す」

「……そう」

さぁて……和也はどう動くかな？

まぁ…説明とありゃあ……和也の事は話さざるを得ないか……。

ま…これは仕方ねぇんだよ……。運命の悪戯がな……

―Ｍｉｙｏ　Ｓｈｉｂａｈａｒａ―

雨宮和也がびしょ濡れの状態で立っていた

「か、和也！！？」

うっわぁ～…すっごいびしょ濡れ……。

そんな事より、私が咄嗟に思ったのは、彼に合わせる顔だ……ってか、ノーメイク。

……じゃないよ!!　たしかに……ノーメイクなんだけど……じゃなくて、私は…未だにあの時から和也にどう接するのが最善なのか分からない……。

「待ってって…！　今、タオルを――！？」

身体を吹かせないと行けないっと、思い。風呂場にタオルを取りに向うが。

私は足を止めた。いや、止めさせられた

「か、かずや？」

私は、後ろから和也に抱き寄せられていた。

優しく……とはいかなく、無理矢理…。

「……少し……こうさせて」

鼻声で…聞き取るのがやっとの声で、和也は何度も何度も呟いていた。

泣きたいのに…泣けない。彼が…昔の……中学生の頃の和也みたいだった…

だから、私は、心の中で泣きくじゃれる彼に、ちょっとだけ……居場所を与えた。

強がりな、大切な彼の居場所を……。

少しの間だけでも……

彼の止まり木になってあげたいから……。

「うっ……くぅぅ…！」

「大丈夫だよ……和也」

弱い…繊細な心をもつ彼に少しでも…長く休ませないといけないから…。

強いけど…弱いこの鳥に…

「和也……少し待ってって…タオルを、じゃないと、風邪、引いちゃう…」

そうとだけ、言い。私は風呂場に走って向った。

なんとなく……急いだ方が良いと思ったから……

「じゃあな…」

背後から、そう聞こえた。

振り返ると、先程までいた和也が居なくなっていた。

この日から、この街で雨宮和也を見る事はなかった。

彼の行方は……誰一人も知らなかった。

「どーいうこと……」

駿と将の話しが信じられなかった。
２人の話がよくわからなかった……まるで、和也が……。
既に潰れてしまったみたいで……

「……和也は、この街から姿を消すぞ」

駿の言葉に、私達は重たい息を呑んだ。
私は立ち上がり、和也を引きとめようとするが、将に腕を掴まれる。
凄い握力で……これじゃあ、行けない。

「死にたいの？」

将が私にそう訪ねる。

「今の和也じゃあ……殺されるぜ？」

将に続いて駿がそう言った……この２人の忠告は正しいのかもしれないけど……
私は……『また』守りきれないのかな…？　そんなのは、イヤだ！

「レナ！」

ラミアの怒鳴り声で私は身体を縦に振るわせビックリした。
ヴァンの優しい目も、今では鋭い目になってる。わかってるよ……。
２人の昔は私も知ってる……。

「私は死なない　私は【フィーナ】じゃない…」
「同じだから言ってるのよ！」

ラミアに胸座を掴まれ、睨まれる。
知ってるよ……わかってるよ……。だけど…私はまた守れないのが辛いの

「…レナ、和也君は止められないよ」
「ヴァン！　諦めちゃ…」

そう言った途端に、意識が遠のいた。
何が……？　そう考えていると、駿の脚が私のどてっぱらにめり込んでいた。

……私……また、日常を守り切れなかった……んだ……

そう思い、私は床に伸びた。
前も……今も……私は、大切なモノを守れなかったんだ。

わた……し……は・・・

意識がシャットアウトされた。

雨宮和也とレナ・フォード＝ライズ・ハールドの歯車が、離れた。
和也の歯車は動きを止め、レナの歯車は勢いが弱まる…
再び、この2つが絡み合わせる時に物語は進む。
そして、全ての過去の歯車と運命の歯車が合さった時に、物語は終盤へと進む。
雨宮和也とレナ・フォード＝ライズ・ハールド、この2つの物語は。
そして、神堂真琴が動き始める……最後の歯車（ピース）として。

【55話】Six reverse coin's 血対槍（後書き）

次回から中盤です。
でもその前に…

中盤にさしかかったって事で！！　世界観まとめてみました～♪

レナ「……私……守り切れなかったのかな？」

飛焔「はいは～い、しんみり禁止ね」

レナ「ってか、ええぇ！！！？　なんでココに居るの！！？」

駿「知らないな……」

将「まぁまぁ……上のタイトルを見ようよ」

『……ふざけるな！！！！！！！！』

飛焔「やろうじゃないか！！！　この骨折した右腕に賭けて！！」

駿「いや！！　あれはお前が悪いんだし！！！！　なんだよ！！？
バスケやってってこけて骨折したって！！！！？」

飛焔「……病院でもできるようにと……ノートパソコンを2時間せがみ買ってもらったからＯＫ♪」

将「狙ってた？」

飛焔「まっさかぁ？　ではでは、魔界の方の田中太郎さん？　アメリア・ファンスさーん」

太郎『勇者は鬼で（以下略）の主人公だ』

アメリア『【バキューン！】』

四ニ神（下っ端Ａ）「うわあああああぁぁん！！！　表記もひでぇ！！！」

真琴「……」（壁に埋まっていて顔から出血多量）

エル「……」（地面に右足意外埋まり血が溢れ出してる）

局長「……」（髪を毟られた）

飛焔「……その３名は？」

太郎『うるさかったから倒した、小指で』

『……そう』

飛焔「まぁ……最初は舞台設定だな」

【新都・鳥栖（とすみ）深県　総部葎（そうぶりつ）市】

という、のが舞台なんです。

特赦な県で５つの市に分かれてます。和也達が住んでいるのは【中心】の総部葎市です。

丁分けも特殊で、円の形の市である、総部葎市は４つの丁に分かれていて。縦と横で区切られた丁です。その中で聖涼高校はその、総部葎市の中心点にあり微妙に生徒も集まらない

まぁ、いろんな理由があるんですがね♪

北海道出身であまり土地感とか他の県詳しくねぇから、新しい都市作ってしまえ☆

的なので決定いたしました♪

舞台はあまり現代と変りはありません。

レナ「適当過ぎだし！」

魅夜「あぁ……だから、レナがお泊りした時に2時間はかかると…」
飛焔「はい♪　説明不足でした♪」

太郎『次は魔界側だな』
アメリア『ふふふ、聞かなきゃ損』

飛焔「はいは～い、読者様？　損なんかしませんからねぇ」

魔界の名前は【クァトゥル】という、世界です
クァトゥルには主にモンスターや、罪神（ざいしん）などの神が存在する世界です
人間に近い亞人なども住んでいる。クァトゥルは東西南北の大きな都市に分かれていています
レナ達が住む町は東の【アランド】とういう都市です。アランドは魔法の科学（【魔科学】）が発展していて、植物や家畜の【クローン】や【レプリカ】が発展しています、技術力では北の【ウェンディ】という都市が高いが、魔法をつかう科学ではなく、普通の【医学】や【科学】である。
他にも、西の【ディラートゥ】は亞人（エルフやハーフエルフ）が住む大きな魔法都市である
南の【トゥリーア】と、武術の大国がある。そこでは技術などではなく純粋な格闘術などが大きく発展している。東と北は科学での進歩の争いが激しく。西と南では戦闘（【魔法】と【格闘】）での争いが激しい。
中央には大きな大木（世界樹）が生えているが、今では枯れている。が、枯れてるのは世界樹だけで辺りの森は緑溢れ綺麗である。

飛焔「こんな感じかな？」

レナ「全然、言ってないよね？」

飛焔「……バチ！　コーイ！！」

駿「どこぞの野球少年だよ」

飛焔「っと、まぁ……見てて分かりますように総部葎市と似たような感じですよね♪
実は、総部葎市はクァトゥルを元に作られたんです♪」
将「ココでネタばれしたよ？」
飛焔「ＨＡＨＡＨＡＨＡ」

では、次はぁぁ……

和也「オレについてだ」

飛焔「……おい」

和也「簡単な人物紹介だよ」

雨宮和也：本編の主人公、聖涼高校に通う1年生。過去に【魔槍（グングニル）】という2つ名を称していた、中学の時に【井塔将】【如月駿】の両2名とつるみ【参魔神】と呼ばれるようになった。その時の彼の2つ名は【槍】となった、参魔神の1番槍だからである。そんな彼の正体は【レプリカ人間】であり、それは【アクレイア】の父、【ゲイル】の最大の研究であった【半完全同位複写人間（アルティメットレプリカ）】の成功体である。【鎌の意】は運命の悪魔を切り裂く刃／ディステニーデビルブレイカー【神名】不明

神堂真琴：本編のもう1人の主人公、【ヒメナ・アマミヤ（旧姓・ヒメナ・フゥーリアン）】が居ない今、実質、彼は最強の死神であろう。過去に試験を受けずに彼は神界（人間界）に落された、その時に知り合った女性【愁羅飛鳥】に何時しか好意を抱く様になっていた、しかし、研修終了のタメの死神のルール【最も大切な者を刈

る事】彼は苦渋の選択を強いられ結末は……彼は死神の人生を歩む事に決められた。卒業と同時に彼は約束されていた４２人の選ばれた死神が集う組織【四ニ神】の座に席を置いた。彼はパートナーたる【水瀬歩奈実】と【セイガ・アルウィン】等と徐々に位を上げて行き、真琴はＮＯ，１に昇った。【鎌の意】は死乃恐怖の鎌／スケィスブラッド【神名】吸血の処刑鎌／ディープブラッドオブジャッチブレイド

レナ・フォード＝ライズ・ハールド：本編のヒロイン。多数の鎌を己の身に宿してる少女で本来ならば真琴を圧倒するだけの実力を誇る。重力の魔法を主に扱う、重力に関しては右にも前にもでるのは居ない程である。常に明るい性格をしてるが、その分１番の臆病者で寂しがり屋。レナ達が通う魔法学校の中では１番の実力だが『勉学』の点が足りなく【Ｓクラス】の次席の椅子に座っている。勉強ができない為に真琴同様、人間界に落されて【雨宮和也（レプリカかずや）】と出会った。ネコが大の苦手で【Ｂクラス】のケットシーを嫌っている。彼女は【０７】という、シリアルナンバーえお持ち合わせているが、本人は知らない。知っているのは一部の者達だけだ。それには【雨宮和也（レプリカ）】も含まれてる。彼女はフォード＝ライズ・ハールドの者では無く、彼女曰く【孤児】らしいが、そのウソは全員が見てみぬフリをしている。基本的に愛用する【鎌の意】は、幻想を切り裂く刃／イマジンスラッシャー。隼の断頭鎌／ソニックヘッドスラッシャー【神名】は不明だが鎌の意とは違い１個しかないらしい。

如月駿：スレイプニルの仮の姿。参魔神の【脚】の称号を保有している。過去の革命戦争（ラグナロク）から人間を信じなくなったが、【雨宮和也（レプリカ）】と出会い劇的に変わった。まだまだウラでなにかしら動いてる様子だ。

井塔将：オーディンの仮の姿。参魔神の【知】の称号を保有している。ゆくりと時間を掛けて【雨宮和也（レプリカ）】を品定めをしていたご様子。過去の革命戦争で息子の【邪神ロキ】と孫に当たる【巨狼フェンリル】に深手を負おうが今では少しづつ回復してる模様（以下、如月駿参照）

水瀬歩奈実：四二神のＮＯ．２で幻影魔法のエキスパート。真琴とは古い仲。【鎌の意】は幻影の魔狼鎌／ファントムフェンリル。【神名】は銀狼の錬魂鎌／レクイエムフェンリル

セイガ・アルウィン：四二神のＮＯ．３で操作系魔法のエキスパートで、真琴のサポートも担当している。【鎌の意】は操り人形の操作鎌／マリオネット・コントロール・オブ・　スラッシャー【神名】は不明

柴原魅夜：雨宮和也の幼馴染み。普通の人間でレプリカ和也の存在を知らない。

雨宮鈴南：和也の妹、魔界の時期王妃的な存在。【鎌の意】は、空間を切り裂く刃／エリアルブレイカー【神名】は、王の鎌／キングダムシックル

和也「メインを纏めるとこうだな」
ラミア「……」
ヴァン「ちょっと……いいかな？」
セフィリア「……ひぃたんも」

飛焔「ダレがひぃたんじゃ！！」
和也「ま、待て！！　オレは無実――

――――その後、彼等の行方を知るものは……だれもいなかった
――――

飛焔「んな、馬鹿の戯言は無視して行こうか」
和也「なかなかやるな……ひぃたん」
飛焔「あぁ、かーくん」

レナ「……軽くボコボコにしたよ……」

飛焔「続きは、また暇な時に！」
『じゃあな～』

飛焔「だが、それはもう少し後！」
和也「はぁ！？」

飛焔「大方のあらすじを思い出していただけないとな♪」
和也「ああ……そうか……」

飛焔「では、行って見ようぅ！！」

全ては、1人の少年の寝坊と。1人の少女の落第が原因であった。
少年は愛車（自転車）に跨り学校へと。少女は抵抗を虚(むな)しく人間界での修行を課せられ、少年、雨宮和也の住む世界、もとい人間界へと落される
和也は運悪く、転移されてきた彼女と激突してしまう。それは、運命の歯車が本当の意味でゆっくり動き出しただけだった。死神の少女、レナ・フォード＝ライズ・ハールドとの出会いは彼の日常を大きくとはイカナイが、クロ○ネの某ドリルで破壊された。

和也は正体不明の少女、レナの正体を探るようになる。幼馴染みの柴原魅夜と、親友の井塔将、如月駿を巻き込みレナの周辺の調査を始める。和也一向は確信へと近づいて行った

晩飯の調達をする為、激安スーパー【怨瀬腐（じょせふ）】で死闘を繰り広げる。そして、和也の発案で始まった鍋パーティー（？）に呼ばれたメンバー、駿。魅夜。将。レナ。和也の5名で進んだ。

レナは眠りこけ、和也は魅夜の反発を聞き入れずにレナを自分の家に泊めた……オマケで魅夜も

翌日、和也は今は亡き自分の親の話をし、なんとかレナの正体を難無く聞き出した。

翌日、黒き彗星イニシャルGとの決闘でボロアパートはレナの重力魔法により潰される。行き場を失ったレナに和也は優しく手を差し伸べた。こうして1人目の居候が和也亭に加わった。

月曜日、レナの強制執行により和也は魔界へと足を踏み入れた。そこで出会ったのは、何れ和也亭に加わる居候のヴァン＝アル・サーザス。ラミア・デュミナサスの2名であった。和也は先生とデーモンとレナについて話していた。一方のレナは親友の2人を道連れにしようとインチキな呪いをやっていた。

そして、和也は実力を示して欲しいと言われて、魔物（モンスター）などと死闘を繰り広げていた、

最後の最後で苦戦を強いられるがなんとか勝利。そこでもう1人の時期居候のセフィリア・ナイト・メイガスだった。足首を捻挫するものの和也は勝利する

ソコから、駿の髪の毛が失われたり、球技大会をやったりと暫らく平和な一時を過した。が、和也の目の前に現れたのはレナを狙う集団だった。無意識の内に和也は勝利をもぎ取るものの和也は何処と

なく不満そうであった。

その晩、幼馴染が浚われ和也達は魔界へとまた足を進めた。和也達はレナの失態で遠回りを、ラミア達は四ニ神の3人と出会う。そこからアレコレあり、アクレイアと和也は真っ向から対立した。アクレイアは和也の説得により、いつもの日常へと戻った。

海での一時やらなにやらあり、公園での、争いやら何やら……まぁ、こんな感じ

和也「後半適当だな…」

飛焔「それでは！！」

太郎『俺等の出番は？』

アメリア『皆無ね』

魔王『……私の出番は０ですよ？』

太郎『……ボコるか、ヒマだし』

アメリア『ふふ……【ズキューン！！】』

魔王『もぉう、イヤーーーーーーーー！！！！！！！！！！！』

太郎「では、締め括りは歌で」
飛焔「なんの？」
太郎「ハゲ」
飛焔「……」

フサフサ？　ハァん、鏡を見てから言いな
作詞・作曲・田中太郎

『てっめ～がぁぁフサフサ。鏡みなぁぁ…
俺様達にぃぃ　喧嘩うるたぁぁ１００光年はえぇぇ～
ハゲぺゲハゲハゲハゲドＳハゲハゲハゲハゲハゲ～
１０年したらぁァ　終わりじゃアホぉぉ…
ツルツルハーゲ　ツルツルハーゲ
それがぁぁ…　テメーのみぃぃぃらぁぁぃぃぃぃ』

飛焔「クソ！　内容はともかく歌がうめぇ！！」
和也「……ハウスキーボイス……」

太郎「ふぅぅ。後書きで歌う予定だったんだがな♪」
飛焔「ドＳが乗り込んでくるぞ？」
太郎「ＨＡＨＡＨＡ　俺様は【勇者は鬼で、白魔術師は黒く、魔王は可哀想】だからちげぇよ。ひゃはははは」
和也「オレ達に被害が出るんだよ…」
飛焔「ペゲってなんだよ…？」
太郎「ヘゲの改造型」
飛焔「ヘゲ？　たしか、前にドＳな俺と、ドＭなアイツで龍二さんが……？
ってか、知ってる人少ないよ！！！！！」

『じゃあな～』

飛焔「あれ～？」

【56話】ヤーさん（多数）対オレ

オレはワケありで只今、『お嬢様』の護衛兼話し相手になっている。

元々は【ココ】に着てから自分でなんとかするつもりだったが、流石にそれは難しかった。

そんなこんなで、バイトをしながら適当に目的地まで向っていたが、空腹のタメに倒れた。うん、殆ど絶食状態だったからな、まぁ助かったのは公園の水が美味かった所かな？　内陸とは違って【ココ】は水も空気も美味かった。そんな事は良しとしよう……。

そんな、途方もない放浪の旅をしていたオレを救ってくれたのが……古都宮財閥の時期社長たる（くやしいが）超イケメンの野郎との契約だ

『三食寝泊り付きの超高額なバイトをくれてやる、だから、瑠依を守ってくれ』

そんな感じ依頼を受けた。

瑠依ってのは……ココ（財閥）のお嬢様だ。

狙われてる原因は知らないが……どうやら一流の暗殺者に狙われてる。

一度、ヤツ等とは手合わせしたからわかる……ヤツ等の目はプロの目だった。

ま、引き受けた仕事だ……今はだいぶ充実してるしな……。

まぁ、説明だけじゃ読者様も分からないだろうし……2週間程時間を遡ろうか

「土下座されても困る。オレは……」

行き倒れてる時に助けてもらった恩はあるが…
しかし……面倒事はゴメンだ。

「頼む！　妹を助けてくれ！」

土下座されても困るってんだ。
誘拐ならまずは警察だろ？『財閥』の時期トップが警察に頼まないのはおかしい
オレに頼む事事態が間違ってるだろうが……

「警察に行ってくださいよ！　財閥の嬢さんが関れば直ぐに動くでしょ！」

「……アテになるか。相手は【燈廉会（ひれんかい）】が相手じゃな」

ひ、燈廉会だぁぁぁぁあああ！！！！！？？？？　めっちゃ有名な暴力団（ヤクザ）じゃん！
警察も迂闊にでたら返り討ちにあって全滅したって……世界に名を馳（は）せる組じゃないか！！？
身代金の要求なら簡単だが……頼むとしたら、身代金の要求じゃないって事だな……
ならば……なにが目的で……？

「身代金の要求は？」

「ない」

そりゃそうか……クソ、警察が手を出せない。金の要求がない。財閥の坊やも分かりませんってか？財閥の嬢さんの誘拐となりゃぁ……身代金以外になにが…？

っと！　深い追いはできねぇか……。

「ハハハ…オレになにをしろと？」

「何度も言う、妹を助けてくれ」

「オレは一般市民ですよ！！　ヤクザなんか…」

簡単に壊滅できます！

おっと、そんな事を言ったらお仕舞いだな♪

しっかし……

「魔槍…」

「！？」

コイツ……オレを知ってるって事か。

それなら……話しは早いって事ですか……クソ。

「話しはそれだけじゃないでしょ？」

「……ウチで瑠依の護衛として働いて欲しい」

やっぱりね……。

おいしい話しならきくけどね…

「三食寝泊り昼寝付きの。給料は倒した野郎一人につき一万円でどうだ…？　だから、瑠依（るい）を守ってくれないか……頼む」

「乗った」

ＨＡＨＡＨＡ　男に二言はないだろうな？
燈廉会本拠地であるココには総人数は十万人以上居るんだぜ……？
ふふふ、十億の稼ぎになるじゃないか…
コレなら、暮らしていけるぞ……ひっそりとな。

アイツ等に知らされないようにな。

「助かる。場所は……」

と、場所を聞いて俺は、目的の場所へと足を進めた。

見るかに重たそうな門の前に佇むオレと相棒（？）の男。
金髪の長身で耳にドクロのピアスを右耳に。左耳にはなにもつけて無い。
結構なイケメンだ。まぁ、先程の雇い主の方が断然イケメンだがな…
名前は【宮鷹　秀一】だ。手合わせをしてみたが、なかなかの実力だった。
負けることはねぇだろぉな……。

「行こうぜ？　相棒♪」
「だな。死ぬなよ？　ミヤ」

鉄の門を蹴り破る。

へへ…驚いてやがるなぁ……たった2人で攻めて来るんだ、考えもしねぇよな。

燈廉会さん♪　残念だが……死んでもらうよ、給料のタメに…ね♪

「相棒！　ココは任せておけ！　お前は幹部クラスを相手にしてろ！」

「了解」

金が軽減しやがるがぁ……時間も大事だ…仕方ない！

いいなぁ…ミヤのヤツ。

白馬の騎士なんてガラじゃねぇんだがなぁ…はぁ～

ってか……広ッ

大豪邸じゃん……まぁ…幹部がだいたい１００人くらいが泊まってんだもんなぁ…

それに、料理人もいるんだろ？　さぁて、どうなんだか……まぁ……

やるだけ殺って見るか

拳を握り締め、屋敷へと突撃。

したのも束の間……

迷子になった。

「……」

まさか、オレって……カッコ悪い？
いや、でも……周りにはぁ……。拳銃持った怖いおじさんがいっぱい☆
さぁて……Ｉｔ' ｓショータイム♪

遅い遅い♪　銃弾なんか当たるかよ。

銃弾なんか、【パーン×多数】【パシッ】【パラパラ】
素手で止めれるよな？　ハハ…チャカ相手に素手か……おやっさん以来だぜ
だが…あのおやっさんのが強かったな♪　さぁて……

「オレの給料になりたいヤツはダレだぁ！！？」

後ろからくる弾は左手で掴み、前からくる弾は良ければ良い……。
さぁて……逝きな！！

「波龍拳」

氣を拳に溜め……。拳を地面に叩きつる！！！
凄まじい衝撃波で周りのヤーさんを一掃っと。呆気ねェなァ……。
ま、この程度か……所詮は♪

さぁて……勘で突っ走るか♪

―Ｓｙｕｕｉｔｉ

Ｍｉｔａｋａ―

「やぁ！！」

最後の１人を蹴り飛ばす。
蹴り飛ばされたスキンヘッドのお兄ちゃんはオレと相棒が蹴り破った鋼鉄の紋に激突した。

さぁて、粗方片付いたなぁ……。

「だいたい……４７００人くらいかな？」

屍の山も数えるのめんどくせぇな……。
さぁて、中で暴れる相棒の代わりに……外は【パーン】【パシッ】

お任せあれ♪

先程掴んだ銃弾をぉ……。

指で弾く……もちろん、狙いは…さっきオレを狙撃したアホ！

「ぐがぁ！！」

さぁ……掛かって来い！！　給料！！！

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

「ば、化け物だぁ！！」

「失礼な。れっきとした人間だよ」

失礼なヤツは壁にめり込んでやがれ。

えっと……片っ端から部屋を探してるオレです……はい。

ったく、銃弾を素手で掴めるからって化け物扱いはないぜぇ～♪

第一、鎌を使わないだけありがたいと思えアホが。

「……」

別にその気になれば、簡単に破壊できるんだが……そんな事をしたらお嬢様まで被害がでる。

第一に死人が大量にでてしまう……はぁ～。めんどくせぇ……。

廊下を適当に駆けてると、大きな扉が見えた……多分、ココかな？
むぅ…他のと比べると一段と立派だな……。ココか？

【スドォォォォオン！！】

扉を蹴り破ったのは良かったが……オレの目に入ったのは……。

涙目の下着姿の女とそれに覆い被さる様にするいかつい親父…勿論、裸体。
オレの……いや、この空間の時間が止まった。それは1秒がまるで1時間みたいに…
しばらくして、沈黙を破ったのはオレ…。

「……失礼ぇしましたぁ～」

妙に間延びした声でオレは即座に逃げ出す。
女はここぞとばかりに助けを呼び。親父はヤーさんを呼び寄せた。

まぁ……逃げ場がない……か。

跳んで来る銃弾を、素手で掴み取り、床に捨てる。

「しかたねぇか……」

逃げるのは諦めるか…。
さぁて……給料になりやがれ！！！！

まずは、通路の邪魔をするヤツ！
へぇん。何度やっても銃弾なんか効かないよ！

首につけてる、チェーンを掴み取り、鎌を通常サイズにする。
ヤーさん達は……そりゃあ、ビックリするか……ふふ。

「獅子閃咳（ししせんこう）」

漢字が違ったらあぶねぇぞ！！？
まぁ、ともかく、一掃っと♪

「えっと～？　キミが古都宮瑠依さん？」

彼女はオレの質問に2、3回首を縦に振った。
ふぅ、お嬢様みぃーっけ

「あ、貴方は？」

微かに震えてる声で彼女はオレに返す。
その回答に、オレは暫らく悩んだ。
取り合えず、邪魔してくるヤツ等は蹴り飛ばして撃破する。

しっかし、何て名乗るべきか……。雨宮和也ってのはオレの名前じゃないしなぁ…
うむぅ……。荒木龍一？　危険すぎるし……。
うむぅ……。天詩文人？　危険すぎだな……。
うむぅ……。瀬川慎一？　危険すぎだし……。

お、そうだ

「荒川（あらかわ）　文也（ふみや）って事で、宜しく♪」

大事な親友の名前をもじったぜ♪

そうそう、作者も視点変更の時には、【―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―】じゃなくて【―Ｈｕｍｉｙａ　Ａｒａｋａｗａ―】でヨロピコ♪　うんうん、我ながらナイスセンスだ♪

さぁて、と。

「残ったのはアンタだけだぜ？　燈廉会　１５代目、東條雪都（とうじょうゆきと）さんよぉ！」

お嬢様にはオレの上着を着せてっと。

『北海道』は寒いからって一応持ってきた奴だが……

夏には要らなかったんだけどなやっぱり♪　まぁ、念のタメに羽織ってって良かったぜ♪

「ひぃぃ…」

脅える、ボス猿にオレは拳をめり込ませる。

吹き飛んだボス猿は見事なまでに壁にめり込む、勿論、頭蓋骨を陥没させる程度だけどな♪

下では、オレを呼ぶ声が聞えたので下を覗くと、屍の山の上にいる、ミヤ（宮鷹秀一）が居た。

最初はお嬢様の着替えさせてから飛び降り様としたが、服はナイフらしき物で裂かれていたから断念した。『少し我慢してくれ』とだけ、言い。オレはお嬢様をお姫様だっこの状態で窓を突き破り、飛び降りた。

「イヤアアア

耳元でお嬢様の切実な叫び声が聞える。非常に…ウザイ

「このまま、落されたくないなら黙ってろ。【ズキューン】がバラされたくなかったらな♪」

口元を吊るし上げて、お嬢様の耳元で呟くと、お嬢様の顔は仄かに赤かった顔が色素を失い真っ白になった。しかも、先程の親父より酷い目でみられてるのは何故？

情報提供は
飛焔作・勇者は鬼で（以下略）
と
コロコロ先生作・勇者以上魔王以上
の
アメリア・ファンス&荒木龍二さんでしたー♪

……これで、恐怖の対象かな？　オレって♪

これが、オレと古都宮瑠依との出会いだった。

【57話】その拳に賭ける意味・その1（前書き）

文也「どーもー」
宮鷹「槍の鷹（スピアホーク）でーす」
文也「さぁて、次回はどうなる!?」
宮鷹「ふふふ、聞いて驚くなよ!」
文也「何ィィ!!?」
宮鷹「驚きすぎだ!!　ってか何もいってない!」
文也「ってなワケで次回」
宮鷹「文也の流す血のワケは?」
文也「え?　ＨＡＨＡＨＡ」
宮鷹「そして、奥様からの指令とは?」
『刮目せよ!　次回へと続くｓｔｏｒｙを!!』

【57話】その拳に賭ける意味・その1

ってな、理由でオレはココで、瑠依の護衛兼話し相手になってる。
まぁ…恐怖の対象なんだけどね♪　ははは、オレに逆らえる奴はいねぇよ♪
そういうオレは雇い主の【古都宮　零時】には逆らえないんだけどね☆

ココで瑠依の護衛を始めてから2週間が経とうとしていて…
だいぶ……ココでの生活は……馴れん。ってか、無駄に広すぎだ。
ハッキリ言うと、3、４ｋｍ程度が、ココの敷地だ。第一に…オレとミヤの迷子率は１００％と脅威の確立を弾け出してる。ある意味天才的だ……零時にも笑われてる。因みに由来は零時に産まれたからだそうだ……。

敷地でも何閃坪があるかって聞きたいよ……でも、聞いた日には死ぬ。
多分、凡人が聞いたらその日に心臓が止まってしまう……絶対に……だってさ……札幌ドーム並の大きさをもつ温水プールを完備してたり裏庭がジャングルぽかったり……。中庭には天然に見たてた人工の川があったりと…
しかも、本社と自宅があったりとか……本当にだだっ広い……。

庭や玄関先でもパーティーをできるぐらい本当に広い。
更には泊まり込みで働くメイド・執事・専属の料理人にも十分な程、泊まる部屋が沢山ある。
どれも、我が家の１Ｆの大きさがあるのが悔しい……。

第一、アレ？　ココに来てから何回「第一」って言った？
それは、すでに第一ではないだろ……？

ああぁぁぁ！！！！！　久しく難しい事を言ったから路律が回らなくなったあああぁぁぁ！！！

「文也さま～！　奥様が呼んでおりましゅ！！　……／／／／／」

噛んだ……しかも単純なところで……。
いや～。相変わらず、綾芽（あやめ）は面白い♪　いや～見てるこっちが赤面だぜ？
笑いすぎて……

「ほいほい、奥様がどうしたって？」

木の枝に横になってた、状態から飛び降りる。
ココは何時もオレが昼寝をしてるから、大抵の使用人が知っている、因みに彼女は【澄比良　綾芽】住み込みで働くメイドだ……迷子防止のタメに零時がオレにつけたメイドさん
先程、噛んだのをわかる通り……ドジッ子だからオレに派遣されたんだ…。絶対に……

しっかし……見事なまでの【ボン・キュッ・ボン】更には可愛い…イヤ、超可愛いし美人だ。久しぶりに男のサガが働きそうになった。だって……発情期だもん……
近くにこんなに可愛い女性がいたら、理性を押えるだけでも一苦労なんだよ？　本当に……

「あの……何やら、来て欲しいとの事です」
「ハハハ、だから敬語じゃなくても良いってタメなんだからよぉ」

年齢も同じ１５歳。元気で本当に良い子だ。
若い執事も結構人気が…いや、狙ってる奴も多い……後、１年もしたら結婚できるからな♪
そりゃあ、メイド服も可愛いし……あ～ぁ。自分でも混乱してきたぞ…

「いえ、お嬢様の大事なボディーガードですから」

少し不服そうに綾芽は言う。何故、瑠依が関ると何故不服になる？
一応はアンタの御主人様だろ？　うむぅ～零時が言うには『それは、お前が来てからだよカカカ♪』と、不気味な笑みを浮かべられた。
なにが言いたいんだ？

「瑠依『なんか』関係ねぇだろ♪　オレは人として言ってる……」

オレは……人間じゃない……。
そんなの……語れない……何が人としてだ？　オレは人間じゃねぇだろ……
馬鹿だろ……オレ……！　クソ！

「文也様？　御気分が優れないのでしょうか？」
「イヤ、大丈夫だ……悪いがいつも通りに奥様の所まで案内してくれねぇか？」
「ハイ♪」

オレの言葉に綾芽は笑顔で返した。
やれやれ、キミの笑顔が救いだよ……お嬢様はガミガミ怒るし……
零時のヤローはなんか笑顔だし

本当にキミのその笑顔がステキですよ……本当に……助かってる

「……」

先程から目が痛かったので振り返ってみると……
目を三角にしてオレを睨んでくる瑠依お嬢様だった……オレって張られてるのか？
何故、毎回お嬢様が出てくるんだか

「おはようございます。お嬢様」

またもや不服そうに、綾芽が言う。
ムムゥ…不思議で堪らない……。
この2人の関係は面白いぞォ…

「あら？　お邪魔だったかしら？」
「いえ。邪魔なんかではありませんよ？　お嬢様」
「愛しい文也との会話を邪魔して失礼」
「愛しいだなんて……お嬢様こそ、宿題にも手をつけずに毎日、白馬の王子様たる文也様に近づいてよろしいのでしょうか？」
「うッ！　アヤこそ……アヤこそ……仕事もしないで文也ばかりと会ってって良いのかな？」
「私は御坊ちゃまに文也様のお目付け役を頼まれてますので。私は今回、文也様に奥様からの申し出を文也様に仰せになったしまつであります。お嬢様」
「ぐぐぅ……。用事を言い終えたのなら帰れば良いじゃないの！親密に話し込んだりして…」
「私は文也様からお屋敷の道案内を頼まれてますので。世間話をしていた始末であります」
「文也！！！」

「へ！？　あぁ。本当の事だよ」
「うぅ……！」

まぁ、結局は……

「【ズキューン！】」
「ご無礼を失礼いたしました……使用人たる私が出来過ぎたマネをいたしました…」

勝つのはお嬢様なんだけどね……でも、見てて笑える。
毎回、何故かオレの話題なんだけど……ふふふ♪

しっかし……お嬢様も美人なんだけど……勝気な性格がなぁ…
問題なんですよ……。くだらん……至極真っ当に。

「綾芽…本題を忘れてるって」
「あ！」
「む？　そんなに私と離れたいのかしら？　足早に！」

……はぁ～。

「【ズキューン！】【バキューン！】【スパァン！！】をｗｅｂで流されたいか？」
「スミマセン。ゴメンナサイ、マジスミマセン」

わかれば宜しい♪

うんうん。素直は良いことだよ？
じゃないと、拳がめり込むぞ？

「まったく、疲れたぁ…」
「ふふふ、お疲れ様です」

いや、笑わないでくれ。
精神的に疲れたから色々ときついものがある。お嬢様をあまり脅すと、オレが零時に虐められる
大体、力関係は……
綾芽→瑠依→オレ→零時→宮鷹→綾芽
って、感じになってる。零時はミヤには敵わないらしい…ってか、サルとイヌだ…あの2人は。ミヤは微笑ましいほど綾芽にベタボレだから、見ていて楽しいんだな♪　コレが♪
実力なら、オレが圧倒するんだが…零時には口でもルックスでも敵わん。

「ふぁ～。眠い…」
「寝不足ですか？」

顔を覗き込んで、綾芽がオレの様子をうかがう。
うッ…石鹸の良い香りが……保て……オレの理性……。
ハグッしそうになるな……。落ちつけ……心拍数を押えろ！　0に！！

クソ！！？？　ツッコミはないのか！？　0だったら死んでるって！！
ラミアちゃんのツッコミが恋しいぞ！？　今！！！

そうそう、ラミアちゃんで思い出した事があったな…
オレがココで働く事になった次の日だったかな?

「あ、着きましたよ」
「ん?　あぁ、ありがとう」

最後にオレに会釈をして。オレは奥様のいる寝室へと足を踏み入れた

【57話】その拳に賭ける意味・その1（後書き）

なんかシリアスっぽい題名ですがコメディーですよ？

【５８話】その拳に賭ける意味・その２（前書き）

宮鷹「じゃかじゃん！！」
文也「ど～も～」
宮鷹「次回！　仕事開始」
文也「冷徹なスナイパーとの知力戦？」
宮鷹「我等！　槍（スピア）の鷹（ホーク）の前には」
文也「敵は無し！」
『刮目せよ！　次回へと続く新たなるｓｔｏｒｙを！！』

【58話】その拳に賭ける意味・その2

ドアを2、3回ノックし『失礼します』とだけ良い。
音を発てない様にして、返事も待たずに扉を開ける。本来なら、カードのスキャンとかもあるんだが
一部の者にはカメラに装備されてるスキャナーで確認される。
そのおかげで、めんどくさいカードスキャンはなくなった。
それに、オレが返事を待たなかったのは『意味がない』からだ
ノックをしても意味がないとは…まぁ、返事が聞えないんだよね。
奥様は別に声を出せないワケじゃない。
先程言った通りに『聞えない』んだ……簡単にいうとこの扉は防音の扉だ
『外に漏らさない』タイプの。外側でのノックは聞えるものの内側からの音は外に漏れない。
だぁかぁら、××で幾らでも大声を出せるんだ……読者様？　そんな目で見ないで…
まぁ、マイクつーかそれが、ドアの近くに設置されてるから、そこから返事は聞えるが…
奥様は現在お風邪を引いていらっしゃるのでお手を煩わせたくないからだ。
一応、使用人だからな……誠心誠意…奥様&旦那様に尽くしてる
……零時や瑠依はどうでも良いがな……

「ご気分はお優れていらしゃいましょうか？　奥様」

毎回、あってるか知らない丁寧語で言ってるが……多分、顔を引きつってるな、オレって…
そりゃあ……こんな言葉を使ったのは詩織の親父に会った以来だな……

詩織は智貴（トモ）と同じ小学校（ガキ）の時からの付合いだ。
詩織は古都宮と肩を並べる財閥の1つだ、毎回学校にはリムジンで来ているから全員、詩織は知られてる。その上、ルックスは特上クラスときたもんだ……次期生徒会長とも呼ばれてる。
そういえば、魅夜と詩織って何と無く綾芽と瑠依に似てるよな…
…特に喧嘩の話題がオレで共通してるし……なんだろ？　オレって話題にされやすいのか？

「ええ、少しは宜しくなりましたわ」

起き上がろうとする奥様に『横になってってください』と言い、布団を被せてに横にさせる。

「で、御用とは？」

横にさせてから、4、5歩下がってから奥様に、オレを呼び寄せた理由を尋ねる
まぁ～。いろいろと、零時の愚痴を聞いてたからなにかしらわかるようになってきた。
確かそろそろ、親戚のジジィの誕生日パーティーがあるそうだ、どうも、性格は最悪ならしい…が、瑠依だけには甘いと……。

「ええ。零時も貴方に愚痴を仰ってたように…

この人、零時がオレに愚痴を溢してたのを知ってるのか……となれば……

近々、叔父の誕生日パーティーがあります。生憎、私は風邪を引いてしまい【政人】さんは海外に出張でだられません。零時も時期社長として仕事を覚える為に後を追わせましたから、パーティーに向

かう者が瑠依しかいません。そこで…」
「オレ等の仕事ですか……」
そう言うと、奥様は『はい』とだけ言い残した。
「それと、前回病院に送られた【燈廉会】の頭首……行方を眩ませました」
なに…？　アイツは龍二さんが病院送りにして絶対安静の状態だぞ？
動けないし、ウチのＳＰが張り込んでるはずだ。いくらヤクザだろぉが、さすがにその状態では運ばないだろうし近づかないだろ…？
なら……ダレが？
「わかりました。調べ上げて置きます」
「頼みましたよ。未来の瑠依の旦那様。ふふふ」
「は！！？？」
奇想天外な事を言われてオレはついつい地がでてしまいそうになるが。最大限押えた結果が、拍子抜けしたオレの言葉だ。
奥様はなにが面白いんだか未だにわからん……何故、オレが話題にされなあかん。
「では、まずはその寝癖をなんとかしましょうか♪」
げっ。やっぱりこの無造作ヘヤーは駄目っすか？
手入れがメンドいからって、寝癖すら直してないのが悪かったのか……やっぱり
こういう所に来たんだから直すべきか……礼儀以前の問題だな……

「うぃーす」

頭の後ろを掻きながら笑ってごまかす……ハハハ……

「失礼しました～」

と、言い残しそそくさと退散する。

さっさと、逃げなければ……自我が崩壊してしまう……

ってか、素のオレが出てしまいそうで恐ろしい…

さぁて、部屋から出たのは良いんだけど……

帰り方がわかりませーーーん!!!!!!!　めっちゃ遅いけど、

綾芽ぇ～!!　カムバック!!!

助けてくれぇ～。屋敷でまた迷子になりたくないぃよ～～。

itii Miyataka―

―Syuu

「母さん？」

真っ暗だった。なにも見えなくて……。何時もココにあった、笑顔はなくて。

あったのは、『赤』である、『深紅』に染まっていた。

手にべとついたその感触は今でも覚えてる。

白かった家が真っ赤に染まる。昔読んだ小説でこんなのがあった『白いバラと手紙。手紙にはこの深紅のバラを親愛なる貴方に』白いバラと深紅のバラ……この違いは……

白いバラは紅い『血』で深紅のバラと化すから。

「うわぁぁぁぁぁあああああああ！！！！！！！！！」

「ッ！！！？？」

なんて夢を見てるんだよ……俺は…クソ！

もう……とっくに忘れてて良い事だろ！　クソクソクソ！

イヤな汗をどっぷりかいちまった……なさけねぇや……

もう…大丈夫だと思ったんだがな……ハハ……

「大丈夫か？　魘されてたみたいだが？」

入り口の方から声が聞えたので振りかえると、我が最高の相棒の【荒川文也】が居た。
【魔槍】と名高い【雨宮和也】の姿だ…
なんで、【魔槍】がこんな所に居るかはわからないが…あの実力は世界に通じている程だ…【鎌のネックレス】に衣替えした【魔槍】は危険だと……衣替えをしたのはつい最近だが、狂暴化しただか…

「ああ…。どうしたんだ？　フミ」
「いや…。恒例のアレだよ　ミヤ」

ハハハ……やっぱり…か。この家は無駄に広いからな

「それと丁度よかったんだけどよ……奥様から命令があったぜ」
「……ひゃははは。俺等の給料になるのか？」
「護衛だよ、どこかのジジィの誕生日のな」

あぁ…零時の野郎がなんか言ってたな…そういえば。
旦那様の妹の義父だったよな……それでか。

「今日だから速めに準備しようぜ」
「ああ」

俺は頷いて。スーツを着込んで、フミに着いて行く。
まぁ、当然なんだけど…中庭にでるのに3時間かけたんだがな…ハハハ。

こんなことなら李(リー)ちゃあを呼ぶべきだったな……失敗失敗♪

「さぁて、闘ろうぜ♪」
「おぅ」

我流の構えをとり、フミと対立する。
フミとの闘いは結構参考になる……が、まぁ……

俺の攻撃を受け流すだけなんだよね。俺は本気で攻撃してるんだが…
フミは左手1本で対象してるんだよねぇ……ハハ、実力が違いすぎるって……

「はぁッ！！」
「……そうだなぁ……これでもやってみるか……」

？　なにを考えてるんだ？
『ちぃ』と、微かに耳に届いた。
舌打ち？　何を……？

【ズドォオオオオオン！！！】

……現実逃避して良いか？
舌打ちしただけで……なんで、遥か後方の山が跡形もなく消滅するんだ？
いや…アソコは敷地でもないから良いんだけど……なにをやったの？

「あ、悪い……最低限に押えたんだが…押えすぎてコントロールが悪くなった
ハハハ、気にするなよ♪　ちょうどよかったじゃん♪」

駄目だ…勝てる気がしない。一生……。
仕舞いには…ウインクだけで山を破壊してしまいそうなんだが……

「今度はウインクで…」

どうやら、できたみたいです……。

【５８話】その拳に賭ける意味・その２（後書き）

知力戦になるかなぁ？

【５９話】その拳に賭ける意味・その３（前書き）

文也「謎が深まる屋敷」
宮鷹「明かされる謎」
文也「守るべき物」
宮鷹「そして…」
文也「謎の人物達が登場」
『刮目せよ！　次回へと続くｓｔｏｒｙを！』

【59話】その拳に賭ける意味・その3

だだっ広いな……金持ちって家を無駄に大きくしてなにがしたいんだ？

普通の一軒家ならメイドさんを雇わなくても自分でできるだろぉし……それに、いたる所に意味不明なもの物が沢山だ…絵画（かいが）とか西洋の鎧（ヨロイ）とか、変な片手の壷に……そして、なんかラーメン大食い対決のなんか賞状……って！！？　３０分で８９７杯！！？　待て待て、コレほどの記録をだせるったら……。

『ほぉう？　この賞状は？』

『ハハハ…。少し旅をしていたらラーメンの多食い対決を見てみたら凄い少年がいたもんでね～

それで、譲って貰ったんですよ。ハハハハ！』

た、確かにあの人は賞状とか要らなさそう……。

しかし……料理人さんが可哀想……御悔みを申し上げます（勝手に殺すな

「どうしたの？　文也」

「いえ、外で警戒してる宮鷹が少し心配でして…」

っにしても……スナイパーねぇ…。

ミヤの勘があってなければ良いんだがな……。この会場から狙うとしたら…

半開きの状態になった……天井だな……それ以外に狙う場所は潰しておいた……。

さぁ……ゴルゴさん…上からどう狙うかな？　半開きになった天井から位置を考えたら…銃弾はジジィには当てさせないし、お嬢様に

はオレがついてるから殺せない……さぁ…どうでる？

「何が面白いの文也？　ニコニコして？」
「いえ。余興について少々…」
「うわぁ。丁寧語だし気持ち悪いよぉ…」

取り合えず拳骨を張って黙らせる。
公共の場所なんだから使用人らしくさせろ！

「あ！　るい～」
「ん？　詩織ぃ」

！！！！！！！！！！！？？？？？？？？
し、詩織だとおおおおおおおぉぉぉぉ！！！！！！！！？？？
？？？？

「久しぶりだね」
「うん。紹介するね♪　私の護衛役の…？　文也？　何を逃げようとしてるの」

お嬢様ぁ！！　逃がしてくださぃぃ。詩織にバレタら『アイツ等』が攻めて来るだろぉが！！
オレはやっと落ちついてきたんだからさぁ…もう少し時間をください…

「お嬢様、私は少し気になる事があるのでしばし、護衛をはずれまぁ――「良いから良いから、すぐ終わるからさ」――しかし！」

駄目だ！！　逃げ切れない！　かくなる上は……気絶させてでも！！

必ィィィ殺ッ！　魔槍裂破…「良いんですよ、ご用事ならば…」

「マジか！？　助かるよ、詩織！　――「やっぱり…」――あっ……」

はめたなあああああ！！！！！！！！！　七瀬詩織ィィィ！！！！！！！！

クソ！　なんて巧妙なトリックなんだ…詩織……探偵にでもなれば！？

こうなったのなら……

「詩織！！　ちょっと来い！！」

拉致！！！

「此方、【スピア１】。【ホーク１】応答を願う！」

『あいよ、此方【ホーク１】。【スピア１】どうした？』

「少しばっか問題に巻き込まれた！　お嬢様の護衛を頼む」

『了解。』

取り合えず、便所まで行くか！

はっ！　別に怪しい事じゃないからね！！　ね！？　ねぇ！！？

冷たいっす！　その冷ややかな目はきついです！

オレは魅夜一筋……じゃない！！！　オレは…その……アレだよ。

ほら、昔ドラマであっただろ？　【血痕できない男】って！　アレ！　【血痕】ってこわッ！！

【結婚】ですよ読者様！　俗に言う上記のラーメン魔神とも呼ばれる最強のひとですよ！！

うむ…よく考えたら確かに結婚できない男か？

せっかく美女に囲まれてるのに勿体無い……本当に…。

おっと、雑談をしている内にトイレの中だ。ＨＡＨＡＨＡ男子トイレだから赤面してやんの
待て……男子トイレ？　……トイレが区別されてらぁ！！！！！？？？？
クソ……当然なんだろうけど……だろうけど……！！！

「か、和也様？」
「詩織、オレはココで分け合って【荒川文也】と名乗ってる」

声のトーンを低くさせて、静かに詩織を見つめてそう言う。
真っ直ぐ相手の目を見てお話しをしましょう♪

「なんでですか？」
「……それは……」

オレは、雨宮和也ではないから……
人間とはいえない人間で……オレはまったく違う存在だから……
雨宮和也じゃないんだ…オレは！

「かず…？」
「！？　いや、ちょっと気分転換だよ……」

駄目か……誤魔化し切れてない……。
……話すワケにはいかねぇし……かと言って、どう言い訳をしろってんだ！
詩織は勘が働くヤツだし……あんま、下手に言えないんだよなぁ…

仕方ない……ウソを言い通すか。

「実はな…」
「雇われたんですよね？　零時さんに」
「ぶッ！！」

なんか、矢印が刺さってるんですけど…。
背中になんか刺さってるんですけど…滅茶苦茶痛いんだけど…

「それで、何故か改名して【荒川文也】と名乗ってると」
「がはッ！」

なら、お嬢様が『文也』と言った時点で気がついていたのか！？
クソ……オレの苦悩って……腐負不（フフフ）。零時ィィ殺されたいらしいなぁ…
帰って来たら今までの復讐もしてやるでぇ…！

「それで、メイドのハーレムを作ってるとか」
「ぶはッ！（吐血）」

心の中でそのつまらない事に吐血してしまう。
危うく、現実でも。

「詩織！　それはウソだ！　偽りだ！　２００７年並の偽装だ！」
「ご冗談ですよ」

何時か詩織も殺す…。

「一応、全部知ってるんだろ？」
「はい」

『そうか…』と、だけ言って。オレは黙った。

これ以上、話す事は無かったから、それにあっても、詩織はわかってる筈だ。
何年も一緒に居たんだ……例え、オレが違う存在でも……一緒にいた時間は同じなんだ。
それが、唯一のオレの支えになってる……。

「辛そうですね」
「……」
「帰って来て宜しいのですよ？」
「……」

【アソコ】はオレの居場所じゃ……ないんだ。
イヤ、本当はオレに居場所なんかないのかもしれない…
それが、事実なんだ……オレは、【雨宮和也】であっちゃならないんだ。
オレが……オレである意味がないんだ。

「魅夜が……みんなが待ってます」
「！？」

違うんだ！　オレは雨宮和也じゃないんだ！！
オレはアソコに居るべきではないんだ！！　オレは、生きるべきじゃないんだ！！
オレは……オレは……いちゃ駄目な奴なんだ……。

「みんなが貴方を捜してます」

貴方をじゃないんだ。みんなが捜してるのは【オレじゃない、雨宮和也】なんだ！
第一、オレは居るべきじゃない人間なんだ…みんなの近くにいちゃ

イケナイんだ…
みんなの笑顔の傍にいれるのは【雨宮和也】であって【オレ】じゃない

「オレは……」
「なにがあったかは知りませんが……みんな貴方の帰りを待ち侘びてますよ？」

違うんだ…オレは……存在するべき人間じゃないんだ…
だから、居易いアソコから逃げて来たんだ…自分が自分じゃないから…アソコに居るべきじゃないから……オレは……アソコにいるべき人間じゃないんだ！

「オレは……アソコに居るべきじゃないんだ……」
「和也様？」

【パァン！】
景気のよい音を発てた。頬が熱い…痛いとまでは逝かないけどヒリヒリする。
振るえて…何がどうなったのか理解出来なかった、視線は先程まで詩織を見ていたが、視線は便器へと行っていた。理解するのに5秒まるまる使った
そうか…詩織に叩(はた)かれたんだ……

「なぁ…？」
「ソレは間違いです」

詩織の真っ直ぐした眼は。オレに向かれていた。

「例え貴方が人間ではなくて宇宙人・エイリアン・未来人・エ・テ

ポピウスだろうと」

なんだよ！！？　【エ・テポピウス】って！！？
シリアスな雰囲気に悪いけどツッコミたくて仕方が無いんですけど！！！！？？？

「私達は、貴方を真っ直ぐと見ています。だから、貴方が貴方だと言える時に帰ってきてください」

ううぅ……イキナリ、シリアスには帰れない……。
詩織よ……お前ってムードを変える天才だよ……。
そういうオレもか……？

アイツは大真面目なんだろうけど……。
ハハ…それで、アイツ等の魅力だもんな……だけど…オレには関係無い
オレには“権利”がないんだ。

「待たなくても良い！」
「えっ？」
「オレは帰らない」
「……それは、おかしいですよ？」

おかしい……？
何がだよ？　オレは居るべきじゃ……ないんだ。
居たいけど居たらダメなんだ……オレは

「レナちゃん達のの知ってる貴方は、貴方でしょう？　例え、私が知ってる昔の和也様ではなくても…貴方は和也様に代わりはありませんわよ」

「ッ！？」

本当に勘が良いヤツだな……。
見抜かされてるみたいじゃん……ハハハ……

『此方【ホーク１】、【スピア１】聞えるか？』
「ん？　少し待ってくれ。
此方【スピア１】どうした？」
『まずい事になった……』
「どうした？」
『……ラーメンのスットックが』
「ダレが来たの！！！？？　ダレが来ってぇの！！！？？？」

う、噂をすればなんとやらってか？
ちょこっと考えてたオレのせいなのか？
お、オレって……待てよ？　入り口にはＳＰが招待状のないやつって……通させないようにしてるってことは……な、なにやってたの！？　どうやって侵入した？　ＳＰなら名は知られても無いし……き、気にしちゃダメだ。
気にしたら終りだ……。

『龍だ』
「やっぱりか！？」
『でもって、相手の狙いもわかった』
「ソレを言え！！　ソレを！！！」

コイツ、遊んでるのか？
って事はストックが無いのもウソだな……ミヤの悪い癖だ……。

『相手の狙いは……』

「……わかった。オレも直ぐ向う」
『あいよ。待機してる』

「詩織もそろそろ行け」
「う、うん」

狙いは瑠依か……ククク
丁度良い挑戦状じゃないか！

ダレだか知らないが……相手になってやるよ

『そうそう、ついでに…』
「どうした？」
『勇者を名乗る少女と魔王と名乗る少女が迷子なんだが…』
「ラーメンを暴食してる人のところに連れて行け！！」

そういえば、剣をもってる筈なんだけど……。なんだけど……！

『更には、茜色の眼や髪の色をした騒がしい奴が人探しを…』
「小鳥遊の住所にクロネコヤマトで送れ！！」

なんで……？　こんなに来てるの？
今回、イヤな予感がしてるぞぉぉ……

『更に更に、将来ハゲそうなガキとそのイヌみたいな女も居るぞ？』
「無視しろ！！！！！」

いったい何がどうなってるんだよ…？　ココに来てからなんか“
変な感じ”がするし……
なにが起こってるんだ？　そういえば、あの勇者とセットの妖精は

どうなったんだ？

『しかも、勇者と名乗る狂暴な男もラーメン暴食男と…』

「しつこい！！！　どうせ、黒い白魔術師も、ピアノを弾いてるアホも、超イケメンの銀髪野球野郎も居るんだろ！！？　更には神徒計画の嬢さんにさらには、なんか可哀想なオーラを漂わせてる少年も居るんだろ！！？？？」

『おお、流石はフミ…超能力者？』

いや、多作だけど飛焔の作品だしな、オレが言ったのって……。

『そうそう、某銀髪碧眼のシスターと、不幸な少年が…』

ネット小説じゃない所からも来てるよ！！！！

なにがどうなってるんだぁ？　ココは！？　本格的におかしくなって来たぞぉ……

どうなってるんだ？　いったい！？

【59話】その拳に賭ける意味・その3（後書き）

ラーメン暴食漢（＋剣）
勇者を名乗る少女（＋妖精）
魔王を名乗る少女
もう最近定番のコロコロ先生著・【勇者以上魔王以上】より
荒木龍二＆エルフィアン
アルス（アリス）＆フィフィ
クルル

茜色の眼や髪の少女
これまた、定番になった。コニ・タン先生著・【学園珍事　ファミリア！】より
（魔道書）茜

将来ハゲそうなガキ
そのイヌみたいな女
たまにでてくる、下弦　鴉先生著【ドSな俺と、ドMなアイツ】より
瀬川慎吾
森野美咲

勇者を名乗る狂暴な男
黒い白魔術師
飛焔作・【勇者は鬼で、白魔術師は黒く、魔王は可哀想】より
田中太郎
アメリア・ファンス

ピアノを弾いてるアホ
飛焔作・【自由のツバサ（短編ｏｒ連載）】より

八神庵

超イケメン・超天才の高校球児
飛焔作・【ナインッ！】より
織田神也

神徒計画の嬢さん
可哀想なオーラが漂う少年
飛焔作・【フル・スクール・パニック】より
エヴァ・クレントス
小鳥羽雅人

銀髪碧眼のシスター
不幸な少年
某ラノベから、鎌池和馬大先生作・電撃文庫著・【とある魔術の禁書目録】より
インデックス
上条当麻

です。全部わかる人は居たかなぁ？

【６０話】その拳に賭ける意味・その４（前書き）

『次回！　解決編！　刮目せよ！　次回へと続くｓｔｏｒｙを！』

【60話】その拳に賭ける意味・その4

読者様、突然で悪いんだが……迷子になった。
ココに来てから自分の方向音痴が分かったかも知れない。さすがに、右も左もわからないのならしかたないですよね……ハハハ……。徐（おもむろ）にケータイを取り出して通話張のグループを開いてオレはとある人物に電話を掛ける。2コールで、アイツは電話にでた

「よぉ、“将”」
『うん。久しぶりだね。カズ』

電話の先は、井塔将。我等が“参魔神”のリーダー
頼れる男だ、ココに来てからも結構連絡を取り合ってる、彼と駿だけは着信拒否にしてない。
電話さえ変えれば済むんだが、契約がめんどくさいから変えてない。
魅夜からは電話番号を変えてたまに来るが……登録外の電話はとらない事にしている。

「悪いんだが……調べてほしい事がある」
『なに？　おやっさんのコネで調べるけど』
「ちょうど良い……ヤーさんの事だからな」
『む？　そっちの世界に興味が』
「なにを言うか」

オレは極道なんかには興味はねぇよ……
あるとしたら、一般人かな？　普通の生活が欲しいかな？
ふふ…それは、何年前の事だァ？

「燈廉会の組長の行方だ」

『え？　確か、入院中じゃあ？』
「イヤ、疾走したんだ。今日わかった最新情報だ」
『ふ～ん。動向を探れば良いんだ』

流石だ、話しが早いじゃないか。これは、アメリアも掴んでない情報なので驚いたよ。
魔界と人間界の情報を網羅してるアイツの情報網を抜けたんだ。余程の“組織”なんだろうな…

ぅん？　組織…？
＜御主人様の考えは確かだと思うよ……＞
「お前の意見は聞いてない」
＜……私って……私って……＞

まさか…四二神？！　イヤ、だけど……。
あの組織がそう出るか？　オレや将達を殺すのに…ヤツが必要なんだろうか？
ヤツはただの人間でヤクザのボスでしかないだろ？

『カズの考えは違うよ』
「将……なら」
『これは、神界……イヤ。此方の世界のが良いかな？
“此方の世界の本当の裏”が係わってる」
「……裏の裏は表…か」
『駿でも理解に苦しんだ奴を意図も容易く解きますか、流石だね』

アイツと同一視しないでくれ…なんか、哀れみたいじゃないか……。

「将、頼んだぞ」

『了解。わかりしだい…電話するよ』
「おう」
電話を切り。携帯をポケットにしまう。
そして、この迷宮（？）をどう抜け出すか考えてるだけだった。

―Ｍａｓａｒｕ　Ｉｔｏｕ―

「駿、僕達の出番だよ」
「おうよ」
カズは危険な空間に居る。ソコは、ターニングポイントに居るんだ。
普通のウラ世界か、本当のウラの世界……この間に居るだけだ。
彼は【ゼウスプロジェクト】なんかに係わらせれない。僕達だけで、なんとかするんだ。おやっさんも事情は知ってるようだけど……こうなれば、僕が動くしかない……か。
「どーいうこと？　なんで、和也から連絡が…」
「げっ！」
「あ…！」
う、ウソ……でしょ？

き、聞かれた？　最も聞かれたらイケナイ人物に……。
お、恐ろしい事になるぞぉぉ……駿もガクガクと音を発てて振るえてるし……。
ゴメン、カズ……。キミに迷惑をかけるつもりは無かったんだ……じゃないと、僕等の命が危ういんだよ……怒らせたら何より強い２人が……立ちはだかってるんだよ……ハハハ……。

「レナ…」
「魅夜…」
「ちょっといいかにゃ？」
「立ち聞きする気ははなったんだけどね★」

ゴメン、キミの居場所が漏れてしまう。
この２人には適いそうにない……ゴメンね……カズ……。

―Ｈｕｍｉｙａ
Ａｒａｋａｗａ―

「ぅん？」

なんだ？　今、一瞬寒気が……？
まぁ、気のせいだよな♪　そうそう、将に限ってありえねぇよな
……さぁて、“この状況”をどう打破しましょうか？

口元を吊るし上げてオレは笑顔をみせる。

「どういう事だぁ？　ココはテメーの居場所じゃねぇよ！」

オレの視線の先に居るのは……。

昔馴染みの馬鹿野郎……オレと同じくじっちゃんに武術を教わり競い合っていた人物の

亡霊だ

「小狼（ショウラン）！？　どうして、貴様がココに居る！？」

「酷いじゃないか？　俺は嬉しいんだぜ？　お前に“復讐”できるんだからよ！」

ヤツのその言葉を聞いたと同時に飛び跳ねて回避する。先程居た場所が“無くなった”

爆撃殺……イヤ、コレは…爆撃滅か…！？

やれやれ……ここでそんな大技を使うか…？

お前はもう1度死なないとわからいのか…！？　クソッタレ！

「お前は所構わず…なんて技を！？」
「ふん！　コレまでの借りは返させてもらうぞ！！　雨宮！！」

ちぃ！　こんな場所じゃ…爆撃殺は使えないし…
近距離はヤツの“ワナ”がありやがる……GI（グングニル・インパクト）なら1撃で破壊できんだが……。仕方ない……長距離で攻めてもヤツの方が技量はある……。

ならば！

「疾風よ！　ヤツを切り裂け！　ウィンドエッジ！」

「な？」

音速の速さで飛ばされた風の刃は、ヤツの腕を切り裂いた。
……幽霊じゃないか……なら、何故生きてる…？　アイツは死んだ筈だ。
生きてるなんて……！？　おいおい…まさか！？

「小狼…？　まさか……！？」
「そうだよ…お前と同じさ。レプリカ和也」

小狼も……レプリカ？

「お前は…ココがどうなってるのか知ってるのか！？」
「知らないなぁ？　オレは仕事で来てるんだ…」

仕事？　なら、ココで起ってる現象とは無関係だとでも…？
ウソだ！　なにかしら知ってる筈だ！　こいつは…！！

「吐け！　小狼！！」

「ひゃははは。残念だが失敗作の俺には聞かされてねぇな」

失敗作!?　どういう事だ?
どこからどうみても、オレと同じく成長した小狼だ……なにが……?

待てよ……?　さっき、オレはヤツの腕を切り飛ばしぃ……
…まさか?

「俺にはなぁ、“痛みって感覚がねぇんだよ”スゲーだろ!?　雨宮!!??」

……なら、楽に死ねるな……小狼
そんな死に物狂いでオレに掛かってきても……オレの勝ちだよ。

「えっ?」

光の速さでオレは小狼の前にでる。
そして、３０％のこの技を叩き込む!

「掛かった!」
「龍滅掌(ドラゴニック・クリア)!」

小狼の奥の手も全てを打ち砕き。小狼はチリ１つ残らず消え失せた。
衝撃波は０の状態に手加減しておいた。衝撃波も付けてればこの屋敷でも無に換える自身はある。
それに、クレーターも世界最大のもできるぞ?
今までのＤＣは２％の威力もなかったからな……。

小狼……お前が哀れだよ。痛みが無いって…すでに人間とは違う

じゃないか……。
お前は、本当に不完全だよ。レプリカじゃなくとも……。

―Ｓｙｕｕ

ｉｔｉ　Ｍｉｙａｔａｋａ―

「じいちゃん……」
「宮鷹!?」

ちぃ。このジジィは…。死んだ筈だろ?
第一……俺が殺したはずだ、手応えもちゃんとあったし……。クソ、どういうことだ?
それに、このジジィと戦う事になったらお嬢様にまで危害が……。
仕方ない……コレを使うか!

「ふぉふぉふぉ。秀坊…其方のお嬢さんを引き渡しなさい」
「けっ!　ダレが!」

しかし……お客さんの真ん前ですか……。よりにもよって…お嬢様の挨拶の時に…ねぇ!?
奥様が来ないからって、代わったお嬢様が悪いんだぜ?　他のヤツに任せれば良いのによ?
演出と思ってくれればありがたいんだがな……

「なら、死んでもらうぞ」
「ダレが！」

ジジィとは思えない程の速さで近づいて来る。うをぉ……ナイフ持ってるしこわァ。
ナイフを蹴りで弾いて、左拳がジジィの腹のど真ん中に当たる。

うしぃ。決まった。

「甘い」

しまった？　ハンドガン！？？
そんなのを隠してたのか！？　クソ、回避に間に合わない…これじゃあ、心臓に当たるぞ？
これは、あんまり使いたくなかったんだが……仕方ない！

【パァーン！】『キャアアアァァァァ…』
叫び声が聞える。ハハハ、実戦って気がついたかな？　さぁて、逃げろよ…。
やっと大暴れできんぜ！

「いくで、桜春（おうしゅん）」
＜了解＞
「ふふふ、久しぶりじゃのう…その【妖刀】は……」

俺の家庭に代々伝わる妖刀だ……。お前を殺したと同じ方法で……切り裂いてやるよ……ジジィ！！

「冥空牙！」

鞘に入った状態から、冗談に向けて引き抜く。
刃はハンドガンを切り裂き、ジジィの手からも落させる。
どう動く…？　ジジィ！？

「老掌砲（ろうしょうぽう）」

手の平から黄色い弾を放つが。桜憙で切り裂き、ジジィの身体目掛けて突進する。
狙いは……頭！　ソコから下に切り裂く……！！

刀を強く握り締めて、刀を突き出す。
しかし、ジジィの頭はそこから消えていた。なにがどうなって…！？

「老天岩（ろうてんがん）」

下から、岩の槍が俺に向って来るが、先っぽを切り裂き足場にする。
へへん♪　一石二鳥ってな……ココから……飛び降りる！　狙いは……レッドカーペット！

岩から飛び降りて、レッドカーペットに桜憙を突きつける。
ソコから土龍が現れる、土龍はジジィは正面から砕く。

へぇ～。よく死ぬ前の動きを覚えてるな……。

昔なら、俺が正面から飛び出してザシュッ♪　なんだけどね…。

「な！？」
「今度は後ろだよ！！！」

瞬時にバックをとり、土龍を破壊したと同時に攻撃は大して変わってねぇだろ？
今回は……後ろからだがよ！！！！

【ザシュッ！！】と音を発てて、またジジィは死んだ。
けっ。“土”の術で俺の家計の“血統”とテメーんお血統ではランクがちげぇんだよ。
宗家の大親分が。本家の俺に適うわけねぇだろ？

「お嬢様…！？」

そう言えば、先程からお嬢様の声が……。
まさか……！？　おいおい……俺のミスだ……。

お嬢が……さらわれた。

―Ｈｕｍｉｙａ

Ａｒａｋａｗａ―

「なに！？」
『悪い、しくじった』

クソ……やっぱりお嬢様が……。
知っていながら守れなかったのか……畜生！！
なにをやってたんだ！？　オレは……！？

「ミヤ、オレはココを調べる」
『俺はお嬢の捜索をする！』
「『掴めよ！　証拠を！』」

オレ等は2手に分かれる事にした。
オレはここの不可思議な現象を探り、ミヤはお嬢様の捜索&救出だ。
ココの現象……オレのイヤな勘があってなければ良いんだが……まさかが、ある。
それなら……“オレにも会える”

掴んでやる……ココの出来事を！

【６０話】その拳に賭ける意味・その４（後書き）

明日から、中学3年生となります。休みの期間を終えて、酷いことに更新が不定期になります。ご了承下さい
更には、受験生という事もあり、勉強に追いまわされる可能性があり更に更に更に（×無限）更新が遅れます♪
１週間に１回の更新になると思いますがご了承ください。
ヒマがあれば、昔のを手直しして行きますので、たまーに読み返してみてください。

【61話】その拳に賭ける意味・その5

「やっぱりか…」
「お、来たかぁ？　“オレ”」

兎に角気配を辿って行って正解だったか……。
ハハ…。どうやら、オレの勘は当たってたみたいだな……。
オレの眼前にいる“俺”が何よりの証拠だ。
セットをしていなくボサボサの髪の毛、オレからみてもなかなかの顔立ち……うむ……意外とオレってカッコイイな……

「馬鹿野郎、自分を見て関心するな」
「な!?　何故わかった!!??」

ちょ、超能力者だったのかオレは!?　その能力が欲しいぞ!?
非常に!!　むむぅ…オレって凄いのか？

「言っておくが超能力者じゃねぇぞ」
「超能力じゃん!!!!　なんで、考えてる事がわかんだよ!!!!??」

それを超能力と言わないでサイコメトリーという!!
ってか、それは既に超能力じゃーん♪　ハハハ♪

「俺をお前に例えれば簡単だ」
「逆算…だっけ?」
「どうでも良いだろ?」

おーい、作者が混乱し始めてるから一旦、ミヤに変わりマウスト

ゥマウス
【思考がおかしくなっております】

―Ｓｙｕｕ

ｉｔｉ　Ｍｉｙａｔａｋａ―

どーも。宮鷹秀一１５歳。彼女いない暦１５年の俺でース。
今回の俺は走ってます。うん、お嬢様を見つけたのは良いんだけど
相手がフェラーリって事で苦戦してます……オレはフミみたいに人
外…いや、神外の実力はないからさぁ…。
相手が凄腕の走り屋じゃあ…流石に適わない……。

ってな、理由で忙しいから、フミに代わるな。

―Ｈ

ｕｍｉｙａ　Ａｒａｋａｗａ―

「……さぁて、おふざけモードは終りだ」
「やっとか……」

そりゃそうだ……テメーには色々とあるからな。
聞きたい事がう～～～～んとあるんでね！

2、3、4…少しづつ“俺”に近づく。
近くで見るとより一層似ていると感じる。

そりゃそうだ……オレは似せて創られたんだ。
似てなかったら意味が無いだろ？

「聞かせてもらおうか？　オレの事を？」
「いいや、本当に聞きたいのは“俺”のことだろ？」
「クッ！」

やっぱり見透かされてるか……。
やっぱり、“俺”なんだな……。
本物には適わないよ……。

「いちいち、捨てられた犬ッコロの眼をしてんじゃねぇよ！」
「人の気も知らないで！！！」
「知るかよ」

殴りかかろうとした時に“俺”が冷徹な声で言い放った。
その眼には愚かな愚図を罵るかのような眼で“オレ”を睨んで来た。
オレはその眼光にたじたじになるだけで何も言い返せなかった。

「テメーの事なんか興味はねぇよ」
「……！」

何も言えないままオレは驚いた。
少なからず、オレが俺なら自分の分身（うつりみ）である、コイツの事が気になる。
でも、同じ筈なのに、コイツは違う……。
「俺は魅夜にしか興味は……あ！」
あ！
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……ぷ、」
長い沈黙を破ったのは、このオレだ。
徐々に顔が赤くなってるのが、わかる。頭が限界に来ていた。
爆発してしまいそうで、押えてた思いが爆発してしまうのを恐れていた。
それは、何かをぶっ壊してしまいそうで……ゴメン、限界だわ
オリジナルの方も顔が赤くなって行く。
もの凄い勢いで……沸騰しそうじゃん。
「……」
殺意の眼光がオレに向けられるが、真っ赤っかな顔では説得力は

ない。
逆に、オレの顔が赤くなっていく。
「ぎゃはははははははははははははははははははははは！！！！！！！！！！！！！！！
ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ　ひゃはははははははははは
はははははははははははははははは！！！！！！！！！　最高だよ！！
！？？？　マジで最高だ！！！！！　ナイスポロリだ！！！！！
あ～、腹が痛い。ダメだ……ぷぷっ、にゃぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱ
ぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱ！！！！！！！！！！！！！！！

ヤツの魂の叫びが俺にまで聞えた……。なにかそんなに面白い事があったのか？
実に気になる（某物理学者風（ガリレオより））

そんな事より、聞いてくれよぉぉ。何処かの桜の木の上で寝てたらよぉ……なんか、剣を持った巫女さんが出て来たんだ、そんでよぅ……俺も自分で言うのもなんだけど強いワケよ、ヤーさん相手なら１０組くらいは３分で落す自身あるもん。それなのによぉ、俺に目もくれずに文也に挑んでよ……妖刀の攻撃を鎌で軽く止めて、小指でデコピンで終ったんだ……たしかに、文也はフワフワした嬢ちゃんジュースを貰ってさぁ……ブラックドラゴンと対決をしたワケよ、理由は聞かないでくれ。
いや～、どちらとも酔ってたから本気とは行かなかったけど世紀の一戦だったぜ？　魔槍対ブラックドラゴンは……見てるコッチが失神してしまうくらい凄かった……実際に拳と拳がぶつかり合っただけで公園は崩壊したんだけど……そういえば、あちらサイドにいた女の子達可愛かったな～♪　結局は途中で酔いが醒めた文也がその僅かな隙をつかれてＫ．Ｏって事だ……あの時に録画したビデオがかなり売れている……俺も買ったんだが……。

で、時間は稼いだぞ？　大丈夫か？　フミぃ？？

umiya　Arakawa―

―H

ゴメン。まだ、腹が痛いわ……。
ダメだ、どうしてもポロリはツボだ……しかも、愛の告白って……
ぎゃはははははははははははは！！！！！！！！！！！！！！

流石はオレの“精神世界”だ！！
あ～～～。くぅぅ。

「そもそも、ココはお前の精神世界だからこういう……！！」
「でぇ、でもにょ～（でもよ～）」

呂律が回らん……ダメだ。まだ、オレに笑えといっている
オレの中の精神が……やっべ～、録音しておけば良かった……。
悔やんでも仕方ないか……ぷぷ、でもあのポロリは……マジでツボ
ったぁ～。

uuiti　Miyataka―

―Sy

まだ、文也が壊れてるから、暫らくオレでいきまーす。
てか、文也のヤツ“屋敷に入ってからイキナリ倒れて”大丈夫なのだろうか？
お嬢様と七瀬のお嬢さんが心配してたんだが……。
そうそう、その七瀬さんのお友達のぉぉ……なんて言ったっけ？
たしかぁ……し、しぃ～？　ま、良いや。
彼女が文也から離れなくてお嬢様（誘拐中）が起ってたぜ♪

さぁて、嫉妬深いお嬢様を乗せた車をはっけ～ん♪
直ちに……“抹消”する。
時刻は深夜１時３０分“鬼門”は開いてる……うし。

懐からお札を取り出して、自分の真上に放り投げる。

「行くで……トロ○べ」
＜我はそのような名前では！！＞

五月蝿い、漆黒の馬は全部トロ○べだ。
第一、この時間まで粘ったんだ……“鬼門”さえ開けば“召喚”ができるからな…！
さぁて、桜憲……準備は良いか？

「○馬一体！！」
＜だから、危険なことを言うな！！＞
＜良いじゃねぇかよぉ？　武士と食通の合体技＞
＜き、貴様！！＞

五月蝿い、この１匹と１本には罰をあてようか。

「ふん！」
＜ぎゃあああああああ＞
＜熱い！！　溶けるぅぅ…！！＞

火炎をお見舞いだ。そうそう、事故紹介の途中かな？
イヤ、言い忘れか……俺は“陰陽師（おんみょうじ）”の家計だ。
“宮”殿を守る地上最強の“鷹”その血を退いてると言われてる人間だ、得意な事は退魔（妖怪退治）などと、武術、【土】の属性の魔法つーか、術かな？　まぁ、武で俺は戦ってるんだが、最近では術の修行をやっていたが、抜け出した。そこで、ブラブラ一人旅をしていたら、零時に拾われたんだ。

「気を取り直して行くで」
≪応ッ！≫

「＜吼えよ【ピーーー】鬼神の如く！＞」
＜駆けよ【ピーーー】って！！　コラ！！＞

乗り気だっただろ？　トロ〇ベよ？

そんなこんなであっさりと、お嬢様の救出を成功っと♪
さぁて、俺の出番は一応終りだぜ？　後は任せたぞ、フミ……お前視点だ……。

ってか、俺はさっきから何を言ってるんだ？

miya　Arakawa―

「それは本心だろ？」

冷たい声で、俺を睨んでそう言う

確かに世界はオレの精神世界だ…だがな……

「人が代わるわけではない」

「ッ！」

その人その人に変化なんかは無い。

オレの知ってる人間が性格を豹変させるワケじゃない……

例えば…

【ドSなハゲ】⇔【ドMなフサフサ】

とか

【ラーメン好き】⇔【ラーメン嫌い】

とか

―Hu

【優しいウラがある執事】⇔【厳しいウラのない執事】
とか
【狂暴な勇者】⇔【優しい勇者】
とかだ。
特に狂暴な勇者と優しい勇者は知ってるが……。
ああ、ドSなハゲも、ドMなフサフサもちゃんといるか。
兎に角、そんな風に変わるワケじゃないってこと！

「本心なんだろ？　心の底から魅夜が大切なんだろ！！」

少し声音を上げて詰め寄る。
睨むようにして、1歩1歩本物に近づく
鼻先三寸にまで近づく、気持ちとはウラ腹にオレの拳は本物の頬にめり込んでいた。

「なら、なんで傍（そば）に居ねぇんだよ！！！」

オレなんかが居るより、お前がアイツの傍にいるべきなんだ、第一、オレなんか居たって意味が無いんだ、オレなんか必要のないヤツなんだ！

「居れるなら居るさ！！　なにも分からないヤツが！！！」
「ああ、わかんねぇよ」

床に落ちた本物を見下すように見る。
眼光は怒りにも悲しみにも満ちていた。
そして、大粒の水がオレの頬を辿っていた、それに気がつき執事服の袖で拭う仕草をする。
見せれるかっつーの。

「努力はしたか？　最大限抗いたか！！？　違うだろ！？　オレという存在を知って、どこかで“アイツに任せよう”って何処かで考えてたんじゃねぇか！？」
「そんなワケ…！！」

ギリッ。と、歯を食い縛る音が微かに耳に届く。

「そうだろぉが！」
「……お前は自分の事を勘違いしてるぜ？」
「えっ？」

「考えてないか？　何故、お前の中に俺の意思もあるかってよ？　教えてやるよ、テメーの存在理由をな……ただの“道具”でしかないテメーの事をな……！」

【62話】その拳に賭ける意味・その6（前書き）

和也「羞恥心！」
将「羞恥心！」
駿「俺達は～」
＜中略＞
和也「……」
将「……」
駿「……」
【99．99】
（（（えええええぇぇぇぇぇぇ？？？？？？？？？））））

次回、このぐらい微妙に『えええええぇぇぇぇぇぇ？？？？？？？？？』な、お話し前編です。

【62話】その拳に賭ける意味・その6

「オレの……存在理由？」

そういえば、考えた事は無かった。

何故、オレはコイツの代わりとして作られたのか……

そう考えると“あの日”の彼奴（きゃっ）の言葉が蘇った『お前の命日は何時だ？』

と、言い出したヤツの言葉を……。

「お前も聞いただろ？　俺は死んでるんだよ……」

「どーいう事だよ！？」

まだ、理解できねぇ……。

ぐちゃぐちゃだ！！どうなってやがる…！！

「教えたいんだが、時間が無い」

「なんだよ！？　ソレ！！！」

ついつい、転んでしまう。

怒りが凄まじいけど……この展開は予想外だ……。

なんだろう……オレ等ってシリアスが不釣合いなのか…？

オレって……第一……こんな伸ばしってありなのか？

「覚えておけ、俺はお前の中に“閉じ込められてる”んだ」

「えっ？」

意外な言葉におれは惚けるだけだった。

なにが起ったのか理解が不能だった……

コイツに対してオレはなんののか
オレに対してアイツとはなんだか
この２つに惑わされて、何か大きな者の手の上で躍らされてるみたいで……凄く怖かった。

ぅん？

目を覚ますとソコには白い天井があった。
そうだったなぁ……
アレは一種の夢だからだよな……にしても、あの人が出て来た時点で不思議だったじゃないか。流石に何処か侵入したんだって事だよ……ＳＰの詳細なんて厳重に保護されてるしさぁ……

っにしても……ヤケに頭が痛いなぁ……。

ゴロンと、顔を横にすると、眼前に飛び込んできたのは……

柴原　魅夜の寝顔だ。

「ッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？？？？？？？？？？？？？」

凄まじい速度で、後ろに逃げて、更に手を滑らしてしまい、頭からベットに落ちた。
それに伴なって「うきゃ！」と、間抜けな声を出すベットから（頭から）落ちた事で【ガチィン！】と大きな音を発てた……どうか、魅夜が起きませんようにぃぃ。
っと、必死に祈る。そりゃぁ……ねぇ？

「ふにゃぁ？」

随分と可愛らしい起き方ですわね……。
起きないでください……お願いします、神様仏様ぁ～

「すぅぅ～」

ありがとうございます龍二様ぁ～～
神頼みってコレだよね

「どぉしたの？　かずや？」

ＯＨ！！ＮＯ！！　龍二さん！！　なにが楽しいんですかぁ！！？

オレの不幸を嘲笑ってるんですか！！？？
どうして、魅夜を起すの！！！？？　ってか、寝てなさい！！　眠たそうな声をしてるんだから！　大人しく寝さしてあげて！！　お願いします！！　師走……じゃない！　天詩様ァァ……

「な、なんでもない」

と、苦し紛れに言う

「そう……。ふぁ～」

と。大きな欠伸（あくび）をして、再三と夢の世界（ドリームワールド）へと、旅だったああぁ～。今ではあのSなハゲの頭が太陽に……

「ってか、起きてたの！！！！！！？？？？」

う、裏切ったなぁぁぁ！！！！！！　瀬川ぁぁぁぁ！！！！！！！！クソ、〇い恋人でもプレゼントしてやろうと思ったのに…！！魅夜を起しやがって～！！　こうなったらプランSに切り替えてやる……！！！
今まではCで我慢してたが、オレの逆鱗に触れたな…！！
ふふふ……本編に乗り込んでやるからなぁ～。待ってろよぉ？
セガワーズ！！！！！！
あ、森野ちゃんと、世界の女王にぃ…それと、超資産家の坊や……ニュアンスがクリリンみたいな奴と……あれ？　他になにかがあったような……？　ってか、居た感じが……？
って、違うだろ。そうじゃない……本題は……起きたお嬢さんだ。

「か～ず～や～」
「で、出たァ～！！」

妖怪み～よ～だぁ！！　ニュアンスがぬ～○～先生だけど！
ハッ！　だから、名前に鬼があるのか！！　まさか、鬼の○をもってるのか！？
そうなんだろ！？　なぁ！！！？？

オレに残された道はは……数学で求めると……
０％だろう……フフ、言葉が合ってないって？　フフ、聞いてよ

「出たとはなにか！？」
「……気絶してま～す」
「……」

め、目が冷たい。
凄く困る……冷たい目のくせぇに……涙を浮かべられたらオレでも手出しはできない。
逃げられないんだよね……逃げたら逃げたで泣かれると困るし……。
つくづく魅夜に弱いオレってやっぱり……あぁなんだ……。
ちょっと、キツイ……。オレも本物と同じなのか？　イヤ、アイツの方が魅夜馬鹿だ。

「……どーして、ココが分かった」

お、スカートの中丸見え♪
いや～、眼福眼福……。

「へぇ？」
「たまたまじゃないいだろ？　オレが零時の元で働いてるのも知ってるだろ？
更には、お嬢様……いや、瑠依の護衛役ってのも知ってるんだろ？」

なんとなくだったが、反応を見る限りその通りか……
おいおい、そんなに後ろに逃げるなよ……。オレって超能力がやっぱりあるのかな？
フフフ……オリジナルよ、どうやらオレも超能力があるらしいぞ……。

「それに、メイドのハーレムを作ってるって……！！！！！？？？？」

遊び半分で言った言葉に魅夜がピクリと反応して動かなくなった。
そして、後ろにいる守護霊（？）の斉藤さんが鋭い目でオレを見てる……
うん。何かをオレに訴えてる目だよな、アレは……。

「ほぉう……随分と楽しそうなのをツクッテルワネ……」

Ｏｈ！　理性が無くなっちまったか！　魅夜の！
さぁて……全力で逃げますか、勢い良く立ち上がり、ドアを目掛けて猛ダッシュ

「待ちなさい！！」
「ハハハ！！　待てといって待つ阿呆が……【ドン】ぁん？」

ドアを開けて逃げ出そうとした瞬間、ダレかにぶつかった。
小柄でオレより１０ｃｍぐらい小さい少女だ何故か黒いローブを着ている。
うん。オレの中で２件のＨＩＴなんだけど、金髪となったらぁ……

「フフフ、ソレって和也でしょ？」

「れ、レニャしゃん？」

イヤな汗が噴出して来た。
冷や汗だぞ……こりゃあ……！
後ろと前から物凄い殺気を放つ2名の挟み撃ち、オレはこの至上最凶の殺気により
口と足がガクガクと震える、確かに簡単に逃げ切れるけど、オレは足が竦んで動きを封じられる。

「やっぱ……りゅーじの言う通りだぁ☆」
「そうね……」

やっぱりあの人の情報かあああああああああああ！！！

「……重力魔法……」

イヤな旋律（否、戦慄）が脳内を駆け巡る。
そして、前まで受けていた攻撃（重力）よりもイヤな予感がオレを奮い立たせる。

「重力（グラビティ）……」

逃げなくては。例え、重力に贖えなくとも逃げなくてはイケナイこのままでは殺されてしまう……幾らオレでも耐えれるのは９６Ｇだ……。
多分、レナが使おうとしてる重力は……まさかとは思うが……。

「引力（グラビジョン）……」

引力と重力を合わせた……って事はぁ……。
うん、逃がす気も、潰さない気もないな。
って事は……命の危機？　ＨＡＨＡＨＡ　読者様、全７７話と、短い間でしたが応援ありがとうございました。
作者がなにか叫んでますけどきこえませーん

「フミ！！」
「あきゅ！」

おお！　ミヤがレナを倒した……
ってか、コレってお札？　何故にこんなものを？
それより、キミが神様に見えてきましたぁ～
どうやら、天詩様とミヤ様だけが頼りだ……龍二様と瀬川様は拝んではいけないみたいだ。
天敵なのだ……ふふふ、いくら龍二さんだろぉが、サーチ＆デスだ。

その時は昔に戻れ……ヤツを殺す……

＜ご、御主人様？　お、お顔が恐ろしいです＞
「……昔むか～し（以下略・勇者以上魔王以上の４月８日の感想参照）＞
＜ゴメンナサイ、もう二度と口答えいたしません＞

うん。それでよし

「なんで、死神がおるん？」
「？　ミヤ？」
「なんでも無い、速く帰ろぉか……なんや、イヤな予感がしてきた」
「？　おう」

悶える２人は無視……ん？　魅夜は何故気絶をしてるんだ？
まぁ、気にしたら駄目だよな。

「何してるの？　レナ？」
「ううぅ～」
「……お札？」

ちぃ！　やっぱり全員来てたか……。
あまりこいつ等に顔を合わせるわけにはいかないし……。
やっぱり、さっさと逃げますか、っにしても……ミヤって何者なんだろう。
アイツは……何で古都宮（ココ）に居るのだろう？
アイツはその拳になにを賭けて……思って、闘っているのだろう？

でも、まずは…自分の事を考えてた。

別にオレは自分がレプリカだからって……あの街から逃げ出したワケじゃないんだ
ただ、自分に賭けてた拳が……オレのじゃなくて“俺の”拳に賭けていた拳だからだ
俺は大切な人を守るタメに拳を振るうていた……相手が上級生だろうが関係無く、大切な人を拳で守ってきた。オレの拳は彼女を守るモノだったんだ、ソレを、オレが変えたんだ……。
荒れてた、このオレ自身が、暴力に拳を振るっていた、だから……自分で壊したもう一人の自分が賭けていた拳の意味を……。その拳に賭ける意味を粉々に砕いた。
オレの記憶ではない“俺の記憶”
そこに、微かにある……夏の記憶

「おじいちゃん？　どうして、ボクはよわいのかな？」
「和坊、お主は強いぞ？　お主にはその拳に大切な物を賭けておろう？」
「たいせつなモノ？」
「ああ、和坊は守るモノがおるじゃろう？」
「……／／／／／／」
「それを守る事が、和坊の本当の拳じゃよ」
「う、うん！」
「さぁて、お母さんにはナイショでパフェでも食いに行くか」

「うん♪」
「でものぅ、ソレは暴力や喧嘩に使う拳ではなく心(ココ)の拳じゃよ」
「しんぞう？」
「心じゃ……」
「でも、ソコはしんぞうだよ？」
「細かいのぅ……。まぁ、簡単に言うと、人を守るという事はのぉ…力は必要ではない。力は守るのには必要ないんじゃよ。　守るという事はその人が大切だからだ、大切な人を守るにはその分、力が要る。それは違うんじゃ……。守るという事は心意気じゃ。『何がどーなろうと、コイツ等は俺が守る』その心意気で大分違うもんじゃよ？　そして、自分がその人を守るって意地。断固たる意地、何にも屈する事のない意地。それが懸命に守るって事なんじゃよ。実力は……関係のぉ、大事なのは『心』。大事な人を何がなんだろうと守り抜くって『心意気』。屈する事のない『意地』じゃ……。大切な人が多い程……この3つが強くないとイケない。力とは……孤独な奴が生き抜く為の物なんじゃよ。だから、和坊は弱くない…強いんじゃよ、誰よりも」
「？」
「ははは、そうか。まだ難しかったな」

　オレは、俺の賭けていた大切な物を破壊してしまった。
ヤツの怒りは、それだけじゃないんだ……他にもあるんだ……ソレほど、オレはアイツの大切にしてきたモノを粉々にしてしまったんだ……。
オレがただ……自分が苦しいからって……現実から逃げ出して暴れ

て……。

自分が自分に甘くて逃げてばかりだった……それが……変わらないんだ……。

オレは、恐くて逃げ出したんだ……自分から……自分が犯してしまった罪に……愕然とにげだして、道に迷った末に辿りついた止まり木が、ココだった……でも、自分が恐くて……ちゃんと、折れてしまった翼を確認できなかった。自分の羽とい罪を全て見てしまうから……。

ボロボロになった鳥は、ひたすら羽を…翼をみないように……ひたすらに前ばかりを見る……目の前にある事しかできなくて、横にある間近な存在も認識してるが、見る事ができない。惨めな存在……。

それが、オレ……雨宮和也……レプリカなんだ。

ただ、ビクビクと、目の前の事しかできない。小鳥が……オレなんだ。

強がってるけど……オレはなにより弱い存在なんだ……。

存在したらイケナイ存在なんだ。

存在自体が……罪なんだ……。

オレという存在は……。

「フミ？　どうしたんよ？　ボーっとしよって？」
「関西弁？」
そういえば、さっきから関西弁だったよな？
違和感の正体はそれか？　ぅん　言って無かったって？　ＨＡＨＡＨＡ気にするなよ♪
「あぁ……京都出身なんだよ……標準語使ってるつもりだが、咄嗟の場合とか気を抜けばたまに出るんだ……」
「ほぉ～」
うし。上手く話題を反らしたか……。
「……さぁて、オレを呼び寄せてなんなんだ？」
「……気がついたか……」
そりゃあね……。オレをダレだと思ってるんだ？
荒川文也様だぜ？　天下無敵の【魔槍（グングニル）】だぜぃ？
「……龍聖鈴……」
「たしかぁ……秘宝だったな？」
そう言えば、【龍】のキーワードで調べた時に出て来たなァ～。
ん？　なんでかって？　知ってる人は知ってるよね？
そうそう、たしか…古都宮の秘宝だって――
「あっ！」
「そうだ」

……なにが言いたいんだ？

「は、関係ないんだ」

「オイィ！！」

ケロッと言い放った馬鹿には罰を与える必要があるらしい。

ってか、オレの拳が頬にめり込んでるんだが……相変わらず理性や本能より速い拳だ……

イヤ、悪いのはミヤだ。

「お嬢様がもう帰るってよ」

「あぁ。そうか……」

Ｏｈ！　めっさシンプルやん！

そりゃあ、８時だから、寝る時間だよな……お嬢様は…

腕時計で時刻を確認してから、再三と走り始める……お嬢様の事だ……もしかしたら……

「それより……先程まであったリムジンがないとは……如何いう状況なのだろう？」

「されを、置いてきぼりと言う」

「その心は？」

「お嬢様の馬鹿ぁぁぁ

【62話】その拳に賭ける意味・その6（後書き）

では、次回の新キャラ予告

神路蒼譜（かみじ そうふ）
蒼髪蒼眼の美男子。

李・明林（リー メイリン）
メイドの1人。太極拳の達人（マスター）

凪凛（なぎりん）
瑠依の親友

【63話】麻雀とゲーセンで【前編】

ま、負けた……？
馬鹿な？　このオレが……！？　そんな……
コイツ……強ぇえ！

「ミヤ…」
「ああ。本格的にヤバイぞ」

【ガシャー】

「さぁ、続きをやりましょう」
「メイ♪　また一人勝ちだね♪」

山を崩したのは、メイドの李（リー）・明林（メイリン）という、中国人だ
何故、メイドをしているのかわから無い程強い奴だ……まさか、【コレ】も強いなんて…
想像もしてなかった！

「クソ！　もう1回だぁぁぁああ！！」
「了解」

メイリンがそう言うと、ミヤもお嬢様も崩す。
ええぇい、今度こそ勝ってやる！　諦めて堪るか！！

そして、散らばった物を、かき混ぜる。
ココまでは、大丈夫だ。メイリンに動きはない……さぁて、どうでる？
“摘み込み”か？　それとも……

「……私のは摘み込んでませんよ？」
「っ！」

ミヤ、表情を見せたらイケナイ。
この女はただ者じゃないんだ……コイツ、玄人（バイニン）だ
ふふふ、久しぶりに燃えて来たぜ。
あ？　読者様？　何をしてるかだって？
分かった人は多いと思うけど“麻雀”だよ？
ヒマだったんで、適当に誘って麻雀をやってたんですよぉ～

横に17個の牌を2列作り、台の凸った所に2列をつけて前列の17個を前にだし、後ろの17個の牌の先を小指で支えて、他の指で整えて綺麗に重ねる。
これが、オレの山だ……先程、親（ミヤ）が聴牌（テンパイ）しなかったから、今度はミヤが南家だよな？　って事はぁ……メイリンが親（東家）か？

サイコロを振って、出た目は【2】【6】ってことで、足すと【10】だから、親から数えたら南家だ……ミヤの所ね。
6つ開けて左から2つ目を開くと【ドラ】である五索子（ウーソウ）が露（あらわ）となる。
……ええっと、もう少し落ちついたらルールの説明したるからまちい。
東家である、メイリンから配牌をする。上下横ニ列（計四個）を取って、次はミヤが同じ容量で四つとる。そんで、オレ、お嬢様と同じ容量で取って行く。3、4回周ったところで、1牌づつ取って行き、東家であるメイリンが、最後の1牌を取る……しかし、何も捨てようとしない。

なにを……？

「あれ？」

きょとんと、した声をお嬢様が上げる。

なにを？　メイリンを睨むが、奴は笑顔だった……何をしたんだ？

「コレって……」

そう言いながら、自分の持ち手を崩す。

【一萬（イーワン）（漢字忘れた…）】【九萬（キューワン）】【一索（イーソウ）】【九索（キューソウ）】【一筒（イーピン）】【九筒（キューピン）】【東】【南】【西】【北】【白】【白】【發】【中】……だ。

えっ？

これは……

「國士無双（こくしむそう）だっけ？」

「「にゃあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」」

オレとミヤは絶望の雄叫びを挙げる。

て、点棒が無くなったぁぁぁぁぁ！！！！！

「め！　メイリン！　摘み込みは」

「待て！　アイツが言ったのは『私のは摘み込んでませんよ？』だコイツは……お前とお嬢様のクセを見ぬいて数億……数百骸通りの山を築いたんだ」

ミヤはメイリンを睨むだけで何も発っせない……。

オレは逆に恐怖を覚えて言葉すら発することが出来なかった。

で、では。
飛焔と、和也（戻ってるよ…）の麻雀講座ぁ～。
（ぱちぱちぱち）

飛焔「お久しぶりです、飛んで焔（ひ）に居る北海道の作者。飛焔です」
文也「どぉも、荒川文也（仮）です」
飛焔「今回は大変グチャグチャながらも、麻雀のお話しを書かせていただきます」
文也「出来るだけ分かりやすく説明する」
飛焔「取り合えず、まずはルールかな？」
文也「では、まず基本のルールをどうぞ！」

麻雀は基本的には４人で行い、３４種類１３６個の牌の組み合わせで得点を争う遊びです
牌（パイ）の種類はに大きく分けて数牌と字牌の２種類があります。また数牌には萬子（マンズ）、索子（ソーズ）、筒子（ピンズ）の３種類があり、字牌には風牌（かぜはい）と三元牌（さんげんぱい）の２種類があります。
牌の種類は

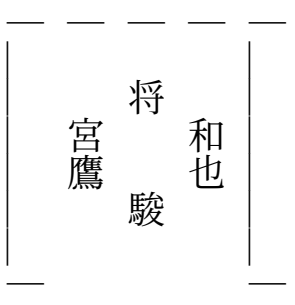
【萬子】一萬、二萬、三萬、四萬、伍萬、六萬、七萬、八萬、九萬
【索子】一索、二索、三索、四索、伍索、六索、七索、八索、九索
【筒子】一筒、二筒、三筒、四筒、伍筒、六筒、七筒、八筒、九筒
【風牌】東、南、西、北
【三元牌】白、發、中

と、なっています。

飛焔「これが、基礎知識です」
文也「次はぁ～場所について行きますか」

はじめに４人の座る場所を決めます。ここでは【つかみ取り】って言う一番簡単な方法を紹介します。
東、南、西、北の四個の牌を裏返して４人がそれぞれの牌をつかみます。和也が北、将が東、駿が西、宮鷹が南を引いた場合、まず、将が好きな場所に座ります。次に南を引いた宮鷹が将の右隣に、西を引いた駿が将の向いに、北を引いた和也が将の左隣に座ります。
また、将のことを仮仮東と呼びます。

自分から見て右にいる人を下家（シモチャ）、向いにいる人を対面（トイメン）、左にいる人を上家（カミチャ）といいます。また、自分以外の人を他家（ターチャ）といいます



と、いう感じになります（ケータイの読者様。スミマセンが、読みにくいでしょうが、ＰＣで見やすく仕上げてます。読みにくく誠に申し訳ありません）

っと、いう事で和也から見ると

将→下家
駿→上家
宮鷹→対面

に、なります。

飛焔「続きまして、親選びです」

座る場所が決まったら、次に親を決めます。
まず仮仮東の人（場所決めのときに東を引いた人、将のこと）がサイコロを2つ振ります。出た目の合計が【5】【9】なら東家の人が仮東になります。同様に【2】【6】【10】なら南家の人、【3】【7】【11】ならば西家の人、【4】【8】【12】ならば北家の人が仮東になります。
次に仮東の人がサイコロを2つ振ります。出た目が【5】【9】なら東家の人が東家になります。同様に【2】【6】【10】なら南家、【3】【7】【11】ならば西家、【4】【8】【12】ならば北家が東家になります。
このとき東家だった人がはじめの“親”となります。

飛焔「着いて来ていただけるでしょうか（汗）」
文也「まぁ、分からないならコイツが悪い」
飛焔「丁寧に説明してるんだけどね？」
文也「説明力無いがな、ルールブックを纏めてるだけだ」
飛焔「わかりやすくやってるだろ！」
文也「余計に分かり難くなったり？」
飛焔「ぐぅ……。次は配牌につきましてです」

東家がサイコロを2つ振ります。出た目が【5】【9】なら東家の牌山から。同様に【2】【6】【10】なら南家、【3】【7】【11】ならば西家、【4】【8】【12】ならば北家の牌山から

配牌を持ってきます。
たとえば、出た目が6ならばまず南家の山から下のように持って行きます。東と書いてあるのが東家が持ってくる牌です。同様に南は南家、西は西家、北は北家が持ってくる牌です。南家の山から牌を取り終えたら、東家の山からも同様に持ってきます。これで東家は１４個の牌、南家、西家、北家はそれぞれ１３個の牌が配られたことになります。これを配牌と言います。
なぜ東家だけが１４牌なのかといえば配牌を配り終えたら、本来なら東家がまず1牌ツモってきますが、面倒なので配牌のときに、はじめのツモ牌をもってくることになっています。
この場合、南家の山の右端から6列（１２牌）と西家の山の左端の1列（２牌）は王牌と呼ばれ、基本的にはツモれません。
また、ドラと書いた牌はドラ表示牌と言いますが、これを裏返して全員に見えるようにします。

【南家】　　↑
南東東北北西西南南東東〇〇ド〇〇〇
南東東北北西西南南東東〇〇〇〇〇〇

【東家】
〇東西東北北西西南南東東北北西西南
〇〇北南北北西西南南東東北北西西南

※
〇・取らない牌
ド・ドラの略

こんな感じになります。

飛焔「流れは…あがり（流局）までの流れは」

まず東家が配牌１４牌の中から不要だと思う１牌を場に捨てます。次に南家が１牌取り、不要牌を１牌、場に捨てます。西家、北家も同様に１牌取って行き、１牌場に捨てます。これを誰かがあがるか流局するまで続けます。

親のチェンジは、東家（親）があがるか、聴牌していなければ、南家が次の親（東家）になります。同様に西家は南家に、北家は西家に、東家は北家になります。

全員に１回親が回るまでを東場、親が２回回るまでを南場といいます。東場、南場が終わった時点で１ゲームの終了となります。これを半荘（ハンチャン）または、東南戦といいます。
東南戦で行うのが普通ですが、東場しか行わない東風戦というのもあります。これは東場だけで１ゲームが終了してしまいます。

これが、大まかな流れです

飛焔「説明が長いな…」
文也「全部書いたら超大作になってしまうな」
飛焔「仕方ないから、他のを省いて進めましょうか。【ポン】や【カン】を抜かします」
文也「次は基本的なあがり方！」

あがりとは基本的には４面子・１雀頭ができた状態のことをいいます。
基本的にというのは、七対子（チートイツ）、国士無双（コクシムソウ）（上記参照）などの特殊な役（ヤク）があるためです。
あがりの状態は下の図のようになります。

【一萬】【一萬】【三萬】【四萬】【伍萬】【三索】【四索】【伍索】【七筒】【七筒】【七筒】【西】【西】【西】

※

【頭】上記の一萬など、同じ牌が2つある時に“頭”となる。
これが無ければあがれない

他にも聴牌（テンパイ）というあがりも、あります。
テンパイはあがるのに牌が1つ足らない状況です。
上記のあがりの3つ纏まりから、【三索】を抜かすとします、その状態で取る牌がなくなると、聴牌になり点数が僅かながら入ります。

次に【ロン】とは…
他家の捨て牌で上がることを言います。そのときは「ロン」と発声します

最後に【ツモ】は…
自分のツモった牌で上がることを言います。そのときは「ツモ」と発声します

飛焔「こんな感じかな？」
文也「でも、やっぱり、“鳴き”も大事だぜ？」
飛焔「だな、やるか」

ってな、事でやっぱり、“鳴き”をお教えします。
鳴きとは、鳴きには【チー】【ポン】【カン】の3つがあります。
それぞれ、自分の欲しい牌を他の人が捨てた場合、その牌を自分で

使うことができます。ただし、チー、ポン、カンした面子は、捨てたり、他の牌と組み合せて使うことができなくなります。

チーとは、自分の欲しい牌を上家が捨てたときに、その牌を使って順子をつくることをいいます。チーをしたい場合は、「チー」と発声して、出来た順子を卓の右側におきます。これは全員が見えるようにします。そして、不要牌を一牌切り、他家から鳴きが入らなければ、下家のツモ番となります。また、対面、下家の捨て牌をチーすることはできません。ポン、カンした人がいた場合はポン、カンが優先されます。

ポンは、自分の欲しい牌を他家が捨てたときに、その牌を使って刻子をつくることをいいます。ポンをしたい場合は、「ポン」と発声して、出来た刻子を卓の右側におきます。これは全員が見えるようにします。そして、不要牌を一牌切り、他家から鳴きが入らなければ、下家のツモ番となります。ポンはチーとは違い、上家、対面、下家のいずれの捨て牌でも鳴くことができます。

カンには2種類あります、自分の手牌だけカン子をつくることを暗カンといい、他家の捨て牌を使ってカン子をつくることを明カンといいます。また、明カンには2種類あり、暗刻から鳴いて槓子をつくることを大明カンといい、明刻に明刻と同じ牌を加えてカン子をつくることを加カンといいます。
カンをしたい場合は、「カン」と発声して、出来た槓子を卓の右側におきます。これは全員が見えるようにします。

暗カンは自分の手牌の中に同一牌が4牌あり、カン子として使いたい場合は「カン」と発声して、カン子を卓の右側におきます。これは全員が見えるようにします。

そして、嶺上牌（リンシャンハイ）をツモり、カンドラをめくり、不要牌を一牌切ります。そのとき、他家から鳴きが入らなければ、下家のツモ番となります。

ただし、暗カンは鳴いたことにはなりません。暗刻と同様の扱いになります。

大明カンとは自分の欲しい牌を他家が捨てたときに、その牌を使ってカン子をつくることをいいます。大明カンをしたい場合は、「カン」と発声して、出来たカン子を卓の右側におきます。これは全員が見えるようにします。

そして、嶺上牌をツモり、カンドラをめくり、不要牌を一牌切ります。そのとき、他家から鳴きが入らなければ、下家のツモ番となります。

加カンとはすでに明刻をカン子にすることをいいます。加カンをしたい場合は、「カン」と発声して、明刻に一牌加えます。これも全員が見えるようにします。

そして、嶺上牌をツモり、カンドラをめくり、不要牌を一牌切ります。そのとき、他家から鳴きが入らなければ、下家のツモ番となります。

こんな感じでしょうか？

飛焔「ううぅ～。長々とスミマセンでした」

文也「まぁ、こんなのを見るより、実際にやって見たら速い」

飛焔「ううぅ…他のあがりとかは自分で調べてください」

『では、飛焔と文也で、麻雀のルールでした！！』

（パチパチパチ）

「フミ？」

「！？　あ、あぁ？　なんでもない」

暫らく、あちらの世界に居たせいか？

ミヤが、心配そうな顔で見つめていた……ううぅ……ミヤに心配されるとは……。

あれ？　そう言えば……

「メイリンは？」

「仕事だってよ」

なに！？　勝ち逃げか！？

それだけはゆるせんぞ！？

例え、一千万詰まれようが土下座しようが、逆立ちをして屋敷１周だろうが許さんぞ！！

万死に値する！！　ってか、どんな事だろうがゆるせん！

「お排除（そうじ）だってよ」

「？」

「お前の連れが侵入してきた」

ナイス！　勝ち逃げをゆるしましょう！

ん？　『どんな事だろうがゆるせん！』って言ったって？　ＨＡＨＡ

気にしたら、ダメ～～～～☆

「そんじゃぁ……どうします？　オレ等はヒマですが？」
「あ！　それなら、ゲームセンター行こう！」

ゲームセンターって……一瞬、何か分からなかったぞ？
普通に略してゲーセンで良いだろぅが？　なんだ？　人を馬鹿にしてるのか？
なんでかって？　瑠依自体がムカツクから？
ＨＡＨＡＨＡ　オレはただの使用人じゃないんだ！　主すら虐める使用人なんだよ！
オレって、鳥かごに入らない鳥……【烏（カラス）】なんでね♪　光物（お金）に目がなくて嫌われ者♪　それが、オレ…荒川文也……イヤ、雨宮和也レプリカだ
※モテモテなのは本人に自覚の一片たりともありません。

「そだな、久しぶりに。お小遣いを貰いにぃ――げふげふ」
「？」
「イヤイヤ、お金持ちのひ弱なガキじゃなくて、ヤンキーのぉ――げふげふ」
「どうしたの？　宮鷹に文也？」

一番上はミヤだ。
お嬢様はやはりなんの事かわからず、釣られてオレが口走ってしまう。
しかし、気がつかないお嬢様……世間離れのお嬢様はコレだから……。

「イヤ、じゃあ行きましょうか」
「うん」

執事服（古都宮家専用）の上着を掛けていた椅子から立ち上がる。

とっていた、ボタンをつけて、ネクタイを馴れた手つきで締める、
ミヤも同様に馴れた手つきで絞める

この執事服（スーツ）は古都宮の者を知らせる物で、オレも微かに記憶してるほど有名だった。
金色の龍が刺繍（ししゅう）されてる。本来は紅い龍なんだが……まぁ、金持ちだからかな？
ってか、純金って……。

どうして、龍なのか？　金持ちなら【ユニコーン】とか【ペガサス】のイメージが強いオレには理解しがたい物だった。

どうやら、龍と何かしら凄く昔に因縁（？）……借りでもあったのだろうか？
そんな事を知る由も無かった……。ってか、あんまし興味がないし…

それより、さっきから、何を喚いてるんだ？
作者は？　なになに～

【僕等の】【説明の】【意味が】【全然無い！！】
……そうだね（泣）
長々と書いたのに……同情するよ。今度、やろうぜ？　麻雀のお話しを

【おう…！】

さぁて、作者も慰め終わった……はぁ～。この作者ウゼーしめんどくせぇ
＜ご主人様？　地がでてますよ？＞
「昔むか～＜うわぁぁあ！！！　ゴメンナサイ！！＞テメー、人

の言葉を遮るなよ」
＜ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイマジスミマセン＞
ああぁ、この鎌を弄るのあきねぇ～♪♪
「どうした？　行くぞ？　フミィ～♪」
「あ？　あぁ」
「お嬢様のお友達も合流する、合流先はゲーセンの中でだ」
「あいよ」
ミヤの情報を頭の片隅に記憶させて、屋敷からお嬢様の後を追いかける。
……だって、迷子になっちゃうもん。
外に出て、2、3回深呼吸する。内陸とは違って北海道（ココ）の空気は格段に旨かった。
そうそう、オレは北海道に来たんだよね♪　ヤーさんの所でも言ったような気がしたが、もう1度念の為に覚えててくださいね？　どうでも良いんだけど…。
「「ッ！！」」
一瞬、凄まじい殺気がオレを……オレ等を襲った。

ミヤもこの殺気に冷や汗を大量に流してる……アイコンタクトを取り、オレが一旦残る事に決めた、オレ等はどんな状態であろうが相談できるようにアイコンタクトの合図を決めておいた。

「お嬢様、忘れ物をしましたので、取って参ります、お先に行って下さいませ」

「？　うん。わかった。三土（みづち）、出して」

「畏まりました、お嬢様」

と、瑠依は運転手に言い、車を走らせた。

オレは見えなくなるまで見送ったところで、殺気を放っていた野郎が居る場所に駆けた。

３ｍほど、ある柵（塀）を飛び越え、歩道に居る。蒼髪蒼眼の１８歳くらいの男がいた。

長身でケツまで伸びる蒼い髪は幻想的でついつい見惚れる、そして、目だったのが蒼穹（空）の色の眼であった、それが一際恐ろしかった、しかし、零時クラスの超美男子だ。

左右のポケットに両手を突っ込んでいて……ただ、立ったままであった。

「何者だ？」

睨みつけて、蒼髪蒼眼の野郎に向って叫ぶ

「ボク？　ボクは…」

高めの女性みたいな声で彼は言う。

その言葉をオレは忘れる事がなかった。

「神路蒼譜（かみじそうふ）……。“キミと同じ人間”です♪」

同じ？　ハァん！　そんなにレプリカ人間が居たら……

「ボクは、最凶の殺し屋と呼ばれている“神路紅夜（かみじこうや）”の実験ナンバー００１
……レプリカ人間……“アルティメットレプリカ”の完成体…雨宮和也の“アルティメットレプリカ”のキミと同じさ」

「あるてぃめっと……？　レプリカ！？」

クスクスと、男は笑った。
そして、先程より3割増しの殺意の眼光がオレを睨みつけて来る、
それには、黒い感情が圧（の）し掛かってきた。

「職業も似てるよ？　ボクはねぇ……殺し屋ですよ。半死神の雨宮和也レプリカさん？」

満面の笑顔で彼はそう言った。
不気味とかではなく……とても純真で真っ直ぐな笑顔であった。
逆に……純粋すぎて……逆に恐ろしかった。

それに、オレが死神と人間のハーフと言ったこの男……
蒼譜っと言っただろうか？　本当に“ただの”殺し屋なのか？
まるで……悪魔だ。

「魂を刈る死神。人を殺すボク……対照的ですが…似てますよな？」
「だからなんだ！？」

「いえ、ボクは貴方にボクと同じ完璧な偽人間（レプリカ）のキミに会いたかっただけですよ」

「……オレは、できるだけ会いたくなかったな……」

コイツ……よく、表情1つ1つ変えずに淡々と言えるな……。

神路蒼譜……何者だ？

「それは、残念」

笑顔をつくり、にこやかな表情を見せる。

だけど……それは、オレの恐怖の対象になっていた……。

【コイツは、危険ダ逃ゲロ】

本能がなんどもオレに言いかける。

【死ニタイノカ？　早ク逃ゲルンダ】

忠告は最終警告（ターニングポイント）を当に通り越してレッドゾーンに入った。

【アイツニハ、勝テナイ。戦ウノハ無謀ダ。避ケルンダ】

逃げ様にも、オレは動けない。足が、接着剤で止められたみたいに動かない。

【死ヌ死ヌ死ヌ死ヌ死ヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌ殺サレテシマウ】

うるさい！！

「ああ、残念だったな」

「じゃあ、また何（いず）れ」

蒼譜はオレの横を優雅に歩いて言った。それも、安易に……。

オレの最終戦闘態勢状態の殺気も簡単に……トンでもない自信……

それは、違う。ヤツは……“この程度の殺気”では同様させれないのだ……

常任なら近くに居るだけで即気絶してしまう程だ、それを、安易にヤツは横を通って行った。

「ッ！」

振り返ると、既にアイツ……神路蒼譜の姿は影一つとして無くなっていた。
始めて、本当の恐怖を知った時だった。オレの中に“神路蒼譜”の名は刻み込まれた

―Ｓｙｕｕ

ｉｔｉ　Ｍｉｙａｔａｋａ―

フミ……大丈夫やろか？
あまり、心配しすぎるのもいかん、フミは十二分に強い…
オレが心配するまでもなく……。

「瑠依ちゃん。待たせてゴメンね」

トコトコと、此方に駆けよって来たのは楕円（だえん）系のメガネをした童顔の少女、
服装も普通のスカートとＴシャツという、最近の女の子では珍しい服装だ、お洒落には興味はないのか？
まぁ、ゲーセンだし、良いんだがな……。

「凛！　大丈夫だよ。私を待たせてる馬鹿な使用人も居るんだから」

「？　あぁ、いつも話しにでてくる文也さん？　じゃあ、あちらの方が、相方のやられる方の……／／／／／／」

何故赤面!？　お嬢様!？　彼女に何を吹き込んだんですか!？ちょっと!！　ココにフミが居なくて正解だったぞ!？

「み、宮鷹秀一です、好みのタイプは、ウチのメイドの綾芽（あやめ）さんみたいにおしとやかで、優しくて、巨乳です」

うわぁ。退かないで！　読者様!！

「あ、はい。此方こそ……。凪凛（なぎりん）と言いましゅ！　こ、こここ好みののの、の、ののののたたたたたたた、タイプはぁあああ…／／／／／／／／／／／／」

「ハハハ、言わなくても良いよ」

「あ、私は…」

「お嬢様？　お嬢様の事は我等知っております」

読者様に紹介してないけどね♪

ＨＡＨＡＨＡ　お嬢様もなかなかボインなんですよ？

可愛い系なんですがぁ……世に言うツンデレなんですね……

は！　だから、退かないでぇぇ!！　読者様アアアア

【６４話】麻雀とゲーセンで【後編】（前書き）

左手だけじゃ辛いっすね

【６４話】麻雀とゲーセンで【後編】

……ゴメン、助けれないや。諦めてくれ……。
オレにはキミを助ける程の力はないんだ……。
それに、資金ってものがありやがるんだ……。
そんな目で見られても困る、君等“２人”だけは救って貰えるだろうけど……。
この魔王は救って貰えそうにないな……。

そしてなんだ？　この視線は？　オレを試してるのか？
フッ…残念だが違うな。オレは、無視する。

「どうしたの？」
「いえ、勇者と魔王２人の影がありました物で……」

フミに頼ってくれ……俺では人をＵＦＯキャッチャーでとる自信が無いんだ
そんな目で見ないでくれ……オレは無力な人間なんだ……

『お母さん？　ＵＦＯキャッチャーの中に人が入ってるよ？』
『しっ。関らないのよ』

……後ろから聞こえる会話が悲惨だ……。
可哀想に……。じゃあ、本当にごめんね……オレの無力を呪うよ。
実質、恐いな……どうやって、入れたんだら？
しかも、見事に人形に埋まってるし……人をあのアームで獲れってのは不可能だ。
俺……宮鷹秀一は陰陽師（おんみょうじ）だけど……人間なんだ。

「凪様、あまり“お兄様”には近づかないでくださいね。勿論、お嬢様も」
「？　お兄ちゃんに？」
お嬢様が首を傾げて疑問に思った事を口にした。
勿論、馬鹿なお嬢様のこの反応はわかり切っていた。
ってか……単純すぎだ……馬鹿はこれだから難儀だ……。
「いえいえ、知らない3人以上のお兄さん達です」
「は～い」
「はい」
と、三者三様の声を挙げる。
因みに、間延びした声は瑠依お嬢様。しっかりした声でいったのは赤面症の少女……
確かぁ……凪凛さんだ。
この子はしっかり者だ。
大丈夫だろう……多分……イヤ、最大限の確立を想定しないと……。
まさかとは……思うがぁ――
「あ、すいません」
「いってぇな……骨折しちゃったじゃない」
「わ、こりゃあ、ひでぇ」
お嬢様!?　言った傍から!?
しかも、古いよォ!!　そのネタ!!
「あ、それならこの程度でどうでしょう!!」

財布の中から数十枚福沢諭吉を取り出す。
あ、ヤンキー顔面蒼白じゃん。あ、謝った…それぐらい予想外だったんだ
こうして見るとなんか可哀想だな……。

さぁてっと……

「お嬢様、少しトイレに行ってまいります」
「ん？　私達適当にまわってるわよ」
「了承いたしました」
「じゃあ、行こう！　凪」
「う、うん」

お嬢様に手を退かれて凪さんは行った。
まぁ、お嬢様だから大丈夫か……多分、あれは……分かってっての行動だな。
呆れてたし……。
俺でも、ありゃあ……金を返して逃げ出すな。
うん。確実にね……。

「静香、隠れずに出て来い」

虚空を扇ぎ、そう答えると背後から女性が現れる……まっぁ、忍者ってのはこれだから嫌いなんだよ
第一、俺のプライバシーってのはなんだよ？

「頭首、捜しましたよ？」
「ウソこかんかい。俺がヤーさんとお遊戯してる時から居ただろ？」

俺が気がつかないとでも思ったのか？
そんなワケがあるはずが……ない……だろ？
イヤ、しばらくしてから、文也が「付けられてるぞ？」って言われたから気がついたんんじゃないぞ！？
本当なんだから！！　読者様！？　俺を見捨てないでください！！

「……お戻りください」
「戻らない」

俺はそう短く切り捨てる。
なんだ？　その目は！？　目を潤ませたって帰らないんだからね！

『お母さん、あのおにいちゃん、あの美人さんを泣かせてるよ？」
『しっ。ドロドロには関らないの』

違います！！　昼ドラ的展開じゃないです！
しかも、忍者の格好にツッコミを！！　お客さんの冷たい目って俺にかな？
多分、俺なんですよね！！！

「頭首。貴方は四聖の西を守る者として、おらっしゃらないと…」
「俺が居なくても“封印”は解けないよ。四聖の封印は完璧だ」
「……そうですか。でも、何れは貴方は帰って来ます」
「どういうことだ？」

沈黙が俺等の間で流れる、一回重たい唾を呑み込む

「それは…」

静香は沈黙に終止符を打ち。

俺を見据える。その目にはなにが見えてるのだろう？

「爆撃殺」

と、真横から聞えた。その瞬間、静香の足元が爆破した。
うん。天井が綺麗に人型に空いたな…ＨＡＨＡＨＡＨＡ

「大丈夫か？　例のストーカー（？）と話してたみたいだが」

イヤ、口元を綻ばせて言われても困るんだがな…？
ってか、ワザとか？　ワザとだろ！？　なぁ！？

「ああ。ん？　どうした？　なんかテカッてるぞ？」

黒いスーツだから、白っぽい後が目立つし気になって仕方ない。

「あ、あぁ……知り合いの魔王２名と勇者１名がある人２人がＵＦＯキャッチャーの中に居たから、なんとか助けたら怒るなり泣くなり大変だったんだぞ？　特にイニシャルＴ．Ｔのヤツに弄られてた魔王は号泣だったな……」

「イヤ、感想は良いから……ってか、その拳の血は？」

何処と無く想像できるできるけど……なんだけれども……
ついつい、聞いてしまう。フミは１度確認してから、嘆息し、俺に答えを言う

「ウザいから殴った。勿論、此方の作者が書いてるヤツがな」

えええぇぇぇ！！！！？？？？　やっぱりだけどさぁ！！？

やっぱりなんだけど、あの中に入れるよりスゲーキツいぜ！？
いや、どうやって血が手に付くんだ？　コレも、恐いから聞かない方が良いな…

「そしたら、慌てて逃げて行ったなぁ……ふふふ」

その笑みで叩いたのなら俺も逃げ出します。
ダレでも恐いですよ？　悪魔だよ……お前は…。

その拳にはなにが眠ってるんだ？　お前は、暴力に振るう拳じゃないんだと思うんだがな…
不思議で堪らん。

「ま、折角だしなんかやろか」
「おう」

コイツ……何か色々と隠してるな……。ま、振れぬ髪に祟りなぁ

やっべぇ、瀬川のヤロー思い出しちまった……あ、違うよ“髪”じゃなくて“神”だからね

ヤツには単に当たっただけだ。オレには寄り添う木がなくて、彼女みたいに、すぐに木に止まってしまうのが無償に腹が立ったからだ。オレにはできない事をやりきれるんだ、妬んでいた、オレは…道に迷った自分自信を捜し切れてないんだ。

それで……オレは……イヤ、もう考える事はよそう……。

「フミ？」

「！？　な、なんでもない」

クソ…どうしたんだ？

まるで……“アソコ”に帰りたそうじゃないか…！！

“アソコ”にオレは居るべきじゃないんだ。第一、オレなんかは存在しちゃいけない存在で……オレなんか……居たらだめなんだ。オレなんか……居なくなれば良いんだ…！！

「……フミ」

「悪い。一人にさせてくれ」

考えるな…！　オレは……雨宮和也でも、人間でもないんだ……存在しちゃ…いけない存在なんだ……！　ただ、アソコの木が居心地が良かっただけで……オレには居る権利が無い。

何度も……自問自答してるワケにはいかないんだ。

オレなんかに……止まる木はないんだ……帰りたいなんて思うな！オレが……“俺”である責務はあるかも知れない……。だけど……

それは“オレ”じゃないんだ……それは、オレじゃないんだ。

「自分が自分って言えるなら自分だ」何度か、そういう台詞を言って来た。

だけど……オレは“自分”でさえもないんだ……自分で言ってって……馬鹿だ……オレがオレでもねぇのに……人様にそう言って……。

……オレは……

……“俺”に……

何も出来ない。身体を明け渡せって言われるなら既にやっている、オレが俺にできるオレなりの事なんか無い……死ねって言われるなら……頑張って死ぬ。アイツ等に会うなって言われたら全力で魅夜に顔を合わせない。

でも…アイツは何も言わない。ただ、キレた目をただ…オレに突き付けるだけ。

そして、何もオレに枷(かせ)を作る事はなく……睨んでるだけで……なにが言いたいんだ？　なんでも言ってくれよ？　やり通すから……やり切るから

償いを……させてくれ……なにを、やったら良いんだ？

「どーしろってんだよ」

呟いても……仕方ない。

結局はこの身体の主な指揮権はオレにあるんだ。

ただ……指揮権があるだけで……。

ただ……逃げても……意味が無いんだ……。

だから、目的をくれ。ゴールをくれ……オレはもう……疲れたんだ。

生きていても仕方ないんだ。殺してくれ。

平然とした顔はもう無理だ……。

疲れたんだ……オレは……。

生きる事にも、考える事にも……。

オレは……飛んで飛んで飛んで……そのまま朽ちる鳥なんだ……。

どうせ……高卒まで持たない心臓だ……。

このまま……生きていくワケにはいかないんだ……。

理由をくれ……なにをしたら良い！？

オレは……要らない存在なのか？

結局は……そうかよ……。

オレなんか……いなくても良い存在なんだよ……。

「なにが……荒川文也だ……」

名前を変えたとしても……なにも変わることはない……
ただの、逃げてるだけなんだ……。

この…世界から。

自分という……存在から

「ぎゃあああああああああああ！！！！！！！！」

……どうして、この小説はイキナリなんだ？　どれもこれも？
ってか、先程の悲鳴ってお嬢様じゃないか？

悲鳴が合った所に駆け寄ると、ＵＦＯキャッチャーの前で固まるお嬢様。

……また、か？

いやいや、幾らなんでもまた入ってるワケが……。

「どうしました？　お嬢様」

と、言うと。お嬢様はＵＦＯキャッチャーの中を指差す。

すると、中に飛び込んだのは……

首ちょんぱされた、クマの人形（特大）だった。

いったいなにが……？

固まるオレにお嬢様は野口英世をさしだす。なにかぁ？　やってみろと？

￥１００に返金しようとしたが、お嬢様はオレの裾を掴んで首を振る

何かァ？　１０００札でやれと？　１０００円って……

ってな事を考えながらお札をいれる所を捜してたら……。

うん。あった、殴ってやろうと思ったね…この機械と店長（オーナー）を

入れてみると、アーム部分が動き、なんか鋼鉄の銅像があったのでソレを狙い、アームを動かす。

真上に来た所で←と2と書かれたボタンを押す。

【ガシィン！！】

【ゴトン】【コロコロォ…】

現実逃避して良いか？

アームはちゃんと頭部分に掛かったんだ、だが悲劇は起こった。
鉄のアームは掴むのではなく……頭と身体を分かれたんだ。

「……お嬢様、これはですね。罪人や影薄を処刑する機械なのです。
少々高価ではありますがね」

「けいはく？」

どうやら、お嬢様はその言葉を知らないらしい。

「あ、雨宮さん？」

雨宮？　ダレだ？
そう考え振り返ると……確か記憶にあった少女がお嬢様の隣に立っていた。
覚えてるぞ……この赤面症の少女は……
確かぁ――

「凪…凛？　じっちゃんの恩師の孫の」
「は、ひゃい」
「あまみや？」

は！　どう説明しましょうか……。お嬢様が不思議に思っていらしゃる。

「ハンドルネームですよ」
「ふ～ん」
「？」

お嬢様にはバレナイように、口元に人刺し指を口元に当てて「しーっ」のポーズ。
凪も兎に角首を縦に振った、深深と１００。ほど……。
大きいって……。

「どうした？」

駆け付けたミヤは、ＵＦＯキャッチャー内の惨劇をみて黙った。
理解できたらしい……銅像が綺麗に真っ二つになれたんだから……。
第一、名前が【ＳＨＩＮＩＧＡＭＩ】って事で気がつけば良かった……マジで。

「それでは、遊び足りないでしょうが、帰りましょうか」
「そやな。５時は済んだしな…」
「え～」
「は、はい」

うん。わかりやすい反応だからダレが何を言ったかはわかるだろ。

帰りの車内、オレは小声で荒川文也と名のって居るのかを軽く説明した。
ミヤとお嬢様はなにか雑談してるみたいだ……。

寝るか……

そう思い老けてオレは夢の中へと誘われた。

【６４話】麻雀とゲーセンで【後編】（後書き）

次回、和君達から離れます

【６５話】神路蒼譜　運命というモノ１（前書き）

ココからは暫らく個別ルートで進みます。

【６５話】神路蒼譜　運命というモノ１

殺す事に違和感は無かった。昔から、ありんこを見つけてはプチィプチィっと、何度も飽きずに何時間も潰して来た。

そして、昔からボクは“雨宮家”に対する苦言を聞いて育って来た、『蒼譜、お前に厳しいことをしてるかもしれない。だが、お前には我々の果せなかった雨宮の根を絶たせるタメに厳しくさせている。我慢してくれ』っと、親父……ボクのオリジナルである“神路紅夜”に何度も言われていた。幼い時から体術、合気道、柔道、剣道、少林寺拳法、太極拳、ありとあらゆる武術を学んだ。最凶の殺し屋のレプリカっと言う事もあり、どれでも１番の成績をとって行った。しかし、父さんに誉められた記憶は存在しない、１０歳の時からナイフの使い方もも学びもした。ライフルも十分スナイパーとしての技量も手に入れた。ボクはボクなりに努力をしていた。だけど、父さんに誉められる事は……一回たりとも無かった。子供としてはそれがショックで……父さんに頭を撫でられる……ボクは微かにそれを憧れていたいたんだ。どうしたら誉めてくれるのだろうか？　幾度も考えた。

「……時は満ちた……」

それは、簡単な事であった。

単純で、見落としてしまいそうな程、父さんが言っていた言葉。

“雨宮の根を絶つ”それだけの事でしかなかった。

大儀であるコレをやれば誉められる……それが頭の中でいっぱいだった。

だけど……その夢は儚く落ちた。“急性心筋梗塞（きゅうせいしんきんこうそく）”簡単な最後だった……。

「蒼譜、依頼だ」
「部屋に入る時はノックしてください」

部屋に入って来たのは同じ“部隊”に所属している“コードネーム・アトラス”と呼ばれてる巨漢だ、単細胞で部隊1の力持ちである、全力の拳で惑星を簡単に粉砕出来る程だ、冗談と呼ばれてるかもしれない、だけど事実だ。まぁ…スピードは遅いし、馬鹿だからボクの敵じゃない……12秒で殺せる

「ウソつけ、気がついてただろ？」
「単細胞も単細胞なりに考えてるんだね」
「んなッ！！」

こめかみに血管を浮べてボクを睨みつける。
殺気が放たれるが、この程度では怯みはしない、逆にココが“ボクの世界”だというのがわかる。
高慾感に浚われて口が綻ぶ。

「ふふ…」
「！？」

口からついつい毀れてしまう。
親指と人差し指を口元に当てて必死に笑いを堪える。“アトラス”はそれが更に気に入らなかったのだろう。ブチィッ！　っと、音を発ててキレた。
やれやれ……コレだから馬鹿の扱いは疲れるよ……

轟音を発てながら拳は空を掠めた。その拳の拳圧だとでも言うのか？
それで、壁は粉々に砕け散った。拳は壁に触れてさえいない……ま、

今更驚く事じゃないんだけどね…此方の世界じゃね……。ココに一般人は1人……正しく言えば【能力者】は1人を残して全員だ。残りの1人とはココの“姫君”たる“愁羅凛音（しゅうらりんね）”復讐者だ。
そもそもココは……落ちた人間の巣窟だ。

「死にたいなら退け。仕事はブリーフィングルームで聞く」
「わ、わるかったよ…」

そうそう、ボクは“アトラス”の後ろで首筋にナイフを突き付けてるだけだよ？
こんな遅い攻撃を当たるボクじゃないよ……。
世間一般からしたらかなり早いのかもしれない。目測ではF1並の…大体700キロぐらいだろうか？
良くもまぁ、力任せでアソコまでやれるよ……。だけど……遅いんだ、ボク等の世界では。

くだらないなぁ…本当に……

野太いその首を折ってしまいそうな衝動に駆られる。
そんなのも日常茶飯事。ほんの少し首を曲げるだけで殺せる……。
手は既に射程圏内に入り、ナイフは常に首筋に当てて威嚇を怠らない。

「……さっさと出て行かないと首が跳ね飛ぶよ？」

作り笑い……とはイカナイかな？　口元だけ緩めて“アトラス”を見つめるだけだ。
“アトラス”は腰を崩して倒れる……子供じゃあるまいのに

ボクは冷ややかな目を“アトラスに”突きつける。

脅えた顔で大の大人が涙を浮かべていた、それが。

彼の最期。

「蒼譜……」
「どうしたの？　“トール”」

ボクは紅く染まった部屋を1度見直してから親友の“トール”に返す。
彼とは子供の時からの付き合いだ。そして、同じ世界で生きる仲間…友達（あくゆう）とも言う。

「やれやれ、俺が行くべきだったか」

手に持っていたナイフをクルクル回して。指で弾き虚空で舞う“付着”していた血がボクの頬に着いてしまう。僕の目の前にまで落ちてきたナイフを掴み、刃を仕舞う。ああ？　コレはオモチャの

ナイフだよ？
普通ならね…

「行こう。依頼があるんだよね？」
「ああ。おい、ココの掃除をしておいてくれ」

“トール”の呼びかけに数人の毎回ながら白装飾の方々が遣ってくる。
毎回本当にゴメンね。
心のなかでそう言うと。アトラスと思しき巨漢がなんの生物かを断定できないような、腐ったトマトのような顔と恐怖に脅える顔だけは残っていた。ハハ…。あの馬鹿デカさじゃなかったら“アトラス”だって断定できないだろぉな……。フフフ、“死の旋律”に酔い痴れたかな？
よい…あちらの世界を。

「仕事の時間だ“ロキ”」
「イヤだなァ？　そのコードネームは嫌いなんだよ」

満面の笑みでそう答える。

「そうだったな、蒼譜」
「うん」

さぁて…次にボクの旋律を聞くのはダレだい？

ハハ……。

これは、運命なのかもしれない。

ボクとキミがココで出会うのは運命なんだ。

何時かは出会うとは思っていたけど……。

そうだよ。キミとボクは“同じ物”で結ばさってるんだよ…。

ボクは神に感謝しよう。

この大地に…天に、森羅万象の全てに感謝をしよう。

そうだろう？

だって、キミとボクは同じなのだから。

運命の歯車とはよく言うものだ、ちょっとした事で回り始める。

フフ、今回の旋律を聞かせる相手がキミではないのは残念だ。

きっと、もっと相応しい舞台で交えるのだろう。

それが、運命なんだ。

家計の血が繋がる…。

そして、ボクの願望が見える。

何度も願っても適わなかった……あの夢が。

その妨げとなったキミは……。

ボクとの運命に結ばれてるんだよ……。

ねぇ？　雨宮和也レプリカ？

【６５話】神路蒼譜　運命というモノ１（後書き）

カオスな話しですが着いて来て頂けるのならば幸いです。
ボクの現在のメンタル的な部分が危険なのでより一層、カオスになります……。
そろそろ、残酷な描写が加わるかもしれませんのでご了承ください。
現在は実力不足により執筆を止めた。
【勇者様ｏｒ魔王様】
この短編も書いてます。

では、軽く紹介を…
―　どうやら、私は勇者と魔王の血を引いてるらしい。つい２週間前に現れたのは「勇者（魔王）となって僕（俺）の代わりに魔王（勇者）を倒してください！！」そんな言葉を言い出した勇者と魔王が発せられました…私にどうしろと？　―
以上です。ボクの誕生日である６月１９日までにチマチマ書いて行きます。
主人公は初の女性主人公です。

【６６話】レナ・フォード＝ライズ・ハールド　運命というモノ２（前書き）

遅れて申し訳ありません！！
某狩猟ゲームをやっていて、全然進まなかったんですよぉ
ＨＡＨＡＨＡ
いやぁ～、引継ぎではなくて始めから作ってやってるんですよ。
勿論ｋａｚｕｙａでね。最強のランサーにしますよ？
ガンランスとランスの２つを使ってます♪

【66話】レナ・フォード＝ライズ・ハールド　運命というモノ2

私は彼の事実を対して驚きはしなかった、将達が大戦の英雄と呼ばれている
武神【オーディン】
神馬【スレイプニル】
だと言うのは驚いた、特にこの間の抜けた元ピンクのハートマークの後頭部を持つあの影薄のヤローがまさか、私達の大先輩だとは……。

違う違う、和也をどうしたら良いのかっと言う事だ。
家出とは……和也らしいのかもしれない。ホラ、アレだ15で不良…イヤ、12から不良化したのか…
イヤ？　存在自体が不良？
……そう考えていても頭を叩く人はもう居ない。
ソレが事実。嘘偽りなき真っ当な事だ。この事実が夢なら楽だが…辛くも現実。
それが…今の現状である。

逆に、コレに偽りはなにもない。

「……レナ」

ラミアが低い声で私に問い掛ける。
なにも言わなくても……続きの言葉はわかるよ。
言わなくても良い……。

「大丈夫……捜しにはいかない」
「レナ？」

この回答にヴァンが疑問符を挙げる。
そりゃそうか……私ってさっきまであんなにも焦ってたんだよね。
“日常”の崩壊が……。
慣れてたつもりだったんだけどね……ハハ……
ココの居心地は良すぎたんだ、私にとって……
始めて“家”に居場所が…出来たんだもん……
暖かさや…楽しさがいっきに、体感できた……
だから、何時もよりこの場が、居やすくて……
みんなが好きで、毎日が楽しくて、それでいて
この日常が壊れるなんて考えてもいなかった。
考える事なんて、出来ないよ。

「私は……慣れてるから」

“日常”の崩壊に。居場所がなくなることに。

「……」

そんな私をセフィリアはただただ見詰めるだけだった。
何も言わずに何も聞かずに……。まるで何かを試してるみたい私を見詰める。
その目に映っているのはなに？　その目はその目で何を私に問い掛けてるの？

「レナ……」
「ラミア？　私は“マイナス”なんだよ」

私の言葉に、いつも落ちついて平静を保っているセフィリアの眉間に皺(しわ)が寄る

セフィリアは何故か“マイナス”を嫌っている……と、いう噂を聞いた事があるがそれは事実なのだろう……。セフィリアの過去はダレも知らない。

彼女はなにも語らないから。“騎士（デュラハン）”の生き様だとでもいうのか？

後ろを振り返らない。前を向いて突き進む。それが彼女だ。

「レナ！」

私の回答にラミアは怒鳴り声を上げる。

ラミアの紅宝玉（ルビー）色の眼が私にドアップで写り

サラサラの太陽みたいな橙色の髪の毛が揺れもする。

「だって……私の居場所は……」

いつも、唐突に崩れ去る。幾らみんなが“プラス”でも一人“マイナス”がいるだけで

どんなにかけても、数式の答えは（たしか…）“マイナス”にしかならない（はず）

数学が苦手だからわからないけど……多分なんだけど……。

その時、私はどんな答えをダレに望んだのだろうか？

私は多分、“彼”が笑顔で“ココだ”っと言われるのを望んだのだろうか？

なら、前提条件が既にできていない……。

「……」

「……」

「……」

「……」

この空気は苦手だ。だけど、慣れている。
私の居場所は“闇”なんだと始めて気がつく。

“異種”である、この私の居場所など……孤独な闇。それが私が私だといえる世界。
私“だけ”の世界なんだ……。

私は何時だって笑顔だった。
私はピエロだから。
道化師……そう、私は……、死の道化師なのだ……。

「わ、私の能力なら主（マスター）たる和也の動向が掴めますけど？」

和也の命令により、点火ていた蚊取り線香の効果が切れたらしい。
再びこの妖精が活動を開始した。ずっと寝ていればよかったのに……

「マスター？　何時の間に？」
「えっと…？　契約とかは？」

上から、ラミア、ヴァンの質問がすぐさま挙がる。
うん。好奇心旺盛だこと…♪
※好奇心旺盛なのは彼方です
この2人は本当にお似合いですわね……。
そうそう、この2人はウブながら端から見るとラヴラヴだ……。付合ってしまえば良いのに…。

「えっと。手紙がありましたよね？」

不幸の手紙の事だろうか？

「それって、あの手紙のこと？」

妖精の言葉にヴァンが返す。

っと、してもみんな分かってるよね？

ヴァンも本当に知りたがりというか好奇心旺盛というか……

※彼方が1番好奇心旺盛です

「うん。アレは呪術式契約書（コントラクトフォルン）って私達は言ってるの」

私の頭の上にちょこんと座って、何かしら説明を始めようとする。

うん。短い出番をしっかりと輝いてね……。

「うわぁ…」

ラミアが私をみて何を言ったのだろうか？

凄くげんなりした声が聞えてきたような…？

「簡単に言うと“詐欺”かな？」

「鷺？」

私が聞き直すと、冷たい目が四方八方から飛び交う。

ゴメンナサイ、マジでスミマセン。作者がカンペを私の脳内で見せるんです。

「えっと。契約者候補（コントラクター）には呪術式契約書の“ノルマ”が架せられるんです。

私の場合ならば、【午後、４時４４分までに、契約書（ふこうのてがみ）を知っている人物２名に送れ】っというものでした。和也さんはソレに背いて出しませんでした。その時点で契約は完了。れっきとした私の主（マスター）っとなります」

「……和也君に言わなかったのも殴られるからでしょ？」

ヴァンの素早いツッコミに、私の頭の上では小粒の雨もとい涙がもの凄い事になってる。

大洪水だよ？　凄いもん……私の癖毛（くせげ）が滅茶苦茶切磋琢磨ってきな感じで濡れてるよ？

※切磋琢磨の使い方が違います。

「取り合えず、和也さんの居場所がわかるんでしょ？」

ラミアの言葉に妖精は首肯する（っと、言っても小さいのでわかり辛い。ただ、私の頭の上でそのような動きがあった）。

「だけど…」

妖精の続きに私達は落ちついて耳を澄ませる。

一片たりとも聞き逃せれ無い……。

「一定の範囲以内ですけど。だいたい、ココから青森辺りが限界です」

たしか、この街は海に面していて、1本の橋で神奈川県に繋がっている。

情報能力としては、ココから青森までは短い。っと、言ってもコレは魔法の類いではない。

“自然の噂”っとでも言うのだろうか？　5行の“木”を司る（つかさど）妖精の大きな特徴は自然との相互関係…簡単に言うと対話だ。彼女達妖精は木々などの自然と会話ができるのだ。

「で？」

「で？」
「で？」

「にゃ！　にゃんで私を見るの！？」

3人と1匹の視線が痛いよぉぉ…
なんで、セフィリアまで私を睨むの？　なんで、2人と1匹は「で？」って聞き返すの？
なんで？　なんで！！？？

「イヤ、言葉に出てたよ」
「マジで？」

イヤ、まさか出てるとは…？
だって、“夏季講習”の内容だよ？　私だって勉強を……？
あ、そうか！　私を試してるんだ！！　絶対！！
ふふふふ、残念だね？　私は……ココまでしか覚えてないのよ！！！
所詮はワークシートだし！　勘で書けばなんとかなるのよ！！

「はぁ～。
それは、諺（ことわざ）でもあるように“風の便り”です。その名の通り、全ての言葉は風に乗って聞えて来るからであって……周辺の木々の情報は取れますが、遠くの情報はすべて風に乗って聞えるからであります。その情報はどんな情報流通魔法より優（すぐ）れている反面、収集範囲が狭いのが欠点です。しかし、妖精との契約者の信頼関係では主の居場所くらい把握できるんです」

さっすが、秀才のラミア♪
ってか、妖精さん？　和也に信頼されてないんだ。

ま、今の和也は心を完全に閉ざしてるんだよね？
そりゃそうか……和也に余裕は無いのだから。

「むむぅ……」
「うぐっ……」
「……」
「きゅ～～～」
「ううぅぅ」

和也が消息を絶って2週間……私達は大事件が起こった。
うん。ちょっとね。

……冷蔵庫が空なのよ

和也の財布を見つけたものの……使ったら殺される。
そんなこんなで、私達は2日絶食状態だった。そんな時だったかな？

【ピンポーン】

っと、インターホンが鳴り響いた。
うん、出たくないな……動いたら死んでしまいそうだから。

【ピンポンは卓球】

なんか、ムカツク……。ってか、幻聴？

【ハゲ瀬川！】

ううー？　和也が録音したのかな？

【チビハゲ！】

か、和也だ……。

【ラスト、３回】

なにがある！！？？？

【ラス１】

２はぁ！！！？？？

【はぁ～…いい加減出ろよ】

録音！？　これは何かを録音してたの？

【レナ、怒るぞ？】

私限定！！！？？？

し、仕方ない……。この後が恐ろしくて居留守できない……。

「は～い」

っと、玄関まで行き。すぐさま扉を開ける。
目の前に現れたのは……

イギリス紳士？

【66話】レナ・フォード＝ライズ・ハールド　運命というモノ2（後書き）

今は、イヤンクックの討伐をやってます。
購入2日目ですし始めからですからまったく進まずに…。
ナイトランスを舐めるなよ！！
こちとら魔槍の名前じゃあああ！！！

【67話】神堂真琴　運命というモノ3（前書き）

Ｒｏｏｋｉｅｓとごくせんに熱中して全く中身の無い、内容かもしれません

【67話】神堂真琴　運命というモノ3

「隊長！」

寝室で横になっていると、同じ四二神に所属してる４２の刺繍がされてる奴が入って来た。
たしか、フェイ・ラフト＝ルージュだった筈だ。部隊の全員の名前は覚えて置くべきかもしれないが…そんな事はどうでも良い。

「どうした？」

力を入れても起き上がらないので、俺は横になりながら返す。
フェイは、俺の元に近づいて耳打ちをする。

内容は簡略、雨宮和也レプリカの消息が絶ったとの事だ。
四二神の情報収集は妖精に匹敵する程だ、しかし、それが消息不明（ロスト）したとなれば……。
相手は決まって来た。

「……ちぃ」
「どうします？」

どうします？　っと言われても困るもんだ。
“アソコ”に手を出されたら困るし、あの所長（オヤジ）の事だ、見逃しはしないだろう。
っと、なれば……“瑠依”の事が明（あか）るみになっちまう……。

「俺が行くよ」
「しかし、隊長は…！」

おいおい……“メンディア”に診てもらったんだぞ？
外傷は０だ。後は、身体に受けたダメージが抜けるのを待つだけだ。
回復魔法も厄介で困る、外傷は消えるものの身体に蓄積したダメージが抜けない。
まぁ、それを回復させる魔法もあるが……“禁忌”っと呼ばれてダレも使わないんだがな。
まぁ、“神界”のクソオヤジが決めたクソな決めつけなんだがな。

「っ…！　ヤツには借しがあるんだよ……」

無理矢理、起き上がるが、全身が軋む音が響く。
身体に悪ッ…！　む、無理はいかんか……？
１撃がこんなに重たいとは……！！

「しかし…！」
「フェイ！　俺をダレだと？」
「負け犬の隊長？」

「響け旋律。終焉の曲を響かせたまえ、その旋律はこの夜を終らせる錬魂歌となり…終局へと！」
「！！？？？」
「葬送曲（レクイエム）」

「ミラーファントム」

ちぃ。邪魔しやがって……。
許さんぞ？　ホナ！　俺を怒らせるとは……。

第一、俺の魔法を弾くのは奴（ホナ）ぐらいしかできない。

「歩奈実せんぱい～～」
「よしよし」

棒読み棒読み…
それに、撫でてるのは自分の頭（テメー）だよゴラァ？
この自覚無しナルシスト女が、テメーは不思議ちゃんになりきれない不思議ちゃんだろぉがクソ

「マコちゃん。ハゲオヤジから指令だよん」
「“よん”の部分がスゲー棒読みだぞ？」
「女の子にはどうしても、炭酸と野菜ジュースを合わせて暖めて飲まないとイケナイ生理現象があるものなんだよ？　女心がわからないんだね。マコちゃんは……ラノベ大好きなのに」
「そうなんです！！！」
「どんな生理現象だよ！！！？？？　そんなヘタな生理現象捨てろ！！　我慢しろ！！　絶対不味いからさ！！　野菜ジュースは野菜ジュースで冷やして飲もうよ！！　ってか、フェイも乗るなよ！！それに、勝手にラノベ好きにするな！！！　俺はラノベじゃなくとも文学や歴史系の小説も読む！！」
「観音も？」
「読むか！！」
「そこは、ノリツッコミだよ？」
「ＭＤ３プレイヤー（小型録音機）を片手に持ってるヤツの前でか！！！？？？」

つ、疲れる……。
ダメだ、過労死してしまいそうだ……。

ってか、コイツ舌打ちをしたんだよ？

バレナいように、口が動くの見えたもん。ってか、鬼だは……ノリツッコミできないな。
多分…イヤ、絶対に……。

「あの人がこう言えばノルって言ったんだけどなぁ…」

あの、ラーメンマン（！！！？？？）ぶち殺してやる。
ホナにヘタな影響を与えて…！！　Ｒウィルス…恐るべし。

まさか、感想の部分だけでコレほどの影響を与えるとは……。

「はぁ～」

溜息を吐いて、２人の注意を惹かせる。
そして、出した言葉は…

「俺は抜かされてるんだろ？　雨宮和也レプリカの討伐をな」

予想はついていた。簡単に言うと……顔が知られてるし、アイツの動きは達人（マスター）クラスっとなれば、既に動きは読まれてる。それに大きな理由は……。
“弱者”には用がないとの事だろうな……クソ！

「あの、ハゲヒゲクソジジィは何処だ？」
「……神界の“端”よ」

“端”…ヤツ等に依頼を？
そんな事が？　なんで！！　アイツ等は係われないだろ！！！？？
少なくとも、此方の“禁忌”には触れられない……あ。

まさか……

「どういうこと？」

「先輩？」

ホナの今までとは違う、冷たい言葉が突き刺さる。

「どうして……“古都宮瑠依が生きてる”のかな？」

「……」

雨宮和也っという、“人間”ではなく“神”を刈るっと言う事か！？

……瑠依……！　クソ！！

「マコちゃん」

「黙れ」

短くそう言う。

俺は、動かない身体に無理を言い、駆け出す。

目的地点は……古都宮財閥本社だ。

守る……今度こそ！！

約束は守る……。我が鎌に誓って……今度こそ、殺させはしない！！

飛鳥……今度こそ、必ず！

運命なのかも知れない……。

ならば、瑠依が死ぬっていう運命なんか……切り裂いてやる！

せめてモノの償いだから

【67話】神堂真琴　運命というモノ3（後書き）

Ｒｏｏｋｉｅｓ、見てみるべきです。阪神ファンなら尚更！

【６８話】イギリス紳士と闇と月（前書き）

【68話】イギリス紳士と闇と月

「……ミヤ」
「……フミ」

オレ等は1回見詰め合い、お互いの視界に写ったモノを確認する。
簡単に言うと…メイドVSイギリス紳士…って、奇怪な光景なんだよね。庭では数多(あまた)多くのクレーターが出来ていて、平和だったあの面影(おもかげ)は無くなり、戦場（？）へと、様変わりしていた。
イギリス紳士の何故か伸びる杖を、メイドが円を描き弾き返す。
しかし、イギリス紳士の伸縮自在の杖が見事にメイドの防御のタイミングを外して押している。メイドも脚を踏ん張り、間合いを詰める。その拳は鋭く、イギリス紳士を貫くが、時既に遅し。
イギリス紳士は、メイドの後ろに居た。手刀がメイドの首筋を叩き、メイドは静かに地に落ちた

「め、メイリン！！？？」
「ミヤ、お嬢様を連れて行け」
「了解」

オレの言葉に反応し、ミヤはお嬢様を抱きかかえて、オレ等の戦闘空間から脱室する。
ミヤが付いていれば大丈夫だろう……それに、まさかとは思うんだが……“あの人”じゃないどろうな
もし、“あの人”なら…何故に？　ココに来る理由なんか無いだろうに？

「「雨宮流格闘術・閃光掌烈破！！」」

やっぱり――！　この動きで相手がわかった。やっぱりあの人だ。確信になったのは良いんだが……オレの負けだな。あんな“怪物”に勝てるかよ。

だって、先程の攻撃はオレの“全力”でやったんだ。それを被害を0にする程に無効化して尚且つオレにダメージを与えない。うん、やっぱり勝てそうにないわ。だって、あれを本気でやったら地球消し飛ぶよ？

「……梨由じぃ……」

「ほほほ。腕を上げたのぅ？　和也君」

この人は、凪梨由（なぎりゆ）……じっちゃんの恩人である。

わかっての通り、凪凛さんの祖父だ……。雨宮流の改良を携わった男だ……即ち、雨宮流格闘術の母親とでも言うのか？　梨由じぃが元をつくり、じっちゃんが改良を施したんだ。

「……何故、ココに？」

「……知ってしまったのだろう？　“自分の事”を」

「！！」

「なんでお前等が？」

オレは目を座らせてもてなしの料理に貪りつく4人と1匹を睨む。オレのイライラには根も触れずに暴飲暴食。一心不乱となりながら

料理を無くす勢いで食べる。
その光景にお嬢様は呆気にとられてしまい、呆然と眺めている。

金髪の少女は梨由じぃを指す。

「あ！　りゅうじって、梨由（りゆ）じぃの事か！！」

コレでいろんなものが繋がったぞ！　あの人の情報網は銀河1とまで言われてるし、しかも異世界の情報もあるくらいだ。オレより圧倒的に強いし全世界の情報が流通してる人間なんだ…この人は

ハッキリ言おう、オレや文人等全員で掛かって言っても3秒で仕留められる。

「レナ……なんで梨由じぃと？」

そう。オレの前の席で貪りついてるのはレナだ。
ここの（応接間）のテーブルは食堂のテーブル程ではないが、かなり長いので、
オレ、ミヤ、お嬢様、レナ、魅夜、ラミアちゃん、ヴァン君、セフィリア、妖精に、零亞が十分に座れる……ってか、後２０人は軽く座れるし……。ソコに、所狭しに並べられた料理が見る見る内に消えて行く。衝撃的なんだろうなぁ……お嬢様みたいな人達にとってはな……

「「すご…」」
「……あいつ等の食費は全てオレからだった」

ミヤとお嬢様が呟く。
あ、やっべぇ。思い出しただけで泣きたくなってきました。

ってか、魅夜の視線が痛いよぉぉ……。
メイドのハーレムがそんなにも強烈だったのかな？　だったのかな？
なんとも恐ろしい……。

「あ、綾芽？　森永さん達にもう良いって言っておいて」
「はい。承りました、文也様」

これ以上食わせてたら話しが進まん。それはそれで困るんだけどな……
ってか、魅夜しゃん？　そんなに睨まれたら穴が開いてしまう。

「文也様？　森永様からの伝言です」

トコトコ走ってきた、綾芽はオレに耳打ちをする。
その言葉にオレはつくづく呆れた。椅子から立ち上がり厨房へ向う。
勿論、綾芽の案内付きで。

魅夜の眼光がミヤを硬直させたのは言うまでもない。

【ボコ！ガシャーン！ズドン！キシャアアア！！バキィ！カシャーーン！ハゲ！昇龍拳！！】

「サンキュー綾芽」
「い、いえ……文也様専属のメイドですから何なりと…」

さっすがにアソコまでやったろ脅えるか？
ン？　なにをやったかだって？　聞くだけ野暮ってもんだぜ？
時に暴力は大事☆　ってな♪

「文也？」

固まった笑顔でお嬢様は聞き返す。
むむぅ……お嬢様に果して言って言いものだろうか？　教育状悪いし。
ってか、オレやミヤと居るとかなり悪いぞ？

なんせ、暴力に生きる者だからにゃ～♪

（ミヤ、恐いだろ？）

魅夜等に聞こえないように耳打ちすると、ミヤは大きく頷く。
なんか、胸元で鎌が呟いた気がしたが無視していこう。

「取り合えず、飯食ったら寝ろよ？　もう１１時済んでるんだから」
「えっ？」

ハムスターみたいに頬袋に溜めて喋るなアホ。
汚ねぇし下品だ。一応、超高級食材なんだしよう……。

「寝ないと“アレ”バラすぞ？」
『はい！』

うん。宜しい返事で♪

夜も深けて来た深夜2時頃、辺りは漆黒の闇に包まれている。
回りが全然見えないで……前しか見えない。目を凝らすと新たな発見があったり……
昼間とはまるで違う世界だ。何時も、オレは昼間に居て闇から逃げてきた、闇が深まれば自分の闇が更に深まる感じがする。この闇は孤独だ。闇とは忌み嫌われてる……まるで、オレみたいに。
あっては、ならぬ存在。あってはイケナイ存在でしかないんだ。

自分が嫌いで仕方ないんだ。

闇はオレなんだ。オレは闇でもある。
ずっと、なにも見えないままで……深淵の闇に飲み込まれる。それは終ることのない永遠の闇夜
決して振り払えない闇に飲み込まれて……ずっと、なにかに脅えて生きて行く。

「……なぁ？　オレって……なんだろ？」
＜……私の主だよ？　ソレ以外の何者でもない＞

「違う。オレは何時も――――！！」
＜それが…違うでしょ？＞
「え？」

徐(おもむろ)に話しかけた鎌から思わぬ言動が出てくる。

＜だって……鎌と主に同じモノはないんだよ？
私達、鎌は……主の心に存在するもので、形も能力も…中身も全部違う。私は彼方の分身。彼方が生きぬいた証なの＞

「……」

生きぬいた証？　コイツはオレの分身？
なんだよ？　そんなのありゃしねぇよ……横取りしてるだけだろ？
オレは……。
人の人生をオレが……レプリカが奪ったんだ。人間でもないのに……なにが！！
クソッタレ！

＜自分で自分の闇を作るものじゃないよ。自分で闇を払わないと＞

「お前になにがわかる！！！」

鎌の言動に怒鳴る。その言葉は幾つも木霊(こだま)して、中庭に響き渡る。
オレの気持ちもわからない鎌にただ苛立ちが込み上げる。

＜……そう＞

鎌は短くそう言って、なにも答えなくなった。
闇は再び静粛を取り戻す。闇には野犬や梟(フクロウ)の鳴き声だけが響く。
オレはひっそりと佇むだけで、なにもやらない。

紫雲で闇夜を明るく照らす月が見え隠れする中。オレはその月の光すら恐ろしかった。
少しの光で自分の世界が崩壊してしまいそうで……なにも通さない

闇が唯一の居場所で……一番に、安らぐ場所である。

「和也君…ちょっと良いかな？」

「？　梨由じぃ？」

木の下から声が聞えたので下を見ると、イギリス紳士が居た。

むむ？　寝る時もその格好なのか？　それはそれで凄いがな？

梨由じぃに普通ってのは無理なのか？　そりゃそうか……普通が合わない人だからな……。

って、人も言えねぇか……レプリカってだけで徒事（ただごと）じゃねぇか♪

「お主に話しておきたい事があるんじゃ」

「話し？」

オレは木から飛び降りて聞き返す。

「……もう1つのお主についてじゃ」

「1つ？」

1人じゃなくて？　いったいなんなんだよ？

コレ以上深い闇に落してくれるのか？　ハハ、そしたら脱室不可能だな♪

月明かりが照り付けてる夜。オレは“オレ”を知った。

“俺”ではなく“オレ”を。最期の闇の扉に出会った。

くだらない、すれ違いに。

切り裂くべく運命に。

【69話】オレ【前編】

……寝つけない。

梨由じぃの話しが原因ではない。

ただ……ほんの少し……。

時間がほしいだけ……。

「……」

静かに時間だけが過ぎて行く。

オレは両ポケットに手を突っ込んで、じっと、エセイギリス紳士を見据える。

「……お主は自分はなんだと思う？」

「は？」

突然の事にどうしたら良いかわかんなった。

でも、1回深呼吸をして、正直に話す。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

自分は不完全な存在だ。
自分がレプリカだってのもあるけれども……、それ以前に……
オレの余命は短くて……それ自体で……不完全だったんだ。
心が……何時も闇に飲まれていたんだ。
毎日がセピアに褪(あ)せて見えていて、オレは逃げ道を通った。
何時も、ゴールの無い逃げ道を通って、自分の居場所も無くて……。
父さんも母さんも、じっちゃんもダレも家の中にいなくて……居場所ってものを知らなくて…
ずっと、一人で寂しかったし……ダレも信じれなかったんだ。
いっつも、ダレからも嫌われていた。他人の眼が恐かったんだ。
魅夜が1番恐かったのこも知れない、彼女に嫌われたくなかったんだ。
彼女が好きだった。ハハ、多分…オレが俺のレプリカだからかな?
ま、いつもオレの前で笑顔でいてくれた彼女が救いだった。
だから、一層…恐かった。いつ、他のヤツ等と同じ眼で見るのかって?
オレを見ないで……化け物のオレを見るんじゃないかって?
嫌わないでほしかった……たとえ、この気持ちが偽りだとしても……
オレは、彼女にだけは嫌われたくなかった。
だから、心の中には余裕がなかったんだ。何時も魅夜の眼が恐かったんだ。

その眼で……なにを見てるのだろうかって、幾度も考えた。
それが、2年くらいした時に、なんか……信じ合えるってか……共感って言うのかな？
そんな大切な仲間が出来たんだよ……そいつ等が、また強烈なヤツ等でよ……。
有名な寿司屋の跡取りと、馬鹿な紅髪。
この2人には、何故か素直に……何故か、真正面から付合えたんだ。
共に笑って…共に喧嘩して生きて来たんだ。
不思議だよな？　不思議と……暖かかったんだ。
居場所を……始めて感じられたんだ。
そりゃそうだよな……オレには最初から居場所なんてものは無かったんだからさ。
そいつ等は兄弟かな？　そんな感じがしたんだ。
何時の間にか、魅夜の眼を気にしなくなった……今ならわかる、オレは……
アイツに居場所を望んでいたんだ。オレがオレでいられる場所を……。
他人よがりで、自分はなにもしなかった。
学校には居場所があったけれど、家に居場所がないのは苦しかったんだ。
一人でテレビを見ても……。
一人で料理を食べても……。
一人で風呂に入っても……。
一人暮ししたいヤツには悪いが……最悪なものだった。
その時までは夜が嫌いで昼間が好きだった、学校には居場所があるけれど、家に……
本当にあるべき場所に居場所がなくて……。寂しかったんだ。
だから、高校へも進学した。その時に厄介な阿呆に合ったんだよ。
レナ・フォード＝ライズ・ハールド……正真正銘の始めてできた

家族だ。
アイツが居候に来てからいろんなドタバタがあった……。
そすしている内に、気がつかない内に……自宅にも居場所が出来たんだ。
でも……本来はオレの居場所じゃないんだって、知った。
オレは、人間ではない人間だと知った。
だから……オレは“俺”の居場所を汚さない為に巣立ち……って言うのかな？
遠くに逃げたんだ……。自分のタメに……自分の罪を……なんとかしたいから。
そして、零時に出会い、ミヤに出会い……お嬢……瑠依にも出会った。
オレは、“雨宮和也”を語る資格がないから……“荒川文也”って名乗ったんだ。
それは間違いだった、全部から逃げてる証拠だった。元に今でも逃げてる。
本能が怒ってるけど、理性が全てを受け流そうとしていた。
苦しいことからも。見詰めないといけないことも。
本当は！！　本当は……なにが大切かわかってるのに……。
オレは……オレは……ずっと逃げた。
“レプリカ”ってのは、オレが1番大事にしていた……
『自分が自分って言えるなら自分だ』それを、打ち砕いた。
オレは何者では無くて……ただの写し見。鏡に写る自分でしかないんだ……。
ただ、違うのは……写ってるのが動く、魔法の鏡だと言う事。
それは……。
夢みたいに儚(はかな)くて。現実味がない。
だけど、本当の事なんだ。
だけど、生きてるんだ。

だけど、違うんだ。
だけど、オレだ。
息をしてる。動脈も動いてる。心臓も……。
だけど……全部、仮想。夢の中……インドリームってか？
ハハ……オレは結局、自分に自身をもてない。自分がわからない。
オレはオレでない……なら？
オレは“レプリカ”人間。偽りの人形。
あ～～。無駄に頭を使ったからいてぇや。
頭のできも完璧なら相当の馬鹿だな？　“俺”も……いや、俺はか？
あ～ぁ。なんで、コイツなんだろ？　それならもっと大富豪とかさ？
そんな連中のが良かったよ♪　でも、なんか……それは違ってって……。
もう、何を言ってんのかわかんねぇや……。
でも、コレだけは……なんでか言える。
ココで良かった
幸せだったって
悔いはあるけど
今度こそは……
人間として……
出会いたい……
レプリカとかじゃなくて……普通の人間で……
友達として！！！
ハハ……眼から汗とは変な体質だな？　オレ……いや、元なんだから俺かな？
めっちゃ、しょっぱいは……。
あぁ～。速く止まらないかな？
オレは！　泣いてなんかないぞ？　何度も言うように汗なんだ！
眼からでる怪奇現象のな…☆

……。
……。
……。
う～～し。止まったぜ♪
んで？　梨由じぃ？　何処まで話したかな？
あぁ。そうそう……。
もし、出会えたなら、それは奇跡だ。似合わないが運命って言葉を使う。
へへ♪　みんなに出会いたい……オレは。大切な親友全員に。
オレは……死んでも構いはしない！
オレは……死んだ方が良い奴だし……。
オレは……居るべき存在じゃない。
オレは……まだ少しでも……みんなと共にありたい！
教えてくれ、梨由じぃ……
オレ、雨宮和也レプリカの事を！
受け入れる。その闇を！
オレは……なんなんだ？
雨宮和也レプリカは……

何故、存在する！！

【70話】オレ【繋】

「……」

結局寝つけなかった。
やっと着慣れたスーツではなくて普段になれたTシャツとGパンに着替える。
夏っと言っても此方は少し寒いくらいだ。イヤ、ちょうど良いのかもな。後は、パーカーでも羽織れば良いかな？
机の上に置かれた鎌をつける。あの晩から五月蝿いこのバ鎌は何ひとつ、オレに言わない。
愛想をつかされたか……へっ。当然の事か。
それなのに、鎌をつけるオレがいる。習慣づいたのかは知らないが……オレは……いや、なんでもない

昨夜のあの時、自分を知った。
全部の謎が解けたものの……オレは未だにモヤモヤしている。
そのモヤモヤがわからなくて……恐くて、何より……昔は無かったモノ。
あの晩に、全ての霧は晴れた……けれど、何かにオレは迷っているんだ……それが、恐い。

扉を開けて見慣れた広い廊下が目に入る。それ以前に迷子になって泣いてるレナも居た。
うん。心に固く決意してオレは部屋に戻った。
バレなければ良い……そんな問題ではないのだ。命に係わるのだから。

「か、かずやぁ～～」

時既に遅し。
閉じかけた扉をガッシリ掴まれた。
め、眼が光ってるし…こ、恐い…！

「……今は居ません」
「居留守！？　かなら天然な居留守だよ！！？」

いや、馬鹿なレナなら引っかかると思って。
だって、馬鹿だし……。って、言ったらオレは潰される。
いや、重力って意外とキツイんですよ？　めっさ重たいんですぜぃ？

「取り合えず……お前はオレの部屋に入ろうとするな！」
「酷い！　ママを追い出すなんて……さては……『爆撃殺』タマゴボーロォォォォォォォ…」

な、懐かしいじゃないか、タマゴボーロ。
美味しいんだよねェたまに食べると♪　久しぶりに駄菓子食いたいなぁ……。
さぁて、馬鹿も吹っ飛んだ事だし……迷子になりながら向いますか。

2、3週間程度では迷子になるわ。
なんだよ？　この2、3ｋｍは、軽くある家って？
ざ、財閥って恐いよぉぉ……

結局、途中で出くわしたメイリンに案内されて大食堂まで来た。
うん。あのメイドは軽い擦り傷ですんだそうだ、白い肌にくっきりと紅い痕が付いていた。
メイリンはミヤ並の実力があるものの……梨由じぃからしたら朝の準備体操の深呼吸にもみたないものだ……多分……あの人にはダレも勝てない。

食堂の中には。
零亞、ヴァン君、セフィリア、ラミアちゃん、
零時、レナ、魅夜と、その他多くの使用人がワイワイと朝飯を頬張っていた。
ココで、オレが疑問に思ったのは
メイドに囲まれた零亞とヴァン君でもなければ、セフィリアにお近づきになろうとしてる庭師でも無くて、何故か居る吹き飛ばした筈のレナでもなくて……何故かメイリンと入ってきた直後に殺気を放った魅夜は恐いと思ったけど……1番気になったのは、零時の存在だ

「零時？」
「よぉ！　文也」

魅夜にナンパ（？）をしていた、零時を呼び寄せる。
別に殴ってやろうっと思ったんじゃないぞ。ただ、何故に“ココに居るかだ”

（旦那様と海外に出張してたんじゃねぇのかよ？）

（それが、速めに終ったから帰って来たんだよ）

（はぁ！！？　なら、使用人専用の食堂に居るんだよ？）

そう、ココは“使用人専用”の大食堂だ。
済み込みで働く使用人などが飯を食う場所だ、住み込みでなくとも昼飯を食うのに使用人が殆ど利用している場所だ。
っと、言う事は勿論の事ながら、古都宮の家族が食事をとる場所がある。
これは、旦那様のご趣味で、一般家庭のテーブルを使っている……『家族団欒』の四字熟語が貼られてるっという伝説もある。

（お前に用事があるんだよ）

「オレにぃ！？」

先程までのひそひそ話しではなく、大きな声を上げる。
いろんな人の目がオレに注がれるが、殺気を放ち黙らせる。
うん？　数人が軽い貧血で倒れただけだが？

（馬鹿！　トーンをおとせ！）

（わ、悪いって……）

（こんなアホみたいなヤツが、魔槍とは……かなりイメージが崩れたぜ）

（悪かったな……）

首を絞めたろか？
それから、ワイヤーでピッと♪　それとも、龍滅掌が良いか？
なんなりとお申し付けください♪

（それより、今日は梨由じぃ……梨由叔父さんと約束が……）

（なんだ？　お前、梨由じぃいを知ってるのか？）

（まぁな）

短くそう答えると、「じゃあ、帰って来たらな」っとだけ言い残して出て行く。

オレは一息ついて、お盆を手に取り、おかずやいろんなモノを手にとって行く、少し冷めてるかもしれないが、結構美味しいものだ。

さすがは、財閥の下で働く料理人だ……。

いろいろと、レシピを教えてもらっている、どれも一般家庭にもできる手軽な料理だから安心だ

「綾芽？　隣り良いか？」

席が見渡しても無かったので（珍しく）空いていた、綾芽の向い側の席に座る。

断られたら泣きそうだったけど、快く許可してくれた。

うん。果てしなく魅夜とレナの目が冷たいんだけど？

だって、あいつ等とこに座るワケにはいかねぇしよう……。

「？　どうした？」

スクランブルエッグを箸で抓んで口に運ぼうとしてる時に綾芽の視線が突き刺さる。

顔も火照ってるし…風邪か？

「いえ。普段着もぃぃなぁと……」

「？　なんか言ったか？」

声が小さく聞えないんだが？
まぁ、良いや……今日は大切な日だからな。
少し速めに外に出てるか……。

漬物を頬張り、そう考える。
後は、綾芽との談笑をして食事を終える。その頃には賑わっていた食堂も静かになり、皿を洗う水道の音が響いていた。今時、手洗いなんだな……感心するぜ。

お盆と牛乳瓶を指定された場所に置いて、オレは食堂を後にする。
勿論、外で待機させていた綾芽に頼んで、玄関まで連れて行ってもらう。

「あ、そうそう。オレのツレがオレの場所を聞いたら知らないフリしてくれないか？
後で、礼はするよ♪　オレにできる程度だけどな」
「は、はい♪」

な、なにそんな嬉しそうなの！？
期待したらダメですよ！！　あ！　目が逝ってる！！　しかも幸せそうな仮想を見るな！！
期待ハズレになるからね！！　絶対！

「ふぅ……」

３０分前行動とは、始めての事だな。
ソレほど、オレには大事な事なのだ。初ってワケじゃないんだが……ヤツとの対面があるからな。

さぁて、どうやってヒマを潰そうかな？

５分後。
準備運動に５分か……残り２５分何しよ？

１０分後。
じっとしててもなぁ……ヒマだ。

１５分後。

「痛い痛い！！　やめて！　やめてください！！」

カラスに襲われる。
うん、くちばしがめっさ痛いっす！

「コラ！　ジョン！」

名前はジョンらしい……カラスを飼うアホは何処のどいつじゃぁぁぁぁぁあああああ！！！！！
殺されたいらしいな……フフフフ、オレの拳が真っ赤に――「ぐぎゃ！」

こ、これは広辞苑？！　な、何てものが頭上から！？

「って！　文也！」
「ぁン？　げ！　お嬢様！！？」

え？　お嬢様があのカラスの飼い主？
財閥の（一応）お嬢様とある人物が！？

「『げ』って何よぉ…？」

恐い、目が逆三角（▽）に座ってる…。
恐い、コレは魅夜以上の殺気だ…！　まさか、魅夜を上回る殺気の持ち主が居たとは……。
類い希なる存在だよ？　自慢しても良いよ。

「いや？　ってか、ジョンって？」
「へぇ？　あぁ……奴隷？」

舌をペロッと出して、笑顔をつくるお嬢様。
それに対してオレは……

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

空間が凍りついた感覚に浚われていた。
たっぷり、３分間、オレとお嬢様はずっと沈黙が続いていた。
空気が、非常に冷たかった。

【71話】オレ【後編／誘い】（前書き）

サブタイですが、誘(さそ)いでは無くて、誘(いざな)いって読みます。

【71話】オレ【後編／誘い】

「んで、その木から落ちていたカラスの雛（ヒナ）を盗ったと」
「盗んでない！　介護だよ！」
「そんでもペットにしてんだろぉが。アホ」

えっと、イキナリでごめんなさい、読者さん。
このアホお嬢が言うにはこの通りなんだよね、どうりでジャージなこった……。
何時もみたいな煌（きら）びやか服装や宝石が付いてたら襲われるからな。
それにしても……親鳥が可哀想に……こんなお嬢様に息子（かどうかはしらねぇ）。あ、子供（ガキ）って言えば1番良かったのか。

「それで？」
「なんかね、そしたらだんだん可愛くなって♪
ほら！　このクリクリなおめめとか（以下略）」

うん。10分も語りやがって。
ってか、書かれてないけどまだぐちぐち話してるんだぜ？
マジうぜぇ……。殴っても良いですか？　殺さない程度に？
うん。とある最強さんの許しが出たのでぶん殴る。

「いっっっ…！！」

「無駄な時間を食った」

お、黒塗りのリムジン？
やっと来ましたか♪　開放されるやっと……

「コラ！　文也！」
「んじゃ、用事がありますので」
なにか、サルが騒いでるが気のせいだろう。
お嬢サルって不思議なサルがね……うん。なまらウザイんやけど。
おっと、何故か知らないが関西訛りが出たぜ。
道産子なんだからしっかりしようぜ？　飛焔…。

車内は無言だった。
ただ、見慣れない景色を眺めてるだけで、コレと言ってなにも無かった。
ただ……梨由じぃの顔が何時ものやさしい顔ではなく、厳しい顔をしていたのが腑に落ちないでいた……何と無く、オレの様子も伺っているようだった……そして、哀しそうな顔をする。
理由は知っている。多分、オレの事を気にしてるのだろうか……
そんな感じがした。

暫らくして、着いた先は【帝葉国立病院】オレでも聞いたの事のある病院だ。
超凄腕イケメンドクター“碇谷悠徒”とかでかなり有名“だった”。
某影薄が病院を移されるちょっと前に来たんだよな？　隣街の小さ

な病院に居るんだったな？
たまに、赤いポルシェでウチの学校の近くに止まって須川女医と親しそうに会話をしてるのを数回見たことがある。
そもそも、碇谷先生が移された理由って……無謀な患者の受け入りとかが原因だっただかなんだかだったはずだ、それで医者がいろんなモノに追われ医療ミスの多発。それで、全ての責任を背負いあの小さな病院に移ったんだ。医者も難儀なものだ。

「着いたぞ？」
「わかってます」

運転手に開けられたドアを杖（ステッキ）を着きながら降りる。
オレも梨由じぃの背中を追いながら降りる。
ドアを潜（くぐ）り、見えたのは賑わってるというか、満席状態のフロント、忙しなく駆ける看護婦の姿だった。

受付に向って歩む梨由じぃをピク○ン如く追いかける。
な、懐かしいぃ……。

「失礼」
「はい？」

笑顔で看護婦は聞き返す。相変わらず笑顔の旨い人達だことで……。

「雨宮和也の見舞いじゃよ」
「！」

看護婦の表情は凍り付いた。すげー恐いんですけど？
イキナリ無表情だとめっちゃ恐いです！！　なに！？　凍てつく白

衣の天使ってヤツ？
絵画を書いてる人ォ！！　ココに珍しいネタがありますよ！！

「ご案内します」

先程の口調とは打って変わって、機械的な口調で言う。
既に無表情なだけで恐い……なに？　調教！？　なんかエロスな言葉！？
ってか、煩悩は黙れ。

看護婦に先導されて、エレベーターに乗り込むと、描写できない手捌きで
【ピーー】を操作して、Ｂ２７に設定した。その頃にはオレは顔面蒼白で呆然としていた。
描写したら作者が自暴自棄になってしまうからな、さすがにそれはまずいし。

「此方です」

ご丁寧“過ぎる”扱いをされ、地下にまるで隔離されたような、厳重な鍵を幾つもつけられた扉の前に立つ。ドデカい南京錠や、鎖で何十にもきつく閉められてる。『これでもか！』っと言わんばかりに閉じられた扉に嫌な重たい唾を飲んだ。
これじゃあ……まるで！

「封印や」
「！　み、ミヤ！？」

暗くて気がつかなかったが、声が聞えて扉の隣を見ると今風のワックスで固められた金髪。右耳にだけつけられたドクロのピアスを

付けた男――
そう、相棒の宮鷹秀一だ。
あ、そう言えばミヤも食堂にいなかった。何時もなら綾芽の隣をキープしていたし……。
零時が居た事に驚いてミヤの事を忘れてた。なんで…？　ココに？

「速かったのう？」
「まぁね。役者も来た事だし“解呪”しても良いですか？」

知り合いなのか？
ダメだ、話しが飲み込めない……なにがどういう関係なんだ？
置いてきぼりは無いぜ……。

「ワケは帰ったら話す。今は少しまちぃ」

ミヤの言葉に頷く。

ミヤは扉の前に立ち『解』っとだけ、短く呟いた。
途端に先程まで繋っていた無数の南京錠や戒められた呪縛のような鎖が解かれるのではなく、消え失せた。それは……溶けたとか、外れたとかではなくて、まるで夢だったように消え失せたんだ。

「ほな、俺は古都宮の方に帰ってるで？」
「では、行こうか。会いに」

ミヤは、看護婦に引かれて、エレベーターに乗り込む
オレは目で追いもせずに、梨由じぃに着いて行くだけだ。
オレはこの先に広がる光景を想像しながら……歩むだけ。
その歩みは何処へ向うかわからない、初々しい徒歩で……白い…
…ただ…白いだけの部屋に足を踏み入れる。そして、歩んだ先は純

白の部屋にある唯一の物であるベット。
そして……純白の皺一つたりともない布団をかぶさり横たわる“オレ”に出会う。
そう“俺”ではなく“オレ”に。

簡単に言おう。このベットで横になっているのは……
オレジナル和也ではなく、レプリカ和也なのだ。
それを告げているのは、“オレ”の…イヤ、“俺”の心臓だ……。
この矛盾……その答えは昨夜の梨由じぃの言葉だ。理解に苦しんだが……全てが繋がった。

この、オレという存在に。

自分の闇をオレは曝(さら)け出した。

「そうか…」

梨由じぃは短く答えると……顔を見上げて目映(まばゆ)い月を視野に入れる。
そして、【真実】は語られた。

簡単な事だった……そして、自分という最大の闇に出会った。
最期の闇の扉は開かれる。一切、光のない真っ暗な闇だった、でも、
立ち向かうべきの闇だった。

最期の扉の鍵が、
明かされる。

【72話】オレ【後編／真実】（前書き）

短いッス

【72話】オレ【後編／真実】

これから、語る事は全て真実じゃぞ？
そうか、当然わかりきっとるか……
ナラバ、聞くぞ？　お主はタダのレプリカダト思うか？
……神路蒼譜……もう、彼奴も関ってきたか……。
そうじゃ、彼の言う通り、お主は“アルティメットレプリカ”と呼ばれておる。
しかし、それはまだ混乱するので後にしようか……。
お主が自分の闇を曝け出してる時に言ったじゃろ？　お主の余命が後、僅(わず)かしかあらんと…それは、“お主ではない”
落ちつくが良い……。慌てるなと言っておる。

落ちついたか？　ならば、聞け。
そして……知るぞじゃ、お主の事をのぅ……。
先程も言ったが、その病気はお主のではない……。簡略に言おうか。
無用な説明は不要じゃのう……
お主の心臓はオリジナル和也のモノじゃ。
察しがついたろう？　そうじゃ、移植されたものじゃよ……ここまで来たらもうわかったろう？
そうじゃ、お主の心臓は“オリジナル”がもっとる。
そうじゃ、アクまでもお主は、レプリカ人間。全てが同じ筈だ、遺伝子や細胞がミリミクロ単位で同じ筈じゃが、“お主は”違う。
そうじゃ、そこでてるのが……“半完全同位複写人間(はんかんぜんどういたい)”……それが、お主の正式名称じゃ。
そう、それが“アルティメットレプリカ”じゃ。完璧に同じのは普通の“完全同位複写人間”と、呼ばれるモノじゃ、お主は別の意味の完全。

そうじゃ……“欠陥”を消した完璧過ぎるレプリカ人間。
そうじゃ、お主は“使用済み”のレプリカ。すでに、心臓を移植された…悪く言って“用済み”の人間なのだ。
……全てが繋がるじゃろう？　わかっただろう？
これが、真実じゃ。スッキリしたろう？
嫌味に聞えるかもしれるかもしれないが、真実じゃよ。お主はオリジナル和也の病気を移植させる為にだけ産まれた存在……“道具”じゃ。
勿論、ダレがかわかるのう？　お主はその血を引いておる“死神”と人間の。
そうじゃ、お主の母親。雨宮姫南……イヤ。ヒメナ・フゥーリアン……最強の死神の息子じゃ。
レプリカと付け足す事もない……お主は本当の“孫”として育てられたのじゃから……孝三郎に申し訳ないじゃろうが……。
お主が言葉もロクに言えない中を、孝三郎は本来の息子ではないお主を育てたんじゃよ。
実の息子みたいに成長をにこやかに話しておったよ……。
お主は…愛されては道具だったかもしれない……けれども、愛情を篭めていたのは確かじゃ。後は、お主次第じゃよ、ワシはその強い眼を信じておる。
それより……会った方が速い。いっきに全部入れる必要な皆無じゃ……。
全部、わかってしまったようだが……軽くだけで良い……。
それは、対面してからの方が良い……明日の１０時に丁度、仕事が空いておる……
会いに行くか？　お主に？

オレの答えは、決まってる

「決まっている。オレは……真実を知るんだ！」

【72話】オレ【後編／真実】（後書き）

前後編じゃねぇな……コレ

【73話】オレ【後編／出会い】

「ワシは席を外そうか」

梨由じぃいは、短く答えて隔離された部屋から出る。

取り残されたオレは、ただ…オリジナルが横たわるベットを見詰めるだけ。

白の世界はオレの闇を真っ白にさせるかのように、“無”へ誘(いざな)う。

徐々になにかしらを考えるのもメンド臭くなり、オレはそっと、ベットのすぐ傍にある椅子に凭(もた)れ掛かる。パイプ椅子は【ぎぃ…】と、鈍い音を奏でてそれは、部屋に響きわたる。

皺すらない布団や、自分(オリジナル)を見返す。何一つ自分と変わらない顔立ちに…全てのものにオレは……なにを思ったのだろうか？

イヤ、白い世界に包まれて無心だったんだ。

わかっているんだが、コレが夢や嘘である事を少しか期待していたんだろう。

でも、現実で…。

だから、泣いた。

何故？　辛いから

逃げたいから？

イヤ、幾ら逃げてもココに辿りついただろう。

同じ者を引きつける“運命”なのだろうか？

だったら……どうする？

逃げられない……闇に挟み撃ちに合ってる。

簡単だ……。

立ち向かえば良い。

なら、オレが言う言葉は？

オレは……こう言おう。自分自身…イヤ、自分他身に。

「はじめまして」

短く。オレは言う。

オレは、涙を親指で拭い、そして……。

「ごめんなさい」

そう言う。

活きていてゴメンナサイ。

恋をしてゴメンナサイ。

偽っていてゴメンナサイ。

壊してゴメンナサイ。

住んでいてゴメンナサイ。

キミの存在を何と無く気がついていて……でも。

捜さなくて……ゴメンナサイ。

「ありがとう」

こうも言う。

オレの生きている“元”になってくれて、アリガトウ。

今まで、黙ってくれていて、アリガトウ。

住む場所を……、アリガトウ。

恋を……アリガトウ。

何回か、命を助けてくれて、アリガトウ。

オレの日常を……オレの道を、例え……仮初であったとしても。

キミの、道（レール）を走らせてくれて、アリガトウ。

「……」

オレは、そこから、言葉を発しなくなった。

暫らくして、梨由じぃが入って来た。様子を2、3回確認して、反

対側の椅子に腰を落す。
そして、真っ直ぐと……オレを直視した。
オレは、息を呑み。続く言葉にしかと集中する。

「お主の中に、オリジナルは居る」

それは、気がついている。レプリカだと聞かされて無数の空白の時間の謎が解かれた。
その時点で、うすうすと、心臓の事が頭に過ぎった。
簡単な事だ、移植された心臓で、ごく稀にある事らしい。
心臓は簡単に言うと【心】その断片が、もう1つの人格……二重人格として出る……。
それの例はオレ、基本的にはオレの脳がオレを保ってるが、心臓が興奮感に浚われると……“俺”が覚醒する。

「そして、その意識は心臓で封印されてるものじゃ」

なるほど、だから……“俺”は動いてないのか。
心臓は……脈は動いてるのに……“意識”が欠如されている。
だから、動かない…植物人間。だから……オレの中にハッキリと“俺”は居るんだ。
それは、オレの…いや、俺の心臓の中に封印されてる。そして、オレは可能性に引っかからずに、意識がなく……植物状態だという……。
もう少し、正しいのは“抜け殻”だろうか？
魂の抜け殻……それが、今の俺。操り糸のない操り人形。

「本来ならば、移植に成功したと同時にお主は用済みとなり捨てられる筈だったが…」
「……意識が“何者”かの手によりオレ（俺）の心臓に閉じ込

められたんだな」
「そうじゃ……」

それで、ココに幽閉された。そして、ノコノコとオレは何も知らずに生きた。
それで、このお話しは幕を下ろす。だけど、本来は“俺”を起して本当のクライマックスだ。
ハハ、終りも始まりもクライマックスか♪
面白いじゃないか……徹底的にクライマックス……。

「……もう良いです。ケジメはつきました」
「……まだ、胸の内にモヤモヤがあるのじぁろうに……」

見透かされてる……。
たしかに、ワケのわからないモヤモヤが胸の中にあるけれど……。
オレは……歩むさ。後戻りはしない……ずっと前に。
この、双六の道を後戻りをしないで、ゴールに言ってやる。
1日1マスのこの日々を……

オレは歩く。ひたすらに。
もしかしたら、どこかに【ふりだしに戻る】【〇マス戻る】があるかも知らない。
ならば、そんな運命……

やるよ。

切り裂いて

【７４話】死神狂乱【前編】（前書き）

今回は悩んだ末にコメディーで行きます。

【７４話】死神狂乱【前編】

「今、帰りました」
「か、かずやぁ～～～」
「うわぁ！！？？」

オレが帰って来たのは昼下がりだった。
アレからたいして時間は発っていない、少しだけ対面しただけだからである。
後は、少し寄り道をしてもらっただけだ。ま、そんなこんなで帰って来てイキナリ、レナに泣き着かれてるとはどういう状況か！？
空襲か！！？？

「ううぅぅ……猫が猫がぁぁぁ～～」
『みにゃぁ～』

ひょこっと顔を出したのは、小さい生後間も無いであろう、可愛らしいロシアンブルーの子猫だ。
パッチリとした目や何時もブラブラさせてる尻尾に癒される我等使用人の神様である……前文同様のロシアンブルーの“カイリ”だ。
ＫＨのカイリではないので悪しからず。

まったく、なにをそんなに恐怖してるのだ？

「猫猫猫

ねこねこ
ｈｊｋｄｓｈｆｏｉ；ｄｙｆｈｗｅｊｆｏｐｗｏｐｆｅｗｏｆｕｏｇふぇぇぇ～～～」

「れ、レナぁぁぁあああ！！！！！！！！」

な、なんで涙目？？？　こ、壊れた！？　ハッ！　そうだ！！
コイツはネコ科の動物が駄目だったんだ！！　しかも、パワーアップしてる！！

『にゃ～～』

カイリは飛び跳ねっる。狙いは多分……。

「みぎゃあああ！！！！！！！！

所代わり食道……間違えた、食堂。
ソコは既に戦場と化していた……のは、幻想。だって、既に2時を回ってるんだぜ？
すっからかんだぜ？　まぁ、この時間はオレとミヤの一服の時間だ。
オレは勿論の事ながらブラックだが？　コーヒーにミルクを入れるアホの考えがわからん。ミヤは紅茶だがな。

「よぉう、幻想殺し」
「危ねぇわ！　ってか、何故にその仇名？」
「ロリコン撲殺少年？」
「ロリコンじゃねぇよ。ってか、撲殺なんかされねぇし（ってか、やる方？）」

ん？　今、オレのSが起動したような？
ハハハハハ、一瞬だから大丈夫♪　ダイジョウ……ブ？

「それより……」
「ああ。アレは、ワイが作った“封印”や。四聖獣の玄武の印を彫ったモノや。厳重に厳重を重ねて彫ったんやから、ワイ以外にあの封印はとけん。ワイのおっちゃんとあのおっちゃんは古い付き合いやから、ワイがあの封印に派遣されたんや。ワイもあの先になにが

あるか知らないで封印を彫っただけや」

マシンガントークまでとはイカナイが凄い勢いで説明しやがった。

ま、ミヤらしく肝心な所だけ話してくれて助かったぜ。

ってか、陰陽師だとは聞かされてたけど、梨由じぃが知り合いに居るという事はかなりの名家か？

その節は縁がないから知らないが……。

「ふ～ん」

『みぎゃあああああああ！！！！！！』

「ま、そないな事や」

『ぐべらぁぁぁぁっちょ！！！！！！』

「何時から一人称が“ワイ”になった？」

『アミラァァァァァゼ！！！！！』

「このモードだと、こうなるんだ」

「戻ってる戻ってる」

『ｊｋｓｄｆｈｒｅｆ；¥ｖｊｄｈｖｇｐ：ｗｅｒ！！！！！！！』

「「……」」

凄まじくウザイんだが？

殴り飛ばして来て良いのだろうか？　なまら凄く【ピーーーーーー】したいんだが？
駄目だ……ドSなオレを許してください。駄目なのはオレなんです。

さてと、殴り飛ばしに行こうか。
多分、許されされるよね？　この世のタメだもんね？
いっそ、世界平和のためだもんね！！

「お～い。文也ぁ～」
「【ズキューン！】」
「……」

あ、零時だ♪　聞いちゃイケナイ言葉でも聞いたのかな？
ん？　絶対的な暴力だけど？　うふふふ♪　駄目だよ？　１８歳以下が聞いたら破滅だよ？
多分、挙動不信になるよ？　世界が信じられなくなるし、７歳の時の作者みたいにホラー系のＴＶ見た日にはトイレにイケナクなりますぜ（マジ）

しかも、１年もしたら耐性着きやがって（マジ）

可愛げの無いヤツだ。うん。絶対。

「どうしたんですか？」

お、ミヤは平常心だ。
冷や汗いっぱいだけど？

「あ！　いや……ちょっとな」

折角のイケメンが台無しなくらいに冷や汗かなりかいてるんだが？
更には、かなり顔が引きつってるのはどうしてなんでしょうか？

まぁ……

「オレが悪かった」

減給処分で済みますようにと、祈るだけであった。
ん？　ひたすらに願ったよ？　暫らく沈黙がきつかったけど。

「８０万減給な」
「……ｏｒｚ」

オレは減給処分だった。

「で、だ」

「なに、が。だ」
「変な所で区切るな」

ナイスツッコミだよ！　ミヤ！！
ついつい、笑顔でミヤに【グー】っと、親指を突き出す。
ミヤは溜息を吐いたけど。

そうそう、描写されてはいないが、未だにレナの断末魔は途絶えない。

「お前等が首を取り逃がした……燈廉会　１５代目頭首、東條雪都（とうじょうゆきと）の存在が確認された」

その言葉にオレとミヤは眉間にシワを寄せる。
零時の言葉は続く。

「……問題は場所だ」
「場所？」

ミヤは疑問符を挙げて零時に聞き返す。
オレは“あってはならない”勘が働いた。その総点は昨日の殺し屋。神路　蒼譜。ヤツの存在が脳裏に返っていた。それは、次の言葉で確信に変える。

「“端”だ」

この世界に居たら誰しもが聞く名前。“裏の端”である。
ミヤも目をパッチリ開き、瞬（まばた）き一つもしないまま、食堂は静粛に包まれる。
その沈黙は先程の軽い沈黙ではなくて、重たい沈黙だ。

一度、裏の世界に入ればその名は直ぐに聞く事になるモノだ。
本当の裏のその最先端にある組織……。オレ達は“端”っと言っている……。
個人個人が世間一般から外された人間。

そうだな……例えば、“放電体質”のある人間で例えようか。
普通にそんな人間はあり得ない、だが、実際は居るんだ。放電体質の人間は“イレギュラー”である。それは“表の世界”に無数に。
数が少ないがながらも、かなりの量がいる。
ランクが低い者であれば、表の世界で生きていける……だが。
ランクC　それ程のレベルは強制的に裏の世界に連れて来られる。
問題は
ランクA　それは異常な存在だ。この世にあってはならない存在である……ならばどうする？
簡単な事だ。抹殺。例え、幼い女、子供であろうが関係は皆無。
存在自体までを抹殺される。

突然、強い能力に開花した。はい、死ね。
そんな感じの事もある。

そこで、一種の特赦能力者だけを集めた者達が連中だ。
条件は、ランクがS以上。殺しをなんとも思わない。異常能力者……例えば、炎を操るとか、水を操るとかではなく……。天候を操る。重力を操る。など、極稀な能力者だけを集めた組織が“端”

狂った組織だ。

「……そいつ等と居たんだ」
「マジか？」

「……」

ハッキリ言って、1人1人がオレと対等だ。
実力が異常に高すぎる、その中で1番危険視されてるのは頂点の【ゼウス】を傘下とする【十二神（トウウェルブ・ゴッド）】そしてゼウスと肩を並べる【ロキ】、最期に【トール】だ。わかっての通りに神話に出てくる神が用いられている。アクまでもこれは補足にしか過ぎない。

いやいや、ストレートに言ってないな。
オレとミヤだけでは勝てる気がしない。
個人個人を相手にするなら勝てる。だけれども、集団。
3人以上ならば、勝てない。絶対だコレは……。なんでも巷（ちまた）じゃあ、ロキはブラックドラゴン（正体不明）と対等以上だか？　笑わせる。
そんなワケあるか
だが、ゼウスには、誰一人として適わないらしい。絶対的な力。
噂でしかないが……ゼウスを見た者は全て死する。

「……大丈夫か？」

弱々しく零時は呟く。そりゃそうだ……相手が、“端”なのだから。
正直……勝てないよ。けどね……オレにだって譲れない物はあるんだ……。

負け？　ハァン！　オレの辞書には【負け】とか、【敗者】とかねぇんだよ。
あっても、【歯医者】だけ！！　オレの広辞苑は……薄いぜぇ♪

だから、言うんだ。だから、答える。
死ぬ気でやってやるよ……所詮は作り物だ。悲しむ奴なんて居ない。

やるんだ。やってやるんだ。この手で……。

「当然だ。何人…何十人来ようが……オレがぶん殴ってやる」

オレのその言葉にミヤは一回息を吐いて続ける。

「オレ“が”？　ちゃうやろ！　オレ“ら”や！」

ミヤとオレは一回目をあわせて微笑み合う。

零時は間抜けでも見てるように惚ける……馬鹿みてぇ。

「でも、守り切った時には……教えてくれよ。瑠依が狙われる理由を」

「ッ！！」

オレの言葉に零時は息を呑んだのが、ハッキリとわかった。

もし、瑠依が“特殊”な異常能力者ならば……あの時の光景もわかる（５６話参照）。

って言っても、最貴重能力ならばなんだがな……。

ま、６０億人に１人の能力なのだからな……。

「あ、そうそう。あいつ等１人につき１００万な」

「安い依頼両やろ？　やっすいやっすいってな♪」

あいつ等１人１人でも数千億の首だっからな♪

やっすいやっすい♪　お？　やっすいやっすい。

「やっすいやっすい」

「お？」

「「やっすいやっすい」」

つくづくミヤとは気が合う。前世は兄弟か？
あ、ってか、オレに前世いないじゃん♪　ハハハ♪
やっすいやっすい♪　やべ？　楽しいかも？　やっすいやっすい♪

「そうそう、零時？　使用人全員を大食堂に集めてくれ、今晩はみんなでワイワイいこうや♪」
「……俺にはそれだけしかできないのか？」

あらぁん♪　何が言いたいのかわかってたんだ。
（縁起でもないが）最後の晩餐になるかもしれないんだから、美味い物を食って力をつけたいですからね♪　まぁ、なんで今日なのかは……昨日も居たアイツが気になるからなんだがな。

1日だったらたいしてこの屋敷は把握できない。だが、3日もしたら……おおよそは把握できる。
本社の見取りはおおよそネットで見られるし、屋敷の外回りは3日あれば裏口も大体わかるものだ。怪しまれないように行動できるのは最大3時間……多分だけど、明日に来る。

言っておくが……オレの勘は英語と気配には全く当たらない！
断言しようじゃないか！　絶対に……当たらないです！！

ミ「フミ？　何処に向って？」
フ「3カメ！　ちゃんと撮って！」
レ「宣伝！？　ってか、なに！！？」

フ「何処って……読者様だろ？」
ミ「3カメ？」

レ「撮影？」
フ「シャラップ！！」

なんだろ？　やっすいやっすいからテンションが上がって来たぞ？
やっすいやっすい……恐ろしい……！
是非、恥ずかしさを知らずに「やっすいやっすい」どうぞ！

「で、なんだ？」
「忘れた」
「なんだっけ？」

ふざけていたら本題を忘れてしまった……。本題を思い出すのに3人共30分まるまる使った。
そして、オレが気になったのはレナの雄叫び（？）が聞えなくなった事だ。
無償に心臓がバクバクしてるのはオレだけだろうか？

『ふしゃ！』
「うわぁ！？」

唐突に飛びついて来たのは、カイリだ。なにかに物凄く脅えているのはなぜ？
ガクガク震えてるんですけど？　肩越しでもけっこうわかるぜ？

【ズドォォン！！】

「「「『！！！！！？？？？』」」」

唐突に社員食堂（もとい、使用人用の食堂）のかなり大きめのドア。

オレが縦に４人、横に手を広げて６人ほどの大きさだ。因みに両手を広げた状態はおよそその人間と同じ大きさらしい。オレが約、１８０ｃｍだからかなりの大きさで、大きさどおりに結構重たい。

「見ぃつけた♪」

ゆらりと、怪しげな陽炎（カゲロウ）を浮べながら、入って来たのは猫背で目が黄色く輝いているという、まるで、ラノベの狂った人物みたいだ。うん。オレはかなり硬直してるよ？

ゆらり…ゆらりとゆっくり動きながら、大鎌を構える。前に一度みた事のある鎌だ、本編にはでてきてないが、１０話の間と、コニ・タン先生の某短編小説に出て来た……ドＳにはオススメの鎌……。断末魔の死刑鎌だ。

全てが黒に染め上げられた鎌はオレにトラウマを産んだものだ……。

簡単に言うと【アイアンメイデン】だ、アイアンメイデンで人を殺せると思う彼方、それは間違いだぜぃ♪　アイアンメイデンの中は実は急所を外すように設置されてる為に激痛と全身穴だらけで済むんだな……。

ヘタに動くと急所に当たるかもしれないが……。アイアンメイデンに首のところに針が仕込まれてないのはそのタメだと、聞いてる。

つまりだな……。

「レナちゃん？」

駄目だ。ミヤ。

「じゃま」

鎌の一閃がミヤを襲う。

「ぎゃあああああああ！！！！！！！！　痛い痛い痛い痛いぃぃぃ！！！！！！！

死ぬぅぅぅぅうううう！！！！！！！！　でも、死ねないぃぃぃぃぃぃ…」

ミヤ、正解だ。簡略に言うと……。気絶をさせなく、相手に最大限（死に近い）ダメージを与えるという、ドSのアイテムだ。慎吾、今度行ったらかしてやる。

「フフフ…♪」

……。さぁて、逃げるか。

【７４話】死神狂乱【前編】（後書き）

今更で、スミマセンが。１００部目を視野に入れていて、９０部間近なのに……なのに……。

なんで、２ヶ月半ぐらいしか経ってねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇのぉおおおおおおおおおおおお！！！！？？？？

【７５話】死神狂乱【後編】（前書き）

レナＶＳ和也？

【７５話】死神狂乱【後編】

「ひゃはははは♪」

オレはひたすらに走っています。
そりゃあ、もう……死ぬ気で。いや、死にはしないよ？
ただね……あの激痛はかなりの物なんだよね♪
死にも気絶も死にゃしないんだけど……寸前で止まるってのは死ぬより苦痛だ。
だってよう……気絶したら痛みは感じないけど意識があれば別……
…だ。

依然と、ゆらり…ゆらりと動くレナはかなり恐い。
しかも、「ひゃはははは♪」っと、跳ね上がる口調で笑いながら一定の間を維持しつつ延々と追い掛けて来るのだ……。Ｂ級ホラー並の恐さを体験してる。

貴重な体験だ。……体験したくないな。

「そういえば……」

昔にラミアちゃん達になんか言われてたな？
思い出せ……凄くどうでも良かったヤツだけど！

『あ、和也さん』
『ん？』
『レナについてなんですが…』

『どうしたの？　ラミアちゃん？』
『いえ、たいした事ではないんですけど……言っておくべきだと…』
『なに？』
『大丈夫だと思うんですけど……３０分以上猫の近くに居るか、もしくは
イライラが最高調に達しますと……レナの馬鹿……壊れます』
『は？』
『私達じゃ、手も足もだせないので…和也さんならと…』
『うん。わかった、覚えておこうか……（どーでもいいか）』

……昔の自分を殴っておきたいか。その意見は尊堂するぞ？
文一よ。
どーでもよくないよ。うん。勝てる気はあるんだけど……直視したくないです！！
チキンでゴメンナサイ！　ヘタレです！！

おい！　そこのヘタレと思ったヤツ！！　出て来い！　殴ってやる！
なに？　言ったのはお前だって？　誰が“言ったの”と言った！
“思ったヤツ”だよ！
いいか？　国語ができない奴と英語のできる奴は嫌いだ！！

「めが　ぐらびじょん♪」

でたな、十八番（オハコ）！
重力には逆らえない……だが、効果範囲から出たのならば…！

自分の足から少し離れた部分が少し沈んでしまう……。

こ、古都宮の床は殆ど核シェルターなみの強度と震度7にも揺るがない造りですぜ？
それが、意図も容易く沈むだと？
　ま、簡略に言うと……手加減してないな！　クソォォ（泣）

「てら　ぐらびてぃしょっとぉ～」

　黒の球体を手の平で作る。この動作には見覚えがある。
【弾系（ショット）】の魔法だ。レナの重力の弾丸は音速の早さだ“いなし”をするにはかなりの実力が要る程だ。弾丸なタメにクセを掴めば簡単だが、レナの場合は違う。

「かい♪」

　手の平で潰して平たくした後に飛ばすんだ。ブーメラン状になった弾丸は簡易に叩き落せるものの、問題はその回転数だ、腕を使い物にならないようにしたいならやればいい、簡単に腕と二の腕を分けてくれるだろう、擦り剥いて関節部分まですり身にできる。そりゃそうだ、重たく鋭い無数の刃があるんだ。直で食らえば…ミンチの完成だ。

「おらよっと！」

　DCで沈める。衝撃波ならば大丈夫だとは思ったのが誤りだった。沈んだ、重力の円状の刃は地を這いオレの足を目掛けて低い場所から攻めてくる。
これは、別に良かったと言うのは変だけど……。オレが1番注意すべきだったのは……レナの動きであった。レナは既に天井をクッションに鎌を構えていた。

跳躍（？）したレナは全身に重力をかけてオレを目掛けて迫る。
空中で防御の姿勢をとるが、完全防御までは不可能だ。

と、なるとやっぱり……。

完全防御不可→0．5倍

重力＋空中からの奇襲→3．5倍

本気→2倍

5倍の攻撃＋断末魔の処刑鎌＝究極の1撃。

だが……見様見真似のこのワザで！！

危ないのは作者だし……一回限りだし！

「きめぇ♪」

レナ、オレが攻撃だけだとでも？　ま、そうなんだがよ……。
でも、これぐらいはできるんだぜ？

「へ？」

「龍…鉄風・雨（あま）ってかぁ♪」

鎌はオレの身体を裂かずに左腕に皮膚や服にも傷1つたりとも着いていない。
そりゃあ、当然だ。あの人の防御系の技のアレンジなのだから。
アレンジと言っても簡単だ。オレの場合は型をつくれず物質や固体の状態では5秒程度しか持たない、だから、防御をした瞬間に相手のどてっぱらに右手を当てて……全身に掛けていた氣を解き、溜める！

「破ッ！」

放出状態になる前に、鎌が皮膚を裂く前に吹き飛ばすッ！！
ディフェンス&カウンター。それが、龍鉄風・雨だ。まぁ、実用化は出来るんだが……流石になぁ…。

ま、始末書で済むかな？

オレはただただ、レナが吹き飛んだ時に空いた大穴を見詰めながら後ろ髪をボリボリ掻いてるだけだったっと、さ。

「もう、４０万減給で」
「……死んで良いか？」

無論、減給処分だった。ま、核シェルターなんだから安く済んだぜ？
壁まで弁償ときたら破滅する。絶対にね。

以降も尚、カイリに懐かれたレナは夜な夜な布団の中で襲われて、オレの部屋に逃げて来たのは秘密だ。お嬢や魅夜、綾芽に知られたら殺されるからだがな。

そして、男子諸君！　なんだね？　その目は？
血気盛んですなぁ……しかぁし！！　どこぞのラノベだ！！　煩悩はあるがエロい展開になるか！
ハハハ、血気盛んさらば、某撲殺天使でも読みたまえ！！

「うぅぅ～～っ」
「レナ、威嚇しなくても入ってこないから」

この阿呆の目の先にはオレの部屋のドアである。猫の入るのは設置されていにので入って来れないんだが、微妙なところで疑り深いコイツはずっと見詰めてるだけである。
猫嫌いなのに本当に猫っぽい奴だ。
涙目なのがより一層面白い、猫になんのトラウマが？　毛が逆立ってるし……
お前が猫じゃないのか？　つくづくそう感じる。

「かずや？」
「ん？　どうした」

一瞬、オレが何を考えてるのかわかってオレに声を掛けたのかと

思って振り返ると、レナは涙目のままでオレをしっかりと捉える。
猫みたいにパッチリ開いた目は涙を溜めていて、トロ～ンと、眠たそうな眼(まなこ)をしているレナの目にオレは迂闊にも心臓が高鳴りする。

「魅夜は知らないけど……みんな知ってるよ」
「……そうか」

オレは短くそう答えるだけだった。

そうなんだ……知ってるんだ。でも……なんで、オレを和也と…雨宮和也って言うんだ？
オレはたしかに雨宮和也だ。雨宮和也の心臓で生きてるだけで……身体は雨宮和也レプリカなんだ。オレには……その名の資格は無いのに。なんで？　オレを苦しめたいのか？

「……和也、よく言うよね『自分で自分だって言えない限り自分はじゃない！　でも、自分で自分だと言えるなら自分だ』って」
「そうだな」

状況が違うんだ。オレは、本当に語る名はなくて……その言葉の前者だ。

「ねぇ？　和也？」
「どうした？」

適当に答えてる事にレナは気がついてる。
なんとなく……目がそうだ。

「もし、和也が……自分を―『ん？　どうしたの？　カイリ？』むぐぅ！」

「……」

『和也の部屋がどうしたの？』

全身にイヤな汗が通る。レナも状況が把握できたらしい。

まずは、外の状況だ。

声の持ち主は魅夜だな…。そして、腕の中にはカイリが居る（っぽい）。

次に考えるのは中！　ココの状況だ。

夜＋男女＋深夜＋口を押えるタメに押し倒してる＋ベット＋完全防音（外の状況は聞える）＋血気盛んな高校生の二乗＝

……土下座の準備は良いかい？

無理だけど言い訳はＯＫかな？

撲殺で済めば良いんだけど……いいかな？

さぁて、逃げるか。

む？　意気地なしと言ったのは誰だ！！？　相手になってやるぞゴラァ！！

三千人殺しのかっちゃんだぜ？　事故で死んじゃうんだぜ…って、違う和也だな。

【コンコン】

控えめなノック音が静まり返った部屋に響く。

『和也…？　起きてる？』

レナの阿呆はベッドの上に布団の中で丸くなる。猫か貴様？　流石にバレるので、いろんなモノでカモフラージュする。どうやら、魅夜と話せと言いたいらしいな……この猫嫌い猫女は……。

「あ、ああ…」

（多分）完成したので、先程の言葉に反応する。

ううぅぅ……頼んだぜ？　レナ……！

『ちょっと、入って良いかな』

「どうぞ」

レナがバレませんように……。

神頼みって、こういう事だよね？

この夜…久しぶりに、魅夜と面と向って話せた。

【７５話】死神狂乱【後編】（後書き）

コロコロ先生、スミマセンでした。

m（＿＿；）m

【７６話】幼馴染みとして【前編】（前書き）

スランプです。

【76話】幼馴染みとして【前編】

内心ハラハラだ。胃が痛いぞ。
ベットの下に隠れれば良いものこの阿呆（レナ）がベットの上に隠れる……ん？
ベットの上だと……？　なんだ？　背筋に悪寒が……？
待て待て、猫を魅夜は抱いてる＝猫侵入成功＋超・猫嫌いってことは……。

……ま、て、よ？

全身からイヤな汗が染み出るのは気のせいであって欲しいものだ。
弁明できる自信がないんですけど……。

「ま！　待ってくれたまえ！　お嬢さん！！」
「か、和也ぁ！？」

自分でも咄嗟にでたこの一言は恥ずかしいです。
いや、どこぞのイギリス紳士なんだよ……それ依然に怪しさ満開だよ？
さらには、猫も居るし……レナは？

常任では見えない速さで振り返る。じゃないと、危ないからさ！

ってか、震えてる！？　めちゃ、小刻みに震えてるんですけど！？　ちょっと！！

「へ、部屋に猫を入れるワケにはイカナイから出してくれ」
「う、うん」

よし。第一関門突破だ！

「……魅夜、茶、淹れるぞ」

「うん」

さぁて……なにを言いたいかはわかるんですがね。

ポットにまだお湯が残っているはずだから（不服だが）インスタントの紅茶を淹れる。

冷蔵庫からは昨日の内に作っていたインドのお菓子のシャヒトゥルクルを取り出す。

ん？　どんなお菓子か、だって？　牛乳と砂糖を煮詰めたモノをパンに乗せたものだ、簡単に作れるから今度作ってみるといい。

＜材料（４人前）＞

・食パン（４枚）

・油（少量）

・サフラン（使わなくても可）

・牛乳（１リットル）

・砂糖（大さじ３、４杯）

＜作り方＞

１．食パンの耳を切って一口サイズに切り分けキツネ色に揚げる。

２．牛乳１リットルぐらいを鍋に入れて煮詰めて、サフラン（風味付けなので使用しなくても可）と砂糖を大さじ３、４杯を入れて焦げないように煮詰める。

３．三分の一くらいの量まで煮詰めたらパンを浸して、染み込んだら取り出す。

4．さらに煮詰め続けてもう一度パンを浸してコーティングする

5．これ以上は無理ってな具合にドロドロになったらパンの上に乗せる、冷えて固まったら完成

6．最後に刻んだアーモンドをまぶしても美味しいです。

根気よく煮詰めて浸さないと固まらないでピチャピチャになるから注意。

ま、簡単だろ？　冷凍庫に入れてしっかり固まれば良いしな。

これが、インドで食されるのは簡単だ。辛いものを食べた後には甘いものを食べたいっていう衝動的行動の1つ。インドのカレーは辛いからその分にこういうのも甘い物を食べてるんだ。

昨日作って冷蔵庫に入れてたからしっかりと固まってるし凄く美味しそうだ♪

「で、話しってなによ？」

シャヒトゥルクルと紅茶を魅夜の前に差し出す。

オレは長椅子に腰を落して魅夜と向かい合う、紅茶を一啜りして、睨むようにオレは魅夜を捉える。その眼に魅夜は少し肩を跳ね上げるが、落ちついてオレの眼を捕らえる。

「聞かせて、和也…」

最初に口を開くのは当然ながら魅夜だ。オレはわかりきってるその一言をただ待つ。

「なんで、いなくなったの？」

オレは……何をどうやって答えれば良いのだろうか？

―？？？―

おい、作者よ。レギュラーに『？？？』は無いだろ。

「いやいや、キミは影が薄いから」

「将よ、それは俺に言ってはならない言葉だぞ？　人が弄られキャラだから影薄なんて言いやがって」

「“けいはく”か“かげうす”は統一しなよ……」

もっともだ。フリガナをふっていないので、どれにするかはぁ…

彼方、次第。

さぁてと、ふざけてないで張り込みますか。

ん？　俺等はなにをやってたのかだって？　簡単だ、俺等は“端”の連中を監視していた。

ヤツ等に最近動きがあったらしくて俺等が監視の任を受けたんだ、依頼人は秘密だがな。

そして、出て来た問題は……“ロキ”が動いてるという事だ。標的は……多分、古都宮の者だな……ならば、１番能力の強い瑠依だろ

うな。

「駿、僕等もそろそろ動こう。何時もでも渋谷に居る事はない」
「だな」
「お～い。旦那♪」

席を立ち上がろうとした時に贔屓にしてるアクセ屋のじっちゃんが引きとめる。
まぁ、アクセはアクセなんだが……ココのアクセは魔力を封じられてる奴だ。

一般的に魔方陣は魔術に欠かせないものだ。しかし、一般的に俺等は魔方陣は神具（しんぐ）と、呼ばれている幾つかの魔方陣の代わりとなるアイテムを装飾したものが、魔方陣の代わりとなっているからだ。それは、こちらの世界で＜技術＞の意味である＜錬金術＞で作られた。本体の複製（コピー）だ。
それらは＜装飾品（アクセサリー）＞と、して用いられているのが一般的で、代表的なのは、指輪や首飾りなどである。
大抵の装飾品を用いる魔法は自分の魔力に比例して下級（ビギナークラス）・中級・上級（ハイクラス）・達人級（マスタークラス）に分けられる。
ハイクラスまでは魔法名を言うだけで魔法を使えるが。
マスタークラスの魔法は、聖霊との一時的な契約や詠唱。
詠唱の際にはその意味を完全に理解していることが必要である。

ま、俺みたいな格闘（蹴り）を多用するタイプの奴には、持っているタイプが違う。普通は補助系の魔封石（まふうせき）では無くて攻撃系の魔封石を使う物だが、俺等が用いるのは補助系だ。攻撃力上昇。速度上昇。硬化。特殊能力装飾。が、基本的だ。

「どうした？」

勿論、こんな装飾品を表に出すワケが無く。俺等が居るのは地下（アンダーグラウンド）だ。
渋谷の真下と言えば早い。ココはイロイロな魔術に関するものが置かれている。
「“端”の連中が相手ならコレをどうぞ♪」
店主から投げられた装飾品を上手に受け取り、広げて見ると。
“本物”の魔封石を用いた腕輪（ブレスレット）だ。黒を基調とし、中心には蒼穹（そら）みたいな純粋な蒼と霞みが繋った白。そして銀色の淵のブレスレットだ。
将はどうやら、首輪（ネックレス）だ。焔のように真っ赤な宝石が装飾されたネックレスだ。
ってか、本物ォォ！！？？
「ちょ！　店主！」
「流石、もう気がついたんだ」
「……轟焔石」
ご、轟焔石！？　おいおい、マスタークラスの神具かよ！？
「お代は？」
「いらねぇよ。“端”が相手なんだからコレぐらいはいるだろ？」
「悪いな」
しっかし、コレは……まさか、聖蒼石か？
魔力の桁が一般の魔封石と違うから良いのだろうな。五行の“水”

か。
五行の頂点に存在する魔封石だ、勿論、轟焔石も“火”の頂点だ。
しかも、本物だ。と、なれば物凄い威力の魔術ができる。詠唱は時間が無く学びはしない。
ハイクラスの魔術が幾つか刻まれてるからそれを使うか。

「将」
「うん」
「「行くか」」

―Ｈｕｍｉｙａ　Ａｒａｋａｗａ―

結局、オレは魅夜に全てを話した。オレが死神と人間の間にできた子だと。オレはそのレプリカ人間だと。オレの知ってる事を全て魅夜に明かした。勿論、大方はレナも知っていたのだろうが度々に肩を振るわせていた。魅夜はオレの話しを終えたと同時に呆然と虚空を眺めていた。網戸から入る夜風は心地良くオレが落ちついて話せた要員だった。

「それが、オレの逃げ出した理由だ」

自分で作ったお菓子を頬張り、立ち上がってオレは自分の紅茶を淹れ直す。

紅茶の独特な甘い華の香りが鼻を燻り食欲を誘う。古都宮のは流石に一般の砂糖を入れなくとも甘ったるいだけの紅茶ではなくて、しっかりと、ローズマリーの香りと丁度良い甘さの紅茶だ。なにやらワケのわからん銘柄だがな。

基本的にオレはコーヒーの方が好きなんだが、夜に寝れないと困るからな。

明日は、使用人を含めてのパーティーをするだがなんだか言ってたが……どうなるかな？

ヤツ等が動けば中止どころの問題じゃないからな……それに、みんなを外に出すべきだ。

みんなに……迷惑をかけれないしな。

「和也？」

「……魅夜、オレは……！」

なんで、和也って言うんだ？　オレを苦しめたいのか？

なにがしたいんだよ？　今更、全部知って、その名前で呼ぶなよ！！

オレは……雨宮和也じゃないんだ！

「……私は難しい事はわからないよ。でも……何が大切かわかる」

「……」

お湯を切り、嘆息してから魅夜を睨みつける。

昔のオレの眼光で。魅夜は多少顔を引きつるがたいして引かずに続ける。

「和也は自分を自分って言えないとダメなんだよ。第一に……オリジナルとレプリカ！　それ自体で違うじゃない！」
「わかってるよ！！　そんな事！！」
「和也はわかってないよ！！」

わかってない？　オレはずっと考えてたんだぞ！？　自分の事を！　オリジナルの事を！！
ずっと…ずっと……今も！！　何度も考えた！！　ずっと……迷ってるんだ！

「オレは…！」
「少なくとも……レナちゃん達からしたら彼方が、雨宮和也なんじゃないの！？」
「だが！　それは、アイツの……オリジナルが通る筈だった道なんだ！！　オレに……作り物にヤツの代理をする資格なんかあるか！！」
「ッ！　なんで、わからないの！？　彼方が代わりならば、彼方が和也の道を走るべきでしょ！　すぐそうやって逃げるなんて……彼方らしくないよ！！」
「だから、オレは雨宮和也じゃないんだ！」
「私が言ってるのは彼方！　雨宮和也としてえはなくて…雨宮和也レプリカ……コレまでの彼方を見てきて私は言ってるの！！」

ッ！　だから……どうしろってんだよ？
だから……オレに何をしろって言うんだ！　オレなんかに何を望むんだよ！！
今更、向かい合ってもしかたないんのに……なにをしろって言うつもりだ！？

「お前に……なにがわかるんだ！！」

「わかるよ！　和也の事をずっと見てたから！」
「オレをアイツと重ねるなよ！！」
「重ねてなんか……ッ！」
「人間のイメージなんか定着したら大してかわんねェよ！！」

ついつい……。手に持っていたカップを割ってしまう。
紅茶と血が拳から滴ってテーブルに溜まる。そんな事はお構い無しだ！

ベットの中に居るレナは少しづつ嫌な汗が出る。もの凄い勢いで、だ。
なにとなく、勘が働く。それは単なる……口喧嘩だと。

意味の無い口喧嘩が幕
を上げる。

【76話】幼馴染みとして【前編】（後書き）

元はと言えば我がクラスに居る友人ことエセ巫女になにやら、強力な霊に憑かれてると言われてなにとなく、苛立つからです……。
なにやら、俺は不幸な人間らしいです。
・ラノベ色に染まった押し掛け女房とかしたクソ幼馴染み。
・クラスには小学校からの付き合いのエセ巫女。
・そして、なにやら強力な幽霊。
・更には、ロリっ子（一番嫌い）
・女顔の野郎……。
・エセ関西弁の馬鹿（学年最下位）
・天才な天然生徒会長……。
なんで、俺の周りは属性が多い？
個性が強すぎだ……みんな。
しかも、全員がMですよ？
Sは俺だけッスよ？
全員の頭をかち割りたい……。
因みにココではハイなテンションの俺ですが学校では、学校1の無表情です。ええ、無口です。
バスケ部です。
っと、まぁ……今回は喋りすぎた俺です。
因みに次回はコメディ方面ですよ？　多分ね……。

そうそう、1人1人に鬱憤を……。
「いい加減ラノベの起し方やめて！！！　なにか知らないけど調理後のフライパンで起そうとしないで！！」
次に…「誰が憑かれてるじゃ！　エセ巫女がァァ！！　半殺しが望みか！？　友達減るぞゴラァ！」
更には…「幽霊がなんぼのもんじゃァァ！！　所詮はウソなんだろ

！！？？」

では…「ロリ女ァァ！！　俺はテメーが嫌いじゃァァ！！　可愛い子ぶりやがって！！！」

でもって…「そんな目（うるうる）で俺を見るなァァ！！！」

そして…「道産子だろォが！　アホォォ！！！！」

最後に…「天才なのか馬鹿（天然）かハッキリしろォォ！！！！！！」

はぁはぁ……では、さいよなら。あ、クラスの人……狭いこの世界ですが見たら黙っててってね♪

ま、こんだけテンションが違えば……バレないよな？

【77話】幼馴染みとして【番外】（前書き）

今回は読者様にお詫びを……。
今回は滅茶苦茶ヘンなテンションで書きました。
今回は酷いせす。
GW…何処にも行きませんでした。
学校に行けるのが安心です。
何故かって？　休みの日の8時には幼馴染みがフライパンを暖めて人を殺害しようとしてるんです。
よほど、俺の恐怖のリアクションが気に入ったのでしょうね。

【77話】幼馴染みとして【番外】

「だいたい！　昔から和也は勝手過ぎるのよ！！」
「昔なんか、知るか！」
「ここ、４年間の彼方よ！」
「だから、なんだ！！」
「もう少し相談とかしてくれたって良いじゃない！！」
「オレは、お前等に心配させたくねぇから！！」
「いっつも自己満足だよね！　本当ッ！！」
「せめて、自分が満足しないでやってられっか！！」

あ、どうも。レナ・フォード＝ライズ・ハールドです……。
只今、布団の中に身を潜ませて魅夜と和也の口喧嘩をきいとります。
アクまでも私の勘＝女の勘ですが……うん。多分、話しの路線がずれるね♪
スゲー、間近で昼ドラ見てるみたい♪　私って隠れ腐女子ですから♪　影ながら、和也×駿を……ウフフ♪　妄想は自由なり♪

さ：本性を曝け出すなよ

出たな、作者。しかもなんだ？　その格好は？

さ：ん？　飛焔のイメージ姿のミニチュア。分身達は忍者だけど本体はコレなんだよ。
飛ぶ焔（ほむら）＝火の鳥。ってことかな？　簡略に纏めると。

貴様……何故に今更？　貴様の仇名のネコでは良いではないか。
私がネコで出た時には瞬時に潰すんだけれども。その前に、和也達は？

和「ああ！　昔からお前は細かいことでグチグチグチグチィィ！！
　うぜぇんだよ！！」
魅「な！？　和也に言われたくない！　いちいちいちいちッッ！！
　頼ってよ！！」

和「オレは心配かけたくないからだよ！！　一人で生きて行けるから！！」
魅「和也が一人で！？　笑わせないで！！　寂しくて死んじゃうんじゃないの！？」
和「オレはハムスターか！！？」
魅「和也がそんなに可愛いワケないじゃん！！」

和「てんめぇ！！」
魅「やる！？」
和「やったろうじゃないか！　それより、中庭に幽霊がでるらしいぞ？」
魅「へ？　……ハ！　やってやろうじゃない！」
和「ヒャハハハ、恐いくせぇに無理しやがって♪」
魅「無理なんかしてない！！」

和「幽霊だけで失神ものだもんな♪　恐がり魅夜♪」
魅「ムキィー！！」
和「おお！　やっと猿（アウストラロテピクス）になれたか」
魅「私は人間よ！！」

和「あ、ポニポニ猿人か♪」
魅「なぁにぃおぅ！！」

……本題は？

さ：ＨＡＨＡＨＡ

……まさか、本当にただの痴話喧嘩となるか……。

しかも、乱闘まできたよ……。

さ：まぁまぁ……。

和「魅夜！　いいか、オレが１番オレの事を知ってるんだ！！　お前に……他の誰にも言われる筋合いはねぇ！！！」

魅「……和也が……１番自分の事をわかってないんじゃないの？」

お？

さ：お？

和「ふざけんなよ！　お前に…オレの……今のオレのなにがわかる！！？」

魅「居場所が欲しいんじゃないの？」

和「居場所？　ハァン！　オレには要らないな！　必要ない！」

魅「……ほら、和也が１番自分の事をわかってない」

和「ッ！？」

おお。

さ：おお。名前表記を消しとくか。

「和也なんかより……私の方が、レナちゃんも、ラミアちゃんに、ヴァン君、セフィリアに零亞！　将に駿！　他にも、龍二さんとか

……文一君……瀬川君とか……他にも多数の彼方を知ってる人！
みんな、和也より彼方を知っていて。雨宮和也を知っている！」
「他作だすなよ」

ソコでツッコミィィ！！？　何か間違ってるよね！？　絶対に！！
さ：僕もそう思う……。うん。
では、恒例になりましたね。コロコロ先生作　勇者以上魔王以上はリラックスしたい人に！　日常は本当にほのぼのします！　因みに僕のストレスを和らげます。主人公は……最強です。

更には、コニ・タン先生作・学園珍事　（×）ファミリーマート（○）ファミリア！　は、探求心溢れるちょっと大人な人にオススメ！　深いですよ！！　主人公は……執事ですね。ハイ、優しい人です

そんでもって、下弦　鴉先生作　ドSな俺とドMなアイツは……ツッコミが上手な方にオススメしますね♪　心の中で盛大にツッコミができます♪　主人公は罵倒されてます。

文字埋めじゃない？
さ：！！！？？　な、何を言うか！？

……図星じゃん。

「和也は優しいしか取り柄が無いんだから！」
「酷ッ！」

確かに。

さ：そだね。

「無駄に優しくて……。自分勝手で……。ナルで……」
「誰がナルだ！」

肯定してるよね？　ナルだけ否定するって事は…。

さ：うん。だね。

「すぐ怒る！」
「悪かったな！」
「でも、何時だって笑顔だった」
「オレはピエロか！？」

だから、ツッコミが何か違うッ！

さ：どうツッコムべきなんだよ？

どうと聞かれても……。困るよ……。

「頼りなくて……変な所で頼れて……」
「どっちだよ」

そのまんまそのまんま…

さ：そのまんまだって。

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｈｉｎｄｏｕ―

「っ！」

＜真琴、これ以上は危険だ＞

わかってねぇな……スケィス……。

俺を誰だと？　俺は最強の死神……神堂真琴様だぜぃ？　この程度で負けるかってんだ。

＜昌霊砲も４台動いてる……気がついてるだろ？＞

「だから？」

＜……俺等が相手にしてるのは何処かわかってるのか？＞

わかってるよ。ハハ、だから面白いんだろ？

此方の世界の３本指に入る組織全てなんか相手にできるったぁ……よほど、お気に入りらしいじゃねぇか……この俺の事を……ハハハ。

「四二神だろ？　それに、冥界（タルタロス）の連中と、魔具組織だろ？　やれやれだ」

＜貴様！　タルタロスの連中は未（ま）だしも……魔具組織まで相手にす

るか！＞

仕方ないだろ、なっちまったもんは！
第一、俺が出るだけでまさか、総動員でぇすか？

「悪いな……。付合え、スケィス！」
＜……肯定だ。右斜め４３！＞

スケィスが指示した方向からくる閃光。色は白。族はレムか。ざけんなよ…！
こちとら、“闇”の属だぜ？　相対する属性じゃ……魔力の大きさで決まるってな！！！

＜！？　避けろ！　真琴！！＞
「どうした？」
＜……ヤバイのが来るぞ＞
「……面白い♪　俺の邪魔をする奴は誰だろうと……とことん切り裂いてやる！！」

―Ｒｅｎａ・Ｆ＝Ｌ・Ｈ―

あ～。ぐだぐだだよ……。

さ：夜風が冷たいからって僕を湯たんぽ代わりにしないで

湯たんぽなんて知ってる人少ないよ？

北海道人でもあまり知らないんだしさ。

さ：悪かったな。中３だけど親父だよ。趣味は囲碁だよ阿呆が。

親父だ……精神が。

さ：ってか、自分も知ってるんじゃん、湯たんぽ

……私は知的な女性ってヤツだから♪

さ：夢を見るのも体外にしろよな

……指定空間重力増強。

さ：飛べない鳥はただの鳥なっ！！

……飛べない鳥はあまりいないよ……。

さぁて、作者も気絶した事だし…和也達は何を？

「オレは……」

「いいんだよ、弱音を吐いて」

待てぇい！！！　進みすぎじゃああ！！！！！！

さ：では、次回で！

待てぃ！！　結局これはお前が書きたかっただけのコメディだろ！？

ってか、何があったか大事な所が抜けてるってなによ！！　結局に私は大事な所を聞きのがしたの！？　ちょっと！　まだ、説明してない所があるじゃないですか！！

これって、殆ど会話ですよねぇ！！　ちょっと！　逃げるんですか！！

さ：某芸人かァァ！！！！！！

【77話】幼馴染みとして【番外】（後書き）

次回は真面目に書きます。

【78話】幼馴染みとして【和也編】（前書き）

今回は2つに分けました。

【78話】幼馴染みとして【和也編】

……気のせいであって欲しいんだが、魅夜から犬の耳が見える。
ほら、大型犬の垂れた耳だぞ。
尻尾までご丁寧に見える。作者、獣耳属性が大嫌いなくせいにヘンな事をするな阿呆が。
む？　そうか……お前は自分の周りにもいる属性も嫌いなのか……
お前、ヲタクを敵に回すんじゃないか？

だって、押し掛け女房に、巫女にといろんな属性が居るじゃないか。
ん？　帰って来～い。何を怒ってるんだよ？　おい！　キーボードを強く叩き過ぎだ！！
や、やめッ……。

そ、そんな事より！　魅夜だ！　魅夜！！
コイツ、「和也は自分の事をわかってない」だか言い張るんだぜ？
本気でムカツクんだが……他人に……オレのなにがわかるってんだ！？
オレはずっと自分の事を考えて来たんだ！　ずっと…ずっと……。

イヤ、オレが考えていたのは自分（オレ）の事じゃない……自分（俺）の事だ。
オレは自分の事をそっちのけでアイツ……オリジナルの事を考える。
オレは彼の道を歩いてる事に不満を抱いていたんだ。結局ソレはオレが渡る人生ではなくて…俺が歩む人生で……何にも変え難いモノなんだ。オレはソレを平気な顔で土足で踏み入っていたんだ。なのに……オレは何も償いが出来なくて。脱線しただけで……ココにみ

んなが居る事は大して代わらない。

オレは自分を変えたかったワケでは……ないのかも知れない。ただ……黙々と進むだけで……何もしない。我武者羅に進んで自滅したがってたんだ。何時かは…なにとなくなんだけど……端の連中と対峙すると思ったからだ。実際は金とかが目的じゃなくて……自分が散れる場所を捜してたんだ。生きる意味は無いから……生きていても……オレは誰からも望まれて無くて…本体が生き残るパーツとして作られただけの存在でしかない。

所詮はそんなヤツで……自分の事を二の次で他人を見てきた。これは、自分の存在に確信ができたからじゃなくて……どうせ、高校の卒業まで持たないならば…何事にも全力で向き合って、適度に手を抜いて……友人と楽しく生きてきた。ずっと、影では姑息な事だらけだけど……生きてきたんだ。オレは……何が大切なのかはわからない。

でも、遠まわしなんだけれども……魅夜はオレのその生き方を侮辱してるように聞えて仕方ない。

アイツにはそんな気は毛頭無いだろう。被害妄想の被害者だ。言う。お前はオレは自分を知らないと言った。けれども……お前はそんな弱いオレを知っていたのか？　他の連中は！　オレの何を知っているんだ!?　表向きの無鉄砲で自信家で……ずっと頑張って来たんだ！　ずっと、弱音を見せないように頑張ったんだ!!　誰も……オレの奥底に眠る深い闇には気がつきはしない……。

なのに……何が知ってるだ!?　何がオレはオレの事を知らないだ!!　なら、知ってるのか!?　オレの闇を!?　オレの裏の姿を!?　いつも何かに脅えて……それでも、平然としていたオレの事を!?　お前等は……何を……知ってるってんだ……ッ！

何も知らないで……。何もわからないで……。何も気がつかないで……。
お前は……お前等は……オレの何を……本当のオレを知っているのか!!!??
無責任に言っても……オレは結局は……何も出来ないんだ。

ずっと前から……
そして今も……

何も……出来ないんだ。
弱い……オレは、強くなんか……ない。
オレは……何より弱くて……脆いんだ……。

オレは……幼馴染みとしては……柴原魅夜を知っている。
だけど……心の内で考えてる事なんか……わかる筈が無いんだよ……。

オレがレプリカだからかも知れないけど……オレは柴原魅夜を知らないように……お前も知らないんだろ？　オレは……幼馴染みとしての……お前しか……知らないんだよ。わからないんだよ……。

オレもそうみたいに……お前もなんだろ？　幼馴染みとしてのオレしか知らないんだろう？

たかが……幼馴染みなんだろ？

【78話】幼馴染みとして【和也編】（後書き）

いえ。なんでかと聞かれましても……ただ……なんとなくです。ハイ。

【79話】幼馴染みとして【魅夜編】（前書き）

最近、ヤケに金縛りになるんですよねぇ……。

エセ巫女が人を憑かれ者扱いしてからなんですよ？

……あのエセ巫女……なにか憑けやがったか？

相談する相手を間違えた……あのラノベ中毒者に相談したら「ふふふ♪　ナイスよ♪」

何がだよ……。

何だよ……その期待の視線は……？

言っておくが、霊感なんか無いから意味がないぞ。

【79話】幼馴染みとして【魅夜編】

……気のせいであって欲しいんだが、和也から犬の耳が見える。ほら、小型犬のピンッと立った耳だ……か、可愛いぃ……ハっ！ち、ちぎゃ（噛んだ）。

尻尾までご丁寧に見える。尻尾を見て気がついたんだが良く見たらキツネの尻尾だ。良く見たら金色の毛……。ついにキツネにまで成り下がったか……。

それより、作者は、獣耳属性が大嫌いなくせいにヘンな事をするね……馬鹿みたい。

ん？　そう……お前は自分の周りにもいる属性も嫌いなんだ……（個性が強すぎるからね……ありゃ）ってか、ヲタクを敵に回すんじゃないのかな？

だって、押し掛け女房に、巫女にといろんな属性が居るじゃないの……な、なに？　イヤな気配が……？

ん？　帰って来～い。何を怒ってるの？　ちょっと！　キーボードを強く叩き過ぎ！！

や、やめッ……。

そ、そんな事より！　和也だ！　和也！！

実際はあの阿呆、なにも自分の事をわかってないんだもん！

だれもが、和也の本来の……弱い姿を知っている……気がついてる筈だもん。心の底から強い人なんて……本当は居ない。誰しも……心に必ず弱さがある……え？　“あの人”？　ハハ…例外じゃないかな？　でも……私は思う、“あの人”でも弱さがあるんだと思う。弱くない人間は居ないんだ。だってさ…ベタなんだけれども、支えが無ければ“人”の漢字は倒れて“一”になってしまう。２つとも

“ひと”と呼べる漢字だ、けれども……支えのない“一”は一人……孤独の事だ……。

うむ……常日頃から金八先生を見てるから勉強してる私を甘く見るなよ♪

※良い子も悪い子も普通に勉強しましょう

私は知っている。和也は意外と弱いんだって……。和也はウソの天才だと……馬鹿なキツネなんだと、普段は平静を装ってるのに時と場合には簡単に薄っすらとその顔を現す。楽観的な阿呆だと思ってきたヤツはそれこそ阿呆だと思う、和也は常に後先を考えてる奴だ……昔から先を見据えてるけれど、最善の手より親友や他人すらも優先して和也は動く……無理矢理にその先の運命を切り開いて来た……けれども、和也は自分の事となると凄く疎い。自分の事はお構いなしに他人に気を配ってる。和也はだからダメなんだ。自分はずっと我慢して生きていたから……一気に襲いかかってくるし…自分の事は、まったくと言っても良いほど無耐性なのだ。弱音を吐けば良いのに……それを言わない。どんなに辛くても淡々とやって…自分で苦しんでるだけなんだ。

だから……この和也なんだ。

昔の彼は……この彼程酷くなかった。逆に真逆だ。なにとなくなんだけど……彼は何事にも素直で隠し事はできない人であった。馬鹿正直（さ：補足ですが、魅夜の前では）だった……。上手くなったんだなぁ……と、思ってたが……まさかこんな複雑だったとは……。

でも、先巡したように和也は自分の事を全くわかってない。

だって……和也は大事な事を知ってるもん。

和也は良く言ってる「自分が自分って言えるなら自分だ。だけれだ、自分で自分を認められないならば……ソイツは名無しだ」と……。

だから、和也はわかってないのだ。

バーカ。

彼方は…雨宮和也でしかないんだから、さ。

それ以上でもそれ以下でもない。

だって……和也は和也だから。私は小難しい事はわからないけど……。

雨宮和也に相応しいのは彼なんだから……私がそう思うだけで……。実際に、和也（本物）に聞かれたら殴られそうだけど……彼を知ってる私だから言うのだけれど……雨宮和也らしいのは彼なのだ。イヤ、コレもなにとなくで……。

そう！　客観的な幼馴染みの勘よ！

好き嫌いでは無くて……。う～ん。本当に勘なんだうよね。

私は彼に出来るのは……幼馴染みとして……彼の……雨宮和也を証明するぐらいしか出来ない。彼に居場所を与えるのは多分……私じゃなくて他の誰かだから。

幼馴染みとして……私は……彼に出来る最大限の事をやる。

【７９話】幼馴染みとして【魅夜編】（後書き）

なんか……憂鬱だな……。

それは、そうと。作者は１１日（日）から盛岡へ修学旅行に行きますＺＥ

４泊５日　５日間更新出来ませんのでスミマセン。

盛岡の人、お手柔らかにお願いします、

【８０話】ＷＨＩＴＥ　ＤＥＶＩＬ（前書き）

今回は章外的な感じです。今回は昔から考えていたお話しで速めに書き進めたかったんです。
今回は和君達から離れたのも少しワケありでして……ま、私事情なんですがね……。

【80話】WHITE　DEVIL

「瑞穂」

一人の青年がベットの上に横たわる少女に話しかける。
青年はフライパンを持ちながら、ドアの隙間から呼びかけるだけ、
少女は少しだけ眉を引きつるが起きる気配は毛頭ない。青年は嘆息して部屋に入る。

「瑞穂！　ご飯冷めるよ！」

耳元でそう叫ぶ。しかし少女は断固起きない。白い薄着で寝ている少女は青年の言葉に少しだけ反応するが、全く起きる気配はない。青年の眉間にシワがよるが、無理矢理に起そうとはしなかった。別に持っているフライパンで叩いても良かった。しかし、青年はわかっている。この少女にそんな事は出来ないと。

そもそも、この青年は卯月騎士（ナイト）と言うカメラマンだ。地道に紛争地域等の戦場カメラマンよ“やっていた”者だ。彼がココに居る理由は一つ、最も関ってはイケナイ“端”の存在までも嗅ぎつけてきたのだ。紛争は大抵は宗教派閥などの理由がある。ならば、その根元……“端”の者達が根回しをしたならば？

“端”は全世界に多数置かれている組織の総称だ。１部の地域とは異なる思想……思惑がある。“端”は別に全世界に置かれてるワケではない。そもそも“端”というは組織でもないのだ。

ただ、強力な力と思想を持った者達の集団でしかない（俗に言う、羽毛の衆）。だから、その思想によって入る組織は違うのである。

“端”はウラの世界の最も深い層に居る連中の総称の事だ。だから組織なんて数百近くはある…と、思うのは違う。“端”は大きく分

けて3つの組織で織り成しているのだ。まずは、頂点に君臨する組織【十二神（トゥウェルブ・ゴッド）】と【騎鋼師団】、【終焉（フィナーレ）】この3組織である、第一にSクラスの能力者はかなり少ない存在なタメにあってもすぐさま巨大な闇に飲まれるのがオチなだけで、他にも細かいのがあっては両指で足りる。

ソコに嗅ぎついてしまったのだ、卯月騎士は。そもそも、騎士（きし）と書いて騎士（ナイト）と読むのは強引すぎて彼は昔からイジメの対象になっていた。それに、ひょおんな事から不幸になるという産まれ持っての不幸体質なのだから仕方ない。

勿論、嗅ぎ憑かれた“端”の連中が黙ってるワケも無く、騎士を殺そうとする者が彼を襲うが、現状では彼は生きている。勿論、生霊、死霊などではなくて……だ。

それは、ベットで横たわる推定12歳の少女…神裂瑞穂（かみざきみずほ）によるモノだ。たまたま街を歩いていた少女である。騎士とは本当に無関係だ。そんな彼女に騎士は救われた。別に金を横流ししたワケでもなければ、“端”の者達が止めたワケではない。返り討ちにしただけである。

ウソみたいな事かも知れないが、14秒、彼の時計が間違えていなければ、正しい。

14秒で連中は死に絶えた。コンマ単位の動きをする者達からしたら少しは長いであろうが、彼から見ればまさに秒殺であった。

「起きてよ……」

そんな彼が何故に同姓（もとい同居）してるのかと、言うと。瑞穂が騎士がどうせ、コレからも命を狙われるのだから、どうせならウチに来れば良い……そのような言葉を言い、彼がお言葉に甘えた

だけである。ま、当然に端（外野）から見ると同性だ。しかし、彼女も12だと言うのに育つ所はかなり育っていてムラムラしない男は少なくないであろう。けれども……彼は別にそう言うのではない。別に彼は熟女趣味とか他の属性ではない（本人はノーマルと言い張る）が、自分でも気がつかない程度のロリコンである。

そんな、初っ端から変態視されているこの（少しは）ロリコンの彼が彼女にムラムラしない理由は一つだけ。

「……いい加減にぃッ！！　【スパン！】　……」

1歩踏み出したと同時に頬に熱いなにかと音が聞えた。

そっと触ると指が真っ赤になっていた。機械的な動きで後ろを見ると……真っ白のナイフが壁に突き刺さっていた。

「……蚊」

それが寝起きの少女が発した言葉であった。よくよく見たら刃先に蚊が一匹壁に刺さっていたのであった。

これでわかったように……彼女に手を出せない……と、いうか。

彼女が恐いのであった。

第一、それは“端”の連中を相手にした時に気がつくべきであった、騎士（ナイト）であった。

「……」
「……」

前文で何処かのアホが失礼な事を言ってなかったでしょうか？
そうですか、なら幸いです。ん？　眼が冷たいですよ？　読者様？
お疲れなんでしょうか？　それなら一回、仕事の事も忘れて紅茶でも甘いものを食べれば良いのではないでしょうか？　それなら、１００均の板チョコでも食べると……
ん？　違うと……なら良いんです。

「……」
「……」

ま、あの後は大人しくご飯を食べてるんです。ま、大人しくと、言っても無言なんですけどね。
基本的に瑞穂は無口だ。ご飯中の会話は「おかわり」「了解」という簡易なものだ、おかわりをするのは瑞穂の方だ。でも、おかわりするのは美味しい証拠であって、料理をしている僕としては嬉しい限りだ。最初の頃は「え～」と言ったら脇差（真っ白）で脅された。

真っ白な脇差というのも彼女が脇につけてる刀（サムライブレード）の事だ。
村正……有名な妖刀だ。銘は【白】っと、いうらしい。
らしいと、言うのはただ彼女が何も言ってくれないだけである。
銘である【白】とは、その純白のデザインからである。刃も柄も全て真っ白から来ている。毎日、手入れをしてるようで毎日見れば

少し綺麗になってる日もある。

村正【白（ハク）】の切れ味は凄まじい、簡単に巨石をチリも残さず消えた程だ。

もちろん、一振りで。

「おかわり」

「了解」

差し出されたご飯茶碗を差し出して僕が受けるって、ご飯ジャーまで歩いて向う。

別に駆け足にする意味はないし……。だけど――――不思議なんだ。

毎回おかわりを頼まれて立ち上がるとすでにおかずの量が僅かながら減ってるんだよね……ま、どうでも良いんだけど……。

「まだ、ヤツの消息が掴めないのか？」

「は、はい！　只今、ぜ、全力で捜索を…」

「見つからないと意味がねぇだろ。ヤツが我武者羅になって撮影してたカメラに“アレ”が入ったんだぞ！？　ええ？　コレが他の“端”にばれたら2つ共襲ってくるだろぉが！」

「は！　心得てます！」
「それで、見つからねぇなら意味ねぇんだよ！」
「ッ！　2、3日までになんとかします……」
「頼んだぞ。魔装騎兵は我等が騎鋼師団の切り札なのだからな」
「はい。我等が理想のタメに！」

「蒼譜ぅ～♪　私は行かなくて良いのかなぁ？」
「ん？　ニナ…大丈夫だよ。別に相手が雨宮和也じゃないんだから…」
「古都宮瑠依は“ＤＴ”なんだよね？　大丈夫なのかにゃぁ～？」
「うん。ニナの出番は来ないよ」
「それはそれで寂しい……」
「それに、ニナが来たら古都宮の家なんてドーベルマン（犬）だらけだよ？」
「……い、行かないよ！　私！！」
「ははは、大丈夫。僕だけで十分だしね」

「ＷＨＩＴＥ　ＤＥＶＩＬは？」
「あまり動いてないな」
「騎鋼師団は最近怪しいな…」

「なにやら、兵器を作ってるみたいですね」
「ふん。どうせ魔具組織も関ってるのだろう？」
「だろうね」
「では……最大限の脅威は……」
「神路蒼譜……ロキか」
「ヒャハハ♪　いいじゃん、楽しければさ♪」
「やれやれだな…お前は」
「どうします？　ゼウス？」
「まだ……動いても意味がないだろう？」

白は見定め。
闇より深き深淵の光。白き光は潜み、時を待つ存在…

鋼は追い。
世界を越え繋がる物。騎鋼は秘密を追い、それは、抹消の兵器…

闇は狙う。
その闇は、２人の運命を動かす存在、復讐の鬼神は、ある死神を…

そして、神は見物す。
全てが集う闇、全ての始まりと終り。全ての高みに存在する最後の扉…

闇は揃いつつある。光は闇に埋もれたまま、さ迷いし浪人。全てが染まりし時、物語は終盤（フィナーレ）へと移行する。其（そ）は全てが深淵に満ちた一筋の光なり。

雨宮　和也　彼が…全ての中心なりける存在なり。

さぁ、進めようじゃないか、深淵より深きカオスなこの物語を。役者が揃うまで、役者が舞台で舞う為に……進めようじゃないか。

少年と死神

の物語を。

【80話】WHITE　DEVIL（後書き）

関係ないですが。
エセ巫女曰く
「守護霊以外の霊があまり人と長く近くにいすぎると守護霊が去って“彼女”が守護霊になるけど？」
後は、色々と御託を並べましたね……。難しい事はあまり知りませんし、興味もありません。盗み聞きした幼馴染みも途中参加しややこしくなりましたね……本職者に聞くべきと思ったんですがね……。ってか、女性の幽霊かよ……。
「ラノベ的匂いが……」
なんつー嗅覚だ。アホ幼馴染みよ。

なんか、最近自伝かしてる？
俺って……女難の相があるかな？
なんだろ？　殺意の視線が……？

では、新キャラを纏めましょうか。

卯月（うづき）　騎士（ナイト）：戦場カメラマン。四捨五入すると三十路（みそじ）の青年で、カメラマン暦8年。戦場カメラマンとしての鼻が効いていて、ウラで紛争の意図を引いていた“端”の存在に勘付く。感づかれた“端”の一部の組織から狙われてる所を、神裂瑞穂に助けられ、現在は同姓（もとい、同居中。

神裂（かみざき）　瑞穂（みずほ）：謎の少女。いつも脇差の村正を持っている。実質、本編の最強さんで、何故か白の色が好き。

ニナ・フォード＝ライズ・ハールド：ヒ・ミ・ツ♪　あれ？　と、思った方はしーですよ♪　実験番号（シリアルナンバー）は２７、通称、最終演奏（レクイエム）者。

【81話】幼馴染みとして【後編】（前書き）

修学旅行から帰って参りました！！
速攻で作った話しですがどうぞ！

【81話】幼馴染みとして【後編】

普段は全然頼りなくて、変な時にはヤケに頼れる。
まったくその通りだ。うん。オレは……魅夜に対して……不器用だった。
アイツにはアイツなりに望んでいた事があっただろう……でもさ……あの頃のオレは恐かったんだ、唯一のオレの居場所だった彼女にどうやって接すれば良いのかさっぱりだった。

「和也は……なんで……いつも逃げるの？」

そうだ……オレは嫌われるのが怖くて……魅夜に何も出来なかった。
本音とは違って……逃げてた。

「……」

「大事な事だけ答えないし……なんで、強いのに逃げるの！？」

「……」

逃げるしかない……なかった。オレは恐がりだから。臆病だから。何時も…影で脅えていて……これからの展開に予測がついてる筈なのに……あと1歩が出ないんだ…弱いから……恐いから、逃げてた。

だって、自分がもう長くないと聞かされて…更には、唯一の拠り所であった、魅夜までも失ったら…オレは……全てを失っていて、自分がおかしくなった筈だ……さもなければ、オレは自殺でもしたのだろう……。それ程、オレの中で魅夜はそれまで大事だった。何

より大切だった。

今……わかった。オレが魅夜に寄せてるのは好意じゃないんだ……。

これは…多分…居場所。心の拠り所……そんな気持ちを押し付けていたんだ。身勝手に……自分勝手にアイツに押しつけてたんだ。自分が心地良いからって……。本当に……オレは弱いヤツだ……。

強いのは……力だけだ。その反面……オレは弱いんだ何よりも……誰よりも心が打たれ弱いんだ。何時も逃げてるのはそのせいで、後ろを振り向けないのもオレが弱いから。

「強くなんか……ない」

「ううん。和也は確かに弱い存在だよ？　和也だけじゃない……私も…他のみんなも」

オレはその言葉に疑問を感じて魅夜を見る。アイツは何時も通りの笑顔でオレを見つめる、その笑顔に軽くオレは恐怖するものの、魅夜から視線をはずさない。

「人ってみんなそうだんもん」

その一言でアイツは切り捨てる。

「人って、一人じゃ弱いままだもん」

そうして、続ける。

オレは呆然と眺めるだけでなにもしない。

「私の支えは和也だった。だから“人”になった。和也が居ないと支えがなくて“一”だもん」
「いち？」
「そう。支えが無くて、他になにも無い孤独の漢字」
金〇先生か？　……エロワードっぽいぞ？　ソコに伏字を使うと。
「……」
「今の和也は“一”なんだよ。支えがなくて倒れた漢字」
その通りだ。オレは真っ直ぐにしか進まないし、何も支えというモノがない。
だって、支えが無くなったから……“オレの”支えじゃないから……。
オレは……孤独で良いんだ……。
「私も…今は“一”なんだ。凄く……虚無感があるの……彼方が居ないから」
「違う！　魅夜には沢山の支えになるヤツが居る！　オレみたいな不安定な存在より！
第一……本当（オリジナル）の俺が居る…アイツが支えになるし、目を覚ました時にアイツにはお前が必要なんだ！　アイツが魅夜の支えに相応しいんだ！　オレなんか……存在異議はただのパーツでしかなくて……だから！！　オレには何も必要なんかないんだ！　使い終わった…遊び飽きた玩具と同じでそのまま捨ててくれればいいんだ！　もう、何も必要ない！　もうなにもしなくて良い！　オレを放って置いてくれよ！　オレに……優しさをぉ……見せないでぇ……くれッ！
っっ……オレは……このまま……孤独でぇ……良いんだ……オレは……何も必要ない。優しさなんかっ……不必要だ……オレは一人で

十分なんだ……満足してる……孤独のままで……良いんだ。ずっと、このままで良いんだ！　オレは……このままで居させてくれ……あの居場所を……オレが1番好きな……好き“だった”場所を思い出させないでくれ！！　惑わさないでくれ……オレにはもう、必要ないんだ……なにも。だから……なにも感じさせないでくれ……このままで……いいからっっ……。ただ、傍観してるだけで良いんだ……だから……放っておいてくれないか？　オレは……もう、なにも……できないから……お前等に出来る事は無いんだ……このままで……もう、精一杯なんだよ……疲れたんだ……。

だから、もう、関らないでくれ……静かにさせてくれ……オレは……なによりも、弱い存在だから…自分でもどうしようもないから……」

上擦った声で…オレは嘆く。どうしようもない苦しさに浚われて……涙が毀れて如何し様もなかったんだ。自分の弱さを始めて本気で喋った、自分でも恐ろしい程のマシンガントーク。その分にオレの弱さがぎっしり詰まってって……胸が如何し様もなく苦しくて……ただ、嘆くだけ。

魅夜は優しい笑顔で、言う。

「自分の弱さを知ってるから……私も、和也も強いんだよ」

違う。オレは弱いんだ。

「だって、自分の根本にある弱みなんて……自分でも向き合わないもん。それを、考える事も避けてしまうから……。でも、和也もソレにちゃんと向き合ってる。自分の弱い所を知っているからであって…誰しもが逃げてる場所に負けを覚悟して挑んでる……」

オレは涙を袖で拭って魅夜を見直す

「それって、凄い事だよ？　負け試合を挑むなんて誰もやらないもんね……特にプライドがちょっとだけ高い和也が♪　だから、尚更凄い事なんだよ。そして、和也はソレを曝け出した……ソレはもう凄いを通り越して強いんだよ……それに和也は自分の事を既に倒して……本来の自分を見ている……彼の闇と無断で戦って自分を傷つけてる……」

魅夜は、相も変わらずに優しいその笑顔でオレを真っ直ぐ見て続ける。

よく見ると、なにやら聖女みたいな感じが漂っていて……何故かまた涙が溢れ出してくる。

ワケのわからない事に戸惑うが、魅夜はそんなオレを気にせずに続ける。

「傷だらけになっても崩れないで……そして、その責務…っていうのかな？

彼に償いがしきれない…出来ない自分が不愉快で……ソレを……その責務を忘れさしてしまいそうな私達を遠ざける……けれど、私達はずっと彼方を追いかけてる……私には……いえ、私達には彼方が必要だから……私達をずっと支えてくれたのは彼方だから……」

涙が止まらなくて……嗚咽をなんども漏らしてしまう。胸が如何し様もなくて苦しくて…自分ではどうにも出来ないほど……涙も、嗚咽も、胸の苦しみも納まらない。

全てのコントロールが出来なくて……。

オレは……泣いてるって自覚した。

「だから……私達が彼方に借りを返す為に……彼方の支えになりたいから来たの」
「オレは……」
嗚咽の収まらなくて、まるで蚊の鳴くような小さな声でオレは呟いた。
「いいんだよ、本当の弱音を吐いて」
脆く膝を付いてしまったオレを優しく抱きしめて魅夜はそう呟く。どうやら……コイツには隠し事は不可能だったみたいだ……誰よりもオレと居た時間の長い彼女にはオレは適わないんだ……。幼馴染み……オレのでは無いけれども、オレの幼馴染み……何よりも大切な存在……ソイツは最初からオレの居場所を知っていて見ぬ振りをしながらオレが出てくるのを待っていたんだ……強がって出てこないオレを尻目に見ながら……。
適わないや……。ソレに気がついたオレは出てくる。ずっと隠して来た弱みが……。
「オレにっ……居場所をください」
そう呟くオレを、アイツは……いや、あいつ等は笑顔でこう言う。
「おかえり、和也♪」
その言葉に……本格的に泣き出してしまう。
オレは……自分で見ぬ振りをしていた弱音を大人しく出るのを待たないで……魅夜に急かされて見つけ出してしまう。そして、隠れて

いた表のオレは魅夜に負けて出てくる。

溜め込んでいたものが、全て溢れてしまって……どうしようも無く呟いた言葉を……

快く、了承してくれた……オレの小さなワガママ。『自分(オレ)が休める場所』俺ではない、オレの休む場所……居場所を……。みんなが居る、アソコを……。

「……ううっ…」

「我慢できないなら、しない方が良いよ。私しか聞いてないから」

「うわあああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…」

今晩、オレは生きていて始めて……本気で泣きじゃれた。

ずっとずっと……オレは止まらない涙に……身を委ねるばかりであって……どうしようも無かった。

傍に居てくれた魅夜の体温が……何よりも……心地良かった。

「……」
「瑞穂？」

急に立ち止まる瑞穂に僕は多少、焦りながら訪ねる。
もしかしたら、アイツ等かもしれないかであって……何時でも逃げる準備は万端だ。
だ、誰だ！？　「ダサッ…」って呟いたのは！？　そして、何故か否定できない自分がぁぁ…

「……動いた」
「？」

確かに彼女は意味不明であるが……動いたってなにが？

そうこう言っている内に僕は端の一部の組織に潜入して撮った写真を眺めていた。
コレはなかなかのモノであって凄く貴重なものであった。

突風によって指先に掴んでいた写真が空を舞う。
当然、僕は全力で手を挙げるが届かない、空を舞っていた写真がプツリと消えて、ソレを追うとその先には瑞穂が掴んでいた。

「あ、ありがとう……」

僕の言葉に瑞穂は反応せずに写真に穴が空くように食い入る。
その写真に写っていたのは無数の黒い機械的ななにか、珍しく瑞穂は顔を青ざめて呟いた。

「相剋魔神機……」

「は？」

冷たい旋風が、僕の前を駆けた。

【８１話】幼馴染みとして【後編】（後書き）

今回は大切な回なので落ち着いたら書き直そうかと…

修学旅行中はツッコミに疲れ果てた結果にできたのがコレです。
ＨＡＨＡＨＡ　一番酷かったのはクラス中が俺に憑いてるとされている幽霊を撮ろうと全員掛りで写真攻めにあって必死に逃げてた事ですかね……そして、それを微笑んでいた教師……僕は彼方を恨みます。

【82話】Ｄｅｓｐｅｒａｔｅ　ＬｉｆｅＧａｍｅ【前編】（前書き）

別題、文也ＶＳレナ二回目の前編。
今回はしっかりとした、前後編です。

【82話】Ｄｅｓｐｅｒａｔｅ　ＬｉｆｅＧａｍｅ【前編】

「双六やろ～♪」

唐突に、何処から出したかわからないボードゲームを出す死神。

「……お前等はいい加減出ろ」

目を三角にして睨み、レナに向ってそう言う、オレ。

「……」

そして、それを逆三角形にして、あきらかにオレを凝視する幼馴染み。

読者様、真に申し訳ありません。状況の把握に少し時間を戻らせていただきま…

さ：めんどいから、やらない

さぁぁぁぁぁぁくしゃぁぁぁぁぁぁああああああ！！！！！！！！！

「「和也」」

「ひゃい…」

絶対零度を遥かに凌えそうな声音でオレは上擦った声で呼びかけられた為にオレはしゅんっとなって座り直す。まぁ、聞いてくださ

い……。事の起こりは2時間程前……。

さ：だから、戻らないよ。

作者！　そんなにめんどくさいのか！？

ってか、なんだ！？　この題名は！　和訳すと……わかりません。

さ：【死に物狂いの人生ゲーム】だけど？

なっ！？　まさか、レナが持っていた人生ゲームって……ッ！

さ：僕が作ったヤツだよ。

クソ！　やってたまるか！！　やれるものなら、やってみろ！！

さ：作者の権限を使うよ？

ひ、卑怯者ぉぉ！！！

さ：神に抗うなど笑止ッ！　無駄無駄無駄ァァッ！！！！

「「……かずや」」

「スミマセン、舞い上がってました……」

恐いよぉぉ……。この2人はどうしようもなく恐ろしいっス。

逆らえません、そして、助けてください……。

オレは今日……殺されるかもしれません……。読者様、真に申し訳ありません。

作者が、時間を戻らせないので、ココはオレが……。

簡単に言います。レナがくしゃみをして、魅夜にバレました。
そこから、恐ろしいのなんの……。尋問に次ぐ尋問。延々と繰り返される言葉の暴力。
更には、肉体への暴力と、隣でケラケラ笑う、レナ。
怒りのボルテージが上がるが、魅夜の説教は続く。何時も通りです……はい。

「最初はグー」

イキナリ!?　ってか、魅夜もノリノリなんですか!?
ってか、身体が勝手に動くんですけど!?　ちょっと!!　作者ぁぁぁあああああ!!!!!!!!

さ：特権、執行。

「じゃんけん…」

クソ！　やれって言うならやってうやるさ!!!!!

先攻・雨宮和也
資金・１００００円
職業・不良

中攻・レナ・フォード＝ライズ・ハールド
資金・１０００００００円
職業・財閥（総帥）

後攻・柴原魅夜
資金・２０００００００円
職業・泥棒（または、怪盗）

さぁて、最初から職業がある事に疑問があるでしょう。
そして、レナとの差がどうでしょうか？
ま、この説明をしましょうか……

飛焔Ｚ「ども、飛焔Ｚです」

文也「マジ○ガーか！？　この調子だと、グレートでるんじゃね！？」

飛焔「まぁまぁ…」

文也「戻った！？」

飛焔「それより、ルール」

文也「ルーネス？　ＦＦ３か？」

飛焔「わぁーわぁー」

文也「要点は普通の人生ゲームだ。しかし、最初からプレイヤーは職業が決められて……と、いうか、ルーレットで決める。その時に決められている資産が決まってるんだ」

飛焔「後は単純にその職業の道……まぁ、ボードゲームの限界を超えてるからデジタル画面にして、最大５Ｐが可能に」

文也「５Ｐって……」

飛焔「煩悩……」

文也「ァン？」

飛焔「……ま、後は他の人生ゲームと同じでルーレットを回して駒を進めるだけ！
では、第１回チキチキ人生の勝者は俺だ！　死に物狂いの人生ゲーム！！　開始！！」

文也「第１回！？」

取り合えず、回す。出た目は８だな……じ、地味じゃね？
駒もデジタル化しようよ……画面だけじゃなくてさ……。

「なになに～…。【今日は学校をサボった　１回休み】だと？」

オイィィ！！！！！　その程度で１回休んでるんじゃねぇぇぇぇ

えええ！！！！！
なんでだよ！？　どうして、ヒッキーなの！？　ちょっと！！！！
「ＨＡＨＡＨＡ」
「うるせぇぞ！　レナ！！」
その笑いムカツクんですけど！！　ちょっと！！
けっ、最初から金持ちだからって調子に乗るなよぉぉ！！！
さ：負け犬の遠吠え……。
……後で、ウラ来いや……。
さ：スミマセン……
弱い犬ほどよく吠える……。
「にゃあああああ！！！！！」
何事だぁ！！！？？
レナが止まったマスは……ええっと……【子会社が倒産する３０００００を支出する】だそうだ…そもそも、財閥なんて金はあるが波瀾の道だ。金は莫大にあるがマイナスがヤケに多い。その代わり、半分以下しかないが、プラスは莫大な金が入る……まぁ、仕方ないのだろう。
「じゃあ、私ね」

言わなくてもわかってるは阿呆。
ささっと回さんかい！　こちとら1回休みでいらついてるんだ！！

出た目は1だな…ふん！

警察に捕まる。全休み

「私は無かった事にぃぃいいい

【82話】Ｄｅｓｐｅｒａｔｅ　ＬｉｆｅＧａｍｅ【前編】（後書き）

オレしにの番外編を書きました！
どうか、ご感想をドシドシ送って来てください！
最大限答えられる質問はココでは黙秘しますが、アソコではポロリがぁ――

【83話】Ｄｅｓｐｅｒａｔｅ　ＬｉｆｅＧａｍｅ【後編】（前書き）

今更なんですが、部数が既に１００まで後がないですねぇ……。今回は和君の弱点が明るみに？

【83話】Ｄｅｓｐｅｒａｔｅ　ＬｉｆｅＧａｍｅ【後編】

紫『どうも、実況の紫飛焔です』

黒『ルネッサァァ～ンス。解説の黒飛焔です』

紫『因みに我等は透明……簡単に言うと不可視モード』

黒『余計にムズイはぁ！！』

紫『くぅ……。斬〇刀なんて漢武器を何処から？　しかも、参式だと？』

黒『真面目にやれ！』

紫（髭男爵の登場をしたコイツに言われたくねぇよ）

黒『まぁ、我等は和君達から目視できないんです』

紫『作者制限？』

黒『五月蝿い』

紫『まぁ、描写がメンドいとの事なので我等が派遣されたんですよね？　解説の黒』

黒『描写は少しはある……筈だろ？』

紫『でも、とある先生にヘタレの名前をつけられたアイツだぜ？』

黒『まぁまぁ……進めればあるだろ？　視点は俺等だから三人称だろうけど』

『『では、本編へＧＯ！　Ｄｅｓｐｅｒａｔｅ　ＬｉｆｅＧａｍｅ　Ｓｔａｒｔ！』』

「レナの番だぜ？」

「ふふふ♪　財閥の総帥たる私に不良が？　甘いわ！！」

文也の挑発的な言葉にレナは大きく（無い）胸を張って答える。

今の状況は文也が1回休みで先攻である。

紫『出た目は……7！　さぁて、止まったマスは！？
なになに～…【怪盗に大切にしていた宝石を盗まれた。ショックにより寝込む。1回休み】です』

黒『因みに怪盗の役職であった、魅夜姉ぇは初っ端からゲームオーバーになりました。おっと、和也さんはメッチャ笑ってます』

「ザマーミロ」
「ウキィィィ」

『『ガキか？』』

黒と紫がハモる。当然といえば当然であろう。元は1つの個体から分解された者達…。
それが、この2人であり、他の3人の飛焔なのだから。計5人の飛焔はそれぞれ忍者の格好をしていて様々な色がある。【紅】【紫】【黒】【青】【緑】この5色が作者の分身だ。

それぞれに個性があるが……やはり、元を辿ると飛焔だ。
思考が同じになるのは仕方の無い事だ。

「まぁ、良い。不良が財閥を超えるのを見よ！！」

紫『出た目は5。そして、なにが書かれてるのかというと？
【他校のヤンキーに負ける。１００００円盗られる】です！』

黒『おっと？　和君が震えてる…』

「軟弱者ォォ！！！！」
「ＡＨＡＨＡＨＡ」

「Ｇｕｇａａａａａａａａａａａａａａａ！！！！！！！！！！」
「何処の怪獣！？」

紫『黒……珍しくレナちゃんがツッコミに回りましたね？』
黒『そうですね。お馬鹿なあの子が……全く意外です』

「オレが相手だ……ひゃははは」
「壊れた！？　ってか、無理でしょ！？」

紫『しかし、レナちゃんが先ほど1回休みになったので……和君が連続で回せます』
黒『しかし、お馬鹿なレナちゃんが回そうとしてますが？』
紫『頭が“アレ”だから仕方ないですよ』
黒『あ、和君殴った。注意もしてます』

紫『ってな事で』
黒『どんな事ォォ!?』
紫『和君が回して出た目は2ですね』
黒『華麗にスルーかぁぁ～い』
紫『黙れゲス飛焔。でもって、【盗んだバイクで走り出す。4マス進む】ですね』
黒『……』

紫『進んで出たマスは……こ、コレは……『Ｄｅｓｐｅｒａｔｅ』!?』

「？　なんだコレ？」
「クソ飛焔　バグッたよ？」

飛焔『失礼な事を言うなよ』

「「うわぁ!?　飛焔？」」
飛焔『疑問系!?　作者に対して疑問系なの!?』
「だって、お前だし…」
「人気ないし……」
飛焔『……』
「これも、文法も適当だし」
「作者はヘタレの称号を手に入れたラノベの主人公の地位にいる奴だし」
飛焔『……』
「「Ｍ３７星雲から来たぁ…」」
飛焔『セブンじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!!!!!』
「む？」「なら、アイツと同じだよね？」
「ああ」「地球人最強のくせぇに」「他が強くて目立たない…」

飛焔『クリ○ンの事かぁぁぁあああああ！！！！！！！！！』

黒『で、では、本体が○猿になってしまいそうなので俺が…。特殊マス【Ｄｅｓｐｅｒａｔｅ】単語の意味は死に物狂いの。絶望的な。やけの…などヤバイ雰囲気の単語です。ソコに止まったら…自分の身に絶望的な、死に物狂いの、恐ろしい事が…』

飛焔『……って、事だよ？』

和「へ？」

レ「？」

＜描写できません。しばらくお待ち下さい……ｂｙ飛焔＞

「ぶつぶつ…ぶつぶつ」

「リアルにブツブツ言ってる！？」

黒『精神が崩壊したようですね』

紫『レナちゃんも宥めるかルーレットを回すかどちらかにして下さい。因みに出た目は１０。最大の数時ですね。止まったマスは……【Ｄｅｓｐｅｒａｔｅ】ですね？』

黒『……良いんですか？』

紫『大変危険です』

「にゃあああああああああああ！！！！！！！！！！！」

「しくしく…　しくしく…」

紫『はい。和君と同じく描写出来ません』

黒『解説の役目を盗られたァァ！？』

「猫が……猫がァァ……」

「○○が……○○がぁ……」

黒『○○って……』

紫『自分が隠してた弱点を言いたくないのか……おっと！　和君がルーレットに触れた！？』

「何がＤｅｓｐｅｒａｔｅだ……そんな物……オレが切り裂いて……」

紫『出た目は7．でもってＤｅｓｐｅｒａｔｅだね』

黒『え、えげつねぇ……。因みにこの人生ゲームの協力者は四二神のＮＯ．２であり、幻惑の響鳥の２つ名を保持する、水瀬歩奈実さんでした』

紫『暴露したァァ！！』

「納豆が……　納豆がァァ……」

「ふふふ、この悪夢を裂くには勝つしか……」

紫『こっちもか～い！』

黒『お前も髭男爵のマネしてんだろぉが……』

紫『出た目は５で、えっと……？　【こんな人生ゲームのなにが楽しいのかしら？　リアルの私もとんだ暇人よねぇ？　庶民はヒマなのでしょうか？　それは失礼！　おーほほほほ】だって』

「……」

「……」

押し黙る2人。あえて言う挙げるならば拳が震えている。
そして、こめかみに青い血管が浮き出ているのだ、もの凄い数が。

そして、ダレもが忘れたであろう、柴原魅夜。彼女はこの場にはいない。
それに2人は全くもって気がつかない。

紫『和君が回して出た目は8。なにが出るかなァ？　えっと…【こんな事をやっていてもいいのか？　リアルの俺にはやる事があるんじゃないか？　こんな事をやって……つくづく暇人だな】……』
黒『き、危険だ……』

「ひゃは……」

和也の口から可笑しな笑い声が漏れる。

「いい度胸じゃねぇか……とことん死にてぇらしいなァァ！！」
「か、和也ぁぁ！！！　押えて押えて！！」
「殺すッ！　今直ぐにでも殺してやるぅぅ！！　滅っしてやるぅぅぅ！！！」

黒『こわっ』
紫『キレてます』

このクソ人生ゲームを終えて正気に戻ったらこの人生ゲームが跡形も無く壊れていたのは言うまでも無かった事で……。オレは何かを忘れているような気ががして仕方がなかった。

【83話】Ｄｅｓｐｅｒａｔｅ　ＬｉｆｅＧａｍｅ【後編】（後書き）

疲れた……。そろそろ、文也編も終りです。
今回と死神狂乱でハッチャケ過ぎたのでそろそろ……文也編を大詰めにしたいと思いますッ！

１００％シリアスのバトル系です！
遂に、和也ＶＳ和也が……？　と、までは行きません！
なに！？　視線が冷たいですよ！？　ウソですよ！　文也編が終ったらゆっくりと日常に戻して行くんですよ？　夏のイベントはまだまだありますから！！

和也ＶＳ蒼譜です。はい……。

【８４話】Ｄａｒｋｎｅｓｓｏｆｓｃｅｎｄｒｉｕ【序奏曲】（前書き）

１００話までは遠いなぁ……。１００部は間近なんですが。
ん？　一々、ルートＡ、Ｂに分けて話数を進めなかったお前が悪い
……と。

……それは言わない約束です。

【84話】Darknessofscendriu【序奏曲】

「アハハハ！！　どうしたんだい？　雨宮和也ァ！」

高笑いしながら蒼譜は攻める。和也はナイフを避ける事で手一杯になり反撃に移る事が出来ない。一向に蒼譜の動きは止まらない。

圧倒的であった。

和也は気がついている。コイツは本気ではないと。ただ、ナイフを振り回しているだけで、実力は微塵も出していない。その答えは他の点からもわかる、“端”の連中はそれぞれ特殊能力がある物だ。しかし、蒼譜はソレを使ってはいない。理由は簡単だ、雨宮和也には使う必要もないからだ。いわゆる、出し惜しみ。子供と大人の喧嘩如き戦いだ。

次元が違う。その言葉に尽きる。

「！？」

「つまんない」

和也はコレ以上に避ける事は出来ない。ソコには絶対の防壁があった。

別に、和也の実力で破れる程の結界だ。だが、破ってしまったら“最終防衛ライン”を突破される事にもなるし、第一、和也にその余裕すら与えられない。

和也の表情が凍りつく。次ぎの瞬間に彼は蒼譜の能力の“一部”

を見る事になった。
氷の炎。否、蒼き炎……地獄の灼熱が纏わる。それは、美しく、それでいて恐怖を覚える。

「焔氷斬」

逃げ場を失った和也は防御の態勢に入るが。和也には防御系の技がない。その点から考えるとアッサリする。雨宮和也は神路蒼譜の攻撃を受けきれない。そして、ヤられる。

「クッ！」

轟音が屋敷中に響き渡り。辺りは無音となった。

―Ｓｏｕｈｕ　Ｋａｍｉｚｉ―

「……」

さぁて、古都宮の屋敷だ。まずは、どう動くべきかな？
このまま攻めるのは簡単だ……だから面白みも無くて仕方が無い…

…どうせなら、下の連中も呼べば良かったね。そうだ、今でも遅くないよね……ダンスタイムにはまだ早い、用意をしてから行くのが礼儀だろうか？　フフ…。紳士的だろ？　大丈夫……開館と行こうか♪　パーティーのね。

「楽しみで仕方がないよ……雨宮和也レプリカ♪　ショーの幕開けだよ」

今宵は楽しい夜になりそうだよ……。

ねぇ？　雨宮和也君？

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｈｉｎｄｏｕ―

「…っ」

＜ボロボロじゃねぇか！？　おい！＞

そりゃそうだ……魔界の組織を全て相手にしたんだ。

もう、体力も魔力もねぇよ……だが……やらねぇといけねぇんだよ。

「決めたんだ。大事な奴は全員助けるって」

＜真琴ッ！＞

「たとえ、無茶苦茶でもやるんだ。昔出来なかった事を……今の俺

なら出来る」
＜自惚れるなッ！　それに全てをなぎ捨てるつもりか！？＞

自惚れてなんか……居ない。アイツを守れなかったあの時に比べたら格段に違う！
実力も…精神的にも！　成長はしたと思う。だけど、なにか“おかしい”のは分かってるんだ。でも、なんか補えそうにないんだよ……なんだか。

だがな、やるしかないんだよ。今はコレしか俺は何も出来ないんだ。
組織なんて関係無い……俺は俺の道を進むだけでしかない。俺はもう、人形なんかじゃないんだ。アイツを殺すまで……俺は突き進む。

＜……真琴＞
「……俺は、何事からも逃げない。自分が信じた道を進むだけだ」

「懐かしい言葉ね……」

ッ！？　そう言えば……アイツが来ていなかったか。
なる程……どうりでゆとりがあったわけだ……魔具組織の連中と来ていたらやられていたか。ダレかいねぇと思ったらお前かよ……今更か。迂闊だったぜ……へへ。

「1人でどうしたんだ？　ホナ！」
「連れ戻しに来た。マコちゃんの中にしつこく居る愁羅飛鳥から」

やれやれ……。

「ホナ……詭弁だな」

「詭弁？」

「飛鳥はもう居ないぞ？」

「マコちゃん……２度も言わせないで」

……ああ。飛鳥は生きてる。彼女の意思を俺の道しるべとして。お前は最初から飛鳥の事が苦手だったよな……自分とは対極の生き方の飛鳥が怖かったんだろ？　でもなければ、お前は逃げ出しはしない……。お前は、飛鳥が怖いんだろ？

知らないだろうが……飛鳥はお前にそっくりだってぜ？　ああ、表と裏が逆なだけだがな。お前は飛鳥が怖かったんじゃない……本当の自分が怖かったんだろ？　でもなければ……そんなにも、お前は脅えたりはしないだろ？　自分が怖いお前にとっては！？

「……俺が言う事は１つ……」

「……そぅ」

「退け！」

「……依頼遂行」

依頼……だと？

―S

ｙｕｕｉｃｈｉ　Ｍｉｙａｔａｋａ―

最近になってから“あの時”の悪夢を見る。最近になってから周期的になってきて、何かがおこるような気ががして仕方ない。母さん……貴方は何を伝え様としているのでしょうか？　なにが来るってんだよ……。

今日はイヤな事が起きそうだな。方角等風水的に優れているこの屋敷に……数万年に１度の災厄が来る……か。なんどやってもその結果だ……占術は優れてはいないが……災厄が振りかかるのは決まっている。それも、とびっきりの荒波がな。

個人的なんだが……この雨……。やまねぇかな？

Ｒｅｎａ・Ｆ＝Ｌ・Ｈ―

……今日はどうしても落ちつかない。このなんかイヤな雨が悪いのかな？　なんだかイヤな予感がして止まない。だから……双六なんてやったんだ、気分を晴らしたかった。楽しかった……でも、このイヤな感じは治まらずにより荒れる。何かが近づいてる気がして仕方がない。

昔からイヤな感じはよく当たる。コレは和也が居なくなった日よりも。物凄く恐ろしくて、よく見ると……細かく震えていた。コレは……よくない！　なんだかよくわからないけど、よくない事が起きる！

……速く……今日が終らないかな？

？？？―

「は～い。わかりました♪　蒼譜が言うならいいよぉ～。それに……私は古都宮とは“個人的なモノ”があるからね……」
『悪趣味だね……可愛くないよ？』
「かわゆぃお花には刺がたっくさんあるんだから♪」
『……“アルテミス”』
「蒼譜？　ダメよ……折角に“おじいちゃん”を殺したんだから。予想以上に梃子摺ったけどね？　所詮は雨宮の端くれね」
『……取り合えず、来てくれるんだよね？』
「勿論……ね」
『……どうやら、ヤな事にキミとボクは似た匂いだ……』
「あら？　ロキたる貴方が？　オーディン……井塔将が嗅ぎまわってるでしょ？」
『キミには関係無い』

「……切られたわね。はぁ～。雨宮和也のオリジナルの場所を吐けば簡単だと言うのに……馬鹿なおじいちゃん……“凪家”の面汚しだわ。となると……もう知っているのは……雨宮和也レプリカだけかぁ～。やれやれ」

「仲良くしてくれてありがとう……瑠依ちゃん♪」

「将」
「駿」

お互いを確認してから、俺等は何も言わずに構える。
雨が徐々に激しく、騒がしくなるが俺はそんなモノに耳を傾けるヒマも無い。

慎重に慎重を重ねて重点的に“敵の数”を数える。大きな気配は５つ。気配を消し切れて無いのは相手が未熟な証拠だ。そして、見え隠れする気配は俺が数えて、これまた５つだ。消し切れない甘さがあるがかなりの実力者なのは間違いはないだろう。そして、微かに。ほんの僅かにだけ感じられる気配がある。コレは全く無いに等しい程のであって、もしかしたらまだ居るかも知れない。コレは恐らく２つだな。合計で１２人か……。キツイな。

「……」
「……」

冷や汗が首筋を通り。悪寒が走って鳥肌までもが立つ。
半憑依をやって６人を相手に出来るか？　憑依なんか結界も張っていないこの市街地なんかじゃ出来無い。不安が募る。

「「行くぞ（よ）！！」」

だが……丁度良い！　こいつの出番だぜ？
お前に眠る魔法……読み取らせてもらぉうか……メインディッシュ

を楽しむためにな！

さぁて、狩りの時間だ……！

ダンスタイムは始まった。

その戦慄は広がる、光と闇の駒が。チェスとも思えるこの戦。

だが、光と闇。この2色の双方にも染まらぬ駒もある。

それは、無数にあってそれは1人の人間――イヤ……。

人間ではない人間を中心とした集団が。

それは、光と闇さえも染めてしまう。逆にその中に居る者達もいつ染まるかわからない者達ばかりなのだ。不安定なのだ……。だが、彼が居るから自分もココに居る。

さぁ、始め様か。

駒も集まらぬ戦乱を。

初陣を。

不安定なこの世界をも巻き込む戦を。

宴の安らぎは一時の終りを告げよう……。

さぁ、不安定なこの戦を進めようじゃないか？

“全て”を巻き込むこの戦争の始まりを！

刮目せよ！　彼と死神の少女と少年の……物語を。運命を！！

【85話】Battle Start（前書き）

１００部目ぇぇ！！　話数は届きませんが実質、１００話です！
こんなにも長く愛読して下さってる方々、ここまでありがとうございます！！　飛焔、感激の余り感謝の雨霰です！！
これからも、オレと死神？！を宜しくお願いします！！

【85話】BattleStart

「……」

落ちつかない……。まるで何かに見られてる感じがする。
殺意とかそういう類いの気配は全く感じられない。どんなに神経を集中させても感じることは不可能だった。だけど、この違和感はなんだ？　この不気味な気配はなんだってんだ？

吐き気もするし……最悪だ。
気分転換にでもなるだろうと思って人生ゲームをやってたが、逆にストレスを溜めたぞ？
そして、トラウマまで出来たんだが？　お、恐ろしい……納豆にマヨネーズだなんて……。
ただでさえ、納豆が苦手なのにアレを目の前で掻き回されたら。うっ……吐き気が……。

※幻術です。

「どうした？　顔色が悪いぞ？」

「そういう零時も……な」

話しかけて来た零時を見上げると眼の下にハッキリと隈が見えた。
いろんな物で隠してるようだけれども、隠し切れてはいない。何か探し物でもしていたのだろうか？　ソレにやつれて来てもいる。酷く体調が悪そうだ。

「なぁ……DT（ドラゴンマスター）って知ってるか？」

「ッ！」「！」

オレと向いに座っていたミヤが反応する。

そりゃそうだ……オレが考えるにはそれは瑠依の能力だ。本人には自覚がなさそうだから知らないのだろう。と、なれば、会長と、奥様が隠してるんだ。古都宮の力なら色々と誤魔化す事が可能だけれども時期総帥の零時が知らされて無いだと？　変だ、おかしい。他にも何かを隠してるのか？

「知ってるんだろ？」

「……いえ。存じ上げませんが」

「私めも文也と一緒であります」

「隠してるだろ？　母さん達も言いたがらないし……クソ！」

文献を漁ってたのか……。それで、古都宮と龍の関係（まぁ、オレもミヤから聞いたんだけれども）を知って……か。確かに初代のDTは古都宮の者だ。財閥になる前の……な。

ランクSSS　能力は龍使い（ドラゴンテイマー）&竜装使（エクストドラゴニック）

最上級の異能力。全ての異能力を超える次元の力だ。因みに先ほどのSSS（トリプルエス）とは、最低限測定域の事だ。つまり、低く見積もっての事。最低限のその能力の力の事だ。

詰まる所を、最強。低いレベルでも殆どの能力を超える。

恐ろしいものだ。次元を超えすぎた者は。

見分ける方法は簡単だ。何処かに龍（たつ）と竜（ドラゴン）の姿が刻まれてる。大きさ的に小さなものだ。あの時にアイツが確認したとしたのならば、

まッぱになって捜せば簡単だ。

「……零時……」

「……文也、瑠依が関ってるんだろ？」

「零時。ハッキリ言うとそうだ。それ以上の事は言えない」

異能力の事なんて言ったら“端”の事まで勘付くだろう。まだ知るには早い。それが、会長と奥様の考えなんだろう・・・・財閥となればウラの世界も必ず関る事になるし。“端”の事もすぐ知る事になるだろうからな。だから、瑠依の事を隠してたんだろう、だからオレ等みたいなヤツを選んだ（まぁ、使いで来た零時に……だが）んだろう。

……零時に隠してなんだってんだ？　零時には知られてはいけない事……？

「……サンキュウな……少しだけ楽になった」

「……そうかよ」

「文也……？」

「そういう事か……ッ！」

少し考えれば簡単じゃないか。零時も……いや、零時はＥＤ（エクストラゴニック）なのか？　そう考えれば簡単だ。疑問の糸が紐解かれた。

クソ！　そういう事か……ヤツ等の狙いは瑠依じゃない……古都宮だ！！

と、なれば１人で来るのは無難だ。なら……おいおい……。

「零時！　至急、使用人を屋敷の外に出せ！！」

「は？」

わかった。あの不気味の意味が。

クソ！　なんで今更気がつくんだ……ッ！

「！？　なんや？　この殺気は？」

「和也！」

「来るな、レナ！」

「え？」

オレが叫んだと同時に床から大きな衝撃がくる。

煙で視界が全くない、零時を死守できるのは位置的にミヤだ。

レナは？　――大丈夫……アソコなら届かない。

ミヤと侵入者は格闘してる……ココに来たという事は……瑠依も？

クソがッ！

「ミヤ！　オレはお嬢様の所に行く！　レナは侵入者は無視をして“生き残った使用人”を連れて行け！　怪我人と女が優先だ。大体のヤツならアソコに行くってわかっている！」

「りょ、了解！」

お嬢様……クソが。気がつくのが遅かった！

零亞には事前にヴァン君達に何処へ向わせれば良いか言っている。

さっさとお嬢様を助けて、蔵にやれば……アソコは特殊な金属だからSクラスの攻撃なら2発は耐えれる……大丈夫でいてくれ。

「和也！」

零亞とすれ違う。アイコンタクトを送ると理解してくれたか？
走り出して全員を集めに向う。クソ、迷子にならなければ……どいうにかなる！
まずは確認をする事になるから、騒がれたらお仕舞いだ。だから、個室だ……個室という個室を調べれば見つかる。３分だ……３分でこの屋敷を調べ尽くせばなんとかなる。この騒ぎでお嬢様の声は掻き消えるだろう。くそ……無駄に広いからッ！！

「瑠依ッ！！」

何処だ？　クソ……！

「邪魔をするか！」
「……我は“バロン”お相手願おう」

大きななんか儀式か何かに使われそうな仮面を付けた南蛮民族（？）らしき野郎が立ち塞がる。どうやら……ルートは珍しくあってるらしいな？　なんか今日は不気味な事だらけだ……クソッタレが。

「後悔するなよッ！！　クソ仮面！！」

不意打ちか？　イヤ、前から威嚇地味た異様な気配があった。どうやら、客が集まったって事か？　はぁん、上等やないか！　おおよそ、零時を狙うって事はイヤな勘は合ってたらしいな。フミと相談するべきだったか……。それに、コイツ……なんだ！？

視界が悪いからよく見えないが……攻撃が効かない？

「風迅」

印を結んで風を召喚して邪魔なモノを振り払う。風はそんなに得意ってものじゃないがな。

意外と衰えてるものだ……修行をサボったのが響いたか？

「……。ルン」

「行くで……桜惷（おうしゅん）！」

印を結んで愛刀たる妖刀＜桜惷＞を取り出すと、同時に先程の侵入者に対して斬りかかるが、相も変わらずに手応えが全くない。まさかと、イヤな結論がでる。

「宮鷹……俺の見間違いか？」

「いえ……。正しいです。コイツは軟体人間（スライム）です！」

「ご名答。ルン」

正確には……水人間だ。さっき斬った感じは水だ……。

斬っても、それは遮る程度だ。分散できるが直ぐに戻る……。武術が基本の俺にゃぁ……相性が悪すぎる。コイツは……やべぇな。五行で言えば水、なら火舞はダメだ……ヤツの実力なら簡単に打ち消される。蒸発させるのは無理だな。

樹は水を吸わされすぎて腐る。土でも吸い切れないどころか、泥水になって殆どが水の主導権。７：３ぐらいの割合で此方が引けを取る。

液体人間（スライム・ヒューマン）それが、てめぇの力か。

「宮鷹？　何者だ？　あいつ等は！？」

「焦るな！　ワイの後ろに居れば……なッ！？」

零時に告げて相手を横目で見ようとした時……敵を見失った。すぐさま後ろを確認し様とした瞬間だった……足が動かなかった。否、足を凍らされていたんだ。

冷気も操れる……その事が判明した。ダメだ……コイツはぁ……やられる！

「……。ルン」

仕方ないから、眼を真横に移すと。居た。

髪を軽くウェーブさせて童顔の（推定）１６前後の女性だ。レインコートを着込んで遂には傘すらも持っている。長靴も着て完全に雨具を装備している。屋内なのに……。

「くそ！」

氷を無理矢理に破り、相手と向き合う。

＜秀一……コイツはヤバイぞ＞

「わかってる」

「宮鷹？」

五行思想の上では……勝ち目がない。

俺等は土と木の術をよく持ち行るものであるが、唯一に苦手とするのは金だ。使えるには使えるが…コイツを止めるのは不可能。

さぁて……どうすっかなぁ？

―Ｓｙｕｎ　Ｋｉｓａｒａｇｉ―

「……なるほど、それがお前の姿か」

「……」

戦っている内に近くの漁港まで辿りついた。イヤ、誘き出されたんだろうな……自然を装って。他の５人までは良かったが……やはり、コイツは別格だ。

能力は最も多いとされている変身（チェンジ）能力だ。そしてコイツはぁ……。
海蛇だ。とても巨大な悪魔……“レヴィヤタン”リヴァイアサンって言った方が読者様にはわかりやすいかな？

「スレイ！」

てめぇが怪物になんなら……。

『応ッ！』

こちとら同じ条件でやり合ってやるよ！！
行くぞぉ……スレイプニル！！

「『憑依』」

―Ｍａｓａｒｕ　Ｉｔｏｕ―

なるほど……ココに誘き出したのもこういうワケかぁ……。
全国的に有名な牧場だ。随分と広いなぁ……ここなら、憑依はでき

る。

『グルルルゥ～』

「サイのくせいに……生意気だよ」

相手の能力が変身（チェンジ）能力ならどうりで。と、納得出来る。

だが、相手は強大だ……“ベヘモット”……か。おっと、読者様にはベヘモスの方がわかりやすいかな？　神の傑作と呼ばれる巨大な悪魔だよ。

「ディン」

さぁて、本気で行こうか。

『了承しとるわぁ…』

僕はキミなんかで立ち止まるワケにはいかないんだ！！

行くよ、ヴァルハラの騎士、オーディン！！

「『憑依』」

―ＢａｔｔｌｅＳｔａｒｔ―

・宮鷹秀一ＶＳ液体人間

・荒川文也ＶＳバロン

・如月駿ＶＳレヴィヤタン

・井塔将ＶＳベヘモット

・レナ・フォード＝ライズ・ハールドＶＳ？？？

・阿玖零亞（ラミア・ヴァン・セフィリア・妖精）ＶＳ？？？

・神堂真琴ＶＳ水瀬歩奈実

・古都宮瑠依ＶＳ凪凛

それぞれのそれぞれが為の戦いが始まりを告げた。

【85話】BattleStart（後書き）

バトル一直線です！

【８６話】戦い。（前書き）

眠いです。

【86話】戦い。

な、なに!?　この騒ぎは!?　ウチに侵入者!?　そんな馬鹿な事が……!?
厳重は筈よ?　一般人とかいくら凄い人間でも簡単に侵入できるワケが……?

そう言えば居た。1人だけ居た……あの死神が居た。
神堂真琴……でも、前と手口が違う。何者なの?

「お嬢様!　お逃げくだぁ、さ……い」

「ひぃ!」

何がどうなったかサッパリだった。心配して駆け付けた使用人が死んだ。
一瞬だった。ワケのわからない間に彼の頭部に“銀色の矢”が突き刺さっていたのだ。
床に血溜りができる。

恐怖心が酷く私を襲う。言葉が出なくなってしまう。身体が動かない。
文也……助けて。
文也……速く来て。
文也文也文也文也文也文也…!!

恐怖心から彼の名前を何度もグルグルと考える。少しは気が紛れるが恐怖心は打ち消せないどころか。『もしも、彼が来なかったら』などもいらぬ事も考えてしまう。それが、余計に私の恐怖心を余計

に駆りたててしまう。恐ろしくて仕方が無い。

「お嬢様！　お早くこの場から…」
「来たらダメェ！！」
「お嬢様？　速く逃げて……」

今度はハッキリ見えた。眼前を銀色の一閃が通りすぎて、彼の頭部を貫通させる。
その矢は見張るものがある。先程と同じ位置だ。耳の穴から必ず貫通させてる。死は免れないだろう。即死だ……何者が？　なんで？
なんの為に？

死体が2つ。息が詰まるレベルじゃない。息が止まる。恐怖で息すらできない。

「瑠依ちゃん……ごきげんよう」
「！？」

ダレ？　私の名前を知ってる？

「そして、さよなら」
「ウソ……だ」

なんで…？　なんで？
ウソだよね？　なんで？　なんで貴方が？　悪い冗談だよね…？

ウソって言ってよ……ねぇ？

「な、ぎ？」

そう、凪凛。私の親友だ……。見間違える筈がないよ……。
見覚えのある楕円のメガネとか、親友の顔を見間違える筈が……そんなワケが……！

「親友の名前も忘れた？　酷いなぁ……。そりゃそうだよね、あんなイケメン達に囲まれたら♪」

違う！　違う！！　あの子がこんなに喋るものか？　ただでさえ、赤面症で活舌（かつぜつ）の悪いこの子が……それに、それに……！！

「ココにいる私は……貴方の知らない私……本来の、私よ？」
「え？」

「貴方を殺す為に来たの」

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

「……」

ささっとぶっ殺したいのは……やまやまなんだけど……。
迂闊には動く事ができないだろうな……相手の能力がいまいちわからん。ただでさえ怪しいヤツなんだ、能力もわからずに挑むのは死を意味する。

だが、何時までも動かないわけにはいかない！

「鎌！　行くぞ！！」
＜……＞

首からぶら下げてる鎌をもぎ取り通常の大鎌に戻す。
相変わらず拗ねたままで折角の出番にも全く答え様ともしない。完璧に拗ねてやがる。
異様にテンションの高いこの鎌がこう何日も喋らないと調子が狂う。

「ふ」
「？　鎌刻風（れんこくふう）」

なんだ？　あの失笑は？

思考の片隅でそう思う。
鎌から放たれるのは疾風の刃。破空斬ではない。まぁ……破空斬の発展型とでも言えばいいのかな？
まぁ……当たればわかるさ。

「……」

「え！？」

馬鹿な？　“炸裂”した筈だよな？
って！　言っちまったァァ！！　ううぅ……バレたからには言いますよ～だい。
風ってのは一直線に進まされるものだろ？　だから、小細工というかぁ……まぁ細かい事を言ったら凄く長くなるから戦闘中にいえないからダメだ。うん……。

その一直線に進まない風を途中で分散。今回は試しだから１２個に分けてぶつけるつもりだったんだがなぁ……。読んでたのか？　全部綺麗に避けられたんだが？　昨日にパッと思いついたワザなんだがなぁ……うむぅ。

だ、ダレだ！？　そんな事を考えるなら防御系統の技を考えろと呟いた奴はぁ！？
そーですね！！（いい○も風）　思いつきもしませんでしたよぉぉ！！

「次ぎは……」

何を呟いてるんだ？　コイツは？

取り合えず……突っ込む！！

「右上段からの攻撃」

えっ？　自分の体制を確認する。その通りに“なった”そうだ、“なっていた”のではなくて“なった”のだ。そう、自然と身体が動いた、操作系ではないのは最初からわかってた。でも、アイツはオレが何処から攻撃するかわかってた？　なるほど、てめぇの能力……見えたぜ？　未来予知だなぁ。

……マジで？
ヤツに聞いて見るか？

だが、どうする？　無闇に聞いて答えるか？

「……違う。我が能力は未来視（フーレルック）だ」

は？

「おっと、失礼……我は常に３０秒後の世界を見ててね……」

３０秒！？　なんですと！？
じゃあ、どうやってあんなに動けるんだよ？　３０秒の中のほんの１秒程度の事だろ？

「その点は大丈夫……我は完全記憶能力者でもある。ここから３０秒の記憶……してるよ？」

「ッ！」

おいおい……本格的にヤベーぞ。

―Ｒｅｎａ・Ｆ＝Ｌ・Ｈ―

「フレアランス！」

「！？　アクアランス」

真正面から飛んで来た炎の槍を即席で作った水の槍で相殺させる。

クソ！　宿舎はあっちにあるというのに！！　それに……コレは魔法？　何者だ？

「……さっすがだね♪　お姉ちゃん♪」

「お姉ちゃんだ？　女王様と御呼びィ！！」

「……」

ゴメン、間違えた。

「ギガントグラビジョン！」

「……エンドグラビジョン」

く、思考が遅れた。こんな所でギガントだとぉ！？　大体、八式重力魔法はただでさえ危険な類いの魔法だ……。第一、屋内で使うとは……ってか、私もやっちゃった！！　仕方ないよね？

アレを防がないと全滅してたからね！！　皆の者！！　私に感謝しなさい！！

「へぇ～。見切ったんだ」
「見切った!?　アンタ幾らなんでもあの重力を!!」
「……鎌で遣り合おうよ」
唐突に私の進行を防いでいた少女が言う。
見覚えがある顔だった。毎朝みていた顔である……。
「……へ？　わた……し？」
「こんにちわ。はじめまして。ニナと申します。お姉ちゃん♪」
少女（いもうと）（？）は不気味に微笑んだ。

【８６話】戦い。（後書き）

おやすみなさい。

【87話】予測出来ない未来（さき）（前書き）

ふふふ……読者様、お忘れでしょうか？
我が右腕の骨折を？　ずっと、リハビリをしてきましたが、ついに
…ついに……ついにィィ！！
医者のお墨付きの復活じゃあああああ！！！！！！！

リハビリがてら（代わり）に執筆してきたからでしょうか？
予定より1週間前に復活しやしたぜぇぇえええ！！！

【87話】予測出来ない未来（さき）

「はぁ！！」

幾ら未来が分かってても回避できない程の乱打で……どうだ！？これなら、回避とかの問題でもねぇだろぉが！

「そんなにヘタな鉄砲じゃあ……1回も当たらないよ」

微かに笑いながらオレの攻撃を次々に避ける。ワザと当たるか当たらないかのスレスレの間隔でだ。当然、当たりそうで当たらない奴にオレは、ストレスを溜める他ない。わかっていてもコレはかなり悔しいものである。

「クソ！」

アイツの言う通りに、オレは我武者羅に攻撃をしてるだけだ。コイツを相手にするには考えても仕方が無いことだった。

と、いうより……ただでさえムカツク仮面に1撃も与えられないのはかなりの苦痛だ。

「覚えてるよ。わかってるよ。キミの動き」

「けっ！」

1歩、後ろに引いてから斬りかかるが、途中で起動を変えて真上からの斬りかかろうとするが、変則。途中で引いて相手のどてっぱらに鎌の先（刃物じゃない方）で突く。単純な2段階フェイント。

当然ながらに、野郎は避ける。

待ってたぜ♪

お前がそっちに逃げるのは読み通りだよ。

「逃がすかァ！！」

前にでる。突く時には左手しか使っていないから右手が飽いている。

追い詰めたぜ？　仮面野郎ッ！！

「やれやれ……。魔神刃（まじんば）」

「！！」

しまった！　誘いに乗らされたのは……オレか！！？

ダメだ、間に合わない……この体制だと回避だなんて……！

防御も間に合わない……マジかよ……随分とアッサリしてんじゃん？

「斬ッ！」

「くッ！」

轟音の後は、沈黙に包まれた。

―Ｒｕｉ　Ｋｏｔｏｍｉｙａ―

「アハハハ。怖いもんだよねぇ？　真実って♪」
「ウソだ……ウソだウソだウソだ！！！」

見たことないよ。嘘だって言ってよ。
私の先に居るのはよく見知った人物で親友の少女だ。信じられない。
コレは悪い夢？
なら……醒めてよ。目を覚ませ！　古都宮瑠依ッ！！

「予測出来ない真実ほど怖いものはないよね」
「ウソだウソだウソだウソだウソだウソだ…」

視界が歪む。自分でも止まらないほどに「ウソだ」と、連呼してしまう。
恐怖より「なんで？」「どうして？」そういう感情が私を支配してやまない。

そして、悪夢としか思えないのは……凪が銀色の弓矢を持っていた事だ。
ドアの近くにある死体を確認する。全く同じ物だと理解するのに大して時間はかからなかった。

だから……余計に信じる事ができない。

「見せてよ？　瑠依の刻印（ルーン）を？」
「え？」
「あはははは！　やっぱり知らないんだ！！」
なに？　なんなのよ？　もう……ワケがわからない。
「あるはずだよ？　小さいけど……龍の刻印が」
りゅう？　龍って？　……ある。首筋にある。５ｍにも満たない大きさだけど…
たしかに、ある！！　え？　コレがなに？　そう言えば以前、攫われた時にあの親父……変な事を……確か……るーんって……！？
え？　どういう……こと？
「知ってるんだ」
「！」
凪が不気味に微笑む。
「気楽だよね……それで居られるんだから。表の世界にッ！！」
……？　何を、言いたいの？
『クァー！！』
！？　え？　何か窓にいる？
ソレにこの声は……からす？　え？　まさか……。
「ふ」

腰につけていた弓を構えて矢を射る。
射られた矢は窓ガラスを破り外あった影を貫通する。既に先ほどの声は届かなく暫らくしてから落ちる音が響いた。私はそれを理解するのに時間がかかった。

「いやぁぁぁぁぁあああああああああああああ！！！！！！！！！！」

絶叫が室内に響いた。

―？？？―

「……勝った」

バロンの口から言葉が漏れる。

「……」

３０秒前から、バロンは荒川文也の負けを視ていた。
バロンは忠実にソレを再現していただけで、常に彼は３０秒後の自分の行動を視ていた。

優越に浸っている自分の姿だ。

だが、予測出来ない未来はある。

「よぉ、オレを倒した優越はどうだ？」

「！？」

バロンには声の主がわからない。簡単な事だ、バロンは３０秒後の世界しか視ていないからだ。声の主はバロンが視てきた３０秒後の世界にはいないという事だ。だが、眼と違い聴覚は今を聞いてる。姿のない敵に恐怖の戦慄を覚える。

「だが、“俺”はオレと違ってンな、生温くねぇぞ！　ゴラァ！！」
「雨宮……和也！？」

声の主の正体は先ほど倒した筈の雨宮和也だった。姿のない敵は未だにバロンの目には移らない。聴覚だけを頼りに捜す。自分の真横だ。

「未来にない現実をご覧……いや、とにかく楽しめや♪」
「う……ッ！！」

バロンは逃げ出す。既にバロンの世界は滅んでる。
それは、予測不可能の存在。本来は未来にも存在しない存在。イレギュラーたる存在。

今のバロンは我武者羅に走ってるだけだ。今は視てる世界と異なっている為だ。

崩壊した世界にはなにも存在しない。1つが狂った音色は全てを狂わせる。

「天の羽音、世界を包み込み。風の音は安らぎを与える。琴の音は羽の音色と共鳴し響く。音(ね)は風と共にあり。響け音よ、裂け風よ。風は音を運ぶ、音は風を震わす…」

“和也”の周りに透き通るような何らかの音色と、そよ風が舞う。和也を優しく包み込む風と音は和也が突き出している右手に集う。

バロンには視えない。十分恐怖に値するものだった。

「音の響、風の牙」

風と音は蒼き刀となり。右腕に装備される。蒼穹の刃は風を舞い上げる。その風は優しいものではなく、鋭い疾風。

蒼き刀を構えて、呟く。

「“風音魔法(ふういん)”・風響鳴刃(エア・ブレイド)」

そう……魔法。人間には使えない筈の忌ましめ術。

「斬(スラッシュ)」

和也は小さく呟く。

「ひぃ……ッ！」

風の刃はバロンを喰らった。

その風の刃（ヤイバ）は屋敷に深く抉り遥か前方の壁をも滅っした。

「解（キャンセル）」

和也の右手に纏っていた風の剣は再びそよ風となり、他の風に溶け込んだ。

音色は鳥の羽ばたき如く遠ざかり消えて行った。

「さて、お前に死なれたら困るんだよ。雑魚が……」

そういうと、和也は脆く身体を崩して倒れた。

「……」

何が起ったかはサッパリだった。起きたら全てが終ってる。

あの時と同じだ！　オレには力がない……俺とオレでは何が違うんだ……力を曝け出して……オレに何を言いたいんだ……クソ。

実力の違いを証明したいのか？　ああ、適わないよ……なにもかも、俺（テメー）にッ！

「クソが……！！」

言いたいならハッキリ言えよ！　こんな傷跡を残して……なんだってんだ！！！

そんな事より……瑠依だ……！　間違いを起す前に……龍契約（ドラゴンコントラクト）する前になんとかしねぇと！　ＤＴの、能力を知らずに振るったら……こんな屋敷、消滅っすぞ！

―Ｒｕｉ　Ｋｏｔｏｍｉｙａ―

折れてる。右腕が動かない……速く逃げないと……。

折角、窓から飛び降りてまで逃げたんだ……骨折ぐらい……死ぬよ

りはマシだ！

ココから蔵までは５００ｍぐらい……走ればすぐだ！！

この程度……我慢すれば！！

「ッ！！！」

脚に激痛が走る。恐る恐る確認すると、左足に銀色の矢が刺さっている。

動かない。当然だ、間接に刺さっているのだろうから。

「――――――！！！！！！」

声にならない激痛が襲う。右足を頼りに立ち上がる。

「ど、ち、ら、に」

跳ね上がる口調で心底楽しそうに指先を使って右腕、右足、左腕、左足を品定めする。

「し、よ、う、か、な♪」

狙いをつけたのは、骨折した右腕。

【ぎぃぎ…】と、玄が引っ張られる音が響く。

「ひぃ…」

よろよろと、避けようと歩くが、矢は右肩を貫通させる。

声すらでない程の激痛。視界が歪んで倒れる。

「アハハハハ♪　終りにしようかな？」

耳元でなにか聞えたが私はなにも聞こえなかった。

タス……ケ、テ。

私の意識は真っ黒の世界へと誘われた。

【87話】予測出来ない未来（さき）（後書き）

因みに、現在。秘密基地の方でコニ・タン大先生が企画のコメディ作品のクロスオーバー企画に参加しております！！

『ハハハ、楽しそうじゃないか。我が子達を他の作者に描かせようじゃないか！！　どれ、他の作者様の子をどう描いて、どう短編を描こうか？』と、思いのお方、参加しませんか？　詳しい事は、此方のＵＲＬから『ｈｔｔｐ：／／ｈｐ２３．０ｚｅｒｏ．ｊｐ／ｂｂｓ／ｋｉｊｉ．ｐｈｐ？ｕｉｄ＝ｈｉｍｉｔｕｋｉｔｉ＆ａｍｐ；ｄｉｒ＝３８２＆ａｍｐ；ｎｕｍ＝３＆ａｍｐ；ｔｈ＝＆ａｍｐ；ｕｎｕｍ＝１２１１６４０５９８３０５＆ａｍｐ；ｍｏ＝０』コピーして入力したら行けますぜ！

【88話】水VS鷹（前書き）

ま、間に合った……。

別題。【鷹の終幕？　竜の覚醒】

【88話】水VS鷹

厄介な相手だ……。身体は水で再生は無限で冷気まで操ると来たもんだ。
当然、どんな攻撃だろうと、水で無力化されて、氷の攻撃は強烈だ。勝てる気がしない。
クソォ……文也ならどうにかできる相手だろうけど……俺じゃあ……無理だ。

「波動水（スプラッシュ）。ルン」

ルンルン……うぜぇよ！！

「守護符！」

懐から札を取り出して結界を張る。手の平から放たれた極太の水鉄砲を防ぐ。
当然、弾かれた水は何所だりかんだりで、水溜りを作る。よし、守護符で防げる程度の威力だ。

「宮鷹ッ！」

零時の叫びで気がつかされる。ルンルン野郎に背後を盗られていた。
取り合えず前に跳び回避するが、追撃の方が速い。傘でも喰らうと痛そうだ。ってか、氷でガチガチに固められてるみたいだ、床に当たった時に破片が飛び散ったし。

なら……あの傘を破壊する！

無駄な印は結ばず……最小限の動きで結んで……桜憙に装宿（そうしゅく）させる！

「焔火抜刀！」

＜燃えろ燃えろ燃えろ燃えろ萌えろぉぉ！！！＞

なんだ？　１つ違和感が？

＜業火の灼熱。地獄の瞬炎、全てを溶かす！　燃えろ！　消え失せろぉぉ！！＞

「……水神刃。ルン」

面白い。水を増幅させた傘の剣か……！

俺の炎とテメェの水……どっちがつぇか……勝負ッ！！

「斬ッ！！」

激しい音を発てながら炎の刀と水の剣がぶつかり合う。

水蒸気がすぐさま視界を奪った上に手に火傷までしたぞ？　どんだけ熱いんだよ？　もう少し熱かったら全身焼けてたよ！？　宮鷹の丸焼きだよ！？

＜……秀一！　大丈夫か？＞

「ああ」

ヤツは何所だ？　それに桜憙のテンションがダウンしてるって事は火は消されたって事だ。

さぁて、霧が邪魔だ。零時は大丈夫なのか？

「零時？」
「大丈夫だ。アイツは？」
「わからん」

何処に行きやがった？　勝ち目の無い俺から逃げるワケもないし……。なんだ？　凄くイヤな予感がする？　なんだ？　この胸騒ぎは！？

「……。ルン」

「！？」

何処だ？　あんにゃろう何処に居やがる！？　それより、何処から声が？
何処から？　違う……“室内全体”から……？

「！　まさか……」
「どういう事だ？」

ダメだ、動悸が治まらない。悪い勘が働く……。おいおい……アイツが本気をだしたら“こういう状況”ならヤツは簡単に俺を殺れただろ？　舐めてやがる……！！

「水蒸気……は水だ。零時」
「なぁ――？」

こんにゃろ……！

「吹き飛べ！！」

印を結んで風を召喚して吹き飛ばす。
水蒸気ていど風にかかれば簡単だっーの！！　最初から風を使ってた俺に挑発的じゃねぇか！
吹き飛んで空気に溶けやがれ！！

「集結。ルン」

ちぃ！　先に人間に戻りやがったか！
こんにゃろう……ッ！！

「宮鷹、どうするんだ？」
「どうするもこうするも……殺るだけだ！！」

「殺れるものなら。ルン」

む、むっかつくぅぅ～～～～～～！！！！！！！！！
小癪な奴めぇ～～～！！！　雷術は苦手中の苦手……さぁて、水をやるにはどうしたら良い事やら？　まずは、相手の弱点を知る事からだ。蒸発させて殺るのは不可能だった。雷は信用無いし……、木は腐るのは確実だ。土も無意味、相手に主導権を握られるだけであって……。

……待て、やっぱり絶対絶命という奴ではないか。

「生き物は自然には歯が立たない。ルン」
「へ！　力強く生きるのも動物だぜ？」

「おお。珍しく宮鷹がカッコイイ」
「珍しくだと！？」

＜ああ、珍しくだ＞
「桜憙まで！！」

「……良い場面を盗られてるのね。ルン」
「テメェもかァァ！！！」

な、なんてヤツラだ！！　た、確かに文也に盗られまくりだよ？
だって、アイツのが強いし……。

「イジケた」
＜だっさァ＞
「敵を目の前にして。ルン」

「だぁぁぁあああああああ！！！！！！！！」

全員敵かァァ！！！ってカ、お前等はダレの味方だ！？
クソォォォォ！！！　痛くなんかないからな！！　ああ！　心が痛くないからなァァ！！！

この阿呆共を、どげんがせんといかァァん！！！

「鷹の目から何も逃れれないんだぜ？」
「ふふ、水はこの世界の7も占めてるのよ？」

だぁから、どうしたってんだ？

鷹は……鷹はぁ……

グスン…。

「泣いた」
＜あ～ぁ＞
「ダサッ。ルン」

……ふふふ。どうやら、お前等はそんなにも俺に殺されたいらしいな……。
どうしてくれようか？　悪いようにはしないぜ？　逆に楽にしてやんだ……感謝して欲しいぜ。

「全員……切り裂く！！」

「……無理。ルン」

……確かに無理だ。どうにか倒す方法はないか？
電気だ……高圧の電流……それをヤツに付けるだけで勝てる。
シャンデリアは？　ダメだ……付けるより先に切り落とされちまう……。
なら……部屋を見渡せ……ココは食堂だ……なにか使えるものはないか？

考えろ……発想を転換させるんだ！

「宮鷹！　後ろだ！！」
「！？　風迅！！」

後ろから攻めて来たルンルン女を風で払い除ける。
すぐ形状を人間に戻して傘を構える。って事は、やっぱり溶けても無かったか……。
第一、レインコートなんか着てられてたら電気を通さなくね？

……おいおい。

俺ってば……風迅で弾く事しかできねぇのか？

……負ける。

勝てない。機転もクソもねぇ！！

俺は……殺される？

「み、宮鷹ッ！！　気を抜くんじゃねぇ！！」

「え？」

しまった！　奴から注意を反らした！！　奴は何処に！？

居ない？　前にも後ろにも、左右にも！？　ウソだろ！？　マジかよ！！

何処だ！？　何処に居やがる！？

「上だ！！」

「！」

「遅い。ルン」

その時は……すでに遅かったんだ。奴にコレだけはやられないように注意をしてたんだ。

だけども、一瞬の絶望が……気を抜かせた。それは、俺を殺すのに十分な攻撃。苦しんで死ぬのは確実の攻撃だ。これをやられたら逃れる事は不可能だったんだ。

真上には水と化したルンルン野郎。それは、人を包み込むのに十分な大きさの球体で神秘的に透き通っていて、眼を奪うものもある。それは、俺を死に招く死神（ジョーカー）であってもだ。

上から降り注いだ水の球体は俺を包み込む。

後は……簡単。

「がはっ……！」

窒息するのを待つだけ。

「――――ッ！！」

零時が何かを叫んでるが、俺の耳には届かない。
眼が染みてもう開けれなくなってしまう。苦しい……。それだけしか既に考えられなくなった。
全身が酸素を欲する。何も……考えられねぇ……よ。

苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい苦しい…。

もう……ダメだ……意識が……とぉ…おく……
なぁ――――

「……死んだ。ルン」
「……おい」
「？」

「テメェ、人の大事な親友に何してくれたんだゴラァ！！！！！！」

「！」

―覚醒―

「テメェだけは、俺が殺すッ！！！」

「覚醒した……。ルン？」

零時の右拳が赤く煌く。

竜の刻印（ルーン）が右拳に“刻まれた”

次ぎの瞬間――

【８８話】水ＶＳ鷹（後書き）

でもって、次ぎはぁ……零亞ルートでもやろうかな？
普段は零亞にヴァン君にラミア様にセフィリア、（役に立つか定かではない）妖精の快進撃（？）です。

ここで大分、人間関係がわかります。多分ですが。

【89話】Not武士道・巻之壱（前書き）

開校記念日で休みです。決してサボったワケではないですよ！！

さぁて、合流は出来た。残すは蔵に行けば和也が対象してくれるだろう。
いくら相手が和也並の実力者だろぉが……こっちは４人も居る……どんな能力者でも対等に渡り切る自信はある！

それに、危なくなったら逃げ切るかどうにかしたら良い。その為の魔封石は取り揃えてる。
時を見誤ってはいけない。常に慎重に動くんだ。

「ヴァン、何か感じるか？」
「う、うん。強い力を感じるよ」

近くに居るか。臨戦体制をとって……常に反撃や先制の攻撃ができるように構える。
さぁて、久しぶりの闘いだ……楽しもうかッ！！

「距離は？」
「そんなにない……次ぎの曲がり角だ！」
「了解」

次ぎの曲がり角……。１００ｍもない。
……さぁて、と。お楽しみはココからだよ♪　さぁて、なにが出るかな！？

「……！」

ギィン。と、鉄がぶつかり合う音が鈍く響く。どうやら、敵さん

は武士……かな？
刀なんか持って、袴なんか羽織ってるし……ちょんまげだし……？

……マジで？

相手の得物（ぶき）はかなりリーチの長い刀だ。たしか、佐々木小次郎という奴が持っていた刀だと記憶している。名は【物干し竿】確か、長さは三尺（約９０ｃｍ）余りで、この長さの刀は珍しくはないが、戦国時代末期から江戸時代初期にかけては長い方だった。と、小学校で勉強した。あの武器オタク先生に。
※零亞の担任の名前は、武紀緒卓（ぶきおたく）先生なのだ！

名前は、ああだけど……一応、日本刀だよ。

「ほぉう、西洋の騎士か」

セフィリアの事だろうか？

「その貧血そうな顔と低血圧な顔はヴァンパイアとお見受けした」

コイツ何者だ？　しかもヤケに威張ってる口調だな？
ちょんまげ星人が……それを知ってなんだってんだ？
様子をみた方が良いだろうか？　それとも、コイツを袋叩きにして……

「我が名前は松之上康正（まつのうえやすまさ）なり！　能力は、問答無用（オールキャンセラー）いざ、尋常に勝負を願おう！」

イキナリの怒号に軽く震える。本当に武士みたいな奴だ。
戦いの前に名を名乗る……。上等じゃないか……。能力まで明かす

なんて馬鹿だろう？
最初に口を開こうとしたが、珍しくセフィリアの方が先に名乗りを挙げた。
「セフィリア・ナイト・メイガス。種はデュラハン」
「ヴァン・アル・サーザス。種はヴァンパイア」
「ラミア・デュミナサス。種は死神」
「フェアナ・クルベルト。種は妖精（ピクシー）」
何時の間に居た？　ピクシーの小娘よ？
「僕は、阿玖零亞。種はハーフエルフだ」
『え？』
４人が驚愕の声を上げる。そうだ、僕は珍しいタイプのエルフだ。元はエルフはエルフ同士の婚約が決め付けられてるが、父はそれに背きヒメナ・アマミヤと床を共にした。その結果が僕だ。死神とエルフの異色のハーフ……もともと、同種族での婚約しか認められてない……。
デスエルフ。知ってる者ならば僕の事をそう言う。
「そうか……零亞の出生は……」
「あ、」
「……」
「？　え？　？？？」
「ふ。誰が相手だ？　一騎討ちで頼み申す！！」

一騎討ち？　クソ！　１対１だったら２ｎｄの状態のヴァンパイアでは使い物にならないし……。妖精なんて使い物にならない。セフィリアは最後まで残しておくのが定石だ。と、いう事は……僕かラミア……か。

「私が行くよ」

名乗りを挙げたのはピクシーの小娘だ。まともな戦闘能力が無さそうに見えるが……ダメージを与えてくれるだろうか？　心配で仕方ない。

（私、小さいから当たらないよ♪）
（当たったらそこで死ぬぞ？）
（まぁ、見てなさい♪）

なにか策があるのか？　だが……何もないと戦いを挑もうなどするはずがない。
……賭けてみるか？　この妖精の小娘に？　大丈夫なのか？

それより、問答無用（オールキャンセラー）か……。相手の能力に確証を得るためだ。

全員が多分同じ事を考えただろう。

（（（（華やかに散ってこい！！））））

「？」
「む？　どうした？　蝿の少女？」

「誰がハエじゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！

！！！！！！！！」

「いざ、尋常に勝負！」

「小さいからって……甘く見るなよぉ！！」

みんなそんなに期待してないからね。

ただ……能力の詳細がわかればキミの任はそこで終っても良いよ。

無茶は禁物だ……それに、コイツはなにかを企んでる。

「アースジェット！」

「いぎゃあああああああああ…」

役に立ってねぇぇぇ

「他愛もない」

いや、殺虫剤をアンタが使うからだよ。

武士道もクソもないか……ふん。ゲス野郎が。次ぎは……僕が出ようか？

だが、能力がわからないのなら……。

「僕が行く」

「ヴァン！？」

「大丈夫、相手に能力を使わせるくらい……頑張るから」

だが……この吸血鬼（ヴァンパイア）は２ｎｄまでしか能力を覚醒させてない。

コイツとは次元が違うだろう……。ヴァン、ヘタしたら……お前、死ぬぞ？

第一に今の時間帯は昼だ、ヴァンの能力は半分もでない、いや、今日は太陽が出てないから５０％も出せれば良い具合だぞ？　月の出て無いヴァンパイアはハッキリ言って雑魚だ。

「ふむ。ヴァンパイアか。楽しめそうだ」

「……やれる限りやる！！」

血が入った小瓶を取り出す。大した量は入ってないが……何に使う気だ？

血は自分の体力の為に使うぐらいだろ？　ヴァンパイアは？　なにが目的だ？

アル・サーザス一族の秘伝の伎（ワザ）だとでも？　まぁ良い……能力の詳細を知るまでは行けるだろう。彼を信用しよう、ヴァン・アル・サーザスを。

【89話】Ｎｏｔ武士道・巻之壱（後書き）

一人一殺の感じで進みます。コレは。

【９０話】宿命。１回目（前書き）

１日いっぱいパソコンです

【90話】宿命。1回目

「行くよ」「鎌で私を相手に？　後悔しなさい！」
『我、ここにて鎌の意を唱えん。我が鎌よ真(まこと)の力を現せ
其は科学の闇が産みし数多の中の一陣の光の内なり！　出でよ！
燃え盛れ焔よ、燃えろ燃えろ燃えろ

「貴方！　八式がどれほど危険な重力か知ってるでしょう！？」
「ええ。勿論、私達の関係も知ってるよ？」

関係？　知るか！！
確かに容姿も何もかも似てるし同じ鎌を使えるのも不思議よ！

「だけど……貴方は気に食わない！！！」
「？　残念だなぁ……」

消えた？　イヤ、違う……背後（うしろ）だッ！！
視界から消え様とも、何故だか私には貴方の動きが見えるわ？　手に取るように。

「「紅蓮滅斬（フレア・リベリブ）」」

２つの紅蓮を纏った鎌がぶつかり合う。
凄まじい熱量が発生して爆散するが、奴は怯みもしていないだろう？
私ならどう動く？　私ならこの爆煙に紛れて……上から超重力（メガグラビジョン）を放つ！
あくまでも外での事だ、内部でなんか使って良いものじゃないからだ。同じ術で相殺したら大変な事が起きてしまう。俗に言う、ブラックホールが完全なものに……ね♪

「メガグラビジョン！」
「グラビフォール」

重力の層を作る。クソォ、力加減が難しい…ッ！
第一、八式をぶつけ合うだけでも危険なのに……ダメだ……力を抜きすぎたか。押されてる。

「押し切られて……溜まるか！」

ヤツが落ちてきたのを狙って……これで決める！！

重力以外でのとっておきのヤツ、見せてあげるよ♪

「天の羽音、世界を包み込み。風の音は安らぎを与える。琴の音は羽の音色と共鳴し響く。音（ね）は風と共にあり。響け音よ、裂け風よ。風は音を運ぶ、音は風を震わす…」

コレは私が知ってる“禁術”の1つで、過去に最強の死神が愛用したとせれてる魔法だ。

コレを使えるのはマコちゃんと歩奈実ちゃんだけだ、マコちゃんが“あの時”に使った“忌々しき”禁忌の魔法だ。だが、あの時はああ、するしかなかったし、実際はコレは見様見真似の魔法。

「音の響、風の牙！」

ヒメナ・フューリアンが最後に残したこの術……ッ！

「風音魔法・風響鳴刃（エア・ブレイド）！！」

「……そう来たんだ♪

天の羽音、世界を包み込み。風の音は安らぎを与える。琴の音は羽の音色と共鳴し響く。音（ね）は風と共にあり。響け音よ、裂け風よ。風は音を運ぶ、音は風を震わす…」

えっ？　この詠唱は……まさか？

そんな事が……？　なんで？　彼女がこの魔法を使えるの？

あり得ないあり得ない！！　そんな事があってたまるか！！　だって、聞いただけで覚えれる内容でもないし、意味の解釈と会得の儀式も行ってなんかいないでしょ！？

ダメだ、深く考えるな！　ヤツの詠唱を終える前に……―『音の響』―…切り裂く！！

「斬（スラッシュ）！　もういっちょ！　―『風の牙』―　紅蓮牙狼」

風の刃と紅蓮の狼を作り出して―『風音魔法・風響鳴刃』―ヤツに向って放つが次の瞬間に2つとも消し飛ばされて、凄まじい風が全てを薙ぎ払う。

「弾（ショット）」

しまった……ッ！　ショットか！

鎌があったら動きが落ちる……ココはしまって……エア・ブレイドを中心に攻める！！

初めて持ってみたけど……軽い。まるで鳥の羽？

鎌より威力はあるが……使いこなせそうにない……ッ！！

どうする？　相手の方があきらかに上手だ、『斬』で精一杯の魔力だ。なのにヤツは平然としてるし。それに……『弾』まで使えるとは……。ダメだ、勝てる気がしないッ！

それに、屋敷で振りまわしたりなんかしたら……ッ！！

「波（ウェーブ）！」

音の波！？　ダメだ！　耳に響く！！

鼓膜が破れそう……音の進行を止めるッ！！

「グラビティエリア！！」

一体を重くさえしたら、空気の振動など止まる！！

「ふ。魔法から再行動まで2秒かかる」

「！」

全身に悪寒が走る。

後ろを振り返ると背後で右手と一体化した剣を振り上げていた。

どうする？　間に合う！？　イチかバチかッ！！

「壁（フォール）」

得物を切り上げて風の壁を作って防ぐ。魔力がもう無くなりかけてる。初めての初めてで作り上げた『壁』を成功させるが、軽い眩暈に襲われる。

もう少し朝ご飯を食べて充電しとけばよかったぁ～～～。だって、あまりにも美味しいから太りそうで怖かったんだもん！！　クソォォ～～！

「もう魔力が尽きてるんじゃなくて？」

「くッ！　甘くみないでよ！　……ねッ！！」

鍔迫り合いと、なるが……魔力の差は明らかであって、押し負けてる。

風と風がぶつかり合うという事はもの凄い衝撃波を発生させてるが、退くワケには行かない。

だが、威力が弱くなった風と、強い風がぶつかり合う事にもう間も無くなる。魔力を振り絞って対等に渡ってるが限界はもう１０秒もしないで来る……。圧倒的な劣勢だ。

【ピキィッ…】と、音を発てて私の得物にヒビが入る。限界は近い……。

だけど……ッ！！

「喰らえぇぇぇ

「斬（スラッシュ）」

え？

向い側の風が強まる。脆くも私が起こした風の斬撃は糸も容易く消される。

「弾（ショット）」

更に追撃。渦を巻いた風の弾丸が風の刃の起動を変えて、ショットの起動へと変換させる。大きな風の弾丸は凄まじい勢いで私に近づく。正直言って……死をも覚悟した。

次元が違う。何者だ？

無念……とは、全く持ってこの事だ……残された魔力は本当に微かだ、ってか、無いに等しい程微弱でどうしようもないが……。少しだけでもダメージを軽減させれれば……生き残れる可能性はある！

「バリア！！」

巨大な風の弾丸が全てを薙ぎ払いながら私へと攻め入る。

「……やれやれ。その程度で防げるかよ」

「！？」

ダレ？

「ダークネスブレイドＺＥＲＯ」

空間を切り裂き出でた深淵の剣が風をも切り裂き、少女にクリン

ヒットする。
この魔法には見覚えがあった、彼のオリジナルの魔法だ、シャドウランスに強化に強化を重ねた最終形態に近い彼の魔法。
四二神の頂点に立つ時に使用した幻の魔法だ。
「神堂……マコ、トかァァ！！」
「27か、ふん。俺が相手になってやるよ」
ダメだ。気を抜いたせいで……意識が遠く……。

「……まさか、“端”に居たとはな？」
「ふふ。“プロジェクト”の最後の完成品が大事だったかしら？」
「ああ。俺等（四二神）の標的だよッ！！」
「ボロボロの身体で無理しちゃって♪」
「舐めるなよ！　ニナ！！」

【９０話】宿命。１回目（後書き）

次ぎはダレにスポットを当てようかな？

【91話】許せない者（前書き）

前半は感情を込めてね（黒笑）

【91話】許せない者

「脚馬・豪襲烈脚ッ！！」
「グガァァァアアア！！！！！！！」

殺ったか？　クソ、予想外に時間を食った。こりゃあ、明日は筋肉痛だろぉな。
だが、ムチを打っとくか……ヤツを逃がすよりはマシだ！　今直ぐ戻るとしたら、3分フルで走ればすぐだ……クソ、待たしちまったら悪いしなぁ……。速攻で行く！！

そうだな……ただ、走るのも詰らないからちょこっとだけお話しをしようじゃないか。
どんな事が良いかなぁ？　そうだ、作者がめんどいから省いたレヴィヤタンの紹介をしようじゃないか。俺ってエライな！　うんうん！！　ゴメン！　なんか手裏剣が飛んで来たんだけど！　なにコレ！？　読者の殺意！？　自我自賛してました！　俺、如月駿はオレしにの玩具です！！

お、覚えてろよ……。

ふ、天才的で頭脳は学校の順位では常に半分より上の俺が……なに？　この可哀想な物を見る目は？　なんだよぉぉ～～～！！！！！

畜生テメェ等！　読者如きがキャラクターにンな事をして……って！！　雷遁だと？　忍者も見てるのか！？　いや、コレは読者の殺意の雷かぁ！？　どんだけだよ！！　殺意がチャクラになるってどんだけだよ！？

……ツッコメば止むんだな……。

そんな事より速く説明させんかぁ！！　愚民共よぉく聞けッ！！

……。……おい、脚を狙って風遁はねぇだろ、俺が風よりも速くなかったら、殺られてたぞ？　馬にとって脚は大事なんだ時なんだぞゴラァ！！！　うわぁ！！　いっぱい来たぁ！！　おい、テメェ等、脚を狙うんじゃねぇよ！　どんだけチャクラ（もとい殺気）があんだよ！？　俺ってどんだけ目の敵にされてんの！？

……もう聞け。いいか？　聞いてください。お願いします。

やっと、静まったか……。最初から言う事は聞くものだぞ？　愚民共？　って！　槍が！　槍が降って来やがった！！　殺意の雨ならぬ、殺意の槍か！？　痛い！　痛いんだけど！　１個刺さったぁ！！

スミマセン、もう調子に乗りませんから止めてください。

では、始めさせていただきます。

レヴィヤタンはリヴァイアサンとも知られてる水中に潜む怪物、ないしは、悪魔の事だ、中世以降は悪魔とされる事が多く、旧約聖書【ヨブ記】同、【詩篇】同、【イザヤ書】同、【ヨナ書】などでは、巨大な怪物だとふれられてるんだぜ。

名前の由来はぁ……確か、ヘブライ語で「集まって壁をなすもの」だったかな？

口から火は出すわぁ、隙間無く敷き詰められた鱗は頑丈でぇ、海に関係深いヤツらしいぜ……正直、戦ってみてコレほどの物かと驚いたぜ。

ヨナ書って、あっただろ？　ヨナ書には預言者ヨナをレヴィヤタンが飲み込んで、三日間腹ン中で過したらしい。胃酸とかどうなってんだ？　そんでもって、神が、ヨナを吐き出すようにと命令して助かったっていう逸話が記録されてるんだ。

俺様ほど頭の良い……なんだ？　その目は？　まぁ、良い……。ヨナの話しを見ればわかる通りにレヴィヤタンは神に敵対する存在じゃない。そもそも、レヴィヤタンは天地創造の5日目につくりだした存在で、そういう意味ではスゲー悪魔なんだよ、自ら敵である悪魔を産むんだからな。

その巨大さから、いかなる武器も効かない。まぁ、俺様は蹴りで砕いたがなぁ！？　ハハハ。ヤツは神すらも最強の存在と認めてるんだぜ？　和也の方が圧倒的に強いんだがな。

まぁ、俺が砕いた場所（頭）は神も砕いたとされてる場所で、その後は人々の食料になったらしいぞ？　詳しくは、知らんがな。そうそう、別の伝説では神は始め2匹のレヴィヤタン（当然、♂と♀）を作ったが、海がこの怪物で埋め尽くされる事を恐れて♀の方を殺したんだか。

そうそう、海をコイツが支配してるつぅ事は陸を支配する悪魔も居るって事で、ベヘモットっていうヤツが居るんだなぁ♪　おっと、見えてきた……。

じゃあな。

―Ｍａｓａｒｕ　Ｉｔｏｕ―

「グゴォォオオオ！！！！！」

真正面から突っ込むか！　槍（グングニル）を持ってる僕によくやるよ。

かといって、３分は済んでるから結構……キツイんだなぁ……。

「魔力増幅（マジックバースト）。溜＋溜（チャージチャージ）＋溜＋炎（フレア）＋炎＋強化（アップ）＋滅（クリア）＝騎焔滅槍（グングニル・オメガ）」

だが、猪突猛進ほど……僕の槍が際立つのはないよ！？

さぁて、これで、終りだよッ！！　怒りで我を忘れてるのならば……コレで終りだッ！！

猛進するサイに、槍を突きつける。顔面から突き刺さって【ゴキィ、バギィッ！】と大きな音をたてて突き刺さる。尾先まで突き刺さった所で「灼熱（フレア）！」と、叫び、ベヘモットは業火に包まれると、同じに僕は普通の姿へと戻りへたり込む。

荒い息を整えて腕時計を確認すると、１２時を回ろうとしていた。

雨は弱まるどころか強くなり始める。相変わらずイヤな雨だ……。

ココから先ほどのところまで走って１０分か……タクシーでも捕まえ様か。

タクシーは左程、待たなく来た。飛ばせば2分程でつくらしいから、少しだけ話しながら休憩しようかな？　そうだなぁ……僕が戦ってたベヘモットにしようか。

ベヘモス、もしくはビヒモスって呼び方なら知ってるよね？　暴飲暴食を司る悪魔の事なんだよ。また、海の怪物……レヴィヤタン、リヴァイアサンなら知ってるだろ？　それと、対なす陸の怪物が、ベヘモットだ。その姿は巨大な腹をもったサイみたいなのである。

本来、ベヘモットはレヴィヤタンと同じく悪魔というよりも神に作られた怪物って言うのが正しいのかな？　怪物っていう線が強いみたいだね。旧約聖書ヨブ記第４０章では、たしかぁ…「これこそ神の傑作」らしい文があったと思うな。

性格は温厚で全ての野の獣が彼と戯れただとか。戦っていた僕にはいまいち信じられないよ。ただし、彼の食欲は、毎日、１０００ほどの山にはえる干草を貪ると、まさに底無しの胃袋に相応しい。そのせいで、時が経つたびに貪欲を象徴する悪魔になっていったんだ。

さぁて、ついたみたいだ……。大人しく駿でも待とうか……。

それでは。

―Ｈｕｍｉｙａ　Ａｒａｋａｗａ―

「ッ！」

一足遅かった。オレは一体どれほど気を失ってたんだ？
クソ……ッ！　瑠依が居ねぇ……。あんのは、死体の山か……蛇島さんに朋澤さん……。クソ、何処のどいつだ？　許さねぇぞ……！
刺殺、この銀の矢が頭部に直撃したのが死因だ。それも、即死だろうな、頭に１発。クソが。

「……」

開いた目を、静かに目蓋で閉じさせる。手をついてから、立ち上がる。この２人はオレが右も左もわからない時に礼儀作法を教えてくれた人だ（まともに、覚えてないが）、その２人が目の前に死体として転がっている。強く握り締めすぎた拳から爪が食い込んで血

が流れる。

銀の矢……アルテミスか。痕跡を残しやがって……余程、挑発をしてるらしいな。想定外の挑発になっただろうな？　オレを怒らせた罪は重いぜ？

どうせ、瑠依と一緒に居るんだろ？　丁度いい、助け出したついでにぶん殴ってやる！

窓が割れてる。ココから侵入？　または、矢で壊した？　いや、ヤツほどの腕だと綺麗に矢の大きさだけで、できるだろう。と、なれば……この大穴は？　ヤツが跳んで逃げ出した？　もちろん、瑠依を連れてだろうが。だが、ナンセンス過ぎる。もっと上手くできるはずだ、奴は射手（アーチャー）。一種の狙撃手（スナイパー）だ。場所取りとか、屋敷の見取りとかは完璧なはずだ、じゃねぇと、スナイパーなんてできるかよ。

ん？　待てよ？　屋敷の内部構造を理解してるだと？　どういう事だ？

内輪にそれらしい動きはオレとミヤが（そういえば、大丈夫か？）目を光らせてたからあり得ない。油断したとでも？　ありえない、屋敷の内部にも外（主に庭師など）にはまったくもってそれらしい動きは全くなかった。なら、油断したしかねぇ？　ダレに？　いつ？　何処で？

安易に屋敷の内部を知れて、オレ等の包囲をやすやすと掻い潜った？

ありえない？　気を抜いたのなんて……あ、1回だけあった。

ゲーセンに行った時だ？　だけど、ゲーセン？　ゲーセンで、なんだってんだ？

ゲーセンでもそんなのは……？　ダレか居たのか？　ダレが？

「あ、」

そう言えば……居た。1人だけ……居た。

「ちぃ！」

遅すぎた！　少しでも警戒してるべきだったじゃないか！！
油断した。安心しすぎたんだ。あの時になんで、警戒しておかなかった？

アルテミスの正体は……凪凛だ。凪梨由の孫……盲点だった。

なら？　梨由じぃは？　梨由じぃは幾ら孫でもうすうす気が付いていたはずだ？

「死んだよ」

「！？」

この殺気は……。ハハ、震えがとまらねぇよ。

懐かしくはないが……久しぶりだぜ……神路蒼譜だったかな？

「凪梨由。彼は死んだ」

「嘘だ！」

梨由じぃが死んだ？　そんな事はありえるか。梨由じぃは、オレなんかより遥かに強い。何をやった？　こいつ等？　“端”の下に居るヤツが梨由じぃを殺れる？　否！　それは不可能だ！

「毒は本当に微小なら効き目は蓄積されてるだけ。わかるかな？大して危険な毒じゃないからね。何年かけたことやら♪」

「……外道がッ！」

「殺し屋だもの」

コイツだけは……許さないッ！！

「ぶち殺すッ！！」

「楽しませてね♪」

この外道だけは……オレが自分の手で滅するッ！！　許せねぇ……殺す。

テメェがどんだけのヤツかは知らねぇが……絶対に殺すッ！　殺してやる！！

【91話】許せない者（後書き）

駿「てめぇの仕業かぁ！？」
ＨＡＨＡＨＡ
将「見事に殺意の的だったね」
駿「あってたまるかよ！　苦しかったよ！」
泣きながら言うなよ。
駿「ううぅ。読者様、再びお詫びを申し上げます。ちぃ」
将「キミのくだらないツンが原因だろ？」
駿「知るか！」
前半はハッチャケましたよ♪
将「ここで、僕等の魔法の説明だね」
あ、本題忘れてたよ。
駿「おいッ！」

将「僕の魔法は【能力付加】簡単に言うと武器にそうの魔法の力を装飾できる能力で主に攻撃力増幅の「溜」とか炎属性を付ける「炎」が基本で「強化」は強度のこと「滅」は決めというか、なんて言うんだろ？　フィニッシュに必ず使う奴だし？　最も強力な威力増幅かも？」
かもって……。
駿「自分の魔法だろ？」
将「僕の師匠が早死にしてねぇ？」
早死に？
駿「俺のはぁ……魔法というより・・

続きは次回で！
将「ばいば～い」
駿「うわぁぁぁぁぁぁああああああああん（号泣）」

【92話】シロートVSプロ（前書き）

今回は自信がありません。どこか、矛盾していたら言ってください。

【92話】シロートVSプロ

どうしたんだ？　宮鷹？　おいおい、立ち止まっちゃ……ほら、相手が消えた。
追い切れてない？　違う！　余計な事を考えてるんだろうか？　それより、ヤツは何処だ？　俺から見たら室内の殆どは見渡せる。居ない？　部屋の角にいる俺からでも見えない位置？　あるだろうか？　ココなら全体が見られる……何処だ？

そんなのはある筈がない。周りをよく見ろ。テーブルが吹き飛んでバラバラになってるからその中とか？　イヤ、宮鷹の動きが止まった今……そこに行く必要はあるか？　ないじゃないか。

なら……？

クソ、闘いの事なんかサッパリわかんねぇ！
兎に角……？　なんだ？　水の球体だと？　天井にあんなの……！？

「み、宮鷹ッ！！　気を抜くんじゃねぇ！！」
「え？」

間の抜けた声を出すな！！　ってか、今更にヤツが居ない事に気がついたのか！？
クソ！　これだから、お前は間抜けなんだよ！　って！　違う、そんな事を言ってるヒマはあるか！
ヤツは宮鷹の真上？　まさか……？

「上だ！！」

「！」

アホ！　気が付くのが遅せぇよ！！
ささっと、避けろ！！　変な事を考えて立ち止まるんじゃねぇよ！！

あんなのに捕まったらお前……！　死んじまうぞ！！
だから、避けろッ！！　宮鷹ァァ！！！！

「遅い。ルン」

高めの冷徹な声が響く。次の瞬間に水の球体は宮鷹に落ちる。
宮鷹が息を初っ端から出してしまう、あのアホが！　第一、水女がこの形態になるのは俺でもわかったのにお前がわからないはずも無いだろう？　ふざけてんのか？　なら、速く出ろよ！　お得意の胡散臭いスマイルをしろよ！？　なぁ！？　宮鷹秀一！？

「宮鷹ァァ！！！！」

俺の叫びと同じに、宮鷹は腕をダラリと浮かせる。
仕舞いには身体が中心で浮き沈みしてる。ヤバイ。

最初からわかっていたが……コイツはヤバイ。それより、宮鷹だ！！

水女は普通（ヒューマン）に戻して、俺の前に立ちはだかる。

俺は女よりも宮鷹の生死に気を配るが、全然、起きる気配どころか、生気すら感じられない。マジかよ？　嘘だろ？　宮鷹が？

「……死んだ。ルン」

何時の間にか目の前に来ていたこの水女が冷淡に告げた。
死んだ？　ダレが？　ダレに？　なんで？　わからない……。
宮鷹がこの程度で死ぬか！！　テメェなんかにあの、宮鷹秀一が…
…俺の親友が死ぬか！　死なせてたまるかってんだ！！　どんなく
だらねぇ理由か知らないが、絶対（ぜってぇ）に許さねぇ！！

「……おい」

身体が熱い。何かを訴えてるのか？　何が？　そんなのは知らな
い。
俺はただ……目の前にいる奴をぶっ倒して、親友を助け出すまでだ
！！　俺の中に眠る何か知らねぇがよ、俺の力になれ。力を貸せッ
！！

「？」

なに、小首を傾げてるんだァァ？　何が疑問だというんだ？　ふ
ざけるんじゃねぇぞ！！
相手は殺しのプロ、こちは喧嘩もあまりした事のねぇシロートだ！
だがよぉ……負ける気がしねぇし、テメェなんかにゃ負けねぇよ
！！　無駄にそんな自信が溢れてきやがる。

なんだ？　胸の内から何かが来る？　だが、そんな事より、俺は
言う事があるッ！！

「テメェ、人の大事な親友に何してくれたんだゴラァ！！！！！！」
「！」

今までにこんなにも人を怒鳴った事はあっただろうか？　いや、

ないな。

だけど、こんなのは初めてだ……右手がメッチャ熱い。そうか…
…そんなにヤツをぶん殴りたいか。殴らせてやるよ、だぁかぁら、
少し待ってろッ！！

あんにゃろうは、俺がぶち殺すッ！！　殴り飛ばす！！
どうやって？　ハァン！　そんなのは決まってるだろ？

ぶん殴る時に決めるんだよ！！

「テメェだけは、俺が殺すッ！！！」
「覚醒した……。ルン？」

覚醒だ？　そんなのはどうでも良い……。

俺はテメェをぶん殴るだけだ！！

＜気に入った＞
＜……＞
＜ふん。楽しそうなヤツだ＞

頭の中に何かが響く。どんなのだろぉが関係ねぇ！　ただ、ぶん

殴れればそれで良し！！
何だろうが手伝いやがれ！！

＜へぇ。面白いじゃん、俺がやるよ♪　機鋼兄も羽風兄も手を出すなよ！！＞
＜……了承＞
＜わかってるよ、暴れて来い＞

「！　なに。ルン？」

力が沸いてくる。不思議な力だ……昔からあったような感じがする？
懐かしいってわけじゃないけど……馴染む。

＜行くぞ、零時＞
「おう！」

わかる。コイツの名前が……その使い道が。
だが、ヤツを倒せるのは、なにかないか？　相手は水……だ。
コイツは炎を使う“竜”だ。機鋼は雷を扱うが……相手を動けなくする必要がある。
羽風は宮鷹と同じ事しかできない……。どうする？　決定的な弱点はない。

だが、やってやるよ！！

「来い。爆焔竜！！」
＜竜装・頭（かしら）！＞

「右手が……。ルン？」

化けた。自分でもビックリだ。使い方はなんとなく分かってはいたが……右腕そのものが代わるってなんだよ？　ってか……相手の目はマジなんですけど！？

「竜装使（エクストドラゴニック）。ルン？」

＜おいおい、姉ちゃん？　知らないで来たってワケじゃねぇだろ？＞

うをぉ！？　右手（が、化けた竜）が喋りだした！？

ってか、どういう事だ？　やっぱり瑠依が狙いなのか？　なら、より一層に許さないぞ。

それより、少しデフォルメしてくれないのかな？　めっさ、リアルで怖いんだけど、俺の右腕が。ってか、自分の腕に恐怖する俺ってなに！？

「想定内。ルン」

＜だぁが、ここで覚醒するとは思ってなかったんだろ？＞

「ＹＥＳ。ルン」

覚醒って？　コイツ等の事か？

深紅の竜を見ながら思う。クソ、相変わらず置いてけぼりだ！

瑠依の事も知ってるようで俺は……多分、宮鷹や文也より知らない。

知っていても瑠依が必死に隠してたスリーサイズくらいだ。まさか、中３で“Ｅ”もあったとは……。

違う違う！　俺は無力だ。なにも出来ない……。最低限の事も出来ないさ。

だけど、やりたいんだ！　妹を守りたいんだ！！　もう、置いてけぼりはイヤだ！！

＜は！　テメェなんかに負けるかよッ！！＞

「ああ！　行くぞ！！」

「ふん。ルン♪」

液状化し、前に出て来た零時の後ろへと陣盗る。だが、零時より、竜が素早く反応して零時は華麗に反転する。

竜が大口を開けて、液体人間（スライム・ヒューマン）を飲み込もうとするが、棒状の長い氷と化して、火竜（サラマンダー）の顎を外す。

（痛ッ！！）

激痛が零時を襲う。火竜たる爆焔竜のダメージが零時へと伝わったのだ。

「スプラッシュ。ルン」

液体と化して凄まじい水圧の水を出す。水圧に負けて零時は吹き飛ばされて壁に激突する。

水鉄砲は零時が激突すると、同じに止み、目の前に形をつくる。手

は包丁のように形状を変えて瞬時に凍らせて鋭い刃を作り、零時の心臓目掛けて突く。

＜ざけんな！＞

しかし、竜が反応して殴り、氷の刃物をへし折るが、水に戻り液体人間の手に戻る。

（ん？　“アレ”は…？）

「けったいな能力だ」

「貴方如きでは、無理。ルン」

（確かにそう……だ）

零時は細く笑いながら立ち上がる。

液体人間は疑問に思いながら不可思議な目でみてくる。

「だがよ、コイツだけは自分（テメェ）でやらなきゃ気が済まねぇ事があんだよ！！」

＜おうよ！　行くぞぉ！　零時ッ！＞

零時の言葉に火竜が答えるが如く燃え盛る。

＜火炎哮（かえんこう）！＞

火竜の口から摂氏数千度もの火が噴かれる。

液体人間は直ぐに氷へ姿を変えて溶けると同じに炎の下へと逃れる。

だが、そこまでは、零時は予測がついていた、だが、手に持っているものが歪であった。零時の左手に持っているのは透明な容器に青いキャップがされてるものだった。

零時はさらに、邪悪な笑みをつくる。

この容器は先ほど、零時が吹き飛ばされた近くにあったものだ。素早く形状を作り身構えるが、零時がソレを破壊する方が早かった。その中身は単純。ヒントを出すなら“さ、し、す、せ、そ”である。そう……中身は塩だ。

「あっ……。ああぁ……ッ！！　熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱いッ！！」

自分の“ルン”すらも消えた。

別に自分の体温（もとい、水温）が上がってるのだ。人間型（個体）に食塩を混ぜると個体は食塩の溶解熱（－０．９３ｋｃａｌ／ｍｏｌ）で、それだけ溶解の時にそれだけの熱を奪う。そうなると凍りだし残った部分の食塩水濃度が高くなる。食塩が少量ならその程度だが、、十分な量の食塩が存在すると、更に食塩が溶けて熱が奪われる。簡単に纏めると『食塩が水に溶けると熱を奪う』という事だ。

つまり、液体人間は溶解されそうになったが、自分で自分の身体を凍らせる。

それが、古都宮零時の奥の手だ。

＜？　何をやったんだ？＞

「まぁ、見てろよ♪」

もう、２つほど取り出して相手に向って投げる。

「ぎゃあああああッ！！！！　くぅ……」

身の熱さに耐えかねて液体人間は自分を凍らせる。
それは何時もよりも数段冷たい氷、触れれば絶対零度の冷たさ。
だが、零時の狙いはコレだ。凍った状態ならば、粉々に粉砕できる。

そう、氷を消滅させたら……液体人間は死滅する。

「爆焔竜、ヤツをチリ1つ残らずに消滅させんのはあるか？」
＜メイオウ攻撃と行くかぁ？＞
「お任せ！」

「＜爆滅瞬焔＞」

口から炎が吐き出され、それは全てを残さずに部屋の壁ごと消えうせた。
零時は自分の後ろにいる宮鷹を確認する。心臓に耳を当てて音を確認する。

「はは…」

【トクン…】

と、耳に響く。宮鷹の心臓は奇跡的に動いていたのだ。
零時はそこで、緊張の糸が切れたか？　零時は、力尽きて宮鷹の隣で倒れた。

一＆古都宮零時ＶＳ液体人間（スライムヒューマン）

勝者・宮鷹＆零時

液体人間・死去。

宮鷹秀

―？？？―

「大丈夫？」

「間に合ったか？」

「……オーディン！　それに、スレイプニル！！」

ダレ……？

「アルテミス……か」

「相手に不足はないだろう？　将？」

「あはははは！！　楽しめそうだ！　相手になってあげるわ？　瑠依は貴方達を殺したら相手をしてあげるから大丈夫よ？　って、気絶してたんだっけ？」

「外道が」
「ぶち殺すッ」
「楽しませてよ？　老騎士と馬ッ！！」

&井塔将ＶＳアルテミス　―ＳＴＡＲＴ―

如月駿

【92話】シロートVSプロ（後書き）

科学的な事を言ってますが……そこが不安なんですよね。

【９３話】石動沙紀！　華麗に参上！（前書き）

スランプです。はい。

【93話】石動沙紀！　華麗に参上！

「“ヴァルハラ”が“端”になんの用ですか？」
「わかりきった事を言うな」
「駿、僕は彼女を非難させておく……べきだろうけど……ダメかな？」

そうさせたいのは山々なんだがなぁ……。
こうも、見事に囲まれたら無理かな？　“端”の連中じゃねぇが、ウラの業界のヤツ等だな。こりゃ。大した連中だ……ここまで集めるとはなぁ……余程、和也を警戒してんだな。

和也から東條の野郎の事を聞いた時は驚いたぜ……。それに、和也達が古都宮の親戚の誕生日会、あれも異常だったな……まさか、地下に“アレ”があるとは、驚いたぜ……後で調べたら騎鋼師団の連中が手を加えてやがった。

魔力炉（マジック・コア）なんて何処で手に入れたんだ？　しかも、幻想（イリュージョン）のコアなんてそうそうないよ……。騎鋼師団と魔具組織の連中が手を結んでるしか考えられない。

おっと、そんな事より……ッ！

「駿！」
「おうよ！」

『纏めて繋って来いや！　雑魚共！！』

―???―

「ふぁ～。ココが北海道ですか」

駅に降り立った瞬間に都会の空気と違う何かを感じた。気持ちの良い風がホームを突きぬける。あたしは、一回、深～い深呼吸をして歩みだす。

お小遣いを全て叩(はた)いてまで来たんだ……旅行とかなら良かったんだけど……今のあたしは一文無しだ。ううぅ……先輩達の横暴でいらついてたからって……流石に駅弁を自棄食いしすぎた？　そういえば、お客さんの目がやけに冷たかったような？　流石に２４個食べるのは異常かな？

ってか……駅弁でお金がなくなったんだ……あたし……。あ！　ダレか今、自業自得だと思ったでしょ！　その通りで言い返せないんですけど……。その……あの……。

原因は先輩達なんですよ！！　あの横暴な先輩達が悪いんですよ

！！

『沙紀（さき）……何処を向いてるの？　出口は……』

「ヴァルちゃん……読者様に……」

『独裁者？』

「もの凄い聞き間違いですよ！！」

ヴァルちゃん……他に人が居ない事を良いことにして……。まったくですよ。

彼女は私の相棒で守護霊みたいなものです……。細かく言うと違うんですが……そんな感じなんです。あたしが利口な方じゃないのが悪いんです……あたしなんか……所詮は先輩達の言う通りにしか動けないんですから……あたしなんか……あたしなんか……。

『く、黒いオーラが』

ううう。合流地点が大分違いますけど……多分、古都宮の屋敷ですよね？

まさか、1週間も遅れるだなんて……。

「取り合えず、石動沙紀（いするぎさき）……行きますです！」

「ッ……。はぁ、はぁ……」
「くっ……」

「アハハハ。流石はヴァルハラの戦士達だ。全滅しちゃったぁ」

舐めるなよ……伊達に最強の馬を語ってねぇよ。それに、参魔神の“脚”もな。
それに……コレが終ったら野郎を連れ戻さないといけねぇんだよ。

テメェ等みてぇな前置きは邪魔なんだよ！！

「スレイ、踏ん張れよ」
『応（おう）ッ！』

一瞬で間合いを詰めて相手（アルテミスのアゴを目掛けて蹴り飛ばそうとするが、脚を捕まれて後方の樹へ投げ捨てられるが、木をクッションにして、真上に飛ぶ……勿論、狙いは……ッ！

「脚馬・蒼鳳凰天駆脚（そうほうおうてんくきゃく）」

「ふ、」

氣を焔に変えて放出。そこから……相手を目掛けて……跳び蹴りっと♪　仮面ライダーを見た後にＴＯＦ（ティルズオブファンタジア）をやって思いついた技だッ

！！

それより、さっき……あの野郎……笑いやがった？

なにか目論（もくろ）んでやがるのか？　そんな事より……狙いは将が食いとめてるからＯＫだ。このまま行けば……一撃だっつーの！！

【ストン。】

！？　なッ？　何が……起こった？

「！　駿！！」

空中で姿勢を崩して、俺は抵抗無く地面に落ちる。しばらく思考が停止したが、何が起こったか理解するのには大して時間が繋らなかった。

俺は撃たれたんだ。腹部に刺さった銀の矢を見て、すぐに気がついた。

「私の能力……わかったかな？」

「座標を変えたのか？」

「ッ……！　どういう事だ？」

ヤツは矢を射ってなんか……？

「触れた者の座標を変えれるのよ」

「……ちぃ！」

そう……か？

何か不気味なのを感じる……。確かに野郎が矢を持ったのはわかった。さらに消えたのもわかったし……本当にそうか？　将は疑ってる節がないし……。

でも……けったいな力だなぁ……。物の座標を変える力……か？

「うふ♪　さぁて、どう料理をしようかなァァ！？」
「ウゼェよ！！」
「駿……。２対１で有利なのは変わらないよ」

樹を背に立ち上がり、将が近づく。
そりゃそうだが……付け加えるなら『やっと』だろぉな…。

「さぁて、攻撃再開ッ！」
「そろそろ……行くよッ！」

「無理無理ッ！　ランクＡ　に適うとでも！？」

やってやるよ……ッ！　全力で繋って来やがれ！！
だけど……試したい事が１つあるんだよねぇ～。俺は結構、諦めが悪い男なんだよね……。

それに……ヤツが本物か偽者かわかる。

「どぉだろぉな！！」
「駿！　焦るな！！」
「まぁ、見てろよ♪」

凝りもせずに間合いを詰める。相手の右拳を払う、なにとなく気

がついていたが……この野郎は雨宮流の使い手だ。しかも改良されてるともなれば……動きはわかりやすい！

「読まれてる？」

和也の攻撃の方がキレもスピードも……全然、足らんッ！！

「へ！　大した事ねぇな！！　脚馬・旋風裂脚！」

身体と脚のバネを使って、全力で蹴り回すッ！！

俺の脚が伸びた先は樹だ。庭に生い茂っている樹木。庭師さんが綺麗に手入れをしてるであろう、整った樹だ。心の内に謝罪文を読んで俺は樹を蹴り倒す。

【バギィッ！！】

あ、ダレだ！？　馬鹿だなぁ…自分の脚を折るなんて、って考えたヤツは！？

折れたのは俺の脚じゃねぇよ、樹の方だ♪　おい、信じてねぇだろ……。

「ッ！」

「やっぱり！」

「そうか！」

以外とアッサリしてんなぁ？　“嘘吐き”が♪　折角の嘘も影薄会書記長兼戦闘要員！　如月駿様には隠しきれねぇようだなぁ！？

この道化師が。

「あ～ぁ。バレちゃった♪」
「天才如月駿に解けぬ問題は皆無！！」

今日の俺ってカッコいい？

「キミの能力は洗脳操作（マインドコントロール）だね」
「ええ。でも……キミ達に彼女は殺せないわよ？」
「？」

何を言ってる？　どうせ一般市民なんだろ？
それなら、簡単に気絶できるし……へ、知り合いでも手加減はしねぇぞ？

ってか、公平に2対2になるんだ。俺が気絶させる役にまわりば……OKだ。
ダレだ？　ヘタレと言ったヤツは？

「出て追いで、“魅夜”」
『なッ！？』

木の上から降り立ったのはよく見知った女性だった。
弓を片手に持ち、整った容姿に胸元ぐらいの大きさのポニーテール。
美少女と美女の狭間にいる、幼そうだがしっかりと凛々しい強気の有り触れた顔……更には、未発達の……なんだ？　その視線は？

見覚えがあるぞ。やけに見覚えがある！
そして、その名前も聞いた事がある……おいおい……。

柴原魅夜……。雨宮和也の幼馴染み……。

「将ぅぅぅうううう！！！！　俺がアルテミスを相手にする！」
「待った！！　馬が主に逆らうな！！　僕が彼女を相手にする！」
そう……雨宮和也の幼馴染み。

とある、一件で俺と将の喧嘩に巻き込まれた少女が居る。それが柴原魅夜だ。そんでもって……ワザとじゃないんだぞ？　魅夜に傷をつけた。今も左腕に傷が付いてる筈だ。それをたまたま（か？）見ていた和也が激怒。それからいろいろあって……だな。

その……なんだ？　『魅夜にどんな状況でも傷を付けたら“俺”が許さない』そうだ。っと、オリジナルの野郎に言われたんだよぉ！！　アイツに勝てるかってんだ！！　しかも、あの野郎は言った事を必ずやる男だ！　特に幼馴染みがかかわったのならば……尚更だ。

「あははは！　雨宮が怖いんだね！？　そうかぁ……雨宮和也を知ってるなら簡単に読まれて当然か！　そりゃそうだよねぇ～。彼は怖いからね！！　特に、この子が係わると♪」
「ちぃ！」
「くっ！」

「さぁ、スナイパーはいいわ♪　私の盾になりなさい♪」
「！　させるか！！」

その前にテメェを冥土に送ってや――ッ！！
速い？　そんな馬鹿な！？　なんで、もう前に居やがるんだ！？

魅夜！！

最速（トップギア）から、急な停止（ストップ）。当然、身体が悲鳴をあげる。更に……目の前にいる魅夜は屈んでいて、その上にはアルテミス……その構えは見覚えのある技だ。

「雨宮流無差別格闘術・改　凪の型　竜殺掌（りゅうさつしょう）！」

手の平が腹部に減り込み、息が出来なくなる。間髪いれずに氣を爆散。

当然の事ながら無茶な事ばかりだった…体制が体制な為か通常より吹き飛び、木へ直撃。

「がはっ……！」

立ち上がろうとするが、すぐ横になってしまう。肋骨がかなり粉々になった。意識が遠のく。

クソ……ッ！　力がはいらねェ……ッ！

「サンダーショット！」

「！」

「しまっ！」

……？　ハハ、遅かったじゃねぇか。

「指揮をしないと動けないようですね？　その指輪で♪」

「！」

「やれやれ……遅いよ」

「例えヘタレな先輩達を欺けても、私の眼は誤魔化せないんですよ

！」
「ダレかしら？」
「石動沙紀！　華麗に参上でぇ――きゃあ！　『ぐぎゃ！』　……あ！　す！」
……死ぬぞ？　俺？
この阿呆は『華麗に参上』までは良かったんだが……問題は『です』の部分だ。
力が入ってだろう、奴は木から落ちて……俺の背中に落ちたんだ。
はは……魂の半分が口から抜けそう……だ。（気絶）
「……如月先輩？　如月センパァァァアアアアイッ！！！！！！！」
『……』
「クソ！　よくも先輩を殺ったなですよ！」
「いや、沙紀ちゃんが……」
「許さないです！！　石動沙紀！　貴方を倒します！　如月先輩の仇です！！」
「面白い♪　やってみなさい……お嬢さん♪」
「沙紀ちゃん……あのね……」
「将師匠は黙っててくださいですよ！　ここは、あたしが受け持つですよ！！」
「だから、沙紀ちゃ……」
「自信家ねぇ？　嬲りがいがありそう♪」
「将師匠は黙って役にたたない如月先輩とその子を安全地帯に送っ

てくださいですよ！」

「駿……哀れ」

「石動沙紀、行っきまぁぁーすッ！」

【９３話】石動沙紀！　華麗に参上！（後書き）

端迷惑な後輩（？）石動沙紀の活躍（？）にご期待してください。

【９４話】八式と能力の真実（前書き）

スランプです。

【９４話】八式と能力の真実

「アハ♪　最強の死神と言われ難い貴方が人間の味方？」
「どうだろぉな」

スキがない。やはり風響鳴刃（エア・ブレイド）は厄介だな。風の防御をそう簡単に掻い潜れはしない。それに、後ろにいるレナを守る責任もある。

それに、戦闘の続行は不可能なほどダメージがデカイ。連なって魔力は０に近い状況だ。
戦況を打破するには……どうするべきなのだろうか？　２７の能力は無限魔力（インフェニティマジック）の使い手だ。迂闊に間合いを詰めたのならば……殺られる。

【実験番号（シリアルナンバー）２７　最終演奏者（レクイエム）。ニナ】四二神の時にどれほど相手にするのを楽しみだったことやら♪　なんせ、ヒメナ・アマミヤの生まれ変りという名までついたんだからな。俺の師の分身……相手に不足はない！

「斬（スラッシュ）」

懐かしいワザを使う。多分、ホナも忘れてるだろぉな♪
“表向き”にはヒメナ・フューリアンが残したとされてる風と音の合体魔法だ。
だが、お前では使いこなせないな。

「クリア・デリート」
「！？」

風の斬撃は俺が起した“黒い穴”に吸い込まれる。
コイツなら俺が起したこの重力の結界の謎が解けるだろぉな……。
それに、見たことないだろう？　ヒメナ・アマミヤが残したこの魔法を♪　真・八式ってか？

「なに？　その魔法は？」
「八式だよ。ヒメナ・アマミヤのな」

そう、ヒメナ・アマミヤのな♪　ヒメナ・フューリアンじゃなくてな♪
テメェ等の腐れプロジェクトの後なんだよ！

「解放（リリース）」

黒き穴から蒼き風の斬撃が放たれる。突然の事に驚愕したヤツは動けなくなる。
だが、目の前に来たらもう遅い。自分の風に喰われな！

―Ｈｕｍｉｙａ　Ａｒａｋａｗａ―

「双龍滅掌！」

両手に氣を溜める。質量の高い氣は通常の人間でもわかるほど神々しく輝く。両腕を広げて不規則に駆ける。素早い動きに氣の黄色い残像は龍が如く長細く伸びる。到達点は神路蒼譜の胸元。

しかし、文也の攻撃は大きく避けられる。

だが、それは計算済みで、龍滅掌の爆破を利用して自分を後ろに吹き飛ばす。次ぎの瞬間に先ほど、文也がいた場所に無数のナイフが突き刺さる。

「だぁッ！」

「ふん」

次ぎの瞬間に2人が攻め合う。文也の攻撃はやすやすといなされて、蒼譜の攻撃は１０発の内の3発は文也に霞める。あきらかに文也の方が劣勢だ。

蒼譜のナイフが空を掠めて伸びきった腕に、文也は右手で掴んでそのまま壁に向って投げ捨てる。蒼譜は壁をクッションにして衝撃を全て受け流して地に脚をつける。

「だぁぁああ！！！！」

これを予測していた、文也は上からの奇襲を仕掛けるが、蒼譜の動きの方が速かった。蒼譜は文也の手首を掴んでそのまま、地面に叩きつける。

「がッ！」

「僕達能力者について教えてあげるよ」

蒼譜はナイフを首筋に突き付けてそう微笑みながら言った。

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｈｉｎｄｏｕｌ

「そんな簡単に八式を……？」

「テメェがさっきまでやってただろぉが」

そんなヤツに言われたくはない。

「にゃはは♪　知ってる筈だよ？　スーパーストリングセオリーの事♪」

「八式の使い手で知らないとでも？」

超弦理論……。頭で理解するのに時間は掛かったが、感じるのには大して時間が掛からなかったな。

「重力を量子論（りょうしろん）に記述する為の理論だ。素粒子の基本要素を大きさのない粒ではなくて、振動する“弦”として、その弦が奏でる音が特定の粒子の形……という事だ。勿論、目視できない小さなミクロ

単位のな」
「そう。ブラックホールもそれで説明されてる。え～っと？」
コイツ、ふざけてるのか？　八式を使っていながら……流石はレナと同類だ。イチゴとは偉い違いだな。ま、理解できる方が不思議だし、作者も雑学程度しか知らん。
「ブッラクホールは超弦理論では、固くからみあった状態の超弦達と説明されている。素粒子よりも小さな微小ブラックホールは、粒子の衝突によって人工的に作り出せる事が可能だ。それは、生まれてすぐに爆発し消滅する……莫大なエネルギーを撒き散らしてな」
「そうそう♪」
コイツ……いい加減なヤツだ。尚に会わない。どこまでもふざけた野郎だ。
八式の危険性を本当にわかってるのか？　気に食わないヤツだ、勿論、“あの野郎”の次ぎだがな。いい加減な野郎はでぇ嫌ぇだ！
「それが、八式の重力の正体♪」
「……なにが言いたい？　その先があるんだろ？」
「さっすがだね♪」

―Ｈｕｍｉｙａ　Ａｒａｋａｗａ―

はっ？　すーぱー…？　なんじゃそりゃ？

そ！　そんな事より、レナのヤツ、バカすか撃ちまくってるけど大丈夫なのかよ！？

地球環境とか地球環境とかさ！！　ってか、それをモロに喰らってるオレって大丈夫なのか？

「別に本当に微弱な威力だから大丈夫だ。手加減は徹底されてるけどね」

「だ！　だからなんだってんだ！！」

その、すーぱーすとりんぐせろり（×）だかはわかった。それが、どうやったらお前等（能力者）に繋がるってんだ！　なにが言いたいんだ？　こんにゃろうは？

「超弦理論を研究をかさねると1つの結論が出るんだ。膜宇宙（プレーンワールド）という概念に辿りつく……知ってるよね？」

「？　くれーぷわーるど（×）？」

さっぱりわからん。

「ボク達……いや、“君等”が住む世界は数多多くある膜宇宙の中の1つでしかないという仮説だよ。小学生でも知ってる言葉だと並行世界（パラレルワールド）だよ。そして、重力子はこの膜宇宙を自由に住来することができる……って事だよ」

「えと、ブラックホールがその入り口だと？」

「そう」

そこからどうやって能力者に繋がるんだ？　話しの流れを考えると……ッ！

「気が付いた？
結論から言うとね……僕達は普通の人間だったんだ、なんの能力ももたないね。だけど……別の世界の人間だけどね♪」

……。

「僕達はただの殺し屋じゃない、本当は……僕達の正体を調べてたんだ」

「……」

「そう遠くない未来に異なる膜宇宙が接触する」

「3季目の世界……」

昔……聞いた事がある。オレの記憶？　違う……俺の記憶か！

世界は幾つも崩壊をして繰り返している。そして、世界は1回滅びただか？　それが1回目の世界で今、人類は遣り直してる最中だって。2季目の世界、それがオレ等が居る世界だ。異世界同士が完全に融合する事になったら世界の破滅と同じだって……。その前にオレ等はこの世界……2季目の世界に飛ばされて1から……いや、0から遣り直したって……。

「そう。だけどその前に、君等が住む世界が一部が異世界の1部と変わってしまう。そこにあった街も人も全て入れ替わる！」

「ッ！」

「君達に咎められるか！？　彼等は別に侵略者でもない！　君等と

同じ……いや、むしろ彼等の方が被災者だろ!?　ただそこに住んでただけで何故、咎められる必要があるんだい？　君等も怖いだろぉが、彼等の方が怖いはずだよ？　何も知らない世界に脅え！　住人に脅え!!　そして、死に脅えるだろう!!!」

「だけど……能力ってなんだよ!?」

アイツが言うにはアイツ等は人間“だった”。と、いう事は何処かで力を手にしたという事だ。それは何処で!?　いつ？　何故!?

「世界の境界を超えた事で僕等の肉体や魂に影響がでる。それが、能力だ！　それらは、全て僕等が住んでいた世界の影響が此方にも来たという事で発生する物理現象だ。能力とは……世界同士の摩擦や拒否反応があわさって出来たものなんだよ！」

「……マジ、かよ……」

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｈｉｎｄｏｕ―

「……それが、お前の仲間の正体、か」
「そう。だから、私達は彼等を助け出すために動いてるのよ！」
まさか、ソコまで辿りつくとはな……。
「真っ先にぶつかり合うのは魔界と人間界……驚くほど近いんだから♪　それに、多作のキャラも」
「そうか、だからこの世界はやけに多作のキャラが来てるのか」
複線の為に自殺行為をする奴だ。心底呆れる……。
「そして、私達はその世界の破滅を防ぐ研究をしてるの！」
「……正義のつもりか？　くだらねぇ！！」

―Ｈｕｍｉｙａ　Ａｒａｋａｗａ―

「正義（ヒーロー）気取りか？　ウゼェんだよ！！」
「ッ！！」

『テメェ等に、ンな事を決められてたまっか！！！！』

【９４話】八式と能力の真実（後書き）

でも、更新は焦ってます。

【95話】Ｎｏｔ武士道・巻之弐（前書き）

こんかいの結末は以外と迷ってます。

【95話】Not武士道・巻之弐

「……」

僕では確かに彼には適わないだろうけれど……この中では僕が1番弱い。そんなのは昔からわかってる事だ、しかも、今は昼でもっとも僕の魔力が低くなっている時間帯だ。

状況は最悪の最悪。最低のどん底に位置してるだろう。だけど……ラミアにセフィリア、それに零亞が居る。僕なんかより数段強い。

「昼間に吸血鬼退治とは愉快だ」

「……。確かに僕では適わないけど……能力だけは使わせるッ！」

「ほぉう……。やってみろ！！」

刀の起動は読み易い。刃を追わなくても……手の動きを追えば簡単に避ける。

でけど、問題は僕のスタミナだ。太陽が出てないのが幸いだったが……時間帯は昼だ……魔力減少のピークに位置をしている。このままずっと避けていたら、何れは動けなくなって斬られる。

もって……10分？　イヤ、10分なんてない。

「閃光の矢（ライトニングアロー）！」

「むッ？　ふん！！」

「ちぃ」

まさか、最速の矢を軽く弾くとは……長いのに良く出来るよ……。

それより、攻撃をしない限りに僕は……勝ち目もないし役命を果せない……どうにか当てないと。

でも、まるでスキがない。

魔力も体力も衰えてる今の僕で懐に潜り込めるだろうか？

「零亞！　加勢しないとヴァンが！！」

「出来ないんだ。わかってるんだけど魔力も練れないし身体が動かないんだ」

「そんな……？　零亞も？」

「……それが、相手の能力かも」

みんな予測はできてるけど、２種類ある……そのどちらかなんだ。

僕は多分……少数派の考えだろう……問答無用（オールキャンセラー）。僕の勘が当たっていれば……それは、かなり危険な能力だ。“とある一言”で簡単に僕等を殺せる……完全に舐められてると、いうことか……。

取り合えず……どうするべきなのかな？　矢（アロー）系の魔法は多分……さっきみたいに弾かれるだろうし……。やっぱり、間合いを詰めるしかないか。

「サウザンドアローズ！」

「ほぉう」

合計千個ものの風の矢を召喚し、放つ。

風の矢は止む事をせずに松之上を攻める……。いや、攻めきれたと……僕は思ってた。

だけど、松之上はノーダメージどころかなにも掠り傷すらついていない……全てを刀で弾いた？　否。それは不可能だ。クソ、やっぱ

りか？　それに、場の空気が変わった……重力か？
違う……ッ！　もしかして……吸収された？

でも……どうして？　能力を2個もっている？
答えは……簡単だ。2個能力を持つなど不可解だ、なら……“元を辿る”んだ。

「な！？」
「……！」
「そうか…！」

あははは……みんなやっぱり目晦ましされてたんだ。
アイツは武士なんかじゃない。武士であってはいけない存在だ！

「ちぃ……。小癪な小僧だ」
「ホメ言葉かな？　盗人（シーフ）！」

間合いは貰ったよ！　スキが出来たこの一瞬に賭ける！　すべてを！！

これは和也君に教えてもらったみんなを守る為の力。和君の居ない分……男である僕が彼女達を守るために教えてもらった技だ！

「雨宮流無差別格闘術　基礎の型　龍滅掌」
「ぐふぉ！！」

よし、出来た！！　このまま続ける！！

右手で銃をつくって、指先に魔力を溜める！
狙いは吹き飛んで体制が崩れてるヤツの右足……だ。

「閃光の弾（ライトニングバレット）」

弾丸は野郎のスネに当たり、よろめいてくれる。

このスキ……逃（の）がしてなるものか！！

「くっ！」

体制が崩れたのならば……再三これでッ！！

「サウザンドアローズ」

「ぐがぁぁ！！」

どうだ？　防御は出来なかっただろうし……それに、“発言”する余裕なんかなかった。

勝った？　いや、立ちあがられたら魔力はもうないし……終りだ。

だが、相手の能力はみんなわかったはずだ。彼は2個も能力を使ってしまったんだ。

ならば、大よその検討はつく。それに……ヤツのストックを知りたい。

多分……残り1つって事はないだろう……あと、何個だ？　1つは【問答無用】そして、【吸収】、そして、もとの能力である【盗難（シ）自能（ーフ）】の3つ。

余裕な顔だ。袴には幾つか穴が開いてるが……。致命傷はないか。

「ヴァン！」

「上だ！」

ラミアと零亞の怒号が耳に響く、上を見上げると頭上には長い日本刀。
ダメだ……ッ！　頭は避けれるが……身体を霞める……か？　微妙だ……！
バックステップをして刀を避ける。髪の毛を数本舞ったけど回避はできた。
「……次ぎは？」
「！？」
背後から野太い声が響く。先ほどまでは僕の目の前……１０ｍ程度離れてたはずだ。
だが、ヤツは背後にいた。そして……短刀で僕の腹部を刺している
「――――ッ！！」
ダメだ、魔力も体力も限界だ……。ク……ソ。
意識が……とぉお……のいて、く。

「……私が行く」
「……ダメだ、キミ等は回復系の魔法を使えるんだろ？　治療をしておけ。僕は、いや……俺はコイツをぶっ倒す。いや、殺してやる」
「ッ！　う、うん」

「少年か…」
「甘く見るなよ。俺は僕とは違う……」
「死神のモードか……？　ニナと同じ気配がする」

「……黙れ。そして、死に腐れッ！！」

【95話】Ｎｏｔ武士道・巻之弐（後書き）

……中体連の時期が来ました。
これからは、部活に集中します。３年間、臭い汗水流してやってきた中学バスケに終止符を打つ事になります。

悔いは必ず残ります。だけど……自分が、イヤ、自分たちが何処まで行けるか。限界を認めずに俺等はコートを駆けます。その先に負けはあるんだけど……勝ちもある。仲間と歓喜して泣いて……。

そんな、俺の夏の始まりと終り。

【９６話】老騎士の意地（前書き）

お、今回はスラスラと文が……？

【９６話】老騎士の意地

「ヴァルちゃん！」
『了解』

石動の影がどよめく。歪んだ影は徐々に別の形へと変貌する。その姿は、女の騎士。鎧を纏った長い髪をもった女性の姿だ、それは、石動とは対照的で、石動の場合ならばボーイッシュな短髪にバンダナを付けているし、それに彼女の服装は鎧などではなく、デフォルメされた可愛らしいヒヨコがプリントされた決して中学３年の女性が着そうにない服に、年頃の娘が着そうな丈の短いスカートを纏ったナンセンスな少女だ。

それは、彼女の“憑依神”たる女騎士が石動の力を貸したからだ。“半憑依”それは、自分の憑依神に影を明け渡し、自分に力を貸す。そういう事だ、影という事で自分に被害はまったくないので多く用いるスキルだ。しかし、疲労は普通に戦う２０倍の疲労を感じる。普通の人間ならば２，３日は動けなくなる。

だが、当然に石動や駿、将など、憑依神を秘めてる者はかなり少ないし、“死と再生を繰り返している”彼等には慣れや、大した疲労にもならない。先巡したように彼等は死と再生を繰り返して肉体と精神力を高めているのだ。事実上、彼等は人間だ。ただし、記憶と力を受け継いで転生を繰り返してるだけ。勿論のこと、通常の人間には不可能な事だ、それを可能にしてるのが……彼等に“憑いてる”憑依神の存在だ。

「凄い力♪　やっぱり、老騎士とは違うのね」
「でも、将師匠の方が圧倒的に強いですよ！」

魔力を固めて作った剣が空を掠めて尚且つ、操られている柴原魅夜の頬も掠る。
しかし、石動はなんの反省もなくアルテミスに斬りかかる。

彼女は知らない。“あの”雨宮和也の恐怖を。
そりゃそうだ、育った場所も違うのだから、だから彼女を傷つけたら起りゆる恐怖を知らないのだ。当然の事だが、魅夜は操られていて、その操った原因はアルテミスにあるが……雨宮和也は恐らく聞き入れないであろう。聞く耳も持たずにアルテミスと石動の双方に制裁を加えるであろう。

「でぇも……私が操作をしてるのは彼女だけだとも？」
「卑怯者のする事ばかりです！　典型的な悪女ですね」

真横の茂みから飛び出て来た狼の眉間に肘を当てて、左手でアルテミスを狙って切り裂く。しかし、これも空を掠めるばかりでまったく当たらない。

さらには、周りには狼や蜂、数多多くの獣や虫が石動を囲む。
しかし、石動は動じるどころか逆に剣の鋭さが増す。理由は簡単……自分の後ろには最強の師が居るからだ。次ぎの瞬間に焔が唸りを上げて一帯の蜂を滅する。

狼の狙いは将に向いて、蜂は石動へと狙いを定める。

「だぁッ！」
「そんな！」

アルテミスは意外で仕方が無かった。彼女の事はすでに調査済み

であった。しかも彼女はスズメバチの特有の毒に対する【アナフィラキシーショック】という体質を持っている。単純に言うと、特定の起因物質により生じた全身性のアレルギー反応の事で、アナフィラキシーと呼ぶ。重症になると血圧低下を伴うアナフィラキシーショックという危険な状態になり、死に至ることがあります。彼女の場合は重度のもので刺されたら即死してしまうほどである。

普通ならどうしても避けて取り乱してしまうものだが、彼女は揺るがない。
真っ直ぐと立ち向かっている。

「エア・ハンマー！」

後方から大きな音が響く。風の金槌は辺りの狼をアッサリと気絶させる。しかし、将の攻撃はまだ続く。次の瞬間に炎の斬撃が、石動の動きによって固められた蜂を焼却する。

「狙ってた！？」
「こちとら端（はな）から2対1なのよ！」
「マシンガンレイ！」

将の手の平から無数の弾丸が放たれ、アルテミスの盾という状態になった、魅夜が前にでて腹部に当たったかに見えた。しかし、光の弾は当たらずに通り抜ける。所詮は質量のない光。人体を掠めるのは当然といえば当然である。コレは多数の相手に対し目晦まし程度の役割だ。炸裂し光が強く輝くの距離も設定できる便利な魔法。

当然、魔族にはよく知られる魔法で知らない者も習得しない者もいない。
しかし、それは魔法の概念を詳しくしる魔族だからだ、人間には…

…大して魔法を知らない人間には微塵も理解できないものだ。ただの、攻撃としか思えない。

「な！？」

光の弾丸を目で追う。しかし、真っ先に目に入ったのは光の弾丸ではない。“脚”だ、白い華奢な脚が入った、そこを辿っていくと、石動沙紀、少女が上段から剣を構えていた。当然の事ながら魅夜は間に合わない。そしてなにより……鼻先三寸の距離。回避は当然不可能……。こうもなれば、アルテミスに残された道は１つだけ。

仕方が無いから……“本当の能力”を発動させること。

アルテミスはつくづく悪女である。自分の切り札（もとい、自分の能力）を最後の最後まで仮初めの能力。最初から用意していた駒を利用しただけ、そしてワザとわかりやすいように安物の指輪を使ってそれらしい動きをしていただけ。

そして、洗脳操作の能力者は幾分、近くにいる。数百メートル離れた樹の上で眺めている。

そして、観察。それは、相手のスキを突くための。

話しは戻る。石動とアルテミスの間で黒い球体が表れる。その球体は渦を巻いて石動を吹き飛ばす。その瞬間に黒い螺旋の渦は砕け散り大量の小人ができる。帽子を被り小さな弓矢を持った小人だ。その小人は、おおよそアリと同じ大きさ。しかし、数はえらい事。かなりの大群だ、地面が真っ黒に染まったほどだ。

「？　か、可愛い……」

「沙紀ちゃん……最低限注意をしてよ……」

「小人（ドール）の強弓（ストロングボーズ）達」

「ぼ、坊主!?」

「違う!!」

小人達から放たれた矢は途中で集結。大きな矢の先が出来あがる。

将は何かに気がついたように思わず駆け出す、相反して、石動はただ呆然と眺めるだけで動く気配がない。相手がどう動くかを見ているのだろうが、将に腕を引かれる。

先ほどの位置から少し離れた位置に移動して、から。矢が動き出す。ドリルのように動き出す。

「ま、猿師匠?」

「ダレが猿だ。守ってやらんぞ」

「?」

黒い矢はソコから不規則に動き出す。そして、崩れる。

無数の矢は不規則な動きにより四方八方全包囲に黒い矢がばら撒かれる。

当然、たいした距離もとっていないために矢が攻める。

「守護焔衝陣」

紅い魔方陣が将を中心に現れる。黒い矢が飛び交うが魔方陣に近づく矢は1つ魔方陣に近づくと発生する炎の衝撃波が辺りの矢をも滅する。

そのまま、約2分後、矢の攻撃は止まり、将は魔方陣を解く。同時に1本の銀の矢が将の頬を掠める。

「ちぃ！」

「魔猿師匠！」

「凶悪化したか？」

「ジャレあってるヒマはあって？」

次ぎの瞬間に黒い矢が射られて、真っ直ぐ将を狙う。いくつもの矢が将を狙う、同時に石動は魅夜に格闘戦を強いられている。当然の事だが数本は自然と石動に当たるだろうが、全ては将に対し射られた矢だ。当然の事だが後ろしか回避するしかないが…後ろには駿や瑠依が横になっている。

「ウィンド・ウォール！」

風の壁が矢を巻き上げて矢は力を無くし宙を舞いながら落ちる。当然、数本は将に刺さるが、大してダメージではない。

しかし。

「ッ……」

将の体力は限界に近づいてるどころか通り越しているのだ。古都宮に来る前のベヘモット戦に限界とされてる3分以上もの戦闘をして既に体力は限界値を超えていたのだから、1時間以内にココまで来たという事は休まずに走って来たということだ、当然、体力の消費は尋常ではない程だ。今直ぐ倒れても仕方がない。更には、魔法の使用や激しい戦いともなれば……既に将の意識は遠くにある。

「終り」

銀の矢が空を駆け、将の腹部へ刺さる。

「将師匠ッ！！」

「がッ……く」

将は刺さった矢を引き抜き、まだ立ち上がるが。大きなダメージを貰ったし出血。倒れても不思議ではない、イヤ、倒れない事がおかしいのだ。

だけど、将は倒れない。それほど、彼を駆り立てるものがある。

「……僕が守ってみせる」

「将師匠！　無茶ですよ！　下がってください！」

「……キミに心配される道理はないよ。僕は、自分の意思で戦ってるんだ」

「あら♪　男ね♪」

「違うな」

アルテミスの言葉に将はすぐさま言い直す。

脚を踏み出して、腹部を押さえながらハッキリ言う。

「僕は騎士だッ！！」

ハッキリそう宣言する。そして、右手を前に突き出して魔力を練る。

強力な魔力の塊は人間にも見えるほど濃い蒼穹色の球体を将は自分の胸に押し当てる。

「憑依ッ！！」

「……駄目ですよ」

しかし、完全に押し当てる事は出来ずに途中で石動に手首を捕まれて出来なくなる。

魔力の塊は少しづつ色素を失いつつ消えて行く。将の影は老騎士ではなく普通の人間に戻り影も日光の照り付けない世界に解けて消える。

将は次ぎの瞬間に身体をダラッと倒れ込む。

「あら、自滅かしら」

「……黙るがいいです。この外道野郎共ッ！！」

石動は剣を構え直して叫ぶ。全ての原因は将の無茶が原因だ。だけど、彼女は単なる八つ当たりだ。疲労が溜まってるのにも係わらず自分の面倒を見てくれたというのに、何も出来なかった自分が許せなかった。だから、とにかく相手のせいにして自分が何も背負わずに戦う為に。

「さ、始めましょうか♪　女の戦いを♪」

「くだらない冗談ですね、同じ人間として虫唾が走ります」

「……嬲るッ！」

黒い小人が弓矢を構える。前方ではアルテミスが、後方では魅夜

が弓矢を構えている。
逃げ場はハッキリ言って０だ。しかし、石動には秘策がある。

「ヴァルちゃん……行くよ！」
『了解！』
「『憑依！』」

閃光が辺りに迸る――

【９６話】老騎士の意地（後書き）

今回は何故かスラスラ描けましたね……。
こういうのにはよく、誤字があるんだよなぁ……。

【97話】「だから。」（前書き）

遅れて申し訳ありません。部活やったり風邪引いたりで遅れました。
イヤ～、75話の後に直ぐ出せる状態だったんですけどね……。

【97話】「だから。」

「私は……私達は自分がやってる事を正しいと思ってるわ！」

「当然だ。自分が正しいとも思わないで行動はできない。自分なりの正義だろぉな。それがッ！」

真琴は鎌を取り出して構える。その目には一切の迷いはなかった。ただ、眼前に捉えてる相手を倒す事のみを考えてる。他の感情はまったく取り得ていないで、真っ直ぐ睨むだけ。

先程の攻撃を返された攻撃で少し、ニナはよろめくがスキは作っていない。それ以前に風の剣が発生させている風がニナの身体を守っているために普通に近づいても弾かれる何処か八つ裂きにされるであろう。だから、あえて真琴は近づかずに相手の様子を慎重に神経を研ぎ澄ましている。

（相手の魔力は無限大……ただでさえかなりの魔力を消費する風響鳴刃だ。それを無限に使えるとしたら長期戦は不可。攻めるにもあの剣は厄介だ……どうする？）

「斬（スラッシュ）」

「龍」

そう呟いた瞬間に鎌は姿を変えて気がついた時にはニナの肩を掠めていた。

ニナは状況を理解できずに慌てふためく。真琴の位置からではニナのいる位置に遠くはずがない。少なくとも２０ｍは離れている。

死乃恐怖（スケィス）の鎌の能力（ブラッド）。相手に死への恐怖を高めるための暗殺器である。その恐怖の源は……『変幻自在』の相手の予測を上回る変則的な攻撃。

「く、さりッ！？」

そう、真琴の持っている鎌と、届かないはずの鎌……それを繋げていたのが漆黒の鎖。地獄の呪縛をも思わせる赤黒い深淵の黒色（こくしょく）。それが、ニナと真琴の間に伸びていた。

「ちぃ。外したか」

鎖の部分を掴み手元まで鎌の上半部を戻して繋ぎ合わせる。

「だが……次ぎは逃がさねぇぞ」

真琴は一定の距離を守りニナの動きを観察する。風の斬撃や、風の弾丸……どれもそれを出す事によって防御は崩れる。真琴の狙いはそれだ。だが、わかりやすいのも難。

相手もすぐさま気がつく。だけど、変化の方が圧倒的に速かった。次ぎの形は漆黒の剣。そして、闇の大剣。

「ダークネスブレイドＺＥＲＯ」

「ッ！」

先程、風の斬撃を簡単に打ち砕いた闇の大剣は、直線状に進みやすやす回避されるが、真琴の動きの方が速く繊細であった。少しずれた風の壁を突き刺して、そのまま切り上げる。

漆黒の剣は腕から肩までを深く抉り、真琴はバックステップをし

て風の反撃を回避する。
剣は鎌へと戻り、床に突きつける。コレをチャンスとみたニナは『斬』を使い攻撃を仕掛ける、が。ソレは風の剣と同時に消し去られる。真琴はなにもしていない……ただ、それは、“後ろにいる悪魔”が原因だっただけ。

「深き闇から出でよ、サタン・ジュニア」

「ばぁッ！　バカな!!」

それは、あり得ない事であった。そもそも真琴の行動は不可思議であった。行動そのものではなく“魔法”がだ。通常魔法は【詠唱】【魔方陣】【意味】の全てが言える（知っている）事が原則だ。それを補う為に“魔封石”を使っているワケだが……例外も当然ある。上位の魔法だ主に召喚魔法だ、コレは【詠唱】【魔方陣】【意味】【名前】【形】【契約】の６つを全て出来ない限り召喚は不可能だ。

しかし、真琴は如何だろうか？　鎌を突き刺して、立っていただけだ。しかし、彼の召喚獣は現れた。現実、ニナの目の前で腕を組んだ人形みたいにデフォルメされた悪魔が炎に巻きつかれいる。悪魔を束ねる者……サタンの息子であるジュニアは当然、かなりの高位に属す召喚獣だ。それが、なにもしないで召喚は不可能。

『ありえない』のだ。

「……無詠唱（ノーサイレンス）。ソレが四二神のトップに立っていた男の能力だ」
「バカな……プロジェクトの死神でもない貴方が……何故？」

“プロジェクト”の死神総勢２７人にはそれぞれ特有の“特殊能力”が付属される。しかしながらに、半数以上が能力の暴走により

死に、生き残っている“プロジェクト”の死神は極僅かなくらいしか存在しない。初期型は暴走の事など想定に入れておらず何も知らずに表の世界で生きていた。故に実験番号（シリアルナンバー）“０７”のレナはプロジェクトや自分の能力の事も知らないのだ。

簡略に纏めると、プロジェクト以外の死神が特殊能力を持っている事は異能なのだ。

これも、また……『ありえない』事だ。

「何故……？　俺は最強の死神なんだよ」

真琴の言葉にニナは更に困惑するが、悩んでいても仕方がないと思い、すぐさま自分の隣に突き付けていた紅蓮の鎌を持ち、突撃。

真琴は一向に動かぬまま、静かに目を瞑る。

「だぁぁッ！！」

「……」

横一閃に、鎌が通る。真琴は静かに鎌を放して後ろに動く。

鎌の遠心力によって上体がずれて回避できる状況ではなかった、ニナが使うにはこの鎌は少し重すぎたのだ。真琴はそのまま手を突き出す。

「しまッ！」

「終りだ。ダークネスブレイドＺＥＲＯ」

漆黒の大剣が空間を裂き、ニナにクリーンヒットし、かなり吹き飛ばされる。強力な風を纏っていない状況では、攻撃を防ぐなどとは全く持って不可能。当然、ニナは莫大なダメージがあるだろうが、

真琴は一時も気を抜かずに鎌を構えていた。

（来る。）

真琴はそう悟る。次ぎの瞬間に強力な光の閃光が迸り、真琴を飲み込んだ。

―Ｈｕｍｉｙａ　Ａｒａｋａｗａ―

「そう。考え方が圧倒的に違うみたいだね」

「同じでたまっか」

オレとテメェが同じ考えでたまるかってんだよ。

っにいしても……こうやって押し倒されてる状態でどうしようか？

ヤバッ！　啖呵切ったのはいいんだけど……逃げれない。

「そう。君ならわかってくれると思ったんだけどね」

「共感が欲しいなら……お仲間の所に行きな！」

く、口が勝手に……？　ってか、よく考えたら身体も言う事を効かない……？

あれ？　なにが起こってるの！？　ちょっと……マジで言う事効かない……？

なんで？　おいおい……動けってんだ！！

『黙ってろ！』

！？　な？　何処から？

『お前は大人しく見てろ』

は、はい！

「……やれやれ、僕は君（オリジナル）には興味がないというのに……」

「黙れ。俺もコイツも……テメェと馴れ合うつもりはねぇよ！」

……まぁな。馴れ合いたくないタイプの人種だな。自意識過剰に過ぎるぜ？

自分が正義だと思わないで行動なんかできるかってんだ。誰しもそうだろう？　自分の行いが自分で正しいと思ってるから人は行動するものだ……オレが、みんなの前から消えたのだって……オレが正しいと思ったから。

客観視は間違いだろう……けど、それがオレの判断なんだ。

『だが、結果はどうだ？　お前を追ってここまで来たんじゃないのか？』

それは……。

『あいつ等にとって……テメェが大事なんじゃねぇのか？』

そんな事……ない。

『……勝手にしろ』

「残念だなぁ～。……本当に、ね」

声のトーンが変わった。それに……笑顔のつもりか何も笑っちゃいねぇ……その目は殺意か？　なにが目的かはしらねェが……やっぱりコイツは危ねぇ。なにより……神経を乗っ取られてるオレですらこの凄まじい殺気を感じる。

1週間ほど前のヤツはまだ可愛らしかったぐらいに、アイツの殺気はなまらデカく感じる。蛇に睨まれた蛙みたいに動きは封じられる。“オレは”なにも言う事も動く事も忘れて息を殺しながら視野に入っている奴を見る。いや、俺から入って来た視界の情報がオレに伝わってるんだ。

「まったくだな」

いっきに起き上がるが、胸元にナイフが迫る。すぐさま腕を掴んでそのまま起き上がると同時に床に頭から叩きつける。その後、瞬時に後ろに避けて構える。

ま、最初からわかってた事だが……あんなちんけな攻撃はまともに喰らうワケもなく平然と立ち上がる。首を2，3回横にして、骨

を鳴らす。はいはい……準備運動ですか。

次ぎの瞬間にアイツはオレの……いや、俺の視野から外れる。気配を辿り姿勢を低く突撃してくる神路（だったっけ？）に肘打ちをし、床に顔をうずくめるが、そんな俺より速く動いたのは神路だ。野郎は俺の背後をすでに取っており、ナイフがスーツを掠める。

すかさず、横一閃の鋭いナイフが頬を掠める。そこから無数の突き。俺はそれを自然に対処し事無きを得るが、迷ってるヒマなど毛頭もなかった。即座に反撃しないと対処に追いつかなくなる。

「くッ！」
「だぁッ」

しかし、相手は反撃させるスキを全く作らない。完璧に急所を狙ってるナイフの防御は簡単で読みやすい……しかし、コイツの速さは異常だ。追いつけなくなってしまうし、あいつはまだスピードを上げていて未だにＭＡＸに到達していない。

防御に徹する俺は反撃の糸口を探そうとするが見当たらないどころか、スキというものがまったく存在しない。

そもそも、この攻撃を反応しているだけでも並ではない。一秒に千回近くの俊敏で確実な攻撃をギリギリながらも弾いてる。人間業じゃねぇ……。

「どうしたんだい！？　雨宮和也ッ！！」
「ちぃッ！」

駄目だ。押されてる……ッ！

『いいから見てろアホ！』

なッ！　人が折角心配してやってんのにッ！！

『テメェに心配されるほど弱くねぇよ！』

む、ムカツク……ッ！

『黙って見てろ』

くっ……！　確かに、オレはコイツより劣っている。

確かに……オレが言うセリフはねぇよ……でも……悔しい。

本当に……なにも適わない……コイツに。やっぱり、ちょっと……キツイ。

なにも勝てない……コイツに……オリジナルの俺に。所詮は作り物なんだ……わかりっきってるのに…わかりきってるのに諦めきれないんだッ！！

わかった……いや、わかってた。オレは……なんだかんだ言ってもアソコに戻りたいんだ。雨宮和也として……。

『！　お、おい！！　邪魔を――』

だからッ！

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｈｉｎｄｏｕ―

「ちぇ♪　防がれちゃった♪」
「やれやれ……これだから、プロジェクトの野郎は嫌いなんだよ」

先程の攻撃で空いた穴から“ヤツ”を見上げる。神々しいという言葉をそのまま具現化したような白い装甲を纏った竜の形の悪魔……。白い悪魔は顔を空いた穴から俺を睨みつける。覚えてるとでもいうのか？　だったら光栄だ、“あの子”の仇もとれる。ま、忘れてるだろぉがな、コイツの精神に知能はニナの物になっているだろう……無様だな。

「だが……関係ねぇ」

この竜に……【無限魔力】のマスターだった、この竜だけはどうしても好きになれなれねぇ。この竜だけは許せない……ッ！　お前が宿してる事を知らなかったら手加減してる所だったぜ。

だが……その必要がなくなったぜ♪

「どう？　私の“元”は？」

「黙れ。ここからは……本気で行かせてもらう」

飛鳥……お前との約束を果たす、今度は、負けないから。“凛音”の仇を取らせてもらうぞ。貴様だけは絶対に許さん。

凛音を傷つけたのは俺の責任だ。俺が……守ってやれなかったから……あの時は力がなかったから。でも……今は違う。

「来な、遊ぼうよ」

「上等だ」

だから……。今度こそ、勝つッ！

【97話】「だから。」（後書き）

それでは、寝ます。お休みなさい……。

【９８話】Ｎｏｔ武士道・巻之参（前書き）

今回は納得できません。文章力がァァ……。
クソ、何か疲れが溜まってるのか？　目が少しぼやけてて頭がボーっとしている……。

【９８話】Ｎｏｔ武士道・巻之参

空気が変わった。と、言っても酸素濃度なだが変わったワケでは当然ない。辺りが緊迫の空気に変わったという事だ。その発信源は零亞だ、今までとはあきらかに違っている。少し具体的に言うと魔力の質量が爆発的に上昇して、なにより殺気が凄まじいものだ。

しかし、この偽武士……松之上康正（まつのうえやすまさ）は殺し屋の一員だ。殺気には幾分、慣れているはずだが1歩引いてしまうほどだ。

「クッ！」

「地を破壊し尽くす破滅の鑞天（あらがね）を滅する破空の鐵（くろがね）よ。万物を砕く天帝の裁きを喰らえッ！！　ジャッチメント・レクイエム」

詠唱しながらの攻撃。相手を外に押し出し術を完成させる。当然ながら黙ってるワケも無く、一瞬にして零亞の前に姿を現せるが、即座に叩き落される。

「氣魔・衝雷破（しょうらいは）」

対極する2つの術【魔術】と【氣功術】を合わせた反則的な破壊力を誇る最強に最も近い体術。

氣功と魔術は反発しお互いが交わることのない2つを無理矢理に力で押し込んだ武術である、当然ながら術者に多大なダメージを与える……どころの問題ではない。反発し合った強大な力は、反発することによって強力な爆発を産みだし術者モロとも消し去るものだ。

当然、人間が使える筈がないし、人間の数百倍の身体能力を誇る魔族だろぉが操る事は不可能の筈であった。しかし、零亞は意図も

容易く扱っているワケではない、彼のは“不完全”なものだ。簡単に言うと“制御出来ていない”のだ、故に、手加減はできなく常に十二分の破壊力で攻撃してるし、コントロールも出来ない。

吹き飛ばされた康正は麻痺する。意識が飛んだワケでもない。ただ、感電しただけの事だ。先程の零亞の攻撃は氣の爆散と同時に強力な電撃を相手にぶつけるという、雨宮流の【龍滅掌】に雷撃を加えた感じのものだ、それは相手の意識を絶つに十分な破壊力の攻撃の筈だ。しかし、意識を保ってるだけ、やはり常識の効かない連中なのだろう。

「ほぉう。だが、終りだ！！」

次ぎの瞬間に空を裂き、巨大な漆黒の十字架が康正に刺さる。

「地獄の葬儀。どうだい？」

（余計な事を言ってる暇があるなら……後ろにいる野郎の相手をしなよ）

「いいじゃないか……アクエル」

虚空に向って零亞が話し掛ける。次ぎの瞬間に上から日本刀が振り落とされる。

しかし、先程の位置には零亞は居ない。ワンステップ前にズレただけだ。そして、刀を持っている“康正”へ間合いを詰めて顔面へと燃え盛る右手を押し付ける。

「ぐがぁぁ…」

「騙せたつもりか？　俺を随分下に見てるじゃねぇか」

（レイア……。調子に乗っちゃ駄目だよ……）

「へ♪　野郎なんかに引けをとるかってんだ」

またも、端からはワケのわからない事を呟く。彼には彼の言葉が聞えているのだ。それは簡単に言うと、彼の脳内でのみ響いてる事だからだ。外野には当然、なんの事かさっぱりである。

当然、全員の頭の上には疑問符が上がっている。（自称）オレしに常識人組もである。まともな常識人だった……だと思っていた零亞が突拍子に変な事を言い出すのだ当然であろう。

信じてたのに……。多少、そんな視線すら感じている。

「貴様……ッ！」

「恨むなら、アクエルにしてくれよ、俺は氣功専門なんだ」

「何を言っている！？」

理解できない言葉に康正は詰りながらも口にする。

「俺は2人で1人なんでな♪」

不気味な笑みを浮かべながら零亞はそう答えた。

―???―

「……」

2人の少年が床に正座“させられていた”

「は、ハク……」

「悪いのはディスなんだけどね……」

「このアホの手伝いをしないお前も同罪だ。ハク・エルウィン」

その前には竹刀を持ったクマみたいな大男が静かに喝する。

ハクはそのまま押し黙り、隣の脚に2、3段石を積まされた赤毛の幼馴染みを見る。

「問題はお前だ、ディス・ホーク！」

「うぐぅ…」

巨漢に指摘されてディスはかなりの勢いで冷や汗を流す。同時に、“整備班”班長で鬼と言われている漢から視線を外す。あからさまに斜め下にだ。

「【猿にでも分かる簡単整備方法☆】で、どうやったら……“アレ”を爆破させたんだ？」

「い、いえ……ソレに記述されてる通りに整備をしました」

「僕も見ていたから間違いありません」

この2人が整備班に配属されてから1週間もたっていない。新人だがディスとハクの間では決定的な差があった。ハクはものの数日で天才と呼ばれるようになり、一方の彼は……デス。その名の通りである、由来は簡単……整備した機体をものの見事に１００％の確立で、だ。

いくら正しい遣り方でも、彼が整備したものはものの見事に爆発する。末恐ろしい少年なのだ。あるいみで……だが。

「貴様は猿以下か？」
「人間です！」
「ディス……あえて言うけど“端”に入ってるのだからまともな人間とは言えないよ」

そう、一応この2人も“端”に所属している。と、言う事は能力者だ。強力でしかも珍しい能力なんだが……この2人が戦いを極端に嫌う為に整備班に回されたという事だ。

「そうか、デスだもんな」
「ディスです！　小さいイが抜けてます！！」
「仇名と名前が似てるのも難だね」
「悪かったな！　ハク！！」

―Ｒｅｉａ　Ａｋｕ―

「……」

「……」

「……」

「その反応は想定外ッ！！」

何も黙らなくても！！

「……どういうことだ？」

やっと聴いてくれたか！？　エセ武士よ！？　お前って意外と良い奴だな！？

（れ、レイア……）

まぁ、待て。冗談だ。野郎はちゃんとやるよ。

（それより、さっきからみてて分かったんだけど……）

ああ。瞬間移動だ。脚の動きが見えなかったし、動いた気配もかんじられなかった。

（気をつけてよ）

任せろ♪　野郎をぶち殺す。

「俺はハーフエルフでも特殊でな……産まれた時から俺はコイツと一緒にいたんだ。精神の中でな」

「二重人格？」

「そんな感じかな？　まぁ言いや……闘ろうぜ？」

（だから、調子に……）

大丈夫だって♪　ケリはついた。

（え？）

ま、少し待てよ。

【ズガァァァンッ！！】

お、来たか……。まさか、壁を破壊して来るとは……うむ。

うおぉ、流石だなぁ……埃がでねぇや、流石古都宮の屋敷（の壁）だなぁ……。

「何やッ『邪魔だチョンマゲッッ！！』ぐべらぁッ！！」

おお。見事な裏拳だな……。アイツの顔にモザイク掛けてくれ。

“この世のものとは思えない”ほどに酷い事になってるから。

（……グロッ）

だろ？

『……』

な？　“アイツ”の氣を近くで感じてたから分かったんだが……こうも片付けてくれるとは、ってか、苦戦してたのに裏拳だけで終らせやがった……。流石だな……雨宮和也は。

（……でも。こうも、アッサリ終っていいのか？）

駄目だろぉな♪　カハハハハ。

「？　どうしたんだ？　お前等は？」

しれっと言いやがったよ……。テメェが殴った野郎と戦ってたんだよ。

まぁ、良いや。俺は眠るからなアクエル。後は任せたぞ☆

（了解……。）

「か、和也さん！？　ど、どうして？」

「どうしてと言われてもなぁ……」

「……何かを追ってる？」

「ま、そんな感じだを（読者さん、詳しいことは次ぎの次ぎの話しでやるから。少し待ってって）」
「何処にウインクを？」
「気にするな」
「「そないでっか」」
「ま、ヴァンを連れてアソコに連れて行け」
「わかってる。それで僕の役目は終りだ」

「そ・れ・と♪　ソコのハエ……じゃない、妖精はオレについて来い」
『居たんだ！』
「居たよ！　ってか、なんでぇ！？」
「ァ？　オレの言う事が聴けない」
「スミマセンスミマセンスミマセンスミマセン」
「んじゃ行くぞ…。零亞、任せたからな」
「は～い」「わかってる」

「ラミアちゃんに、セフィリアも無茶すんなよ」
「「はい」」

「行ったか……」
「強い反応が……屋根かな？　上にあるわよ。ソイツなんでしょ？」
「へ、助かった。取り合えずついて来い……。迷子になるから案内

をたのみたい」
「それで私を捜してたんでしょ……」
「当然♪」

【９８話】Ｎｏｔ武士道・巻之参（後書き）

あ、第二部もそろそろ終わるので改めて二部とレギュラー陣で人気投票をやろうかと♪

勿論、友人の伝手（つて）が大半だと思いますが。心優しい読者様もお願いします。

やれやれです。今回は逆立ちしてもなかなか納得できる文章が出なかったんですから……。苦労しました。

真琴の人気が上げないと主人公のメンツがありませんからね。主人公なのに前回は惨めな結果になりましたが順位が上がる事に期待しましょうか。

章ごとに人気投票を目論んでます。勿論、番外編になれば……あの２人が……？

でもって大事な次ぎの（コメディ編）の主用になる人物をちょこっとだけ。

ディス・ホーク：活発で元気が取り柄の少年。端（騎鋼師団）の整備兵でありながら、マニュアルに従っても爆発させてしまうといういろんな意味で危険な奴。少し中性的な顔立ちでそれをコンプレックスにしているが、幼馴染みであるハクに（ある意味で）引けをとっているのであまり言われてない。

ハク・エルウィン：整備兵の中で群を抜いて優秀で天才的才能を持ち合わせている。男性でありながらも１０人いれば９人間違う程の

女性みたいな顔立ちの少年。“もう1人の幼馴染み”に強制的に女装させられて、嫉妬される事もしばしば……。

ミレア・ミディア：上記の2人の幼馴染みで、開発局で“秘密兵器”の追加武装を考案している。此方もどちらかと言ったら中性的な感じで、ボーイッシュな服装を好んでいるので此方もよく間違われる。尚且つ、他2名が男なのでミレアまでもが男性とよくおもわれがち。

この3名ですかね？

なんか、長い後書きでした。スミマセン。

【９９話】龍、覚醒（前書き）

１００話まであと１話ですね。よくやったと自分に誉めましょうか。

【99話】龍、覚醒

「『憑依』」

目映い閃光が迸る。

刹那。白銀の鎧に身を包んだブロンドの髪の女騎士が姿を表す。
女騎士は持っている槍を構えて突撃。

しかし、槍はアルテミスまで届きはしなかった。それは、アルテミスが別に仕組んだ事ではない。ましてや、攻撃など受けてはいなかった。

「……ッ！　馬鹿沙紀……ッ」

原因は体調。単純に言うとガス欠だ。
苦虫を咥えたような顔をした後に、また目映い閃光に包まれ、姿は石動沙紀の状態に戻る。

しまいには、第一声が。

「お腹空いた……」

『……馬鹿沙紀ィィ！！　駅弁をあんなに食べたじゃない！！』

と、言われても仕方が無い物だ。彼女は育ち盛り真っ只中（終りに近い？）で、なにより彼女は食欲旺盛で人間の三大欲の中で８割と末恐ろしい少女だ。それに、駅から５０ｋｍほどある古都宮の屋敷まで全力疾走で向い、半憑依での闘い。

半憑依の疲労は尋常ではないものだ。

「ぷ。あはははは！！！！！」

地面にへたれ込む石動を見て、アルテミスは高笑いする。

石動は目を回しながら、ふらふらと立ち上がろうとするが、どうしても、2、3歩目で躓いてしまう。それを見てアルテミスは更に大笑いする。

が、それも“彼”の一言で止まる。

「笑ってるヒマ……あンのか？」

「きさらぎ……しぇんぱい？」

―Ｓｙｕｎ　Ｋｉｓａｒａｇｉ―

やれやれ……。何処かの誰かさんに気絶させられたせいで状況の

把握できねぇや。ただでさえ、勘しか働かない俺が将に沙紀まで倒れてる光景をみたらビビるは。

ま、その何処かの誰かさんが気絶させてくれたお蔭で結構、疲れは取れたんだし我慢するか。

「1人で何が出来るのかしら？」

「さぁな。お前を倒す事ぐらいだろぉか？」

ヘタな笑顔をワザと作る。かかかッ、ストレス溜まるだろぉな♪ほら？　顔にはだしてないつもりだろぉが、こめかみに血管が浮き出てるぜ？　さぁて、行くかッ！

「なっ！？」

「まだまだ、遅いほうでぜ」

俺は瞬時に間合いを詰める。先程とはスピードが大幅に違う為にアルテミスの野郎は思考が止まる。だけれども、この隙は見逃しだ。まずは、撹乱させてから……畳み掛ける。

バックステップし、もう1度間合いを計り始める。

「き、さまァァッ！！」

ほら？　絶好のチャンスに攻撃を入れられないのは1部の強者（つわもの）にとっては結構な侮辱であるから……。ま、勘通りに奴はキレた。

さぁて、野郎はどんな能力かな？　だが、問題は魅夜だ。あいつにあんな動きが……？

そういえば、どうやって反応したんだ？　俺のスピードに追いつくには……ッ！？

そうか……道理であんな無茶苦茶の事が出来たじゃないか……。魅夜をコントロールしてる野郎、魅夜に存在する“氣”を使ってるんだな。氣を上手く使えば俺並の速さは出せる。しかし、それにはかなりの熟練が必要だ。それを、操作しながら、魅夜に使わせた。

あんにゃろう……氣を完璧なまでに使いこなせるのか。

「さぁて、マジでどうすっかなぁ？」

―Ｒｕｉ　Ｋｏｔｏｍｉｙａ―

私……悪い夢でも見てたのかな？　だとしたら今日は本当に厄日だよ。文也に笑いながら話せるかな？　この場に文也が居てくれたら守ってくれるかな？

身体中が痛い。夢に痛いって感覚はおかしいかな？　夢じゃないんだ……やっぱり。

胸が痛いよ……苦しいよ。どうして、凪が私を殺そうとするの？　なんで、親友だと思ってた人に殺されないといけないの？　わけわかんない。

なんで、私だけがこんな目に逢うの？　なんで私だけが苦しい思いをしないといけないの？　おかしいよ、変だよ。私が何かをしたっていうの？　これなら……“彼”が来た時に死ねば良かったんだ。彼に殺してもらえば。

2、3年前……私の前に1人の黒いローブを羽織った少年に私は出会った。彼の名前は神堂真琴と名乗っていた。私の魂を冥界に送り届けるためと言って。

そりゃ、あの時は本気で逃げたよ。なんせ、話を聞く限りでは彼は死神。かなり恐怖した。話しの途中なのに私は全力で逃げ出した。それなのに、何故か彼は追ってこないで、ただただ……時間が過ぎて行った。

その間に彼は……まるで何かを調べてるみたいであった。今でも、それが何かわからない。

そして、1週間が過ぎた……あの日に私はファミレスで強盗犯に直面。その後、人質となり拳銃を突きつけられた。その時に何故に彼が追ってこなかったのかを悟った。

彼は私が死ぬ事を知っていたんだと。

私の妄想は膨らんで行く。

彼は私が死んだ後の霊魂を刈るとか、そんな勝手な考えが。

でもね、そんな時に私を助けてくれたのが……古都宮のＳＰとか、お兄ちゃんじゃなくて、勿論だけど、文也でもない。神堂真琴っていう死神だった。彼はものの数秒で強盗犯を撃退した。そりゃ、２人だけだったけど（何故か）犬の耳を付けていた死神に私は助けられて、攫われた。

そりゃあ、死ぬとは思ってたよ？　その日は台風が来ていて大雨だったから、いくら叫んでも聞えそうになかったから、死ぬ覚悟はなかったけど、出来た。

でも、彼はこう言った。

『お前は死神（おれら）では殺せない』って、おかしいよね……。私も理解できなかったもん。それでも、彼の言葉は衝撃的だった。

『本来なら、なかなか手配する車や飛行機が用意出来ない警察に逆上した強盗犯がお前を撃って、殺されていた筈なんだ。その死んで現世に残った霊魂を悪霊になる前に刈り、冥界へ送る筈だったが、俺の身勝手でお前を殺さない。いや、本来なら俺が係わっちゃいけないんだがな。どうやら、餓鬼達が間違ったらしいな、運命はどこかで大きくひっくり返されたんだ。君は自分に感謝するべきだ。自分の存在にな』　そんな、ワケの分からない言葉を言われた。前半は理解できたんだけど後半はさっぱりだった。私が死ぬというのは間違い？　そんなワケある筈がない。だって、あの引き金がいつ引かれても可笑しくなかったもん。凄く怖かったから……。

そして、最後にはこんな事も言った。

『運命って怖いものだけど。安らぐもんなんだ』って、まるで私じゃない、誰かに語りかけるように言った。泣きじゃれる私を優しく抱きしめながら。

今ではなんとなくわかった気がする。

運命は人を裏切る。けれど、安らぎを与えてくれる。凪と一緒にいた時間。あれは私の宝物なんだ。私だけの大秘宝。時間っていう本当に大切なお宝。

まだ、自分っていうのがよくわかんない。けど……。

これだけは、言えるんだ。

「脚馬」

地面を蹴り飛ばし全速力で間合いを詰める。当然、直線の動きだけに反応しきれないアルテミスではない、すぐさま（別人が操作をしているが）魅夜を盾とするが、駿はそれをまるで幽霊が如くすり抜ける。直線に進んだのだから、駿は後ろに居ると反応し、後ろを振り返ると、蹴りを溜めてる駿がいる。強制的な氣を使わされボロボロの魅夜がすぐさまアルテミスの後ろへとくるが、またもや駿は消えている。

「幻影桜脚（げんえいおうきゃく）ッ！！」

駿は上にいた。そのままさすがに素早く操作をする事は出来ずにアルテミスへの防御は不能。そのまま落ちてくる駿の速さについて来れずに、駿の蹴りはアルテミスの顔面にクリンヒットする。蹴りの強力な威力に吹き飛んだアルテミスに更なる追撃をする。

なんとか、持ちこたえて立っているアルテミスの顎に強烈なアッパーを与える。
それは、駿が幾度も喰らったワザである雨宮和也が得意としたワザ。

「昇龍拳ッ！」

大空へと昇る龍を描（えが）き。アルテミスは一瞬、気を失う。
意識を戻した場所は地面まで僅かという場面。ギリギリで受身をとるが、当然不完全。かなりのダメージを受ける。

「蹴りじゃないだけ感謝しな」

人差し指を突き上げてそう言う。余裕の笑みで。
勿論、プライドの高いアルテミスは逆上。更に怒りを増す。如月駿への殺意は本物だ。

「コロスッ！」
「へ、やれるもんならやってみやがれ」

余裕の笑みで駿はそう呟く。
当然ながら、これも怒りのボルテージが上がる。

まんまんと、如月駿の手の平の上で踊らされている事に気がつかずに。

素早く矢を射るが駿に捕まれる。ただ、隙を与えずに次ぎは魅夜が。その次ぎにアルテミスがと次々に射られる。しかし結果は惨めに終った。駿には1本も刺さってはいなかった。

そう……“駿には”だ。

「「！！！？」」

駿とアルテミスは言葉を失った。1本の矢は予想もしていなかったモノに刺さった。しかし、全く気が付いていないのか？“彼女”は呟く。

「私は……特別でもなんでもない。古都宮瑠依。ただの、人間だよ」

朦朧としている意識の中で彼女は呟いた。刺さった矢を抜いて投げ捨てる。出血が酷いことになって服が鮮血に染まる。しかし、彼

女は気にも止めないで前に歩み出す。

駿は停止した思考を無理やり引き寄せて、頭の中で整理する。
彼女があんなに酷い状態で生死を繋ぎ合わせているもの。それは、異常能力の“暴走”
暴走した彼女の内に秘めた強力な力が生命力というものになっているのだろう、それが出来る最も強力な生命体を操る存在。

龍使いの血だ。

「……何か、来る」

「アハ♪　覚醒したんだぁ？　瑠依ちゃん♪」

雷が轟く。雨も一層に強まる。そして雷雲を付き抜けて巨大な黒いモノが現れる。漆黒の鱗が隙間無く敷き詰められた黒い空を飛ぶ蛇（？）

漆黒の龍だ。しかし、龍にしては不可思議で漆黒の翼までもっていた。竜みたいであるが辰である、翼のある龍に瑠依はそれがなにかわかった。

「おかえり、ジョン」

彼女は、大切に育てた1匹の先程アルテミスに仕留められた、カラスの名を呟いた。
そう、彼女はあのカラスに龍使いのパートナーとなる龍にジョンを選んだのだ、その為に起こって誕生したのが漆黒の翼を持ちし龍。

古都宮瑠依の最強の守護者たる存在。

「……」
「……」

しかし、それだけではなく。もう1匹“竜”が現れた。漆黒の龍と違い純白の竜。
これは、瑠依のものではない、当然ながら竜装使である零時のものではなく、もう1つの闘いの場で起こり、1人の少女が変化した竜だ。

アルテミスには誰かわかった。次ぎの瞬間に漆黒の大剣が白い竜に向って放たれる。

駿は理解するのに時間がかかった。しかし、それが彼の敗因。

「かはッ」
「気をぬいてはいけないのよ?」

駿の腹部に1本、銀の矢が刺さっていた。
それは、アルテミスが射った矢である、流石に完璧に疲れを取れていなかった駿のトータルダメージは深刻なまでに達した。駿はそのまま樹に凭(もた)れ掛かり、そのまま倒れ込んだ。

駿もこれまで無理をしっぱなしであったので、1撃が致命傷になっていたためである。
生死に別に問題はない。ただ、アルテミスに魅夜は追撃を出来たはずなのにやっていなかった。それは1人の少年が邪魔をしていたからだ。

「え?」

瑠依は彼を知っていた。

以前に彼女を殺そうとしてしまいには殺さなかった人物。

彼は大きな溜息を吐いてから言う。

「纏めてかかって来い。相手してやる」

最強の死神、神堂真琴は大鎌を片手に持ち、白い竜とアルテミスを睨み、そう呟く。

白い竜はアルテミスの近くに降りて明るい口調で喋り出す。

『アハ。余裕そうじゃん？　私も相手なのに？』

「ニナ……。その姿にさせられたんだ……余程、強いんだね？　あの死神は」

「さぁ？　どうかな？　やったら強いかどうかわかんじゃねぇのか？　やってみろよ、雑魚」

運命とは、怖くも時に安らぎを与える。最後には悲しみが待っているものである。だけど、それを切り開いた先にはなにがあるのだろうか？

さぁ、始まったようだ。神堂真琴のショータイムだ。

【99話】龍、覚醒（後書き）

第2部の人気投票受け付け中です。
基本的に2部目のメイン使用したキャラを選んでくれるとありがたいです。第1部で出ても第2部で出てないキャラもいますので、例えば名とか名とか名とか……。
名「……死ニタイ？」
いえ…。
多分、第2部はあと7話ぐらいで終りですので急遽ながらお願いします。
あ、番外編のキャラでも可ですよ……どうせ、増えてるの1人だけだし……。
名「おい」
それでは～。

【１００話】「何が悪い？」　Ｈｕｍｉｙａ　Ａｒａｋａｗａ（前書き）

あれ？　もう少し遅れると思ったのに……
久しぶりにスラスラ描けた……１００話目です。

１００話です……１００話だからなにをしようか？
何も企画してませんので、後書きにキャラの雑談をしましょうか。

あ、そういえば人気投票、１人２票です。では……後、４、５話ぐらいで終るので。

【100話】「何が悪い？」　Ｈｕｍｉｙａ　Ａｒａｋａｗａ

どうしてだろうか？　あの日の事を思い出す。そういえば……あの日もこんな雨だったな。馬鹿だな俺って奴は……未だに根に持ってるとは、イヤな男だよ。

『余裕こいていつもギリギリの男』そんなレッテルを貼られた事を。

ったく、悪質なまでに俺の本質をわかってやがる。

とことん恐ろしい奴だったよ。飛鳥……。ま、いまでは良い思い出だぜ♪

お前といた時間の全てがな。ああ、本当に楽しい時間だった。

「古都宮、お前は何処かに隠れてろ邪魔なだけだ」

ったく、結界を張ってなかったらマスコミが大騒ぎだぞ？

屋敷は所々に穴だらけでなによりも……巨大な生物が2匹……考えてやってもらいたいものだ。

ま、殆どが俺のダークネスブレイドが原因なんだがな……ここまで来るのに邪魔をした奴を全員吹き飛ばしたからなぁ……マジで。

まさか、迷子になるとはな……。魔力があったから助かったぜ。

なかったらやばかったなぁ～。ま、目的だった古都宮の生存の確保ができたんだし良かった良かった♪

取り合えず暴走した龍を静めて……ニナ相手にあのメガネっ子に柴原魅夜。

さすが、飛鳥だな。まさに『余裕こいていつもギリギリの男』だ。

内心ハラハラだぜ？　だがぁ、お前はもう1つ忘れてる事があるんだなぁ♪

「それでも、なんとかする」

それが、俺なんだよ♪

見逃し3振ッ！　バッターアウトッ！　ってか～？

『アハハ。この人数に余裕そうだね』

「ったりまえだ。雑魚が何人集まっても同じだッ！」

本音だと限界超してますッ！！

「で！　でも、数的に……」

黒龍に白竜、それに“端”の雑魚と操られた柴原魅夜、そして後ろで気配を消してるついもりの、推測にしかすぎないが、柴原魅夜を操っている野郎か。

5対1かぁ……。無理じゃね？

魔力なんて空に近いし……実際は身体が言う事をきかねェもんだ。ハッキリ言って勝機なんて殆どねぇし……冷静に考えれば俺のやってる事の全てが無謀。

組織を裏切り、魔界の組織の殆どを相手にして今度は徒でさえ化け物の27を相手にして、しまいには敵を増やすとは……生半可じゃねぇよ。

だが……悪くはない。

「そんなに数が心配ならお前がだした黒龍を戻せッ！」

幾らなんでも術者を攻撃はしないだろう。だから、古都宮（コイツ）は大丈夫だ。なんとかコイツを守りつつ3人と2匹を撃破する。

黒龍は古都宮が操作できたらなんとかなる。だが、それでも相手にするのは4体。

だぁが、古都宮にアレのコントロールは無理だろう。それに倒れてる3人に危害を加えさせれない。どうする？　なにをしたら良い？

暴走した龍を相手に、他の雑魚を相手しながら、古都宮にオーディンにスレイプニル……それに、奴はヴァルキュリアか？　ヴァルハラの連中を守って戦う。

流石だな俺、相変わらず無茶苦茶だ。

「あ、アレを？」

黒龍を見上げて古都宮が呟く。そりゃあ普通の人間として暮らしてきたんだ。そりゃそんなしかめっ面するわ。

だから、俺がなんとかするんだ。

さぁて、戦闘開始だッ！！

―Ｈｕｍｉｙａ　Ａｒａｋａｗａ―

「で、何があったの？　アンタが逃がすタマじゃないと思うんだけどねぇ？」

肩越しからハエ……じゃない、妖精（？）が、ぼやく。
しかも、痛いところを突かれた。ちきしょう、そんな所に気をづくなよ。

な、なんだい？　読者諸君？　そんなにオレの身になにがあったか語ってほしいって！？

だッ！　断固きょｈ――

―数分前―

「オレは……頭の良い人間じゃないらしい。どうしても、同じ答えに辿りつきやがる」

「そうでなくっちゃ♪」

蒼譜は口を微かに吊るし上げて微笑む。文也は静かに蒼譜を睨む。次ぎの瞬間に閃光の龍が通る。高質量の氣が具現化したものであり、文也の十八番（おはこ）である、文也が最も信頼してるワザ。

「雨宮流無差別格闘術　基礎の型　龍滅掌」

しかし、蒼譜は単純に横に避けて回避し腕を捕まれる。文也はすかさずに床を蹴り跳ばして回し蹴りの体制をとるが引っ張られて、掴んだ手を離される。支えを失った身体は大きくよろけて、次ぎの瞬間には蒼譜の拳が和也に減り込んでいた。

息も吐けない。声にすらできない激痛が走った。

文也は素早く後ろに跳んで体制を立て直す。

（クソ。攻撃が完璧に読まれてる……能力を使ってる様子はねぇ……。野郎、肩慣らしにもなってねぇってか？　さぁて、マジでどうすっかなぁ？）

朦朧とする意識の中で文也は思考を巡らせる。

何通りもどうやって行動をするのがベストか考えるが答えはでない。

（駄目だ。どれもこれも……いなされるッ！）

結果は“不可能”　文也の実力ではダメージを与える事は出来なかった。

蒼譜は別に雨宮流の武を知らない。しかし、タイミングや攻撃方法などを瞬時に理解するずば抜けた判断能力が全ての攻撃に対して完璧に無効化させているのだ。

「さぁ、楽しもうか……雨宮和也ッ！」

「楽しむつもりなんかねぇよッ！」

ナイフが頬を掠める。素早く伸びた腕を掴みそのまま引き寄せると、同時にナイフを叩き落す。

距離は殆ど皆無で顔はぶつかっても仕方がない程だ。

「逃がしはしねぇぞ？」

「ワァオ♪」

（その余裕……へし折ってやるよッ！）

文也の右拳が蒼譜の腹部に減り込むが、蒼譜は怯みもしない。

それにまだまだ、蒼譜は余裕の笑顔を浮かべていた。文也は忘れてはいけない事を忘れていた。しかし、蒼譜は未だに“それ”を使わずに大人しく文也の攻撃を受けている。

別にMではない。ただのサービスタイム。

（っにしても……なんだか不気味だな？）

この距離なら確かに攻撃は与えれるが、蒼譜の実力ならば威力を和らげる事も可能だが、そうやってる節もない。

簡単に言うと完璧に舐められている。小学生と大人の喧嘩に近いものだ。蒼譜はただただ遊んでいるだけで“半分の実力”も出していない。

「我流格闘術　風雷掌（ソニックライジング）ッ！」

空気のを圧縮した弾丸を蒼譜の腹部に押し当てた瞬間に雷撃を放つ。

文也が利用したのは“魔法”である。通常の人間には不可能だが彼には特別使用可能なのだ、それは彼の持つ【鎌】の持つポテンシャルだ。

鎌にはそれぞれ属性というものがある。

そもそも、鎌は死神の内に秘めている力が具現化し現れた自分の分身に近い存在だ。それは当然に持ち主の“力”となる。いわば、そういう事だ。

鎌の“属性”それを利用する事により、文也みたいな死神と人間のハーフにも簡単に簡単な魔法程度なら使用が可能という事だ。

「くっ」

初めて蒼譜の顔が歪む。

「さっきまでの余裕はど～したッ！？」

文也の攻めは続く。

しかし、ダメージがあったのは先ほどの1撃だけ。後の攻撃は全く通じていなかった。

（あらら。お効きになりませぬか。ってゆーか、あんにゃれろう受身で手一杯なワケがない。野郎、なんで反撃しねぇんだ）

先ほど感じた『不気味』は蒼譜が反撃をしない事には簡単に気が付いた。しかし、何故反撃をしてこないか？　文也はそれが不気味でしかたがなかった。

文也は未だに大事な事を忘れていた。この超至近距離は蒼譜の空間（リア）（エ）だという、戦闘で最も忘れてはイケナイ事である。

「飽きた」

「！」

次ぎの瞬間に蒼譜の姿は文也の前から消えていた。

「僕は一流の殺し屋だよ？　予備の武器なんて沢山あるんだから♪」

腹部に熱い感触を文也は覚える。そっと触れてみると手が深紅に濡れていた。生暖かいその液体は止まる事をせずに溢れ出す。

切られた事に理解するのには少し時間がかかった。

（しまった……ッ！　ナイフかッ）

蒼譜の手にはそんなに長さのない短剣（ダガー）が握られていた。

特徴は根元が太くて大きな、まるで西洋の大剣をそのまま短くさせたヤツだ。刃渡りは６５ｃｍ程度の短い剣だ。

名前はチンクエディアと言って、フランス語で「五本指」の意味で文字通り刃の付け根には指五本分の幅がありそれを示すように５本の溝が彫られている。刃の幅は狭まっているので真中辺りで３本、上の方では２本、先端には小さい（中指の第一間接ぐらい）のが１本彫られている特徴のある短剣だ。

（血が……止まらねぇ……。）

文也の出血は酷かった。急所は突かれてなかったが深く抉られた。文也の足元には赤黒い水溜りが直ぐに出来た。文也の顔色は次第に青褪(あおざ)めて、少しづつ白くなっていってる。

危険だ。文也は悟るが……このまま逃げてもどうしようもない。

（逃げるのが得策だがぁ……逃がしてくれそうにねぇな）

蒼譜はすでに文也の懐に飛び込んでいた。突き出していたナイフは正確に肝臓の辺りを捉えてる。文也は横に避けて腹部に蹴りを１発入れる。蹴り上げられた蒼譜の顔面を掴んで壁に叩きつける。

「龍滅掌(ドラゴニック・クリア)」

零距離での攻撃。文也の攻撃は止まらない。

「龍滅掌。龍滅掌。龍滅掌。龍滅掌。龍滅掌。龍滅掌。龍滅掌。龍滅掌。ドラゴニィィッ」

文也の腕は既にボロボロになっていた。龍滅掌は高質量の氣を相手にぶつけると同時に爆破させるというワザだ。そもそも常任が龍滅掌を使用すると手の皮は焼けて黒焦げになるか、最悪の場合に腕が吹き飛ぶ。

流石の文也もココまで連続で、しかも危険な零距離での使用は多大な負担と代償が繋る。

文也の腕は熱を帯びて赤く、そして肉が焦げる匂いがする。手は既に黒くなっている。ボロボロの腕は既に限界を超えていた。文也は言葉にも出来ない激痛が圧し掛かる。

「それで……終り？」

「ッ！」

（化け物がッ！）

蒼譜の声音は変わらなく平穏なものだった。幾ら頑丈でも“本気”の龍滅掌を直接に喰らったのなら一撃天に召されてる破壊力だ。本気の龍滅掌の威力はヒマラヤクラスの山なら5つほど跡形もなく滅する事のできる破壊力だ。それを何発も喰らって大丈夫なワケがない。

しかし、蒼譜は顔に幾つかの深手を負っただけで致命傷はない。

「残念だけど……終りだよ。焔氷斬（フレアアイスブレイド）」

「しまッ！」

（この距離じゃ……避けれないッ！）

蒼き焔を纏った斬撃が文也を飲み込んだ。

「冷や汗かいてるよ？」

そりゃ、完敗したなんて言えないからな……。ってか言ったら世界中に雨宮和也の敗退が広まりそうで怖い。なんか、プライドが許せないぞ。

そりゃ、負け無しの雨宮和也が負けるという事は自分（俺）の顔に泥を塗る事になるしな。

それだけは……絶対に避けないとイケナイんだ。オレのせいで俺が馬鹿にされるのは絶対に許せない。

「……案内サンキューな。ココからはオレだけで大丈夫だ」

「みんな、アンタを待ってるんだよ。必ず帰って来てよね」

「ツンデレかテメェ。ハエのけせぇにツンデレしてんじゃねぇよ」

「ダレがツンデレじゃッ！　ってか、ハエじゃねぇ！！」

耳元でウルセェよ。

「帰って来る。心配するな」

「……わかった」

……。帰ってこれるかなぁ？　今度は完璧に殺されるぞ……多分。

だけど。やるんだ……。

屋上へのドアを蹴破り、宿舎の屋根にいるアイツわ確認する。

ヤツもオレに気がついたか、視線をコッチに送る、「哀れみ」の視線が感じられる。遠いから否が応かはわからねぇが……オレの勘だ。

しかし、睨んで来ると思ったが、野郎は視線を空にやる。

「……瑠依」

空に黒龍が現れていた。そして白い竜に敵意を剥き出しだ。

口から何かが放たれようとするが、漆黒の剣が黒龍に当たり標的がずれて天にレーザー如く閃光が放たれた。悪雲を貫き少しだけ太陽が見えたが直ぐに雷雲に隠される。

「覚醒しちまった……ッ！」

クソ、瑠依を優先させるべきだったか……ッ！　負けたのが気に食わないからって追いかけて……馬鹿だろ！？　オレッ！！　ガキのすることじゃねぇか……ッ

「馬鹿だね。なんでコッチに来たんだい？」

「！」

何時の間に目の前に来やがった……。まったく、油断大敵ったぁ、この事か。

「何が悪い？　お前をぶっ殺しに来ただけだクソ野郎がッ！！」

「そうか。今度は本気で行かせてもらうよッ！」

わぁお、先程の殺気から2倍くらいスゲーよ、５０％で戦ってたのか？

ハハ……。おもしれぇ。

「鎌ッ！　行くぞ……ッ！！」

＜……うん＞

お、やっと口を開いたか。

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｈｉｎｄｏｕ―

「スケィス。モード【フランベルジュ】」

鎌は姿を変える。刃はまるで揺らめく炎如く波型で、刃渡り１．５ｍ程の大剣の剣。柄も両手で握っても余るほどで真琴はそれを片手で自在に操る。

『へぇ～。剣にもなるんだ♪　その鎌は♪』

ニナは舐め回すような視線で真琴の鎌を見る。

『私、その鎌欲しいなぁッ！！』

大口を開いて真琴に飛びかかるが、真琴は既にその場から消えていた。

「ニナ、貴方の顔よ」

アルテミスの指摘通りに真琴はニナの頭の上を走っていた。２本の矢が真琴を目掛けて飛ぶが絶妙に走る速度を変えて避ける。ニナは頭を思いっきり左右に振り真琴を振り払う。真琴は簡単に落ちた。そう、自ら落ちたのだ、その着地地点には１人の少女、柴原魅夜の下だ。

そうして、一閃。

「ちぃ！」

真琴は舌打ちをする。剣が通らなかったのだ。別に服の下に何かしらの物を仕掛けたワケではなく、肉体に通らないだけだ。答えは単純で氣を使い身体を固めたのだ。

1回、後ろに跳んで体制を立て直そうとするが、ソコにニナの腕が落される。

真琴は自分の失敗を呪ったと同時に対処法を考えるが、それは必要なくなった、ニナの手が弾かれたのだ、原因は黒龍の尾だ、瑠依の指示ではないのは彼女が未だに混乱してる所から真琴は簡単にわかったが問題は次ぎ。

『邪魔するなッ！』

ニナの咆哮が黒龍に当たるが黒龍は傷一つ負わない、黒龍は仕返しと言わんばかりに口に何かを溜めるような動作をする。黒龍の口から光が漏れると同時に真琴が動く。

「ダークネスブレイドΩ」

漆黒の剣は2つに分かれていて、その刃と刃の間に黒龍の首は挟まる。攻撃は通さなかったが光線の発射は、攻撃の反動によって天を向いた黒龍の口から天に向って放たれた。

光線は雷雲を貫き、太陽の木漏れ日がでるが、すぐさま雷雲の中に隠れる。

漆黒の剣は砕け消え。黒龍は真琴を睨みつける。

（ちぃ。やっぱり敵と認識しやがったかッ！）

「スケィス。モード【クレイモア】だ」

＜了解ッ！＞

先程の剣の形から変わる。

今度も大剣だ両手で振らないと振れないような長さ、２m程の剣だ、刃の幅も広くて剣全体の啓嬢にしては刀身の方に傾斜した鍔（つば）とその両端についた飾りが目立つ剣だ。

真琴は両手で構えて、ニナに対して攻撃をするが、装甲が固すぎて通らなかった。

「凍閃矢（こうせんし）ッ！」

冷気を纏った矢が真琴の頬を掠める。黒い小さな人形らしきものは形を矢に変えて今度は焔を纏い「焔貫矢（えんかんし）」と叫び、射られる。真琴は剣で叩き落すが後ろからも矢が射られる。ローブを使い防御するが、今度はニナに振り払われる吹き飛んだ所を尻尾で吹き飛ばされる。

黒龍が口を開いて真琴が到達するのを待つ。下ではニナが光線の準備を整える。

（上も下も駄目か……ならばッ！）

ありったけの魔力を使い、空間をつくる。

（中だッ！）

重力のプラスとマイナスを合わせて空中で立つ。

ニナの放たれた光線をブラックホールの防御壁を作り防御する。同時に空間に飲み込んで。

「解放（リリース）」

先程の閃光が黒い渦から放たれる。ニナが翼を広げて防御するが、結構なダメージを受けたみたいで傷だらけだ。

真上からくる口は重力の壁を作り閉まらなくする。同時に真琴は自分の周辺に作った重力の空間を解いて重力に逆らわず落ちる。

手に爆破系の魔法を練り地面に着くと同時に放つ。落下の衝撃を吸収して真琴はなにも無かったかのように黒龍を睨む。黒龍は真琴が地面に着くと同時に重力の枷を砕き一層に真琴に敵意をむき出す。

真琴は剣を鎌に戻して構える。

後ろから蹴りを繰り出す魅夜に拳を減り込ませるが手応えは感じられない。

（やっぱし手応えはないか……。）

氣で身体を守っているから当然なのだろう。しかし、攻撃中でも防御も欠かさない……。真琴は一番に厄介なのが柴原魅夜を操っている者だと確証するが、真琴にはソイツを相手にする暇などない。しかし柴原魅夜を防ぐにはヤツを倒すしかない。

（厄介の極みだ！　クソッ！！）

心の内で舌打ちをしておく。

魅夜に続き間髪を入れずに雷を纏った矢が射られるが、真琴は鎌で弾く。

上空からニナの火炎弾が放たれる、屋敷全体を飲み込むほどの火炎は放たれるが、火炎は黒い渦に飲み込まれる。

「解放（リリース）」

渦から放たれた火炎はニナを飲み込む。

（魔力がもう空か……コレで決まれよッ！）

『ふんッ！』

ニナを飲み込んだ火炎は、ニナが翼を広げて吹き飛ばす。火の粉は空を舞う。

（このままじゃ、火事だ。全て撃ち消す。）

真琴は既に空となった魔力を振り絞り。水の弾丸を作る。

「アクアバレットッ！」

手から水の弾丸が放たれ空中で分散。そして、空を舞う火の粉に全て命中する。何個かは撃ち消せずに屋敷に落ちるが、屋敷はその程度の事では燃えたりしない。

（無駄に頑丈な屋敷だ燃えたりなんかしねぇだろうな。）

真琴の勘は的中した。あの程度の炎で燃えるような古都宮の屋敷ではない。

「雷電矢（らいでんし）」

「じゃまだッ！」

矢を払い、アルテミスに接近する、素早く何本も矢を射るが全て真琴によって避けられる。黒い小さな人形達が矢を射る。真琴は鎌の斬撃でそれを払い、その瞬間にアルテミスの懐に潜り込む。

「しまッ！」

「まずは、1人ッ！」

鎌を素早く先程のフランベルジュに変換し突く。アルテミスは血を吐き息が荒くなる、真琴は斜めにして剣を抜く。フランベルジュの刃が波型になっているのは、相手に傷口を深くする為である。放って置いても絶命するであろうアルテミスに真琴は追撃する。

「スケィス。モード【アイアンメイデン】ッ！」

アルテミスを鉄の棺桶が飲み込んだ。絶叫が辺りに響き暫らくすると、静粛に包まれる。鉄の棺桶の下の方から赤い液体が垂れ出す。

「吸血の処刑鎌（ディープブラッディーチブレイド）」

漆黒の霧に包まれたアイアンメイデンが目視出来ないほど漆黒の霧に包まれて、暫らくすると蒼き焔に包まれる、形状はすでに変化していて、二枚刃の漆黒の鎌が現れる。先程流れ出た血溜まりもア

ルテミスの死体から出る血も無くなっていた。

血を全て吸われ尽くしたのだ。

「……さぁて、ココからだぜぇッ！！」

鎌を構え直して、三人に視線を配り怒鳴る。

深呼吸を数回して息を整えてから、真琴は動き出す。

【１００話】「何が悪い？」　Ｈｕｍｉｙａ　Ａｒａｋａｗａ（後書き）

レナ「和也～♪　１００話だよ１００話！！」
文也「だな」
魅夜「そうやって冷めないの。それは駄目だよ」
駿「お～い。酒買って来たぞ」
文也「ナイスだ！」
※お酒は二十歳からです。
将「おつまみもテキトーに買ってきたよ」
レナ「結局はこの５人なの？」
魅夜「だから、和也！！　お酒なんか飲むんじゃ……」
文也「まぁまぁ、甘酒やるから」
魅夜「あ、ありがとう……。って、なんであんた等ウォッカなのよ！？」
文也「？　お子様にはやれないぞ？」
魅夜「同い年！」
レナ「私のが年上！」
駿「ははは、無理だって」
将「そうだよ、君等は甘酒じゃないと」
魅夜「なんでウォッカなんてアルコール度数が高いのを？」
レナ「ロマネコンティはぁ！？」
「「「「ソコ、何か違うッ！！」」」」
レナ「にゃ！？　なにが違うの！？」
文也「高いだろぉが！！」
「「「ソコか！？」」」
「「何がぁ！？」」
駿「まぁ、ふざけないでちゃんとやろうか」
将「では、こほん。」
「「「「１００話目おめでとーう！！　乾杯♪」」」」

将（……みんな勝手だよ。）

……作者なのに……僕だっているのに無視？

【１０１話】無題。（前書き）

……纏め的な感じです。
サブタイですか……？　今回のサブタイトルが思いつかなかったんです。

【１０１話】無題。

徐にＰＣを開いて、画面を見る。画面には赤と青のバーがありそれを、互いに押し合っている、青が少し押しているだろうか？　ほとんどが均衡を保っている。

これまた、意外だ。俺等が押してると思ったんだがな……。余程、強力な戦士が古都宮側にいると言う事か……こうでなくては面白くない。どれどれ……どういう経緯なのかな？　内部に侵入したのは“端”の連中だ……外側はランクＡ集団と指揮下にいる裏組織を多数送ったが……まさかここまで戦力の差がねぇ？

ウチ等のアホ共はどうなってることやら……。

まずは、バロンだ。彼は生き残ってるはずだろう、なにせ彼は僕等の中でＡだそれに彼にはほとんど最強に近い能力、未来視（フーレルック）は２０秒後の世界を視ているそれに彼は１度みた事は必ず忘れない。よほどの実力ではないかぎり、彼は倒せない筈だ。

彼は２階の宿舎から攻めに行ったはずだ。彼の最終目的地は古都宮知鶴の抹殺だ。彼は舞台のＡ死なれては困る。

パソコンをいじり、２階の廊下に仕込んだ隠しカメラを開く。そこには戦闘のあとがあり、巻き戻すと大分前に戦闘が開始された。

見ての通り、バロンがかなり優位に立っていた。バロンには雨宮和也レプリカの攻撃は全く当たらなかった。当然だ、蒼譜ほどの攻撃のキレがない。これは圧勝だ。

ほら、バロンが勝った。ほら、とどめを刺しなよ……バロン。

ん？　そういえば、先程の映像には死体も、傷跡もなかった。バロンにはこの床をこれほど深く抉る事はできない。ん？　雨宮和也が動いた？　どうした？　視えてるんじゃないのか？　バロン？　まさか……視えてない？　これは、バロンの世界にないとでも言うのか？

駄目だ、これは負けたな。

未来が壊れたバロンにヤツは倒せない。

口が動いてる……？　魔法だと？　雨宮和也は人間と死神のハーフだ強力な魔法が使えるワケがない。なのに……なんでこんな強力な魔法が？

実に興味深い。

雨宮和也の腕が振られる。右手につけられた蒼き刀から強力な風迅が放たれ、古都宮の床に深い傷を残し、バロンを飲み込んだ。

やれやれ……彼は負けたのか。使い物にならないな。

まったく、彼女は上手く行ったのかな？　竜装使…古都宮零時の抹殺を命じたんだけどなぁ？　ヘタな実力を持つ物が居ない限り彼女に傷はつけられない。

さてはて……上手く殺ってくれたかな？

画面に出たのは日本刀も持つ金髪の青年と水越深鈴（みずこしみすず）だ。俺の記憶

には宮鷹本流陰陽道時期頭首宮鷹秀一とお見受けした。残念だがコレはルンルン（もとい、水越）の勝ちで決まった。宮鷹に彼女に勝てるものはない。

だが、バロンの事もある……さぁて、どうなるかな？

結果で言えば彼女の勝ちだ。確実に息の根を止めたか確認してないところが甘い。だが、彼女は大きなミスを犯した。古都宮零時が竜装使に覚醒してしまった……【火竜の頭】と、でも名付けようか？　古都宮零時の右腕が紅き竜の頭となる。

だが、これも勝てるだろう。ヤツの属性は火だ、ルンルンの属性は水だ……殺れる。

しかし、またもや結果は俺を裏切った。小学生にならう“溶解”だ。ものの見事に彼女は古都宮零時の知略に繋り自らを凍らせる。身動きできないまでに固めたあの馬鹿は火竜の攻撃により跡形もなく滅された。

またしても、主力が負けた。

やれやれだ……。

ん？　なんだ、宮鷹は生きてたのか？　心音を聞いて安心なんかして？

やれやれ、１人も殺せないでまた負けたよ。

本当に使えないなぁ……他の所を映してみるか。

PCに6つほど画面を出す。一般人では見れないだろうけど瞬時に“黒い何か”が通ってた。その直後に次々と倒れていく。どれも絶命だろうな……鎌らしいもので深く抉られてる。

死神だ。この手捌きと黒と鎌を繋げたら単純な答えが出た。

次ぎの瞬間、漆黒の大剣が他の画像の者達を切り裂いた。その後の映像がないという事はカメラは破壊されたのだろう。

さぁて、ニナはどうなってる？　彼女が負ける事はないだろう。彼女はピンチになればあのモードになれば良いんだ。人間が彼女に適うわけがない……ん？　ニナが2人だと？

いや、そうか……同じプロジェクトの07か、ニナのモデルはレナ（07）だった筈だ。どうえいで似てるワケだ。見分けるのは意外と楽だった、ニナは勿論、プロジェクトのラストだ他のプロジェクトの死神より遥かに強化されてる。

決まった。邪魔をされない限り殺れる。

おやおや、無限魔力（インフェニティマジック）を相手に魔力を大量消費する魔法なんか使っちゃったりして♪　ほら、殺れよ！　いい加減に1人ぐらい殺してくれよ！？　聞きてぇんだよ、絶望の悲鳴が！　殺せ殺せ殺せ殺せコロセコロセコロセコロセ。

ほら、そこで追撃だ。よし、よくやったぞ……ニナ♪　気持ち良い悲鳴を挙げろよ？

……。邪魔だ。コイツ余計だ。

見た事のある顔だな……神堂真琴かぁ？　最強の死神……。

邪魔だ。やってしまえよ、ニナ。こんな魔力がなくなりかけてる死神なんか一捻りだろ？

ちぃ。

何を追い詰められてるんだよ。買かぶってたようだよ……ほら、負けそうじゃないか。

まぁ良い……相手に倒したと“思わせて”勝てば良いんだ。カメラも壊れるから悲鳴が聞けないのが残念なんだけどね。まぁ良い、殺してくれればね。

閃光が迸ると同時にノイズが走った。

さぁて、では我等が隊長の蒼譜はどうしてるのかな？

おや、これはこれは……雨宮和也レプリカじゃないか♪　また逢ったね♪

でも、今回は相手が悪い。蒼譜には勝てないよ。蒼譜は俺等の中で唯一、十二神の頂点（トゥウェルブゴッドぜっぺん）にいるゼウスと対等の実力だ。君程度の力では……勝てないよ。

ほら、見ての通りだ。蒼譜が押してる。圧倒的だ……ほら？　防御が追いついてない。

蒼譜も遊ぶなよ……。さっさと殺れよ。どんな因縁があるか知らないが……聞かせてくれよ。悲鳴を。飢えてるんだよ……聞かせてくれよいい加減！

ほぉ、今回はかなり高いレベルの戦いだな。だが、甘い。

この距離……蒼譜の距離なんだよバ～カ。ほら、蒼譜の能力も知らないから……幾ら零距離でも攻撃しても意味ねぇよ。

？　おや、この構えは……決まった。

蒼き焔を纏った斬撃『焔氷斬（フレアアイスブレイド）』が雨宮和也レプリカを飲み込む。

『うわあああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ…』

はぁ～。気分が良いぜ♪　悲鳴はいつ聞いてもあきねぇ。

ん？　なんだよ？　こっちを見て？　気がついたか？

まぁ、そう睨むなよ。俺も仕事なんだよ……ロキよぉ？

さぁて、本題……古都宮知鶴殺しはどうなってるのかな？

「なッ！？」

ついつい、声を上げてしまった。

そりゃそうだ……たった2人のメイドに“端”の小隊多数が壊滅させられたのだ。驚かないでどうするんだよ。

なに者なんだ？　この2人は？

【１０１話】無題。（後書き）

２人のメイドと言ったら？

え？　マジで？　な反応があったら僕の思うツボです♪

【102話】メイド　イン　バトル（前書き）

バトルで作られた（×）
闘いの中のメイド（〇）

今回も文がスラスラっと出てきました。
今回、オレしにに変動が…？

【102話】メイド　イン　バトル

―数時間前―

遅い。何をやってるんだか？　こうしてる間にも“奥様に”危険が及んだら“あの御方”に示しがつかないじゃないか。説教はもう懲り懲りなのよ。

綾芽ももう少し大人になってくれたならなぁ……。

恋に現を抜かすのは1番イケナイ事なのに……やれやれ。

「待った？　メイリンちゃん？」

「待ったわよ。速く行くわよ。あいつ等の狙いは零時様や瑠依様ではない。奥様の筈よ」

私の言葉に綾芽は口を膨らませて反論しようとしたが留まる。あい変わらず動作の1つ1つが可愛い……憎ったらしいくらいに……それに、豊富な胸だって反則よ、それにその引き締まったウェストがあれば男なんて悩殺じゃなくて？

ま、そんな事より……どうやら、それ所じゃないのはわかったらしい。

「行くわよ“殺雌（あやめ）”」

「任せてよ“冥隣（めいりん）”」

さて、久しぶりにまともな相手じゃない♪　腕が鳴るわ♪

「ココか？」
「だな」
「開けるぞ…」

む。目標確認。

ちぃ！　先に扉に辿りつかれたか。どうする？　勿論……。

「させないわよ♪」

殺すだけ♪

先に動いたのは綾芽だよくあんな大きな物（胸）があって私より素早く動けること。いつ見ても関心する。豊富なバストのくせいに。

はッ！　なに自分のない胸に手を当てて……。

ま、私が手を下すまでもないんだろうけどね。

素早く3人の中心に入っていた綾芽が1人に掌底を与えてる。ア

レは居たいぞぉ……綾芽はツボを捉えるのが上手い。……異性のツボも。

当然、1人やられたんだ。流石は“端”だ戦闘態勢に入るのが速い。

だけど、綾芽が見てる世界では圧倒的に遅い。

「舞桜」

でた、綾芽の十八番。

私も彼女の動きを捉えれなかった。流石は綾芽だ、誰にも見られずに殺める。暗殺者の鑑だよ……本当に。まさか、あれほどのバストで（しつこい）……。

いかせん話しは良い、どうやら私の出番も来たようだ……。

「おい！」

「遼平達が殺られた？」

「メイドだと!?」

冥土の土産……メイドがプレゼントしますよ♪

―Ｓｙｕｕｉｔｉ　Ｍｉｙａｔａｋａ―

「人思いに殺してくれぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！」

お久しぶりです読者様……。俺、宮鷹本流陰陽道次期頭首宮鷹秀一は今日、汚れてしまいました。もう、お婿にイケナイ……。

「待て！　早まるな宮鷹ッ！」
「そうです、頭首」

さぁて、どういう状況かわかるかな？　この場にいる人間でおかしいんだ。

そう、１人増えてるんだ。忍者がな……。

「確信犯だろ！？　微笑んでるだろぉが！　静香ァァ！！」

事の起りは俺が起きる３０分ほど前の事だ。

―Ｌｅｉｚｉ　Ｋｏｔｏｍｉｙａ―

「戻れ」

取り合えずどうやったらこの頭が戻るかわかんねぇから取り合えず「戻れ」とだけ言っておく。そしたらまぁ、いつも通りに俺の腕だ。

それにしてもなんだ？　こいつ等？　そしてなんで俺は初めて使うコイツを慣れてるんだ？　それぞれの長所に短所が明確にわかっている。

それにこの威力はなんなんだよ？　食堂の壁が綺麗に無くなったぞ？

「ッ！　宮鷹を医務室に……」

駄目だ、こんな騒ぎじゃあ医務室に誰もいやしないし本当に応急処置だけだ。それに、保健室みたいな狭い所で闘える竜は“今は”居ない。クソ、放っておいたら死んじまうぞ？

えっと、こういう時は深呼吸？

……そんな冷たい目でみないで……。わかってるよ、人工呼吸ぐらい。
だって……女性ならウェルカムだ！　だけど……男とだなんて……こら、そこの腐女子、よからぬ妄想をしない！　ってか、期待するな！

「……大丈夫です」
「ダレだッ！？」

背後から声が聞えたので振り帰る。

……モロ好(この)みだ。

「お嬢さん、今度お茶でもご一緒しませんか？」

は！　何デートの取り付けをしてるんだ！？　俺は！？
ってか、何故に忍者？　まぁ……露出的に俺としてはありだけど……ダレだ？　俺を変態と言ったヤツは？　これが男なんだよッ！

「……この騒ぎが終りましたら何(いず)れ」

「では、お時間が出来次第この電話番号にご連絡下さい美味しい物を作ってお待ちしております」

「楽しみにしてます」

はて、本題はなんだったか？　美女にお声をかけるのに必死だったから忘れてしまった。

「……胃に水が溜まってますね」

おお、そうだ宮鷹だ宮鷹。うんうん、野郎に殺られた宮鷹をどうするかだ。

っにしても、腹部に手を当てただけでよくわかるなぁ。

「……では、これを」

懐から取り出したのは1つの木箱。何処に入ってたんだよ……見る限り貴方のウェストより大きいですけど？　何が入ってるんだ？

【自主規制】

「頭首、口をあけてくいださい」

と、いいつつ無理矢理開ける。ってか、頭首？

あ、口の中に入った。口の中で暴れてないか？　頬が滅茶動いてるんだけど。あ、止まった。ごくり、へぇ～【自主規制】って喉に通るんだ。

ってか、大丈夫なのかな？　“あんなの”が入って？

アハハハ～♪

しばらくして、宮鷹は血相を変えて起きた。

―Ｓｙｕｕｉｔｉ　Ｍｉｙａｔａｋａ―

『かあさん？』

少年は真っ赤に染まった部屋の中心にいる女性に声をかけた。女性は既にまともではなかった。振り帰った女性は人間の腕を喰らっていた、周りの死体も身体の一部が無くなっておりまるで、無理矢理、取られたようだった。

女性は焦点の定まらぬ眼で少年を捉える。

少年は幼くしても才能が溢れていた。状況が理解できた。

『お、桜憙ッ！』

少年の手に小刀が握られるが、遅かった。

『グガァァァァアアアアア！！！！！』

『！？』

少年の母は少年の後ろに居た。

「ッ！！」

クソ……なんで、あの日の夢なんか……。

それより、アイツは！？　零時は大丈夫なのか！？

「お～、起きたか宮鷹」

「は？」

キレて良いのだろうか？　いや、許してくれるだろう。

「貴様等はなに紅茶を啜ってるんだよぉぉ！！！！！！」

死にかけてた俺を放って置いて紅茶を飲んでる奴を許せる奴は俺は誉めてやるよ。

俺は心が狭い人間なんでね。

「ってか、本当に“あれ”で復活したんだ」

あれ？

「なんだよ？　あれって？」

「実は……」

静香が近づき耳打ちする。ってかなんでコイツはここに居るんだよ？

前回、文也にふっ飛ばされただろぉが。あのまま帰ってこなければ……。

「……」

なんですと？

「です」

……。

「人思いに殺してくれぇぇぇえええええ！！！！！！」

―Ａｙａｍｅ　Ｓｕｍｉｈｉｒａ―

はぁ～。ちょっと憂鬱だ。久しぶりに全力（と、いってもまだ、全力ではないが）で身体を動かせるのは楽しいんだけど……。屋敷が殆ど半壊なんだよね、掃除が大変だ。

メイドもいろいろと便利だけどこういう時にはもの凄く大変だ。執事達もなにかとメイド任せだし、力仕事もたまに来る。メイドは便利屋ではない。

あ、でも文也さんに命令されるなら……／／／／／

ま、妄想は……。

「だァァッ！」

この、戦争が終ったらで、ね♪

「天女（あまめ）」

相手の攻撃と同時に、瞬時に後ろに周り。そのまま背中のツボを押すッ！

「がはッ！」

どれも危険なツボだ。暫らくは起きあがれないだろう。それにしても、雑魚ばっかだ。手応えがないヤツばっかりでガッカリだ。“端”もこの程度の実力なのだろうか？

だとしたら、買かぶり過ぎてたみたいだ。

「お排除修了♪」

まったく、女の子1人に男の子何人やられたのかしら？

それより、奥様は大丈夫かしら？　メイリンちゃんが他のヤツを押さえてるから私は奥様の安全の確認を優先っと。

扉を蹴破り奥様の寝室に入り込む。

ほら、心配は無用だ。

「準備体操にもなりませんでした」

窓から侵入したであろう男は見るも無残な姿になっていた。

「大丈夫ですか？　奥様」

「幾ら風邪でも雑魚に遅れをとりませんわ」

そりゃそうだ、燈篠流の免許皆伝で私達の師匠だ。私なんかより遥かに強い。

「では、参りましょうか奥様」

「ええ。零時なら上手くやるでしょうから、瑠依の所へお願いしま

す」

雲行きが怪しい。もしかしたら出るかもしれないぞ……龍が。

急いだ方が断然いい。

「メイリンちゃん！」

「コッチも片付いた！　さっさと行くよ！」

「了解」

お嬢様は何処だ？　駄目だ雨に紛れて気配が掻き消えてる。屋上に強い２つの力が強すぎて辺りの気配を掻き消してるんだ。それと、裏庭……ここの反対の方にも強い力が集中してる。

なにか……お嬢様の気配は何処だ？

メイリンちゃんも気配を探ってるみたいだ。何処に行けば会えるかしら？　取り合えず裏庭に蔵があるから、その地下に隠れてるはずだ。緊急の避難経路は殆どの使用人が知ってる。多分、お嬢様達もソコにいる筈だ。

―???―

「廉、助かったぞ」
「礼はいらねぇぞ、お前が必要だっただけだからな。それでお互い様だ」
「相変わらずワケのわかんねぇヤツだ」
「取り合えず行こうか。“和也”」
「仰せのままに」

青年はベット温もりを残し、その場から出て行った。深い漆黒へと。

その漆黒の先にあるものを求めて、2人の青年は同じ道を並んで歩む。

茨の道を。

【１０２話】メイド　イン　バトル（後書き）

さて、オレしにもいよいよ中盤の序盤が終ろうとしてます。
自分でもまさかココまで話しが出切るとは思いもしませんでした。
中盤はハッキリ言って伏線が集中する所だと思ってください。ワンキャラに１つ以上の伏線と考えてください。そして次ぎの第三部はコメディが集中しますがその文キャラも増えます。
僕の中では既にキャラや結末や人間関係などの殆どが決まっています。
ソコでなんですが……読者様と親睦を深めるために集まるかどうか知りませんが、
【貴方の創作キャラ出しませんか？】を第三部修了までやりたいと思います。
こんなキャラが居たらもっと面白くなるのではないか？
こんなキャラが居たら駿はもっと苦しむのではないか？
こんなキャラが居たら作者のレベルは上がるんじゃないか？
貴様に我が考えたこのキャラを使いこなせるかな？　アハハハ。
などが、ありましたら受けて立ちます。伏線大好きドＳのスーパーネガティブ思考の僕がやってやろうじゃないですか。
どうやって、作中で行かすか見ておいてください。

この挑戦は必ず通ります。どんな無茶苦茶だろうけどやってのけます。
あくまでも人材不足ではありません。キャラは第三部だけでも３０人程度で考えてます。
その中で貴方が創ったキャラを輝かせて見せます。
さて、集まるかどうか定かではありませんが、貴方が創ったキャラをオレしにに出してみたいという物好きな方は、評価＆感想欄ｏｒメッセージに名前と年齢に掻い摘んだ詳細を書いていただけたのな

ら、第三部から登場になります。

貴方の独創的なアイデアを心待ちにしてます！

あ、敵役が良いか味方が良いかおまかせなら、「おまか！」で味方が「みかた！」敵役なら「ダークサイド？」と描いてください。更には「ドS」か「S」か「M」か「ドM」などの情報が欲しいです。

さぁて、来るだろうか？　微妙だな。
ユニークが5万から一向に伸びないんだよな……読者様。
どうか、よろしくお願いします。

ってか、後書き長ッ！！

【１０３話】戦闘終了（前書き）

終った……だけど、後、２話残ってます第二部は。
ってか、大変なんですよね……我が人気投票企画が……差がありすぎなんですよ。

それに、コニさんの企画と創作キャラの件、先程の人気投票に試験勉強、中体連に部活。仕舞いには受験生で目標校がギリギリなんですよね……だから、一年の教科書を見直したり等と……忙しいんですよね。

中体連と部活さえなんとかなればゆっくり描けるんですがね。

それはそうと、また親睦会を始めたいと……では、後書きで。

【１０３話】戦闘終了

「キミは彼女……古都宮瑠依を守るんじゃなかったのかい？」

改めて、コイツはオレに問いかける。だけど、初っ端からオレの答えは決まっている。だから、来たんだ……そう思う。

ずっと前からやって見たかったんだ。どうやら屋外にオレ以上の相手。

「オレは自分の力で何処までいけるか試しに来た。お前という壁に対して！」

ここなら、存分に暴れられる。勿論、“禁術”は使わない。使ったら多分それはオレの負けだ。多分ヤツの攻撃で打ち消されるどころか押し負けるだろう。

試したいんだ。オレが鎌でどれほど……ヤツに対抗できるかを。最高の相手で。

「……それだけの理由じゃ、僕には勝てないッ！」

消えた？　いや、上だッ！

案の定、野郎はオレの真上に居た。そのまま後ろに移動して横の一閃。だが、手応えはまったく感じられない。ナイフで防御されたか。だが……。まだまだ続くぜェ！！

そのままオレは突っ込む。鎌の持ち手の部分が神路の腹部に入る。

うしっ。今度は確かな手応えがあった。カウンターで攻めればなんとかなるかもしれない、攻撃してきた瞬間が勝負だ。鎌のお陰で身体能力は大分上がってる。

屋根の中央をキープするんだ。とにかく、高さの差を生かして攻めれば上手に相手の攻撃がギリギリになる。射程距離ではオレが勝ってるんだ。

「空牙斬！」

屋根を描けるように真空の斬撃がオレを捉える。斜めになっている屋根を伝い直線状に向ってくる斬撃をギリギリまで引き寄せて破空斬で相殺する。多分、あのワザを相殺する事は想定内の筈だ。雨水もあるから眼晦ましにもなる。速攻がくる。

「そこかッ！」

鎌を横に払う。金属がぶつかり合う鈍い音が響く。同時に左手に雷の魔法を溜めて屋根にぶつける。雷撃は水から伝わり神路へ多少のダメージを与える。ま、本当に微弱ですこと。

だが、太刀筋が微妙に鈍ってるぜッ！

ナイフを持っている手を払い神路の腹部を全力で殴る。

落ちてきた隕石を跡形もなく打ち砕いた拳だ。だいたいその３０倍程度の破壊力だ。ダメージを貰ってくれよぉ。

ちぇ。まったく効いてねぇや。

こんにゃろう、直ぐにやり返しやがって。随分と重てぇ拳だ。一瞬意識が飛んだかと思ったぜ。

「がはッ」

拳が離れると同時に溜まっていた息を吐く。しかし、神路の攻撃は留まる事を知らなかった。相当数の拳がガトリング如く威力やスピードが留まる事無く打ち続く。

クソ、がッ！

意地で拳を握ったがどうしてくれようか？

このまま引っ張って……もう一丁、腹に（拳を）入れるッ！

「ちぃ」

やはり手応えはない。クソ、この野郎……体が柔らかい、攻撃と同時に身体を捻って攻撃を分散してやがる。それに、コイツは“円”を知り尽くしてる。“円”の起動は全ての攻撃をいなせる防御面では最高のワザだ。だが、防御に集中特化してるから攻撃が疎かになる。

だが、ヤツはカウンターを狙ってるワケじゃない。多分……ヤツは未だにオレの実力を計ってるんだろうな。攻撃が一定のリズムだ。だから見切れるが上手にリズムを変えられたら多分、殺される。それも1撃で、だ。

気を抜くな。真正面からぶつかるぞ。

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｈｉｎｄｏｕ―

「鎌劇・豪雨ッ！」

ニナの下に潜り込み、鎌を不規則に鋭く。振り回す。

斬撃ではあるが……かなりの威力だ。そりゃ、人間一人の血を吸い尽くしたんだ。ダメージを与えないと余程、使い物にならんぞ？

『ぐッ！』

ま、傷は付くか。

だけど、防御がやっぱり生半可ねぇ。どうすっかなぁ？

＜マコト、上空から高エネルギー反応＞

上？　そういえば、あの黒龍の野郎、随分と大人しかったじゃな

いか。

何をしてやが――

「なッ！」

『でかッ』

俺とニナは同時に反応する。それもそうだ、屋敷を包む程の強大な咆哮。

これは危険過ぎる。そう悟るが魔力が空の俺では如何しようもないが、ニナにも不可能だ。幾ら魔力が無限に使えても……威力が段違いだ。

ヤツは屋敷ごと滅すつもりだ。

「瑠依ッ！　止められねぇのか！？」

「む、無理だよ！」

ちぃ！　鼻っから諦めてるからだよ。瑠依には頼れない。

魔力を兎に角集めるしかない。集中しろ、クリア・デリートができる分の魔力があればなんとかなるんだが……このだだ広い屋敷を包み込む程になるぞ？　出来るか？　いや、やりきるんだ！　無茶でも！

間に合うか？　間に合ったのならそのままリリースすればヤツは倒せる。

畜生ッ！　全然、魔力が溜まんねぇッ！！　このままじゃ……や

られる。

いや、そんな事を考えるのは間に合わなかったからだ！　今は前を向いてその問題に立ち向かう。背を向けたらそれはその場で終るんだッ！　死ぬ気で魔力を溜めるッ！

「雨宮流鎌術奥義」

？　屋根の方から？　なんだ？　この感じは……？

馬鹿げてる、コレほどの破壊力なんてありえねぇぞ……。感じだけでもわかる、コレは……黒龍の攻撃なんて目でもない。

「堕天使（ルシファー）ッ！」

凄まじい斬撃は遥か高みで溜めているあり得ない氣の塊とぶつかり合う。

「ッ！　あぶねェ！！」

すかさず瑠依やオーディンがいる場所に移る。そのまま先程溜めた魔力を全て使い通常の結界を作る。クリア・デリートは単体を守るに適した“盾”みたいなものだ。

だが、全体を守るのには適していない。

まだ、意味不明な読者に説明をしよう、簡単に言うと“壁”と“箱”だ。

クリア・デリートは“壁”で1つの面にしての防御で、俺が今使っている魔法は“箱”である1面1面は“壁”には及ばないが全体

を守るのに適している。そんな感じである。おい、まだわかんねぇアホがいるなら今回の感想欄に来い、マンツーマンで指導したやるよ。

「ぐッ！」

予想以上だ。この“爆風”はちょっとヤバイかもしれねェぞ……。

あの攻撃を相殺させたんだ……尋常じゃない程のエネルギーが逆流するッ！

「……止んだか？」

「そう、みたい」

衝撃が無くなった…だが、土埃で前がみえねェ。

取り合えず魔法を解くか。身動きできないのも危険だ……クソ、視界がない。五感を働かせろ、音、気配、風、相手の呼吸……全てを感じろ。

風を切る音が上から聞える……これは、羽ばたき？

ニナかッ！　止まった？　いや、そこからの急降下。

タイミングを見誤るな。敵に勘付かれたら折角の攻撃のチャンスが無くなる……ニナに大ダメージを与えるには固い装甲に覆われてない部分を狙うのがベストだ。

ヤツは身体の９５％程、固い外装があるが……ヤツがその外装に覆われてない部分がある。

「鎌劇・大斬月ッ！」

大振りの一閃。その斬撃はニナの弱点ともいえる部分に当たる。

空中で大きくバランスを崩したニナは血飛沫を降らせながら地に落ちた。当然、血なんかこの強い雨に溶けて消えたが頬に生温い感触が今もある。

『ぐッ……。がァァがッ！！』

ニナはその黄色い眼光で、憎しみの視線を俺に突き付ける。

俺は鼻で笑い飛ばします。

「幾ら身体が固くとも……翼は固くしたら飛べねぇもんな」

久しぶりだ……こんなにも冷徹になれたのは……。不思議な気分だ。

「仕上げだ。眼を潰してやるよッ！！」

動けないニナの眼に向い鎌を振り上げる。その落ちる位置はニナの眼。当然、保護するもののない眼を潰せば俺の勝ちは決まる。あの爆風だ……柴原魅夜も深手のの筈だ。

このまま、振り落とすッ！

「や、やめてッ！」

―Ｈｕｍｉｙａ　Ａｒａｋａｗａ―

ま……間に合ったのか？　あんなのが落ちたら……この屋敷は完膚無きまでに滅びるぞ、気がついて良かったぁ……。ってか、あんなの喰らったら地球も消え失せてただろうな。異常なものを感じた、あれはなんだ？　凄く邪悪なものだ。

「……最後に言う事は？」

それより……コイツはなんだってんだよ。

「みんなわ助けるチャンスくれてサンキューな」

オレは……負けた。バックを取られて首筋にナイフを突き付けられてる。

……一瞬だった、反応しきれなかった……オレはちょっと本気を出したコイツに手も脚もでなかったんだ。クソだ……あぁ、クソだ。

オレは弱い。

痛感した。最強と謳われ、師匠とも呼ばれて……自分の中で自分は強いと思ってた。

勿論、オレなんかより強い人達も知ってる。でも、違うんだ……本気をだして、全力でかかって。ここまでやられるなんて初めてで……。自分の無力を始めて痛感したんだ。

勝てない。本気で、始めてそう思った。

「……それだけ？」

「ああ……」

ちくしょう。ちくしょう！　ちくしょうちくしょうちくしょうッ！！

オレは…無力だ。

とことん、無力だ。クソッタレ……なんで、弱いんだよ……オレはッ！

「……キミと僕が死闘するのはこの場ではない。今度は志を持って僕の前に立ちなよ」

後ろから押えてる状態を解いて、そのまま後退する。オレは暫らく思考が停止した。

「なんでだ……」

オレは聞えるかどうか定かな声でつぶやく。雨の音が掻き消したかもしれない。だけど……大きな声は決して出さずに呟く。

「なんでだ」

再度呟く。

神路は振り返る。オレは背を向けたままで動かない。

「キミと僕とでは実力も、なにより志が違いすぎるからだ」

「違うッ！　なんで、なんでオレを見逃すッ！！」

ヤツに背を向けたままオレは怒鳴り声を上げる。

ヤツは殺し屋だ、それなのに……なんで、見逃すんだ？

何故ッ！　侮辱と受け取っていいのか？　ぶん殴るぞ？　1発だけでもいい。全力で殴る。

「言ったはずだよ……。キミと僕が死闘するのはこの場ではない、と」

「答えになってねぇ！！」

「キミが荒川文也である限り、キミは僕に勝てないだろう」

「お前に……何がわかる！？」

「キミは……ただの屍でしかないんだよ」

雨は滞る事をせずにただ……強く、オレに降り注いでいた。

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｈｉｎｄｏｕ―

子供？

オレの目の前に出て来たのは１０歳前後の少年だ、ニナを庇うように腕を広げている。その眼には強い意思が宿っている。

コイツは本気だ。

オレと闘り合う気まんまんだ。『彼女に手を出すなら、僕が相手になる』眼がそう言っている。オレは答えるべきなのか？　この少年の眼に？

「……ッ！」

この少年の眼に恐怖はない。真っ直ぐ俺を見ている。

なら、答えてやる。

『アルッ！　貴方は下がってなさい！』

「ニナ姉ちゃんをイジメルなッ！」

興奮しているのか？　ニナの言葉を聞いてなんかいない。

ただ、俺を睨んでるだけだ。良い眼だ、なににも囚われずに真っ直ぐ相手を捕らえるその眼、コイツは強くなる。それに、強い。

「守りたかったら来い。相手になってやる」

中指を突き上げて挑発する。

「だぁぁ！！」

純粋なものだ。少年は俺に突っかかって来た。俺のやる事は決まってる。

真正面からぶつかり合うッ！　だけだ！！

少年は地面を蹴り飛ばし俺の真上とくる。瞬時、姿が消える。

気配を探すが見つからない。

「覇掌ッ！」

「がはッ！」

な……にッ？　後ろだと……ッ！？

「粋掌」

背中の攻撃でよろめく、間髪入れずに懐に拳を入れられる。

重たい攻撃だ、何処から溢れて来やがるんだ……それにこの攻撃は……？

まさか……？　そんな馬鹿な事が！？

「轟旋掌！」

駄目だ！　早すぎる！！　防御が……間に合わない！

コレを喰らった日には3日便所と恋人だぞ……！　なんで、コイツがアイツのワザを？

「は！」

「間に合ったみたいね」

「ええ。助かりました死神さん」

何が？　起ったんだ？

「メイリンにアヤ！？　それにお母様ッ！？」

メイド……だと？

それより、こいつ等ただ者じゃねぇ、俺ですら反応しきれなかった攻撃を、更に相手を上回る速度で的確に相手のツボを突いた。そこからはもう、残像しか見えなかったが……多分、１２発ぐらいぶ

ん殴ったんじゃねぇのか？

駄目だ、攻撃が全く見えてなかった。

それにコイツ……何故、俺が死神だと？

たしか、古都宮の母……たしか、旧姓、水都瀬知鶴（みなとせちづる）。そうか……なるほどな。どうりで死神だと知っている筈だ。そもそも、古都宮がどうしてここまで大きくなったかか知っていれば簡単にわかる。

「お母様……」

「落ちついて」

古都宮知鶴は背後から、瑠依を抱きしめる。その頃、龍は先程の攻撃で結構なダメージを受けたようで身を固め回復に専念していた、アレは相殺じゃなかったのか？

さすがは、雨宮流だ……“威力だけ”はお墨付きだな。

「くッ…！」

『アル！　体制を立て直すわよ』

！　もう回復したのか！

「待て！　聞きたい事がある」

俺の静止を聞かずにニナは少年を乗せて空へと行く。

聞いて無いかも知れない。けど、俺は自分が出せる限りの大声を出す。どうしても知りたかった、どうしても聞きたかったんだ、こ

の答えを。

「キミは何故“あの”武術を使えるんだ!?　まさか、キミは……奏の、“嵩波奏”の息子か!?」

「……僕は、復讐者だ」

ハッキリした。

これで、わかった……。

彼の正体を…。

「瑠依様をここまで守ってくださり感謝します」

「……どうかなせれましたか?」

……。会いに行こう。アイツに。

「だぁぁぁあああ！！！！！」

再び背を向けて歩き出した蒼譜に向って文也は走り出した。手には高質量の氣を造りそれを、両手造る。蒼譜は立ち止まり、振り返ろうともしない。文也は両手を合わせて蒼譜の背中を狙い両手に回転を加えて放つ。

「双龍旋掌（スクリューオブドラゴニック）ッ！」

しかし、その場に既に蒼譜は居なかった。

後方から着地の音。上に跳び文也のバックを盗ったが、攻撃する気配はない。

（クソ！　ヤツならいくら雨でも着地の音は消せた筈だ……舐めるなよ！）

文也はそのまま、右肘を後ろに持って行くが、蒼譜に素手で止められる。

文也はそれを振りほどいて、蒼譜と向かい合う。

「アハハハ！！　どうしたんだい？　雨宮和也ァ！」

（へ、それでいいんだよ）

高笑いしながら蒼譜はやっと攻める。文也はナイフを避ける事に手一杯になり反撃に移る事が出来ない。一向に蒼譜の動きは止まら

ない。彼の目は先程と打って変わって違っていた。

獲物を狩る目だ。

やはり、文也と蒼譜の差は圧倒的であった。

文也は気がついている。コイツは本気ではないと。ただ、ナイフを振り回しているだけで、実力は微塵も出していない。その答えは他の点からもわかる、“端”の連中はそれぞれ特殊能力がある物だ。しかし、蒼譜はソレを使ってはいない。理由は簡単だ、雨宮和也……いや、荒川文也には使う必要もないからだ。悪く言えば、出し惜しみ。子供と大人の喧嘩如き戦いだ。

蒼譜はまで本気ではない。今度、“雨宮和也レプリカ”との闘いの場で彼は自分の能力を使う気でいた。だから、彼は能力を使わないでいた。

（まだ、使わないのかよ！！）

次元が違う。その言葉に尽きる。

「！？」

「つまんない」

文也はコレ以上に避ける事は出来ない。ソコには絶対の防壁があった。

別に、文也の実力で破れる程の結界だ。だが、破ってしまったら“最終防衛ライン”を突破される事にもなるし、第一、文也にその余裕すら与えられない。

下には蔵がある、緊急避難場所だ別に下に落ちても大丈夫だが……このまま暴れたらヘタしたら蔵が破壊される。文也はその最悪の場合を想定して飛び降りなかった。

文也の表情が凍りつく。次ぎの瞬間に彼は蒼譜の能力の“一部”を見る事になった。

氷の炎。否、蒼き炎……地獄の灼熱が纏わる。それは、美しく、それでいて恐怖を覚える。

今度は先程より鋭い。文也は悟る。今回は平気では済まないと。

「焔氷斬（フレアアイスブレイド）」

逃げ場を失った文也は防御の態勢に入るが。文也には防御系の技がない。その点から考えるとアッサリする。文也は神路蒼譜の攻撃を受けきれない。そして、ヤられる。

「クッ！」

轟音が屋敷中に響き渡り。辺りは無音となった。

この時に、他の戦闘も全て決着がついたのだった。

【１０３話】戦闘終了（後書き）

和也「……なんで俺等なんだよ？」
廉「読者様、覚えて頂けていたでしょうか？　前回の話しにちょっと出て来た木村廉です」
君等、第三部暇人チームを呼び出したのも他でもない」
「「殺してほしいのか？」」
滅相もありません！！

和也「なんだよ？」
廉「ま、話してよ」
あ、うん。１人でペラペラ喋るのもよくないからさ。仲良くやろうよ雑談しながら。
和也「黙れ。ってか、前書きで話してた企画ってなんだよ」
廉「また、ふざけたものじゃないだろうな？」
ふふふ、長い間コメディー路線から外れてたからね。ハッキリ言うと「うわぁ、コメディ描けな！」なんですよ。
ってか、どうやって進行すればいいのやら。
和也「駄目じゃねぇか」
廉「ずっと、シリアスが続いたからね」
はは、クセでなんかシリアスな方向にふらふらと……。
和也「そろそろ、オレしにをコメディじゃなくてファンタジーにするべきなんじゃねぇのか？」
廉「それらしいよね」
五月蝿い！　コレはコメディなんだ。僕が趣味のどす黒い。
「「コメディじゃねぇよ」」

そこで、第三部企画第二段！　【あ、これ見てみたい】　をはじめます！

和也「相変わらずネーミングセンスねぇな」
廉「どういうこと？」
ふ、簡単だよ。僕にこういう話しを書いてほしい、このキャラを主にして書いていただきたい。夏秋冬とコメディ路線なので春先から、第四部なのです。現在は夏休み中盤で7月に脚を入れたところですので、七夕などはやりますが……他に夏や秋、冬にコレをやってほしい！　などがありましたら評価&感想欄ｏｒメッセージで受け付けます！
例えば……【再び和君を小さくして女性に…】等がありましたらやります。和君に殴られますが。
和也「俺じゃねぇぞ、“オレ”の方だ」
廉「ふ～ん」
あ、勿論……１８禁は無しですよ。１５もです。性描写は駄目ですから。
和也「ってか、企画持ちすぎじゃね？」
廉「コニさんの企画に、人気投票、創作キャラにこの企画と……大丈夫か？」
ふ、真琴は僕の裏（本当の）の性格を移植したものだよ、彼の考える事は僕が考えることだ、ちなみに飛鳥に張られたレッテルは実際に僕が貼られたものです。
和也「…どーでもいいわ」
廉「そだな。帰ろうか」

ではでは、人気投票と、
和也「創作キャラに、」
廉「おねがい、飛焔（なんじゃそりゃ？）」
『宜しくお願いします！！』

暫定１位　緑飛焔「な～のだ♪」

2位との差15票。

【１０４話】帰宅（前書き）

さて、これで２部は終了です。残りの１話は人気投票の結果発表です。
長かった……まさか、戦闘があんなにもつづくとは…。
それでは、２部のラストをどうぞ！

【１０４話】帰宅

「和也は大丈夫なの？」
「さぁな。俺も状況がよくわからない」
「冷たい物言いだな」
「駿ッ！」

うるさい……。もう少し寝かせてくれ……。

「死神がなんでココにいんだッ！？　元凶であるテメェがなんでノコノコ平気な顔をしてやがる！」
「落ちついてください！　如月先輩。この人を殴ってもなんにもなりません」

こっちは疲れたんだ……。身体も重いし……。

「……それだけか？」
「ンだと、テメェ！？」
「マコちゃんも挑発しないの！」

……。

「駿、病人の前だよ。静かにしよう」
「くッ！　覚えておけよ！」
「如月先輩……」

……。

「！　何処に行くの？　マコちゃん？」

「俺にはまだやる事がある。２週間も起きないコイツに脚を止められてるんだ。いい迷惑だ」

２週間？　ダレが？　ああ、そうか、オレだよな。ベットで横になってるんだから。

……は？　オ、レ？

「なにぃいいいい！！？」

「ぬをぉ！？」

ダレの首根っこ掴んだか知らねェが、如何しても確認せねばならん。

「マジか！？　マジでオレは２週間も寝てたのかァァ！？」

「や、やめ……か、和也。首が、息がぁ……」

「いいから答えろッ！」

えっと、あの闘いが６月１９日だったはずだ……２週間って事は今日は……。

「正確には１５日と２３分５４秒８１だ」

「うわぁ、細かい」

「って事は……今日は、７月の４日！？」

うわぁ、ウチの高校普通よりかなり早い夏休みで助かったぜ。それに、まだ夏休みが終るまで３週間ある。

って、ソコじゃねぇか。

「！　そういえば、“端”の連中は！？」

よくよく見ると古都宮の医務室だ。くそ、やっぱり薬品の匂いは好きになれねぇ。こんな所に2週間もいたのか……。は！　また、話しが脱線してしまった……。

クソ、あれからどうなったんだ？

「“端”はあれから来てないよ、カズ」

？　オレをカズと呼ぶ奴は……確か……。

「将！？」

「げふ」

「久しぶり……っと言うのは僕達からしてはおかしいかな？」

おお。それより何か捨てたような……？

「か～ず～や～」

うわぁ！　ベットの下から男が！？

ってか、この見るだけで憎ったらしい顔は……確か……？

「ジェイソン・北村！」

「ダレだ！？」

冗談だ。ただ、ハゲ（？）じゃなくて、人並みに毛が生えてるから、少し眼を疑っただけだよ。前までは薄かったのによく人並みに

育ったな……あの髪が。

犯人悲しいわ（泣？）

「んで、君はダレ？」

「ひゃい？」

いや、そんなに声を上擦らせなくても……。オレって恐怖されてるのかな？

オレはこんな幼子に手を出さないぞ？　第一、こんな幼女に発情なんかするか、オレを発情させるならせめてDはないとな……。

「彼女は石動沙紀ちゃん、実力は保証できるよ。僕が師範をしてる、須藤流暗殺術で僕の次ぎに強い娘だから、今回、着いて来てもらったんだ」

そういえば、将は須藤流の使い手だったな。ガキの時に師範を半殺しにして今では将が全体を指導しとるとか……。うむぅ、納得だ。

でも、如月を先輩とな？　如月は我流の蹴りだったはずだ、そういえば如月とは素手でしか相手にしてなかったな……まさか、オレと同等の実力があるとか？　ははは、将はともかく如月に負けたらリストカットしちまいそうだぜ。

……負ける、かもな。

「って、和也？　私を忘れてない？」

「ネコ嫌いではないか」

「名前は！？」

ふ、第三部からのコメディィの練習さ。

ま、それより……。

「なんでお前がいるんだ？　神堂真琴」

「……“今の”お前に知る権利はない」

「……また、またそれかよ！」

今のオレの何が悪いんだ……？　オレの何が悪いんだ？

「荒川文也と名乗っている内はお前になにもわからない」

「ッ！」

また、コイツもそう言うのか……！？

オレは所詮、作り物だ。雨宮和也じゃないんだ……何が分かるんだ？

オレの気持ちもわかんねぇのに……うるせぇんだよ！！

「表に出ろ。オレの力を証明してやる！」

「……お前は本当になにもわかってない」

ウソ……だろ？

あの時、オレはコイツにあっさり勝てた。なのに……なんで？

オレは、負けたんだ？　しかも、たったの１撃で…！

「わかったか？　コレが俺とお前の差だ」

「どーして、だ？」

セミの鳴き声が五月蝿い。黙れ、集中力が切れるだろうが。そうだ、オレは２週間も寝てたんだ、身体が訛ってるんだ。そうだ、だから負けたんだ。

「わからないみたいだな。だから、お前は弱いんだ」

「ッ！！」

弱い？　オレに負けたのは誰だ？　オレに負けたのはお前じゃないのか！？

お前は……オレよか弱いんじゃねぇのか！？

弱くない弱くない……オレは弱くなんかない！！

「お前は実力では誰にも勝ってはいない。お前の初めての負けはオーディンの使いと戦った時だ、悪いが此方である程度調べてある。お前はそれで惨敗した、あれらは石動沙紀と同じだけの能力を当分

した数、故にお前は彼女に適わない。当然、石動の上にいる如月駿、井塔将が全力を出せばお前に勝てるという事だ。そして、2度目の敗退はキマイラとの戦いだ、アレはたまたまお前に流れていた死神の血が覚醒して特殊な鎌が出来たからだ。あれが無ければ焼け死んでたな。そして、アクレイア戦でもお前はヤツの完全防御を崩せなかったあのままずっと戦っていれば何れは負けただろうな。次ぎは俺だ、やる気のなかった俺を倒したつもりだが……お前の拳は軽かった。そこの2人は気が付いてただろ？　俺が様子を見てた事を？

そして、バロン戦だあれでもわかるだろ？　お前は負けたんだ。コレまでの中で本当の勝ちを掴んだのはお前の中にいる雨宮和也でしかない。そうして、最後に神路蒼譜戦だ……お前も自覚してる通りにお前の完敗だ。わかったか？　お前は形だけしか勝ててないんだ」

圧巻した。

言われて見れば本当の事だった……あの使いの事はともかく……キマイラ戦はそうだ、鎌（コイツ）の能力を屈指して勝った。それは、オレの中に死神の血が流れてるからであってオレの力ではない、親の力だ。そして、零亞との戦い、あのまま言っていたら確かに負けていた、最後はコイツのサポートがあって零亞を倒せた。そして、説得できたのは絶対の自信である防御が無くなったからが大きい。多分、零亞との戦いはコイツの勝ちだ。そして、コイツとの戦い。始めは気持ち悪いほどオレと同じレベルだった。そして、オレのタガが外れてギアをトップにした……だから、差が生まれたんだ。そして、あの仮面野郎の戦い、そうだ、オレはあれも負けたんだ。俺が戦って勝ったのはわかってる。オレじゃないんだ。そして、神路との戦い……ああ、完敗だよ。

そうだな……全部、オレの負けだ。

「確かにお前は強い……“端”とも闘り合えるんだ。だが、お前の周りは異常なんだ」
「……」
「そして、なによりお前には足りないものがあるんだ」
足りないもの？
オレは多分、生気のない眼でヤツを見る。
「それは、荒川文也じゃわかんねぇよ、雨宮和也でない限りな」
「お、俺？」
「お前だ」
「お！　オレは雨宮和也じゃ……お前が言ったんだろ？」
ヤツは何も反応しない。ただ、その“意思”の強い眼でオレを見るだけだ。その眼にオレは全部、見通しして感じがする。ヤツが語る事は常に“真実”なんだ。そうだ、コイツは全部真実しか言わないわかってるその眼がなにを言いたいのかぐらい。
「お前の居場所はここじゃない。だろ？　雨宮和也」
そう、言うと思ったよ。

―Ｈｕｍｉｙａ　Ａｒａｋａｗａ―

「カズ、大丈夫？」
「まぁな……でも、気が付いたんだ……今更だけど、ずっと前からわかってた事が」
「矛盾してるぞ、和也」

如月の言葉にオレは相槌を打ち、２人を見てオレは語り始める。

「逃げる事は……悔やむ事は何時だって出来るんだ。だけど、何かに立ち向かうってのは勇気がいる事で。オレは意気地なしだ……ずっと逃げてきた。自分の事から、薄々わかっていた自分の無力さとか…気づかないフリをしてたんだ。レナを守るって約束したけれど、本当は自信がなかったんだ、だからデーモンさんの前でオレは「オレ等」と答えたんだ……１人じゃ何もできないから」

こいつ等は本当によいヤツだ。つくづく実感する。

「オレは何かに立ち向かったって事ねぇんだ。立ち向かうって事はさっきも言ったように「勇気」が必要だ。それに、立ち向かう時には、その日、その場で、その瞬間に勇気を出して前に踏み出す事が必要だったんだ。何かに立ち向かう時に、言っちゃ悪いが「俺」や「鎌」に邪魔をされてきた、そしてそいつに頼った。自分の力に自信がなかったから……」

2人とも口を綻ばしてはにかむ。クソ、何が言いたいのかわかったのかよこいつ等は。

恥ずかしいから遠まわしに言ってたつーのに。

……ありがとう。将に“駿”

「でも、今日にオレが立ち向かう事があるんだ」

う、後ろからも笑い声が……クソ、知らないフリをしたが本格的に恥ずかしいぞ。

あ～、逃げてぇ。この場から……でも、決めたんだ。もう逃げないって、だから言おう。

「オレ……帰っていいか？　あの場所に……」

「「ゴメンだな（ね）」」

2人が綺麗に揃う。

「あの場所は“荒川文也”の場所じゃないんだ」

「僕の……僕達の大親友である“雨宮和也”の場所なんだ」

「え？」

「勿論、お前の方だ」

「僕達と君が過した時間は、仮にも雨宮和也との時間だ。荒川文也？　それはダレだい？」

自然と、涙が溢れた。

あれ？　前がみえねェや……なんか、しょっぺぇ。

「「帰って来い、雨宮和也」」

身体が小刻みに震えやがる……怖くもない寒くもない……ただ、堪えて震えてる。

必死に、零れる涙を止めようとして……ただ、それだけの事だった。

「……ほら、掴めよ。帰るぞ」

「今日、汽車に乗れば七夕の準備が間に合うからね。みんなで祝おうか」

駿が伸ばした手をオレは握り締める。そのまま持ち上げられて2人共こう言う。

「おかえり。和也」「おかえり。カズ」

何時も見てた2人の小憎たらしい顔が前のみえないくせぇ何故だか、ちゃんとわかった。

ドア越しに聞える声を無視してだが。

「お世話になりました」
「いいのよ、これ、安いけどお給料よ」

駅のホームでオレは奥様と会話をしていた。当初は古都宮の自家用ジェットで送ってくれると聞かれたがオレ等はきっぱり断わった。今回はみんなでゆっくり電車の旅でもしようかという事になっていたからだ。

「い、いりませんよ。今、屋敷がボロボロじゃないですか」
「形のあるものは治ります。だけど、私達はお金では治らないものを引き裂きました。だから、そのお詫びです」

如何（いか）なる理由があってもお金を貰うなんて……最後は結局オレのワガママで瑠依ではなくて敵の方に走った。だから、オレには資格はない。

しかも、封筒じゃなくて銀のトランクケースだ……見たら気絶してしまいそうだ。

財閥……恐ろしい。

「でも、オレは……」
「資格はいりません。これは気持ちなんです」
う……。そう言われると受け取るしかねぇじゃねぇか。
「おい、和也ー！　そろそろ出るぞ」
「あ、ああ。今行く」
「良きお仲間ですね」
……。け、言う事わかってるだろ？　奥様♪
「はい。最高の友人です。勿論、瑠依も零時も宮鷹も。それでは、失礼します」
「……本番はここからなのかもしれませんね。本当に辛いことは」
「ううぅ…」
「何時までも泣かないの、綾芽」
「それでは、帰りましょう。私達も“家”に」
「「はい。奥様」」

＜行っちまうぜ？　秀一＞
「だな」
＜相棒を失ったんだぜ？　よく平気だな＞
「……相棒じゃねぇよ、アイツは……親友だ」

「頭首……」
「ああ、帰る仕度はできてる」
＜そんじゃ、俺等も我が“家”に帰りますか＞
「ちげぇよ、琵埜の家だ」
＜時期になんだろぉ？＞
「なんねぇよ」

「行ったね」
「だな」
「帰って来るかな？」
「来ないな」
「だろうね」
「瑠依……ヤツと居て楽しかったか？」
「うん。有意義だったよ」
「そうか……俺もだ」

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

ってなワケで、電車に揺られてる。はい、そこーダレだ「どんなワケだ!?」とツッコンだ阿呆はありきたりすぎだろうが！　そこは、「そーですね」っていい○も風に返すんだよ、それで、オレが「いい○もかよ!」ってツッコミをいれるんだろ!?

ってな、ワケで電車に揺られてるんだが……。ツッコミのチャンスは1回なんだよぉぉ!!

「どうしたの、和也」
「ん？　読者に指導をな……」

1人でブツブツ言っていたオレが心配だったのか？　レナの野郎がオレの前に座って聞いて来る。ウソを言ってもしかたないし、本当の事を言う。

「調教じゃなくて？」

すると、オレの髪（な、中に居るハエ）が喋り出す。人の頭を布団にしやがって……。

「ＨＡＨＡＨＡ　帰ったら覚えておけよ、ハエ野郎」

帰ったら人には言えない事にしたる。

……そうか、オレ……帰るのか。いや、自分で決めた事じゃないか。例えアソコはオレの家じゃないかもしれない。だけど、オレの帰る所はアソコなんだ。

「まぁまぁ、和也、こっち向けよ」

「ぁン？」

如月に言われた通りに振り帰ると、カシャッという機械的な音と眩しい閃光が迸る。

カメラ？　……この状況を？

「て、てんめぇ！！」

「暴れちゃ駄目だよ、“彼女”が起きちゃうから」

「そうですよ」

うっ……。そう言われるとオレは口を紡ぐしかない。このまま立ち上がったらぜってぇまた“泣き出す”に決まってる。なんせ、電車に入ってから一時（ひととき）たりとも放してくれないのだ。非常にトイレとかも困るのだ。

オレの肩で寝てるから尚且つだ、この女は……。

ま「それほど、心配してたんだよ」

さ「話したくても話せるチャンスが無かったからですよね、先輩に師匠♪」

し「ツンがデレに移行したんだ」
レ「ラッブラブ～♪」
ラ「お似合いですよ」
ヴ「ほら、みんなで集まって」
セ「……？」
か「ヴァン君！？　何故にそんなカメラを！？」
ヴ「作者さんが……」
『飛焔ッッッ！！！！』

カシャ。

長旅だった……日付が変わったじゃないか。

さっさと寝たい。魅夜はちゃんと帰ってくれたし……このまま風呂に入って寝るか。

それより、クソ。こいつ等笑顔でコッチを見やがって。もう2度という事もねぇと思ってたんだがな。恥ずかしいじゃねぇかよ。

仕方ない。玄関に入ってオレはこう言うしかないらしい。

「ただいま」

『おかえりなさい』

クソ、こっぱずかしい。最近こいつ等の手の平に躍らされてるみたいだ。

取り合えず、居間に入って荷物を置いてから……。

(あ、)

(どうしたの？　ヴァン？)

(そ、そういえば……私達)

(……部屋を汚したまま……)

(あ、)

「はぁ～」

……そうか、あいつ等は死にたいのか。

オレの知ってる居間は何処に行ったんだか？　ふふふ、どうやったらここまで物が散乱するのかなぁ？　聞きたいぐらいだよ。本当にねッ！

「に、逃げろぉ～！」

「うわぁぁぁあああ」

「きゃあああああ」

「……逃走」

「ふ、」

バ～ロ、笑顔で逃げるっこたねぇだろうが、これじゃあ鬼ごっこだろ？

ま、いいか。コレが、オレとこいつ等なんだから。これが、オレと死神達との日常なのだから。

これで……良いんだ、これがオレ等らしいのだから。

だから、オレはこう言うんだ。

「待てやゴラァァアアアッ！！！！！」

【１０４話】帰宅（後書き）

では、まだ投票してない方、宜しくお願いします！

【番外編】紹介（？）そして、第二部結果発表（前書き）

前回の人気投票と同じく、人気投票などのメッセージは消させていただきました。半分異常がメールで来ますが流石に多いですから。

友達の輪って怖いですね。

【番外編】紹介（？）そして、第二部結果発表

美樹「レディースアァァンジェントルメン」
名「英語で書きなさい飛焔」
飛焔「女&男って描くの？」
名「馬鹿」
美樹「だぁかぁら、あんたがそう言うから私達の出番がみるみる盗られてるのよ！」

名「知るか。どうせ番外編要員ですよ、私達は！」
美樹「落ちついてよ……」
？？？「ふ、番外編要員に俺等も来てるんだぜ？」
？？？「ＹＦＳ」
？？？「……」
？？？「ガツガツガツ」
？？？「そうだよ～」
？？？「私、とうじょ～う☆」
名「番外編要員の立場に危機が！」
美樹「本編の危機を知りなさい！」
飛焔「大丈夫、次ぎの人気投票の結果発表からだから」

飛焔「では、上から紹介します。第三部から登場の代表格達です！」
名「……作者、コイツがか？」
？？？「コイツとはなんだ？　生徒会長」
美樹「犬だよ、ね？」
？？？「犬言うなッ！　我が名は犬星流聖（いぬぼしりゅうせい）だ覚えておけ！」
飛焔「これは、作者がソフトバンクのＣＭを見ながら出て来たヤツです」
流聖「ふん。パクリだと？　我は（作者ガード）だぞ」

「「恐れ入りました」」

飛焔「次ぎは企画で下さったキャラです、番田長太通称『番長』です！　これは我が友人が考えてくれたキャラです」

名「ってか、登場のあれ、間違いよね」

番長「？」

美樹「あ、私のメモに書いてた。聖涼１の馬鹿なんと奇跡の単位０！」

名「……はい、次ぎ行こう」

番長「まぁ良い、今回は散会するか」

美樹「退散ね」

飛焔「今回のは読者様からのご要望で唯一の敵キャラです」

？？？「東雲ゆかり。階級は大佐で騎鋼師団【暁】の指揮をとっている」

名「……なんだろう、やっとでたクールキャラ？」

美樹「お姉様と呼ばせてください！」

名「美樹ぃぃぃぃぃ！！？」

飛焔「さて、次ぎのキャラは……」

美樹「……」

名「……」

飛焔「お、わかったかな？　特に名ちゃん」

名「……まさか」

飛焔「そう、かのコロコロ大先生が下さったキャラ！」

美樹「あった。名前しか載ってないけど。３年Ｃ組出席番号１赤穂真太郎、知ってるよね？」

名「？」

飛焔「設定だと同じクラスなんですけど？」

名「……とにかく次ぎッ！」

【ズキューンッ！】
美樹「あ、撃たれた」
真太郎「食事中は大人しくしろや」
「「は、はい！！」」
美樹（流石、銃刀法違反クン）

飛焔「そんじゃあ、僕は撃たれた名ちゃんを修復するからやってってね」
美樹「へ！？　こんな個性の強い集団の中でおいってっきり！？」
飛焔「ば～い」

美樹「えっと、じゃあ次ぎのお方……」
？？？「私だよ～」
美樹「では、お名前を」
？？？「穂鳳那美（ほとりなみ）だよ～」
美樹「では、スリーサイズは？」
那美「上から９２（Ｆ）／６２／８６だよ～」
美樹「なるほど……（で、デカイ）」
那美「彼氏はいないんだよ～」
美樹「その胸で！？」
那美「アハハハだよ～」
美樹（ふ、伏線なのか？）

飛焔「何を聞き出すかァァ！！」
美樹「名、直すの早ァァ！！」
飛焔「所詮は作り物だ」
美樹「暴露したぁ！！」
名「それでは、地獄はあちらです巨乳」
飛焔「……ふ。本編で痛い目を見るなよ」
「「え？」」

那美「アハハ……だよ？」
「「（（（（。口 。；））））ガクガクブルブル」」
飛焔「最後はこの方です！」
？？？「やっほぅ！　羽鳥香奈様だぁい！」
美樹「エラく元気ですのぉ、我々年よりの時代は終りのようですね、名さん」
名「私はまだ高校生よ！　そっちの世界にはまだ行かないわ！！」
飛焔「バイバイ」
名「手を振るなァァ！！」
香奈「おお、私の紹介より目立つとは流石です！　先輩！！」
名「誉めるなァァ！！　嬉しくともなんともない！！」
香奈「人の紹介なのに本人より目立つその図太い神経……さすがだ」
名「だぁかぁら！　誉めるなァァ！！」

名「はぁはぁはぁ……」
美樹「個性が強い」
ＨＡＨＡＨＡ　流石読者、頭がいいね。
名「それより、本題の方に行きましょう」

美樹「そんじゃあ……第１３位から！」

第１３位・０票…多数。

第１２位・１票…桜憙。神路蒼譜。雨宮和也（オリジナル）。飛焔

桜＜ヒャハハハ、サンキューな刀なんかに票をくれて＞

蒼譜「ま、敵キャラなのに票があるだけ十分かな？」

和也「ふん」

飛焔「ま、作者だからね」

第１１位・２票…東條雪都

名「ダークホース！」

美樹「入れた奴は捻じ曲がった精神の持ち主よ！」

飛焔「……僕の幼馴染だ２票とも」

「「アイツか！？」」

※因みに東條雪都は消息を絶ってる為に来ません。

第１０位・５票…澄比良綾芽。李（リー）・明林（メイリン）。古都宮瑠依

「「いぇーい！」」

飛焔「まさか、メイドがこんなに低いとは」

綾芽「あんまり本編に関ってませんからね」

メイリン「メイドじゃなきゃ票が入らなかったんだから感謝よ」

瑠依「……こんなもんだよね」

飛焔「不服そうだな…」

第９位・７票…ヴァン＝アル・サーザス

飛焔「良かったね、ヴァン君」
ヴァン「う、うん。本当に良いのかな？　セフィリア達に入ってないのに僕なんかに」
飛焔「ありがたく頂いてなよ」
ヴァン「う、うん。作者の友人（思い女子）ありがとうございまちゅ！（噛んだ）」

第８位・１１票…井塔将。石動沙紀

将「結構はいったね今回は」
飛焔「３年にもなれば顔が大きいんだよ」
沙紀「あ、本当です」
飛焔「どちらかと言ったら僕は小顔だよ！　部活で１年と２年までにやってるからね」
「「悪だ」」

第７位・１２票…宮鷹秀一

秀一「お、俺か」
飛焔「ミヤ、ウチのクラスが多かったぞ」
秀一「へぇ。サンキュウな」

第６位・２０票…古都宮零時

零時「めっちゃ意外なんだが」
飛焔「俺もだ、それに票の差もだ」
零時「なんでだ？　作者？」
飛焔「【なんか、カッコイイ？】って感じの意見が多かったぞ」
零時「な、なんか？」

第5位・22票…如月駿。レナ。魅夜

駿「はッ!?」
『ウソだ!!』
飛焔「マジマジ」
駿「うをぉぉおおお!!　俺の時代が来たぁぁあああ!!!」
レナ「そ、そんな……この影薄と同じ」
魅夜「いやァァ」
駿「ひでぇ!!」

第4位・25票…愁羅飛鳥（死神の事情より）

飛鳥「わ、私がですか？　本編でまだ全然語られてなくてしかも死人の？」
飛焔「まぁまぁ、君の性格だろうね。男子からのウケがいいんだよ」
飛鳥「作者さん、真琴が睨んでるよ？」
飛焔「……（汗）」

第3位・30票…荒川文也（改め、雨宮和也）

和也「お、落ちた……」
飛焔「ま、予想通りかな？　前半と後半へタレだったし」
和也「そそんな……1位から下がった……主人公なのに」

第2位・35票…神堂真琴

真琴「おい作者」
飛焔「な、なにかな？」
真琴「……殺されたいか？」
飛焔「お、落ち付こうぜ」

真琴「……けっ」

第1位・48票…緑飛焔

オレしにメンバーズ「そ、そんな馬鹿なぁああ」

緑飛焔「な、なのだ……」

オレしにメンバーズ「同様したァァ！？」

飛焔「な？　出たろ……学校でよくやれって言われてる。殆ど2票目には緑に行ってた」

オレしにメンバーズ「こ、こいつなんかに……」

飛焔「ウチのクラスの天才美術史たる人が描いてくれたものもあるぞ」

オレしにメンバーズ「か、かわいい……」

緑飛焔「なのだ♪」

飛焔「ふ。差が13票か……。でも、おしい」

名「なにが？」

美樹「えっと……総計218票？　スゴッ！　ってことは109人のお方が！？」

名「流石はＷＥＢ」
飛焔「ああ。本当に親友の輪は凄い」
名「でも、何がおしいの？」
飛焔「あと２人から頂けたら１１１人だったのに……」
「「欲張るな！！」」

そ、それでは我が友人や票を入れてくれた読者様！　ありがとうございました！！

【番外編】紹介（？）そして、第二部結果発表（後書き）

奇跡の３・連・続・更新ッ！

【１０５話】ネタ捜し。（前書き）

随分と前に作ってやる機会がなかったヤツです。

【105話】ネタ捜し。

夏休みも終りに近づいてきた頃、オレはまったりと公園をブラブラ歩いていた。
夏休み、更には公園って事もあってか？　幼い子供達がワイワイと遊んでいた。

その中で一際目を惹いたのは1人の泣き虫の男の子と、しっかり者の少女だった。
どうやら、口喧嘩で言い負かされたみたいだ。

ついつい口が綻ぶ。
なんか、何時だかの自分と魅夜を見ているみたいで。
でも、ソレはオレではなくて“俺”の記憶でしかないのだが
やれやれ……平和だな……。

ベンチに腰を降ろしてじっくりと子供達を見つめる
ソレだけでも、ほのぼのとできる。

照りつける太陽と木々の日陰で涼しさを覚える……。

無邪気なものだ……あそこまで汗を流して……。

おっと、こんなに平和すぎたら読者様も詰まらないか……。
んじゃ……何処から話そうか？

ってか、気持ち良くて眠たいんだが？

お天道様が機嫌が良い日には昼寝に限る。

まさにそうだよ、ジッちゃん……

パト○ッシュ……ボクは眠たいんだ……眠って良いかい？

「がはっ！！」

な、なんだ！！？　何故、作者の目覚し時計が……！？

ってか、手紙も付いてきた？　なになに～？

『キミは良いかもしれないけど、読者的、作者的にこんなほのぼのではＮＯ！！』

ちぃ。わーったよ。

少年少女を拉致れば良いんだろ？

「ばはっ！」

こ、広辞苑だと！！？　馬鹿な！！？　また、作者からか！？

【貴様は朝鮮民主主義人民共和国か！？】

……知るか。ってか、略して、北朝鮮でいいだろ？

「くそぉ……眠るのがダメか……アスレチックで遊べとでも言うのか！？」

【想像してみてください……高校生＋不良＋アスレチックを……】

……うわぁ。自分で言っときながらイヤだなぁ……。

気色悪ぃ……。

しゃあない……ネタを捜しに行くか。

街をぶらぶら歩く。当然、駄菓子を買い込んでだがな。
ついでに言うと、ねり飴のレモン味を加えてる。

駄菓子は安いし美味い。オレからすれば最高の品だ
袋の中にはヨーグルトとかラムネとか１０円ガムにせれからキャラメルなど多数の駄菓子が入ってる
最近では、暴君ハバネロ君や、超暴君ハバネロ君、大魔王ジョロキアが流行ってるみたいだから買ってみた……うん。レナの口に全部打ち込むために♪

そんな時、一迅の疾風がオレの横を駆け抜けた
むっ？　あの紫色の忍者みたいな格好は……まさか【作者郵便・飛焔】！？
ただ、中学生が郵便配達のバイトって？　校則違反だし！
ってかさぁ……知人が経営してるからって、中学生が郵便をチャリで配達かァ……
ま、作者は如何でも良いんだがぁ――

ってか、紫飛焔じゃないか……。配達か？　追てってみるか

全力でオレは紫色の忍者の後を追う事にした

はぇ！！　オレの全力疾走（スペースシャトルより少し遅い）より速いだと？

『……』

なにぃ？　バレたから更に速くしただと！！？

ハワイから日本まで3分以内に届ける実力は本当だったのか！？

面白い！！　郵便物を奪ってやる！！（コラ

「見つけたぁ！！」

『……』

上手く計算して先回りをし。コンマ1秒の世界で忍者と配達物争奪戦を繰り広げ、オレが勝利、配達物を脇に抱えて忍者と対峙する

ふふふ、残念だが……オレの暇つぶしのタメに死んでもらうぞ（オイ！

飛焔……お前はこの世界の神だと思ってるかもしれねぇが……それは違う！！

この世の神は……オレだァ！（オイ！

『……影分身』

忍者がそう呟くと和也を取り囲むかのように無数の同じ形の忍者が現れる

紫がぁ……ひぃふぅみぃよぉ…たっくさん♪

「爆撃殺・崩」
『……』
なに？　避けられた！？
和也の氣の攻撃を易々と避けてクナイを持ち和也の首筋を狙い突撃する。　右からの攻撃は楽々避けて後ろは裏拳を使って倒した後に、左から来たヤツは龍滅掌をどてっ腹に与えるしかし、ハズレだった。
次は……？
『忍法・獄炎殺』
上か！！？
左右前後に気を取られていたタメに反応に遅れた
バックステップで回避するが。後ろから周り込まれてクナイを突き付けられる
この間、約１秒
『……』
強ぇ……！
率直な感想であった。和也は感心を得た。
駄菓子を入れた袋を地面に落とし、約コンマ０，００１秒の隙をついて後ろの分身を倒す

「さぁて、本気で行きますか！」

その言葉と同時に３人の忍者が消え失せた
実際は同時ではない、コンマ０，０１秒で間合いを詰めて攻撃し撃退したのだ

『……口寄せ。悪魔の王（サタン）』
「魔槍裂破掌（グングニルインパクト）！」

足に氣を集中させ爆撃させる。その勢いを使い、筋肉をフル活用させて腕に螺旋の動きを加える。それを相手に叩き込む
サタンの攻撃は和也の攻撃に相殺されて消える
和也は怯まずに分身を叩き潰して、本物と向かい合う

『……和君、配達の邪魔はしないでくれ。バイトなんだ！！』
「正体を表したか？　飛焔……いや、イニシャル、Ｔ．Ｎ！」
『言うな……紫電（しでん）の閃（せん）って呼んでくれ、作者名では危険だからな』

「なら、閃（せん）……手合わせを願おう」

その言葉と同時にオレ等は駆け出した。

クナイが和也の頬を掠る
和也の拳は簡単に避けられるが、爆撃殺で吹き飛ばされて。拳にタメられた氣が和也が駆けると同じく黄色閃光が龍を象りどてっ腹に差し掛かった所で氣を爆発させて、追撃に拳を叩き込む
閃はソレをモロに喰らいよろめく

『やるじゃないか……』
「けっ。龍滅掌で気絶しねぇか」

『ならば……スピードＵＰ』

なに？　まだ速くなるのか！？　ドップラー効果まで聞こえるのは当然だが……アイツは今、音と光の速さの間に居るのか……

「ちょこまかと……！」

『ふっ。終わりだ』

「なにをぉ？」

痛ッ！？　な、なんだ？　糸？

和也の周りには黙視できない程の糸が無数にも張られていた

『糸牢獄』

「くっ……ヘタに動けねぇな」

「～～♪～～♪～～～♪」

どこからともなく口笛＋鼻歌が聞こえてきた。しかも、森山直太朗のサクラ……時期ハズレだつーの

歌ってる主はオレしに最強のＨＰと防御力を誇る自転車に乗って蕎麦の配達中如月駿であった

「ん？　和也どぅ……

「……如月ィーーーーーーーーー？！」

如月が何かを言い掛けたと同時に糸に掛かってしまい、顔が３つに別れた。脳みそは飛び出してしまい上唇と下唇が瞼（まぶた）から上に別れてしまい、体はもうグロくて言えない状態になった

って、なったら15禁になるよなぁ？　作者よ？
さ：言うな、作者と。ちゃんと、言ってしまえ。上はウソです読者様。
　しゃあねぇな……自転車が意図も容易く切り刻まれて、吹き飛んでった如月の腕が糸に掛かってしまい、それが糸と絡まり吊るされた。

「た、すけて…」

『……』
「……」
「『無視だな』」

　そうして駿は無視された。
つくずく、糸に運がないな……以前は関西弁に糸の空間につかまり、作者の糸でも捕まるか……
まぁ、どうでも良い事か……。
　どうすっかなぁ……？　ヘタに動いたら如月の二の舞えだ、如月がオレしに最強の防御力でも簡単に切り裂かれたんだ……どうする？

『ふっ。忍法……作者奥義巻之壱・神雷！！』

　晴天の雲から何故か落雷が落とされる。閃光が迸り、避雷針として高く作られた糸に直撃した。
糸は全体に雷が伝わり、微かに触れていた和也の服にまで伝わり、大ダメージを与えてた

「がっ！　紫電とはこのコトか……」
『雷と風の属性しか使えないけどな』

くそ……。雷効くなぁ……

『ふふふ、糸牢獄をなんとかしない限りキミに勝機はない！』

「やるじゃねぇか……だが、オレは何か……知ってるだろ」

『ま、さかぁ！』

気がついたか、だが……遅いぜ。作者

オレが手に持ってるのは我が鎌……ＤＤＢ（ディスピアブルレイカー）……ふっ

「切り裂け、旋空の刃！　ウィンドエッジ！」

風の刃が糸を切り刻む。

そして、閃の首筋には……鎌が突き付けられていた。

『いつから……魔術を？』

「鎌を持てばその属性の魔法を使えるってコイツが言っていた。雷と風、更には炎の魔法なら使える」

『ふっ。鎌の設定はそうだったな……』

「自作のキャラや武器の設定は把握しておくんだな……終わりだ」

鎌が閃の首に直行するが……。鎌は在らぬ方向……駿の抜けた魂へて向かった

『特権忍法・道化の舞』

「なん……だと！？」

まさか……こうなるコトまで計算していて……オレに鎌を出させたのか？　ソレでお前がピンチになった時……

『特権忍法でキミを操作したんだ……じゃ、届け物があるのでさらば』

く、クソぉ……。感想ではワザとやられていたのか……してやられた

和也は苦虫を加えるような顔になった。感想では幾度も作者を倒したが本気の戦いとなるとこうも実力の差があるコトを思い知ったからである

クソォッ！！

「待ってろよ……鍛え直してから再戦してやるからなあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

和也の叫びは虚空へと消えた

「あ、そうだ
雨宮流禁術・極光破」

ん？　そうそうＴＯＥにでてくる奴の改良版だよ？
勿論……威力はぁ――

『……何か、忘れてるような……って！！？　グギャアアアアアアアアアアアァァァァァァァ』

さぁて、仕返しもした事だし帰るか。

―一方―

駿（魂）「俺を忘れるなぁ～」

駿は翌日、よぼよぼのお爺ちゃんに発見され須川先生の治療で魂と身体が完璧に治った。

因みに第一発見者はコナ〇によくでるあの黒いの（犯人）であった……

それはまた、ダレもが興味のないお話。

そして、イラナイ容疑も架せられたのも事実だったとさ♪

【１０５話】ネタ捜し。（後書き）

神の４連続更新。次回は七夕です。

【１０６話】星に野望を？（前書き）

つ、疲れた……。

【１０６話】星に野望を？

7月7日というワケなんだが……、当然の事ながら七夕だ。実を言うと作者の闘い（もとい、中体連）が始まる日でもある。やっべぇ、リアルの日付に追い越されそうじゃん！

でもって、七夕伝説と言えば、おりりん（もとい、織姫）とヒッキー（もとい、彦星）が喧嘩別れした日だったけ？　親父はいい加減な人だったからオレもよく知らない。

親父曰く。

『いいかぁ？　和也？　七夕っつーのは昔の中国話しでなぁ。えっと？　夜空に輝く天の川のほとりに、天帝の娘で織女と呼ばれるそれは美しい天女が住んで居ました。

織女は、天を支配している父天帝の言いつけをよく守り、毎日機織りに精を出していました。

織女の織る布はそれはみごとで、五色に光り輝き、季節の移り変わりと共に色どりを変える不思議な錦です。天帝は娘の働きぶりに感心していましたが、年頃の娘なのに、お化粧一つせず、恋をする暇もない娘を不憫に思い、天の川の西に住んでいる働き者の牽牛という牛飼いの青年と結婚させることにしました。

こうして織女と牽牛の二人は、新しい生活を始めました。

しかし、結婚してからの織女は牽牛との暮しに夢中で毎日はしゃぎまわってばかり。機織りをすっかり止めてしまったのです。

天帝も始めはこんな二人の様子を新婚だからと大目にみていましたが、いつまでもそんな有様が続くと眉をひそめざるを得ません。天帝はすっかり腹を立ててしまい、2人の所へ出向くと。

「織女よ、はたを織ることが天職であることを忘れてしまったのか。心得違いをいつまでも放っておく訳にはいかない。再び天の川の岸辺に戻って機織りに精を出しなさい」更に付け加えて…。

「心を入れ替えて一生懸命仕事をするなら1年に1度、7月7日の夜に牽牛と会うことを許してやろう」と申し渡しました。

織女は牽牛と離れて暮すのがとても辛く涙にくれるばかりでしたが、父天帝に背く事もできず、牽牛に別れを告げると、うな垂れて天の川の東に帰って行きました。

それ以来、自分の行いを反省した織女は年に1度の牽牛との再会を励みに、以前のように機織りに精を出すようになりました。牽牛も勿論思いは同じ、働いて働いて…7月7日を待ちました。

こうして、牽牛と織女は互いの仕事に励みながら、指折り数えて7月7日の夜を……。

ところが、2人が待ち焦がれた7月7日に雨が降ると、天の川の水かさが増して、織女は向こう岸に渡ることができなくなります。

川下に上弦の月がかかっていても、つれない月の舟人は織女を渡してはくれません。

2人は天の川の東と西の岸辺にたたずみ、お互いに切ない思いを交しながら川面を眺めて涙を流すのでした。

7月7日に雨が降れば。そんな2人を見かね何処からともなくかささぎの群が飛んできて、

天の川で翼と翼を広げて橋となり、織女を牽牛のもとへ渡す手助けをしてくれるのだそうです。

って、なのは。ウソだ』

「おとうさん？　ほんとー？」

『ああ。実はヒッキー（彦星）が街の女に浮気をしたのが、天帝にバレて2人は離れ離れにしたんだよ、だが、おりりん（織姫）がどぉしても、ヒッキーの事が好きで好きで止まなかった。それを見かねた『娘命』な天帝が7月7日の晩に会うことを許可したんだ』

「へぇ～。おとうさん、ものしりだね♪」

『ハハハ！』

『貴方、ちょっと……』

『ま、待て。姫南。あれは冗談であってだな……は、早まるな……ぎゃぁ（以下略）』

「？」

……親父……。

ってか、純粋じゃねぇか“俺”よ。ってか、心に残るほど衝撃的だったのかよ？

……純粋ですなぁ。

ってか、騙されたまんまって事だったのか。

流石は我が頼れる弟子だ、物知りで助かったぜ。

「？　文一君とメール？」
「ああ。ちょっと、調べものがあってな」

さすがに、この歳になって七夕の事を聞くのはマズイからな。ってか、常識なんだよな。多分だけど。ふ、知らなかったらあいつ等に示しがつかないからな。

俺が間違った記憶があるのが悪いんだな。さて、オレは正しい知識があるだけマシですか♪

「それよりさ、飾り付け終わったよ！　ほら早く早く♪」

腕を引っ張らなくてもわかってる！　文一に教えてもらったら行く気だったから。

ったく。お祭り騒ぎが本当に好きなんだから……コイツは。ま、オレもオレで宴会の準備をしねぇといけねぇからな。酒はいつも通り駿が持ってくるし、つまみと寿司は将が持って来るって言ってたからオレは夕餉の準備をするっと。

さぁて、なにを作ろうかな？

飾り付けなんかは興味ない。酒だ酒。今回はやっぱり缶ビールなんだろぉな。
※お酒は二十歳からです。

「ほら！　凄いでしょ！」

オレは見慣れた居間に“奇妙なもの”がある事を確認した。

さぁて、気がついてるのは……ヴァン君だけか。こいつ等の行動に動揺してる。

やっぱり君は常識人だよ……。

「おい」

『？』

ただならぬ気配を感じたか？　ふふ、ここまで怒りの炎を出していたら当然か。

「七夕にクリスマスツリーを飾るアホが何処に居るッ！！！？？」

こいつ等（ヴァン君を除いて）なに、納得した感じの顔になってんだよ？　ってか、名前で気がつこうよ！　クリスマスって明記されてんじゃん！　笹だよ！　杉じゃねぇんだよ！！

ってか、ラミアちゃん、オレは君に裏切られたよッ！　君もまともな人間だと思ってたのに！！

「ここに居るッ！」

レナ！　その返しはおじさん予想外だったよ！！　ってか、逆ギレ！？

「なに、七夕にクリスマスツリー飾ってるんだよ？」

「おじゃまするよ。カズ」

おお、来てくれたか。友人よ。おじさん若い者の逆ギレが怖かったよぉ。

最近の若者は本当に忍びなくてのぉ……おろおろ。何処かのドSハゲも怖くて怖くて……歳寄りを労わることをしないからのぅ。本当に最近の若もんは……。

「な、なに泣きついてんだよ？」

若者がいじめるんでな。

「若い者の逆ギレが怖かったよ……」

「君は老人かい？」

いや。高校生だ。

ピチピチの１５歳♪

「ま、それよか……」

「ああ。持ってきたぞ……１００話記念と違って缶ビールだがな」

「僕の方からはいつも通りの寿司とおつまみに、適当に刺身を持ってきたよ」

将と如月は各々が持ってきたスーパーのレジ袋から持って来た物を並べる。缶ビールが大半を占めてこいつ等でも飲めるようにノンアルコールのチューハイなどの酒類に、イカの燻製や、さきいか、などの酒のおつまみの山と、適当に見繕ってプラスチックの容器に入れたものと、各種の魚やイカ、たこの刺身などが、並べられる。

レナは余程、待ち遠しかったのか、大好物であるプリンを如月が買ってきていたので目を輝かせながら自分のをキープしている。

「和也さん？　ツリーじゃなかったら何で飾るんですか？」
「おっと、そうだったな。ちょっと、待ってろ。捜してくるから」
そうだ、さっさと飾り付けをせねばな。余計な時間が掛かった。
えっと……何処やったっけなぁ？

暫らく蔵や物置などを捜してやっと、笹が見つかった。今は４時頃なので今から速攻でご馳走を作れば丁度、酒も冷えてよい頃だ。

「ほれ、見つかったぞ」

「笹？」
「パンダ？」
「笹団子？」

おいコラ。連想ゲームじゃねぇよ。ってか、セフィリアが「笹団

子」なんてボケるの始めて聞いたわ。ってか、まともに言ったのはラミアちゃんだけじゃねぇか。ってか、妖精のくせぇに笹をパンダってなんだよ？　たしかに、パンダが食うけどなぁ……。

「連想ゲームになってぞ、セフィリアにハエ」

因みにハエはオレの頭の上でくつろいでやがる。最近、コイツにとってオレの頭は安全地帯らしい、なんせ、殺虫剤が掛けられない、なにより、ヘタしたら自分の頭を叩く事になる。自分で自分の頭を叩くのは流石にイヤだからな。アホみたいでし。なにより、オレの寝癖が丁度良いらしい。

ってか、蚊取線香以外の手を封じられた。

くっ。やるじゃない。

「それより、飾りは作らなくて良いのか？　和也」
「しっかし、おりがみとかねぇからな。それに、短冊もねぇし」

流石に、飾り無しはちょっと淋しいからな……。

「ふふふ、そういう事もあろうかと用意してたぜ？　和也」
「おお！　珍しく如月が輝いてる！」

な、なんて神々しいんだァァ。

「カズ、それより、何を作るの？」

む？　そうだなぁ……七夕に何を飾ったかな？　『わっかづり』とか『ちょうちん』やら『ふきながし』ぐらいかな？　他にもあん

だろぉが知らねぇな。

「和也？　『たんざく』ってなに？」

「あ、ああ。画用紙とか切って穴を空けてその中にヒモを通して、願い事を書いて飾るんだ」

「へぇ～。己に秘めたる強気心の欲望を書くんだね」

「言い方こえぇよ！　レナ！！」

じゃ、邪悪だ。それよりなんで邪悪な言葉はペラペラ出てくるんだよ？　やっぱり死神だからか？　いや、違うな。ドSなんだろ？　レナ？　お前って。

（いえ。昼ドラの影響です。）

と、ラミアちゃんが耳打ちする。そういえば、昼になるとヤケに目を輝かせていたのはそれだったのか……澱んでる。ドロドロ大好きな飛焔みたいに。

「和也君？　飾りってどうやって作るの？」

「ああ。簡単だぜ。まずは簡単な「ちょうちん」から教えてやるよ。まずは、おりがみを半分に折って、それからハサミで等間隔に切る。全部は切らないで少し残しておけよ。感覚は……だいたい１ｃｍぐらいがいいかな？　それで、広げて切ったやつがサイドにくるように丸めてのりでつける。そしたら完成だ」

うんうん。作ったのは“俺”なんだろうけど懐かしいねぇ♪

ってか、おりがみを折るなんていつだかぶりだな。

「ねぇねぇ？　他には？」

そうだなぁ……「わっかづり」は如月と将がおりがみを同じ方向に3回ほど折って広げて折り目に反っておりがみを切って行く。それを丸めてのりでつける。それを繰り返してるので、ならば、「ふきながし」と「あみかざり」の作り方を伝授するとするか。

「ほんじゃ……「あみかざり」でも作って見ようかな？
同じ方向に2回負って、等間隔に切る。さっきも言った通りに少し残しておくんだぞ。今度も１ｃｍぐらいの感覚で切る。次ぎは先程、切ったのと反対の方からさっき切った間を切って行く。しつこいが全部切るなよぉ。それで、広げて伸ばしたら蛇腹状のできるだろ？
それで完成だ」

ははは、この程度の事なのに必死な顔つきだねぇ。よくツルとか折る時になってたもんだ♪

本当に子供みたいなヤツ等だなぁ～。微笑ましい事この上ない。

「ねぇ？　他には？」

調子にのってレナが聞いて来る。チャレンジ精神豊富な奴だなぁ……。

「んじゃ、次ぎは……「ふきながし」かな？　４回ほど同じ方向に折って、そうして開く。そうして折り目に沿って切って行って後は丸めてのりで着ければ完成だ。

あとは、適当に作ってろよ。オレは晩飯の仕度をするから。ヴァン君、悪いけど料理手伝ってくれないかな？」

「あ、うん」

さて、何を作ろうか？

―Ｍａｋｏｔｏ　Ｓｈｉｎｄｏｕ―

「……？　天の川……か」

そういえば、今日は七夕……７月７日か……。どうりで、夜なのにこんなにも明るいワケだ。

織姫と彦星の再会の日。そうして、俺にとっても再会の日か……ま、別に恋人なんかじゃねぇがな。元・クラスメートとの再会だ。此方でいえば１０年ぶりになるのか？　オレ等から見れば１００年以上経ってるんだがな。

「……織姫と彦星みたいじゃない？　私達？」

目の前にいる彼女は微笑しながら此方の様子をうかがいつつふざける。それに、思って無い事を考えるのは俺も同じ事を考えてたよ。

「……そうだな。奏」

「“あの時”から変わってないね。真琴は」

皮肉か？　俺にそんな事を言うって事は？　ふん、確かに変わってねぇよ、俺は……あの時からな。お前だってそうじゃないのか？　いや、違うか。お前は大分変わったよ。

「そりゃ、死神だから若い時間は長い」

「……そりゃそうだよね」

……さて、敵の本拠地だ。足を踏み入れようじゃないか。

最後の石段を登り、鳥居を潜る。

……結界を張られたか。まぁ良い予想通りだ。

「ようこそ、嵩波神社に」

星々が輝く下に俺と奏は再び出会う。２度と会うまいと１番に思っていた彼女と。織姫と彦星が如く再会をする。

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

「そんじゃ、みんな出来たか？」
「出来たよ！　我に秘めたる強気心の欲望！」
「だぁかぁら、こえぇよ！！　レナ！！」

お、恐ろしい子。

「ねぇ、和也君？　七夕ってどんなのなの？」
「織姫と彦星ってなんなんですか？」

ああ。七夕伝説ね……文一に教えて貰って助かったぜ。間違った事なんかおしえられねぇからな。

ま、そんな事を掻い摘んでオレは七夕伝説を親身に教えてやった。

「それって……自業自得だよ」

そんな意外な事を呟いたのはレナだった。

オレはリビングでワイワイやってる中から抜け出して2階のベランダに出ていた。それで、オレを呼びにキタ来たらしいレナと、少し雑談をしていたら、レナは唐突にそう言った。コイツにしては本当に珍しい事かもしれない。いつも明るく前向きなコイツからは考えられない事だ。いや、だから……なのか？

「なんでだ？」

オレはベランダの手摺りに凭れ掛かってそう言う。レナはそのネコみたいなパッチリした目でオレを見てくる。どうやらコイツはオレと同じ意見らしい。そうして、レナは、はにかんで答える。

「自分の仕事をしなかったから悪いんだもん。確かに恋って目の前の事を忘れられるよ、辛いことも悲しいことも。だって、大好きな人の傍にいるだけで楽しくて幸せだから。でも、だからって仕事をしないってのはおかしいもん」

「そだな…」

レナはオレから目を反らして空を見上げる。わし座の1等星アルタイル（牽牛星）こと、彦星と、こと座の1等星ベガ（織女星）こと、織姫を隔てて数多多くの星々が天の川を描き遮っている。それは幻想的で、神秘的で……だけれども、どこかに悲しさがある。

「でも……和也？」

「ん？」

レナは空を見上げながら呟く。

「織姫は本当に好きなのかな？」

「？　どうしてだ？」

好きで好きで仕方がなかったから織姫は仕事を忘れてしまうほど彦星の事が好きだったんだ、なのになんでだろうか？　おかしくなったのか？

「私が織姫だったら、邪魔をする川なんか無視して彼に会いに行く。如何し様もないほど、彼の事が好きなんだから……障害を通り抜けて会いに行く」

……。そういえばそうだ。自分の仕事を忘れてしまうほどに彦星の事が好きだったのだ、オレが織姫だとしても、彦星に会いたいから、邪魔な川を無理やりに渡って彦星の元へ行く。

親だろぉがなんだろぉが無視をする。彦星が好きなのだから。

その時、オレはある話しを思い出した。

「知ってるか？　レナ？」

「ん？」

「2人が裂かれてる本当の理由（ワケ）」

レナは不思議そうな顔でオレを見る。

「実はな……ヒッキー（彦星）が街の女に浮気をしたのが、天帝にバレて2人は離れ離れにしたんだよ、だが、おりりん（織姫）がどぉしても、ヒッキーの事が好きで好きで止まなかった。それを見かねた『娘命』な天帝が7月7日の晩に会うことを許可したんだ。だけど、また裏切られる事が怖い織姫はなかなか面と向って会いに行けないんだよ。つまり、本当は喧嘩別れなんだよ」

「アハハハ♪　なにそれ？」

「ああ、全くだ」

親父はまさかココまで考えてたのか？　ま、そんなワケはねぇか。

でも、あながち間違いじゃねぇのかもな。

「おせぇぞ！　和也」

「わりぃわりぃ」

下に行くとダレも居なかったので外に出ると案の定。それぞれ、楽しんでるようだった……約一名以外は……。

「ううぅ～」

「ちょっと、ベランダに居ただけだから！　そうやって泣くなって」

そう。ヤケに淋しがり屋になってしまった柴原魅夜である。最近やたらとメールが来る。昨日なんて６５件も来やがった。ちょっとメールが怖くてしかたがない。

他の奴も他の奴で変な事を言うし……まったくだ。

「ったく、人を買出しに行かせやがって」

「じゃんけんで負けたのはお前だろ？」

律儀に待たなくても良いのに。

縁側に置かれたレジ袋から花火を出す。如月が「花火やりてぇな」って言い出したのが理由で、ウチにねぇから、ダレか買いに行けと、なったからじゃんけんで決めたら、いいだしっぺである如月が負けて買いに行かせたのだ。ふふふ、オレの反射神経をなめるなよ。あのままだったらあいこだったんだがな……（ニヤリ）

「んじゃ、始めますか」

『おぅ！』

全員の顔をみてオレは少し微笑む。オレがベランダに行ったのにはちょっと理由があるんだが……たまたま見ちゃったんだよね。

ベランダに飾ったお前等の短冊♪　やれやれ……。

みんな似たり寄ったりな事を書きやがって……。

ああ、大丈夫だよ……変わらないさ、この日常は……。オレが守るから、この日常を絶対に守るから、だから、安心してろ。自分が1回壊してしまったこの日常を……オレが必ず守るから。

「ほら、和也」

「ん？　あぁ」

レナが差し出した花火を手に取り如月が持ってオレはみんなの元へ、レナと歩み出す。

この日常を必ず守ると決意して。ああ、守ってやるよ、お前等の野望をな♪

とにかく今は……楽しめればそれでいいんだ。

【１０６話】星に野望を？（後書き）

部活がぁぁ――。

【１０７話】宿題風景？　ｉｎ夏（前書き）

……明日……中体連です。明日泣きを見るか？　それとも、笑いが出るか？　それは、僕にもわかりません。相手は強豪校で、毎年ベスト４のバスケ部です。ウチはせいぜい１６がやっとの部活です。

多分、終るかもしれません。悔いは必ず残ります。だって…３年間、汗水流して頑張って来たんですから。

正直、結果は後でいいんです。結果ってのは自分達の後を着いて来るものだから、負けて立ち止まって、やっとその結果に逢える。それが、早いか遅いかだけでしかありません。だから、我武者羅に走って、いつか、結果に出くわすだけでいいんです。

結果を求めるのではなくて、我武者羅に突き進んで結果と出くわすのを遅くする。

それが、僕がやる事です。いえ、僕等がやる事でしかありません。目標は頂点等の結果ではなくて、１つでも多くの勝利を求めて、我武者羅に駆けりながら、僕等のゲームが始まります。

さて、僕が言う事は１つしかありません。

「暴れて来るぞッ！！」

僕等の戦場（コート）で。

１つでも多くの勝利を手にする為に。

【107話】宿題風景？　in夏

暑い。蒸し暑い……。これだから、露の季節は嫌いなんだ。雨が止まないから洗濯物が乾かないし、溜まるし……。風が入らないから酷いもんだ。扇風機を回しても風が生温いので却下。

そうして、目の前には冷えた麦茶。それを飲んでしまったら、私は麦茶から逃れられないだろう。虜になってしまう。だから、それは、これが終った時の自分へのご褒美なのだ。

そう思いながら、ペンを進める。あとは、コレが終ると天国なのだ。だから……がんばれ私！

「めい～。アイスないのぉ～」

向いの机に伏せてる美樹が私に問い掛ける。私は「ない」の二つ返事切り捨てて。宿題に集中する。残りは苦手分野の世界史だ。ここさえなんとかすれば、宿題は終る。

この外に出られない期間を少し過すだけで、後は天国に等しい日常だ。

「別にウチはエスカレータなんだから、んなに、勉強せんでも」

「これは、宿題だからよ」

ウチの高校はたしかに、高校と大学が一括されてる。その分、大学には楽に行ける。

だが、それと宿題とは関係ない。そもそも大学に行く人はそんな

に居ない。聖涼はバイトが禁止されているから、稼ぎがなく、自立する者が多いからだ。

今の不景気な時代、大学に行くのは裕福な家庭ばかりだ。

例えば、有名なのが世界を股にかける超一流不動産、五十嵐不動の現社長の五十嵐遊馬。弟さんは違う大学に行ったけど、これまた世界一流のピアニスト、八神悠一などが、卒業生である。因みに、弟さんは現在消息を絶っているようだ。

私は決して裕福ではない。何時の間にか“あの子達”に借金の事を帳消しにされても、バイトができない分ギリギリの生活を強い遣られてる。リアルに毎月がギリギリなのだ……。

「その、冷えた麦茶、いっただきぃ～♪」

美樹が私のコップへと振れる。その瞬間に美樹の手にシャーペンが突き刺さる。

「みぎゃあああぁぁぁぁぁぁ――――」

美樹の断末魔が私の家に響いた。

さて、ささっと終らせよう……。

「……」

つくづく思う、１人暮らしは不便だ。特に淋しいというのはない。なにより、俺の後ろにはコイツがいる。人には見えないだろうが……ま、守護霊みたいなものだ。

あまり外では喋らない。だって、怪しい人じゃねぇか……。

俺が不便に思うのは、やはり……こういう宿題とかだ。１人でやるというのは虚しいものだ、わからない問いは教科書を引いてとかってやるのは虚しいものだ、やはりここは、進まなくとも友人と駄弁りながらやるってのが良い。

ケータイを開いて、適当に操作して、なにもせずに閉じる。

（はぁ～。１人辺り８００文字って無茶だよ～。俺は１人暮らしだし～。）

『仕方ないさ。行き当りばっかな作者だからな』

「冷静に言うな。スレイ……」

っに、しても……わからん。何故、英語なんてものが……？

クソ、こんんあのが第二言語にあるのが間違いなんだ、今の石油問題だってあいつ等の爆弾が石油コンビナートに当たって爆発したのが原因じゃないか。日米安保だって実際はアイツ等にだけメリットがあるだけだろ？　日本に武力は持たせないつっても、防衛力として置いて……けっきょくはアメリカが守ってくれるより、自衛隊が戦うのはわかりきってる。それに、今はアメリカ軍兵の問題だってある。アイツ等は日本を守る気なんかないんだ！　日本はアイツ等を見限るべきなんだ！！

『見苦しいぞ……』

「うるさい！」

くそ……。日本人は日本語を使えればそれでいいんだ！！

世界史は完璧だからいいんだ……だけど、いらん知識があるからややこしいんだよ。実際はここにあいつ等が関ってだなぁ……。“端”の動きを知ってるからな。

……。“端”は何故、追撃をしなかったんだ？　和也とあの死神が動けないあの時だったら簡単に落せたはずだ。他にも、古都宮はなにかを隠してる。しかも、ＤＴやＥＤとは別物の、もっと強大なものだ。

っと！　まずは、宿題を終らせねぇと……。

『先に気がつけ』

「悪かったな」

がんばれ、俺……あと１００文字ぐらいだから。１人でここまでよくやった。

さぁて、世界史は終ったから科学かぁ……これも得意分野だ。伊達にン千年生きてねぇよ科学なんてだいたいこの目で見て生きてきたんだ。

問題は……数学と英語なんだよなぁ……。あぁ～あ、将にでも頼もうかな？

ワザと間違えてもやったんだ、それでいいだろう。

ケータイを取り出して将に電話をかける。

『却下』

でた瞬間に言いやがった。

……だって、涙がでちゃう。影薄だもん。

―Ｔｅｎｓａｉ　Ｈａｋａｓｅ―

僕視点？　無駄だよ……僕はすでに宿題を終らせたから。

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

『待ってぇぇぇえええ！！！！！　久しぶりの登場を見捨てないでぇぇえええ！！！』

？　な、なんだ？　なんか悲痛な叫びが……？

おっと、そうだそうだ……そんな事より残された宿題だ。前回のドタバタで中途半端だったから、この露の時に終らせて後は適当に過せば楽だ。そんな、オレの頭を悩ませてるのは英語である。フミｔは英語の教科担任だから、なんとかせねばならない。

特に、英語の出来ないオレがよほど好きらしい。他のクラスにはB５のプリントを２枚（表だけ）なのに、ウチのクラス（B組）には、特別に『愛』とかいって、５倍の１０枚（裏面もびっちし）である。あの野郎、オレの方を見ながら微笑んでやがった。

本来なら、放っておくけども……売られた喧嘩だッ！　買ってやるよ！！

～１０分後～

「か、和也？」

レナらしき声が聞える。

オレはゆっくり、顔を横に向けると、レナの身体が凍りついたかのように、固くなった。

「い、生きてる？」

「なんとか…」

生気のない声で返すと「重傷だ」と、呟いた。うん、重症だよ…。

わかんない。クソ、英語が第二言語にあるだけおかしいんだッ！

いいか？　今の石油問題だってあいつ等の爆弾が石油コンビナートに当たって爆発したのが原因じゃないか。日米安保だって実際はアイツ等にだけメリットがあるだけだろ？　日本に武力は持たせない、つっても、防衛力として置いて……けっきょくはアメリカが守ってくれるより、自衛隊が戦うのはわかりきってる。それに、今はアメリカ軍兵の問題だってある。アイツ等は日本を守る気なんかないんだ！　日本はアイツ等を見限るべきなんだ！！

飛『駿と、同じ事を言うなよ…』

「うわぁ！？　飛焔！」

「……よぉ、作者じゃねぇか」

飛『本当に生きてるの？　和君？』

知らねぇよ。英語なんてサッパリだ……。

飛『知恵熱？』

オレは赤ん坊じゃねぇよ……。駄目だ、言葉を発する気力もない。

「それより、和也？」

「ぁん？」

レナが冷や汗を掻きながらオレに問いかける。オレは朦朧とする意識の中でなにを言うのか集中することにする。下（プリント）なんか見たら死んじゃうもん。

「この前の笹になんか、血がついてたんだけど…？」

ああ。ミンチにして飾ったんだけど、気に食わないからってことで蹴り飛ばして天の川の一部にしてやったヤツの血か……。たしか、名前は……？　薄影コバッシー？　キョンシーの影が薄いヤツだったか？

「……イケニエ？」

「『……（汗）』」

あ、そうじゃないか……こういう時に役立つのが『知』じゃないか！

ポケットから、ケータイを取り出して将の電話にかける。暫らくしてから、将が出たのはいいんだけれども……。

『却下』

瞬殺された。

「うわぁ、リアルに泣いてる」

飛『友人に見放されたか…』

うるさい。

ちょっと、出て行ってくれないか？　ちょっと、壊れた友情の穴を直したいから……。

もう一度、将に掛け直す。先程とは違ってすぐに将はでた。

「な、なぁ、将さん？」

『なに？』

「オレ等、友達だよね」

『……うん』

なに！？　その間は！？

「ちょっと、宿題を手伝っｔ【ツーツー】かな？

……ま〝ざる〟〜〜〜〜〜〜〜〜ッッ！！」

「あり得ないところで、濁点が出たァ！」

飛『人間の言葉じゃねぇええ！！』

だって、涙が出ちゃう……男の子だもん。

「『いや、ないない』」

【１０７話】宿題風景？　ｉｎ夏（後書き）

などと、前半部分はなにやら小説風味のにしてみました。

今回は時間がない中で作ったので多少、ふにゃふにゃですが……ね。

さて、明日に備えて寝ますか。

【１０８話】闇は光の形を作る。（前書き）

勝っちゃいました。

【108話】闇は光の形を作る。

その場には5人の黒いマントを羽織り容姿などは隠れて見えない怪しい連中が寛いでいた。それぞれ、ソファーに座るなり、水槽の中の“奇妙な生物”にエサを与えている者もいる。

雨宮和也と、木村廉はその5人に近づくとその内の1人が反応し、和也にも見えない速さで廉の目の前に移動していた。廉は左程、驚かずに「やぁ」等と、軽く挨拶をしてそのまも、抜けて行く。

「連れないの～」

後ろを振り返り、“彼女”は廉に告げると、やっと和也の存在にも気がつく。

和也も視線が自分に来てる事はわかっている。他の4人も和也を射抜くように睨み付けている。和也は気にも止めずに廉の後を追う。廉は目で促すが、5人の視線は和也に集中する。

やれやれ。そういう仕草をして廉は、その場にあったソファーに腰を落す。

和也はそのまま立ち惚け、5人を警戒する。

（……化け物が）

率直な感想を和也は覚える。先程の女もそうだが、ここに寄せ集められたのは皆が皆、化け物揃いだ。弱者などはいない。なにより、全員が和也より上である、けれど廉よりは遥かに格下だとも感じる。

廉は他でもない、神裂瑞穂（かみざきみずほ）に匹敵している実力の持ち主だ。それに、比べたとしたら……彼等は廉に劣っている。

だが、和也には大きな枷がある。それは、彼が閉ざされた４年の間である。彼は４年もベットの上で寝ていたのだ、身体的ものが訛っているだけで、和也が本領を発揮したら同等異常に渡り合える。この５人と。そう、１対５で、だ。寝起きである和也の意識は未だに睡眠へと誘われている。まだ、意識がハッキリとしていないのだ。

和也は大きな欠伸（あくび）をしてから、５人を睨む。殺気を込めた視線は５人を黙らせた。すると、先程の女性は和也の隣にいた。

「ふ～ん」

和也を舐め回すように見る。和也はその視線が先程の視線より気に食わなかったが、和也は反論しない。“今の自分”では、彼女に適わないからである。それを、証明するのが、先程の超高速での縮地である。“今の”和也では追えない。

女は納得したように頷く。

「キミ、雨宮流だね？」

「！」

ズバリ。と、隠れた目が無気味に輝く。

しかし、答えたのは和也ではない。

１番奥にいる、同じマントを羽織った者だった。

「雨宮和也。雨宮流の使い手で得意武器は刀。どうやら、死神と人間のハーフらしいね？　多分、母親が死神で父親が人間だ。そして、キミは……いや、キミにはもう1人のキミがいるようだね？　そして、キミは自分の中に獣を飼ってる……」

「……何者だ？」

和也の詳しい詳細を言った少年は黙った。和也は一度、少年を睨み付けてから、廉に視線を泳がせる。廉は微笑して、自分の向かいの席に手を向ける。

その行動に和也は何も言わずに、言われた通りに座り、廉を睨む。

「ははは、そう睨むなよ」

廉は軽く流す。

「アイツ等……何者だ？」

「仲間だよ」

即答。和也は押し黙る。

しかし、和也はその解答に納得出来なかった。

互いが互いの信念を持っている。その為の踏み台としか全員持っていない。

「これが…か？」

「これは、手厳しい」

廉はふざけた口調で言う。

（俺はお前が1番、信じられないんだよ。）

和也は廉が1番わからなかった。なにが目的で俺等を集めたのか？　そして、廉がなにを目的にしているのか。そして、廉が見てる野望の先には後ろの連中の目的がある。それで、こんな所に来てしまった集団。それが、ココなのだ。

（なにを、考えてるんだ？　木村廉？）

「後、5人だね？　足りないなぁ……。まぁ、良い、彼なら俺等を見つけてくれるだろう。彼の目的は俺等がいて達成できるのだから」

（彼？　ダレの事だ？）

1人に限定されている。それは、廉が必ず来ると解かってると、言う事だ。和也はやはり、廉の思考が読めなかった。廉はダレを待っているのだろうか？

「取り合えず、紹介するよ」

「いらん。お前の目的はなんだ？」

立ち上がりかけた廉が止まる。そして、先程までの優しい目ではなく。“本性”の目が見えた。獰猛で憎しみに満ちた目で和也を捕らえる。

和也は自分でも気がつかない内に震え出す。

「僕の目的？　簡単だよ、神を殺す事だ」

その冷ややかな言葉には決意に満ちていた。

『神を殺す。』和也はその言葉の意味はわかった。

“端”の3大組織の頂点（トップ）の組織。『十二神（トウウェルブ・ゴッド）』を潰すという事だと悟るが、その先がわからなかった。あいつ等を潰してどうなるのか？　しかし、言える事は1つだけあった。

（コイツ……異常だ。）

「ふ、いいかな？　雨宮和也」

いつもの声音に戻る。しかし、和也は反応しない。

［Ｌｕｃｉｆｅｒ結成だ」

―Ｄｙｓ・ｈｏｒｋｃ―

「なぁ？　ハク？」

パイプ椅子に座り、ディス・ホークは、手もとのペンチを弄りながら。後ろで忙(せわ)しく作業をするハク・エルフィンに話しかける。ハクは作業しながらもディスの言葉に耳を貸す。

「俺等……なんでこんな所にいるんだろうな」

「ディス……」

ハクは手を止めてディスに視線を移す。

ディスはハクの視線を気に止めずに続ける。

「わかってる。今でも目を瞑れば思い出せる。けど……なんでココまで来ちまったのかな？」

ディスの独り言にハクは何も言わなかった、否。言えなかったのだ。ハクもディスと同じだからである。同じ境遇で同じ時間を生きた。だから、こそ……ハクは言えなかった。

ディスの苦しみは、ハクがなにより知っていたから。

「ミナ……今の俺を見てなんて……言うかな？」

「ディス！　それは言わない約束だよ！」

ハクは拳を握り締めてディスを怒鳴りつける。ディスは「悪い」とだけ呟き、椅子から立ち上がる。ディスはペンチを握り締めて、ハクと向かい合う。

刹那――

ズコーンッ！！

と、大きな音を奏でて、次ぎの瞬間にディスが倒れる。ハクは静かに紅く塗装されたペンチを見て、大きな溜息を吐く。ハクは紅く塗装されたペンチを手に取り、持ち主を見る。

「ミレア、いくらディスが丈夫さだけが取り柄だからって…」
「いいのよ。ディスが悪いんだから」

ミレアと呼ばれた女性はハクが投げ渡したペンチを受け取り紅いジャケットのホルダーに収めた。ボーイッシュな顔立ちに童顔だが強気の目をもつ少女がハクの隣に立つ。すると、ディスは震えてながら立ち上がろうとする。

「ミレアァァァアアアッッ！！　てんめぇ！！！」
「五月蝿い」

今度はスパナでディスを殴る。

ハクは数歩、後ろに下がってこの2人を傍観する。ハクはいつもこうである。この2人のやり取りを眺めてるだけ。この2人のやりとりは意外と好きなのだ。

「って！　血がァァ！　血がでたァァ！！」
「あら、ご臨終です」
「死んでねぇから！　生きてるから！！」
「ちぃ」
「なんだよ！？　その舌打ちは！？」
「能無しのディスじゃわかんないわよ」

「黙れ。鬼畜外道」
「最高のホメ言葉ね」
「ドSゥゥゥウウ！！！」

このやり取りが、“彼等”の唯一の救いだった。でも、足りないものを全員が感じてる。1人の少女が暫らくして3人に襲いかかってくる。特にディスには……。

目の前で愛しい少女を失ったディスはなによりも喪失感に討たれる。

「騒がしいぞ」

3人はいつの間にか格納庫に降り立っていた1人の女性に気が付く。

「東雲大佐ッ！？」
「大佐等付けないでいい。それより、作業は順調なのか？」

東雲はディスに告げると、ハクを見てから聞く。ハクは後ろの白銀と藍色の機体を見せてから自信満々に答える。

「完璧ですよ。零式も、アルテイルも」

30m程の巨兵が完成された。

2機の相剋魔装神機（ヴァルト・ゲイル）が産まれた瞬間であった。

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

夏休みが終る。長いようで短かったような……いろんな事があった夏休みだった。ＢＡＫＡＮＳＵに行って、死神に会って自分を知って……逃げて。それから……本当にいろんな事があった。そんなオレは現在は洗濯物を干してる訳だが……。何よりも、困っていることがある。

髪が邪魔だ。

そう、ここ４ヶ月近く髪を放っておいたからだ。伸びて仕方がない。

自分で切る手もあるけれど問題がある。掃除がめんどい……。さぁて、どうしたものか。

さすがに、ココまで伸びたら切らないワケにはいかない。仕方ない……。

“アイツ”の所に行くか……。アソコなら安いし。

だけど、1人ってのはなぁ……？

「どうしたの？　和也？」

「ん？」

話しかけて来たのは、魔界から帰って来たレナだ。なにやら、夏季講習でテストがあったらしく魔界メンバー（零亞と妖精を抜かす）は今日、魔界に行っていた筈だ。アイツ等の事だからゆっくりしてくるだろうと思ってたんだがな……。

零亞は相も変わらずに麗&霞のコンビに拉致られてった。妖精はいまでも、オレの髪の中にいる。ってか、コイツを追い出す為だ。

「あ、ただいま。それより、自分の髪なんか触って……ナルシスト？」

「だぁれが、ナルシストだ」

「ラーメン、つけめん？」

「オレ、イケメンッ！　――って！　なにをやらせるか！！」

こういう場面はノリツッコミが王道っと。

「で、なにしてたの？」

「洗濯物を干してる」

「そだね……」

普通に流しやがった。ツッコミが欲しかったぞ。オレ……。

「って！　違ぅう！　髪を触ってなにしたのって聞いてるの！」

ツッコミ遅ッ！　なに？　ノリなの？　ノリツッコミ！？

だとしたら、負けましたってオレは言うよ！　ノリツッコミって意外と難しいから！

「い、いや……。髪が伸びたから切ろうかと……」

「へ～。駿みたいに？」

ダレがするか。

悲惨だぞ……あの髪は（１６話参照）

「しゃあない。オレ、１人で行って来るわ。ヴァン君達にも言ってってくれ」

「う、うん……」

？　なに動揺してんだ？　まぁいい……さっさと切ってくるか。

「……やっぱ、変わらないモノはないんだよね？」

レナはそう……静かに呟いた。

【１０８話】闇は光の形を作る。（後書き）

女子も勝っちゃいました……。

【１０９話ＲＡ】なんだかかんだか気が合う。（前書き）

終りました。はい、これで僕の戦いは終りです。清々しく負けました……。そりゃ、あんだけ大差つけられたら……これは悔いは残りません。そりゃ、残ってますけれども僅差でないだけマシです。

力の差がハッキリとわかる試合でした。試合の展開もリバウンド、オフェンスもディフェンス……流石は強豪校ですよ。見ていてタメになりましたよ。

さぁて、部活も終ったことだし。受験だ受験！

学生の本業ですからねぇ♪　それに戻るだけです。

勿論、小説もしっかりしますよ？　後ろは見ないタチなんで。

【１０９話ＲＡ】なんだかかんだか気が合う。

さて、オレは１軒の美容院の前で立っているんだが……オレの目の前にはもう１つのものがある。それは、オレを堕落させるのに十分だった。

そう、【定休日】と、書かれた看板があるのだ。

そうだった……毎月月末は定休日だったんだよなぁ～。

オレがいるのは、Ｄｙｌｒｚｅ（ディラーゼ）という、知人が経営してる美容院だ。勿論の事ながらこんな単語はみた事ない（あるかも知れないが）。これにはいろいろと理由（ワケ）があるんだけれども……話すと長くなるのでやめよう。

しゃぁない。明日でも来るか。

「あれ？　和也君じゃん」

背後から声が聞えたので振り帰ると。相変わらず何も変わってない女性が自宅の玄関から姿を表した。相変わらずの美女である……捻じ曲がった性格さえなければ。

「志穂さん？　どしたんですか？」

「んや、買出しから帰って来たのよ」

覚えてる人はいるかな？　彼女は吉村志穂さんで、ここらで腕の発つ美容師だ。栗色のショートが似合っていて背は１７０前後のＣカップ。なにより、元、許嫁である女性だ。親同士が勝手に決めて

有耶無耶になったんだがな。

少し、髪が伸びたか？

「髪、伸ばしたのか？」

「ぁ、うん。気がついたんだ」

「どう？」と、聞いて来たので率直に「ああ」と肯定する。

よくよく見たら肩越しまで髪は伸びていて、愛嬌のある顔が隠れないようにと、前髪は少し短い髪は志保さんには似合っていた。なにより、美琴（みこと）さんに、似て来たんじゃねぇのか？

美琴さんは、志穂さんの母であるいみ、オレの母でもある。親が忙しいオレと魅夜はよく美琴さんに連れられて晩飯をご馳走になったりしてた。オレが料理を教わったのが美琴さんでオレの（料理の）師匠でもある。中2の時まで美琴さんには世話になっていた。

「なにしに来たの？　店（ウチ）の前で？」

「いや、髪が伸びて来たから切ってもらおうかと…」

「だけど、定休日だった」

オレは項垂れて黙る。本当の事だからしかたがない。

志穂さんは笑い。オレは足早に退散しようとする。

「いいわよ」

「は？」

返ってきたのは意外な台詞だった。頬を抓って見る……もの凄く

痛かった。

つーことは……夢じゃなにだとッ！？　あの、鬼畜外道な志穂さんが！？　なに、槍でも降るってのか？　グングニルやゲイ・ボルグが落ちるのか！？

グングニル…百発百中の投げ槍。

ゲイ・ボルグ…必ず心臓にささる槍。

危なッ！

何を降らさせようとしてんだ！？　この女子は！　人類死滅だぞ！！

「な、なに身構えてるのよ？　髪を誉めてくれたお礼よ」

「な、なんだ。地球を破滅させるかと思った」

「どーやってよ！」

いや、槍を降らせて？

こ、困った。

俺は今、冷や汗を流している。手には鮭おにぎり片手にレジのスキャナーを持っている。お客様の会計をしてるワケなんだが……問題は相手だ。

知っての通り、聖涼はバイト禁止で俺は許可も取らずにバイトしている。不良というレッテルが先生を中々頷かせてくれないのだ。不良という事が喧嘩に繋がる者も多い。まぁ、フミｔは俺を信用してくれてるが頷かない者も多いからだ。校長と教頭はアホだから必ず許可を出すから、教職員で審査をしてから校長に聞くのが暗黙のルールである。

それでも、俺は……バイトをしている。一人暮らしだから食費を稼ぐためだ。

そんな中、いつも通りに隣町のコンビニで働いてると……見知った人物に会った。そそくさと、目的の物（カロリーメイト。ソイジョイ。おにぎり各種）を買い物篭にいれて持って来た女性は、話が聖涼高校１学年Ｂ組の学級長であるメガネチビ……おっほん。クラスで１番小さいメガネッ娘の桧山桐（ひやまきり）である。

「ひ、桧山？」

「……お会計お願いします」

桧山は無機質にそう言う。俺はそそくさとスキャナーを通す。

「えっと、２５０８円です」

ってか、買い過ぎだろぉが。いくら、健康にいいつっても……通りで背が小さいワケだ。いつもこんな食事なのか？　コイツは？

「桧山はなんでココに来てたんだ？」

俺が疑問を薙ぎかけると睨んで来た。やべぇ？　地雷でも踏んだのか？

そう思うと、袋からカロリーメイトを取り出すと。「コレ」と呟いた。

「あ、フルーツ味か？　それが無かったから、わざわざ隣町の方に？」

俺もカロリーメイトはフルーツだ。さぁて、ここなら来ないだろぉと思ってたけど潮時か？　そろそろ変えなければな……っと思ってたんだよ。

俺の質問に桧山はコクリ。と頷いて財布の中から金を取り出す。

まずは、２０００円札を……って！　まだあったんだ！！

め、珍しい……。

１００円札を１枚に１００円玉４個を取り出す。てか、１００円札って……たしかにまだ使えるけど使えるんだけど……。ってか、

珍しい物持ってるなぁ……。それから、５円玉と１円玉を２枚取り出すが……財布を閉じる。そこから、ポケットを漁る。どうしても１円が出てこない。

桧山は袋からソイジョイを取り出してそのまま、あった棚に戻そうとする。

「……」

「？」

俺は何故か桧山の手を掴んだ。桧山から軽蔑の視線があるものの、俺は桧山が出した金を渡すと、これまた何故か自分の財布の中から３０００円を取り出してレジに入れる。

「ほれ」

俺はそのまま、桧山に袋を渡す。

「いいのに…」

「馬鹿野郎。悪いのは国だ。レジ袋如きで１円もとるからな」

なにを言ってるんだ？　俺らしくない……？

「ありがと…」

「どーいたまして」

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

軽快なリズムで髪を切られて行く。そのリズムは一定していて無駄が無いのもわかる。志穂さんはやはり上手い。

ううぅ……。眠い……リズムが一定してるからスゲーねみぃ。

「和也君？」

「ぁん？」

突然話しかけたので、眠気眼（ねむけまなこ）に反応する。

「ケジメはついたんだ」

「？」

何を言ってるんだ？

「自分の事に決着はついたみたいね」

「ッ！！」

オレは勢い良く振り返る。志穂さんはハサミを片手で遊ぶ。

志穂さんはオレの顔をみて微笑する。

「気がつかないと思った？　恋する乙女はなんでもお見通しなんだぞぉ？」

「ど－して？」

気が付いたんだ？　オレの周りに気がついてる人間は微々たる者なハズだ。ってか、何故に如月達は知ってたんだよ？　あいつ等に言った記憶なんかねぇし……ってことは、ヤツも気がついてたつーことか？　それで、滅多に会う事のない志穂さんにまで気がつかれて……オレってわかりやすいの？

「キミとアイツは違うよ。アイツは彼女に一筋だけど、キミは全員が大切だから」

「な、なにを言うか！」

だけど――やっぱり。なんだ……いつもそうだったんだ、コイツはオレの求めてる答えをいつも持っていた。だから、いつも本音でぶつかり合える。だから……コイツは気がついてたんだ。オレが俺ではないと……。

「恥ずかしがるなよぉ～。性少年」

「“せい”の字がちげぇよ！！」

「だから、童貞なのよ」

「悪かったな！！」

どうせ、童貞ですよ！！　いいじゃないか！！　最近の若者は中学生でもヤるんだから……作者の友人も一足早く行っちまったしな！　別に高校1年でもいいじゃないか！　チェリーですよチェリー。

「いいのよ、私もだから♪」
「うわぁ！　人のことといえねぇ！！」
「私のが悪いよ！もう、１９になるんだもん」
「おお。安心した」
「せめて、同情してよ……」

笑いあう。互いの私情でもコイツとなら自然と笑いになってる。
ある意味、親友かもしれない。

「同情？　ハァン、オレに求めるっ一の？　バカじゃね？」
「そりゃそうね。私がバカみたい。人間のクズの更に下にいる人間だもの」
「なぁにぉう！」

こうやって、喧嘩になる。

な、何故だ？　わ、わからん……。

今の俺というのは自転車に乗ってるわけなんだが……いつもと違うのは……後ろである。柔らかい２つの感触が……って、違う違う。俺の後ろに桧山が乗ってるという事だ。

バイト先から総部葎市（そうぶりつ）まではだいたい、２０ｋｍほどある。なにやら、話しを進める限りは桧山は歩いて来たらしく、俺が仕方なく。そうだ！　仕方なくなんだ！　俺がコイツの家に送ってく事になったんだ！

『何を力説してる？』

五月蝿いぞスレイ！

萌えないからな！　俺はそういう人種じゃないからな！！　こんな事で萌えるか！！

※駿の人格は崩壊してます。

「こっちであってるんだよな？」

「うん」

えっと……カラオケ屋の角を曲がって……信号を２つ過ぎたら右に渡る。向いにａｕショップがあるマンションっと。

……マジで？

「ありがと…」

「ん？　あ、あぁ」

待てよ。最新設備の超高級マンションだと？　俺の住んでるマンションとはエライ違いだ。俺のは月3万のボロマンションと違って……たしか、月に１８０万だぞ？

そ、そのお嬢様がカロリーメイト？　ソイジョイ？　コンビニのおにぎり！？

「……私がお金持ちじゃない。お父さんがＩＴ業者の社長なの」

「そうか。で、お前はなんて言って欲しいんだ？　お嬢様とでも言って欲しいってか？　そうじゃねぇだろぅが。お前はただ俺の質問に答えてくれただけだろ？　ンなのわかってるよ。つーか、俺が『お嬢様！』とでも、言う人間に見えるのか？　だとしたら、悪いな。俺は誠実でもなんでもない。俺はただの不良（ワル）だ」

「……そう」

可愛くねェヤツ……。もう少し反応があってもいいんじゃね？

やれやれ……。最近の若者は……。

『最近のではないだろぅ』

「うるへぇ」

【１０９話ＲＡ】なんだかかんだか気が合う。（後書き）

因みに、３０点以上の大差です。

【１０９話ＲＢ】その時の彼女達は。（前書き）

つかれた……。

やっと完成した……一昨日更新できたにも関らず消してやり直した僕を責めてください。

納得出来なかったんですよ……。

では、桧山＆志穂視点でどうぞ。

【１０９話ＲＢ】その時の彼女達は。

私の目の前には苦手な人がいる。如月駿である。

クラスで１番に背が高くて、１番に小さい私とは真逆の人間である。彼は常にクラスの笑いの中心にいる。誰とでも打ち解けて誰にでも優しい人だ。私も彼には雑用等、いろいろ助けられてる……私をまるで子供扱いしてるみたいで嫌いな人だ。

そんな嫌いな彼が私の目の前で冷や汗を掻きながら固まっている。理由は簡単だ、私に見つかったからに決まっている。先生方がバイトを許可した人は把握してる、風紀委員の私としては当然で彼は学校のルールを守っていない事になる。

聖涼はルールには五月蠅い学校だ。無許可のバイトがばれたら退学になる。彼はそれを恐れてるのだ。

「ひ、桧山？」

「……お会計お願いします」

固まって動かない彼に私は呼びかける。彼は少し間を開けてから手慣れた手つきで、スキャナーを通す。

全てを通し終えてから、彼は私に話しかけて来た。

「えっと、２５０８円です」

そう言うと、彼は先程にスキャナーを通した携帯食を見てから。

『買いすぎだろぉ』という表情を表す。彼は顔を見ると思ってる事

が顔に出るタイプの人間だ。だからわかりやすい。しかし…カロリーメイトにソイジョイ、おにぎり等を買う15歳は珍しいのか？いいではないか。料理が出来ないんだから……。

そんな事を考えてると彼から話し掛けてきた。

「桧山はなんでココに来てたんだ？」

本当は来ちゃだめ？　と、でも言いたいが。彼にも彼の事情がある。最寄りのコンビニではなく遠くのコンビニに来るのは流石に予想外だろう。総部葎市からけっこう離れているから当然だろう。そうしたら知人にあまり出くわさないから、彼はここでのバイトを選んだ。

私は雨宮君と席が近いので彼の私情をいろいろ聞いている。彼はダレもが知る“参魔神”の1人でこの地区では指折りの不良である。不良は当然の事だが評判は悪い。授業はフケるし、寝てる。と、なれば真面目にバイトをするのか定かではないから、頷かないのだ。

話しがずれた……。戻そう。

私は彼が積めた中から、私がここまで来た原因を出す。

「あ、フルーツ味か？　それが無かったから、わざわざ隣町の方に？」

そう。カロリーメイトのフルーツ味である。私は特にコレが好きだからである。最寄りのコンビニに行ったものの、生憎、売り切れであった。そこから、いろいろコンビニを回ってココに来てやっと逢えた。如月駿というおまけ付きで。

私は彼の解答にコクリ。と、頷き。財布の中からお金を出す。

しかし、財布やポケットの中を探ってもどうしても、１円が足りなかった。

最悪だ――

袋から適当に物をとって、あた場所に戻そう。そうした時だった……。

彼…、如月駿が私の腕を掴んだ。最初は私もビックリした、しかし、なにより彼が驚いてるみたいであった。たしかに、彼らしくない行動であったのは認める。彼の場合は１円ぐらい見逃しただろう。けども、彼は私の腕を掴んだ。

その奇怪な行動に私は彼の顔を覗き見る。こう近くにいると、見上げて見ないといけないから大変である。産まれつき目つきが悪いから睨んでるように見えるだろうか？

しかし、そんな事はどうでもいい。

彼は私の出したお金を掴み私の手に置いて自分の財布から３００円をだしてレジにいれた。そうして、私にレジ袋っを渡す。

「ほれ」

渡されたレジ袋を無理矢理掴まされる。

「いいのに…」

これをやめれば済む話しなのだ。だから、彼に払ってもらわなくても良い。

けど。彼は私の反応をお見通しという風に返してくる。

「馬鹿野郎。悪いのは国だ。レジ袋如きで1円もとるからな」

彼はコンビニで見せている無機質で機械的な笑顔ではなく、いつも雨宮君達に見せている、“彼の笑顔”であった。それが、何故だか……私の心臓を高鳴らせた。

？　わからない……。なに？　コレ？

「ありがと…」

私は自然と呟いていた。何時もなら如何切り返したのかわからなくなっていた。

「どーいたまして」

彼はもう一度、“彼の笑顔”を私に見せる。

―Ｓｈｉｈｏ　Ｙｏｓｈｉｍｕｒａ―

疲れた……。

今日は帰ってゆっくり寝たい……。

今日は恕瀬腐のバーゲンセールで戦争に駆り出たのはよいものの成果は０で仕方ないから隣町まで買い物に行ったのだ。久しく動いたので果し無く疲れた……。

そんな私の目の前には、げんなりとしている男が１人。少し長身で乱雑な髪をしたこの男性には見覚えがある。

黙っておけば超イケメン（？）の雨宮和也である。どうやら、髪が伸びて来たので切ってもらいに来たものの店が定休日だったとお見受けした。

「あれ？　和也君じゃん」

私がそういうと、彼は振り返ってくる。私は店の向い側にある自宅のドアノブに手を掛けている。声を掛けずに入ろうかと迷ったものの、意を決して話しかけた。

「志穂さん？　どうしたんですか？」

彼は私の買い物袋を1回見てから聞いて来る。近くには怨瀬腐があるのに、隣町のスーパーの袋を持っているのかだろう。

「んや、買出しから帰って来たのよ」

怨瀬腐で負けたなんて言ったら笑われる。

私がそう思案してると彼はまじまじと私の顔を見てくる。彼の視線に気が付いた私は自分でもハッキリわかるぐらい紅くなる。

な、なに…？

「髪、伸ばしたのか？」

できたら整えたと、言って欲しいんだが……彼にはそこまで期待できないか……。確かに私は髪の毛を伸ばしている。私だって年頃だ、髪とかにも気を配る。

「ぁ、うん。気がついたんだ」

この最低男が…。

「どう？」と聞いてみたら彼は素直（？）に「ああ」と、肯定してくれた。

この髪型には少し自信があった、これは私のお母さんがよく私の髪を切ってくれた時によくお揃いにしてくれた髪型を自分でやってみたものだ。私もこの髪型は私自身も落ち着けるし、なにより可愛いという自信もある。なにより、母さんが近くにいる感じがするんだ。

「なにしに来たの？　店（ウチ）の前で？」

いや。見たらわかるんだけどね。

「いや、髪が伸びたから切ってもらおうかと…」

「だけど、定休日だった」

お見通しよ。私がそう思ってる中で彼は項垂れる。いいように手玉にとられていい気味。

私はその光景に笑い。和也君は足早に退散しようとする。

だけど…。

「いいわよ」

「は？」

暫らく沈黙が包まれた。彼は自分の頬を思いっきり抓んで見る。涙目になった彼は次ぎは顔が青褪める。

なんじゃそりゃ？

彼は1回空を見上げてから身構えたのだ、何かを警戒するように。おかしいだろ？

冷や汗がダラダラだ。

「な、なに身構えてるのよ？　髪を誉めてくれたお礼よ」

一応……。念の為に訂正しておく。

次ぎに彼が言った言葉に私は仰天することになる。

「な、なんだ。地球を破滅させるかと思った」

「どーやってよ！」

―Ｋｉｒｉ　Ｈｉｙａｍａ―

かれこれ、２０分である。私はコンビニの外で待たされて２０分だ。

彼の勤務時間もそろそろ終るから待ってろ、彼にそう言われたから待ってるワケだが……２０分である。おかしな連中が声を掛けて来たが彼が姿を見せたらそうそうと退散した。

流石は不良の間では顔が広いだけの事だけはある。

２０分である……彼と話さないで？　違う…ッ！　彼に待たされてるんだ。

「悪いな、結構待っただろう？」

そう思案していると、彼が制服ではなく普段着で彼が裏口から出て来た。

「２２分…」

「うっ……わりぃ」

私がそう言うと彼はバツの悪そうな顔で無理矢理微笑む。自転車の鍵を取り出して、ロックを外して私の目の前まで持って来る。

「ほれ」

私は彼に促されるがままに自転車の後部にのる。法律違反だよね…？

ま、彼には法律は関係ないんだろうけど……。

彼は１回地面を蹴り飛ばして自転車にスピードをつけて２人乗りでのバランスを整える。この人……馴れてる。２人乗りにも関らず不安な感じはなかった。１人で乗ってるみたいな安心感がある。何故だかは……わからないけど。

いや、彼と居ると安心出来る？　そんなワケはない。

私は１人で生きてきた、幾ら過保護を受けようがほぼ毎日のよう

に1人で暮らしている。だから、私は1人でも十分に生きていけるんだ。だから……他人の安らぎなんかはいらない。

求めたら駄目なんだ……。

“また、裏切られる”から……。

人なんか信じちゃいけない。自分しか信じられない。私は私だけで十分だ。

「なぁ？」

「？」

背中越しに彼が話しかける。私は何も言わずに彼の方を向いて首を傾げる。

「お前って学校でも笑わないけど……楽しくねぇのか？」

返すなら「楽しくない」である。だけれども、私はわからなかった。当たり前のように学校に来ていて当たり前のように勉強する。本当に楽しくないなら来ていなかったんじゃないのか？　楽しいの？　学校が？　わからない……。

「……」

「わかんねぇのか？　わかんねぇよな……つまんねぇのに学校に来て……つまんねぇ毎日を送ってく。俺も中坊の時にそうだったんだ……だけど、和也や将に会ってなんで学校に来てたのかわかったんだよな……」

同じ…？　でも、彼は何かを知って変わった。私は……変わらない。

自分が変わってしまうのが怖い……。

「俺って……誰かに構って欲しかったんだよ。学校に来たら喧嘩出来て、センコーにも眼ぇつけられてさぁ……。ソコに居るってのが実感できたんだよ。1人だとどうしてもその感覚がなくてさ、学校に来たらなんかいろいろあンだよ……。あいつ等とつるむ前まではンなの無かったんだけど、俺は1人だと思ってた……けど、なにかしら関わり合いが欲しいからって、学校に来てたんだな」

昔の彼は……私なんだ。喧嘩はしないけど……誰かと関わり合いたいから学校に来てる？　そうかも……しれない。学校に来たらいろんな事があるのは確かだ。私は学校に居場所を感じてたの？　つまらないけど楽しい居場所として？

私は……学校（アソコ）が好きなの？

「ハハ…。おかしいだろ？　悪いな勝手に語って……ただ……なんか桧山を見てると昔の俺みたいだと思うんだよなぁ……。気を悪くしたらわりぃな」

……。私は、自分がわからなくなった。

彼と話して、まるで自分を教えてもらってるみたいだ。

私の知らない私を彼が知ってる？

わからない……彼と話してからなにもかもわかんなくなる。

「私は…『コラァー！　そこの２人乗り自転車！！　待ちなさぁぁああいッ！！』！？」

「げっ！　警察（マッポ）かよ！！」

彼が振り返るとほとんど同時に私も振り返る。ミニパトカーである。婦人警官がよく乗っている……しかも制限速度をあきらかに守ってない速さである。１００ｋｍ強は出ていると、思う。それに、あのいミニパト……側面にステッカーが貼ってある……。

無駄に眼はいいので見える。

【神速逮捕】と、貼られていた。

「しかも、韋駄天ッ！？」

韋駄天？

『ヒャハハハッ！！　見つけたぞぉぉおお、如月駿ッ！！』

壊れた口調で女性の声が響く。

知り合いだろうか？　この壊れてる人と？

『しぇ、しぇんぱいぃぃ！　わたしたちが追ってる誘拐犯はあっちでしゅひょぉお～』

『黙ってなさい！　ヤツとは１００戦０勝１００敗０分けの……』

「勝ちと引き分けいれる意味ねぇよ！！　ってか、誘拐犯を追えぇえええ！！！」

職場放棄？　ってか、勝ってないしライバル視してる意味がわからない。

ってか、本当に誘拐犯を追いなさいよ。

「桧山、振り切るぞ。捕まっておけッ！！」

彼がそういうと、私はすかさず彼の服を掴んだ。次ぎの瞬間にまるで浮き上がった感じがした。けれど、タイヤは地面を着いてる。無駄に良い眼はミニパトが“瞬時に”遠くなったのがわかった。

速い？　いや、速過ぎるんだ。

チェーンが音も無く回る。しかし、チェーンは私にも何かが迸ってるようにしか見えない。そうした瞬間に自転車が跳んだ。階段から大ジャンプである。

さすがに、怖い。

気が付かない内に私は彼を抱きつくようになっていた。

次ぎの瞬間にミニパトが宙を舞った。一足速く地面についた私達はそのまま走り抜けていく。大通りはこの時間の歩行者の数は多い。流石のあの人でも捕まえるのは至難のワザだ。その頃には通常の速度に適度に安全運転をしながら進む。

『待てぇぇえええ！！　如月駿ッ！』

『先輩〜。ボンネットから煙がぁぁあ』

壊れたな……。

「ブイ」

「……」

取り合えず、脇腹を殴った。

もの凄く怖かったんだから……。

―Ｓｈｉｈｏ　Ｙｏｓｈｉｍｕｒａ―

口喧嘩もセットも一段落して、あとは洗髪とワックスぐらいになった時に彼は口を開いた。

「……美琴さんと聡さんは何処に行ったんだ？」

私の手は止まる。それと同時に言い訳を考える。

「お父さんもお母さんも、イタリアに勉強しに行ったのよ」

苦し紛れの言い訳だ。彼の目はそれをウソだと見抜いている。なんせ、彼の情報網に掛からないのだ彼なら知りたくて当然……なんせ、彼にはお父さんやお母さんに“借り”があるから。彼は作られた借りは返す主義。

それに、この目は本気だ。

「……志穂」

「知ってるでしょ？　“アイツ等”の存在に」

「……“黄昏の夜（トワイライトナイト）”か……」

やっぱり、知ってるか……。本当に何処から情報を得てるんだか。

しかも、ＴＮ（トワイライト・ナイト）の事なんか……。あのクソ野郎……ッ！

「野田の野郎か……科学オタクがッ！」

「怒らない怒らない♪　これは、私の問題なんだから」

そう、これは私の問題だ。あの科学オタクの野郎から出来るだけ早くケリを付ける。人体実験なんて絶対させない！　私の親は私が守る。

「……無理はするなよ。力がいる時はオレが力になる」

私は「うん」とだけ答えておく。本当は彼に迷惑を掛ける気なんかない。彼の助けはいらない、此方も此方で準備は完了している。人員もいる……。

なにより、京都の方に“協力者”がいる。

「……（コイツ、危ないな……自分から滅びるタイプだぞ。）」

「はいはい、この話しは終り！　仕上がりにかかるよ」

―Ｋｉｒｉ　Ｈｉｙａｍａ―

何故だろう？　顔が熱い……。駄目だ、今日はなにやらおかしい……。

彼と別れてから5分ほどたっている。マンションの最上階まで何故か階段で来てしまった……十二階建てを恨む。何故に登り切ってから気が付く？

駄目だ、今日は本格的におかしい……。

今日はゆっくり休もう……明日は始業式だ……。

……学校、か……。

「ただいま…」

ダレもいやしないのに、私はついつい言ってしまう。

「きりぃ～～～♪」

いや。居た……。

私に抱きついてるんですけど？

この人は誰かって？　私の父、桧山劉哉（ひやまりゅうや）である……。

大手ＩＴ企業の総帥たる私の父である、因みに母親は秘書をやっている。良い匂いがする……スパイスの香りだ……カレーか？

お母さんも居る…。

「それより」

涙目で父が顔と顔に大して間がない。物凄く近いんですけど。

「さっきの赤髪の子はダレなんだい？」

「如月駿。クラスメート」

「そうじゃなくて……まさか……ッ！」

「？」

「ふふふ。如月ィィ、娘を汚した罪をおもいしれ、桐に手を出しやがってぇ」

汚した？　手を出す？

お父さんは携帯を取り出してどこかに連絡する。

「ああ。私だ……ああ、今すぐ探偵を雇ってほしぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぁ〝ぢぃぃぃぃぃ！！！」

顔にお玉を押し付けられた。カレーを先程までいじっていたのでかなり熱いだろう。当然、お父さんに掴まっていた私ができるわけがない。やったのは……。

「桐がダレと付合おうが勝手でしょうが」

お母さんである。元・レディースでココら辺一帯を統べていたという伝説を残している。

今でも不思議だ……どうやったらＩＴのエリートの社長の息子と貧乏不良女性が結婚なんてできたんだか……。

「だってぇ～」

「泣くな」

「あぎゃあああ」

「……」

騒がしい……。

今日はゆっくりしたかったのに……。

私はただ、静かに溜息を吐くだけである。

【１０９話ＲＢ】その時の彼女達は。（後書き）

駿にＬＯＶＥの予感？

基本的に桧山は好きなんですよね……。だけど、桧山は……ゴホン。

ええっと……です。

さぁて、次ぎからは学校が舞台だ……それでは！

【１１０話】再びのスクールライフ！【前編】（前書き）

更新しました……。なんか疲れた……。

明日から手直しを再開させるか……。

【１１０話】再びのスクールライフ！【前編】

「はぁ～。右手におたまを！　左手にフライパンを！　横たわりし者に正義の鉄槌を！　うなれ！　エル○ン家秘儀、死者の目覚め！」

お玉とフライパンをぶつけ合う。ってか、なんつー始まり方だよ……。

イキナリ、エル○ン家秘儀とは……。やってる方もうるせぇんだよ。

「にゃぎゃあああああ！！！！！！」

耳を塞いで起きたのは夏休みの間隔が抜けずに８時過ぎても寝ているレナである。最近は叩いても起きなくなったから、口の中に掃除機いれて吸ったり、エル○ン家秘儀やったりで、やっと起きるようになってきた……放っておけば１２時まで寝てるからな……。

ま、そんなこんなでオレはレナを起こしてる。

「起きたか？　今日から学校だぞ。早く降りて飯食えよ」

「ひゃい……」

あ、涙目じゃん。やめろって、オレのＳまで起きるから。

さぁて、レナが食い終るのを待ちますか……遅刻ギリギリだなこりゃ。つーか、置いて行ってもいいかもしれねぇけど後でが怖いからやめとこ。

「和也？　学校って？」

頭の上から声が聞える。名前はつい最近知ったんだが、フェアナ・クルベルト……ピクシーだかなんだか……。つーか、この野郎、まだ頭の上に乗りやがって。

「学び舎」

「蕨屋？」

“わらびや”ってなんだよ？　“び”と“や”しか合ってねぇよ。つーか、その間違いを仄かに聞き覚えあるオレってなに？

もう構ってらんねぇや……。

「すぅ…」

出ようとしたオレの足が止まる。フィーも何かを感じたのか？　ワナワナと震え出す。つーかオレも震えてるよ？　２度寝をするアホに対する怒りという感情に。

そうか……エル○ン家秘儀も効かなくなったかぁ……ハハ。

そうかよ……余程喰らいたいらしいな？

「左には滅、右には砕……横たわりし睡魔に憑かれた者を目覚めさせよ！　我、汝に問う。いつまで寝てるんじゃゴラァ！！！　雨宮流快眠術奥義・混沌の目覚めぇぇぇえええ！！！！！！」

描写は自主規制。ただ、殴っただけだから。うん……殺しはしないよ？　泡噴いて白目になってるけどね……。つーか、コレって１

番強いんじゃねぇの？　もしかして？

不思議だよなぁ……多分、魔槍裂破掌（グングニル・インパクト）より強いで？　やってたらわかるもん、作者だって描写できないものだし……。

さぁて、死体（レナ）を食卓に運びますか。

「ううぅ…？　朝から身体中が痛いのは何故？」

どうやら、記憶が跳んだらしい。原因はオレだし……ま、覚えてないにこした事はねぇか。つーか、今は８時１５分……こりゃ遅刻だな。

オレと零亞、セフィリアなら余裕なんだが……問題なのは寝起きのレナ、意外にも運動音痴のラミアちゃん、１番の問題がヴァンパイアである、ヴァン君だ、日光に当たっても大丈夫みたいなんだけれども、朝はスゲー貧血で昼は挙動不審になるわ……。そんなこんなで絶対に遅れる。

さてと、初日から遅刻するとはヤベーな、フミｔカンカンだぞ？

「そういえば、零亞は？」

ラミアちゃんがオレに質問してくる。いつもの登校メンバーに零亞はいない。零亞が通っている小学校は聖涼から８００ｍほどの所にあるため一緒に行って途中で別れてるんだが、今日は零亞は姿がない、原因は。あの双子ちゃんだ……。

「零亞なら、麗ちゃんと霞ちゃんに連れてかれたよ」

「？　私達は気がつかなかったけど、いつ来たんですか？」

ラミアちゃん達が起きたのは７時ごろだ、オレと零亞は６時半ごろに起きていたんだが、オレが朝食の準備をしてるとあの双子ちゃんが来たんだ……時間的にはかなり余裕があるにも関らずトーストを咥えていた零亞を連れて行ったのだ、あの双子ちゃんの家からココまでは軽く３ｋｍ程度あるんだが、息が荒い所をみると、どうやら走ってきたらしい。子供の足なら１時間半程度かかると思うが競い合い全力疾走で来て３０分ほどなのだろう……。

もてる男は辛いんだな……零亞……。

「６時半ごろに連れてかれた」

「早過ぎると思うんだけど？」

「だよな……」

オレもそう思うよ……ヴァン君。

「モテモテですね、零亞は……」

「ラミアちゃん？　その零亞はの、“は”って、深い意味はないよね？」

こめかみに血管を浮ばせながら問う。

この娘はいい子だから、深い意味はないのだろう……。

「和也はモテないって――げっぱ！！」

馬鹿には天誅を喰らわせた。失礼な事を言う奴はゆるさねぇぞゴラァ。わるかったな、所詮は不良ですよ、モテないですよ～だい。

人がちょっと気にしてる事をいいやがって……。

「頭から煙が！　ケムリがぁぁああ」

悶絶してろや。アホが……。

そんなノリでの歩きながらの登校。当然の事だがレナには登校中の記憶が無くなっていた。ってか、大丈夫なのかよ？　２回も記憶を無くして？　ま、そげな事はどうでもいいばい。

因みに今のオレは将達と始業式をフケてる。あの校長と教頭なんかに構ってられっかよ、あ～空が蒼いなぁ……。

ん？　あいつ等なら体育館に行くクラスの連中に紛れたぜ？　オ

レはそこから抜け出て第2校舎の屋上に来たんだがな……。ん？
第2校舎って？　ああ、ウチは知っての通り高校と大学の一律だ、故に校舎も結構ある。大学と大学の特別教室塔、倉庫、寮、高校に高校生が使う特別教室塔、がある。だからトータルで第4校舎まである事になる。高校の一般教室塔から第1で、特別教室塔が第2となっている。

第2校舎の屋上はオレ等の溜まり場であるからダレも近づかないからゆったりできる。

オレは屋上に設置されたベンチで横になっていて、駿はシゴトガイドを食い入るように見ている。なにやら、店長とモメてクビになったとか……。将は将で羅生門とか読んでるし……。

はぁ～。空が蒼いなぁ……。

「「「はぁ～」」」

3人同時に溜息を吐く。オレはなんとなくだけど、この2人は本当になにか合ったらしい。

将はなにやら眼がヤバいので聞かないが……如月は聞いてみようか。

「どないしてクビになったんだ？　また学校がバレたワケじゃねぇだろ？」

如月がクビになる理由は生意気なガキを殴ってか、先生にバイトがバレたかのどっちかだ。今回も先生にバレたのだろうか？　ここから1番遠い場所だからあんまりバレないだろぉがな。それに、ア

ソコは真面目なヤツが多いから喧嘩吹っかけてくるヤツもいねぇだろぉしな。

なにがあったんだ？

「カロリーメイトのフルーツだ」

「は？」

それ以上如月はなにも言わなかった。

何があったというのだ？　ワケわからん……。

なんかねぇかなぁ……つまらん。

「アマミヤァァアア！！！」

扉を蹴破り出て来たのは１６、７人程のセンパイだ。つまんねぇと思った時につまんねぇ雑魚かよ。めっちゃくだらねぇ……。面白い事ねぇかな？

「和也？　どうする？」

「僕はカズに任せるよ」

「んじゃ、１番倒した人数が少ないヤツが昼を奢るってどうよ？」

このままウゼーのは１番イヤだし……ぶちのめすか。

なんか、センパイ達がウゼーけどいいか。さぁて、何を奢ってもらおうかなぁ？

久しぶりの普通の喧嘩だ、普通に楽しみますか。

ま、結果からいえば、如月１０人の将４人でオレが３人と、苛立ってた如月と将の独壇場だった、ってか全員倒すのに掛かったのが２秒だ……相手からしたらなにがあったのかわかんねぇだろうな、第一に如月の野郎早過ぎだっつーの。

１秒で８人やってオレが如月にコレ以上やらせないと思って邪魔しながら倒してると、将にやられたという事だ……自分で言ったオレが馬鹿だった……。

つ……。将なら適度に勝たせてくれるんだがなぁ……本気になった如月ほど怖い物はねぇぞ、ってか、あのルールなら素早い如月が断然有利じゃねぇかよ、如月の本気ってマジでどうなんだ？

「終ったぞ、和也」

「ん？　そうか……んじゃ、ファミレスにでも行くか？」

「そだね。ファミレスで手を討とうか」

オレは“綺麗な”屋上を後にして教室に向う事にした。

「な、」

オレは絶句した。教室に入ってフミｔのチョーク投げを如月を盾にしたまではいい。しかし問題なのは、後ろの席である。

増えてる……。オレの席は窓側の後ろから2番目なんだが、そこには学級長とラミアちゃんが居る。オレが知ってる所では彼女達が1番後ろだった筈だ……。しかし、1番後ろの席には見なれたヤツが1人と見なれない奴が1人……2名の転校生が居るという事だ。

つーか、ンな事はどうでもいい、その転校生の1人が……。

黒髪になったが、右耳に髑髏（ドクロ）のピアス2個をつけた結構イケメンの青年だ。金髪より黒髪の方が似合ってる……いやいや、そうじゃなくて……コイツは……。

「み、宮鷹（ミヤ）!?」

「よ、フミ……いや、和也かな?」

ミヤは微笑ながら軽く手を振っていた。

なにをしてんだよ？　おいおい……？

コイツは古都宮の時にコンビを組んでいた奴で陰陽道の舞の使い手でなかなかの実力の持ち主だ、ヘタしたらオレと対等に渡り合えるかもしれない……刀さえ使えば余裕で倒せるけど鎌なら多分、同等ぐらいの実力だろぉうな。

そんな事より……。

「……」
「……」
「……」

この険悪なムードはなに！？　転校生と将、如月は知り合いですか？

ちょっと！　この３人の間にいるオレって視線がバチバチ当たってるんすけど！？
なに！？　なんの因果関係なんですか！？　痛い！　視線が痛いッ！！

「橘……」
「どうしてココに？」
「イヤだなぁ。俺の役目は“姫”を守る事ですよ」

“姫”だと？　なにを言ってるんだコイツは？　どこぞの忍者じゃ？　その前にコイツ……なんだなにかが漂ってる？　これは……？

魔力？

それも、レナに似てる……これは？

いや、でも……あり得ないだろ！！　だってこの感じは……“死神”だぞ？

オレの周りは異常なのか？　オレの存在じたいが異常だけど……

よくよく考えればオレの周囲の方がおかしいんじゃねぇのか？

待て待て……どうなんだよ？　オレの人生は？

【１１０話】再びのスクールライフ！【前編】（後書き）

イエーイ！
和也「無表情でそう言うなよ…」
レナ「イエーイ☆」
駿「テンションが高いのもいらん」
桧山「……」
将「黙るのはやめようか」
沙紀「ヤッホー！　石動沙紀！　久々の登場！！」
真琴「黙れ。ウゼーよ」
飛鳥「ってか、私ハブられてるよ」
幽霊だもの。
飛鳥「……ちょっと、嬉しい響きだけど……この世の神である貴方しか会話できないのも…」
悪かったな。
真琴「ダレと話してる？　作者？」
ん？　マコりゃんだけには言えないね。
真琴「ダレがマコりゃんだ」
和也「まぁまぁ、主人公とヒロインが総出なんだから」
レナ「やった！　やっぱ私がヒロイン♪」
桧山「……」
駿「ヒロインの座にも興味がねぇのかよ」
沙紀「わ、私がヒロインなんで――」
うん。ダレとも出来ないね☆
沙紀「ヒロインーーーーーー！！！？？？」
将「じゃ、ないね」
ＨＡＨＡＨＡ
沙紀「ヴァ、ヴァルちゃん、この最低野郎をぶちのめしますですよ！！」

ヴ『はいはい…』
沙紀「どうして呆れてるんですかぁ！？」
（（（（（（（（（どーでもいいからね）））））））））
ＨＡＨＡＨＡ創造主を舐めるなよ♪

「『憑依』」
ヴァルテニックヒートソニック。
沙紀「みぎゃあああああああ…」
将「星になったね」
和也「星になった少女だね」
駿「処女？」
「「少女だアホ」」
レナ「サイテーだよ」
飛鳥「どこが？」
真琴「？　なんかムカツク発言が聞えたよーな？」
飛鳥「？」
気のせいだよ……。うん、気のせいだ。
真琴「そ、か……？」
（あ、危なかった……ここに飛鳥ちゃんを呼んだなんて言ったら……。）
桧山「……」

【111話】再びのスクールライフ！【後編】（前書き）

憑かれた。なんかもぅ……憑かれたよ。

最近不幸が多い……何時ぞやの女子幽霊の本領発揮か？

【111話】再びのスクールライフ！【後編】

ただ……ひたすらに追いかけて。ひたすらに捜して……俺はやっとキミを見つけた。だけど、やっぱり“此方の世界”のキミは違って、“あっちの世界”の事は忘れてるだろう。けど、俺はキミを守る。たとえ“何度も世界が滅びようが”俺は必ずキミを見つけ出して守り抜く。“この力”はその為の力なんだ……“死神の力”で俺は必ずキミを守る……“ヤツ等”から……。

この命、幾らでも賭けよう。キミを守る為に、俺は剣とも盾ともなる。

―Ｓｙｕｎ　Ｋｉｓａｒａｇｉ―

ヤツを見た時に初めは目を疑った。橘悠詩、随分と前に……と、いっても僅かにある一季目の世界の記憶なんだけれども……。二度ほど“ラグナロク”で拳を交えた奴だ、君主を守る為に命を賭けて

立ち向かった……阿呆だ。君主の為なら命を捨てる……俺にはわかんねぇよ。

つーか、和也のヤツ、さっき“宮鷹”って言ったな……？　宮鷹ってまさか“あの事件”の？　いや、それを覚えてる奴はいねぇし……そういえば、古都宮に言った時に何回か見た顔だけど、名前までは知らなかったな…。

それよか……。

「どうしたんですか？　顔色が悪いですよ？」

何をしれっと言うか。俺と将が気にしてるのはそのどす黒い死神の気配だよ。そうか……“端”と同じって事か？　ヤツはもともと別の世界の人間だった。勿論、干渉できるはずのないな。そこで、ヤツは世界は滅び此方の世界に飛ばされた。境界（ジャンパー）を超えし者なのか？　だとしたら説明がつくコイツは特殊能力とかじゃない……突然変異能力（フォルテーゼ・スキル）って事か、だとしたら合点が効く。

ちぃ。コイツとまた戦うってのかよ？　死神の力を持った？

「……」

「おやおや、嫌われた者だね」

ダレもお前を好（す）き好（この）んでるワケねぇよ。特に、同じ（しにがみ）のあの2人はな。視線を反らしてラミアちゃんとレナちゃんにやる。2人共ヤツには警戒してるみたいだな。俺の視線に気が付いた橘の野郎が口を綻ばせる。

何が言いたいんだ？　この野郎？

「お前等ッ！　いい加減に座れッ！！」

睨み合ってる俺等を止めたのは、我等が担任の石川文宏（いしかわふみひろ）通称、フミｔだ。まぁ、ゴリラ＋人間かな？　つーか、教師じゃねぇよコイツ、プロレスラーになった方が断然、良いって絶対によ。ンな事はともかく、俺を残して何テメェ等だけは座ってるんだゴラァ！！！？？

俺がフミｔを見たほんの一瞬でこいつ等全員座りやがった。当然、視線が俺に集まる。

……。言っていいよな？　久しぶりに不良を解放して。

「ッテメェ等！！　何見てんだゴラァ！？」

これでも、参魔神の脚だぞ！

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

オレ等は今、走ってるワケな。アイツ等のメシ作らないで自分だけ外食するなんて言ったら殺されるからね。そんでもって、アイツ等はどうやらオレ等を追跡中だったりする。コノヤロー、ヴァン君なら簡単な料理なら出来るようになったじゃねぇかよ。

「待てぇえええ!!!　メシィィイイ!!!」

「ダレがメシじゃゴラァ!?」

オレはお前にとってメシを作るだけのヤツか!?　そういうなら帰らねぇぞ、絶対に!!!　こんまま如月の家に上がりこむぞ!?

……。いや、駄目だ。そんな事をしたら腐肉女子に覚醒したレナの妄想が酷くなる。ｔ－か、オレが居ない間に何かあったのか？　オレが居なかったのは６月からだから……。

!!!??　い、一件該当!!!

……。“アイツ”か!?

楠木ィィィ!!!　覚えてろよ!!!

「和也？　大変そうやな？」

「ミヤ、殴られたいか？」

こういう時にヘラヘラされんのは１番ムカツク。つーか、なんでテメェも居るンだよ？

「まぁまぁ…」

多少威嚇するオレを将が静止させようとする。ミヤの野郎……後で嬲ってやる。

「ンな事はともかく！　まずは撒くぞ」

多少呆れた口調で怒鳴りながら如月が言って来る。まぁ、そりゃそうなんだけどよぉ……。なんかお前に言われると余計に腹立たしいんだよね。この短髪がッ！！

髪が人並みに生えたからって威張るなよピンクマン（故）！

「生きてるわッ！！」

「ツッコミ！！　地の文を透視するな！！！」

何時の間にこんな能力を手に入れたんだ！？　てか、コイツ、ボケが出来なくなったのか？　まさかな？　そんな事になったらオレはボケに周るしかなくなるじゃないか！？　立場的に！！

「「「どんな立場！？」」」

お前等もか！！？　ねぇ！？　お前等もなの！？　つーか、ラミアちゃんの立場危うし！？　いやいや、そうじゃなくてだなぁ……。いや、もういいや……。なんか憑かれた。

「「「何に！？」」」

「やっぱりかぁ！？　読めるんだろお前等！！」

今回限りの能力か！？　作者はオレを落し入れる気か！？　ここ

で何時ぞやの復讐なのか!?　そうなんだろう作者!?　出てこないか!!　作者達の分身よ。

『な～のだ♪』

「出たァァァァ!!!!!」

ねぇ？　何時の間に居たの!?　何時の間にオレの頭の上に居たの!?　他の連中もビビってるんですけど!?　緑ィィイイ!!

マジで出て来たつーか、何時の間に出て来たんだよ？　特に気配に敏感な将だって口を開けたまんまだよ。

あ、侮れん……緑飛焔よ。つーか「壊れてる」って言ったんだけどよ……まさか、言語だけじゃなくて能力でも言ってないか？　まぁ……良いや。

「おい、和也…」
「ンだよ、如月？」
「追いつかれたよ」
「はッ？」
「あの、死神に」
「……え？」

「アハハハハ。私から逃げる？　無理無理!!　さぁて、私のメシ……じゃない、シェフを返して『那埜打(なのだ)』げらっぱァァ…」

……。はいはい、説明説明……。

えっと、いつの間にかオレの前に出て来た凶悪腹ペコ死神を緑飛

焔が殴り飛ばした。はい、終了……って、なんですとぉぉぉぉおお！？

あの状態のレナを瞬殺？　ありえん……何者だ？　いや、神（ヒエ）の分身（ン）か……。

『なのだ♪』

ん？　待てよ……。そうか、なるほど……。

この緑飛焔はラミアちゃん同様に人の心がわかるのか、それと同調して一定の範囲内の者にも自分の能力を加える事ができるんだ。その能力はドーナッツ状な為にオレには反映されなかったって事なんだろう。それで、あいつ等は読んでたんじゃなくて、聞いてたんだ、オレの心の声を？

さすが、壊れた飛焔だ。能力がスゲー。

「……さて、行くか」

「「「おぅ」」」

追っ手も消えたしゆっくり行くか。

―？？？―

目が覚めると見知らぬ空間があった。けど、このボロい部屋は見覚えがあって凄く懐かしい感じがあった。今まで俺が寝ていた場所とは……？　今まで？　俺は何処で寝ていたんだ？

それに、ベットで寝た……？　布団の感覚ならあるけど……ベットはあったか？

今までに寝ていた布団よりも良い布団なのは確かだ。しかし……何か、忘れてないか？

俺はゆっくり布団の中から出て、何時も通り歯磨きをしに洗面所に向かう。相変わらず朝は弱いそう言えば……今日は何時だったっけ？　ここまでボケるとヤバイな……アイツに笑われる。

アイツ…？　いや、なんだ？

それより、俺は何をしてるんだ？　何時もの行動なのはわかってる……だけど、なんで俺は学校の制服なんかに着替えてるんだ？歯を磨いて、顔を洗って……制服に着替える。

ッ！？　待てよ……なんかおかしいぞ？　何がおかしい？　何もおかしくないのに……なんだよ？　この感覚は？　俺は何かを忘れてるとでもいうのか？

“学校に行く”のがおかしい事だとでも？　そんなワケがない。

「お、」

そう思い扉を開けると居たのは何時ものメンバーだ。でも、何処と無く俺は違和感を感じた。何時も通りなのに……。おかしいだろ！！

「今日は早いんだね♪」

「いや、遅いって、遅刻ギリギリよ？」

「流石だな、“神堂”」

飛鳥に、奏、翔何（かける）がおかしいってんだよ。

「始業式そうそう遅刻……意外と」

「はいはい、ラノベとかでよくありますね」

「ささっと行くぞ、神堂」

そうだった……今日から、３年だったんだよな……。無駄な事は考えるな……。

取り合えず、学校に行くか。

「行こう♪　真琴」

「あ、あぁ…」

でも、なんなんだよ？　この感覚は？

この、胸を締め付けられるような感覚は？

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

「さて、カズには話しておこうと思うんだけど」

将がそう斬り返してきた。それは、オレが座って間も無くの事だった。反応したのはオレではなくて如月であった。なんだ？　オレに黙って隠し事か？　彼女でも出来たのか？　グフフフ。

いいじゃないか、男だけの恋バナでもしようじゃないか。

そう思っていたのだが、次ぎの言葉でオレの思考は一旦停止した。

「僕達の正体についてだ」

「は？」

何ヲ言ッテルンデスカ？　ってか、隣りで納得してるミヤは、なんなんだよ？　オレが知らない井塔将と如月駿って事か？　どうい

う意味なんだよ？

それから、適当に注文をとってから、再び将が話し出した。

「知ってるよね？　“端”がなんなのか？」

……。なんで、あいつ等の事から始まるんだよ？　それよか“端”がなんなのかだって？

たしか、神路蒼譜（アイツ）がなんか言ってたな……。

「違う世界の集団？」

「そう」

オレの解答に将は頷く。よかった、真面目に聞いてて……。聞いてなかったらなんとも応えられなかったぞ。た、助かった……。

「だが、それでは５０点だ」

「は？　どういう事だ、如月？」

あいつ等は異世界の集団で特殊な能力があって……。それが集まった集団なんじゃねぇのかよ？　将に如月は何を知ってるってんだ？

「端は確かに境界（ジャンパー）を超えし者だよ、だけどその前に彼等の事を端の他にもこう言ってる。“悪魔”と。端とは集団の事で僕が聞いた事は境界（ジャンパー）を超えし者であるか、否かではなくて、“端”の者達の事だ。」

「ッ！」

あ、くま？　悪魔って……。何度か渡り合った事がある、別の世

界で……？

待てよ、運命（さだめ）の空間で刈ってた悪魔という存在と悪魔。そして、端という集団の悪魔という存在……。

……。どういう事なんだ？

「それが、僕達だ」

「は？」

「だから、俺と将は一季目の世界の最初からずっと悪魔だってんだ」

「なるほどな」

待て待て。まだ、整理出来てねぇんだよ。どういう事だ？　はぁ!?

ちょっと待てよ、えっと、端つーのは悪魔の集団って事で、それで将と如月がソレっと？　しかも、一季目の世界からずっと生きてるつー事？　それが、オレの同級生？

ちょ……？　どーいう事ですか？

「勿論、僕達はそんなに歳よりでもない。れっきとした１５歳１６歳だ」

「待てよ。ずっと存在してたつー事は数万とか越えてるんじゃねぇのかよ？　人類が始まってから存在するって、どうやってお前等は存在してんだよ？　一季目の世界が滅びた時にランダムに跳ばされた連中なんだろう!?　一季目の世界が、滅びるずっと前から居たってなんなんだよ!?」

理解出来ない。なんだっていうんだ？　何がどうなってるんだよ？

クソ、さっぱりわかんねぇつーの。

「順番に応えるよ。まずは年齢についてだね。それはひぐ〇しの梨花ちゃんと似てるかな」

ダレですか？

（死と再生を繰り返してるつーことや。）

（死と再生を繰り返してる？　ま、なんとなくわかった。）

本当は理解不能なんだけどね。

「２つ目は俺等がどうして存在するか、和也、お前は勘違いしてる。世界は一季目だけじゃねぇだろうが。なら、聞くが、お前とこの居候……何処の何者だ？」

レナ達の事か？　ヤツ等は魔界の……ッ！！

「魔界…」

「いや、それ以外にもいろんな世界があるよ、僕達はそちらの世界から跳ばされたんだ。北欧神話最高神オーディンという者でね」

「俺はそれに使える愛馬スレイプニルが其方の世界で合うように人間の姿になってな」

えっと……？　将達はいわゆる……まったく別の世界から来たって事か？　な、なるほど……俺の頭の収容ギリギリだがいいだろう。

「３つ目も４つ目もそれでわかるよなぁ？」

「おう（ギリギリでな…。）」

やっべぇ。なに、オレが馬鹿みたい……。ミヤも速攻で理解してるようだし……。

……。駄目だどーしても頭を使うのは性に合わねぇ。なんでだよ？　なんでこうなんだよ？　何処からこうなったんだ？　なんでこう……難しい方に行くんだよ？

……。確かにオレの存在自体がややこしいのはわかってる。だけど……オレが居なければ俺の運命は何処で分岐してたんだ？　いったい何時？　何処で？

「カズ、難しく捉えない方がいい」

いや、十分難しいです。

「ま、ンな事はさておき……メシが来たようだから……って！！」

「げっ！？」

料理を運んで来た可愛らしい店員さんと如月が驚愕の表情を浮かべる。つーか、立つなよ如月……目立つから。座れって……。おい。

「げッ！　幾島（いくしま）ッ！？」

「駿様ッ！？」

またややこしい事かァァ……。

「幾島さん、こんにちは」

「ちぃ。アンタも一緒かよ」

扱い方違うって!!　将と如月の扱い方違うんだって!!　つーか、如月に様づけしただろ!　絶対にしただろぅが!!　オレの耳に間違いはねぇぜ!!

ちょっと、脳内で巻き戻し。

料理を運んでくる美女。如月が料理に気がつき親指を指してオレ等にハニカムそこで、如月が店員さんの顔をみて立ちあがる。

『げッ!　幾島ッ!?』

そう、次だ。

『駿様ッ!?』

ほら言った!!　如月に様付けだ!!

……なんだろう?　何故だか如月に波乱の予感?　なんかオレでもわかるくらい女難の相が出てるんだもん。

「おいとまさせていただき「するな!」ご命令とあらば…」

……。なんか、もっとも危ない奴にあった気がする……。

【111話】再びのスクールライフ！【後編】（後書き）

なんか、絵がほしいと思う今日このごろです。
なんかイラスト描いてもらいたいなぁ……第2部のメンツを……。
そんな事を思う今日この頃。

【１１２話】球技大会２　メンバー発表♪（前書き）

別題・漢、宮鷹秀一？

【112話】球技大会2　メンバー発表♪

「ンで？　昨日の女は誰よ？」

今は朝のＬＨＲ中である。そんな中他の生徒からハブられてるオレ等不良組は適当な席に座って雑談をしてるワケだ。そこでオレは昨日ファミレスで出会った美女について聞いてるワケだ。

なに？　球技大会の説明だと？　前回やっただろぅが。しゃぁねぇな。

まずは、球技大会は、５月。７月。９月。１２月。３月にかけてあることだ。ま、１年の場合はなんだけどよ。なんでこんなにあるのかって言われると、なにも、校長が球技とかが好きでやってる行事ということらしい、それで、１年の学級対抗でＡ～Ｆクラスで争うのだ。

各月の優勝したクラスに１万円～１０円の文化祭のクラス資金に重大な関りがあるのだ。勿論の事だが１位と６位では雲泥の差があるのは明確。だから全てのクラスが本気になるワケだ。

男女総合優勝の組にはポケットマネーを一人一人５０００円をプレゼントというご褒美があるのだ。それも、本気になる要員でもある。

掻い摘んで話すとこんな感じだ。

もう２度と言わねぇからな。

つーか、本題本題っと。

「幾島の事か？」
「イエース」

それ以外に何があるってんだ。この人並み毛猿が。ピンクマンでも坊主でも無くなったからって好い気になるなよゴラァ？　所詮はもとピンクマンなんだ、微妙に髪が揃ってねぇんだよ。オールバックにしてるから目立たねぇが、オレの目は誤魔化せないぜ？

「奴の名は幾島沙織（いくしまさおり）聞いた事ぐらいあるだろ？　上半期のＣＤ売上オリ○ン２位と大差をつけての１位をとったの？」

ん？　結構ニュースでやってたな……確か、【ＯｖｅｒＬｏｖｅ】だったっけ？　レナが欲しいと言ってた気がするんだけど……？　それがどうしたんだ？

ん？　待てよ……？　そう言えば歌ってる奴の名前はたしか……幾島沙織だったけ？　で、あの美女の名前が幾島沙織ですと？　うむぅ、珍しい事もあるもんだ。アハハハハ。

偶然偶然。なんでそんな人が如月に様づけすんだよ？　ありえへんありえへん♪

「幾島はアイドルになる前に出会ってよ……」

……。マジかい。確か出てきて２年も経ってねぇぞ。何時の間に会ったんだよ、いや、出身がこの地区だつーのはオレでも知ってるけどよぉ？

「ンで？」
「谷崎達に絡まれてる所を助けただけだ」

にゃるへそ。彼女からしたら如月は深紅の王子様って事ね。深紅の長髪を靡(なび)かせて、次々と自分を襲ってくる不良を1人で撃退すんだ、そりゃぁ見惚れるんだろぅね。如月だって容姿は悪くないというか、イケメンの分類に入る奴だ。そりゃ、大抵のヤツだったら惚れるわな。

ん？　谷崎って誰かって？　谷崎は、竜狼鬼つーギャングチームの頭だ。昔はかなり名のあるチームだったけどオレと将、如月で20秒で潰した所だ。それが広まってオレ等は参魔神と呼ばれるようになった。参謀、魔槍、神風の過去のオレ等の名から取られてる。

ンな事は無視しておいて……。

「それで、様づけか」
「以前はストーキングされてた」

OH！　重大事実発覚やん！！

トップアイドルが過去にストーキング行為なんて……いやはや……よくやりますよ。それより、どうしてアイドルになったんだ？　そして、何故に如月はしかめっ面になってんだ？　なんか余計な事をしてねぇだろぅな？

ちょっと、調べてみるか。

「ある日、声をかけられてな……告られたんだよ」
「ンで？」
「『ダレだテメェ？　知らねぇヤツには興味ねぇんだよ』ってな感じの言葉を返したんだよ」

なるほど……話しが読めて来たぞ。彼女はそれを何を思ったか芸能界に出て一躍有名人。これでは、知らないとは言えないからな。如月が食い終わったら速攻で立ち去ったのはそういう事か……。つーか、幾島って確か同じ学校だったよな？　あんまし学校に来てないから知らねぇけど……A組に「幾島さんって有名人がクラスに居るんだって』と、ヴァン君が言ってた気がする。

だが、1つ気になる。

「なんで将を毛嫌いしてたんだ？」

「あぁ。あまりにもしつこいから将に相談して撃退してもらったんだ」

なるほど。将のトラップは手加減無しだからな。

その本人は今は屋上で朝からサボってるワケで、レナ達は女子のメンバーで盛り上がってるみたいだ。取り残されてオレ等から結構離れてる桧山以外はな。

……。なんか、アイツ不思議な感じなんだよなぁ……？

なんつーか、他の女子とかが彩られて鮮やかなフラミンゴならば、桧山はそこに迷いこんだ彩られない黒一色のカラスという感じがする。フラミンゴの群れの中の異端者。

別に差別というかそんなんじゃねぇんだけど……。なんか、ンな感じなんだよなぁ？　オレ等に近いんだよ。桧山桐は……なんかあの冷めた目で見られるとビビる、なんつーか、オレを見透かされてるんだと思う。

アイツには悪いが、なんとなくアイツが怖い。

「ンで、どうせ球技大会のメンツに選ばれると思うんだけどよぉ？今回なんだっけ？」

「ん？　ああ…野球だよ」

「休み明に少しは楽できそうなヤツだな……」

外野で楽してていいかな？

取り合えず集まってからポジション決めだからな……15人選んでポジションに分けるか……。ま、運動神経からみたら9人は決まったな。

「みんな、聞いて。メンバーが決まったよ」

ハカセが全員に声をかける。そして谷澤と柳沢が画用紙に描かれたメンバーを公表させる。案の定オレが選んだ面子である。

1 如月駿（きさらぎしゅん）
2 雨宮和也（あまみやかずや）
3 井塔将（いとうまさる）
4 宮鷹秀一（みやたかしゅういち）
5 橘悠詩（たちばなゆうし）
6 葉架瀬典齊（はかせてんさい）
7 長田優（おさだゆう）
8 新堂劉詩（しんどうりゅうし）
9 古田俊斗（ふるたしゅんと）
10 宮越雅也（みやこしまさや）
11 影薄谷翔汰（けいはくやしょうた）
12 ボブ・ジェイソン

１３上田衛（うえだまもる）
１４宇都宮葎（うつのみやりつ）
１５都野沙麻（とのさま）

つー感じだ。１人外国人がいたって？　ハハハ、気にするでない。

さてと、将にも選ばれた事を伝えに行きますか。もとい、次ぎの英語をサボる為にな。オレが立ち上がると同じ事を考えてか如月も立ちあがりフミｔに適当に言って屋上へと向かう。そもそも屋上は立ち入り禁止なんだが錠が壊れていて、自由に出入りできる。故にオレ等だけの穴場なのだ。この第二校舎からは街を一望できる位置にあって……本当に最高の場所だ。

そうそう、昨日の不良は街を一望させてやったぜ？　屋上からバンジーさせてな。ま、そういう事で以外にも広まってる。オレ等の巣に入って来た哀れな不良が週一で吊るされてるという事でな。

「おーい。将？」
「ん？　決まったんだ」
「おう。オレ等選ばれたぞ」

将はそう。とだけ言ってフェンスに腰をかける。

今日の風は少し強くて髪が遊ばれる。そっと目を細めてると将がこう言って来た。

「世界（ファンタジスタ）を知る者が動き始めた」

ファンタＴＨＥスター？　ど、どんな味のファンタなんだ？

「……どうするんだ？」

打って変わって如月がそう返すと将は押し黙る。オレの知らない所でなにかが起きようとしている。そしてそれは……“敵”だという感じが否まれなかった。オレの知らない将と如月がいる。近くに感じてたのに今はヤケに遠く感じてしまう。

井塔将と如月駿ではなくて、オーディンとスレイプニル。そんな感じだ。

「なんとかするしかないさ。“彼女”が敵なんだ。と、いう事はこの世界はもうすぐ崩壊する。そして三季目の世界が始まる。それだけの事だよ……1年だ、ここから丁度1年後……崩壊する」

「ッ！？」

オレは言葉が詰まる。世界の崩壊が間近だとわかってたんだが……ここから丁度1年だと？　本当に間近じゃねぇかよ。それなのに、オレ等は球技大会なんかやってていいのかよ？　幾つ物世界がぶつかり合って滅びる。それは、オレが知ってる友人達の世界も……ぶつかり合うという事だ。

そしたら、その世界も滅びる……。

「なんとかしねぇといけねぇ」

「僕達の力だと不可能なんだ。方法はある……けれども、僕達ではできない」

「諦めてどうすんだよ」

「知らないのに言うなッ！　和也！！」

如月の怒鳴り声にオレは黙る。こいつ等は思考錯誤やったけどど

れも無意味という事だ。考えろアイツの会話をあの中にヒントがあった筈だ。

どうして、“悪魔”という者が来たのか。どうやって来たのか？

考えろ……。なにか方法はねぇのか？

『ボク達……いや、“君等”が住む世界は数多多くある膜宇宙の中の1つでしかないという仮説だよ。小学生でも知ってる言葉だと並行世界（パラレルワールド）だよ。そして、重力子はこの膜宇宙を自由に住来することができる……って事だよ』ヤツはこう言った。ブラックホールが入り口という事だった。重力子が自由に行き来できる。それを止めるという事だ……なら、なにをしたら……？

重力子の行き来を止める？　けど、どうやって？　そんな事をしたら世界は矛盾してしまうのでは？　それならば、突き放せばいい。入り口を無くさせる……。

ブラックホールの破壊？　不可能だ……。そんな事で出来ない。

「違うよカズ。破壊するのは膜宇宙の境界を破壊する事だ」

「中央渦界域（セントラルボーテックス）。そして並行世界の移動を可能にしてるものを破壊するってことだよ」

「わかってるのになんで！？」

わかってるなら実行するべきだ。こんな所でちんたらしてないで……。

そう思ったけど、オレはなにも言わなかった。やれたらコイツ等はやってる。故のオレは何も言えなく。静粛が辺りを包んだ。

無力だ……。

オレは何も出来ないのか？

―？？？―

もうすぐ、世界は終る。

幾つもの膜宇宙があの子達の世界を中心に集まってる。どうやら、あいつ等がなにかを企んでるのだろうか？　私をいち早く誘い込む為に。

ふん。面白いわね。世界を知る者（ファンタジスタ）を相手にするつもりかしら？　ま、こういう小細工をするという事はそういう事ね。

私は世界の破滅を知らせる者。世界の全てを知る者……だから、そろそろ私も舞台に立つべきなのだろうか？　いや、立たされるのか……。

傍観者は卒業みたいね。

今度逢う時には貴方の敵でしょうね。宿命というものかしら？
貴方はその運命すら切り裂くのでしょうね、それが貴方だもの。納得は出来ないものはとことん追求してしまう。答えを欲しがる……運命というくだらない事を。

その時に私が立つだろうか？　いや、立たないでしょうね。

世界の存亡を賭ける争いには、私は消えるんでしょうね。この力があるから。

雨宮姫南が出来なかった事を貴方がやり遂げる事を願ってるわ。弟弟子♪

守ってあげてね。貴方の大切な人達を。

崩壊の運命を切り裂き……世界を守る……貴方に出来るかしらね？

雨宮和也……。本当の世界（ファンタジスタ）を知る者……。

そして、未だに眠るもう1人の世界（ファンタジスタ）を知る者。貴方が目覚めて過去を断ち切り和也君と行くべきなの。神堂真琴、貴方がピースの中心。

ヴァルハラの諸君。彼を支えて上げてね……。私にはもう時間がないのだから。

そう、私――三原香澄……いいえ、柴原香澄の時間はもうない。

私の事を敵だと思ってもいい。けど、本当の敵は別よ。

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

今は放課後。オレ等はグランドに集まってポジションを決めてる。正直、それ所ではないと思うが……どうしようもないんだ。今は日常を歩むしかない……結論はそれから……。結局はこうだ……。

そんなこんだで適当に身体測定を野球部の強力を元にやった所一応決まった。

―先発―

雨宮和也　背番号１　投手（ピッチャー）
井塔将　背番号２　捕手（キャッチャー）
橘悠詩　背番号３　一塁手（ファースト）
影薄谷翔汰　背番号４　二塁手（セカンド）
新堂劉詩　背番号５　三塁手（サード）
葉架瀬典齊　背番号６　遊撃手（ショート）
宮越雅也　背番号７　右（ライト）
宮鷹秀一　背番号８　左（レフト）
如月駿　背番号９　中（センター）

―控え―

長田優　背番号１０　投手（ピッチャー）
古田俊斗　背番号１１　捕手（キャッチャー）
ボブ・ジェイソン　背番号１２　一塁手（ファースト）
上田衛　背番号１３　二塁手（セカンド・ショート）／遊撃手
都野沙麻　背番号１４　三塁手（サード）
宇都宮葎　背番号１５　右（ライト・レフト・センター）／左／中

ってな感じだ。基本的なスタメンではあるが、打順などはその日のコンディションで決まる。

「ポジションは決まったけど、次ぎは打順……どうする？」
「クジでよくねぇ？」

ハカセの呼びかけに適当に答えるが、ハカセは少しだけ思案して「却下」と言う。ま、当然なんだろうけどな。流石にクジはマズいか。

それならソッコーで終るんだけどなぁ……。

「ジャンケンで勝ったヤツから決める」
「ん～…。めんどくさいし、それでいいかな」

『オイィィッ！！！』

全員のツッコミが華麗に重なる。ハカセらしからぬ言動だ。それでも学校のＩＱ測定で１９７を叩き出したヤツの言葉か！？　おいハカセこら。

生真面目なハカセからこの言動はビビッた。

そんなこんなで…

『どんな事ォォ！！！？？？』

おぅ。ダレもボケてないのに神に対してツッコミを入れたか。つーか、このメンバーはツッコミ組だとでもいうのか？　ツッコミ要員の集まりだったのか！？

う、迂闊にボケられないぞ……。

「和也？　どないした？」

「いや……なんでもない」

話しかけて来たミヤを適当にあしらう。それより、橘……なんなんだアイツは？　みんなと打ち解けてるんだが、アイツは桧山と似た匂いがする。そう、朝に感じたように彩られたフラミンゴの群れの中に迷い込んだカラス。そして、何かを探してる……。

不気味なヤツだ。

「カズ、決まったよ」

「ん？　どれどれ…」

1番　中　如月

2番　遊　葉架瀬
3番　一　橘
4番　投　雨宮
5番　左　宮鷹
6番　三　新堂
7番　二　影薄谷
8番　捕　井塔
9番　右　宮越

ふむ。順当なメンツだな……。

じゃんけんの結果がこうだ……まさかココまで綺麗に纏まるとはな……。

ま、いいだろう。試合は一週間後から……。

さて、文化祭のタメに一丁やったりますか。

「ンじゃ、帰りますか」
「あ、和也」

鞄を持って帰ろうとした時にミヤが声を掛けてきた。なにやらイヤな予感がする……うん。立ち去ろう。今すぐ立ち去るべきだ。なんかイヤな感じがする。

「待て！　ちょっと話しあるさかい、マック奢るからちょっとぉぉおおお！！！！」

「うるせぇぇえええ！！！！　テリヤキバーガー2個にポテトの

Lにメロンソーダ！」
「OK！」
うし。それで手を討とうじゃないか。

つーワケでマックにいる。

ミヤが適当に注文をとってると、オレは1つ前から試してみたかったものがあった。

前CMでやってたような気がするような……？

「……で、頼みます」
「はい。此方でお召し上がりになりますか？」
「はい」
「畏まりました」

ミヤと店員さんの会話の流れを断ち切るようにオレがこう言う。

「あ、すみません」
「はい？」

可愛らしい笑顔で返してくれる。うむぅ、それだけでも十分なんだが1度は言ってみたいんだよね♪

「店員さんの笑顔1つ」

レナ達と来るとボコられるからな。魅夜と来た時なんて口が裂けても言えない。すると店員さんは少しポツーンと河合らしい効果音を感じさせながら跳びっきりの笑顔で返してくれる。

オレとミヤはそれを見た瞬間にかなりのダメージを受けた。ま、まぶしすぎる……。

「私はお持ち帰りしますか？」

ブハッ！！（吐血）　オレとミヤのHPは危険を察知させる吐血と鼻血が出る。ナイスバディーな店員さんにそう言われると困る。どうなるんだ？　お持ち帰りしますと言ったらいったいどうなると言うのだ？　オレとミヤは古都宮の時に培ったアイコンタクトをとる。

か『や、やめよう』
み『？　ココで食うってのか！？』
か『……ぶはッ（吐血）』
み『うっ（鼻血）』
か『ミヤ、なんて答えるべきなんだ？』
み『そやな……いいえとゆーたら、ここで食うちゅう事やろ？』
か『ここは思い切って…』

み『ＹＥＳか！？』
か『だ、……だが』
み『和也……。ワイ等、男やろ？』
か『ミヤ……アンタが本当の男だよ……いや、漢（オトコ）だ！！』

「あぁ～。いいですよ、バーガーだけで」

ミヤァァァアアアア！！！！！！！！

＜つ・づ・く♪＞

【１１２話】球技大会２　メンバー発表♪（後書き）

本当に笑顔はくれますが、こうは言いません。

【113話】野郎多数登場しやがった。（前書き）

夏休み突入！！

……これでゆっくりと1日2話の手直しが出来る……。

【113話】野郎多数登場しやがった。

「ンで？　オレを呼んでなによ？」

メロンソーダを一度啜ってから、ミヤを見る。ミヤはメガマックを口に咥えてなんとか返事しようとするが……アゴが外れたらしい。もがいてる。

顎が貧弱だな……。ミヤ、まさかとは思ってたけどお前の弱点ってアゴじゃねぇだろぅな？　オレじゃなくて良かったな……オレ以外だったら遊ばれてるぞ？

いや、誰だよ？　オレだから危険だって言ったヤツは？　いや、思ったヤツか？

「ちょいと、経過報告をと思ってやな……」
「経過報告ぅ？」

アゴを押えながら「そやそや」という。そのイケメンが台無しだぞ？　ただでさえこのオレよりイケてるんだ台無しにしたら許さんぞ。ってか、報復？　だって考えるよりも先にオレの足がミヤのスネを捉えたもん。あ、涙目になった……。

やっべぇ。快感なんですけど？

「ううぅ……。ヤツラの事や」
「端か？」
「んにゃ。燈廉会の事や」

前回に瑠依を攫った奴等の事か……。張本人の名前は東條雪都、十五代目頭首にして若干２２歳のルーキーにしてかなりの兵力を持ってるヤツだった。オレとミヤが攻め入り瑠依を救出してオレがボコりその後で龍二さんにボコボコにされてそして、屋敷を下弦先生達に爆破されて……ｅｔｃ

に、なったワケなんだがな……。

暫らくして、その東條雪都が消息を絶ったそうろう……。

……。ツッコミが欲しいなァ……「そうろう」にツッコミ入られたヤツは才能は微かにあるぜ？　才能の保証はせんがな。

「……なにか進展があったのか？」

「無かったら言わんやろが」

そりゃそうだ、なかったらオレが半殺しにしてた。つーか、すんぜ？　鷹の爪を口にたっぷり入れてやってなぁ？

ふふふ、なにかしら有徳な情報でない限り……栽培中のドリンダちゃんに食われてもらうぞ？　クソ鷹野郎？　鷹の丸焼きもいいかもしれねぇな？

「話していいか？」

「ああ」

ストローを甘噛みしてミヤを見ると。話し出した。

「俺はここ数週間、全力で東條の行方を捜した。あれから連中が古都宮に来なかったということは既に東條が依頼主（クライアント）ではなくなったと

考えて良い。それなら、古都宮や知り合いの“組”を伝手に調べてった」

「見つかったのか……？」

組ってのが気になるけど、多分……ヤクザなんでしゅよね……？

さすがは陰陽（おんみょう）の名家ですこと……情報網はダテじゃないということね。

にゃるへそ……。

ンで見つかったからオレに一応の報告をした……イヤ、ミヤの顔をみる限りは違うな。多分、東條の野郎は……。

「ああ――。死体と、３人な」

「ハッ――!?　おい、まさか……」

「察しが良いな、レプリカ人間が確認された」

……。オレと同じ、か。こんなん（レプリカ）なんか間違ってるのに……どうして。なんで、アイツのレプリカを３人も……？　いや、待てよ？

燈廉会は全国区に渡る巨大暴力団だ、リーダーを見つけると軍団が纏まりを強める。しかし、３人がバラバラのまったく違う動きをしたら？

そんな事を知ったら「裏切った」そう感じるはずだ。そうなれば、抗争となる。

そういう事か。だけど、争わせてなにを……？　本部の北海道ならまだしも地区なんてどれも同じような実力でやりあったら３つ共同士討ちだ。

ん……？　同士打ちだと？

「！」

「そや、ヤツ等は燈廉会を潰すつもりやったんや」

メリットは？　端がヤツ等なんか潰して、しかもレプリカなんか使ってなんになる？　ヤツ等の中から1人でも送りだせば潰せるはずだ。奴等にはなんのメリットもない。自分の隠れ家でも隠すために？　アイツは裏の世界で生きてたんだ、“端”には必ず逆らわない。死に直面しても口には出さない。それが……なんで？

「……ちゃうわ」

「？　“端”じゃねぇのか？」

「黄昏の夜（トワイライト・ナイト）や」

「ッ！？」

あいつ等……？　確かにアイツならレプリカぐらい作ろうとするだろぉけどよ……？　アイツ等こそメリットなんかねぇだろ？　相変わらず考えが読めない奴だ……。それより、どうしてＴＮ社の話題になったんだ？　東條がＴＮ社と繋がってれば此方（ウラ）の世界ではすぐさま広まるはずだ。

繋がりがないのに何故……？

「ワイはここまでや。ここまでしか情報がもみ消されとんねん。電子の死神に断たれたちゅー事や。知っとるやろ？　電子の死神？」

電子の死神とはネットの情報を断ち切る存在だ。幾らハッキングしようが電子の死神が刈った場所へはダレも辿りつけない。それはネットだけでもなく、人づてでも手がかりを掴まれそうになった瞬

間、死神に刈られて情報は得られなく闇に変える。

裏ネットの管理人とでもいいたいかのように、アイツは守っている。

そいつは、ＴＮ社に属してるとは聞いてたが……。まさか、東條がなんらかの行動をして悪い事でもあったというのか？　オレが眠ってた空白の２週間……。そこに、なにか動きがあったんだ。

とてつもなく深く黒いなにかが……。

―？？？―

「鬼ごっこは終りだぜ？」

少年は呟く。追い詰められた青年は押し黙る。暗く湿度の高い倉庫に１人に対して３人、追い詰められた青年の方が分が悪い。

「樹（いつき）。遊んでいるなら帰れ」
「そうよ、アンタは邪魔なだけよ」
「酷ッ！？」

別にふざけてるつもりはない。ただ、彼が馬鹿なだけである。本人は真面目にカッコイイと思しき事を言ってるついもりだが、全くしまらない台詞だ。なぜなら所詮は一般人と“端”の者の戦いだ。追い詰めて当然。

「なんなんだよ……てめぇ等？」

恐怖が入り混じった声で青年は質問する。彼は“端”を知らない……表の人間だ。

「裁く者。それだけのこ――ごふぁ！」

樹は赤髪の少年に殴られる。全力でだ。

続けて少女の踵落しを頭に直撃。樹は涙目になりながら苦痛を耐えてる。

「「一世代古いンだよ」」

息ピッタリである。青年はこれを気に逃げ出そうとするが、それはすぐさま逃げ出そうとするが、“壁に叩きつけられた”勿論、彼等は触れてもいない。倉庫内に高い音が響き渡った。音叉を叩いたかのような音は止んだ。

青年は混乱する。なにも触れていないのに何故自分は吹き飛ばされたのか？

「Ｓｏｕｎｄｌｕｍｐ」

音響の塊。一応大学を受けた青年はこれぐらいはわかった。しかし、彼には彼女の異能の力【音響操作】による力だ。空気中に振動するどんな微弱な音でも好きな様に操れる。先ほどのように音響の塊を作るなり音源を変えるなり変幻自在の能力だ、表の人間には絶対わからない能力（ちから）である。青年は苦悶の表情を浮かべる。

「冥土の土産だ。俺等の所属は“端”そして君は俺等の上の理由で殺させてもらう……それだけだ」

またもや頭を捻ってない言葉を樹が言う。

「っざっけんな！！」

「ふざけてねぇよ、お前は番犬の法に触れたんだ……」

『法に触れた。』赤髪の少年がそう言うと青年は反応した。そして顔が青褪める。まるでなにかを思い出したかのように。彼は無造作にバッチを握り締める。ＴＮと描かれた組織のバッチを。表向き大手ＩＴ企業のＩＮ社のバッチを握り締める。

そして、じわりと汗が垂れてくる。

「故に、極刑だ」

数秒後、青年の悲痛な叫びが倉庫に響き渡った。

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

バーガーを食ってると見なれた制服のコンビがマックに入ってきた、一人は長身で……見間違いであれば嬉しいんだが背中に大きな大太刀を装備し、右腰に日本刀、左腰に大型リボルバーと明かにおかしな物を持っている人と、低めの身長で不釣合いな2人が入って来た。

見覚えがあるのは体格とかではなくて、制服だ。Ｙシャツに黒いジーンズ。それはオレ等が通う高校の夏服だ。イコール、オレとミヤと同じ格好つーこと。

あの長身は見覚えがありすぎる。さすがにアレを知らないヤツはウチの学校にはいない。聖涼（ウチ）の影の支配者と名高い男……赤穂真太郎（あこうしんたろう）だ、学食にあるカレーライスが食えない原因を作ってる人物だ。

あのちっこいのは……たしかぁ……？　継坂腕（つぎさかいな）だったと思う、女性徒に絶大な人気を誇る三年生方（センパイ）だ。そりゃ、あんな物を持ってたら目が行くよ。

ミヤだって狼狽してるし……。

まぁ、そんなこんなで会話が聞こえるわけよ。

『いらっしゃいませ♪』

『取り合えず、チーズバーガー2つにフィレオフィッシュ2つシャカチキ2つフライドポテトのMを2つでコーラとジンジャのSで頼むニャ♪』

『畏まりました』

『あー……。カレーライスはねぇか?』

あるかァァァ!!!!!

『しんちゃん! さっきから言っておるとおりマックにカレーライスは無いニャ!!』

『畏まりました』

『ええぇぇ~~ッ!!!???』

なんだとッ!!!???

『オーダーです! チーズバーガ2 フィレオフィッシュ2 シャカシャカチキン2 フライドポテトのM2 コーラとジンジャエールのS、そして、カレーライスです』

『やっぱあったんだ!?』

あったんだ!?

『あ、そうだニャ~♪ 店員さん追加頼めますか?』

『はい』

ま、まさか……？　先ほどのオレと同じ事をするつもりだとでも言うのか！？

『店員さんの笑顔下さいニャ～☆』
『はい♪』

うわぁ！　眩しいです！！　こっちにまで貴方の笑顔の爽やかさが届いてます！！

つー事は……ってか、コラ！　近づいて聞く耳立てるなミヤ！　男と触れ合っても嬉しくともなんともねぇんだよ！！　レナに見つかったら妄想の世界にフェードインだぞ！？

『私はお持ち帰りしますか？』

おお。なんか初めてエロ本を読んだ中学時代の感覚が……？

どんな感覚か……だって？　……知らん！

作者自体が知らない感覚をオレに求めるな！！

『も、勿論ｄ――『持ち帰るかアホ。邪魔ださっと用意しろ』――しんちゃん～～」

……切り捨てた。あ、店員さん笑顔だ、さすがは鍛えぬかれた笑顔集団。笑顔を怠らないとは……流石です！　オレだったか『ウラ来いや…』とか言ってます！！

ァン？　ダレだよ、一緒にするなよって言った奴はよぉ？　ちょっとウラに来いや。

「つか、離れろミヤ。お客さんの目が痛い」
「せやな」

断じてオレはホ○じゃねぇ。

おいこら、腐肉女子、妄想の世界から帰ってこーい。

「俺が言えるのはここまでや。これから入った情報は細かく報告すンからな」
「……ミヤ」
「なんや？」

「志穂を頼んだ」

ただ、その一言だけを言っておく。

アイツは1人で暴走しがちだ……誰かが止めないとイケナイ。だけど、オレにはオレの直面する事があって志穂と同じ位置には必ず立てない。だから、同じ場所に立つミヤに頼むんだ。

「まかせとけ」

アイツとはよくよく喧嘩するけど……一応許嫁なんだ。
オレのじゃねぇけど、俺の大切なヤツの1人なんだ……本当ならオレが守ってやるべきなのにオレは守ってやれない。自分の目の前の事と、後ろに置き忘れた物を探すので手一杯だから。

オレと俺は同じだけど違う。

オレは俺みたいに強くともなんともないから……。

だからどーしても……友の力を頼ってしまう……。

「サンキュ」

＊＊＊

―我を求めよ。

―拒否する。

―何故…？　何故お前はその姿で甘んじてる？

―うるさい！　私は私だ……。アンタなんかいらない！

―……何れ汝は我を必要とする。その時にまた逢おうか……。

―私は貴方を必要としません。ご主人も！

―お前も気がついてるだろ？　お前のパートナーはファンタジスタに目覚める。

―……。

―その時に彼は我を求めるだろうな。

―知るか。

―運命の悪魔を切り裂く力……。彼はそれを捨てる。悪魔と言う存在を知った時にな……。

―私は……。

―今は君に預け様、運命の悪魔（ディステニーデビル）を切り裂く刃（ブレイカー）。

―……。もう2度と私の前に姿を現すな。

―では、何れ……。

まぁ、喧嘩だ。

ここは和也の家の近くの公園なんだが……。そこは戦場と化していた。

いや……戦場というよりは……ジュラ紀？　弱肉強食の獣（きょうりゅう）が住みかい捕食する全てが戦場の世界。そこには弱者（エモノ）と捕食者（きょうしゃ）がいる。他の恐竜など相手にならなく全てが捕食されていく。

俺の前で薙ぎ倒されて行く者の上に立つ、王者。ティラノサウルスが牙を向き最後の１匹を瞬殺し捕食した。

「……次はテメェかよ？」

「いやいや、ただの散歩してた者ですよ」

ウチの制服だ。たしかコイツは……番田長太……。２年の先頭きってる不良（ワル）だ……やれやれ、どうやら帰してくれねぇみたいだな……新しいバイト先の近道だつーのに変な事に撒き込まれたなぁ……。

しゃぁねぇな。

「やんなら相手になるぜ？　雑魚が」

「上等だ……。喰らってやんよ」

恐竜が神様の馬を相手に出来るとでも？

さぁて、次話は喧嘩のようだな……。

さてはて、俺はバイトが大丈夫なのかな？　初日から遅刻したら殺されんぞ？

……。ソッコーで決めるッ！

【113話】野郎多数登場しやがった。（後書き）

飛『次回番外編』
和『オレしに終了？』
駿『激動するオレしにメンバー』
将『あまりにも突然な事で…』
レ『作者が暴走しかけそうな話し』
ラ『本来なら、死神の事情に組み込まれるこの話し…』
セ『……試し』
ヴ『セフィリア、言葉足らずだよ』
魅『実験としてやる話し』
宮『飛焔にお願いで届いた不可思議なもの…』
真『……【オレしにのメンバーを性別変換したものを見てみたい】と、あった』
和『次は“俺”等の出ない物語…』
廉『ま、当然なんだけど……』
零（亞）『ワタシと死神☆』
瑠『奔放初公開』
飛（紫）『予定！！』
全『予定なんだ！？　やっぱ！！！』
飛（緑）『なのだ♪』

はい、マジで予定です。そんな事をしたら作者が壊れそうなんですが、多数決をとりたいかと。

評価感想欄ｏｒメッセージで承ります。

『さっさと本編進めろやアホ』なり…
『み、見てみたいかも……』なり。

送って来てくださいね。それでは！

【超番外編】ワタシと死神☆（前書き）

駄文です。

【超番外編】ワタシと死神☆

ワタシは今、ヒッジョーに困ってます。ええ、困ってますとも、そして不幸のどん底ですとも、人間の底辺ですよ！　所詮は生きてる価値もありませんよ！！

ワタシは今、爆走ですよ、はしたないんですよ！　けどこうするしかないんですってば！！

だって、だって……遅刻するんだもぉぉおおおんッ！！！！

―数分前―

ま、眩しい……。　薄目を開けて窓を見るとカーテンを閉めてなかった事に気がつく。

ゆっくりと寝ぼけて重たい身体を動かして空を眺めると、いつも

と変わらず快晴の天気である。そこで、窓際に繋ってる一着の制服が目に入る。藍色を基調にしたブレザーで、胸章には天秤とＳＥＩＲＹＯと刺繍されてる。

この制服はちょっと有名な所のド真中に建たれてる学校。聖涼高等学校の制服である。なにやら卒業生の有名なデザイナーが作ったヤツでこの制服が目当てで他の県からもくる人がいるくらいだ。バカじゃない？　そう感じるのはワタシだけだろうか……？

そんな事はどうでも良い。

さっさと行かねば。今はいったい何時だ？

枕元に置いてある目覚ましを手当たりで捜して、掴む。そして目の前に持って来るとワタシは自分の目を疑った。目を擦って確認するが、ワタシの願望は儚く夢に散った。

只今の時刻…。９時２４分☆

「みぎゃぁぁぁ

着つけも終り、リビングからパンを一斤だして口に咥える。そのまま自転車の鍵を取り出して自転車に急ぐ。扉を蹴破りロックを解除して乗り全力で駆ける。

ワタシは今、ヒッジョーに困ってます。ええ、困ってますとも、そして不幸のどん底ですとも、人間の底辺ですよ！　所詮は生きてる価値もありませんよ！！

ワタシは今、爆走ですよ、はしたないんですよ！　けど、こうするしかないんですってば！！

だって、だって……遅刻するんだもぉぉぉおおおんッ！！！！

この際は、信号が赤なんだけど無視し！　子供がイキナリ飛び出して来たけど無視！　邪魔じゃガキィィイイ！！

【バゴォ！！】轢いたけどいいや、ワタシの邪魔をしたのだから！

それに止まったらワタシが警察に掴まる……いや、掴まらないね。ワタシの名前を聞いたら警察も泣いちゃうんだも、財布をだして直ぐ逃げてくんだよね？　しつれいしちゃうわ。

ン？　あぁ、紹介が遅れたわね。私の名前は雨宮和音（あまみやかずね）と言います。今後共によろし……ン？　ワタシは今回限りの限定？　マジで？

ふ、この作者も終ったわね、この類い稀なる美貌をもったこのワタシを……おい、誰だ？　このワタシを貧乳といった奴は？　殺しますよ？

【パチィン…】

何かが弾ける音が私の頭上に響いた。最初は電線で感電したアホなカラスでもいたかと思ったが違うようだ。

なんだろう？

好奇心に負けて上を見上げてしまう。次の瞬間、黒い何かが落ちて来た。

なにぃいいい

ワタシが話しかけてたのは親友の井塔真沙美（いとうまさみ）である。赤と黒のチェックのバンダナがトレードマークでボーイッシュな短髪の銀髪は1本1本丁寧に手入れされてて、大き目の目はヒジョーにカワイイ。因みにボクっ子なのがおいちゃんをあらぬ方向に運ぶ。

襲いたいくらい。ふふふ…。

「和音、お前ならマジで食いそうだから……」

そういって、牙を向くワタシを静止させるのは男子のも引けを取らない長身の巨乳……もとい、如月愁璃（きさらぎしゅうり）多分、成長が影にいかずにアソコに行ったのだらう、故に影が薄い。膝まである深紅の髪にパッチリした相貌がチャーミングで巨乳。聞くところによると、Gだそうだ……。女の敵め。

「ワタシ、どんだけよ？」

頬を膨らませて2人に返す。2人は仄かに笑いあい。答える。

「小指でカズに近づこうとする男を撃退」
「世界中のヤクザを相手に無傷で全滅」
「睨んだだけで蜂の巣を盗られた蜂が引き返す」
「熊をも恐れずに眼力で撃破」
「キャンプ中に押し寄せて来た濁流を小指で弾きかえした」
「中学の時にラブレターを果たし状と勘違いして全員を病院送り」
「レディースやヤクザの勧誘は数え切れないほど」
「「……ｅｔｃ……」」

「イヤァァァァァァァ」

ワタシってワタシって……？

「女か？」

そうワタシに聞いてきた命知らずは、柴原統夜……単なる腐れ縁の幼馴染みだ。如月と同じ位の身長で男としてはロングで綺麗な顔立ちをしている。勝気で負けず嫌い、イヤな所を挙げたら切りがないんだが……。基本的にはイイヤツだ、軽くサドなんだが……たまにマゾな感じも出す。つーか、男のくせーに消極的で生真面目なヤツ。

「喰っちまうぞ？」

「そういうところが、男なんだよ…カズ」

「柴原が振るえてるから。取り合えず犬歯を出すな。怖いから…」

こんな聖母みたいに優しいこのワタシの何処が怖いんだか……？

世の中世知辛い事ね……。む？　誰よ？　開き直りって言った奴は？

「飲み込むぞ？」

「「「だから、怖いからやめぇーい！！」」」

3人からの拳を避け切れずに顔面に直であたる。普段ならこういうのは平気なんだが、寝不足＋朝のドタバタ＋腹減った＝で、ワタシの身体は限界が来ていた。

……もう寝ます。おやすみなさい……。

でも、なんだろう……？　別の世界のワタシの方が危なかったりして？

―？？？―

クソ、朝は酷い目にあった……いったいなんなんだよ？　あの女（アマ）は？　人様の着地地点にいてぶつかったと思ったら首根っこ掴まえてこんな所に連れてこんな所に連れてきやがって……。

しかも、人を盾に自分勝手に変な理屈を並べやがってよ？　真っ当にくだらねぇ人間ってああいうヤツの事か？　マコ姉ぇも言ってたな、「くだらない人間は自分の理屈を押し付けてくるヤツだ」って、マコ姉ぇの場合は誰の事かはバレバレなんだがな。

ンな事より問題なのはやはり……このゴリラ（にんげん）か……。先ほどから無視してるがガミガミうぜぇンだよ、制服やらローブやらうるせぇつーの、人がどういう格好」してようが勝手だろぅが？

どうしてそんな状況かというとだな……。

「は？」

俺は1枚の紙を見て呆然とする。今日は晴れて入学式……そんな日だった、しかし問題はある、入学した次の日にあるテスト、それに合格しないと俺達は入学……つーか、1年生からやれないという事だ。つもり言うとだな……それで赤点になったら補習で人間界に落されるつーことだ。

ン？　ここは人間界じゃねぇのかって？　ハハハ、説明してなかったな。ココは魔界だ、“アランド”と呼ばれる世界で俺は“死神”である。ここに人間等いない、魔獣、神獣、下等神、エルフ、各種の魔族や神族と呼ばれる者達が集まった世界だ。

説明はその程度にしといて、俺は現実に帰る。

だって、リリス先生が滅茶見てるんだもん、クラスも気まずい空気☆

……スマン、無理矢理明るくした。

「レナトス・ハーケン＝クラウド・ウェイル」

「ひゃい……」

相変わらず綺麗な声で俺の名前を呼ぶ。妖艶な笑みを浮かべて。

その笑みは邪悪なものだと気がつく。そして微笑。相変わらずお綺麗です！！　……じゃなくて。

「何かの間違いでは？」

「間違いないわよ」

「マジで？」

「大マジ」

「ホント？」

「イエース」

「キリスト？」

「さっさと、落ちなさい」

酷い！　やっぱり女の悪魔ってのは残虐だ！　全員サディスティックだ！　こういう事なら真面目で優しい鬼なデーモン先生が良かったぞ！　この悪魔なんかよりもダントツで！！

「…だ、そうです。リリス先生」

「ラミレス――――！！！！」

「どこぞのプロ野球選手だよ？」

俺にツッコミを返してくれるのは相方とも言い難い我が親友のラミガー・ゾンボルト。悪を断つ剣みたいなヤツで――

「間違った事を吹き込むな。このアホトス」

俺は現在床にＫＯされてる。“ラージア”のハリセンがモロに食らったのだ糖分絶てないだろう。

「大人しく糖尿病になってさっさと死ね」

「だって、甘党でプリン命なんぜ！？」

因みにラージアは別に読心術を使えるというワケではなく。単純に相手の心理状況を素早く察知して相手の思考を読み取る……殆ど読心術なんだが決定的に違うのはラージアはそういう事にはかなり敏感で普通にしてても心を読んでしまうのだ。

もとは、“デュミナサスト家”の純粋な血が原因なんだがな。

立場的に俺のツッコミ専門。

「ヤだよ」

「ちょっと、ショックなんですけど！？」

「ウゼーから気絶してろ」

「踏まないで！　お願いだから！　踏んだら気持ち良い……違う、なんだよみんなその目は！？　倒れてる人に失礼だろぉがァァ！！」

みんなの目が冷たいよ！　ちょっと待て！？　俺が悪いのか？　おい！？

＜早送り＞　＞　＞　＞

なんか、短縮されたような……？　つーワケで俺は人間界に落されてなんかいろいろごたごたに撒き込まれてるつーワケ。

おい、そkの腐肉女子よ……なにか良からぬ眼で俺を見て無いか？

―Ｋａｚｕｎｅ　Ａｍａｍｉｙａ―

いつの間にか保健室で寝ていた。夢の中でレッド・ツェッペリンのボンゾが出て来やがった。ファンのヤツには悪いが、奴は泥酔して眠って自分の嘔吐物を喉に詰らせて窒息死したというヤツだ。因みにドラムをやってた……なにか？　このワタシにドラムをやれって言ってたのか？　お断りだ、やるなら断然ギターだな。

そう言って、殴り飛ばして冥界に帰してやった。

そこで目がさめてイケメン保険医と少しコミュニケーションをとってから教室に戻ろうとしていたところで教室の異変に気がつく。

ヤケに騒がしい。幾らかのワタシが超絶美人だからって……。

おい？　誰だ調子に乗るなって言った奴は？

「噛　み　砕　く　ぞ　？」

よーし、黙ったか。それでいいのだよ、口答えするヤツはこのワタシが叩き潰す。つーか、全員をワタシに近づく男みたいにしてやるよ。

　嬲るって快感よね…♪

「カズ、また恐ろしい事考えてる」

「何故わかった！？」

　その前にワタシはいつの間に座ってたんだ！？

　おい、作者よ無理矢理時間を跳ばすのではない。いくろ、別の世界のワタシと変わらないからといってそりゃねぇぜ。しかも中途半端に……。

「ンで、あの女子の人だかりはなに？」

「テンコーセーだよ」

「転鋼星！？」

「どんなボケだよ…」

　転がる鋼（テンコーセー）の星。恐ろしいヤツだ。星が……。鋼鉄の星が転がるなんて……いったいどんなヤツなんだ！？　ふふふ、面白い、挨拶にでもいってやるか。

「ただ、テンコーセーが気になるだけでしょ？」

「うッ」

お見通しですか～☆

女子の群れを書き分けてその転校生やらと対面する。

見覚えのある金髪。

見覚えのある髪型。

見覚えのある服装。

見覚えのある相貌。

……。今朝の男だ。

「「は？　はあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ…」」

ワタシと彼の叫びは全く同じであった。

居候が増えた。そう、増えたのだ、とある理由でレナトスが居候して魔界へと行きそこで親友と出会い、そこからリリス様になにやら実力をみたいとの事で素手喧嘩(ステゴロ)した。足場が不安定というか逆三角錐という形の部屋で本気を出せなかったがなんとか全勝した。

因みにリリス様とはドSという義理姉妹(しまい)の契を交わした仲だ。

そうして、なにやら実技試験落ちたとの事で落された、レナトスの相方のラージア君と、3人の纏め役……つーか、仲介役のヴァレンちゃん、この子が本当に可愛くてレズになってしまいそう……夜な夜な襲おうかしら？　おいしそう……じゅる。

「……」

ラー君が睨んでるけど気にしない♪　それともう1人、セフィルだ、この子はワタシがリリス様が仕組んだ対戦相手のラストでなかなかのいい筋はいいけど、その剣に多少の迷いがあった。人を斬るためらいではなく過去のモヤモヤだ。

厄介な事にワタシが嫁という仮の形になってる。

詳しい事はいいたくない。

そこで新しく入ってきたのが、魔界で知り合った……つーか、服従させた阿玖鈴亜(あくれいあ)だ、女なのに男勝り……ワタシと似た存在だ。

そしてワタシの髪の中に潜り込んでる生意気な妖精。フェイト……この野郎何様だゴラァ？

ワタシの家には着々と居候が増えてる。

作者よ、内容を飛ばしすぎではないだろぅか？

む？　内容は知ってるだと！？　ま、またもや別世界のワタシか……。そいつは良い男なのだろうな……？　どうした読者よ？

なんでもないか、かというワタシはシャワーを浴びていた、なにやら視線を感じたのでタライを投げたら、カメラを持ったレナトスを小さくした感じのカメラを持った少女をひっ捕らえる事になった。なにやら、「フミ君、ゴメン」としか言わない。

慈悲ぶかいワタシは耳元である事を呟いたら、泣いて出て行った。

ワタシのヌードを撮ったというのか？　ふふふ、良い度胸だな、彼女を使いにだした文一とやらよ？　喰っちまうぞ？

性的な意味で。

蛇口を絞めて髪についた水滴を払う。風呂場の戸を開けるとその先には半裸状態のレナトス、顔面が蒼白だ。なにをしたる？　ここは顔を赤くするべきなのではないか？　こちはバスローブもなにもしてないのだ、まっぱだぞ？

目を瞑るのはいいんだが、何故身構える……？

ほほぉう。

「あ、あれ？」

「フェイントだ。スケベが！」

ワタシの回し蹴りはレナトスの顔面に当りそのまま数回回転しながら吹き飛ぶ。壁に穴を空けて半分だけ埋まってる……壁に。

この野郎、ワタシに殴られると思ってたな？　当初は滅多にない眼福で許してやろうと思ってたがどうやらお仕置きの方が良かったみたいだ。あんな身構えて……。本当にお仕置きが好きなんだから♪　ワタシの下僕はみんなこうなのよね？　なんでかしら？

そんな、平和は長続きしなかった。

急展開だな。おい。

ワタシは十分に平和だぞ？　メシも美味いし、気の合うヤツはいるし、美味しそうな子は沢山……おっほん。ただ、違うのは場所だけでしかない。ココは北海道だ、そしてワタシが居るのは古都宮という大財閥で働いてるのだ。このまま裏で手引きして世界征服をとでも考えてる。

……。マジにするな冗談だ。

「灯音（ともね）。どうした？」

「ん？　なんでもない」

ワタシに話しかけてきたのは先巡したようにワタシと気の合うヤツこと、宮鷹愁深（みやたかしゅうみ）である。ン？　名前が違うと？　それには色々あって、そう名乗ってる。荒川灯音、我ながら知り合いの名前をバラして合体させて素晴らしい響きじゃないか。

Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ
Ｈｕｍｉｙａ　Ａｒａｋａｗａ
Ｋａｚｕｎｅ　Ａｍａｍｉｙａ
Ｔｏｍｏｎｅ　Ａｍａｍｉｙａ

今更だが、ワザと文字数を揃えてるな？　作者よ？

その前に上の２人がもう１つの世界のワタシか……。

「熱でもあるんじゃないの？」
「大丈夫大丈夫。宮鷹を（性的な意味で）食べちゃう気力あるから」
「私は不味いよ…？」
「なぁに、大丈夫……おいちゃんに任せなさい、心も身体もワタシの物に……」

誰かの期待に答えないといけない気が……？　ワタシの手は既にミヤのＹシャツに伸びてる、そのまま襟を掴んで押し倒す。「あわあわ」と、涙目になりながらワタシを見る。逆にそれがそそるんですけど♪　きゃわいい♪

耳を甘く噛むと、宮鷹が喘ぐ。ふふふ、だから、そういうのがそそるというのに……。

“本番”にうつろうとした時、頭をハリセンで叩かれた。

「零時ィ！　なにをする！？」

「だったら、僕の家でなにしてるんだよ？」

ワタシの邪魔をしたのは我が主である古都宮零時、単直に言うとワタシ達は使用人兼ボディーガードとして雇われたのだ。その雇い主は零時の姉にあたる瑠依だ。

ワタシはメイド服なんだが、ミヤは、ごねてスーツでいる。

「性行為だ」

「同性愛か！？」

「ちゃうわ！」

「だったら日本じゃ無理ね……カナダ行けカナダ」

「よし行くか」

「行くか！！」

何故否定するんだ？　ミヤ！？　思えはそれでいいというのか！？　なんてヤツだ……ワタシの事はお遊びだったのねぇぇぇ（泣？）

もう飛び飛びじゃないか。いくら文字数が二万を一回超えたからと言って、描き直して最大限短くさせてるんだからってよぉ？

ワタシはというと、仮面野郎との戦いの最中だ、詳しい事はもう1つの世界のワタシをみればわかるだろう！！　説明がはそれで省く。作者に尽力をつくすとは……さすがワタシだ。

「覚えてる。君の攻撃」

「だァァ！！」

ワタシの回し蹴りは意図も容易く避けられる。そのまま相手は横に移動してがら空きのワタシの腹に拳骨を食らわせる。一時的な無酸素。「かッ」と血を吐き出すと同時に追い討ちがくる。

「魔人刃」

それを食らいワタシの意識は闇に消えた。

……。

……。

……。

……？

なんだ、“私”の出番みたいね……？

まったく、使い物にならないわ。結局は私の出番ですか？　あら？　人称の意味を知ってるのね？　なら話しは簡単よね？　私の久しぶりの出番……ふふ♪

あら、この子は随分余裕そうな顔ね？　３０秒後の世界に私は……“ワタシ”はいないという事ね。ふふいいわ、甥り甲斐があるってものよ♪

「貴方の未来は終息した」

「！？」

「未来（さき）にない現実（いま）……楽しんでね♪」

次の瞬間に全ては終った。こんな雑魚に負けるとはね……。ふん、所詮はこの程度か、それじゃぁ、ワタシはもう１度寝るはせいぜい頑張ってね、ワタシ♪

それからも、いろんな事があって……ワタシは深手を負った。何があったのか？　それはワタシも全部は把握してない。ワタシにわかってた事は「このままじゃイケナイんだ」そんな感情だった。神路蒼葉にも神堂真琴にも言われた言葉が、ワタシの胸に深く刺さった。

『“今の”お前では無理だ』その言葉が深く圧し掛かっていた……。

ワタシは……。なんなんだろう？

ワタシは……作り物（レプリカ）だ。人間じゃない……。

ワタシは……。なんだというのだ……！！

そんなワタシを解消させたのは、真沙美と愁璃のこの言葉だった。

「あの場所は“荒川灯音”の場所じゃないんよ……和音」

「ボクの……ボク達の大親友である“雨宮和音”の場所なんだよ」

たった、それだけの言葉で……ワタシはもう一度全てと直面できた。

古都宮はあれからごたごたがあり、なにかしらいろいろあってワタシは元の鞘に収まった。

そこでは、いつもの日常が送られて……。いつもみたいに喧嘩して……。いろんな事がある。

ワタシは……それが好きだ。日常と呼べない非日常な日常……ワタシと死神を中心にして起るいろんな事が……ワタシは大好きだ。

ワタシの毎日。これが長く続きますように……ワタシは願う。

醜くも美しいこの世界で生きていけますように……って。

以上！　無理矢理感たっぷりの終りでした！！

『言うなァァァァァ！！！！！！！！』

＜オレしに&ワタしに劇場～♪＞

和也「意味不明なのが始まったぜ」

和音「困ったものね」

和也「ンで、貴様が別世界のオレか」

和音「惚れちゃいやよ」

和也「惚れるか貧乳」

和音「なんだと？　寝癖？」

和也「ンなのは昔じゃい、古都宮行ってからちゃんと直してるわ」

和音「類い稀なる美貌をもつワタシの敵じゃないわ」

和也「どこが美貌だ？　香澄姉ぇの本能をオレに移植させ女体化させた変態が」

和音「ンだと？　喧嘩っ早い若造が」

和也「ァン？　やんのか小娘が！？」

和音「上等よ、帰せなくさせてあげるわ」

レナトス「……」

レナ「は、鼻血が……」
レナトス「なにをしてンだよ」
レナ「いや、私達も男だったらねぇと」
ラミア「いやよ！　私はいやよ！　あんたの煩悩の餌食になるなんて！！」
ラージア「お互いに苦労するな」
レナトス「苦労してるのか？」
ラージア「しとるわ！！」
レナ「何処が？　ラブラブじゃなくて？」
ラミア「お前は煩悩の世界に帰れ！！」
レナ「いやよ。現世でウハウハしたいわ」
レナトス（危なくないか……？　別世界の俺よ？）
ラージア（お前も十分に危ないワ）

ヴァン「ども」
ヴァレン「こんにちわ」
ヴァン「……」
ヴァレン「……」
ヴァン「……」
ヴァレン「……」
（（な、なにか話題はなにのか！？））

セフィリア「……」
セフィル「……」
セフィリア「……」
セフィル「……」

「「……」」
「「……」」
妖精ｓ「「黙ったまんまかい！！」」

駿「エロいぞ？　あの和也」
愁璃「ええ、私達も困ってるのよ」
将「アレは犯罪物だよ」
真沙美「犯罪者だから」
秀一「説得力がある…」
愁深「こ、怖かった…」
駿「ま、まぁ、ご愁傷様」
将「でもって、僕達？」
愁＆真「「？」」
秀一「マサシュンが期待されてるんだけど」
愁深「え？　そ、それって……／／／／／／」
愁＆真「「するかァァァ…」」

飛焔「ではここからはいつも通りに」
駿「ま、あれだな」
将「作者、今回の話しにバトルを無理矢理入れる必要があったの？」
飛焔「うん。オリジナルの方もださないといけないから、蒼譜戦だったら本当にちょびっとで活躍しないからバロン戦を入れたんだ」
和也「名前だけのヤツもおおいよな。つーか、視点変更無駄じゃな

いか？」
飛焔「うん。描き終わってから思った」
駿「それよか、どうして二万文字を超えたんだよ？」
飛焔「まさに暴走したんだよ。大幅に削減した所全ていれたからね。それにメンバーが全員おかしいんでちょっとね」
将「それより、こういうのは本編にいれるべきじゃないよ」
飛焔「うん。でも長くなりそうだから」
「「「駄目出しで」」」
飛焔「ぐはッ」
和也「つーか、オレを変態にするな」
将「そうだね、犯罪者だよ？」
駿「出番が少ないぞ。和音やらのオンステージじゃないか」
飛焔「せやから、いろいろなヤツと絡めたら1部だけで一万五千超えたんだよ、それで第二部でもかなり削減してだなぁ…」
駿「ま、大変だったな」
飛焔「つかれた」
将「憑かれたと疲れただね」
和也「ひらがな偉大！！」
駿「文字の力だな」
和也「つーか、ミヤを襲っちまったンだが」
将「カズ……ドンマイ」
駿「無理矢理やる意味なくねぇか？」
飛焔「うん。1部だけで十分だった」
和也「なんでやったの？」
飛焔「……同性愛のを期待されたから？」
「「「それだけぇぇぇぇえええ！！！！！？？？？」」」
飛焔「ご期待にあまりそぐわれませんでしたが、カズミヤはやりました」
和也「レナとラミアちゃんのも少しやったな……踏みつけるだけだけど」

駿「俺達はなくてよかったな」
将「まったくだよ」
飛焔「ないと思ったか？」
「「え！？」」
和也「聞いてないのか？　これでもっとみたいとの声があがれば、オレと死神？！　番外編・死神の事情のＲＢ（ルートビー）よりやる事になる。レギュラーで」
飛焔「そこで、ヒマがあれば……ふふふ」
駿「……」
将「……」
飛焔「絶望せよぉぉぉ

【超番外編】ワタシと死神☆（後書き）

以上。それでは。

【１１４話】神馬と最強の肉食獣（前書き）

ポーニョポーニョポニョ……。

何故か脳内に焼きつく歌ですね、脳内に幾度なく再生されます。おもに（何故か）後ろから……。

真夏のホラーが僕の中で起ってます。

【１１４話】神馬と最強の肉食獣

「つーか、ダレだてめぇ？」

むッ？　俺様を知らないだと？　新人（ルーキー）か？　いや、コイツは産まれも育ちも葛飾柴又ならぬ、総部葎だぞごらぁ？　それでこの俺様を知らねぇだ？

けっ！　俺の名を刻んでやるよ。

「如月駿だ。カスが」

「誰に上等こいてんだァ？」

地面で気絶してる雑魚共を蹴り飛ばして俺の目の前に来やがる。

野郎と俺の身長はおおよそ同じ上から視線をやり少しでも威嚇する。

下に見られてる野郎は突き上げるかのおうに威嚇する。

「後悔すんなよ」

「そりゃ、てめぇだろ？」

動いたのは全く同時だった。俺の拳は空を駆り、野郎の拳は俺の鳩尾に減り込む。

攻撃力とスピードは和也より上……かッ！？　なんだ、コイツ……？

俺は怯むワケにもいかずに、すぐさま1歩下がる。

「逃げてんじゃねェよッ！！」

馬鹿野郎！　てめぇみたいな化け物（カイブツ）に間合いを取らないで戦えるかってんだよ！　ただでさえ、和也よりヤベーもの持ってんだ。こちとら、全力でいかねぇとやられるぞ！？

『手伝おうか？』

黙っておけ。これは一般人（？）との戦いなんだよ、半憑依なんかしてられっか！！　この野郎は俺が倒すッ！

スピードだけなら俺のが圧倒的に早い。間合いは計れた。アイツは和也と違って超近距離戦だ、和也みたいなオールラウンドでも、将みたいな策士でもない。それなら、最も近距離に長けてる俺としては嬉しいんだが間合いを持ってかれたら終る。

落ち着け。

全速力（トップギア）で行く。

「脚馬・龍昇閃脚」

相手を蹴り飛ばし、自分も跳ぶ（ジャンプ）して相手の最高到達点と同時にその上に行く。そのまま、身体に捻りを咥えて相手を踏み台にするように……蹴り落すッ！！

地面に叩き落され砂埃が舞い視界が奪われる。決まったか？

手応えはあった、これで決まってたなら最高なんだがな……しかし、決まってないだろぉな。

ジャングルジムの頂点に降りて上から状況を確認する。

砂埃は強風に撒かれ先ほど、野郎を叩き落した所が現るが、そこには小さなクレーターが出来ている程度で野郎の姿はない。ヤツは姿を消した――？

何処に行った？

すぐ冷静さを取り戻す。

「だァァアッ！！！」

後ろから男の声が聞こえる。振り返るとそこに居たのは先ほど落したあの野朗だ。拳を開き俺の顔を掴んでそのまま降りて地面に叩き付ける。

「ガハッ！」

頭に強い刺激を受け。意識が跳びかける……つーか、マジでヤベー。

「終りだ」

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｒａｋａｗａ―

厄介な事に撒き込まれた……。事の発端はマックでの出来事だった……。

とある不良Ａ……ン？　オレじゃねぇよ、知らないヤツだから借りにも不良Ａなんだよ。そいつが赤穂センパイにぶつかって持ってたカレーライスを落したと。そいで、誤りもしねぇで『マックでカレー』の事を友人と笑ってると。その不良Ａが殴られたんだ。そりゃぁ、顔の形が変わったからな。

そいでもやめないでもういっちょ殴ろうとしてオレが手首を掴んで止めてそれから色々あったわけだ。困った事に継坂センパイも悪乗りして、ミヤも撒き込まれた……と。

クソが。こちとらいろいろ苦労してるつーのによぉ？

なんでオレが刀や太刀やら銃やら危ないもの持ったヤツを相手にしねぇといけねぇんだよ？　ミヤが羨ましい……アイツ丸腰の相手じゃねぇかよ。どないして、オレがアブなっかしぃヤツを相手にしねぇといけねぇんだよ？

しゃぁねぇな。

「行くぞ、鎌」
＜……あいよ。＞

む？　やはり最近のコイツはおかしい……？　いつもならノリがいいんだがなぁ？　折角の出番だっつーのによ？　まぁ、気にしてるヒマはねぇんだが……よッ！

一閃。オレは銃弾を弾き返す。手がめっちゃ痺れる……。お、重てぇ……。

やっぱ、手で取らないで良かったぁ……。

「遅い」

オレが次の行動に入る内にセンパイは既にオレの後ろに居た。

速いッ？　いや……？　銃弾を弾く前から居たのか！？　と、なれば……カウンターに入ってもスピード差で負ける。

しかし、これほどのヤツだ、このまま攻めるかどうかもわからん。

スピード勝負なら……ッ！

「鬼槍（オーガスピア）！」

光の速さに等しい光速の突きだ。カウンターに適してるんだが、あまり威力はない。だが、オレの勘がただしければ、コレは避けられてそのまま下段から刀がオレを断つ。

予想通りセンパイは姿勢を低くして下段から切り上げる。

「連牙（コンボファング）」

そのまま膝で蹴り飛ばし、首筋に肘をぶつける。

手応えはあった……。だが、このままで終るほど柔な奴じゃねぇよな。

「……虎麟炎（こりんえん）」

棒読みかよ。つーか、センパイを攻撃した個所がイヨーにあちぃ!!! 火傷したぞ!? つーか、コレって気功術だァ!? おいおい……反撃の穴がねぇぞ?

クソが! やっぱ無差別格闘術では攻撃力が欠ける。スピードに難がある鎌術で対抗はできない。上手く工夫して攻撃をしてくしかないか……。

「化け物が」

「よく、言われる……なんでだろうな?」

ああ、オレもよく言われるよ!!!

―Ｓｙｕｕｉｔｉ　Ｍｉｙａｔａｋａ―

「すまねェニャ。しんちゃんのカレーの恨みは恐ろしいんでニャー」
「そなら、俺等は観戦でいいんじゃねぇの？」

どうせ、俺等は撒き込まれた側の人間なんや。そないなら、俺等が争う理由はなにひとつない。無駄な戦闘は避けたいんだがな……。

でも、なにやら俺と遣り合うつもりらしいな。あの構え……なんだ、姿勢を低くして右手を突き出したあの構え……。何者だ？　あんな構え見たことねぇし……。

取り合えずは相手の様子を見る。

「俺には俺の事情があるんでねぇ♪」

「知るか。やるつーならやってやるよ」

拳を構えて距離を一旦置く。何やら余裕そうな顔だな……秘策でもあるつーのか？　ンな事はどうでもいい、問題は和也や。ありゃ、やられるのも時間の問題……。

早く助けに入る必要があるつー事や。

「ダァッ！」

「俺の領域（テリトリー）にようこそ♪」

「なッ!?」

俺の拳を片手で止めた!?　違う、それより手が離れない…。まるで何かに引っ付いたみてぇや。つーか、なんで俺の拳のが痛いんだよ!?　つーか、つめぇて!　ンだよ…?　この火傷したみてぇな感覚は……。

?　まてよ、この感覚…!?

「らァ!」

先輩の拳が顔面に減り込む。2、3回転しながら吹き飛び雑木林の中に入る。先ほど異変があった右手をみると赤く火傷……いや、凍傷していた。ヤツの拳は確かに異様に冷たかった。だけど、人間が凍傷するほど冷たい手なんてありえん。

どないなっとんねん。

まるで……異能者（アカシック・スキル）みたいやなぁ……。まさか?

ヤツは……?

「それは違うな。俺はヤツ等には属してねぇよ」

「どういうこっちゃ?」

言うわけねぇか。

「やっぱ喧嘩は、素手（ステゴロ）喧嘩だニャー」

ウソこけ、よくわからん能力を使っただろーが。

まぁ、良い……ヤツを見定める機会だ。和也には報告をしとくか……。とりあえずは……コイツを倒す。今は、それだけの事だ！！

―Ｓｙｕｎ　Ｋｉｓａｒａｇｉ―

「大人しくしてられっかよ！！」

駿は動ける腕を使い、番田の顔面に喰らわす。押し倒された状態でも駿の洞察力と身体能力は伊達じゃない。一瞬の隙を突き起き上がる。そのまま立った勢いを殺さずに回し蹴りを減り込ませる。駿の蹴りを喰らって大丈夫な筈がなく、番田は大きくよろめく。

「ペッ」

口に溜まった唾液を出して、もう一度駿に向って構える。が、駿の姿は既にそこにはなかった。番田は辺りを見渡すが駿は視野に入

らない。上を見るが駿はそこにもいない。

（何処に！？）

獲物が消えた。番田は焦るが直後に野性の勘が冴え渡る。

「脚技・脚馬崩斧【顎（アギト）】」

（下だとッ！！）

十分に溜めることのできた蹴りは、番田が作った防御すらをも簡単に打ち破り番田の顎にクリンヒットする。しかし、攻撃は大振りで隙は多い、番田も怯みはしたものの、その眼は殺意に満ちている。殺意に満ちた者の攻撃は限界を超えていた。

「ッ！」

駿はすかさずバックステップしてよけるが、追撃のほうが早い。

（はやすぎだっつーの！！）

そう思うものの、スピードだけなら駿に勝敗が挙がる。だが、回避はどれもギリギリである。少しでもミスをしたらやられる。

拳は空を駆り蹴りが腹部に無理こむとほぼ同時にバックステップして距離を置くがすぐさま詰められる。尋常じゃない程の体力（スタミナ）だ。駿の脚は動きすぎて既に笑っている。半憑依もせずに普通の人間で通常の人間を超えてた動きをする。当然、筋力、体力、その他もろとも凄まじいダメージを負い動けなくなる。その前だ。

駿は既に限界が近づいてる。当然と言えば当然、音速に近い速度の移動をするのだから。

「脚馬だの脚技だのグダグダ言いやがって……統一しろや。つーか、これで死ね」

「お前みてぇなちんけな頭じゃわかんねぇし、てめぇなんぞの攻撃あたらねェよ。喰らいな」

「脚馬奥義・神風鳳學（しんぷうほうがく）！」

「雨宮流無差別格闘術　破壊の型　竜皇突神（りゅうこうとっしん）」

（はッ！？　あ、雨宮流だと！？　つー事は力と氣の怪物（パワーアンドスピリッツモノ）つーことかよ！！）

駿に焦りの色が浮かぶ。駿が放った攻撃は単純にいうと氣を練り蹴り飛ばした大鷲だ。番田が放ったのはほぼ同じ。恐竜の姿を練りそのまま特攻するというものだ。問題はそこではなく、流派だ、駿の蹴りは我流であっていろいろな段階を無視した蹴りだが、雨宮流は基礎、力、氣、速度、等多数を踏まえたバランスに優れ尚且つ氣と力には群を抜いてる破壊力を誇る。

駿が放ったのは単純に氣のみだが、番田が放ち突進したのは氣と体術。それは雨宮流の得意分野の集結。結果は目に見えた。

「ちぃ！」

打ち負ける。そう確信した駿は避ける事無く特攻した、ぶつかり合った氣は瞬殺されて駿とぶつかり合う。氣は消し飛ばされれて拳（ク）が交わるとなる。（ロスカウンター）

「へ……ッ！」
「ッ！」
２人共微動打にしない。次の瞬間までは。
「リ・ソルトグランディング！」
次の瞬間に強力な閃光が２人を撒き込んだ。

―ＳＵＲＥＩＰＵＮＩＲＵ―

これも必然だとでもいうのか……なら皮肉な物だ。まさか、こんなに早く奴と出くわすとはな、彼をも撒き込んでしまうとは……すまないな。

だが、彼女じゃないだけマシか……彼女だったら駿は死ぬ気になって掛かってったはずだ。別に男だからっていいというワケじゃねぇんだが……それに彼女はとっくにこの世にいない。駿の弱点は無

くなり、しかし、強みもなくなってしまった……。

果して今の俺と駿で勝てるのか？　いや、勝つしかねぇんだな…。第一ステージだとしても、負ける事は許されない。

……。ランスロット！！　円卓の騎士だが知らないが……俺等はお前を踏み潰す。

―Ｍａｓａｒｕ　Ｉｔｏｕ―

「アーサーじゃないか」

「……オーディン」

やれやれ、買出しの帰りだというのに厄介な奴に会ったよ……。君もそう思うだろ？　ディン？

『まったくだ。相変も変わらずに空気が読めないのぉ。小童が』

「円卓の騎士が戦士の聖域（ヴァルハラ）になんの用だい？」
「ちょっと、下着ドロして逃げてたらね…」

変わったね……。頭の上にパンティーなんか履いて……。前は少しまともだったのに何時そんなに壊れたんだよ？　ってか、先月に大根をぶつけてからか……最近下着泥棒が多いと聞いたけど、君だったなんて……よき好敵手（ライバル）（故）として頑張ってね。

「僕の前から消えろ。共犯に間違われる」

僕の評判に関る。

「え？　違うの？」
「……ディン！　行くぞ！！」

『キレた……最近の若者は……』

「エクス行くぞ」
＜壊れた貴様に使われたくないんだが…＞
聖剣（エクスカリバー）を出して来たという事は本気……か。前回みたいにふざけてはいねぇようだな？　この前は遊び半分でかかって来たから大根で勝てたが……ンなワケにはいかねぇみてぇだな！？　変態が！！
※将の人格は崩壊してます。

あの変態野郎には地獄の灼熱がいるみたいだなぁ？　ヒャハハハ、ンなのよりスゲー地獄を見せてやるよ変態野郎がァァ！！！？？？
※将のモラルは崩壊してます。

「エクス～その口調やべ～ぞ、包丁で喋ってってよ？」

＜我をあのなまくら包丁と一緒にするな飾られてるだけの剣など戦場で鍛えられ戦場を駆け、聖剣の代名詞となった我に比べたら……所有者さえしっかりしていれば……って！　鞘に戻そうとするな！　つーか！　アーサー！　貴様我を包丁といいやがったな！！＞

「「話しなげぇよ。黙れ包丁が」」

＜ひゃい…＞

妖精の加護を受けた聖剣……。傷を付けても癒えるから厄介なものだ。だけど……この変態はもっと他の事に使うことを考えないのか？　下着泥棒の手伝い以外で……。

仕方ない……。もう1度叩いて直してやるか……。今度は本気で！

―Ｓｙｕｎ　Ｋｉｓａｒａｇｉ―

……。この魔法……ランスロットの野郎か……。っにしても、どうしたものか……いつもよりキレが悪い……。

砂埃も晴れて俺の目の前に出て来たのは完全防寒具を装備してマスクをしたメガネの少年だ。うん、理由はわかった、風邪を引いてたんだね。しかも冷えピタなんか貼って……。来るなよ！　おい！！

「み、みつけ――ごほっ！　たぞ、素レイプ煮る」

その言い方は止めろ。まるで変態じゃないか。なんだよ、素でレ○プして煮るって？　極悪じゃねぇか、そんなの出来るのは和音ぐらいしか……ン？　誰だ和音って？　なんで知らないヤツの名前が出て来やがったンだ？

まぁ、いい……。

「な……？」

「落ち着け。閃光の刃だ、伏せたから問題はない」

動揺の色を隠せない番田だかにそう言っていく。魔法だの言ったらさらに厄介だな……いや、正しく言うと聖霊の加護だと言っても余計に難しい……。ったく、つーか、気がついてすぐに半憑依したからよかったものの……気がつかなかったら危なかったな。

無関係のコイツを撒き込む道理もねぇ。自分でいうのもなんだが、酸いも甘いも噛み分けてる俺からしては……撒き込めない。ちぃ！　どうすっかなぁ？

「マー君？　風邪を引いたんだから外出はＮＧィィ！！！」

あ、走って来たオカンにドロップキックされた。

つーか、オカン強いな……。あ、往復びんただ！　コレはきまった！！　おっと、ランスロットもといマー君は涙目だ。ゴメンナサイってもう怖いぐらい言ってる。そこで、オカンの得意技、首根っこを掴まえて引きずりながら帰る！！

……さよなら。和也の家の近所なんだ……当分和也の所には行けないな。

「……」
「……」
「……」
「……」
「じゃ」
「じゃ」

こうして、昔馴染みみたいなやり取りで帰ることにした。

なんつーか、馬鹿馬鹿しくなった？

【１１４話】神馬と最強の肉食獣（後書き）

直そうと思ってるのに直せない。しばらく更新をやめようか？　直すのやってると本編が進まないし最近ではワタシにに集中してたから直してませんでしたし、私生活がなにかと忙しいですよねぇ……。ま、中坊の戯言ですし、バイトは知人の芋掘り程度……大体５時間程度で、作者のちょっとした秘密の仕事を少々、そして受験勉強……練成会…そんで夏休みの毎日のようなダルさ……。そして、オールスターを見て燃え尽きた自分……。

暫らく更新をやすんで、コニさんの企画の方に集中しますか……。暫らく弄らなかったら意欲が沸くだろうし。

【115話】意地と食い意地（前書き）

はい。後書きに重大な報告があります。短い乱文ですがどうぞ。

【１１５話】意地と食い意地

力の差は歴然だった。和也の攻撃は赤穂に軽く回避され大振りの鎌なので隙が大きい。和也も最大限気をつけてるが、その隙を見逃さずに突いて来る。和也は完全に押されていて反撃の手は“この”和也は持っていなかった。

（強い…ッ！　オレの攻撃が軽く払われてるッ！）

下段から切り上げるが逆に刀で誘導されてがら空きになった腹部に拳が減り込む。拳が離れた瞬間に溜まった空気が吐き出される。崩れ落ちそうになるが、アッパーを貰い立たされる。吹き飛ばさないように手加減をして。そのまま体制を立て直そうとした瞬間だった。刀が首筋に突き付けられた。

「ッ！？」
「俺の勝ちだ（チェックメイト）」

剣先が喉もとのにほんの少し動かすだけで刺さってしまう。手も足も出せない。だが、別の言い方をすると、手や足以外なら何か出来る。という事だ。

（ターゲットロック。氣をアソコに集中させて……。破裂させるッ！！）

「爆撃殺！」

先ほど、赤穂が居た場所が唐突に爆発した。雨宮流気功術基礎の型・爆撃殺（バクゲキサツ）。空間を１ｍの等間隔の碁盤に例えてラインが交差して

る場所に位置を合わせて、体から送り出した氣を練り爆弾みたいなものを作り、炸裂させる、精密度の高さが用いられる。技だ。和也は隙を見逃さずサイドステップし右手で指鉄砲をつくり、左手を据えると、誰もが目視できる程の氣を指先に集中させる。昔に和也パパが古本屋で呼んだ某人気作品の技を参考にした技。らしい……。

和也パパこと、雨宮厳馬が編み出した技。それを和也が多少手を加えた技。

煙が吹き飛ぶ。和也はそのままの体制で腕を突き出して本格的に構えるが、その位置に赤穂は居ない。和也はその程度の事を既に考えていた。正面からは来ないし、背後に障害物がある故に背後も安全だ……。しかし、それだけの事。

（ソコか。当れよッ！）

「針鼠」

指先に溜められた氣が無数のレーザーとなりランダムに飛び散る。関係ないものまで撒き込み。関係無い物をも貫く。無差別攻撃。１本の閃光が樹から舞い落ちた葉をも貫きそのまま威力が無くなるまで貫いていく。動揺に他多数の閃光も同じように周辺に風穴を開けて行った。

しかし、赤穂は全てそれを刀で弾いた。最後の一本を大振りで薙ぎ払う。しかし、これが和也の望んだ光景。大振りの防御だ。

（空中、そして大振りの防御！　この瞬間を待ち望んでいた！）

和也の指先にはいつの間にか先程と同様に氣が溜められて居たが、

それは先程のと段違いにハッキリと青白い閃光が迸り限界を超えていた状態で何時、暴発しても可笑しくはない。

「！」

「アデュー♪　氣丸（キガン）！！」

先程とは違いちゃんと狙いを定め。先程の拡散と違い1本に纏め。先程とは圧倒的に違う威力。先程とは違い弾く事すら出来ない赤穂。そして、和也は3発目を用意し、放つ。

受け切れなくなった赤穂はそのまま吹き飛ばされるが空中で十分に威力を紛らわせたが、ダメージは重かった。誰から見ても明かな程に足が震えてる。しかし和也はトドメの1発を放たずに鎌を持ち接近戦を挑んだ。あのままもう1発撃っていれば勝てた。……“撃てれば”だが。

氣丸や針鼠は氣を大幅に使う。和也の1日の限界は組み合わせても3発だけ。それ以上使用すると暴発してしまう。所謂（いわゆる）、一発必中の必殺技である。数に制限があるだけ威力もかなり高い。和也はそれを使い切り、氣も残り僅かとなっている。ここで頼りになるのが、“鎌の副能力”メインはその名の通り『運命の悪魔を切り裂く』だが、サブスキルはどの鎌も統一して持っている能力だ。属性魔法。その鎌特有の属性を人間、半死神でも使用を可能とする。

和也は高レベルの鎌。付属属性は3種類。【風】【雷】【炎】の魔法を司っている。鎌を持った状態の和也には鎌の属性である、風、雷、炎の3属性は無効化される。無効化されると言っても、相手と自分の実力にもよる、小さな炎は大きな炎に飲み込まれる。そんな感じの事だ。

「逝れ雷。我を仇なす者に天帝の裁きを！　大雷光（ライトニング・ノヴァ）！」

快晴の空から特大の稲妻が落される。地面は焼け焦げるが、赤穂は刀と銃を仕舞い大太刀を構える。和也は上等と言わんばかりに鎌を頭上で回して石突で地面を突く。そのまま、梳（けず）るようなけたたましい音を発てて。両手で柄を持ち構える。

（迂闊に間合いを取らせたら駄目だ。間合いは奴のほうが格段に広い。鎌ならば接近して切り込む必要があるが……刀とかの場合なら違う。奴の３６５度、全てが凶器だ。）

※３６０度を、１年（３６５日）間違えてます。

（間合いに迂闊に入れば俺の勝ちだ。しかし、いくら大鎌でも大太刀（コレ）よりは素早い。隙あらば付け入る！　３６５度警戒だ。どこから来るやもわからん。）

※上記と同、そして、５度しか警戒してない。

「……」

「……」

互いが互いの間合いを計り動かない……いや、動けないのだ。先に動いたほうの負けとなる。赤穂が動けが素早さで勝る和也に勝機はある。和也が動けばバカデカイ太刀の餌食となるのは明確だ。ハッキリ解かるのは和也が動いたら負け。赤穂が動いたら和也が圧倒的に有利になるだけ。結果的には赤穂が動くのが得策なんだが問題がおきていた。それは赤穂と和也の決定的な差である。

（そういえば、腹減ったなぁ……。）

昼食を摂ったか、摂らなかったかである。故に赤穂が先に動けば

和也は9割がた勝てると、いう事だ。故に2人共動かないのだ……ただ、冷たい空気が2人の間で流れるだけであった。

これまでの攻めを見る限り前半はボコボコにされていたのに、何故か後半になると和也が押していた。それは単に、赤穂の腹の調子であった。和也は逸早(いちはや)くそれに気がついたが、ターニングポイントを見失っていた。

そして、この冷たい空気が流れてる今がターニングポイントだと気がつかないでいたのだった。それは空腹で頭が回っていない赤穂もである。

一時間後にレナが迎えにくるその時まで……。

「マジ、スミマセン」

はいはい、イキナリでゴメンねオレ、土下座中☆

別に話すとそんな長いワケじゃないんだけどさ。あれから暫らく

互いの間合いをどう取るかで睨み合いが続いていた。敗戦覚悟で突っ込もうと思って動こうとした時に上からレナが振って来た。なにやら、最近になって考えた重力を屈指して空を飛ぶみたいなものらしい。と、いってもスーパーマンみたいに飛ぶワケでもねぇ。単純に言うと浮遊。精々、５mが丁度加減が出切る具合だ。

まぁ、奴が落ちてきた。それでなんやかんやあって。腹の虫が鳴った先輩を連れて我が家で“カレー”をご馳走する事になった。それは何処かで見覚えのある光景をそっくりそのまま、“カレー”に写したという感じだ。大食いの人も顔が真っ青だと思う。パッと見、３００皿越えてるもん。因みになんでそんなに皿があるのかというと……棒を使って皿回しをする為なワケがないだろ。一瞬でも騙された人、お前は完璧なまでにボケだ。なんであえうのかと言うと……コメディーだからだ。そして、あり得ないほど短時間で作るのもコメディだから。因みに、セフィリアは皮むき担当。見事なまでの剣捌きで綺麗に皮を剥いてしっかりと大きさを揃えてる。なかなかのものよ……。

そんで、ヴァン君がスパイスを逢わせて。ラミアちゃんが野菜と肉を炒める。それでフィーはカレーをかき混ぜる。零亞が盛りつけてレナが運ぶ。みごとなまでの（魔界チームの）コンビネーションである。約２秒で１皿だ。材料？　それもコメディーだからだ。故に雨宮家の材料に現在は底がない。そして皿も。何故、オレが働かないのかというと、レナの馬鹿が風呂を壊したから、魔界の連中は連帯責任として、１週間こき使ってるわけだ。

レ「わぁ！！　フィーがカレーに落ちた！」
ヴ「た、助けないと。熱づ！！」
ラ「のふぁ！」
セ「熱さが原因」

零「……はぁ～」

カレーの上で忙しなく周ってれば当然か。辛口だし熱いし地獄だよな……。つーか、溜息吐かないで助けてやれよ零亞よ……。

そういえば……誰か忘れてるような……？

正解：宮鷹秀一。

【１１５話】意地と食い意地（後書き）

はい。ここで一旦更新を打ち切ろうかと思います。理由はと言いますと……疲れたから☆　……ウソです、凶器を持たないで下さい。理由はといいますと、コニさんの企画がどうやら３部構成になりそうで描いてたら間に合わないんですよ。８月末までなのでなんとか終ると思うんですが……。だけど、コニさんの企画を終えても暫らく休みます。何故かって？　飽きたから♪　……。お茶目です！　お茶目ですから物騒な物をお仕舞い下さい！！　お願いします！！　理由はといいますと……フルスクールパニック＆死神の事情を進めるからです。

実際の所を言いますと、フルスクとオレしには時代＆場所が同じなんです。内容は多少しか入りませんが、端と神徒計画、を大まかに繋げるつもりです。気分が乗ればフルスクにオレしに陣の出演もしくはその逆もあります。そして、何故に死神の事情を進めるのかと言いますと、題４部、それがいろんな人物の過去が主体になるんです。そこでマコちゃんが主人公こと雨宮和也を差し置いて完全レギュラー化（かも）なので、ちょぉぉぉと、死神（しにじじょ）の事情で触れたらわかりやすいからです。それと、作者がバトルがちょっとヤバイからです（これで作るのに一週間弱）。中坊のクセイに生意気かもしれませんけど私生活がなにかと忙しいんです。受験生で目標校がギリギリなので勉強に集中してる時期でもあります。愚痴ですねスミマセン。

ま、解かり易く言いますと。諸事情の為に連載を一時止めて、企画作品を優先に、フルスクをだいたい３０話まで。死神の事情をだいたい、２０話ＲＡまで進めたいと思います。あれ？　詳しくなった？　あ、これは大体の目安ですよ。フルスクは単純なコメディですから３日１可能ですし死神の事情ながら、ＲＢは別ですが結構捗り

ます（バトルが少なく、シリアスコメディーなので。ま、後半はなんですけど……。）って事でいつぞや決を取ったワタシになんですが友人やその他の人から面白かったと挙がりましたのでちょくちょくやろうかと思う始末です。

フルスクールパニック&オレと死神?!　番外編・死神の事情にも来てみてくださいね!!

フルスクは作者が暴走してます。

死神の事情はラブ&コメディ。真琴が人間界に落された時の話しでいろんな物に繋がって行きます。例えば飛ばされる際の真琴とレナの違いを考えて戴ければ……。

それでは、長々とスミマセン。ちょくちょく直すつもりですのでたまに読み返してみてください。あと、ふとキャラのアイデアや見てみたい話がありましては、まだまだ企画がつづいて降ります。第三部の後編までなので。更新してないのにも関らず来て見てください♪　評価・感想欄にいらしてくれたら作者が調子に乗ってオレしにを少し進めるかもしれません。勿論、メッセージも大歓迎です!!

長々とすみませんでした!!

【１１６話】裏の裏／前哨戦（前書き）

とある事情で１１６話を出します。はい、理由は聞かないでくだせぇ。

後書きには嘘予告が…？

【116話】裏の裏／前哨戦

「守護符！」

そう叫ぶとバラバラに散っていった札が効力を発揮させる。創られた壁は継坂腕（つぎさかかいな）の手を弾く。客観的には怪現象と思える出来事なのに、継坂は口元を少し緩ませるだけだった。宮鷹の疑問は深まる。

守護符による結界は明らかに怪現象でしかない、一般人から見たらだ。しかし、継坂は驚いた顔すら見せず喧嘩を純粋に楽しんでる感じが漂っていた。そして、宮鷹が気になってた事は1つだけあった。それは、凍傷を起した自分の手ではなく、継坂のあの言葉。

『それは違うな。俺はヤツ等には属してねぇよ』その言葉が宮鷹から離れなかった。宮鷹が能力の事を言う前に宮鷹が何を言おうか勘付いた継坂が言った言葉だ。つまり、継坂は少なからず“端”を知ってる。裏の人間だ、そして、能力を持っていると、いう事は…深い所だ。

だが、能力者なら“端”が強制的に連れてくはずだ。希少価値のある能力者、しかも異能力（アカシックスキル）……喉から手が出るほど望むはずだ。

企業に隠されてるのか？　いや、そんなワケがない。“端”の情報量は馬鹿じゃない。世界に住む全ての人間の個人情報を握ってる程だ……見逃すわけはない。

「りゃ！」
「遅い！」

使い捨てな為に守護符の効力は消え、それに気がついた継坂は右手でフェイントを掛けた後に回し蹴りを喰わそうとするが、肉弾戦では宮鷹に分がある。

宮鷹本流陰陽道を流派に持つ宮鷹は“舞”を主にした“妖術”や“呪符”を使わない実戦最強の陰陽師である。氣なだ使わなかった場合、和也とは同等以上に殴(ヤ)り合える。

宮鷹は継坂の脚を左手で持ち上げて、そのまま吹き飛ばす。そして、一気に間合いを詰めて腹部に拳を入れる。通常なら吹き飛ぶが、動いたのは身体だけだ、まるで固定されたかのように手が地面にくっついてるのだ、そなまま片方の手もつき腕の力で立ち上がり土埃ついた手を払う。

（やっぱりコイツ……。手に秘密があるみたいやな……？）

「なかなかやるねぇ？　楽しいニャ♪」

「どういたしまして…！」

左手を腰に付けて隠しながら宮鷹は印を結ぶ。属性は水。そして加工(メイク)。印を結んだ後に左手を地面に叩きつけると“氷の槍”が継坂を襲う。しかし、継坂は動じなかった。氷の槍は途中で止まっている、正確には、継坂には当ってる。しかし、それに威力は殆ど無かった、勿論、宮鷹はギリギリ外すのを狙っていた。しかし、まるで“魔法”みたいに氷の槍は継坂の手で止まっていた。

奇跡？　否。氷の槍が止まっている。

（……？　ヤツの手からなんか滴ってる？　あれは、水？　いや、

氷になった?)

宮鷹が見たのは継坂から滴ってる“水”だった、これだけ見ると“高温の手”だと思うかもしれないけれど、しかし、手から水の雫が落ちた瞬間に氷へと変わった。“元に戻った”かのように。

「異能……?　違うか、お前、陰陽師だな?」

継坂は呟くように言う。

「!?　なにもんや?　お前?」

宮鷹はイヤな汗を押えて問う。

すると、継坂は何時もの愛嬌のある目ではなく、鋭く冷たい目で見る。

「聖涼高等学校三年B組出席番号二十三継坂腕だニャ〜♪」

(ルビ長いやん!!　ちゅうか、全部関係あらへんがな!!)

だが、それはたった一瞬の出来事でしかなかった。すでに、継坂は余裕の笑みを浮かべていた。当然だが宮鷹もその変化に気がつく。が、次の瞬間、視界から継坂が消えた。

「とある会社の養子、だよ」

「――――ッ!!!!!」

目で追った瞬間に既に継坂の拳が減り込んでいた。宮鷹は肺にた

まった二酸化炭素を吐き出して、継坂の“腕”を掴まえる。

「効果範囲は手……なんやろ？」

「勘付いたようだ、な？」

そう考えれば打点がついた。凍傷を起した手、地面に引っ付いた手、一時は溶けたが再び氷に戻る氷槍角（ひょうそうかく）。

「お前の能力は、“手に触れた物を『状態変化』させる力”やな？」

「ご明察で」

【状態変化】状態変化…熱したり冷やしたりすると、その物質の状態が変わること。

（状態…固体・液体・気体）

物質そのものは変わらないので、質量は変化しない。

最も身近なものであれば、『水』。その姿は3通りあり。ふだん水道の蛇口から出てくるのは液体の「水」、暑い日には凍らせて固体にした「氷」を飲み物に入れたりする。沸かすことによって、どんどん気体の「水蒸気」となって空気中に飛んでいく。

水だけでなく、物質は「固体↑↓液体↑↓気体」と、温度によってその状態を変える。

（なに悠長に説明しとるんや！？）

人間の手とは握っていれば自然と汗が出る。それが手の甲にまで僅かながら出る（夏の場合は特に）そして、継坂は宮鷹の拳を止めると同時に僅かな汗を察知。そして、能力を発動させる。水から氷にえと変化させた。

次に土の変化だ、土言えど何種類もある、砂、ソルト、粘土など

さまざまだ。継坂は土を粘土に変化させて体重任せに乗っかかると、勿論の事ながら手は沈む。そして、能力を解除させて粘土は砂が交じり合った固い土に戻る。故に吹き飛ばずに威力を下に分散出来たのだ、立ち上がる時には能力で再び粘土に戻す。そして立ち上がればそれで、マジックは完成する。後は能力を解除して手についた砂を落せば完璧である。手形を見せないように足で手形を隠す必要がある。土の状態変化といってもピンとこないだろう、まず皆さんは、小さい頃に土（細かい粘土を多く含むもの）遊びをされたと思う（主にドロ団子とか…ないかな？）。もしくは、幼稚園の時に粘土を使って動物などを作られたと思います。その時に土が乾いていた場合、家とか動物などの立体的な作品が上手に作れましたか？　形として上手く作れなかったと思います。だけども、その土あるいは粘土に少しの水を加えて混ぜると土・粘土は水を含み、今までに形にならなかったのが、少し形を形成しますがぼろぼろと崩れます。また少し水を加えると自由に色々な作品が形作れ、さきほどよりも多くの水を入れると今度はドロドロになり土が流れてしまい作品の形が作れない経験があると思います。いや、なかったらマジでスミマセン。

そして、氷の槍、氷槍角（ひょうそうかく）だが、これは簡単だ。氷を溶かして水にしただけ。しかし、効果範囲は飽くまで自分の手だ、溶けた水が手を伝って、雫が落ちた瞬間に氷へと帰る。

仕組みは単純。しかし使い方によっては……。

「この能力は便利たで？　多少水滴がつい取れば簡単にジュースを冷やせるから」

「微笑ましい使い方やな！？」

主に日常生活（特に夏）で、便利な使い方が出来る。

「おい！　作者！！」

では、コニ・タン大先生。キャラの提供及び能力の提供ありがとうございました！！

「ここで暴露！？」

「流石ツッコミだニャー」

騙されたでしょ？　読者様？　今回は我、飛焔視点なのだ！！

「三人称やなかったんかい！！」

イエース。

「軽いやん！　さっきまでのシリアスは！？」

ないね。もともと今はコメディパートだ。シリアス全開にする気はない。ははははは、どうしたんだい？　そんあしかめっ面して？　幾ら見回しても無駄無駄無駄！！　ステルス&反響能力のお陰で君は場所を特定できな――　！！！

「羅針・十二死界」

ね、ネタバレワザ？　本編で？　ちょっと待った！！

ぐぎゃぁぁぁ

一口メモ

【羅針・十二死界】回避不可能一撃必殺級の宮鷹流最強奥儀。

「くっ（やっと、俺視点やな…）」

ちゅうか、むっちゃくっちゃ疲れたわ、やっぱり羅針はまだまだ未完成で消費も激しい。クソッタレが、それにしても、けったいな能力やな。

手に触れた物を状態変化させる力。

使い方によっては……！

「ン？　もう4時か……。そんじゃ、俺帰るわ」

「あ、あぁ……？」

……。

逃げられた？

大分、使えそうな駒だな。ま、俺は義父がどうなろうが関係ないんだけどな。宮鷹秀一。俺の義父はあいつの敵だからな？　ま、主に言うと吉村志穂さんかな？　ＴＮ社を相手にするんだ、実際はもっと力が欲しいんだけどな？　それにアイツ、妖刀に食われてる。

けっこう楽しそうだな、だが、あの実力じゃぁ、あの厳つい科学ヲタクな親父は倒せないな、本来なら刀を使ってるみたいだが、あの程度じゃあめぇ。それにまだまだ刀の秘密を使ってないな。桜色の刀の本来の力。いつになったら引き出すんだか。

だが、期待ぐらいはしてもいいだろう。

藪を突付いて……蛇が出るか……もしくは？

いや、考え過ぎだろう、過度な期待はそもそもしてない。

さぁて――。ショータイムの巻くがあがるみたいだな。

この決まった定石を覆すのは……どんな、常識（イレギュラー）はずれなのか。楽しめそうだ。だけど、笑顔もここまでだな。う～んと？　電柱の上か。

「尾行しなくても内通なんかしないニャ」

「君は大事な戦力だからね」

まったく、相変わらずわかんないやニャ。同類の臭いはプンプンするけど、コイツのは特に臭い。闇が染みこんでる。どんな世界で……いや、こっちの世界で生きてたんだろうな、一筋の光を浴びな

い、闇という世界で。

ったく、本当に嫌いだよ、あんたは。

「蒼譜（そうふ）」

神路蒼譜（かみじそうふ）。俺の上司だ。蒼髪蒼眼の美少年。得意武器は短剣（ナイフ）。この上ない程に嫌味な奴だ。それよりも、終焉（レクイエム）のトップ、つまり……。

「ん？　どうしたの？　腕（かいな）？」

あのお方のお気に入りだからな。

「……お前の敵、だんだん見えてきたで？　だけど……まだまだ甘いニャ」

雨宮和也。正直、一番怖い奴だ。奴は成長する、何よりも少しずつ迷いが晴れてる。だけど、もっとも……ヤツは鎌の力を引き出してはいない。まぁ、だけども奴はまだ蒼譜よりは遥かに下だ。だけども。古都宮を攻めてた時、奴のとなりで画面で見てたが……変わる。

アイツは蒼譜なんかより強くなる。

「君がニャーというと、相変わらず嘘っぽく聞えるよ」

そりゃ、褒め言葉だぜ――？　蒼譜？

俺は所詮……ピエロだからな？　おどけるさ、刻が来るまで。

―Ｍａｓａｒｕ　Ｉｔｏｕ―

「では、オーディン……誘いましょうか」

アーサーがそう言うと、辺りが徐々に黒に包まれて行く。黒い霧みたいなものが空間を覆い尽くすと前の見えない漆黒の世界が出来あがる。黒い霧に覆われた空間は１ｍ先も見えないような簸たすらに深い闇。だが、次第（しだい）に霧は晴れて望むのは緑が生い茂る草原。そして、多くの骨や錆びた武器が突き刺さってる戦地。騎士達には、最高の戦場（いくさば）だ。北欧の騎士オーディン。ギリシャの騎士アーサー。両雄が並んだ時だった。将はは近くに刺さっていた剣を抜き取り、魔力を注ぐ。すると、錆びて古臭かった剣は新品同然に輝きを取り戻す。

将の魔法。それは魔力を物体に付ける力。つまり、ビーダマに魔力を注ぐとしよう。そして、術者が投げて「燃えろ」と念ずるとビーダマは火の玉にへと変貌する。それを追うようして、将は剣に魔力を注いで、「研がれよ」と念じられて、錆びを接ぎ、さらに鋭く

変化したわけだ。

準備が完了した将を見てアーサーは1歩前に出る。

「さて、どちらが最上級の変態か決着を……」

「誰が変態だ。君だけだ」

アーサーは、残念そうに項垂れる。それを見た将は限界とばかりに冷淡に言う。

「そんな事はどうでもいい、ケリをつけよう」

と、言い切る。アーサーは先ほどまでの笑顔と打って変わって真面目な顔になると。聖剣(エクスカリバ)を低く構えて、振り切る。

「『閃光迅(せんこうじん)!』」

放たれた剣撃は地面を抉り真っ直ぐ将へ攻める。将はサイドステップをしてから、走りぬける。剣を振りきり隙だらけの横腹に、制服(ブレザー)の内ポケからパチンコ玉を取り出して投げる。スピード的に直撃する。アーサーの防御も間に合わないと思っていたが、突如の突風。それにより、玉は急激にスピードが下がり、アーサーはそれを叩き落す。すると、玉から白い煙が出て辺りを覆う。

しかし、その霧も突如の突風ですぐさま晴れる。

将は滅多にしないしかめっ面をして、訝しげに剣を見る。

「そうか、聖霊の加護か」

『その通り、アーサーの身は守らせてもらう』

将がそう言うと、聖剣が答える。エクスカリバには聖霊の加護がついている。もし、装備者が傷ついたのならば、たちまちに傷は塞がる。そういう逸話は数しれない。先程のは風の聖霊の加護。当ると煙が出るように細工した（魔力を注いだ）パチンコ玉のスピードと、その煙を払ったのも風の聖霊によるものだった。

将は間合いを広くして、思案する。

（どうする？　アイツに攻撃を与えるのは至難の技だ。前までなら2、3日は戦ってたが今はそんな時間はない。逃げるにもここはアイツが作りだした異空間。ならば気絶させるしかない。だが問題はココからだ……どうやって攻撃するか。）

「ちぃ！」

将の思考は途中で遮られる。アーサーの突撃による回避の為だ。将は避けてそのまま剣をアーサーの首筋を狙って切るが、アーサーが突然、しゃがみ剣は虚空を切る。

姿勢を最大限まで低くしたアーサーがそのまま剣を振り切る。

「『閃光破（せんこうは）！』」

先程の2倍程の大きさの剣撃は将を飲み込み吹き飛ばされる。

将は２００ｍほど離れた巨石に強打する。

「くっ…！」

痛みを堪えて立ち上がる。剣を杖の代わりにしないとすでに立てない状態だ。

（半憑依してなかったら、死んでたな……。）

将は旋律する。

『将、落ちついて戦え。聖霊の力を封じるにはアヤツに剣を触れさせなければいいだけだ』

後ろから北欧神話の主神であるオーディンが忠告する。その声は将にしか聞えないものである。それぐらいのヒントは将は最初からわかっていた。将は岩を背にして剣を構えるアーサーを睨む。

（変態でも実力はやっぱかわらないか……。）

「遅い、聖王（ホーリー）……！」

閃光が駆ける。アーサーはすでに将の懐に飛び込み剣を右斜め上に構えてそのまま振り落とさんとばかりに構える。その間に剣は力を溜めるかのように目映い光を収縮するかのように膨張し凄まじい光を放っている。最大の一撃である事を証明してるかのように、アーサーは勝利を確信した笑みである。

しかし、アーサーは気がついていない、将が微笑していた事に。

「斬破散塵（ブレイディア）！！」

剣が振り落とされようとする時に将は呟く。

「襲槍円（グングニルフェイス）」

そう呟くと対象物（アーサー）を中心にした八方向から漆黒の槍が飛び出し串刺しにする。振り落とされる光の斬撃は光を失いただただ、落ちるだけになる。

飛び散る鮮血を頬で受けて剣を持っていない左手の甲で拭う。

「……」

槍は深々とアーサーを貫き通し鮮血が飛び散っている。普通ならば誰もが勝利を確信したであろう。

『気をつけろよ、仕留めとらん』

北欧の老騎士はここからが本番と言わんばかりに冷淡に告げた。

ＴＯ　ＢＥ　ＣＯＮＴＩＮＵＥ？

【116話】裏の裏／前哨戦（後書き）

「お前は……俺？」
「ああ、そうだ」
運命の再会。偽りと本物の歯車が重なる。
「……はは。どーにでもなれ」
精神的に大ダメージを追った真琴……。屍の上に残す彼の言葉とは？

「……共鳴」
「合体……」
「スターエンドギャラクシー！！」
騎士と死神の娘2人は新たなる力を得て強大な悪へと立ち向かう！！

「マシンは古くさくてもな……。エンジンは新型なんでな！！」
F1に目覚めた駿。その先にある物（ゴール）とは！？

「僕は……君達を殺す」
将の言葉に一同が恐怖する！！
第117話・そして世界は滅んだ。

嘘です。

【117話】何が為の力（前書き）

将がどうなったのかは、何れわかります。

【117話】何が為の力

オレこと、雨宮和也の朝は意外にも早い。プロローグは例外だから忘れてくれ。

毎朝4時前に起きて晩飯の下準備と、地下倉庫の保管室で材料をひとつひとつをちゃんと見てよいものを選んでから調理開始だ。勿論、米粒だってオレが厳選したものだ。こんな生活環境になったのは中坊の時に魅夜のアホが風邪を引いた時になにも出来なかった自分がアホらしかったからだ、魅夜の両親は政治家ずいぶんと忙しいみたいだ。故に、月に一度かそこらへんにしか帰ってこない。殆どの時間を東京で過してる。そんな魅夜が風邪を引いたらオレが看病するしかないことで……。まぁ、自分が情けなかったんだ。

実際、精神的には誰よりもの弱いと思う。ちょっとした事で自分が簡単に崩れてしまう。そんなのは最初からわかってた。

ま、つまらない話しはいいだろう。

ふむ、今日の晩飯はどうするべきか？　昨日でジャガイモ、ニンジン、豚肉、タマネギなどなどがなくなったからな……？　久しぶりに鶏肉を使ってなにか作ろうか？　レナ達が喜びそうなものか……。

「北京ダック！」

レナ、シネ。

「私ですか……？　私は和也さんが作るならなんでも」

ラミアちゃん、取り合えずネタくれ。

「僕は手羽だ」

ふむ、零亞は手羽か……。だが、生憎なんだが手羽は人数分はねぇな。大食食らいがいっぱいいるからな。

「鶏肉？　それなら、唐揚げはどうかな？　もも肉はまだあったよね？」

うむ。たしかにもも肉は沢山あるぞ。流石はヴァン君だ。偉いぞ。

「……」

黙ってるなら妄想内に出てくるな！　セフィリア！！

よし、今日のメインは唐揚げに決定だな。なら、トマトとレタスを使ってサラダでも作るか。ラミアちゃんはコーンが入ってるのが好きだから、トウモロコシを少量とって……。

なら、味噌汁は……。うむ、このコンブからはイイ出汁が出るな……香りが他のと違う。しかし、鰹節も捨てがたい。昨日はカレーだから味噌汁は使ってないな。一昨日にはコンブで出汁を摂ったな、なら今日は鰹節にしよう。

しかし、物足りないな……。ま、大方は決まったから学校で考えておくか。でもって、米は昨日の内に選別したから……。朝飯の分を取って作りますか。

米は欠けてたり、白っぽ過ぎるのは駄目だ。とりあえず、大方はそれで分けてる。基本的に家は知人が送ってくれるコシヒカリだ。別に、ブルメ小説じゃねぇから詳しい事を言う意味はねぇか。

「ふむ、相変わらず速いな」

貯蔵庫から出てくるオレに声をかけてきたのは零亞だ。まぁ、詳しい事はまだ聞かないでおくが、掻い摘んで言うとオレの義理の弟になる。

「おはようだろぉが」

ま、これと同じ会話はかなりやってる。

「取り合えず飯作ってるから、学校の用意を済ませて着替えて来い」

「わかった」

さて、仕事だ仕事。

＊＊＊

調理を一段落させ、零亞には今の内に飯を与えとかないとアイツ、なにも食えないな。そんで今のオレはというと、貯蔵庫に行く前に洗濯機から洗濯物を取りだして今現在外に干してる。今日の天気は快晴。降水確立は０％の清々しい真夏日だ。最高気温は４２度だか……。風呂じゃねぇか。

最初は女性物の下着を干すのは苦労したが馴れればこんなものだ。
ふ、高い服と安物は一緒にしないのがポイントだぜ？　ふむ、今日はいい日だ。

＜日差しが気持ち良いですね。＞

「ああ……。それよりも今日から球技大会の練習かよ……だりぃ」

それよりも、後二日で大丈夫なのかよ？　そりゃ人並みに力を押えて投げるけどよ……。文化祭を楽しむ為だ、しゃねぇからそれなりに頑張りますか。それよりもよ……グローブねぇんだけど？　やべぇ！　それはマジでやべぇ！！

誰だ！？　「気ニシナーイ」ってほざいた奴は！？

＜一人しか居ないよ！！＞

「そりゃそうか……」

しゃぁねぇ……。学校に行く時に買っとくか。

ふむ、時刻は６時１２分……。そろそろか。

「「お邪魔しまーす！！！」」

「おお、双子」

勢い良く我が家に入って来たのはただで小さい瑠依を更に小さくしたような双子ちゃんだ。２人ともクリクリとした大きな黒めがご愛嬌で、互いに小さいツインテールで容姿はまったく一緒でわかり

づらい。紹介が遅れたが、彼女達は零亞の同級生で雨笠麗ちゃんと、雨笠霞ちゃんだ。たしか、区別する方法はリボンの色だった筈……？

霞「青いリボンが麗だよ」
麗「赤いリボンが霞だよ」

「お馬鹿なお兄さんに説明ありがとー！？」

そして、作者よ。新説に名前までつけてくれるとは……。意外に気が利くな。

「お兄様、零亞君は起きてますか？」
「お兄様、零亞君は起きてますか？」

お、お兄様……！？　な、何故にこんなダメージが！？

「？　大丈夫でしょうか？」
「？　どうしたんですか？」

「いや、なんでもない。零亞ー！　双子ちゃん来たぞ」

ま、何時もの事ながら無反応か……。やれやれ、反抗期な少年は困る……？　誰だ「お前もだろ」って言った冷たい読者は？　オレは反抗期なんかとっくに終った。ガキじゃねぇんだよ。

それよか、零亞だ零亞。こんな可愛子ちゃんに好意を寄せられているのにそんな態度は。それはよくないぞ。人生の先輩であるオレが言うんだから……？　誰だよ、オレを「お前もだろ」って見る読者は？　違うよな！？

「お兄様が虚空に向ってなにか！？」
「お兄様が髪の祝福を求めてる！？」
＜ご主人が太陽の力を吸収してる！＞

誰が髪だ。カミ違いです。髪の祝福を求めるのは某魔王と某Ｓだ。

その前にこのクソ鎌……。双子ちゃんが不思議そうな顔をしてるじゃないか。

「それじゃあ、零亞を連れて来るから少し待っててくれ」

洗濯籠を持って、縁側に置いてある鯉と、金魚（４４話参照）に餌を投げ入れてから、草履を脱いで家の中に上がる。

さて、ワガママで強情な奴は少しお仕置きが必要みたいだな♪

―Ｓｙｕｎ　Ｋｉｓａｒａｇｉ―

俺こと如月駿の朝はというと何時も遅刻ギリギリの時間だ。朝飯はというと昨日のバイト先で買ったおにぎりが主体だ。弁当とかも作らずに購買部や学食で済ませてる。

家は一人暮らしで月3万というかなり安めのボロマンションである。親は居ないわけではないが……簡単に言うと“捨てられた”のだ。原因は産まれ付きの深紅髪だ。親は両方とも日本人だ。立派な家柄のな。ガキの時に叩き込まれた茶道の作法は今でも覚えている。因みに妹も居る、兄贔屓なしで可愛かった覚えがある。

だが、小学校の時までは良かった。高学年になった時に捨てられたわけだ。面白い事に学校から帰って来たら家の中に誰も居ないし、家具もないわけよ。あったのは冷蔵庫と1人分の皿と俺の勉強机だけである。つまり、そういうワケだ。

「ねみぃ」

うとうとする目を擦る。今日から野球の練習だサボると和也こえぇからな。

『駿、どうした?』

スレイか……。俺も何故かはわからん。寝不足ってワケでもねぇし疲れが溜まってるワケでもねぇ。なんか最近ねみぃ。

「さて、ほんじゃ行くとするか」

スクールバックを持って俺は立ち上がる。忘れては行けないグローブと、昔振り回した金属バットを持って……。あれ、まだ血がついてやがる。血は落ちにくいってのに……?　なにに使っただって?

……。知らなくて良い事はあるのさ。

【如月駿】読み、きさら　ぎ　しゅん。ギャングチーム・カービッジ元リーダーであり、札付きの不良で有名である。現在は影薄同盟書記長。

国語辞典!?　そして人の過去の傷を塩を掛けて抉るな!!

『駿、時間がまずいぞ』

「げっ!?」

朝っぱらから疲れるみてぇだな。

―Ｓｙｕｕｉｔｉ　Ｍｉｙａｔａｋａ―

「……」

精神の集中。桜憑とのシンクロ。つまり座禅。それが俺こと宮鷹秀一の朝となる。基本は最初に座禅を一時間やってから筋トレ（腕立て等さまざま）をそれぞれ１０セットってクールダウンに座禅を一時間というの修行を毎日繰り返してる。そして、暇があれば式紙を使っての実戦練習である。

ま、健康的なのかはよーわからんが、それが俺の朝である。

後は何時でも使えるように“印”の再確認である。“印”は簡単なものでも大分複雑だ。入り組んでて似てるのが大量にありこれを使い分けるのは余程の才が必要なわけや。せやから、基本は札に“呪力”を込めてつくられた、“呪符”を用いて発動させる。

俺は基本的には“印”を使うが、速さを必要とする防除関係の札は持ち歩いてる。

「秀ちゃん、ご飯出来ましたよ」

俺に声を掛けてるのは由咲琶埜（ゆいさきはの）。俺の許嫁である。……勝手に決められたな。俺は家計が家計だから仕方ない、宮鷹は全国に名を派す有名な陰陽師（おんみょうじ）であり、武術を主とする本家の血筋である。

彼女……。琶埜の由咲は宮鷹と同じく有名な陰陽師の家計で宮鷹本家と違い呪術。つまり、呪いを主流としてる者達だ。そりゃ、陰陽師は呪術が基本やけど由咲の呪いは特別……。ちゅうか、ま、そこんとろは後でいいか。

「ああ、今行く」

誰や!?　夫婦ちゅーた奴は？　俺は認めんで!!　俺は貧乳よ

かでっかいのが……。その目はなんやねん？　いや、軽蔑せんといで！！

それよか、琶埜の事は和也にバレたらあかん。なにされるかわからんで……。

「なんか言いた気だな桜蓼？」

『秀一、座禅の時に乱れてたぞ。昨日の奴の事を考えてるのか？』

……。継坂センパイね。いまいち掴めない奴だった。あの人……何を考えてるんだ？

それが確かに集中を乱してる要因だった。

あの後、家の優秀な情報屋に依頼したんだが……。聖涼高等学校3学年Bクラスだけ情報が入って来た。学校での素行や家、家計もなにもかも不明。この情報屋は和也の伝手でもわからんかたクソ野郎を見つけた奴や。それがこの程度の情報……？

ありえへん。

「しっかし……。転入そうそう野球やらされるってなんやねん？」

『和也が手を回したのだろうな』

なんやねん……。

まったく、和也にはかなわんは。

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

「ううぅ……？　最近、朝の記憶が……？」

頭を押えてうめく阿呆（レナ）は無視の方向で。お寝坊な野郎でみんなに迷惑を掛ける馬鹿に天誅が下っただけだ。誰も殴ってナイヨー？

現在はスポーツ店でグローブを模索中。ラミアちゃん達は先に学校の方に向わせている。この商店街はオレに馴染んだ場所であって顔見知りが多い所だ。

ま、当然……レナの事に目が行くみたいで、レナは自分が注目される事を喜んでる様子でもある。しかし、問題なのはババァの情報の速さだ、以前は魅夜の「変態発言」そして、今はというと……オレのガールフレンド騒動だろう、一々、目が苛立つ。

誰もがオレと魅夜の関係を勘違いされてる状態で更に盛大な勘違いをされたら……。

「はぁ…」

「和也、溜息吐くと寿命が縮まるんだって」

「はぁ…」

「無視！？」

一日に軽く数十回溜息を吐く作者に言ってやれ。あいつ、そろそろ死ぬぞ？

取り合えずバットは学校のでいいだろ？　だから、グローブなんだよねぇ。

「８５００ＹＥＮ！！！？？？」

「和也が壊れた！？」

＜ご主人が壊れた！＞

た、たけぇ。マジかよ……。いい素材だと思ったが……？　いや、安い方だ……隣の黒いのは１３７００円だ……。たけぇ……。

財布の中を確認する。

８５００円ジャスト。

「……」

「……？」

＜ご主人？＞

さて、どうするべきか。

取り合えずグローブは後回しでいいか。

「レナ？　わぁてるか？」

「うん、２人だね♪」

＜最近多いね、戦闘が……。＞

仕方ないだろ……？　オレは完全に目をつけられてるんだからな？　裏の人にも表の人にも。

やれやれ、呑気に高校生活を送ることすらままならねぇか。

この気配は隠してるようだが……殺気だな。だとしたら……“端か……。”

気配は大きいのと小さいの……。これは下っ端かなにかか？

「レナー？　おめぇはどうする？」

「モチ！　腹ごなし！！」

「なら、授業中に早弁すんなよ？」

「うそん！？」

ウソじゃありませーん！！

「和也は良いかもしれないけど、私はここだと……」

「それなら、公園に行くぞ。寝坊助のお陰で時間がねぇ」

「だ、誰よ！？」

「お前だ阿呆！」

「阿呆って言う方が阿呆なんだよ」

「だったら、アホ」
「変化ねぇ！！」

ま、おふざけモードは終了っと。

「行くぞ、レナ」
「了解！！」

＊＊＊

「ここなら、誰もこねぇな」

オレが来たのは空き地だ。けっこう広い場所だが人通りも少なく喧嘩スポットとして不良達には有名な場所である。昔、病院かなにか建ってたという話だが、信憑性がまったくない。

聞くところによると、最初から鳥栖深に最初からあって買い手が多い筈なのに手放さないという事を聞いた事がある。

ま、ンな事はどーでもいい。

「付いて来てるな」
「うん」

……だが、狙いはなんだ？　オレの命か？　なら好機はまだまだあった筈だ。あの双子を人質にすればよかった。なのにやらなかった……。だったら、オレじゃねぇのか？　もしかしたら……レナな

のか？　でも、“端”がレナに用があるってのか？

……。いや、憶測だ。

もしかしたら……“端”じゃないのか？

決定するには速過ぎる……。つーか、1人増えてるな……ややこしい。

「行くぞ、鎌！！」

＜おぅ！！＞

「我、ここにて鎌の意を唱えん。我が鎌よ真（まこと）の力を現せ
其は科学の闇が産みし数多の中の一陣の光の内なり！　出でよ！
疾風の息吹！　唸り轟け！！　其の風は王者の疾風！！
『風嵐の鎌（ストームライダー）』」

ネックレスにしていた鎌をもぎ取り通常サイズの鎌『大鎌』に戻して、レナは呪文を唱えて「風」を司る疾風の鎌を呼び出す。レナの大鎌には刃はない。

「どうした？　刃ばねぇぞ？」

「へへん、風の刃だもん♪　見えなくて当然だよ」

なんつー奴だ。持ち手の位置から考えるとわかるが大きさがわからないぶん、回避はかなり慎重になる事が必要だな。はは、まったく……相手にしたらマジでこえぇぜ。

だが、味方だから頼もしいぜ。

「……」

「……」
「……」
「鷲！？」
「鷹！？」
＜隼！？＞

―Ｓｙｕｎ　Ｋｉｓａｒａｇｉ―

「如月旬！　覚悟！！」
「小栗じゃねぇよ！！」

家の戸を開けてイキナリ出て来た忍者装飾の野郎を殴り飛ばす。
吹き飛んだ忍者野郎は空中で体制を直して華麗に地面に着地する。
だが……。疾（はや）いのは俺の方だ。
野郎の腹に拳を入れて、頭突きをくらわせて地面にキスさせる。

ったく、舐められた者だな？　この俺にンな雑魚だとはよぉ？

いいや……。コイツ……。

「へぇ、タフじゃねぇか」

まだ立ちやがる。よえぇくせぇにしつけぇな。雑魚は雑魚らしくすっこんでればいいのによ？　しっかし……虚ろな目をしてやがる……。

なるほど、何時だかの魅夜と同じってワケね。だが、原理は違うな。

蟲だ。１つの人間に２つの気配がある。

「ぐ、がぁぁぁ

……。話しがすれたな。

俺が野郎を殴り飛ばして、野郎が地面につくまで約2秒。その間に速攻で下りてゆっくりと相手の空中動作を眺めて着地したと同時に。俺の鉄拳だ。かなり隙だらけで怯んだ野郎に頭突きして地面に熱いキスをさせるまでは良いだろ。問題は次だ。

突然立って叫んだかと思えば、身体の彼方此方（あちこち）から様々な動物の足やら顔やらが飛び出て来る。その姿は人間版キメラ。大鷲の羽に、虎の爪……わかるのでそれぐらいだ、動物もごちゃ混ぜになってなにがなんだかわからない。

俺と将と同じってワケじゃねぇ。

人工なのか……？

「ぐがぁぁぁぁぁあああああ！！！！！」

「ちぃ！」

目が逝かれてる！　まさに獣じゃねぇか。

「殺す殺す殺す

「瞬きでもしてみろ、そしたらてめぇは終り（しまい）だ！！」

ぶち殺す！！

「鏖（みなごろし）ッ！　鏖鏖鏖！！！　鏖鏖鏖！　鏖いいいい

簡単、絶命したという事だ。

瞬きは長くて０コンマ４１程度。地面に叩き付けられたんだ、当然といえば当然だ。当然、瞬きは一般人からしたら瞬きはかなり短い。しかし、俺からしたら……。

百発は簡単なんだよ。

俺は動かなくなり手をだらんとぶら下げて先程まで狂人（きょうと）と化していた者とは思えないほど全く動かない奴の顔を鷲掴みにする。

「出て来い」

「なぁんだ♪　気が付いてたんだ♪」

「……」

「所詮は失敗作だね、ちょっと薬を投入しただけで狂っちゃうし、蟲だって扱いきれないんだからぁ♪　それに、変化もできないんだもん♪」

「何者だ？」

口調からしたら……女だ。しかも、かなりふざけた野郎だな。

「株式会社黄昏の夜生態実験研究部第三科で部長やってる、三代雲雀（みしろひばり）よ～☆」

「……」

ＴＮ社？　つまり、コイツは実験生物ね。

女は不気味な笑みを作って近づく。身長は俺より圧倒的に小さく、１４０程度だと思う。

「私達の研究、それが……能力の開花」

それが、俺の不幸の始まりの言葉だと、まだまだ知るよしもなかった。

―Ｒｅｉａ　Ａｋｕ―

「零亞君？　どうしたの恐い顔して？」

人様の顔を勝手に除きこんで訪ねてくる麗。もう、３ヶ月もいれ

ば見分けがつく。

「……なんでもない」

しかし、気になる事がある。思い過ごしだといいんだがな。

最近、和也の方も気が付いてないみたいだが……監視されてる。どうやら、夏休みを終えてからだ。最終日になにがあったんだ？僕はこの双子に連れて行かれたからなにが起こったかわからんが……あの最終日から急激に和也の魔力が飛び跳ねた。

夏休みの中で和也は基本的な魔法しか使えなかった。だから、それを鎌や拳に加えて威力を補っていた。少なくとも中級の魔術を使えなかっただろう。それがイキナリ飛び跳ねたのが夏休みの最終日。少し遅れて日が落ちて帰った時だった。

雲泥の差の魔力。果たしてあれはなんなんだ？

だが、それが原因で監視されてるのだろう。最近になってやっと勘付いたみたいだが……実際はもっと前だぞ？　果たして目的は……？

「？　なんだろう？　零亞君」

「どうした？」

……なんだ？　揺れてる……？　いや……地鳴り？

「霞？　なんだろう？」

「麗？　どうしたの？」

……この感覚……魔力！？

「なんか、恐い」

「大丈夫、麗♪」

……。グランドか！！

「おっ？　零亞ぁ？」

グランドに向おうと教室の戸口を開けると現れたのはなにかと僕を敵視してる奴で太田秀平（おおたしゅうへい）だ。

「秀！　誰一人外に出すな」

「はぁ？　お前、何を言って……？」

秀の言葉に聞く耳を持たずして走り出す。

……。僕の勘があってれば……！

＊＊＊

やっぱり、地鳴りの中心はここか。（グランド）

「出て来い。お望みは僕なんだろ？」

地鳴りが一層強くなる。

……来る。

【117話】何が為の力（後書き）

ぼちぼち更新再開です。主はフルスクですが。

【１１８話】何が為の力【零亞】（前書き）

戦闘回は「なにちか」で第二部の方は終了です。

今回は、零亞、宮鷹、駿、和也、番田、赤穂、ラミア、レナと、とある新キャラという、豪華キャストの伏線回であります。

順番は、零亞、駿、番田、赤穂、和也、宮鷹、レナ、ラミアという順番で行きます。本来なら、ヴァン君と瑞穂も居れたいんですが、そしたらただでさえ凄まじくパワーバランスが崩れてるのに完全に崩壊しますし、瑞穂の話だとどうしても真琴が必要ですから、真琴は今……ですからねぇ。

それでは、なにちか零の編どうぞ～。

【118話】何が為の力【零亞】

地中からの地鳴り。それは暫らく続いた。

零亞はグランドの中央で目を瞑り神経を集中させる。地鳴りが一気に唸り激しくなる。凄まじい震度の中で零亞は立ち尽くす。

地面が裂け、一層に激しくなるが零亞は何も無いように自然と立つ。

次の瞬間、零亞が立っていた位置から巨大な蛇が現れる。

しかし、零亞は後方宙返りで避けていた。

『グギャァァァアアアアア！！！！！』

地面と同色で２０m超の巨大な大蛇である、半分以上は地面の中に隠れている為に５０mを超えてるであろおう。その大蛇は喉を鳴らしてから大きな真紅の目を開ける。凹凸（おうとつ）の激しい鱗（うろこ）で全身を覆われ、頭からは長さの違う2本のツノを持っている。その姿は大蛇というよりは、辰であろう。口元からは明らかに毒素であろう紫の煙を口から出して漆黒の牙を出している。片目は縦一文字に深く抉られた傷を持ち、もう片方の「灼眼」には、遠すぎて確認できないが、灼眼の中に黒く大きな刻印（ルーン）が刻まれてる。理性という物が欠落したように、無様に涎（よだれ）を垂らして、大きく口を開き牙を剥き出しにして零亞に咆哮する。

（やはり、父上が研究してた「禁術」か……。）

それを見て零亞はとある確信する。

（レプリカ技術……。そして……！）

零亞の思考は途中で中断する、零亞が横に避けると同時に蛇の尾が零亞を襲う。吹き飛ばされた石で頬を裂くが零亞は気にせずに構える。しかし、蛇は追撃せずにまじまじと校舎の方を見る。

蛇の狙いは校舎。

ネズミの頬袋みたいに口を膨らませて吐き出そうとするが、

「爆撃殺（バクゲキサツ）」

顔の真横で爆発が起き、顔が弾かれると同時に中に溜まっていたものは端にあるサッカーのゴールに紫色の唾液がかかり、一瞬で溶かされる。

（おいおい……。消化液っつーワケか）

零亞は笑みを作りこれからの戦いを楽しむかのように見る。

愉快気に微笑む零亞を他所に校内はパニック状態であった。地震と地中から出て来た大蛇。そして、なにもない場所での突如の爆発。

それで落ちついていられる者は少ない。ましてや、小学生である、男女共に幼く悲鳴やらなにやらが外に響き渡る。

蛇は首を元の位置まで戻して、零亞を睨みつける。

『キサマか』

低い唸り声のような声で蛇が呟く。

「ほぉう、喋れるようだな」

更に愉快なように零亞は答える。

すると、零亞の足元から再び尾が飛び出してくるが余裕綽々で回避するが、空中に跳んで避けている時に大蛇の口が零亞を襲う。

「甘い！」

大口を開けて迫る大蛇に向けて、作り出した火の玉を産み出してそのまま放つ。

放たれた火の玉は大蛇の喉に当たり、大蛇は痛みの為が勢い良く口を閉じる。

それよりも先に動いたのは零亞であった。火の玉を放つと大蛇の口の中に降りてそのまま下を引っ張り出して口の中から出る。

そして、大蛇の口が勢い良く塞がる。つまり、舌を噛まさる。

『！！』

声にも成らぬ悲鳴が響く。

「ばぁか」

憎たらしさ１２０％で零亞が言うと一層、殺意が篭もった目で睨みつける。

「喰らえ、風の刃（エア・エッジ）」

腕を横に薙払い、魔力の篭もった風の刃が放たれたる。

最もダメージがあるであろう喉に向かい放たれたが、まるで放ったのが夢のように何も無く大蛇も零亞が何をしたのかわからないようであった。

（手加減なんかしてないぞ？）

幾ら下級の魔術であろうが、零亞の中ではそれなりに深く傷を付けれるような魔法である。それがまったく効かない……。つまり、下級魔法は効かないという事だ。

零亞は心の内で舌打ちをする。

（切れ味は下級では１番だ……。手加減もしていない……。あれならロッキー山脈だろうが横一文字に裂けれるというのに……。頑丈すぎる。）

零亞の強さはあまり目立たない物だ。最初の頃はマントの効果で全ての攻撃を防いでいたせいか、攻撃が目立たないでいた。しかし、あの神堂真琴が負けたのも零亞だ、そして、和也のイレギュラーな力（運命（さだめ）の空間）によって免れたのだが、零亞の一撃による攻撃もだ。

破壊力だけならば、和也の次に高い。それを先巡した真琴と和也

の件で火を見るより明らかである。

「効かないか…」

零亞は小さく呟く。

大蛇はまた頬袋を膨らませる。今度の狙いは零亞。

（消化液……。後ろに避けて……！）

吐き出される。吐き出された物は先程の消化液とは違い、数多くの鋭利に尖ったニードル状の石達。

裏を付かれた零亞の反応は一時遅れる。

降り注ぐ石の槍の中で零亞は魔力を溜める。

「ウッドワォール」

零亞の目の前に現れたのは巨大な木の壁だ。石の槍は木の壁を貫通する事も無く平然と立つ。

五行思想に則（のっと）り考えると、木や草は土の上に立つ事から、木は土に強いて位置付くかれる。故に石の槍は木の壁を破れなかった。

しかし零亞はミスを犯していた。

それは、前方の自分の視界を防ぐ事であった。零亞の前方では、先程の石の槍とは比較にならない程の物が出来ていた、魔法を砕くには量より質である。壁をも撃ち破る巨大な岩の槍は回転をも加え

て力を溜めていく。上では大蛇が石の槍を大量に放っている、それは囮でしかなく本命は、この岩の槍。

「無駄だ」

『その盾がだ』

「？」

大蛇がそう言うと巨大な岩の槍が放たれる。岩の槍は脆くも木の壁を砕き、訝し気に大蛇を見ていた零亞を襲う。

「なっ…！？」

突如現れた攻撃に普段から冷静な零亞も戸惑う。しかし結論は早かった。零亞は右腕を突き出して、自分の氣を空気中の氣と同じくして一ヶ所にのみ集中させる。

迫り来る岩の槍。切れ長の目でそれを睨みつける零亞。

「爆撃殺」

そして、氣を送り流した地点に近付くと氣を一気に膨れ上がらせて爆発する。

その爆発で飛ばされたのは尖った先の方。串刺しや死傷は免れるかも知れないが大ダメージは確定である。

「回転する物……。そうだな、扇風機を素手で止める方法を知っているか？」

『？』

零亞は目を閉じてゆっくりと言う。そんな零亞を見て大蛇は訝し気に零亞を見る。諦めた感じをしないし、動く気配もない。

岩の槍は威力も変わらずに凄まじい回転を加えて突き進む。既にかなりの近距離。

「回転する物を素手で止めるには……」

岩の槍は2m前後まで近づく。回避は間に合わないし防御の体制でもない。

零亞はゆっくりと構えてから……

「回転する物の中央を突く!!」

地面を蹴飛ばし、勢いを付けて右手を岩の中央に叩き付ける。

回転は留まる事も知らずに依然と凄まじい回転で迫る。一方の零亞は段々と押されていく。地面を抉り靴の跡がどんどんと伸びる。

「嘗めるなよぉ!!」

零亞は叫び同時に踏み切る。先程まで続いた靴の跡も止まる。零亞は一層力を加える。回転は徐々にだが弱まっていってはいたが……。まだ回転は続く。

しかし、零亞は余裕の笑みを作る。明らかに余裕はない。平手で受け止めているものの、出血は酷い物になっていく、足元には血が溜まるが、

「龍滅掌（ドラゴニッククリア）！！」

岩の槍は砕かれる。

零亞が今までこの岩の槍を砕く為に使わなかった理由は単純、氣を溜めないといけなかったからだ。龍滅掌は破壊力抜群の攻撃だ、手に氣を溜めて相手に叩きつけてから吹き飛ばすと同時に拳を入れる。零亞は今回、拳を入れる工程をやらなかったが破壊するには十分であった。

粉々になった岩の槍を見て少し大蛇は目を見開いたがすぐ落ち着きを取り戻した。

「くっ…」

岩の槍を砕いたものの零亞のダメージは深刻であった。

『ダメージはあるようだな』

「大した事……ない！」

零亞は拳を2、3度握り締めてから言う。

（クソ！　ダメージ的には大丈夫だって言うのによぉ……。相手に攻撃が通らないのは厄介だな。）

忌まわし気に考える。零亞はゆっくりと肩を落としてリラックス状態を少し作ってから、すぐに構え直す。

『踊り舞……死ね！　レインアース』

零亞の頭上を中心に小さな石が浮かぶ。そして急降下、まるで隕石のように落ちてき、小規模なクレーターを作る。そしと最初の一個が落ちた事を境に次々と零亞に向かい落ちる。

零亞はそれを簡単に避けて行く。石の雨は止む気配も無く幾ら避けても幾ら時間が経っても止まらない。最低限の移動で避けていく零亞も徐々に足場にクレーターが成っていく内に悪くなる。

素早く避けながら零亞は大蛇の元へと急ぐ。

（ここなら、攻撃は少しぐらいマシに……！）

しかし、その判断は甘かった。大蛇はその巨体のまま倒れてくる。零亞は横に避けてプレスを回避するが、運悪く石が零亞の足に直撃する。

その怯んだ隙にも容赦はなく石が降り注ぐが、零亞は片足を庇いながら避け続ける。

『ふはははは』

大蛇が低い声で嘲笑う。

（このヤロー！）

＊＊＊

一向に止まない石の雨に零亞は苛立つ。
しかし、零亞はもっと危ない状態でもあった。石の雨が降り始めてから２０分近くが経つ。最初の方から足を負傷して片足でカバーしてるが無理して動いてる状態、更には炎天下である。幾ら零亞が常識外れの力があろうが所詮は小学生だ、体力というものが無い。しかも２０分休みもなく全力で動くのだ、体躯の小さな零亞には時間が経過していくだけで不利であろ、零亞の限界は近い。

石の雨は未だに降り注ぐ。

（しつこい！　それよりも……“核”は何処だ。）

核とは即ち、魔法を発動させるものだ。通常は「術者」であるが、例外も多いそれは術者が好んで使う魔封石（まふうせき）と呼ばれる、魔方陣と詠唱の代わりになるものだ。つまり指輪などの装飾品（アクセサリー）のような物だ。一部の術者は破壊されない為に体内に埋め込むのも多い。

魔力の発生地点は大蛇ではない。そうして装飾品らしきものも見当たらない。つまろい、体内に埋め込まれてるという事だ。

（……狙いはあの目だ……。落ちつけ……！）

気功と魔力を集中。回避と並行してる為に徐々にゆっくりと溜める。

通常、気功と魔力を合わせる事は不可能だ。それは力と力がぶつかり合う為に能力（ちから）が反発されて溜める事や形を作る事が出来ない。しかし、零亞の場合は事情が違う。

降り注ぐ石の雨を避けながら零亞は大蛇下へと潜り込む。

前回と同じく大蛇は再び倒れ自分の影という手段を防ぐ。しかし、零亞の狙いはそれである。これを予測していた零亞は既に横に跳んでいて大蛇の眼が有る真横へとずれていた。

「やっぱ、指輪の刻印……か」

『キサマ…！』

大蛇は顔を上げようとするが零亞の動きの方が速い。

「氣魔・鋼貫（こうつう）！」

通常の魔法や気功術なら通さないが、下級の技でもその数十倍の破壊力を誇る気功と魔力を合わせた物で幾ら固い外装を持っていたとしても眼だけは鍛える事が不可能だ。そして、破壊力を郡を抜いて高い技。

つまり……。

『グガァァァァアアアアアア！！！！！！！』

鮮血が飛び散る。

鋼のドリルは眼を貫き石の雨は消えて無くなる。

悶絶して暴れる大蛇に間合いをを大きく取り相手の出方を覗う。

（眼は潰した……。これで、終らせる！）

零亞は集中させる。しかし、零亞は見逃した点が１つだけある。

『なんてな』

「！」

零亞の足元から尾が飛び出す。しかし、当然が如く零亞は避ける。しかし、着地地点から尾が飛び出してくる。

「なに！？」

先程、零亞が立っていた位置にも尾が未だに引っ込んでいなく有り、そして今も零亞の着地地点から飛び出してくる。つまり、尾は２つあったという事だ。

空中動作の時に方向を返れる者はかなり稀で和也でも出来るか出来ないかは五分五分である。まだ身体の成長しきっていない零亞にはまだ不可能。

「がッ！」

尾により零亞は吹き飛ばされ、空中を舞う。空中で無理矢理回って威力を半減させるが、最高地点に達すると、迫るのは大蛇の顔。

すかさず防御の体制に入るが、速かったのは大蛇の頭突き。

吹き飛ばされた零亞は校舎の窓を破り、多くの机を巻き込み誰も居ない教室の横端に身体を強打する。そして、零亞の意識は深い闇に葬られる。

ピクリとも零亞は動かない。蛇は顔を近づけて校舎の中を除き込

むように近づく。しかし、全く動こうとしない零亞だが大蛇は警戒する。

《コイツ……。魔力が膨れ上がっている。》

気絶した零亞ではあるが、だんだんと魔力が増幅していく。

「なるほどな、お前は元から地中で過してるんだな、そのせいで殆ど最初から眼が見えていないんだ、俺を狙えたのは簡単、お前の五感だ。故に俺の位置までわかった。ま、意外だったのは尾が2個ある事だな」

『!?』

先程まで気絶していた零亞は何時の間にか大蛇の頭の上に胡座(あぐら)をかいて座っていた。大蛇はそれを振り払い零亞はなにもなかったかのように地面に着地する。そして、その位置に向って左右から2個の尾が襲う。

「鬼風」

狂風(きょうふう)が吹き荒れる。そして、尾は細切れになり地面に落ちる。

『!!!!』

激痛をたえるかのように大蛇は悶絶し先程とは比にはならないほど暴れる。消化液を辺りに撒き散らし辺りの木々や遊具を溶かす。

「俺は僕の為に力を振るうんだ。僕はあれを壊さないといけないからね……」

『ま、さか……！？』

「地を破壊し尽くす破滅の鑭（あらがね）。天を滅する破空の鐵（くろがね）よ。万物を砕く天帝の裁きを喰らえ。そして、無へと！　ジャッチメント・レクイエム・ゼロ」

快晴の空に悪雲が立ち込める。黒い雲を断ち切り、漆黒の十字架が落される。大蛇の頭を潰しそして地を深く抉り一周４００ｍと大きなグランドいっぱいにクレーターを作る。血が滴るがそれを漆黒の十字架が吸う。

そして、一回吸い始めると、凄まじい勢いで吸い尽くす。大蛇は悲鳴も挙げる事も無く干からび既に骨だけになる。大蛇はまるでミイラのように干からびた後に十字架を中心に大きな漆黒の球体が包み、圧縮されるみたいに小さくなる。それに飲み込まれた大蛇はグランドから居なくなり、同じく、漆黒の十字架も無くなる。最後に残ったのはビーダマぐらいの大きさの漆黒の球体。

零亞がそれを掴むと、その球体は本来の姿を表す。

黒い十字架に大蛇が巻かさったような形のネックレスである。それはまるで先程の光景のような不気味なアクセサリー。そして、尾も２つある……。

先程の光景をリメイクしたようなネックレスを零亞は握り締めて、砕く。

「地獄の葬儀……。どうだい？」

冷徹に、零亞は呟く。

＊＊＊

俺は僕を守る為にある。

僕はあれを破壊するよ。

その為の力だから。

その為にある力だ。

俺は僕の裏だ。

僕は俺の表だ。

どちらも偽り。

どちらも真実。

俺は僕の代わりで。

僕は和也の代わり。

闇に包まれ光を忘れた、禁忌の種族。

死神とエルフのハーフ、暗黒の種族。

産まれてはイケナイ存在。
あってはイケナイ存在だ。
それが、俺。
それが、僕。
アクレイア、それは偽りと禁忌。
阿玖零亞、それは真実と過ちだ。
君からは見えない。
君は見えないけど。
俺は……。
僕は……。
利用させてもらう。
利用し尽くすんだ。
目的の為に。
目的の為に。
「ふ、ははははははははは！！！！」

狂ったかのように俺は笑う。

その先には絶望だけだけだ。

知れた事か。

そう、なら。

絶望の味だろうが構わない。

希望の道は閉ざされたんだ。

俺は僕を守る、その先にはアイツが居る。

僕はあれを壊す。その先にある物を知る。

だから……。

だから……。

共存するんだ。

抹殺するんだ。

【118話】何が為の力【零亞】（後書き）

あ～。クロス作品が途中で止まってるというのにどうして、本編が嫌味な程に進むんだ……。

和也「お前が悪い」

雅人「作者、僕の話はなんなんだ」

待て、雅人君の話は現在修正中だ。エヴァが予想以上に強くなりすぎた。

雅人「だからって……」

いいか、雅人。頑張れよ。

雅人「おい！！」

和也「落ちつけ雅人、こいつがいい加減な人間だって知ってるだろう」

雅人「け、けど…！」

ふはははは。フルスクのパワーバランスを壊しちゃうか……そしたら俺も楽になる……！

雅人「さ、作者！？」

和也「オレしにより酷くするのか！？」

そうだよ、もともとは同じなんだよ、フルスクとオレしには。もう好き放題しちゃお♪

和也「……」

雅人「……」

【１１９話】何が為の力【駿】（前書き）

今回はお詫びを。本来ならば如月妹も登場だったんですが予定を超えて一万字近くなりましたので駿だけで。

そろそろ、雨宮妹、如月妹、石動が出てきます。乞うご期待です。

「なにちか」の番田は短編集みたいなので、番田から雨宮妹と話が広がって、如月妹と石動の短編みたいな感じになるはずです。

……なる、筈です。

【119話】何が為の力【駿】

駿は掴んでいた人間キメラを三代（みしろ）の方に蹴り飛ばす。蹴り飛ばされたキメラは突然、なにかに弾かれる、まるで見えない壁でもあるかのように激突した。しかし、速かったのはやはり駿、すでに三代の後ろに移動して回し蹴りの用意をして落そうとしているが、その攻撃は虚空を掠める。

姿勢を低くした三代はそのまま如月と間合いを詰める。

「相手の力量も測らず詰め寄り瞬殺する。古い手ね♪」

「くッ！」

駿はバックステップして間合いを計ろうとするが不気味な間合いを計る三代に駿は不気味な感じを覚える、近距離でもなければ遠距離でもない、そしてその中間距離でもない。まるで、彼女には間合いが存在しないかのうように近づいて来る。

そして、駿は本能的に近距離でも遠距離でも中間距離でもない微妙な間合いを計っている。それに比べて三代は自然状態でゆっくりと駿に歩み寄る。足を軽く引きずりながら歩いて何時でも反応が出来るように気を配りながら。

隙だらけに思える自然体だが一流の者が使うと隙はなくなる。

（取り合えずここだと危険だ、全力で走り抜けて学校に行くか？）

模索する。しかし、駿には気になる事があった。

（……あの声、あの顔……！！　そんなワケがあるか……そんな筈が！！）

駿は外面は落ち着いたように装っているが、内心は錯乱していた。駿の中では三代雲雀に対する物を強く感じていた。そして、昔の知人に面影を重ねていた。

高速移動からの急停止。そして、跳躍。屋根の上に足を着いて屋根伝いに場所を離れて行く。振り切ろうと複雑に、跳躍、着地。それの繰り返し。しかし、三代は駿の動きを予測してたかのように先回りを最短ルートで行く。

駿は幾ら放そうとしても放れない。近づこうとしても近づけれない。

そんなぎくしゃくした感じが駿をより一層苛立たせた。

（こうなりゃ……！　全力で！！）

駿は自分のギアを上げる。そして直線状の全速力。その速度は音速に等しい。これが通常の駿の限界ギリギリの速度。これが、憑依、半憑依をしたら違う。その速度は光速に等しくなり、そして神速ともなる。

半憑依状態の駿の全力の攻撃で立っていられる者は殆ど居ない。1秒に数兆放たれる攻撃を防げる者はほとんどいないであろう。しかし、それほど攻撃をしてるのだ、威力は低いと思われがちだが、足というのは自然と体重が移動してる為にかなりバランスを崩さない限り拳と同じ破壊力がある。足の力は腕の力の3倍である、故に

破壊力は損なわれない。なにより、駿は蹴りやそれらのスペシャリスト高速で移動しようが通常時に蹴りと威力は変わらない。

その駿が本能的に逃げ出す。つまり相手は……。

駿以上のバケモノとなる。

「どうして逃げるの？」

「ッ！？」

しかし、三代は既に駿の目の前。

（おかしい……。俺よりも速い？　何者だ？）

「アハハ♪　すごっく驚いた顔だね♪

それとも、私が彼女に似てるから？」

「！？」

駿の勢いは衰えて停止する。空中での静止からまるで石造のように硬直し落ちる。

けたたましい音を発てて木々にぶつかりながら落ちる。地面に落ちた駿は立ち上がる気力もないせいか、顔を上げて三代を見るだけ。

『駿！　ヤツは舞花（まいか）ではない。気を確かにしろ』

スレイプニルの声は駿に届かず、駿は自分の世界にいた。

＊＊＊

少年は孤独だった。産まれながらの紅い眼（まなこ）と紅い髪を持っていた。別にハーフというワケでもなく純粋な日本人の血を引いているのにまるで、忌み子のように黒ではなく紅に埋められた少年は何時だって孤独であった。

学校でのイジメや親の偏見の目。彼は優しさという物が知らなかった。ただ、彼の闇に大股で歩む少女が居た。少年と少女は幼馴染であり兄妹みたいな物でもあった。少女は泣き虫で恐がりで何時も少年の横でひっそりと居た。そこが、少女の居場所であったから。しかし、その場所は次第に奪われて行った。

少年に妹が出来た。何時も寝起きの悪い少年を起こすのも何時の日か彼女ではなくて妹になって行った。少年と遊ぶ公園も妹に入り込まれていた。少年は親が忙しい事も知っていた、その為に渋々、少年に妹を託したのもわかっていた。自分を毛嫌いしてる親、それに反して普通の、一般常識の髪と眼の妹だ。少年に蟠（わだかま）りは無く、寧ろ妹として大事にしていた。

故に、少女は居場所を失っていた。

少年は気が付いていた。しかし、幼い妹から目が離せなかった少年はどんどん少女から離れていった。妹も少年にべったりだった。だから、仲直りしたくても少年は気恥ずかしくて出来ないで居た。いつも普通に話していたが小学校の中学年ともなれば遊び仲間は男女で分かれる。しかし、少年には居なかった、少年には少女だけであったから。

別に恋心とかではなく、彼女がいなければ少年は1人だけであっただけ。

孤独に慣れ親しんだ少年は別に苦ではなかった。

そんな彼に呼びかける声があった。昔からノイズのようにたまに聞える声。少年が9歳を向える時、少年は自分の背後に居る1つの存在が見えた。

それは、八本足の黄金の毛並みを持つ馬。

それは、神馬。

『久しぶりだな』

その言葉の意味を正少年はどこかで理解をしていた。

＊＊＊

「池野舞花（いけのまいか）」

駿の目の前に三代は降り愉快げに言う。それはまるで、貶すように。

「……なん、で」

力を無くした駿は蚊の泣いた声で呟く。その言葉にはどこか暗く、

かなしい感じがあった。

「それが、私のモチーフだから♪」

その言葉と同時に駿は見上げる。その眼は普段から温厚で優しい駿の目とは懸け離れていた。その眼には殺意。憎悪。様々な負の感情が入り乱れていた。

その握り締められた拳は爪が食い込み血が流れる。

「お前は不幸な奴だ」

ゆっくりと立ち上がり土埃をいろんな物を払いながら駿は言う。そして、劇的に変わったものがあった。それは駿の髪の毛。深紅の毛は昔のように長く伸びる。膝の辺りまで伸びる髪を片手で整えるが突風で髪が再び揺れる。駿の長いストレートの紅髪は十分に駿の髪で遊ぶと、乱雑に落ちる。片付けをしない子供のような風は過ぎ去り、駿はまた、片手で整えて、ゴムで縛る。

その深紅の髪は尻尾のようであった。馬の尾如く風に髪を揺らされる。

深紅の髪は強い太陽の光でより一層輝きを増す。

それは業火。

赤毛がまるで燃えているかのように輝く。そして、駿は今まで誰にも見せた事の無い顔をする。

「俺を、本気で怒らせた」

「そう、なら私も本気で……！」

三代に次の言葉は無かった。駿の幾重の蹴りが三代の意識を遠くに刈っていた。しかし、歯を食い縛り意識を現世に戻す。しかし、駿の見えない速過ぎる攻撃は未だに続いていた。

音速、即ち３４０ｍ／秒。つまりは、駿の移動速度は1秒に３４０ｍであるが、それよりも速く繊細えある。もっと速い。音速なんて生温い物ではない。

三代は掻き消えそうな意識の中で力を溜める。そのまま手の平の手の平を合わせて強い衝撃波を生み出す。辺りの木々は吹き飛び電柱も吹き飛ばされ辺り一帯を破壊し尽くした。

しかし、その攻撃は駿に掠りもせず後方宙返りで簡単に避けられた。駿は地面に足を着けてから再び姿勢を低くさせる。しかし、一向に攻め様とはしないで低くしたまま目を閉じて集中する。

そして、三代を囲うように音速を超えた為に起る凄まじい風の音。その空気は貫通したかの様に穴が開いていた。駿があのまま突っ込んでいたら自分も餌食であっただろう。凄まじい風の衝撃波を受けてすでに三代はボロボロであった。

（ウソだウソだウソだウソだ！！！）

三代はその言葉を繰り返していた。

実力の桁が違い過ぎていた。それは凄まじい程。誤算、いや。逆鱗に触れた深紅の龍。あれは馬なんか優しい物の尾ではない。それは龍。そして、その逆鱗に触れたのは三代。龍の逆鱗に触れた者で

生きて帰った者は居ない。

そして、三代は言葉には言い表せない恐怖を肌に感じる。「速さ」おいう陳家な物に。しかし、三代からしたら恐怖の対象に十分であった。速度による見えない蹴りという見える攻撃。人の限界を超えている素早いフットワーク。そして、なによりも恐かったのが三代の意識を闇に行かせないという手加減である。まるで、じっくり料理してやると言わんばかりの怒涛の攻め。それらが指し示すのは駿の絶対的な強さ。

三代の意識は半分以上が闇の中である。あと、数発受けたら命はもうないと三代事態が確信してる。もう動けない、座ることもできない、なにも動かない。そして、未だに動いてこない駿に対する絶対的な恐怖心。

（そうか、アイツは自分の部位にスレイプニルを憑依させた。それで爆発的なスピードと脚力を手に入れたんだ。半憑依の素振りはただ私が見えなかっただけ。それほどまでに、速い。）

そう、駿は一瞬の内に自分の脚にスレイプニルを憑依させていた。故に光速に近い速度での攻撃を可能にしていた。それ以上にスレイプニルを脚に憑依させた事により、身体に憑依させるよりも脚という部位に憑依させる事でより強力になったという事だ。

つまり、普段の半憑依の倍以上の速度と脚力を出せる。

「教えろ。お前等は何を研究してるんだ？　さっきのキメラ、あれはなんだ？」

「ッ……。」

何時の間にか駿は三代の顎に拳を置いている。何時でも殺れるという確証みたいに。１４０程度の身長の三代に対して駿は１９０もある。威力を出すには十分である。

「我々はレプリカの研究をしている。詳しく言うと、レプリカを他の生物とを合成させる研究よ」

生態実験研究部第三科（レプリカヒューマンプラス）。それが彼女達の研究である。人体レプリカに多種多様、世界にある生物を全て合成してるものだ。摂り込んだ生物を己の武器として使うという研究である。駿や将と親戚みたいなものである。それが「能力の開花」というワケだ。

「あれは失敗作。暴走した物。産まれたばかりのレプリカには人格がないから、それを「蟲」で操るの。レプリカに刷込み教育でやったとしてもすぐに死んでしまうから、「蟲」という存在を使って刷込み教育をさせずに思考や言葉などを作ってる」

「……最後、お前はなんだ？」

今までとは違い語気が強い。

「研究の為に殺されて作られた……哀れな人間のレプリカ！　その成功作！！」

狂ったかのように強く。自分の存在が当然であるかのように、なにかに訴えるかのように、強く叫ぶ。その叫びを聞きつけてか、人が集まるのが自然であろう、しかし人は一人たりとも集まらない。偶然が偶然と重なり辺りの住民には聞えなかっただけ。入り組んだ闇の理由。

駿は三代を見下して言う。

「お前は失敗作だ」
「違う！」

＊＊＊

『駄目だな、コイツも失敗作だ』
『またか……？』
『ああ。困ったものだ』
『コイツは順調だったんだけどなぁ？』

白衣を着込んだ若い青年達の声が聞こえた。書類らしき物を持ってなにか語り合ってるみたいであった。それは彼女を破棄するか否かである。一応はここまで成功したのは彼女だけであり、それは重要な研究対象でもあり失敗作であった。

青年達の論は激しさを増す。激論は他の研究員も巻き込み。残すか処分するかになる。これからの研究の為に少女を生かすか？　研究には成功意外無用。つまり、処分するか。

これからの為に彼女は必要だ。彼女を上手く利用すれば…！
だが、それがなににになる！？　成功しない限り意味はない！

２つの意見が飛び交う。

それを制止させるのは１人の若い研究員。

『わかったわかった。それならこうしよう、彼女がこれから私達の

為になったら彼女を生かす。彼女がロクに喋れずに役にたたなかったら処分。それでいいでしょ？？』

彼女の名前は浅黄留美音（あさぎるみね）。偽名かどうかは定かではない。ただ、ここではそう名乗っている。お互いがお互いになんの関心もない。唯一お互いが関心があるのは『レプリカ人間』の研究だけである。出しぬくか出しぬかれるか。それだけ。

留美音の提案に双方は渋々頷く。

彼女は、カプセルに入れられていた少女に微笑む。その笑顔は「大丈夫だよ」って言ってるみたいだった。その笑顔を、先程までの会話を少女はわかっていた。

彼女に助けられた。少女はそこまで理解をしていた。

＊＊＊

「失敗作じゃない！　私は失敗作なんかじゃない！！」

何かを思い出すかのように叫ぶ。目尻に水を溜めて。

「留美音が言ってくれた、私は違うって！！」

さっきよりは語気を強めて言う。その言葉にはより感情が篭っていて彼女の物とは言えない物であった。その眼は駿の言葉を否定してる。心から否定している。

「なら……さ。そいつは成功作って言ってくれたのか？」

瞳が濁る。それは図星の証明（あかし）。それは少女が彼女といる中でもっとも言って欲しかった言葉。でも、最後まで言ってくれなかった言葉。

「言ってくれねぇよなぁ？　テメェは紛（まが）い成りとも人間になれなかった奴には「成功作」だなんて言う奴はいねぇよ」

冷徹な駿の言葉。駿の口からは絶対聞えはしないであろう非道な言葉。

「そんな事……！　私は失敗作なんかじゃ……！」

三代の頭のメモリでノイズが走る。

そのノイズは酷くなり視界が砂嵐のようになって、なにも見えなくなる。

『やっぱ、発達が遅れてる。所詮は失敗作か』

聞えたのは1番嫌いな研究員の声。

「レプリカが本物ではないのはわかってる。だが、お前は人間にもなれてねぇ」

「！」

睨みつける眼は先程と攻守の逆転。

「お前には家（ヒエン）の作者に起承転結がないみたいに喜怒哀楽の表情（かお）がな

いんだよ」

その言葉に三代の眼はより曇る。憎しみを込めてみていた眼は何時の間にか伏せており、三代は力を無くし俯く。

そう、眼だけは。どんな事をしても彼女の表情は動かない。そう、彼女には表情というものが欠落していた。駿が感じていた不気味な微笑みは単純に眼だけが笑っていた。そして、三代の語気だけである。彼女の感情がわかるのは表情ではなく、言葉と眼。つまりは彼女は言葉では笑っているつもりでも顔は笑ってはいなかった。彼女は鏡の前で微笑んだ事もなにもない。

彼女は自分の表情がない事を知らなかった。

「喜んだり、怒ったり、哀しんだり、笑ったり。言葉では出来る。人間だってそれは出来る。でもよ、人間は言葉だけじゃない顔でも出せるんだよ」

優しく駿は頬を撫でる。

駿を知るみんなが口を揃えて言う言葉がある。

『駿は凄い奴だ』

それは身体能力的な意味もある。しかし、みんなの言葉の意味は「精神」である。駿の支えてる芯は強靭である。有言実行、どんな人でも信じるし、イジメられた奴が居たら自分の友人でも殴り飛ばしに行く。それが、如月駿だ

駿はいろんな人間に慕われている。クラスの中で最も先に馴染ま

れたのは駿である、卓越された運動神経を誇りで部活に勧誘されてそこから始まった友好関係は既にクラスの中心人物である。不良のレッテルを貼られていてもどんな人からも信頼される。それが、如月駿だ。

あの殺意の篭った眼は自分の大切な友人。つまりは、池野舞花が罵られたような口調だったからだ。自分の汚い幼少の頃を汚された気分であった。そして、死んだ者への冒涜。それを駿は許せなかった。しかし、駿は殺しはしない。駿は……否、スレイプニルの記憶を持つ駿が持っていた記憶。それは多くの死体の上に立ち血で塗れた自分を知っている。そして、駿は誰も殺さないと決意した。衝動はある、でも駿は押える。押える事が出来るのだ。それが、如月駿だ。

それは偽善だ。偽善で埋め尽くされてる。でも駿は喧嘩した相手にも笑顔で手を差し伸べられる。そんな優しさ。それが、如月駿だ。

不幸は自分だけでいいから。

だから、動物でも殺さない。蟻も殺せない。駿は偽善だった。だが、偽善の度を越してる偽善者であった。大きなお世話を自分からやる。例え不可能な事でも遣り通そうとする。そして遣り通す。それが、如月駿。

器から零れる水を、どんなに多くとも受け止める。駿の器だ。それを漏らす事はなく、何時だって受け止めてくれるのが駿だ。

「俺の知人にもレプリカがいる」

三代は顔を上げて駿を見上げる。

「そいつが、また表情豊かでよ」

笑顔を作り語り出す。

「アイツはアイツの表情（かお）があるんだ。根っからのサディストで笑顔に囲まれて、アイツを中心にして俺等が集まって、その隣に立つ奴が可哀想なくらい奴は朴念仁でよ？」

「成功作の事なんか聞きたくない！」

「一昔前までは喧嘩に明け暮れて、鬼とまで呼ばれてたんだぜ？表情なんか見せなくてよ。今のお前みたいにな」

「え…？」

「成れよ。本物（オリジナル）でも成功作でもない。三代雲雀に」

三代は一度しか名乗ってない自分の名前を覚えていた事に驚いたのか？　大きく眼を見開く。そして、先程から目尻に残っていた涙を親指で弾く。

駿は重たい肩の荷が降りたかのように肩を落す。

「わ、私に？」

「成功とかどうでもいいだろ？　だってお前はお前でここに居るんだ」

きょとんとした三代の言葉に、駿は視線を三代と同じにして答える。先程拭った筈なのにまた目尻に水が溜まる。それを誤魔化すかのように三代は欠伸のふりをする。

そして、駿の顔を見た時にはさっきとは比べ物にならないほど溜まって流れる雫。

「成って、いいの……。かなぁ？」

駿は何も言わずに頷く。

「だったら……。買い、たいの……！　あるんだ？」

過呼吸。息が荒くなり言葉を発せなくなる。辛くなって、なにも言えなくなる。駿はそれを何も言わずに抱きしめて言う。そして小さく「なに？」って耳元で呟く。

駿は肩を撫でて落ち着かせる。ゆっくりと酸素を吸い落ちつかせる。

「小さくてもいいから、鏡が欲しい」

三代は力強く言う。何かを決意したかのように。それは初めての自分意外の為の決意。自分の笑顔を見せたい人が居た。駿みたいな笑って、留美音に会いに行こう。そんな小さな決意。

その為に練習。その為にこの人に付いて行きたい。

そんな小さな事。

三代は何処かで、本物……。池野舞花が彼に淡い物を抱いていた理由もわかった。

（ここは、居心地がいいんだ。）

三代の零れる雫を、駿はちゃんと受け止めている。偽善の塊の器

で。

「なら、買いに行くか？」

「……うん」

（俺の力は人を殺す力ではない。俺はみんなの為に力を使う。自分の為じゃなくて人の為に）

駿は三代を1度見てから髪を纏めていたゴムを手に取り、それを三代に手渡す。不思議そうにそれを見る三代に駿は言う。

「それ、舞花から預かってたんだ。何時か返せって言ってた。雲雀に返すのは違うかもしれないけど。返しておく。舞花との約束だから……。だから、お前が持つべきなんだ」

渡されたのは、なんの変哲もない、ただの白いゴム。

三代はそれをまじまじと覗いて見る。少し黄色く変色して、でもちゃんと綺麗に手入れをしているのがわかった。

コレはただのゴムじゃない。8年も彼の手元にあった、唯一の形見。しかし、彼女が違うとしても駿は彼女にこれを渡す。

＊＊＊

『しゃん……？』

『なんだよ……』

『ほっぺ、きずついてるよ』

『大丈夫だ、かまうなよ…』
『だめ！　いつもケンカばっかりして』
『かんけいないだろ？　まいかには？』
『かんけいあるもん！』
『かんけいない！』
『あるもん！』
『ない！』
『だったら、きずつけないでよ…』
『ケンカなんだからしかたないだろ！』
『だったら、お守りあげる』
『お守り？』
『うん。パパが買ってくれたゴム♪　しゅんがもうケンカできずつかないようにね』
『い、いらないって』
『しゅん、それをもっててね？　でも、ちゃんと返してよ？』
『え？』
『じゃ、じゃあね、しゅん！』
『まいか……？』

＊＊＊

記憶が再生される。本当に小さかった時の記憶。あの時、急な突風と小さくなった舞花の声で聞き取れなかった。

多分、返す時が来たんじゃないかと、俺は思う。

「……舞花は、まだまだ先の事を言ったんだよ？」

諭したかのような雲雀の声に俺は聞き入れる。

「舞花は、
「私達の結婚式に」って言った」
「……は？」
「……朴念仁」

いや、朴念仁ってアナタ？　まだまだ俺も若かったし、ガキの遊びだって。

「駿？」
「ん？」

突然の呼びかけにまた振り返る。

「貰っておくよ？　これで舞花に負ける気はなくなったから」

……？　ドーイウイミデスカ？

わけのわからんヤツだ。元は舞花かも知れないが雲雀は違うというのに。負ける気がしないってドーイウイミデスカ？

むむぅ、女ってわけわからん。

……ま、いいか？　今回は血に染まらずに済んだから……。

約束だもんな……桜……。如月に咲かない筈なのに咲き誇る、不思議な桜。如月桜……。はは、今回の苗字が如月か、駿は……お前の血が通ってるんだな。

お前は生きてるんだな、如月駿の中で。

『……駿？』

「なんでもねぇよ。ただ、アイツを思い出してた」

一季目の世界。俺は疎開児童として

「如月」に預けられた。そこで出会ったのが如月桜。

俺の最初の失恋相手だな♪　俺は春斗の意志を強く引き継いで此処に居る。如月春斗。本名、鳴海春斗……。お前は、俺に何を望んでいるんだ？

……あの日にお前は何を言いたかったんだ？

……いいか、俺にはみんなが居るのだから。

【１１９話】何が為の力【駿】（後書き）

お気づきになられたと思いますけど、オレしにの複線の回収は少ないです。まだまだやりたい事があるので。

はぁ……２００を越えるな……。どんだけだよ。

では、そんな１２０話はちょっと番外編です。何故かって？　１２０あれば缶ジュースが自販機で買えるじゃないか！！

和也「ふ……ざ、け、る、な！！」

　昇龍拳。天まで吹き飛ぶ作者

駿「随分と久しぶりだな」

石動「はぅ！　お買い得感満載の１２０話です」

レナ「でもってどーいうのなのかな？」

よくぞ聞いてくれた！

レナ「慈悲だよ」

……（傷心）

和也「何をやらせるんだ？」

なんと！

『誰も気になってねぇよ』

……。

雨宮流特集＋短編（鎌視点）

特別編（オリジナル劇？）＋短編（零亞視点）

読者感謝編（リメイクストーリー（何話かは秘密♪））＋短編（真琴視点）

の、ＲＡ（ルート）、Ｂ、Ｃだ！！

『……はぁ』

……何故溜め息を？

【１２０話ＲＡ】ＴＨＥ雨宮流（未公開編）＋α（前書き）

どーも、飛焔です。前回の後書きで書きましたように今回は番外編という形です！！

桧山「オレしに第１２０回」
雲雀「缶ジュース買えるよ」
舞花「スペシャル編その１」
瑠璃「はじまりはじまり～」
幾島「私は何を言えば！？」

駿「なんでお前等が！？　桧山に雲雀は無表情だし、舞花は故人だろ！　しかも、雲雀と殆ど同一人物だ！　そして我が妹！　フライング登場じゃねぇか！！　確かに、そこまで言われたらセリフはない！　なら出て来るな幾島ァァアアア！！」

【120話RA】THE雨宮流（未公開編）＋α

＜THE雨宮流＞

それは、朝の始まりを教えるものであった。太陽の光が差して、薄ら寒い外の空気をオレは肺一杯に吸い込む。木々の爽やかな匂いに、小鳥の優雅な囀（さえず）り。

オレは自分の頬を両手で叩いて目を覚醒させる。基本、オレはYシャツで寝ている。寝ている時に皺になったYシャツを脱いで、無地のTシャツを着てYシャツを着る。

ん？　オレの着替えが見たい……？　ちょっとだけよぉ……。アンタも好きねぇ？

……。ごめん、古かった。

そうこう言ってる内にこういうのの特権で着替えを終える。軽く身体中を柔軟させてから部屋の扉を開ける。

そして、目の前にいる変質者（ヒエン）。

「……ふぅ」

ゆっくり扉を閉める。

扉を開けた先が薄紫だったのは気のせいだろう。開けた先にフェニックスみたいな火の鳥改めて、焼き鳥（ヒエン）が居たのは気のせいであろう。ちょっと疲れてたんだ、最近いろんな事があったからだ。野球

の練習もそうだし、鎌の特訓だってそうだ。文一達のとこの晩餐祭で振舞う……？　いや、出品が正しいのか？　まぁ、その食べ物を考えたり、食材を捜したりで疲れたんだ。

あ、学園珍事ファミリア！　面白いですどうぞ見てください。

他にだって、鎌の動きやまだ扱い切れてない鎌術で夜遅くなってたからだ。それに、扱いなれない魔力のコントロール。特に精神力を梳ってる。んいしても、この鎌……。まだまだ何か隠してるな。「運命の空間」の件もそうだし……。アレも。何を考えてるんだ？

＜ご主人？　私を忘れないで！！＞

あぁ、鎌を枕元に置きっぱなしだったな。

この鎌の付いたネックレスは珍しいだろう。まぁ、コイツはちょいと特殊で本当の姿は大鎌である。そもそもオレは人間と死神のハーフ。そして死神が持つ特殊な能力……つまり「鎌の召喚」だ。そいつでちょっくら召喚した鎌だ。伸縮自在（大は大鎌の時。小はネックレスにピッタリなくらい）でオレはそれをネックレスにしてつけてる。いちいち召喚するのは面倒だから、何時でも召喚しとけ！な感じだからだ。

オレは鎌を手に取り首にかける。ハハ、鎌首か……恐いねぇ？考えれば。

「さて、たまには卵焼きでも焼くか」

そう言いながら、扉を開ける。

……。

「やぁ」

「死ねぇぇえええ！！！」

鎌をもぎ取り瞬時に巨大化。そのまま振り落とそうとするが、焼き鳥の野郎素早く後ろに跳んで避ける。オレの攻撃は空を刈り、斬撃を生み出す。

雨宮流鎌術基礎の型「破空斬・鎌」だ。破空斬は剣術にもあり、ただ振り落とすのが横か、斜めかだけだ。剣術は、横からで鎌術が斜めから。威力は基礎の中でも高めだ。

しかし、その斬撃も飛焔は上に飛んで避ける。

「危ないじゃないか！　なんだテメェ？」

「テメェこそなんだ！？」

「作者（アイアムゴット）！」

調子によるな。

「テメェ、作者。オレになんのようだ？」

鎌を数回転させて地面に叩きつける。オレはそのまま飛んでる飛焔を睨みつける。

氣を大気中の氣に流す。空間を碁盤の目にに例えて……一点に氣を集中させる。コレは苦手だから当たるかどうかわかんねぇぞ……？　「爆弾」を設置……。

3秒前……

「雨宮流」

2秒前……

「気功術」

1秒前！

「！」

気が付いたか？　遅ぇぜ！　ゼロだ！！

「爆撃殺！」

一気に膨張。そして爆発。飛焔が丁度着地した場所である。まぁ、飛焔はバイバイキ～ンってワケだ。うん、綺麗に飛んでったな。よかよか♪

……いやいやよくないよくない！！　オレここに切り飛ばしに来たはいいけどよ？　オレは何をしたらいいんだよ？　何をしたらいいの！？

「まったく、イキナリ飛ばすなよ」

「お前は……！」

俺の目の前に出て来たのは１６５ちょっとぐらいの男としては低身長、少し痩せ方でなんか疲れた顔をして青ぶちのメガネの短髪野郎は……。

飛焔（純粋）！？

「魔●○ゥじゃねぇよ！」

流石はリアルでツッコミ役。そして、わかる人にはわかるような伏字だな。

でもって、本体で出てくるなんてめずらしいな。

「今回は和君に責任を取ってもらおうかと」
「お前に孕ませた覚えはない！」
「孕んでねぇ！！」

なんつー事いいやがるこの野郎。

「ええい、実はな……」
「実は？」

「調子にのって君の技をいろいろ出しすぎて忘れてるのもあるから、全部回収して、雨宮流をちょこっと教えて行こうかと」
「おい作者、どうやったら帰れるんだ？」

付合ってられるか。

＊＊

＊

和也「作者!?　描写がそんなにめんどうなの!?」
作者「ふ、描写が下手なんだよ」
和也「知ってる」
作者「……」

作者「それでは、中間発表しようよ」
和也「ァ?」
作者「ふ、飛焔にお願いに決まってるだろ?　それらしきものは今の今まで未開封でな。これを季にやろうと思ってな。メッセージの方のを開封するぜー!」
和也「読者様も忘れてるぜ?」
作者「うるせー!」
和也「さて、みなさんこんなクズの為にハガキサンキューな」
作者「ハガキ!?」
和也「ノリだ」

和也「オレのターン!　ドロー!」
作者（ノリノリ!?　しかも、遊●王!?）
和也「……ぁ」
作者「ん?　なになに……?」

【和也×魅夜のＳＭ】

和也「……」
作者「……」
和也「どうすんの?」
作者「王様ゲームという方向でやってみよう」
和也「……なんか気恥ずかしいんだが?」

作者「俺のターン!　ドロー!!」

和也「ガキじゃあるめぇ」
作者「てんめぇ！！　……は？」

【飛焔Ｓ　ＶＳ　オレしにメンバー】

和也「採用！」
作者「待て待て待て！！　第二部の戦闘回は「なにちか」で終りなんだよ！　戦闘なんてやらないよ！　しかもよく見ると総当たり戦って書いてるじゃないか！！」
和也「いいじゃん。番外編の方でやれば」
作者「それだ！　って違う！　そうじゃないだろ！！」
和也「いいじゃないか、徹底的にボコる」
作者「ンだとテメー？」
和也「ァ！？」
作者「ンァア！？」
和也「ァン！？」
作者「アアァ！？」
和也「しつこいわ」
作者「だな」

和也「オレのターン。ドロー！」
さくしゃ（このネタしつけぇ……。）
和也「……鎌ァ！！」
鎌＜私！？　私の出番！？　私がメイン！？＞

【和也の性変換（縮小）リターンズ】

作者「アッハッハ！！（大爆笑）」
和也「その笑い声、常連さんじゃねぇかよ！　ついでに、アッハッハさんの小説もよろしく！」

作者「毎度毎度感想ありがとうございます。ここの場をお借りして感謝感激の…」
和也「＜雨宮流鎌術焔の型！　烙煌煬（らくこうよう）＞」

凄まじい熱量を纏い鎌を斜め上段に構える。下から上げる軌道は火龍が昇るような描く。そこから振りかぶり特攻して真一文字に払う。焔の斬撃は獅子を作りだし相手を数億度の灼熱地獄で屠（ほふ）る。

和也「お前の大罪、地獄の焔に焼かれな」
作者「ぼはぁ」（黒焦げ）
和也「ちぃ、流石は火の鳥だ死なないか」

＊＊

＊

和也「んで、やっと本題か」
作者「だな。」
和也「どんどん上げてくから行こうぜ！」
鎌＜私だ、私だ。私の出番だ＞
作者「はい、雨嵐。的には、古都宮の重工が開発した警護用ロボのＫＮＩＧＨＴあるから」
和也「気が利くな」
鎌＜また盗られたぁぁあああ！！！＞

和也「んじゃ……まずは！　雨宮流剣術　衝の型　円閃斬（えんせんざん）」

鞘を抜いてそのまま勢いに乗せて一回転する。雨嵐は当然が如く

蒼い起動を描き、和也を中心に切り裂き、周辺の物を真っ二つにする。しかし、ＫＮＩＧＨＴは屈んで避ける。雨嵐は再び鞘に仕舞われる。そして、一瞬で相手の懐に飛び込んで蹲った相手に踵をぶつけて空中で背を曲げる形になる。

「雨宮流剣術基礎　破空斬・双牙」

雨嵐を出して下段からの破空斬。しかし、それでは終らない。振り上げたまま上に上げて大上段から振り落とす。しかし、雨嵐はＫＮＩＧＨＴの腕で防がれるが、胸部の防御が薄くなる。

「隙ありだ！　雨宮流格闘術！　鳴雷掌（めいらいしょう）」

隙だらけの胸部に雷を纏った拳を叩きつける。しかし、雷で胸部は少しだけ黒ずんでいる。

「逝きな！　雨宮流剣術　奥義　玖頭龍破（くずりゅうは）」

雨嵐を放し距離を盗ってから瘋迅（ふうじん）を九発作る。しかし弾丸のように飛んでいかずに大気中で渦を巻き、ドリルのように凄まじい形を練る。雨嵐の先を相手に向いたまま腕を引いて構える。そして十分に氣を風に行き渡らせたらそのまま虚空を突くと九発の風の弾丸が放たれる。放たれたドリル状の風は形を変える。それはまるで龍。風で練られた龍はＫＮＩＧＨＴに食らいつく。

所々に青白い電流を迸らせる。

「痺れるぜぇ！！　雨宮流剣術　瞬！　重雷帆風牙（じゅうらいほふうが）」

玖頭龍破を放ってすぐ和也の姿は消える。一瞬の内にＫＮＩＧＨ

Tの後ろに刀を振り切った状態で雨嵐を2回程回して仕舞う。と、後方つまりＫＮＩＧＨＴに特大の雷が落される。莫大な電流を流されたＫＮＩＧＨＴは一時的にフリーズする。

「終りだ！　龍滅焔帝掌裂破（ドラゴニック・インパクト）！」

和也の十八番の龍滅掌の数万倍の破壊力を誇る、格闘術最強奥義。焔を纏ったオレンジの起動がまるで龍のように蠢き腹部に叩きつけられる。

数十tあるＫＮＩＧＨＴを吹き飛ばす。

「仕上げ！　雨宮流剣術　芸！　遊技斬（ゆうぎざん）」

落ちてくる状態のＫＮＩＧＨＴを和也は雨嵐を繊細に動かして切り刻む。

そして、地に落ちた時には金属のティディーベアーとなって落ちる。

作者「流石は剣が本家本元」
和也「まぁな、手加減したらあんなもんか？」
鎌＜作者さん！　私！　私！！＞
作者「はいはい」
和也「しゃぁねぇな。作者、おかわり」

作者が指を弾くと……見渡す限りＫＮＩＧＨＴの群れ。

和也「はぁん　＜鎌術我塵　血桜舞（ちざくらのまい）＞」

一機のＫＮＩＧＨＴを切り刻み、オイルが頬に当る。それはまるで鮮血が如く。

和也「へ！　食らえよ！雨宮流剣術　基礎！　天撃龍殺斬（てんげきりゅうさつざん）！」

約２ｍ程跳躍、雨嵐を下に突き出してＫＮＩＧＨＴ目掛けて突貫。串刺しと同時に柄の方に立って飛び降りて、雨嵐を引きぬき後ろ向きで刀を鞘にしまう。後方では大きな爆発を起す。

和也「雨宮流剣術　閃！　疾風煉斬（しっぷうれんざん）」

雨嵐の蒼い起動が閃く。疾風は全てを切り刻み、原子の位まで切り裂く。

和也「雨宮流剣術　基礎　土龍閃裂斬（どりゅうせんれつざん）！」

殆ど下段からの破空斬と同じ。しかし威力は桁違いで直線状のＫＮＩＧＨＴを滅す。

しかし、後方からＫＮＩＧＨＴの突撃と剣が襲う。

和也「雨宮流無差別格闘術　基礎の型　裂破掌（れっぱしょう）！！」

それを和也は冷静に対処してエルボーを当ててＫＮＩＧＨＴの頭を鷲掴みにして地面に叩きつける。しかし、龍滅掌のような衝撃波ではなくて、縦に裂くような鋭い衝撃波。縦一文字に真っ二つにされる。

今度は四方からの攻撃。

和也「剣術　雷鳴斬（らいめいざん）」

雨嵐を地面に突き刺して地面を裂き青白い稲妻が吹く。

和也「雨宮流無差別格闘術　速戦剣　閃雷十字斬（せんらいじゅうじざん）」

瞬時に間合いを詰めて鎌と雨嵐を使い十文字に切り裂く。

和也「雨宮流剣術　滅！　轟雷皇剣（ごうらいおうけん）！」

そこからの連携。ＫＮＩＧＨＴが分裂する前に蹴り上げて、十字に割れたと同時に雷を落とす。

和也「翔龍雷神掌（しょうりゅうらいじんしょう）！」

そこをアッパーのように拳を振り上げて塵一つ残らず滅する。

和也「＜雨宮流鎌術！　龍撃魔破（りゅうげきまは）！＞」

横で鎌を振り回し、その中心点から極太のレーザーっぽいのを出す。横からどんどん自分の正面に持って行き、正面一帯を全滅させる。

和也「＜雨宮流鎌術　基礎の型　黒桜斬（こうおうざん）＞」

横に薙ぎ払ってから、そのまま切り返して斜めから切り落とす。

和也「＜波閃咲（はせんこう）！＞」

鎌の石突を相手に突きつけて吹き飛ばす。一瞬だが獅子の姿が浮

んだ。

和也「＜雨宮流鎌術　滅殺　覇魔滅殺陣（はまめさつじん）＞」

和也を中心に巨大な魔方陣が描かれる。そして辺りの瓦礫やらなにやらが浮びあがる。そのまま和也は鎌を地面に突き刺す。そして魔方陣全体を闇が包む。そして残ったのは中心部。つまり和也の足場だけ。それ以外は無へと帰る。

和也「雨宮流鎌術最終奥義！！

深き闇の安らかな眠りよその内に秘めし極光の兆しを隔てよ。汝、我が深き闇により、永遠たる眠りへと誘う。貴様を屠る葬送の一撃ッ！

終焉せし常夜の斬撃（ダークネスエンド・ブレイジング）！！」

和也の周りに金色に輝く三日月状の斬撃が舞い、残ったＫＮＩＧＨＴを全て切り裂く。切り裂いた三日月は一点に集まり巨大化して、回転をしてそのまま切り裂く動きが封じられ未だに自分が切られたと気が付かない者に突撃してなにも残らず切り裂く。その一撃は今まで和也が放った中でも最強の分類に入る。かなりゆるく手加減しても全力で放つ魔槍裂破掌程（グングニル・インパクト）の破壊力を誇っている。

和也「ふぅ、ンなもんか」

鎌＜ご主人！　殆どが未公開技だよ＞

和也「ＯＨ！　全部感想欄だぜぇ？」

作者「……それに本編で出たのやっても捜すのがかなり大変なんだぜ？」

鎌＜どーりで私の出番が少ないわけですね！！＞

和也「……出番欲しい？」
鎌＜もちろんです！＞
和也「やらねぇよ……。ばぁか！」
鎌＜サディスト馬鹿ご主人ーーーー！！！＞

作者「と、まぁ。ホンの一部です」
鎌＜一部！？＞
作者「うん。授業中に考えた技なんかこの3倍くらいだぜ！？　出るかわかんねぇけど！」
和也「だから作者、防御系の技を考えてくれ！　オレの！！」
作者「やだね」
和也「ったく！　痛いのは嫌いだ」
鎌＜痛くさせるのは？＞
和也＆作者「大好き」
鎌＜……。＞

＜鎌とご主人　パート1＞

どうも、私こと運命の悪魔（ディステニーデビル）を切り裂く刃（ブレイカー）です♪

つーか、私視点!?　ヤッタ!!　これで全く使い様のない鎌の汚名削除!?　たしかエルさん視点なんかなかったしヤッター！武器が視点なんかいいー!!

うんうん、作者さんもわかるようになったじゃないか。人間が描写するのはありきたりなのよ！　だから私みたいな武器が視点となって戦闘をやれば世界もまたかわるのよ!!

「ふぁ～」

この大きな欠伸を掻いてる人は私のご主人。根っからのサディストで脳内検査をした方をオススメする朴念仁。まさか、あんなに積極的になってる魅夜さんの気持ちも気がつかないとは……。恐るべし雨宮和也(あまみやかずや)！　馬鹿の鑑だよホント！　たまに勘が鋭い時もあるけど戦闘とかそんな時だけだし普段はかなりの鈍感。

私は伸縮が出来て、大きい時は大鎌になったり、小さくしたらちょうど良いくらいのネックレスになる。ご主人は小さな鉄の鎖で私を留めてネックレスにして何時でも出せれるように準備をしてる。こんな時には頭が働くのもどうかと思う。少しは人の好意にも気が付こうよ。

「オイ、鎌ァ？　テメェ何を考えてやがった!?」

え!?　こんな時に鍵って鋭いの!!

＜ナ、ナンモナイヨー。アハハ＞

「思いっきり棒読みなんだがなぁ？」

口調からしてめっさ信じてない。寧ろ完璧にご主人の愚痴を考えていたことがばれてる！！

「ったく」

一蹴される。放置か！？　放置プレイなのか！？

何時も叩きつけられたり握り締められたりしてるのに今度は放置プレイですか！？　これはこれで……うほぉん。それとこれは放しが別だ。うん、寧ろ関係ないし……まさか、心身がここまで支配されてるとは。恐ろしい和也タイプS（サディスト）！

「オレは某起動戦士の敵キャラか？　ナギナタ持ったあいつかぁ？」

＜何時の間に読心術なんか！！＞

「さぁ？」

こ、この人は……！

本当にわかんない人だ。

でも……。素直な眼をしてる。どんな敵にでも食い下がる力がある。諦めが悪い。無鉄砲。信じた者を貫き通し。約束したら破らない。普段は思い遣りなんか全然ないけど、本当はかなり優しい。なにかと言って私を毎晩磨いてくれるし。家庭的。主夫だと言ったら万畳一致で認めるだろう。なによりも強い。そりゃ上には上がいる。

でも、ご主人は必ず食い下がる。

それが私のご主人である。

「鎌、今晩は何が良いだろうか？」
＜カルボラーナのスパゲティなんかどうでしょうか？　この前ＴＶで見たの覚えてます！＞

私は、こう見えても記憶力にはかなり自信がある。
私は、伸縮自在だ。
私は、装備者が持つ事により運動能力は数十倍に跳ねあがる。
私は、小回りを補うだけ破壊力がある。
私は、まだまだ能力を隠してる。
私は、自分の属性の魔法を術者が使えるようになる。しかも、火、雷、風。と、お買い得だ。

私は……優秀なのだ！

「黙れ、草刈鎌以下」
＜久しぶりの「草刈鎌以下」という暴言ですね！！＞
「じゃぁ、草刈鎌以下電気鋸以下？」
＜ひでぇ！！＞

しかも、なんか似たような小説の題名があった気がするんですけど！？

勇者以上魔王以上も宜しくお願いします！！

こんな事は日常茶飯事である。ご主人はある意味本気で言っている。そして気が付かないのだろうか？　私の縮少を使えばどんな草刈鎌よりも鋭い鎌が出来るというのに。まさに馬鹿の鑑。

うむ、ご主人なんか一瞬殺気だったからやめておこう。

＜そして、あのですね？　ご主人？＞
「んぁ？」

教科書を覗き込みながらボーっと尋ねる。ご主人。うん、気が付いてないね。この人は……。

「雨宮く～ん、そんなに先生の授業がつまらないのぉ～」
「げッ！？　日次（ひなみ）先生ぃ！？」

教壇で手をついて泣いてる彼女は日次恵理（えり）。科学担当の先生で……かなりの童顔でフワフワとウェーブのかかった綺麗な黒髪、そして、なによりも背が小さく１５０あるかないかである。そして最も特徴があるのは「涙脆い」という事だ。

滅多に遅刻しないご主人が遅刻した時に丁度、一限目の授業がたまたま彼女で……。

「うーっす」
「あまみやくん……ううぅ」
「はッ！？　日次先生！？　ちょ！？　な、何を泣いて！」
『……』（クラスの冷たい目）
「そんなに先生の授業がつまらないの？」（涙目＋捨てられた小犬の「拾って？」的な目）
「あ、あぁ……。あぅ」（困惑）
「いいもんいいもん、どうせ私なんか……」
「わぁー！　ごめんなさいマジスミマセン！　途中で信号待ちのバb……、御婆さんが居ましたので荷物持ち等お手伝いをしてたら遅刻いたしました！！　日次先生の授業スゲー楽しみにしてたのになぁ！！　あぁ！！　クソッ！！」

「ホント…？」
「マジで！　いや本当にです！！　もう2度と遅れません！」
「ううぅ……。うわぁぁぁぁあああああん！！」
「泣かないでぇぇぇぇぇえええ！！！」

という、事があったきり化学が一限目にあると必ずどんな事があっても遅れないようになった。うん、聞いてて凄く苦し紛れな言い訳だよね。それでも、信じるこのセンセーもまた……。

「ぐすん……。私なんかの授業より晩御飯が大事なのねぇ」
「すみません！　廊下に立ってますから！　なんでも持って立ちますから泣かないでぇぇぇえええ！！！」

ご主人、彼女を泣かすという事に凄い罪悪感があるんだね。凄い必死なのが伝わるよ。

……。あれ？　私には平気でやるのになに？　この格差は！？

それ以前にご主人が敬語？　古都宮でもないのに！？　龍二さんくらいだよ？　あと敬語を使うのは！？　今更ながらあの先生なにもの？

「く、くそ……。何故オレが」
＜自分で言ったことだよ？＞
「だりぃ……屋上でフケて「ぐすん」……へ？」

あ、ご主人スゴイ汗だ……。

「ジョーダンですよ、先生の授業はサボリませんって」

苦し紛れの笑顔だよ…絶対に。

＊＊＊

「災難やったなぁ？　和也」
「ミヤ、お前の眩しい笑顔を殴りたいと思うな。うん」

握り拳を作って横目で宮鷹さんい見せると人間を超えた速さで後ろに仰け反る。

「冗談だ」
「冗談に聞えんわ！」

私も冗談に聞えません。

「っにしても……。和也は日次先生に弱いのか」
「ならよぉ、駿。あの先生を泣かしてみろ。

凄まじい罪悪感だ」

声のトーンが暗いです。何時ものご主人じゃありません！

ご主人をここまで苦しめるあの先生はいったに何者なのだろうか？

まさか、このご主人が罪悪感を感じるなんて。

「なんかスゲー失礼な事を考えただろ？」

『！！？？』

その場の全員（レナ、魅夜、ラミア、ヴァン、セフィリア、フェアナ、将、駿、宮鷹）が反応する。物凄いイキオイで。

まさか、セフィリアすらも反応したぞ？

「……オレのガラスのハートが砕けた…」

「防弾ガラスの間違いじゃ……？」

「襲うぞ？　魅夜？」

一歩間違えれば危ういよご主人！！　カミングアウトしとりまっせ！！

＜ご主人？＞

「なんだ？」

＜ご主人がガラスのハートなら他の人達はどんだけ脆いハートなんですか？＞

「ほぉう、喧嘩売ってるよぉだな」

ひぃぃいい！！　ご主人の顔が恐いですよ！　凄まじい負のオーラが！！

「レナ、軽く鎌に同意してたでしょ？」

「ふぇ！？」

「……動揺」

「そりゃぁねぇ？」

「で、でも誰だって心は脆い……よ？」

「ヴァン、和也だぞ？」

「なんやねん？　そのものごっつー説得力ある言葉は？」
「カズだから」
「和也だから」

「……」
＜あのみなさん！　本当に傷心してます！！＞

『なに！？』

スゲー息ピッタリだよ！　読者様も思ったようなら凄まじいですよ！？　それよりもかなりご主人から負のオーラが……。

「鎌……」
＜ひゃい！＞

もう何時も恒例だがチェーンからもぎ取られて巨大化（と、言うよりは元の大きさに）して頭上で回転（まわ）される。普段言わないんだが……目が回る。え？　目があるのかって？

……細かい事は気にしたらダメだよ。うんうん。

取り合えず……こんなに振り回されたら私だって辛いの！！

「喰らえよ。お釣はいらねぇ！！　雷落し（かみなりおと）！」

ご主人の魔力を私がブースターとして魔力を強化してから、電流を纏う。ご主人が私を上空に投げて最高到達点に到達すると、身体に流れる電気を解放。

そして、巨大な雷を落とす。ゴメンナサイ、手加減はしますから

……。

そして周りながら落ちてくる私をご主人は地面すれすれになった所でキャッチする。なんか、グランドが騒がしいんですけど。

「なに……しやがる……」

駿さんがそう言い残してみなさんと一緒に地面に落ちました。……あ、あれ？　手加減はしたから多少の麻痺程度なんですけど？何故に？

あ、あれ……？　よく見ると宮鷹さんその他からタンコブが……ＰＴＡから苦情がたくさん来るであろう最強５歳児みたいに……？まさか、私が雷を落す前に殴って最後まですばしっこい駿さんには私の雷で麻痺したところ攻撃を……？

アンタ、鬼だ。

「オレの繊細な心を傷つけるからだ」

＜そ、そうですよね！！＞

ダメだ、軽くだけどキレたご主人は容赦がないよ。

暴弱無人。ああ、本当にたまにだけど見せる優しさは本当に飴と鞭だよ。

【飴と鞭　いや鞭と飴　我が主】

【１２０話ＲＡ】ＴＨＥ雨宮流（未公開編）＋α（後書き）

聖涼高等学校教職員は１２０話ＲＣのふろく特典でやりますよ～。
ちゅうか、必見！！

【１２１話】何が為の力【零時・前】（前書き）

へい！　特別編のルートとは交互に更新だぜ！　騙されたな！　因みに謝ることがあります。

なにちかで零時を書くのを忘れてました。因みに前後編の二部あります。

【１２１話】何が為の力【零時・前】

少年は走る。

走っても走っても届かないと分かっているのに走る。

少年は負けた事がなかった、勉強でも運動でもなんにしても。勿論、バレンタインのチョコの数も学校の誰にも負けた事がなかった。

場は小学校の大運動会。歓声やらなにやらが飛び交う場所。今の競技は６年生の代表リレー。

青のハチマキが鬱陶しく感じる。

少年はアンカーだった。そして、その前にいる少年も。

少年には負けられない理由があった。当然、前の少年にも。

ゴールテープまで後僅か。後続は２人にはついていけずに遥か後ろにいる。

少年は腕を大きく振り脚を大股に開き走る。目の前の少年に並ぶ為に。

目の前の少年も後ろの少年と同じように走る、彼女の為だけに。

少年はただ見してあげたかった。

少年は元気付けたかった。

意地と意地。

でも、現実は変わらなかった……。

順位は結局変わらず、少年は2位という結果に終り、少年は1位という結果で終った。そして、少年は初めて敗北を味わい、初めて来てくれた親の前で1位をとる事無く地面に膝を付けた。

少年の名前は古都宮零時（ことみやれいじ）。もう傍らの少年の名前は――

＊＊＊

「……ッ、最悪の目覚めだ……」

零時はベットから置きあがる。そして、夢の続きを思い出す。しかし、少年の名前は出てこずに、その後に父親に「古都宮の恥さらし」と怒鳴られた記憶が鮮明にあった。

時刻は夜、そんな時に裏庭にある森の迷路みたいな場所に父親と行き、投げ出されて夜をその森でさまよった記憶が鮮明に残っていた。

古都宮を継ぐ者は常に人の上に立つ存在ではないといけない。そんな父のセリフを思い出す度に苛立って仕方がなかった。

零時にとって、“常に人の上に立つ存在ではないといけない”そ

の言葉が気に食わなかった。まるで、普通の人間よりも上から目線で言ってるみたいで、まるで自分は人間よりすぐれた存在だと言わないばかりに。

自分が「そんな古都宮の長兄」だからという事は理解してる。理解はしてるが、理解出来ない事でもあった。「アンタは特別なのか？」「神様を気取っているのか？」

むしゃくしゃした気持ちが零時を余計に苛立たせていた。

「ヒマだ……」

普段多忙で世界各国を跳びまわってる大財閥の時期御曹子とは思えない発言である。彼は本当に珍しく5年に1度くらいしかないであろう休みを過していた。実際、彼は高校生だ、学校へ行けば問題はないのだが……今日は開校記念日でたまたま休みなのである。

友人に電話やメールで遊びの誘いをしようとも、全員零時の「古都宮」というのを気にして本音で言い合えないヤツラばかりである。形だけの友人でたまに合コンに呼ばれても零時ブランドとはまさにこの事、零時の気を引こうとあれやこれや。殆どが零時の方に言って他の男は手も脚も出せない状態である。

零時が「古都宮」の御曹子だからでもあるが、なによりは零時が誰が見てもイケメンだと言えるし話しのネタも豊富で知識がたくさんある。つまり、どんな女の子もばっちこーい！　な、感じである。零時も女好きの一種、ナンパなどもする男だ。軽い男ではあるが寄りつかない女なんか1人も居なかったくらいだ。

「はぁ～」

零時は再び布団にダイブする。

頭の中では「ヒマだ」としか言ってない。

「よし、瑠依をからかって見るか……って、瑠依は学校なんだよなぁ……はぁ」

妹をからかおうと思った矢先、妹が通う中学校は普通登校の日だ。

つまりは居ない。

只今の時刻はＡＭ９：３９分

部屋の中が時計の針の音だけで静まり帰る。

「ヒマだぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！！！！

何故だ！？　金持ち、イケメン、高校生、その他もろもろ！！

何故に女の子のフラグが起たないんだぁぁぁぁあああ！？　いつしかは妹にまで手を出しちまうぞぉぉおおお！？」

零時は盛大に暴走をしていた。そもそも妹に手を出すってなんじゃいな？　その前にそれは作者が居る時に言ってくれ。

そんにヒマなら外に出ればいいじゃないか。

それにお前は部活に所属してるだろ？

「そ、それだ！」

え!?　聞えてたの。つーか、見えてる?

＊＊＊

「きぇぇぇぇぇえええいッ!!」

空気を裂く音の後に、小切れのいい音が室内に響き渡る。

振り落とされた竹刀は有効打突ではない。

有効打突は、充実した気勢、適正な姿勢を持って、竹刀の打突部（弦の反対側の物打ちを中心とした刃部）で打突部位を刃筋正しく打突し、残心をしておく。

残心とは、打突した後にも油断をせずに相手のどんな反撃にも直ちに対応できるような心構えと身構えを示すことである。打突後間合いをとって、ただちに中段の構えとなる。また対して相手の反撃に備える適正な間合いがとれない場合、自分の中段の剣先を相手の中心（咽喉部）に向けて反撃に備える。残心のない打突は、たとえ正確に打突していても有効打突としての一本にならない事を認識する。

まぁ、つまりは……一本にはならねぇ。

今、攻めてるのも上手いが……。上手いのは守勢の方だ。絶妙な足使いで打突部をずらした。

審判の反応は当然のことながら無効と判断。

決まったと思ったのに決まってないんだ、攻めてる奴は焦ってるな。なにが起ったかわかってねぇみたいだ。刃先も下がってる。

このままだと……。

「やぁぁぁぁあああ！！！！」

大上段に腕を上げた時、先程まで守勢だった方はその隙をつく。普通狙うなら胴だろう。だけどもあの野郎一足一刀の間合で中段に構え、左足に重心を移しつつ右足を踏み出し始めて左右の手を内側に絞りながら押しだしやがった。右足を踏み出すと同時に左右の手の打ちを閉め、腕力に頼らずに腰を使い、剣先で咽喉部を突く。

直ぐに左足をひきつけ、体制を整えて中段の構えに戻る。

「一本！」

ワザとだな？　アイツ……。

「く……」

自衛に部長は危なっかしい足取りで戻ってくる。それを心配して集まる部員達。かくいう俺はあのクソ野郎を睨むだけだがな。俺の視線に気がついてか、あの野郎は俺の正体も知らずに人差し指を曲げて兆発する。

うん、あの野郎は天狗だな。よーし♪　ぶちコロース。

「ん？　古都宮！！」
「センパイ！？」
「来てたんですか？」
「久しぶりじゃねぇーか古都宮～」
「いやいや、俺だって一応部員っすよ？」
つーか、練習試合だったのね。しかも相手は名門の常盤台ねぇ。無名高のウチじゃ相手になってねぇな、つーか先鋒から副将まで相手の先鋒に全滅じゃん。えっと、なんつー名前？
……御手洗？
「御手洗硬磁、常盤大にスカウトされて入った1年だ」
あら、“みたらい”ですか。
「大将の飯田の奴途中で逃げ出してよ……そんでウチの部員は6人だろ？　それで大将戦に出る奴いねぇんだよ。流石に1人に全敗つーのはイヤだし……出てくれねぇか？」
「まぁ、いいですけど……。飛騨仁センパイがそう言うなら……。」
それに、あの野郎はきにいらねぇし。
つーか、久しぶりに竹刀を待つけど大丈夫かな？　ハハハ、負けたらどうすっかなぁ？　怒られるかも？　そしたらヤベーよ。
「紅陽側、選手は？」
うむ、俺は絶賛お着替え中だ。

「大将がトイレで帰ってこないんですよ。練習試合なので代わりを出しても……」
「……まぁ、いいでしょう」

稽古着を着て、垂れをつけて胴をつけて頭をタオル結んで篭手して面を被るっと。そんで竹刀を持ってレッツゴ～♪

さぁて、行きますか。

＊＊＊

迫る竹刀を受け流す。体制を崩された相手は元の姿勢に戻そうと焦る。普段の実力なら焦る必要はないだろう。しかし、相手の実力が異常だった。そして相手が二刀流の使い手だったわけだ。剣道に置いて二刀流は珍しい。守勢と攻勢が分けれるものの扱いが難しい。それを好き好んで使う者も少ないので滅多に戦わない性質（タチ）である。

二刀流のメリットはやはり二本の竹刀である、左手に小太刀、右手に竹刀を持つことにより完璧な攻防一体の構えがとれること、小太刀で防ぎ竹刀での攻撃というバランス。反面デメリットは尋常じゃない腕と肩、握力、腹筋、背筋、などが必要となれる、普通中段や上段で使う竹刀を片手で使うのには余程の力を使う。相手の全力で振るわれる竹刀を片手でいなすわけだ尋常ではない。

相手は大将。つまりは一番の実力保持者。しかし、見なれない二刀流の男に一太刀も浴びさせていない。それどころか負けていった部員達も。

垂れに視線をやる。それが大きな隙。

「メーーーーーーン！！！！！」

古都宮と書かれた垂れの男に。名門常盤大付属工業高校が惨敗した。全国区を上回るその実力者によって。高校生なんてレベルではなく既にそれは遥かに高い存在だという認識。

そして、審判は端を挙げ

「面有り！　一本ッ！！」

と、高々に宣言をした。

相手は固唾を飲んでいた。無名高の見た事のない得体の知れない男に全国の常連の常盤大が一太刀も与えずに終ったのだ、相手からしたらとんでもない男だろう。

古都宮零時（ことみやれいじ）。女好きでただの金持ちのボンボンと認識されてるが、そうではあるもの彼には大きな武器がある、異能などではなく彼は剣術の才能に恵まれていた。他にも運動神経など多くのスキルが高い。むしろ弱点を捜すのも大変な男だ。

しかし、彼の才能は和也に継ぐ才能に等しい。もし、彼が本気で剣道ならずとも剣術に飲み込めば大きな存在になる。そして、彼が本当に覚醒するのは間近な未来である。

そんな事は誰も知るよしはなく、寧ろ古都宮零時は弱い存在と捕らえてる。

しかし、気が付いてる存在は僅か数人。

彼は決して弱くない。

「お前ら……弱ェな」

限りなく強い存在だ。

小太刀をだらしなく下げて竹刀を肩に担ぎ天才は告げた。

＊＊＊

ふぅ、良い運動になったぜ。つーワケで俺は剣道の練習試合も勝った所で歩いて帰宅中というワケである。心優しいお兄様は瑠依の向えも兼ねて昼はファーストフード店でバーガーを歩きながら食って只今、懐かしい中学校に絶賛侵入中♪

因みに家の者に家出したのを見つからせない為にケータイの電源を切ったりしてる。うむ、今は家で大変な事になってると思うな。しっかし、懐かしいは……我が母校よ。

うわぁ、図書室の雰囲気変わってねぇな……ん？　不法侵入？ハハハ、そこん時は古都宮の名を上手く使うまでさ。天下の古都宮様だからな。

懐かしいな……『暗黒童話』作者がしばらく鬱状態になったという幻の本じゃないか。ガラスの靴を履くために……？　どうしたん

だ飛焔？　赤ずきんの方がいいか？　あの紅は……ん？　お願いだから止めろって？　ごめん、産まれ持ってのSが許せない。だから、夜な夜な瑠依の耳元で読んでやったら一週間返ってこなかったな。結構、胸にズーンとくるラストだったな。

？　どうしたんだ？　飛焔？　身体から炎が出てるぞ？

……よく、ホームズとか借りてたな……。あの間はなにかって？　気にするな。うん、気にしちゃ駄目。

さて、このまま瑠依の教室に向うとするか。確か……2－Dだったか？

図書室や特別教室はどれも5階にあって、4階には3年が、3階には2年、2階には1年の教室となっている。1階にはホールや職員室、体育祭や文化祭の大道具などが置かれる倉庫、仮眠室や用務員室がある。通路を渡ったら体育館に続いている。

つーワケで俺は3階に居るわけだが……。

「……」

「……」

バッチリ瑠依と目が合ったワケよ。そして、尋常じゃない程の殺気を放ってるし。コラ、科学の教科担当の増山先生が脅えてるじゃないか。それ依然に教室の連中も軽く恐れてる。

「ど、どうしたんだ？　古都宮？」

「昼飯を食いすぎて腹が痛ぇンじゃねぇの？」

と、場もわきまえないクラスのムードメイカー的な男が言うと、教室が笑いに包まれる。うむ、瑠依も軽く肩が震えてるな（怒りで）。それ依然に、あのクソガキィ、瑠依を笑いの材料にしたな？

ぶっ殺す！！

《零時、やめろよ》

《……》

《そうだ、その前にお前はなにをやってる？》

うるせぇな、３匹とも。爆焔竜も機鋼竜も羽風竜もマジメなんだから。いいじゃん、教室に侵入するくらいさぁ、大丈夫だって気が付いてるのは瑠依くらいだし。窓際の席が空いてるじゃん♪

《いいんじゃねぇ？　やりたいようにしたらいいんじゃねぇか？》

おお、話しがわかるじゃねぇか、冥闇竜。

《主、そのような邪な行為いけませんわ！》

園光竜は黙っとけ。

？　何時の間に竜装の竜が増えたかって？　修行をしてる内に覚醒したんだよ。俺に宿る竜は両の指の数、つまりは１０匹。その中でオス竜は爆焔、機鋼、羽風、冥闇の４匹で手は右。爆焔が小指、機鋼が人差し指が機鋼で薬指が冥闇そして、中指が羽風。左手の中指である園光だけである。

まったく、男にモテたくともなんともねぇのに。

因みに親指には雄竜と雌竜を統べてる竜だとか。

竜装での形状は

爆焔・火竜（サラマンダーアーム）の頭：腕を火竜の頭から首に変化

機鋼・雷竜（エレクトリックガン）の上顎：強力な電気の大型の銃を装備

羽風・風竜（ウィンドーブレード）の翼：風を纏った羽の形の剣を装備

冥闇・黒竜（ダークネスガントレット）の鱗：トゲの付いた黒い手甲も右手に装備

園光・光竜（シャイニングブレス）の息吹：さまざまな回復能力のある風

という感じになってる。ま、俺もまだまだ弱いから1つづつでしか竜装できないけどな。それと、園光は竜装というよりは、竜術。まぁ、魔法みたいなものだ。

さてと、久しぶりに授業を聴いて見ますか。

「……だ、あるからして」

「……つまりは、こうなる」

「……因みに、この化学式は…」

「……おい、古都宮、どうしたんだ？」

「……釘バットなんてどこから!?　って！　おい！」

はて？　この授業で古都宮なんて単語……？　先生の目が血走ってるな。

《零時ィ！　横！　横！》

どぉしたんだよ、爆焔…？

胡乱げに振り向くとそこに立って居たのは我が妹（マイシスター）。凶悪な目をして手には何故か血のこびり着いた釘バット。

「瑠依！？　待て、どこから血の着いた釘バットなんか！？」

「問答無用！　天誅！！」

「紅陽高等学校剣道部を舐めるなぁぁぁぁぁぁああああ！！！」

椅子に立ち前方宙返りで華麗に瑠依のバックをとる。

ふっ……。華麗に決まった。やっぱ、顔もいいと運動神経もともなるもんなんだな。うんうん。やっぱり俺ってば凄い奴？

勉学も学年首位、運動神経抜群で、顔もイケてる。

「ふ、まだまだ青いな」

「こぉんの……！　なんでここに居るのよ！」

「忍び込んだからさ！」

「警察にイケ！」

残念だが古都宮の跡取りはその程度では捕まらんよ。すぐ釈放だ。

「まぁまぁ、落ちつけって。授業中だろ？　いやぁ、土曜にも勉強って偉いぞ」

「お兄ちゃんもここ出身でしょ？」

「俺は親父と世界を飛び回ってたぞ？　帝王学とかで」

まぁ、今もなんだけどね。女は頭で知るな、身体で知れとか？
……え？　俺の自論だっていやだなぁ～。え？　わぁってるって？
つーか、汚い者を見る目で見るな愚民よ！

「この馬鹿兄貴……！」

＊＊＊

「だぁかぁら、ケーキ買うから機嫌を直せって」

竹刀ケースと瑠依のバックを持ちながら零時はぼやく。しかし、前を大股で歩く瑠依はまったく聞いてはいなかった。零時は嘆息してその後を追う。

普段なら迎えに来るだろうが、屋敷の運転手は恐らく零時の捜索に駆り出されてるのだろう。そんな中で悪の根源である零時は損ねた瑠依の機嫌をなんとかしようとするもののこの無視である。

（ったく、気難しいこった。）

誰のせいだ。

「おい」

零時の背後から零時を呼びとめる声が聞こえる。零時は胡乱げに振り向き相手を確認する。しかし、それは見た事のない顔であった。長身で髪を金に染めた短髪。耳には三連ピアスをつけてガラの悪い格好。見た所、常盤台の制服だと見積もる。

だが、知らない顔である事に変わりない。

「誰？」

零時の耳元で瑠依が聞く。

「ハッ――？　彼女連れかよ」

「馬鹿野郎！　俺は貧乳には興味はねぇ！」

「そこを否定するのか！？　妹ですから！」

辺りに寒い空気が流れた。呆れ返って押し黙る者が一人。しばらくして口を開いたのはガラの悪い男であった。その目は殺意というよりは卑下た目。零時は瑠依を自分の後ろにする。

「なら、貰おうかな？　なぁ――？　みんな？」

後ろを振り返ると、まぁ、見事にガラの悪い男たちがぞろぞろと路地から出て来る。それに零時は一層に目を細くさせる。人数は……２０ぐらいだと目測で計算する。

（瑠依を逃がした方がいいな。そろそろ俺らの居場所がバレるから瑠依を見つけてくれるだろう。数人が瑠依を送っても2、3人なら瑠依だけでなんとか出来る。）

バックを投げ捨てて竹刀と小太刀を取り出す。

「瑠依、先に行ってろ」

太刀をリーダーっぽい男に向けて、小太刀を逆手に持ち喧嘩用の構えをとる。相手は素手ならば獲物がある自分には三段上ではないと太刀打ち出来ないだろう。ならば、数が多くてもいける。

瑠依は一瞬、躊躇うが早めに発見してもらい零時を助けて貰おうと思ってか走りだす。零時はそれを見て細く微笑む。

「さて、滅多討ち(フルボッコ)になって……もらおぅかな？」

「上等だァ！　やっちまえ！」

男の伝令と共に零時の周囲を囲む。男にモテてもうれしくねぇよ。などと内心思う。余裕はあるし、瑠依を追う者は居ないみたいだ。ならお構いなしでイケる。零時は瞬時に目の前に居た男を蹴り飛ばす。顔が大きく歪み地面(アスファルト)に強く叩きつけられる。頭を軽く血が出たが零時には関係ない。

その素早い動きに驚いてか、数人の時間が止まる。当然、その隙を見逃す零時では無く小太刀で腹部を突く。酸素を吹き出して倒れかかる男の顔面に膝を入れる。約3秒で2人を倒す。

その流れるような攻撃は止まらない。そして、後ろから鉄の棒で仕掛けてきた奴を振り返らずに竹刀でデコを突く。怯んだ隙に肘を鳩尾に叩きつける。

左右からの攻撃には竹刀と小太刀を上手に弱点を突く。小太刀の場合は的確に喉を突く。だが、まだまだ零時の舞は止まらない。両の竹刀を上に投げて素手と蹴りを駆使して叩きのめす。

腹部に入れたと同時に横に蹴り飛ばして数人を道ずれにした所で

意識のあるやつの腹部などに飛び乗り意識を飛ばす。

そこからドロップキックで正面に居る連中に攻撃すると、軽くバックステップし2つ竹刀を取り構える。

（残り半分くらいか……？）

零時は目算で数えるがまだ居るみたいだ。大きな溜め息を吐こうとするがその隙を与えずガラの悪い連中が攻めてくる。零時は軽く回避して竹刀で意識を刈っていく。

残ったのは腕っぷしのありそうな男達数人になった所で零時は止まる。

否、

《止まれ！　零時！！》

止められる。

零時を止めたのは灼熱の炎を司る竜。つまりは爆焔竜だ。零時は爆焔に聞き返そうとした瞬間に空から光の筋が落ちてきた。

光の筋は先程止めなければ、零時が居たポイントに落とされる。その場所には“聖剣”という表現が似合う白銀に神々しく光る剣だ。レイピアのような細く鋭い刀身は穿つためにあるようである。

零時は竹刀を投げ捨てて間合いを取る。

「……？」

零時は違和感を感じる。理由は単純で周りが静かであったからだ。少なからず騒ぎ出す筈だ。しかし、周りのヤンキー達は？そう思い辺りに視線を配るて直ぐに見つかった。

「なっ……？」

自分の真横のビルに穴を開けられて何も刺さってもいないのに磔にされていた。死因は頭部を一刺しされて貫通した事で血が白い壁を赤く彩った。

零時は目を逸らすと、前ではリーダーっぽい男が低身長の短髪の少年の前で尻餅を付き顔は恐怖を感じさせていた。

短髪の少年は先程のレイピアを片手に持ち穿つ瞬間でもあった。

「羽風！」

風の攻撃は少年に目掛け放たれるが少年はレイピアの一振りで消し去る。零時は徒者ではない事を再確認する。しかも零時の方を見向きもしないでだ。アイツの狙いがあの男だとは零時の中ではなく、自分がターゲットだと思っている。

（戦うっても……）

しかし問題があった、戦闘に発展してしまったら破壊力が売りの自分のスキルが発揮出来ない。カマイタチを発する羽風ではカマイタチでいろんな所を切り刻み、機鋼の破壊力はトップクラスなんで却下。爆焔もなりふり構わない。なら、冥闇を使ったとしてもレイピアとの間合いでは分が悪いし園光では不可能だ。

（第一にあの男が邪魔だ。腰を抜かしたのかよ？　どうする？　なにか方法は……？）

殺されるぞ。

頭によぎる。

少年は再び男に向かい直る。レイピアを高く上げてると、青白い光が溢れんばかり電流が流れる。零時は流石にヤバイものだと察知。戦闘がシロートな自分がなりふり構うわけにはいくわけもなく、少年の背中に蹴りをいれる。

今の内に逃げて欲しかったんだがあの馬鹿は腰を抜かせたみたいだ。

内心、舌打ちをする。

男を自分の背後にくるようにして、冥闇竜を装備する。黒々と怪しい光を放つ手甲を装備して構えると少年は微笑むかのように余裕そうな顔をする。

「おい、お前」

零時は男に投げかけると、恐怖でしわくちゃになった顔の男が反応する。

「死んでも文句は言うなよ？」

俺、弱いからと告げて笑う。そうこうしてる内に紫電の突きが零

時の顔面スレスレを通る。零時はその隙を狙って強く握り締めた拳で腹部を思いっきり叩く。通常の数十倍の破壊力に改造された拳はえげつない破壊力である。

アスファルトなんて簡単に粉々に出来るというのに少年は平然とした顔である。多少のダメージはあるが問題はないとう多少のやせ我慢はあるが、まだまだ無表情でイケるみたいだ。

零時の顔が青褪める。

（実力（ケタ）が違いすぎるッ！）

当然といえば当然である。能力に覚醒してから僅かな普通の人間と能力を使いこなし戦闘に慣れた者。どちらが強いと聞かれたら後者であろう。ましてや能力の力が強すぎるから使いこなせてもいないから手紙も出来ない。

零時の頬に汗がつたる。

ヤバい事はわかっていたけども、向かいあって初めて実力の差に気が付いた。零時は内心で焦る。

打開策を必死に考えるが見当たらない。

辺りを見渡す。こんなおかしな状況なら人が集まると危険だ。だが、零時は気が付く

（車が一台も通ってない……？）

そう、こんな路地で暴れてれば少なからず車が通って見つかるはずである。けども先程から車も通ってないし誰一人通っていない。

零時は疑問に思うのはいつからだ？

いつから車は通らなくなり、いつから人は通らなくなったんだ？

その問いに零時は答えが出せなかった。

「ターゲット確認。第一目標、目撃者の虐殺」

レイピアが空を駆る。

「竜装・翼！」

冥闇を戻し羽風を装備する。

「ンでもって、双翼（そうよく）」

翼の形をした大剣が2本握られる。人っ子一人もいないみたいだ、ならば多少暴れても構わないだろうという楽観視で長兄の竜を装備する。青緑というような不思議な色の剣（つるぎ）。まるで宝石のような不思議な色合いを出すその剣を振るうたびに風が舞う。

そよ風は零時の長めの髪を弄（あそ）ぶ。

竹刀よりも思いだろうが、零時の動きを見る限りそれよりも軽そうに見える。

実際に竹刀よりも軽い。羽みたいな軽さの刀である。竜装は主の手に馴染むものばかりでなによりも主だけは重さは感じない。

故に羽のような軽さというわけであって、二刀流の疲労も削減さ

れるが体力を使うのは変わりない。全身の筋肉をフルに使う。だが、零時がとった行動は違う。剣と剣をクロスさせた状態で神経を集中させると、そよ風……？　否、そよ風よりも弱く優しい風が流れる。

《零時、詠唱だ》

（結局はイチバチか……ったく）

「風を確認。速度リミッター解除」

「＜夜風の詩（うた）を響かせましょう＞」

零時は目を閉じ詠唱する。旋律は頭の中を無責任に走る。縦横無尽に駆けるあおの旋律を頭に刻み込みながら神様（ルール）を勝手に作る。

「＜皆アナタを恐れアナタに近づかない、アナタは孤独の波＞」

その旋律は優しくどこか悲しい。

「＜誰もアナタを忘れてアナタを知らない。何も知らずに産まれたアナタは光を浴びず＞」

少年はレイピアを構えていたが動かない。

「＜でも、私はアナタを見ています。孤独の波だとしても誰よりも強く雄々しく謳うアナタを＞」

否

「＜さぁ、もう一度詩を謳いましょう。アナタの詩を誰も知らない美しき詩を響かせましょう＞」

動けないのだ。

「＜アナタの翼は何よりも高く。アナタの声は大地をも震わす。産まれ落ちた不幸を一時の幸福へ変えましょう＞」

不気味な力によって身動きが出来ない。次第に動き始めている。

「＜アナタしか謳えない夜風の詩を世界に響かせましょう。例えその先が孤独であっても……＞」

つまりは不気味な力に対抗出来てる訳だ。

「＜アナタの詩を私は刻み込みます＞」

レイピアの閃光が駆ける。

「＜そして、私の音と共に……＞」

詠唱は完成しない。間に合わない。

「＜一緒に響かせるから＞」

至近距離。目と鼻の先。

「＜だからおいで、誰にも触れられぬ優しい夜風の子よ＞」

皮一枚。

「＜夜風（ディユーゴ）の竜、アナタは何よりも高く雄々しく忘れ去られた強き子

だから＞」

貫く。闇色の霧を。

零時はその後ろ。剣をクロスさせた状態でシュバルツの闇を纏い構える。その背後……零時が纏っている黒い霧のようなものはカタチがあった。それは例えるなら竜（ドラゴン）。

誰にも忘れられるような霞の黒竜……否、霧でもなんでもない。

『夜風』

「＜一緒に謳いましょう。夜風の詩を＞」

旋律は完成した。

ＴＯ　ＢＥ　ＣＯＮＴＩＮＵＥ…

【１２１話】何が為の力【零時・前】（後書き）

夜風は十指竜ではありません。羽風の変化形と考えてください。

【１２０話ＲＢ】浦嶋太郎＋β（前書き）

公立入試（＋面接）終了祝いだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！

【１２０話ＲＢ】浦嶋太郎＋β

昔々あるところに、お爺さんとお婆さんが住んで……ぇ？　違う？　なら竹取の翁やろうか？

そないな事どうでもいいんや、とにかくお爺さんとお婆さんが住んでたんや！

浦島太郎にそないなもん存在せんて？　残念やな、題名通り「浦嶋太郎」なんや！　ちゃうくてもいいんや！！　ふはははは、題名は誤字ではないのだよ！！

浦島太郎と思ったか！？　それ事態がワナなのだよ！！

「黙れテメー」
「ウザイわ」

……。一ノ瀬先輩に二ノ宮先輩……何故？　未登場なはずや！

「俺達がラヴラヴだからさ！」
「そうよ、私達の愛は誰にも負けてないわ！」
「美羽ぁ！」
「悠二ぃ！」

抱き合うな。暑苦しいんですけど。死んでください。

「俺達の愛に干渉しないでくれ」
「邪魔よナレーターの分際で！」

……止めてやるよ！　ああ！　やめてやるからなこのぉぉぉおおお！！！　なんやねん作者！？　【大人しく続けろ】やと！？
いやや！　もういやや！！

なんでやねん！　なんで俺がこんな役なんや！？　ええかげんにせんかい！！　俺かて子役でもなんでもやりたいわ！　おい作者！【桃に入って流れるか？】って桃太郎やろ！　この浦嶋太郎にそんな要素はないやん！　なに！？　俺、放置なのか！？

なにが、【ＹＥＳ】や！　糞作者ぁぁぁあああああ！！！！！

「美羽、どう？」
「気持ちイーよ……も、もっと強くぅ」

なにやってんねん！　あえて描写せぇへんけど誤解がでることゆーな！　ただの肩揉みやないか！　つーかツッコミに疲れるさかいやめんか！　なに言ったらいいかわからへんし……それよか浦嶋太郎は何処にいったんや！！？

台本では家の中にいるんやけど……。

「息子ならここに」
「あら素晴らしい」

……。煌刃抜刀！　煌く星々を滅す廃滅の羅刹！　顕れ！　滅（ほろ）星（ぼし）！！

「「ノォォォォォォオオオオオオオン！！！！！！！！」」

ふぅ、悪は滅びたか。まさか滅星を使うことになるとはな……だ

がいいやろ……邪悪な存在は滅びたんやから。それよかホンマに何処に行ったんやろか？

＜浦嶋太郎こと、真琴サイド＞

「……」

ヤベーよ。浦島太郎ヤベーよ。俺って泳げないどころか浮きもしない超が付くカナヅチなんですけど……？　だ、駄目だ。やってられない……あえて言うが……ダイビングの魔法もホナが手伝ってくれないとすぐ崩れてしまう。水が恐いから……。

よし、逃げよう。

＜ナレーターこと、ミヤサイド＞

あ、居た居た……ちゅうかなに逃げ様としてんのやアイツ。えっと、大道具係り一神堂真琴の逃走を確認、作者が予め言っていたポイントに海を移動。え？　急行中だって了解ー。

さすがは生徒会長、動きが速い。

あ、ウチの生徒会長やないで、鳳第二高等学校の生徒会長と雅人君や。

雅人の能力はえらくゴッツイからのぉ……反則やあの力は。どうりでオレしにで起用しなかったはずやな。これ以上パワーバランスを崩すのはよくないからな……。

まぁ、そないなことはおいといてやな。

浦嶋太郎は愕然としていました、目の前の3人の少年が亀と共謀して1人の少年を嬲ってるのでありました。ボサボサな髪の少年や銀髪の少年、そして、小さな少女が。少年達の仲間であろう高身長の紅い髪をした少年を虐めてるではありませんか。

（は？　何故、ここにいるんだ？　そして何故亀が虐められてない）

浦島太郎じゃないからさ。

「痛い！痛いって！　やめろ和也に将！　それに石動も」
「やーいやーい」
「花火を近づけて見るか…」
「アルウィーードエルシィー！！！」

和也は手もとの石を投げ、将は花火を近づけ石動はありもしない必殺技まがいの顔弄り。ぶたっぱなになり口裂けををやられタレ目にされた。なんかもう顔をオモチャにされてんねん、ちゅうか哀れやな駿は……。

「そして、エンド・ワールド・デス！！」

「待て、それは顔の原型を留めていないような気がするぞ」

ついついクセのようなものでツッコミをいれてしまう、浦嶋太郎

である。ふむふむ、あの死神はツッコミに改造されていた……と。ん？このメモはなんやねんって？気にしたらあかん、気にしたら負けやで。

一同の冷たい目が浦嶋太郎に送られる。

石動（亀）「たーすーけーてー（棒読み）」
雨宮（脇）「あー、浦嶋太郎だー（棒読み）」
井塔（脇）「やっべー逃げろー（棒読み）」
如月（脇）「置いてくなぁー（棒読み）」
神堂（主）「全員棒読みか！？」

亀を虐めてた子供は浦嶋太郎を見るなり一目散に逃げました。なんやて？虐められてたのは赤髪の男だって？なんのことや？わいはしらんで、亀と子供達が連携して駿を虐めてたなんかしらへん！！
虐められてたのは亀や！そう亀なんや！！

「助かりましたです、浦嶋太郎」
「待て、何故そうなる」
「お礼をさせろ」
「慎んで拒否する」
「さーせーろー」
「イヤ」
「……では、浦嶋さんもわかってくれたところでイクです！」

がしッ、という効果音が響き渡ったような感じがする、しばらく亀と浦嶋太郎は睨み合います。亀は純粋な気持ちで恩返ししようと真心こめた善良なる気持ちでやってるというのに、慈悲の欠片もない冷血漢な家出少年の不良でねじまがった正確な浦嶋太郎は亀の気持ちもわからずに冷たくあしらってます。そんな男にならないでく

だございね。

絶対、『イヤ、怪しい宗教はいりません』ってな虚ろな目です。片や亀は恩返しをしようしようと見てしかも浦嶋太郎を引きずっています。つーか、力負けしてるやん。

「イ・カ・ナ・イ」

「酷い！御腹の子は誰の子よ！？」

「亀と関係をもった記憶はない！」

「パパがボケたぁ――」

「娘が亀ってなんだ…」

なんちゅうやっちゃ。ロリコンなんやな娘の亀を孕ませるってロリコンなんやな！？　ひゃ！？　な、なんや……この殺気は！？何故や！何故に俺がここにいるって知ってるんや！？　さ、さすがは最強を冠にしちょる死神やわ。和也やったらこないな殺気でぇへん。

「さぁ、話しも決まったところで竜宮城に行きましょう」

「待てぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……」

連行。ちゅうか、石動はん……なんちゅう行動力や。

「ささ、行きましょう。口と目を閉じてくださいね、ついでに鼻も塞がないと海水が入りますです」

「ふがぁぶあぁぁあああああ……」

……さてはて、浦嶋太郎はどうなったのでしょうか……。水死体は表現いやだぞ…。それでは浦嶋太郎が軽く水中に潜って行ったのでこんかいのキャストの紹介やー！！

【パチパチパチパチ】

うむ、作者。効果音だけ有り難う。なぜそないなテープを持ってるしらへんが……ってテープレコーダーやん！最近の若者が持って無さそうなのもっとるな。ちゅうか、テープレコーダーなんて今のご時世使い物になるんかい。ちゅうか、そんなことより紹介やー！！

ナンバーワン！　裏主人公さらに言うなら裏主人公冷徹にして冷静、作者の人格をインプットし主人公っぽく加工した主人公、もちろん裏の！！裏と浦つながりで……浦嶋太郎役はコイツやぁ！神堂真琴

でもって次は亀だ。だれがなんといおうと亀や！なんかもう虐められてるんじゃなくて虐めてたなんてゆったらあかん！そいつは見間違いや！　ひた向きに純粋といえばウチの小説で一匹……ごほん、一人だ！！　その名も石動沙紀！

次は次はぁ～、もうナンバーなんて関係なくなってるって？ハハハ、気にしたらアカン気にしたらまけやで～。俺は何時でもマジメやからそないな事ありえへん。ぬわぁははは。おじさん、おばさんはもう我が校がナンバーワンと認める熱々カップル死ね！その名も男は一ノ瀬悠二に二ノ宮美羽やー！なんちゅうか頼むから心中して。

さぁ、白熱してきました。レギュラーキャラなのにこんな脇役のいいのか？子供ＡＢＣこと雨宮和也、井塔将、如月駿（けーはく）やー！ん？駿のルビがおかしいって？ははは、気にしたらアカン気にしたら負けや！なんちゅうかもう口癖の領域やな俺！？

さてほんで、オレしにの顔、オレしにナンバーワンのビジュアルと人気を誇るこの俺こそこの浦嶋太郎のナレーター……宮鷹秀一やーーーー！！！

和也「麗しき黎明の光は朱く昂ぶる焔の輝き。その輝きは世界を包み込み祝福と幸福を運ぶ光なり、これぞ夜明け、世に包む闇を明かす朱き焔の不死鳥よ、雄叫びを挙げ顕れよ、何者にも縛られぬ翼よ今こそ飛び立て！　黎明の神鳥（フェニックス）」

のぶらぶぁぁぁぁすっつ！！

将「戦の神の呼びかけに応えよ。狂戦士よ戦の雄叫びを挙げろその響きは全てを震わせる怒号の如く、ユグの名にルーン応えよ、ユグの名において光の断罪を、ユグの名において進軍せよ！　夜を明かす黎明の光を……受けろ！　これで……、最後だ……！！！　夜明け（トワイライト）の翼（イト・オブ・ユグ）」

べべらぁ！！

駿「疾風轟け！閃雷煌け！我が名に応えよ、我が力に伏せよ。我は煌きの光を放つ神馬なり。さぁ、光すらも遅し韋駄天の疾風よ世界を駆け巡れ。煌く閃雷は全てを挫き轟く疾風は全てを薙ぐ。さぁ、吹き荒れろ……お前の生命（いのち）ここで朽ちな！　明け空の陽光（オーバー・サンライト）」

ばべらぁぁぁあああ！？

参魔神「「「さぁ、夜明けの翼を得し黎明の神鳥よ明け空の陽光に照らされろ……北欧（ユグドラシル）の息吹き！！」」」

ぶばぁぁあああ！！！？　合体技やと！？　描写していいの

描写駄目だって作者？　そ、そんにゃあぁぁあああああぁぁあああ！？

こほん。テーステース、只今マイクのテスト中。なんつーかもう宮鷹がボロボロなんでこれよりはやはり当然と言うかなんというか飛焔が司会をさせていただきます。

宮鷹のミンチは楽屋裏のごみ箱にありますんで無視しといてください。今はカラスのエサです。まぁ、ところかわり竜宮城の保健室。あいも変わらず保健室にいるのはこの須川先生……。つーか、なんでここにいるんですか貴方。

何故に保健室かといいますと……。

「う……あぁ……」

浦嶋太郎が寝てるから。

すさまじく顔が青いけどね。

流石は僕の分身だ、カナヅチだこと……それがなければいろんなスキルが完璧なのにね、勿体無いというかなんというか……ザマーミロ（笑）

まぁ、僕のそこらへんを出してるからしゃぁねぇか……。本当に難儀だな……そもそもコイツがカナヅチな理由は天性のカナヅチだからだ。理由なんて特にない、泳げないからやらない、やらないか

ら泳げないという悪循環。

それだけでしかない。

「マコにぃ――――――――――!!!!!!!」

そんな事は無視でいいだろ？　魚Ａのレナが浦嶋太郎こと真琴の鳩尾にエルボーが華麗に決まった。扉を蹴破り助走をつけてジャンプし、全体重を乗せられた肘が急所ともいわれる鳩尾に減り込んだのだ……威力は計り知れない。

真琴は悲鳴も絶叫もなにもしない。寧ろ、言葉といいう者を出したくはないのだ。っていうか、出ないんだろうね……そりゃでねぇわ。

「おーきーろ!!」

そこから、往復ビンタの連続技。あいも変わらず凄まじい快音が響き渡る。

「……」

しかし、馬鹿（レナ）は気がつかなかった、真琴が凄まじい殺気を放っていた事に。いや、気がついたが反応が遅れたのだ……。

いや、反応はしたのだろう無意識の内に。だけども、その無意識が硬直してしまった。

「行けダークネスブレイド金糸雀（カナリア）！なだれ込め、ダークネスブレイドＡｖａｌａｎｃｈｅ（アヴァランチ）！まだだ、ダークネスブレイドα（アルファ）

、並びにβ（ベータ）、γ（ガンマ）、ε（イプシロン）、ζ（ゼータ）、χ（カイ）、κ（カッパ）、φ（ファイ）。何れも総攻撃。終りだと思うな、ダークネスブレイドZERO（ゼロ）、並びにΔ（デルタ）、Ω（オメガ）、Λ（ラムダ）、Ψ（プシー）、Υ（ウプシロン）、Θ（シータ）、Σ（シグマ）！これで終りだダークネスブレイド∞（インフェニティ）！！」

「うひゃ！？　深淵の園（ヴァルグ）より出でよ冥府の門（メイシュト）！　終焉之楽園門（シュバルツ ヘブンオブエデン）」

闇色の投げナイフが凄まじい速度で飛んで来る。そして、その投げナイフがなだれ込むようにレナに降り注ぐ。そして次々と様々な形をした巨大なDBが幾重（ダークネスブレイド）も降り注ぐ。レナは初撃の金糸雀は防いだものの、アヴァランチで破壊される。そこから、威力の高いDBが次々と降り注ぐ。

そして、最後の一撃にはなによりも大きな空間が裂けて今までのどのDBよりも遥かに巨大な刀身が空間の裂け目から姿を表す。そして徐々に落下速度を上げてボコボコになったレナに落とされた。こういう姿をボロ雑巾ってこの事だな……後で修正しないと。

まぁ……このセットもだけど……って須川ァァァアア！！！逃げたのか！？

……大道具ぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！！！！！！！

ぁ、いやまずは担架だ！　もう逝ったかもしれないが助けろ――――！！！！！

「……レナ、寝起きの俺に近づくな」

「ひゃい……がくぅ」

浦嶋太郎の魚の惨殺……。まさか、最初はもうＲ１７な展開だったのに、殺戮という意味では和也よりも真琴が適任……。なんだろ、またブラックなコメディになってきたぞ……？

ぁ、そうそう……。

後半へ続くゼー！！

「終（フワ）レ」

はい。浦嶋太郎様。

＜零亞のとある日ｖｏｒ１＞

僕の朝はこの家では遅いみたいだ。一番速いのはこの家の家主である雨宮和也（あまみやかずや）である。僕でも何時に起きてるのかわからない。たまに知ってるのは夜はたまに魘（うな）される事があるというわけである。

和也もいろいろと心身に深い傷を負ってるというのに和也は笑顔のままだ。笑顔でいつづけている、その反面には悲しい顔を隠してる。特に和也は周囲の人間を尊重して考えるようになっている、和也がたまにする無理は友人の為。無茶をするのは周囲になにかがある時だ。

最初はやけに獰猛なヤツだと思っていたがその反面には周囲の表

情を覗う力があり、たまに無理する事もある。特に駿と和也は互いの信頼が一番強い……和也のいじめもつまりは愛情の裏返しというヤツなのだろう。これは秘密だ、和也に聞かれたら叩かれてしまう。あいつのゲンコツはいたい。

ふ、自分もここまでこの暮らしを気に入ってるようだな。ついつい自嘲してしまう。

「零亞ー、昨日の煮物を盛りつけといてくれ」

サトイモの煮っころがしか!?　うむ、昨日の煮っころがしも美味かったが一日置いてるんだ、くぅ……この家に来てから本当に料理というものが楽しみになった。因みに和也が盛りつけろといったのは僕の弁当の事だ、僕が通う小学校は弁当は自給なのだ。故に弁当作りも和也に任せている。

それに煮物は冷めても美味い。だから、楽しみでしかたない。

食卓の方へ進んでテーブルに置かれた弁当を除くと、彩りが鮮やかというワケではないが純和風な弁当だ、煮っころがしをいれるスペースだけが開いてるという事は和也が途中までもりつけていたというワケか。視線を泳がせば焼き魚と格闘してるのが確認できた。どうやら少し焼きすぎてしまったみたいだ。

滑稽だな。

ガスコンロの上にある片手鍋を見る、ご丁寧にさえ箸が添えられている。

さてと、箱の中に入れておくか……できるだけ多く。

そう考えた時にチャイムが鳴る、うん？　っと、軽く振り返るとドンドンと激しいノックの音。僕の背中には冷たい汗が浮ぶ。ま、まさか……あの双子（チルドレンズ）が……？

「か、かかかかかかかかかかかかかか」

しかし聞えたのは別の声。

その声になってやっと和也は反応する。おい、無視してたな僕が攫われたら弁当を持って学校にこいよこのヤロウ。って、さっきから「か」しか発音できてないけどこの声は……。柴原魅夜（しばはらみよ）？和也の幼馴染みだ……いや、正確に言うと雨宮和也オリジナルの幼馴染みというワケだ。

しかし、なんだ？　今日はやけに速いな。

それを思ったのは和也も同じみたいで焼き魚の火を調節して玄関に向う。

軽く足取りに殺意があるような気がするのは何故だ？

「かかかかかかかかかかかかかかかかかか」

……よほど取り乱してるな。玄関の扉の前にいるがよほど動揺してるらしい。

「ふぅ……雨宮流格闘術　空断の型　点虎烈衝（てんこれっしょう）」

正拳突。ドアには異常なし。しかし

「あぶべぇ！？」

ドアを叩いた本人には効果があったらしい。

「ご近所迷惑だ、時間を考えろ」

「……ひゃい」

……なんだってんだ？

「和也……？　それは？」

「点虎烈衝。空間を超えて拳圧を放つ技だ人質を殴っても平気なわけだ」

「……」

技が豊富だな、本当に……。

＊＊＊

「……で？　なんだ」

「煮っころがしが美味しい」

「死ぬか？」

「ごめんなさい」

……ったく、一体なんだというんだ？

まさか、こんな朝食を摂るハメになるとはな。まるで一つの一家だな。因みにこのツッコミと思われる事は禁句だ。この娘が卒倒してしまうからな……凄い勢いで。

ヤカンが沸くな確実に。因みに和也にも殴られるから言わないだけだ。

「魅夜、話せ……なんだ？　こんな朝っぱらから」

「ガイル・オリシア・キルバーニュ・イング・ブリバリーナ・ウエンディ・ライト・イグリットがぁぁぁあああああいやァァァァ嗚呼嗚呼嗚呼」

……

……　……

……

……

は？

恐らく僕の目はハニワみたいになっているであろう、それは和也も同じらしい。和也の箸から珍しく煮ものが落ちた。いや、掴み辛いのはしっているがあの和也が放してしまった。これは僕が始めてる見る光景で、誰かがどこかでこの家に『アイス・エンド』を唱えたのではないかと疑わせられる者であった。

限りなく永遠に近い時間が経過する。

その僕と和也の目の状況を知ってか知らずかこの小娘はムンクの叫びのような顔になってる……そのまま帰って来るな。帰って来たら撃退する。むしろ、またあの城に送るぞ。

そうそうクッ○城に……マリ○が助けに来ない……な。

「……ふぅ」

溜息。箸を置いてテーブルに座りながら何かアクションをしたらこの小娘は悶絶した。スネを押えてるが気にしてはならないのだろう。なぁに、実際は僕もやろうとしたのだけども脚の長さが足らなかったのは秘密である。

「嗚呼（ぁあ）嗚呼（ぁあああぁぁああぁぁあ）嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼」

恐怖と悲鳴が混ざっている。B級ホラー映画に出そうだな。

「どうやら、コイツの家にゴキブリが出てきて逃げてきたらしい」
「なんだ、ゴキブリか」
「ああ、ゴキブリだ」
「よくゴキブリだなんてわかったな」
「作者はゴキブリで同じネタを一度使ったからな」
「ゴキブリ好きなのか？」
「いや、北海道ではそんなにゴキブリはみないらしい」
「何故にゴキブリなんだ？」
「ゴキブリは一般的に恐怖の対象だからな」

「ゴキブリいわないでぇぇぇえええ！！！」
「「お前が言ってらぁ！！」」

バッサリ切り捨てる。

うん、バッサリね。

付合ってられないな。

「零亞、醤油とってくれ」

「わかった」

悶絶してる人は無視して朝食の続きをすることにした。なんでかって？　理由は簡単だ。ツッコミ（＝肉体的体罰）を与えたからだ。それにそろそろヤツラが来る時間帯だ……。あの双子もよく来るわ……っというか迷惑なんだよね。

足の骨を折っても這ってきそうなんで少し恐い。あれはある意味執念だ。

茶を啜る和也はふと天上を見上げる。気がついたらやたらと上が騒がしい……？　食卓の真上といったら僕の部屋か？　物置だったのを和也がリフォームして部屋にしたんだったな……その倉庫に日本刀やら血の着いた金属バットやら鉈に斧、特攻服があったのは気のせいであってほしい。

そもそも、特攻服って……背中には『天上天下唯我独尊』、『魔槍』、『参魔神』などと殴り書きされていた気がする。よほどやんちゃだったんだな……。そういえば、あの障害事件も犯人は和也だって街の人が話してたな……女を使った親父狩りもしてたと聞くぞ。

……今とはくらべものにならないな。

「零亞、お前はなにを連れ込んだんだ？」

「少なくともネコではない」

ネコなんて連れ込んだらこの家の最後だな。

「……人の気配だ」

「人？」

確かに言われて見たらそうだけども一体いつ、どこで侵入したんだ？

「まさか、女連れ込んで【バキュン！】してたんじゃねぇよな！？　大人の階段の～ぼる～♪　か！？　ァァ！？　お義兄様置いて先に大人かァァアアア！？」

「待て、それはストレートすぎるぞ和也！　それは言ってはならない！　少年誌で言うな」

「少年誌じゃねぇよ！　零亞テメェ……」

「【バキュン！】をこんな歳でやってどうするんだよ」

「最近の子供は手が早いからな」

「……はぁ」

この童貞はそういうのに反応がいいのか？　まったく、こまった時代の人間だ……いくら中学あがりとはいえ中学生かと言いたくなる。

っしかし……なんだ？　人の部屋に誰か居る？

「……」

耳に神経を集中させる。

断片的だがまるで口論のようだ。

――……いだけ……いよ！！

――……だって……ぁ……の枕を……でしょ！！

――霞！　アンタは布団に包まって――――！！

！！！！！？？？？？

侵入者はあいつ等か！？

「零亞、お前……３Ｐって……」

「お前はその思考から離れろ！」

【１２０話ＲＢ】浦嶋太郎＋β（後書き）

遅れて申し訳ありません

【１２２話】何が為の力【零時・後】（前書き）

うひゃ、勉強ねぇと結構スラスラ書けた

【122話】何が為の力【零時・後】

青年はただただ震えるだけしか出来なかった。最大限振り絞った一閃がどういう原理か避けられてそして自分は動作が固まったまま。相手はそれを知ってかしらずか、先程の蒼い宝石のような不思議な色合いをかもちだす双剣に夜霧を纏わせてクロスさせる……。

そう、まるで渾身の一撃を溜めてるかのように感じられる。青年はそれが危険なものだと察知する。しかし、世界がスローになっていた相手の動きも自分の動きもだ、一秒一秒が長くて長くて青年はその剣から放たれるであろう一撃に恐怖し避けようとするが足が竦む。

内心で絶叫しながら脚を踏ん張り。

地面を蹴り飛ばしひたすら後ろへ。

しかし、それは既に遅いものであった、最初の時点で勝敗は決していた。負けは最初に臆してしまったこの青年。顔は恐怖一色に染まり上げられ彼はそしてその剣から放たれる風に喰われる。初撃は平凡な真空波の攻撃、それで身体も深く抉り、右腕を切り裂いていった。同時にそれを放った零時の姿が消え同時に世界が闇……いや、月光のみが天上に輝く常夜の世界へと変わり、その月を血に染めて行く、切り裂かれて噴出す血は高く力強く跳ぶもの月の足元にも降り注がれない。

ただ天上の月光を視野の分だけを血で埋め尽くしたからである、そして月は両断された。青年は身体から血が無くなる虚無感や全身の痛みやらを堪えながらその目に月が両断されたのを見た。自分が

どんなに視野を上げてもそれは月を両断するかのように高々と上げられているその物。

鈍い夜色に輝く巨大な、巨大過ぎる太刀。

視線を降ろすとそこにいたのは“鬼神”である。

「死ネ」

それが青年の世界の終りの光景であった。振り落とされた一撃は破壊を繰り返し一直線状に凄まじく抉られた傷跡を残した。その光景を見て零時は高笑いする、まるで人を見下すように発狂して嘲笑う。それが悪魔の笑いのように聞えてどうしようもなかった。

しかし、その笑いも途中で止まり一箇所を凝視する。

理由はわかっていた、両断したはずだ。いや、両断したと思っていた。

この一瞬の出来事を見れた者はいるのだろうか？　いや、この出来事を見た人間はもういない。そう、見た人間はいないのだ誰一人として。この禍禍しい戦慄はバケモノでしかない。いや、本性というのが正しい。

そう、この狂ったような古都宮零時こそが本来の古都宮零時の姿というわけだ。その目は真っ直ぐと冷徹に横たわりすでに絶命した青年の方を睨みつける。何故避けたのか？　そのような視線であった。

一歩一歩ゆっくりと地を踏みしめて青年に歩み寄る。先程まで装

備していた蒼い翼を象った剣とは違い同じく常夜のような僅かな輝きを放つ漆黒の剣を振り上げる。

「消エロ」

＊＊＊

や……ぇろ……。

ヤメロ、こんな事……したくないのに。

なんで、思い通りに動かないんだよ……？　動けよ！動けぇぇぇぇえええええ！！！！

なんだよ……なんなんだよ……。言う事を聞いてくれよ！　俺の身体だろ？　動け、動け動け……殺したんだろ？　なのになんでまだ痛みつけるんだよ！？　殺したくなんかねぇんだ！　なんだよ、一体なんだってんだよォッッ！？

――――思イ出セ、

ぇ……？

――――思イ出セ、我ガ子ヨ。

……誰だ!?　お前なんだろ!?　俺を操ってるのは！　誰がお前の子だ！

俺の名は古都宮零時だ！　古都宮政人の息子だ!!　消え失せろ！　お前なんか知るか!!

――思イ出セ、我ガ子ヨ。破滅ノ子よ。

うるさい！黙れ黙れ黙れ

――あんた馬鹿？　アハハハハ、本当に気が付いてないんだ♪

……お前は誰だ？　さっきの奴とは違うな。

声音と雰囲気で察する。男のようなアルトの声からソプラノの声になった。なによりも先程とは威圧が違う。これはさっきのプレッシャーよりも軽い。そして耳元で聞える。しかし、これは声を発しない。言っても意味はない。

――気がつきなよアンタ？　なんで、アンタがなんで１ｍも見れないの？　その瞑った目はなに？　なんで真っ暗だってのにヤツを殺した事を知ってるの？

ぇ…？　……あ、あぁ……！！

――その目を開けた先に、何があるの？

うわぁぁぁ

う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う！！！！！！

――――否定しちゃ駄目だよ？

――――思イ出セ、目覚メロ！

やめろ……

ヤ……メロォォォォォオオ！！！！

＊＊＊

「はぁ……はぁ、はぁ……」

感覚が戻った……。いや、最初から感覚はあった……？　……俺はただ目の前の事から逃げて、俺は……自暴自棄になりそうだ……ハハ……。

なんだってんだよ！？

……夜風……アレを使って記憶が跳んだ。コントロールできなかったって事か？　もともと“夜風”は肉体強化と一撃必殺の攻撃だ……。攻撃力が中の羽風が大きなダメージを与えるのに重要な攻撃だ……。

羽風に話しを聞くか……？　いや、召喚や脳内での会談は精神的に疲れる行動だ。今は控えておこう……それに今考えるのはここがどこかだ。ズキズキする喉頭部を押えて立ちあがる……。

って、なんで喉頭部が痛いんだ……？

それに……ここは？　俺の……部屋？

そうだ、見たことがある、家具の配置やなにから全部俺の部屋そのものだ。なにがあったんだよ……本当に？　俺は殺したのか？　もしこれが夢でしたってなら楽なんだがな……。

夢なら……俺は、それにすがるしかないのか？　もし、アレが現実なら？

……ッ！！

身を抱える。こうしないと魂と身体が乖離（かいり）してしまうと思ったからだ。溜まらなく自分の身体だという確信が欲しかった。さっきみたいに自分が自分じゃなくなってしまうと錯覚してしまいそうになって、自分で自分を取り乱す。

殺した、俺がこの手で……。

罪悪感。一言で言うとその感情が俺を叩きつけた。

違うと否定したくなる。

でも、否定できない。

俺ハ、人殺シナンダ……。

しかたなかった、それで済むのか？

……俺は……。

そうだ、俺は……。既に一人殺ってただろぅが！！　ああ、屋敷が襲われた時、ミヤがやられた時には俺は既にやってたじゃないか……。

「ハハハ……」

乾いた笑い声が漏れる。

ああ、そうだよな……俺はもう一人、殺してたんだよな……。なんで今更罪悪感に飲まれるんだよ？　開き直れよ。相手は殺しのプロで俺はシロートなんだ……ああ、そうなるんだよな……。俺はもう手が血に染まってるんだよな……！

今更なんだよな、俺が殺しで嘆くなんて……。

クソがッ！！

「お、お兄ちゃん？」

水と氷を撒き散らす音と共鳴するかのようにプラスチック制のなにかが落されるけたたましい音が響き渡る、視線をあげるとそこに立ってたのは瑠依。見上げて見た（二重表現だが）瑠依の顔は軽く青褪めていていて不健康そうに見える。看病してくれてたのか……？

そんな思考が挙がったが却下する、恐らくは違う。よくよくみたらハチマキをしてるところから推測すると受験勉強だろう。我が妹ながら馬鹿だから志望校にレベルが足らないと嘆いていたからな…

…。ここ最近の月水木日は勉強漬けだ……。

と、なれば今日は木曜日か……。

それより……コイツは何を怒ってる（と、いうか驚いてる）んだ……？

「む、起きたのかレイジ」

「あぁ、おかげさまで……ん？」

あれ？　瑠依の声じゃない？　むしろ後ろから……？　後ろってベットくらいしかないぞ？　後は着替えが入ったクローゼットとかだ。因みにクローゼットの下には秘密の階段がありエロゲーやらあっち系の本が置かれてる。冷房暖房完備で巨大薄型ＴＶや最新型高性能パソコンを5台設置している。俺のエデンがあるくらいだ。

……わるかったな、俺だって男だ。

っと、それよりも……誰ッ！？

俺は光速を越えるかのような速度で振り返り不審者を睨みつける。

ギロッとね。

……はい？

「お兄ちゃん……不潔ッ！！」

「ぐはッ！！？？　兄としてのダメージが絶大だ――――って！

そんな事より」

俺のガラスのハートにＲＰＧ－７を食らわせた妹を無視して再び

振り返り人のベットに入っていた長い銀髪の持ち主を睨む。そりゃぁもうギロっとね……鼻の下伸ばしながら。いや、伸ばしてないって！伸ばしてないから信じてください読者様！！　いくら相手がバスタオル一枚巻いただけで人のベットで横になってたからなんて伸ばしてないよ！！

※伸ばしてます

「む？　なんだレイジ？」

「お前は誰だ――――――！？」

俺の魂の叫びとも近い絶叫は部屋に高々と響いた。因みに瑠依はうるさそうに両手で耳を塞いだが……マイシスター？　それはあんまし意味がないぞ。って、そこじゃねぇそこじゃねぇ……一々あっち向いたりこっちむいたりしたら首が少し疲れてきた。

ってか、どんなエロゲーな展開だよッ！？　なんだ？　俺ってば誘拐でもしたわけ？　あのおかしくなった俺が誘拐したの！？　この女を！？　ああもう！　一体全体どうなってるんだよ！！

なんか慌ただしい俺を他所に謎の女は座った目で俺を見ている。

「一緒に一夜過した仲であろうに」

なんですと！？　その記憶がなくて悔しいんだが！！

って！　だから、そうじゃねぇェ！！

「ｗｈａｔ'ｓ　ｙｏｕｒ　ｎａｍｅ！！」

「ｍｙ　ｎａｍｅ　ｉｓ　ＳＴＦＡＮＴＨＩＳ（ステファノティス）」

く、無駄に発音がいいな……。俺のこの人生で学んだネイティブな英語と同等じゃないか……結構自慢だったってのに……親父の仕事の繋がりでアメリカが親戚みたいなものだったからな……ちぃ。

つーか、不思議な名前だな……ステファノティス？　え……っと、マダガスカル・ジャスミンかよ？　ったく……何者だよ本当に。なんでここにいる？　そもそも何者だよ！？　ってか、落ちつけってーの。

頭の中を整理しろ……クールになれ、お前ならできるはずだ！
古都宮零時！

「――で、マダガスカル・ジャスミン」
「その名で言うな」
「ひゃい」

こえぇぇぇぇぇぇぇえええええええええ

なんだよあの目は！？　なにこの威圧は！？　百獣の王だ！いや百獣で済むのか！？　むしろコイツは食物連鎖の頂点だ！　多分、人の上のものだ！　恐らく人を食う悪鬼だぁ！！　花なんて美しい名前じゃねぇ！　異議を申し立てる！！

……事が出来れば楽なんだがな……。

「長いから略すが……ティスよ……経緯を教えろ」
「ぇ、お兄ちゃん……？」

先程までのふざけた顔からマジメモードに切り替える。マダガ―ごほん、ティスは薄着（バスタオル一枚）にも関わらず立ちあがる。踝まである長いストレートの銀髪は妖艶さを放ち、まるで見るものを魅惑する魔性のようなものだ、それを一層強めるのが切れ長の眉に気の強そうな目は月明かりのような金とオーシャンブルーのような深い蒼で小顔で張り艶のある肌、大人ぶった顔とマッチするその長身に豊かな双丘……。

まぁ、性格に難はあるがレベルは高い。

ふむ……Hと俺の邪気眼（？）が見ぬいた！！

「てい」

「目がぁ…！　目がぁぁあああ！」

瑠依よ、いつからそんな危険な目潰しを覚えたんだ？　って、いてぇ……。

それより、何故に俺の思考がバレた？

「口に出してたわよ」

と、冷めた口調でティスが言う。

「嘘だッ！！」

今世紀最高のポーカーフェイスと名高いこの俺が何故！？　顔にも口にもだすはずがないではないか！！　ってか、折角のマジメな話が台無しに！！

確かにすこしは鼻の下を伸ばした事考えてたかもしれないが……って落ちつけ。今度こそ落ちつけ。今、俺に必要なのは情報なんだ……。俺を知るために……コイツは恐らくヒントを知っている。

俺は……知らない方が幸せにすごせると思う。そもそも俺は一般人とは言いがたいかもしれないが、力とか金とかなけりゃ一般人の分類なんだ……。だから、このまま黙ってたら……幸せなんだと思う。でも、コイツが来たって事はどうやったって関わってしまう事なんだと思う。

それだけじゃない、あの夢のような現実のような……あの幻聴。あれも何かのお告げで俺の日常が壊れる宣告なんだと思う。いや、俺の日常は壊れるんだ。もとの発端がなんなのかもわからない、自分が何をしたいのかもわからない。わからない事だらけでムズイ。

もしかしたら瑠依まで巻き込むかもしれない……いや、確実に巻き込む。なら、せめて――闘うしかないんだ。俺にはその力がある、この十指に宿る竜達がその武器なんだ……。強くなりたい、いや、強くならないといけない。

それは何故？

愚問だ……俺は……守る為に闘うッ！　その為にこの力がある！！

さぁ、恐れるな古都宮零時、お前は何を怖がる？　何か怖い者でもあるのか？

……イヤ、ない！！

なら、真実へ歩め。その準備はもう出来てるんだろ、古都宮零時

？　俺の答えは決まってるはずだ……だから目を反らすな、そこに傷が、涙が、真実があったとしても決して目を背けるな！　それが、古都宮零時だろ？　償いはもうできないのかも知れない。

償うのは……全部が終った後だ。

今は、ただただ真実を……見るだけだッ！！

決断が早いかもしれない。だけど……決めた事なんだ。俺は知るしか方法はないから。

さぁて、この女――ティスが死神となるか天使となるか……？はたまた……どうなるか？　その先は闇かもしらないと臆すな、臆すとは自分に屈する事だ…！　臆して負けるよりも、立ち向かって負ける方が男らしいだろ？

だから、俺は臆さないし迷わない。

それが、俺が担げてたプライドだからだ……！

つまり、俺に負けるかッ！　このままで許せるかよ!!　必ず俺を叩き潰して俺は俺になる。俺は俺だからだ……例えアイツが、文也――いや、和也みたいに本当の俺だとしても、俺は強欲なんだ、俺は俺になりたいんだ……。

俺は……俺だッ!!

自分に負けない強さを求め、誰かも守れる力も求める。

ああ、そうさ、俺は強欲だ。

だから、知りたいんだ……それを得る不幸へいくために。

「瑠依は出て行け……これからは真面目な話だ」

瑠依に背中を向けて威圧するような低い声で“忠告”する。

そう、これは忠告だ……。瑠依が引かないようであれば武力行使で強制退去までさせる。妹だろうけど手加減は出来ない。それにもしかしたら……可能性は低いけれども……。もしかしたら、瑠依は関わらないかもしれない。

それは——兄として喜ばしいことで、幸せであった。

別に、瑠依だけでもない。メイドや執事、コックやジィにバァ、父さんも母さんもこの古都宮に関わらなければ、俺だけに不幸が振りかかれば喜ばしい。本当は……真実を知って不幸なんかなければいいのかもしれない。けど……それはない。

「うん——わかった」

扉を閉めたしオートロックも繋った、これで外の話は聞えても内側の会話は聞えなくなった。つまりは瑠依に話しを聞かれる危険性は消えた。

さぁ、トカゲの尻尾は掴んだ出てこいよ……『古都宮零時』という不幸の脚本を書いた悪魔さんよォ？　俺は……逃げないぞ？

それなら、あえてお前の脚本通りにすすんでやる……！　そして、笑ってる内にお前を舞台のど真ん中に引きずり出してやる！

「……引き返せないわよ？」

“忠告”される。

そりゃそうだ……ここから、世界は変わるのだから。

「引き返すかよ…！」

こうして、竜装使の物語は進む。

その先にある悲劇は喜劇へと変貌するのか？

はたまた、悲劇から……惨劇へ？

目の前の「清らかな祈り（ステファノティス）」が導く真実とは？

さぁ、運命を破って見せろ。

最強の能力をえし零の時（ノー・タイム）よ……

その先に、どの時を刻む？

羅針盤はもう止まらない。

―歯車は噛み合ったのだから。

―絶望の足音は刻一刻と―

【120話RC】Six reverse coin's +γ（前書き）

今回はＳＩＸの番外編的なものです……正直な話しは後書きで。

【120話RC】Ｓｉｘ　ｒｅｖｅｒｓｅ　ｃｏｉｎ＇ｓ＋γ

金属音の不協和音を奏でる。黒が舞いそれを銀が叩きつける。Ｙシャツにジーパンというラフなスタイルのな少年は叩きつけられてずらされた起動を無理矢理調整し思いっきり切り上げる。しかしその渾身の一撃は黒いローブに身を包んだ青年の服にすらも傷を付けない。

逆に振り上げた大きなスキを突かれて腹部にその銀の正体である大鎌の石突が腹部に減り込んでしまう。肺にたまった酸素を全て噴出し少年は身を落しそうになる。そこに青年は回転を加えて貫かんとばかりに押しつけられる。

「ッ！！」

腹部に激痛が走り、足に気合を入れて踏ん張らせる。そして、バックステップ。しかしその行動は読まれている。少年よりも素早く移動した青年が少年の背中に回し蹴りが放たれると本格的に倒れてしまう。やたらと強い雨に打たれ少し少年は意識が昏倒したがすぐ取り戻す。

そして、服に付いたドロを気にせずに向い直る。

その視界に青年はどう写ったか？　それを知るのは本人しかいない。ただ自分と青年との実力の差を思い知ってるのであろう。口元を拭い再度、鋭い目で青年を睨みつける。その獰猛な野性的な目は彼としては久々に出す自分の過去の姿であった。

例えるなら、獲物を狙う野獣。

事の発端は数時間前である、この少年……雨宮和也（あまみやかずや）は居候組を引き連れて買い物に行ってた時、運悪く天候が崩れてスーパーの帰り道、豪雨に見舞われた。そこで干していた洗濯物に危険が当然迫っていたので猛ダッシュで帰宅しているところに、この黒いのにすれ違いザマにボディーブロゥを貰って、この場所に呼び出されたのだ。

その呼び出しにノコノコ出向いてやったら、その場に同じく呼び出されたのは友人であり敵でもあったマブダチのようなものである、周囲には“参魔神”として知れ渡られている、“参謀（オーディン）”の井塔将（いとうまさる）、“魔槍（グングニール）”の雨宮和也、“神風（スレイプニル）”の如月駿（きさらぎしゅん）のそれぞれの異名の頭となる漢字を文字られ言われたのが“参魔神”だ、しかしどうやら状況的に同じで同一犯だと思われる。

そして時間通りに現れたのが、今現在和也達と退治している黒いローブの男たちである。

3人は見事なまでに分散されて、和也に至ってはこのザマだ。

この青年……神堂真琴（しんどうまこと）の前では太刀打ちが出来ない。格の違いを見せつけられていると和也は悟り、それが一層に彼の苛立ちを増している。なによりも自分の不甲斐なさがその最もたる原因。

そして和也は圧倒的な劣勢にあった。

踏み出し鎌と鎌がぶつかり合い火花を飛ばす。その火花は雨の中だというのに朱く輝きを放ち薄ぐらい公園にその周囲に異様な明るさを生み出していた。金属が擦れ合う不協和音を奏で離れて再び火花と不協和音を出す。

黒と銀のぶつかり合いは外見、幻想的で皮肉なほどに美しかった。

「はぁ――――！！」

大上段から叩き落された一撃は真琴の前に落される。和也としては真琴を頭から真っ二つにするつもりだったらしく舌打ちをあからさまに大きくする。抜かるんだ地面に鎌の刃を滑らせて思いっきり振り上げる！

「牙連追（がれんつい）！」

そこから無理矢理鎌術へと切り返る。泥を抉り真琴の顔面を狙うが真琴の姿はもう無く真琴は和也の頭上へと舞い後ろへと着地。そして鎌を構えて真一文字に薙ぎ払う。素早く腕で脇腹を守り氣で一瞬にして硬化して吹き飛ばされる。

高質化は二秒を越えると自らダメージを負うのですぐ解除する。それと同時に地面に叩き付けられ転げまわる。立ち上がろうとするが行動はやはり真琴の方が段違いであり首筋に鎌を突きつけられる。滑稽だ…と内心でつぶやき、この尻餅をついた状態は自分として恥ずかしく、屈辱であった。その鎌に突きつけられた首筋には、冷たい感触と生暖かい感触の液体が入り混じり流れるような気がした。

鎌は……！？　そう思い徐に和也は身の回りに気を配るが視界の端に見える一本の大きな鎌が見えた。自分と同じく吹き飛んだんだと理解する。和也は息を飲む、どうやってこの状況から打開するか。状況は圧倒的な劣勢……、逆転するにはどうするか……？

考えて考えて、活路を見出す。

しかし、その行動は真琴の発言で止まる。

「世の中……知らなければいいことだけだ」

真琴から奇怪な言葉が放たれる。その言葉は和也だけではなく自分にも言い聞かせてるように。その奇怪な言葉に和也は一瞬呆気に取られる。

気が付くと鎌は大上段に構えられていた。コレを気にと和也は無理矢理に地面を蹴り飛ばして空中で一回転し着地すると、鎌が突き刺さった場所にダッシュで駆け寄る。ぬかるんだ地面はスピードを奪い脚の踏ん張りが効かない。

鎌を掴み足にブレーキをかけさせて体制をとろうとするが、何分ぬかるんだ地面だ足が滑り無理な体制で立つ事になる。立ち膝になるような姿勢で無理矢理動くのも難しい姿勢だ、恐らく杖の代わりといる鎌が無くなればたちまち地面に伏すであろう。しかし、和也が気にしたのはの真琴による追撃であった。目も衝撃に備えて硬く瞑っていたが、何時になっても想像したような衝撃はこずに薄っすらと目を開くと和也は息を飲んだ。

朱色の光の柱が天に聳(そび)えたち、それを囲むように見た事のない文字がふわりと浮雲のように浮び螺旋階段を作るように柱と同じく天へと向っていった。和也はそれを魔法と判断するが、脚が竦んでしまう。

和也はこれまでに魔法に対処するためにセフィリアやラミア、ヴァン、零亞などあらいろんな魔法を見て魔法の習性（動きのベルクトなど）を学んだつもりでさまざまな魔法にも対処できると思っていた。しかし零亞もセフィリアもいくら強力だと言われてても所詮

は和也とタメ、もしくは歳下である、つまりはまだまだ幼く魔法にもまだ馴れがない。

それに比べて真琴は違う。幼い時から独学で魔法を学び、生き抜く為にさまざまな魔法を知り覚え使い並外れた才能を開花させていった。つまりはセフィリアや零亞は真琴からすると幼稚なものでしかないというわけだ、そして誰もが使えないであろう魔法の詠唱を始める。つまり和也はこの魔法を知らないしそもそも魔法の詠唱を滅多に見なかったので面を食らっていた。

普段、レナ達は“魔封石”を愛用していて下級などの魔法なら簡単に作れる。だが、真琴のは明らかに手順が違う。

意味の理解――聖霊との契約――力の「カタチ」――詠唱

＜ご主人ッッ！！　ヴィラング・ゾルです＞

詠唱に入る前に鎌が魔法の正体を言う。

しかし和也の耳には届かない。

――燃え盛る猛き灼熱の焔よ

いや、聞えても頭には入ってこない。名前を聞いてもどんなのか理解できないからだ。

――全てを不毛の地へと焼き尽くせ

そして、真琴から発せられる魔力をいまさら感じ臆した。

――焔の聖霊の息吹きを……さぁ、燃え尽きろ

詠唱が完成された。

「ヴィラング・ゾル」

「や……り？」

魔法の姿は神々しく猛々しい焔を纏った巨大な鎗（やり）。その鎗は光の柱の真上に現れて矛先が和也に向けられている。そして和也は悟る。

コノ攻撃ハ危険スギル。と……全身が警告が発令する。

＜ご主人！　波長を合わせてぇ！！＞

鎌の悲鳴に近い絶叫が和也の鼓膜に響く。そしてこの攻撃を破る方法を見つける。

“運命（さだめ）の空間”……“超確立変動（ディステニー・ブレイク）”鎌の特殊な力が頭に過ぎりそれが“最善手”だと考える。そして頭に再生されるのは“運命の空間”の発動条件。

１つ、主が魂は従者と共に。つまりは、以心伝心している事。精神の波長を合わせるという意

２つ、揺るぎなき世界のみ。つまりは、空間が不安定でない事。異空間では使用不可という意

３つ、運命を信じない精神。つまりは。「運命なんか信じるな」それは我が運命の神の試練なり

４つ、これは最も単純で最も難しいもの……「臆すな！」それだけの想いを示せ

それが和也が鎌に教えられた４つの条件。

コレまでの精神統一で１つのステップは簡単。２つ目に至ってはおかしな世界で無い限り楽に解決である。３つ目も和也は鎌に「運命なんか簡単に破れる」と言われてるので少しばかりは信じるようになったしそう想えるようになった。

そして問題は４つ目……。

それは確かに簡単……「臆すな」……。

人間とは想像（イメージ）するものである、だからその先にあるものを憶測してしまう。つまりは、床に穴でもあればもしかしたら鼠が出てしまうかもしれないという先入観。それを考え始めたらその妄想はありもしない恐怖を産んでしまう。そして臆してしまう、それが人間だ。そのイメージを捨てる方法はなくどれほどポジティブに考えられるか？

しかし、上空に煌く業火を纏ったその鎗の威力を最低限ではなく最大限の思想をしてしまった和也にとってそれをどうしたら臆する事は無いか？　頭ではわかっていても心というものはそれでは理解が出来ない。あの攻撃の想定した破壊力は先入観に刻み込まれてる。

発動を試みる。が、発動しない。

発動を試みる。が、発動しない。

発動を試みる。が、発動しない。

発動を試みる。が、発動しない。

ゆっくりと確実に迫る鎗は更に和也の意識を抉る。

焦りが産まれる。その焦りが「臆し」でもある。

奥歯を噛み締める。不甲斐ないと想う……自分はこの程度のものが怖いのか？

（ああ、恐いさ恐いよ。あんなのモロに当ったら死ぬだろぉが！！そりゃぁ死にたくねぇよ……。なら生きるしかない。だけども生きる為の事が出来ない……。

それで……オレは、諦めるのか？）

鎌を握る手が強まる。そして、和也は不気味に笑う。

「使えないものはしゃぁねぇぇな……」

鎌を上段に構えて目を閉じる。

（正直……こえぇぇな……。）

ほくそえむ。真琴はその表情を真琴は訝しげに見る。

「雨宮流鎌術秘伝奥義　刳零那（くれない）威の刃」

漆黒の鎌が紅く染まる。それはまるで夕日のような淡い赤。そして一呼吸置き、和也は鎗を睨みつける。鎗が射程に入った事を確認すると和也の足元に魔方陣のような円陣が描かれて『曉』『煬』な

どと炎や陽を表す漢字が所狭(ところせま)しと書かれる。その一文字一文字が鎌に宿るように鎌の刃に浮かび消える。

魔方陣のようなものが本来の姿を表す。複雑な形だろうがなにと無く太陽をモチーフにしてると理解はできるが、入り組んだ魔方陣は紅くハッキリと光が放たれる。

「火力勝負なら……まけぇねぇッ！！

こうなりゃ……実力で壊すまでだ！　『軻遇突智(カグツチ)』ッッ！！」

地面に叩きつける。そこから火柱が立ち上るとその上空で一部膨れ上がる。まるで殻を破るように火柱を裂いて姿を見せたのは一羽の巨大な鳥。朱い羽を持ったまるで不死鳥を象ったような鳥である、その雄叫びはなによりも猛々しい鳴き声。いや、フェニックスというよりはガルーダ。その朱い光りは本来の色を赤くしているだけ、ようは孔雀だ。

軻遇突智は主を守るように鎗の前へと出し翼を広げて思いっきり羽ばたく。

紅きその疾風は鎗とぶつかり合う。

「な――――?!」

想定外だと言わんばかりに真琴は驚愕の音を漏らす。彼としてはこの一撃に賭けていたつもりなのだろう。しかしそれを止められた。いや、押してるのは鎗の方だ。だが和也はもとから勝つ気はない。ニヤリと和也が笑っていたのに真琴は気がつかない。

結局は軻遇突智は鎗に貫かれて和也に迫る。

そして、世界がゆったりとした世界に変わる。いや、そう感じるのは和也だけだ。真琴は和也が小さく唇を動かした感じがしたが読唇術を使うにはぼやけていてはっきりしない。和也は“能力”を発動する前に小さくこう呟いた『この程度のオンボロ鎗……魅夜のゲンコツのがいてぇよ』と、それは和也の宣言にも似たようなものである。

そして、次の瞬間、和也からみたら動きは一層に速くなった。そして真琴からしたら奇怪な光景であった。鎗が崩れ落ちたのだ。真琴が気が付かないはやさで。軻遇突智の攻撃でそこまでなったとは到底想えなかった。すると視線は和也の方に向う。塵となった鉄くずが降り注ぐ場所で和也は鎌を一回転させて構える。

そして、一気に前に出る。

「雨宮流鎌術！　魔閃！」

真琴の正面から和也は消えて真琴の背後へと移る。

「遅いッ！

体劇……」

首を掻き切らんと振り切った鎌を真琴は姿勢を低くしてよける。同時に手を地面につけて身体を捻り和也の脇腹に蹴りを見舞いする。

「乱（みだれ）」

和也が防御姿勢に入る前に軽いジャンプで立ち膝に入り和也の顎に向って蹴りを放つ。上体を持ち上げられ軽く吹っ飛ぶ和也に対して真琴は上げた脚を地面に足を着けて踏ん張り右手を鳩尾に拳を叩きつける。腕を捻り同時に身体も捻る、回転を加えた拳は威力を挙げて、和也の意識を殴り飛ばす。

「ッッ！！」

意識を無理矢理引き戻し目を開く。真琴は次の攻撃の姿勢に入り、消える。

「体劇　飛凰（ひおう）」

次に見えた時は和也の目の前。膝を腹部に叩き付けて和也は今までに感じたことのないほどの浮遊感を感じる。次の瞬間は背中にそして締めには和也の真上から蹴り落す。和也は地面に叩きつけられて次こそ和也は気を失った。真琴は何事も無かったように地面に降りて和也を見下ろす。

そして視線を一角に見られる雑木林に移される。木の一つが微かに揺れると真琴の目の前に一人の女性が現れる。彼女の名前は、セシル・ラザ＝ミーチュ。四二神の一人であり真琴が指揮する『狂気（ラ・ヴォン）の番犬（トナス・オ・メディ）』の一人でもある。黒いローブの右にあるワッペンには５の刺繍されている。彼の前で忠義を示すように膝を地面に付けてフードを取る。小さな顔に特徴的なサイドに分けた黒い髪に銀髪が混じった髪。一度礼を解くと彼女の琥珀色の目が望める。

彼女は真琴が指揮する『狂気の番犬』のＮＯ３として知られている。頂点に君臨する真琴に続くＮＯ２が真琴の友人ともいえる、セイガ・アルウィン。四二神のＮＯ３でもある。それに続くトップと

して立つのがセシルである。彼女は真琴への忠義が厚く、真琴に憧れて四二神に入隊した才能と忠義を併せ持ったものだ。

四二神のトップ5になっている今でも真琴の命令には逆らわない。絶対服従の誓いすらも立てている。そもそも、セシルはとある事件に巻き込まれたところに四二神として現れた真琴に助けられ、親を失ったセシルを孤児院に連れて行ったのも真琴だ。命の恩人としての忠義であり、好意などではない。

「始末を任せる」

「恐縮ながら隊長……局長（マスター）の命令で隊長のノルマになっています。故に隊長の身体での変化魔法の許可をとりたいんですが…？」

「……許可する」

投げ槍に真琴は許可すると。「鎌の意」を唱え鎌を召喚させる。彼女の鎌は「変貌の魔鎌（トランス・デス・サイズ）」といい、効果は術者の一定範囲（セシルの場合1ｋｍ弱）にいる者の一人を対象に自分の姿をその者、その思考の中にいる者に術者が姿を変えることが出来る。その時は思考は術者のものだけども声も体術、武器もその通りに変化させる事が出来る。

セシルはそのまま真琴の身体に変貌し、鎌も鎌に変化（トランススケィス）する。彼女はフードを深く被り直し未だに意識を持って行かれてる和也の方を向き直る。その時には真琴の姿はそこに無く彼は彼の目的を果す為に移動した。

仲間のもとでもなく別の場所へ、他の和也の家の周囲にいた四二神はすでにレナに撃退されてるコロだと真琴は確信していたからだ、他の二人も本気になった駿や将に勝てないと見込んでいる為だ、いや少なくとも勝機はある、憑依さえさせなければ歩奈実もセイガも

勝てる、だが憑依をさせたらアイツらは神にも、いや実際に神だ……。死神程度の存在では敵わなくて当然でもある。

和也が立ちあがったのは真琴が立ちあがってすぐであった。意識を失ったことにより小さい状態に戻った鎌を左手で握り締める。気を引き締め直すように

「出番だ！　鎌！！」

＜了解！＞

＞＞５３話へ

＜聖涼高等学校教職員紹介＞

真琴「神堂真琴だ、今日は不本意ながら母校（卒業してないが）の教職員を紹介しようと思う。因みに毎日この話を見て今日はを何回繰り返すんだこの馬鹿は、毎日見てるじゃねぇかは無しだぞ。そんなどうでもいい事は控えてどんどん行こう。

まずは、俺が高校時代に担任の夕都敏樹（ゆうとしき）先生だ、因みに社会を担当してる自称永遠の３５歳のナイスガイだそうだ。先生、ほら一言」

トッシー「紹介に挙がりました夕都敏樹です。トッシーと呼んでくれ、因みに彼女募集ｔｙ『煉獄殺』ぎゃぁぁあああ、髪が！髪がぁぁあああ…」

真琴「次は勝手に人に因縁をつけてくる今は二年の体育教師、高梁克典。通称エロゴリラ。歳は４０後半くらいになるんだな……懐かしい」

エロゴリラ「高校生での男女の交際など絶対に認めん！」

真琴「エロゴリラの未婚の嘆きを無視して次に行く、もう何度か登場したので知ってると思うがつまらない漫才を繰り広げる校長、馬牟詩響夜、次にボケ専門のつもりかもしれないが教頭、雨影秀吉だ」

教頭「校長と共闘しがんばります、教頭です」

校長「ハハハハ、上手いじゃないかぁ、教頭君」

真琴「では一年Ｂ組の担任といえばこの人（？）、ムキムキの筋肉を盾にし、その豪腕は壁をも解すかもしれない、何故英語を担当するか知らないが、石川文宏こと、フミｔだ……いい先生だと評判はある」

フミｔ「ふむ宜しく頼む」

真琴「いい加減馬鹿馬鹿しいんだが続く……次は最凶の先生。涙脆いのは人情豊だからさ、だけど泣かせた日にゃ罪悪感たっぷりな幼女先生、因みに酒豪……日次恵理先生だ、現代国語の先生で物語がハッピーエンドで終わる時はいつも泣いている、愛称は『泣き殺しの恵理』だ……因みに旦那様はいる……」

泣き殺し「ううぅ……真琴君、こんな捻じ曲がった感じに育って……ぐすん」

真琴「悪かったな……こういう性格なんだうよ。保険医でありサキ

ュバスとなんでもござれな保険医、グラマーだからって通うな、精気を吸われる……須川美久……背中に書かれた『取り扱い注意』は本当の事だ、気をつけろ」

須川女医「怪我の際にはゴムを持参して『爆連・地裂怒（ちさど）』あら…？」

真琴「数学、科学、物理、生物、古典、音楽、美術、家庭科、保険、公民、日本史、世界史、書道の先生を1、2、3の担任を順番から言う。因みに、音楽からは幾つかの学年を担当してるのがいるので悪しからず……。

ってか、その他の先生でくくれば楽だが名前は出るので覚えといた方がいいかもな。まずは一年からいく。

戸中春（となかはる）、足立理沙（あだちりさ）、井神統介（いがみとうすけ）、蜂餓健（はちうえけん）、小埜英（おのひで）、赤守響華（あかもりきょうか）、横山傑（よこやますぐる）、青島咲（あおしまさき）、佐々木夏（ささきなつ）、大森大地（おおもりだいち）、御崎馨（みさきかおり）、鬼堂藤（きどうふじ）……って、ご老公はまだ生きてたのか……。鹿鎗蒙梨（かそうもうり）だ」

春「一年の数学を担当する戸中春だ、宜しく頼む」

理沙「同じく一年の科学を担当する、足立理沙と申します」

統介「物理担当、井神統介」

健「一年生の生物を担当する、蜂餓健です……解剖なら任してほしい……な」

英「古典担当のー、小埜英ーよろしくー」

響華「一年から三年の音楽担当の赤守響華なり☆」

傑「同じく一年から三年の美術担当の横山傑……先生たちの中で一番若いのが自慢」

咲「一年二年三年の家庭科を担当してます、青島咲です、よろしくお願いします！」

夏「保険担当、佐々木夏……一年から三年の担当をしてる」

大地「一年と三年の公民の担当してる大森大地だ」

馨「御崎馨……全学年の日本史担当」

藤「ハハハハ！！　世界史担当の鬼堂藤じゃ！　好きな物は酒とタバコと色男！　彼氏募集中の２９歳！　お姉さんと呼んでくれて結構だ！！一年と二年担当や！！」

蒙梨「一年、二年、三年の書道を担当をしとる鹿鎗蒙梨じゃ……。古株はもう去るべきだが、教える事はまだまだあるのでな……」

真琴「二年は……省略……理由は雨宮達が進級すりゃわかる。三年だな……。

乾雅、品川陽、戸久那愛、村田姫、藍沢浩太、天夜光杜だ、でもって英語の担当はジェイ・スミスだ……」

雅「乾雅です、数学には必ず答えというものがあるんです。諦めない精神と発想の転換が大事で（略）」

陽「品川陽……科学でわからないことはないのだ！」

愛「戸久那愛……物理……なんだよ～☆」

姫「生物担当してます村田姫……よろしく……解剖はやりません……グロいもん」

浩太「古典担当……藍沢浩太で、す」

光杜「天夜光杜……蝙蝠ではないけど暗いとこ落ちつく……世界史担当」

ジェイ「……ジェイ……デス」

真琴「変人奇人があつまる、聖涼の教職員方でした……」

＜「なにちか」シリーズ予告&新展開！？＞

１２３話【番田】

漢には、やらねばならない時はある。もし、それが今なら臆すな。

漢は少女と出会い自ら過去にケジメをつける。けれども……罪は変わらない。
思いと思いが交差する所に過去がある……それは、彼の罪の数。
漢は今、立ち上がり。彼は瞳を反らしながら歩む。
「俺はァ……罪から逃げねェ！！」
「君は……君だけは倒さないといけないみたいだなッ！」
ぶつかりあう拳にはなんの価値があるのか…？

１２４話【赤穂】
男には言えない言葉があった。女には言えない言葉があった。
思い出の写真。今は亡きもう一人の大切な仲間、恋人。
失った物は同じなのに、お互いの思いは交差していた。
だけど、男は嘆く時間もなく、運命に直面した。
「気にするな……所詮俺はイレギュラーなんだ」
「あんたなんか……嫌いだ」
彼の力には何があるのか？

１２５話～１２７話【和也】前、中、後
その力は彼女の為に。この力は守りたい者の為に。
私欲を失った彼の想いは友へ移すしかなかった。
自分が自分ではないけど自分はここにいる、彼の貫いた間違えた正義は。
彼らしさを見失わせていた。
「オレは――――ただ！」
「貴様は……弱い」
思い出して……貴方の力強さを。

１２８話【宮鷹】
封印された過去。親に受けた愛情はなく…。
優しい瞳に移された血塗られた記憶は着々に解かれて行き。

迷宮にさ迷う記憶には残酷な扉があった。
桜舞い散る季節の物語
「……いやや……そんなのいやや！」
「秀一を……だから、私だけは――――」
残酷な猛虎は鷹を狩る――

１２９話、１３０話【レナ】前、後
彼女にいつもハッピーエンドはなかった。
自分の周りが全て敵であったあのコロ。
自分を救ってくれた恩師……でも、それは……。
残酷な再開であった。
「……う、そ……だ」
「さよなら、０７番の死神」
この「重力（ちから）」誰の為に？

１３１話【ラミア】
忌み嫌われた時。そしてあんなに大きかった背中を追い掛け。
だけどそれが傷つけて……。
子供だから気が付かなかった。
だから……こんな事が起きたのでしょうか？
「お兄ちゃん……なん、で？」
「ラミア、僕は……君が嫌いだった」
兄と妹はなんで、理解し会えないのか？

１３２話、１３３話【？？？】前、後
逃げて逃げて辿りついたのは見知らぬ土地。
勇ましき者は傷ついた老騎士に出会う。
彼女は彼を見つけた時に今は亡き友を思い出す。
その過去は憎悪であり復讐を心に誓う。
「私は……殺したい」

「復讐はなにも生まないことを何故わからない！？」
銀と金がぶつかり合う。

１３４話「夏の風物詩と恋の戦争」―予告編―
まだ暑い夏……この月を乗り切ると残暑なのが憂鬱だ。そんな中でその暑さを吹き飛ばすようなイベントが舞い込んで来た。それは、夏の風物詩……ぁ、いや、海とかプールではない、確かに水着もいいかもしれないが、やはり日本の魂は着物だ！そう、夏祭りである！！
そんなノリとハイなテンションで居候陣と祭りに行く事になったんだが……なんか、魅夜のヤツ様子がおかしくないか？
そして、オレは自分の気持ちに気がつき始めて……

―ついに、ラブコメ的なもの……始動ッ！―
―なんかもう、もとはラブコメだったのに１４０以上もまたせてすみません！―

【120話RC】Six reverse coin' s＋γ（後書き）

53話を見ちゃだめぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！　前後の文脈が可笑しくなるから！　それといろいろい間違いあるから！　もう少し時間が出来たら直すから！　大々的に、そして卒業式終わって直していくから待ってって！！

頼みますから読むんじゃねぇぇぇぇぇぇぇ

【123話】何が為の力【赤穂】

それは、とある初夏の話しだったと思う。転校生として来た俺は自分でも情けないほど緊張していた。性に合わない事もわかっていたし、ましてやこの高校は有名な所だ、俺みたいなものが来てもいいところじゃないなんて承知の上だ。

だが、親の仕事の都合で転勤する事になり、住み慣れた故郷を離れる事になった。高校にも入学して間も無くの事で、俺としてはクラスにも馴染めていなかったので別にどうでもよかったんだが……まさか、この高校に来るなんて考えた事はなかった。それもそうだ、見るからにヤンキー。そんなのに好き好んで近づく馬鹿はいない。

先公に連れられて扉の前に行った時には転校生の噂にざわめく黄色い声や「なんで女の子じゃないんだ」と嘆く野太い声、まぁ、俺としてはどうでもいいんだけどな。かといってノーリアクションってのも困る。中でもよく話し声に聞えるのは“めい”という女生徒と“チヒロ”と呼ばれる会話の端々を聞くと男生徒だと予測できる……。

手に滲む脂汗をブレザーのポケットあたりでゴシゴシ擦る。新天地での日常が始まろうとしていた。土地感もないこの街で、誰も知人のいない学校。それは単純に恐ろしくもあった。不安がある分、期待もある。先生が入れと命令した時の心拍数は人生で最大かもしれない。

引き戸の取ってに手をかけて教室に入る。

＊＊＊

懐かしい夢だった……目が覚めた時の素直な感想がそれであった。それは俺がこの学校に転校して来た日の夢。たまにみる夢でもあった。今でもあの日の出来事を思い返すことが出来る。それから名とは腐れ縁でもあるんだよな……。

名ってのは、ほら、アレ。

「そこ、私は物か！？」

髪は昔とは違いバッサリと切って短髪になったんだけども、白く小さな顔は変わらず、目は大きく二重目蓋。一般的に美人というか大和撫子というものだろう。でもって、名前はわかってるけど美人ってこういう使いかたであってるのか？

因みに聖涼の二年間を通してミス聖涼だかの栄冠を手にしてるとか聞いた事があるな……。まぁ、アイツが生徒会長だなんてことがミスなんだけどな。

「そしてスールーなのか！？　真太郎ッッ！！」

教壇を叩いて猛講義。それよか、なんで人様の思考がわかる。

「口に出してるじゃねぇかァァアアアア！！！！」

「黙れ」

「すみません」

手元にあったリボルバーの安全装置を外して名に向けるとコンマ

の速さで謝った。うむ、これも普段の調教の賜物だな。むしろ三年間同じようなことを繰り返してるからクセでもあるのだろう。クラスの連中も見なれてる光景だからなにも言わない。

俺と名のコミュニケーションというものだ……恒例の。

「そもそもアンタは聞いてるの？」

「聞いてない」

「キッパリ言い過ぎじゃ――――！！」

しゃぁないじゃないか。学校行事なんかにゃ興味ねぇんだし。あー日差しポッカポッカ……それでは俺は約3年の眠りにつくとするかぁ……。カレーが出来たら起して、むしろ学食が開かれる5分前に……起してくれ。

「矛盾だ……3年後じゃないのか…！」

「カレーの二の次だ」

「こんのぉ……黄レンジャー！」

「光栄だな」

そして古いぞ。

「……はぁ……」

……さてと、イザ鎌倉幕府（スイミング）。

「泳いだ！？」

そんな感じのＳＨＲだった気がする……。そのまま俺は昼休みジャスト５分前に目覚めた。机に目を向けるとルーズリーフが数枚。それには今日の授業内容らしきものがきちっとした字で丁寧に書かれたのが数枚。トナリの名（トトロ）をみると黒板に書かれた以外の先生が行ったらしきものを纏めたりしている。

名の成績はだから高い。ちゃんと予習も復習もしてる……コイツはルックスで生徒会長に選ばれたわけではないのを俺は、特に千尋（ちひろ）は知っていた……。そう、知っていた……あ～～、くそ。今日はなんかおかしい。

今朝の夢が原因だってわかってる……。特にあの日が近づいてるしな……そりゃ、多くなるか。名の眼もよくみりゃ充血してる……まさか――コイツも？

いや、考え過ぎか……。

名が書いといてくれたルーズリーフに目をと俺では不可能なほどにキレイな文字で埋め尽くされていた。世界史に至っては年表すらも纏めている、黒板に書かれていたであろう説明より詳しくなんとなく、名の奴が書いたんだなと解釈。

前の席では明石（あかし）が爆睡している。その机の右端には俺のと同じルーズリーフが置かれていた。あ～ぁ、涎まで垂らして……。

……コイツは気にするだけ無駄だったか。

っにしても……あと５分……ぁ、今４分になったが待ち遠しい……。食堂からカレーの香が……。ああ、パラダイスだ。

……？　ありゃ、名の足が小刻みに震えてやがる、麻痺や痙攣って様子じゃない……無意識にリズムを刻んでやがる、あ、これはあれだ、ローリング・ストーンズの「Ｐａｉｎｔ　ｉｔ，Ｂｌａｃｋ（黒く塗れ）」だ。銭ゲ○のＣＭで少し知名度は上がったかもしれないが、脚ので刻むリズムが何度もＣＤ聞いた時に名が刻んでたリズムだ。

……どうやら、考え過ぎでもねぇみたいだな……。

「それでは、今日の授業はこれでおしまいやー！」

鬼やん（鬼堂藤）がそう言うと同時にチャイムがなる。因みに１、２年担当の鬼やんが何故いるのかというと蝙蝠……じゃなく光杜が出張で行ってるからその間、俺らの世界史を見てるわけだ。つか相変わらずやたらと元気で仕方ない。

元レディース総長にして、先生だというのに茶髪のチリチリ頭、身長は１８０近くと喧嘩や武道をするための恵まれた人でもあるし、人間離れした怪力の持ち主でもある。

『コケーーーッコッコ！！ケホケホ』

『ニワトリ！？しかも、咽とる！！』

おお、クラス（俺と明石以外）が協力したハモリツッコミを見せてくれた鬼やんはそれをゲラゲラ笑ってる。俺はというと一限目の教科書と名が書いたルーズリーフを乱暴に机の中に仕舞い込んで食堂へダッシュする。イスを仕舞い名の頭を踏み台にしてドアを蹴破り一階の食堂を目指す。遥か後方で名の怒号が聞こえたが無視。週に一回あるかないかの攻撃なんだから慣れろとだけ言っておく。

猛ダッシュすること数十秒、食堂の前に辿りつくと同時におばさんたちが食堂の鍵を開けて開いてる頃だった。うむ、どんぴしゃだァァアア――――――！！！！！

「おばちゃん！　カレーライス！！」

芳野（よしの）おばちゅんにそ告げると“プレート”いそいそと定位置の場所に座る。別に風景もよくないし広いというわけでもない。むしろ殺風景なところだ。だからこそ、逆に落ちつくのかもしれない。少しすると仲の良さげな集団がまばらに入っていき小さなグループを作って適当に座る。そして徐に数名の生徒が立ち上がりなにかを確認するように言ってから芳野おばちゃんのとこに注文しに行った。

聖涼の食堂は注文し“ナンバープレート”を貰ってそのナンバーが呼ばれたらその料理を取りに行くというものだ。それに贔屓目（ひいきめ）なしでここの飯は美味い。購買部のパンも美味い、ともなれば少しは値があっても食いたいってものだろ？　だから生徒のほとんどが来るから席を取られ易い。だからパシリ役をじゃんけんかなんかで決めて注文に行かせるんだ。後は一人2個くらいで持って2、3人使えばとられる心配はないってもんだ。

俺はというと開始数秒で食堂に来たからいっちゃん最初に呼ばれたんで取りに向う。因みに俺の定位置には、刀とか置いてたから心配はない。むしろこの食堂組は俺の定位置を知ってるし取る物はいない。ちょいと痛め付けた奴を数人いるからああいう風になりたかないんだろう。

俺がカレーをもらい、自分の席に戻ろうとした時にひとつの人影がいた。見覚えのあるロングストレートの髪は……明石美樹（みき）……？

なんでアイツが座ってるんだ？　いつもなら名と中庭で購買のパンだってのに、阿野は弁当だが……。うむぅ、明日は燕が低空飛行するのか。

「それを言うなら、雨でしょうが」
「なんでここにいんだよ？　出席番号壱（あかしみき）」
「ちょいと聞きたい事があるの　出席番号弐（あこうしんたろう）」

うむ、やられたらやり返す性格は見事だな。明石。

俺は明石の向い側に座りお盆の上にあるカレーをスプーンですくい食おうとした時に明石が言う。

「名の様子、おかしいと思わない？」

手が止まる。口に運びかけていて鼻先で食欲を誘う魅惑の薫りを放つカレーをついつい皿に戻してしまう。そして、明石を俺は睨みつけるが、明石は普段は見せない真剣な顔で俺の顔を覗う。それで、「気が付いてるんだね」と確認する。なによりも、俺の反応は肯定の証拠。

……明石はそれを確認してどうするってんだ？

「様子は確かにおかしいな、けども“去年”とは様子があきらかに違う」
「千尋……かな？」

十中八苦そうだろうな……後の２０％の確立はあやふやだが……俺が言えるのはそれくらいだな。名の性格からすると孤軍奮闘するタチの人間。相談なんか乗らない、心配かけたくねぇんだろうが逆

にそれが心配だっつーことがわかっちゃいねぇ。

……だけど“去年”の様子とは違う……もしかしたら千尋じゃないのかもしれないな。

だから、俺に聞いて来たんだろうな……。

……。

「明石、出席番号参を頼んだ」

俺は……何も出来ない。“あの時”みたいに……。

「うん、わかった…」

……それが、無償に苛立つ。昔自分の師に言われた言葉が染みていた『力はあってもお前は何のタメに使うかわかっちゃいねぇだろ？そんなんで俺に一太刀浴びせるなんてン億年速いぜ、がーははは』アルコール中毒に言われたあの言葉は未だにわからなかった。用は『何の為に力を振るうか？』その問いの応えが未だにわからない。

あのアル中は知ってたはずだ、俺は“復讐”の為に刀を振るっていると……。それを知っていて聞いたのか？思い出しただけで腹立たしい上にこんな時にその無力を知るのは痛かった。これは名の問題だともわかっている、けれども名には“借り”がある、授業のノートとかではなくてもっと大きな“借り”。それを返さないと駄目なんだ……アイツにしては小さいかもしれないが……なんとかしないとな。これぐらいしか、返せるものがない……クソ。

「――――」

…？　なんだ、明石がなんか言ったみたいだが……？　いや、気のせいか……。

――彼は気が付かないでいた、明石美樹が「潮時かな？」っと小さく呟いた事を。

―Ｍｅｉ　Ａｎｏ―

今日――ううん、最近、懐かしい夢を見ていた。こう言っちゃなんだけども私は頭が良かった。いや、ちゃんと言うと良過ぎたのだ、一年で有名な子の葉架瀬君とは次元が違うんだけど……。彼に比べたらバカなのかもしれない……私が天才的だったのは……この“異能”の使い道。

いつからかは知らないけど、私の頭の中で如何なる計算を瞬時に行なう“光速計算（メディスレイト）”という力が何時の間にか身についていた。だから、始めて見る数式でも高速で計算し答えを出してしまう。そんなんだから持て囃（はや）されもしていた。そんな自分が嫌いで……なんども

リストカットをしていた頃の記憶だった。

自分の力が嫌いで、何度も死のうとしたのに死ねなかった。ある意味幸運なのかもしれないけど私にとっては不運でしかなかった。疎ましいこの力が嫌いで嫌いでどうしようもなかった。学校では好かれる偽りの自分を作っていた、そんな自分もいやになっていた時の話し、夢を見るごとにその物語は進んで行く。ここまで見て、私の記憶になぞられてるんだなと最近自覚し始めた。夢という事ですぐ忘れてしまうのだけども思い出してしまったら記憶は鮮明に再生される、だからそれを辿れば簡単だった。

今日は珍しく美樹はいない。だから、一人で考える時間はいくらでもある……それに美樹は私がリストカッターだったなんて知らない。心配もかけたくない……手首の傷はばれないようにリストバンドをしているから大丈夫だろう。1年の後半からしてる……なにやら校内では凶悪な力を封印されてると広まってはいる。一応は言っておくけども市販品です、封印の装備ではありません。

「……」

弁当を包み直して空を見上げると、黒いなにかが空の上にあった。一瞬ヘリコプターかと思ったけども――――違う！　まるで、そう！　像だ……巨大な！

落ちて来る……こちらに！？

うっそ……！？

空を裂きアスファルトを砕く音を響かせる、周辺の教室の窓を破り鼓膜を裂くような悲鳴が耳に響く。空を舞う土煙の中で落下位置

は私の正面に２３．６ｍ弱という計算が成り立った、今日の風向は風力、落下してきた位置に音が轟くまでの時間……逃げるには十分な距離がある。しかし、相手の腕を伸ばされたら最悪捕まる。

ッ！！　なんだ……この感覚は？　私はコレを知ってる？

「お迎えにあがりました、“姫”」

テノール、高めの男の子の声が聞える。落ちてきたのとは……？別？

“姫”って……なに？　彼は誰？

私は……誰？

「さぁ、行きましょう……貴方の居場所に」

恐い、なんだろうこの人……？　いや、そもそも人なの？　恐い恐い恐い恐い恐い！！

「おーい、阿野？　大丈夫かー？」

上から？　ってことは、１年の教室……ここから近いのはＢ組だ、それに、この声は……？　ぇ？

「うひゃ、でっけぇな……和也」

……我が校きっての問題児２人組！？

「待て！　なんで将が入ってないんだ！」

「なんでアイツだけ罪がないんだよ！？」
「僕は君達みたいにやんちゃじゃないからね」
「「将ーーー！！！」」

……そりゃそうだね。将君はなんか裏で暗躍してるみたいだけど……うん。

って！　それどころじゃないでしょうに！！

「何！？　あのでっかいのはなに！？」

取り乱す私に対応したのは彼等ではなくて背後の男。銃の安全装置を外す音と銃声。それに舌打ちした正面にいる男の声。このバカでかい聞き覚えのある銃声は…！？

「しらん……雨宮、如月、井塔はデカ物を頼むぞ」

真太郎…！？

「うぃー」
「はいよ」
「わかりました」

我が校の最強ヤンキーが４人も揃ってしまいました……頼もしいというレベルではなくもう呆れてしまってる自分がいる。その呆れは安心の裏返しであるとは気が付いたのだけども幾ら非現実だというのに落ちつき過ぎではないと思う。

正しい判断は校内から聞える悲鳴なんですけど……。

［第二校舎屋上］

普段、和也達が溜まり場として使っている特別教室塔の屋上。そこは一般生徒は立ち入り禁止とされている。裏を返せば一般生徒でなければ立ち入る事が出来るというワケだ。そんな中で彼――継坂腕（つぎさかいな）はフェンスの細い足場から下で繰り広げられる戦闘をサングラス越しからもわかるような細い眼で見ていた。

その後ろにいたのは普段の服装、そもそも聖涼の制服に身を包んでいるはずの彼女が制服ではなく、スーツを着込んでいてまるで秘書のような感じを漂わせる女性が立っていた。その見覚えのある顔立ちは、阿野名、赤穂真太郎、天野千尋の親友ともいえる人物であった。

明石美樹である。彼女は表向きは情報好きの生徒会長の友人であるが、裏では違う。裏で彼女が通っている名は浅黄留美音（あさぎるみね）という生態実験研究部第三科（プリカヒューマンプラス）の現所長（レ）である。しかし浅黄留美音も恐らくは偽名。彼女の本名を知る者はごく僅かでしかない。

下の巨人と少年。それは直接的に“黄昏の夜（トワイライトナイト）”には関係がない。しかし、間接的に、仲立ちである彼……継坂腕で繋がっている。それは腕にも下の彼にも利も害もないたあだこの件へ協力しその分の“異世界”の情報を手にしただけである。正確に言うと“異世界の生き物の遺伝子情報”である、彼女……留美音が研究してるレプリカヒューマンプラスに大きな影響を与えるものであるからだ。

それを何故、留美音の上に立つ腕が仲立ちをしてるのか、それは単純に腕の目的にはその必要があったからである、腕は“端”の“終焉（フィナーレ）”にも所属し“黄昏の夜（トワイライトナイト）”のトップである父の息子、その“反乱軍”にも席を置き、そして下で戦闘をしている彼とも決して友好ではないが関係をもっている。

目的もそれぞれバラバラ。留美音も腕がしようとしている事もわからない。一言で腕を言えばいい加減な男などそんなものになる。そんな腕にトワイライトナイトの留美音が尽くすのか、それは闇に葬られ、光に浄化された過去にある。そして背を向けたまま腕は留美音に話しかける。

「ルミ」

腕は口元を吊り上げて腕は不気味な笑みを浮かべる。いつもの愛嬌のある笑顔ではなく……酷く黒く残酷な悪魔の笑み。それを表のクルクル変わる表情とは裏腹にまったく思考もなにも見せない無表情の彼女は何も言わずに腕を見る。そんな留美音を見て腕は一層にその笑みを深くする。

それと同時に破裂音。

銃声だとは理解できたがそれだけではない、その銃声に紛れて様々な音がした。眼を向ければ跡形もなく残骸にされたここぞとばかりに憑依したのだろうと推測する。銃声に紛れてするとはと、腕は呆れていた。そして留美音は口を開いた。

「プランをCに移行します」

いままでの無表情とは違う、万面の微笑で。その天使のような微

笑みの影にある闇には誰もが気がつかないであろう。

これが全ての過去という未来の真実が待ち受ける――気がつく者はいない。

そう、この男――継坂腕を除いては。

［中庭］

ふむ、雨宮達はもう片付けたか。性格もバラバラだというのにコンビネーションが凄いな、いや単に3人ともお互いを知り尽くした戦闘のプロだからか、1人が2人の長所をそれぞれ生かす形で動いている。中でも群を抜いてるのは井塔、アイツから纏まっている。

さて、ンな事はどうでもいいんだ……目の前のチビ……俺の銃弾を素手で止めやがった。特殊加工のマグナムがそう易々と防がれるとはな……。撃ったと同時になにかに弾かれる音がした……。

コイツは、いや……能力者か？

「やれやれ、邪魔をしないでくれ」

人を見下したようにそして貶すようにコイツは言う……しょーじき気に食わねぇ……。

「お前こそ学校の休み時間になんて事をしやがる」

リボルバーを一旦ホルダーに仕舞い鞘から抜いた太刀を突き付け

る。銀(しろがね)の刀身が陽光より反射し強い煌めきを放つ。眼を細め刃を寝かせヤツの姿を確認する。

見た目は小学生か中学生、柔らかい顔立ち（女顔とも言う）になにより目立つのは死神のローブみたいなもの、みたいなものと言うと死神で連想させる『黒』ではなくてそれは『白』であるという事……そして俺は奴の背中にある物で俺のマグナムが弾かれた事に納得する。

「そんなの――知らないよ！！」

ヤツが消えた？　いや、上か！

「虎昇斬(こしょうざん)！」

上半身を捻り、溜め、そして上へ向い切り上げる。豪快な金属音を奏でるなんとも耳障りな耳鳴りまでする。いや、この耳鳴りは最初の方からしてたな……。

その思考が厄介な事に繋がる。理由は簡単だ、耳鳴りの発生源を考えてる瞬時にこのガキは俺の懐に潜り込んでいた。右手には身の丈以上あり不気味な赤紫の光を放つ骨か鉱石で作られたかかも理解出来ないほど不気味な素材の斧。片方ではなく両方につけられて破壊力も重量も十分ありそうだ。

どんだけ怪力なんだよ――――！　このガキィ！

そう思ったと同時に浮遊感。吹き飛ばされたという自覚はすぐ出来た。アバラが2、3本貰われたかバックステップをしてたら刃に当って上半身と下半身がおさらばだったじゃねぇか。

ゴォウというような快音を立ててこのガキは斧を弄(もてあそ)ぶ。まるで俺を敵と見なしていない、つまりは俺を雑魚と決めつけやがったという事だ。ちぃ、出鼻を挫かれたのは認めっが…！

テメェよりよえぇなんて決めつけんな！

「まだ、やるの？」

上等だ、ノってやるよ。

＊＊＊

（い、やぁ……。なに？　頭に何かが過ぎってくるよぉ……）

赤穂がぶつかり合ってる最中、名は頭を抱えて蹲(うずくま)っていた。奥歯をガクガク言わせて恐怖に抗うどころか恐怖に脅え切ってるところが理解できる。しかし、彼女は理解できていない。それは恐怖じゃなくて自分の“能力”にだ。

「――――――――――」

――音というものは魔力を媒体にしやすく音にやる力は未知数である例を挙げるなら“超音波”である振動数一万六千ヘルツ以上の超高周波は人間にとって音として感知されない不可聴音波である。その超音波には未だに解明されてない能力(ちから)もある。それは歌にもあることだ、とある曲を聴くと元気が出るというのもある、第一、言

葉には力を与える能があるとも言われている、言葉や歌、つまり音というものにはまだ解明されていない部分もあるというわけだ。

突然、名は言葉を発する、名かどうかも怪しい程に声色が違う。名よりも少し落ち着きのある……まるで国を統治する姫様のような透き通るような声で。

「――――――――」

――筋力強化というのもありえるかもしれない、そもそも人間は自分の実力の半分も出していない潜在能力がある。それを引き出せば巨石などを持ち上げる事も出来る。あの高周波はその類いの一つでしかない。あの巨大な斧を片手で持っていられるのは彼が余程のムッキムッキなマッチョではなワケではない、第一に細すぎる。

しかし狂ったかのように、そして名は次の言葉で

「――――――――」

――だがその答えは否……

自分の論は違うと言い切る。

「――――――――」

――仮にも超音波だとして……それならば何故に真太郎には作用しないかが矛盾になる……。

機械的に淡々とした声で

「――――――――」

――異常な力、正体の判断の材料になる斧が放つ超音波と全体的な筋肉の発達……。

それが小気味悪くもあった。

「――――――――」

――推測結果、音が高ければ高いほどに発達する筋力。超音波の説とは殆どが同じ、しかしただ彼が能力者なだけであり筋力強化の超音波ではない。

そして、なによりも気味が悪いのは名の発している言葉。透き通るような、けども淡々とした“言葉”でもあっても、それは日本語の発音でも外国語の発音のどれにも該当せず誰もが聞いた事のない言葉であった。まるで魔法の詠唱如く。

「――――――――」

――しかし、それも訝しく確証はないに等しい。

少年は斧の柄の先を掴んでる。てこの原理を応用した能力(ちから)もしれない。むしろ単純に筋力強化かもしれない。挙げればキリがない程ある。あの超音波は五感の聴覚を潰すだけなのかもしれない、超音波言えど聴覚が優れていれば耳鳴りくらいはする……。

「――――――――」

――だけども、大丈夫であろう。

それは、“名”の自信というものが発した。

「真太郎は、強いから」

ハッキリと、誰にでもわかる声で名は言い切った。

けたたましい音と共に意識は“名”に戻る。

視界に飛び込んで来た光景は先ほどのけたたましい音を創造させないほど静かな光景であった、木の葉が舞い、２つに分かれる。どこぞの漫画みたいな光景で、赤穂が愛刀であり妖刀である“顎（あぎと）”が振り切られていた。

そして、時期がだいぶ遅い、夏の血の桜が乱れた。それは純白を汚（けが）し彼の意識を狩ったも同然な一撃であった、しかし名には理解出来なかった、常人では判断できない速さの動きであるから、だけども、血だけはどうしてもわかってしまう。

だって、噴出す血だけはすぐには止まらないから。だれが噴出しているのかも。イヤでも、わかってしまう。

そう、血を噴出したのは赤穂真太郎の腹部である。

だけども、次に名の耳に聞えた声は

「吼えろ……顎（アギト）ッ！」

まごうことなき、彼の声。

＊＊＊

それは数分前のことであった。赤穂は明らかに劣勢であり押されていた。武器そのものの重さや破壊力などにも関わっている。

だけども最も赤穂が押されてる原因がある。それは今回に限って大太刀である『血桜』が使えないという事である。血桜は特殊な刀な為に特別な刀匠でない限り研ぐ事は難しいのだ。“とある一件”で血桜を使った事により研ぐ必要が出たのである。そしてまだ血桜は届いていないのであるからして顎を補う絶対的な破壊力が欠けているためである。

間合いを図っても異常なスピードで動かれ、もしくは斧で弾かれてしまう。だが赤穂は落ち着いていた。

斧と妖刀がぶつかり合う。当然ながら力の差で顎は弾かれる、赤穂の懐が露わになった所で白いロープに身を包んだ少年は斧を水平にし、真一文字に振りきる。

「ジェノサイドバスター―！」

その空気の裂け目、いや、正確に書くなら空間の裂け目から深紅の閃光が溢れ出す。赤穂は顎を納刀し構える、姿勢を低く利き足を前に鞘を上に向け柄を下に、そして一気に抜き去る。あふれ出る紫電は地を駆け、引き裂かれる風は轟く。

「雷虎滅衝（らいこめっしょう）！！」

放たれた紫電が凝縮した虎が深紅の閃光とぶつかり合う。

強い衝撃波は校舎の窓を割れる……ことはなく。

「衝波守護円陣」
「脚波風衝」
「衝烈波・崩」

障壁ををつくったり衝撃波を相殺したりしてる人達がいるから。

そんな裏事情はどうでもよくて。

「待て作者！」
「ちょっと、出番が欲しいね…」
「そうだ！不公平だ！」

どうでもいいわ！　つか、不公平って駿！　お前には出番があったろ！！

和也にもあるし将にもある！あーゆーＯＫ？ってか、お前等学校に来る前の流れなんですけどー？

「「「……後で殺す」」」

えー、ゴホン。お見苦しい会話失礼いたしました。

虎と閃光の衝突は互角……いや、微かに虎の方が強力であった。力でならたしかに白ローブに分があるだが、“技”とは“力”とはどれだけ武器を扱えるかという“技量”の問題になる。力いっぱいに降り回しても“技”というものは完成しない。“技”とは“技術”なり、“力”の差を“力”で越えるものこそ“技”である。

互いの攻撃のぶつかり合いで生まれた衝撃波を2人はモロにもらい少し怯む、土煙が晴れるとそこにいたのは白ローブだけである。

「力の壁なんか…」

「？！」

赤穂は白ローブの上にいた、正確に言うと真上。そこから一振り、しかし衝撃波は3つ降り切る速さを同じにしたのではなく微妙に速度をずらした技、「連爪襲虎」が放たれる。その衝撃波は斧に防がれるが、背後に隙が生まれる。

「ぶち破るッッ！！」

「爆虎衝連破」、赤穂が使う最大の奥義でもある、壱の太刀に右薙ぎ、弐の太刀に袈裟斬、参の太刀に唐竹、肆の太刀に逆風（さかかぜ）、伍の太刀に逆袈裟、陸の太刀に右切り上げ、漆の太刀に刺突、捌の太刀に左切り下げ、玖の太刀に左薙ぎ、壱拾の太刀に左切り上げ、壱拾壱の太刀に右切り下げ、壱拾弐の太刀に真空刃という形になる乱舞である。

白ローブは深紅に染まり、虫の息という感じだ。肆の太刀、真下から切り上げられた一撃、あれが苦し紛れの受身を崩した、そこから怒涛の追撃。そして、刀を刃先を相手に向け、刺突の姿勢になる。

「吼えろ……顎（アギト）ッ！」

『応…！』

「ッ！　ありえん…！」

「気にするな……所詮俺はイレギュラーなんだ」

冷めた目で赤穂は言う。

背後に姿を見せる白い猛虎。

「白虎」

その冷めた目にその敵しか写さない目に、

彼女は

震えながら

手を広げ

庇うように

立っていた

「天消虚……!?躯」

「真太郎ッッ!!」

阿野名は

その眼に

決意を込め

その白き

獰猛な虎は

彼女の目の前で消え失せた

その消え失せた虎を見て

赤穂は、和也も駿も将も、その場の誰もが驚愕していた。名の突き出された右手に浮ぶ複雑な魔方陣、その魔方陣を見てどこからか沸いて出たか知らないが和也のブレザーの胸ポケから顔を出したフェアナが呆然と呟いた。

その言葉の意味は恐らくだれもわからなかっただろう、どの国の言語でもなくそして妖精たちの言葉でもない、ただただ……フェアナの記憶にあった言葉。

その言葉の意味は「――――」

＊＊＊

消えた

最大の力を込めてた

ただ、何故か手を突き出せと身体が

私の全ての細胞が怒鳴り私はその言葉に従った

真太郎が放った攻撃は普通なら私なんか消えて無くなる

でも、なんでだろうか、私は生きてる、鼓動がある、息をしている

とめどなく、涙が溢れ出す。生きてるんだという実感、死から逃れた幸福、なにより…

「なんで…」

コイツが生きていたこと。

「姫……」

姫なんて意味、私にはわからない。私にはわからない私なんか私じゃない。でも、ハッキリ言える事は2つある。1つは、私は助けたくて助けたんじゃない。

そして――

「あんたなんか……嫌いだ」

コイツはどうも好きになれない、なんで余計な事をしてくれたのかな……？　コイツさえこなければ平和な学校生活だったのに。こいつに壊された。だけど――でも！

「アンタは戦いに来たんじゃないでしょ？」

余計な手出しをしたのは、ウチの不良衆だあのデカイのは多分、保険でしかない。なのに話しを聞く前に動いたあいつらが悪いし、勝手に怖がった私も悪い。確かに、今でも……ちょっとだよ、ちょっとだけ恐いけど……最初から戦う気のなかった彼に背中を向けれる。

白いローブを纏った彼の沈黙を私は肯定と受け取る。

「それなのに……殺すのはおかしい！」

私が甘いのはわかってる。でも、けど……私は間違った事を言ってるわけじゃない。でも、これはただのキレイ事、世の中はそんなには甘くなんてない。

そんな事はわかってる！

知ってる！
でも……これ以上、
私の前で
誰一人、死んで欲しくないから。
だから私は
だから……
私は……！
「盾にでもなんでもなる！」
このわけのわからない力を、誰かの為だけに使う。

＊＊＊

零れた雫は、ゆっくりと乾いたアスファルトの上に落ちた。その時、誰も気がつかなかっただろう。遥か上空、雲の上で巨大な魔方陣が描かれてる事を。

魔力の膨張。その異常な現象に彼女、運命を操る和也の鎌、運命（ディス）の悪魔（テニー・デビル・ブレイカー）を切り裂く刃は悲鳴のような言葉を発する。

だが、遅い。

和也は高速で鎌を巨大化させて魔力を溜める。その間に魔方陣は完成された。

白いローブを纏った彼に向って

漆黒の

逆十字の

十字架が落とされた。

その衝撃波は校内の窓を粉々に割り

彼の近くにいた阿野名を巻き込んだ

「――――」

詠唱に入る和也

「め……い？」

呆然と眺める赤穂

「……」

唇を噛み締める将

そして、彼は……

その金色の毛並みの上に彼女を乗せて悠然と空を駆けていた。そ

して、駿（スレイプニル）は屋上の上で2人の人間を確認した、1人は見た記憶があった。継坂腕、そこが見えない男という印象があった、もう1人は女性、わりと好みのタイプであったが、その目はプロの眼だ。自分を観察してる……。少しゾッとした気分であったが、構う事無く駿は、和也達の所に戻って行った。

「バレましたね」

「ふ、如月君の洞察力は凄いからね……恐らく将君（リーダー）より鋭いよ」

継坂は含み笑いをする、その真意は留美音にはわからない。だけども興味あるのはそれではなく、如月駿、いやスレイプニルのデータであった。歓喜、今にも笑いたくなる気分であった。彼女は細い眼で再度スレイプニルを見る、すでに、如月駿に戻り憑依をといて阿野名をおんぶしてる姿が見られる。

そして和也に殴られた。

＊＊＊

「ぶべらぁ！？」

……なんだというのか、とんでもない脱力感だ。

「間に合ったから良かったものの……無茶のし過ぎだよ」

……でも、俺は……間違ってたのか？　正直、あの中で一番不安だったのは名のはずだ。なのにアイツは、千尋の、アイツの……二

の舞にさせなかった、名は、どうしてこんなに強いんだろう？

ただでさえ、一番精神が不安定な奴だった、いつも泣いてた奴だ。でも、人一倍頑張ってた。ああ、そうか……今更わかった。あいつはあいつの力を誰かの為に使ってた、その力を何の為に使うか、無意識の内にわかってたんだ。

それと違って……

俺は……

冷静に考えれば戦いに来たんじゃないってわかったはずだ、なのに誰もわからないで……アイツは本当に強い。弱いのになんであんなに強くなったか、全部……千尋がいたからなんだよな。俺は……何の為にこの力があるんだ……？

わからない……。

俺は……。

雨宮も如月も、井塔ですら己の力の矛先もなんの盾になるか、見出してる。

だったら、俺は……何が為にこの力を――――？

……わからない。復讐の為に……それは、なにかが違う――。

教えてくれ……。俺は、何の為に力を振るえばいい――――？　千尋……。

『名を――』

頭に走るノイズ

『めぇ――――ぇ』

次第にノイズは悪化し

『――を、――お――ぇ』

でも、ハッキリ聞えた言葉は

『――を殺せ』

――――――ッッ！！！

『名を殺せ』

なんだ……？　なんで……だ、千尋……。

どういう事なんだよ、名は……名とお前は――。

恋人なんだろ……？

なのに……なんで、それを俺に言うんだ？

嘘だろ……？

『お前、真太郎ゆーたっけ？』
『まぁな……お前は？』
『俺は、三重咲千尋！　何時か、トップギタリストになる男や！』
『五日が五日後のニュースを楽しみにしてるよ』
『そうそう、あと五日したら俺は新聞の記事にバンバンバーン！！
っと、なわけあるか！、五日やない！何時か！五日後じゃなくて来月の五日じゃなくて何月の五日でもないわ！　何時か！　まだ日程なんかは未定！　ゆーあんだすたーん？』
『わかってる、耳元で騒ぐな』
『わかってたんかい！！』
『それより、なんだお前？』
『おお、そやった。転校生、お前ロックに興味あらへん？』
『ロック、いや……俺はそのままグイッと』
『酒やないわ！　ロックンロールやって！！』
『わかってるから騒ぐなって』
『もう怒る気になれんわ！』
『怒らなければいいだろ？』
『誰のせいや！』
『元を正すとお前が俺をバンドに誘ったのが』
『おお、そりゃそうやな。こりゃ失敬……って、惑わされんわ！』
『ちっ…』
『舌打ちすんやない！』
『俺を誘うなら……そうだ、アソコのがり勉娘を誘え』
『は、はぁ？　わ、私？』
『おお！　そうだ名！　やってみないか？』
『わ、私は……』
『リストカットはするなよ、大事な手首だ』
『私より手首か！』
『リストカット……？　命を粗末に扱うなぁ！』

『ッ！　正論は聞き飽きたわよ』
『刃物が錆びるだろ！』
『……』
『……』
『どうした？　呆れた顔で見て』
『ハハハ…』
『あ、あはは』
『？　急に笑ってどうした？』
『俺、お前等とバンドやりたいわ』
『私も、ちょっとは……興味あるな』
『まぁ――俺もやってみてもいいかな？』

幸せだと実感できた過去が、黒く塗りつぶされた気分だった。

【１２４話】何が為の力【番田】

昔、俺は師範代に連れられてどこかの山に連れて行かれた事があった。兄弟子や同期の弟子たちはなんかキーキー叫んでいたが、どうやら本当にアソコに連れて行ってもらったのは俺だけらしい。

兄弟子は師範代の孫であり“継承者”でもあった。それは、アッチのではなく今の兄弟子だ。兄弟子の事は……何かと知っているし聞いてもいる、ただ兄弟子には重たいだけだ。兄弟子は感受性が意外と強い面がある。故に真実を知っては……いけないんだ。

そこで俺は考えてはいけない考えをしてしまう。

もしかしたら師範代はニセモノの兄弟子よりも継承者として俺を選んだのか？

そんな期待に近い軽蔑の心が俺に渦巻いた。でも、その先にあった出来事はちょっとした、俺の苦手のジメジメした話しで、俺は継承者に受け継がせる為に“アレ”を預かっている。それは、“雨宮家”のちょいとした秘密……本来なら俺が触れてはならないものだった。

そもそも、これは“人”や“神”すらも触れる事が敵わないいわば“聖書”みたいなものだ。神を殺めるもの。神を許すもの、雌雄の神を裁く存在……まるで夢物語。戯言、それで片がつく話なんだ。

……でも、俺は……知っちまったんだよな……。

「雨宮……ねぇ？」

雨宮の歴史を語るなら徳川家の話から始まる。その頃にちょっとした家康の周辺に不幸があった。徳川家はもともと三河（今の愛知県）にを本拠にしていたのだが、まずは家康の祖父である松平清康が合戦中に“とある刀”をもった臣下に切られたことより始まる。次に、家康の父である松平広忠も近臣の謀反により“とある刀”の脇差で暗殺された。

さらに家康の不幸は続き、家康の嫡男である信康が“織田信長”に武田との内通を疑われ自害に負い込まれた時に介錯人が使ったのも“とある刀”であった。そして最愛の息子の命を奪ったのも“とある刀”であった。それにより“とある刀”は“妖刀”と囁かれる用になり、そして打倒徳川を担げる者たちの象徴ともなった。それが、“村正”である。

当然の事だが村正は一種のブランドであり、固有の刀を刺すものではない。

村正の切れ味は戦国、江戸時代にかけて一級品であるため武士の間では好まれ使われてきた、村正を基準にしては他の刀は悪く言えば少々イマイチなのだ、そこで家康公はとある部隊を動かした……歴史書やらなにやらにも一切書かれていない「死使丸隊（ししまるたい）」と呼ばれる超一流でありながらにし名も知れぬ武士一派である。

そこの長にして最強と謳われている“雨宮信盛”に村正が真実（まこと）に妖刀であるかと調べさせる中で、信盛らは村正を持つ者を見つけ次第、狩っていた。結果としては村正を所持する者には不幸が訪れるという噂が庶民にまで広がり、村正にまつわる怪奇譚（ばなし）が次々と生んでいった。信盛は家康に真実だという事を伝える内に自らが力で築き上げていた。

しかしながらに村正ブランドの勢いは強かった、村正を作るのを止めさせなかったのは信盛の言葉が原因だった「このまま村正を所持し身を食われるのはあやつら、このまま耐えつづければ家康公が安心し統べれる地へなるでしょう。辛抱強く待たれる事ですぞ」という言葉である。家康は当然渋ったが信盛の言葉を信じた。

「死使丸隊」とは家康が裏で仕事をさせていた信盛が作り上げた“雨宮流”を仕込まされた。雨宮流とは全ての武道を極め幾重の発生を生んだ多種多様の技を誇っていた故に戦闘スタイルを細かく変える事も出来、尚且つ如何なる状況でも対応出来る。そんな流派を鍛え込まれた超人集団であったが、家康の死と同時に信盛自身が解体、一家相伝のものとなり、長い歴史封印された。

だけども、雨宮が表に出たのはおかしな事に……雨宮紘守……俺や小狼、和也の師に当たる人が弟子をとりはじめたのだ、それも烏栖深が出来たと同時にだ。

さて、ちょいとした問題だ。

師は何故に弟子をとりはじめたか？

ヒントはやらねぇよ……ただわかるとしたら……もっと先になるかな？　今はこの問題を頭の片隅に残しておくといいさ。そう、今はただ、目の前の事を見とけばいいんだよ。そう……こういう事態をな。

「……番田長太だな」

見かけぬ風貌……つか、ピエロ？　やれやれ、“端”か本当にし

つこいねぇ？

「だとしたら？」

赤と白とは目出度い色の横縞だな。これまたおかしな顔になってやがって。ついついその丸くなった鼻を殴ってぶっつぶしたいじゃねぇか！

「裏切り者……いいや、絃守（げんもり）から託された物を渡してもらおうか」

マジでしつけぇーー。ったくこの野郎！

「はて？しらねぇな？失せな」

ガンを飛ばすと同時にピエロは消える……いいや、高速移動。塀を駆けたりなんなりするだがスピードが乗り過ぎてるから複雑な運動は不可、超高速での動きでは決められた方向への移動じゃなければ足への負担やらなにやかも高い。

車がいきなり止まると似たり寄ったりである。当然タイヤとか駆動部に負担は強い、足にもいえることだ。直線での移動に体に反し意識や神経が横に跳ぶと当然体がついてこられない。そうなると動きはワンパターン……。しかし……なんだ？　速いのに遅い……？

まぁいい……！　違和感なんてどうでもいい……！

「雨宮流格闘術…」

あの赤髪（きさらぎ）に比べたらハナクソだッ！

「竜砕爪（レックス・ブレイク）！！」

ピエロの顔面にアイアンクローを決めてそのまま塀に叩きつける。塀は脆く粉々に砕ける。後頭部をぶつけたんだこのピエロもただじゃすまされないし脳震盪（のうしんとう）は確実だ。それにこんだけ血も出てるんだ掘っといても出血が酷くて逝くかもな。

しかし弱ぇぇなぁ……？　“端”にしては不気味過ぎる。

念の為に気配を探る。

“人間”の気配はあるが、“人”の気配はない。おかしな気配が感じられない……このピエロは気絶してるから当然。やはり不自然すぎる。

考えろ考えるんだ。コイツはなにをしたんだ？　見た感じがピエロ……ん？

「さぁさぁ、愉しい愉快なショーを始めましょう」

「ってめぇ！」

コイツはフェイクだ、いいや、コイツが本物でだったわけだがな。つもりは気絶してんのが本物で真後ろのコイツはニセモノ。どういうわけかっつーと、最初っから2人いたってことだ、コイツの能力は恐らく……『分割』だな。

1↓2↓4↓8っといった感じで分離できるどこぞの単細胞生物みたいなのだ。どうやら奴の高速移動を簡単に捕らえる事が出来たのは速さが少しは遅くても2人いれば高速移動を装える。俺が感じた違和感とはこれのことだ。

「この世で最も強いのはなにかわかるかい？」
「は？」
「それは武力でも精神でもなんでもない！　この世で最強と言えるのは絶対的な物量！　太平洋戦争で日本の精神が屈したのはアメリカの武力ではない、その圧倒的な物量の差！」

おお、増える増える。つか、目の前の本物ピエロもどんどん増えて行く。１６、３２、６４……ってマジかよ？　まだ増えるのかよ…！　さ、流石に相手が弱くても多勢に無勢ってのじゃねぇか？

……そういうことか。こいつが言いたいことも理解できたぜ……。これは確かに厳しいのがあるな。俺は和也みたいなオールラウンドの攻撃や小狼みたいな全体的な攻撃が出来ない１対１の格闘術しかできない……これは相当やばいぞ…！　日本の人口密度が！！

「おもしれぇ……！」

久々にゾクゾクさせれるぜ……！

「お前を喰らう！」

―？？？―

「氷絶（ひょうぜつ）なる楽園の群雲よ…」

美しい歌声が響く。透き通るようなでもその声はまるで戦に出る

前のように雄々しく。5分、10分経ってもその詩は止まない。長くとてつもなく長い言葉の羅列。そして永遠とも思える詩にも終わりは近づき、終えた。

「久遠の雪姫（エヴリシング・ホワイト）」

ここは砂漠の前線基地のような場所、砦がありそれを囲むようにミミズのようなバケモノサソリのようなバケモノの群れが攻めていた。ミミズのようなバケモノの名はロッククイーター、サソリのようなバケモノの名はレフトスコーピオン。どれも砂漠には生息してるものの主な生息は“遺跡”の中である。それが大量に外に出現してるのは異常事態であった。

砦から見て東の空の天候が荒れる、朝日を照らしていた太陽を覆い尽くす雨雲が現れそして雪が降る、これも異常事態であるが砦の兵士たちは慌てない。雪は霰（あられ）と成り、霰は少しづつ大きさを増す米粒のような大きさが小石のような大きさに、小石のような大きさがビーダマのような大きさに、そしてビーダマのような大きさが少し大きめのような石程度に、そんなくり返しで今では岩石。岩石であれば軽く見積もって3tはあろう巨大な岩石みたいな霰。

それは砂漠に巨大なクレーターを作り、土に潜っていたロッククイーターを叩き出し、レフトスコーピオンを粉砕する。だが、これで終わりではない。ソレは雨雲に描かれる白銀のライン、ラインは五忙星を描く。そして彼女は微笑む……。

その光景を見た者はいただろうか？

それを見た者はいないであろう。そもそも“女神”には時の概念がないから仕方がないことでもある。だけどもこの光景は壮絶、い

や……超絶であった。凍てつき眠り砕け永遠の死と生を与えている。荒れて荒れて全ては白き砂塵へと帰す。言葉を改めると“雪原”である。

再度言おう、ここは砂漠だ。

でも、一面は白銀の世界、まるで、別世界のように。そして彼女は満足そうに笑う。

「水弦！」

そんな彼女に“彼”は駆け寄った。黒髪で中肉中背といったところか。黒いローブを纏った、そう神堂真琴（しんどうまこと）、最強の死神と謳われる前の真琴だ、容姿はまだ幼くだけども、マセた表情感情を表さない鉄仮面。だけども、水弦は彼の声で焦ってるのはわかった。

その焦りの原因は水弦にはすぐわかった。

「またお嬢様ですか！？」

「ああ、ったく！　厄介な鎌に見初（おもちゃ）められたもんだ」

ほとんど日常のような行動であった、その度に慌てるのはこの2人である。いや、ちょっとしたら国全体が騒ぐかもしれないが、それを側近であるこの2人は恐れてるわけだが原因は他にもある。それは単純に……

「あの馬鹿」

「真琴様、それよりもお嬢様が力を使わないかが問題です……こんな騒乱の中じゃ――」

そして、つよい衝撃波が真琴と水弦を襲う。真琴は難も無く耐えるが水弦は吹き飛ばされる。だが真琴に腕を引かれ抱きかかえられる形になる。頬を紅潮させるが、そんな事を知ってか知らずか耳元で囁く感じに真琴は言う。

「大丈夫か？」
「は、はい…」

確認をとると真琴は北の方を睨みつける。北には未だに駆除し切れてないモンスターの群れだ、その奥には微かに見えるピラミッドのようなものの頂点。

魔力の発生源はあそこらへんと特定する、だけども距離がありすぎる。衝撃波などくるはずがない……それは、否だ。一般的にはそうかもしれないが、彼女の魔力は一般の桁を外れてるそもそも彼女の魔力の定義はこの魔力の定義とは違う。

その意味をわかってるものは真琴ぐらいだろう、魔力の定義じゃなく、これは魔術の定義……そういってわかる者は数が少ないだろう。簡単に言える事は一般の常識からはずれてるということだけだ。

「遺跡か…」
「そのようですね」

さもめんどくさそうに真琴は溜息を吐く。歩きや走りでも一日はかかる距離だ。めんどくさがってある意味はとうぜん、そしてその距離ならばあの超破天荒暴風雨娘が動かないはずがない。そう考えると騎馬や騎鳥を出したいのだが……こうもモンスターが大量にいれば対処は厳しい、騎鳥という貴重種が殺されるのは問題だ。

「騎鷲を出せ」
「は、はい！」

水弦は砦の中へと行く、ジリジリと照らす陽光を眺め小さく、言葉を漏らす。

「出て来い…」

そして、物陰から姿を見せる“男”が1人、男は表情を不気味に歪ませる。しかし男はなにも言わない。真琴はその白銀に煌く鎌を召喚する。

「チプペディアノン・クロリアス……いいや」

菊の装飾を刃の背にあしらった大鎌を振るう、その衝撃波は男の真横を通り過ぎる。砦の床を深く抉るほど破壊力だ。言っておくがこの床を割るにもよほどの手練れでもここまで抉ることなど不可能だ。この砦の表面には何層にも張られた防御結界がある、どんな魔物が攻めてこようが落ちることはまずありえない。

それが、ここまで抉る事が出切る者など……恐らく真琴だからこそ出来たのだろう。

「ハデス……！」

なによりも、憎しみが篭っていた。だからかもしれない。

ハデスと呼ばれた男はその乾いた手で拍手をする。

＊＊＊

圧倒的であった。

さながら群がる小蝿程度のようにこの恐竜はあしらう。弱肉強食、絶対的な力の差。それを感じさせる。真上から迫るピエロをアッパーカットで静め同時に空いた腹部にバタフライナイフを刺そうと迫るが足で蹴り飛ばす。

番田には敵を一斉に対処する技はない。それに増える速さのほうが速い。それもそうだ、気絶したって二分割される。そうもなれば恐ろしいことだ。主に日本の人口密度が。

こんなイタチゴッコのくり返しでは意味がない。

何故なら

「何故…」

無意味だから

「何故だ」

愚か

「そんな…！」

敵うわけがない

「馬鹿な！！」

何故なら彼は

「夏儚（かな）…」

彼だけではないから。

彼女は……ハッキリいうとなに者かわからない。そもそも大きさが人間ではないというか生まれたばかりの赤子のような大きさだ。まるで人形。そんな彼女はトコトコ歩いてくる。銀髪に薄い青を交えたような色のウェブの繋った髪に、身体的から見て取れるような幼い顔立ちでなによりも眠たそうである。

しかし、彼女は何故か仁王立ち。

彼女を狙いバタフライナイフを刺さんと迫る。これも愚かリーチが違う。だが、体格が違いピエロみたいな１７０はあろう成人男性並の身長では刺そうとも姿勢がおかしくなる、そしてピエロは吹き飛ばされる、いや、そもそも彼女の武器は素手ではない、下手したらどんなものよりもリーチは長いし隠し武器としても使えるヨーヨーだ。

ただし彼女の体格から考えて大した回転はない、ただこのヨーヨーは特殊で回転の動力となるのは己の魔力。故に彼女は強力な回転を生むことが出来る。ストリングスも彼女の意思で伸縮が出来る、彼女が戦う為にあるような武器だ。

「ベーシック２　『ウォーク・ザ・ドッグ』」

魔力で練られたヨーヨーが左右計１０のヨーヨーを落とし糸（ストリングス）を空回り（リープ）させるそれが地を抉りピエロを次々と薙ぎ払っていく、そして指を引きヨーヨーは夏儚の手に戻ってくる。ヨーヨーを再び右手の薬指だけに戻して

「ベーシック６　『アラウンド・ザ・ワールド』」

手のひらを下に向けてヨーヨーを持ち、ひじをやや伸ばして前方にヨーヨーを投げる。ヨーヨーをスリープさせたまま、投げた勢いでで１回転させる、ピエロ一匹の顎にクリンヒットし意識を沈める。そしてヨーヨーが前方に戻るとストリングスを引き手に戻す。

「スーパー５　『ツイスティング・アラウンド・ザ・ワールド』」

体の右側で先程の『アラウンド・ザ・ワールド』を行い同じくピエロ１人の意識を昏倒させる、だが今回はそのままキャッチせずに身体を捻り右手を左側に持っていく。左側でも『アラウンド・ザ・ワールド』をして再三ピエロを仕留めてキャッチする。

「く、くそぉおお！！」

ピエロの１人が夏儚の背後から迫る、だが甘い。アドバンスレベル２『リバース・アラウンド・ザ・ワールド』先程のスーパーレベルよりは難易度は簡単だがそれなりに難しい。斜め後方にヨーヨーを投げ出しそのまま逆方向の『アラウンド・ザ・ワールド』で後方のピエロを倒すだけではなく正面にも迫ってたピエロの頭上にも直撃。ヨーヨーが身体の後ろに戻って来たらストリングスを引きキャッチする。

「雨宮流格闘術　拳（ナックル）×　爪（クロー）＋　脚（キック）（　拳（ナックル）＋　膝（ニー）　）×

肘（エルボー）∞氣（スピリット）
乱れろ、轟嵐（ごうらん）！！」

竜爪掌、つづいて踵落とし、膝を顔面にいれ鳩尾を殴る、だが１発ではなく拳を入れ次はコークスクリュー、吹き飛んだところピエロよりも上に上がり背中に肘を叩き込む。どの一撃一撃も氣を込め強烈な一撃を見舞ってるその破壊力は恐ろしいものだ。

「ベーシック３　『フォワード・パス』」

手のひらを後ろに向けてヨーヨーを持ち、肘をやや曲げた状態から前方に投げる、ピエロの顔面に辺りストリングを引きキャッチする。

そして、痺れを切らした夏儚は手の平を後ろに向け

「ベーシック８　『ループ・ザ・ループ』」

フォワードパスのように前方に投げる。戻ってきたヨーヨーはキャッチせず、手首のスナップをきかせふたたび前方に出す。これをループという。このループを何回もくり返しながら長距離中距離近距離３６０度いたるところのピエロを蹴散らしたら手のひらを上にしてキャッチ。

ピエロは唖然とするしかなかった。最後の１匹。それを恐竜は食らう。

「終わりだ……竜皇突神！！」

氣で練られたその姿は地球最強（ティラノサウルス）の肉食竜。地を駆け大地を揺るが

し突進する。氣を纏い己の体術を振るいピエロを一撃で仕留める。

番田はこれ以上増えないか軽く警戒するがそれはないみたいだ。全員が気絶してる。意識が無ければ分割もできないらしい。いや、1人でもあれば分割は出来るのだろうが、全員が地に伏せられ足の踏み場すらない。正直シュール過ぎる光景でなにも言えない。

同じ顔が敷き詰められてるのだから。

だが、番田も夏儚も警戒をといていない。それもそうだ、番田らの背後にはいつの間にかいる蒼い髪をした一見女性のような美男子。神路蒼譜が居たからだ。番田はどうしようもない恐怖が襲う。絶対的な力の差、そして蒼譜の底知れない深い闇の気配。

「夏儚……久しぶりだね」
「……そうか？」

しかし、夏儚は怖気もない。ただ蒼譜と会話をしているだけでしかない。

「君さえもどって来る気になれば、僕は」
「失せろ」
「……ふふ、君はやっぱりそうなんだね」
「同じ事を言わせるな、失せろ」

語気が強い。

蒼譜は夏儚が無理だと悟ったか、話しの矛先を番田に向ける。

「番田君……僕達は本当の過去の真相を知ってる。あの時何があっ

て君は何をしたか？　それで傷ついたのは誰か？　僕は君はそっち側に居るべきではないと思うんだよ、君にその色は似合わない、君の色はこっち側にあるんじゃないかな？　罪と罰を背負って孤高に生きてなんになる？　なにも変わらない」

「……」

それは、番田が願ってもない言葉だっただろう。番田にとって幸せや娯楽を勝ち取るには蒼譜の誘いにのる事だ。だが番田は蒼譜を睨みつけ

「――を、その誑し込んだろ」

「ふ、彼女はこの世に不満なんだよ……彼がたまらなく愛しいなのに彼は……」

「テメェ――！」

番田が殴りかかろうとするがヨーヨーのストリングスが腕に巻きつかれ止まる。夏儚が押えろと言ってるのが手に取るようにわかった。実力が違い過ぎるとも。

「彼にも僕と同じ絶望の末に苦しめばいい！！　何故だ何故彼も同じ存在だというのに…！　何故彼だけ優遇される？　苦しめばいい！絶望の末に殺されればいい！！」

偽りの笑顔で固められた蒼譜が崩れる。それは正に邪神。酷く残忍で酷く狂気に満ちた存在、その美貌。“ロキ”と呼ばれるのに相応しい姿であった。こんなにも酷く歪んでるというのに、それが溜まらなく美しかった。

「ッ…！」

「罪と罰、誰もが背負って行く！　僕はその裁判者だ！」

「裁判者？　自惚れだな……ロキ」

夏儚の言葉に蒼譜は反応するが、押えたようだ。

「俺はァ……罪から逃げねェ！」

「いいや、罪が逃げるんだよ……僕はその罪に罰を与える……執行者でもあるのさ」

「蒼譜……貴様」

夏儚からあきらかな怒気が感じられる。

「ああ……そうだね」

夏儚が蒼譜の様子を敏感に察すると番田を上に投げると自分も飛びあがる。

「ゴミを片付けないとね。覇皇蒼華（ばおうそうか）！！」

路地に群青の閃光が地を駆けピエロの姿が跡形も無く消え失せていたその光景を番田たちは眺め唖然としていた。消えてたのはピエロだけだ、アスファルトにはかすり傷もついていない。どれも地面に張りついたように伏せていたから自然とアスファルトを抉ることになる、だが……実際に傷は見当たらない。

次元の違いを見せつけられた。そう率直に感じていた。

実際にそういうワザは高等技術だ。ただではそうはならない。

「……」

「……」

「いい解答を待ってるよ……特に儚い夏の姫」

そう言い残し蒼譜は昼間の街へと消えて行った。その中で番田は静かに思っていたことがある。それは主に3つ。

1つは、紘守から預かったもののこと。これはさして重要ではない、ただし蒼譜などの事を考えたら守れる自信は希薄。

2つは、彼女の事。どうやら敵側に回ったのは明白。

最後には……「何の為に闘っているのか」という疑問。いや、自分が何の為に戦ってるのかはわかるでもそれは蒼譜の言ってる事と同じで矛盾している。その矛盾は自分も問答していた、不安定だったなにか信念というものに支えて欲しかった。

夏儚はそんな番田を察するが何も言わない。

彼女が番田にかける言葉は彼女の頭の中では見当たらなかった。

＊＊＊

「ぁ……ッ……」

真琴が地面に転がる。身体中に裂傷を負い息が荒い。虫の息だ。それを見下すのがハデスと呼ばれた男。彼は無傷に等しく悠然と真琴を見下していた。真琴は見上げ様とするが血が目に入り視野を潰されてぼやける。

弾かれたのか、真琴よりも遠くに突き刺されたスケィスがなにやら叫んでいるようだが真琴の耳には入らない。意識が遠退き昏倒とする。

「神堂真琴」

（気安く、人の名を呼んでるんじゃねぇ。）

闇に葬られそうな意識の中でそう言うが口が動かない。

真琴は決して弱くなんてない、この頃ですでに四二神に劣らない実力があった。いや、もしかしたら四二神のトップに上れる並みの実力がある。だけどもこの実力の差はハッキリとしていた、真琴としてもありもしないが自信というのが砕かれた気分でもあった。

ハデスが何か一人で言ってるようだが真琴の耳には入らない。

でもわかったことは幾つか。

『空間を切り裂く刃（エリアル・ブレイカー）』『世界を知る者（ファンタジスタ）』『運命の悪魔（ディステニー・デビル）を切り裂く刃（ブレイカー）』『絶対運命（フェイト）』『獅子王（レグルス）』『レプリカ』と言った意味不明な単語。

この時に真琴が理解できた言葉は彼女が見初められた鎌と同じ鎌があったことだ。エリアル・ブレイカー。如何なる空間も自分が思った場所ランダムにといった感じで自由に行き来できる鎌でもある。それは例えこの世界の如何なる場所でも、例え過去でも未来でも空間を切り裂き移動できる。

本来ならあってはいけない存在なのだ、因果律の崩壊をもたらす。

そう――それが、最大の要因であった。

真琴や水弦が焦る一番の原因。知らなかった教えてもらえなかったそんな事を言われても取り返し様はない。何故なら鎌の主である彼女はどうしても変えたい過去がある。生き別れの、唯一取り残された兄を連れて来たいのだろう。

精神が幼い。

故に兄という存在は彼女に大きかった。

「わかるかい？　世界は彼を中心とし彼を必要としてる」

聞いていない。真琴の意識は闇に落ちた。だけどもハデスは言う。

「使い捨ての駒として。哀れな０７番と雨宮和也（レプリカ）はね」

その言葉を真琴が聞くことはなかった、それが幸と繋がるか不幸と繋がるか。“運命の悪魔”という

小洒落た悪魔のみがわかってるのだろう。この時の真琴にそれを知る術は存在しなかった。そしてハデスの底、それが計れない。

彼は何故そこまでわかってるのか、彼はどこまで知っているのか。

その答えは、全て。

彼はこの世の全てと未来の全てを知ってる。正確に言うと記録しているのだ。

「神堂君、君は僕が見初めた新しい『語り部（ウラノス）』なんだ……頑張ってくれたまえ」

その言葉を真琴が聞くはずも無く、ハデスは砂丘に溶ける様に消えて行った。

しばらくして騎鷲の用意を完了し真琴を呼びに来た水弦はその真琴の姿を見て悲鳴を挙げる。砂漠に響くその声を嘲笑うかのようにハデスは不気味に頬を歪ませていた。

「真琴様！！」

真琴の意識が目覚めるには2日かかった。その間、お転婆娘は兵に捕まり駄々をこねてたらしい。彼女の名前は雨宮鈴南。雨宮和也の妹でもあるそして、気高きアランドの皇女でもある……。

彼女の持つ鎌が一人の偽り、それが紡いだ皆の運命を変えるなど誰もが考えもしていなかった。ただ一人を除いては――。

＊＊＊

「？」

小首を傾げる彼女を見て私はちょいとした疑問を持った。今までの話しに少しでもおかしな事はあっただろうか？　私こと、白坂逢（しらさかあ）那（いな）は彼女に話しかけます。

「どうしたの？　若葉？」

「いや、なんか……いやな気配が」

ああ、そこで私は合点しました。彼女の、如月若葉（きさらづきわかば）ちゃんの背後に居る獰猛な猫がいるのを確認いたしました。気配をしそめその目を輝かせながら構える彼女の姿を。私は若葉ちゃんに言おうか悩みましたが、言わない事にしました。

いや、だってすでに飛び出した状態ですから、彼女が。

「ふしゃー！」
「ひゃ！？」

背後から胸に手を伸ばし若葉ちゃんの胸をまさぐります。因みにネコみたいな声をだしたのが飛び出して来た石動沙紀ちゃんで、嬌声を挙げたのが若葉ちゃん。ああ、若葉ちゃんが少年誌（？）では見せちゃいけないような姿に……。

ああ、あんなはだけたら……因みに少年誌（？）では書いちゃいけないので声も描写もおおくりして……ああ、そんな所まで手を出しちゃうの！？ちょ、ちょっと、本当にこの作者は人格破壊者なんですか？

ああ、もうこれは小説なんでしょうか？　小説は小説でも全年齢対象なんでしょうか？　ああ、あんな所までいってしまいましたら大変ですよ！！　ああ、若葉ちゃんそんな声を出したら駄目です！

なんですか作者、クラスの男子がみないようにモザイクかけるはいいですけど、なんでそんなところだけに気が回るんですか！？

ま、まぁ、他の男子がなにか作者の野郎とか血の涙を流してますが……。そのなんですか、これは何時まで続くんですか？

え？　１３５話まで？　私達の出番ってなんなんですか？　それよりも１３５話ってなんなんですか？ちょっと作者さん！？　待って下さい、なんで筆を降ろそうとしてるんですか？　この惨劇を静めてください！

―強制終了―

【125話】何が為の力【和也・前】

なんつー反応したらいいんだよ。流石のレナもツッコム気力がないみたいだな……。いやいや、よくよく考えろこんな猛禽公がこんな仲良くお空の散歩するかぁ？　それは否だろう。

うん、こうやってツッコムんだ、きっと。

「オレは美味しくないぞ！」

「和也！？　わ、私を売ったね！！」

あれ！？　ボケたのにこのバカなんかノッタんですけど？　ちょ、なんかもう後戻りできない！？　このままボケを貫きとおすしかないのか！？　いや、冷静に考えればボケでもなんでもねぇぜクソヤロゥ！！

ええい！　どうするどうする？　オレ正直なとこ言うとこんなお空を自由に駆け回る奴なんか相手にした事ねぇんだよなぁ……そもそもこういう空を飛ぶ相手を相手にするのは結構熟練された物が必要なんだ。

こういう相手は動きの先読みをする。ンなわきゃぁないそんな事が出来るのは相手が同じで“人間である”という前提条件がつく。ワケは人間の動きは人間が一番わかるからだ、頭ではなく身体がそれに反応するってのが早い言い方だな。例え考えは違っても“脳”を使って動くんだ、どこでどういう風にしたら止められるとか何処に移動するなんかおおよそ自分の身体がわかってくれる。つかそういうのはいいんだが、第一に空を飛ぶ人間なんか……

あれ？　一部例外を除いてだが……知り合いにいるんだが……？

まぁ、他作品だしいいとするか。えっとだな、つまり、人間は人間の思考を読み取ることができるというか、予測をたてれるんだなコレが。しつこく言うけど頭ではわからないよ、身体が読み取るんだ。だけども動物の思考は読めないんだ、だから人間を相手にするよりも厄介である。そもそも鷲や鷹、鳶や隼なんかを狩る者は熟練された知識とかよりも“勘”を使ってるんだ実際は、経験とも言えるが経験があっても“勘”が鋭くなければ全く当たらない。つまりは、動きを読むというのはまさに初心者の考えなワケ。

そう、一番大事なのは……絶対的な“勘”だ。

縦横無尽３６０度全包囲に移動する鳥にどんだけ狙っても避けられたりしておわりだ。そうなれば当てれるはずがない……つまり、経験がないオレはそうだが、このレナなら！！

一応、魔界が故郷なんだし！いろいろとこういう相手とも場数を……！

「人悪し刺し悪し死の美悪し…」

「待て待て待て！　どこをどうツッコメばいい？　それよりも逃げ様としてんじゃねぇ！！」

「猛禽類だよ！？　私、捕食されちゃうよ！！」

「ネコか！？　おめぇはやっぱネコか！！」

「ネコイヤァ――――――！！」

「うるせぇ！！」

こんのアホんだら糞が！一人で逃げ様としやがって……！　それになんだよ、『人悪し刺し悪し死の美悪し』って……『抜き足差し足忍び足』だろうが、因みに『抜き足』と『差し足』は武術の歩法

であって……おっと、なんかくだらない説明をするところだったぜ。

ちぃ、しゃあねぇか……、とっておきを使いますか。

「レナ、伏せとけ鎌！」

＜イエス！ボース♪＞

うわぁ、ウゼーくらいテンションがハイだ。そんなに使われるのが嬉しいのか？　まぁ、これで捨てられるゲージが捨てないゲージと均衡したからいいとして……因みに、さっきこのバカさっきウザかった捨てるゲージがグングン上昇中でもある。

まぁ、新しい“鎌の意”……いっくぜ！！

「我が名は雨宮和也、我が従者との盟約により、封じられし禁じられた“鎌の意”を唱えん。」

オレを囲むように結構な広さのある魔方陣が描かれる。だいたい直径5メートルって所だろう、そして魔力が魔方陣を中心として強い風が乱れる。……いい扇風機だ、涼しいぞこりゃ。まぁ、そんな事よりも集中しよう、今のオレではすぐ気を抜いたら解けるからな……フル詠唱で行く！

「我が力の従者は運命（さだめ）其の力を束縛し禁じられ厳重（くえ）に架せられた幾（い）重の鎖たちよ、我が呼びかけに応えよ。縺れ我は紡ぐそれは果てなき久遠もの契約の契（ちぎり）の元に我は命ずる、我が忠実たる禁じられし従者たる物、運命（さだめ）を解放せよ、逃げられない運命（さだめ）刹那に目覚めよ、我が愚者に齎（もたら）す裁きとその先にありし破滅その終末の闇から解き放て、我に力を貸されたし」

＜ファーストロック解除コードアクセス。解除、世界のＥＴＨＥＲ

解析、ＥＴＨＥＲコードＳ４０Ｅ９８４６１Ｋ３０２。ＥＴＨＥＲシステム起動に支障はばいため、Ｓ４０Ｅ９８４６１Ｋ３０２を基準とし全膜宇宙から類似した魔力を供給。最大数６２５、全てを持ち主の色魔力並びに世界の地魔力（しぜん）に適切な魔力に変換、ＥＴＨＥＲ設定完了。ディステニーナンバーＲＵＬＥ　壱の型（ファースト）　“運命（さだめ）の空間”の一時的に封印並びに弐の型（セカンド）を起動、登録された和英辞典をダウンロード、“引き出し”の設定の為にシンクロ率上昇。７０……１００．シンクロ完了　ＥＴＨＥＲ　ＯＮ　システム解除。全（せん）じし万物、跡形も無く滅します＞

ッ……！！　身体が言う事を効かない。おいおい……最初に使ったよりも魔力の流れが激しい。魔力が乱れてる……じゃじゃ馬が――――――！！！

得体の知れない力のくせぇに……！

勝手に人の中で暴れてるんじゃねぇぞコラァ！！　従え、魔力（テメェ）はオレよりも格下だこんにゃろう！！

ッ……、言ったはずだ。テメーはオレに利用されるだけでいい。力を寄越せ…オレは力がいんだよ……寄越せッッ！！

＜魔力安定……。ご主人、先程の制御で相当無理をなさられました。“参連（さんれん）”が限界です＞

「なーるほど、１匹につき“壱連（いちれん）”ってワケだな」

＜なんなら“弐連（にれん）”でカタを付けます？　だけど…＞

へ、ばーろー弐連なんて使ったらオレはぶっ倒れるっての。それにこんな猛禽公なんぞ

「＜壱連で十分！＞」

鎌がリンクした６２５のオレたちの世界の「魔力」に類似した世界の１つから「火」という“地魔力”を取り出す。１つの世界分の地魔力は加速器（ブースター）である鎌により２倍の大きさに。そして体内の無色透明の“色魔力”を取り出した「地魔力」にあった色に染める、オレが染めた色は「猛火」赤や紅、橙などで表現の出来ない色ではある、そして地魔力、色魔力を“総魔力”へと変換。流れは普段使う魔法となんら変わりはねぇ、だが……世界にある「火」という概念を全て込めてるんだ、普段輸入してる品物ったーちゃう。

だが、オレは再び鎌に挿入ッ！

「魔力挿入（エーテル・オン）」

鎌は鈍い光を放つ、微弱だし気がつかないのが多いだろうが……まぁ、いい。

「火」

火×２×猛火×２……つまり最初に世界に対する４倍の魔力

その猛火は鎌により莫大な猛火へ、いいや。猛火をも超過した力に。そして鎌から再びオレに。その“紅蓮”を“カタチ”にして、鎌とリンク。予め鎌に登録させた和英辞典より検索。コイツにやる名は

『断罪の煉獄』

鎌の神経回路を利用して…めんどいから中略、なワケで、簡単に

言うと脳内会話し発音を覚える。とりあえず文法は関係ない……ただ大事なのはタイミングを計る事ッ！　と、いうか始めての魔法だし魔力挿入（エーテルオン）に馴れてないからタイミングわかんねぇし！　とりあえず、カッコよければ！

「ＣＯＮＶＩＣＴ　ＰＵＲＧＡＴＯＲＹ（訳：断罪の煉獄）」

とりあえず、ヤツラは空にいるんだし……大事なのは……。

「芸術は、爆発だ！！」

空に巨大な火柱の十字架が立った。おお、デカイ、デカ過ぎる、規格外だ。とりあえずこの馬鹿（レナ）は吹き飛ばされそうになったんで首根っこ掴んで押えてるけど……いやぁ、本当に規格外だ。まさか贅沢に使うとこうなるんだな……。ふむ、焼き払ったのは２匹で１匹逃がしたが吹き飛ばされたか。

とりあえず、このワザ用の決め台詞を言っておこう。

指で十字を切り

「煉獄の柩にて安楽の死を…」

あーーーんど、

「イケ！レナァァアア！！！」

馬鹿を遠投！！

「ふにゃぁあああ！？」

因みに狙った先は吹き飛ばした鷹だ。空中で体制を取られそうになったからな。ついでにもういっちょお披露目タイムと行きますか。レナの渾身の体当たりで怯んだ隙に……っと。

「セット」

鎌の石突を鷹公……あえて宮鷹といおう、その方が制度が上がる。理由はみなさんわかっての通り……だしミヤが読んだら泣くしあえて言わない。

「破空斬（はくうざん）・魔王（まおう）！！」

石突を銃身として撃ち出されたのは漆黒の閃光（レーザー）。因みに最大収束で放ったからその貫通力は壱連の魔力に相当するぜ。と、いうわけで猛禽公はやったわけだが……ちぃ、レナとは分断されたか（お前のせいだ。

そんで、こういうのがいるワケか……。ちぃ、次から次へと。

「み……ナァァア…」

レプリカヒューマンプラスの実験体ね。可哀想に……ンなワケのわからん姿にされて……それに“蟲”か……。レプリカなんてあるだけで間違いだってのに……アイツ等は……ッ！

テメェがそーくんならよ……そのオモチャ、壊すまでだ。

「コロ……し、テク……ぇ……」

……自我が……ある、のか？

「死ニ……た、イ」

これは“蟲”が？

違う。氣を感じる……。そんなこの人は……。いや、この人の氣の癖は……。

だから……か。

ちぃ！　もう手遅れの状態なんだ……やるしかない！

＜ご主人！　レナさんの落下地点から……“蒼き死”の気配が……！＞

「なッ！？」

アイツの……気配……だと！？　糞ッ！　レナに合わせるワケにはいかねぇ！　コイツらをなんとかしてからだ！　魔力挿入中で全く気配を察知できなかったが慣らせばこんなに囲まれてるとは思ってなかった……目の前のコイツでさえ手間どりそうだってのによォ！

ソッコーでカタをつける！

「魔力挿入　金　ＴＯＵＧＨ　ＧＵＹ（鉄人）」

肉体強化。体の高質化に筋力の超強化……制限時間は○ル□ラ●ン如く３分！　周囲のゾンビ（キメラ）掃討後、目の前の奴を倒す……それからとなるか……クソ！

一気に、蹴散らす！

「破空斬・翔（しょう）！」

逆風（さかかぜ）で一気に切り上げる。つか二重表現だな、逆風ってのは正に切り上げの事で真下から相手を両断するわけだな、あんま知られてないンで勉強になっただろ？　もとは剣術なんだが鎌に派生させといたちょいとアレンジも加わってるのもある。

ふ、行くぜ！

「続けて、風翔連牙（ふうしょうれんが）！」

音速を以上光速未満といった感じ（きっと）の速さで全包囲からランダムに切り刻み真後ろに回り込んだ後、逆風。そんでオレも軽くジャンプして相手に追いつきそのまま、腹部に石突を当てそのまま叩き落とす。まず１匹……。

この状態から鎌を投げ捨てて

＜ひゃぁ！？　ちょ、ご主人！！？＞

「針鼠（はりねすみ）」

上空から下のヤツラをあらかた一層。使い勝手がいいぜまったくコイツはよぉ……。威力こそはないが雑魚の掃除が楽だ。

っても、まだ１０匹くらい残ってるか……コントロールできりゃ楽なんだがまだ実力が足りないのがわりぃか。だが時間のロスは大分ない。このままで行けば間に合う。ついでに落下点に丁度あった

鎌を念の為に不本意ながら拾っとく、いやーこいつ等は弱いおかげでオレの活躍をバッチリ実況できるよ。

＜ご主人……気を抜きすぎですよ……。接近する、ドックタイプキメラが2匹。タイガータイプキメラが1匹＞

「まぁまぁ、今は余裕でいさせろよ。一撃で葬るぞ」

＜はい＞

「雨宮流鎌術秘伝奥義」

＜我断つは＞

「冥空（そら）の世界」

＜逝きなさい＞

3匹の合間に瞬時に移動。逃がしはしねぇーよ……終わりだ。イヌ公には唐竹、右全包囲薙ぎ3匹に、今度はネコ（虎）公に逆風、もういっちょ全員に左全包囲薙ぎ、もう1匹のイヌ公を石突で突き真上に投げる。

「＜冥空衝破斬（めいくうしょうはざん）！！！！！！＞」

上下一列に並んだ奴を一気に切り裂く！　切り裂かれた箇所の空間が裂かれる、なぁに……ブラックホールのようなもんだよもちろん切り口から派生するブラックホールから逃れる術はない。鎌術秘伝の奥義として最強に名を残す技だ。

こんな雑魚に使うワザじゃねぇがな……さぁてと……のこり7匹。

「円閃斬（えんせんざん）・鎌（れん）」

360度に一回転。その真空波で辺りの木々と数匹のキメラを仕

留める。さてと、気配からすると残り5匹か……ちっ……残りは軽症か……。

＜ＴＯＵＧＨ　ＧＵＹ残り時間１００秒切りました＞

……。無駄に自然破壊してしまった

＜そこですか！？＞

「だって実際は地球寒冷化だけど地球温暖化で騒がれてるからさ！やばいじゃん道徳的に」

＜道徳的じゃない貴方が言うんですか！？＞

失礼なヤツめ…。

だけどまぁ……準備は出来てるみたいだな。そこんところはよくて好きだぜ……。

氣と魔力の混ぜ合わせ。統一し1つにする。

「氣魔」

1匹1匹、正確に切る。

「怒髪天翔波（どはつてんしょうは）！」

鎌の刃を叩き付けてその縦に強烈な衝撃波で相手を浮かす、因みにめっちゃ速い衝撃波速い衝撃波そこそこ早い衝撃波まあまあ速い衝撃波少し速い衝撃波少し遅い衝撃波まあまあ遅い衝撃波そこそこ遅い衝撃波遅い衝撃波めっちゃ遅い衝撃波といった感じで鎌を叩きつけるのを工夫したため、１０連続で攻める。

次…。

とりあえず逃げようとしてる奴からだ……。

「破空斬・鬼走（おにがしり）！」

もういっちょオマケに刃を叩きつける。華麗に直線状に地面を裂いて行き見事真っ二つに。詳しく描写しないよグロいから、だってあれだよ内臓とかいろんなのがでてるんだよ？

ね？　いやだろ。そういう描写みたいんならもう少し待て！

＜ＴＯＵＧＨ　ＧＵＹ効果切れました……ご主人＞

「おーけー」

よし、残りすくないし生残ったキメラの説明をしようじゃないか、目が死んだサラリーマン風の虎っぽい腕と尻尾もったのが１匹、もう１匹は翼の生えてそんで熊のようなデカイ手もって、足は……ど、ドリル！！？　な、何故機械チック！？　つかいままでツッコマナイでごめんなさい！！

……そんで、この中年のいいた体格をしたこのオッサンは……サソリのような尾、狼のような足で２速歩行、そんで左にタコの足計８本右にイカの足計１０本っと……。そんで、顔はそうだな……わかりやすく言うとタイガーマスク。

……ツッコミどころがわからねぇ……それにコイツは、繰州（くるす）流の使い手だ。雨宮流ってのは前にも言ったが大きな塊だった、そっから幾つ物流派に分かれて今では数十の流派の元は雨宮流ってな

わけだ。そして繰州流はオレでも知ってるほど有名な流派であって……空手で五輪にまで選手を出してるほどだ、因みに金をとるのは８０％以上とか……。

こいつはその中でもオレに近いんだな……。

「鎌…」

＜……はい＞

まずはあの空飛ぶドリル野郎か、ドリルを利用して回転してなるほど馬鹿デカイ熊の手の力を遠心力で倍増するってことね……あれなら大抵の攻撃は弾かれるか……ンなら……鎌ではかんなりハードになるがオレならやれる。

間合いは完全に相手に渡す。自然な構えをとり刃を柳のように柔軟にして……。

「…破空斬・柳（やなぎ）…」

刃は柳のように相手の攻撃を逆らわずに糸で縫うように一閃！

まだだ、そこから切り刻む！

そこから、バックステップ。

石突を向けてからだの横で溜めを作りそこから螺旋運動により風の弾を作る。瘋迅みてぇなのだが……威力も劣ってるしだが、虫の息にゃちょうどいい…！

「破空斬・弾（だん）」

そこから衝くようにし衝撃波の弾を放つ。的確に喉をやったし絶命は確実だ。

次はトラサラリーマンだな。略してトラリーマン。一応人ならこれは通じるんじゃねぇべか？　いっちょ行きますか。

「破空斬・朧」

おや、どうやらゆっくりスピードをあげてやったら残像を残して消えたように見えたか。とりあえずもう突き終わったしゆっくりスピードを落とすか。

「シャ――！！」

オレを見つけたと同時に襲ってくるとはいい反射神経だ。だが……

「死んでンだよ、テメェ」

オレのところに来る前に倒れた。息の根は止めたし起きあがる事はねぇだろ……運がよけりゃ生きてるがまぁ、確立は低いだろぉな。

「朧」は単純に徐々にスピードを上げることで残像を残し連続して人体の急所を超高速で突き徐々にスピードを落としてもとの体型に戻るってことだ。

ちょいと本気で突けば絶命は殆ど確実。

さてと……邪魔者はいねぇな……ほんで。

やっぱコイツは動きが違うワケだな。何時の間に背後に回ったかしらんがとりあえず裏拳をプレゼントってな。ったく、動きが速いし空手の型でもないこいつはオレと同じ“戦”の型ってわけだなやっぱし……。

狼の足（大きさから予測、イヌの大きさではないと思ったから）は2足歩行なら大して意味はないんだがむしろ劣化してるんだが…なるほどな、瞬発力の問題か一発で進む距離が違う。これじゃあ避けるのも時間の問題か……、いやそもそもこんんあにタコやらイカの足がウネウネしてやがったら鎌での「柳」じゃあ……！

ちぃ！　一々切り落とすのにも数が多過ぎるってーの！

様々な方向から迫る触手、さすがにコレ以上は間合いを計り切れない。ならば、刃の側面で防ぐ、って！　タコ足が横から……きゅ、吸盤から明らかに強酸のようななにかが出てるんですけど!?　ちょっと！　地面がなんかじゅうって！

＜と、溶けるぅ！さ、サビがと、とけぇえええええ!!!!!＞

マジで酸!?　ウソォン!?　こうなりゃ……！　ちょいとワザを応用して……！

「破空斬・煉獄（れんごく）」

刃に猛火を纏わせる。イカ焼きになりやがれ！　っと、まぁイカの足は数本押えたか。念の為に数本もらうぜ！

刃を無理矢理自分の所にもっていき、2、3本ばっかしタコの足を切る、切り口が紅く染まりバック宙で避ける。

「爆ぜろ」

紅く染まった切り口は膨張し大きく爆ぜた……ってもまだ計１３本もあんだからイヤなもんだ。っと！　目を放してたらご丁寧にオレの目の前か間合いは…？　だめだ間に合わない――――！？　虎が牙を向きオレの肩に齧(かぶ)り付いた。

「ッ！」

だけどよ……ありがてぇ零距離だ。噛まれたのは右……利き手の左に氣を…！？

「グガァァア…！」

この……タコ足が腕に……！　な、めん……なよぉぉぉおおおお！！！！

手の平に大気を集め渦を作るそれを、握り締める！！　四散した風はオレモロともこのヤロウを容赦なく吹き飛ばす。『烈風掌(れっぷうしょう)』正直あんまし使いたくない技だ。

＜ご主人！！！　大丈夫ですか？＞

「左手はしばらく使えねぇよ！」

いてぇ……。クソが、余裕なツラこきやがって！　こうなりゃ…もっかい冥空衝破斬で……いや駄目だ、ンなことしたらレナとか行く前に力尽きる、それは魔力挿入も同じことがいえる。うむぅ、姿勢を低くしていつでも攻めれる準備をしないで……。こっちゃまだ対策を練ってないんだよ！

ああ、やっぱり根気で動きを止めて今の内に俺を殺れなんて展開はないのね……。

ちぃ……お披露目はまだ後にし様と思ってたんだがな……。

こうなりゃ、仕方ないか。

テイ●ズ如くワザの使用回数をマスターして使える超奥義系のワザで締める。全ての破空斬の使用回数１５０回以上という（ウソです）、これでなら、決められる……！

落ちつけ……全ての一撃をこれで――！

「鎌ァアア！！」

「シャァアア――――！！」

＜はい！＞

一太刀目、オレの勝ちだ……！

まず逆風！　そこで切り上げ相手を少し浮かせてそこからだいたい５発くらい適当にすばやく切る。生憎まだまだ続くぜ！　そこから鎌を振るい大気を思いっきり乱れさせ周囲を破壊する、木々は粉々の木屑になるのが確認できた、そこで浮き上げられた触手野郎を石突で思いっきり突く、オマケに風の渦もプレゼントして相手を上空に上げる、そかから、唐竹で叩き落し未だに風が止まない無法地帯に空中の着地と同時に石突で地面を突く、その衝撃で浮いたキメラに最後の一撃を見舞う。

それはなんら普通の破空斬と変わりはない。真一文字の斬撃。だ

がよぉ……威力だけなら一番たけェんだよ！　これはな……払い終わった後にクルリと回し刃を地面に叩き付ける。

「破空斬・嵐（あらし）」

始まりは静かに、そして激しく、そして静かに終わる……嵐の如く！

「あり……ガとウ……」

……感謝なんて言われたくない。怨んで欲しかった……。オレは、こんな事しかできなかったんだから。

＜ご主人……＞

「レプリカは殺人罪にゃならねぇよ……法律外だ。どうだ？こんな正統化させる奴は？」

＜……ご主人！＞

ああ、お前が言いたいのはわかってるよ……。ちょいと遅かったみてぇだな……レナの気配が消えた。間に合わなかった？　いや違う……“アイツ”が起きたのか。

急ごう……。

＊＊＊

「道は未知」

誰かがそう言った。

そうだ、お姉ちゃんが言ったんだった。

そう、そしてボクは……殺されたんだったね。

でもね、お姉ちゃんは誤算してたね、だってボクは自分の力を騙してたから。

ははははは、ボクはここだよ。いつ、見つけてくれるのかな？

そうだ、一度アクションをしてみようじゃないか。

そうだ、いい実験体が2人もいるじゃないか。

この身体もいいものをしてる、しばらくは観察でもしようかな？

さぁって、「未知なる道」を渡ろうか……。

その先にある、惨劇を目指して……ね？

【１２６話】何が為の力【和也・中】（前書き）

今回の話し、

混乱注意

【126話】何が為の力【和也・中】

みなさまお久しぶりです。私この世界の絶対なる神であります――です。

さて、今回みなさまに見ていただくのはやはりこの哀れな1つのレプリカの少年であります。この少年には幾つかの不思議な点があります。まず代表的なのがこの「鎌」、運命の悪魔を切り裂く刃（ディステニー・デビル・ブレイカー）であります。

その力は確かに強い、そして強力だ。だけども彼が持つには幾分おかしな点がある、それは彼、雨宮和也レプリカが何故所持をするのか？　普通に考えて頂ければそれを所持するのは“オリジナル”の雨宮和也のはずだ。それなのに彼女を持っているのは“レプリカ”にある。

原因は彼の心臓？　確かにレプリカが所持するのはオリジナルの心臓だ。だが鎌とは主の『精神』いわば『魂』にその形を残す、たしかに心臓を移植する事によって記憶を受け継ぐや、見た事のない景色を懐かしく感じるといった症例もあります――確かに可能性は0ではありません。

けれでも、受け継ぐといっても所詮は一部で明確でもなんでもない。本来鎌を持つべきなのはオリジナルであった、だが現実ではその鎌を握るのはレプリカ。少し考えただけでもこんなないおかしい。

そこで鎌との魂の波長が合ったのがたまたまあのレプリカだから。など、相性が合ったからと考えるのはいい。だがそれは否だ、鎌とは“産まれながらにして身に宿るもの”つまりはハーフいえど鎌と

いうのは最初に宿されてるものになる。ここまで言えば次の疑問に至る。

なぜ、細胞単位で一致し記憶も上書きされ正真正銘の雨宮和也になっている、当然“あの死神”の事だ“魂”の単位で一致してるはずだ、故にオリジナルもレプリカも氣による硬質化のコントロールが出来ていないし、氣の細部まで一致しているのだ、そうともなれば選ばれるのはやはり、オリジナルだった。

そして似たような疑問となるのが雨宮和也はいかにして鎌を従えたか。いや、正しく言うなら鎌との契約という状況を無視している。時を戻せば神が悪戯、自らの道楽で作り上げた“キマイラ”という1匹の獅子との戦いが事の発端である。魔法と肉体、圧倒的な実力の差。そして迫る焼死という運命。

しかし、それを打ち砕いた存在。それが鎌だ。契約の時間がまったくない。鎌とは己の潜在意識の一つと言う定義で考える、それを呼び起こす為には“儀式”を行う必要がある。そな中で一番マイナーで一番楽な『血の契』である、人間の致死量である1／3を越え2／3の血を抜く事による目覚め。当然、生残る物など極僅か。

そして、【神殺死】、あのプロジェクトの死神でもない。いや、神殺死の責任者である彼女、雨宮姫南に関わり合いがある。だがレプリカの完成時、そしてプロジェクト廃止では噛み合わない。故に雨宮和也は正規の契約を交わしていない事になりえる。

ここで私はある仮説を立ててみよう。それはとても馬鹿げたものである。

『レプリカとオリジナル、それらは入れ替わっていた』

確証もなにもない。ただ、その真実は

私以外、誰も知らない。私は全てを知っている、だから私は問いただけ。答えを見つけるのは貴方だ。

私はただ、このくだらない世界を眺めるだけなのだから。

―Ｋａｚｕｙａ

Ａｍａｍｉｙａ―

「なんで……！」

奥歯を噛み締める。傍目から見ても分かるように腕が震える。そしてそこにいる人物を睨みつける。深海のような暗澹のローブを纏い、そして手に握られた蒼空のような蒼い刃先をした鎌をもった人を睨みつける。その目には明らかな怒り、そして不安。

「アンタは――！！」

地を駆る。それはいままで如何なる敵に向うよりも速く、鋭い鎌の一刃。それは轟音を発て辺りの木々をも吹き飛ばす衝撃波を産んだ。そして間合いを計り、そして再襲撃！

その刃は風を纏い、全てを蹴散らす一陣の一撃。

「破空（はくう）――！」

下段からの一閃。それは鎌の持ち手で防いだ“彼女”さえも浮かせ、否応無しに休む暇も与えず高速で、そして縦横無尽に鎌による斬撃が駆ける。

「緋連蹴（ひれんしゅう）！」

そして落下する相手にオーバーヘッドキックをお見舞いする。その蹴りは深紅の紅蓮を纏い焼き払い、そして地面に大きなクレーターを残す。そして地面に足を付き土煙が舞う場所を睨みつける。が、そこに気配はない。

そして、日が隠れた事に気が付く、最初は雲に隠れたのかと思ったが違う。その刃は蒼焔をまとい、鎌の刃を立てそして叩き付けられるんばかりに振り落とされる！

――襲牙焔【蒼】

その一撃は和也を仕留めるのに十分だった。

否――

和也は仕留めておらず、和也は彼女の背後に居た。

「うをぉぉぉぉおおおおおお！！！！」

そこから放たれる光速の拳！

『鬼槍』その一撃は脇腹に減り込みアバラを2、3本やったことだけは和也はわかった。だが、まだ終わらない。そこから放たれる鎌を全包囲に横薙ぎにする一撃、『円閃斬・鎌』そして上段から叩

きつけられるような一撃の『破空斬・斧』

「槍破(そうは)！」

そして回し蹴りで顎を蹴り上げて腹部を晒す。足を落とし鎌の石突で地面を突き刺し、力強く踏ん張り。そしてそこに最大の一撃を見舞う。その一撃は和也が最も自信を持つ子々孫々の一撃必殺『龍滅掌』

「追滅掌(ついめっしょう)！」

会心の一撃。和也は一息ついた構え直す。

ダメージはそこそこあったらしい。少し動きが鈍っていることを和也は見逃さない。だけども和也はまだ警戒を解かない。むしろここからが本番といった目だ。

そして、2人の姿が消えた――否。

目にもとまらぬ速さの攻防を繰り広げる、そのぶつかり合いによう衝撃は強く、そして穏やかであった。無音、鉄と鉄がぶつかり合ってるというのに恐ろしい静けさ、そして2人は間合いを計る為に離れた刹那、鉄と鉄がぶつかりあう轟音、人体を殴るような音が不協和音を奏で、そして強い衝撃波が周囲のクレーターを大きく広げた。

光速のぶつかり合い。

今の和也は比べ物にならないほど圧倒的に強い。それは雨宮和也という本能が剥き出しになっているためでもある。和也は多くの勘

違いを受けるが、彼が、雨宮和也が本当に怒った時は完璧なまでの『静』の極である。

常に落ちついた判断、数億、数兆の手を読んだ攻撃。そしてなによりも今の和也は何時も以上に視野が広い。３６０度全包囲が今の彼の視野だ。これだけはハッキリと言える、今の和也は今まででどんな敵を相手にするよりも強さを曝け出していた。

眠れる獅子が正に目覚めた瞬間（とき）でもあった。

「強くなったわね…」

ローブをまとった女性が沈黙を破る。

「うっせーよ……そもそもオレなんかには興味なぇんだろ！！」

和也は鎌を薙ぎ彼女へ向ける。

「アンタにとってオレは使い捨てのゴミなんだからな！！」

そして、瞬時に目の前に移動し鎌を下段に構え、「翔」とは比べものにならないほどの下段からの一閃、『断空裂昇』がローブについてるフードを巻き上げその容貌が姿を表す。

「母さんッ！！　いや、ヒメナ・フューリアン！！」

「……レプリカが！」

その顔は、和也にとって、和也の“記憶”に刻み込まれた一人の女性の姿。それは、自分の母親の姿であった。『蒼き死』こそ和也の母親であり和也という存在に流れる死神の血の原因。

そして、それは――

「黙れ！オレのことなんかどうでもいいんだよ――だが、レナを否定することだけは許さねぇ！！」

死神の少女、レナ・フォード＝ライズ・ハールドにとっても、それは同じだった。

いや、この場にその名は似合わない。

神殺死プロジェクト実験体形式ナンバー０７にして、雨宮鈴南の――――

「いいのよ、思い出したのだから。もう遅いのよ」

「ッ！　テメェ！！」

力の膨張。和也の力がまだ底上げされて行く。そして異変が訪れる。和也の氣が漆黒に染まった。氣とはほど無色、ただ密度や質量が圧倒的に多い氣は紅く染まる。だか、黒などという前例はない。そしてその漆黒の氣はある姿を象る。そして傷ついた左手がみるみる内に塞がる。

その姿は『威厳』に満ち“王”に相応しい姿であった。それを見て蒼き死――雨宮姫南は頬を綻ばせる。予想外の出来事だった、いややはりこのレプリカは選ばれていたという確信の笑み。

「うぉぉぉおおおおおおお！！！」

『グガァァアアアアアア！！！』

叫び声が挙がる。

咆哮が鳴り響く。

＜そんな……氣の質量が……八万を超え……嘘、まだまだ桁が……

そんな……こんな数値って＞

和也の平常時の“氣”を1とした計算。その数値はすでに八万倍を超過していた。

＜四千四百那由他……？＞

『千那由他』。万、億、兆、京、垓、禾予（漢字が出ないんでこれを一字に例えてね☆）、穣、溝、澗、正、載、極、恒河沙、阿僧祇と上がった上にある桁だ、一那由他とはつまり0が60個もつくという事だ。

絶対的な数字。天文学的な数字だ。

だが、それでは収まらない。

＜そ、そんな……不可思議……そ、そんな事が！　無量大数！？

ありえない……こんなのありえない。0が71個！？　嘘だ、こんな数値…＞

鎌が算出した数字。それは四千四百無量大数。無限に圧倒的に近い数字だ。

「余計な」
『――』
「事を…」
『――』
「すんじゃねぇぇぇえええ――――――――――――!!!!!!!!」
『グゴォォォォォオオオオ――――――――――――!!!!!!!!』

「!!」

叫んだ。それだけだというのに姫南は吹き飛ばされた。それも絶望的なダメージを受けるほどに強烈なものでもあった。漆黒、その漆黒が全てを包み隠す。その獰猛な目を、牙を、爪を晒し漆黒のソイツは和也に溶け込むように消えていった。

和也の意識はあった。だけどもそこにあるのは和也ではなく。言うならば、“惨劇”の魔王。

「――」

なにかを呟く。氣の凄まじい収束。

「爆砕（ばくさい）」

行動も動きもなんら、龍滅掌と変化はない、唯一違うのは――

その

絶対的な

破壊力

だが

人体の許容範囲の限界を何度もやった和也は

その拳を当てる事も無く

地に伏せた。

＜……私たちは、貴方を許しません＞

「そうね、構わないわよ？　だって貴方も私に怨みはあるでしょ？」

＜ッ！　“アトロポス”！　なんで貴方はそっちに！　ただでさえ“あの子（ラケシス）”が！＞

＜“クロト”……ラケシスが目覚めなかったのは仕方ないのよ、そもそも私達は彼女の場所を知らない＞

＜アトロポス……この世界はもう……なのになんで貴方たちは――＞

鎌は明らかに和也に隠し事をしている。それはとてつもなく重要なことで運命の分岐点ともなるものであるなど、この場の者くらいしか気が付かないであろう。だが、鎌は和也にそれを隠している、そこに鎌は境界線を張っていた。

それは、己の秘密でもあり、そして――

この崩れ行く世界の秘密でもあった。

鎌の問いに答える事無く、姫南は姿を消した。

静かに、和也は左手で拳を握り締め歯を噛み締めながら目から一筋の涙を零した。

＊＊＊

――力が欲しかった。

――ただ力が欲しかった。

――弱かった自分が、

――どうしても弱い自分が

――醜くて。

――どうしようもなく、

――悔しくて。

――力が欲しかった。

――ただ力が欲しかった。

――もし力があったら彼女を守れたはずなんだ。

――今、言っても仕方ないさ。

――だけど、

――そうしたらアイツを守るのは俺だった

――オレなんかじゃなかった。

――そしてオレは守る者を変えてる

――つまらない同情じゃなくて

――ただ約束じゃなくて

――アイツは俺と同じ理由で居る。

―力が欲しかった。

―ただ力が欲しかった。

―そしたら僕の罪は消える、

―そんな勘違いで

―自分勝手に思ってるだけだけども。

―力があれば変われたんだ。

―でも僕は本当に脆弱だ。

―だから僕は俺をオレを利用する。

―それで僕はオレを守る、

―それが今の僕に出来る最後の事。

力が欲しかった。

ただ力が欲しかった。

そしてボクは力を手に入れた。

“お姉ちゃん”に対を成す力を。

惨劇の宴を謳おう。

ボクは“惨劇”だ。

この悲劇を惨劇へと変える存在。

くははははははは！！！！

やっと、やっと全部思い出したよ、

けっこうな間シンクロしてたみたいだ。

やっとやっと思い出した。

さぁ……復讐だ。

惨劇の始まりだ。

＊＊＊

――時は遡るり進行する――

夢は儚く。
人は脆い。
空は高く。
海は深く。
孤独だけ。
独占だけ。
世の中は。
儚く脆く。
醜く汚く。
欲望だけ。
貪欲な者。
満ちてる。

「……」

イヤな、目覚めだな――――。

頭の中でそれを反芻してみる。

……否定はしないし、実際にオレが見てる世界だ。

でもコイツは……多分、こんな日常を知らなかったんだろうな。

時計を見ると時刻は3時を回ったところ。

うむぅ、昼の下拵えと朝飯の下拵えをすると6時をちょっと過ぎるころか……。つか今日は月末だからレナとかは魔界に行くんだよな？　だとしたら昼飯はいらないから手抜きでいいか。そしたらまだ時間はあるし……。

……久しぶりに行くとするかな。

＜ご主人？＞

「お、鎌か。ちょっとついて来い」

＜へ？＞

馬鹿な声を挙げるんじゃねぇよ。

「修行だよ」

鎌の奇声が更に酷くなった。オイコラ、オレだって修行くらいは

するわってーの。最近は忙しかったから座禅とか格筋トレ二千回に５０ｍダッシュ一万本と軽くだけどな。ま、まぁ汗だくにはなるけどさ……。ウ、ウォーミングアップだよ。

＜何強がってるんですか…＞

「うるさいわ！」

く、くそこの鎌の野郎……。最近は妙に生意気になりやがってよぉ……これは調教が必要だな。そういう意味も兼ねてアソコに行きますか。えっと、こういう時には便利屋を呼ぼうっと、ケータイを取り出して操作する、ってもケータイなんてあんましケータイなんかいじった事ねぇけど、流石にアドレス帳を出したり電話とかメールとかは出来るからな。

ＥＺとかさっぱりわからんけど。

オレって現代人……だよな？　だってネットなんか開いて何に使うんだよ。調べたい事があるなら人に聞くとかですぐわかりそうだろうに、動画とか音楽とかは別に最初から登録されてんのに不備はないし……本当にわからん。

ああ、そうか最近の日本人はシャイなのか。つってもそんなすぐ調べる物なんかねぇー気がするんだがよ……？　まぁいいか、えっとあいつの連絡先は――っと。

あったあった、えっと、センターキー押せばいいんだよな。

数回のコールであいつが出た。

『もしもし』

わぁお、不機嫌だな。こういうのはこう返しとくか。

「おはよう」

『……テメェ』

逆効果だったか！だがあえてここは気丈に行こう！

「早馬を出せ！」

『俺は便利屋かよ』

ないすツッコミ。ここでベタに「誰が馬だ」とかより高難易度なツッコミだぜ。

「いいじゃねぇか」

『そんで……なんのようだ――って、早馬ってどういうことだ？』

うん、さってと……本題に入りますか。

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ―間奏曲―

ここは東京の郊外にある山奥。そこには地元の人が絶対に立ち入らない洞窟がある。その洞窟の奥はあきらかに人為的に作られて滑らかな表面でドーム状に作られた空間がある。

その中央、そこには不自然なものがあった。それは突き刺さった一振りの日本刀。それに和也は近づく。

『雨宮の血統か――』
『馬鹿者こやつはレプリカだ』
『レプリカ、雨宮に作られた因果』
『そしてこやつは、聖者になる存在を殺めた』
『存在が罪』
『何故ここに来た？』
『お前が来るべき場所ではない』

木霊する声。だが、和也は尚も近づく。

「文句あんならかかってきやがれ！！　その為に来てるんだよ！
強くならねぇといけねぇ！強くならなくちゃいけない！オレはまだ
強くなる！オレはレナを守る！そう決めた！！」

『何故、固執する？』
『お前はオリジナルの全てを受け継いでる』
『『何故、あの死神を？』』

『破空』が舞い『龍滅』が毛を逆立てる。

“飛龍”と“白虎”それが何時の間にか和也の背後に居た。いや、
厳密にいうならば現れた。

『物好きなヤツらよ…』
『愚が』

『なんとでも言うが良い……』
『我等はこやつを殺すだけだ』

声は消える。そして2匹が動き出す。

「鎌ッ！　今回はふんばれよ！」

＜了解！魔力の限定解除、詠唱時間の短縮化セット＞

その戦いは昼にまで及んだ。

【破空之極】

【龍滅之極】

【襲牙之極】

破空は空を先進む飛龍の様

龍滅は龍と対極す白虎の様

襲牙は高く飛翔す大鷲の様

雨宮の技は“覇”を表しその“覇”にはそれぞれ役割が存在する。

飛龍は破空を斬し、白虎は龍族を滅す、大鷲は牙如き爪を。

和也はそれを統べた。

『――――』

『なかなかやりおるではないか』

『雨宮の血統が流石というよりは、死神の血かのぅ？』

『いや、恐るべきは』

『あの鎌だ』

肩で息をする。だが和也はまだイケると確信してる、今日は身体がすぐに言う事を効く。そして強くなってると自分でも確信できる。

久しぶりの充実感、同じ次元での戦闘。そしてなによりも……単純に和也はこの戦いを楽しんでいた。

それは、そこにいる人物も同じであった。

「……やっときたか」

「……カズくん」

ここで、彼と彼は再会した

――ウ――ロ

――――なにが間違いだったんだろう？

――何を忘れていたんだろう？

―何が信じられなかったのだろうか？

なんでココにいるんだろう？

「うぁ……！」

――――如何してこんな事になったんだよ！

――泣いても叫んでも戻らない。

―もう、答えてくれないんだ。

だって、ボクらが殺めたんだから。

「ぁ……あああぁ！！　ッぁあ！！」

――泣いてれば、笑ってくれる。

――手を差し伸べて、くったいない笑顔で。

―その笑顔を僕らが、僕ら自身の手で染めて。

その罪の潰れその罪に濡れその罪に沈みその罪に死ね

「うあ、ぇああ、かぅあぁぁ」

――願わくばもう一度。

――ワガママな自分に。

―微笑んでください。

何も言わない骸よ。

＜……ご主人、もう泣かないと誓ったよね？＞

「ああ、ああ！」

＜今は泣く時なの？＞

「約束したろ……もぉお！　オレは泣かない！　今、やるべき事があるからぁ！」

＜なら、行きましょう。全部＞

「ああ、そうだ！　ああ！　アイツにぶつけるッ！！」

キ――セ―

「シン――――――――――！！！！！」
「雨宮――――――――――！！！！！」

――交わした約束。

――それは嘘。

―それは本当の気持ち。

決して、守る事のできない。

――さよならは言わない。

――だからせめて、

―最後くらいは……。

笑顔で居たかった。

「――――」
「死ね！！」

――でも、約束は

――守る事は、

―適わない。

ものなんだってわかってた。

「お釣りだ…」

「なに…！？」

「余す事無く受け取れ！」

―エ――――

1998

バリ

手で紙を裂くような音。

バリ

それがもう一度。

ボリ

奥歯で何かを砕くような音。

ボリ

それが再び。

裂かれ裂かれ食われ食われ

ああ、そうか

お前はあの日からここに居たのか。お前はだれなんだ?

ボクは――――。

それが、本当の名なんだな……。

もう捨てた、裂かれ裂かれ食われ食われ。

……。

……。

夢は儚く。

人は脆い。

空は醜く。

海は汚い。

孤独だけ。

独占だけ。
世の中は。
儚く脆い。
醜く汚い。
欲望だけ。
貪欲な者。
満ちてる。
罪に香りがある。
罰に彩りがある。
罪香に包まり。
罰彩に染まり。
オレは…。
ボクは…。
ろー

―消え失せ

2000

「メア……お別れだね」
「メル……会えるよきっと」
「オレは闇でしかない。光といる必要はもうないんだよ」
「そう言わない方がいいよ、だって私達は――――」

「瑞穂？　なんで、お前が」
「雨宮和也……約束だったから」
「約束……？　なんで、オレは……」
「思い出してるんでしょ、本当の事全て」

―ＳＡＩＤ・和也―

「ここは？」
「オレのヒミツの修行場だ」

竹槍が幾つも天高く聳え立つ場所に和也は平然と立っている。長さは均一ではなく下は落ちても良いように水面になっている。

その竹槍の先は下手な岩の針山や鉄の針山と比では無い程、鋭く固い。そんな先を和也は平然とそして鎌を持ち留まる。重心が不安定なその武器で自然体を意地するのは到底不可能なことだ。迂闊にも足をそのままでいったら足を貫いてしまう。

（なーるほど、指先を丸めて先に付かないようにしてるんだな。あんだけ鋭ければ距離なんかなくても足を貫いちまう。それにあの姿

勢を維持するったーなま半かな実力ではなくなったってことだな）

柔軟な足、そして足の指の握力、そして絶対なバランス感覚。

それは“力”と“気”を主とする雨宮流と反する。“調和”と“安定”

そこで駿は確信する。和也に雨宮流とは不釣合いなのだと、雨宮流は“動”を司る。だが今の和也は明らかに“静”の維持。むしろ和也は純粋なる“静”の塊だと。それは将も気がついていた。恐らく気が付いてるのは極僅か。和也の表しか知らないのが理由でもある。

駿や将、魅夜はその前の和也を知ってる。

あの頃の和也は纏めると、知略に長け冷徹冷淡冷酷そして、残忍にして狂暴なバケモノといった感じである。決して感情的にならず影で復讐をするような者だった。口の上手さや揚げ足の取り方までそして人脈の広さ。

雨宮和也はあんなにも活発ではなかった。

それが変わったのが、あの死神。

レナ・フォード＝ライズ・ハールドの存在。雨宮和也は何故、彼女であんな感情的になったか。

「ん？」

何かが通った。それは一迅の疾風。あの駿でさえ感知が出来なか

った疾風。たしかに半憑依も、憑依もしてない状態の動体視力は大分劣るが、駿の動体視力は明らかにバケモノである、音速値のものならスローで写るのだが……写らなかった。それはまるで……

迅雷。

「……よぉ、お前か。久しぶりだな」

今の和也はそれを感じていた。そして優しい笑みで振り帰るとそこに居たのは、人形サイズの茶ぶちのネコ……他に特徴があるとしたら長靴を履いてること、そして……もう一つ。

このネコは殺気を出してる事。

「ニャーが修行に付合おうかにゃ？」

レイピアが空を駆る。

状況は明らかに不利、和也は駿ほどの動体視力はないこと、そして鎌という大振りの武器であるという事、とうぜんスピード、武器の小回り和也の弱点を集めたような存在だった。ここから別に鎌を落としてもよかった、だけども和也は、

鎌を構えた。

そして、このネコ……覚えてる物はすくないだろうがケットシーは驚愕した。前、たたかった時のように姿勢もなにもかもにムラがない。とてつもないほどの成長、いや成長なのかも疑わしい。

まるで、生まれ変ったかのように。

「レナは魔界だけどいいのか？　ケットシー」
「にゃ！？　ニャーには関係ないにゃ！」

煽る、和也は余裕だ。だが自分が優位に立ってるとケットシーは気が付いてる。だから、積極的に攻める。竹をしならせイキオイを付ける。ロケット如き突進力、だがその一撃は和也にはあたらない。

「強くなったな、今じゃあのイフリートなんか雑魚だろ？」

実力もなにもかも和也は見ぬいた。

そして、全てを悟る。

「差し向けたのはあのハーピーだな？　そんでお前は恐らく今はSランクにいて、オレを倒すと特Sに上がるとか言われたんだな」
「ッ！」

図星、そして和也の声がどこからするのか探る。それは直ぐに見つかった。それは自分の真下、和也は落下してる？

いや、違う……これは、水面だ、つまり相手は上。見上げる、そこには一際高い竹槍に立つ雨宮和也がいた。その手には先ほどなかったもの。駿はそれを知っていた、いや知っていても言葉に出せなかった。何故ならばそれは

この、ついついツッコミをしたくなるものだった。

「鎌！」
＜はい！＞

何故か、和也は和英辞典を持っていた。

【１２６話】何が為の力【和也・中】（後書き）

あえて今回の話しは謎だらけにね

2006

【127話】何が為の力【和也・後】

約束したことがあるんだ――昔に

それは遠い過去でオレの記憶なのにオレの記憶ではない俺の記憶。

小さな少年が居ました、少年は弱虫で泣き虫で何時も泣いてばかり居ました。そんな少年には、物心つく前からの知り合いで親同士、仲が良かった為かずっと一緒に居た少女が居ました。

その少女はしっかり者でみんなのリーダーとも言える存在で……、とても輝いていました。いつも泣いて虐められる少年を助けていつも少女は少年と居ました。

少年は少女の笑顔が堪らなく好きでした。あの日溜まりにいるような暖かな微笑みは人を幸せにしてくれるほど朗らかな春の日差し。

“夜”とは違う暖かさが彼女にはありました。少年は少女に恋をしていました。

だがある日、虐めの矛先が少女に向き、怖くて何も出来なかった少年は、少女に一つ誓いを立てました。それはその弱虫の少年が決して出来ることではなくて、そんなのは少年はおろか少女も理解していました。

少年が少女の騎士になる為の誓い。

『ぼくは、ぜったいに……ずぅっとみぃちゃんをまもってあげるよ』

少年は強くなる事を心に決めた。

だが現実はそうは行かない、もとから心臓を患い尚且つ虚弱体質な少年にはすぐに限界を迎えた。

だけども少年は――――――に、――――――た。

――――――。――――――！

少年はその言葉を聞き入れ、少年は全てをなぎだし、全てを――――――に委ね託した。

そして少年は後日――

街を一つ滅ぼした。

少年は怖かった少女を守るにはどうしたらいいのか？　少年は思った傷付くくらいなら無くしてしまえ。

無に変えよう。

少年は少女をも殺め少年は自らを――――――に捧げた。

全ての恐いものを消すために。

「泣いてるんだろ？　自分を止めてって」

オレは――いや、俺はそこにいた。

「僕は止まれないんだよね」

2008

そうして、オレもこの場にいる。……オレが二人も？

「やっと来たか」

「はじめまして……かな？」

「……なるほどな」

理解した。コイツらは紛れもないオレだ。あの不機嫌そうな奴も温厚そうな奴もそしてオレも含めてオレなんだ。

感じる。今まで感じなかったのがおかしいくらいこの2人の鼓動を感じる。荒々しい虎のようなのと静かで雄大な海のようなのも全部感じる。

感じる。機会を狙うように待つオレらの中の誰とも違う鼓動も。わかるのは“雨宮和也”という分類ではないということだけ。

ああそうか、そもそもソレはオレじゃないからか……うん。今なら感じ取れる手に取るようにわかる。

ふん――。

あの記憶そして介入された記憶、どこからが混ざったかなんて知らないが途中までは俺の記憶だった――そして僕の記憶も――なによりまだ見ぬ、感じだけのオレの中の別人の記憶もオレは……触れた。

「主人格（オレ）……は強くなるのはなんでだ？」

「主人格（キミ）がどこまでも強さを目指すのは何故？」

オレに力がいる理由。

『みぃちゃんを』
『せんやだけを』
『おねぇちゃん』
『オレの理由…』

「簡単だ」

恐らくそれはオレらの統一の願いでありオレの一番大切なもの。
何時からなんて忘れた……オレは

「大切（アイツ）な物を守れんなら、幾らだって強くなれんだよ」

これはオレの自信である。アイツを守るためならオレは力を振るう。

「頑張れ。君は、無敵になる」
「オレは“俺”にも“僕”にもなれるのだから」

この力は、無限であるがために無敵である力なのだから。

＊＊＊

「ニャ……？」

惚けたケットシーの声が虚空に霞める。誰もが和也の行動に疑問を持った。この場、それも戦闘中に似つかわしくないものだから。

和英辞典を使う要素は検討がつかないのが本音であるのは確かである。だが、和也と“彼女”はそうではないらしい。

真っ先に気が付いたのは駿であった、それは和也の背後。漂うウェーブの繋ったブルーサファイアの髪をした天使のような翼と悪魔のような翼を持ち合わせた女性。身長は女性にしては高く、１７５はあると見積もってもいい。虚ろな目……見た感じ天然そうである。

だが、その女性で一番問題なのが……。

（ろ、露出がたけぇ……！）

豊富な胸を強調するかのような生地の薄い服、いや、そんなことよりも本当に露出が高い。スカートなんかも膝よりも高い。多分、モロ見えだ。

「相変わらず露出たけぇぞ」

「仕方ないじゃないですか“ご主人”！」

駿は目を細めた。そのキーワードは“ご主人”と和也を言うものに該当したのが和也が今、持っていない大鎌である。そして駿は気がつく。和也の行動に。

だが次の瞬間、疾風が吹き荒れる。

「……ふにぁ！？」

「なんつー魔力だ！」

それはまさに魔力の嵐。体内に存在する質量のない魔力が岩、海、炎といった質量のある魔力と化す。強力な嵐として和也を中心とし

て存在した。後々嵐は静まり。そして、雨宮和也の周囲には幾つもの紙切れが舞っていた。

紙吹雪。

舞舞。揺揺。

そして、次の瞬間には衝撃波。

＜ＤＳＭＢＳＭＥＳＥＯ（ダイレクトスズルヌヌルウヌンングヌヌヌルオン）……＞

「いっくぜ……」

握り締めた漆黒の刃を棒にとりつけた、鎌という死神を印象させる武器。それを振り上げ、叩きつける。先程の嵐に近い威力の衝撃波を産む。

「＜Ａｃｔｉｖｅ（アクティブ）！＞」

それは、最強にして無限の力の生誕でもあった。いや、訂正しよう、たしかにこの力は最強に近いが広い視野でみると2つ、この力を超えるものが2つある、それは、雨宮和也レプリカと八神庵（やがみいおり）の道をつくったあの少女の――である彼女が共通して保有する力、それはこの世界にある最上位の力。

陰と陽に次ぐ、第三位の力、“破壊”。

「人間が内包できる魔力のケタにゃ……にゃい！」

迅雷が駆ける。レイピアの剣先が和也の咽を正確に穿たんと迫る。

「コレは痛いぜ…！　魔力挿入（エーテルオン）　金！」

大気が哭（な）く

そして虚空から顕れる幾重の紫電の矢。

「ＬＩＧＨＴＮＩＮＧ　ＲＡＩＮ（訳、稲妻の雨）」

そしてそれは降り注ぐ。さながら天から雨のように。ただし降り注ぐのは水滴ではなく危険な紫電の矢。

それはケットシーを目掛けて降り注ぐ。豪雨、轟（ゴオウ）と音を立て注がれる雷雨（この言葉につきる）はケットシーを叩き落したかに思えた。

だが、ケットシーはすでに和也の目の前。鎌の間合いではなくケットシーの一撃の間合いそして常識的に鎌で攻撃するよりはレイピアの方が早い。

だが、それは“鎌”の場合である、それは和也のメインウエポンとして誤認されがちだが、鎌は相手の間合いなど素手では分の悪い相手用にだ。そう、和也のメインウエポンとは、破壊力のみに追及された“格闘術”である。

ケットシーは気がつかない、鎌を持つのとは逆の手、左手から神々しいほどの光量が溢れ出していたことを。破壊の王の力をもったその拳はケットシーの死角となる場所から潜り込み腹に叩き込む。さながら、海から出でる龍王の如く。

「！」

「ちぃ――！　破龍烈滅掌（ドラグーン・クリア）！」

轟！

動きは単なる“龍滅掌”と大差はない。だが、その破壊力は比較は不可能なほど。和也は最弱レベルに控えたがその威力、ゆうに龍滅掌の5倍を越える。滅、そして烈（はげ）しく滅す。

いや、正確に言うと当てたのはその爆風だ。だが、ケットシーを怯ませるには十分。

「あめぇンだよ！」

浮いた身体。いや、それ依然にケットシーは反応していた、身を軽く翻し直撃を避けてた故に爆風のみ。だが威力は十分あり、そして大きな隙も生まれる。

その背中に石突を叩き込み、真下に落とされたケットシーの身体に和也の拳が減り込む。勝負は決したかに思えたがそのケットシーは光に乖離していく。そこで和也は気がつく。細く微笑む表情は、まるで、味なマネをといってるかのように思える。そして、和也の姿も消える、否、人間の動体視力の限界を超過した高速での移動。

鉄がぶつかり合う音。そして――ぶつかり合っていた者からすれば長い時間なのであろうが――刹那という表現の出来事であった。

「Sクラスってだけ……あんじゃねぇか」

「レナやヴァン、ラミアの実力を図りそこにゃってたみたいにゃね」

「いちいちにゃーにゃーうぜーよ」

和也は鎌を肩に担ぎそして左手を突き出す。強大な魔力の波長、それを感知したケットシーは先程と同じく姿を消す。

現れたのが和也の背後。

そして首へ一撃。レイピアの一突きでケットシーの勝利は確定する。和也は気がつき振り返る僅か一秒。その一秒にケットシーは5つの斬撃を和也に与えた。

「約3秒……それが準備時間にゃろ？」

和也が魔力挿入をするのは、はじめてのことだ。慣れもなければ魔力の扱いも長けてはいない。事前に鎌からどういう力かは聞いていたのであろうが――結局使うのはは和也なのだ、天性の格闘センスを持つ和也にしてみれば、魔法とは使い道のないものである。自分が、一番に隠してるウィークポイントを曝しかねない。

果敢に先陣を切り貫かんばかりに敵を薙払う“魔槍”は己の身体を張っていた。

故に雨宮和也は己の拳に自信を持っていた。

故に雨宮和也はイレギュラーたる魔法を使いこなせない。

和也は零亞という、幼き才能の塊のように多種多様の魔法を使いこなせない。ラミアのように知識と、経験を生かした魔法の組み合わせや、道具の応用がきかない。雨宮和也は魔力というものを本気で感じていない。

だが、それは雨宮和也であり。もう一つ忘れているものがある。

「ああ、確かに魔力を込めるとか作業が結構あってな……。
だけどよぉ……！タイミングや魔力の込め方は」
＜私、サポートしてますから＞
鎌という和也の相棒を。
斬られた個所からまるで霧のようにモヤがかかり人型であった原型は崩れ虚空に消えていく。そして和也は姿を表す、真下から、真上から同時に。水面に映ったものではないとケットシーが認識するとケットシーは下にレイピアを投げすて和也の眉間を刺す、そして真上には高火力の炎の柱を浴びせる。
そして虚空から再びレイピアを作成。具現化し握りしめると、真下に駆ける、晴れたモヤの下にはレイピアを左手に持つ雨宮和也の姿。
「およ？　バレた？」
「ニャ――！！！」
激突しすれ違う最中の、攻撃。
斬。という切り落とすかのような音が轟く。
そして、空を駆けたレイピアは砕け散る。
「まさか、ＴＯＧ　ＴＨＥ　ＯＴＨＥＲ　ＳＥＬＦ（霧の分身）がここまで簡単にネタバラしされるとはなぁ……」
「作れる分身は一体とは限らないニャー」

軽口。その後に今更な空を裂く無数の音。

「で、覚えとけ。これがＴＲＡＧＥＤＹ　ＳＴＯＲＭ（惨劇の嵐）だ……。普段なら嵐の如き風を収縮させた一撃の斬撃だが、そのまま嵐ごとぶつけてやる事も出来る。どうだ？」

「……負けニャよ……」

「で、お前ら」

先程まで沈黙を破った駿が声をかける。

「濡れて帰る気か？」

「は？」

万有引力。つまり下の和也を狙って落ちたケットシーも上のケットシーを狙った和也も空中で止まっている状態だ。周囲の竹槍は和也の一陣の斬撃で木っ端微塵となり足場がない状態であるため……つまり、万有引力に従い落ちていった。

ま、つまり簡単にいうと。

ドボンだ。

「つめた！最悪なんだけど！」

「なんて事しやがるニャ！」

「なんだとてめぇ！？」

「やるかこのニャロウ！」

「上等だ！」

その光景を見ながら駿は頭を掻く。

「やれやれ……だな」

……。

……。気がつかない幸福はある。

いや、この事は何も知らない和也に知る由はなかったしその前兆すらも見せなかった。故に、唐突に起きる災害は前兆のある災害よりも恐ろしい。これは恐らく、雨宮和也にとって大きな爪痕を残すものになる。故にこれは雨宮和也の運命にある宿命なのだ。

更に同じく、一人の男も葛藤していた。それは男の心を埋めるような世界で、いろいろな事に傷付いた彼の休まる時間。そして彼が打ち破らないといけない世界。彼は進む、いくら破滅があろうが既に破滅した彼を動かす、復讐と、適う事ない愛は彼に与える最後まで。

目覚める漆黒は終世を。

目覚める純白は再世を。

＊＊＊

―同時刻―

目の前は真っ暗だった。

2018

目の前は真っ暗だった。

目の前は真っ暗だった。

目の前は真っ暗だった。

目の前は真っ暗だった。

目の前は真っ暗だった。

目の前は……！！！！

そう、僕の目の前は真っ暗だった。

暗くて暗くてなにもなく冷たく孤独であった。

僕は暗くて暗くて暗くて暗くて暗くてなにもわからなくてソレに触れた。

暗い暗い暗い。黒い黒い黒い。

『小――――――――狼っっ！！！！』

そうして、僕の世界は終ったんだ。

目の前の先にある光を見ずに僕は彼に殺された。

怨み妬み憎しみ。有象無象の夢の終りはその感情、嫉妬という哀れな憎悪。

それは光だった。

2019

それが闇だった。

それが神だった。

それが師だった。

それが兄だった。

それが姉だった。

光を闇を神を師を兄を姉を、すべてを妬み。そうだ、全てを妬み妬み妬み

の支えになるはずだった。僕は、彼を憎み妬み苦しませる。それで彼を支えるつもりだった。

なのに、彼は否定した。兄弟子である彼は僕を否定した！

だから僕も否定しよう、彼を――

冷たい冷たい暗黒の過去。それを全て僕は……僕は！！

――？？？――

『――、決めようか？　ダレが強いか』

『――――！？　何を言って……？』

『――――ソレは……』

『――――、そうだよ……コレは、“惨劇”忌みの刀だ』

『あ、“嵐”……？』

『そう、そんな銘だったね――――』

『――――止めろ！！！』

『もう遅い！！――――！　君も死んでもらう』

『やめろぉ！　――――――

そう、何度もこのノイズの走ってる映像を見た。

魔槍（グングニール）、最恐竜（ティーレックス）、月狼（マーナガルム）。それらの過去であることは理解できた。しかし理解できないのはそれがレプリカであったことだ、哀れなレプリカ和也。どこまで哀れになるのだろうか？

くくく……。

なかなか楽しい光景じゃないか……。そうだ、君には復讐をさせてあげようか。

コレを偽りの記憶に塗りつぶして。

さぞかし愉しそうだ……愉快だよ本当に。これでもっと楽しめる。

――この愚者は知らないこの先にある真実を。

――この愚者は知らない雨宮和也の内に秘めし力を。

――この愚者は知らない李の血の意味を。

――この愚者は知らない運命という二字の重みを。

――さぁ、目覚める漆黒は終世を。

2022

ｏ　Ｓｈｉｎｄｏｕ―

―Ｍａｋｏｔ

自分の感情がわからなかった。何時ものなんの変哲もない日常であった。自分の言葉がいちいちが薄っぺらかったんだ……無気味に。何時もの日常だった、そんな思考をするだけで深く探ってしまう。日常であった……それが日常なら“日常だ”の筈だ……。なのに、“だった”まるで前がそうではなく懐かしむように。

いや、そう考えるなら日常だったという方がおかしい。当然の事を忘れてしまうのが人間だ、それは俺達死神にも言える。当然のようにあるものを忘れてしまう。例えば明日だとしよう、明日の事を明日になって昨日の明日は今日だったなんていちいち思わない。そういう事だ……。

なのに自分はそういうのに過敏に反応してしまう。

そんな自分がイヤになる。このまま過せれば楽なのに……俺の体が流されてはイケナイと反応してしまう。まるで後戻りは出来ないと言わんばかりに。

ふと、視線を反らす。何席か離れた場所にいる飛鳥を見る。ほんの少しだけ胸が痛んだ。

この感じが……嫌いだ。

授業は延々と続くような感じがした。そんな感じに長くてどうしようもなかった。

2023

頭の中が混沌とする。否定と肯定。この場所を肯定するのが俺。だけどもこの場所を否定する俺もいる。なにかを忘れてる。なにかを思い出さないとイケナイ。

なのに――なんで、思い出したくないんだ？

なにを――なにを、思い出したいんだよ俺？

わからない知りたくない。だけど、俺はなにかを思い出さないといけないんだ。その何かを知ったらこの日常は終る。だけど――知るしかないんだ。

自嘲する。俺はよほどこの日常に依存していたらしいな……。

「俺は……なんなんだろーな」

ボヤキは新しく一風変わったなんの変哲もない三年の教室の大した事もない空気に流され微かに消えて行った。眺めた窓から望める木に小鳥が数羽、囀りという会話をしていた。なんの変哲もない狂った日常はその狂いを俺に見せずに進んで行く。

残酷なまでに美しく、残酷なまでに醜い……この世界は。

＊＊＊

「マーコートー！！」

耳元で聞きなれた声でバカが叫んでくる。何故か毎回聞いてる声

なのに酷く懐かしい感じがした。薄っすらと目を開くと時計の針は丁度、昼休みの時間を刺していた。どうりで小腹が空いた訳だ。

しかし俺のは生憎、眠気のほうが強い。残念ながら俺は起きないぞ。

「もぅ、下校の時間だよ！　おーきーろー」

うるさいうるさい……昼飯くらいなら奏と食べろ。俺は寝る。断固して寝るんだから諦めろ……って？　下校だと……？

あぁ、そうか……今日は進級して初めての学校だからか……午前で終るんだったな。つまり、コイツは2時間近く待ってたのか？なんつーお人好しだ、まぁ、コイツらしいといったらコイツらしいか。

目線を窓に逸らすと桜並木が見え、風に流されていった。

薄目を開けてたのが仇となったのか、俺の視線いっぱいにバカの顔が写される。そしてバカの顔にも花が咲いた。百花繚乱……そんな表現ができる笑顔。その笑顔を見た瞬間に何故かズキリと鈍い痛みが心臓あたりを刺した。その鈍い痛みはなにかわからなかった。

やっぱり大事な事を忘れてるんだ……俺は。思い出さないといけないんだ……。

「起きた……」

「起きてた」

何時もとは言いがたいが毎日のようなやりとり。

「ふふ……、帰ろう真琴」
「ああ、そうだな……帰らないと駄目なんだな」

恐らく、俺とバカの言葉には食い違いがある。笑顔のアイツにいつものように仏頂面の俺。何時もの光景だった……。だけど、俺に宿る目の光は別である。それに、アイツは……愁羅飛鳥は反応する、なによりも早く気がついて……恐らくは、俺が起きる前に。

飛鳥の顔はその現実から逃げようとする仮初めの笑顔。何度も見たくないと誓ったのに何時も俺が作ってしまったこの笑顔。悲しそうな笑顔は再びあの映像と繋がった。

小さな公園。ゾウの形をした滑り台。緑色に塗られ所々錆びついたジャングルジム。夕風に揺れるブランコ。小さな山にトンネルと思しき山が出来ている砂場……。それらの遊具に囲まれて公園の中央付近に立つ……鎌と無表情の仮面を付け、黒いローブで身を包んだ一人の男、その男の持つ鎌に突きつけられた、泣き顔の制服の少女。

そうだ……そうだよな。

「真琴……イヤだ」
「なんで……お前が気が付いてるんだよ」

そう、目尻に浮ぶ涙がその証拠だ。俺に帰るなと飛鳥が言うのも証拠。

そして、全部がわかった。全部を見失いかけてた……。

そして、今も失う。

「真琴がそんな優しいなんて……明日は大雨になるからさ……！
そ、その……折角の桜が」
「答えろ」

飛鳥の挙動不審な言葉を俺は遮る。取り繕ったその真実を俺は切り捨てた。ターニングポイントはもう無くなった。もう後戻りはできないんだ……コイツは知ってる、こいつは気がついた。俺を捕まえるためのものなのに、コイツは気がついてしまったんだ。

ＮＰＣだというのに、プレイヤーみたいに。

それは、禁忌なんだ。

「イヤだ！　言いたくない！！」

また、鈍い痛み。

ハッキリと泣いたからだとはわかる。悲しませたくないと心から誓ったのもわかってる。だけど……！　だけどだけどだけどだけど……！！

俺としては珍しく頭の中で自身が怒鳴る。葛藤。冷静になれと頭の中に呼びかける。どうも俺らしくない、そもそも俺がなんなのかなんて俺が知るワケない。自分がどんな自分なんかわからない。誰も形だけ信頼していた、裏切られるのが恐いわけじゃない、ただ信頼というものがわからなかった。でも、ハッキリわかる事が一つだけあった。

俺はこいつ等を裏切れない。そして、裏切りたくない。身勝手なのは十分承知だ。

言いたくないって言葉の意味を考えたくない。それは俺は裏切る事になるから。

「飛鳥……。気がついてるんだろ？」

「知らない知らない知らない知らない知らないしらないしらないしらないしらないシラナイシラナイシラナイ…」

「知らない」それは「言いたくない」という意味なんだと思う。左手で自分の右腕を掴んで、まるで自分の暗示をかけるように、そして狂ったように「知らない」とだけ答える。知らないという事は知ってるって事なんだと思う。知らない事を素直に知らないなんて言わないんじゃないか？

言い逃れの言葉なんだ、知らないは。本当に知らないなら絶対即答しない。必ず考えてしまう。考えたって思いつかないなら普通は「わからない」だ、特に俺の質問はそっちの方が適切だ、自分が思った事を聞いてるのに答えたのは「知らない」。それは、自分の事が知らないというワケだ……本当は「わからない」で答えるべきじゃないのか？

それは、自分の考えを「知りたくない」んじゃないのか？

……飛鳥ッ！？

「わ、私は……！」

ズキリと今までで一番の痛みが走る。溢れてた涙に俺はなにもい

えなかった。何も……言いたくなかった。

その後……俺は一人学校に残った。楽園のネタばらしは済んでいる。この世界は確かに楽園だ。だれも苦しむことはないし苦しめることはない。いっそ、この世界に身を委ねようか？

我ながら馬鹿馬鹿しい。俺にはやる事があるだろ？

定められた幸福の世界。俺では到底考えられない世界だよ。

どうする？　アイツは強情だしな……。はやく、奏をとめてやらないとイケナイ。なんで忘れてたかなんてこの際はどうでもいい。実行に移そう。この世界に俺は居たら駄目なんだ、無理矢理壊す力が使えないなら――それなりに別の手はある。

例え鎌が使えなくとも、たとえ魔法がつかえなくとも、たとえ氣が使えなくとも、身体能力が一般人よりはかなり優秀な程度に下がったとしても。俺はこの世界を切り捨てる、現実と向き合う必要がある。だって、俺にこの世界は眩し過ぎるから……。

―Ｋａｚｕｙａ　Ａｍａｍｉｙａ―

もの凄く端折ります。オレこと雨宮和也は鎌の本当の姿と“試練”もとい、戦闘したわけですが、結局最後の最後に無理矢理力任せ

にふった力のはいっとらん拳が偶然当たってなんとか、鎌に一撃でも与えたらクリアという試練を乗り越えたわけですが……。

オレ、もう半分死んでます。

「聞いてますかぁ？　ご主人」

すみません、聞いてません。別の意味で効いてますけど。正直会話とかそんな余裕も糞もねぇんだけど……この野郎、空飛びやがるし、やたらと中距離から攻めて来るから鎌が使えない……いや、使えたら使えたでもっと苦戦しただろうが……つまり、オレは格闘と氣しかつかえないから手が届かない、氣を溜めるまえに速攻されるで、正直、殺されると思ってた。

復讐か？日頃の報復なのか？

ぶっちゃけ、こんなに強いなんて思ってもみなかった。あれ、もの凄くしょっぱい悔しい味のする汗が目から……。悔し涙ながすとはなんとコメディエンスな…！

「もう、よわっちい野郎です」

「お前が強いんだよ！」

「わーちゃんと聞いててくださってたなら答えてくださいよー」

騙された！

「つまりは、オレたちの世界の「魔力」に類似したというよりは、お前の許容範囲である法則的に似た世界から“地魔力”を取り出すわけだな？」

「はい、因みに私の許容範囲はＤ００Ｂ７８９００Ｌ５６８～Ｖ５

０Ｅ１０００００Ｘ８７０までで、私達の魔力、Ｓ４０Ｅ９８４６１Ｋ３０２がちゃんとはいってるんですよ！褒めて褒めて♪」

それは、作者的な事情だろ。

「イヤだ」

「酷い！」

「で……だ。１つの世界分の地魔力は加速器（ブースター）である鎌（おまえ）により２倍の大きさにするわけだ。そして体内の“色魔力”を取り出した「地魔力」にあった色に染める、そうだなぁ……オレが染めた色は「疾風」緑や白、無色などで表現の出来ない色ではあるな、それを表現するのは一苦労だが、染めるんだな。そして地魔力、色魔力を“総魔力”へと変えて、通常なら完成だろ？　流れはオレが普段使う鎌を使った強化した魔法となんら変わりはねぇな」

「だけども、もういっちょ私が“総魔力”を強化しますんで」

うむぅ……その必要性がわからんが……いいか。

「つまり、初期とは４倍の威力があるわけだ」

「はい。それが私の弐の型（セカンド）です。あとは、ご主人の設定次第で変わりますがね」

まぁ、難しく考える必要はないか――オレはこの力を使いこなさないといけないのだから。設定かぁオレは馬鹿だし多くてもよくわからなくなる、それならオレは――――。

MO（マジックオプション）：「木」「火」「土」「金」「水」
SM（スペルマジック）：「英語」
M（マスター）：「雨宮和也」
SN（スキルネーム）：

そこまで設定し、オレは筆をとめる。パッと頭に浮んだのは最近小生意気になってきた弟子（アイツ）の顔とその戦う様。ちょっと作品感越えてるが……。そうだなぁ、パッと頭に浮んだこの機能の名前が似ていたが――まぁ、悪くはないか。

SN：「魔力挿入（エーテルオン）」
MI（マジックインヴァケーション）：「詠唱なし。単語で直接」

「うし、これで最後か……KW（キーワード）ねぇ……」
「ご主人、最初に使用する時にコレをいえば自由に使えますよ。まぁ、こっちにも準備はいるので詠唱はしますが簡略化もできます」
「ふむ……ならこれでいいか」

KW：「Ａｃｔｉｖｅ」

【１２７話】何が為の力【和也・後】（後書き）

捕捉：：

１和也の魔力挿入は現段階で最高「５」それ以上の使用は術者の負荷により死に至る。

２五行思想の五大元素から地魔力をとること意外、「氷」や「雷」などど取り出すことは不可能。その氷や雷から五大元素の中から連想し色魔力で工夫する。

３和也が魔力挿入を入手した時期は【１０６話】と【１０７話】の夏休みの間。

４同じ属性（「水」）など連結することは、まだ出来ない。

「コニ」

※「コニ」：：コニ印の修正印。この小説は、コニ・タン先生の協力のもと誤字脱字の面など直しました。

【128話】何が為の力【宮鷹】

「坊ちゃま！」

また始まる。俺の色褪せた日常が。ここに帰って来るときから分かっていた。ここには、本家には俺の望む世界はない。繰り返される毎日がそこにあるだけや。本家頭首としての育成計画に準じて進む、決められた修行しかとりおこなわれない毎日である。

俺はその声に振り帰る。

「坊ちゃま！探しましたぞ！」

見なれた世話役の顔。白い髭をはやした皺だらけの老人の顔である。思い出すだけでも苛立ってくる。親父の言う事にだけ準じて俺を束縛して自由という自由を奪った男の一人。今更蒸し返すつもりやないし、第一、こんなことで復讐するのは愚かというもんや。罪のない人を切る権利なんて俺にはない、罪がないというのは単純に、俺を束縛する原因をつくった親父――いや、その元凶ともいう御袋にあるんやからな。

イヤな記憶でしかない。

「親父の命令やからか？」

「そ、そんなわけでは……」

まぁいい。毒を吐いても仕方あらへん。

歩く。じぃは無視してもかまわへん。俺はここでやらないといけ

ない事がある。古都宮の件を終えて俺は調べることがあった。それはあの時の零時の言葉にもあったように「燈廉会　15代目頭首、東條雪都（とうじょうゆきと）の存在が確認された」というもの。しかし、確認された東條は端に雲隠れしていて、そして行方を晦ませたという報告を受けた。

……それに胸騒ぎを覚えた。

せやから、俺はここに戻ってくる必要があった。宮鷹本家には世界のネットワークを掌握していたりもする。宮鷹は陰陽家庭なために妖（あやかし）や幽霊と言った騒ぎに対処する組織であり、つまり怪現象に精通している最中、宮鷹には裏の顔を持っている怪現象による能力者を“端”に流すという腐った虫酸の走るものだ。

裏世界で確かに“端”に逆らえる組織は存在しぃひん。せやから宮鷹はそういう家業であり裏の存在とし、“端”の前組織の一員として存在している。

……ホンマにクソッタレや……。

だけど“端”の内部事情とかを探るには……本家に来るしかなかった。せやから俺は帰ってきた。不安が的中せーために。姿を眩ませた東條……確かに東條は日本の極道会のトップや、そんなんやからいろいろ手筈はある……せやけど……。なんやこの違和感は？

考えても仕方あらへん。今は目の前の事に集中せなあかん。

「宮鷹秀一だな」

「……」

敵は二人。忍の家計の者やな……わざわざ本家に忍びこむとは褒

めたってもええかもあらへんな。

「御命頂戴」

「……」

だが、人んちの庭に土足はいけねぇぞ？

緩やかに指を滑らせ次第に速さを上げ、高速で複雑な印を組み立てるという、何度も幾重にも繰り返してきた印を完成させる。迫る刀は俺の頬に傷を負わせて、もう一人は正面から腹を狙うのに対して、俺は刀の鍔を蹴り上げる。

弱い……。

「“怨（オン）”」

硬直する二人の忍。そりゃそうや俺が刻んだ印は呪いの印でもある。つまり忍たちは呪われた訳やな。俺の印は宮鷹の直径として大部効果あるから一日は動けへんやろうな。

せやなぁ……愚かにも俺の命を狙ったんや、苦しめ苦しめ苦しみ抜いた末に殺してもかまわへん。いや……せっかく本家の塀をくぐり抜けて来たんやないか……せやな……、

楽に逝かせたる。

「桜憙」

『御意』

そして俺は剣を振るう。

飛び散る深紅を桜色と共に彩りながら。骨を断ち内臓を切り捨て原型すらも無くす。最後には心臓を一突きしたら十分やろ？　見慣れたひとつの死体から桜憊を抜き、恐怖に顔を染めた男に向ける。

いや、顔を隠してるからわからんなぁ？　まぁいい動けない苦痛と死の恐怖に怯える様なんか幾らでも見てきたんや。せやから……俺は笑って返したる。

死と共にプレゼントや。冥土の土産に……。

「散れ。桜の如く」

吹き出す血で桜吹雪を描いたるで。テメェの死をもって。

桜憊を鞘に納め再び俺の中にしまい込む。桜憊はこれでも妖刀だ血を落とす必要があらへん。血を吸うとより桜色の刃は満開の桜へと変わっていく……正直、気色が悪く思われるかもな。せやけど俺は進まないとあかんのや……。

例え間違えた道やとしても。進む道があるんやから進む……。それだけの事やさかい。

……敷かれたレールを渡るふりして実は別のレールを走らなあかんのや……だから今は……。

「次期党首どう致しますか？」

だから今は、この現れたた一人の従者に笑いながら答えるんや。

「バラバラに引き裂いて贈り返したり」

宮鷹のレールと装うためにも、必要なことやから。だから俺を酷い人間とも、腐れ外道ともなんなりと言うがええ。俺はそれを言い返せないし、言い返す意味もない。この姿はあの“お茶目な宮鷹秀一”やないんや、これは“宮鷹流六五代目次期党首宮鷹秀一”なんや。

せやから、俺は一時の幻想を消し歩まなあかん。堪忍しぃや……ここからは、人の死をなんも思わないとあかん非道な俺の姿なんやから。

さぁ始めようか秀一。種を蒔くために、花を咲かせたいわけじゃない、ただ種を植えるために。

始めるんだ。忌みの惨劇をな。

＊＊＊

「秀一、来たか」

「党首、お呼びで御座いましょうか？」

昔の中国とかによくある玉座ちゅうもんに座る男。彼は宮鷹流六四代目党首の宮鷹竹虎（たけとら）という人物に当たる……俺の親父や。髭をはやした白い髪、白い髪とは高位の霊能者を表し自然と白くなるもんや……まだ４０代という若さにありながら親父は髪が白い。

威張ったような風貌で常に巫女服を羽織り、正直“えらそうな人

物”を体現させた姿やな。いや、生活には“えらい”んやけどな。その親父はいきなり帰って来た息子に用があると言ってきた。

頭に浮かんだのは家出の件。だがそれにはバツマークをつける。この親父から見れば俺は玩具なのでしかあらへんからやな。玩具が逃げても奴隷が逃げたとは別や、奴隷が逃げたらそりゃ探すわな、殺すためか引き戻すために。せやけど、玩具が逃げたなら違う、所詮は玩具でいつかは見つかる。

気長に待つだけや。

ならば――？

「貴様！！」

「ッ！！」

親父がいきなり俺の髪を掴みかかり引っ張っられる。苦痛に顔を歪ませながらやっぱりなと思う。親父は宮鷹に陶酔してるそんな元来陰陽師として動いてた家計を大切にしてるが故に、俺が金髪にしてる事が気に入らへんみたいやな。

冷静に冷静にいるんや。こんな男の玩具になったらあかんのや。せやけど俺にはやらないとイケない事がある、今は従うしかあらへんか。

「なんだ！　この髪は！！」

「気に入らへんなら染め直しやす……」

とっとと、黒く染め直そ。

だが親父は止まらない。訝しげに思うともう一つ心あたりがあった。

「秀一、この耳のやつはなんだ」

ピアス――！　しかもドクロちゅう陰陽師としてはあってはならんもの。しもうた……付けとったのを忘れとったか！

「……ピアスです」

「ふざげるな！！」

走る激痛と耳たぶに熱い感触。歯を噛み締め耐えながら右手で印を描き左手でピアスをつけていた右の耳たぶに触れる。痛みは引き傷も完治はしたであろう。だがまだ耳と記憶にはあの痛みが鮮明に再生される。

そんな俺を親父は鼻で笑いのけ再び椅子に座る。

「秀一、報告しろ」

「報告……やと？」

目を細め視線をぶつけ合う。今、争ったら分が些か悪い。とりあえず従うしかないか……桜憲召喚の印を解除するか……。

しかし報告とはなんだ？　知らないぞ？

「古都宮に潜伏していた件だ」

「アレは単なる家出で古都宮の次期総帥である古都宮零時が拾ってくださっただけや！」

あえて喧嘩越しに返す。

「だったら何故に端から、お前の身柄を渡せと来るのだ！」

しもうた！！　俺の素性が明らかになっとたんか……！　宮鷹のものが金髪で更にピアスをし、イメージをかえてたからカムフラージュも出来とったし表向きには零時が手を加えた……せやけど俺があった“端”の者は倒したからやって――楽観視しすぎたか！

つまり親父も宮鷹も敵という訳か……！

「秀一……」

「なんや？」

印を描き、桜憙を取り出す。

「古都宮に詰め寄り古都宮零時並びに古都宮瑠依を殺せ。そうすればお前を儂が助けてやろう」

「……」

どうする？　もちろん答えはＮＯだ！　零時を殺すことなんか出来ひん。それに瑠依かてそうや。せやけどしかし――宮鷹にはまだまだやらないとあかん事がある。

宮鷹流党首が隠してる禁書の確保も目的の内やけど諦めるしかないんか？　周りの気配は……駄目や親父を含めて俺が相手に出来る数やあらへん。親父め仕組みおってからに！

考えろ考えるんだ、零時に頼んで死亡した事に？　否、それではあの二人の人生をボロボロにしてしまう。駄目や……見当たらん。

せめて相棒が……雨宮和也がおってくれたら楽なんやけどな……。

死を覚悟し向かうか？

報酬は宮鷹の全て。対価は自分の命。

零時達を殺しに向かうか？

報酬は自分の命。対価は友を命の恩人を自ら殺める事。

ちっ……！

答えが――――あらへん！　明日に答えを伸ばしてこの前みたく逃げ出せれば……。

「今選択するんや、せやないと逃げおるからに」

……退路は断たれた。

『秀一……どうする？』

「桜憙……俺は零時を切れないし自分の命も大切や」

いや、もとから退路はないんや……それなら……！

『……』

いや桜憙、言葉はいらない。どんな言葉も必要はないんだ。何かを言おうとしてくれた気持ちは素直に嬉しいんや……せやけど、俺の答えはある。

退路がない。

俺はならば……！

「……それはベストなアンサーじゃないな宮鷹君」

背筋に悪寒が走る。背後からの声に周囲が凍てつき、親父の表情は凍り付く。長く蒼い髪をしてジャケットを羽織る戦闘体制のヤツの存在は大きすぎた。コイツみたいな存在を知ると、あの預言者の言った恐怖の大王は実在したと信じざる終えない。

ヤツは周囲に恐怖を撒き散らす。残酷な遊びのように。その姿はまさに邪神。彼はロキと呼ばれるゆえんでもある。

神路蒼譜。神の路（みち）を歩む蒼き悪魔の譜（うた）。またの名を、ロキ。

「か、みじ……いや、ロキ様」

親父の掠れた声がする。

「君は立ち向かおうとしたね、それはベストなアンサーじゃないし君の性格からしたら後者の考えもベストアンサーじゃない」

「何が言いたいんや」

コイツが和也をあそこまで眠らせた元凶……そして“端”最強と呼ばれる悪魔……。その能力は誰も知らない……。

クソ、だらしない身体が震えて身動きが出来ひん……せやのになんて迂闊に軽口叩いとんのや！　これは人がかなう相手やあらへん、死ぬのがオチや。それに神路蒼譜は戦闘体制、あのジャケットを着

てるという事は……！　ちぃ！

「まぁ待て宮鷹君、僕は君を捕まえに来たんじゃないよ」
「なん……やて？」

どういうことや？　“端”は俺を差し出せと親父に紙を送りつけたんやないんかい！　何が目的なんや？　この男は……。

「ロキ様、それは……一体？」
「ふふ……竹虎。僕の雨宮和也の友人たる彼に此処まで手酷い仕打ちをするなんてね」
「し、失礼を致しました！」

……読めん。なんや？何が狙いなんやこの男は？　わからへん、わからへんから余計に不気味や……。何を企んどるんや……！

……ん？　なんやこっちをチラッと見てわらいおったで？

「竹虎、実はね組織が君に手伝ってもらいたいことがあるんだって」
「！　Aプロジェクト……」

Aプロジェクト…？　なんや？　聞いたことあらへん。なんかの単語の頭をとったんやれうけどAから始まる単語なんか多すぎる。

考えるだけ無駄か。

「そして組織は宮鷹君を秀一君を必要としていない」
「なッ……！？」

ん…？　親父の驚き方が尋常やないで？　なんや？　何を話して

るんやろ？　空気が特殊すぎる。なんや？　この胸騒ぎは？　危険や、したらあかん事をしてるんや……コイツらは。

「相剋魔装神機」とはまた違う……なんやなんなんや？　ちぃ！　情報が足らなさすぎるやないかい！　キレても仕方あらへん……今はこの展開に感謝する時や……感謝しとうない相手やけどな。

神路蒼譜。ホンマに何考えとんのか訳わからへん。

「……宮鷹君」

いつの間にか話しを終えてたみたいで蒼譜が俺に声をかける。その気色の悪い満面の笑顔で……冷酷に。

「古都宮零時を殺す、古都宮瑠依もだ。雨宮和也も当然、僕が殺す……」

「ッ！」

「まずは……あの子からだ」

「おんどれぇ！！」

一気に振り返り唐竹割りを食らわす。せやけど桜憲での一撃は小指と薬指の爪先で止められる。引き抜くことも深く斬ることも出来ない。宮鷹の顔が冷や汗に彩られ青くなる。

……ンな阿呆な……。完璧に隙を狙ったつもりやったのに……こない容易く……！

「いずれは君だ」

「……」

俺は恐怖のあまり動けなかった。ヤツの目に潜む悪魔を垣間見え怖じ気づいて刀を手から落とし跪いた。恐いという怖じ気づいた感情の爆発を俺は窘める事が出来ひんで……せやから、奥歯をガクガクと鳴らし、恐怖に流された。

弱い。俺は……悔しい。

強くならなあかん、神路蒼譜が誰を狙っとるかわからんが和也の周囲なんは検討がつきよる……早くせなあかんし、早く俺は俺で情報をつかまなあかんのや……俺はやったる。

やったるで……！　神路蒼譜……！

俺はお前に助けられたなんて思わん、俺の運だ運は実力の内だ。必ずいやお前を倒すのは和也の仕事や……俺の仕事はお前ら“端”を潰すこと…！

化けの皮を剥いでやる。宮鷹としてではなく秀一としてお前らの息の根をとめる。絶対にや！

「宮鷹君、とあるグラサンには気をつけた方がいいよ。彼は抜け目がないからね」
「グラサン……？」
「僕には見えるよ、君と彼の小競り合いがね」

そう言い残して神路蒼譜はまるで夢だったかのように消えていく。少し驚きはしたが神路蒼譜の悪魔としての力がわからないんだ。別段、驚く必要は――、ない。

「……」

親父も歩き出すと俺の前で止まり背中越に一人だけ言うとすぐに歩きだす。畜生――何が
「宮鷹の自覚を持ち行動しろ」や！！　確かに俺の決意は軽いもんだったと認めよう。だが俺は、宮鷹秀一は宮鷹ではない、宮鷹などいらない！！

俺は……！　あの時から宮鷹である事を捨てた。宮鷹である重荷を捨てたんだ……今更従うかよ！　アンタなんかに！

「俺は、アンタに従う義理はないよ」
「そうか……」

それだけ言い、親父は歩きだす。

……クソが。お袋……正直、俺は貴女も嫌いです。そして親父も当然、嫌いです。お袋が親父を恨んだように息子も親父を憎んでいます。

＊＊＊

「殺せ、君の手で」
「ひぃ…！」

……。５歳。

「お願い、この子をあげるから私は助けて！」
「――――」

……。４歳。

「いいのか？　旦那は？」

「いいのよ……あんな男は。それよりも楽しみましょ？」

……。４歳。

「バケモノ！来るな――――！！！」

「受け入れんか！」

……。３歳。

「秀一よ、お前は宮鷹を継ぐためにだけある」

「秀ちゃん、お父様に従えば大丈夫だから」

……。３歳。

遡る嫌な過去の記憶。俺は母親を殺し、犯罪者に母親に売られ、仕事ばかりの親父に愛想をつかしたお袋は他の男に抱かれ、陰陽師としての日々がはじまり、宮鷹を強要された。

未来から見て、過去に至るという些か奇妙なものだし３歳の記憶などあやふやだが鮮明に残っていた。

……嫌な夢や。

身を起こして空に静かに輝く月を見上げる。月はただあるだけで何かに俺を魅せてくれる気がした。まだ忘れていた記憶は断片的で強い刺激になったことだけだ……少ししたら思い出せる……全部を。

宮鷹を出て思い出すようになってきた……決まって満月の日に。

満月が何を意味するかなんて知らないさ。けれども俺は……思い出す、断片的にでも……必ずだ。そんな気がする。満月が俺の記憶にどない関係しとるなんか思い出せないんやから当然知らん。せかやら刻(とき)を待つんや。

例え罪に濡れ様がなにをしようが関係しぃひん。

「……桜が儚いのは知っていたことなのだろ？」
「誰や？」
「なのに君はその桜をいつだって見れると思っている」
「……」
「人の夢は儚いとはよくいったものだ」
「答えんかい！」
「桜も夢に等しく、儚い存在なんだよ」

……。なんだってんだよ……この野郎……！　姿もみせぇひんと！　それにコイツは何を言いたいんや？　それに何処から声が？　気配も感じんし……頭に直接語りかけられてる？　頭痛で眉間に皺を寄せながら耐える。少しづつ頭痛は治まっていくと同時に、あの幻聴は消えて行く。

なんやったんや？

と、いう。小さな後味の悪いものを残して。

―？？？―

さて、私は“観察者”として動いているわけだが、それは所詮、彼女……否、“世界を知る者（ファンタジスタ）”の真似事でしかない。だが、この観察者としての使命は私にとっては大切なものである。私は科学者としての興奮と高鳴りを押え切れないでいる。

今回注目するのは、陰陽の家計の少年だ。この少年のこれからの話を纏め様。

許嫁である由咲琶埜（ゆいさきはの）との再会。結咲の協力のもと、様々な暴力団を伝手に東條雪都を捜索する。結果は、宮鷹秀一の最悪の予感が的中したものであった。東條のレプリカ、それを利用しようとしていた事は解明した。

だが、宮鷹秀一にはまだすることがあった。それは、宮鷹竹虎が隠した書物の発見及び保管である。それは禁書というった分類で宮鷹の歴史や桜憙の事も描かれている。宮鷹は知らない事が多かったのだ、宮鷹とはそもそもなんだったのか？　どうしてここまで巨大な組織へと熨し上がったのか。子供の時の教養で学んだのはすでに巨大な組織とし、“端”との連携をとりはじめていた頃である。

しかし、宮鷹の出現に関して、宮鷹秀一の記憶にはなかった。つまり、宮鷹の秘密、桜憙の秘密が描かれている書物は宮鷹秀一に必要なものであった。ここで、疑問になるのが宮鷹秀一が何故にその書物の存在を知ったかだ。

コレを語るのは彼にまかせよう。ここは私の管轄なのではないのだから。

そして、宮鷹秀一のもとに大きな依頼が舞い込む。それは宮鷹秀

一の運命の中で最も大きな山である。動き出した、彼と神路蒼譜の言った“グラサン”の騙し合いに始まり真実で終わる事のない物語が、すでては手中にある。

それと同時に、少年と少女の物語が動き出す。

ふ、“歯車の連鎖（ギア・チェーン）”か……一つの歯車が回り出すと連鎖していく。それの繰り返しだ――この物語だってそうだ。最初は夜色の少年と月のような少女の出会いから動き出した。少年と少女は引かれ会い、そして裂かれ、少年は絶望し、少年は昔に戻ってしまう。そして、偽りの少年と作り物の少女は出会う。これは、先程の過去がなければなかったことでもある。

全ては、本当のすべては過去からはじまってる。そう、私の物語はそのもうちょっと前から始まっている。青年となった少年の幼かった時に。全ての始まりはあの悲しい少年だった。そして受け継がれたのかもしれない。

新たに引かれ合う、少年と少女に。

「……この部分は関係ないから、消そう」

指が自然と「Ｄｅｌｅｔｅ」と描かれたキーに向かうが、途中で手を止める。一興かもしれない。これも、ある意味真意である。そうだな、このタイトルは如何しようか？　観察者としてこれは面白いかもしれない。このファイルにつける名前は……。そうだ、この言葉にどれほどの意味を得れるか面白いじゃないか。

【ファイル名】オレと死神

さぁ、観察者として私は私で動くとしようか……。

【１２８話】何が為の力【宮鷹】（後書き）

ふふふ、タイトル時点で６つの伏線と意味があるとは誰もが気がつかなかっただろう……くくくく。

そして今回はちょっとオマケ設定。たまーにナゾな魔法があるよね「ヴィラング・ゾル」とか。実はそれにはオレしに的用語っぽいのがあるんだよね。一種の魔界の言葉なんですよね設定的に。まぁ、言うのもどこで使うかも謎でしたからね。

ヴィラング：「太陽神」
ゾル：「鎗」
ゼウ：「光」
ザウ：「闇」
ヴァランド：「月光神」
ガル：「剣」
ギィ：「焔」
レン：「氷」
ヴィル：「荒れ狂う」
ガメッシュ：「獣王」
バイン：「牙」
マリナ：「女神」
ウェイシスト：「涙」
チャイン：「樹」
フェアナ：「聖霊王」
セーバイン：「龍王」
バリク：「雷」
シン：「残酷な天使」
エヴォ：「土」

ファイン：「風」
ブラァイン：「嵐」
ルン：「水」
オルド：「岩石」
ブリア：「血」
セイル：「聖なる」
ルイン：「邪なる」
キヴィ：「幻」
ザイロ「飛翔」
クリュウィ：「抹消」

というものです、はい、「フェアナ」とかにひかかった人はおめどとう。もう少し考えてみようねー。ってのは流してつまり真琴が使ってた「ヴィラング・ゾル」とはつまり「太陽神の鎗（やり）」と、なるわけですね。

以上、使ってるのにどこでやることもないような設定でしたー。

【129話】何が為の力【レナ・前】

唐突に言うがレナはよく悪夢を見る。いや、“よく”という言葉ではなく、ある日を境に毎日、“それ”を見ている。それを知るのは、彼女の一番の親友であるラミア・デュミナサストだ。彼女は同じく孤児院に育てられていたみたいなものだ。

偏見は受けたかも知れないが、ラミアの父も母も……兄もみなが健在である。デュミナサストは古代の魔界の意味で訳すと“灼眼の罪女”となる。彼女の持つ橙の瞳は不完全な“魔眼”なのだ。魔眼とは死神が有する力の源である。その眼に宿る力は一子相伝、つまり子々孫々にまで渡る“死神”という種族の証でもある。

彼女の眼の力は“審判の瞳”同じく古代の魔界の言葉になぞらえている。審判の瞳の能力は単純に人の思考を読み取るというもの。しかし彼女は“人の細かい動作により心理的な考えを読み取る力”と嘘を付き、雨宮和也を騙している。その理由を知るのは同じ死神でもあるレナだ。

レナは勿論、事情を知るヴァンも雨宮和也には黙っている。その原因となっているのはデュミナサストという家計に繋がるのだが、それは端折る事にしよう。いずれにそれは明らかになる。

話を戻すと、ラミアが孤児院に居たのは目的があったからだ。孤児院とはみな“わけあり”を共有し種族間の抗争もなく、お互いがお互いの家計を……つまりは、“血”を尊重しあえる関係にある。

ラミアは、否――デュミナサストはその“力”により、同じ種族からも違う種族からも、疎外されている。故にラミアには友達も何

もおらず、父や母は常に“開眼”し“魔眼”を不完全ながらも使用しるラミアを誇りに思い、様々な魔法の知識、様々な魔法の応用、ありとあらゆる魔界の歴史を叩き込まれていた。

幼い時のラミアはそれが苦で心の寄りどころを兄に委ねていた。が、兄は自分よりも優秀でデュミナサスト全体に期待を寄せられ、未だに“開眼”の予兆がなく、父や母に“失敗作”とまで言われ続けていた――故に、兄は妹を憎んでいた。

“開眼”していたラミアが当然、その感情を読めないわけではなかった。故にラミアは傷付き、寄りどころを失い、デュミナサストを一人で出た。

しかし、街でもラミアの素性は直ぐにデュミナサストである事を認識され、街すら村すらも彼女に休まる地を与えなかった。

そんな彼女が行き着いたのがスラムである。かつて神堂真琴が存在していたここでラミアは出会った。今現在、親友と呼べる少女、レナ・フォード＝ライズ・ハールドに。そして、後に魔界が有する死神により構成された四二人の精鋭の頂点に立ち、更にその後に、人間界でやるべき事のために全てを薙捨て魔界を裏切り、今は静かに夢に眠る“最強の死神”と称され。そしてこの頃には、王国騎士団審判の剣精鋭部隊（ガーディアンズブレイド）皇女五十鈴鈴南護衛部隊隊長、神堂真琴という男にだ。

その神堂真琴に飢えている所を救われ、当時、彼の師である雨宮姫南が経営していた孤児院に拾われた。
この頃には神堂真琴が切り盛りしていていた。ラミアの知る、現魔王、五十鈴燿（いすずアキラ）の愛娘……否、義理の娘である鈴南の護衛部隊の隊長である神堂真琴は、ラミアと出会う少し前に解任され、今では、腹

心であった、天符水弦（てんぷみつる）に隊長の権利を渡して、孤児院の経営をやっていたと知ることになる。

ラミアにとって神堂真琴は魔法に関しても、死神としても尊敬の眼差しをするに相応しい相手であった。故にラミアは孤児院に行く事を拒まなかった。

ラミアにとってはそれが転機となった。孤児院には差別や侮蔑はなく皆が公平で皆が幸せであり、皆が友であった。ラミアには過去になにがあったかという、深層心理や記憶まで見通す力はない、ラミアは今考えてることのみわかるのだ。ラミアは孤児院が自分の居場所であると自覚した。

特にラミアはレナと話すようになる。自然とレナといる事が自然となっていった。だが、事件は起きる。

それは真琴が不在の時であった。場所は小さな山の中腹。いつもレナがラミアが、孤児院の仲間ではないが近くにいることから知り合ったヴァンが、そして、もう一人の孤児院で仲のよい、フィーナが。この何時もの四人で居た時に事件が、レナにより起きた。

“第八式・重力子爆破重力派生型魔法”の暴走。重力子達が幾つもの数が集い連鎖的に生み出した超爆発が強い重力をうみ、更に強い重力がぶつかる事で、ブラックホールがそこに誕生する。全てを飲み込むその穴は、傷心のレナを動けなかったラミアやヴァンを助けた少女、フィーナを食らう。

暴走した八式を止めようと必死になるレナ、持ち前の魔法の知識でサポートしようとするラミア、手を伸ばすヴァンを嘲笑うかのように、フィーナの体を闇が包む。

もがくレナの背後に息を切らせた少年がそれを見ると同時にレナとラミアを払いのけ、先程と存在した重力を作りあげる、重力は重力を飲み込みながら強い衝撃と強い空間的崩壊をもたらしながら、レナの作りあげた重力を少年が作りあげた重力で相殺した。

あのまま止めなければ、山ごと消し去っていたであろう。少年は止めて大正解であった。

しかし、少年は――神堂真琴は知らなかった。あの闇に紛れた中に、自らが守るべき孤児院の一人、フィーナが居たという事を。それを知った真琴はどんな顔をしたか、泣き叫ぶレナに気を取られた二人は真琴の本当の素顔を見なかった。

悲しみと罪に彩られ、護ることの叶わなかった一人の死神の顔を知るものは……いない。

そう、レナはその日を境に……この悪夢を毎日見る、磨り減る心。レナのあのあどけない笑顔の裏側には、必死に幸せになろうと願う小さな、本当に小さな少女が手を伸ばしている。

雨宮和也は薄々、レナの裏側に気がついていたのかも知れない。レナの隠された気持ちを……。

だから私は私に笑うのだ。レナ・フォード＝ライズ・ハールドの本来の姿の仮面である。神殺死プロジェクト０７番である……この、私は笑うのだ私という私に。

＊＊＊

さて、この物語の前半は佳境へと向かっている。そして君達はコレを知らなければいけない。何度も出てきてはいて、もしくは、隠れていた、この言葉を。勘がいいものは直ぐに気がついたであろう、そう、正に“何が為の力”なのである。

阿玖零亞、彼はその力を破壊の為に振るうと言っていた。それは何故だ？

如月駿、彼はその力を全ての為に振るう決意をした。それは何故か？

古都宮零時、彼は妹の為にそしてあの一輪の華の為にと決意する。それは何故だ？

赤穂慎太郎、彼は力に迷いがあり何の為に力を振るうか見いだせずにいる。それは何故か？

番田長太、彼は雨宮の為にその力を振るう決意をする。それは何故だ？

宮鷹秀一は、友の為にそして、自らの為に力を振るう。それは何故か？

雨宮和也、彼は大切な者の為に力を振るう誓いを立てた。それは何故かだ？

今までの決意の現れ。それには当然それぞれの意味（タイトル）がある。そう、例えるなら阿玖零亞は「リトルブレイカー」だ、正にあの小さな破

壊者に相応しい名である。如月駿につけるなら「レッドナイト」民を守る赤い騎士なわけだ。そう、それぞれの“何が為の力”には、隠されたタイトルが存在しているのだ。

だが、それは宮鷹秀一までである、“レナ・フォード＝ライズ・ハールド”、“ラミア・デュミナサスト”、“　　”の何が為の力に意味（タイトル）はない。なのにタイトルは「何が為の力」である。考えてもらいたいのは、阿玖零亞から雨宮和也までの繋がりと、レナからあの勇ましき者までの繋がりにある。単純に見れば“男と女”だが……魔界繋がり、これも違う、阿玖零亞は魔界の住人でもあるが……、ならば、相関図にしてみるのも何かが見えるかもしれない。

答えは“神殺死”である。

阿玖零亞は神殺死を知らない。
如月駿も当然だ。
古都宮零時は魔界に関わりはほとんどない。
赤穂慎太郎だってそうである。
番田長太にも同じことがいえ。
雨宮和也は確かに知るが、それは偽りであり本当の意を知らない。
宮鷹秀一が知るのはまだ先のことである。

しかし、

レナは神殺死の被験者であり。
ラミアは神殺死というのを“柊彼方（ひいらぎかなた）”により、知り。
“　　”は、とある場所で神殺死というプロジェクトを知った。

神殺死を知るか、否かで、“何が為の力”が変化する。そう、今までの“決意”や何からは“崩壊”にへと、姿を変えるのだ。

“神殺死”と表裏一体の姿の“何が為の力”で何を見いだすか。
それは、別れるのだ本質的にも、すれ違う要素としても。

雨宮和也たちは、レナと、ラミアと、彼女とも、すれ違うであろう……近い未来に。

神として私は笑う。この少女の中で。

＊＊＊

レナ・フォード＝ライズ・ハールド
【１２９話】何が為の力【レナ・前編】

ＰＡＲＡＤＩＳＥ　ＬＯＳＴ～失われた彼女の日溜まり～

私はある日、作られました。どこかの研究室で、大きな試験管みたいな、黄色い水の溜まっていた中に居るのを覚えてます。たまに聞える会話、それは初めて聞く言葉なのに私は理解していました、なのに私はそれを喋る事は叶いませんでした。声をだすことすらも。

目覚めて、次の日には――私は、見知らぬ豪邸の一部屋に私は居ました。

見渡す限りの豪華絢爛な作りや、至る所にある物は、それを大富豪と主張しているようなものでした。そして、立つ事も、よちよち

と這う事の出来ない私は、優しく抱き上げられます、綺麗な金色の髪はまるで、女神様のような気品と美しさがあって……胸は小さい。でも、暖かかったのを覚えてます。私がその暖かさが好きだったのも覚えてます。

じっと、私は顔を見上げてます、すると女神のような女性が、本当に女神のように微笑みます。私はその笑顔も好きでした。そして、女神のような女性がゆりかごのように揺れながら、その綺麗な、透き通るような……天使のような歌声を部屋中に響かせます。優しい声に優しい詩（うた）、安らぐ暖かさに安らぐ感覚。

それは、本当に心地良いララバイであった。

目を覚ました時には、女神様と髭を生やした威厳バリバリな男が視野を埋め尽くしました。私は泣きました、いや、髭がなんか怖いし……。

慌てふためく二人を尻目に私は泣きました。どうやら二人とも途中から気がついたみたいでした……。私が、泣きながら笑ってるって。支離滅裂だよね、あの髭が怖くて泣いたのに、私は笑っていました。女神様がいるという安心感と髭が怖いという微妙なバランスが、私にそうさせたのかもしれません。

ピンチです、ネコが居ます。私と向かいあっています……と、いうか全方位にいます。

「ニャー（レナ様だにゃ）」
「ニャー（そうみたいだにゃ）」
「ニャー（しめしめだにゃ）」
「ニャー、フー（何を考えてるんだにゃ？　早く解散するにゃ）」

「ゴロニャーゴ（馬鹿かにゃ？　レナ様はテナル様とご主人様の大切な娘だにゃ。その娘が居なく騒いでる今に、ニャーたちが報告したにゃら大手柄だにゃ）」
「ニャニャニャ（そうしたら……！　鰹節が山ほどだにゃ！）」
「ニャー（ねこまんまもにゃ！）」

……さっきからニャーニャー言って何を言っているのでしょうか？　もの凄く猫たちから邪悪なオーラが出てます。とりあえず私は最近身につけた“はいはい”となるもので急行突破を計りました。

「ニャー（鰹節――！）」
「ニャー（ねこまんま――！）」
「ニャー（アジの干物――！）」
「ニャー（ガールフレンド――！）」
「ニャー（焼き魚――！）」
「ニャー（マタタビ――！）」
「ニャー（大怪獣・ピタエンテゴラス――！）」
「ニャー（しましまパンツ――！）」
「ニャー（生肉――！）」
「ニャー（にぼし――！）」
「ニャニャニャニャー（あ、こら待て！　襲ってはならん！　こら聞かんか！　爪を立てて引っ掻いては駄目だぞ！　というか幾数匹おかしいぞコラ！　話をきかんか――！！！！）」

爪を立てたネコの軍勢にあちこち引っかかれ歯を立てられ、痛くて私は泣きました。泣いても見境がなくなったネコは襲うことを止めずに。鳴き声を聞きつけ、駆けつけたメイドがネコを払ってくれました。

……ネコ、嫌いです。

次の日、屋敷からネコが居なくなりました。

ある日、屋敷が赤く染まりました。何かが火と木炭が弾けるような音、鉄と鉄がぶつかり合う音、幾つもの断末魔と泣き声、そして嘘せ返るような熱気に包まれた世界、赤く綺麗に揺れるものに手を伸ばそうとしたら遮られる手。

「駄目だぞ？　レナ」

……私の思い描く彼が居ました。

「迎えに来てくれたんだね」

私がそう言うと、彼は笑いました。

「誓ったんだ……レナを守るって」

「……和也」

目を見開く。今まで開いていたつもりなのに開いていなかった……おかしいな……本当に。

おかしいといえば、私はなんであんな記憶を有していたのだろう？　赤子の時の記憶なんか……。

まぁ、いいや……。多分、太陽の匂いがいっぱいなこのベッドが見せた夢なんだろう。気持ちがよくてふかふか……昨日干したばかりなのに微かに残る太陽の匂いが堪らなく恋しかった。太陽の匂いは彼の匂いに似てる。

「お？　起きたかレナ」
「か、かかかか和也ァ！？」
「驚きすぎだ！　逆にビックリする！」

私の奇声に確かに和也の方がビックリした、いや、和也の方が明らかに悪い！私を投げたり、それに――それに、あんな事を考えてる時に本人が出てこられちゃたまげたもんなんだな！

ってか、私落ち着け――――！

「ンで？　どんな夢見てたんだ？」
「ぶー、知ってるくせいに」
「途中からだってーの」

頬を膨らませてスネると和也はバツの悪そうな顔でスネた。こ、この男は微妙にこういう所がいちいち子供っぽいっていうかなんというか……！

いやいや、落ち着け落ち着くんだ私よ。クールになれクールになるんだレナ・フォード＝ライズ・ハールド。お前はこういう時はクールな女な筈だ！

「ひ、人の過去を詮索するのは、レディーに対して失礼なんだよ」
「レディー？　オレの目の前にいるのは阿呆なんだ――ぐぽらぁ！？」

マコにぃ直伝、重力パンチ。うん、重力魔法手加減しなかったからかなり重たいリバーブロゥだよね♪

とりあえず、失礼な。これでも一応は恋する乙女なんだ。ピュア

なラブハートの持ち主だというのに……なんで和也は……。まったく、不愉快だ不愉快すぎる……なのに、私は……。

「ったく……レナ、続きは言えるか？」

「……うん」

彼の前だと、素直になれるのだろうか？

「辛いなら何時でも言え」

「何をしてくれるの……？」

僅かな期待を胸にして、私は彼に言う。何を期待してるなんか自分でもわかりゃしない。なのに私は、和也の目を視て問いかけながら言った。別に何もいらない、ただ近くにいて貰えるだけで——私は、あの辛い出来事を和らげるから。あの人との最悪な再会を和らげることが出来るから——だから、隣（そば）に居て下さい。

すると、和也の顔が見えなくなる。ただ暖かさと鼓動を感じる。気持ちいい……微かにする太陽のような香り、私は溶けてしまいそうな感覚を受けながら、静かに和也に抱き寄せられた状態になる。

「これじゃあ駄目か？」

——欲を言う、もっと強く抱いて。もっとして欲しい。

でも、ここは……私の居場所じゃないんだ。でも、今日は少し借りよう。大好きな人の腕の中を。

「変態」

「ぬかせ……コレが今のオレに出来る最大限なんだよ」

離れる。恋しくなるあの場所の感覚を確かにしながら、記憶に焼き付けて私も離れる。お互いの顔が赤いのは……お互いが気にしない。

だから、私は再び語り出す。夢の続きを。

＊＊＊

そう、私はつまり、とある研究室で産まれた人間……一種のクローンみたいなのかな？　まぁ、私はある目的のために産まれた。産まれた目的はニナ……もう一人の私が言うにはファーストナンバーである００から０９までは知らされないんだって。つまり私は私が何の為に産まれたかなんて知らない。

そこで誕生した私は、フォード＝ライズ・ハールドに実子として招かれた。招かれた理由としては金持ちだから私を養える――ってなのもあるけど、母親が卵子を作れない体だからなんだ。そこで私は三歳まで育てられた。

そう、和也の視た通り。そのままなんだよ、フォード＝ライズ・ハールドは襲撃に合った、多分――和也も知っている魔界の組織だよ。

そう、同種族でありながらも、神殺死というプロジェクトが産んだこの私を排除する為にね。動いた四二神は容赦無く、使用人も何もかも嬲り殺されたんだ。そこからは……和也は微妙に知ってるんじゃないかな？

私はスラムにいて。そこから――私の本当の悪夢は、はじまるの。

【１２９話】何が為の力【レナ・前】（後書き）

あの部分に騙されたらこの話しは大・成・功！

この話しには作者の幾多の悪戯と無理矢理繋げたストーリーがありますね。主にアソコとかこことかそことか！矛盾に気がつくかは貴方次第さ。

【１３０話】何が為の力【レナ・後】

決して晴れる事のない、小さなこの街。延々と降り続ける雨にうたれながら一人の少女は一人の女性に問う。同じ質問を、同じ声と、同じ顔で……同じ、“人間”に。

明日は晴れますか？

明日は晴れるんですか？

明日にはきっと晴れますよね？

明日にはこの曇り空は晴れますよね？

明日にはきっと、私の心の闇は晴れるんでしょうか？

＊＊＊

私は、ごめんね和也。私は和也に嘘の記憶を教えた。でも、私が言った結果は間違えてない。私を拾ってくれた雨宮姫南という女性、孤児院での生活、そして私の過ち。でも、経緯がまったく違っている。これは、もう慣れた嘘だ。

もし、和也が――いや、和也は本当の事に何時か気が付く。だって、和也は“あの人”の血が流れてるんだから。そう、雨宮姫南の、ヒメナ・フューリアンの血が。元、最強の死神にして初代特Ｓクラス首席者。和也には無限に近い可能性がある。“あの鎌”に選ばれ

たのもそうだ。恐らく和也は、今よりもっと強くなれる。誰も寄せつけないほど、無敵の力を得るほどに。

わかるよ、うん。和也の運命がわかる。全部思い出してしまった私だからわかるんだ。和也はその力で私を止めてくれる。だから私は……笑顔の仮面をつけるんだ。

刻(とき)が来るまで。

「……。レナ？」

「なんでもないよ♪」

この愛しき日常が、消えてなくなるまで。

「それならさっさと学校に行くか」

椅子から静かに立ちあがり、和也は手もとにあった鞄を2つ持ち、一つを私に投げ渡す。布団に寝かされていた状態だったので私は、僅かに反応が送れて――ずっしりした感触の、重りのような鞄が声にならない激痛を与える。

って、冷静に言ってらんにゃ！　にょ！　重いって！　絶対、この鞄に何か仕込まれてるって！

「うにゅ……。何入れたの和也？」

「一枚5キロの鉄板ありったけ」

……何故!?

ちょ！　重いって！マジで身体が動かないよ！　このまま圧死な

んてごめんですよ！　ヘルプ！　ヘルプミー！　助けてカズパンマーン！

「それは罰だぞ、一応」

ふざけた口調ではなく、和也が静かに怒気を交えながらそう言った。扉に手をかけて開けると、静かに和也は振り替えて言う。もがく私を、優しく見ながら。どこか、懐かしそうに……。私も、見覚えがある表情だった。似ているんだ、あの人に。

雨宮姫南に。やっぱり、和也はあの人の子供だ。あの人がこういう表情をする時は大抵――

「一応、４ヶ月近くお前といんだ。嘘くらい見分けれる」

「……」

それに、私はどんな反応をしたのだろうか？　正直、和也が“本当の事”は知らないといえ、私の嘘には気がついた。でも、和也は真実を追究しようとしないで、私が言うのを、その時が来るのを待っているような表情だった。

静かに扉は閉ざされる。まるで、隔ててるかのように。多分、これは最初に私がひいた隔てり。私が開けないといけない壁。鍵を失って開けれなくなった、忘れられた扉。和也は、その先でずっと待ってる。私が出てくるのを待っている。

あの人みたいに……。

「オレは、」

僅かに聞える、和也の声に耳を委ねる。

「信じてるぜ？　“レナ・フォード＝ライズ・ハールド”を」

和也はそれだけ言うと、多分、下に降りて行った。死神として研ぎ澄まされた聴覚が階段を下る音を僅かに捕らえる。私は、鞄にかかっている重力だけをマイナスに変更する。ふわふわと浮びあがる鞄を眺めながら、私は静かに眼を閉じて、心の中で呟く。

“ごめんね”と、一言だけを。

鞄に力を集中させると、鞄は漆黒の闇の球体に飲み込まれ黙視できなくなる。そっと、左手を握り締めるとそれに比例し、漆黒の球も収縮していく。それは既に飲み込んだ鞄の大きさよりも遥かに小さい。ほんの小さなビーダマ程度。

その球体を私の右手で掴み取る。イメージは一つ、“時間の逆流”

「真・八式重力魔法」

それは再生を表し、崩壊も表す。重力で極限までに収縮させられた鞄。強い重力と強い重力をぶつけあい小規模のブラックホールを作り出す“破壊の重力”けども、。“ブラックホール熱力学”は、“量子効果”によって“ホーキング放射”することによって、ブラックホールが最終的には蒸発することを予言している。だけども、このプロセスも時間反転に対して対称である、そのために、熱的平衡にあるブラックホールの時間反転解も、ブラックホール解である。そうなれば、ブラックホールも“ホワイトホール”と同じ物体として解釈され得る。

そう、入り口（ブラックホール）が作れるなら、応用で“出口（ホワイトホール）”の生成を出来る。そして、世界を移動する入り口ならば、出口を最初に作ってやることから過去からへの物体移動を可能にする。時間帯は和也が鉄板を入れる前。

私が嘘をついた辺りから、呼び出す。

「R（リコール）・デッドグラビティ」

先ほど右手に収めた重力の球体が白く発光する。握り拳を解くと、私の手には元の大きさの鞄が現れる。量子論の解釈だけでは不可能だが、一般相対性理論の法則を他の世界から重力で少しだけ触れる事から、例え法則が別であろうが、重力の繋がり。それで、こういう事も出来る。

……マコにぃは、本当にあんな事を考えてるのかな？　間違ってるよ……。この力はそんな力じゃないんだ。マコにぃ……。

今、どうしてるんだろ？　こっちの世界に居るとはデーモン先生が言ってたけど……。もしマコにぃが本当にあんな事を考えてこんな力を考えたとしたら私が、止めないといけないよね。和也なんてマコにぃの足元にすら及ばないし……止められるのは、私くらいしかいない。

マコにぃの暴走を止められる……確証は無いけど。やるしかないんだ。

『その原因を作ったのは貴方だものね？』

「ッ！！　私に、話しかけるな……！」

『私が私に話しかけて、何が悪いのかしら？』

「私はレナだ！　失せろ！！」

＊＊＊

神堂真琴には、どうしてもやるべき事があった。過去形、そう、神堂真琴は自分がやろうとしていた事があったのだ。真琴が四二神に入ったのもその目的を果す為である。人間界――つまり神界から帰って来た真琴は、単身で四二神の本拠地に向った。

四二神を次々と蹴落した真琴は、一時期魔界を賑わせた。真琴の実力は初期から四二神に一目置かれていたほどの実力であるが、あの真琴は異常なまでの力であった。幽鬼如く無情に、鬼神如き力で全てを薙ぎ払う。神界に行くまでの真琴ならば、四二神の四二（ラストナンバー）に及ばなかったであろう。神界での出来事が真琴に、よい意味か、悪い意味でも成長させたのだ。

目的の為に、真琴は強くなった。

いや、強くなくては行けなかったのだ。真琴には“力”が必要だった。

そう、全部は――大切な者の為に――。

「その未来は、塗り返られた」

それも、良い様に。誰もが、幸せでいられるように。確かに、こ

の世界はあいつにとっては最良の存在なんだろうな……。だって、みんなが生きてる。だれも死んでないし、神堂真琴は死神の力を失った。つまり、死神としてのしがらみも失われた。

彼を束縛するものはない。彼は、一度、彼が望んだ世界にいる。もし、自分がただの人間なら、何も巻き込むことは無くて、毎日が平和であったのだろうと。今の彼なら考えれない絵空事だ、何もかもが絵に描いたモチのように、何もかもが上手く行っていれば――こんな世界だった。

「でも、俺は死神だ」

それは、彼がこの世界で気が付いた過ち。

彼が望めば、それを忘れたままでこの世界にいられたのだろう。だけども、彼は薙ぎ払う。現実を見なければ彼は、彼でいられない。死神、神堂真琴は存在し、人間、神堂真琴は存在しない。この世界でどうかは知らない、神堂真琴は死神なのだ。

昔も、今も――これからも。

そして、最後まで。

（これは一種の“魔術”だ。魔力を扱えない者が“魔法の代わりに生み出した”代用品……アイツがあつかえれるのも頷ける。“幻（ファントム）”系の魔法の代用に、“夢（ナイトメア）”系の魔術を使ってるんだな。恐らく、魔術の術式に使った場所は、使用者が書き込んだ陣の場所。それを消せばこのきれいな世界は、消える。）

確かに彼は死神ではなくなった。けども、ここに存在する人間、

神堂真琴は死神、神堂真琴と同じである。故に魔法の知識は受け継がれている。だが、それもぼやかされている。今の彼に必要なのは、こんな世界ではない。罰を与えてくれる世界なのだ。

だから、神堂真琴はここにいる。

（嵩波神社。恐らくここの何処かにいる。恐らく、睡眠薬で寝かされた俺は、何処かに連れ出されたはずだ。女一人の力で、男を何処かに移動させるのは難しい、ならばこの神社のどこかに、魔術式の陣がある。）

彼の読みは正しい。

そして、彼は見つける。

本堂。前に一度だけここに2日閉じ込められた場所だった。目を軽く瞑れば思い出せただろう。でも、彼は降りかえらない。降り返る訳にはいかないのだ。降り返ったらここに留まる事を選択してしまいそうな予感があった。油性マジックで書かれた大きな陣。

意味の解釈。“夢（ナイトメア）”である事を確認。陣の解除方法を読み取る。そして深い溜息を吐く。死神としての自分なら簡単に打ち砕く事が出来ただろう。ただし、魔力も扱えない、魔術の知識は断片的なもの。解除には時間を有する事がわかった。

めんどくさい事この上なかった。

今の自分では十分を有する時間が必要と推測する。深夜のこの時間にここに来る人間は滅多にいないだろう。ならば……と、真琴が次に取った行動は内側から鍵をかけ、そして適当なもので扉をふさ

ぐ。3分の時間は稼げると憶測を立てながら、真琴は陣に向う。

だが、真琴の足は止まる。

陣の中央。そこに、それは……いた。

「……読まれてた、か」

嵩波奏が、幽かに微笑みながら、彼女に刃物を突き付けていた。

＊＊＊

「和也――――！」
「げっ、魅夜！」
「ちょっと来なさい！」
「イヤだ！死にたくない」
「黙って鍋で茹でられろ！」

どんな脅し方なのだろうか。

「いやぁ、仲いいやないか」
「本当にそうだなぁ…」

呑気な金髪と赤毛。

ってか、宮鷹って黒髪に治されたんじゃなかったっけ？　何故に金髪に戻したの？　いや、みんながすでに金髪陰陽師兼ナンパ師と

して認識されてるのはわかってるけどさ……。うむぅ、宮鷹くんは和也から聞かされる限り人間関係でごたついてるらしいからいいや。

別に、あの変態ナンパ師だし。

「ちゅうか、将遅いんやないか？」

「そうですね、和也さんとかなら兎も角、将さんが遅刻は珍しいですね」

「おいコラ、ラミアちゃん？」

「将なら遅刻しねぇとはなんだ！」

いや、態度とかそこから見たらわかるんじゃないのかな？　だって和也って微妙に遅刻あるし、駿だって寝坊の遅刻が多いよね？　うん、ラミア、冷静によく言えるよ。多分、私だったら和也に殴られてるのに……って、あれ？

「さ、差別だぁ！」

「何がだよ！？　レナ！？」

「五月蝿い！大人しくおでんの具になってなさい！」

「魅夜、ひでー！」

なんで煮物なんだろ！？　魅夜って意外と煮物好き？

「お前ら……反省してるのか！！」

男『もちろんしてないさ！』

女『してますから！　正座は許して！』

フミｔの恫喝に見事にわかれた言葉が職員室に静粛をもたらしました。うう、正座はまだ続くの？　辛いんですけど？　あ、足が痺れる……よぉ……。

なのに、何故に和也（修行で慣れてる）に宮鷹くん（同じく修行慣れ）、駿（何故か大丈夫）が苦しんでいない！？　私とか魅夜とか、ラミアとか凄く苦しそうなのに！！

「お前等、そろいもそろって遅刻して！」

ああ、始まる説教の時間が。もうすぐ昼休みだというのに……。そういえば、本当に将が遅いねぇ。何時もなら平然とした顔で学校にいるのに。それに、なんだろう、さっき和也がラミアに講義した時に一瞬だけ駿と視線を交わしたように思えたけど。

そういえば、あの3人はよくつるんでた。それなら理由はわかるはずなのに言ってない。何かを隠してるみたいだ。そうだ……そういえば私は将について全く知っていない。多分、魅夜も知らないんだと思う。

駿とかは意外とオープンな性格だからわかりやすいけど、将ってなんなんだろう？　あの貼り付いた笑顔の裏には一体なにがあるんだろう？　わからないことだらけだ。江戸前寿司の倅ってくらいしか家の事情もよく知らないし……。なんなんだろう？　本当に？

……オーディン、井塔将……、か……。

そういえば……誰ろ？　あの人は？　さっきからこっちを見てるような気がする。生徒かな？　すごく若い……私達と同じ位かな？

あ、立った。

「石川先生、ちょっと」
「り、理事…！？」

理事……？

「如月…」
「ああ、将が心配だ」

あ、あれ？　さっきまで和也と駿が居たのにいないよ？　話し声も聞えたから本当にさっきまで居たはずなんだけど？　に、逃げた！？

「はよ逃げるで」
「へ？　ちょ、ちょっと！」
「ま、待った！足が痺れて…」
「レナ、このまま正座してる」

よし、動け私の足。

＊＊＊

「アレが、“陰の獅子”ですか」
「はい……」
「アレ……、邪魔ですね」
「……では？」
「排除しましょう。我々はその為にあるのですから」

さぁ、狩人は動き出した。

【131話】何が為の力【ラミア】

――■■■・■■■■■■■■

その名前で、私を呼ぶんじゃない。

――■■■・デュ■■■ス■

うるさい。

――■■■・■ュ■ナ■■■

黙れ！　私はそんな名前じゃない！

――■■■・■■ミ■サ■ト

違う！　わ、私は……！

――■■■・デュミナサスト。

違う！！

――灼眼の罪女、審判の瞳に選ばれし者……。

知るか！　そんな事、知るか！　デュミナサストが、この瞳が！

私から！　全部！

――灼眼の瞳から零れ落ちる雫。

う……あぁ……。

――■■■に灯す、光となり。

あ、あああ……。

――黎明の兆しを、友にもたらす。

いやぁぁあああああ！！

――緋髪の乙女の祈りは、■■■■に――――

……。

＊＊＊

緋髪、緋眼。それは、彼女のコンプレックスでもあった。無菌の世界で彼女は育てられた。全てが小奇麗で全てが、定められた時計のように、正確に……。機械的な毎日の繰り返しの渦中にいた。狂いのない時、歯車が正確に回り、歯車が役割を刺していく。

世界を知らない彼女は、世界を知らされる事がなく、彼女の小さな世界が世界そのものであった。みなが通うような幼稚園や、保育園ではなく、同じ緋髪の者たちに世話をされている毎日。箱入り娘でよくいう、箸以上に重たい物を持った事がないような、生活であった。

暇な時間には強制的に分厚い歴史の本、魔法に関する本を読まさ

れてもいる。彼女にある世界は、その本の中であった。外の世界に憧れ、本の世界を夢見る彼女。許された1時間あまいの小さな時間、彼女はクレヨン片手に絵を描いていた。だが、彼女は世界を知った、全てが敵で、忌み嫌われるその緋髪と緋眼によって……。

そして、彼女が描いた世界は、今もその彼女が過した、家に……。いや、時計の中に飾られている。

「ふん」

男は、それを一瞥すると踵返し。その時計の中を出る。無菌の白い部屋を赤く染めて、緋髪の悪魔はほくそえみながら出て行く、同じ緋髪の死体を見る事もなく。

外は、気持ちのよさそうな世界だった、涼しい夜風に、夜にもすこし暖かい今の時期。見上げれば美しい満月が、周囲の木々に見え隠れしている。こんな日は熱いお茶を片手にゆっくりしたいであろう。

夜風が、彼の緋髪を遊ぶように、靡かせる。眼にかかるその髪を、右手で直す仕草をする。そして、静かに悪戯っ子な夜風は、一筋の嵐と化す。

「阿修羅であぁぁぁあああある！！！」

そして、その怒号……いや、咆哮。絶対にその筋の人間であろうという風格のその男が、彼に迫って行く。周囲の木々を薙ぎ払い、迫る。距離は零距離、彼の顔と、阿修羅と名乗りを挙げた大男の顔が交差する。単純なことである、彼は横に避けただけである。それだけの事だ、後ろでは衝突するような大きな音が静けさの満ちてい

た森を再びにぎわす。

「阿修羅……！」

「あの馬鹿！」

「……ち」

その後に夜陰に紛れて現れる、男女混合の3人、いや、フードで顔がかくれてわからないが高い身長の一人に対して他の2人は小さい。黒いフードつきのローブに身をくるむ、阿修羅と行った大男と3人を身長に彼はみやる。

「貴様！　貴様も武人ならば立ち向かわんかぁぁぁあああ！！！」

大男は再び叫ぶ……いや、やっぱり、吼える。どこぞのロボットアニメの敵キャラに見えるとかいわないの。そんな事よりも彼は、涼しげな表情を浮かべて、その灼眼で睨みつけると、萎縮すると思いきや大男はさらにいきり立つと、叫ぶ……いや、何度似たような訂正をしたが、吼える。

「いでよぉぉおおお！！　数々の黒歴史に名を刻みし吹き荒れる戦乱の暴風如き、我がぁあああ！！　鎌よぉぉおおお！！　覇者の暴風刃（デッドエンド・ストーム）！！」

木々を吹き飛ばし、彼女が過した時計の中すらも消し飛ばすほどの嵐が吹き乱れる。根から吹き上げられた木々の葉が、阿修羅を中心に吹き荒れる。その葉はまるで風の刃のような暴風に切り刻まれて細かくなっていく。それは――そう、この大男、阿修羅の存在を表すかのように周囲には、大きな傷跡が残る、暴風如きこの、大男ごとく。

彼は先程と同じ仕草で髪を直し、吹き飛び破壊された家を見る。屋根はいち早く飛ばされ視野にはいる距離には存在しない。そして、破壊された瓦礫を見て彼は、微笑む。背筋が凍りつきそうな笑みに萎縮した黒ローブが2人、男と、もう一人のほうの女性。燃えあがる阿修羅と、もう一人は先程同じく、冷静に観察する。そして、すぐに動き出す。

「四二神ナンバー2　知識の番犬所属、水瀬歩奈実（ラ・クルアスナ・オ・メディ）」

「同じくナンバー5　知識の番犬所属、稲川楓梨（いながわ ふーり）です。はい」

「同じくナンバー28　知識の番犬所属、湖成冬斗（こなり ふゆと）だ」

「ガハハハハ！　武人とした事がいっとらんかったな！　小生は四二神に属し41の剛を持つ者よ！　そして番犬の天秤（ラ・ディアレンス・オ・メディ）の名を持つものなり！」

四二神には大きく二分する組織がある。一つは戦闘を目的とした、制圧、駆除部隊。「狂気の番犬（ラ・ヴォントナス・オ・メディ）」もう一つは、魔図書館の禁書区域の警備、盗み出したものの排除、情報操作を目的とした「知識の番犬」である。

しかし、阿修羅が名乗りを挙げた「番犬の天秤」とはどちらにも属していない。僅か3人の少数精鋭ばかりの、「狂気の番犬」、「知識の番犬」の双頭の顔をもつ部隊。それが「番犬の天秤」である。そう、今回、四二神の、それも「知識の番犬」が駆り出されているのは「禁書を奪った者の排除」である。

「やっぱり、“コレ”かなぁ？」

おどけた表情で、彼は一冊の本を取り出す。先に動いたのは歩奈実である。一瞬で間合いを取り、鎌を取り出して本当に瞬間の一閃。正確に彼の首を狙うが、それは大きく空を駆るだけである。大きく振り切った後の、大きな隙、彼は歩奈実の目の前にいる、そして彼は人差し指で、歩奈実のデコを突く。

「所詮は神堂君を失った組織だ……僕の敵じゃない」

「――――ァアア――――！！」

怒りが沸点に達する。普段から表情を見せない彼女が、大きな怒りを露にする。組織の愚弄が大きな問題ではない。彼女の激昂の原因、それは神堂真琴の名である。もともと彼女の精神は不安定だった。とうの昔から、そして均衡を保ってたものを失った彼女は、崩壊したダムのように崩れている。そのダムを崩すキーワード、それがアレだと、彼は気がついていた。

「隊長…落ちついてください」

それに駆け付けたのは、歩奈実の右腕である稲川楓梨であった。素早く歩奈実の手に腕を絡めて押える。荒い息を整えながら歩奈実は眠り出す。静かに息をたてながら、子供のように。楓梨らは別段不思議な顔をしない。最近たびたびある事だ、故に楓梨は下がる。

残ったのは阿修羅と冬斗の2人である。

2人は彼を挟むように、陣を整える。

「“ロアン・デュミナサスト”……四二神の名の元に排除する！」

「冬斗ぉぉおおおお！！　武人の戦は一対一なり！　邪魔だてはゆるさぁぁあああん！！」

もう何度目かわからないが叫ぶ、いや……ほんっと何度目かわからない訂正だが、吼える。冬斗は内心“なんでコイツが来てるンだよ”とか思いつつ、大人しく構えを解く。これで、正真証明の一対一であったりもする。

燃えあがる武人と対峙する、緋髪の彼――ロアン・デュミナサストは笑う。

発狂という言葉が似合うほど、狂ったかのように、笑いだす。

そして、世界は白に包まれた。

＊＊＊

デュミナサスト。それが、私の運命だった。あの、“時計の中”だと気が付けなかった。世界に私は気づかされた。いずれは知る世界、でも、幼い私はトラウマになるには十分だった。時計の中から、ある日、私は抜け出した。切っ掛けは、些細なものだった。

純粋に世界を見たかったんだ。だから、鍵の情報を読み取り、奪って――私は時計の外に出た。森を抜けて小さな街。そこで私は――私の存在を呪った。緋髪と緋眼で推定される家計の死神。忌み嫌われたその血筋が受けいられるはずなく、侮蔑の言葉で生め尽くされた情報の羅列。それは、吐き気がするほどのもので、幼かった私が、家計をはじめて怨んだ。

そして、整然とした世界と真逆の……、誰も自分を認めてくれな

い世界。何もかもがどう起こるかわからない世界。恐いのにワクワクする。でも、その世界は、自分がありたい世界は、自分を否定する。何故？　私が、デュミナサストだから？

私が、否定される。

なんで、私だけが？

そんな事ばかりを考えていた。自分を認めてくれる親も、それは私じゃない。私の瞳があるから私を認めたんだ。私はオマケにすぎない。この眼を仲介させたら自ずとわかることだった。そう、本当の意味で、誰も私を認めてはくれないんだって。使用人も、親も、家族も……。みんな……。

それは、今だってかわらない。街で感じる偏見や軽蔑などの、侮蔑の視線。それが変わったおとなんて一度たりともありはしない。この人間界でも、緋髪は如月さんとかと似てそれほど感じない、だけどこの緋眼は何時までも、私に付きまとう。

私をどん底へ落とす、死神として。

「セフィリア…！」

なんで……。やっと、落ちつけると思ったこの場所（せかい）で……。どうして？　なんで、私が、私の責任で、ヴァンが、セフィリアが傷付くの？

「今の特Ｓの首席がこの程度か」

「ルーネイ、失礼ですよ？」

「エルチア、君は人の事を言えないだろ」

四二神が動いた。理由は単純、私の殺害であった。いや、命令の方は読めない。ただ、私を殺すと考えてるのが容易くわかる。原因は、兄の行動……。どうやら、自ら手で私以外の縁者の惨殺、そして魔図書館の最下層からの禁書を盗み出した事、どうやら、それで四二神は私に目をつけた。推測はここまで……。私には、時間がない。

世界は本格的に私の敵として動き出した。傷ついて起き上がれないセフィリアとヴァン。殺さないように手加減してるのは目に見えてわかる。ここまで実力が違うなんて思ってもいなかった。四二神の黄金コンビとして名高い、ルーメイ・エルレイシア（ナンバー１３　狂気の番犬）とエルチア・ローナンス（ナンバー１４　知識の番犬）の２人組だ、こちらが分が悪いなどわかりきってはいる。

この結界内だ、レナや他の人が気がつくことはまずない。そう、既に詰んだ将棋だ。やる意味なんかないんだ。なのに、なんでだろうか？　無性に落ちついてられる。そう、冷めてるんだ、ヒーローのいない、私の世界に、最初から……。

レナみたいに、駆け付けてくれる真琴さんや、和也さんみたいな人がいない。いつも孤独で、いつも私は否定される。咎められ、侮蔑され、ゴミのような扱いを受ける。それが、デュミナサストの……この灼眼の、存在すらも罪な哀れな女神の名をもつ。そう、その罪女が罰を受ける時なんだ。

「避けろ！　ルーネイ！！」

――――轟。

――斬。

同じに聞えた2つの音。それに耳を意味はないとわかっていながら押えてしまう。そして、頬には生暖かい感触そして耳を裂かんばかりの叫び。そして、冷たい男の声。

「妹、傷付けないでくれよ……クソども」

眼を見開く。“緋髪の悪魔”がそこにいた。ビクともしない2人の……、いや……、2つの死体の顔のどれかを足で踏みながら。悪魔は微笑む。楽しんだかのように、さぞ充実そうに微笑みながら悪魔は振り返る。その“灼眼”で私を捕らえて。見覚えのある、その面影のある表情は昔とかわらない……。そう、私を見る憎悪の眼を。

……魔眼……。

――■■■、折角助けたのに、感謝の言葉もなしかい？

ッ！　リンク……！

――そう。父上の得意なことだよ。この話しを他に聞かれるわけにはいかないんでね。

なんで、兄さんが魔眼を？

――……■■■、劣等の僕が秀作な君よりも早く開眼したのが気にくわないのか？

そんな事が言いたいんじゃ！

――黙れよ。

……。

――■■■、僕はね……

＊＊＊

「ラミア……く！」

「ヴァン、駄目だ。魔力が途絶えた……ラミアはここにはいない」

無感情に、それも機械的にセフィリアは言い放つ。旧年来からの付合いのヴァンにはそれが癪に障ったのか。セフィリアに向い直る。明らかな怒りの感情をセフィリアにぶつける。ヴァンが焦る理由、それをセフィリアは見透かしている。故に、言葉は冷たいものに、真実になる。

「貴方が滅ぼした血族の生残りだから？」

「ッ！　なん、で……それを！」

胸座を掴みかかる、目を血走らせて明らかな焦りの色を見せる。彼の犯してきた罪はいかなる罰すらも物足りないものである。何故なら彼は、全ての災厄の元凶にもなっている存在なのだから。フォード＝ライズ・ハールドを仮にも根絶やしにし、セルレイン家も根絶やしにした。そして、デュミナサストすらも、彼は滅ぼしたのだ。

この、“クリュウィ＝アル・サーザス”が。

「レイド・セルレイン……」

「！」

「私は、貴方を殺す。必ず……」

ヴァンはその場に崩れ落ちる。自分の身体を抱きかかえて、小さな動物のように震えながら。セフィリア・ナイト＝メイガスの冷たい視線で見下されながら、ヴァンは静かに眼から雫を零した。耐え切れない罪の重さと、片方の瞳は狂気で笑いながら。

血に餓えた滅ぼしの吸血鬼は、その胸の狂気を抑えながら。

――滅びの詩を謳(うた)いましょう。

――黄泉の国へ届きますようにと。

――鎮魂の詩を。

――人々に奉げる、天使の歌声で。

――悪魔が笑っても、

――堕天使が笑っても

――私は、謳います。

――貴方達にささげる、最後の希望の詩として。

——滅ぼしを。

【１３１話】何が為の力【ラミア】（後書き）

オマケ―四二神名簿―　鎌名不明者は書いてません。一応四二番は重要なポジションなんでかきましたー

ＮＯ１　神堂真琴　狂気の番犬
鎌：死乃恐怖の鎌　魔眼：夢幻の終焉
ＮＯ２　水瀬歩奈実　知識の番犬
鎌：幻影の魔狼鎌　魔眼：追尾の狼
ＮＯ３　セイガ・アルウィン　狂気の番犬
鎌：操り人形の操作鎌　魔眼：狩猟の罠
ＮＯ４　エル・ミクトラン　知識の番犬
鎌：使用不可　魔眼：雷食いの獣
ＮＯ５　セシル・ラザ＝ミーチュ　狂気の番犬
鎌：変貌の魔鎌　魔眼：不可視の具現
ＮＯ６　稲川楓梨　知識の番犬
ＮＯ７　セイリ・テルテル　狂気の番犬
ＮＯ８　戸森灯　知識の番犬
ＮＯ９　蓮・リュウヒン　狂気の番犬
ＮＯ１０　アルエイルンシ＝エット　知識の番犬
ＮＯ１１　牧野愛　狂気の番犬
ＮＯ１２　ロイ・ウィングス　知識の番犬
ＮＯ１３　ルーメイ・エルレイシア　狂気の番犬　死亡
ＮＯ１４　エルチア・ローナンス　知識の番犬　死亡
ＮＯ１５　佐倉凛　狂気の番犬
ＮＯ１６　エウロパ　知識の番犬
ＮＯ１７　逆三日月光　狂気の番犬
ＮＯ１８　ロン・ミンチョウ　知識の番犬
ＮＯ１９　ロイアン・パティ　狂気の番犬

ＮＯ２０　森田明　知識の番犬
ＮＯ２１　伊織冬香　狂気の番犬
ＮＯ２２　仙波昭夫実　知識の番犬
ＮＯ２３　ペンチュウ＝ライライ　狂気の番犬
ＮＯ２４　アキラ・シナジク　知識の番犬
ＮＯ２５　伊達剛　狂気の番犬
ＮＯ２６　布施標　知識の番犬
ＮＯ２７　百合紫テナ　狂気の番犬
ＮＯ２８　湖成冬斗　知識の番犬
ＮＯ２９　氷柱譚證　狂気の番犬
ＮＯ３０　ティルスン・パーパル　知識の番犬
ＮＯ３１　然風太　狂気の番犬
ＮＯ３２　檻内春花　知識の番犬
ＮＯ３３　ミハセル・ルイス　狂気の番犬
ＮＯ３４　橋本剣　知識の番犬
ＮＯ３５　阿穂聖理　狂気の番犬
ＮＯ３６　狼迅　知識の番犬
ＮＯ３７　パピィ・ティンティク　狂気の番犬
ＮＯ３８　織色愛裟　知識の番犬
ＮＯ３９　ディストナル・ラ・ガンスロット　狂気の番犬
ＮＯ４０　朧三日月暗　番犬の天秤
ＮＯ４１　阿修羅　番犬の天秤
鎌：覇者の暴風刃　魔眼：帝の咆哮
ＮＯ４２　フェイ・ラフト＝ルージュ　番犬の天秤
鎌：双頭の蒼龍牙（氷、炎）　魔眼：調和の女神

【１３２話】何が為の力【井塔】

――■■様だ！

私を、そう呼ぶな。

――■■様がいらしゃったんだ！　もう大丈夫だ！

私に押し付けるんじゃない。

――■■様さえおらっしゃれば、この村も大丈夫だ！

くだらないんだよ、どいつもコイツも。

――■■■、お主は最後の希望なんだ。

なにもしない、無能な奴が言うな。お前はなにをやたっていうんだ？

――■■様さえおらっしゃれば！

だから、なんで私なんだよ……。

――たすけ……■■様……。

なんで赤の他人の為にためにわざわざ向うんだよ。

――勇■様……。

そんな目で私を見るな！

――なんで助けてくれなかったの？

私に非があるのかよ！　私は私なりに頑張ったさ！　なにもしない、出来ないお前等より頑張っただろ！

――勇者様。

私は、勇者なんかじゃない！

――そう、お前は勇者じゃない。荒(すさ)んだあの心、まさに魔族ではないか。

魔王が！　汚らしい目で私を見るんじゃない！

――お前は、独りなのだよ。

やめろよ……。

――お前は、孤独なのだ。

なにが言いたいんだよ。

――お前はこちら側なんだ。

触るな。

――父はまさに勇者であった。

やめろ……。

――父の心は主とは違って澄んだ空のようだったぞ？

私をあんなクソオヤジと一緒にくらべるなよ！

――父の後光を背負ってられるはずがない。

私は私だ！　アイツとくらべるな！　アイツのことなんか知るか！

――お主は■者ではない。

……。

――お主こそ、魔族の王に相応する。

わ、私は――私は――。

「――――――ッ！！！！」

飛び起きる。整然と整えられた布団を払い捨て無数の皺をつくる。荒い息で上体を起こしながら、大きく息を吸った後に、しずかにゆっくりと、吐く。その行為を3回、４回と繰り返す。次第に落ちつきを取り戻していくにつれて、今度は頭痛が酷くなった。

ズキズキと、脳が圧迫されるような痛み。

そして額に右手を触れた時に自分に包帯が巻かされているという

ことが気がつく。そして、気が付いたのは見なれない白い天井、そして整然と瓶に入ったなにかが陳列される、これまた白っぽいような棚。自分のいるのも白い布団。

周りを見渡す。

理解が出来なかった。

自分が誰で、なんでここにいて、それ以前にここは何処で、なによりも、あの“夢”はなんだということ。なにもわからない、それが何故かわからなかった。

なにも、わからなかった。

「あ、あ〝あ〝あ〝あ〝ぁあ〝あぁぁぁ――――」

両手で頭を抱えて布団に顔を埋め込むような体制をとって、彼女は叫んだ。聞こえたのは布団から漏れてすこし不気味になった獣の咆哮のような叫び声。それは徐々に断続的なものになっていき、その咆哮も徐々に短くなっていく。

頭が、痛い。

頭が痛かった。

再び荒くなった息。咽返るような強い薬品の匂い。苛立つ、無性に苛立つ。

頭に浮んだ言葉、それも何故か私に理由はわからなかった。ただ、“なんで私が”という無償な苛立ち。憎かった、なにかがわからな

い、わからない何かが、彼女にとってこの根源。溢れ出す憎しみの矛先。

無償に苛立つ。

その苛立つ元凶がわからない。

故に、更に苛立ちを覚える。

ムカツク。

ムカツク。無償に、何故か。

「大丈夫……ですか？」

刃の切っ先のような鋭い目。それが何時の間にかそこに立っていた少年を突き刺す。鋭い目は憎悪の色に染まり上げた透き通るようなビーダマのように綺麗な瞳。だけど、憎悪という曇りは油汚れのように、しつこくこびり付いていた。

今にも食って掛かりそうなこの少女を見て、この少年はニッコリと微笑んだ。

これが、井塔茂明（いとうしげあき）とエリナ・スワン＝エートの出会いであった。

＊＊＊

「やれやれ……」

将はその言葉を聞くと聞えない程度に小さく舌打ちをした。正直、将はこれ以上の魔力の消費を避けたかった。徒労なのも当然、だがなによりも――これ以上、魔力を消費したくなかったのだ。将は幼い時から片目を失明している。

オーディンが自分の中に宿っている。そう考えれば納得は出来た。単純な運命なのだと。そして、その魔力を宿し鏡を作って物体を写しそれを、脳にダイレクトに送る電気のような単純に思えて神経を研ぎ澄ます紙一重の複雑な術式である、視力と言うピントを両目を均等になせるなど、将だからこそ使えるようなものである。

目に見える、そういう風に脳に錯覚させることで脳が両目とも違和感なく映像を写している。。もし、魔力を尽かしたのなら、それは闇を見る事になる。片目だけで勝てるような相手ではない。

将はそれを重々招致の上だった。

だから、自然と出た舌打ち。

「この程度で、負けないよ――！」

「僕にだって負けられない理由はある」

アーサー、彼の顔が少しだけ曇った。その言葉の意味を噛み締めたのであろう。将を見る目つきが変わった。優しかった笑みが沈黙の笑みに。口もとの微笑を残しながら野獣のような目を向けて。将は、手にもった剣の切っ先を向ける。その先は、アーサーの咽を指

すように。そして、剣で半月を描き、右下で剣を構える。

剣を水平にし、上体を捻り足を肩幅に開く。

一刀一殺の構え。昔、自分が憎んだ人に教わった――切り裂く剣。

「スワン＝エート直伝、井塔守雲流剣術」

父の包丁捌きと、母の剣術を頭の中で結合する。

選び出した結論は――一撃必殺の太刀。その頭に思い浮かべる軌跡を――辿る！

踏み込み。浅くは無いが少し深すぎる――オーバースピードを抑える為に踏み込んだ足とは逆の、今の軸足となっている足で小さくブレーキ。軸足を持ち入り反転、先程自分が居た位置に真空の刃が爪痕を残した、敵に背を向けてる状態、そこから飛びあがりバク宙を決める。

そこから姿勢を低くして腕の力で反転、突き出した脚で軽く踏み込み、次に踏み入れる足で強く踏み込む。短く詰めた間合い、聖剣が煌いている、強い一撃と認識――だが、軌跡はまだ辿り終えていない――すべて、計算の内。

ポケットからありったけのパチンコだまを取り出して魔力を込める。無駄なく均等に、そして、なによりも繊細に。これは母の教え――。そして、コレからは――父の教えである。

「爆焔纏いて――」

「聖剣の極光――」

投げ出されたパチダマは爆破し煙幕をはる。強く煌く聖剣はその位置を安易に晒し出す。大気が乱れる――爆煙を払い、その一撃を振る――いかける。

その剣の軌道に、将はいない。

「疾風となせ！」

声が聞えたのは、背後。そして、圧倒的な魔力の圧力、それがこの剣に濃縮されている。煌きの度合いで言えばエクスカリバーに劣っている――だが、劣っていないもの、それは魔力のケタ。

「瞬迅閃光（しゅんじんせんこう）【爆嵐（ばくらん）】」

抜かれた剣閃。その閃光とも思える一太刀は的確に、アーサーの右腕を切り裂いた。見えたのは振り返った時のアーサーの呆けた表情。そして、噴水のようにおびただしい量の血液を噴出するアーサーの肩、そして、金属独特の音――。

エクスカリバーが、アーサーの手から放れた。

「オーディン、とんだ僕の期待外れだ」

「……これは……？」

その瞬間――そのアーサーは燃え尽きる。轟と唸る焔に纏われながら。その光景を見る将はあることに気が付かされる。それは単純なフェイク。

ザクリ。

そんな音を発てて、その剣は腹から突き出ていた。

＊＊＊

……井塔将――敗戦、か。

やれやれ、本当に誰も使い物にならない。

零亞ＶＳアーススネーク――阿玖零亞、圧勝。

駿ＶＳ三代雲雀――雲雀戦意喪失。

零時ＶＳ向井隆平――零時の覚醒。隆平の斬殺。

赤穂ＶＳ白璃――赤穂からくも勝利目前だが乱入者により戦意を喪失。

番田ＶＳ神路蒼譜――蒼譜の圧勝。

和也ＶＳ蒼き死――雨宮和也の覚醒、だがコントロール出来ず気絶。

宮鷹ＶＳ宮鷹竹虎――勝負するまでもなく負け。

レナＶＳ■■――レナの精神的な勝利。

■■■ＶＳロアン――闘うまでもなく制圧される。

将ＶＳアーサー――読み合いの末に敗戦。

　され、残された駒は、未だに沈黙を守る【ＷＨＩＴＥ　ＤＥＶＩＬ】と滅ぼしの吸血鬼の少年。そして、私というわけか。何時までも私が沈黙してるわけにはいかないとでもいうのだな。雨宮よ……。まぁいいさ、高みの見物をするのも時間の問題だ、過去にそうだったように雨宮たちは必ずここを嗅ぎつけるはずだ。ならば、私から出るのも、一興。

　いずれは、アヤツも動き出すであろう。ならば……そう、ここで動くのも悪くはない。

　定石に従うのもここまでとしよう。ここからは私の打ち方というものがある。

　さて、ゲームは始まったばかりだぞ？　もう2度と誰も守れなかった過去を見る必要はない。選択肢の数だけあるこの並行世界の彼方で、何度かあったことなのだろう、だが、この世界だけには――あるんだ。どの世界にもなかった――その力がある。

　数多の世界。そこで神堂真琴は常に死を選択していた。その並行していた世界で――とある支障が発生した。それが、神堂真琴の生存である。生残った神堂真琴が編み出した荒業――それがあるのかこの世界だけ――そう、“真・八式重力魔法”である。

　この世界の法則――“量子論”によりブラックホールの形成、そのブラックホールを入り口として別の世界の法則に触れることでその法則をこちらの世界に持ち出す。一般相対性理論を持ち出す事によって――ホワイトホールを生成する。ブラックホールとホワイト

ホールの双方を扱いこなす、それが真・八式重力魔法の正体である。

因果律を超えた極無に帰せす――最も最強に近い魔法だ。

神堂真琴が産んだ、この世に5人しか使えない魔法でもあり、普及はあしないであろう。ハイリスクハイリターンが多すぎるためだ。重力を扱う死神は多い、いや正確に言うならば重力魔法は死神だからこそ扱える魔法なのだ。

そう、その説明はあとでしようか――

全部、終わったその時にでもしよう。

「さて、はじまりのおわりをはじめようか――」

「お前は……！！」

静かに、私は歩み出す。傍観者はもう辞めたのだ隠れる必要などなかった。井塔将、彼には居てもらわないといけないのだ。だから、私は進むとしよう。とりあえず――目の前の雑魚を片付けてからだ。

『オディ・リュレイヒン！！』

「何故……！　貴様がぁ！！」

吼える言葉に、私が答える必要はなくなった。

「とりあえず、逝ってくれないか？」

約1秒――、いや、正確には一秒未満である、そうだなぁ。四捨五入をしたとしても0秒の域――その速さ、たかがこの男の命を奪うにはそれで十分だった。貫いたのは一筋の光。光は既に消え去り、

男の心臓があった場所に穴をあけただけ。

「さぁて、私は私で進むとしよう――救世の道をね」

＊＊＊

ねぇ、この子の名前どうしようかな？

まだ決めてない……？　まったく、貴方はトロいんだから……。

わ、私も決めてないだろ？って！　わ、私は――そう！　センスが良過ぎて決められないのよ！

えっ？　えーーっと、ピタエンテゴラスとか、ｅｔｃ…ｅｔｃ…か、可愛そうなものを見る目でみるんじゃないの！　だ、大怪獣ピタエンテゴラスって多分、凄いのよ！　そりゃもう、世界を3分で征服するくらいに！

……ダ・カ・ラ、そんな目で私をみるんじゃない！！

あ、貴方こそ――決めてないんだから同罪よ！

安静にしないとって――私を怒らせてるのは貴方が――パパが原因でしょ？

キャハハハ――顔真っ赤ー。

うーーん、男の子なのに男らしくない顔ね。貴方の遺伝？

怒ったら私みたいに恐いってどういうことよ！　ちょっと！　噛み砕くわよ！

謝っても遅い！　一応は■■だからそれくらいの体力は――ッ！！

む、無茶な、んかしてな――。

「だったら、こうしよう。男らしく前で戦って、仲間のためにならどんな逆境にも身を投じ、知略にも溢れた名前――」

ピタエンテゴラス？　ちょ！　冗談だから！　冷たい目で見過ぎだから。

「まるで“将軍”のようにね――。どうだい？　“将（まさる）”って名前で？」

――そうね、この子には頑張って欲しいわよね。シゲ――

「“将”ならなってくれるよ。エリナ。だって僕等の子だ」

――この時、智将は静かにこの2人に謝っていた。北欧の主神にして戦の神。現在、井塔将の守護霊のような存在の、一人の老兵が。

――幸せそうに微笑むこの2人、深深と謝った。それが聞えるわけじゃない、見えるわけでもない。そんなのも承知で、土下座すらもして謝った。

――老兵は――オーディンは、わかっていたから。

――幸せそうな2人の間に挟まれた、新しい生命（いのち）。

――その運命を、悟っていたから。

――負の螺旋（デフレスパイラル）の道を歩ませてしまうことになるから。

――どん底へと続く、その螺旋階段を。

【133話】STARNIGHT RAVENMEMORY（前書き）

星の夜　鴉の記憶

【133話】STARNIGHT RAVENMEMORY

そういえば――。

黒衣に身を包み。生気を失った目で壁に寄りかかっていた男は、ふと思い出した。10年ほど前のこっちの世界での思い出だった。あの頃は、輝いていたのかもしれない。だって、それもわからないんだ。

あの時の感情――。

自分でもよくわからないまま、流されていく。いつも問題をおこされて、後処理をすることばっかりで疲れる日常。それだけの日常なのに――本来あるべき日常よりも落ちつくことができた――本来あるべき自分でもなんでもないのに。自分は――。

今の感情――。

昔の自分なら振り払えなかった幻想を振り払う。だけど、未だに今の世界よりもあっちの世界が性にあってるような気がして。毎日が徒労だというのに、その徒労が悪くなかった。俺が干渉するようなことでもないのに介入して――ホントに無駄な努力をしていた。

――そうか。

黒衣の男は理解した。

たった一人。そう、たった一人の少女がそうさせていた。夜にある絶対無二の輝きとして、自分の月として。自分と彼女は似た者同

士で、互いに惹かれあってた。でも、そこには幾つもの運命が、隔てりがあった。わずかな可能性、もしかしたら、超えようと思っていたら超えられたのかもしれない。

この先に――俺は――。

この先、ずっと先。きっと、誰も知らない場所。誰にも知られるはずの無い場所。そこに、きっと自分はいる。そんな気がしたのか、この黒衣に身を包んだ青年は。

「約束――か」

青年は、小さく。そう呟いた。

＊＊＊

将が入院してから約1週間が経過した。

「おーい、将ー」

オレらが、赤穂先輩とちょっくら組んで――ってのもおかしいが。そんでドンパチやってた。その時は特におかしい事はないなぁとは思っていたが――。やっぱり、将の体長は悪かったらしい。つーか、将が遅刻する時点で本当に珍しいし、それに、ちょっと昼休みの間に学校抜け出して将を如月と探していたら、あら不思議だったりもする。

将は道のど真ん中で倒れていた。

将がそこいらのヤンキーに負けるわけねぇし、もし端がやったとしたのなら、それは些かおかしい。将に命に別状はなかったんだ。端が将とかいう危険因子を見逃すわけはない、たしかに怪我は酷かったが――命に支障をきたすほどではない。つまりは、端ではねぇってことだ。将も口をわらねぇし――ったく。

「ん？　また来たの？」

そんで、放課後に球技大会の練習やろうや。となった時に、将がぶっ倒れてそのまま救急車でここまで。そん時から将の入ってる大部屋はオレらの溜まり場になってるワケだが――。

「ッ！　テメェ……」

となりに立っていた如月が“その男”を威嚇する。オレも、如月もいささか因縁のある奴だった。過去に何度もオレと奴は殴り合ってるし、如月も同じなのであろう。中学校時代に『喧嘩最強といえば全国的に見ても雨宮かアイツのどちらかだろうな』とまで噂が発っていた。

たしかに、どんな格闘技やっても優秀な成績を治められるほどの実力はありやがる。ンなもんはオレから見てもわかる。身長を見ても如月よりも高くて２ｍはオーバーしてる。頭は角刈りをいつも決めてて――多分、オレなんかみてぇな普通の高校生に寝癖をたしたような髪と比べたら――って、自分で何をいってやがんだ、オレは？　格闘家にだっていろんな髪型はいるだろうに。

ま、まぁ、オレよかは一目両全でわかるヤンキーだ。うん、そうしておこう。ガラがわりぃし。

「雨宮に如月か――」
「テメェが病院（ココ）に何の用があるってンダ？ァ？」

ずかずかと如月は奴の――羽柴（はしば）のとこに進んで行く。羽柴が見下ろす感じになり、如月はそれを見上げて睨みつける。険悪なムードの中でオレは静かに将へ目を配ると将はにんわりと微笑んだ。どうやら、如月が思ってる事態ではないようだと見て取れた。

流石のオレも病院ではまずいからやめろ。そんな風に言う為に動いたが――。オレは見てしまった。そう、羽柴の足元、そこにはやたらと不釣合いな者がいた。長い間入院生活なためか病院の服を着込んでいる、２ｍ近くある羽柴の腹あたりくらいしかねぇ――。１４０ｃｍってな感じだと思う、そんな少女だ。それが、羽柴の足元にしがみついてる。

な、なんじゃそりゃ……？

オレはついつい脱力してしまい、腰をちょっと落とした。その時、腰すれすれに風が通り過ぎた。その次の瞬間に吹き飛ぶ２つの巨漢。そして見事な着地を決め、先ほどの小動物（羽柴の足にしがみついてた）を抱きかかえていた白衣の女性――。

ナース……だと？

「そこのでっかい２人！　ここは病院です」

ま、まさか、あの２人を飛び蹴りで……！？　オイオイ、マジっかよ……？

「な、何しやがるこのアマ！！」

いきり立つ如月。ビクっとついつい震えてしまった小動物。ああ、また白衣の蹴りがくるぞ――と、思いきや蹴りが飛んで来たのは思いにもよらぬ方向。白衣の方を向いた如月の後ろ――羽柴だ。羽柴秀が如月を蹴りつけた。

「愛華（あいか）を驚かせるな！」

オレと如月は聞くには2分間フリーズしていたらしい。

＊＊＊

「つまり、度々愛華ちゃんの御見舞いにくる羽柴が原因でベットは空き、そこに将が来て何時の間にかこんな状態になったわけだ。そういや、愛華ちゃんはたまに見た気がするな」

将の説明を受けて、とりあえずオレは納得する。ついでに愛華ちゃんには今年で１９になる兄貴がいるとかも聞いた。愛華ちゃんは１４歳――。そして親は夜逃げしたらしい。ヤバイとかに借金して――破滅した。兄と妹を置いて……。その話しにちょっとだけむかついたりオレはしてたりする、駿もそんな気配がした。羽柴に至ってはイライラが全開だ。

そこで心臓に持病のある愛華ちゃんは入院。その入院の費用を稼ぐ為にその兄はボロボロになってるらしい。羽柴も見たことないし、兄の話にいたってはこの水沢（みずさわ）ってナースが、いい加減本当にタバコをやめさせないと――だか、なんだか関係無い事を言っていた。

そこで将と羽柴、愛華ちゃんは出会い、話しをするようになった

と。オレと如月はほとんど学校を中抜けして昼休みまでここでたむろしてたわけで、ほんっと偶然に顔を会わせる機会がなかった。そんで、将の退院も間近にせまった土曜日に、偶然つか、本当はかなりの確立で会うんだが、やっとオレは羽柴に合ったというわけだ。

「……」

羽柴は静かに頷く。まさか、あの羽柴がこんな可愛い子と知り合いだなんて……。まぁ、他のヤツラと合わせたくねぇってのもテメーのメンツであるから仕方ねぇよな。まぁ、ヤンキーはメンツってもんがあるからな、そりゃそうだ。舐められるしこの子を盾につかわれるい、しかも病人だからストレスとかなんてもっての他だしな。

将も知ってんなら言えよ……。

「ったく。羽柴テメェ将に手ェ出してねぇだろうな？」

「ンなもんシラねぇな、雨宮」

「ンだ？　舐めてんのかテメェよぉ？」

静かに立ち上がり、ガンをぶつけ合う。この野郎なんも言う気はねぇか。それにこの子がいりゃあ羽柴は手をださねぇだろうな。いらぬ心配、それに将はそんなヘマをしねぇし。だが、念を押しとく、これは警告の意味で言った。

なんか仕組みやがったら容赦はしねぇという意味でだ。

如月も羽柴もンなことは理解してる。暗黙の了解に近い。

「まぁまぁ、和也。愛華ちゃんもいんだしよ……」

「カズヤ……？」

ンァ？　愛華ちゃんが微妙に反応したが……なんだ？　ふむ？　オレの勘違いだろう。つかカズヤなんてありふれた名だしな。そりゃ同じ中学の友達とかなんじゃねぇのか？　まぁ、そんなとこにしとくとするか。

オレはそのまま病室を後にする。如月も立とうとしたが右手を肩の上に挙げて制止を表すと、大人しく如月は座った。そして、オレは廊下に出る。そして、エレベーターに向う。

学校などとは違ってせい静寂に包まれる廊下。数々の部屋番を割り振られただけで中身の同じ部屋。教室のように中にいやがるやつらだけ違う。まるで学校みてぇなもんだな、なんて思ったこともある、ただココにはいろんな重みを背負ってるやつらもいるし、いろんな思いもある。ンなことはオレはわかりきってる。

廊下を歩く度に響くスリッパの独特の音。それがイヤに響く。静寂なこの世界――それに足音が聞こえるだけ。そう、オレはこれが苦手なんだ。薬品の臭いもそうだけど、病院の廊下は静か過ぎるんだ。余計な雑音がなくて、まるで、自分だけ外されてる感じがした。

やれやれ。と、オレは小さく呟いた気がした。自分でもよくわからないほど、自然にその言葉は出た。エレベーターの前にたち上を差すボタンを押す。ほどなくして開かれる扉。中にはまた誰も居ない。オレはそれに乗り込み、ボタンを押す。

扉は整然と閉じて――ゆっくりと稼動音をこの密室に響かせた。

途中で止まる事なくエレベータは最上階へと至る。開く扉、その先には誰も居ない。似た作りで似た世界を繰り広げる。オレは特に

気にせずにつかつかと進んでいく。目的は階段、そこは上に続く階段があってその先には、屋上がある。

階段を上がる。

扉に手をかける。

声が聞えた。

『か、看護婦さん！　ぼ、僕は――』

『え、江藤さん。こ、困ります――』

御取り込み中らしい。オレはンなことを無視して扉を静かに開ける。夢中になってる2人に気がつかれないように静かに閉めて、軽くジャンプしクソでかい給水湯の上にあがり成り行きを見守る。

アン？　軽くじゃねぇだって？　え？　あーー、まぁ、オレだから？　ちょっと待て、お前等なに納得してる。まるでオレが人間じゃねぇみてぇじゃないか。あ、そもそもオレは人間なんていえねぇーじゃん。第一死神の血混じっててレプリカって、死神の血が混じってるだけで人間っていえねーわな、そりゃ。

ンでもって、解説の雨宮さん。あの2人のご様子はどうですかーってな。2人とも見た事のある――そう、さきほど病室で愛華ちゃんが着込んでいた病院の服だ。もう一人はそりゃナース服を着込んでる、つまりは患者と看護師なのだろう。いや、そもそもそうじゃなかったらなんなんだ？

まぁ男の方は、車椅子だ。足にキブスしてるってことは足を壊したんだな。それで……あーあの看護師みたことあるな。たしかぁー

『大怪獣（だいかいじゅう）　飛蛇焔手醐羅統（ピタエンテゴラス）』だか言ってたような……？　つか、なんだよ大怪獣ピタエンテゴラスって？

つか、男の方――前髪で眼が隠れて無いか？　……ギャルゲー？　なに、この告白イベント。

「で、でも僕はもう抑え切れなくて……」

「わ、私困っちゃいます……」

イラッ。

なんかイラッときた。

「ぼ、僕は――その、えっと――」

「――――」

破空斬でも飛ばそうか？

＜駄目ですよ、ご主人＞

ちぇ……。つか、なに？　さっきまでのシリアスな空気をぶち壊し？　あんの二人――襲破牙龍閃（しゅうはがりゅうせん）をぶちかまそうか？　ん？　襲破牙龍閃がなにかだって？　うーーん、パット思いついた技の名前だ――きっと。

「本当にもう、抑え切れないんです」

「何が、ですか……？」

いやぁ。いつまでやってるんだろうねー。給水湯の上って冷たいんですけどー。

「目が、目がぁぁ…」
「邪〇眼……ッ！　大変！　ドクターを呼ばないと」
ひとこと言わせてもらおう。
「くっだらねぇー！」

小さく呟く。なんか男のほうが運ばれてった気がするけど邪気眼じゃしかたない。手をポケットに突っ込んで一つの箱を取り出す。『ＤＯＲＡＧＯＮ（ドラゴン）×ＡＳＨ（アッシュ）』というご当地もののタバコだ。特徴って特徴はない、長いわけでもないし短くもない、強いて言えばスカスカかもしれん。

その箱から一本だけタバコを取り出して咥える。気功術をコントロールし火を人差し指に灯しタバコに火をつける。軽く吸ったあとですぐに口から放す。クソ冷たい給水湯の上で寝転がる、空はいやに蒼く雲一つねぇような快晴。それが、無性に苛立つ。まったく心境と異なってるし、肌に照り付ける太陽はクソ暑い。

タバコを咥え直す。そして、思考に没頭する。つい一週間ほど前だった。そこからいろんな事が変わった。まずは、学校が休校になったりもした。そりゃ……あんだけ壊しちまったら仕方ない。今はやっと直った所で、明後日には学校が始まる。

つーわけで、学校がやすみなため、オレらも適当な時間にここに来れてる。基本は2時済んでから5時くらいまでだ。オレはあの馬鹿どもの世話もあるし、如月はいろんなバイトをかけもちしてる。時間帯的にそんな感じなわけだ。朝に顔をだしたのは今日がはじめてである――だから、まさか羽柴があんなことしてるとは思っても

居なかった。

紫煙を昇らせながら、オレは更に考えふける。学校とかの事ではなく、ちょっと身近なこと。

それは、ラミアちゃんは何か隠し事をしている。そしてヴァンとセフィリアが傷だらけだったのも気になるし……。ラミアちゃんたちも口を割らないの牙なんかスゲーやばい気配がしてならない。それにミヤの様子も最近おかしい気がする。そうだ、あの継坂先輩たちと会ったところだ。それが、アイツの何かを変えた。そんな感じがする。

刺し込む太陽光。それが眩しくてオレは、目を細める。

最後に――これが一番の悩みでもある。レナの嘘――ンなのは見抜いてるし話しはあの人から聞いたことで正しいはずだ。デーモン先生を疑うわけじゃない。ただ、オレには時間がない。だから、なんとかしたいのは本心だ。だが、オレが頭を悩ませてるのは違う――。

それは、昨日の出来事だった。

＊＊＊

オレと魅夜とミヤがゲーセンに居た。特に理由はない、休みの間暇だったから出かけただけだ。そうして、こうなった。どうなったのかと言うと、つまりだ……。

「２８連勝」

「和也……お前どったら格ゲーが得意なんや……！」

オレは来る者拒まずで格闘ゲームで遊んでいた。どっかで見たことある奴だったが奴に限ってンなことあるわけじゃない。『激闘列伝ファミリアバトル』とかいうこのシリーズの一世代古い奴だ。残念な事に最新の奴は鳥栖深には出てきてない。もとは、ＰＷＰ（プレイワールド・ポータブル）の作品であるが、あににくオレはそれを持っていない。つうか、最新作だとゲームのタイトル『四文字熟語（？）　ファミリア　〇〇』なコンセプトはそのままでタイトルが変わってるらしい。

そんなことは、どうでもよくて、オレの使用キャラは「ＦＵＭＩＨＩＴＯ」という魔道書が相棒な男性キャラだ。多少クセのある操作だが魔力のコマンド次第では凡用が効く。大太刀のデザインなんかも結構すきだ、日本で言う草薙剣みてぇでカッコイイ。つーか、あれーほんっとどっかで見たことある奴だな、この使用キャラ。

「和也、それ以上は危険だと思うけど……？」

魅夜はなんかに気がついてるみたいだが、とりあえず無視した。とりあえず、破竹の３０連勝を決めたところで疲れたんでやめた。実際、手応えのある奴が居なかったのが本音だ。まぁ、オレの格ゲーの師匠が師匠で悪魔の１０００連勝を決めた男だからな。実際オレなんかが手も足も出ないくらいに強い。

そんなこんなでひときしりゲームで遊んだところ一休みしてる時にミヤがはなしかけてきた。

「そういや、咽乾かん？」

「オレはペプシな」

「私はオレンジジュースね」
「またんかい！」
ミヤが抗議した。
「なんだ？　金は払わないぞ」
「さっさと行って来なさいよ」
「じゃんけんやないん？　フツー」
まぁ、一理あった。
「よし、じゃんけんで負けた宮鷹が買いにいくんだぞ」
「そうね」
魅夜が頷いた。どうやらオレの意図がわかったらしい。次にオレがとる行動はミヤに気づかれない内に実行すること。
「じゃーんけーん」
「へ？　ちょ、まっ！」
「ぽん」
オレ　グー　魅夜　グー　ミヤ　パー
「いえーい」
『ちぃ』
「じゃんけんポン」
オレ　グー　魅夜　グー　ミヤ　パー

「2連勝！」
「くっそー」
「じゃーんけーん　ポン」

オレ　グー　魅夜　グー　ミヤ　パー

「3連勝！」
「いい加減負けろ」
「まったくよ」
「じゃーんけーん　ポン」

オレ　グー　魅夜　グー　ミヤ　チョキ

「NOォォォオオオ！！」
「よし、買いに行け」

オレはミヤのケツを蹴る。だがミヤは振り返り抗議する。

「俺勝ってたやん！」
「オレは負けたミヤがと言ったんだが？」
「そうよ、男なら潔く行きなさい」

つまりだ、負けたミヤ限定のじゃんけんだったわけだ。

「負けた和也と魅夜はどうなるんでしょうか！？」
「黙れ」
「ルール外よ」

猛抗議なミヤにオレ等が同じに言う。因みに現在のミヤは宙を舞

ってたりする。理由は簡単。オレと魅夜がグーだったからだ。途中から気がついたら殴ってた、もちろんその為にグーだった。まぁどうせ猛抗議に来るだろうと思ったから、グーだった。

「あ、あんたら、鬼っすね！」

「いいから行け。因みにペプシはペプシだがペプシマンが載ってるペプシだぞ」

「果汁７７．７％じゃないと許さないわよ」

因みにペプシマンなんて作者がつい最近思い出したものだ。たしかそんなの居たよなぁーって。因みに果汁７７．７％とか魅夜のリクエストはひでぇ……。悪魔だな。まぁ、オレのもたしかもう売ってないはずだし。

「問答無用っすか！？　そして何！　その無茶苦茶なリクエスト！」

「買ってくるまで戻ってくるなよ」

「０．１％でも間違えたら、もう繁栄できないように噛み千切るわよ？」

当然ように反対するミヤにオレ等はまた殴り飛ばしておく。そして吹っ飛びながらミヤは叫んだ。

「あんた等は本当に鬼だぁあああ！！」

「アァ？」

「ァン？」

地面に落ちたミヤを踏みつけながらオレと魅夜が脅す。ミヤは硬

直しそして地面にへばりつきながらこう叫んだ。

「あんた等、本当に御似合いっすねぇ……アハハハ」

乾いた笑いだった。オレは容赦なく足に力を入れた。ミヤがゲーセンの通路のど真ん中で倒れていたのでオレはとりあえず何食わぬ顔で私服警察にスカート覗き魔として引き渡した。まったく、最近の若者はこまったものだ、あの金髪陰陽師め。

そんなこんなで、自販機からお茶を買ってオレらはベンチで一休みした。ミヤは恐らく戻ってこないだろう。本来ならオレはゲーセンに寄る気なんてなかった。オレはここでは子供からお歳寄りまで顔の知れ渡ってる悪名ばっかの不良だ。つまり、いろんな目で見られるわけだ。侮蔑の目、怨みのこもった目。そんな視線にオレは曝されてる。

もし、だ、オリジナルの“俺”が帰って来たら……こんな目でみられるとどうなんだ？　これは、全部オレの悪い行いが原因でオリジナルには非はない。悪いのは何時もオレだ――。そう、悪いのは何時だってオレ――レプリカの方なんだ――。

「和也？」

「ん？　あぁ」

ちょっとだけ意識をはずしてたらしく、怪訝そうな声音で魅夜はオレに尋ねてくる。オレの顔と向かい合って、大きく勝気な目はちょっとだけ、潤んでて……最近見てなかったからよくわかるほど、彼女の特徴的なポニーテールの長さが違う事に気が付く。頬をすこし紅潮させて、間近で見るとよくわかるほどに整っている容姿、手入れに余念が無いような白い肌……正直、ヤバかった。理性が吹っ

飛びそうでもあった。

「魅夜…」

「ん？」

やっと発した、理性の言葉。

「髪、少し伸びて来たんじゃないか？」

「和也……そりゃ伸びるわよ……。そろそろ志穂さんとこに行こうかなって思ってたの」

そう言う。どこか、嬉しそうに魅夜は声を弾ませる。そういえば、オレは滅多に魅夜の喜んだ顔を見たことがなかった。何時もは結局口喧嘩して、何時の間にか仲直りしている。中学の時なんてまともに顔を見た記憶なんてない、頭に浮ぶのは如月に将、羽柴とかのヤンキーの顔。そして、現在行方不明になってる親友の顔。それだけだ、魅夜の喜んだ顔なんてなかった。逆に、悲しそうな顔でけが脳裏に今更再生された。

高校になって――オレは見たことがあるだろうか？　魅夜のこんな笑顔は？　ああ、そうだ――入学式の時にも合格して喜んでくれたな――オレなんかが魅夜と同じ高校に通う。幼馴染という関係、腐れ縁が続いた。同じクラスだってわかった時も喜んでいたような気がする。

それから、ぱったりと途絶えた。オレの頭の中にはレナの笑顔が大半を占めていた。レナと過してる日常で少しふくれっつらな魅夜がいる、一緒に笑ってる魅夜もいた。でも、笑ってると喜んでるは違う。そうだ、オレは見たことがない。なんか結構長い間、まったくもって。

「そうか……」
「うん。でも意外だったなぁ、和也が気がついてくれるなんて」
そんな小さなことでコイツは喜んでる。
なんで、オレはこれまで間にそんな事が出来なかったんだろうか？
オレはなにをしてたんだ？
そうだ、オレは――レナと日常をすごして来た。たまにレナの好物なんか出してやると喜んだ。屈託のない笑顔で、本当に子供みたいな奴だとつくづく思ってた。だから、その顔が見たくてオレは頑張ったのかもしれない。それに、そういう事の方がオレも楽しかった。
そうだ、オレは――オレは多分――。
「あ、そうだ！　和也！」
「ァ？」
弾んだ魅夜の声。それにオレは思考を集中させる。
「そういえば明日って御祭りだよね？」
「ああ、そういえばこの時期だよな、嵩波神社の祭りって」
そうだ、鳥栖深の3大行事の一角である、ここ唯一の神社で執り行われる祭り『星黎夜大祭（せいれいやたいさい）』ってなものがある。3大行事は他に『桜龍聖誕祭（おうりゅうせいたんさい）』って行事がある。それなら2大行事だろって？　まさにそうなんだよ。だけどな聞いた話しによると、鳥栖深が出来て間

も無い頃に一番最後に出来た大きな行事があるらしい、名は――』
残酷な天使の微笑み』どんな行事か、なんてしらない。ただ、名が
存在するだけの行事だ。

そんな感じで執り行われてる。

その一角の星黎夜大祭はここ唯一の神社、嵩波神社でおこなわれ
る大きな夏祭りである。

「奏（かなで）さん、ほんっとにキレーよねー」

うっとりとした声で、魅夜が言う。奏さんとは神社を切り盛りす
る女性だ。正直に言う、べらぼーに綺麗だ。巫女服姿を前に見たこ
とがあるけど……オレってそんな属性が無いのに酷く心臓が荒れた。
恐らくミスコンに出ても優勝は確実なはずだ。

「まぁ、聞いた話しによると奏さんって過去に男にフラれたらしー
ぞ？」

「は、はぁ？　嘘！？　あんなキレーな人だよ！　ここに住む女性
であの人に憧れを抱く女性ばっかだよ！？　それに男だってありの
ように群がるような人だよ！」

うお！？　恐いって！　顔が近いって！！

「なんでも、その男には好きな人が居たんだとよ！」

「二股かければいいのに……。でも、おかしいよね？　そんな人な
ら街でも有名になってると思うけど？　奏さんがフラれた話題なん
て奏さんの親衛隊が血眼になって探すはずなのに」

うっわーすっげー想像できる。つうか、親衛隊なんて鳥栖深の１

／3はいんじゃねぇのか？　老若男女問わずに絶大な人気があるし。つーか、オレが知ってる情報はあと2つあったりもするが魅夜が発狂しそうなので言わないでおく。オレは適当に相槌を打って、その思考を遮断する。

『その男は、その愛する人を殺した』

『その後、男が姿を表した事はない』

「それで……。星黎夜大祭がどうしたって？　つぅーか明日じゃねぇか」

「だって最近部活で忙しくて和也に会えないもん」

ガキかお前？　と、思ったが口に出さない。口に出したら殺される。

「――ない？」

「ァ？」

ブツブツとなんか言った気がする。だから、オレは聞き返してしまった。

「明日にでも一緒に行って見ない？」

そう、このひとことが――全てのはじまりだったのかもしれない。

―？？？―

雨は容赦なく体温を奪っていく。

ずいぶんと忘れてた、鬱陶しく生暖かいと思ってた。その雨がこんなにも冷たいなんて。肌に感じる冷たい感覚。ああ、鬱陶しい、さびぃんだよ……。

「……」

そんな目でみないでくれ。そんな目で俺を見ないでくれ。俺は――俺が、やろうとしてることは決して許されない。ああ、そうかこれは“断罪”なんだ。過去に積み上げた罪、生残る為に積み上げた屍、それらを精算する時なんだ――ああ、なんでこんな事になったんだろ？

俺は……。

なんで……。

こんな場所に……。

こんな、思いなんて……。

知りたくなかったのに……。

無駄だって、運命だって……。

もう、言い聞かせるものか！

「――」

名を、呼ばれた。決意は、したんだ。俺は――たとえ、忘れられても構わない。だから――！

「――」

言葉が、次第に消えていく。ハッきりとしなくなっていく。そして、次に聞えた声は俺の意識を完全に目覚めさせた。

「これで、君は迷わなくていいだろ？」

「ま――」

頭から、何も無くなった。

「あす、か……？」

ただ、広がって行く紅い水溜り、いや、紅い花弁が広がる。その開花した大きな花の中心、満開に広がってく花のめしべでもあろう箇所に伏す、彼女。その後ろに居る男を凝視するしかなかった。黒い剣、黒い服、見覚えのある、顔――憎かった相手の正体、そしてその男は、彼女を、切った。

ダレを？　ダレが？　ソイツは　どう　なった……？

「真琴、迷う事はもうないだろ」

「……」

飛鳥を切った　飛鳥は今、血が止まらない肩から腰にかけて傷が深い……助からない……？　え？　はは、それってどういうことだ？　なんで、この男がそうなるんだ？　イヤだ、やめてくれ……俺は……！

「ぁ……」

なんで、口を開いてくれないんだ？

「ああ……」

なんで、俺はここにいるんだ？

俺は、誰なんだ？

「躊躇（ちゅうちょ）するな」

「うるせぇ！黙れ！　なんだよ！　なんなんだよ！！　飛鳥、今連れてく、急ぐ、だから！！」

死なないでほしかった。ただ、それだけだった

「躊躇（ためら）うことがあるか？」

「うっせぇ！　黙れってのがわかんねぇか！！」

抱きしめる。体温は著しく冷たい。もう、死んでるかもなんて思ったりもした、でも息があることがわかった。それだけで、嬉しかった。早く行こう、こいつはあとで殺せばいい。だから、今直ぐにでも病院に行こう。

「聞えないか？　君も死神なら聞えるだろ？　この街から数々の消防車の音が聞えるはずだ」

無視だ。耳を貸すんじゃない。

「もし、病院が炎上したとなればどうなるかね？　いやな、偶然で」
「――――！！！」
耳が痛い。
「君にもう選択肢はないんだよ」
聞きたくない。
振り返った時、もうアイツは居ない。ただ、この公園の入り口に――誰か居た。見覚えのある顔だ。顔色が青褪めてる。そして、血相を変えて近づいて来る、傘を捨てて、そしてソイツは俺を見た。親友を殺されたんだ、そういう目で見ても仕方ないよな……。
「どいててくれ……」
俺は小さくそう呟いた。
「――」
何が言いたいか、わかってるつもりだ。アイツが病院にと言わなかっただけでも俺はちょっとだけ救われた。無駄だって、最初からわかってた。なら、やる事は一つしかない。俺は、ソレを振り下ろした――。

＊＊＊

「嫌がらせ、か？」
俺は……寝てたのか？　ああ、酷く疲れたのに寝たりない。

今更、こんな夢をみるのか……。

「……俺は、どんだけ断罪したんだろうか？」

暦（こよみ）に書かれた赤い丸を見つける。懐かしい記憶が蘇りそうになる。

頑張ってたんだよな……。俺は、どうしたらいいのだろうか？

長い夢から覚めて、俺は……今更どうしたらいいんだか。もう、考えたくない。

「最低だ……俺」

わかりきった事を、俺は呟いていた。

【134話】STARNIGHT RAVENPENALTY（前書き）

星の夜　鴉の罰

【134話】STARNIGHT RAVENPENALTY

……祭りかぁ……。

正直、オレは即答が出来なかった。だって、そんなもんだ。祭りとなればオレも動き難いっていうか迷惑になるし、それに魅夜の奴は……オレを通して俺を見てるようなもんだ。頭では理解してても、多分、アイツにも譲れない感情ってのがあるんだよな……。

咥えていたタバコを何時の間にか短くなってる。正直、吸い足りなかった。基本オレはめったにタバコを吸わない。たまに、タバコが吸いたくなるから吸って終わりだ。レナとかと会う前はそういやよく吸ってた気がする——ああ、そうだ、オレは苛立ってたんだよな、寂しかったとも言うのかもな。

じっちゃんが居なくて、静かになった家に。

気苦労かけた、罪悪感はないといっちゃ嘘になる。

「クソ……」

短いタバコを火の付いたままで投げ捨てる。なにかが苛立ってた。なにかはよくわかんない。だから、余計に苛立ったんだ。星黎夜大祭……何年も行ってないな……。オレが行っても恐がられるばかりだろ？　みんなが楽しんでるってーのに、そりゃひでーことだな。オレが行くような日の当たる場所じゃねぇんだ……。

『認められたいのか？』

そういうワケじゃない。

『だったら、どうして欲しいの？』

お前等が関わる事じゃねぇだろ……。“俺”も“僕”も“オレ”に関わるな。混血と混血の移植でたまたま産まれた存在が……。オレは、オレだろうが。お前等には関係ねぇんだ、話しかけるなってアレほどいっただろうが。

『なら、好きなだけいじけてろクズ』

『……。』

……まだ、変わったことが本当は一つあった。それはオレの“人格”についての話だ。オレが気絶したあの時、オレは“俺”と“僕”にあった。精神を仲介させる鎌が作り上げた世界で。知っての通りオレは“俺”のレプリカ。存在しないもう一人の死神と人間のハーフだ、それでオリジナルの心臓を移植させられたことにより、稀にある現象、それは多重人格障害……だか言ったか？　つまり自分じゃない人格が出来るんだ。

更にオレはもっと稀にある現象というか事情があった。１／２ｘと１／２ｙでハーフとして存在してたオレ、同じく１／２ｘと１／２ｙの存在の俺が合わさる。それが合わさったことによって２／２ｘと２／２ｙという答えになる。つまり１ｘと１ｙだ。仮定の段階でｘを人間のオレ、ｙが死神としてのオレというワケかたに偶然なり……。つまりは、オレは三重人格というわけだ。もともとある人格は残されてるらしいな……。

人格を変更することも、オレが望めば勝手にあいつらが出てきてくれる。でも、腑に落ちない点がある。オレはまだ、もう一人の人

格を保有しているかもしれないということだ。いや、なんとなく、ソイツがいそうな感じがするだけだ。オレや“俺”でも“僕”でもない人格がどっかに存在してる……そんな感じがする。

ただ、それだけの事だ。それ以上でも、それ以下でもないんだ。オレはオレだ、レプリカという役目はオレで十分だ。

――ちぃ。何をオレは葛藤してんだ！　くだらねぇ！

苛立ってる自分が情けない。なににオレはむかついてんだよ……！　クソ！　ああ！　ムカツク。

「雨宮……くん、じゃないかい？」
「ァ！？」

殺気を込めてオレは言い放つ。聞えたのは下、タイルの屋上に立ってる一人の童顔の――青年。どこか、将ににた感じでタレ目だ、優しそうなオーラが溢れ出してる。その人の手にはタバコが握られてた。多分、オレが投げ捨てたタバコだ。別に咎める目じゃない、この人はオレも知ってる人だ、将の親父さん――井塔茂明さんだ。

「シゲ……さん？」
「やぁ。久しぶりだね」

シゲさんはやさしく微笑んだあと、片手を軽く挙げながら……そう言った。

＊＊＊

『僕は、将に怨まれてるんだ』

……。怨まれてる、か……。

オレは廊下を歩きながらちょっとだけ、シゲさんの言葉を反芻させた。最近は頭が痛くなるようなことばかりだ。誰にだっていろんな事情があるのは十分にわかってる、けどそんなの関係なくオレは楽に過して居たかった。

もっと昔みたく、オレや如月、将で馬鹿やってたようなころにでも、レナとか連れて、いろんな事情を捨て去ってもっと楽に生きたかった。背負うものがあるんだ……オレも、みんなが。わかりきってたことなのに……やっぱ、人間って楽にしたいもんなんだな……時間はもう昼時。十分歩ける患者で廊下が賑わってる、食堂に向う者、病食を配膳する看護師が入り乱れる廊下……。オレは、不思議と突き刺さる視線を受けながら流れに従うように一つの病室に戻ろうとしていた。

そう、オレは――奴に会うまでは。

桐谷竜司（きりたにりゅうじ）。奴は、その名乗った。

「その鎌、」

『僕が頂くよ。何れ』そうすれ違いザマに聞えた。ただ、すれ違って名乗られて、そう言われただけ。それなのにオレは――なにを感じたんだろう？　ただ、いいようのない感じを覚えた。振り返ったら、そいつはもう居なくて……。

オレは手に脂汗を掻いていた。

神路蒼譜、アイツの名をオレは思い出していた。奴に近い気配を、その桐谷竜司は発していた。いや、近いというよりは、もっと次元が違う。なんだ？　なんて言えばいいんだ……？　言葉が、思い浮かばない。

ただ、わかったのは……明らかに鎌は脅えていた。問いただすか、どうか考えた……けど、オレは問いただせなかった。オレはアイツに係わりをもちたくなかったんだ。ただ、圧倒的にその意見にオレの多くが賛同していた。だから、オレはそのまま歩いた。

恐怖を押し隠しながら。

「遅かったな、和也」

部屋に入って開口一番。如月がそう言った。オレは小さく頷き椅子に座る。将が飯を食ってた。病食らしくそんな美味しくなさそうなバランス重視な食事だ。質素というかなんというか……。つうか退院間近な健康体がよう病食でいいもんだよ。

「羽柴は？」

「帰ったよ」

オレの質問に応えたのは駿だった。聞いておいてオレは駿の話しを流す。個人的に羽柴が帰ったつーことは愛華ちゃんがなんかいろいろ立て込んだってことなんだろうな。愛華ちゃんのベッドにも愛華ちゃんはいない。羽柴の奴……もし愛華ちゃんのことバレたらだおすんだよ……。ったく、悪い人達に狙われないといいがな。羽柴だってオレと同じで色んな因縁を作ってるからな……。ったく、心

配事を増やすんじゃねぇってんだよ！

乱雑に後ろ髪を掻きまがらジト目で将を見る。正直、シゲさんのはなしを思い出さなかったと言ったら嘘になる。だけど、オレは気にしない事にする。将はオレらの中だと一番大人だと思ってるけど、中身は同じだった。ただ、家庭の境遇でグレただけ、オレや如月となんら変わりはないんだ。

「どうしたのカズ？」

「いや、普通に病食じゃなくてもいい奴が、病食食うなんてな。ンな美味くねぇだろ」

呆れ半分、冗談半分でオレがそう言うと、将は一旦箸を置いて口ン中にいれてたものをよく咀嚼して飲み込む。そして、さも当然のように言う。

「カズ、僕も駿だってココじゃ有名だよ。無駄にパニックになせるのも悪いからね」

オレはそれに何も言い返せないでいた。ちょっとおふざけが過ぎたオレら3人だし悪名ばかり流れてるようなもんだ。それがこんな病院でさも当然のように食事してる、多少の問題は起こるなんて目に見えてる。

だから、将はそんな選択をした。オレでもたぶん同じ立場ならそうやってたと思う。昼時だってのにオレらが病院で食事をとらないのも似た理由だ。オレの沈黙をしばらく見て将は小さく微笑んで食事を再会させた。

如月も妙な沈黙を続けてる。そして、ケータイのバイブの音。如

月の方から聞えた、オレは視線だけ動かすと如月はあきらかに動揺した顔で出て行った。なんなんだ……？　アイツは？

「どうしたんだろうね？　駿？」

「さぁな？」

残されたオレらは如月の慌てぶりに呆然としていた。

＜……。＞

鎌の様子もおかしい。まだ、なにかに脅えてる――まぁ、何かってアイツだよな……。桐谷竜司って言ったっけか？　なんだったんだ？　アイツは……。ちぃ、うだうだ考えるのはやっぱり性にあわねぇ……どうせ、オレと奴はイヤでもぶつかんだ……！　それなら……オレは！

打ち負かす。奴を……。そして、聞き出す。それだけのことだ……。

「カズ？」

「なぁ、将」

無気力、そんな状態になりながらオレは将に言う。聞きたい事があった。

「強くなるにはどうしたらいい？」

単純な、でも複雑な想いの入り乱れた言葉だった。“強くなる”それはとっても簡単な事、でもとても難しい事だ。強くなるって定義で難しい、単純なパワーアップ、そんなんじゃ意味がない次元で

オレらは戦わないといけないんだと思う。特にオレみたいな奴は……精神的に強く、肉体的に強くても駄目なんだ。

「強く、なりたいなら鍵はその鎌じゃないの？」

「足りないんだ……もっと必要なんだ」

そう、あの時――薄れる意識と何も考えれない怒りが支配したあの状態の時。獰猛なあの力みたいに。本当にあんな力が自分に秘めてる――いや、オレの力じゃない。“俺”でも“僕”でも誰でもない。あのわけのわからない力。あれを使いこなせたら――もし、それなら、もっと上にいけるんじゃないだろうか？　オレが求める『強さ』の意味で。

爪が手に食い込むのがわかった。自分が焦ってるのもわかった。

だから、将は呆れた口調で言ったんだと思う。

「気を張り詰めすぎだよ」

見透かした様子で。

「カズが何を見たのかは知らないよ。だけどさ、カズはカズらしく強くなっていこ？」

「――絶えれるかねぇ？　オレ」

おどけた口調で、そう言った。でも、本心だって将は見抜いていた。だから、将はそのあとに何も言わなかった。言ったら多分それはいらない励ましとか、偽善なんだ。それを将は理解してるから、何も言わないでくれた。それだけだ。

＊＊＊

病院を出て、如月と別れてから。オレは商店街をぶらぶらしていた。特に目的はない、だからぶらぶらしてた。すると見覚えのある黄色い頭が出て来たのでとりあえず殴って見た。

「ぐぼらぁ！？」

和也は　６００の経験値を手に入れた　和也はレベルが上がった。

てきなことになった。おお、パワーアップしたぞオレ！

「なにすんねん！　和也！」
「消え失せろアホ」
「誰がアホやねん！」

お前だ、お前。

とりあえず、通りがかる人々の視線が痛々しい。それがオレにも向けられてるんだ。クソ、このクソ金髪陰陽師め……。

そういきなり現れたのは昨日オレが殺人未遂の容疑で警察に差し出したパンツ一丁が流行ファッションと危険な事を豪語してる男。宮鷹秀一だ。

「ひど！？　なんやオレの扱い方変やないん？」
「ツッコミをひとまとめにすんじゃねぇ」

とりあえず顔面を蹴ってやる。気色悪い悲鳴を上げて仰向けになるミヤ。その鼻血を垂らしてるイケメンにオレは最小威力の針鼠を放ってみた。

距離もほとんど無かったのでいい感じに穴だらけになった……服が。肌も一応は焦げてるが大したことはない寧ろ治療なんだ。そう、荒治療とかいうだろ？　うんうん、世の中の底辺みたいな男にまで気を配るなんてオレは本当に心優しい人だ。

「何処がやねん！」
「なんでやねん」
「そうきましたか！？」

起き上がり速攻でツッコム。流石ツッコミといいたいが、ツッコミうっぜー。つうか口に出てたんだ。しゃあない、もうちょっと遊んで見るか。どうせミヤだし。

「ちゅうかなにしてくれはんねん！」
「荒治療だ。治療費１２０円」
「ジュースたかる気かいな！？」

ち、使えないクズだ。お前、それは自分の存在価値の半分を否定してるぞ。いや、自分の存在価値の全てを否定している。可哀想に……。お前がオレの無料でなんでも出て来る自販機じゃなかったら一体なにになるっていうんだ……。

「なんやねん、その哀れむ視線は！」
「いや、すまん。お前ほど哀れな人は始めてでな。で、お前誰だっけ？」
「悪魔に魂渡してませんか！？　アンタ！」

ミヤ、全力のツッコミ。それをオレはグーで殴り飛ばす。うん、デジャブだな。昨日かいつだか似たような光景を見た気がする。だって失礼だろミヤの奴、初対面なのにアンタとか言いやがるし、悪魔に魂渡してるまでいいやがるんだ。当然、天罰ものである。

宙を舞うミヤ、指先に氣を集中させるオレ。

指鉄砲でミヤを捕らえ左手を肘に添える、指先で球体を成すその塊、それはどんどん膨張していきバスケットボールの7号ほどの大きさにまでなる。7号つったら大体８０ｃｍくらいだ。いや、ぶっちゃけると７５~７８ｃｍほどなんだがな、訳８０ｃｍだ。当然のことだがそのまま８０ｃｍの球体じゃない、球体の周囲が８０ｃｍというわけだ。

卓球の球みたいな大きさで放つ氣丸とはワケが違う。氣丸派生型の針鼠と対を成す技であろう。そういえば初公開だったな。まぁいいや、貫通&破壊力の氣丸や貫通&ホーミングの針鼠とは異なる性質だ。いわば、高質量&破滅の最大の威力を誇るものだ。

因みにこれは手加減なんてできん。

重力に従って落下するミヤ……。さよなら……。

「重氣弾（じゅうきだん）！」

放たれた危険な氣の塊は見事ミヤに命中し吹き飛んで行った。まぁ、ミヤだし無事だと思う。実際に“重氣弾”は不完全な技だったから生きては帰ってくるだろう。そういえば、ミヤはオレにそんなようだったんだろ？　まぁ、ミヤのことだからンな大した話しじゃ

ないだろう。

まぁ、ミヤは放って置いて帰るとするか……。そう、思って足を進める。視界には走って我先にと進んでいく子供らがいた。祭りに向ってるんだと思う。オレは足を止めてた、祭りに行くか行かないか決断はあっさりとしたのかも知れない。

魅夜には、悪いけど……やっぱ、あんな幸せそうなヤツラの邪魔はしたくねぇよな。そう、思って断わろうとした時、オレの視界に奴が入った。でも、一瞬でハっきりとはしてない。だけど、間違いない。こんな真夏で黒ローブ、そしてあの見覚えのある顔――アイツだ。

アイツしか、いない。

最強と称えられる死神。神堂真琴。その男はゆっくりとオレに近づいていく。そして、目の前にその男は立っていた。今ならハっきりとわかる、この男の計り知れない実力が。オレがちっぽけに見えてしかたないほどに、魔力に魔法に関われば関わって行くほど、相手の、特に魔界のヤツラの実力がわかる。ハっきりとわかった。

強い。

「代わってないな。ちっとも」

「……」

コイツは見抜いてる。強くなったのはオレじゃなく鎌だって。

「神名（かんな）はまだ言えない様子だな」

「か、“神名”ぁ？」

＜“鎌の意”です。ご主人にわかりやすく説明すると、進化みたいなものですね＞

鎌の進化……？

「レナに渡して欲しいものがある……」

「ンなもん自分で行けよ」

唐突に切り出された本題をオレは切り捨てる。そりゃそうだ、なんでオレがメッセンジャーボーイなんか、しかもコイツはレナに近づけない奴なんかじゃねぇ。それなのにオレがやる必要はない。それ依然に、レナが喜ぶだろうよ、こいつが来ると。

ちッ！　なんで、オレがそんな奴の言う事をきかねぇといけねぇんだよ。日本は縦割り社会だとかなんだか言うけどオレには関係ねぇ。

オレの返答を聞くと、この死神は顔色一つかえずに、そして、何事もなかったかのようにオレの横を歩く。無性に腹が立つ。何もいわねぇってなんなんだよ？　クソ、相変わらず何を考えてやがるんだよこの男は？　気にくわない。

「わかった、ならば別に構わない」

「待てよ」

すれ違いざまに、そう聞えた。オレはゆっくりと振り返り苛立った声で言う。自分でもなんでそんな苛立ってるのかわかんねぇ、でも、たまたまその矛先がコイツに向いただけ。目を鋭く、どこか殺気を込めて、そう言うんだ。

「なんでテメェがここにいんだよ？」

神堂の野郎は振り返らない。だけど解答は返って来た。

「墓参りだ。予定外の奴のも増えたがな……もっとはやく行ってやるべきだったんだ」

「……お前、」

オレの言葉は続かなかった。オレが言う前に神堂の姿はなくなっていた。賑わう商店街でどこかオレは一人ぼっちにされた、そんな気がした。アイツはこれらどこに向うんだろうなんて考えもした、墓参りにはおかしい時期、そして死神が墓参りとは微妙にシュールな光景――でも、違和感なんてなかった。オレが想像してた死神とは、オレの知ってる死神はかけはなれていたから。

人らしいんだ……、オレは、なんで死神を人ならざるものなど考えてたんだろうか？

……馬鹿みてぇだな、オレって。

「ほんっと、今日はひでー日だな」

＊＊＊

守れなかった。でも、護れた。

個を守るか、

多を護るか、

俺には決める必要があった。

俺は、守りたかった。

なのに、守れなくて、俺は護った。

なんで、護っちまった？

なんで、守れなかった？

決めたはずなのに。

そう、決めたのに……。

ああ、そうか、俺は『守る』ことなんて出来ないんだ。

なのに、『護る』って事しか出来ないんだ。

個を守るには多を犠牲にする。

多を護るには個を犠牲にする。

そう、俺は大勢によかれと思って行動するのが性にあってるんだ。

個のために多を犠牲にするなんて馬鹿馬鹿しい。

そう、思ってたじゃないか。

何時だろう？

何時からなんだろう？

ああ、出会ってからだ。アイツと……。

守りたかった人。

『護った』中に入らなかった、彼女。

俺は――情けないな。

本当に……。

罰を背負って護るしかないんだ。

罪を背負って守る事は出来ない。

クソッタレ……。

『まこ、と……』

だから――

『――――』

どうか――

『真琴』

切に、俺は願う。

『さよなら』

もう一度、俺の前で微笑んでください。

そうしたら、俺は……絶えれるから。絶え間無く続く俺の『罰』に。そう、あの日の、あの俺の非日常のように、あの日常で見せてくれた微笑を。俺、さ……泣かしてばっかだから、もう見れなかったんだ。『――』の幸せそうな笑い。

見たくないんだ、悲しい顔も、悲しい無理やり作った笑みを、泣き顔も。

「ああ、さよならだ」

何時か、迎えに行く。今は、行けない。でも、何時か、必ず、行くから。

「立ち止まらない。そう決めた。『護の手』しか使えないなら俺はそれを選ぼう」

断罪。そう、自ら罪を断たせなどしない。俺が執行者になろう。死刑の執行だ……。

「行こうか、『飛奏（おもいびと）』……もう少し……あと少しで、全部終わるから」

鎌――『飛奏（ひそう）』――無名の名は『飛奏（おもいびと）』

ソレは俺の呼びかけに答えるように黒く煌く。スケィスやジャッチの白銀とは異なる漆黒の煌き。それはどこか微笑むように感じる。

ありがとう。と、心の中で最後の感謝の言葉を言う。

歩き出す。

どこかなんて、決まってる。

中央渦界域（セントラルボーテックス）。そこで、すべてを終わらせる必要がある。

レナ、先に行ってる。お前なら雨宮といればいつかはくる。だから、先に行ってる。

『行こう、真琴』

『大丈夫でしょ？　あんたが心配することじゃないし』

ああ、まったくだよ。

――黒衣の青年は漆黒の鎌を持ち闇に消えていく。

――その先に死に場所を求めて。

――ただ、残酷な運命を認めるこの青年は、せめて、

――妹のように育っていった少女の笑顔のためにと、動く

――背後に2人の長い黒髪を靡かせる女性2人と共に。

――『飛奏（おもいびと）』を片手に

――昔少女と繋いだ手を残して……。

【135話】STARNIGHT SWEARDETERMINATION

オレは何をしてるんだろう。そう、軽く自己嫌悪になる。自分でも特にすることがないんだ。祭りに行けば少なからず暇ではないと思う。夜も少しづつ深けて空が藍に染まりかける時間帯に、食い盛りの多い居候がいながらもオレはゲーセンでなにをやってるんだろうか？

指が殆ど反射的にコマンドを入力する、昨日やってた格ゲーだ、同じキャラで同じように屍を作っていく。入力した魔力は“断”の魔力を2つ、そしてコマンドの入力をして技が発動する。伸びた刀身で相手のキャラを払い除けた後に、すかさずコマンドを入力、次の魔力は“穿”一つ。体制を崩した相手は防御する暇もなく当たり、よろめく。

すかさずにキャラを近づけて、トドメの一撃を与える。

＜ご主人、とってももう駄目なんだよ……。＞

「うるせぇよ……」

椅子から立ちあがってオレは適当にゲーセンの中を見て回ろうと思ってぶらつく。何時もおりも人数が少ないのは祭りがあるからだろう。オレには、関係ない、魅夜には悪いと思った――だから、せめてもでレナたちを連れて行けと頼んだ。オレだって本音はいきたいとは思ってはいるが――やっぱ、問題になるよなー。

クレーンゲーム、箱の中には見覚えのあるような金髪と緑の髪をした少女の人形があったりもする。さらにその中では……いや見なかったことにしよう。血まみれの金髪で影薄なオーラを発する男が

いたなんて気のせいだ。

ガンシューティング、そういえばS・T・ｍｏｄｅとかいう反則なシステムが組み込まれてるのがあるな……銃の種類も豊富にあって数回変更が効くのも戦術を変えるのに役に立つ。そういえばＰＷＰ版には日本刀とワイヤーとかも使う主人公が選べたな……。うむぅ、暇つぶしにでも買ってみるかその内。

音ゲーでいえば、最近ドラムの超人だか言うのが新しく入ったな。基本はロックのものばかりでそういうのが好きな人には好評だった気がする。実際バンドとかでも一番大事になっていくのは地味にドラムだ、リズム感が従来のヤツよりも難易度が高く扱う太鼓とかの数も多いんだ、そりゃ結構てんやわんやなゲームだ。

他にはなんか大掛かりな対戦ゲームがあった気がするカードをスキャンして全国対戦を可能とする奴だったはずだ。大型スクリーンに映されて観戦もしたり出来る。オレとしてはそんなに興味はないんだけどね。いや、だって見覚えのある面のキャラが多いんだよなー、何故か思い出せないけど、うむぅ、そしてオレに似たような奴もいるし、その弟子らしい男も、やたらとラーメンを食う男とか本当にどっかで見覚えがあるんだよねぇー。最近ではどんどんカードが増えていってるらしいが、詳しくは知らない。

ふむぅ、何かないかな？　レーシングつっても新しいのは特にないしなぁ……。

ボーっとするしかねぇかな？　オレは何をしたいんだろう？

ああ、クソ！

「お、雨宮じゃん」
「は、一人寂しくなにやってんだかねぇ？」
「女にフラれたかぁ？　ザマァ」
「つぅか、この前はよくもやってくれたなァ？」

口々に好き勝手言いやがって。寧ろオレがフッた方だとは言おうと思いもしたが、何が悲しくてこんな三下の連中にいわねぇとならねぇんだよ……。つうか、お前等包帯まみれじゃん、骨折してギプスまでしてやがるし、懲りてほしいんだけどよぉ……うざってぇ。

「シカトしてんじゃねぇよッ！」
「表こいよ雨宮」

イライラする――。

今なら、殺してしまいそうだ。人数は3人、正気になるまでには全員殺してしまう人数だ。歯止めが効かない。あのドレッド頭――緋耶麻（ひやま）か、ならツレは宮下に加藤。先週絡んできて軽くあしらった――そう、あんな風に軽くあしらえれば――そう、それでいいんだ――だから。

「あんたらやめときな」
「ァ？」

……？　制止を促す声。それに不満そうというか、苛立った感じで反応する緋耶麻。それに変わってオレは冷めた目でソイツを見る。踝まである金髪、西洋の人形を思わせる青い瞳に白い肌、スラッとしたモデルのような体型、外人ぽいってのに打って変わってなあの貧相な胸……あれは、まさか……？

「ちょっと雨宮、何を考えてる？」
「心を読むな！　クレーン＝ストーブ！」
「私は高所作業車か！？　そして真冬に重宝される暖房器具か！？」

相変わらず切れ味のいいツッコミを御持ちのことで。むしろコイツがなんでゲーセンなんかにいんだよ？　ああ、そうだ、説明が足らなかったな、一見天使のような外見だが中身は悪魔が震えあがるようなほど狂暴な邪神で貧相な胸をしてるコイツはオレが中学時代に知り合ったヤツの一人だ。

このあたりのレディースを指揮って頭を張っていて、オレなみにこの街では有名なヤンキーであり付いた仇名が“堕天使（ナイトエンゼル）”。夜警のヤツラが今一番に注意してるヤツだ。喧嘩の腕っ節も強い。ここにいる緋耶麻らなどとるに足らないほどに。そして、オレもオレでコイツには因縁がある。

「クレア＝スイープ…」
「夜鳥の尾（レイブンテイル）の……！」
「堕天使（ナイトエンゼル）！？」

おお、見事なコンビネーションじゃないか緋耶麻たち。つうかクレアの顔はここまで恐れられてるのか。まぁ、今のオレは大人しくなったってなってるから舐められても当然なんだろうな。昔は奔放に学校を強襲して潰してたなぁ……。確かにあの頃と比べたら大人しいだろうな。まぁ、その分にクレアは顔が知れ渡ったわけか。

「お前等では雨宮に勝てないのはわかってるだろ？　それに今の雨宮は歯止めが効かないぞ？」

外人だってのにキレイな日本語を使う。外人鈍りってのが暫く見

ないうちに抜けてるみたいで関心もした。それに、クレアの登場で尻尾を巻いてるこの3人に重症を負わせない事も助かったと感謝すらもしている。

クレアの忠告が効いてか、舌打ちを残して消えていく3人。オレはそれを見ながら小さく溜息を吐いた。特に安心したとかの意味ではない、単に疲れたという意味の溜息だ。それを見てかどうかは知らないがたまたま手に持っていた飲みかけのジュースを投げ渡される。

この地域ではポピュラーで安価、味もそれなりにいいご当地物のドリンクだ。味テキなものは「元気ハツラツ～」なあのCMでやってるドリンクに近いのがある。まぁ、炭酸系のジュースだ。自販機かなんかで買ったばかりなのだろうか、軽くボトルに水滴がついてる。

まぁ、そんな事は木にせずにキャップをあけると炭酸独特の音を立てる。そして、オレは一口、口をつけて咽を潤す。適度に頭にのぼってった血の熱が抜けた気がした。オレはジュースから口を放して息を吐く。

「落ち付いたか？」
「まぁな。それよりも久しぶりだな？」

ボトルを投げ返すとクレアは片手でキャッチする。

「ああ、本当に久しぶりだ。毎日顔を合わせてたからな」
「チームは纏まってるのか？」
「いや、内部抗争が耐えないんだ。やっぱり男関連でのいざこざでな」

嘲笑気味に、呆れ半分でクレアは答えた。レディースとなるとやっぱりそういう小さな問題が多いらしい。血の気が多い連中だからな。そういう事ですぐいざこざを起す。やっぱ大きくなると内部がそういうのに多くなるんだな。つってもオレは小規模なチームだし特にそんな事はないしな。つうかチームが3人ってチームっていえねぇか。

だが、クレアは人望もあるし特に問題はないだろう。

「クレア、お前は祭りにいかないのか？」

「お前も行かないのか？　魅夜に誘われなかったのか？」

うぐぅ、痛いところ突きやがって。

オレの反応を見るだけでクレアは気がついたらしく、妖艶に微笑む。良い感じの暇つぶしが見つかったという笑顔だ。コイツのこういう顔は久しぶりに見た。なんつーか、本当に懐かしい。最後に顔を見たのは聖涼の受験の時だっけ？　あいつそういえば合格者の欄になかったな……。そういや、クレアのヤツは今なにしてんだ？

つうか何を気になってんだオレは？

ああ、なんかジレンマだ。こんな関わったら街中の女を敵にするような野郎とはかかわらねぇほうがいいってのに。つーか、このヤローいくら昔のダチだからって……。

「甲斐性無しだな」

「うっせ！　オレなみに甲斐性ありまくりな男なんていねぇぞ！」

ごめんなさい！　思いっきり嘘です！！

「お前、まだ昔のことを気にしてるのか？」

「――――ッ、お前には関係ねぇだろ」

まだ、覚えてるんだなぁ……。あの日の祭りのこと。オレは言われるまで忘れてたけどな……でも、鮮明に思い出されるよ。あの後、たしかこってり警察の御世話になってたなぁ、オレとクレアは。それでオレらはあの祭りに出入り禁止くらったんだっけ？　ああ、そうだ、奏さんにずぶんと怒られたっけ、祭りであんな大問題起すなんて、アイツ以来――だかなんだか。“アイツ”ねぇ……一体誰のことなんだか。

まぁ、悪行ばっかしてっとやっぱこうなんだなぁ……。そりゃそうか、出店までぶっ壊すような騒ぎまでになったんだよな……。喧嘩の原因はやっぱりオレ、喧嘩売られたから買って、ボコってクレアが来てムシャクシャしてたオレはクレアまでに手を上げた。

「わるかった……。あの時は、自分でもどうにも出来なかった」

「気にするな。あの時は仕方なかったろ？　それにあの日、始めてお前の本音を聞いたよ」

本音……？　と、軽く気になったもののオレはきかないことにした。あの時にある本音つったらアレしか考えられない。軽く、拳を握り締める。爪が食い込んで痛い。だけどオレは前を見るしかないんだ。そう、あの日にオレは変わらないといけなかった。

「雨宮――その、2、3頼みがあるんだ」

クレアが、そう頬を朱に染めながらそう呟く、それにオレはぶっ

きらぼうに頷いてみせる。クレアならわかるだろうが、大抵のことなら許可するという意でもある。まぁ、クレアならわかってくれて当然っちゃー当然だよな。なんせ、オレの元カノだったりもするんだし。

ン？　なんかさらっと大切な事を言いやがらなかったかだって？　いや、だからクレアはオレが昔付き合ってた彼女なんだよ。まぁ、付き合ってたと言ってもクレアに一方的に押し切られただけだけどな。そんで、クレアと破局したのは今日――つまり、あの日の出来事でだ。それで説明はいいか？

ちゅうか、オレは誰に話してたんだ？

「ま、また下の名前で呼んでも……その、いいだろうか？」

そういえば、コイツ、オレの事を“雨宮”って呼んでたな。まだ気にしてたわけだ……そりゃぁ仕方ねぇよな……。別にオレとクレアの中だから今更だし、別にかまわないけど……なんで、オレを名前で呼ぶ必要があんだ？　それは兎も角として……まさか、クレアは……？　いや、よしておこう単なる憶測にしかならない。

「別にかまわねぇし、今更だろ？」

「あ、ああ。ありがとうな。」

どういたまえまして（注：どういたしまして）。とかふざけて答える気にはなれなかった。オレは、何をしたいんだろうか？　そう、よくはわかんないけど、オレはソレを見失った。オレは何をするべきかわかってるのにやらない。それに苛立ってる――なんだ、わかってるじゃん。でも、何がわかってないんだ？

考えろ、集中しろ。

落ち付け、そう冷静になれ。

「和也、お前は“見つけた”のか？」

「ああ、“見つけた”よ。約束通りに……。頼みだったしな、お前の……“アレ”は」

「そうか……。やっぱり、“あった”のか」

感慨深く呟く。悲しそうに、そして――なにかを確かめるように。

そう、オレも見つけた……。出会った。

オレが、今のオレがやることも見つけた。

なら、オレは――！

「祭り、行ってやったらどうだ？　あんなのに縛られるのはお前らしくない」

腹は、決まった。

「クレア」

オレは静かに立ちあがる。そして、ひとことだけ伝える。

「助かった」

「……浮気者め、さっさと行け」

オレは、細く微笑んで駆け出す。オレは、伝えないといけないん

だ。そう、アイツに。

＊＊＊

そう、今更考えればここにコレがあると気がつかなかった方が異常なのかもしれない。中央渦界域……そう少し考えれば単純だった。ここが、全ての元凶。存在しない“空間”の魔法を描いた原因。そうだ、これがあるから、色んな悲しみの連鎖が、出会いがあった。決して紡がれることのない出会いが。

皮肉なもんだ。

「神堂真琴……だな」

空間に響く男の声。

「お前は俺側の人間なんだろ？」

それに俺は冷静に言い放つ。多重スパイを計り決して本当の姿を曝さないこの2人。いや、今は1人みたいだ。気配は感じない。それに、ココを察知するという事は――コイツはやはりこっち側の人間だ。ふん、どうやら協力者が居たみたいだな。

「まぁな……って、どうするんだい？　実力的にあんたがリーダーだ」

「……ふん。くだらないな」

男は乾いた笑いをする。冗談が通じなかったことに対する笑いな

のだろう。目が隠れた状態では口元を確認するしかない。そう、交渉で大事なのは表情を悟られないこと、決して目で話しては行けない。こいつはそれを熟知してるのだ。さすがは多重スパイといった所か。

まぁいい……コイツほど現状で頼りになる男は居ない。

「とりあえず、どうしますか？　リーダー殿」

「……」

思考を巡らす。俺らの目的、その理由。互いに互いの目的が一致せずともその流れを必要としただけの小さな纏まり。互いに専門分野がある。戦闘、科学、偵察。それでコイツは偵察に長けてる存在だ。それならいろいろな指示は出せる。だがコイツは多方面でのスパイ活動、身軽に身動きはできない。それならいろいろ目的は制限される。

なら、俺が出す結論は――コレだ。

「デウス・エクス・マキナの調査に当たってもらう」

「リーダー、そいつは難しいニャー。いくら一季目をいきなり現れて終わらせた奴の事なんか動向ですらわかんないんだぜ？」

意味の咀嚼。たしかに“ソイツ”を調べることは困難だ。だがコイツがいる組織のだいたいは“ソイツ”を捜し歩いてる。情報を仕入れるのも容易いことだろう。対立しながらも目的が類似してる２つの組織、そしてコイツが罠を張り巡らせているもう１つの組織、３つと情報を共有することになるだろう。だが、それは当然こちらの方が少しは情報量がコイツを通して多くなる。

ならば、俺が次に出す指示は似たものではあるが――多分、３つの組織も視野にはいれてるが、検討がまるでつかない存在のことでも言ってみるとするか。

「デウスのＤＮＡをもつもの……で、どうだ？」
「デウス・エクス・マキナの神徒……ってことか？」

そう、神徒計画。それにある筈だ、あの神のＤＮＡを所持する高校生が１人……。

「了解した。それと報告だ」
「なんだ？　“継坂”」

サングラスがこの闇に閉ざされた世界でも、ギラリと不気味に輝いた気がした。

「“滅神導（めっしんどう）”の所有者が割れた……“肯定（ザイン）”と“否定（ニヒト）”の２つを持ってな」
「……名前は？」
「■■■■■」

＊＊＊

――星はまるで夜の黎明だ。

――星は、月も夜を照らす偉大な存在だ、闇を夜にさせる。

――■■って……詩人？

――いや、違うよ。単にお前は月みたいだなって思ったんだよ。

――なら、さ？　■■って闇なんだね。

――ああ……。お前がいるから、俺は夜になれるんだよ。

――■■……。

――■■……俺は、

――なにをこっぱずかしい事してるのよ……アンタら。

――■……ッ！？

――あ、アハハ……。

――はぁ…。でも■■ので正解よ。この祭りの由来はね。

――由来？

――ええ、星黎夜大祭はね――

……視界が次第にクリアになってくる。なにか、誰かの会話が耳に霞めた気がする。２つは聞き覚えのある声。もう一つは聞いた事のない女性の声だった。一つは、奏さん。あの抑揚のない声は……あの死神だ。なんで、今更そんなのが聞えたんだろう？

そんな事は、どうでも良い。伝えたい言葉がある。

立ち止まらない。そう、オレはとまるわけにはいかない。

だから、オレは――。

「あれ？　和也？」

誓う――。

【136話】STARNIGHT　ANDANTETOMORROW

――守ると護るの決意を迫られる少年がいた。

――守ることが敵わないと知り護ると約束した青年がいた。

――少年は罪を雪のように重ねて行く運命に気がつき、轍を描き突き進む……槍如く。

――青年は重ねてきた罪を罰とし精算して行く、省みずに。ただただ、罰に向き合って。

――少年と青年は鏡写しのように、互いを写していた。

――少年は罪と守

――青年は罰と護

――対極の思いを写して

――2人の運命は…

――加速する。

＊＊＊

……星黎夜大祭の話をしよう。この祭は鳥栖深の創立から存在する三大行事の一角である。

主催はこの神社の一家……つまり嵩波さんの家計が執り行うものである。

８月のはじめの満月の夜――

開催される。

星黎夜大祭とはその名の通り。“黎明ごとく夜を白す星々”ということらしい。実際の所そんな白夜のようなことにはなっていないし、行灯や提灯がなければ闇のように暗い世界だ。

行灯や提灯のぼやけた灯り、それに群がる蛾などの虫――溢れかえる人の群れの波。人の群れは少数の組み合わせをつくり談笑をしながら行くものもいれば、闇夜でもわかるくらいに手を繋ぎ歩く初々しいカップルもいる。

――私もあんな風に――――って！　ええぃ、私は何時まで女々しくアイツの事を考えるんだ！

く、クソ……なんだか悔しくなって来たぞ。

「どうしたの？」

「ふぇ？」

唐突にかけられた声に私は振りかえってみるとそこにいたのは、懐かしい顔立ちの少女。実際はほとんど毎日顔を合わせてるけど……多分本当に久しぶりの本編登場だ。

セミロングの綺麗な艶のある黒髪、整った顔立ち。いいとこ育ち

なためか気品のあり飛白（かすり）の着物を美しく着込んだ女性がいた。まぁ、実際育ちも財閥のお嬢様だからいいのは当然である……。私の古くからの親友で、七瀬詩織（ななせしおり）だ。

「祭でおひとりなんて……和也様はいらっしゃるんですか？」

「し、詩織……あんたようぅそんな抜け抜けと……。それに私は迷子を探して忙しいの」

「あらあら、迷子探しで逆にひとりとは……強がってる子供みたいですわね」

グサッ。もうそんな効果音である。そう、私が迷子に近いという状況なのだ。少々ボーっとしていて気が付けば近くに誰も居ないという事態なのだ。因みに相手は和也ではない。

そ、そりゃ、和也なら嬉しかったけど……和也に断わられたから私は和也の家に居候してる子たちと来たのだ。レナちゃん、ラミアちゃんに、セフィリアさん、因みにフェアナちゃんは人気が多いのはダメと言ってヴァン君とお留守番である。

鳥栖深のそれなりに大きいお祭ではしゃぐレナちゃんに、それに対し常にツッコミなどを決めるラミアちゃん。かたぬき屋を破産まで追い込んだセフィリアさんと……とりあえず女の子水入らずで来たものの……こういうことになったのだ。

私としては本当に情けない。

あ、因みに零亞君はすでに家にはいなかった。どうやら御友達に誘われたから行ったのだと思う。しかしあの子供らしくないマセたクソガキが祭なんかに興味を示すだろうか？　いや、やっぱり相手は子供なんだ、やっぱりこういうのには興味を示すであろう。

「あ、あんたもひとりじゃないの？　詩織……？」

とりあえず、このままつたったままで話しをしたら通行人の邪魔になるだろうから私達は歩きながら話す事にした。

「私は御誘いを受けたもので…」
「詩織が？　誰に」

一瞬、詩織の目がギラリと無気味に光った気がする。

「和也様です」
「ぶはッ！？」

盛大に噴出す私。

なに？　なんだと？　和也はこんな本編登場を超がつくくらいに久しぶりのアマを誘っただと！？　いやいや、まてまて和也も詩織とは小学校からの付き合いで――ああ、でも“あの”和也は中学校からの知り合い――ってよくよく考えたら関係ない？　ああ、そう考えると私と詩織のスタートラインも同じ？　クラスも和也と同じだから――って、ぎゃあああ！　マジか！？　マジでそうなのか！？　何時の間にそんな仲にまで発展してたんだ！？　逢引か！　私のしらないところで逢引でもしていたのか！？　居候たちの目もありながら堂々と逢引か！？　そ、そういえば宮鷹くんが転校してきてから宮鷹くんのはなしで和也が度々でてきて、話しをする内に段々と和也の評価があがってたような……？　ああ、もう！　浮気者！　あとで和也は死刑だ！　洗いざらいしゃべらせて――

「み、魅夜……？」

「和也（ろくでなし）とどこで待ち合わせ！？」
「き、聞いてくださってなかったのですね……冗談ですよ冗談」

……冗談？

そういえば、思考をグルグル回してる時になんか聞えた気もしてたが……。

「って！　なんつーたちの悪い冗談を！？」
「だって、和也様の名前を口にだすだけで面白い反応致しますから」
「私は面白くない！」

ぽけぽけ声の腹グラ心情の解答に私は、怒鳴る。周囲が一挙に振り返り私に視線を――もとい、死線を移す。し、死ぬほど恥ずかしい。く、くそ！　自分でもハッキリとわかるくらい顔が赤くなってるぞこりゃ？　つか、なんで疑問符？　ああ、なんかまだ混乱しちょるーー！？

く、クソ、こんなんだから詩織に遊ばれても仕方ないか……。

な、なんか、凄く悔しいけど……。

「って、“ひとり”の詩織様は私になんの用で御座いましょうか？（にこにこ」
「“まいご”の魅夜さまがたまたま目に入りましたので、遊んだだけですよ（にこにこ」
「あらあら、それは大変。御友達にすっぽかされましたのかしら？　やっぱり金持ちって男に遊ばれるんですねぇ？（にこにこ」
「あらやだ、男の人とデートなんて、勘違いも甚だしいですわ？
私は和也様一筋ですし、姑みたいな幼馴染様とは関係のない御友達

ですわ（にこにこ」

なぜかしら？　こんなにこやかな会話をしてるのに人の波が一気になくなったねぇ……。アハハ、どうしたのかなぁ？　私と詩織の回りだけぽつんと穴が開いてるわ？　うふふふ……。

＊＊＊

星黎夜大祭。それは、むかしむかしの伝承からとられたといわれてる。その『伝承』の正体は既に勘付いてるはずだ、全ては『一季目』の世界の出来事だ。それが、この世界に流れ付くなんて単純だ。

境界（ジャンパー）を越えし者とも“悪魔”とも呼ばれる存在。境界を越えた誰かが、この『二季目』の世界に流れ付き、文化を、自分の知りゆる歴史を広めた。

この星黎夜大祭、その伝承の最初はこう綴られてる。

『夜とはなんなのでしょうか？

闇と一切の違いがないのに、闇と夜は違う。

静寂の時と変わりはない。

“黒”が支配しているのに。

“私”は顔を上げる。

ああ――そうか。

夜は闇じゃない、闇は夜になれる。

空には黎明があるんだ。幾つもの黎明が。

闇の空を踊る聖霊が――

空を覆うほどの1人1人は小さな星が――

闇を照らし、夜をなしてる――

ささやかでちっぽけな星――

夜とは安らかなものだ――だから“私”は、“彼”と共に――』

そう、綴られている。ささやかでちっぽけな空を覆うほどの満天の夜空――それは“黒”だけの闇とは違う。誰かが、そんな当然のことに気が付いたんだ。

そんなささやかで、ちっぽけな事に気が付いて――気がついたからいるんであろう。

これは、この祭で歌われる神楽歌の冒頭でもある。伝承の一部を歌詞にした里神楽を踊る……今で言うミュージカルのような舞である。俺らには馴染んでて特に感情を抱く事はない。でも、どうやらとなりの“こいつ”は違うらしい。

嬉々して聞いてるワケではない。この騒がしい祭という場所で自分だけの世界になってる。恐らくこの里神楽で言う“夜”なのだろう。星々である、この歌詞を静寂な自分だけの世界に羅列させ感じる。体感、俺からしては聞き飽きた歌を、聞き取る。

誰かの言葉で支えられてる”こいつ”の闇。

それを照らす言葉は――ささやかでちっぽけなものだった。

となりの“こいつ”を見る。

小さな体躯でこの人込みの中で放れたら探すのを苦労しそうな身体。ささやかちっぽけな花みたいな少女。摘んでしまえばすぐに枯れるんじゃないか？　とまで思う弱々しい身体。

俺は少し“こいつ”に近寄って見る。

近くに行ったら余計にわかる小さな身体、ちょっと力強くだけば折れてしまいそうな身体。落ち付きのある乏しい表情のこの少女の顔をまじまじと見る。

学校では気が付かなかったが――可愛いというよりは、綺麗という顔立ち。そう思った瞬間に妙に色っぽく感じた。

8月いえど夜はまだやや暖かい。朱に染まる頬に潤いのある唇。

ま、マジでヤバいかもしんねぇ……。

「……如月？」

「ん？　あ、あぁ……どうした桧山？」

まさかのまさかで、あの桧山桐（ひやまきり）にドキドキせにゃならんのだ……

俺は。ああ、もう一体なんだっていうんだよ。

そう、俺こと如月駿は人生初のデートをしているのだ。まぁ、くわしくいうとデートとかそんなんじゃねぇんだけど……まぁ、画面の向こうの君達は知らないと思うが、桧山と俺はコンビニの一件以外でもちょっとした繋がりがあるんだ。

簡単に言うと学校の文化委員である。１－Ｂの文化委員に俺と桧山がはいってるんだ。知らなくても当然だと思う、どうせ和也とかは覚えてないだろうしそんなこと言う意味はないからな。それに俺は殆ど委員会に顔を出してないしな。

だが委員をやるからにはたまには顔を出せとフミｔからお咎めを食らったんで俺は委員会に出た。相変わらず俺がいるだけでピリピリとした空気にはなってはいたが話しは進んでいく。話しの内容は１１月３の文化の日にある学校祭――【凰龍祭（おうりゅうさい）】の準備などについてだ。三ヶ月近くあるというが、三ヶ月とは実は短い期間だ。クラスの出し物の準備や、学年での準備、部活動での準備や学校祭の宣伝とかその他もろもろと多くの準備を必要としている。

毎年恒例の山車（だし）も作るらしい。

一応情報を頭の中に叩き込んでおく。これでも俺は記憶力が良い方だ。超高速で移動してると相手の位置を覚える必要もあるからな。動体視力を強化すれば別だが……半憑依でもしないかぎり俺は俺の速さを俺の目では追えない。だから辺りの風景や相手の位置を叩き込んで一気に叩き込む。

まぁ、そんな事はどうでもいい。

委員長と担当の先公が話す中で耳を澄ませばヒソヒソと間近に迫っている【星黎夜大祭】の話題で持ちきりであった。そりゃ、あれ

だけ大きな祭りならこない方が学生としては少ないだろう。

まぁ、俺は行かないけどな。だって無駄に喧嘩とかしたくないし。

とりあえず【凰龍祭】の情報を頭に叩き込んで、委員長の言葉で委員会を締めた。

あ、そうそう疑問に思われただろうが聖涼の委員会に前期と後期は一部以外存在しないんだよ。1年と2年が主に参加して1年の任期をやり通すんだ。3年は受験やら就職やらといろいろあるからそれに集中させるって思惑があんだろうな。それにこういう学校祭とかでハメをはずさせたいってのもあるのだろう。

んで、その例外で前期と後期が存在するのは『生徒会』と『風紀委員』だ。しっかし不思議だ……普通なら生徒会とか風紀委員とかが1年間の任期なんじゃないのか？

まぁ、聖涼はなにかと馬鹿っぽい学校だからいいとするか。

ちらり、と桧山を見ると相変わらずの乏しい表情で黙々とメモの整理をしていた。そろそろ祭だってーのに楽しくなさそうな顔だなってのが印象。

「あー、ちょっと待った」

委員長の解散の声で帰る仕度をしていた生徒が手を止めて先公の声で止まり、振り返る。桧山も例外ではない。

「ＨＲでも聞いたと思うが、最近不審者が出没してるらしい。委員会をやって時間も遅いので男子は女子の騎士（ナイト）になるよおに遠回り上

等でいってくださいねぇー、チャンスですよぉ男子諸君、だけどチャンスだからといって一夏のアバンチュールにならないように気をつけてくださいねー」

一夏のアバンチュールとか、古いって流石に。ほら、何人か引いてるし。って、こらそこら辺の男子、この先公の変な暗示にのるな。おいおい、鼻血を出すなって女子がおもいっきし引いてるだろ。

つうか、不審者だぁ？　ＨＲでもンな事聞いてねぇ……ってかＨＲは寝てたなそういや。聞いてなくて当然だし和也とかもしらねぇだろうな。和也なら面白がっていくだろうしな。

まぁ、俺に頼む奴なんていねぇだろうし……ちゃっちゃと帰るか。

「……」

グイッ。

「……！」

グイッグイッ。

「……！！！！」

……何を俺の制服を引っ張ってるんですか？　桧山サン？

「如月」

「ンだよ……？」

周囲が静まり帰る。そりゃ俺がイラついた声で喋るとそうなるで

あろう。ましてやそれが女子だ、だがいざとなれば動こうと思う男子はいない。これなら不審者に会っても知らない顔だろーな……くっだらねぇ連中だ。しょせんは口だけ、考えだけなだろうな。

ハァ……。

「如月なら私の家、知ってる……」

「ンで？」

『送って』

その一言に盛大に場は混沌とした。

それからチャリで桧山を送ってその途中で不審者に出会ったんで蹴りを見舞いしたのは略す。不審者だから描写してはいけない恰好だった。だから、とりあえず蹴った、そして路上放置。これ以上係わり合いたくない。だから、路上に放置した。

そして……まぁ、そこからいろんな事があって、話題は【星黎夜大祭】の話題になった。まぁ、ゆっくり自転車で走ってたしな。あのパトカーに追われることもなかったし。

そして、今、俺の隣には桧山がいる。俺からしたら……いや、学校の人間から見たらわかんねぇくらいに目を輝かせながら神楽を夢中で見てる。その体躯から本当に子供みたいに目を輝かせて。

……まぁ、悪くないな。

それにまさか、舞台の目の前だとここまでヤンキーも居ずに落ち付いて見られるとは……。まぁ、実際なんども見てるから飽きが回

ってるんだろうな男は。

この神楽は女性に人気があるらしい。まぁ、確かに男の俺から見ても綺麗だ。これが奏さんだったらスゲー綺麗なんだよなぁ……。あれだ、恋する乙女だ、そう、そんな感じだ！

ハッキリいおう、よくわからん！

しっかしどうしたんだろうな？　奏さん。毎年踊ってたのに……あ、いや毎年じゃねぇや、たしか御姉さんと交替で踊ってたんだよな？　たしか今年は……あれ？まぁ、忘れたからどっちでもいいや。

桧山が喜んでりゃそれでいいか。

「……如月」
「あんだ？」

潤いに帯びた熱のある双眸にドキリと胸を高鳴らす。

「ありがとう。付き合ってもらって」
「いやぁ、暇でしたからねぇ」

まぁ、たしかにそうでもあった……けど1番は……。

桧山（コイツ）だから……なんて言えねぇよなぁ……。俺だって一緒に祭に行く人くらいなら選ぶっての。まぁ、女の子から誘われたのを断わるのも野暮ってもんもあるけど。まぁ、桧山となら楽しいかなぁってのがあったのもあった。

俺……なんか、ヤバイかも……。

「……ッ！？」

一瞬。

なにか、見えた。

いや、ハッキリと見える。

女性だ。

よく、わかんないけど……女の人。

『う』『ん』『め』『い』『か』『な』？

そう、口が動いた気がする。

小首をかしげながら。

『は』『る』『と』？

ハルト？

……？

「如月？」

桧山だ……。

なにが、重なってた？

ああ、コイツは……桧山だ。

『桜』じゃない……。

……？　さ、くら……？

――季節は巡る。

――出会い、別れ

――再会、紡ぎ

――四季の巡り。

――だから、

――再会する。

――如月に咲くはずのない桜

――今、蕾へとなる。

＊＊＊

必然か、偶然か――運命か。

そんなのは、どうでも良かった。

「レナ……」

オレは、ただ……伝えればそれでよかった。

荒い息を整えてその伝えたかった人の名を呼ぶ。既にオレを見つけて駆け寄って来た小柄の金髪の少女をオレは見る。向日葵の柄のついた白い着物で、なれない草履か、少し危ない足取りで、石段を下ると祭りのざわめきでも、カタカタという音はオレの耳に届く。

おめかしもちゃんとしてるのに、ちょとだけ笑いが込み上げる。レナにひまわりとはこれまた……。

「和也？　どうしたの？」

軽く息を上げながら、駆け寄って来たレナの手を強引にオレは掴む。軽く呆けた声をレナはあげたがオレは聞えないふりをして強引に連れて行く。

この神社の奥にはたしか秘密のスポットがある。

“俺”の記憶を手繰り寄せながら、その場所を導き出す。

人込みが嫌いだった“俺”が見付けた……ゆっくり出来るあのスポット。魅夜も誰にも教えなかった“俺”だけのスポット。

そこで、オレは――――

＊＊＊

気配がした。

寒気が走るような冷たい気配が。

「……」

故に、彼女――李（リ）・明林（メイリン）はこの薄暗い森の中に来た。零時の護衛という名目で秘密裏に『処理』するために国外へと出た彼女は、この見知らぬ土地で悪意に近い殺気を感じ取った。

そして、その寒気の発生地点が――おそらくここ。

見知らぬ地の見知らぬ森。野性の動物たちの蠢く音、気配。

殺気は感じられるが、それは動物のもの。決してさっきのような肌寒い悪魔ににた者の殺気ではない。“端”が再び主――零時の命を狙ってると一瞬考えたが、その思考を捨てる。

すでに“端”は零時と関わる意味を失っている。

なら、何を狙う？

それで思考が詰まった。

“端”だという前提を消すと零時は古都宮の次期総帥。命は狙われてもおかしくない。相手なら幾らでもいるが――所詮、古都宮に歯向かうだけ無駄な集団である。

古都宮の執事やメイドはみな、その手の一流、超一流の集団だ。“端”の襲撃で死者があそこまで少なかったのもそのためである。

“端”という前提以前に、出来た前提を消して見る。狙いは零時の命じゃない、“端”という組織ではない、フリーの、一匹狼の殺人者。

繋がった。

理由はわからないが、仮説は出来た。

ヤツは獲物を狙う狼だ。

「……」

引き返すべきか、明林は考える。狙いは零時でないなら自分が関わる必要性はない。だが、もし今後の『計画』の邪魔になるようであっては始末しなければならない。李・明林……いや、裏・冥隣として。

思考、思考、思考思考思考

「か、和也？」

乱れた息、乱れた髪を直しながらレナは多少怒りっぽくオレの名を呼んだ。オレは慣れない長時間のダッシュで荒くなった息を整えながらオレは振り向く。

疑問符を浮べるレナにオレはひとことだけ言う。

「知ってるから」

白黒させる目。そして言葉の意味を飲み込めたレナの目は悲しげに虚ろな瞳に。澱んだその瞳はなにを焦点にしてるのか？　そんなの、オレはわからない。だけど、オレは言わないといけない。伝えないといけない。そんな自分勝手。

ああ、自己満足だ。

でも、オレは――正解だと思う。

「わりぃ、他の人の伝手で聞いた。だから、お前の嘘もわかってた」

思考がクリアになってく。やっぱり、オレが言う事はまとまった。

レナ、お前のそんな顔――みるのは今後一切絶対にないから。絶対に。見るのもそうだし、させることも絶対にさせない。オレが――オレが！

誓う。

オレは、誓う。

「……なら、わかるよね？　ファーストナンバーがどんな運命か」

「させねぇよ」

ぇ？　っと、小さく盛れた気がした。

当たり前だ。そんなんだと、レナの存在意義を否定してると同じなんだ。運命とか宿命とか、やらないと他人に決められたことなんてする必要があるわけがねぇ。ンなのに躍らせちゃいけねぇんだ。だからオレは言う。オレが言う必要がある。

他の誰でもなくて、オレが。他の誰にもやらせない。

「運命なんてくだらねぇな」

自ら『運命』を司る鎌を持っていながらオレは言い切る。『運命なんてクソくらえ』と。そういった口調で。実際に鎌にだって『運命の空間』の使用の条件で言い聞かされた。

あの鎌が言いたかったのがわかった気がする。『心構え』とか、そんなんよりまずはこれをオレに教えたかったんだろう。多分。『運命』なんて『悪魔』を『切り裂く』オレの『刃』として――

「そんな『自分が決めたこと』じゃなく、他の誰でもない『神様（クソヤロウ）』に決められたこと』なんてものはな――」

それが『運命（デビル）』の『神様（ディステニー）（悪魔）』を『切り裂く刃（ブレイカー）』として。

くだらねぇ神様（ディステニー）（悪魔）がつくった死（デビル）（運命）を切り開く（ブレイカー）（切り

裂く刃）それが――運命の悪魔を切り裂く刃として。

だから、この鎌を持ったオレは言う。

「切り裂く！　そんで、自分が望んだ『未来（あした）』を掴む！」

「でも……。それだと……！」

強い言葉。

多分、レナは受け入れてた。

『０７』としての事を。

『言霊』に踊らされる『運命』を。

その先にはない『未来（あした）』の幻想。

そこには『居場所（いえじ）』の幻想はない。

なら、それはコイツが望む『未来（あした）』？

それは、否だ。

『居場所（いえ）』も『未来（あした）』も必要なんだ。

だから――オレは！

「我！　雨宮和也の名のもと！　我が『剣』、運命の悪魔（ディステニー　デビル）を切り裂（ブレイカー）く刃に賭けて誓おう！」

鎌を繋げていた鎖を千切りとり巨大化させ、天を衝くように担げる。騎士がその『剣』で誰か大切な者に誓うように。だから、鎌はオレの『剣（あいぼう）』だ。コイツ（・・・）の変わりなんて誰もない。

オレの至高の『剣』だ。桐谷竜司だかなんだか言った奴に渡す物か。独占欲でもなんでもない、自身の身体の一部をホイホイやれるか。だからオレは、コイツを一生の相棒にでもしよう。生涯を付き合ってもらう。

だから――ここで誓うんだ！

「雨宮和也はその身にかけ、レナ・フォード＝ライズ・ハールドを守りぬくと誓おう！　『運命』を『切り裂く刃』として！　幾多の罪を重ねようが、我が意志に代わりはなし！」

久しぶりに鎌が淡く光った気がした。キマイラだかと戦って以来のこの光。なんの光なんて知らない。だけど、オレのあやふやだった決意は固まった。今までずっと『なんのタメに戦っていた』かがわからなかった。自分のタメだけに戦ってたのかもしれない、明確な意味を持たずに戦っていたのかもしれない。だから、オレの動きは何時も半端だった。貫き通すものが存在しないから。

だから、オレは剣になる。

それが、オレの貫く、オレだけの意地。

オレは――レナを守る。この命にかえても。

「だから、レナ。掴めオレの手を――守るから。絶対に」

鎌を担げてる手とは逆の手を呆然とするレナに差し出す。決してレナに届かない距離に伸びた手。オレの手を伸ばすのはそこまでが限界。レナが手を伸ばさない限り掴めない距離。それが今のオレだ。レナが望まない限り本当の助けにはならない。

ここからはレナ次第だ。レナが望めばオレはレナを助ける。レナの望む『未来（あした）』を――オレは信じたい。だから、オレは鎌――剣を担げるんだ。

誓いをたてる。

『守る』と。

その為だけに、オレは鎌を振るう。

「駄目だよ……、和也は――」

“オレ”は“俺（オリジナル）”の知ったことじゃない。

オレはオレの意志として――レナを命にかえて守る」

俺は魅夜を守ろうと強くなったのかもしれない。オレはその力を利用させてもらってるのもわかる。だからオレはオレ自身の手で強くなるんだ。そのタメには“俺”がしたように――誰かを思う気持ちは必要なんだ。だから、オレは――。

「死んでも守るわけじゃねぇ」

「ぁ…」

「オレが死んだらお前の帰る場所がなくなっちまう――生涯、命を張って、戦って――必ず。必ず、勝つから。オレは死なない」

それが、オレの『未来（あした）』と『居場所（いえ）』を守るための誓い。決して

揺るがない――オレの誓い。

オレの『守り』だ！

レナを守る『剣』と成し、レナの『未来（あした）』と『居場所（いえ）』を守るそれが――『守』だ。

「和也……私、」

「何も言わなくて良いから」

伸ばした手、重なる手、交じり合い存在を確かめ合う指。引き寄せる腕。そっと、息がかかる。担げられた腕を支える小さな手。その胸にあたる温かいもの。

愛しくて、堪らない……。

オレは――絶対に――。

――星黎夜大祭ってね、遠い昔の過去にね、ある“誓”いをたてた人の話しなんだよ。

――？　神楽の内容と違うくないか？

――ふっふーん、神楽の内容はただの伝承なんだ、本当の絵巻にかかれてた内容はね……。

――うんうん。

――……。

――――だから、『誓黎夜』なの。

――その掛詞で……星黎夜か。

――へぇー…。

まただ、また――聞えた。石段でも聞えた3つの声。

少し聞え難いとこもあったけど――なんとなくわかった気がする。
『セイレイヤ』の意味を。その掛詞にされて託された幾つ者思いを。
背負って、オレは――ここに誓いをたてる。

背負って来た幾つもの運命の荷を半分だけ預かりながら――オレは目を開く。胸の中に埋まるレナを見据えてオレは切に願う。

――ずっと、ずっと傍に。

そんな、小さな願いを。

＊＊＊

走った激痛。

突拍子もなく、鋭い物に突かれた感覚。

混濁する意識の中で、腹部から突き出たであろう、その“突起物”に触れる。固く固く固く、非常に冷たいソレ。流れ出す生暖かい感覚は――腹を伝い腿を伝い――垂れ流れる。

溜まる溜まる。溜まって行く。とめどなく、ソノ溜まったものは広がって行きながら――肌寒くなっていく。

ゴポリッ。と、例えようのない水っぽい音を発てる。足に力を――いれることができない。腕が、動かない――身体がなにも動きができない。

口から漏れる息、湿って広がって行くのそ水っぽく生暖かい水溜りに身体を埋める。未だに広がって行くその水溜り。混濁する意識は徐々に白が埋め、視界は黒が支配する。

「姉さん」

聞えたその声に、彼女は反応する――いや、反応できない。荒くなる息、咽を通る生暖かい物を吐き出し、そして、白くなる意識を無理やり色に染め、黒くなる視界を彩り豊に入れる――が、出来ない。意識が、遠い。いや、もう既に意識は掴めないほど遠くなっている。

激痛――無痛。

激痛激痛激痛激痛無痛激痛激痛激痛無痛激痛激痛無痛無痛激痛無痛無痛無痛無痛無痛無痛無痛無痛無痛無痛無痛無痛無痛無痛――

意識はない。視界がぼんやりと、確実に黒に染まる。染まって染まって染まって染まって染まって――

全てを黒が支配する前――彼女の視界に悪魔の姿が写った。記憶の片隅に残る幻想――。もう二度とあうことはない、その面影の――顔が、

黒く塗りつぶされる。

ザクリッ。そんな小さな音で彼女の世界は終わりを継げた。

「駄目だよ……森には殺気だった生き物が多いんだから」

不気味な笑いを浮かべながら。“男”は頬を緩ませ、笑い出す。発狂したかのように。いや、男は既に笑い出している。手で顔を覆い明け方の薄暗い闇の中で、月に吼えるように――一匹の狼は狂い吼えた。

酔い痴れるように。李・小狼は狂(わら)う。

「不注意不注意不注意不注意!!」

狂(わら)いが止まらない。狂った歯車は延々と狂(わら)う。

そして、咀嚼音。クチャクチャとうい水の音と何かに齧り付くような音の影はひたすらに大きく、闇夜に赤く目を輝かせていた。鋭い爪で骸を抑えながら――

そして、再び齧り付く。

砕く音水の音――。

その影は徐々に大きく大きく――。

「くは、くははははははははははは」

そして、突き破る。産まれる――。

＊＊＊

気が付いてた。知っていた、彼が人ならずのものだったなんて。

「屑が」

あの学校で確信もした。始めてあった時から、感じた。それは私だけだったかもしれない。双子の片割れも彼は普通の子だと思い込んでいた。

他のクラスの子もそうだ。

私はそれを運命って思い込みたかったけどそれは違った。やっぱり、違った。

「ひゃ、ひゃめひょ……」

「ヤメロ？　ここまで来てもその減らず口は治らないか」

影。射影体――。影の大鎌。潰された顔――。

「ひぃ……」

恐怖が支配するのは、闇でも夜でもなかった。私はそう思った。

「懺悔（ゆるし）などやらん。眠れ――恐怖（あのよ）の底で」

影が裂いた影――。崩れる肉片――。噴出す紅――。

私は、その紅の中心に居た。

――崩れはじめる『日常』の『未来』

――『未来』にある『希望』とはなんですか？

――『日常』にある『絶望』はもう来ないんですか？

――『未来』には『涙』が降りますか？

――『日常』には『笑顔』は輝いてましたか？

――私は、わかりません。

――ただ、

――『未来』だったら『君』は居るでしょうか？

――『日常』のように『私』の太陽として？

――『未来』には居なかったら『涙』は止めど無く。

――傍に、

――ずっと、

――もっと、

――『未来』と『君』と『一緒』に、

——Andante（あるくようなはやさ）で。

【137話】鏡面の世界《零》

エステリカ・クォーツは資料を読み漁っていた。

礼拝堂の図書室にある一角で山のように詰まれたハードカバーの本を次々と目を通す。分厚い本を凄い速さで読み進めて行く。目を通してないんじゃないかという速さで。

しかし目はその一文一文を追いつづける。瞬きもせずに集中を持続させながら。まるでそこだけ時間の流れが違うように、次々と本を重ねて行く。

紺の修道服から覗く胸元まである長めの金髪と大きく開かれた深い蒼の目に透き通るような白い肌。整った顔立ちのこの女性は徐に、とあるページで指を止めた。

その項目にはこう書かれている。『Ｌｅ　ｄｉｅｕ　ｄｅ　ｍｏｒｔ』と。フランス語でいう『死の神』つまり、『死神』である。

「見つけた…」

そう小さく呟き指を走らせる。その指先で文をなぞりながら胸元にある金の十字架を弄びながら考える。

思考を張り巡らせる。そして、とある言葉で指を止める。訝しげにその文に目をやる。そこで書かれたのは『死神と人間の混血』の文字。

ページをめくる。

そこには、『真実』が記されていた。

＊＊＊

天気がいい。見事なまでの快晴である。今日一日の疲れが吹き飛びそうなくらいに清々しい。久しぶりの学校がアソコまで疲れるとは思ってもいなかった。朝普通に起きて普通に朝食の準備をしてレナを起こしにいったりとか、日常とは変化はすくない。

そう、問題だったのは学校である。ＨＲで既にオレはダウンしてしまった。そう、心に大きな衝撃があったのだ。なんでかって？ああ、それを話す事になるとはな……。そう、アレは去年の話しだ――っておい、ツッコミはどうした？　ＨＲでの出来事なのになんで、去年なんだよって感じの。ん？　てっきりクレア関連だと――だって？　ま、待て！　クレアは無関係だ！　た、確かに去年まではにゃんにゃんし合った中ではあるが――。

ごめんなさい嘘です。にゃんにゃんまでには到ってません、私、雨宮和也はその身をレナ・フォード＝ライズ・ハールドに奉げております。ええ、そりゃ心身ともにハイ。

そんなオレは１人で屋上で傷心してるわけですが……。ああ、そういえば何があったか言ってなかったな。

そう、アレはオレが学校に行く途中から始まっていたのであろう。オレの徒労は……。

「紅茶を飲むか？」
「あ、あぁ。貰うよ」

オレは差し出された紙コップを受け取り、水筒らしきものからコポコポと注がれる温かい紅茶に安心感を覚える。まだ夏だけどこういう温かいのもたまにはいいなぁ、お茶も渋くて熱い派だしなぁオレって。

やっぱ、粗茶とかって日本の心だぜ。そうなれば、紅茶とかはフランスの心かねぇ？　ふむ、この独特で強い花のような香りは――マスカットフレーバー。つまりダージリンだな？　それも紅茶の名産地で地味に有名なインドのだ？

ふむ、水筒で多少は香りは落ちてる物の淹れかたがよかったな、それにこの深い味わいは……

「『セカンドフラッシュ（夏摘み）』だな……？」
「ほぅ、口をつけずに香りだけで判断したか」

ちょっとしたうんちくだが、日本や欧州の一部（ドイツとかそこらへんだろうな）では『ファーストフラッシュ（春摘み）』が高い人気を誇ってはいるが、品質的には『ファーストフラッシュ』よりちょいと遅れて収穫される『セカンドフラッシュ（夏摘み）』の方が上級品とされているんだ。

その中でも最上級品といわれている『マスカットフレーバー』の『セカンドフラッシュ』は生産量の５％にも満たないという稀少価値の高い品物なのだ。味もオレとしては『セカンドフラッシュ』のが好ましいが中々手に入らず『ファーストフラッシュ』で飲んでいたが……。

ここまでとは。

口をつける。

「ほう、８５度前後の低温で抽出時間を長めにして、より味わいのあるようにしてるな……？　ミルクや砂糖も入れずにストレートで来てるな……。お前、何者だ？」

「お前を殺しに来た」

……あれ？

「ってうをぉ！？　お前は誰だ！？　つかさっきまでオレは１人だったってのに！　あれか？！　ストーカーか！　新聞の勧誘か！？　ヤク〇トの御誘いか！？　それとも、某龍のつく主人公が嫌がらせにオレ名義で注文したラーメンの出前の徴収か！？」

「どれも違う」

まぁ、そりゃそうだろうね。なんせ、オレを殺すなんって行って来たし。流石にオーバーリアクションだったかな？　新聞の勧誘やヤク〇トの勧誘でこんなダージリンを出されたらたまったもんじゃねぇし、それにあの人なら確かにやりそうではあるが、オレを殺す発言には繋がらない。それは、新聞もヤク〇トもだ。

残されたストーカーという選択肢。これもＮＯだ。オレは外人の知り合いなんてジョンにフラン、それにクレアくらいだ。そんで外人なんかに喧嘩ふっかけた記憶なんてほとんどねぇし……、おっかけてくるには些かおかしい点が山ほどある。

代表的なのは、その身のこなし方。これは結構場数を踏んでるし

只者じゃねぇ。それに、この修道服――つまりシスター様様に目をつけられるような男じゃねぇ、自慢じゃねぇが多少ばっかし荒れた性格だと自負してる。そんなんが神様に身も心も奉げてる馬鹿どもにストーカーされるかぁ？　まぁ、命を狙われる理由としちゃありだが――そこまで必要性はない。

とも、なれば、こいつの狙いは簡単によめる。

「私は、エステリカ・クォーツだ。フランス聖教の一員だとでも名乗ろう」

やっぱ、ね？

「雨詩文三（あまうたふみぞー）、グルメ高校生だ」

「雨宮和也、死神と人間のハーフだな？」

ちっ。冗談が通じねぇのは可愛くねぇぜ？　綺麗な顔立ちでよぉ？

とりあえず、どうする？　鎌を使うまでもないと思うしそのまま格闘術でつっきるか？　と、いっても相手は異国のゴーストハンターもどきみてぇなもんだろ？　そんなんに死神でもあるオレが突っ込んで痛手を貰わないか？

考えろ。

ヤツは死神を狙ってるならラミアちゃん、更にはレナが危険かもしれない。レナの身が危険になりゆるこの因子ならば――手加減する必要はない。

……屋上か、ヘマしたら落しちまうな。それなら……グランド？

駄目だたしか一限目の授業で体育があるから目立っちまう。こっから体育館裏も危険だ、校内を通って別の棟に行く必要がある。しっかし、屋上でもオレは構わないんだが――さすがにぶっとばして地面に落すのも癪だよな……。

うむぅ……？　打撃を使わず斬撃で攻めて上手く工夫するか？

むむ……、意外と難しい注文だな。

「と、考えていた。」

「？　どう言う意味だ……？」

考える。コイツはオレを殺そうとしていたんだ。そう、過去形。すくなくともオレを殺す気でいた。それは何時まで？　何故？　考えろ、考察しろ。これからの戦い実力で劣化してるオレがこれからレナを守りぬくには考察するしかないんだ。地形、相手の動き、言動――全てに神経を張り巡らせろ。そして、優位に立つんだ、切り伏せる――思考とは人間もつ最大の武器をイカすんだ。

考えろ。考えるんだ。

答えはある、アイツの言動を思い出せ。ロジックを組み合わせろ――答えはある。

【お前を殺しに来た】【どれも違う】【私は、エステリカ・クォーツだ。フランス聖教の一員だとでも名乗ろう】【雨宮和也、死神と人間のハーフだな？】【と、考えていた】

それがアイツのいった言動。

『オレを殺しに来た』それは真意なのだろう、だが最後の『と、考えていた』という発言から察するには『オレを殺す気はない』ということだ。

オレを殺そうとした理由『フランス聖教の一員』であるコイツに『死神』という存在が混じったオレという理由でいいであろう。ハーフとまで知っているようだが、ここではハーフを置いておく。

それは『と、考えていた』という発言に繋がるかもしれないということ。死神と人間の『ハーフ』であるために、もしかしたらオレを対象外にしたのかもしれない。だが、それは些かおかしい。

コイツがココに来る理由などないのだ。それは『どれも違う』という発言で宗教とかの勧誘ではないことはわかった、かすりもしてるわけじゃない。そもそも勧誘に来たならば殺しはしないであろう。

……ここで、欠落した情報がある。

……そうか、わかったぞ。こいつがオレを殺す気のない理由は。

「忌みの存在は殺めないといけないかもしれないが……少なくとも玩具などに構う暇はない」

そう、オレがその死神と人間のハーフの男の『レプリカ』だという情報。

「どこでそこまで知った?」

単純にここからは読みの勝負になるかもしれない。コレは勘で挙げて見よう。”端”が関与しているという可能性。“端”になら

ばオレの情報も“俺”の情報もあるはずだ。だが、コイツの所属は明確にフランス聖教と答えた。オレと2人しかいないという場所で“端”を隠す意味はよくよく考えるとない。油断させる手だとしても『お前を殺しに来た』発言でそれは崩壊だ。オレの警戒を扇ぐ。

オレの勘は当てにならないわけだ。ハン、さてどういう反応を出すか？

「企業秘密です♪」

オレの緊張感が解けたのは言うまでもない。正直「ざけんな」って言いたい気分ではあるが……、コイツ始めからオレと話す気でいたんだななんて思った。

オレは今日に何度かわからない溜息を吐いて向き直る。

「リカ、お前の狙いは――なんだ？」

語気を強めてオレは言う。

「『鏡面の世界』の管理よ」

『鏡面の世界』……？　鏡面ってアレだよ？　鏡の表面のあれ。どういう意味だ？　鏡の表面のように何かを映してる世界……？　そういう意味なのか？　くそ、こういう用語はサッパリわからねぇ…！　むしろ造語がそんなに好きか！？　ええい、クソ！

「ンだよ……それは？」

口調を荒くしてみる。以前とエステリカ……いや、リカは表情を

変えない。涼しい表情でいる、修道服から魅せる長い胸ほどの長さの髪が屋上から吹き抜ける風で靡いた、被っていたフードすらもっていって。

そこでオレは気が付いたことがある。些細な事かもしれない、だけど、オレは息を呑まずにはいられなかった。

妖艶。そういうのではない、ただ、それがイヤなほど似ていたんだ。たった1人の少女に。酷似。オレの始めての罪に酷似していた。そう、それだけの事だったそれ以上もそれ以下でもなんでもないんだ。

だけど、動悸が治まらない。

オレは――彼女を直視できなかった。

押し潰されそうな心情。止まったと錯覚するような感覚。静寂――そして覚醒していく意識。鏡写し。そして、あのフラッシュバック。病院、鼻に残る強い消毒の匂い、記憶に焼き付いた白いベッド、そして、顔を隠すように置かれた――白い――

覚醒する意識。

思い出す。

何をしたか。

覚えてた、けど、忘れ様と思ってた。

明日。

『また、明日ね。』焼き付いた言葉。

『未来（あした）』を見れなくなった――

「なん、だよ……いやがらせかよ？」

なんでだよ。

そう言おうと思ってた、言葉が掠れた。意味は通じる、言い直す必要はない。頭が激しく回転する、縦横無尽に羅列された言葉の数々。何度も何度も頭を駆け巡る。

その駆け巡る言葉にオレの答えはみつからない。あるのは俺の言葉だけ。なら、オレがする事は一つ。それに、こいつもそれを望んでいる。なら、オレは退散すべき……なのか？

オレはオレの中にいる“俺”に問い掛ける。だが、反応したのは“僕”の方だ。答えは単純にひとことＮＯである。ハッキリとした口調で断言した。その断言に理由はみられない。あるのは、そこに何かオレに知られてはいけないなにかがあるということ。

だから、オレは――どうしたらいい？

オレは如何するべきなんだ？

オレはコイツに何をしたらいい？

何が出来る？

考えろ。考えろ！

オレに出来る事なんて微々たる事。だけど、オレは――

「久遠言葉（くおんことば）」

「……久遠？」

それはオレの知らない――“俺”すらも知らない名前だった。だが、この言葉にハッキリと反応したのは“僕”だ。そこで、オレの思考は切断された。

「言葉を知ってるのか！？」

いてもたってもいられなかった。この世界で絶望的に近かった可能性の名前。その手掛かりが今、ここにある。だから、“オレ”には悪かったけど僕が強制的に出て来た。普段は“オレ”の意志じゃないと代われない僕と“俺”の意志。だが、僕にだけはその糧は弱い。それは、“オレ”が“鎌”を持ち魔法を使うようになってから、徐々に薄れて行った糧だった。

もともと氣を扱う“オレ”と“俺”では明確な差が存在する。氣の絶対量や格闘センス。どれをとっても“オレ”は“俺”に届かない。そして自分がレプリカであるという意識が“俺”を遠ざけてるのだろう。

そんな事は、今はどうだっていい！　いるんだ、ここに存在するんだ！　言葉が……！！

「出て来たか、“鏡面の死”……と、言っておこうか」

「答えろ…ッ！　ただじゃ済まないぞ！」

重厚な魔力の圧力をかける。だが、生憎コレははったりでしかない。“死神”という表の姿の僕には“魔封石”を所持していない。故に詠唱や術式の形成。精霊を降ろす空間をつくらないといけない。近距離で魔法が有利か、格闘が有利か。そんなのは考える必要性すらない。答えは格闘。

こんなハッタリが通用する相手ではないのはわかりきっている。エステリカ・クォーツただものではないと。歴戦の猛者というほどではない、交渉の場慣れと、戦場に慣れ親しんでるという感覚。遊戯。そんな感じでここにいる感じがしてならない。

それに、ここまであの娘に似てるとは……やはり、“鏡面作用”が起こったか？　だが、彼女は純血の日本人……。まさか、“鏡面作用”とはまったく関係ない？　いや、そんなワケはない。彼女は自らを鏡面の世界の管理が狙いだと言った――待てよ？

まさか、コイツは――！

「シンキングタイムは終了みたいね」

「――――ッ」

チャイムの音が校内に響き渡る。１５分の休み時間に入る頃合だ。そうなれば、教室から一限目をサボって来た事を問詰めに少なからず、如月は来るであろう。他にある可能性は柴原と、死神の娘。この状況は流石に不味い。第一に僕という人格を悟られるわけには、まだいかない。

クソ！　手掛かりがもうそこにあるというのに……ッ！

「残念。また、会いましょう。いずれね」
「待てよッ！待てって言ってるだろうが！！」

足元に浮ぶ魔方陣その術式を読み取る。転移魔法……！？　月を指す魔界の文字に、世界をさす魔方陣の中に描かれる大宇宙の式図。それは膨張し陣の一面に広がっていく。そして、次第に完成していく魔方陣を呆然と眺め、僕は詠唱を始める。

間に合うかどうかは知らない。

「――――――」

……？　何を、言った？

くっ……マーキング魔法が間に合わないか……！

「畜生……！」

階段を駆け上がる音も聞こえてくる。そろそろ時間切れか……。畜生……折角、掴んだと思ったのに。また、いずれ会える。アイツの狙いは――恐らく僕らとなんらかの形で関わる。

だから、今は……。

「……うっ……」

頭がイテェ……。人格を強制的に変えられたのか……？　リカは……いないか。“僕”は黙り込むし“俺”はなにも状況をつかめないみたいだしな……。問詰めても無駄、か……。

……紅茶、美味かったな……。へん、とりあえず今は、事実確認するべきだよねぇ…。志穂に連絡いれねぇとな。多分、オレの考えに間違いはねぇはずだ。エステリカ・クォーツは……。『宮小都梨花子』の関係者だ。

あの顔、間違いない。

梨花の親友だった志穂ならリカの事をどう思うか……。

今日、会いに行くとするか。

「……エスレリカ・クォーツ……か」

不安じゃないと言えば嘘になる。

だけど今は屋上から吹き抜ける風に身を委ねていた。

間も無く、オレは駿たちと合流した。

【138話】動き始めるは、影――／はじまるよー球技大会！

「ふ～…ん。エステリカ・クォーツ……ねぇ？」

それが志穂が発した言葉であった。軽い感じに届いた声は、どこか濁っているような気がしてならなかった。たしかに感慨深い物はある。それが、本当に『梨花』……『宮小都梨花子（くおつりかこ）』だという確証は毛頭ないんだ。あるのはそれに似た存在であったことのみ。他にオレが与えられた情報は、アイツがフランス聖教の者ということだ。あえてここでは『人間』とは言わない、アイツが言ってたのはフランス聖教の一員というだけ、こんな世の中だ。境界（ジャンパー）を超えし者なる存在なのかもしれない、はたまたオレと似た存在……レプリカでもあるかもしれないんだ。レプリカなんて存在がいりゃ『クローン』だってありえる。他には“端”の……“悪魔”の誰かの能力（ちから）って答えだってありえるんだ。他には、以前に古都宮関連で出向いた時にまんまとオレらがかかった幻術ってのもありうるんだ。小狼のことを考えても、なんらかの幻術がオレにかけられてた。

あれはオレのイメージの小狼だった、まったく成長していない小狼。あれは勝てて当然だ。あの頃のオレと、あの時点でのオレでは実力がだいぶ違う。レナや、ヴァンくんとか、セフィリアと日頃の鍛錬や組手をしてるからオレも成長はしてるんだと思う。つっても、身体的成長は、おそらく今のオレの“段階”ではこれが限界……ったく、“継承開放式”にオレの“パッセージ”を組みやがって……強くなろうにも強くなれねぇじゃねぇかよ。

っと、はなしがずれたな。雨宮流のことは、後で詳しく説明することにしよう。少なくとも番田もいないと説明するわけにはいかねぇことだしな。

まぁ、少し脱線したが、つまりは……、選択肢は石を引きつめた池の中でビーダマを探すほど難しいものがあるんだ。だから、志穂は軽く、だけどどこか感慨深げにそう答えたんだと思うぜ？

オレだっていきなり聞かされたら嘲笑するだろう、心のどこかにわだかまりをもって……な。自分なりの推理を働かせようにも、生憎情報が足らなさ過ぎだしな、憶測だけで考えるのはオススメできない、それはもう妄想のレベルだ。オレの過去にヒントを求めようとも帰ってくるのは懺悔の念だけ、オレが最初にした罪。もう見えない『未来』のために、何も出来なかった無力のオレ、眼を瞑れば、……思い出せる。

でも、最近。いや、今まで忘れてのうのうと暮らしてた、オレも志穂も。エステリカ、アイツが出てきてからオレのその記憶にところどころ、ノイズが走る。だけど、その状況はそこはかとなく似ているのに……登場するのは、オレと志穂ではない別の誰かと『梨花』がいるんだ……。

その中で、オレは“アサヒ”と呼ばれ、志穂は“おねえちゃん”と呼ばれている。“アサヒ”と『梨花』は恋人同士であった。“アサヒ”のその時の感情がオレにも流れてくる、平和で暖かい日常。心穏やかで、こんな毎日を永遠と送るんだと信じて疑ってなかった。毎日、お日様に照らす、『梨花』の左手の薬指にある小さく、でも綺麗に輝くその石を眺めてぼーっと歩く『梨花』が気が気じゃなくていつも心配そうに見守っている。

そんな、オレじゃないオレ、“アサヒ”は“オレ”に言うんだ。

数日後に、必ず……。

『悲劇を、もうこんな悲劇を繰り返さないでくれ』って……。そして、オレは“アサヒ”との約束は守れなかった。『梨花』はもういない。エステリカ……なぁ、どう思う？“アサヒ”……？

なんで、今になってオレに干渉するんだ？

なんで、エステリカは……『梨花』に似てるんだ？

お前は、オレのなんなんだ？

答えは求めない……。求めたらいけないのかもしれない。オレが誰でお前が誰かなんて触れちゃいけない禁忌なのかもしれないから。でも、それが禁忌だとしたら、オレはその禁忌に触れるかもしれない。エステリカ。少なからずオレの知ってる奴の中でももっともオレの答えに近いのかもしれない。だから、悪いな、“アサヒ”。それでどう世界が動くかはわかんないけどオレは進むよ……突き進む。そんで、オレは、逢わないといけないんだ……。その先にいる糞野郎に。その障害すらも突き破って……こんな糞な『運命（せかい）』をつくった奴に、一発かましてやらねぇとな。

呼応。それと同じものを鎌に感じる。一瞬どうしたものかと思ったが、コイツにだってなんかの想いはある。オレは黙って見過ごす事にした。紡がれる運命の糸。その先になにがあるなんかオレの知ったこちゃねぇんだ。ただ、そこにあるものに向かっていく。

どんな運命だろうと、立ち向かうことが運命か、運命に屈するのが運命なのか、なんて……誰にも決めて欲しくはねぇんだよ。運命に立ち向かう運命、その先に屈する運命だとしても、オレはどんなことであろうと突き進みたい。だって、守りたい人がいる人間には

当然だって、オレの中の全部の細胞が言う、その気持ちにオレが賛同する。オレの中でオレが言うんだ。だから、……もう、悲しい結末で終わらしたくないって。

■オ■、■ク、アサヒ、ナツ■、ア■シ……。どうしてか浮かび上がるその名が、オレにそれを誓わないといけないような気がしてきた。誰なのだろうか？　そんなことはどうでもいい。

あんたらが言わなくてもそのつもりだよ。レナを守ってやる、絶対に。そんで、“アイツ”に言うんだ。

こんな巡り合わせを神様が決めてるんだとしたら、きっとその神様は残酷だ……。だから言うんだ、“アンタ”は本当に残酷だって……だけど、オレは“アンタ”に感謝するよ。オレとレナをあわせてくれてありがとう。でも、その先にあるクソッタれな『運命（みらい）』なんて、オレは認めない。

切り伏せるさ、そんな運命は。

テメェの運命（みち）に先（ゴール）はねぇンだよ。

だから……オレは“アイツ”を打ち崩して、勝ち取るんだ。大切な人との未来（あした）を。

「――――ぁ！　か――！　ぁずや！　バカズヤ――――！！」

「ぁ…っ！？　み、耳元で叫ぶんじゃねぇよ！」

ってか、バカズヤって言うんじゃねぇ！　ってか、せっかくのオレのカッコいい意味深げなのが台無しじゃねぇか！　クソボケ！！

あえて口に出さない。怒られるじゃん、鬼の形相で。

「アンタがボーっとつたってるからでしょう！」

まったくと、言わんばかりに呆れ顔をされた。そしてとびっきりのため息を吐く。志穂も志穂でいろんな事情にさいなまれてるのをオレは知っている。どんな事情があってどんな状態に立たされてるか、力がないのに裏の世界に立つ気分。それは気持ちのいいものではないはずだ、下は灼熱地獄、少しでも動けば崩れかねない崖の先端、それを志穂は慎重に渡る、裏の世界で自分が動いてると悟られないように、悟られたらそれは一環の終わり、下にある奈落を待つだけ、それもあっさりと来るであろう。自分が居たという痕跡すらのこらないという、“現実（リアル）”は。

志穂の強さがここに来てわかった気がする。こんな絶望的な状態だっていうのにアイツは表の世界にいて笑顔を振りまいてる。母から受け継いだもう研ぎまくって短くなったハサミを尚も愛用して、細かい調節の時に使う、それがアイツなりのおまじない……。誰かが幸せになりますようにって、見えるけど見えない小さなおまじないを残す、特別な魔法使い……。まさに志穂にぴったりだ。

「なに笑ってんのよ…」

不機嫌そうな声が聞こえる。わけもわからずに笑われたことに腹でも立てたのだろうか？　そういうあたりは童心を忘れてないあたりコイツは面白い。大人になりきれないガキじゃなくて、大人なのにガキって矛盾した存在だ。

「い、いや……なんでもねぇよ……っくくく」

「笑うな――！！」

手元が怪しい銀に輝く、それは鋭く研がれたセラミック――

「ば、馬鹿！　商売道具を振り回すんじゃねぇよ！！」

刃は閉じてはいるが安全ってわけじゃねぇ、それをぶんぶん振り回す馬鹿の腕を掴んでオレの脇を潜らせて抑える。体勢を崩した馬鹿の身体を、身体をつかって支えもしものために逆の手をつかみ、腕を捻る。そのまま支えてた身体をどかして、上体が倒れたところに掴んでいた腕を志穂の腰に回して、そのまま流れに身を任せてサブミッションを行い、間接技を極めるっと。

悶絶。そりゃ痛いにきまってる。

「ふはははは、こんなもんよー！」

「むきーってあぎゃぁあああぁあああ！！」

ははは。

オレのじゃれあいは5分ほど続いた。

志穂の説教で一時間ほど正座させられたのはいうまでもないであろう。

＊＊＊

それは、そこにあるだけであった。ただ佇むだけの存在。だが、それに逆らう存在はいない。それは自然の摂理でもある。食物連鎖、弱肉強食……。

さまざまな形に姿を変えるそれは『自然』と呼ばれる存在になった。

『自然』は『絶対』故に孤独。その孤独に『孤独』は微笑むんだ。

『笑顔』で『友達』が出来ると信じて。

刻には『謡』を、

刻には『花』を摘む。

誰かのために、静かに、孤独な『孤独』が嫌いで。

『自然』の『絶対』にいる『孤独』が『嫌』て……。

だから『自然』は『謡』を歌い。『花』を用意する。

けど誰も来ない、誰も見てくれない、誰もが恐がり、崇める。

『友達』なんて出来なかった。

違うのに。

違うのに。

『孤独』は『自然』なんて……違うのに。

『絶対』に立つ存在じゃないのに。

どうして？どうして。どうして。どうして。どうして。どうして。
どうして。どうして。どうして。どうして。どうして。どうして。
どうして。どうして。どうして。どうして。どうして。どうして。
どうして。

『自然（ぜったい）』は『機械（デウス）』を産んだ。

『機械（デウス）』は――

『自然（ぜったい）』を――

――した。

『機械（デウス）』は知らなかった。

『機械（デウス）』に彼にがたどり着くまで。

『機械（デウス）』が『――』の『――』だということを。

『機械（デウス）』が流した涙は、

『静寂（そら）』を清め――――。

＊＊＊

「……わけ、わかんねぇ」

それが死神に聖黎夜大祭の日に渡された手紙の内容だった。オレに読まれる危険性をもったのであろうかとても見たことのない文字だった。当初はフェアナなどに訳させようとしたがフェアナはラミアちゃんとお風呂に行った。残念なことにそんなことに気が付かないでドア開けて――な素敵展開はなかった。個人的に思うが、ラミアちゃんは絶対着痩せするタイプだ、多分中身はすご――――っごほっごほ。

もちろん、オレはレナに一筋だ。た、確かに目移りするのは仕方

ないじゃないか！　オレだって男の子なんだ！　でもくそうっ！　レナの笑顔が一番まぶしいぜごらぁあああ！！　って、なにオレは言ってるんだよ！

ええい、そうそう。誰が読解したってのは、オレの便利マシーンこと、鎌ちゃんだ。ミスディスデビちゃん、オレの最高の相棒にふさわしい。ちゃんと魔界の言葉（それを暗号化させたみたいだが）を解読するなんてすんばらしぃぜ。と、5分だけ賞賛してやったら鼻高々で気分がかなりよかったらしい。後で湯船に沈めといてやるからな。

なんでオレがコレを持っているのかっていうのは少し複雑な事情がある。あの後の深夜に『神堂の使い』だとか名乗った男が現れた。とりあえず殴ったが、オレの軽く拳は止められた。悔しかったがそれで実力の差を一瞬で悟った、喧嘩挑んで勝てる相手じゃねぇってな。

言っとくが、オレがそこまで言う奴なんてハッキリ言って絶対的に珍しい。『神路蒼譜』や、この前あった。『桐谷竜司』……アイツらもかなりヤバイが、アイツらなんか目じゃないほどの実力者だ……。たぶん、オレの目利きが正しければ神堂とタイマンを張るのに十分な実力だなはずだ。

そんな奴に、神堂がオレに（正確にはレナにだが）渡そうとしてた手紙を渡された……。そんで読もうと思ったものの結局はオレでは読めず、暗号化されてて“僕”でも読み取れなかったそれで仕方なく先延ばししていたが、今になって思い出したものである。

内容が、まるでわからなかった。

レナならわかる。あいつはそんな感じだった。

……少しだけ、ムカつく。

……結局、オレはどうしろって言うんだろうか？

神堂の野郎なら少なからずオレが他人宛の手紙を盗み見るとわかってたはずだ。アイツはこれに何を考え何を思ってるんだ？　デウスって、あれか？　部隊とかの技法の機械仕掛けの神……つまりデウス・エクス・マキナが勝手に出てきてそれが適当に締めてしまうって無茶苦茶なやつ……？　だけど、涙ってなに？　それに最後の方に鎌はいくつか解読不能って役たたずっぷりを発揮したけど……。

それに機械が涙って――前半はなんとか大まかに理解できた。まったく内容はわかんねぇけど、この『自然（ぜったい）』がなんかは推測は出来る。でもデウスをつくったってどういうことだ？

見当違いか？　オレの考えは……？　うーん、魔界のやつらなら少なからずわかるよな。零亞にでも頼んでみるか？　……そういえば祭から帰ってきていらい零亞の様子がおかしかった。丁度いい機会なのかもしれない。零亞とはいろいろ話しておきたかった。母さん――いや、蒼き死のこととか、他にもいろいろと……。

つうか、待てよ？　デウスったらアイツが詳しいんじゃないか？　たしかそんな裏技もってたよな？　お馬鹿で意気地なしで三下で見てて情けない執事野郎こと、愚かな弟子とかいて、愚弟子をさらに略して愚子な男に聞いてみよう。意を決してＴＥＬする。

……あの馬鹿は電源を切っていた。

よぉし、後で殴っておく。

つってもいろんなことが違うんだし、使い物にならないよね。本当に、まったく。困った奴だ。お仕置きメニューにいろいろ追記しておくべきだろう。これで少しかは役立つと思うね。もともとがあーだからしかたないけどさぁ。ナハハハ、師匠様のラブコールを無視した罰だ。

とりあえず、オレは再び鎌が訳したもののメモをした紙を見る。視点がバラバラで少し混乱するものがある。これの意味を流すけど、やはりオレでは見当が付かない。本気で自分が情けなくなってきた。オレも弟子を馬鹿にできないかもしれないな。まぁ、そこらへんは師弟仲良くお相子ってことでいいじゃないか、はははは。

っと、そんなことを言ってる暇じゃねぇよな……。

明日だ。明日は球技大会……だ。

……。すこし、少しだけ憂鬱になった。

記憶を少し遡らせて天気予報を思い出す。

最高気温２５℃、夏の終わりを少しづつ告げる天候だ、少しだけ、本当に少しだけ憂鬱になった。そしてオレの思考を切り替える。アイツら、どんな弁当を喜ぶんだろうか？

ちょっとだけ、幸せな思考に。

日常の思考。少しだけ賑やかになったオレの日常でオレはオレであるべくして過ごす。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

朝食、弁当をこしらえ終えてオレはひとりで屋根の上にいた。ここにはちょっとした思い出が合ったりもする。それはオレの記憶ではなく俺の記憶。感情、ありのまま……そうだ、よく考え事があった時はよくここに登って、ひとりで思考に浸っていた……いや、ひとりじゃなかったよな。

「何してるの？　不良少年？」

はぁ。と小さなため息を吐き捨てる。そういえばコイツがいつも来たんだっけ。毎度毎度、飽き足らずに……。よく考えればコイツのが不良少女だ。自分の家の屋根の上で思い更けようが勝手だというのにコイツはそれにずかずか踏み込んでくるんだ……まったく、相変わらずだよ、本当に。

「おめぇこそ、こんな朝早くどうしたんだ？　魅夜」

「和也がここに来るなんて久しぶりだから来てみただけよ。深い意味はないんだから」

そういうと逆に怪しいって。まぁ、どうでもいいんだけどさ。確かにここに登ってくるのは久しいかもしれない。言われて気が付いたことだ……。浮雲で太陽が陰になる。少しだけ心地よい風が吹いた。オレは空を見上げる。つられて魅夜もみた気がする。オレはバレないように呟いた。聞き取れはしないだろうと思ってたが魅夜が少しだけくびをかしげたのが見えた。

やっべ？　聞こえたかな？

聞かれたらすこし内容がマズイ。

「……ねぇ？」
「ん？」

すこし魅夜の熱に帯びた声に耳を傾ける。いつまでも続きを発さない魅夜に少しだけ痺れを切らしてオレは振り返る。オレの思考は、一瞬だけ途切れた。なにがあったか理解できずに、視界が黒くて、頬に仄かに暖かい感触と鼻腔に掠める石鹸のいい匂いがオレを満たした。そして、何が起こったか気が付いた。一歩だけ後ろに下がる。

……は、はぁ？

困惑した。

「勝利の女神のお墨付きのおまじない」

いや、頬を赤めていう台詞じゃねぇだろ。そんなに挙動不審になってたら危ないって――。ったく、足滑らして落ちてもしらねぇぞ。オレは大きく伸びてから赤面状態の魅夜に声をかけようとする。そ

こでオレはやっと気が付いた、空には無数の星が見えていたことを、気が付いた。

心臓がざわめき嫌な予感を駆り立てる。目を凝らし空を見る。たしかにそこにはいくつ物“地球”に似た何かがあった。オレの中の血が騒ぎ出す。死神としての直感がそれに答える。その見出した答えは、早すぎると思っていた、だけど世界はそこまでやさしくなった。まるで星の海のように朧げに見えるその星は蒼空の天に満面と広がっていた。そう、コレが何を意味するかなんてオレにはわからない。だけど、感づくんだ、これから何かが始まろうとしてるって。そんな事、オレが知る由はなくて、ただただオレの視覚的現実にオレはおびえた。

少し遠くても魅夜が息を呑むのがわかった。

……ッ！　オレだけじゃないってわけか！！

嫌な予感しかしねぇぞ……。可能性として考えられるのはやっぱしアレか？　パラレルワールド同士の衝突による崩壊――。そして世界は移行する、新たな季節になるために？　いや、それこそどういう意味なんだ？　よくよく考えればオレはそういうところを知っていない……。知っているなら将から聞かされる、如月も、将も知らないのか？　だとしたら……いや、それはそうか、『滅びた世界』が『生れ変わる』時なんて見れる奴はいねぇ……。

そう考えれば自然だ。

いや、待て。だとしたら一季目や二季目ってどうなるんだ？

……今、考えてもしかたないか。将と如月に話しておくべきだろ

うな。この話には確かにレナを加わるべきなんだけど……それは避けるべきだと思う。レナのっもつ八式の重力魔法、あれは神路が言ってたアレは……結びつけば……レナの力はこの世界ではもっとも有効な力だ、利用されたくはない。むしろ、それはレナの安全を保障は出来ないんだ。それにレナをかからわせるワケには――

『そうだ。彼女を守り通せ』

――ッ！！　頭がいてぇ……誰だよ、指図すんのは……！　何もんだよ！！　声からしてアイツらとは全然違うし――オレに指図してんじゃねぇよ！！　最近は気分がわりぃ、アサヒとかわけのわかんねぇ野郎が出てきやがるし、テメェはなんだよ！！

「か、和也？」

よほど恐い顔をしていたのだろうか、魅夜が心配してるような声でオレに聞いてきた。

『っセぇよ！　テメェはとりあえずあの子を守ってろ』
「お前に言われる筋合いはねぇっ！！」

虚空に叫ぶ。魅夜の肩が少しだけ跳ねた。

「勝手にオレの頭の中に出てきやがって！　なんなんだテメェらは！！」
『黙れよ』
「なっ――！！」

わりぃが、魅夜に構ってる暇はなかった。ここ最近の変化はあまりにも急速だった。レナを守るって言ってから、いや、桐谷竜司、

アイツにあってからいろんな物が、いろんなことが動き出してる気配がしてならねぇんだ。エステリカ、アサヒ――今、起こってる現象――『零時からあった祭りの次の日の電話』、『瑠依の誘拐』、……そう、いろんなもんが動き出してやがる。それも急速に、そう考えれば神堂の使いが持ってきた手紙――あれもそれか。

……オレらが考えてるほど、時間はねぇのかもな……。

ってか、なんかムカつくぞコイツ！

「和也、大丈夫？」

「ぁ、ああ……。幻聴みてぇなもんだ。心配いらねぇよ」

「し、心配するでしょ！　それ！」

……幼馴染の鑑だこと。まったく、ある種めぐまれてんのか？　オレは？

「ったく、そろそろ学校に行くぞ。オレらは飯食ってから行くから先にいってろ」

「ちょ！　和也！？」

あー、うるさいうるさい。心配性なのはわかってるから少し大人しくしててくれ。オレとしては心配性は軽く困るから、いや、だってさ……。うん、言わないでおいておこう。これはまだオレの内に秘めておくことにしようか、最近の“悪夢”のことなんて言ったら本当に病院に無理やり連れ込まれる。あんな馬鹿みたいな夢なんか他に言えるわけがないだろ？

……。

オレは、本物の“悪魔”なのかもしれない。ってな――。

屋根から飛び降りた景色は、すこしだけゆったりとしたものだった。

◆◇◆

空について、学校でも話題になっていた。

だが、学生ってのは呑気なもんで――オレらは球技大会に少し浮かれる生徒に混じって、炎天下の中でゆっくりと開会の宣言を聞いていた。

＊＊＊

誰かが呼んだ。

誰が？

ああ、君か……。

そうか、始まるのか……。

運命の歯車……は、止まらなくなったか。

それを、打ち破るか？

運命に愛された一季目の産物よ……。

『機械仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）』よ、彼はここまで来るだろう。

そして、貴方様はどう致しますおつもりで？

そして、――神堂真琴よ。お前の選択は……“ソレ”なのだな？

「ああ――。俺は、アイツを潰す」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8153c/

オレと死神？！

2010年10月12日07時36分発行